

ありふれた職業の召喚（ガチャ）士で世界最弱

ヴィヴィオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トータスへと転移したけど関係ない！ ガチャだガチャをする！
例え国庫を空にしてもいい！

召喚士はある界限ではありふれた職業であります。特にソシヤゲーをやっていたりする人にはとつてもありふれた職業です。

ユエ可愛いのでハジメから奪いたい。でも、ユエ×ハジメはジャステイス！ というわけでユエはハジメ確定です。基本的に原作通りのハーレムメンバーになるかも。

ありふれた職業のヒロインは鈴を予定。

魔法少女リリカルなのはからユーリ・エーベルヴァイン確定。

Fateから沙条愛歌とアストルフオキゆん。美遊確定

目次

第24話	八重樫雫	第22話	朝田詩乃	第20話	第19話	第18話	朝田詩乃	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	ユリ	第6話	第5話	第4話	鈴	第2話	第1話
317	305	295	282	274	253	245	234	215	201	188	174	164	148	130	106	78	69	52	45	32	20	9	1

第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 ハジメ 第41話 第40話 第39話 第38話 清水 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話

686 672 663 651 643 628 615 596 574 562 539 531 519 504 473 459 452 435 414 406 391 372 361 349 333

八重樫雫	第73話	第72話	ディアーチエ	第70話	第69話	第68話	相川昇	第66話	清水×愛子先生	第64話	第63話	ハジメ×愛子先生	清水	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	見ろ、人が塵のようだ	第54話	第53話	第52話	ネコネ	第50話
1008	992	981	974	955	949	939	926	917	906	894	882	856	845	832	822	811	786	774	761	752	743	733	724	705

ネネカ	天之河光輝	第86話	第85話	第84話	雫ちゃん	第82話	第81話	第80話	第79話	とある魔術師の受難	第77話	第76話	第75話
1165	1157	1144	1139	1130	1107	1093	1081	1069	1060	1051	1041	1031	1019

第1話

学校に行きたくないが、行かないといけない。お小遣いというか、給料を貰えないからだ。お小遣いがなければ大好きなガチャもできない。そのため、仕方なく学校へと通っている。

授業開始の少し前に教室へと到着した。教室へ入ると視線が集まってくるが、無視して席に座る。

「お、キモブタも来たな」

キモブタ。それが不良グループである檜山大介達が俺につけた名前だ。確かに俺は太っている。運動なんてからっきしだ。

「遅すぎだろ。どうせエロゲーでもしてたんじゃないか？」

「否。ソシヤゲーのイベントをやっていたのだ。間違えるな」

「あ？ かわんねーだろうが！」

「断じて違う。違法と違法でないかは大きい」

席に座り、消費していないAPを使い終わってから授業を受けようとする、隣に座っているオタク仲間の南雲ハジメが声をかけてきた。

「どんな感じ？」

「アストルフオキゆんがでない……」

「あははは、やっぱりでないか」

話していると教師が入ってきて授業が始まったのでスマホを戻す。

一応、窓際なのでソーラーパネルで充電をしておく。

授業が終わり、昼の時間となった。お昼ご飯としてコンビニで買ったサンドイッチを食べながらヘッドフォンをつけてゲームを始める。スマホとタブレット、二つで何種類かのゲームを同時に起動する。

起動したのは魔法少女リリカルなのはINNOCENT、Fat e / Grand Order、うたわれるもの、艦これ……そして、D i e s i r a e。最後のはただ動画だ。ルサルカが好きなんだよな。

ンがある。恐る恐る再接続をしてみるが、当然のごとく直に回線接続画面が表示される。電波の場所を見ると圏外になっていた。

「俺の星5を返せえええええええええええええええええ!!」

「いや、それどころじゃないよー!」

南雲のツッコミを受け、どうにか正気を保ってボタンを押し続ける。せめて、せめて、何が当たったか見せてくれ!



あれから教皇に説明を受けて馬鹿、天之河光輝が人族と魔人族の戦争に参加する事を約束したらしい。本当に何を考えているのかわからないが、無駄にカリスマだけあるので厄介だ。

そもそもこの馬鹿はクラスのリーダー的存在だ。成績優秀・容姿端麗・スポーツ万能の完璧超人。死ねばいいのに。

しかも、自分の正しさを疑わないのでよく自分の都合のいいように考える。そう、自分以外の価値観を受け入れられない上に、自分の非を認められない等の性格上の欠点も多く、その自覚もない。

まあ、馬鹿は置いておいて俺達は呼び出された聖教教会の総本山・神山の麓にあるハイリヒ王国へと移動した。

この国で俺達は受け入れられ、訓練を受ける事になった。その日の夜は王城にて歓迎する宴が開かれ、訓練は明日から開始すると言う事でお開きとなった。

次の日――

教育を担当する事となったハイリヒ王国騎士団長メルド・ロギンスより一枚の銀色のプレートが全員に配られた。

「このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすな」

ステータスを表示か。なんだかゲームみたいだな。ああ、ゲームできないんだよな。スマホとタブレット自体は動かせるし、ダウンロードしたページデータとかは残っているんだが……

まあ、どちらにせよ運動音痴の俺でもどうにかできるステータスだったらありがたい。どうせ訓練しなければ死ぬだけだ。せめてチートだったらありがたいんだがな。本当に天之河は余計な事をしてくれた。

そう考えながら、説明された持ち主登録の手順に従い、針で指を軽く刺して自分の血をプレートに付ける。すると、血はプレートに吸い込まれる様に消えて、代わりに身覚えのない文字みたいなのが浮かび上がってきた。

沙条 真名 17歳 男 レベル：1

天職：召喚士

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

耐魔：10

技能：召喚^{ガチャ}・言語理解

召喚士でスキルがガチャとか最高だ。もしかしたら、美少女が召喚できるかもしれない。いやできる。できるはずだ！

まあ、能力値が低すぎる。ちなみに俺の名前である沙条真名はPr ototypeにでてくる沙条愛歌と名前が一字違い。彼女みたいに根源に接続できればどれだけよかったか。

見慣れない文字を識別できたのはこの《言語理解》の技能のお陰だと思う。エヒトが召喚した時にでも付与されたのだろう。

「全員見れたか？ 説明するぞ？ まず、最初に“レベル”があるだろう？ それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。

レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない。ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。

詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

レベルが上がるとステータスが上がるというわけでは無いらしい。つまるところ、レベルと言うのは本当の意味でその人の総合的強さの指標なのだろう。

「次に“天職”つてのがあるだろう？ それは言うなれば“才能”だ。末尾にある“技能”と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。

戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

召喚士は一応戦闘系だよな？ いや、微妙か。召喚の方式によつて

色々とできる便利職業ではある。というか、色々と悪用ができそう
だ。例えばエヒトがやったような拉致とか。または緊急脱出の為に
仲間を召喚するとか。後は物資の輸送とかも楽にできそうだ。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10く
らいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！
全く羨ましい限りだ！ ステータスプレートの内容は報告してく
れ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

ステータス……数倍？ 俺、10なんだけど……終わったかもしれ
ない。そう考えていると天之河がメルド騎士団長にプレートを見せ
る。それを俺も覗いてみた。

天之河光輝 17歳 男 レベル：1

天職：勇者

筋力：100

体力：100

耐性：100

敏捷：100

魔力：100

魔耐：100

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・
縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理
解

チートじゃねえか。チートがいやがる！ ありえねえ！ 差別だ
！ 天職まで勇者だぞ！ まさに物語の主人公だ。

それから暫く、生徒達が報告していき、俺の番となった。

「召喚士か……」

「え、駄目なの？」

「いや、召喚士というのは難しくてな。まず、召喚契約を結んでいないと呼び出せない。また、召喚には魔力が必要だ。君のステータスは……魔力がかなり低い」

「うっ」

「ぎやははは、やっぱりキモブタは使えねえな！」

「そうっすね！」

ああ本当に使えないようだ。ああくそ。何か方法はないのか。外れ職業なのか？ いや、そんなことはない！ どうか探せ！

まず、召喚を実際に見してみよう。

「すいません。召喚ってどうやって使うんですか？ それと何かで代用で来たりしますか？」

「わからんな……調べてみよう」

「お願いします」

それからハジメの番になり、彼が錬成師という俺と同じありふれた職業だという事がわかった。ステータスも同じく最低値だ。

そんな訳で、俺達は図書館に籠って情報を集める事にした。

数日後。図書館で調べものをしていたが結果が伴わない。

「そっちはどう？」

「全然駄目だ。魔力が足りなさすぎて召喚できない」

「魔力の代わりに他で代用できたらいいのにね」

「他か。金とか？」

「確かにお金はありそうだね。スマホとかでよくあるし……」

「あ、そういえば……ゲーム起動してないじゃないか」

「いや、無理でしょ。バッテリーとかどうするの」

「ソーラーがある」

スマホを取り出し、電源を入れて確認する。やはりゲームの接続はできない——

第2話

ゲームに接続できない。やはり電波がないのだから仕方がない。

「電波の代わりがあればいけるんじゃないかな？」

「代わりか？」

「例えば魔力とか」

「確かに召喚は魔力を使うし……試してみるか」

「……といっても、そもそも魔力を流し込むってどうするんだ？」

召喚魔法はメルド騎士団長から聞いた事と本で調べた限りだと魔法陣を描き、魔力を通して召喚を行う。

召喚には触媒が必要でそれ次第によって呼ばれてくる物が変わる。

この時に召喚されるのはランダムだが、触媒によってはある程度は指定できる。

また召喚された対象が生命体なら契約を結ばないとならず、契約内容によっては召喚者が殺される場合もあるとのこと。この契約は戦闘以外にも交渉などどちらも可能らしい。

ありふれた職業でありながら、あまりに使い勝手が悪い天職だ。

だが、極めれば異世界人を召喚とかできるのは確実だ。何せ、俺達は実際に体験しているんだからな。

隷属術式でも入れないと使ってられない。すくなくともFateみたいな令呪がないとかなりやばいのが多い。すくなくとも好感度を植え付けないとこちらが殺される奴が多すぎる。

そう考えるとFateシリーズは召喚できたとしても止めておいた方が良いか。ジャックやアビー、アタランテとか召喚したいキャラは多いけどな。

「魔法陣ってこんな感じかな？」

「こんな感じだな」

魔法陣の一部にスマホをセットし、詠唱を行ってみる。やる詠唱は……駄目だ。思いつかない。やっぱりFateの奴でいくか。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門

は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「Fateの奴だね。でも、時間って夜の方がいいんじゃない？」

「……それもそうだな。ついでにメルド騎士団長にお願いしてお金も貰ってくるか」

「そういえば、宝物庫から装備を選ばせてもらったの？」

「あく召喚士用にいいのなか聞いてみたけど、他の人を優先されただよな……」

「なら、一緒に探してみる？」

「それもいいかも。よし、いっちょ騎士団長様の所に向かうか」

「そうだね」

図書室から出て、騎士団の人を捕まえてメルド騎士団長が何処に居るかを聞いてそちらに向かう。彼は執務室で書類を処理していたようで、直に会ってくれた。

「用事があるらしいが、どうした？」

「実は召喚の実験にお金と魔力が増加する装備が欲しいんです」

「ふむ……」

「宝物庫に案内してもらった時、僕達は職に合わせた物を選ばませんでした。図書室で調べたら錬成師と召喚士に使える物を探したいと思います」

「確かにあの時は天之河達を優先していたな。良いだろう、掛け合ってみる。少し待っていてくれ」

「お願いします」

二人で頭を下げた後、しばらく待っているとメルド騎士団長が戻ってきた。どうやら、無事に許可が貰えたようなので、宝物庫へと移動した。

◇

宝物庫で改めて吟味して選んでいく。魔力が上がる装備を探し、召喚の触媒になりそうな物も探す。1000年という長い年月をかけて大地の魔力が結晶化した伝説の鉱石と呼ばれる神結晶とかあれば

いいんだが、流石にそこまでの品物は望んでいない。魔力を集めた魔力結晶でもあれば充分だ。

魔力が上がる装備は耳に穴を開けるタイプのイヤリングと魔法陣を書く為の杖があった。この杖はぶっちゃけ呪いの装備で、使用者の血と魔力を使って書き上げるマゾ用装備だ。イヤリングの方は魔力を溜め込んで一気に使うタイプだな。

「いいのあった?」

「あらかた取られてしまっているが……いいのがあった」

「そうなの?」

「ハジメはバッテリーの作り方って知っているか?」

「バッテリー? いや、流石に知らないけれど……」

「俺は知っている。そこでだ。魔力のバッテリーって作れないかな?」

「なるほど。沙条君の魔力で足りないなら、他から持ってきたらいいってことだね」

「そういうこと」

「バッテリーの材料は?」

「これだ」

俺は始めにタブレットでドクター・ストーンを見て調べ、ダウンロードしておいたページを見せて相談する。それからお金や鉱石を沢山持ちだしていく。文句を言われても、他の奴等より持っていくのは少ないし大丈夫だ。きつと、多分。

さて、楽しい楽しい工作タイムだ。ハジメは既に魔導具の作り方を覚えているので次の問題として、放出した魔力を溜める方法が必要だ。

「魔力は空気や大地に溶けている。少なくとも大地には溶けている事は確実。だったら、やる事は一つ」

「そうだな。一つだ」

二人で領いてから、急いで設計図を作って実験用の器具をハジメの錬成で作成。それからある一人の女の子の下へと移動する。といっ

ても、俺達だけで彼女の部屋に直接尋ねたらアウトだ。だから、皆が食事をしている時にお願いにきた。

食堂に入ると、一齐に視線が集まってくる。檜山や天之河達がこちらにやってこようとする前に目当ての女の子が食事をしている場所へと向かう。

「谷口、ちょっといいか？」

「うにゅ？ か、カオリンじゃなくて鈴？」

少し怯えられたみたいだが、今はガチャのためにどうでもいい。

「そう、結界師として頼みたい事がある」

「僕と沙条君で召喚を使う為の魔導具を作ってるんだけど、起動する魔力を溜めるために谷口さんの力を貸して欲しいんだ」

「もちろん、出来る限り報酬を出す」

このタイミングで天之河や檜山達がよって来たが、当然のように邪魔をしてくる。これはこいつらにもメリットがある事なので、邪魔されると困る。

「おい、谷口の迷惑に……」

「大事な話をしているんだ。邪魔をしないでくれ。これは全員にメリットを生み出せる可能性がある」

「あ？ なに妄想してやがるんだ。お前達ができるはずないだろ！」

「じゃあ、檜山は帰りたくないんだな」

「「え？」」

「あ？」

「「帰れるの！」」

全員が驚いたように言ってくるが、こいつらは忘れているのだろうか？

「あのさ、俺達って召喚されたんだぞ？ つまり、俺の天職による力と

同じだ」

「だが、それは神エヒトの力で……」

「いや、使われている理論は同じだ。問題なのは出力だけだろう。ちなみに言うところ召喚士というのは召喚だけでなく、送還もできる。この二つはセットのようなものだ。よしんば無理としても空間魔法の工

キスパートが召喚士だ」

「可能性があるって事ですか！」

「そういうことだよ、愛ちゃん先生」

先生にしつかりと伝えて味方につける。

「まあ、人のレベルではないって事は確かだろうから、莫大な魔力が要るだろう。それこそ、勇者数十人分が必要かもしれない」

「それは無理だろー！」

「普通は無理だ。特にこの世界の人には難しいかもしれない。だが、俺達はそれを常日頃から使っていたじゃないか。スマホとかで」

「もしかして、バッテリーですか？」

「正解です。流石は先生」

「なるほど、バッテリーなら確かにできそうです。一度では無理なら、複数回に分けて魔力を溜め込み、送還すればいい」と

「そういうことです。で、もちろんこれは机上の空論と言えます。そこで僕と沙条君は考えました。それ以外のメリットを提示すればいい」と

全員が不思議がっているところに、詳しく説明していく。

「作るのはバッテリーなんだ。つまり、魔力が切れた時の補助に使える。特に回復役や魔法使いには必須アイテムともいえる品物になるはずだ。想像してくれ。魔物が襲ってきて、魔力切れで戦えなくなつた魔法使いや治療できない治療術師はどうなる？ 答えは簡単だ。足手纏いだ。ダンジョンのような簡単に帰還できない場所だと尚更だ」

「「!？」」

「それとこのバッテリーはいざという時の攻撃手段にもなるよ。中身が魔力の塊だから、蓋やリミッターを外して投げつけてそこに魔法をぶつければ盛大に爆発してくれると思う」

「そんな危険な物を皆に持たせるなんてとんでもない！」

「いや、リミッターとかで大丈夫なようにするよ」

「少し危険かもしれないけれど、耐久性をちゃんと確認して安全対策を取れるなら確かに有効ね」

やはり、天之河は邪魔をしてくる。だが、八重樫も安全対策をしつかりとするとという前提でバッテリーには賛成してくれた。後は天之河だが、馬鹿に対する切り札がある。

「ところでさ。俺の召喚って触媒を使えばある程度コントロールして呼び出せるんだよな……」

「それがどうしたんだ？」

「例えばジャンプーやリンスとか召喚できる可能性が……」

ガタツと女子生徒が立ち上がってこちらを見詰めてくる。無茶苦茶怖い。だが、予定通りだ。天之河が反対しても、それ以上のメリツトを提示して女子を味方につければいい。

「まあ、試していないからなんともいえないが……俺はリンスやジャンプーの作り方を知っている。この意味、わかるよな？」

「手伝えば教えてくれるの？」

「むしろ、作って渡してやる。手伝ってくれない奴は知らん。売ってやるから買え」

「沙条、君は仲間から金を取るつもりか！」

「手伝うのならやるが、手伝ってくれない奴にやるつもりはない。ギブアンドテイク。等価交換というこ。さあ、どうする谷口鈴！」

「ぐっ……卑怯な！」

「確かに納得できるわね」

「そうだね、雫ちゃん」

八重樫と白崎の二人は納得してくれたようだ。他の連中は谷口に任せてどうにか融通してもらおうと思っっているのかもしれない。肝心の谷口はまだ悩んでいるな。

「ちなみに協力してくれたら、召喚できたアイテムを融通してもいい。実験次第だがパフェとか、男にはいらんないが、女にとって必要な物とかいろいろあるんだろ？俺はしらんけど」

「……いいよ、乗ってあげるよ、その悪魔の契約！」

差し出した手を握り返してくる谷口鈴。他の女子生徒達からの圧力に屈したか。

「いいの？」

「だって、鈴にもメリットがあるしね。それにバッテリーは有ったら皆が生き残れる確率が上がるんだよ。だったら、協力した方がいいよ」

「でも……危ない事はしない？」

「そのための結界師でもあるからね」

「わかった。私も協力する！」

「香織！ 君まで！」

「助かるよ。沙条君、下手したら死にかけるかもしれないから」

「え。何を使うつもりなんですか！ そんな危険な事、先生は許しませんよ！」

「いや、魔力がないんで増幅アイテムを使うだけです。副作用で死ぬ可能性があるかもしれませんが、なに白崎さんが居てくれれば大丈夫ですよ」

「香織に迷惑をかけるな！ そんな事に香織を参加させるわけにはいかない！」

天の河がこんな事を言ってくるが、どう考えてもブーメランだ。

「え？ それを戦争に参加する事を決めた天の河が言うの？」

「なに？ 俺が香織達に迷惑をかけたとでも……」

「死地に送り込まれるのが迷惑じゃないと思ってるのか？ 言っしまえば第二次世界大戦に戦闘機を持つて傭兵として参加するって事なんだけど、理解してる？ それも日本やドイツの負ける側で。できるだけ準備して生存率高めておかないと、あっさり死ぬぞ」

「この世界に戦闘機や爆弾なんて……」

「戦闘機はないが、ドラゴンやワイバーンなど空を飛ぶ魔物はいるし、爆弾の代わりに魔法がある。戦略級の魔法だって当然ある」

「俺が守るから大丈夫だ！」

「万単位で銃弾や砲弾、ミサイルが飛び交う戦場で全員を守れるのか？ 勇者一人で？ わかってるのか？ 戦いは数が有利だぞ。質を数で凌駕してくるぞ。その飽和攻撃から守れるというのなら、実際に試してみようか」

「何？」

「簡単だ。天之河が一人でクラスメイト全員からの攻撃を防ぎ、背後に配置したクラスメイト全員の身長と同じ箱を守る。これで一つも壊さずに守り切り、クラスメイトを倒せば天之河が言っている事は正しい」

「ふざけるな！ クラスメイトを攻撃するなどできるはずがないだろ！」

「じゃあ、騎士団の人達にお願いしよう」

「騎士団の人達を守るだけでなく何故攻撃しないといけない！」

「えっと、相手に人型モンスターがいる。それに魔族というのは調べた限りじゃ、俺達人と同じ容姿に角とかが少し生えていたり、肌の色以外は全く変わらなかったりする者がおおい。そんな相手を殺せないんじゃ、誰か死ぬぞ」

「俺が守るから誰も死なない！」

「……」

駄目だこれ。理解していない。この世界の人達が言った通りなら、魔族にすでに敗北しかけ。つまり、第二次世界大戦の時にアメリカが参戦してきたような状態なんだが、もう無視しよう。

「ソウカ。マアガンバレ」

「あ、諦めた」

「さて、谷口さん。明日からお手伝いお願いします」

「待て。谷口の練習を邪魔するな」

「邪魔にならないさ。むしろ訓練になる。なんせ、試行錯誤が基本だからな。数回から数十回は結界を張ってもらう。それに上手い事できたとしても量産するのに数を作ってもらう必要がある。それも精密操作で」

「待って！ それってかなり難しいよね！」

「頑張れ。さて、俺はこれからちよつと商談行ってくるから、この辺りでさらば。説明はハジメに任せた」

メルド騎士団長の下へと移動し、必要な物を用意してもらう。ウイキペディア先生の力を思い知るがいいさ、異世界。



「死ぬ！　死ぬよ！　これ無理！」

「いけるいける！　まだいける！　喋れるならまだいける！」

「デスマーチ、修羅場にようこそ」

「うわああああっ！」

朝からひたすら試作機に結界を張ってもらって、それを魔法陣で定着させる。魔力の通るパイプを設置してスイッチ形式で開け閉めし、結界内の魔力を移動させるようにした。問題は結界の維持に魔力が多少吸われていくのだが、維持を空気中に漂う魔力から供給すればどうとでもなる。

「錬成師も結界師もチートじゃねえか」

「工具が要らなくて自由に形を整えられるとかすごいよね」

「これ、ご褒美をくれないと鈴は許さないからね！」

「ご褒美か。何がいいんだ？」

「え？　それは美少女の胸かな？」

「そうか。じゃあ、ハジメから白崎に頼んでみよう」

「いやいや、無理だから！」

「え、大丈夫だと思うよ、カオリンなら！」

「というか、本人が居るところで止めてくれないかな？」

「は〜い」

ご本人様に怒られたので、二人して謝りながら作業を続ける。二人がやっている間に俺と白崎で魔法陣の作成だ。ちなみに杖は茨が生えて腕に絡まり、どんどん血を吸っていく。それで魔力と血を混ぜた魔法陣を描き、実験していく。

スマホは使わず、触媒は女生徒から提出してもらったシャンプーやリンス、ファンデーションなどなど。それを使って召喚を試してみた。やはり魔力が足りない。そこで課金してみた。

「行け、金貨10枚!」

「「うわあ」」

触媒に金貨を使うと、なんと真つ赤な血で描かれた魔法陣が光り輝き、中央に幾つもの影が現れる。

「☆5来い☆5来い!」

「美少女こい美少女こい!」

俺と谷口は互いに見合わせて同時に言葉を発する。

「「そうだ! ☆5美少女来い!」」

「鈴ちゃん! 沙条君!」

そして、光が収まった時に現れたのは……C青椒肉絲。Cリンス。Cブラジャー。R魔力式ドライヤー。Cシャンプー。C木刀。Cカレーライス。Cジャンボデラックスパフェ。Rスキル・サクリファイ。小石。

「……失敗か。全てR以下じゃねえか。けっ、使えない金貨だぜ」

「まったくだよ。あ、ジャンボデラックスパフェもらうね」

「ずるい!」

「女性陣でどうぞ。その、色々回収してくれると嬉しい」

「う、うん」

ブラジャーなどは女性陣に回収され、ほっかほかの料理は俺達のご飯として食べさせてもらう。故郷の味は美味い。

スキル・サクリファイはサクリファイを覚えられるみたいだ。何故か召喚したアイテムの詳細がわかる。どうやら、召喚と同時にそれに対する知識がある程度は頭の中に流れ込んで来るみたいだ。鑑定機能みたいな感じだな。Fateのサーヴァントのように知識をインストールされる感じの方が近いかもしれない。

ちなみにサクリファイは生贄に捧げた分だけ効果が得られるみたいだが、自分限定なので使えない。よっぽどの時以外は使えないだろう。

「さて、次の十連に行こうか」

「え、金貨つて凄い高価な奴じゃ……」

「知った事か! SSRかURが出るまで引くんじゃああああ!」

「止めろ！ 止めるんだ！」

金貨がたつぷり入った袋を魔法陣に入れようとする、ハジメや白崎、谷口まで抱き着いて防止してきたが、暴れてなんとか放り込む。「あ」

その時、一緒にスマホまで触媒の所に入ってしまった。その瞬間。魔法陣は発動して——金貨が全部消えてスマホだけが残った。

「……えっと」

「お金だけが消えた？」

「スマホ……変化はある？」

「いや、特にない……」

「金貨が……俺の全財産が……」

「ちなみにいくら入ってた？」

「232枚」

「え？」

「だから232枚だ！ 一枚1万から10万ぐらいはすると思われ……」

「あはははは」

「アーティファクトの代わりにもらった支度金だったんだが……あはははははははは」

「どんまいー」

「せめて232連引かせろよおおおおおっ！」

嘆き悲しんでいると、三人は立ち上がってすぐにバッテリー作りを再開した。俺はしばらく呆然としていた……

鈴

どうしてこうなったのだろうか。ただ、何時ものように学校に行つて授業を受けて友達とお喋りをしていただけだったのに。

それなのにお昼になったら異世界に召喚され、この世界、トータスを救つて欲しいと教皇の人にお願ひされた。

それを天之河君が受けて、鈴達も同調して一緒に受けることになった。愛ちゃんだけは拒否していたけど、その時はまだ良くわかつてなかった。でも、天之河君やかおりん、

それから、鈴達が世話になるステータスプレートを貰い、結界師という天職になった。

この結界師というのはバリアを作つて皆を助ける天職みたいで鈴には合っていると思う。

結界師になつてからちゃんと攻撃を防げるように頑張つて訓練をしていく。

そんなある日、その日の訓練が終わつて一日に何度かある至福の時、食事をするために食堂にやってきた。ちなみに今の一番の楽しみはお風呂でかおりんの胸を揉むことだからね！ かおりんの胸は鈴が育てた！

まあ、そんな風に食事をしていたら、クラスメイトで関わりのない男子二人に声をかけられた。

一人はかおりんの思い人で、もう一人は太った人。この二人はクラスでもあまりよく思われていない。ゲームばかりしてよく遅刻ギリギリにやってくるからだ。それにかおりんが南雲君に構うからまた嫌われる原因になっている。

トータスに来てから二人は最初のステータスプレートを貰つてから訓練に出て来ていない。何をしているのかなんて知らない。

それにクラスメイトとはいえ話しもほとんどしないし、沙条君にいたつてはたまに視線が会うくらい。話なんてしたことないし、なにされるかわからないから怖い。でも、指名されたから答えないといけな

い。

「うにゆ？ か、カオリンじゃなくて鈴？」

かおりんに用事なら、色々わかる。かおりんは南雲君に好き好き光線を出して積極的に関わっているから。でも、なんで鈴？ かおりんが笑顔を向けてくるけれど、目は一切笑っていないから凄く怖い。「そう、結界師として頼みたい事がある」

「僕と沙条君で召喚を使う為の魔導具を作ってるんだけど、起動する魔力を溜めるために谷口さんの力を貸して欲しいんだ」

「もちろん、出来る限り報酬を出す」

報酬って何をくれるんだろう？ それ次第で協力してもいいかな？

そう思っていたら、天之河君が来て揉め出した。その過程で沙条君がとんでもないことを言い出した。

一つ目は召喚魔法を極めれば帰る可能性がある、かもしれないこと。これはかなり大変な事みたいだけれど、是非とも成し遂げて欲しい。応援するよ！

二つ目は魔力のバッテリーを作るという事。この件で鈴に協力を要請してきたみたい。皆が生き残るために保険として必要な物だと説明された。その時に魔力の切れた後衛は足手纏いにしかならないと言われてムツとした。でも、それからの話を聞いて納得できる事があった。

三つ目は戦争について。沙条君は鈴達がこれからすることは「第二次世界大戦に戦闘機を持ち、傭兵として参加する様なもの」と言ってきた。その言葉で考えて思いだしたのは社会や日本史の授業で習った事だ。授業で戦争の映画を見せられ、それについてレポートを書くという内容だった。そこで見た無数の戦闘機が戦艦を破壊していくけれど、逆に相手の戦闘機に落とされ、味方の戦艦がどんどん落とされ、沖繩に上陸されていく光景。

確かに鈴達には特殊な力があるけれど、その力が絶対的な力じゃなければ沙条君の言う通り殺されてしまうのかもしれない。少なくとも、魔力が無くなった魔法使いタイプは倒しやすいと思う。それにそ

んな仲間を守ろうとすると味方の行動が制限されて皆が倒されるかもしれない。それは嫌だから、協力する事にした。



夜。聞きたい事があったので親友である恵里の部屋にやってきた。一人じゃ怖いし。恵里は眼鏡をかけたナチュラルボブの黒髪をした女の子で、温和で大人しく地球では図書委員を務めていた。だから、きつと知識はあると思う。

「どうしたの?」

「えっと、食堂での沙条君が言ってた事どう思った?」

「どれについて?」

「バッテリーとか、戦争について」

「バッテリーはあれば助かるよ。私達後衛は魔力が切れたら戦闘能力が格段に落ちるから」

「それは鈴と同じだね。戦争については?」

「戦争は……」

しばらく悩む恵里から一瞬だけ変な感じがした。でも、すぐに何時もの恵里に変わったからきつと気のせい。

「あいつの言う事もわかるけれど、天之河君の言う事なら大丈夫だと思っようよ」

「そう? でも、魔物の数は凄いなだね? 今の私達だと……」

「大丈夫よ。確かに今、私達は弱いけれど、強くなっているし彼が守ってくれるわ」

「ほ、本当に?」

「ええ、もちろん」

即断してきた恵里にちょっと恐怖を感じる。まるで天之河君が言う事は絶対だというみたい……

「え、恵里……?」

「どうしたの?」

「ううん、なんでもない。それより明日から手伝う事になったんだけど、大丈夫かな？」

「大丈夫だと思うよ？ 白崎さんもいるし、何かされればすぐに助けを呼んだらいいしね」

「そ、そうだよね」

「心配なら定期的に覗くようにするよ。その方が都合がいいし」「え？」

聞こえなくて聞き返すけれど、恵里は微笑むだけだった。それから、他愛ない話をして切り上げた。



次の日。食事を終えた鈴は早速、カオリンに引っ張られて沙条君と南雲君に合流した。カオリンはそれはもう、満面の笑みを浮かべていて、とても嬉しそうにしている。

そして、国から与えられたらしい工房に移動して四人で作業を始めるのだけれど……そこからが地獄だった。鈴の味方は誰もいない。

「谷口、ここの球体に魔力を零さないように結界を張ってくれ」

「やったことないんだけど……」

「球体の結界は作れるか？」

「作れるよ」

「そうか。じゃあ、この水……色をつけた方がわかりやすいな」

そう言って沙条君は水瓶から水を取り出して、おもむろに指をナイフで切って血を混ぜる。その水を鈴に差し出してきた。顔が引きつるのが自分でもわかる。

「この水を結界に閉じ込めて洩らさないように実験してくれ」

「ひ、必要な事なの？」

「必要だ。せつかく閉じ込めた魔力が逃げたら意味がないからな」

「わ、わかったよ……」

失敗したら掌に血が混じった水がかかるといふ罰ゲームありでやる事になった。拒否しようとしても、カオリンが怖すぎて拒否できない。南雲君と私の時間を邪魔するなんてどういふつもりなのかな？
って感じのプレッシャーを受けるし。

二時間ほど練習したらできた。何事も必死になればできるって鈴は理解したよ。それから、指定された場所に結界を展開して魔法陣を銅っぽいの吸い込ませる。起動できれば成功。失敗したら別を作っていく。

沙条君と南雲君からの要求がどんどん厳しくなっていく。ミリ単位で調整しろとか言われても無理だよ！ 強すぎたら銅の板が壊れるし、弱すぎたら逆に魔力が逃げだして意味がない。

「これでどうだ！」

「お〜丁度いいね。凄いよ谷口さん」

「鈴、よく頑張ったね」

「えへへ〜」

「きやつ」

本気で、死ぬ気で頑張ったのでカオリンの胸にダイブして頭を擦りつけて英気を養っていると、大魔王が降臨した。

「凄いぞ谷口。じゃあ、次は二重の結界を作ってくれ」

「え〜？」

「あ、正確には一つでいい。外側から魔力を吸収して内側から魔力を逃がさない結界だ。おそらく二重構造の方がやりやすいと思う」

「え、無理」

「それができないとバッテリーは作れない。南雲がとっても悲しむだろうな。白崎はどう思う？」

「か、カオリン？」

「鈴ならできるよ。頑張って！」

「……鬼！ 悪魔！ 外道！」

「さあ、練習だ」

夕方まで頑張ってどうにかできるようになってきたけれど、まだまだ

だ精度が甘いらしい。

「死ぬ！ 死ぬよ！ これ無理！」

「いけるいける！ まだいける！ 喋れるならまだいける！」

「デスマーチ、修羅場によるこそ」

「うわあああああつ！」

南雲君と沙条君の言葉に鈴は泣きながら逃亡をしようとしても、カオリンが許してくれない。恵里も見に来てくれているけれど、助けてくれない。むしろ、対応をカオリンがするのでカオリンにとっては南雲君と共同作業ができる天国に邪魔者はいれないということみたい。

「錬成師も結界師もチートじゃねえか」

「工具が要らなくて自由に形を整えられるとかすごいよね」

「これ、ご褒美をくれないと鈴は許さないからね！」

朝から頑張つてもう鈴は燃え尽きかけなんだから、貰えるご褒美がなければ耐えられない。

「ご褒美か。何がいいんだ？」

「え？ それは美少女の胸かな？」

カオリンの胸を思う存分揉みしだきたい。

「そうか。じゃあ、ハジメから白崎に頼んでみよう」

「いやいや、無理だから！」

「え、大丈夫だと思うよ、カオリンなら！」

「というか、本人が居るところで止めてくれないかな？」

「は〜い」

腕で胸を潰しながら隠してくるカオリンに沙条君と一緒に謝る。それから沙条君が自らの血を混ぜて書き上げた魔法陣を使つて召喚実験を行った。触媒はお金で召喚を実行すると幻想的な光景が現れた。

「☆5来い☆5来い！」

「美少女こい美少女こい！」

沙条君と鈴は互いに見合わせて同時に言葉を発する。思うところは一つ。

「「そうだ！ ☆5美少女来い！」」

「鈴ちゃん！ 沙条君！」

カオリンに怒られたけれどこれは仕方ない。それで出て来たのは女性用の品やシャンプーとか、木刀とか、色々。とりあえず、ブラジャーを貰おうとしたけれどカオリンに奪われた。南雲君を落とす為に必要なだろう。まあ、先に鈴がジャンボデラックスパフェを選んだだけけど。ちなみにこのパフェ、凄く美味しくて夢中になっちゃった。

その後、沙条君が全財産を溶かしたけれど、鈴達は悪くない。きつと悪くない。呆然として部屋の隅で項垂れているけれど……うう、やっぱり鈴達が邪魔をしたのがいけなかったのかな？

どんまい！ と伝えてから作業に戻る。バッテリーを作れば喜んでくれるよね？

◇

お風呂で早速、シャンプーとリンスを使ってみたら……効果がやばかった。シャンプーは凄くいい匂いがするし、リンスは髪の毛がサラサラになって風でふわっと浮き上がって風の向きに流れる。これ、体験したらパフェと一緒に止められないかもしれない。

カオリンとお互いに秘匿する事を決めた。皆で使ったらすぐに無くなっちゃうしね！

「へへそれ、私も使わせて？」

「恵里……いつの間に……」

「いいよね？」

「は、はい」

大人しく差し出し、結局は女子全員で共有する事になってしまった。まあ、もともとから隠し通せるとは思っていないしね。ただ……ジャンボデラックスパフェとかの甘味だけは隠し通すよ。これは頑張った鈴へのご褒美だからね。

◇

次の日から、沙条君は何処に行つて素材を持って戻ってくる。それでカオリンと一緒にシャンプーやリンスを作っていく。鈴と南雲君はバッテリーの制作だ。カオリンに凄く羨ましがられるけれど、こればかりは仕方ないのだから諦めて欲しい。ただ、沙条君と一緒にサポートも忘れない。

「ハジメ、この花の中で好きな匂いはどれだ？」

「えつと、これかな？」

「そうか。じゃあ、白崎。これでリンスとシャンプーを作るぞ」
「わかったわ」

こんな風に南雲君の趣向を聴き出して、それをカオリン専用ブレンドとする。鈴も一生懸命に二人つきの時間を増やすように行動してあげる。結果的に沙条君と一緒に居る時間が増えたので色々話すことになった。まあ、内容は如何にして南雲君とカオリンをくつつけるかだけだ。

そうこうしているうちに数日が経ち、試作バッテリーは八割型完成した。けれど、一番重要なところがまだなのでこれから実験を行う。そのために訓練をしている場所に移動した。

もちろん、メルド騎士団長の許可はもらっているし、他の皆も待機してもらっている。そんな中で沙条君が杖で大きな魔法陣を書いていく。それも杖から生えた茨を腕に食い込ませて血を吸わせながら。ここだけ見ると、皆の為に命を張って頑張っている姿はカッコイイと思う。容姿が駄目だけれど。あとガチャ狂い。王宮に来ている王族や貴族の人にシャンプーとリンスを暴利で売り、稼いだそばからガチャに溶かすのはどうかと鈴は思う。まあ、鈴としては美味しい思いをしているからいいけれどね。

ちなみに出たのはほとんどがコモンアイテムで、レアアイテムは魔力水という魔力が籠った水。これをバッテリーの中に入れる液体とすることで結構いい効果を得られた。あとは基本的に食料かゴミアイテムだった。小石とか薪とか丸太とか。

「南雲君、これはこつち？」

「うん。そこをお願い」

「これがここだと、これはどこ？」

「そうだよ。凄いね、覚えたんだ」

「えへへ」

嬉しそうにイチチャラブしながら試作型バッテリーの作業を行っていく南雲君とカオリン。ここには鈴達以外が居る事を忘れていていると思う。ちなみに天之河君達が邪魔をしようとするけれど、鈴が結界を声と出入りを遮断する結界を二重で展開しているので聞こえないし、入ってこれない。

「カオリン、鈴のサポートを喜んでくれるかな？」

「どうだろうな？　というか、やりすぎじゃないか？　檜山や天之河が無茶苦茶睨んでるが……」

「皆も隣でイチチャイチチャされる鈴達の苦労を思い知るといいよ」

「それもそうだな」

これでカオリンが誰が好きなのかをハッキリと理解したら、諦めてくれると思う。うん、きつと大丈夫！

「よし、設置完了。どうしても大型になっているけれど、今は仕方ないよね」

「小型化するのは完成してからだしな」

「だね」

準備が出来たみたいなので結界を解除して皆に入ってもらおうけれど、注意もしっかりしておく。

「くれぐれも魔法陣を消さないようにお願いね。もし消したら爆発するかもしれないから気をつけてよ！」

全員が魔法陣の中に入る。要注意の人達はしっかりと監視しておく。皆が入ったら、早速実験を始める。

「では、今からする実験を説明します。この結界の中で魔力を放出してもらいます。といっても、鈴ちゃんの結界で引き出すので抵抗しないでください。辛くなったら魔法陣から出てください。これは皆の為になる実験なので、協力してください。お願いします」

カオリンが皆をお願いする。説明とか説得とかは全部カオリンに

お願いした。鈴達がやるよりスムーズだしね。

実際、カオリンのお願いにいい恰好をしたい男子が頑張つて魔力を放出した。それを結界で受け止めてバッテリーに溜め込んで引き出せるか、貯蓄できるかなどを確認していく。

魔力を貯めていると、限界を超えたら放出されるし、どこまで耐えられるかというのを知らないといけないらしい。そのため、沙条君だけを残して皆がでる。鈴は外から結界を維持していく。

「沙条君！ もう限界だよ！」

「了解だ」

沙条君だけが残ったのは、溢れ出して暴走状態になった魔力を安全に消費し、ついでに美味しい思いをするため。天之河君達の魔力はとも高いしね。

床に書いた召喚用の魔法陣が光り輝き、赤い光が周りを照らす。中央にある魔法陣の近くにいる沙条君も光に包まれている。特に一ヶ所だけでも光っている気がするけれど、気のせいかな。

それに光が無数に浮かび上がって幻想的な感じを醸し出し、その赤い光がどんどん色が変わっていく。そして、光から出てきたのは……

「掃除機だどー！ いらんー！」

沙条君の言葉が聞こえてポイツと投げられてくるのを南雲君が回収する。

「ゴモン。ただの吸引力が衰えない魔法の掃除機だね」

求めているものじゃないなあ。次は石が飛んできた。普通の石だね。その次は絵日記。ショートソード、槍。その槍を南雲君がみると、凄く驚いていた。

「これ、疾風の槍……SRで移動速度上昇効果があるね。使用者の魔力を消費して風を自由に扱えるみたい」

「まじかよー！」

流星はSR。とっても強いね。次は麻婆豆腐だった。慌ててキャッチした坂上が悩んでいた。次は鎧でプレートメール。次は光ったけれど人型になったけれど飛んでこなかった。その次は真っ赤な剣が飛んできた。最後に小石。

光が完全に収まり、沙条君の姿が見える。その隣にはゆるゆるふわふわのウェーブがかつている光り輝く金色の髪をした幼い女の子が立っていた。瞳も金色で、服装は赤いシャツに茶色のズボン。ジャケットも着ているみたい。沙条君は彼女の両手を掴んで涙を流していた。

「あ、本当に美少女引いちゃった」

「確保！」

天之河君の声に一齐に坂上君達が動き出していく。でも、鈴の結界に阻まれる。皆がこちらを見てくるけれど、知らない。何かを話しているみたいだけど、聞こえない。いや、向こうからやってきた。

「ハジメ、ステータスプレートを貰ってこっちにきてくれ！ 彼女は本物かもしれない！ 急げ！ それと谷口は結界を続けてくれ！

後でお前が大好きな白くてドロドロした奴をやるから」

「了解！」

「りよ——」

「え？ 鈴？」

「あ、言い方！ 言い方ああっ！」

皆に詰め寄られたので、大人しく白状したら無茶苦茶頬つぺたを抓られた。甘味の独り占めならぬ二人占めについて後で話し合いが持たれることになってしまった。

南雲君がステータスプレートをメルド騎士団長から貰って向かい、金髪幼女の血を垂らしていく。それから彼女のステータスプレートを見た二人は……狂喜乱舞した。具体的には彼女を持ち上げて振り回すような。

「カオリンとせずしず、判定は？」

「流石にアウトかな。雫ちゃんは？」

「普通に考えて事案じゃないかな？」

「よくし、確保！」

結界を解除した瞬間、皆がかける。

「あ、やばい。鈴ちゃんすぐに隔離して！ 下手したら皆が死んじやう！」

「え！」

カオリンの言葉に急いで結界を展開すると、先頭を走っていた天之河君や檜山君達がぶつかって坂上君に押し潰された。女の子は怖がって沙条君の後ろに隠れる。

「カオリン？」

「あの子、本物ならあるゲームやアニメでラスボスなんだよね。借りた漫画で見た事があるよ」

「え」

「ラスボス……」

ラスボスを召喚するとか、召喚士も大概チートだと思う。ありふれた職業って何気にやばいのがいっぱいあるよね。

第4話

暴走状態になった魔力を使って召喚……ガチャをしたらようやく待ち望んでキャラが現れた。誰でもいいとは思わないが、光が小さな形となって固定化される。続いて光が晴れるとゆるふわエープの髪の毛をした金髪金眼の幼女、ユーリがいた。

「私はユーリ・エーベルヴァインです。召喚に応じてこちらに来ましたが、ごめんなさい。今の私ではあなたの力になれないかもしれません」

「いや、それでも召喚に答えてくれただけで十分だよ」

しょんぼりと項垂れているユーリとしゃがんで視線を合わせて答える。

「本当ですか？」

「ああ、本当だ。だから、君の事を教えてくれるかな。ユーリはその、召喚される前の事は覚えているか？」

ユーリ……ユーリ・エーベルヴァインが登場する作品はゲーム、映画、漫画の三つがある。どれをとつても彼女は強大な力を持っているのに力になれないとはどういう事だろうか？

「ある程度、全部覚えていきます」

「全部？」

「はい。私はユーリ・エーベルヴァインであつて、ユーリ・エーベルヴァインではないのかもしれませんが。自分が作られたキャラクターであることも知っています。魔法少女リリカルなのはINNOCENTのユーリ・エーベルヴァインです。それに加えてゲームや映画などの記憶も全て保持しています」

「それは……」

記憶を保持しているという事は、システムU—Dについて知っているという事だろう。召喚した時にスマホが関係していたのかもしれない。

タブレットやスマホには俺が魔法少女リリカルなのはINNOCENTの他に魔法少女リリカルなのは―THE GEARS OF DESTINY―も入っている。

もちろん、映画も入っているし漫画のデータもある。これらのデータが基礎としてユーリ・エーベルヴァインを統合して召喚されたのかもしれない。

ただ、そうなると暴走状態になればこの世界で誰が止められるというのだろうか？ 勇者である天之河？ 無理だ。ユーリがそのままゲーム通りのスペックなら瞬殺されるだけだ。

「あ、安心してください。私のメインはあくまでもINNOCENTのユーリ・エーベルヴァインです。あなたに色々とお世話をしてもらって仲良くなったユーリです。アマタとキリエを学校の前で待つてから、私の部屋に移動して一緒にぬいぐるみを抱きしめながらイベントを考えて作った事も覚えていますよ。だから、私はあなたのユーリです」

凄いやワードだ。あなたのユーリですとか、やばい。まあ、落ち着こう。とりあえず、ユーリが言っているのはメモリアル☆パーティーのことだろう。他にも色々なイベントでユーリの限定コスチュームとかを集めに集めた。

しかし、ゲームデータ通りのユーリとなると、確かに可愛がっていたユーリなのだろう。彼女とは常に一緒に戦っていた。基本的にユーリや紫天のマテリアル達でデッキを組んで使っていたからな。

「どうして召喚に答えてくれたんだ？ 危険だぞ」

「毎日話しかけに来てくれて嬉しかったんですよ？ それに色々な所にも連れていってもらいましたし、別世界の私もいっぱい応援してもらいました。だから、今度は私が助ける番なのです」

詳しく聞いてみると、プレイしたゲームはなのは達と一緒に助けたこととなっており、映画は応援してくれていたような感じだ。

応援は物理的に考えると円盤を購入したとかだろう。他に考えられるのは映画を見ながら応援していた事か。そう考えるとある意味では間違いない。

INNOCENTの方は本当に一緒にいろんな所を冒険したり、遊んだりしたのが嬉しかったようだ。イベントは皆勤賞でいっぱい課金したから最初から好感度はある程度はあるようだ。本当によかった。

「ですので、あなたの傍に居させてください。私が頑張って守ります！ スピリットフレアはまだありませんが……きつと大丈夫です」

拳を作って気合を入れるユーリの可愛らしさに思わず撫でそうになる。だが、今はやる必要がある。

「ありがとうございます。悪いけれど頼むよ。一応、この世界でのステータスを確認とかしたいから、少し待ってくれ」

「はい」

メルド騎士団長からステータスプレートを持って来てもらうようにハジメへ頼む。ハジメはすぐに受け取ってこちらへとやってきてくれた。するとすぐにユーリは俺の後ろに隠れる。どうやら、人見知りという設定は残っているようだ。

「持ってきたよ。それで彼女はこういう感じになったの？」

「聞いて驚け。ゲームやアニメの中から召喚したようだ」

「本当！ それって凄いい事だよ！ じゃあ、カーマを召喚なんて……」

ハジメが聞いてきた奴は色々ややばい奴だ。カーマというのはビーストとしても存在している。ただのアサシンとして召喚されたのならいいが、人類悪のビーストなら世界が終わる。流星は季節で世界が滅びるような世界だ。

「可能かもしれないな」

「そっか。うん、しばらくガチャ禁止ね」

「何故だ！」

ガチャを禁止とかふざけている。そんなのは断じて認められない！

「彼女はまだ大丈夫かもしれないけれど、魔王とか殺人者とか召喚したらどうするの？」

「あ、あの、私が守りますが……」

「沙条君。君は自らの欲望を叶え、ユーリちゃんを危険にさらすのか

な？ ほとんど力の無い彼女を……」

不安そうにこちらを見上げてくる。自分が守るとは言ってくれたが、今のユーリの力ではどうしようもないだろう。

「無理だな。ユーリの気持ちは嬉しいが、危険すぎる。俺にユーリを犠牲にするなどできない」

そう答えるとユーリはどこことなく嬉しそうな気配を発する。ユーリの賢さなら、どれだけ無茶な事かしっかりと理解できているだろう。

「うん。理解してくれてよかったよ。ガチャは彼女が強くなるまでは待った方が良く。ユーリなら、力を取り戻したら大抵の存在は制圧できるとは思うね」

「わかった。ユーリもそれでいいか？」

「あなたが言うのなら構いません」

ユーリも納得してくれたようなので、ステータスプレートを受け取って、ユーリに渡す。ユーリは不思議そうに見ながら使い方を聞いてくる。

「これはどのように使うのですか？」

「ステータスプレートにある魔法陣に血を垂らすと、ユーリのステータスが浮かび上がるんだ。やってみてくれ」

「はい」

指を噛んで少し血を出して塗りつける。するとステータスが浮かび上がってきた。

ユーリ・エーベルヴァイン ○○歳 女 レベル：1

天職：アンブレイカブル・ダーク 砕け得ぬ闇

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

耐魔：10

技能：魔導師・天才・デバイス作成・言語理解

永遠結晶エグザミアこそ持っていないが、魔導師のスキルは持っている。バリアジャケットを着込めば戦えるだろう……いや、デバイスがないから無理か。能力値が全体的に低いし、どうなるかわからないな。やはり、ユーリがデバイスを作るまで待つしかない。

「本当に本人みたいだね」

「もちろんです。私はユーリ・エーベルヴァインで間違いありません……よ？」

「いや、そこは疑っていない」

「本当、ですか？」

涙目になったので抱き上げてクルクル回してやると、嬉しそうにしました。しばらくユーリを可愛がり、地面に降ろす。

「問題は天職だよね」

「アンブレイカブル・ダーク
砕け得ぬ闇って、やばすぎだろ」

「レベルが上がったらエグザミアとか生えてきそうだね」

「エツヘン！ 任せてください！ エグザミアは欠片とはいえ、ちやんと私の中にもありますから成長させれば大丈夫です。こちらの世界に来るのに力を使いすぎて小さくなっているだけですから」

可愛く胸を張るユーリ。本当に可愛らしい。INNOCENTがメインだから、暗い部分はかなり少ないな。

「それは朗報だな」

「朗報なのかな？」

ユーリの頭に手を置いて撫でながら、光っていたスマホを確認する。するとしっかりと動いた。相変わらず電波は立っていないが、新

しいアプリが増えている。

確認してみると召喚キャパシティーと書かれていて、現在は10/10になっているようだ。隣にはユーリのアイコンがあって、触れてみるとユーリのステータスが全て表示される。そう、全てだ。服装からなにかからスリーサイズや健康状態などもありとあらゆるユーリに関する情報が全て表示された。

試しに装備を変えてみよう。

ジャケットを取って見ると、ユーリの服が光となって消えた。ユーリは赤いシャツだけとなって慌てて身体を隠す。すぐに戻してやると、こちらを見詰めてくる。

「あの、なにをしたんですか？」

「すまない実験をしていた。ユーリにとって悪いかもしれない事だが、どうやら俺はユーリの全てを掌握しているようだ」

そう言いながら、スマホを見せると天才である彼女はすぐに理解したようにスマホを返してきた。

「えつと、今の私が着ている服や身体は魔力で作られているようです。早急にこちらでの服をお願いしますね」

「わかった。用意してもらおう」

といつても、ユーリの服をユーリと一緒にとはいえ、買いに行くのは無理だ。俺にセンスなんてないし、女性特有の必需品なんてわからない。だから、ここは女子を巻き込んだ方が良さ。だが、俺の容姿的に普通に頼んでも駄目だ。だから、高確率で成功する手段を取らせてもらおう。なに、生贄はいる。

「なんだか凄く嫌な予感がする」

「大丈夫だ、問題ない」

「？」

不思議そうに小首を傾げるユーリと、嫌そうな表情をしているハジメを置いて、メルド騎士団長の方へ視線を向ける。するとこちらにやってこようとして結界に阻まれているクラスメイト達の姿が見えた。

天之河は結界を展開している谷口に詰めよっていて、谷口自身は両

手を耳にあてて聞こえないふりをしている。近くにいる白崎は天之河を押さえようとしているようだ。

「もう無理矢理結界を破壊して彼女を助ける！」

限界が来たのか、聖剣を抜き放ち、こちらへと振り上げている。まるで俺がユーリを襲っているみたいだな言葉だな。

「谷口、白崎、ハジメ。明日街に素材調達しに行くぞ。ついでにこの子、ユーリの服とか日用品を買いに行くから。ユーリに似合う服を選んでくれ」

「任せて！ こんな可愛い女の子なら大歓迎だよ！」

こちらにダッシュして結界に入り、ユーリに突撃する谷口。だが、ユーリは即座に俺の後ろに隠れながら俺を盾にする。

「ぶふあっ!?!」

「ひぎゅっ!?!」

結果、谷口のタックルをもろに受けたが、後ろにユーリが居るので踏ん張って耐える。なんとか、谷口の肩を掴んで引き離す。彼女からいい匂いがしてドキドキしてしまうが、あのシャンプーとリンスを使っているせいだろう。

「ごめんごめん。大丈夫?」

「なんとかな。とりあえず、明日は頼む」

「了解。鈴は谷口鈴。よろしくね！」

「ユーリ、ユーリ・エーベルヴァインです……よろしく、お願いします……」

顔だけ俺から出して挨拶をするユーリ。俺を守ってくれるらしいが、こういう事からは守ってくれないみたいで安心した。流石に日常からユーリのような幼い少女に守られるのは御免被りたいしな。

「南雲君と街に買い物……? 鈴ちゃんに沙条君を任せればそれって

……うん、私も一緒に行くから、必要な物を全部揃えよう」

白崎が近付いてきて何かつぶやいたが、おそろく予想通りだろう。計画としては午前中にユーリの買い物をして、午後からはハジメと白崎の二人と、俺とユーリ、それに谷口の三人で別れて必要な物を集める予定でいこう。つまり、白崎とハジメのデート計画だ。こちらはこ

ちらで楽しませてもらおう。ユーリを案内しないといけないからな。

「谷口、メルド騎士団長を結界の中に入れてくれ」

「はい」

天之河達が攻撃しだったが、今の谷口は前の谷口とは違う。結界が一枚壊されても次の結界が存在する。二重にしか展開できないが、一枚が壊されたら次の結界を強化し、新しい結界を再展開する。これを繰り返す事で破壊される事を防ぐ。ただ、少しずつ接近されているし、魔力効率がよくない。その点はまだまだ直さないといけないだろう。

「メルド団長、もう結界に入れるのでこちらへ来てください。彼女について説明します」

「わかった。そちらに行こう。光輝達は攻撃を止めろ」

「しかし！ 沙条は彼女を……」

「落ち着いて光輝。それに……」

「ああ、どうやら知り合いみたいのようだ。仲が良さそうだし、お前達が心配している事はないだろう。事情を聞いてくるから待っている」「くっ……わかりました。皆、とりあえず様子を見よう。谷口、俺達も入れてくれ。話し合いに参加する」

メルド団長や雫が説得してくれたようで良かった。メルド団長がこちらに来たらしつかりとユーリについて説明するが、さてどうしようか。それに谷口が天之河達を入れていいかと視線で聞いてくるので許可しておく。ただ、何かあったら守ってもらおう。

「それで彼女は誰なんだ」

「彼女の名前はユーリ・エーベルヴァイン。俺との関係は……」

「関係ですか？ この人は私のマスターです」

「間違っていないけど言い方！」

「沙条貴様！」

「「うわぁ……」」

額に手を当てて溜息をつく。言ったユーリはわかっていないみたいだ。召喚。つまり、彼女を呼び出しているのは俺なのだ。それも含めて使い魔やユーリ自身がある意味ではプログラムなので、彼女自身

が俺のデバイスという扱いにとらえていてもおかしくない。俺自身の手で召喚や送還ができるようだし、ユニゾンデバイスになってくれるかもしれない。

「ユーリ、そのマスターというのは止めてくれ」

「間違っていますよ？ 私はお兄さんの求めに応じて召喚されたんですから」

「正直、マスターよりお兄ちゃんの方がいい」

「お兄ちゃんですか？ わかりました。お兄ちゃん……なんだとても不思議な感じですよ。お兄ちゃん……気に入りました」

「それはよかった」

「……な、なあ……彼女は本当にユーリ・エーベルヴァイン……なのか……？」

「そうだ清水」

「な、なら、他の奴を呼び出す事だつてでき、できるのか？」

「可能かもしれないが、今はやらない。ユーリが力を取り戻してからだ」

「そうか……」

清水に答えてから、改めてメルド団長に向き直る。

「彼女の扱いですが、俺の召喚獣だと思ってください。召喚用のキャパシティーが追加されて、使われているので間違いありません」

「キャパシティーを使っているのなら、確かに召喚獣なのだろう。流石は天職が召喚士か。人を使役できるなど、知らなかったな。大概、鳥や魔物と契約して使役するんだが……」

「今回の契約方法はある意味では邪道ですからね」

「そうだな。だが、君達が作っているバッテリーというのを解せば他の召喚士達でも強力な魔物を使役できるかもしれない。そうなれば数で劣る現状を押し返す事はできなくても、押しとどめる事はできるかもしれない。後で実験に協力してくれ」

「わかりました。それとユーリの扱いがどうなるか、ここで明言していただきたいのですが……」

「彼女が召喚獣であるのなら、扱いは召喚者に一任される。君達勇者

の扱いが神エヒト様によって決められているようにな」

「なるほど」

「ただ、気をつけてくれ。召喚獣が起こした問題は全て召喚者が背負う事になる。例えば衣食住を用意するのも召喚者の役目だ」

「わかりました。肝に銘じておきます」

とりあえず、ユーリは衣服は明日買いにいくとして、食事は俺のを別ければいい。寝る場所は同じ部屋で問題ない。最悪、召喚解除という手段もあるしな。

「よし、これでいいな。では、本日の訓練を開始する」

「待ってくれ！ 沙条のような危険な奴からユーリちゃんを助けないといけない！」

「あの、お兄ちゃんは危険じゃありません」

「いや、危険だ！」

うん、皆が頷いている。谷口もだ。ハジメと白崎だけは乾いた笑いをしている。

「だいたい沙条！ 君は彼女をどうするつもりだ！」

「もちろん、戦争に協力してもらおう。彼女の知識は有用だからな」

「ふざけるな！ 子供だぞ！」

「あ、見た目通りの子供じゃないからな。下手したら俺達どころか、メルド団長よりも年上だからな」

「「「え」」」

ユーリがこちらを睨んでくるが、軽く頭を下げておく。後でご機嫌取りをしよう。実際問題、PPSのゲームや映画の設定を考えると数百——ユーリに膝を抓られたので考えるのを止める。

「それに天之河には彼女を否定する権利やとかくいう権利はない」

「なんだと！」

「俺は召喚士として魔族との戦いに参加し、生き残るために召喚の儀式をして彼女を呼び出した。そして、彼女はそれに答えてくれた」

「あ、そういうことね」

八重樫は理解したようだ。他にも頷いている奴はいる。

「それがどうしたんだ？ 俺に否定する権利がなくなるわけないじゃ

ないか」

「いや、これって俺をこの世界の人にして、召喚されたのを俺達にしたからお前が認めたのと同じ行動になるじゃないか」

「違うー！」

「それにお前が戦争に参加する事を選ばなければ彼女を呼ぶ事もなかった。つまり、お前が悪い」

もちろん、俺がガチャを止めるはずないのだから、天之河がどうしようが呼び出しただろうけどな。

「俺達に力はあるが、彼女に力はないだろう！」

「まあ、今はこちらに来てくれた時に力の大半を使ってしまっているが、元に戻ったら勇者を軽く超える力くらいはあるはずだ」

「核兵器のような攻撃だつてほぼ傷を負わずに耐えるような子だからね」

ハジメが捕捉する。核兵器Ⅱスターライトブレイカーですね、わかります。本当に高町なのは、冥王は凄まじい。非殺傷だからってあんなのを人に撃つんじゃない！ 普通に死ぬわ！ いや、死ねないけれど！

「それが本当ならかなりの戦力になるな。歓迎しよう」

「メルドさん！ 彼女は子供なんですよ！」

「だが、見た目通りの年齢ではないのだろうか？」

「ぶっちゃけ、俺達より賢い。彼女、設定通りなら大学を飛び級で卒業している」

「そんなはずないだろう清水！ 妄想は大概にしろ！」

「その妄想が現実になった奴なんだ……けどな……」

清水の言う通りなんだよな。ユーリ・エーベルヴァインというキャラクターが受肉して実体化したのが彼女だ。つまり、妄想によって生まれてきたといえる。

「まあ、どちらにせよ彼女を召喚したのは俺だ。故にこの問題は俺とユーリによって決められる。部外者は黙っていてもらおう。もちろん、ユーリが助けを求めたというのなら、話は別だがな。ユーリ、ユーリが望むなら召喚を解除するし、俺と一緒に居なくてもいい。どうす

る?」

「もちろん、私は——」

「沙条と別れるよな」

天之河が断言した口調で告げてくるが、ユーリが天之河を見る目は冷たい。そもそもユーリにとってはまったく知らない奴で、友達もしくは親友である俺を貶めてくるような奴と認識しているかもしれない。いっばいデュエルしたし、戦友の可能性が高い。どちらにせよ仲間には違いない。

「——誰か知りませんが、私の意思を勝手に決めないでください！」

私はお兄ちゃんとわかれません！ お兄ちゃんと一緒に居て私が守ってあげるんです！ いっばい恩返しをするんですからー！」

「なっ!? もしかして脅されているのか！ 見損なっただぞ沙条！」

「え? なんでそうなるんですか? わかりませんか? えっと、えっと……」

ユーリが混乱しだったので、彼女の頭に手を置いて遮る。

「はいはい、最初から見損なっているくせに何言ってるんだよ? まあ、それは俺も同じか。俺もお前に期待なんかも一切していない。だからもう関わらないでくれ。鬱陶しい」

「なんだと! 待て沙条!」

「待つのは光輝よ!」

「うん。彼女は沙条君という事を自分で選んだんだから、私達がとかく言う事はできないよ?」

「ん〜これは……」

八重樫と白崎の二人が止めてくれている。谷口は何か考え込んでいるようだが、今は放置しよう。

「行くぞユーリ。魔力を溜めるバッテリーについて、魔導師としての意見を聞きたい。ハジメ、すぐに改造に取りかかれるように準備してくれ」

「任せて」

「南雲君、大丈夫なの?」

「彼女はある意味ではこの道のスペシャリストだから、大丈夫だと思

うよ」

喚く天之河を無視して、魔力暴走させたバッテリーをユーリに見てもらう。すると出まくる改造点のオンパレード。一度見分してから数分で式を書き上げ、こちらの魔法を見せてからまた数分で式を書き直す。そしてすぐに設計図を用意してくれる。容姿と合わさってまらでお絵かきみたいだが、内容が高度すぎる。

「とりあえず、これで容量は70%上昇し、保存できる期間は100%上昇したはずです。もっと研究したら小型化と更なる出力アップもできると思います」

「こうなるとはわかっていたが……」

「僕達の苦勞っていったい……」

「鈴はかなしくなったよ……よよよ」

「あははは、どんまい」

「えっと、ごめんなさい」

俺と谷口は謝ってくるユーリを抱きしめて撫でまわして傷ついた心を癒す。仮想現実を作り出した科学者が認めただけあって、幼いながらもユーリの技術力は普通にやばい。技能に天才とあるだけはある。

ああ、ここはこれだな。

技術チートが仲間になった！

第5話

約一メートル四方の立法体だった魔力式バッテリーはユーリのお蔭で容量などが飛躍的に上昇した。こいつを訓練所に設置してから、ユーリを連れて図書室や工房、部屋や風呂場などを案内していく。それが終われば部屋の場所を教え、ついでにハジメや白崎、谷口の部屋の場所も教える。

女性陣が泊っている部屋の場所だから、緊張する。実際に扉を開けて覗んできている奴も多い。来る事自体は問題ないから文句は言われない。言われても谷口や白崎にユーリの事で相談や頼み事があるだけだと言えばいいだけだ。実際にユーリを連れて来ているのでとやかく言われる筋合いはない。

「谷口、居るか」

「はいはい、いるよ。今日はもう休憩だよね？」

扉をノックして声をかけるとすぐに返事がきて、扉が開けられる。頭だけ出した谷口はユーリを見るなり、勢いよく開いてユーリに抱き着こうとするが、ササつと俺の後ろに隠れる。そうなると先程と同じように俺に突撃してくることになる。

「ぐぎぎ、邪魔だよー」

そう言いながら俺のふくよかな腹をポコポコと叩いてくる谷口。呆れながら肩を掴んで反対に向かせて部屋に押し入れる。

「明日について相談がある。それと少し話したら白崎を呼んで欲しい」

「明日？ ユーリちゃんと買い物？」

「そうだ。その計画もあるしな。ここでは話せない。工房か俺の部屋、谷口の部屋かは好きに決めてくれ」

「ん。ちよつと待ってね。今、恵里もいるから聞いてみるよ」

少ししてから、谷口が戻ってきた。

「恵里も一緒に聞いていいかって言ってるよ」

「他の誰にも洩らさないなら構わない」

「大丈夫だと思う。どうぞ〜」

「ありがとう。行くぞ、ユーリ」

「は、はい」

不安そうなユーリと共に部屋の中に入ると、すぐに遮音の結界が展開された。作り自体は俺の部屋と同じだが、やはりというか匂いが違う。女の子の部屋なんて入った事はないので少し緊張する。

部屋の中にあるベッドに中村が座っている。その隣に谷口が座り、空いている席を俺に進めてくる。

「じゃあ、ユーリちゃんはこっちに座って」

そう言いながらベッドの上をポンポンと叩く。ユーリは俺と谷口達を見る。特に中村を少しの間、じつくりと見てから悩む。それから俺の方にやってきた。

「ん?」

「よいしよ」

「おお……」

「なん、だと……」

ユーリは俺の膝へと登ってきて、小さなお尻をチョココンと乗せて俺の両腕を自分の前にクロスさせて、むふ〜というような感じで息を吐いた。

「オノレ、ウラヤマシイゾ」

「……どう見ても事案だね」

「俺は無罪だ」

「駄目ですか?」

「いや、全然いいぞ」

ユーリをしつかりと抱きしめて固定しておく。俺にとってはとても幸せだ。まあ、ユーリとしてもよく知らない二人の近くに座るのが嫌だっただけかもしれない。それか、中村になにかあるのかもしれないな。

「それで、相談って何?」

「ああ、まずは明日の買い物だ。午前中はユーリの買い物をして、午後

は二組に別けて買い物をする予定だ。谷口は悪いが、俺と組んで買い物をしてもらう」

ユーリはわからないだろうから、暇つぶしとして俺のタブレットを渡しておく。すぐに色々調べ出したので時間の無駄にはならないはずだ。

「それってやっぱりかおりんと南雲君をデートさせるためだね？」

「そうだ。だから協力してくれ」

「全然いいよ。恵里もかおりんの為にできれば協力してくれないかな？」

「私が？ うん、もちろんいいよ。私が光輝君達を足止めすればいいんでしょ？」

「流石は恵里！ お願いね！」

「いいよ、気にしないで」

ニコニコと笑っている中村。凄く友達思いのようだな。

「助かる。じゃあ、そのように行動するとしてこの事を白崎に知らせるか？」

「いや、それは駄目だよ。知らせたらかおりん、気合を入れすぎちゃうし」

「そうだね。行くメンバーが決まっているなら、伝える時に鈴が気合を入れておしやれをすれば香織も対抗しておしやれをしてくると思うよ」

「その辺は全部任せる。俺にはわからないからな」

ユーリの頭を撫でながら告げると、ユーリも頷いている。彼女も人間関係をまだ把握していないので助言なんてできない。

「よし、鈴にお任せだよ」

「でも、それって沙条君か南雲君とのお出掛けに力を入れているように見られるけれど、鈴はいいの？」

「何言ってるの？ 鈴が力を入れるのはユーリちゃんとのデートだよ！」

「なるほど」

俺と中村は思わず納得してしまった。確かに鈴の性格ならユーリ

は大好物だろう。特にユーリの髪の毛とか気持ちいいからな。

「中村、白崎を呼んできてくれないか？　彼女にも用事があるんだ。できれば中村もまた来て欲しい」

「わかった。行ってくる」

「用事？　なんだろう？」

「後でわかるから気にするな」

少しした後、中村が白崎を連れて戻ってきた。

「用事ってなにか？」

「一つは明日の予定だが、食事をした後に馬車を用意してもらって街へと買い物に行く。白崎も付き合ってもらおう。ユーリの服を買わなといけないから、谷口と二人で選んでやってくれ。まあ、ぶっちゃければ谷口へのストツパーとしての役割を期待している」

「ひどい！」

「あははは、うん、わかったよ。任せて。いざとなったら物理で黙らせるから」

何と言われようが、恐怖で震えるユーリを助けるためならばストツパーぐらいは用意する。

「その後も買い物があるが、これはバッテリーに必要な品物を色々と買っていくからだ。白崎も欲しい物があったら付き合うお礼としてハジメに買ってもらえ」

「うん！」

「で、中村も合わせた三人に頼みたいんだが、ユーリを風呂に連れていってくれ。流石に風呂へ一緒に行くわけにもいかないしな。頼む」
「任せて！　鈴が手取り足取りしつかりと教えてあげるよ！」

「二人はストツパーだ。ユーリに余り手を出せないようにしてくれ」

ユーリが涙目になってこちらを見てくるが、仕方ないだろう。個室とはいえ、大浴場しかないのだから。

「ユーリにシャンプーとリンスを渡しておくから、それが代金だ」

ハジメが好きな匂いがついたシャンプーとリンスを渡せば白崎はユーリの手を掴んで任せて！　と伝えてきた。怖がっているユーリの耳元に口を近づけてこっそり白崎とハジメの関係について教えて

やると、こくこくと頷いた。

「じゃあ、よろしく頼む。俺はその間にメルド団長に許可を貰って、馬車の手配をしてもらう。合流は食堂だ」

「わかったわ」

ユーリを預けてからすぐにメルド団長に話を通す。必要な鉱石なども買いに行くので許可をもらえた。ただ、ついでだから他の連中に聞き取りをして要望にあった物を集めてきて欲しいとも言われた。面倒だが、やるしかない。だが、それが条件だから仕方がないな。



「あ？ 欲しい物だ？ ロリコンキモブタ野郎の命？」

「なるほど、オークが欲しいんだ。飼うにしろ、食うにしろ、ちゃんと管理しろよ。予算オーバーしたら請求はそっちに行くからな」

「待ちやがれ！」「で、檜山以外はなんだ？」

「あく俺は下着類やズボンが欲しい。訓練でボロボロなんだよ。いや、訓練で使うのならいいんだが、部屋着に使うのがな……」

「わかった。サイズを教えてください。無難な無地の奴を買ってくるが、この世界の技術力では期待するなよ」

「おう」

「あ、俺は彼女」

「女生徒ならいるだろう。好きに声をかけてこい」

「冗談だ。小物を頼む」

流石にバツサリと切ったら、買って来てもらえないと思つたようでも普通に要望を告げてきた。余り高い物は請求するので、無難な物を頼んでくる。

「見つけたぞ沙条！」

「良い所に来た。勇者、騎士団長から仕事をもらっているんだ。現在、

欲しい物を答えろ。明日、買いだしに出るから買ってきてやる」

「そんなことよりも彼女についてだろう！」

「買い出しの方が大事に決まってるだろう。お前個人が喚くことよりも、これは皆の望みを叶えるんだぞ。お前が邪魔をすればそれだけ迷惑がかかるんだ」

「ぐ……いいだろう。欲しい物は訓練道具だ」

「俺は筋トレ道具が欲しいぜ」

「筋トレ道具か……わかった。それなら材料を買ってくるから、ハジメに作ってもらおう。坂上が監修してくれ。俺達はやった事がないからな。どういう構造や道具が欲しいか、出来れば絵をかいてくれ」

「わかった」

色々な奴の場所に移動して、最後に清水と遠藤の所へと移動する。ぶつちやけ、遠藤はレアキャラだから、声を出してどこにいるか聞かないと駄目だ。

「遠藤、どこにいる？」

「俺ならここにいます」

「うおっ!？」

気がつけば背後にいるというホラー。とつても怖いぞ。

「じゃあ、欲しい物はなんだ？」

「影の薄さがなおる奴」

「すまん。それは無理だ」

「ちっ。じゃあ、軽くて丈夫な動きやすいコート。ナイフを忍ばせたい」

「わかった。清水はどうだ？」

「……俺は……魔物が欲しい……後……いや、なんでもない」

どうしたんだろうか？ まあいい。女生徒は谷口や白崎に頼むか。

ユーリと合流し、白崎と谷口に仕事を投げる。ユーリは俺に引っ付いて離れない。やはり、誰も知らないところでオレから離れるのは怖いようだ。まあ、今のユーリは幼い少女そのものだから仕方がない。

それに一部には一方的に自分の事を知られているというのはかなり怖いだろう。そんな訳で、隣で急いで食事をしているユーリの口を拭きながら食事をする。それを羨ましそうに谷口達が見てくるが、無視だ。

食事が終われば歯磨きをして部屋へと戻り、寝るわけだが……ベツドは一つしかない。必然的にユーリと一緒に寝る事になる。

「ユーリ。俺は床で寝てもいいが……」

「一緒に構いませんよ。召喚を解除してもいいのですが、その……凄く不安で怖いので、できれば一緒に寝てください」

INNOCENTがメインとはいえ、別のユーリとしての記憶もあるんだ。だったら闇の書の中で過ごした記憶や、暗いところに閉じ込められた記憶などもあるだろう。召喚待機されている間がどのような事かわからないが、普通の子供として過ごした記憶もあるユーリにとって恐怖でしかないはずだ。俺も考えるだけで怖いしな。

「でも、それなら床で俺が寝てもいいが……」

「それは私が嫌です。それにその、寂しいですし、怖いですから……」

「わかった。なら一緒に寝ようか」

「はい♪」

ユーリを抱き枕にして眠れるとはこの世の春である。一緒に水分を取ってから布団に入り、腕枕をしてやりながら眠る。ユーリの匂いと体温でとても暖かくて気持ちが良い。本当、エヒトには感謝しよう。するだけで意思に従うわけではないが。

朝、冷たい感触がして目が覚めるとユーリが顔を真っ赤にしていた。物凄く可愛かったが、ポカポカと殴られてしまった。

そういえば、昨日は寝る前にトイレに行つてないし、初めてのことや知らないことばかりで緊張していたから仕方ないだろう。

第6話

本日は計画通りにハジメと白崎をデートさせ、ユーリの服や素材を
買うために街へと出てきた。移動は馬車で御者は女性騎士の人を手
配してもらった。ユーリの服を買うのだから、それなりの店でないと
いけない。

馬車はとつても揺れてお尻が痛くて大変だったが、ユーリを膝の上
に乗せる事でなんとか耐える。

「痛っ」

「白崎さん、大丈夫？」

ハジメが隣に座っている白崎を気に掛ける。席はハジメと白崎が
対面に座り、俺とユーリ、谷口がこちら側に座っている。

「うん、なんとか。南雲君は平気？　なんだったら回復魔法を使うけ
ど……」

「大丈夫だよ。それより、そっちは？」

「痛い、ユーリのクッションとして頑張っている」

「ご、ごめんなさい」

「俺が好きでしている事だから気にしないでくれ」

ユーリが痛がる姿なんて見たくないし、俺が痛がる方がいい。それ
よりも気になるのは谷口だ。馬車に乗ってからユーリに余り構っ
ていない。乗る前は凄く可愛がっていたのにだ。調子が悪いのか？

「谷口、大丈夫か？」

「ん〜？　鈴は大丈夫だよ」

外の景色を見ながら答えて谷口はやはりどこかおかしな気がする。

「本当に大丈夫か？　具合が悪いのなら無理しなくていいぞ？」

「大丈夫、大丈夫」

「だが、ユーリに手を出してきてないだろ。隣に居るのに」

「あの——」

「それはね……ユーリちゃんを着せ替えするためにエネルギーを溜め

てるからだよ！ ついでにかおりんも着せ替えするしね！」

「私はついでなんだ……」

「ごめんね、かおりん。今はユーリちゃんが優先なの！」

「どうやら気のせいのようなのだ。心配して損したか。」

「ユーリ。何か言いかけたようだが、どうした？」

「——いえ、なんでもありません」

ユーリが谷口をジッと見た後、小さく頷く。それから特に気にした様子もなく、街並みを眺めて興味がある事に瞳を輝かせて俺達に質問していく。その姿は普通の子供みいだ。

◇

馬車での移動を経験し、無事に御者をしてくれている女性騎士さんがお勧めする良いお店に到着した。

「それでは私は待機していますので、どうぞゆっくりとお過ごしください」

「「「ありがとうございます」」」

全員で女性騎士さんにお礼を言ってからお店に入る。テンプレだと、こういう時はオカマの凄腕か、美人の凄腕がいるのだが……そんな人物はいない普通のお店のようなのだ。もっとも、女性用の服飾店だから俺とハジメは居心地が悪い。

「別の店で買い物をしてこようか」

「駄目だ。三人を置いてはいけない。それに男の意見というのも欲しいだろうからな。そうだろう、白崎」

「え？」

「男の意見は要らないか？」

視線でハジメの方を見ると、理解したようでしきりに頷く。

「南雲君の意見を教えて欲しいな」

「わ、わかったよ、白崎さん……」

ナチュラルに俺の意見は無視されたが、まあ何時もの事だ。それには俺には天使の……いや、大天使のユーリがいるから大丈夫だ。そう

思ってユーリを探すと、谷口がさっそくユーリに色々な服を並んで話しながら一緒に選んでいた。

「予想以上に仲が良さそうだね。谷口さんがユーリちゃんに襲い掛からないか心配したけれど……」

「確かにその様子はないな」

すっかりとユーリの意見を聞いて、より良い服を選んでいつている。ユーリが嫌がればあっさりと下げて、次の服を合わせていく。その姿は仲の良い姉妹みたいだ。ユーリ自身も心を開き出しているようだ。

「鈴ちゃんは……いや、これは自分達で気付くべきかな」

「白崎さん？」

「教えてくれないのか？」

「うん。ちゃんと鈴ちゃんを見て考えてあげて。鈴ちゃんはとっても良い子だから」

白崎が慈愛たつぷりの美しい微笑みを見せながら伝えてきた言葉にもう少し谷口をしつかりと見てみるか。どちらにせよ、ユーリと仲良くなってくれるのはありがたいからな。

「とりあえず、白いワンピースは鉄板かな。フリルとかあればなおいけれど、ないみたいなんだよね」

「お兄ちゃん、どうですか？ 似合っていますか？」

白いワンピースを着たユーリが俺の前に来てくるりと回転する。服の裾が浮かび上がり、下がっていく。その姿はとても可愛らしい。まさに大天使だ。

「ああ、とっても似合ってるよ」

「えへへくそれじゃあ、これにします」

「何着くらい選べばいいのかな？」

「十着か？」

「多すぎだよ。洗濯を考えて四着くらいでいいんじゃないかな？」

ハジメの意見は正しいのだろうが、色々な服……コスチュームを着たユーリを見てみたい欲望が止められなかった。

「えっと、動きやすい運動用の服と普段着る服、部屋着と寝間着。最低

でも四種類はいるよ?」

「そんなに……」

「女性の服が多いのは納得だな」

「全部で十二着ぐらいはいるから、二人は意見を教えてね」

「お、おう」

「わかったよ……」

白崎と谷口に言われた通り、俺とハジメはただ着飾った二人を見て、意見を言うだけの存在となった。

「あ、谷口も二人の服ばかり選んでないで、自分の服も選べよ」

「それじゃあ、これかな」

谷口が選んだのはいくつか彼女が着た中でもあまり谷口の趣味に合わない、値段が安い奴だった。

「そっちより、こっちの方がいいだろ」

「確かにこっちの方が鈴の趣味に合うけど、でも高いの」

「それなら、ユーリの服を選んでくれたお礼に俺が買ってやるよ。三着ぐらい選んでいいぞ」

「本当!？」

「ああ、本当だ。そうだな。一着はそれでいいとして、残り二着はユーリが谷口を選んでやってくれ」

「任せてください!」

「やった。お願いね!」

「はい!」

二人が服を選び出すのを見送ってから、俺はハジメの脇をつつく。白崎は二人を羨ましそうに見てから、ハジメにちらりと視線をやってから溜息をつけて二人の方へ移動した。

「な、なに?」

「俺は谷口にプレゼントするから、ハジメは白崎に頼むぞ」

「え!？」

「流石に二人分も出したらお金はない。協力してもらっているんだから、感謝を込めて贈ろうぜ」

「……でも、僕なんか選んだ奴だと……駄目じゃないかな? 天之

河君と違って白崎さんが喜んでくれないかも……」

「いや、こっちは金を出すだけだから、向こうのセンスに任せるんだ。失敗はない。それに白崎はハジメから送られたらどんな物でも嬉しいぞ」

「そう、かな？」

「ああ。確実だ」

「まあ、白崎さんは優しいし、そうかも」

自己評価が低いのが、嬉しいがる白崎を見たら大丈夫だろう。そう思っている、ハジメが移動して白崎に声をかけていく。

「本当！ いいの！」

「う、うん。バッテリー作りを手伝ってくれたお礼に僕が出すよ」

「嬉しい！ ありがとう南雲君！」

ハジメの両手を掴んで凄く喜んでる白崎。もう見ているだけでわかる光景だ。

「かおりん、かおりん。それなら南雲君に選んでもらったらいと思
うよ」

「そうね。じゃあ、南雲君が私に似合うと思う服を選んでくれる？」

「それは……」

「お願い。南雲君が選んでくれるのなら、どんな服でもいいから……」

「わ、わかった」

谷口がこちらへとやってくる。どうやら、ユーリが選んだ服を着てきたようで、俺の意見を聞いてきた。

「そうだな——」

素直に意見を言っていく。といっても、谷口が俺の事を好きになるなんてないだろうし、気楽に答えられる。谷口も俺には全然興味がないし、普通に駄目だしされる。

「ユーリちゃんのために女性が好むところを覚えないと駄目だよ」

「ああ、そうだな。色々教えてくれ」

「鈴がしっかりと教えてあげる。というわけで、ユーリちゃんのファッションショーをしよう！」

「はうっ」

結局、二人に沢山の服を着てもらって良さそうなのを何着か選んだ。ダメもとでコスプレみたいなものを選んだが、着てくれたりもしたのでとても眼福だった。だから、かなりの出費だったが、ガチャもできないうの嬉しいだろう。

◇

午前中の買い物が終わりに、女性陣は支払いしている間に購入した服に着替えてもらってから店を出る。荷物を馬車に積み込み、用意ができたなら皆で話す。もうお昼前だが、ここからが本番だしな。

「これからどうするの?」

「もうすぐお昼ですから、何処かで食べる?」

「それなんだが、今日一日で出来る限り王都を見て周り、必要な素材を確保したい。鉱石とかは基本的に各店から一つずつ購入したいしな」
「確かにそうだけれど、それって無理じゃない? いくらなんでも全部を回るのは無理だよ?」

「そこでチームを別ける。男手の俺とハジメは別れる。ユーリと谷口は俺のところで必要な物を集めてもらう。そっちはハジメが白崎と一緒に回ってくれ」

俺がそう言うと、聞いていたユーリと谷口はうんうんと頷き、聞いてない二人は反応が別れた。ハジメは啞然とし、白崎は少しして言葉を理解したようで満面の笑みを浮かべた。

「え!? 普通女子と男子で別れない!」

「それは無理だ。この中で必要な物を調べられるのはユーリとハジメだけだ。白崎や谷口はわからないだろう」

「じゃあ、帰ってもらえば……」

「せっかく許可をもらえて王都を回れるんだぞ? 息抜きとしても丁度いいだろう」

「でも……」

「白崎はどうだ? ハジメと一緒に回ってくれないか?」

「任せて！ 南雲君と一緒に……いっぱいお店を回るよ！」

「白崎さん!？」

白崎はハジメの腕を取って胸に抱きしめ、嬉しそうにしている。それに驚いたハジメは叫び声を上げるが、無視してこちらをニンマリと見てからハジメの耳元で何かを囁いていく。するとハジメも驚いたようにこちらを見ながら、頷く。

「わかったよ。僕は白崎さんと回るから、そっちはユーリちゃんと谷口さんをよろしくね」

「ああ、任せろ。ハジメも気をつけてエスコートしてやれよ」

「う、うん……」

何を言われたのかわからないが、絶対に変な事だろう。まあ、計画通りに進むなら支障はない。

「すみません。それじゃあ、俺達をそれぞれ王都の反対側に降ろしてください」

「わかりました。一応、この地区には近づかないでください。スラムなので危険ですのぞ」

「はい、ありがとうございます」

事前に貰った商店が書き込まれている地図を使いながら注意を受ける。しっかりと王都における注意事項を覚えている間に馬車で移動する。始めに俺とユーリ、谷口が降りる。女性騎士の人はこっそりとハジメと白崎を護衛してもらったためだ。

治療師と錬成師の二人と、結界師と魔導師、召喚士の俺では前の二人の方が不安だ。こちらの場合は谷口が防御を固めてユーリが攻撃とかをできるからだ。守っている間に救援を待てばいいだけだな。

それに一応、何か有った時のために発煙筒の魔導具を受け取っている。騎士団の見張り達に支給される緊急用の物だが、王都内で使えば普段よりかなり数を増やした見回りの騎士達がすぐに駆け付けてくれるそうさ。本当に至れり尽くせりといった感じだ。そんな訳で安全面は確保されている現状。俺達は安心して店を見て回れる。

「さて、それじゃあ行くか」

ハジメと白崎を乗せた馬車を見送ってから二人に振り返る。ユーリは白いスプライトが入ったピンク色のパーカーに薄紫色のミニスカート。黒いタイツとキュロツトが無くなり、スカートがキュロツトに変わっているがINNOCENTの春花日和みたいな感じだ。谷口も着替えていてユーリと同じような服を着ている。ピンク色が白色に代わり、スカートが赤になっている。どちらもとても似合っている。

「はい！」

「鈴としてはかおりんと南雲君のデートがどうなるか、見守りたいんだけどね〜」

「それは諦めろ。口実にはしたが、実際に人手も時間も足りないからな」

「そうですね。私も早くデバイスを作らないといけませんし、そのための機械も必要ですから」

「デバイスってのはわからないけれど、理由は理解しているから大丈夫だよ。それで、最初はこの店？」

「そうだ」

店の中に入ると、ユーリがさっそく飛び出して金属や鉱石、素材を物色していく。俺は店員の所に移動して購入許可証を見せる。

「これはレアメタルですね。これとこれとは多めに買って……」

次々と選んでいくので、荷物持ちをしながら購入した物は城へと運んでもらうよう手配する。

「普通の小学生に見えるけれど、本当に違うんだね〜」

「まあな。ユーリは研究所に勤務して最先端どころか、数世代先の技術を開発するような子だからな」

「うわあ……鈴、ビックリだよ。天才の上に将来は美人確定の美少女。まるで天之河君みたい」

「あんな馬鹿と一緒にするな。ユーリは性格も完璧な優しい大天使だ」

「ちよ」

「欠点は体内に世界を滅ぼしかねない物体を所持していて、暴走する

危険がある事か？」

「それ、致命的だよね！」

「大丈夫大丈夫。冗談だから」

「そっか、良かったよ」

今は無いから冗談で済む。その後、一応全部の商品を購入し、追加でユーリが選んだ奴も追加で買う。

「終わりました。他はもう目ぼしい物はありませんね。私が知らない物質があると思うので現実とはいえませんが……」

「構わないよ。そのために一応、全部買ったんだからな」

「そうですね。実験しないといけません」

「ユーリちゃんは凄いな」

「わぷっ」

谷口が抱き着かずにユーリの頭を撫でていく。ユーリは大人しくされるがまだまだ。

「ほら、次の店に行くぞ」

「その前にご飯食べない？」

「それもそうだな。ユーリは何を食べたい？」

「えっと、お肉がいいです。血の滴るステーキとかなら……魔力効率はいいかもありません」

「お、ガッツリだね。鈴はそれでもいいよ」

「じゃあ、行くか」

店から出ると大通りなだけあって人通りが沢山ある。だからユーリと逸れないように手を繋ぐ。今のユーリは好奇心旺盛で興味があればどこにでも突撃しそうだからな。

「逸れないように手を繋ぐぞ」

「えへへ〜こういうのもいいですね。谷口さんも繋ぎましょう！」

「鈴も？ ま、いいか。うん、いいよ」

ユーリが差し出した手を谷口が握り返し、三人で道を歩いていく。ユーリが楽しそうにしているからいいか。何か視線が集まってきているが、見た限りではクラスメイトなんていないし、大丈夫だろう。

「あ、そうだ。ユーリちゃん、鈴は鈴でいいよ」

「はい。わかりました。鈴さん」

「ん〜鈴さんじゃなくて、お姉ちゃんでも鈴はいいよ！むしろそれがいいかな〜」

「えっと、鈴さんはお兄ちゃんと結婚するんですか？」

「え〜」

ユーリの言葉に驚く俺と谷口。ユーリは不思議そうに俺達を見上げながら告げてくる。

「だって、私のお姉ちゃんになるのなら結婚しないといけませんよ？

そうしたら義理のお姉ちゃんです」

「ゆ、ユーリちゃんにとつて沙条君は本当のお兄ちゃんなの？」

「はい。そう望まれましたから。私はお兄ちゃんにいっぱいお願いを叶えてもらいましたから、今度はお兄ちゃんのお願いを出来る限り聞いてあげるつもりです」

「沙条君？」

「知らんが、ユーリは良い子だな。だが、ユーリの望むままに行動していいぞ」

「それは嫌です。絶対に嫌です。危険すぎます」

「？」

谷口は不思議がつているが、ユーリは闇の書、夜天の書に組み込まれた制御プログラムだという記憶もある。それは即ち、自分を使われる存在と認識しているのか、それとも暴走する危険があるから俺に自分の権限を譲渡しているのかはわからない。この世界にロード・デイアーチエを始めとしたマテリアル達や高町なのは達が居ればまた別なんだろうが、まだまだ俺はユーリを自由に過ごさせてやるには実力が足りないという事なんだろう。当たり前か、魔法少女……いや、魔砲少女達と同じにされてはかなわないな。

「お姉ちゃんと呼ぶのなら、お兄ちゃんのお嫁さんになってください」
「それはごめんなさい。ユーリちゃんは好きだけど、沙条君の事はね……」

「知ってた」

「あう、ごめんなさい」

「いいさ。俺にはユーリがいるからな」

「はい！」

ユーリが嬉しそうにこちらを見上げてくるので笑い返して歩いていく。

「あれ、鈴つて単に出汁にされただけ？ あはは、そんなまさか……」

「どうしたんだ？ 行くぞ」

「うん！」

谷口が急いで歩調を合わせてくる。俺も当然、ユーリに合わせているので歩みはゆっくりだ。移動しにくいのがユーリのためだし仕方がない。

レストランっぽい店に入り、三人で食事をしてからは色々な店を回る。道具屋から武器屋など。その中で安売りされていた壊れかけの剣や廃棄物などを全て購入していった。

最後の方でユーリとついでに谷口へとペンダントを購入して送っておく。こいつをデバイスに改造できなくても、谷口の結界を施せば防御力は上がるだろうしな。

◇ 恵里

「沙条と南雲が香織と谷口を連れて出かけたんですよ！ 何故俺達には許可が降りないんですか！」

「彼等が必要な物資を買い出しに行っただけだからだ。それにユーリと言ったか。彼女の服を買いに行くのに二人の協力が欲しいと言われたら断れん。本人達も納得していたからな」

「ですが！ 危険です！」

「ちゃんと警備はさせている。それに休息日が欲しいなら、少人数ずつだが、しっかりと取らせてやる。こちらも警備がある都合上、四人から五人ずつが限界だ。それ以上の者が城から出る事は許可できない」
「しかし……」

「光輝、メルド団長がこう言っているんだから大丈夫よ。そうよね、恵里」

「うん。四人というか、五人はしっかりと計画を決めてたよ」

「これが五人が行動するルートだ。多少の前後はあるだろうが、問題ある地域に入る場所には騎士を立てているから入ることもない」
「それなら安心ですね」

雫と二人で光輝君を止める。与えられた役割なので、それを全うしつつ接触を図るために抱きついて制止した。でも、光輝君はこちらを見もしない。それほど香織が大事なの？

やっぱり、邪魔だなアイツ。それにあの子も光輝君を……っと、いけないいけない。今は光輝君を止めないと。そう、光輝君は止めないと。何故かこちらを警戒しているユーリちゃんを誤魔化すためにも実績は作っておかないとね。

「だが、やはり心配だぞ。白崎達が沙条達に襲われるかもしれない」
「それはないでしょう」

檜山の意見に雫が否定する。

「わからない。アイツはユーリちゃんのような幼い子を誘拐してきた奴だぞ。絶対に酷い事をするつもりだ」

「いや、わからないでしょ。それに知り合いみたいだし、同意を取って召喚されたと彼女本人が言っているんだから……」

「脅しているかもしれないだろー！」

「大丈夫だよ。鈴もいるからね。それに言っしまえば妹や子連れでダブルデートしているようなものだから」

「なんだと！」

「どういう事だ？」

「恵里？」

私はしまったという表情を作り、詰めよってくる檜山と光輝君に説明する。

「私が言っただって言わない？」

「もちろんだ！」

「これは買い物だけど、途中で二組に別れるんだって」

「確かにそう言っていたな。王都の店を回るのに一組で行動していたら回り切れないと」

メルド団長が捕捉してくれるので少し捏造して話す。

「だから、午前中にユーリちゃんの服を買った後、沙条君達は別れるの」

「おい、まさか……」

「沙条君が鈴とユーリちゃんを連れて、南雲君が香織を連れてね。沙条君は南雲君と香織をくっつけようとしているし、二人つきりになるように誘導している。沙条君自体はユーリちゃんを使つて鈴を狙っているのかな？ 鈴は鈴でユーリちゃんが気に入っているみたいだけど。だから、とりあえず今はデートを楽しんでいるんじゃないかな？ 二人の感情は知らないけれど」

「おのれ沙条！ 香織が優しい事に付け込んで……」

「南雲の野郎……」

男共の嫉妬が一斉に南雲君に向く。沙条君にも向いているようだけど、香織の力で南雲君の方が多い。沙条君が鈴を狙っているかなんてわからないけどね。どちらかというところユーリちゃんがメインでしようし。

「恵里……」

「やはり迎えに行くべきだ」

「いや、違うでしょう。二人が香織や鈴達を狙っているのなら尚更、何も起こらないわよ」

「何故だ！」

「嫌われたくないからよ。それに騎士団の監視があるんだから、何か有ればすぐに止めに入るわ。ですよね？」

「もちろんだ。ちゃんと定期報告も受け取っている。全て予定通りに進んでいるそうさ。捕捉として仲良さげで楽しそうだと書かれてるな」

メルド団長が報告書を見ながら教えてくれる。これで香織が満更ではないと光輝君に教えられたかな？　ここから香織の気持ちを理解して身を引いてくれれば、邪魔者は一人になる。

「香織が優しいから合わせてやっているんだろう」
「なんでそうなるの……」

思わず雫と一緒に呟いてしまった。くっ、どうするべきか……ここは方法を変えようかな。やっぱり、さっさと消えてもらうのがいいか。用意しておこう。

「この話は終わりだ。それよりも近々オルクス大迷宮へと遠征に向かう。それに合わせてしっかりと訓練をするように」

「はい……」

部屋から外に出ると、檜山が壁を殴りつける。

「くそっ、あの野郎！　帰ってきたらただじゃおかねえ……」

「メルド団長はわかっていない。こうなれば強行するしかないか」

「待ちなさい！　それはまずいわよ！」

「止めないでくれ雫！　俺が香織を助けにいかないといけないんだ！」

「だから、まずいのよ！　だいたい香織は……」

「ねえ、雫。ばれなければいいんだよね？」

「まあ、それなら……」

「光輝君も護衛がいたら安心できるよね？」

「ああ、そうだな」

「じゃあ、遠藤君」

「俺？」

「そう。遠藤君なら、見つからないように抜け出して見張れるよ。これならメルド団長達と衝突することもないし、いい案だと思うんだけ

ど……どうかな？」

「確かに遠藤なら……遠藤頼めるか？」

「いやいや」

「やれ、遠藤。そして邪魔してこい。白崎の方だぞ」

「わ、わかった」

光輝君と檜山に言われて遠藤が落ちた。計画通り。これで光輝君が香織達を問い詰めたら、デートを邪魔されたり、余韻を台無しにされたりした香織は怒るはず。これで光輝君が目覚めてくれたらいいけれど、これで駄目なら……うん。事故に遭ってもらおうかな。檜山達を利用するか、悪霊を取り付かせて色々やればいい。

夕方。五人が帰ってきた。五人共、とても楽しそうにしている。そんな所に光輝君が突撃して凄い言い合いになる。その状態で馬車に乗って戻ってきた遠藤君が報告してくれる。

「で、どんな感じだったの？」

「それが……沙条君達はわからないけど、南雲の場合はどちらかという和白崎の方が押していたな。南雲は終始、翻弄されっぱなしだった。まるで白崎の方が南雲を好きなようだった」

「嘘だ！ 有り得ないだろ！ あの南雲だぞ！ 無能野郎だぞ！」

「駄目な子ほどかわいって言うから？」

「まあ、確かに光輝は一人でも大丈夫そうよね」

「楽しそうに話していたが、白崎が着ている服も南雲の趣味に合わせてたらしいからな」

「っ!？」

どンドンヘイトが溜まっていく。これでいい。檜山は考え無しだから、オルクス大迷宮に行ったら何かをしかすでしょう。その時に纏めて邪魔者を排除する。光輝君は私の物なんだから。



戻ったら天之河に問い詰められた、意味がわからない。谷口も女子達に問い詰められて何があったか話している。まあ、普通に買い物をして食事をしただけだし、問題ないので荷物を降ろして運んでもらう。

「私が誰と買い物しようが、光輝君には関係ないでしょ！」

「関係ある！俺は幼馴染だから、香織を守る義務がある！」

「ないよ！」

「まあまあ、二人共そこまでにして……」

南雲が必死に仲裁しているが、時間がないのできつきと止める。

「そこまでだ。白崎と谷口、南雲はこれから買ってきた素材を使って早急にバッテリーを仕上げる。邪魔をしないでくれ」

「そんな事は後回しでいいだろう！ いや、お前達だけで作るべきだ！」

「オルクス大迷宮への遠征に間に合わせる必要がある。お前は自分のエゴだけで他のクラスメイトに危険を負わせるのか？」

「そんな事はない！二人で作ればいいだけだろう！」

「無理だよ。白崎さんと谷口さんの協力がなければそんなすぐには作れないよ」

「だが……」

「それなら、俺が監視しよう」

清水が手を上げてそう言ってきた。

「どうせ俺の力は低い方だ。今から訓練しても少ししか力は上がらないだろう。それならバッテリー作りを手伝って、バッテリーが欲しい。魔力効率を上げたらまだ強くなれるからな」

「清水は闇術師だったな。確かに使えそうだ。わかった。それなら清水が来てくれ。それだけでも助かる。もちろん、報酬として優先してバッテリーを渡そう」

「ああ、頼む」

「ほら、行くぞ。時間がない」

何かを言ってこようとする連中を無視して、谷口と白崎の腕をそれぞれで掴んでさっさと移動する。天之河達が邪魔をしようとするが、谷口の結界で防いでもらって工房に籠ればいい。食事は買って来てあるから平気だ。

ユーリはジーと中村の方を見てから、こちらにやってきた。工房で楽しい楽しい工作の時間だ。作るのはバッテリーだが、大量の廃材や廃棄用の金属武器を使ってユーリが設計した工作機器をハジメが作りあげる。それを使ってバッテリーを量産していくのだが、完全にデスマーチだ。

だというのにユーリは鼻歌混じりで別の何かを同時に作り出していた。南雲の作業量がやばいが、機械さえできれば後は俺と清水が作って谷口が結界を俺が書いた魔法陣に固定化するだけの簡単な作業だ。

「これが簡単な作業とか嘘だ！」

「はっはっは、諦めろ谷口！ ご褒美が欲しければな！ ほら、これが欲しいんだろう？」

「くそう、くそう、鈴はまけないんだから！」

チョコレートとかガチャ産の菓子類がまだあるから頑張れるのだろう。今も口にチョコレートを突っ込んでやったら食べながらどんな結界を張っていく。白崎はハジメの世話をしているので忙しい。世話は飲み物を口に運んだり、汗を拭いたりだが。それと定期的に全員へ回復魔法をかけることだ。そう、どんなに疲れても倒れられないデスマーチだ。だが、俺がガチャをしていないのだから、これぐらい当然だろう。

ユーリ

私の名前はユーリ・エーベルヴァイン。お兄ちゃんを助けるためにトータスという異世界に自ら召喚されました。様々な並行世界に存在する全ての私を統合し、永遠結晶エグザミアの力を使ってお兄ちゃんが行った召喚へ干渉し、この世界の管理者を誤魔化して一番弱くて非力なINNOCENTの私をメインとして、私達の分体と呼べるべき存在を送り込む事に成功しました。

その為にアバターやデバイス、紫天の書などを持ってこれなかったのが痛いです。でも、管理者の目をかいくぐるには仕方ありませんでした。ですので管理者に見付かったり、見逃されている内に力を蓄えるか、取り戻せばいいのです。幸い、知識には自信があります。

そもそもINNOCENTの私は飛び級で教育課程を終えて留学生として日本にやってきました。ホームステイ先のグランツ研究所で学校には通わずに研究の手伝いをしていました。そこで普段は研究所の受付やグランツ博士の助手をしています。

グランツ博士が開発した体感型のシミュレーションゲーム、ブレイブデュエルを置いているショップ間の交流をとりもったり、イベントを企画して運営するなど自分なりのやり方でブレイブデュエルの発展を頑張りました。ですが、やはり私や親友のディアーチェ達だけでは限界があり、身体が弱い事も合わさって苦労していました。そんな時に助けてくれたのがブレイブデュエルをしに来たお兄ちゃんです。私が担当してプレイヤー、デュエリスト登録を行い、アバターの作成などをお手伝いしました。その縁からよくブレイブデュエルについて相談していただき、仲良くなってお手伝いや一緒にイベントの企画や運営なんかもしました。

非力な私では達成できない事がいくつもあり、力仕事は全部任せる事になってしまいましたし、おんぶして運んでもらった事もあります。

気がついたら、グランツ研究所に所属してくれているデュエリスト

の中でも上位ランカーの一人になっていました。私とお兄ちゃんのアバターカードを合わせて行うユニゾンなどして、他のシヨップ主催のイベント攻略とかも凄く楽しかったです。互いに自分のカードをいっぱい持っているのは少し恥ずかしかったですけれど。

これが普通の世界で子供として生活していた私の全てです。ですが、並行世界の私はまた別です。

一つの並行世界で私は闇の書の奥深くに封印されていた無限の力を持つ永遠結晶エグザミアを核とするシステム、アンブレイカブル・ダークを内包しています。

ですから、争いごとを好まない私は自身の復活を望んでいませんでした。

私の封印が解除されればエグザミアのあまりの出力で暴走してしまい、周りに破壊と混沌を巻き起こして最後には自壊してしまうといった望まぬ事態を引き起こす事が分かりきっていました。

ですから、改造された夜天の書、闇の書の中で紫天の書と共に暗い暗い何も無い場所ですつと一人で過ごしていました。

そんなある時、闇の書の防衛プログラムが暴走し、主人であるはやてさんもろとも世界を破壊しようとしてしました。それをなのはさん達が防ぐ過程で闇の書の防衛プログラムを分離させました。その時に暴走する原因の一部となっていた紫天の書と私は放りだされてその世界を彷徨います。

紫天の書に搭載されている防衛プログラム、マテリアル達が起動し、闇の書が暴走した時に取り込んでいたデータからディアーチエ、シユテル、レヴィを作成し、なんやかんやあつて私を蘇らせました。当然、暴走した私をなのはさん達と協力して止めてくれました。

こちらの世界だとお兄ちゃんが応援してくれました。これはもう一つの世界と同じですね。

そちらでは惑星エルトリアに夜天の書と共に転送され、海底で眠っていた所をエルトリア再生委員会のイリスが見つつけ、覚醒させられました。

こちらは暴走せずに委員会に引き取られてイリスと共に私の持つ

エグザミアの力で惑星環境の改善事業に従事し、とても平穏な時を過ごせました。

この時に弱っていた所を助けた3匹の子猫が後にマテリアルの素体として、デイアーチエ達になりましたが……その後は……色々と大変でした。詳しくは思いだしたくもありません。

ですが、最終的には皆で仲良くなってエルトリアの復興をさせました。こちらの世界では復興を直接的にお兄ちゃんがお手伝いしてくれました。

このように私は認識しています。例えばこれらの記憶が作られたもののだとしても、私にとつては実際に経験し、お兄ちゃんと共有した事実にかわりはありません。

ですから、本当は私が存在しておらず、召喚される過程で参照されたデータから記憶が作られたとしても問題はありません。

実際に出会っていないなくても、お兄ちゃんが私の為に沢山の時間や労力、お金を使って一緒に行動してくれた事は事実ですから。それに愛してもらえていることは契約によるパスから温かな気持ち伝わってくるのでわかります。

だから、私はお兄ちゃんのコウリ・エーベルヴァインとして全力で支えてお手伝いします。それに異世界の技術を勉強し、様々な事を経験するのはちよつと楽しみです。

「コウリ、どうした？ 具合でも悪いのか？ 少し休むか？」

「はい！ 鈴は具合が悪いです！ 休ませて！」

鈴さんは余裕が大分ないようで、私に構ってくる事はありません。そもそも鈴さんの行為は……いえ、別に今はいいですね。今は必要のない事に思考を割くのは無駄になります。

「却下だ。谷口はノルマを終えてからな」

「そうだよ。後二時間以内に八個のバッテリーを作らないといけないんだから、休むのはそれが終わってからだよ」

「ひい〜！」

「はい、鈴ちゃん。頑張って」

心配そうに聞いてくるお兄ちゃんと周りの状況に苦笑いしながら、

大丈夫だと答えます。するとお兄ちゃんはスマホで私の体調をステータスという形でしっかりと確認しました。

「信じてくれないんですか？」

「ユーリはたまに溜め込んで無理をするからな。例えば——」
「あう」

実際に体験したイベントの事を言われてはどうしようもないので、私は大人しく受け入れます。そんな私をお兄ちゃんは頭を撫でてくれました。気持ち良くていいのですが、眠りそうになるので止めて欲しいです。

いえ、やっぱりこのままがいいです。ですから、すぐに作業を再開します。タブレットを分解し、構造を把握。それから私の知識と合わせて設計し、理論をハジメさんに説明して新しいタブレットを作成します。

その作成したタブレットを使って次の設計図と理論をわかりやすく説明し、投影型のディスプレイを作り出してもらいます。これがあるとないのでは作業効率が全然違いますからね。

「沙条、どう考えてもユーリと南雲がチートなんだが……」

「だよな。量子コンピュータの小型化ってマジかよ」

「あの、ユーリちゃん、要求されているバッテリーの大きさが小さすぎるから、無理だよ？」

「では、もう少し大きくしましょう。最悪、魔力は自前の物を使えばいいですからね」

ハジメさんに伝えて部品一つ一つを大きくしていきます。

「白崎と清水は出来たバッテリーを届けて魔力を入れるように伝えてきてくれ」

「わかった」

「うん。ついでに何か飲み物とかとってくるね」

「頼む」

二人が出て行ったので四人で作業です。お兄ちゃんは鈴さんが張った結界を箱で閉じ込めて魔力を吸収させて溜め込でいきます。魔力爆弾としても使うために箱型にしてありますよ。

魔力がどれだけ溜まっているかをわかりやすくするためにメモリも刻んであります。魔力にはそれぞれの色があるので分かりやすいです。なくても着色すればいいだけです。

「ねえ、鈴は思うんだけど、この部屋だけ数世代……数世紀、時代を飛ばしてない?」

「飛ばしているな」

「発達した科学は魔法と変わらないって本当なんだね」

「そもそもユーリの世界は魔法と科学が融合している……いや、今はINNOCENTの方が強いから純粋な科学技術か」

「どちらにしろ、凄いよ魔科学!」

「だな」

ハジメさんがお願いした部品を錬成してくれたので、組み立てていきます。大型で旧型の物ですが、デスクトップ型量子コンピュータと投影ディスプレイの完成です。

「あ、そうだ。そういえば槍ってどうするの?」

作業を終えたハジメさんが身体を動かして伸びをしながらお兄ちゃんに聞きました。

「槍?」

「疾風の槍だったかな。SRで出た奴」

「忘れてた。誰も使わんだろ」

「クラスの人なら、誰かは使うんじゃない?」

「嫌、ここで手伝ってくれている奴以外には渡すつもりはないな」

「そうなんだね……」

「あの、その疾風の槍ってどんなのなんですか?」

私、それについて聞いていません。

「ユーリちゃんは知らないんだ」

「はい」

「鈴もわからないよ。どんなの?」

「えっと、移動速度が上昇して、魔力の続く限り延々と風を操るって奴だよ」

移動速度が上昇して風を操る……あ、これは使えますね。

「……ちよつとバッテリーの仕様を変更して機材を追加しますね」
「「え」」

直に設計図を投影ディスプレイを操作して書き上げていきます。
「ノルマが間に合わないいいいいい！」

「あはははは」

「この修羅場中に仕様変更……稀によくあるけど、地獄だ……」

「……無、理だ……」

◇

二時間後。工房の中を半分ほど占領する大きな黒い箱ができました。大型の量子コンピュータではありませんが、他にも色々使える代物です。

「では、お兄ちゃん。ここに槍を突き刺してください」
「わかった」

お兄ちゃんが黒い箱の側面にあるスリットに槍を突き刺します。ハジメさんが安全の為に槍をしっかりとロックしていきます。こちらにある投影ディスプレイにシステムがちやんと動いている事を確認しました。

「鈴さん、そのスイッチを押してみてください」

「鈴が いいの？」

「はい。どうぞ」

「やった！ じゃあ、スイッチオン！」

「どんなどんでも飛び出すんだ……？」

「さあな」

「とんでもだよ」

「ユーリちゃんは凄いな」

清水さん、ハジメさん、白崎さんが喋っている中、スイッチが押されて魔力が流された槍は固有能力を発動させて周りに風を発生させ

ます。発生させた風は中にあるフィン付きのギアを回転させ、そのギアが次のギアを回転させ、運動エネルギーを生み出していきます。

生み出された運動エネルギーは量子コンピュータを動かす動力として使用します。当然、普通に風だけでは足りませんが移動速度上昇をギアに適応させ、風も魔力によって速度が上がっていきます。生み出した運動エネルギーを今度は魔力に変換させれば問題ありません。私は闇の書として様々な知識や技術、記憶を収集してきました。それらもしっかりと私の血肉となっています。

「工作機器を使った手作業は終わりです。動力の時代と行きましよう」

「マジか」

「あははは……」

「凄いね。でも、これって……」

「あの、鈴は解放されるの？」

「魔法を付与する技術はちゃんと知っています。すでに鈴さんの結界に関しては沢山の解析対象があったので、問題なく終わっています」

「やった、休みだ！」

「良かったね」

「ふむ。三時間の休息を認めよう」

「待って！ 三時間！ 鈴死ぬよ！ お願い、なんでもするから寝かせてー！」

「「なんでもだと！」「」

「南雲君？」

「お兄ちゃん？」

「「なんでもありません」」

香織さんと二人でとめます。でも、すぐに清水さんを二人が見出しました。清水さんは視線を逸らします。

「あ、ハジメさん、コンベアの作成などが必要です。それと充電したバッテリーの切り替えなどに人手も要ります」

「オツケー、やろうか」

「手伝うぞ、ハジメ」

「よろしく」

「俺も手伝う。だから、デバイスを作れないか？」

「私のお兄ちゃんのが優先です。その後はハジメさんで鈴さん。白崎さんなので、その次でいいならいいですよ。順番に作ります」

「わかった。インテリジエンスデバイスは……」

「流石に無理です。今は素材と機械が足りませんし、ストレージデバイスが限界ですね。それも自分に合った魔法でないと効率が悪いです」

「じゃあ、闇魔法で何か頼む」

「わかりました」

闇魔法ですか。デИАーチェやはやてが使う重力やジャガーノートとか、ラグナロクブレイカーとかですか？ アレはまず現状では無理ですね。魔力が足りません。

「そのストレージデバイスって何？」

「私も知らないよ」

「ストレージデバイスは待機形態と稼働状態があります。稼働状態はだいたい武器ですね。主な役割は魔法を搭載して、発動や魔力の操作をサポートしてくれるものです」

「便利アイテムだと思えばいい」

「ざつくりだね」

「……コンピュータを搭載した武器だ。呪文の詠唱とかを肩代わりしてくれる」

「なにそれ凄く便利じゃん！ 欲しい！」

「くれるって言ってるぞ」

「やった！ ユーリちゃん大好き！」

「ところで、鈴ちゃん。このままだと休憩時間が三時間だけだけど……」

「あつ、朝まで寝させて！」

「残念だったな。もう朝だ」

「朝帰りになっちゃったよ、かおりん……」

「何時もの事だよ？」

「そうだった」

「明後日にオルクス大迷宮でしたか」

「そうだな。というか、明日だな」

これはストレージデバイスを急いで用意しないとイケませんね。

「あ、私と鈴さんはペンダントでいいですよ。お兄ちゃんが買ってくれた奴です」

「ああ、アレだね。うん、いいよ」

「ハジメさんと香織さんはどうしますか？」

「僕は……」

「私と南雲君はこれをお願い。前に互いで買って交換したの」

香織さんが嬉しそうに十字架のペンダントを差し出してきました。ハジメさんののはネクタイピンかな。

「選んだのか？」

「う、うん……記念になるから、アクセサリーが欲しいって……それで……」

「なるほど」

「わかりました。どちらもデバイスに加工しますね。一部、宝石を埋め込みますがいいですか？」

「うん」

「鈴もいいよ」

「清水はどうする？」

「待機状態が腕輪で、稼働状態は短剣がいい」

「できるか？」

「大丈夫です。ハジメさん、手伝ってください」

「ああ、わかってる」

寝る時間を考えると日付が変わる前には寝たいですね。頑張りましょう！

第8話

谷口鈴

ストレージデバイスとかいうのを貰える事になったけれど、鈴は眠さが限界なので沙条君達に抱き着いて上目遣いでおねだりする。普通にやっても三時間しか許してくれない。

「お願い。鈴、もう寝たいの……いいよね？ 今日はずもう、お願い……」

もう限界だからお願いしたけれど、こんなことやりたくない。それにまともにお風呂にも入れていないし、汗とか埃とか鉄とかの臭いが酷いし。

「鈴ちゃん、本当に限界なんだね。私も他の皆より仮眠を取っているから大分ましかけど……」

かおりんはちゃんと寝ているからね。ずるいと思う。鈴しかできないから仕方ないけれど。

「確かに明日の事を考えたら休んだ方がいいかも」

「明日はオルクス大迷宮だから、休まないといけないか。いいだろう。ただし、夜には一度集まるぞ。ユーリが作ってくれたストレージバイスの設定とかしないといけないはずだからな。だよな？」

「はい。要望を聞いて作りますが、最終調整は実際に使ってしないとイケません」

「南雲君達はどうするの？」

「俺は残る。ユーリを一人にはできないしな。ハジメは……」

「僕も残るよ。ベルトコンベアとかも作らないといけないし、素材の加工は錬成師の僕にしかできない」

「じゃあ、私も……」

「いや、白崎さんは休んで」

「でも……」

とりあえず、許可は貰えたので鈴は先に出る事にする。

「鈴は先に行くよ〜寝たい」

「谷口、ちよつと待て。これをやるよ」

沙条君からラング・ド・シャとシガールというクッキーのお菓子を貰えた。試しに箱を開けて一つ、シガールを口に入れるととても甘くて美味しい。夢中でカリカリと食べていく。効果は特にないけど普通に美味しいお菓子。

「リスみたいだな」

「にやにを〜」

「鈴ちゃん、寝る前にお風呂に行かないと駄目だよ」

「かおりんも一緒に行く？ 臭うよ？」

「……行く……」

かおりんの口にもシガールを入れて、他は箱に仕舞う。

「風呂にいくならこれも持っていけ」

アロマキャンドルと入浴剤を渡してもらえた。確か、アロマキャンドル。疲労回復の効果があつたはず。入浴剤はお肌がツルツルのスベスベになるらしいので、とても、凄く凄く嬉しい。寝不足で肌の手入れとか全然できてないもん。

「鈴ちゃん、今すぐお風呂に行くよ。さあ、早く」

「うん。れつつご〜」

「あ、やつぱりちよつと待つてくれ」

「え？ 嫌だよ？ どうしてそんな酷い事を言うの？」

「いや、ユーリも連れて行って欲しいと……」

「私は後でいいですよ。今はストレージデバイスを完成させる事が優先です。ですから、お先にどうぞ」

「だって」

「わかった。悪かったな、引き留めてしまつて」

「ううん、いいよ。それじゃあ〜」

「また後でくるね」

二人で部屋から出て歩く。

「鈴ちゃん、荷物を持ってあげるよ」

「ありがとう〜お願い〜」

普段なら普通に自分で持つけれど、今は寝不足と疲労でふらふらしているのぢよつと大変だから任せる。

「あ、二人共、やつとでて……」

「顔色悪いけれど、大丈夫？ それに……」

「うう、言わないで……」

「あはは……」

しずしずと恵里の二人が廊下の先から来た。近付かれると流石に臭いと体調の事がばれちゃった。こうなる前に早く入りたかったけれど、仕方がないね。

「今からお風呂行つて寝るの」

「私もお風呂に行こうかなつて」

「もう終わったの？」

「バッテリーは多分、終わったよ。鈴はよくわからないけれど、後は自動で作ってくれるみたい」

「自動つて……」

「じゃあ、もうこれから自由なの？」

「夜にまた集まりますね。ご褒美に何かの道具を作ってくれるらしいです」

「楽しみ〜」

「そうなのね。ところでそれは？」

「これは鈴の努力と苦労の結晶だよ。二人にもあげるね〜」

二人の口にもシガールを入れて、かおりんにももう一本あげて鈴も食べる。口に程よい甘さを感じながら、部屋へと移動する。

「私達は訓練だから、ここまでね」

「うん、またね」

「また〜」

「ばいばい」

恵里としずしずの二人と別れて部屋へと到着。着替えを取つてからお風呂に向かう。お城だけど、流石にずっと風呂を焚きっぱなしにはされていない。だから、風呂の湯船にメイドさんが火属性魔法と洗浄の魔法を放つて温めてくれる。そのお礼にラング・ド・シヤの方を

三枚あげた。お菓子の箱とアロマキャンドルを着替えの上に置いておく。入浴剤は持って入る。

「さあ、入ってねよ」

「その前に身体を洗わないと駄目だよ、鈴」

「うゝかおりんが洗って」

「もう、仕方ないな」

「えへへ」

疲れて動きたくないから、かおりんにおねだりしたら、洗ってくれる事になった。どこから召喚された柔らかいタオルで身体を洗ってもらおう。流石に大事な所は自分で洗うけれど。お返しに背中を洗ってあげる元気もない。

「あれ、シャンプーとリンスが……」

「え？」

「無くなってるみたい」

「嘘……」

「みんな使ってたから仕方ないよ」

「うみゆく残念……新しいの貰いに行くのもしんどいし、諦めよう」

「そうだね。普通の石鹸はあるしそれで代用だね」

「髪の毛がゴワゴワするから嫌なんだけどね」

「……鈴ちゃん、私達には切り札があるよ」

「ふえ？」

「入浴剤。頭からお湯の中に浸かればつるつるのスベスベに……」

「それだ！ かおりん天才！」

「それほどでもありません。と言いたいけれど、本物を見ちゃうとね……」

「あれはやばいよね、可愛いけど」

かおりんと話しながら肌や髪の毛がゴワゴワする石鹸で汚れを洗い落とし、入浴剤を入れる。するとお湯が光り輝き、エメラルドグリーンに変化した。木々の良い香りが立ち込めてまるで檜風呂のような感じがする。

「投影型ディスプレイで自然を映して森の中みたいにしたいね」

「それは贅沢だよ」

二人で髪の毛を結ばずに入り、本当に肌がスベスベになるか確かめる。するとあら不思議。一瞬で身体の老廃物が浄化されるような感じがして肌がみるみるうちにつるつるのスベスベになっちゃった。

「鈴ちゃん」

「かおりん」

二人で頷いた後、一斉に目を瞑って潜る。一分ぐらい頑張った息を止め、外に出ると髪の毛や顔を含めたお肌がツルツルのスベスベになった。それに肌はモチモチと柔らかくもなっている気がする。これは元からかもしれない。

「気持ちいいね〜」

「そうだね〜」

「眠りそうだね〜」

「駄目だよ〜」

「ん〜」

「寝たら沙条君を呼んで運んでもらうよ」

「それはやだ」

仲良くはなっただけだけど、お肌を見せるほどにはなっていないよ。でも、胃袋は握られてるんだよね。そして、一緒になっただけ可愛いユーリちゃんからお姉ちゃん呼び……やっぱり駄目。考えたら坩堝に陥りそう。鈴は安い女じゃないんだから。

それにユーリちゃんがどう行動するかもわからないし、正直かおりんの話聞いた限り、怖いんだよね。沙条君を取られた事で暴走でもされたら……鈴は瞬殺されちゃう！

「それよりかおりんは南雲君とどうなったの？」

「う〜ん、微妙かな。アプローチはしているんだけど……」

二人で湯船に身体を横たえながら会話していく。お行儀が悪いけれど、ここには鈴とかおりんだけだしね。それに全身に染み込ませたいから。

「南雲君、自己評価が低いからね。それに天之河君の事を面倒だと思ってるし」

「光輝君に悪気はないんだけどね……」

「まあ、手っ取り早く告白すればいいと思うんだけどね。手遅れになっちゃうかもしれないよ?」

「え?」

「だって、制作活動している時の南雲君ってカッコイイし」

「まさか鈴ちゃん!」

「鈴はかおりんの味方だよ! だからそんな怖い顔をしないで!」

なんかかおりんの後ろに般若の仮面を被った蛇が幻視できちゃう気がするよ!

「本当に?」

「神様に誓って!」

「……この世界、神様がいるんだよね……」

「嘘だったら神様殺しちゃう!」

「なら、信じてあげる」

「ほっ」

安心したら少しお腹が空いてきた。そういえばもう朝食の時間を過ぎているんだよね。うん、お腹が空くわけだね。お菓子でも食べて空腹を紛らわせて寝よう。

「そういえば鈴ちゃん」

「どうしたの? 何か凄く嫌な予感がするんだけど……」

かおりんが鈴を見る目がまるで養豚場に送られる豚さんのように……まあ、見た事もないから知らないけど。

「鈴ちゃん、トータスへ来てから全体的にふくよかになった?」

「え? まさか、そんなはずは……」

「沙条君からいっぱいお菓子貰って食べてるよね」

いや、でも作業で頑張っているし、向こうでもあれぐらい食べてたし……」

「沙条君が出したお菓子とかの甘味って美味しいよね?」

「うん、美味しい」

「特殊な効果もあるよね?」

「あるね」

「南雲君や沙条君が鑑定してくれた結果、忘れた？」
「え？」

「カロリーはお察しとか、高カロリーとか、これさえ食べたら他はいらないとか……」

「あつ、ああああああつ！」

「考えないように、考えないようにしていたのに！」

「現実を見よう。鈴ちゃん……」

「うわああああああ！」

「試しにお腹を触ってみると摘まめた。これはやばい、やばすぎる。ダイエツトしなきゃ！ でも、お菓子が無いこれからの生活なんて考えられない！ 人は上の生活を一度経験したら生活水準を下げるのは大変なんだよ！ 鈴達は経験したから理解しているの！」

「ダイエツトはする。でも、お菓子は食べる」

「釣り合わないと思うよ？」

「くっ、捻り出せ鈴の灰色脳細胞！」

「お湯に沈みながら考える。何かないか、何かないか……」

「あつ！ 閃いたよかおりん！ いくら食べても太らない方法！」

「え、そんな方法があるの？」

「うん！ 鈴は結界師だよ！ だから、胃に結界を張って味を堪能したら全部圧縮して出せばいいんだよ！ そうすれば栄養素が吸収されないから太る事もないしね！ 効果は受けられないかもしれないけれど、太るよりはましだから！」

「……鈴ちゃん……そこまでするの……？」

「する！ これでダイエツトしながらお菓子を食べられる」

「遅すぎたのかも……？」

お風呂を堪能してからうきうきしつつ外に出る。脱衣所でふかふかのバスタオルで身体を拭いてから用意していた着替えを着ていく。そこでふと違和感に気付いた。まあ、気のせいだと思ってお菓子の缶に手をやって開け、口に入れるためにシガールを取ろうとして――
「あれ？」

――空を切った。掴むはずの物を掴めず、不思議がつて探す。

「あはは、シガールを食べ過ぎたかな？ でもラング・ド・シヤは少ししかあげてないから絶対にあるはず——」

そう思つて引き寄せた缶の中身は何も無かつた。

「鈴ちゃん？」

「おかしい、おかしいよかおりん。鈴のね、お菓子さんが消えちやつた……」

「え？ まだ貰つたばかりでいっぱいあつたよね？」

「うん。いっぱいあつたよ。あげた枚数を考えても半分以上あつたのに……」

「盗まれたの？ でも、そんな事をするなんて……」

「かおりん。直に探すよ。鈴のお菓子を奪うなんて許さないんだから！」

「まあ、あれだけ苦勞して手に入れてるんだもんね」

「30分仮眠してから、休みなく六時間結界を張り続けた対価なんだから当然だよ！」

いくら明るくて優しい鈴でも怒る時は怒るんだからね！ 犯人は絶対に許さないんだから！

「あ、ちゃんと着替えてから出ないと駄目だよ」

「そうだった。急ぐよかおりん！」

「うん」

急いで着替えを終わらせて髪の毛を濡らしたままでも気にせず外に出て、犯人を捜す。



犯人達はすぐに見つかった。何故なら堂々と訓練所でクラスメイ卜の皆が食べていたからだ。それぞれビニールの袋に包装されているから、確実に鈴の物だ。沙条君が鈴達以外に渡すはずがない。鈴に対する報酬としてキープしているのはわかつている。だって、出た時に鈴が一番欲しいのを選ばせて、それ以外を報酬として渡してくる鬼畜野郎だからね！ 本当に駄目だと思つた時に渡してくれるけれど、

鈴はニンジンをぶら下げられたお馬さんの気分だよ！

「それ鈴のお菓子だよね！　なんで皆が勝手に食べているの！」

「え？　そうなのか？」

「これって中村と八重樫が持ってきたよな？」

「そのはずだ」

「どういう事！　まさか盗んだの！」

「谷口！　クラスメイトになんて事を言うんだ！」

「待つて鈴ちゃん！　ちゃんと理由を聞こう？　ね？」

「うぎぎ」

かおりんに抱き着かれて頭を胸に埋められ、柔らかくて少し落ち着いてきた。

「それで雫ちゃん、恵里ちゃん、どういう事？」

「えっと、私達は二人と別れてからメイドさんに渡されたの。皆で食べるようになって……」

「確か、鈴からだと言われたよ？」

「鈴、そんな事言っていないし渡していないもん！」

「じゃあ、そのメイドが犯人じゃないのか？」

そう言われてすぐにそのメイドを探すように言う。一番怪しいのは鈴があげたメイドさん。

「一緒に来て！」

二人の手を掴んでメイドを探しに行こうとすると、天之河君が鈴の前に立った。

「なに？」

「今は休憩時間とはいえ、すぐに訓練の時間だ。それにそのメイドさんだって俺達を労うために渡してくれたんだろう。だから、許してあげよう」

「ふざけないで！　あれは鈴が、鈴が頑張つて、頑張つて頑張つて何度も限界を超えて手に入れた報酬なんだから、鈴のお菓子なの！」

「谷口もクラスの一員じゃないか。それなら皆のために提供するの当たり前だろう？」

「ちよつと光輝君？」

「待つて、それは……」

「黙っていてくれ香織、雫。俺は勇者として間違った道を進もうとする谷口を導かないといけない」

「ちよつと待つて？ 別に鈴はおかしなことを言っただけよ？ 皆に鈴が鈴の意思であげて、それを食べるのは全然いいんだよ？」

「それなら同じ事だし、別にいいだろう？」

「全然違う！」

「谷口が渡すか、メイドさんが渡すかの違いだろうか？ 結果は同じじゃないか」

「だから全然違う！ 鈴が食べる分を残して別けると、全部取られるのは違うの！ なんて鈴が頑張って労働の対価としてもらったものを自分の分も残さずに何もしていない人に取られないといけないの！」

「何もしていないことはない。俺達は訓練をしていた。むしろ、谷口達の方が訓練もせずに……」

天之河君が何かを言っているけれど、檜山君達も天之河君に賛同して鈴を責めてくる。かおりんとしずつが止めようとしてくれるけれど、要は勝手に食べた事を開きなあって罪悪感を解消したいだけだよ？

鈴はなにもわるくない。なのになんで鈴が責められてるの？ もう眠いし、さつさと犯人をみつめてこんな事が二度と起きないようにしないと……それには天之河君が邪魔だよ。どうせ鈴の話なんて聞いてくれないし押さえ込もう。

「見えざる盾よ、枷となりて拘束せよ」

「谷口！」

複数の障壁を同時に生み出して、天之河君の両手と両足を拘束する。いくら勇者でも一つの拘束は五重にしてあるし、大丈夫なはず。

「おい、マジかよ……」

「鈴、やりすぎだよ」

「うるさい！ いいから犯人捜しをするの！ 鈴のお菓子を盗んだ人とはしっかりとお話をしないといけないんだから！ 食べ物への恨み

は恐ろしいんだから！」

「犯人捜しなんて無益な事は止めるんだ！ 一体どうしたんだ！ 明
るかった君がこんな小さなことで……」

「小さくない！」

「っ！」

色んな意味で怒った鈴は握り拳を作って、拘束している結界を小さくする。

「天之河君！」

「光輝君！」

「やめんか！ 誰か谷口の暴走を止めろ！」

「雫ちゃん！ 沙条君からお菓子を貰ってきて！ 急いで！ お菓子を食べさせてベッドに叩き込めば大丈夫だから！」

「わかった！」

「それで解決するのか？」

「鈴が機嫌が悪いのは寝不足の部分もかなりありますから……」

「そうか……寝てないのか？」

「仮眠ぐらいです。全然足りていないです」

「これは改善させる必要があるな」

ぐぎぎぎぎぎぎぎ！ 鈴の邪魔をするなら全員、結界に閉じ込めて――

「ほら、谷口。口を開けろ」

「ふえっ？」

反射的に口を開けると、とても美味しいマドレーヌが放り込まれてきたので、味わって粗食する。

「ふみゆ……」

視線をやると、沙条君が居て箱を持っていた。中からとってもいい匂いがする。

「ほら、もう一個喰うか？」

「たべる〜」

食べた瞬間、急激に眠気が襲ってきて意識が朦朧としてくる。

「ふむ。かなり効くな。この呪いのマドレーヌは」

なんてもの食べさせるの！ 美味しいけれど！



気がついたら、ベッドで眠っていた。起き上がると頭がスツキリとしてくる。隣には沙条君が持っていた箱がある。中身にはマドレーヌがあつて、手紙が添えられていた。

「なにになに……」

眠りのマドレーヌ。食べてから数分で食べた者を深い眠りへと誘う。疲労などが完全に回復するまで眠り続ける。病気などがある場合、それが完治するまで眠り続ける事になる。

これってつまり、自然治癒とかで完治しなかったら永遠に眠り続けるって事だよ。なんて恐ろしいお菓子なの！ 確かに呪いのお菓子だよ！ 安楽死とかにも使えそうだね！

「え、つまり鈴は寝ていたって事？ 今何時？」

そう考えていると、すぐに扉が開いてかおりん達が入ってきた。

「あ、鈴ちゃん。起きたんだね」

「おはよう、鈴。それとごめんね」

「ごめんなさい」

「ううん、鈴の方こそごめんなさい」

先に謝られたので、鈴も謝り返す。ベッドから出て着替えながら質問する。

「今何時？」

「えつと、もうちよつとでオルクス大迷宮へ出発するところかな」

「鈴はそんなに寝ていたの？」

「そうよ。いけそうならオルクス大迷宮へ一緒に来るようになって」

「行く。あ、ユーリちゃんに謝らないと」

「大丈夫よ。説明はしておいたから」

「ありがとう。で、犯人は？」

「結局見付かってないの。ごめんなさい」

「しずしずが悪い訳じゃないよ」

「それと香織や鈴が風呂場で見たメイドさんは白だった。その人はお風呂を沸かした後、すぐに別のメイドに呼ばれて離れたそうで、詳しい事はわからなかったわ」
「そっか」

恵里の言葉を聞きながら、何処か腑に落ちない。何かを見落としている気がする。でも、やることがわざわざ鈴のお菓子を盗む事なんておかしいよね。まるでメリットとデメリットが釣り合っていない。それこそ、鈴の評判が落ちて天之河君達と溝ができたくらい。そんな事をして得するのはメルド団長達、国の人じゃないし、クラスメイドでも違うと思う。こっちもメリットがないしね。

「よし、着替え終わり！　じゃあ、行こう！」

「スッキリしたみたいで良かった」

「元気になったみたいだね」

「これで一安心ね」

「ご迷惑をおかけしました。鈴はこれからも頑張るよ」

握り拳を作ってから外に出て、食堂によってサンドイッチを貰ってから移動する。クラスの人達と合流すると、彼等から睨み付けられる。だけど、鈴は無視して沙条君やユーリちゃんを探す。

すぐに皆がバッテリーを配っていたので、鈴もお手伝いに入る。

「おはよう〜遅れてごめんね！」

ユーリちゃんを優しく抱きしめる。

「鈴さん、もう大丈夫ですか？」

「うん、もう大丈夫だよ。昨日は行けなくてごめんね。本当は行くつもりだったんだけど……」

「いえ、大丈夫ですよ。でも、デバイスは最終調整ができてないので渡せません。誤作動すると危険ですからね」

「まあ、それは仕方ないか」

結界は座標指定だからね。設置場所が狂ったら、色々とおかしくなっちゃう。鈴が張りたい場所とデバイス君の方で理解している場所が別々の場所だと意味がないし。

「二人共、手伝ってくれ」

「はい」

欲しい人に渡した後、鈴も自分用のバッテリーが取り付けられたベルトを装備する。いざとなれば爆弾にもできる危険なバッテリーだけど、ユーリちゃんも幾重にもリミッターや破損した時に無害な状態として魔力を放出する機構を設計して取り付けてある。なので魔力爆発はそう簡単には起きないようにできているとのこと。実際に正確な手順でコードを解除しないと爆発しないので安全だと思う。実験も何度かしたらいいし、安心だね。

◇

オルクス大迷宮。全100階層からなるといわれている地下迷宮。下に進むにつれて魔物は強くなっていく構造から、実力を測りやすいこと。それに加えて良質な魔石が手に入ることから、冒険者や傭兵、新兵の訓練の場として人気が高く、大迷宮の近くには宿場町ホルアドがある。

そのホルアドへと向かう途中にバッテリーへ魔力を込めてもらい、ホルアドで一泊して魔力を完全回復させる。それから大迷宮へと潜ることになっている。

そんな訳で、俺はユーリと一緒に眠り、大迷宮へと挑む日となった。ちなみにユーリが一緒なのは俺の召喚獣扱いだからだ。騎士団側はお金を出してくれないので、宿の人を言いくるめて同じ部屋にした。まあ、なんとも言えない視線にさらされたが気にしない。

「オルクス大迷宮。書物で調べる時間はありませんでしたが……大丈夫でしょうか？」

俺の隣では動きやすい服装のまま、バリアジャケットを展開していないユーリがいる。バリアジャケットの機能は現在のストレージデバイスには実装されていない。本当に魔法の演算を助ける補助的な機能しかない。そもそもストレージデバイスとはいえ、一から六つも

たった一日や半日で作れるわけがない。キットとパーツが揃っていないのならまだしも、コピペもできないのでユーリの手作業だからな。むしろ劣化品とはいえ六つも仕上げた事自体が偉業だ。

「しかし、少し楽しみです」

「そうだな」

「これからオルクス大迷宮へと挑むが。油断はするなよ。油断すれば死ぬ事になる。だから、迷宮では皆で助け合うように。例えどんな事があってもだ！ それとくれぐれも指示に従うように！」

「「はい！」」

「なに、今回は安全圏で弱いモンスターを倒すだけだ。俺達騎士団が護衛をするから安心してくれ」

「「はい！」」

「では出発する！」

メルド団長達に従い、俺達は住民に見送られながらオルクス大迷宮へと足を踏み入れる。洞窟の中なのに不思議と灯りがある。光る苔みたいなのが生えているからだろう。

「少し採取していいですか？」

「そうだな。俺が取ってみる」

「お願いします」

苔を回収し、ユーリに渡してやるとタブレットを出しながら早速、解析していく。すると隣に谷口がやってきた。

「谷口は前の組じゃなかったか？」

「抜けてきたの」

「いいのか？」

「だって、鈴が居ると空気が悪いし、鈴だつていたくないもん。それに咄嗟に守ってあげられるかもわからないし、ユーリちゃんや沙条君の所に居た方が守るって気持ちになれるから」

「俺まで守る対象になるとは感激だな」

「沙条君はついでだからね！ ユーリちゃんを守りに来たんだから、勘違いしないでね！」

「ツンデレか」

「違うよ！」

ユーリを挟んで三人で歩いていく。前方にメルド団長達がいて、後方には騎士達がいる。俺達はその間に居るという感じだが、モンスタ―が出たら説明しながら倒すまで止まるので歩幅が小さいユーリでも追いつける。

ユーリと谷口の二人と警戒しつつ騎士の人達に質問しながらゆっくりと進んでいると、前方から銃声が聞こえてきた。

「ハジメの銃だな」

「本当に作ったんだね、弾薬は大丈夫なの？」

「弾丸は魔力ですから、無限とは言いませんがバッテリーがあればそう簡単には無くなりません」

「鈴も欲しいかも」

「谷口の場合は結界の使い方を変えれば攻撃に使えるぞ」

「そうなの？」

「はい。まず、相手を拘束してから結界を縮めます」

「それはやったよ」

「じゃあ、薄い結界を飛ばして切るとか」

「それはやった事がないや。でも、結界を動かすのはできないかな。練習しないと」

「他には……あ、結界を大きくしたり、小さくしたりはできるんですよ？」

「できるよ」

「それなら、それを繰り返せば移動させられるんじゃないですか？」

「なるほど。こんな感じ？」

展開された四角い結界が大きくなり、小さくなり、また大きくなつてだんだんと移動していく。

「鈴さんの魔法はどちらかというプログラムで考えるのがいいかもしれないですね」

「それってユーリちゃんの魔法と相性がいいってこと？」

「ですね。マクロを組んで同じ動作を高速で繰り返させれば移動できます」

「確かにそうだな」

「やった。鈴にも攻撃手段ができるかも！」

「結界に相手を閉じ込めて圧縮するとかもいいかもな。ぶっちゃけ、谷口だと時間はかかるが魔力を集める結界の応用で空気を外に排出するようになれば生物は結界が破られない限り殺せるぞ」

「おお。流石沙条君！ 鬼畜なだけあって酷い戦法を思い付くね！」

「褒めてるのか？」

「褒めてるよ？」

「そうか」

「あははは」

話しながら移動していると、そろそろユーリの体力が心配になってきたのでおんぶしてやる。肩車がいいが、迷宮でそれをやると天井に頭をぶつけるかもしれないからな。

「次、沙条と谷口！ お前達の番だ！」

メルド団長に呼ばれたので前に移動してモンスターと戦うが、どこに居るかわからない。メルド団長が呼んだことからモンスターが居るのは確実だ。擬態しているのだろう。

「鈴に任せて！」

谷口が詠唱し、広域に結界を展開。即座に何かが洩れる音が聞こえてくる。

「閉じ込めるだけでは意味がないぞ？」

「大丈夫です。多分、これは……」

「そろそろかな」

メルド団長が不思議がつているのをハジメが説明していく。谷口が言葉を発すると、結界から破裂音がして急激に風が結界の中心に流れていく。中には岩に擬態したモンスターの死体が転がっていた。

「なんだ、これは……毒か？」

「違うよ。ただ単純に空気を抜く結界を作ったの。呼吸できなかつたら生物は生きていけないからね！」

「！！！！」

谷口の言葉に他のクラスメイト達が恐ろしい物でも見るような目

を向ける。当たり前だ。気付かない内に苦しくなつて酸欠で死ぬ事すらありえるのだから。いや、空気と言っているが、これを酸素のみに限定して二酸化炭素や一酸化炭素などだけ残るようにすれば簡単に死ぬんじゃないか？ それも見えないようにした結界を使って。

「お兄ちゃん、綺麗な素材が手に入りましたね。流石は鈴さんです」「エツヘン！ もつと褒めていいよ！」

「確かに素材集めにはいいな」

移動して倒れているモンスターを分解し、素材を採取しておく。

「谷口、くれぐれもそれを味方の居る所で使うなよ」

「わかってます」

「ならいい。次は沙条とユーリだな」

「はい」

「頑張ります」

しばらく移動すると、今度は短剣を持ったゴブリンが出てきた。そいつはこちらを見るなり駆け寄ってくる。

「よし、ユーリ。君に決めた！」

「はい！」

ユーリがおんぶから降りて前に立ち、ストレージデバイスを展開。腕輪が装備される。そしてユーリは魔法陣を目の前に作り出して魔法を放つ。

「パイロシューター、シュート」

弾速が遅い炎の弾丸を三発作りだし、それを放つ。一発目を余裕で回避したゴブリンの前から二つの弾丸が少し間を開けて進んで来る。ゴブリンは笑いながら後ろに飛び退くと背後から戻ってきた炎の弾丸に命中し、燃え尽きた。

「詠唱もなしか……まさか、魔力を直接操っているのか？」

「いいえ、詠唱は魔法陣を展開する事で肩代わりしています。これによつて高速で放つ事ができるんですよ」

「バッテリーといい、その武器といい素晴らしい技術だ。是非、我が国でも採用したい」

「それは値段次第です」

「おい、沙条！ 今は人類の危機だぞ！ 無料で提供するのが当然だろう！」

「材料費や技術料とかかかるんだよ。だいたい無料で武器を提供してみろ。どうなるかわかってるのか？」

「皆が助かるだろう！」

「馬鹿か。そうなると騎士団や他の人に武器を供給していた人達が路頭に迷う事になる。なんでもかんでも与えたらいいというものではないんだ。経済が破綻するぞ」

少なくとも、本当の末期なら気にせず放出するが……そこまでの危機なのかわからん。だいたい一方的に人類側の情報しか聞いていない状況で判断できることでもない。魔族の言い分を聞いて裏付けをしないとイケないし、本当に互いを殲滅しないとイケないのかもわからない。

「今はそれを気にしている時ではないと言っているんだ。強い武器を供給しなければどんどん人が殺されていくんだぞ！」

「そうだぜ。俺達にもその武器を超越せよ。南雲やキモブタより有効活用してやる」

「は？ ユーリが俺達のために寝る間も惜しんで作ってくれた奴を渡すわけないだろうが。頭湧いてんのか？」

「なんだと！」

「やめんか！」

「あの、そもそも個人用に調整して登録してあるので、他人では使えませんが？ 魔法だつて個人で違うのですから」

「つまり、オーダーメイドの高級品という事か」

「はい」

「メルド団長。それにあくまでもこれは試作機です。これからデータを取って、試作を繰り返して問題点を解消。それからようやく製品化するものです。下手をしたら暴発とかもしますからね」

「ふむ。まだ実験段階という事か」

「はい」

ハジメが説明してくれたお蔭でメルド団長はわかってくれたよう

だ。

「さて、俺達の番は終わったから後ろで採取でもしてようかな」

「ですね」

「鈴も手伝うね」

「待て。まだ沙条は戦っていないだろう」

「そうだぜ」

「俺は召喚士だ。俺の代わりにユーリが戦った。何も間違いではない
い」

「屑だな」

「お前はこんな幼い子の後ろに隠れて恥ずかしくないのか」

「恥ずかしいに決まってるだろうが、馬鹿め！」

「あ、やっぱり？」

「戦う力がないんだから仕方がないんだよ。そもそも俺の魔力は全て
ユーリに供給されているから、ハジメみたいに魔弾を撃つこともでき
ない。剣とか持っても意味がない。実際問題、普通に戦えないんだ
よ」

「それなら訓練をして少しでも強くなる努力をすべきだ。少なくとも
俺はそうすべきだと思う」

「まあ、召喚の訓練はするが、後回しだな。今は全体の戦力を上げるた
めにバツテリーを開発していたんだ。というか、そもそも使い捨て
の攻撃手段は用意している。ただ雑魚敵に使うのがコスト的にあっ
ていないだけだ」

「なんで矢で倒せるような雑魚敵にバリストタとかの攻城兵器を使う
んだって感じた。かかる費用の桁が違う。」

「ねえ、アレはなにかな？ 上で水晶みたいなのがキラキラしている
よ？」

「ん？ アレは……」

白崎の言葉に上を見ると確かに水晶みたいなのがあった。綺麗だ。

「綺麗ですね」

「確かにちよつと欲しいかも」

「アレはグラントツ鉱石」

「グランツ?」

「グランツ博士ですか?」

「いや、違う。その博士というのは知らないが、求婚の際に使われる指輪などに加工するのが人気だぞ」

「……すてき……」

「だったら俺達で回収しようぜ!」

「こら檜山! 勝手な事をするな! 安全確認もまだなんだぞ!」

メルド団長が止める間もなく、檜山がグランツ鉱石に触れて赤い光が溢れた。

「転移反応! 強制的に転移させられます! 気をつけてください!」

ユーリの叫び声に正気に戻り、すぐにユーリの言葉で何が起きているのか気付く。だから、まずはユーリと近くに居た谷口を引き寄せて指示を出す。

「谷口! 結界を全力で展開! 範囲は大きく取れ!」

「わかった!」

結界が展開されると同時に視界が一瞬だけ暗転し、どこか真つ暗な広い空間に出た。目の前には巨大な橋があり、後ろにも続いている。どうやら橋の真ん中のようだ。

「前方と後方に召喚用の魔法陣を確認しました。すぐに後ろの階段に引いてください! 退路を確保しないと全滅します!」

「嬢ちゃんの言う通りだ! 全員、急いで橋まで走れええつ!」

「まだ敵も出ていませんよ!」

「そうだぜ。ビビる必要が……」

「馬鹿者! 退路を先に確保するのが戦術の基本だ! 敵が現れてからではおそ——」

「駄目です! 間に合いません!」

ユーリの言葉と同時に前方に巨大な地竜のような数メートル、下手したら数十メートルはありそうな凶悪な存在が現れる。背後には無数の骨の身体に剣と盾を持つモンスターが出てきた。

「ちっ、間に合わなかったか……しかもアレはベヒモスか……」

「団長！」

「すまん。俺と一緒に死んでくれ」

「はい！」

「全員撤退しろ！ 俺達が防ぐ！ お前達はなんとしても帰還するんだ！ 全ての敵意と悪意を拒絶する！ 神の子らに絶対の守りをここは聖域なりて神敵を通さず！」

メルド団長が障壁魔法を展開させる。

「谷口！ 俺が抱えて走るからお前はメルド団長達の前に結界を頼む！ ユーリは階段付近の敵を倒してくれ！」

「おっけー！ 全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りをここは聖域なりて神敵を通さず！ 全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りをここは聖域なりて神敵を通さず！」

「任せてくださいー！」

谷口が連打してくれるお蔭でなんとか猶予はできた。急いで谷口とユーリを抱えて橋まで走る。抱えて走っている間にユーリが複数のパイロシューターを生み出して、こちらに襲い掛かってくるスケルトンへと命中させていく。命中したスケルトンは炎に焼かれて崩れ落ちていくので、火力は問題ない。

それでもユーリだけでは流石に手が足りないが、他のクラスメイト達も俺達の後ろから階段を目指して移動しはじめた。彼等がユーリの討ち漏らしを処理してくれるおかげでどうにか倒せている。

ある程度は進むと、ユーリがブラストファイアーという爆発魔法を階段前に陣取っているスケルトンの集団へと放ち、纏めて吹き飛ばしてスペースを確保してくれた。そこに俺達は滑り込む。

「到着ですー！」

「これでどうにかなるか」

無事に階段へと到着できたので二人を降ろす。といっても、周りには敵がいっぱい居るので油断はできない。後ろに居たクラスメイト達の事もあるし、防衛網を構築しないと奪い返されるかもしれない。

「……ここは鈴が結界を張るから、二人は敵を排除して！」

「わかった」

「はい。任せてくださいー！」

ユーリは即座にパイロシユーターを放ち、スケルトンを排除してくれる。それを見たクラスメイト達も谷口を中心としてスケルトンの排除に協力してくれたので、どうにかなりそうだ。

階段前の確保はユーリと谷口に任せて前の方へと視線をやると、栗毛に切れ目が特徴のクラスメイトの一人、園部優花がスケルトンに襲われて地面に押し倒されていた。今にも剣が振り下ろされそうなので、俺の身体を割り込ませて起動状態にしたストレンジデバイスの剣で受け止める。柄と剣の腹に手をあてて両手でなんとか耐えるが、腕がぶるぶるしだしているので長くは持たない。

「園部、立って急いで逃げろ！ 長くは持たないからな！」

「沙条……」

「早く行け！」

「う、うん。沙条、ありがとう！」

さて、どうするかと思っていたら、横から別のスケルトンがやってきて剣を突き刺そうとしてきているのが見えた。やっぱかつこつけるべきではなかったか。

「私のお兄ちゃんに何をしようとしているんですか？」

その声が聞こえると同時にスケルトンが一体、小さな足で蹴り飛ばされて周りを巻き込んで倒れる。もう一体は炎によって燃やされていく。蹴りを放った子は立ち上がり、金色の可愛い瞳から冷たいエメラルドグリーンの瞳へと変化させ、周りに炎の翼を展開している。

そして、次々と炎弾を放って薙ぎ払っていつている姿はまさに魔法少女リリカルなのはの魔導師だ。

「ユーリ、助かった」

「何をしているんですか、お兄ちゃんは……早く下がってください。後でお説教ですからね」

「ああ。それでどれだけ持つ？」

「もうすぐ切れます」

「わかった」

ベルトを外してバッテリーをユーリに渡し、狩らせまくる。炎の翼から放たれる無数の魔法弾がスケルトンを纏めて排除していく。

ユーリが攻撃している間に後ろに撤退するが、どこも混戦状態だ。前の方を見ると結界が破られ、ハジメが錬成で足止めしている。

「援護するねー!」

そのタイミングで谷口が空気を奪う結界を展開してベヒモスを弱体化させていく。ただ、ベヒモスの一撃を受けたら結界は簡単に壊れるだろう。

天之河達がハジメに何か言われてこちらへと突撃してくる。これで少なくとも雑魚はどうにかなるか。問題はベヒモスだ。討伐するには……一か八かだが、いけるか？

考えている間に天之河達がやってきてスケルトンを一掃してくれた。これでスケルトンの脅威は排除できたので、階段前の安全はひとまず大丈夫だ。

「無事か」

声に前を見ると、メルド団長が白崎を抱えてやってきた。前ではまだハジメが頑張っているから、攻撃して撤退の援護をしないとイケないが……これはもしかしたらいけるかもしれない。

「全員、バッテリーは何個余っている?」

「どうしたんだ?」

「数さえあれば倒せるかもしれません」

「本当か!」

「はい。まず、バッテリーを爆弾の状態に変えてからハジメが足止めし、爆弾を投げ込んだところで谷口が結界を展開します。爆発で仕留めきれずにいたとしても、遠距離攻撃で傷口を狙えば倒せると思います」

「よし、やってみよう」

「はい」

全員からバッテリーを受け取り、ユーリと一緒に運ぶ。谷口は遠距

離から結界を展開できるので入口で待機だ。

「ハジメ、作戦を説明する」

作戦を説明するとすぐに理解してくれた。まあ、ゲームやアニメでよくある方法だ。

「もう時間がない！ はやくお願い！」

「わかった。ユーリ！」

「はい。最後の魔力で強化して投げます！」

安全装置を解除してユーリに渡し、次々と投げ込んでもらう。起爆時間まで多少の余裕がある。持ってきた全てを投げ込み、急いで逃げる。

「この速度では間に合いません。失礼しますね」

「ちよ!?!」

俺達はユーリに捕まれて引きずられるようにして高速で橋を移動する。そのタイミングで目の前にころころとバッテリーが走っている橋の上に転がってくる。安全装置が解除された状態で。

「っ!?!」

瞬時に反応したユーリは俺達を全力で順番に階段の方に投擲した。その瞬間、バッテリーは起爆して他のを巻き込んで連鎖爆発が起ころ。俺達の前に転がってきたのも同じだ。

「……私は……大丈夫、です……」

爆発の中、ユーリの声が聞こえた気がしたが、爆発に巻き込まれてその姿は一切見えない。

「ユーリイイイイイッ！」

ユーリの姿を探しながらも、俺とハジメは何度もバウンドし、最初に投げられた俺は無事に階段まで到着し、次に投げられたハジメは距離が届かずに橋の途中で止まった。ハジメが急いで立ち上がった走ってくるが、ユーリの事で頭がいっぱいになつて考えがまとまらない。

「くそっ、ベヒモスはまだ生きている！ 全員、遠距離攻撃で仕留めろ！ 嬢ちゃんの犠牲を無駄にするな！ なんとしても南雲を助けるぞ！」

無数の放たれた攻撃はベヒモスに着弾して悲鳴をあげさせる。

「二発目を放て！」

二発目が放たれた瞬間、炎の魔法がハジメの目の前に命中し、橋を破壊する。同時にベヒモスも倒され、呆然としていると白崎の悲鳴が聞こえる。

「南雲君！ 南雲君！ いやあああああああああああああああ
あああああつ!!」

皆の視線が白崎に集まっている中、ふと爆発に巻き込まれて居なくなつたはずのユーリがデバイスから幻影のようにチビットで現れる。チビットのユーリが何かを伝えるかのように中村を指さす。同時にユーリがしきりに中村の事を気にして警戒していた事を思いだした。

彼女を見ていると、にやりと何かを企んでいるかのように微かに笑った。

その瞬間。無数のスケルトン達が現れて襲い掛かってくる。ハジメが落ちたことで呆然としていた中での襲撃。それによって皆は大混乱に陥る。

俺は慌てて中村と谷口を探すと、二人が端っこの方で追い詰められている姿を発見した。中村が谷口を庇っているように見えるが、彼女の天職は降霊術師だ。スケルトン達を操るにはもってこいの能力だったはずだ。

だからこそ、谷口の元へ一生懸命に痛い身体を我慢して走る。すると中村が無防備に振り返って谷口を崖へと押す姿が目に入ってきた。谷口は落下する時に両手を伸ばしてなんとか崖の端を掴む事ができて耐えた。その谷口を助けようとしやがんだ中村と谷口の声が聞こえてくる。

「恵里、なんで……」

「光輝君を馬鹿にして貶して傷つけたでしょ？」

「な、なにを言っているの？ そ、それだけで鈴を……」

「そう、殺すの。さようなら。ばいばい。友達ごっこは最低で最悪だったよ」

「あああああああああああああああつ！」

中村が谷口に何かをして谷口が叫び声を上げながら落ちていった。その光景に沸々と怒りが湧いてくる。谷口は友達だし、ハジメも失った。それにコイツはユーリが命を賭けてまで助けてくれたというのに、それを無駄にしゃがった。そんなのは許せない。絶対に許しちやいけない！

「ふふ、これで邪魔者はいなくなった……」

「なら、お前もいなくなれっ！」

「え？」

スケルトンごとタツクルを決めて悦に浸っていた中村を突き落とす。俺も一緒に落ちるが気にしない。どうせ、もうユーリは居ないのだ。だったら、こんな世界で生きる必要はない。ガチャでまた引けるかもしれないが、それはもう別のユーリだ。俺と一緒にいてくれたユーリじゃない。

「なっ、なああああつ！ お前えええええええええええええつ！」

「因果応報だ！」

落ちたタイミングが同じだと落ちる速度も同じだから追い付くのは難しい。

だが、どうせなら谷口には色々と迷惑をかけたからクッションくらいにはなつてやろうと思う。

「ちよっ！」

中村を掴んで上に放り投げる。これにより落下速度が上がリ、どうか谷口が見える場所まで追いつく。

「結界を足場にして展開しろ！ それで衝撃が和らぐ！」

「っ！」

命令すると、反射的に谷口が結界を展開する。それによって速度が緩和されて追いつく事ができた。震える彼女を抱き寄せて俺が下になる。何度も障壁に身体がぶつかる痛みを感じていると、中村も追いついてくる。

「恵里！」

咄嗟なのか谷口が中村の手を掴んで引き寄せた。本当に谷口もお

人好しだな。そう思っているとその衝撃で意識を失った。

「あれ、私の予定が変わった？ でもいいわ。邪魔者は一時機能停止。絆を結んだ枷があるのだから、どうせ貴方は呼ぶでしょう？ それなら私の計画に変更はない。早く会いたい……早く会いたい、早く会いたい！ 私だけの王子様！」

第9話

身体を襲う痛みで目が覚める。目を見開くと暗い天井が見えた。頭を動かして視線を横にやれば鈴の下に沙条君がいる事がわかった。沙条君に抱きしめられていて、落下の衝撃から助かったみたい。周りにはいつの間にか展開したのか、結界が張られている。

沙条君の腕から抜け出して、すぐに沙条君に手を充てて観察すると生きているのがわかる。沙条君の身体を至近距離で見ると、身体中に擦り傷があつた。それなのに鈴の身体に傷は少ない。

「良かったよぉ〜」

ユーリちゃんが死んで沙条君まで居なくなるのは凄く悲しい。座り込んで泣いていると、少し離れた場所で音がした。ビクツと身体が震える。暗闇の中で凄く心細いけれど、今は鈴が確認するしかない。ここはオルクス大迷宮の中で、とてもじゃないけれど鈴達が活動できる階層じゃないはずだから。

「それに恵里を探さないと……」

沙条君の周りに結界を張ってから、音のした方へおっかなびっくりぬかるんでいる地面を移動すると、物陰に恵里が背中を岩に預けて座り込んでいた。

「恵里っ！」

「鈴……生きてたんだ。まあ、それも当然か」

「どういう、事？」

「僕は落ちている途中で壁に無数の穴があつたの。そこから鉄砲水が滝のようにでていた。その中の一つに押し流されてここまでやってきたの。鈴の結界が無かつたら死んでたわね」

「確かに鈴は無意識で結界を張ってたかも」

「まあ、もしかしたらこの迷宮が落ちても死なないように色々細工されていた可能性もあるけれどね」

「そうなんだ。やっぱり恵里は賢いね。鈴にはそんな事わかんないよ」

ニコニコと笑いながら、恵里に近付く。すると恵里は鈴に杖を向け

てきた。

「いい加減にして！ 僕が鈴に何をしたのかわかっているの？」

「うん。鈴を騙して恵里がここに突き落とされたよね？」

「それを理解していながら、なんで僕を助けたのよ……僕は鈴を殺そうとしたのよ？」

「何を言っているの？ 友達を助けるのに理由はいらないよ？」

「本気で言っているの？ だいたい、僕は……」

「友達ごっこって言ってたよね。凄く傷ついた。でも、鈴が傷ついたのは鈴が思いこんで本当の恵里を見ていなかったから。自分の事だって私から僕が変わってる。そっちが恵里の本性なんだよね？」

「そうだよ。僕の本来の性格は利己的で残忍な外道だよ。だから、僕の天職は降霊術師なんだ」

「そっか。でも、恵里がどう思っているかなんて鈴には関係ないよ。鈴は恵里の事を友達だと思っているし、鈴がやりたいようにやるの。沙条君達からそう学んだよ？ そうじゃないとどんどん仕事が増えて、難易度が上がって寝れなくなるの！」

「鈴の勝手な思いを押し付けないで！ 何も知らないくせに！」

確かにそうだけど、今は次のチャンスがあるかもわからない。ここを逃したら恵里は鈴から離れていく気がする。離れていくにしても、ちゃんと話して納得してからがいい。だから、お話をしてそれでも恵里が嫌なら、鈴は悲しいけれど納得する。天之河君みたいに人の話を一切聞かないような人にはなりたくないしね。

「うん。そうだね。意思を否定されるのは嫌だし、鈴は確かに本当の恵里の事を知らないよね。だから、お話しよ？ 例え恵里が逃げても追いかけてお話しするよ？ 鈴は改めて恵里のお友達になりたいからね！」

「悪魔か……」

「うん。悪魔でもいいよ？ だから、悪魔らしい方法で聞いてもらうの」

鈴が恵里の周りに結界を展開して逃げられないようにして、至近距離へと移動してから正座する。

「さあ、お話ししよう！ 話してくれるまでずっと待つよ！」

「はあ……本当に聞くつもり？ 言っておくけれど、光輝に近づくために鈴を騙して親友になったんだからね」

「うん。それでも聞くよ。鈴達はもう少ししたらここで死んじやうかもしれない。だから、後悔の無いようにしておきたいの……一生のお願い！」

「まったく、それが一生のお願いって……」

「駄目？」

「いいわよ。話してあげる。僕が一番記憶に残っているのはお父さんが死ぬ光景だよ。五歳の時にね。公園で遊んでいて、気が付いたら車道に飛び出していたの」

「それって……」

「うん。悪魔的なタイミングで突っ込んで来た自動車から僕を庇ったお父さんが死んだっていう探せばどこにでもあるありふれた事故だよ」

それから恵里が話してくれる。事故の後、お母さんの態度だった。恵里のお母さんは、流石に人前では控えたものの家に帰り二人きりになると事故の原因を作った幼い恵里を憎しみのままに責め立てたらしい。

「お母さんは少しいいところのお嬢様だったの。お父さんとは家の反対を押し切って結婚して、幼心にも恥ずかしくなるくらいべったりだったんだよ。だから、こうなるのは仕方がなかった。だって、お母さんが僕を愛していたのはお父さんの娘だからという理由だけだったんだ」

「恵里……」

「毎日のように行われる暴力を振るわれながら、僕のせいでお父さんが死んだと言われ続けた。確かにその通りだし、自分の不注意が父親を殺したんだから、お母さんに言われるまでもなく誰よりも、そう信じていた。だから、お母さんに僕なんか生まれてこない方が良かった。と、言われた時は思わず納得したよ。そんな日々にはたすら耐えた。何時か、罰が終わったら優しいお母さんに戻ってくれと信じて

いたから。でも、違った」

「ど、どうなったの？」

「お母さんはある日、家に知らない男を連れて来たの。ガラが悪く、横柄な態度の屑野郎。その男に甘ったるい猫なで声を発しながらべつたりとしなだれかかっていく姿を見せられたんだ。」

あの時は自分の眼を疑ったよ。だって、信じられなかったんだ。お父さんを心の底から愛していたからこそ、自分にあれだけの怒りと憎しみをぶつけていたはずだったのに。しかもそいつ、幼い僕に性的な目を向けてくるんだよ？　ちようどユーリちゃんみたいな年齢か少し上の時かな」

「うっ」

ユーリちゃんは平気そうだけど、たまに沙条君もそういう感じで見ている気がする。そう思うと恵里と沙条君の相性は最悪なのかな？

「屑野郎が家に住むようになって、毎日身体を這い回るような気持ち悪い視線にさらされながら、今まで以上に息を殺すようにして過ごしたんだ。それでも、アイツの言動は徐々にエスカレートしてきたから、僕は自分を『僕』と呼び、髪を乱暴なショートカットにしたの。女の子として見られなければいいと思っただけれど、それでもアイツはお母さんが夜勤の時に襲ってきたの。幸い、何時襲われても悲鳴を上げて助けが来てもらえるように備えていたから助かった」

「凄いな。鈴だとそんな事できないよ。そのまま襲われてたかも」

「僕がこんな性格になったのは間違いなくアイツ等の影響だね」

「それで警察に逮捕されてめでたしめでたしになったの？」

「そうなれば良かったんだけど、結果は最悪だった。お母さんは僕が誘惑したと言って暴力を振るってきたんだ。お母さんにとって、僕は自分の男を奪っていく憎い泥棒猫でしかなかったの。にや〜ってね」

「恵里……」

不謹慎にも恵里のにや〜が可愛いと思った。こんな時なのに。ごめんなさい。

「こんな事があって、母は僕を絶対に愛さない。昔の優しい母に二度

と戻らない。昔の穏やかな姿ではなく、眼前の醜さに溢れた姿こそが、母の本性だと理解した。だから、僕はこの時に壊れたんだ。鈴、知ってる？ 夢や希望がなくなった子供がどうするか……」

「まさか……」

「お母さんの傍で死にたくなかったから、ふらふらと歩いて大きな川をみつけたの。そこで死のうとした時に光輝君が声をかけてきたんだ」

「それで？」

「その時、光輝君が無理矢理僕から話を聞き出した。今の鈴みたいにね」

「一緒にしてほしくないけど、否定はできないや」

「ふん。それで言ってくれたんだ。——もう一人じゃない。俺が恵里を守ってやる」

「ちよ、それって……」

全然守れてないよね！ 凄く病んでるよ！

「心の底で、ずっと誰かからの愛情を求め続けた幼い僕にとって、友達まで作ってくれた光輝君はまさに白馬に乗った王子様だった。僕だけの王子様……でも違った。光輝君にはすでに特別がいて、僕はその他大勢の一人だった。他のクラスメイトだって、光輝君に言われたから話しかけてきただけ。結局、僕の居場所はなかった。ねえ、鈴……」

「な、なに？」

「おかしいよね？」

光輝君はもう一人じゃないって言ってくれたのにね？

光輝君は守ってくれるっていったのにね？

僕は光輝君の特別だよね？

ねえ、どうして同じ言葉を僕以外のその他大勢にも言っているのかな？

ねえ、どうして、僕だけを見てくれないのかな？

ねえ、どうして、今、こんなに苦しいのに助けてくれないのかな？

ねえ、どうして、他の女にそんな顔を向けるのかな？

「残念でした！ 鈴はかおりんの友達になって、そこで恵里を紹介されたんだもん！ だいたい、話しかけるように言われたからって、それってあくまでもきっかけでしかないんだよ！ それからずっと友達として、親友として過ごしたのは鈴の意思なんだから、恵里にだって否定は絶対にさせないからね！」

「嘘！ 嘘よ！ だって、鈴は僕の事を渾名で呼ばないじゃないか！

香織や雫みみたいに！」

「それは恵里が嫌だって言ったからだよ！」

「あれ？ そうだった？」

「うん。えりりんって言ったら、中学生の時に止めてくれて泣きながらお願いされたの。だから、名前で呼ぶようにしているんだよ？」

「そう……だった。うん、確かに。だってえりりんなんて名前はない」

「えく可愛いと思うのにく」

「小学生ならともかく中学生でそれはない」

鈴が不貞腐されて頬っぺたを膨らませると、恵里が笑ってくれた。

「なんだ。馬鹿みたい。僕って空回りばかりしてたんだ」

「そうだよ？ だから、友達に……ううん、親友に戻ろう？」

「駄目だよ」

「なんで？」

「もう引き返せないんだ」

「どういうこと？ 確かにここから生きて帰れる可能性は低いけれど……」

「それもあるけれど、僕はユーリを殺した」

「え？ 恵里？」

ユーリちゃんを殺した？ 何を言っているの？ アレは爆発で

……

「ずっと僕を警戒して監視していた邪魔な彼女を沙条君と南雲君、二人も纏めて始末するために残しておいたバッテリーを置いておいて、あそこに居た骨のモンスターを操って橋に投げ込ませた」

「でも、あの時は始末していたはず……」

「うん。だから、僕が呼び戻して死体の、骨の山に隠しておいた。結果

は見ての通り、ユーリは死んであの二人は助かった。これ以外にも色々やったよ？ 例えば鈴のお菓子を盗んだのだから僕だよ。鈴の評判を落として、殺した後でも問題なく周りを操れるようにしたの」

「え？ でもしずしずとずっと一緒にいたって……」

「死体を操れるんだよ？ 偽メイドを作ったり、霊を憑依して操らせることだってできるんだ。本当は鈴が寝ている間に霊を憑依させてやろうと思ったけれど、常に香織か誰かがついていたらできなかった」

「お菓子を盗んだのは恵里の暗躍！」

「他にも買物デートをばらして四人にヘイトを集めて、檜山が南雲を殺すように誘導もした」

「うわあ、うわあ〜」

でるわでるわの暗躍内容。元の世界でもかなり色々やって恵里の邪魔になりそうな女子達を排除していたみたい。

「それで最後に鈴を殺そうとした。沙条に妨害されて僕まで落ちて結局は死ぬだろうけどね。わかったでしょ？ もう遅いんだよ」

「遅いって誰が決めたの？」

「え？」

「我儘になった鈴を舐めないで。その程度、受け入れてあげる！ だから、改めて親友になろう？」

「……ばっかじゃないの！ ありえないんだけど！ どこの世界に自分を殺そうとした奴と親友になる奴がいるのよ！」

「ここにいますよ！」

「阿保らし……わかった。親友になってあげてもいい。でも、これだけは答えて」

「何？」

「結婚したりして結局、僕の居場所じゃなくなるよ？ それとも鈴は一生、僕と一緒に居てくれるの？ それならなってあげてもいいけど」

「うっ……それは無理かな。鈴も結婚して子供が欲しいとは思っし」

「ほら、無理じゃない」

「そこは前向きに考えようよ。もしかしたらいい方法があるかもしれないし！」

「まあ、保留にしてあげ——っ!？」

「恵里？」

恵里が鈴を突き飛ばした。不思議がつっていると、突き飛ばした恵里の腕が緑色の光をした円形の刃で鈴の結界ごと斬り落とされた。

「あつ、ぐうううっ！」

「恵里！」

「いいから逃げて！」

「嫌！」

急いで結界を展開し、恵里の傷口にも結界を展開して止血する。そして、襲撃してきた奴を探すと、そこに奴はいた。2メートルを超え、白い毛皮の巨大な熊。爪は緑色に光っている。どう見てもやばい存在で、鈴達ではかないっこない。

「鈴が足止めするから、恵里は逃げて沙条君に伝えて二人でできるだけ生き残って」

「駄目。残るなら僕が残る！」

「それこそ駄目だよ。引き留める適任は鈴だよ。だから、お願い……」

「鈴っ！」

鈴は走って結界を熊に展開する。相手は軽く腕を振っただけで結界を破壊してきた。だから、何枚も展開して、こちらに引き寄せてできる限り逃げる。でも、熊はまた緑の環を恵里に放つ。急いで障壁を展開して二つはどうか軌道を変えたけれど、一つは恵里の片足を切断した。

すぐに止血の結界を展開した後、熊に石を投げつけてから逃げる。熊は恵里を一瞥した後、すぐにこちらへと追ってきてゆつくりと距離を縮めていく。まるで黴って遊んでいるみたい。でも、それでいい。そのまま逃げるけれど、何度も何度も障壁や結界を展開して魔力は底をついて限界がきた。それに壁際に追い詰められていて、もう逃げ場はない。それなのに熊は油断なく、まるでこの場からでも逃げられ

るんだろうというかのようには何時でも攻撃できるようにしながら接近してきた。

背中を壁に預けながら、鈴は座り込む。近付いてくる熊の怖さに思わず漏らしてしまう。でも、どうせ死ぬんだから、もうこれでいいか。最後に恵里と親友に戻りたかったけれど。

「え？」

そう思っただけ目を瞑ったら、熊は鈴を掴んで持ち上げた。そして、足から口にいれてがぶりと噛みついた。最初は痛くて、次に熱くて、寒くなつていく。

「やっ、やめてっ、やめてええっ！ あっ、ああっ、あぎいいいいっ!!
痛い痛い痛いいいいいっ！ いやあああっ！」

余りの痛みと恐怖。それにわざといたぶるようにゆつくりと下から食べられる恐怖に鈴は悲鳴を上げ続けるしかない――



「やっ、やめてっ、やめてええっ！ あっ、ああっ、あぎいいいいっ!!
痛い痛い痛いいいいいっ！ いやあああっ！」

谷口の悲鳴で意識が覚醒する。身体中が痛いのを我慢して目を見開くと、周りがほとんど何も見えない。どうにか手探りで探すと、デバイスの残骸がみつかった。

もうチビットのユーリもない。それでも断続的に聞こえてくる谷口の悲鳴を頼りに移動する。やけになった中村が谷口に手を出し

た可能性がないでもない。

声が聞こえた方へと移動すると、中村が地面を這いずっている姿がみえた。暗い中で地面を片手を使って必死の形相で這いずっている。彼女の片手と片足がそれぞれ一つずつ無かった。

「っ！」

こちらへ気付いた中村が必死に見詰めてくる。彼女は進んできた方を向く。おそらく、この先に谷口が居るのだろう。

中村の姿からろくでもない事が起こっているのは確かだ。襲っているのは中村ではなく、モンスターだったのがある意味では幸いかもしれない。

「沙条！　お願い、助けて……」

「断る。お前は何をしたのかわかっているのか？」

「わかっている！　だから僕じゃない！　鈴を助けて！」

「お前が殺そうとしたんだろう？」

「それでも、頼むから鈴を助けて！　僕にできる事ならなんだってする！　奴隷にだってなるし身体だってあげる！　だから、だから僕のもの、本当の居場所になってくれる鈴を助けて！　罨じゃないかって疑うのもわかる！　それでもお願い！」

必死に頭を地面に擦りつけてお願いしてくる中村の姿を見る限り、嘘を言っているようには感じない。

「嘘じゃないだろうな？　なんでもしてくれるのか？」

「当たり前だ！　本当になんでもしてやる！」

「そうか。なら、その依頼を受けてやる。ギブアンドテイクだ」

「ありがとう……」

中村を抱き起して急いで移動する。その先は地獄だった。



急いで駆け付けると、そこには白い毛皮で、2メートルを超える巨

軀の熊のようなモンスターが存在した。足元まで伸びる長い腕で谷口を持ち上げて足からゆつくりと食べていた。

悲鳴を上げている谷口の表情は苦痛と絶望に塗れていて、食べられながらも泣きながら障壁を何度も張ってなんとか出血を防いでいる。だが、熊のような奴はなんでもないかののように気にせず破壊している。そもそもこのような状況ではまともな障壁を展開できない。

熊は谷口を楽しそうにみつめながら、ゆつくりとゆつくりと時間をかけながら食べている。まるで憂さ晴らしをするかのようにだ。

「ああ、くそっ！」

どう見ても勝てない。谷口の障壁や結界を紙のように切り裂き、破るような化け物だ。普通の方法では勝ち目がない。だったらやるしかないだろう。起死回生に賭けるしかない。

スマホを確認すると召喚キャパシティが上昇していた。レベルが6ほど上昇しているから、キャパシティも増えたのだろう。

今のキャパシティは10/70で、ユーリの召喚が継続されているのがわかる。ユーリを再召喚して倒す事はできない。

ユーリの部分は次に召喚までの可能な時間がかかっているし、そもそもユーリの実力なら瞬殺される。もうどうしようもない。

「どうにか、できそう？」

「やるだけはやってみるが、期待はするなよ」

「期待するよ」

無茶を言ってくる中村に何かを言ってやりたいが、どう考えても召喚ガチャに賭けるしかない。やはり最後に頼るのはガチャだ。分の悪い賭けになるが、それしかない。更に間が悪い事にガチャにできる金はほぼ全て地上だし、魔力はまったく足りない。それでも谷口を助けるためにはやるしかない。ここに至っては俺にやれる事はたったの一つだ。

「発動。サクリファイス」

ガチャで手に入れたスキル・サクリファイスを使用する。サクリファイスは低ランクのせいで俺自身しか代償を支払えない。だから、支払う代償は俺が生存できる最低限の物以外だ。どうせこのまま死

ぬのなら、男らしく女の為に使うというのも悪くない。

「代償は恐怖、痛覚、味覚、一つ肺、片目、片腕、脂肪！」

指定した部分が赤く光り、次の瞬間には激痛が襲い掛かってくる。片方の視界が完全に消滅して真っ黒になり、腕もなくなった。代わりに強大な魔力を生み出す事に成功した。

「沙条、それは……」

「無傷で勝てるわけないからな。それよりも、中村は降霊術師だよな？」

「そうだよ。それがどうしたの？」

「なら手伝え。王子様二人でお姫様を助けてやるぞ」

「乗った！ 何をすればいい？」

「痛いが我慢しろ。それと俺に続いて詠唱しろ！」

「わかった！」

中村と身体をくっつけ、互いに無くなった腕を合わせて傷口を接触させる。本当は粘膜接触でもいいから、キスとかでもいいが、ここは血と肉で代用する。詠唱をしないといけないからだ。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

中村が痛みに我慢しながら同じ呪文を唱える。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する——

Anfang

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する——

Anfang

次第に詠唱がシンクロして同時になる。

「誓いを此処に。我は常世総ての善となる者、我は常世総ての悪を敷く者」

この熊に勝てるサーヴァントなら誰でもいい。いや、勝てる存在な

ら例えモリアーティ教授ですら許容する。だから――

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――」

――谷口を、鈴を助けられる奴を寄越せ！

――鈴を、親友を助けられる奴を寄越せ！

召喚魔法が起動し、ガチャが始まる。熊はこちらに気付いて振り変える。その手に握られた谷口はボロボロだ。何時死んでもおかしくない。

しかし、神様は絶望しかくれない。サクリファイスを発動してもゴミアイテムしか召喚されない。嫌がらせのようにC黒剣*5、Cまるごしシンジ君*5、C桜の特製弁当*4、SRスキル・魂喰い*1、Rスキル・優雅たれ*1、N小石*15、C謎の仮面*7、Cただの布*6、R騎士剣*1、R若返りの霊薬*2……そして、ラスト。虹にはならず絶望した。最後はSR血塗れの拷問日記だった。全てが終わったかと思つた瞬間、景色が止まった。

世界は灰色に代わり、迫つてきていた熊の爪はすぐ近くにある。不思議に思つて隣を見ると、中村も絶望した表情で止まっている。

「あれ？　自分の身体を捧げれば願いを叶えるとか、そんなふわふわした幻想を本気で信じていたの？」

声が聞こえて振り返る。そこには金色の綺麗な髪の毛はショートにし、綺麗な翡翠の瞳は俺を見ている。服装は薄い黄緑のワンピースに白いフリルがあしらわれた可愛らしい恰好をした純粹無垢で無邪気な少女が座っている。それも無数の死体でできた山の上なのだ。

残酷な所業を平然とやってのけている魔術師然とした少女であり、『Fate／Prototype』の黒幕にして、前日譚『蒼銀のフラグメンツ』の主人公。

産まれながらにして根源に接続していて、恋を知って少女となつてしまった全能。決して全能の少女ではなく、あらゆる全てが可能で、あらゆる全ての事象を知り、あらゆる全てを認識する機能を持つ、文字通りの全知全能。

魔術結界などを無視した空間転移、単独でサーヴァントすら倒せる戦闘能力、並行世界への干渉など、あらゆる事が可能だが、自分に関わる未来を見ることは意図的に避けている。

また根源には接続しているものの魔術回路の本数自体は少なく出力には制限があるのが救いと言われている、

本当にガチでヤバイ奴だ。

「沙条、愛歌……」

「そうよ、沙条真名」

「召喚、できたのか？」

「違うわ。私が貴方如きに召喚できるとでも？」

「無理だな」

ペろりと、血がついた指を舐め取る沙条愛歌。その姿は神秘的だ。

「同じ名前のおよしみとして私と契約しない？ そうしたら助けてあげる」

「契約か？ 助けてくれるのか？」

「いいえ。私は力を上げるだけ。助かるかどうかはあなた次第」

「何が望みなんだ？ 俺に支払える事は……いや、あるな。アーサー・ペンドラゴン。それもプロトタイプか」

「ええ。貴方が代価として支払うのはアーサーを召喚して私に引き渡す事。もしくは……」

「もしくは？」

「貴方が私の王子様になるか、よ」

「俺が王子様に？」

「理想はもちろん、アーサーよ。だから、そうなるように育てるのもいいと思うの」

「ちなみにユーリ達はどうか？」

「私だけの王子様に他の女はいらないの。だから、殺すわ。いえ、もつたいないから生贄にしましょうか？」

やばい。沙条愛歌に勝てる奴はユーリの全力くらいか？ それでも勝てる可能性がある程度だ。

「アーサーを渡す方向で前向きに検討したいが、召喚できるかは運だ。

ガチャの結果だつて見渡せるのか？」

「無理よ。本当の私ならともかく、今の私は皮と力を似せた紛い物。だから、同じく紛い物の王子様で我慢してもいいと思っているの」
「そういうことか」

「でも、安心して。私だつて運が絡んでいる事はわかっているの。だから、私を楽しませてくれるだけでもいいわ。たまに身体を貸してくれるだけでもいいし。ただ、アーサーが出たら絶対にもらうわ。あなたが私だけの物として過ごすのなら別にいいのだけれど」

者じゃなくて、物だろうな。感覚的に。

「身体を貸すというのはいいが、他の者に迷惑をかけないのならいい。もちろん、自衛行動を除く場合だが……」

「それでいいわ」

「よし、アーサーを渡すので力を貸してくれ。できるだけ楽しめるように協力する」

すまないアーサー。だが、沙条愛歌がこうなった原因はお前にもある。責任を果たしてくれ。俺は嫌だ。普通に受け入れてくれるのならしいが、アーサーのような感じにされるのは俺が俺でなくなる。かといって、力を借りないところで死ぬ。俺だけならまだしも、谷口や中村も死ぬからな。

「いいでしょう。じゃあ、私の力を貸してあげる」

「ふふ、これで俺も戦える」

「無理よ」

「え？ 力をくれるんだよな？ 沙条愛歌といえば全知全能……」

「そうね。でも無理よ。貴方は召喚以外の適正は一切ないの。例えば銃を撃つても相手は掠り傷を負う程度。これは剣でも同じよ。致命的に他の才能はないわ。ただ、召喚する器としては素晴らしいほど特化しているわ。もつとも、魔力がろくにないからただの器でしかないけれど」

「なん、だと……」

「最弱だから、そこら辺のモンスターに簡単に殺されるわ。もつとも、召喚士としては何も間違っていないのだけれど。藤丸立香みたいに。

まあ、彼女の場合は魔術礼装とかで戦えるけれど、あなたは無理よ。だって、才能がマイナスなもの。契約する器だけは広いただの入れ物よ」

「くそおー」

「それで、どうするの？　すぐに行動しないと二人が死ぬわよ？　それともアンデットにして操る？　それはそれで面白いでしょうけれど」

「すぐに助けてくれ」

「契約成立。こういう場合は……そうね。私と契約して魔法少女に……いえ、召喚機になってみない？」

「答えはYesだ。ちくしょうめっ！」

答えた瞬間、胸を貫かれて彼女が俺の中へと入ってくる。そして、肉体が作り変えられる気持ち悪い感覚が襲ってくる。

次の瞬間。視界の色が元に戻り、時間が動き出す。同時に身体から馬鹿みたいな魔力が溢れてくる。ご都合主義のようでご都合主義ではない。ただの空売りをしただけだ。沙条愛歌という化け物に取り立てられていく人生が始まる。

「ああ、それでも……いい」

ガチャを回せて二人が生き残るのなら、安い買い物だろう。そして、ただのノーマルで小石だった無価値な物が巻き戻るかのように渦が現れ、その中から光が溢れ出してきた一瞬で虹色が混ざった光の塊へと変化していく。そして、それが弾けた瞬間、声が聞こえてきた――

「わっはっは！　わーはっはっは！　来たよ来たよついに来たとも！　クラス、セイバー！　アストルフォー！　ホントホント、ホントに最優のセイバーだってば！　何だったら出るところ出てもいいから！　コホン。ともかくよろしくね、親愛なるマスター！　引かれたのにずっと待ちぼうけだったんだから、活躍するよ！　それに男気を見せて

てもらったからね！ ボクこそがキミの剣だ（たぶん）。とりあえず、アストルフオ・セイバーここに推参！」

——虹色の光の塊から出てきたのはピンク色の髪の毛にうさ耳をつけた美少女。しかもメイド服を着た状態。沙条愛歌ブーストがかかっているのだろう。まあ、第二はともかく初期は痴女……いや、男だから別の物になるか。そう、アストルフオは美少女でも男である。つまり、男の娘という奴だ。

「この子、勝てるの？」

「たぶん！」

「アストルフオ、谷口を助けてくれ！」

「任せて！ といっても、ボクの剣技が通じると良いんだけど……大丈夫かな、大丈夫だろ！」

突撃したアストルフオは熊の放つ緑色の環を剣で斬り落とし、接近したところで斬ろうとする。しかし、熊は谷口を盾にしてくる。

「うわわ！ 卑怯だぞ！ マスター、これ一人じゃ結構大変かも！」

アストルフオが慌てて下がり、熊の追撃を回避する。どうにかしないといけないが、召喚するための触媒と魔力は……いや、魔力はある。問題は触媒だ。使えそうなのはあるな。幸い、アストルフオの召喚キヤパシティーは100。つまり、オーバーしているが、愛歌から貰った魔力で代用しているので気にしないでいい。質だけはいいしな、愛歌様の。

「血塗れの拷問日記と魂喰いだ！」

「物騒な奴みたい？」

「これでいい！」

まだ愛歌ブーストが効いている間に召喚する。彼女が召喚されたら助ける事はできる！ 決してエリザベートとかはいらない。今は居られても困る。可愛いけどエリはいるのだ。

「来い。聖槍十三騎士団・黒円卓第八位。魔女の鉄槌ルサルカ・シュマレウス・マレフィカルムヴェーゲリン……いや、アンナ・マリーア・シュヴェーゲリン！」

魔法陣が起動して赤髪の学生服を着た少女が新たに召喚される。見た目は十代前半の美少女だが、ドイツ古代遺産継承局アーネンエル

べの初期メンバーであり、騎士団に入る前から魔道に傾倒していた生粋の魔女。ナチス時代からは最低でも生きています。

「やれやれ、まさかこの私を指定して召喚するなんてね。どう考えてもヴィルヘルムやシユピーネ。ムカつくけどメルクリウスとか、ハイドリヒ卿とか呼びだした方がいいわよ?」

「無理だ。絶対に無理」

「そう? まあ、いいけどね。それで、オーダーはこいつらの拷問でいいのかな?」

「いや、あの熊だけを頼む。それと他は全員味方だから危害を加えないでくれ」

アストルフオが十全に実力を発揮できたらなんの問題もないんだが、俺の実力が愛歌ブーストありで低すぎるのでかなりステータスダウンを受けているはずだ。

「兎さん。時間を稼いでくれるかしら?」

「任せて! シャルルマーニュ十二勇士の名に賭けて時間稼ぎくらいしてあげる!」

俺達の前に立ち、緑色の環を剣を振るって斬り落としていく。その間にルサルカが指を鳴らして服装を第二次世界大戦でドイツに使われていた親衛隊の制服へと魔術で変える。

「In der Nacht, wo alles schlief
Wieder, den Meeresboden zu verlassen

次の瞬間。ルサルカの周りに無数の赤色の文字列が複数の環となって実体化し、彼女の周りを周回する。同時にルサルカも楽しそうに踊り出す。

「Ich hebe den Kopf, ber das Wasser,
Welch Freude, das Spiel der Wasserwellen

目の前に巨大な赤色の魔法陣が現れ、無数の光を発していく。熊の方もルサルカが発する魔力と作り出した魔法陣を見て気付いたのか、すぐに攻撃をして詠唱を妨害しようとしてくる。

「させないって! 君の相手はボクだからね!」

緑色の環を斬り伏せ、接近したアストルフオ。その前に熊は鈴を置

いて盾にする。谷口が悲鳴を上げて目の前に迫る切っ先を見詰め、泣き叫ぶ。

「いやあああつ!!」

谷口に命中する直前、アストルフオが剣を引きながらその剣を解けさせて振るう。すると刃の部分が分裂し、ワイヤーで繋がれた等間隔に鞭のように変化して谷口を避けて熊の身体を軽く斬り裂くが倒せてはいない。

「硬いね!」

アストルフオの持つ剣は蛇腹剣だ。その元となったのはウルカヌスが自身の妻ウエヌスがマルスと浮気をした際にその現場をおさええた網だ。それを紆余曲折ありアストルフオが手に入れた。その網がアストルフオがセイバークラスに変化したさいに蛇腹剣へと変化した物だ。鈴さえいなければアストルフオでも倒せる。

「Durch die nunn zerbrochene Stille, Rufen wir unsere Namen 《澄める大気をふるわせて、互に高く呼びかわし》
Pechschwarzes Haar wirbelt im Wind
Welch Freude, sie trocken zu sehen!」

アストルフオを見ている間にルサルカが詠唱を完成させた。ルサルカが使用しているのは永劫破壊という魔術だ。永劫破壊という名称の由来は世界に渦巻く既知感、すなわち永劫回帰の法を破壊する為に編み出された事からだ。その効果は聖遺物を人間の手で取り扱うための魔術であり、その使用と発動には人間の魂が必要となる。この術を施された者は、魂の回収のために慢性的な殺人衝動に駆られるようになる代わりに、所持している聖遺物を破壊されない限りは不老不死となる。また、人を殺せば殺すほどに魂が聖遺物に回収され、感覚を含む身体能力や防御能力が向上していく。感覚能力も単純な五感の強化だけでなく、霊視による魂の識別や、テリトリーを拡大することで範囲内の人物の気配、呼吸、心音、精神状態の察知などができる。防御能力に関しては特に強化され、回収した魂の数に比例した霊的装甲を纏うことで肉体の耐久度が格段に向上するので、対人武器は最大

効率で使用しても一撃一殺が限度であるため、何千人もの魂を纏った肉体に傷一つ負わせられない。普通の人間が想像し得る破壊という意味においては、一発で何千人も殺せる武器でなければ話にならない。聖遺物とは人々から膨大な想念を浴び意志と力を得た器物を指す。その想念は種別を問わず、信仰心や怨念等、どのような形でも力を得れば聖遺物と呼べる物になる。ルサルカの場合はエリザベト・バートリーが綴った拷問日記となる。そして現在、ルサルカが使っているのは心の底から願う渴望をルールとする異界を作り出す能力だ。心の底から願うといつても、それは常識などを度外視した狂信の領域であることを要し、この領域に達したものは一見理的でも、根本的に常識とかけ離れた価値観、常識を持つ者が多い。

「創造Briah—
Csejte 拷問 Ungarn 城 Nachhatzehrer 食人影」

ルサルカの使役する影の怪物、ナハツエーラー食人影に停止能力を持たせたのが拷問城の食人影。追いつけないなら先に行く者の足を引っ張りたいたというルサルカの渴望を具現化したもので、影を踏んだ者の動きを完全に封じる。つまり踏んだら終わりだ。創造とは永劫破壊の第三位階。名称はBriah（ブリアー）であり、作中の登場人物の殆どが使うのがこれである。聖遺物を用いた戦闘における必殺技を使用可能になる位階である。この位階に達した術者は、心の底から願う渴望をルールとする異界を作り出す能力を得る。心の底から願うといつても、それは常識などを度外視した「狂信」領域であることを要し、この領域に達したものは一見理的でも、根本的に常識とかけ離れた価値観、常識を持つ者が多い。

ナハツエーラー食人影は己の影に他者の魂を込める事で影を怪物と化し、それを操作する魔術だ。ルサルカは永劫破壊エイツイヒカイトの魔術によつて殺した者の魂を自らに吸収して力を蓄え、その魂を食人影ナハツエーラーに変えているということだ。

「これ、ボクが当たったらどうなるのー！」

魔法陣から無数の闇が、影人が現れて熊へと襲い掛かっていく。多勢に無勢で谷口を盾にしようとも拷問城チエイテ・ハンガリア・ナハツエーラーの食人影は容赦なく谷口

にも触れる。その瞬間、谷口は停止した。後はもうルサルカ次第になる。

「そりゃ、止まるわよ」

「うん、ライダー殺しだね!」

「そのライダーがよくわからないけれど……はい、動きが止まったわよ。後は……」

「任せて! ウルカーノ・カリゴランテ 僥倖の拘引網! は、撃てないんだった! なら、ふつうにえい!」

熊に飛び乗り、口から剣を突き刺して喉や胃からズタズタにして始末するアストルフオ。もう大丈夫そうなので俺は中村を置いて飛び出す。谷口を助け出そうとするが、掴んでいる手が硬すぎる。

「じゃあ、ボクが外すね」

「私は非力だからパス」

「嘘だよな?」

「嘘だろうな」

ルサルカはステータス的にはアストルフオと同じか、それ以上だろう。なにせ喰らって蓄えている人数が千じゃ効かないはずだ。本人も大量虐殺による魂食いで反英雄とされてもおかしくない。軍隊が戦場に親衛隊の服を着た奴がいたら逃げろと言うぐらいだ。

「私は非力なの! いいわね!」

「はい! じゃあ、ボクがあけるね」

「鈴、大丈夫かな?」

アストルフオが元気に返事をして死後硬直が始まる前に開いていく。そのタイミングで中村も片足で器用に移動してきた。

「ルサルカ、頼む」

片腕で抱いた谷口をルサルカに見せる。谷口はルサルカの力によつて停止しているから、死にはしない。それよりも中村の方がやばいかもしれない。谷口が停止したので結界が解除されるからだ。

「はいはい。代金は高いわよ。出血多量による意識混濁かな」

「マスターを含めて全員が大概の大怪我だよ?」

「そうね。結界で止血してなかったらもう死んでいるわ。これだけの

事をされても結界を維持した根性……拷問してみたいかも♪」

冗談のように楽しい口調で言っているが、かなりの部分で本気だろう。だから、力を込めて言い聞かせる。

「やめてくれ。拷問する相手はいっぱい用意してやる」

「いいわ。私はいっぱい殺して拷問し、足を引つ張ればそれでいいから。私にとってこの世界はボーナスステージみたいなものなんだしね」

そう言って回収した熊の魂を消費し、魔術による回復を行ってくれるルサルカ。谷口達の傷は癒えて死ぬ事はなくなったように思えるが、足や腕の再生はできない。

「この二人はまあ、足と腕だから止血すればなんとか生きていけるけれど、問題はマスターね。身体のうちがちが抜けているわ。痛覚を消しているの?」

「痛覚と恐怖、味覚も代償に捧げた」

「そうになると、再生は無理ね。他の何かで代用するしかないけれど、このオルクス大迷宮だったかしら? まともな人が一人も居ない状態に加え、私達を使役するマスターがこれじゃあ、高確率で死ぬでしょうね」

「だよね。それは困る! ボクはもつと冒険したいしね! よし、決めた!」

「ん?」

「マスター、ボクと一つになろうか! マスターならわかるよね!

ジークフリートがジーク君にしたみたいにするんだ! ボクがマスターの身体になってあげる!」

「確かにそれがいいわね。私も手伝ってあげるわ」

ルサルカも乗り気のように、いやらしい笑みを浮かべている。絶対に碌な事にならない。

「え!」

「問答無用!」

アストルフオが俺に抱き着いてきて、そのまま身体の中に入ってきた。そして、ルサルカの魔術によって身体の中が急激に作り変えられ

ていく。愛歌にもされた感触がまたしてきた。こいつらは人の身体を玩具としか思っていないのかもしれない。いや、愛歌とルサルカはその通りだろう。アストルフオの場合は本当に俺のためだろうが、理性が飛んでいるので色々と思考がやばい。

『こんばんは！・ボクはシャルルマーニュ十二勇士のアストルフオ！

マスターの身体を守るために少しお邪魔するよ！』

『ええ、構わないわ。今、死なれたら興醒めなもの。どうせなら手伝ってあげるわ』

『わ〜い！』

こんな会話が聞こえる中、俺は意識を失った。嫌な予感しかしない。

第10話

ぴちやぴちやという音が聞こえ、柔らかくぬるぬるした物が口が入っている。気持ちの良い感触に目を開くと、目の前にルサルカの顔がある。どうやら、キスをされているようで何かが流し込まれている。

やばい。やばいやばい、怖くはないけれど、絶対にろくでもないのを流し込まれている。意識したら怨霊とっていいような人々の魂が流し込まれている。同時に身体の中に無理矢理空間を作り出されているみたいだ。

「よし、これで完了。後は若い人に任せるわね。じゃあね〜！」

ルサルカがそう言った瞬間。ルサルカがどろりと溶けて口から俺の中へと入ってきた。そのルサルカと共に作られた大量の魂と共に。いや、これでもおそらく少ないのだろう。ほとんど奴に奪われている可能性だってあるのだから。

「あいつら本当に好き勝手してくれる……」

発した声は俺の物ではなかった。しかし聞き覚えがある。不思議に思って頭を掴む。すると頭に兎の耳が生えていた。髪の毛を確認するとピンク色へと変化していた。そして、着ている服装がメイド服になっていた。

『ボクの身体を使ってマスターの無くなった部分を代用したんだ。でも、そのままだと戦えないから身体を作り変えたらしいよ？』

『ちゃんと元に戻るから、安心していいわよ』

アストルフオとルサルカの声が頭の中から聞こえてくる。

『身体操作は何時でもボクが貰えるから、マスターは気にせず好きにしていいからね』

待て。それってアストルフオがその気になったら何時でも暴走するって事じゃないか。

『気にしなくていいでしょ。どうせ、このままじゃ死ぬ命だったんだ』

し。それよりも、私もアストルフオも体内で待機するから、基本的にやばい時しか出ないわ。私は顕現しても大丈夫だけれど、マスターの魔力じゃ戦闘するには全然足りないから、普段はここで消費を減らししておくわ』

ルサルカが俺の中に入ったのは召喚キャパシティーと魔力の消費を抑えるためか。確かに俺の魔力はすくない。先程までサクリファイスでブーストしていたが、それは先程の戦いでなくなった。ルサルカは単独で行動できるかもしれないが、彼女が持つ自前の魂を消費してまでやってくれるほど仲良くはなっていない。先程のキスだって、言ってしまうえば彼女にとっては挨拶代わりかもしれない。

『じゃあ、頑張ってマスター。期待しているわ』

『ボクがちゃんと守ってあげるからね!』

どうやら、保護者ができたようでもまだましなのかもしれない。それにアストルフオの身体ということはある程度は戦えるのだろうしな。

『ねえねえ、愛歌ちゃん。ポップコーン取って』

『ボク、コーラ!』

『……なんで私が取らないといけないのよ。自分で取りなさい』

なんか身体の中で好きなように遊んでやがる。菓子とかを用意して好き勝手に食べているようだ。まあ、いい。

そんなことよりも目が覚めたらうさ耳美少女メイド……の皮を被った男の娘。これはどうしたらいいのかわからない。

いや、決まっている。谷口と中村と共にハジメを見つけて生き残り、ユーリを再召喚する。地上に戻るかどうかはわからないが、なんとしても生き残る。それが決定事項だ。

『そうになると、谷口と中村はどこだ?』

周りを探すとすぐ近くに眠っていた。思った以上に動揺していたみたいだ。まあ、起きたらいきなりうさ耳美少女メイドとか意味不明だしな。TSするよりは男なだけましか。前の容姿なんてあまりいいものではない。家族とまた会えるかもわからないのだし、生き残る事が優先だ。

「あれ? でもたまたまに愛歌に身体を乗っ取られるって言ってたけど、

その時はTSになるのか？」

『なるわね』

「まあ、気にしなくていいか」

別に怖くもなんともないしね。それよりもやる事がある。谷口と中村を抱き上げて隠れられそうな岩場へと移動する。ここが熊のテリトリーなら、もう少しは大丈夫かもしれないが何時他のモンスターが現れてもおかしくない

だから、岩場に二人を運んで座らせた後、熊の死体を確認する。ガチャ産の食料があるとはいえ、ランダムなのだから何時補給できるかわからない。そうなると現地調達しかない。それに今着ている服だけでは心もとないし、毛皮があれば暖も取れる。

「アストルフオ、毛皮を剥いで肉を確認してくれ」

『はい』

身体が勝手に動いて剣を使って解体していく。すでに魂はルサルカに美味しく頂かれているので毛皮と肉だけだ。切り取った肉の血抜きをしながら、周りを見渡す。飲み物をどうするかが問題だ。

しかし、川とか水がありそうな場所は見た限り存在しない。周りは岩場だらけで何も存在しない。草木もないのだから、本当にやばい。

『飲み物の存在は大事よね。まあ、出した物を保存して飲み物にするか、魔物の血を飲む。それぐらいじゃないかしら？』

楽しそうなルサルカの言葉に嫌な予感はあるが、実際にそれしかないだろう。魔物の血は何が入っているかなんてわかりはしない。出した物というのはルサルカがこんな表現をしたのは彼女も女の子だからだろう。言ってしまうば尿だ。おそらく、この中でまともに飲めるのは尿ぐらいだ。これが一番安全ではある。ただし、俺以外は女の子で様々な問題が付随する。ある趣味の人だと役得だろうけれど、そんな趣味はない。

「なら、確かめるしかないよね！」

口から勝手に言葉が出て、身体が勝手に動いていく。おい馬鹿止める！ そう思うも、身体は止まらずにアストルフオが解体してくれた血の滴る肉に吸い付く。

口内を潤す血生臭い味。すぐに身体がビクンツと震えて身体のうちこちにある血管から血液が噴き出す。だが、恐怖も痛みも感じない。

『ちよつ、この馬鹿！ 細胞が急激に破壊されていつてるじゃない！』
『あれ？ ボクの勘では大丈夫だと思っただけどね』

『ああ、もう！』
『お願い』

身体が崩壊していくなか、ルサルカの力によって治療されていく。とりあえず、アストルフオはお仕置きしないとイケないな。

『ごめんなさい……』

まあ、これでモンスターの肉は食べられないことがわかった。こんな二人には食べさせられない。

「ルサルカ、どうにかなる？」

『どうにかなるじゃなくてするのよ。やっぱり永劫破壊エイヴィヒカイトを突っ込んで魔人にしてしましましょう。魂は私のを少し別けてあげるわ。後で利子をつけて返してもらおうからね』

「わかった。お願い」

『じゃ、痛みに襲われるだろうけど……いや、感じないのか。アストルフオはしっかりと責任とって殺しなさいよ』

『了解だよ！ 騎士の名にかけて悪を討てばいいんだね！』

ルサルカが無言になった。まあ、ルサルカも悪だしな。とりあえず、身体は改造されてある程度の魂を譲ってもらおう事で霊的な装甲と肉体そのものが強化された。これで大丈夫だろう。

「ん、んんっ……」

「あつ、目が覚めた？」

「いつ、いやああああつ!!」

谷口が起きた瞬間、悲鳴をあげる。すぐに口を押えて飲み込ませながら警戒する。悲鳴でモンスターが寄ってきたら死ぬからだ。

「あなた、鈴に何をしているの？」

すぐ隣から声が聞こえ、そちらに向くと中村が炎の魔法を準備していた。何故こちらに魔法を向けてくるかわからない。中村も現状を

理解しているはずなのにおかしい。

「そもそも沙条はどこ？」

「あつ、そつか。悪い。今は姿が変わっていたな。谷口、落ち着いたか？ 叫び声や悲鳴などの大きな声をあげない。またモンスターが襲ってきたら今度こそ終わりだからな」

谷口がこくこくと頷いたので口から手を離す。中村は周りを探して警戒している。まあ、彼女達からしたらよく知らない女の子だろう。

「俺は沙条真名だ。今は代償として支払った身体の一部を召喚したアストルフオの身体で補うために姿を変えさせられている」

「アストルフオって、シャルルマーニュ十二勇士の？」

「そうだ」

「恵里は知ってるの？」

「私が知っているのは男のはずだけど……確かにアストルフオは派手好きで中性的と言われているけど……」

「作られたゲームのせいで女装少年にされた。これでもちやんと男だ」

「オタクって……」

何も言い返せない。まあいい。しかし、うさ耳ってヘアバンドだから取れるはずだし取ってしまうか。

『だめ〜！ それを取ってしまうなんてとんでもないよ！』

「ちっ」

「ごめんなさい」

中村が勘違いして謝ってきたので、違うと教えて仕切りなおす。これからの事をしっかりと決めなければいけないからだ。

「さて、諸々は置いておいて現状を説明する。しっかりと心を強く持つて聞くように。良い報告と悪い報告がある。どちらから聞く？」

「鈴は……いい報告からお願い」

谷口が顔を俯かせた。身体は微かに震えていて、中村に抱き着いている。中村も谷口を片手で抱きしめているが、その表情と顔をよくみれば青い。

「まず襲ってきた熊のモンスターは倒した」

「良かった……」

「た、助かったんだね……」

「今はな」

体内の三人は何も言わないので、このまま続けていく。

「悪い報告は？」

「まず、俺達は全員がかなりの重症だ。このまますぐに命を失う事はないが、非常に不味い状況には変わりはない。まず中村は片腕と片足を失っているし、谷口は両足を失くしている」

俺がそう言うのと二人が泣き出した。

『そこだ！ 行け、マスター！』

『抱きしめて優しい言葉をかけるのよ！』

『アーサーとの参考にできそうね』

外野が何かを言っているが、泣かれているとどうしていいのかわからないから、言われた通りに抱きしめて二人の頭を俺の胸に押し付けながら彼女達の頭を撫でる。

「俺も腕と肺、感情や痛覚など色々と失っている。今はアストルフオ達のおかげで身体が作り替わったが五体満足だ。だから、俺ができる限り頑張つて二人を生き残らせる。最終的には帰る事が目的だが、今は生き残る事を最優先しようと思ってる」

「……本当に守ってくれるの？」

「ああ。中村も谷口も守る。少なくとも谷口は絶対に守る」

谷口が中村に襲われたのは俺達と関係を持ったからだろう。詳しい事はわからないが、その可能性が一番大きい。

「そう……」

「……いいよ、守らなくて……」

「谷口？」

「どうしたの？」

守らなくていいという谷口が漏らした言葉に俺と中村は聞き返す。

「だって、鈴は足手纏いだよ。両足がないの。だから、苦しまないように殺して欲しいの……」

「何を言っているの！ だいたい結界師のあなたが足手纏いなら、私は……」

「恵里はまだ片足があるから松葉杖みたいなのを用意したら、動けるかもだけど鈴はもう……」

泣きながら伝えてきた谷口の言葉に考えさせられる。確かにトータスの技術力では足を失ったら終わりだろう。再生魔法でもあれば別だろうが……白崎なら至れる可能性はあるか？

「それに、ね？ 怖い。また食べられるんじゃないかって……そう思うとろくに結界も作れないんだよ？」

「鈴……それを言うなら僕の方もだよ。あんまり役にはたてないし……」

「でも、鈴よりは役に立つよ。だから、鈴は置いて二人で生き残る事を考えて欲しい」

どうやら谷口は完全に心が折れているようだ。無理もない。俺も食べられたらそうなる自信がある。

「なら、僕も一緒に死ぬよ」

「え？」

「だって鈴がこうなったのは僕のせいだし、鈴は僕の居場所になってくれるって言うてくれた。ならずと一緒がいい」

「恵里……それは駄目だよ！ 沙条君、お願いだから恵里を説得して！」

「わかった」

「どういうつもり？ 僕が沙条に頼んだのは鈴が助かるから。そうじゃないと僕は君の奴隷になって全部を差し出すつもりはないよ？」

「奴隷？ 沙条君、どういうこと？」

「まあ、とりあえず話すか」

谷口に中村から頼まれた事を包み隠さず伝えると、谷口が中村を叩いて怒り出した。中村も中村で谷口を叩いて怒っている。どちらも互いの頬をひっぱったりしているが、両手が使える谷口が優勢だ。

『止めなくていいの？』

「そうだった。二人共、まだ俺がどうするか伝えてないだろ」

「あ……余りに恵里が自分の事を大切にしないからつい……」

「それは鈴も同じ」

「今は非常事態なんだから協力するぞ。それと中村を奴隷のように扱うつもりは一切ない。あの契約は谷口を助けた事で終了している」

「いいの？」

「ああ。それに考えてもみろ。もし、俺がその話を受け入れて中村に関係を強要し、ユーリに知られてしまえばどうなると思う？」

「あくなるほど」

「塵屑扱いでしようね」

そう、そうなる可能性がある。そんなの俺には耐えられない。あの癒しであるユーリからお兄ちゃん不潔、大っ嫌いとか、近付かないでくださいとか言われたらもう……

「シスコン？ いや、ロリコン？」

「どっちもかもしれないよ？」

「うるさい。そんなわけで破棄だ破棄。はい。この話は終わり。で、話を戻すけれど俺は谷口も中村も見捨てるつもりはない。といつても、俺の中での優先度は谷口の方が高い。どうしてもという時は全員を連れていくのを断念して谷口を優先する」

「いや、鈴はいいよ」

「駄目。僕も沙条の意見に賛成。鈴を優先する」

「じゃあ、多数決で決まりだ」

「鈴は役に立たないよ！」

「谷口。一つだけ言っておく。お前の意思など関係ない」

「ちよっ!? 助けられるのは鈴だよね！」

「そうだが、それはこの際関係ない。俺がユーリに嫌われないために助けるだけだ」

「うわあ……」

引いているが、こうでも言わないと谷口は納得しないだろう。俺はもうこの世界で生きていく決意はある程度はしている。だが、谷口は違う。戻りたいがためにあれだけ必死に頑張ってくれたんだ。だから、谷口だけでも元の世界に戻してやりたいと思う。

「まず、決定事項として限界までは谷口と中村、二人を連れてハジメを探す。ハジメとユーリさえ居れば義手や義足なんて簡単に作れるし、失った腕を元に戻す事は容易いはずだ。なにせユーリが居た世界にはクローン技術がある」

「それを移植すれば元に戻れるのね……」

「そっか。それなら……うん、まだ頑張れるかも」

ユーリの世界。ゲームや映画だが、プロジェクトFという記憶転写型クローンまで作り出すような世界だ。臓器や腕用のクローンくらいならなんとかできるだろう。

「それに無理だとしても、ガチャでエリクサーや再生できるキャラを引けばできるだろう。だから、生きるのを諦めないでくれ。俺も諦めない。できる限り足掻き続ける。だから、谷口もせめて俺や中村が死ぬまでは頑張ってくれ」

「……うん、わかった。鈴、頑張ってみる……」

手を差し出すと、谷口はそっと両手で握ってきた。ぎこちないけれど微笑に笑みも浮かべている。逆に中村は顔色が悪くなった。

「どうした？」

「ごめんなさい。そういうえば僕、ユーリを爆殺した……これってもう無理じゃ……」

「ほう、お前が犯人か」

どうやら、バッテリーで橋を爆破した犯人は中村だったようだ。まあ、谷口を殺そうとしていたし、おかしくはないのか。

「ごめん。鈴が助かった後なら僕を煮るなり焼くなり、本当に好きにしているから」

「あ、鈴もいいよ。恵里の罪は鈴が半分持つから」

どうやら本当に仲直りしてみたみたいだ。むしろ、行き過ぎている感じもある。これは諦めや諦観などが関係しているのかもしれない。どちらにせよ、二人の心はとても弱っている。

『そうよ。付け入るならいまよ。この二人を物にしちやいなさい』
だからそれは断る。

『なんでよ。生存率は格段に上がるわよ』

ルサルカの説明を聞くと、足手纏いでしかない二人を殺してその魂エンヴィヒカイトを永劫破壊によって吸収。エネルギーと変換する事で生き残る可能性が格段に上昇するらしい。

ただ、その場合はアストルフオが怒るだろう。

『当たり前だよ！ それはシャルルマーニュ十二勇士の、騎士としての道に反するもん』

『そんな事を言っている場合じゃないでしょ』

『だめ〜』

『まったく……まあ、それだとやっぱリアンタの女にしてみいなさい。それで彼女達とエッチして房中術で魔力を貰うのよ。これだと彼女達を連れていく理由にはなるわ』

結局は魔力タンクとしてだが、連れていく理由にはなるとルサルカが納得するのは大きいだろう。彼女の協力が無いと俺達は生きていけないかもしれない。

「何言ってるの。これは……」

どちらにせよ、二人を止めないといけない。

「言い合いするな。どちらにせよここを抜けてからだ。だいたいユーリは死んでいない。あの程度でユーリが、ユーリ・エーベルヴァインが死んでたまるか」

俺もあの時、ユーリが死んだと思った。だってINNOCENT基準だったんだ。それはつまり、ただの幼い少女の身体でしかない。いくらエグザミアを持っているとはい、力を失っているのだから無理だと思った。だが、召喚キャパシティーは相変わらず消費しているし、再召喚可能時間が表示されている。これはつまり、死んでいないということだ。

「本当に大丈夫なの？」

「それだったら、鈴はとつても嬉しいよ！」

「これを見てくれ」

編成画面の召喚キャパシティーを見せる。現在はアストルフオ（剣）、ルサルカ・シュヴェーゲリン、ユーリが登録されている。愛歌が表示されていないのは彼女が俺に協力する気がないからだろう。

一時的に力を貸してくれたとはいえ、あの時限定だ。もう彼女によるブーストは当てにできない。何を代価として取られるかわかったものではない。

プロトアーサーを引き渡すか、俺がそうなるかを選ぶしかない。いや、ひよつとしたら天之河を引き渡して洗脳か精神を作り変えてもらえばプロトアーサーができるか？ 駄目だ。いくらなんでも嫌なクラスメイトとはいえ殺す理由にはならない。

「再召喚可能となっているだろう？ だから、大丈夫だ」

「良かった……良かったよお」

「そっか……」

二人共、ほつとしたようなので話を戻す。

「生き残るには決めないといけない事がいくつもある。それは二人に精神的苦痛を伴う事でもある」

「いいよ。なんでも言っつて。それで生き残れるなら安い物よ」

「デスマーチだよね！ うん、鈴は頑張つて耐えるよ！」

「そつちじゃない。女として、人としてのプライドを結構捨ててもらうことになる」

「え」

具体的に話していくと、二人が真っ赤になっていく。まず、説明したのは水の事。最悪一步手前で互いの尿を飲まないと生きられない事。ガチャ産の水や飲める水源をみつけたらある程度は解決する事だが、覚悟だけは決めておいてもらう。

「脱水症状を防ぐためね」

「そうだ。水分を定期的にとらないと死ぬ。尿で排出して破棄するのは現状ではできない。一番最悪な場合は汚染された水を腸から吸収する。それで口から摂取するよりはましになる」

白崎が居てくれればこんな事はしなくて済む。いや、ハジメだけでもいい。

「ハジメだけでも見つけられればろ過装置を作れるんだが……」

「南雲君を速攻で探そう」

「鈴も賛成！ でも、飲み水くらいなら魔法で作れるよ？」

「そうなのか？ 俺は召喚以外の魔法が一切発動しないからな」

「あれ、知らなかったんだ。知った上で緊急時にする必要があると
思っただけだ……」

「まあ、消費魔力次第だな。正直、できるだけ戦闘に回したいから魔力
に余裕がある時は魔法で出して、水源を探す。それでも見つからな
かったり、戦闘が連続して魔力量がやばかったら最終手段にでる」

「うん、それでいいよ」

「それなら納得できる。魔力のリソースは大事だし」

とりあえず、サバイバルで水分確保についての重要性は理解して
くれただろう。次の説明に入る。

「次に食料だ。ガチャ産でお弁当が出ているからしばらくは持つ。た
だモンスターの肉を食べると谷口達は死ぬ」

「本当に死んじゃうの……？」

「確か、魔物の肉は猛毒だとメルド団長が教えてくれたはず」

「それ、聞いていなかったな」

「訓練している時にいなかったから仕方ないよ。確か、檜山君達が伝
えておいて言っていたような？」

「そういうことか」

「あははは、その時点で殺す気だったんだね」

檜山達からしたら、俺達が勝手に毒物を食って死んだ程度の認識に
なるんだろうな。今度、死なない程度の毒キノコでもプレゼントして
やろうか。ああ、そういうえばオークを欲しがっていたな。探してやろ
う。

「まあ、そんなわけで弁当は基本的に二人で食べてくれ。俺は英霊で
あるアストルフオの肉体を使っているのと、死なないように作り変え
てもらったから大丈夫だ」

「わかったわ」

「申し訳ないけど、好意に甘えるね」

「で、やって欲しい事と逃れられない恥辱があるが、どっちから聞きた
い？」

「……」

二人が互いを見てから、両手を握り合って覚悟を決めたよう伝えてくる。

「恥辱の方で」

「まあ、こっちは簡単だ。二人には足がない。だから、まともにトイレもできない」

「あつ」

理解した二人は全身を真っ赤になったように感じる。恥ずかしさから手で顔を覆ったが、こういうデリケートな問題もある。流石にした後、拭かないとならないし洗浄しないといけない。で、片足の中村と両足がない谷口に互いで補佐させることは考えた。でも、それって平時ならともかく、非常事態の現状では無理だ。そもそも離れたら何時襲われて殺されるかわからない危険地帯だし。

「互いに……無理ね」

「ああ、そうだよ。鈴、介護してもらわないといけないもんね」

「そういうわけである程度は許容して許してくれ。これは三人だけの秘密にするから」

「あ、あの軍服の女の子は？」

『嫌よ。なんで私がそいつらの下の世話をしないとイケないのよ。許容できないのなら、垂れ流すか死ぬべきよ』

「拒否している。まあ、彼女を実体化させて戦闘してもらうには魔力がかなり必要だ。だから、命が掛かっているわけでもない排泄に魔力は使えない」

「相談させて」

「うん。ちよつと覚悟がいるから」

まあ、女の子だから仕方ないだろう。でも、次の問題なんだよな。

「わかった。じゃあ、次の話。これも覚悟がいる」

「言い方からして、さっきのよりはましだよな？」

「そのはずだけど……」

「今度は定期的に俺とキスして唾液を交換することだ」

「やっぱり、身体が目当て？」

「うゝキスかゝ」

「言っておくが、これは房中術を使った魔力の譲渡というところらしい。俺一人の魔力量と回復量じゃまともに戦えない。それに二人が魔力を供給してくれるなら決して足手纏いじゃない」

俺の魔力量と回復量は少ない。サクリファイスと愛歌から貰ったものでどうにかできたが、本来は魔力の塊である聖杯のサポートなくしてサーヴァントであるアストルフオや、それに比類するであろうルサルカを召喚するなどではきはしない。レア度が高いという事はそれに応じてコストも莫大に跳ね上がる。ノーマル詐欺とはいえ、ユーリと二人では維持する魔力に天と地ほどの差がある。

「この二点を考えてくれ。最悪、キスは一人でもいい。それで守ってくれるルサルカを説得できる」

「つまり、魔力供給ぐらいしろってこと?」

「そうなる。それにこれはまだましだ」

「え? 鈴はファーストキスになるんだけど……」

「最初、ルサルカに求められたのは更に進んだ方だからな」

「あうっ」

「ああ、確かに房中術ってそっちが本当の使い方よね」

「あれ?」

「どうしたの?」

「いや、何もキスしなくてもいいんじゃないかなって、鈴は思い付いたの。沙条君としては残念かもしれないけれど」

「言ってくれ」

確かにルサルカにキスされた時は気持ちいいのもあったが、やはり同意がないと駄目だ。そういう対象として二人は見れるが、傷つけない。くはない。

「バッテリーを使えば解決だよね?」

「なるほど。確かに……」

ルサルカに言われた事が絶対だと思考停止していた。思ったよりも精神的に堪えていたのかもしれない。

「でも、バッテリーってあるの? 僕のは全部爆弾にしたよ」
「俺のもだ」

「鈴のもだね」

「無理か。まあ、キスくらい別にいいけど。鈴はどう?」

中村の言葉に谷口が俺をじーと見てくる。

「ん〜今の顔だと女友達の悪ふざけとかに思えるけど、唾液の交換となるとガチの奴だろうし、沙条君には助けてもらったから……鈴も生きるために受け入れるよ。でも、戦闘中にそんなことできないよね?」

「それはそうだ。だが、それを言うなら谷口さえ居ればできるぞ。そもそもあのバッテリーは谷口の結界ありきだからな」

「そっか。デスマーチは無駄じゃないんだね」

「どうせ僕達は沙条に背負われて戦う事になるだろうし、たぶん大丈夫だと思うよ」

「背負われて……確かに逃げる時とかそうなるから降ろされるのも悪いね」

「確かに前と後ろに抱き着いてもらう予定だ」

前と後ろでサンドイッチ状態になるが、それでもしないと移動が困難だ。男としては至福なんだが、正直言って楽しんでる時間なんてない。ちよつとしたミスが死に繋がるかくれんぼと鬼ごっこを合わせたスニーキングミッションだからな。

「まあ、二人は相談しておいてくれ。俺はガチャで出たアイテムを確認する」

「は〜い」

「うん」

少し離れた所でガチャで出たアイテムを確認する。いくつかは戦闘で壊されているが、何個かは大丈夫だった。

出たアイテムはC黒剣*5、Cまるごしシンジ君*5、C桜の特製弁当*4、SRスキル・魂喰い*1、Rスキル・優雅たれ*1、C小石*15、C謎の仮面*7、Cただの布*6、R騎士剣*1、R若返りの霊薬*2、SR拷問日記だ。

そのうち黒剣は4本が折れている。まるごしシンジ君は2個破損。弁当は一つ巻き散らかされている。魂喰いと血塗れの拷問日記はル

サルカの召喚に使った。スキルの優雅たれはその名の通り、優雅になれる礼儀作法系のスキルを手に入るだけなので使い道がない。小石はまあ、投げるくらいには使える。

謎の仮面は本当にわからない。鑑定不可だ。だが、中には石でできた仮面もあるのでひよつとしたら、俺は人間を止めるぞ！ の人を召喚できるかもしれない。もしくはこころちゃん。いやいや、シヤア・アズナブルの可能性もある。仮面の人は多いからな。まあ、とりあえず、効果はわからないので放置。呪われていたらシヤレにならない

『魔術的な品物なら鑑定してあげましょうか？』

「廃棄するから、欲しいならやる」

『それじゃあ、もらいましょうか』

正直、邪魔になるから捨てるしかない。それでルサルカが喜んでくれるのなら安い物だろう。俺達の安全的に機嫌が良い方がいいしな。まるごしシンジ君は残飯処理と囷に使う。Cただの布*6は防寒着や寝る場所を作るのに使えるし、谷口達の傷口を覆うのにも使おう。

R騎士剣は騎士が装備し、誰かを守る時にカバリングを行えるという物のようだ。アストルフオのサブウエポンとして持つておこう。黒剣は黒曜石の剣で使えるかはわからないからな。

そして、Rながら若返りの霊薬。効果は肌が六年分若返るようだ。凄く売れそうだし、残しておこう。これから傷はどんどん増えるだろうし、谷口達にあげてもいいだろう。

「沙条君、ちよつといい？」

「何？」

「話し合いが終わったから、こつち来て」

「オツケー」

仮面や残骸をルサルカが取り込んで溶かしていくのを見送った後、二人の場所へと戻る。二人は相変わらず両手を繋いでいた。

「で、覚悟はできたか？」

「うん。恥ずかしいけれど鈴、頑張るよ」

「僕も頑張る。でも、女の子の大事な所を見るんだから責任はとつてね」

「前向きに善処したいと思います」

「する気ないよね！」

「冗談だけだね。それしか選択肢がないのもわかっているし……本当は倒したモンスターのスケルトンでも使えば問題ないかもしれないけれど、こつちの方が都合がいいし」

「何か言ったか？」

「なんでもないよ」

とりあえず、他に決める事を伝えてから次に互いのステータスを確認していく。レベルアップはしているだろうし、有用なスキルが得られていたら助かるな。

「あ、それとこれから一蓮托生だから、名前でいいよね？」

ステータスを確認しようとしたら、中村から提案があったので受け入れる。その方が仲良くなれるからだ。

「それもそうだな。俺は真名でいい」

「真名だね」

「まなまだね」

「それは止めろ」

とりあえず、まなまなは止めさせて真名と呼んでもらうようにする。マー君というのもあったが、却下した。

「僕は恵里でいいからね」

「鈴は鈴でいいよー！」

「恵里と鈴だな。これからよろしく」

「よろしく」

「よろしくね〜」

無理して明るい声を出している谷口、鈴に少し思うところはあるが、仕方ないことだ。

「あ、恵里はえりえりにするね」

「……まあ、それならえりりんよりはいいか」

えりえりはいいいんだな。まあ、これで二人が仲良くなってくれたらいいや。

こんな事を思っていると誰かのお腹が鳴った。三人で恥ずかしが

りながら、先に食事を取るよう提案する。

二人も受け入れてくれたので、桜特製弁当を一つ渡して二人で食べてもらう。俺はモンスターの肉を恵里に魔法で焼いてもらってから食べる。臭いは凄く不味そうだが、我慢して食べる。どうせ味覚は感じないのでから。

第11話

警戒しながら食事をする。二人と食べる量が全然違うし、次々と口に入れていく。鈴と恵里の二人は仲良く一つの弁当を別けて食事をしている。仲良きことは美しきかな。

『ま〜ず〜い〜ぞ〜！』

そんな二人を見てみると、身体が勝手に動いてケラケラ笑いながらパクパクと肉を食べていく。アストルフオには味覚があるし不味いのはわかるが、嬉しそうなのはなんでか……いや、これはヤケだな。

『ほら、さっさと食べなさい。私に面倒な事をさせた罰よ』

『こういう時はいつきというべきよね？』

『それ、飲み物だからね！』

鈴と恵里の二人はたまになんとも言えなさそうにこちらを見詰めている。アストルフオの事は説明しているので大丈夫だと思いたい。

少し時間が経ち、栄養補給が終えたのでこれからステータスの確認を行う。そのために三人でそれなりに大きな岩があり、壁がすぐ近くにある場所に移動する。

狭いスペースだけれど一人ぐらいはちゃんと座れる。地面に布を敷いてから念の為、鈴に音が洩れないように意識して結界を張ってもらう。それから岩と壁の間に張った結界の上に布を置いて砂や小石などを置く事でカモフラージュする。

壁を背に一人のスペースに座り、続いて俺の太股の上に鈴と恵里を座らせる。二人が倒れないように後ろから抱きつくようにして支えてやる。二人のお尻の柔らかさを味わえ、同時に二人の身体を岩肌から守るという大義名分もあるので、怒られる心配もない。素晴らしいことだな。

「えりえり。鈴はなんだか邪な気配を感じるよ？」

「そうね。でも今の僕達にはどうする事もできないしね」

「そうだね」

笑顔で話し合っているけれど、会話がちよくと物騒だ。まあ、隠れるために小さなスペースに入るのは仕方ないことだしな。

「それじゃあ、ステータスを見ようか」

「そういえば全然見てないよ。上がってるといいなあ」

「うん。それで生き残れるかが決まる」

「まずは言い出しっぺの俺からだ」

ステータスプレートを出して表示させる

沙条 真名 17歳 男 レベル：20

天職：召喚士

筋力：10 (2000)

体力：10 (800)

耐性：10 (600)

敏捷：10 (1500)

魔力：200 (200)

耐魔：10 (600)

技能・ガチャ召喚「+ランダム召喚」ガチャ「+確定召喚」ガチャ「+夢幻召喚」インスタトル「+再召喚」・パーティー編成・召喚用魔術回路E・エイヴィヒカイト永劫破壊「+触媒変換」・サクリファイス・言語理解

召喚キャパシティ：650/200 ユーリ・エーベルヴァイン

N：i0 アストルフォ「剣」：i00 ルサルカ・シユヴェーゲリン：

80 沙条愛歌：460。キャパシティオーバーの為、制限発動中。

「色々と言いたい事がある」

「普通に強いと思うよ？」

「うん。確かにそうだね」

まあ、括弧内はアストルフオが憑依しているからだろう。ステータスの低さは諦めるからいいとして、問題は召喚キャパシティだ。沙条愛歌の460ってなんだよそれ。

『一人だけ容量食い過ぎね』

『ずつこい！』

『安心しなさい。内側に引っ込んおいてあげるから、少しはましになるわ』

実際は少しオーバーしている程度なのかもしれない。愛歌がどれだけ抑えてくれているかにもよるのだろうが。やはり、もつとレベルを上げないと駄目だな。それに熊と戦う前は確実に召喚キャパシティが足りなかったが、倒したおかげで愛歌が居なければぎりぎりいけるか？

どちらにせよ魔力が全然足りていない。

確定召喚は素材を集めて召喚する物のようで、ルサルカを召喚したから手に入れたみたいだ。この場合、魂喰いが永劫破壊、血塗れの拷問日記がエリザベート・バートリーの聖遺物と認識されて召喚できた。つまり、召喚したい対象に関わる物を用意すれば確定で召喚できるようだ。ただし、当然のように膨大な魔力が必要なようだ。

夢幻召喚インストールは現在、アストルフオが憑依しているから得られたんだろ。そもそも夢幻召喚は英霊を自らの身体に降ろし、その力を借りられる魔術だ。本来はクラスカードという触媒が必要だが、それは英霊本人が自ら力を貸してくれている事で触媒がなくても成立している。むしろ、今の状態は合体といった感じだ。

召喚専用魔術回路Eは愛歌によって作られて開かれたのだろう。俺の根源が召喚になっていいるから召喚専用なのだろう。本当に召喚機としての役割しかないようだ。いや、魔力を集めていけば行き着く先は聖杯か。どちらにせよ魔術回路魔術回路は魔術師が体内に持つ、魔術を扱うための擬似神経。生命力を魔力に変換する為の「炉」であり、基盤となる大魔術式に繋がる「路」でもある。魔力を電気とするなら、魔術回路は電気を生み出すための炉心であり、システムを動かすためのパイプラインでもある。回路を励起させ魔力を生成すると、

人である体からは反発により痛みが生じる。最初は眠っているが、修行によって「開く」ことで使用できるようになる。一度開いてしまえば、あとは術者の意志でオンオフができ、魔術を使う際にはオンにし魔術回路を活性化させ、使わないときはオフにしている。スイツチの仕方は術者のイメージそれぞれで、これは最初の「開き」に關係している。最初の開きも方法は術者次第で、中には性的興奮とか自傷行為とかもある。魔術師にとっての才能の代名詞で、これの数が多いほど優秀な魔術師であるとされる。これを持たない人間は魔術師にはなれない。生まれながらに持ち得る数が決まっておき、魔術師の家系は自分たちに手を加えて、魔術回路が一本でも多い跡継ぎを誕生させようとする。古い家系の魔術師ほど強力なのはこの為。魔術回路は内臓にも例えられ、ひとたび失った魔術回路は死ぬまで再生することはない。また、跡継ぎに魔術回路を増やすよう働きかけるということは、内臓を増やすということにも繋がるが、その手段がまっとうであるはずもない。は魔術師にとっては必要不可欠な物だし、使い方によつては便利だ。ガチャがやりやすい。それだけで十分だ。

エイヴィヒカイト
永劫破壊

「+触媒変換」は集めた魂を召喚専用の触媒へと変える。

FGOという聖晶石が作れるという感じだ。魂を捧げて手に入れるなんてまさに禁断のシステムだ。大いに結構！ モンスターは沢山倒してガチャだ！。

「鈴より明らかに強いね。ずるい〜！」

「鈴のはどんなのだ？」

「これだよ」

谷口 鈴 17歳 女 レベル：28

天職：結界師

筋力：330

体力：420

耐性：760
敏捷：210
魔力：960
耐魔：720
技能・結界「＋多重展開」「＋高速展開」「＋特殊結界」・障壁「＋多重展開」「＋高速展開」・魔力消費量削減・魔力回復速度増大・精神力強化・言語理解

鈴のは魔力がかなり高い。体力こそ低いが、それ以外の防御系はかなり数値が高い。サポーターとしての役割はできるかもしれない。これで回復魔法を覚えたら、ヒーラーやサポーターとしてかなり強くなる。精神力強化はデスマーチで得たのだろう。これがなければ鈴の心は完全に壊れていたかもしれない。

「どう、かな？」

「特殊結界というのが使えそうだよ。それに鈴は随分と強くなっていくね」

「頑張ったからね。真名君は？」

「いいと思うぞ。正直、魔力回復速度増大があるのは助かる」

「そ、そうだね。うん、良かった……」

何をする事になるのか、思いだして顔を赤らめる鈴に思わず俺も想像してしまう。

『なんなら今すぐして魔力を貰えばいいのよ』

『確かに魔力が心ともないね。マスターができないならボクがやってあげるよ……』

「やめてくれ。自分でやる」

「え？ どうしたの？」

「何か悪い事でもした？」

不安そうに二人がこちらを至近距離から見詰めてくるので、慌てて

謝る。

「すまない。二人じゃない。アストルフオ達に言っていただけだ」

「そっか。良かった……」

「うん。何かあったら気にせずと言ってね。できるだけすぐに直すから」

「それは俺もだな」

俺がそういうと、二人は嬉しそうに微笑んだ。二人にとって俺の機嫌を損ねるとかなり不味い事になるからだろう。もつと安心させるように行動しないといけない。

『そうだね。マスターが不安がったら駄目だよ。それが伝わると二人にとって悪影響しかでないからね！』

それが分かるのに、なんでキスをすると言ったんだ。やるなら俺からしないといけないし、そうするべきだ。

『まあ、女の子としてはそっちの方がいいわね』

『『女の子……?』』

『いい度胸ね。殺す』

『やってみなさい』

『につげろ〜』

中は楽しそうだな、本当に。さて、鈴の話に戻すが、鈴の結界は多重展開と高速展開、特殊結界というものがある。この特殊結界というのが結界自体に色々と効果をもたらすもののような。魔力を集めたり、空気の移動を操ったりといった効果だな。

「とりあえず、鈴の結界を使つて隠蔽をしてくれ」

「任せて。できる事は頑張るよ」

「鈴の次は僕かな?」

「頼む」

「恵里の楽しみ」

中村 恵里 17歳 女 レベル：18

天職：降霊術師

筋力：140

体力：110

耐性：180

敏捷：170

魔力：1380

耐魔：250

技能：降霊術・死霊操作・死体操作・火炎魔法・言語理解

恵里は鈴より全体的にレベルとステータスが低い。あくまでもレベルは全体的な強さを表しているだけなのだから、デスマーチを経験していない恵里が全体的に低いのは納得だ。だが、降霊術や死霊操作、死体操作はかなり使える。

「おう恵里って思ってたよりも強いね。でもなんで火炎魔法？」

「降霊術が嫌だって言ってたじゃない。その代わりに火属性の魔法を練習していたの」

「普段の訓練はそれで、後は隠れてか？」

「そうよ。炎魔法じゃないのは僕の炎が降霊術で呼び寄せた死霊を混ぜて使う怨霊の炎だから。だから、炎に適正が生まれたの」

「なるほど、天職と合わせたのか。確かに鬼火とか言うし、それと混ぜることで成長が速かったのか」

「たぶんだけどね」

「へえよく考えてるね。鈴は言われた通りにやってただけだから、素直にすごいと思うよ」

「鈴の場合は作業で鍛えた感じだしな」

「アレはしんどかったよ」

鈴の頭を撫でてあげると嬉しそうにする。それを見て恵里は呆れ

た表情をした。

「調教されてるじゃない」

「え？ そんなことないよ？ うん、大丈夫、大丈夫」

話している二人を他所にこれからの事を考える。まず、何時までもここで隠れていられない。食料と飲み水を探さないとまずいからだ。それに何時までハジメや俺達が生きていられるかもわからない。

「二人共、相談がある」

「なに？」

「何でも言つて！」

「ここで一夜を過ごしたら移動しようと思う。だから、悪いけれど魔力が欲しい」

「キスでいいんだったよね？」

「結界でもできるけれど、結局どっちがいいのかな？」

「確かにちよつと気になるかな。キスと結界での魔力供給つてどっちが効率がいいの？」

「ちよつと待つてくれ」

ルサルカに聞いてみる。

『ルサルカ、どっちがいいんだ？』

『当然、キスね。房中術で二人の魔力を混ぜ合わせて増幅して与えるのと、ロスが発生する結界で与えるのだから、どちらがいいのかは一目瞭然ね』

『なるほど。ありがとう』

確かにルサルカの言う通り、そっちの方が効率がいいし、俺も嬉しくなる。

「効率でいったらキスの方らしい。結界だとロスが発生するし、房中術での増幅もできないって」

「そう。それじゃあキスでいいわね」

「う、うん……キス、だね……」

「無理しなくていいぞ。二人は俺の事を好きでもなんでもないだろ？」

「まあそうだよ。僕の計画を潰してくれた憎い奴だ。でも、鈴を助け

てくれたし、和解するきっかけにはなった。だから、感謝してる。それに今は四の五の言っている時じゃない。キスの方が効率いいならそうするし、なんだったらエッチの方でもいい」

「えりえり本気なの？」

「本気よ。鈴と一緒に生き残る事が優先だから、身体を売るぐらい問題ないわ」

「えっと、それって俺が悪くならないか？」

「……そうね。ならセフレでいいか」

「駄目だよお！　鈴も一緒にキスするから、そっちは絶対に駄目！　はじめては大切にしないとイケないんだからね！　そういうのは好きな人とやるの！」

恵里が自分の身体を大切にしていないのでとても怒っている。まあ、ほぼ隅々まで見ることはなるんだけどな。

「それで死んだら後悔しない？」

「しない！　多分！」

とりあえず、エッチなしのキスはありつてところか。

「こうやってくつつくのはいいんだ」

「だって、隠れるためだし。それにあつたかいしね」

「まあ、そもそもこんなところでエッチなんてできないけどね。声で見つかって即アウト。鈴の結界があればなんとか？」

「手伝わないからね！　え、エッチなことはイケないと思うよ、うん！」

「残念だったね、真名」

「本当だ。まあ、今はキスで我慢しておくとするよ」

「我慢しなかったらユーリちゃんに告げ口してやるんだから」

「それは止めてくれ。で、どっちからする？」

恵里と鈴が話し合うのを待っていると、少しして順番が決まったようだ。

「す、鈴からお願い。真名君との付き合いは鈴の方が長いからね。うん、その……優しく、お願いします……」

「わかった。目を瞑って」

「ん……」

目を瞑った鈴の頭に手を回し、ゆっくりと顔を近づける。軽く唇同士をくつつける。すると鈴がビクツと身体を震わせる。そのまま舌で鈴の唇をなぞる。すると鈴が涙を流しだしたの慌てて離れて鈴の頭を撫でていく。

「ごめん、嫌だったよね。ここでやめる？ 別に無理する必要はないからね」

「だ、だめだよ。鈴はやるって決めたんだから。それに鈴が一番の足手纏いなんだから、大丈夫」

「だけど……」

「大丈夫よ。鈴は真名の事を恋愛感情かはわからなくても、それなりには気に入っているから」

「そうなのか？」

「えりえり！」

「気にせず強引にやっちゃっていいわ」

鈴が恵里を睨み付けているけれど、それが本当なら嬉しい。まあ、鈴は認めてないみたいだからわからない。それにどちらかというと、吊橋効果だろう。

「でも、余り時間もかけられないの」

「うう〜わかってるよ〜。真名君、一思いにやっちゃって！」「わかった」

鈴がやると言っているのだから、男を見せて強引にでもしてしまおう。今度は鈴の顎を掴んでクイツと口を少し開かせて唇を合わせ、舌を入れる。

「んっ、んんっ！」

ぬるぬる鈴の舌と俺の舌が触れ合って気持ちが悪くて夢中になって鈴の口内を舐め、唾液を交換する。

『ルサルカ、房中術をお願い』

『別にいいけれど、全然なっていないわ。私が言う通りにしてもっと気持ち良くさせてあげなさい。嫌悪感よりも快楽を与えた方が効率がいいし、その方が魔力供給もしやすくなるわ。だから、私の言う通り

にしないで！』

『お願い』

どうせなら鈴にも気持ち良くなって欲しい。いくら同意とはいえ、鈴が嫌がるのなら本当に止めてもいい。

「ちゅっ、ちゅるっ、んっ、んんっ！」

ルサルカの指示に従って房中術を使いつつ、鈴と深い口付けを行っていく。ルサルカが鈴の顔を見ながら、鈴が気持ち良くなるように調整してくれているので、鈴はどんどん気持ちよさそうに蕩けていつている。

しばらく鈴とのキスを堪能し、唇を離すと互いの唇に唾液の橋がかり、火照った顔に涙を浮かべる瞳。そして蕩けた表情……すごく興奮してくる。鈴はぼくと熱に浮かされたようにこちらを見詰めたまま動かない。それを見てペろりと唇の周りを拭いて飲み込む。

「っ~~~~！」

それを見た鈴が意識を覚醒させて顔を両手で覆った。すごく恥ずかしいのだろう。唾液と一緒にかなりの魔力を貰ったのだけど、罪悪感が湧き上がってくる。

「ごめん、大丈夫かな？」

「あ、謝らなくていいよ！ ちゃんと納得している事だから……ただ、ちよつと、その……気持ちよかつただけだから……うん、鈴は大丈夫だよ。思ったよりも全然嫌じゃなかったし！」

「そ、それは良かったよ」

「ごちそうさま。二人だけの世界を作るのはいいけれど、僕を忘れてないかな？ 怒るよ？」

「っ!？」

二人で慌てて隣の方を見ると、頬を膨らませて拗ねていますとストレートに表している恵里。

「わ、忘れてたわけじゃないからね！ 本当だよ！」

「はいはい。まあ、別にいいけどね。じゃあ、僕ともしようか」

「ああ」

「僕も気持ち良くしてね？」

「努力する」

「うん」

鈴とは違い、恵里は自分から片手を俺の頬に合わせて自らキスをして舌を入れてくる。どちらかというところ、こちらが蹂躪される方だった。負けずと反撃に転じる。

『虚勢ね。こういう子はね……』

ルサルカ先生の教えに従い、恵里も気持ち良くさせていく。その方が得られる魔力の質が圧倒的に違うらしい。とりあえず、美少女二人とのキスはとても気持ちがいいし、味覚がないはずなのに唾液も凄く美味しくて身体の隅々まで染みわたっていくかのような感じがする。だから俺はいつぱいで鈴と恵里とのキスに魅了された。

『魔力が枯渇している時だから、すごく気持ちいいよね』

『味覚を感じないんだから、これが娯楽になるでしょうね』

最後に恵里の唾液を吸い取って唇を舐めてから離れる。俺も恵里も顔を赤らめながらしばらく互いに見つめ合うが、今度は鈴が頭を押し付けて主張してきた。

「ねえ、鈴はまだ魔力があるんだけど取らないの？」

「鈴のは半分にしておいた。結界を維持してもらわないといけないし」

「僕はほぼ全て取られたね」

「そっか。まあ仕方ないか。うん、それで鈴達は十分に役に立つよね？」

「もちろんだよ。これから戦闘が終わったらご褒美としてもらいたいぐらい」

「じゃあ、そうしようか。その方が真名のモチベーションも上がるだろうし」

「ん〜それと寝る前かな。魔力は無駄にできないし」

「どうやら、二人から戦闘が終わったらご褒美としてキスしてもらえようだ。まあ、十分に嬉しいし頑張らせてもらおう。」

「じゃあ、寝ようか。一緒に抱き合って寝るけどいいよな？」

「うん。その方が鈴は安心できるし、いいよ」

「見張りはどうするの？」

「アストルフオ達がしてくれるから大丈夫だ」

『任せろ〜！ マスターたちはボクが守る！』

「そっか。じゃあ、お休み」

恵里がそう言つて頬に軽いキスをしてきた。それを見て鈴は驚いた表情をしている。どうやら、恵里の独断みたいだ。

「え、恵里？」

「別にこれぐらいで気分よく守ってもらえるならいいじゃない。減るものじゃないし」

「女の子として大事な物が減るよ！」

「サービスだから、きにしないでいいよ。するもしないも鈴が好きにしたらしいから。それじゃあ、お休み」

「あう〜」

いうだけ言つて自分に布をかけて俺の腕の中で目を瞑る恵里。すぐに寝息が聞こえてきた。恵里もなんだかんだで限界だったんだろう。

「もう、よくわかんないから鈴も寝る！ おやすみ！」

「おやすみ」

鈴も俺に身体を預けて眠りだしたので、二人をしつかりと抱きしめて俺も眠る事にする。どうか、明日も三人で生き残れるように祈りながら。

◇オルクス大迷宮65層

瓦礫が浮かび上がり、壊れた巨大な橋に集められてゆっくりゆっくり作り直されていく。修復されていく中、その途中に赤い結晶体が存在していた。それは本来、オルクス大迷宮が急速に橋を修復するために送り込んだ魔力の大半を奪い取り、自らの物としていた。

「解析終了しました。ベヒモスの召喚陣にアクセスを開始します」

「わかりました。肉体の再構築はどんな感じですか？」

「修復率は13%といったところです。魔力が全然たりませんね」

「前の身体ならもう作れませんか？」

「確かに魔力爆発が起きた時、大半の魔力を吸収しました。それでなら新しい身体を作れますが、それでは役にたちません」

「マスターがいらっしやる深層では足手纏いにしかりませんか……」

赤い結晶の中にある空間。そこでは三人の幼い少女が作業をしなから話し合いをしていた。どの少女も金色の長い髪をウェーブのかかったふわふわの髪の毛が揺れている。そして、三人が三人共、同じ顔だ。違うのは服装で、一人はピンク色のストライプパーカーを着た普通の幼い少女。彼女の手には紫色の本が握られている。

もう一人の少女はお腹を出した白色と紫色。そしてオレンジ色の衣装に身を包み、背中に燃え盛る翼を持つ幼い少女。最後の一人は青色と白色の衣装に身を包み、お腹の部分を露出させてベルトのような物で覆っている。そんな彼女の周りには機械でできた無数の盾のような剣が接続されて翼のように浮いている。

「マスターの魔力が増大しました。外部からの干渉があつたようです。魔力反応から対象を谷口鈴、中村恵里と断定。先に召喚された存在による入れ知恵だと思われます」

「マスターの安全が考慮されるのなら、しばらくは泳がせましよう。それまでに管理者の目が誤魔化しやすいこの迷宮にてリソースを回復させます」

機械の少女が告げると、炎の翼を持った少女が決定する。

「しかし、大丈夫でしょうか？　いくらこちらからも魔力などを送って支援しているとはいえ、限界があります」

普通の少女が心配そうに聞くと、機械の少女はすぐに答える。彼女達は自らを再生させている最中でも必死にマスターへの支援を健気に続けていた。

「問題ありません。保険は打つてあります。マスターが完全に死ぬ前に我々は転移します。そうすれば私達の中で生き残る事はできます。」

それに現状での問題はマスターが初期、もしくは最初に魔法を使った時に召喚していたと思われる沙条愛歌です。かの者が情報通りの存在なら、マスターに害をなす可能性が高いです」

「奴を滅ぼすか、最低でも撃退できる力の回収は必須です」

「確かにそうです。ですが、このままでは修復速度が遅すぎます」

「では、どうしますか?」

「決まっています。人手が足りないのなら、増やします。すでにベヒモスの召喚プログラムは解析しました。それを利用すれば可能です」
「なるほど。賛成します私」

「私も同じくです」

普通の少女がニコリと笑い、プログラムを実行する。すると外では赤い結晶が光り、ベヒモス召喚の魔法陣が三度起動していく。しかし、現れたのはベヒモスなどではない三匹の猫。

「二お願いします。リソースを蒐集してきてください」

「二ニャー…」

三匹の猫は65層からそれぞれ行動していく。

「しかし、三匹だけで大丈夫でしょうか?」

機械の少女が心配そうに告げると、炎の翼を持つ少女はなんでもないかのよう^に答える。

「問題ありません。自己進化プログラムを搭載してあります。外見は猫モードですが、ナハトヴァールも搭載してあります」

「暴走しませんか?」

「え? ナハトは可愛い子ですよ?」

「認識の違いが存在します。ナハトヴァールは闇の書の闇、暴走したプログラムです」

「……だ、大丈夫です、きつと皆が制御してくれます! それに人は襲われない限りは襲わず、襲われても蒐集するだけにしよう言っていますから……」

「そうだといいのですが……」

「問題ありません。いざという時は私達が出て回収します」

「お、お願いします」

赤い結晶……永遠結晶エグザミアによってオルクス大迷宮に新たな災厄が解き放たれた。それも仕方のないこと。何故なら普通の少女にとって、ナハトヴァールとはペットとして飼っていた可愛いワンコでしかないのだから。例えば角と翼が生えていて空を飛んでちよつと姿が違っても彼女、INNOCENT基準のユーリ・エーベルヴァインにとってはただのペットである。作業の為に三体に分離した弊害がここにあった。

「にゃー(地上へ)」

「にゃー(じゃあ、地下)」

「にゃー(ではこの辺りか)」

三匹の子猫による冒険劇が始まった。果たして周りのモンスターはどうなる！ 無限再生無限増殖機能付きニャンコから逃れられるかな！

第12話

失敗した。思ったよりも恥ずかしい。自然に顔が赤くなり、熱を持っているのが自分でもわかる。キスはまだどうにかなった。でもそれ以上はとうしようもなかった。もう止めることはできない。それに鈴を巻き込んで一度見られてしまったのだし後戻りはできない。

ちらりと真名に正面から抱きしめられて真名の頭を挟んで反対側の肩、僕の手の上に頭を乗せている鈴の顔も真っ赤で恥ずかしさから涙目になっている。それでも必死に後ろを見ながら警戒をしてくれている。真名の方も顔が赤くて思いだす事を避けるためにか集中して進んでいる。

「あ、モンスターだ。隠れるよ」

「わ、わかったよ」

「りよ、了解」

互いに照れながらも、生き残るために必死に行動する。こんなおかしな関係だけれど、僕にとっては心地良く感じてしまう。光輝君は僕と触れ合ってなんてくれなかったし。

真名が地面の窪みに入って私達を降ろし、その上から布をかけて砂などを置く。それから真名も入って私達の上に覆い被さってくるから、変則的な川の字みたいになる。少し重いけれど、自分でちゃんと身体を支えてくれてるし、これは僕達を守るためだと分かっているので我慢できる。

鈴の結界も合わさってじっとしていたらばれない。モンスターが通り過ぎるまでゆっくりと待つだけ。気付かれたら逃げて、それでも無理なら戦って時間を稼ぎ、倒せたら倒す。最悪、ルサルカの魔術で停止させて倒すか逃げる。これが僕達の基本戦術とすることになっている。

こうしてもう何度も隠れていると、二人の体温と臭いはずの匂いが心地よく感じる。もつとも、アレばかりは少し前にしたけれど、慣れないし死ぬほど恥ずかしい。鈴も同じでこちらに視線を合わせよう

ともしない。

そう、トイレだけは本当に恥辱を味わうことになった。岩肌とかで傷ついて黴菌が入り、感染症などにならないよう、幼い子供のように真名に持ち上げられて足を開かれて排泄する。

安全が確保されて時間がある時は僕と鈴が互いに拭けばいいけれど、無い時は真名にしてみよう。その過程で目を瞑ってやってもらっても時間が無駄になるので大事な所を見られるし拭われる。それにお尻を直接触られる。本当に恥ずかしくてやばい。鈴は死にたくなるとかいつていた。

そこで僕と鈴は僕達だけだと不公平だと言って逆襲したけれど、こっちはこっちで問題があった。うん。自分達に魅力がある事をちゃんと認識できたけれど、なんともいえない空気になった。

そこで出来る限り思い出さないように協定を結んだけれど、強烈に異性を意識することになってしまった。そんな状態で密着しないといけないから本当に大変。まあ、本当に僕達の事を守ろうとして、大切にしてくれているから別にいいけれど、うん。

「むう」

「どんな感じ?」

唸り声が聞こえて、真名に問いかけるとすぐに答えてくれた。

「可愛い兎さんが七体いるんだよね」

その喋り方から、真名じゃなくて過去の英雄、英霊のアストルフオだとわかる。

「それって……」

「このままだとまずいかな。ちよつとマスターと相談するから待ってね」

「うん。お願い」

少し待っている間に鈴を見る。鈴は腕で顔を隠してうゝとかあうゝとか漏らしている。まだ折り合いはつけられないみたい。無理もないけれど僕としてはこれからの事を考えると鈴と真名をくつつければ鈴は安泰だ。ただ、僕の居場所が無くなるのはいただけない。本当に悩ましい。まあ、今は考えていても仕方がないし、生き残る事を

優先しなくてはいけない。

だから、今は鈴の事を置いておいて真名の方を見る。真名のうさ耳が動いていてとても不思議に思う。もしかして、本物の効果があるのかもしれない。

「このまま待機してあいつらが移動したら移動する」

今度は真名みたい。しかし、鈴の結果がすぐに壊されるとそうするしかない。相手が一匹だけなら或いは……と思うけれど、ここで活動しているのなら普通に強い。今もコツソリと覗くと、狼の集団を兎達が首を狩りつつて身体を貪り喰らっている。

周りに血の匂いが充満してかなり大変だけど、今動く終わる。あいつらは餌を食べて隙を曝していると思えるけれど、それは違う。連中はしつかりと食べているように見せかけて一部が食べずに警戒して襲撃に備えている。

「ね、ねえ、大丈夫だよね？」

「大丈夫だ」

「う、うん……」

ようやく折り合いをつけた鈴が心配そうに小声で聞いてくると、真名が僕達を引き寄せて抱きしめて伝えてくる。三人分の温もりと心臓の音で安心できる。必死に息を殺して隠れているけれど、兎達は移動しない。どうやら僕達に気付いたのかもしれない。

「仕方ないか……」

「なにそれ？」

「人形だよね？」

「そうだ。使える」

確かガチャで出たまるごしシンジ君だったかな？ それを投擲する真名。そのまるごしシンジ君は地面に降り立つと移動していく。それに気付いた兎達が襲い掛かって食べていくけれど、ぺつと吐き出してその場を軽く見た後、去っていく。

「これで大丈夫？」

「まだ駄目らしい」

「もしかして、罨？」

「そういうこと」

しばらく待つっていると、兎達が戻ってきて狼の死体を解体して持っていく。残ったのは肉片ぐらい。あのまま移動したら僕達は捕捉されて餌になっていたのだろうか。

「じゃあ、もう少し待つの？」

「そうだな。確実に離れるまで待とう」

「確かにその方が確実ね」

死体が残ってくれていれば僕の方で操りたいけれど、ここに出てくるモンスター達は骨までしつかりと食べていくのでろくにスケルトンモンスターを生み出せない。

「う〜ドキドキするよ〜」

「頑張ってくれ鈴。鈴が失敗してもリカバリーは頑張るからさ」

「それって誰かは死ぬ可能性が高いよね？」

「むしろ運が悪いと全員だよ」

「責任重大だよお……」

現状、僕達は運命共同体。僕以外は死んだらやばい。いや、違うか。鈴さえ生きていれば……ううん、僕以外が死んでもリカバリーできる。死体と死霊さえあれば二人を蘇らせる事ができるし、なんとかなるかもしれない。ベストは全員で生き抜くことだけど。

「よし、もう大丈夫だろう。行くよ」

「うん。恵里？」

「ああ、お願い」

「任せて」

僕達を抱き上げて真名が移動する。行く先はわからないので全部真名にお任せ状態。でも、それでいい。迷いのない進み方は希望が持てる。例えばそれが偽りでも。

「あ、駄目だ。こっちにも敵がいる」

「迂回するしかないわね」

「うん」

それから何度も移動し、進んで戻る。下がる方が上がる方かはわからないけれど、どちらのルートも兎や狼達が邪魔してくるので迂回す

るしかない。

「どうするの?」

「倒すしかないんだろうが、きついな」

「なら、別の道を探すしかないわ。少しずつなら狩れるんじゃない?」

「それなら可能だと思う」

「なら、鈴も倒す方がいいと思う」

「少しずつ削っていくなら拠点が必要だけど、ここは長期的に行動するしかないか。じゃあ、こっち。水の気配がするらしい」

水を確保できるのなら、拠点としては十分。でも、水場という事はモンスター達も水を飲みに来てくる可能性が高い。どうなるかわからないけれど、このままここに居るのもまずい。それに水場なら罠を仕掛けることもできそうだしね。



水の音がする場所に移動すると、小さな川があった。ただ、予想通りそこにはモンスターが沢山いたので上流の方へと移動していく。上流には綺麗な地底湖が存在していた。周りにモンスターはいないし、植物も存在しない澄んだ綺麗な湖で水場としては十分。

「あ、これ駄目だね」

「どうして? 綺麗だよ?」

「綺麗すぎるのよ。それに見た限り生物がない」

「植物もないし、明らかに異常なんだよな。これは仕方がない」

地底湖に近づく前に真名は僕達を降ろして少し離れる。

「ルサルカ、護衛を頼む。二人を守ってくれ」

「仕方ないわね」

いつの間にか、隣に軍服の女の子が立っている。僕達の魔力を使われているはずだし、召喚できたのかな?

「大丈夫かな?」

「鈴はここから援護すればいいわよ」

「それもそっか。行ってらっしゃい。ほら、えりえりも」

「……行ってらっしゃい……」

「行ってきます。アストルフォ」

「はいはい！」

真名が地底湖に近づき、弁当箱に水を溜める。その瞬間、地底湖の方から水の濁流が襲い掛かってきた。それを予想していた真名、アストルフォは瞬時に下がりながらスネークソードで水を攻撃する。

「ほいっと」

水の濁流を切り裂く前に剣が弾かれ、アストルフォの手元に戻る。弾かれた部分を見る限りでは鱗を持つ生物が濁流に擬態しているみたい。そいつはアストルフォが離れたことで地底湖の中へと戻っていく。

「だ、大丈夫！」

「大丈夫だ。それよりも生物みたいだけど……見えた？」

「鈴はよくわからなかったよ」

「僕は鱗を確認できたくらい」

「あいつは水の蛇よ。おそらく擬態能力で地底湖と一体化しているのね。それで近付いてきた獲物を襲って食べる。おそらく水中での戦いでは勝てないでしょうね」

周りには簡単に岩を切断する兎の群れに地底湖には水の蛇。本当にここは魔境ね。

「どうするの？」

「あの、ルサルカさん、何か方法はありますか？」

「そうね……まずは観察ね。あの蛇が呼吸が必要かどうかでも話すが変わってくるわ」

「結界で酸素を抜いて地底湖の水中を無酸素状態にする。それでも死なない可能性が高いよな？」

「そうね。だから釣りましょう」

ルサルカから提案された内容は馬鹿馬鹿しい程の力尽くだった。それでも有効な事には代わりない。

「襲われない範囲で拠点を作って用意する。二人共、手伝ってくれ」

「手伝うのはいいけれど、明らかに僕達の手じゃ釣りあげられないけど？」

「うん。鈴や多分、ルサルカさんが協力してくれても無理だと思う」

「まあ、可能か不可能かといえば私だけでもできるんだけど、この程度の事で力を使いたくないわ。だから自分達でどうにかしなさい」

そう言っただけで彼女は見えなくなつた。自分達でどうにかするように言われても、釣りあげるのは真名一人だけだ。足の無い僕達の手じゃ手伝えないし。

「一人の手じゃ、いくらアストルフオの怪力があつても無理だ。だから、ここは道具を作ろうと思う」

「道具？」

「ま、またデスマーチ？」

「鈴は地底湖に結界を張るだけでいいから大丈夫だよ」

「そ、それならまだいけるかな？」

「僕は？」

「この計画には恵里の力が一番必要だ」

「わかった。なんでも言っただけ」

「うん」

作るように言われたのは土魔法でその辺にある岩を加工し、溝が掘られた円形の道具。滑車を作る事により、引き上げる労力をすくなくするのが目的みたい。

そんなわけで作ってみたのを真名と修正し、削ったりして加工していく。そこで鈴が体験したデスマーチの片鱗を体験させられてしまった。

「あ、ここは数センチずれてる。力の伝わり方がかわるし、もっと滑らかにしてほしい」

「細かい」

「うんうん。細かいよね。でも、数センチじゃ合格もらえないんだよ？ ミリ単位じゃないといけないんだ。恵里も頑張っただけ」

「……うわあ、めんどろ」

「まあ、大まかな部分までいい。俺が調整するから」

「だ、大丈夫かな？」

「大丈夫そうよ」

全力で走って離れると、滑車の力を利用したのか、純粋に怪力だからかはわからない。でも、鈴の結界によって地底湖の酸素が抜かれて弱っていた水の蛇は水中から引きずり出されてくる。

「鈴！」

「任せて！ 聖壁」

壁のような複数の結界が展開されて地底湖へ逃がす道を閉ざす。地上に出されて暴れる水の蛇に何を思ったのか、アストルフオが目には微かにしか捉えられないような馬鹿みたいな速度で口の中へと突撃する。そしてそのまま突き抜けた。当然、絶叫をあげる水の蛇と真名。当たり前だ。口から食道、胃、腸を通して中をズタズタに切り裂かれながら貫かれたんだ。

「た、倒せたの？」

「倒せたようだけど……アレにキスするのとか嫌なんだけど」

「う、うん……鈴もやだ」

「とりあえず、洗ってからね」

「……汚れを弾いて拒絶する結界って作れないかな？」

「努力次第じゃない？」

「大勝利！ さあ、楽しいご褒美タイムだよ、マスター」

血や汚物で汚れたまま水の蛇の上に立ち、剣を掲げるアストルフオ。純粋な目でこちらを見詰めてくるけれど、当然拒否する。

「いやよ」

「うん。嫌だよ？」

「なんで！」

「当たり前だろう馬鹿野郎」

「ヒドイ！ ボク頑張って倒したのに！ 宝具まで使ったのに！」

「やり方だ。あとはこっちでやるからアストルフオは休んでいてくれ。それとありがとう。ご苦労様」

「えへへくまつかせて！ ボクがマスターたちを守るからね！」

嬉しそうな声が聞こえると、すぐに真名が倒れた。どうやら魔力の

使いすぎと肉体を馬鹿みたいに行使したからみたい。

「えつとどうする？」

「まずは掃除ね。汚い状態でくつつきたくもないし」

「うん。鈴がやろうか？」

「ううん。僕がやるよ。鈴は結界を維持しておいて。一度解除して酸素を供給させないと駄目だからね」

「わかってるよ。真名の事、お願いね」

「任せて」

結界を鈴に任せ、水の魔法を遠距離でぶつけて強制的に覚醒させる。綺麗にするために徹底的に水で洗う。魔力の無駄なんだろうけど、大腸菌を僕達が摂取しないためという大義名分がある。それにやっぱり恨みもあるからきつめに洗浄してやる。真名が起きたら僕達の服を脱がせてもらって、身体と服を洗おう。恥ずかしいけれど洗わないと匂いがまずい。

ああ、後この蛇を僕の下僕と変えよう。それで兔に対抗できるかもしれない。すくなくとも護衛と移動には使えるはず。体内を刳り貫いて住居みたいにするのもありかもしれない。でも、そうすると逃げ場がないから駄目かな。まあ、気兼ねなく使い潰せる戦力はありがたい。

第13話

恵里によつて強制的に洗われ意識が戻ると、周りがぐらぐら揺れている。まあ、これは仕方ない事だ。汚物塗れなんてさっさと洗い落したい。

ぐるぐると回る視界が落ち着きを取り戻したあと、フラフラしながら二人の元に戻る直前で臭いを嗅いでみる。一応、綺麗に落ちている気がしないでもないけど正直わからない。

「臭いは取れたか？」

「ん〜微妙？」

「そうか……」

とりあえず、キスはお預けか。流石にこの状態で二人に迫って嫌われたくもないし、おそらく他の敵が来るまで余裕はあるだろう。

「やっぱり本格的に服とか洗わないと駄目か」

「そうね。身体を洗いたいわ」

「鈴もだよ。もう痒くて……」

「大分汚れてるからな……」

今までは水が貴重だからやれなかったが、目の前には地底湖がある。飲める水かはわからないが、すくなくとも大量にある。これが硫酸だったらまずいけれどな。

「とりあえず、洗濯と身体を拭こうよ」

「それもそうだな」

「うん。鈴に賛成。僕も身体を拭きたい。真名は脱ぐのは手伝って欲しい」

「身体を拭くのは二人でできるのか？」

「それぐらいなら大丈夫だよ。近くに鈴達を寄せてくれればどうにかするよ」

まあ、俺が拭いた方が効率はいいだろうけど、女の子としてはあまり肌は見せたくないだろうからできるのならそれでいい。俺として

もやる事はあるしな。

「じゃあ、服はこつちで洗濯する。水洗いだけど全部渡してくれ。下着も含めてだから」

「す、鈴達で洗うよ!」

「あくできるかできないかで言われたら、できるだろうけど危険だからだね」

「地底湖に落ちられて溺れられると困る」

「まあ、仕方ないよ」

「うくわかった」

洗濯について話は纏まったので、これからの予定を話そう。

「さて、これからする事が……何か身体を洗う以外に何かあるか?」

「鈴はないよ」

「それなんだけど、あの死体をアンデッド化して操りたい。上手いことできたら戦力になるし」

「確かにその通りだな」

「うん。戦力が増える事はいいことだね」

「ただ、魂つて必要か?」

「降霊術で降ろせばいいから、別に必要ではないよ」

「降霊術か……あれ、もしかして悪用できるか?」

「どうしたの?」

二人が同時に聞いてきたので俺は思った事を伝えていく。

「ルサルカに聞かないとわからないけれど、降霊術で魂を呼び寄せてエイツイヒカイト永劫破壊で喰らえばどうなるんだろうってな」

「あくなるほど」

「どうなんだろう?」

ルサルカに聞いてみよう。

『魂を引き寄せられるのなら可能でしょうね。ただ、あまり下手な魂を喰らうと腹の中から食い破られるわよ。これ、経験談だから』

「了解。可能らしいけれど、実力差がある時はお勧めしないってさ」

「残念だけど、安全を優先だね」

「そうね。よし、まずは死体操作を試してみる。動かして」

「わかった」

恵里を死体の傍に移動させると彼女が魔法を発動させる。それからしばらく動きはない。不思議に思っているところを見上げて告げてきた。

「こいつに僕の魔力を満たすまでに時間がかかる。既に死んでいるとはいえ抵抗が激しい。やっぱり、僕の実力不足かな？」

「それなら魂を食べたら難易度は下がらない？」

「どうなんだ？」

「たぶん、下がると思う」

鈴の提案に恵里が考えてから答えを出す。下がるといふのなら、トライアンドエラーを繰り返すしかない。

「じゃあ、魂は俺が貰う。恵里は身体を支配してくれ」

「数日間、時間がかかるけれどいい？」

「地底湖を確認してからだが、戦力が増えるならここに留まる方がまだましだろう。それにそろそろ俺達は限界だ」

「ここ数日、休憩しているから大丈夫だよ？」

「それでも水の蛇に襲われる可能性もあったんだから不安だろう」

「まあ、それはね」

逃避行は長く続かない。ここいらで休息を取ろうと思う。まあ、その前にやる事がいっぱいある。

「じゃあ、水を確認してちよつと潜ってくるからルサルカ、護衛をお願い」

「仕方ないわね。さっさと行ってきなさい」

ルサルカが隣に現れたので二人を任せて今度は地底湖に移動する。この水は弁当箱で掬ったが、回避する時に零しているので飲めるかはわからない。なので少し手酌で掬って舐めてみた。

なにもわからない。そういえば痛覚も味覚もないのだからわかるはずがない。アストルフオ、どんな感じ？

『ん〜問題ないよ。普通に飲める水だけど、マスターはともかくあの子達に飲ませるのなら沸騰させるのは必須だね。できたらろ過もした方がいいよ。かんせんしよう？ とかいうのになるかもしれない

し』

「わかった。助かった」

『やったー褒められた〜!』

一応、飲み水として使えるので頭を水につけて周りを見てみる。確認すると魚とか一切いない。これはもつと調査しないといけないので、鎧と服を脱いで裸になって剣だけを持って潜る。

『水着が欲しい〜!』

本当、水着が欲しいな。どちらの意味でもだ。こんな事を考えながら潜っていくと地底湖の底にキラキラと光る物を確認した。

『アレを回収しなさい』

底まで移動して確認してみると、それは水晶のようだった。そこで愛歌から助言というか、命令をもらったので剣で掘り起こして回収する。よくよく見るとそこらへんに結晶や貝が存在していた。まずは結晶を回収して浮上する。かなり重たかったが、そこは劣化しているとはいえサーヴァントのステータス。どうとでもなった。

「大丈夫?」

「溺れてない?」

「大丈夫だ。今、そっちに戻る」

結晶を持って帰り、三人に見せるとそれぞれ綺麗な結晶に触れだした。

「これは魔力が結晶化した物ね。水の蛇から漏れ出た物が蓄積したのでしょう」

「つまり、お宝って事?」

「お宝!」

「ああ、これはお宝だ」

この結晶はたっぷりと魔力を溜め込んでいる。つまり、ガチャの素材にできるという事だ。ならば回収してやらねばならない。

「いっぱいあったから回収してくる!」

「行ってらっしゃい」

「頑張ってね〜」

「期待しているわよ」

地底湖の底へと移動し、貝と一緒に回収しては地上に運ぶ。それを何度も繰り返ししているとゴゴゴゴゴという音が聞こえてきた。急いで陸地に戻る。俺が戻った瞬間、天井から濁流のような水が滝となって至る所から流れて落ちてくる。みるみるうちに水位が上昇していき、このままではまずい。

「鈴！」

「任せて！」

「蛇も守って！」

「頑張る！」

蛇の上に乗ってから鈴が結界を展開する。三角形の形にして濁流となりだした水を受け流していく。俺達も鈴に抱き着いて支える。もしもの場合は一緒に流されることになるだろうし、これでいい。実際に結界はどんどん壊されていく。壊された傍から新しい結界を展開して押し流されるのをどうにか防いでいる。

「鈴は負けない！」

必死に両手を突き出して結界を展開している鈴を支えていくと、次第に流れが収まってきた。どうやら、複数の鉄砲水が地底湖に流れ落ち、そこから川となって迷宮中に水が送られていく仕様のようだ。

「鈴、よく耐えてくれた」

「うん。頑張ったね。偉いよ」

「これ、しんどいよ……」

「それだけの価値がある」

濁流が収まり、地底湖を見ると魚が泳いでいた。どうやら、さっきの鉄砲水によって押し流されてきたのだろう。もし、鉄砲水のどれかにハジメが押し流された物と同じなら、近い場所に近付けるかもしれない。

「だいたい水位がわかったから、そこよりも高い所を作れば安心かもしれないね」

「水に濡れていない場所を探せばいい」

「えっと、何処かな？」

岩場の中には結構削られた物が多いが、中には高さが十分で水から

逃れた岩もある。そこに登って大丈夫かどうかを確認するが、中には溝ができていて水が溜まっている場所もある。その近くには更に高い岩があるけれど、ごっつごっつしていた。

「恵里、これを土魔法で高さを上げて整地できない？」

「できると思うけど……」

「それなら頼む。鈴は結界を使って岩と岩が平行になるように整えてくれ」

「鈴にお任せだよ。えっと、こうやって……」

二人の協力で平らな岩が数個できた。そこをさらに恵里の土魔法で埋めていくのだけど、流石に時間がかかるから恵里にお願いする。

「石でいいから、スコップとツルハシを作ってくれ」

「スコップ……わかったわ。これを埋めるのは僕一人じゃきついしね」

「鈴も手伝うよ」

「いや、鈴の身体じゃ手伝えないだろ」

「できるよ！　鈴だつてちゃんと考えているんだからね！」

「えっと、どうやるんだ？」

「こうやるの」

鈴が結界を使って地面とその下を指定して両手を合わせて力を込めていく。すると結界に閉じ込められた土が明らかに潰されて圧縮されていた。小さな範囲限定とはいえ、これは攻撃手段にもなるし、工具……重機にもなる。それにこれなら予定を変更してもいい。

「ナイスだ鈴。これで兔を倒せるかもしれない」

「でも簡単に壊されるし、まだいっぱい力を込めないといけないの。実戦じゃ使えないよ？」

「そこは訓練次第だな」

鈴の頭を撫でながら言つてやると、嬉しそうにはにかんで可愛らしい笑顔をを見せてくれる。それに圧縮された土は色々と使える。小説やゲームで得た知識を使えば兎共を狩れるかもしれない。

「じゃあ、鈴はいっぱい圧縮してくれ。そうだな。この岩場の周りに堀を作るようにして欲しい」

「堀？」

詳しく説明して堀が如何に防衛に適しているかを説明していくと、納得してくれたようだ。

「よくわからないけど頑張るよ。それとそのツルハシとスコップにも境界を使つて強度を上げておくれ」

「頼む。恵里は……」

「蛇の支配を優先するから」

「そっちは任せる」

「任せて」

二人を岩場の上に置いてから近くの水が溜まっている高めの岩場へと移動する。そこで英霊であるアストルフオの怪力を利用してツルハシで危なそうな岩を砕いて取り除き、スコップで掘つたり砕いた物を埋めたりして調整する。それから地面をしつかりと固めていく。本当にアストルフオには感謝だ。

「今日はここまでにするか」

ある程度作業が終わったので、水溜りから出て二人の所に戻る。すると鈴と恵里はぐったりとしていて荒い呼吸を繰り返していた。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫……魔力が、切れた、だけ……」

「ぼ、僕も……そ、それよりも、と、トイレに……」

「ああ、なるほど」

二人を抱えて地面に降りて少し離れた所に連れていく。そこでさつさとスカートやズボンを下着ごと脱がせてさせる。二人は本当に恥ずかしそうにしている。いや、少し泣いているからその場を離れた方がいい。今は比較的安全だから、二人の態勢を整えてから少し離れ、水を汲んできて布と一緒に渡す。

「じゃあ、服を脱いで渡して。どうせだから洗ってくるよ」

「ほ、本当に脱ぐんだ……」

「それしか仕方がないよ。魔力は拠点を作るのに使うんだから」

恵里が大人しく上も脱いで手ブラをしながら服を渡してくるので、それを受け取って大きな普通の布を渡す。鈴はまだ葛藤しているよ

うなので、脱がせたズボンとスカート、下着を回収する。その間もまだ悩んでる恵里が話しかけている。

「汚い服を着ていたい？ 私は臭いからいやだけど」

「うーうーわかったよ〜できるだけ見ないで洗ってね！」

「善処する」

「そもそも脱がす時に見られているんだけどね」

「うが〜！」

乙女として挙げてはいけない声だが、まあ仕方がない。裸に布を巻いただけの二人と居たら色々と興奮してやばいので彼女達の温もりが残っている服を受け取って地底湖へと移動する。そこで小さな水溜りを見つけたので、そちらで洗濯する。石鹸があればいいが、無いのでただの水洗いだ。もちろん、自分の服も脱いで一緒に洗っていく。

女性の下着を洗うというなんともいえないことだが、ふと二人の匂いが漂ってきて嗅ぎそうになる。だが、視線を感じて振り返ると鈴が恵里に身体を拭かれながらじーとこちらを監視している。

ここは誘惑を振り切って何もせず大人しく洗濯する。全部洗うとかなり汚れが出ていて水が汚くなった。しっかりと絞ってから布を巻いて二人の場所へと戻る。

「ただいま」

「おかえりなさい真名。鈴と相談して決めただけだけどお願いがあるの」

「何？」

「頭とかも洗いたいから、やっぱり水浴びがしたいの」

「それがどういう意味かわかっているよな？」

「わ、わかっているよ！ でも、頭も洗いたいし、仕方ないもん！」

「というわけで、洗ってちょうだい。お触りは許すけど襲わないでね」

「襲ったら駄目だからね？ 信じてるから！」

「襲うなら僕にして。僕なら何をしてもいいから」

「う〜」

「襲わない」

正直、目の前に染まる巨大な蛇の牙や口の中に突撃するのは恐怖を感じないが死を覚悟するような光景だ。血を浴びるとこれが自分の血や行き着く先なのだと思っても心が理解させられる。そのせいか、性欲が高まって二人がどんどん魅力的に見えて襲いそうにはなる。まあ、身体の中にアストルフォヤルサルカ、愛歌もいるのでやるという行為は完全に筒抜けなので、どうにか冷静になれる。それこそ二人から離れて発散したいが、それもできない。生殺し状態だ。

「なに、僕達にはその魅力がないと……？」

「それはそれで嫌かな……」

「どっちだよ」

「だから、妥協案でお触りあり？」

本当に恵里の言う通り、襲つても恵里は許容するだろう。ただ、鈴は文句を言うし、納得しても心押し殺して溜め込むだろう。これは恵里も同じか。恵里の場合は鈴を奈落に落とした負い目があるから、自分の身体を差し出そうとしているのだろうが、それじゃ駄目だ。奈落で一緒に過ごす間に恵里の事も気に入ってきた。だから、恵里にも生きて幸せになって欲しい。それに俺としてもユーリと笑顔で会えなくなる気がする。それだけは嫌だ。

「まあ、とりあえず洗ってやるから一人ずつな」

「えつと目隠しを……」

「駄目だ。落としたらすぐに助けられない。洗ってやるんだから見せるぐらい許容してくれ」

「うゝ」

「まあ、悩んでいたらいいよ。僕からお願い」

「わかった」

恵里を抱えて移動し、互いに裸になってから地底湖の中に入って座る。彼女を膝の上に乗せてから後ろから抱くようにして水に浸かる。

「冷たいけれど、やっぱり気持ちいい」

「お腹に手を回して固定しておくから、自分で拭いてくれ」

「無理よ。片手だからどうしようもないの。利き手を失ってるんだから洗って。別に手で洗ってくれてもいいし……なんなら、してあげる

けど」

「いや、それは……」

「硬くて熱いのが当たってるけど」

「それは諦めてくれ」

「別にいいけど、本当に鈴を襲う前に言つてよ。私がしてあげるから」

「その時は頼む」

「任せて」

眼鏡の無い恵里はこちらを見詰めて顔を合わせてそういつてから、俺の唇に軽くキスをしてくる。どういふつもりかはわからないが、どちらにせよ無茶苦茶恥ずかしかつたようでそのまま水の中に潜つた。すぐに引き上げてやるとなんでもないように装っているが、顔は真っ赤で恥ずかしそうにしている。

「さ、さっさと洗つて」

「了解、お姫様」

抱きしめる恵里の温もりが冷たい水の感触ではつきりとわかる。それに肌の感触も気持ちよくてゆっくりと時間をかけて洗つていく。「痛い。もつと優しく労わるようにして」

「すまん」

撫でるように身体を洗う。胸や下半身も全部だ。それから裏返して互いに抱き合うようにして、背中やお尻なども洗つていく。手摺がないから今はこうするしかない。拠点にするのなら手摺を設置してある程度二人だけでもできるようにしないと俺が死ぬ。最後に恵里の身体を片手で支えながら水面に浮かべ、髪の毛を水の中に漬けさせて空いている手で優しく洗つていく。

「あつ、そこつ、気持ちいい……人に髪の毛を洗ってもらうのっていいね。毎日お願いしたいかも」

「毎日ちよつと大変だな」

「確かに恥ずかしすぎて死にそう」

「ならやらなければいいだろう」

「でも、身体を洗う方が今は大事だと思う。それにもつと恥ずかしいところは見られてるしね」

「それもそうか」

「うん。あ、もういいかな。次は鈴ね」

「わかった」

恵里を連れて地底湖から上がり、布の上に恵里を寝かせて身体を拭いていく。その次は鈴を抱えて地底湖へと移動する。恵里と同じように鈴を抱えて浸かる。恵里と違って髪の毛を纏めている紐を解くと雰囲気少し大人びてみえた。

「やっぱり、すごく恥ずかしいよお」

「支えておいてやるから自分で前を洗ってくれ。その方がいいだろう？」

「真名君は鈴の肌が触りたいんじゃないの？ 恵里はそういう風に洗ってたよね？」

「鈴が嫌ならしない」

「鈴が嫌なら……」

しばらく考え込むと、鈴は驚いた事に渡した身体を洗うための布を渡してきた。

「いいのか？」

「うん。鈴だけ仲間外れは嫌だもん。恵里と一緒にがいいから、我慢するよ」

「我慢しなくていいんだが……」

「やだ。仲間外れにされるのって怖いもん」

「仲間外れにもしないって」

「わかんないよ！」

「いや、ないって」

「あつたもん！ 仲良くしていたのに鈴が間違った事を言われたから、怒ったのに皆、天之河君の方が正しい、鈴がおかしいって……それから、オルクス大迷宮に行くときだって……」

話を聞いていくとあのお菓子を盗まれた事件がきっかけで仲良かったクラスメイト達からハブられたようだ。だから、空気を読んで後ろに下がってきたとのこと。これが鈴が俺とユーリの場所に入ってから少しして来た理由みたいだ。天之河の方は香織に構っていて

鈴にはほとんど見向きもしなかったのかもしれない。

今までクラスのムードメーカーとなっていた鈴にとってはかなり精神的に不安定になったことだろう。そこで更に追い打ちがかかり、親友だった恵里に裏切られて奈落に落とされた。そこで死ぬ事はなんとなくわかっていて、自暴自棄になったのかはわからないが、なんとか恵里と話して和解したらしい。鈴は恵里の話はしてくれなかったが、それでも色々とあるみたいだ。

「ねえ、鈴が悪かったのかな？　こんな風に奈落に落とされるようなことをしたのかな？」

「悪いのは他の連中だ。一番は戦争を受け入れた天之河だろうが、それに同調した鈴達も遅かれ早かれ生死を賭けた戦いに赴いてこうなっただろう。ここまではいいか？」

「うん。でも、クラスの皆は……」

「ここで考えて欲しいのは戦争に参加する事になって訓練とはいえ頑張っていたところで、表面上は問題ないにしても環境が変わり、元の場所に帰れないし連絡もつかない。更にやる事は人殺しの訓練だ。皆、知らず知らずのうちにストレスを溜め込んでいたはずだ」

「確かに……それはわかるよ」

「で、そこにメイドが持ってきた鈴のお菓子を食べた。当然、盗まれて勝手に食べられた鈴は糾弾する」

「うん。した」

「じゃあ、食べた人は罪悪感を感じつつも罪から逃れようという心理が働いて天之河に賛同した。しかし、これで鈴をまた受け入れようとしても、罪悪感や罪を糾弾されるかもしれないと思ってできない。結果、ハブられることになったと思う。まあ、あくまでも想像だが……園部達は普通に謝ってくると思うが……」

「わかんないよ。すぐ眠って起きたら迷宮だし……」

「そうか。ここを出たら聞いてみるのもいいかもしれないな」

「うん……怖いけど、頑張ってみるよ」

「それと俺は鈴が悪いとは思わない。当然の事だ」

「よかった……」

俺を掴んでこちらに振り向いた鈴が抱き着いてきた。しばらく抱き合っていると、視線を下にやって何かに気付いたようで顔を真っ赤にしてボソツと呟いた。おそらく、鈴のお腹に当たってるアレだ。

「もう、鈴お嫁にいけない」

「それなら諦めて俺の嫁になるとか？」

「え？」

「じよ、冗談だからな」

「だ、だよね……うん……」

なんとも言えない雰囲気になったので急いで話題を変える。

「それで身体を洗うのはやっぱり鈴が自分でやった方が……」

「ううん。洗って欲しいの。やっぱり仲間外れは嫌だし、恵里にやったことは鈴にもして。鈴にやったことは恵里にもして。鈴と恵里を同じように扱って欲しいの。鈴にとっては恵里はかけがえのない大事な親友だからね！」

「わかった。でも、胸とか触っても我慢してくれよ」

「うん。恥ずかしいけれど我慢するけど、あんまり触ったら駄目だからね？」

「善処します」

「もう！」

鈴が一応、元気になったようで良かった。せつかくだから鈴の身体も堪能させてもらおう。それに俺の背中も洗って欲しいから、抱き合って互いの背中を洗うようにする。

「あ、そういえば恵里から軽くキスされたけど、鈴もするか？」

「え！ それはその、あうあう」

「嫌ならいいけど」

「嫌じゃないよ！」

「そうなんだ」

「も、もう何度もしてるからね、うん。ちゃんとできるよ」

そう言っただけで目を瞑りながら唇を差し出してくる。軽く触れ合うだけのキスだけど、鈴からしてもらったのははじめてだ。

「こ、これでいいよね！ 手早く洗ってあがろう！」

「あ、ああ、そうだな」

鈴の頭も綺麗に洗った後、恵里の元へと移動する。すると彼女は火にあたっていた。魔法で作りに出した火のようだ。

「随分とお楽しみだったようね」

「そ、そんなことないよ！ うん！」

「そう。別にいいけれどね」

「じゃあ、拠点に戻って寝る用意をしようか」

「そうね」

火を消した後、岩場についた平らな場所に移動する。狭いが落ちないようだけにだけしてここで眠るようにする。近くに火を焚いて剣を地面に突き刺し、そこに洗濯物をかけて、食事をしたら二人を仰向けで寝かせて順番に覆いかぶさって深いキスをする。二人と唾液を交換して魔力を高め、最後は吸い取って吸収する。魔力がほぼなくなった二人はそのまま気持ち良さそうに眠りについたので位置を変えて二人に腕枕しながら眠りにつく。

『どうでもいいけれど、地上に戻ったらその二人は離れていくんだから他の男に取られる事も考えなさいよ』

第14話

朝、目が覚めて目を開くと程よい温もりと重さが腕にかかっている。隣を見れば可愛らしい顔で寝ている鈴と恵里の姿が見えた。本当なら二人を置いて朝食の魚や貝を取りに行きたい。でも、それをやると無茶苦茶二人に怒られる。

一度二人が眠っている間に取りに行って、戻ってきたら二人が起きていて泣いていた。置いていかれたと思っただけ。俺は置いていくつもりはないが、どうしても不安になってしまおうようだ。だから、不安にさせない為にも起きてくるまでは待つ。裸で抱き合っただけの布で寝ているので、手は出さないようにして寝顔だけを堪能する。

「おはよう」

「んん〜おはよ〜」

「ん〜おはよう」

二人が目を覚ましたら寝ぼけた感じで俺に身体を擦り付けて頬擦りのような事をしてくる。最初は悲鳴とビンタが飛んできたので押しさえつけてしつかりと目覚めさせる事が必要だった。だけど、今ではこんな風に甘えてくる。

そんな二人を敷いている布の上に置いてから立ち上がり、彼女達を水場へと運ぶ。そこで顔を洗ってやってから覚醒を促す。同時に二人と一緒に水の中にゆっくりと入って身体についた汚れを落とすとしていく。

屋根もない吹き曝しの所で洞窟とはいえ野宿しているので、夜間に大分汚れてしまう。だから、俺達の朝は水浴びから始まる。

水浴びをすると二人も完全に目覚め、顔を赤くして大人しくなる。昨夜と今朝の痴態を思いだしてしまうのだろう。ただ、二人が満足するまでは役得として二人を抱きしめて温もりと肌を堪能させてもらう。美少女二人と水浴びなんて普通は体験できないことだから、後悔しないようにしないといけない。

本当に何時死ぬかわからない。例えばこのタイミングで兎がこん

にちはしたらやばい。新しい水の蛇が現れたら死ぬ。それぐらい危険な場所だ。

「よし、おはよう。今日の予定を話し合いますか。いい?」

「うん。鈴も大丈夫。目が覚めたよ」

「俺も大丈夫だ。で、今日の予定だな。まずはいつも通りに食料確保。その次はそれぞれの行動だけど、恵里はどんな感じだ?」

まずは基本的な事を話す。食料確保は毎日俺が地底湖に潜って魚や貝を取ってきている。そうしないと鈴と恵里が飢えて死ぬからこれは外せない。俺はある程度魔力があれば問題ないが、蛇の肉もあるから大丈夫だ。蛇の肉。そう、蛇の肉だ。

恵里がアンデッド化しようと言っていたが、ゾンビって腐った死体だ。つまり腐敗している。治癒術師も居ない現状では、腐敗によって病原菌が繁殖して病気を貰えば死ぬ。だから腐る物だけは早目に処理させてもらうことにした。時間がかかってしまうのは仕方がない。骨だけ残したスケルトンスネークになっていた。それでもかなりの時間がかかっている。

「スケルトンにしたことで魔力が通り易いから今日中に終わるでしょうね。そこから扱う為の訓練が必要だから、実戦はもう少し後ね」

「わかった。恵里はそのまま続けてくれ。鈴はどうだ?」

胸やあそこを手で隠している鈴に伝えようと、恥ずかしそうにしながらもしつかりと答えてくれる。

「大分圧縮できるようにはなってきたけど、やっぱりイメージが上手くいかないんだよね」

「今はどんなイメージでやっているの?」

「えつとね……結界を縮めて押し潰していくイメージ?」

「いつそプレス機をイメージするとか?」

「プレス機か」

「両手をプレス機として、間に結界の箱を作る。それを両手で叩き潰すとかどうだ?」

両手を叩くみたいになればイメージしやすいはずだ。

「でもそれだと潰せる感じがしないんだよね」

「いつその事、二つの結界を用意して一つは圧縮する用に強度を上げ、もう一つは柔らかい結界で押し潰しやすくする。それで連動させるのはどうだ?」

「いや、流石に無理でしょ」

「連動させるのが難しいかも」

「残念だな。連動させれば俺が知っているキャラにそういうのがいるんだがな」

「どんなの?」

「ヒントになるかもしれないし、教えてあげて」

「わかった」

Fate/Extraに出てくるパッションリップについて説明する。

「全部両手で押し潰すとか鈴にはそんな怪力ないよ」

「他にないの?」

「そうだな……キュツとしてどつかーん?」

「なにそれ」

東方プロジェクトの吸血鬼フランドール・スカレットの力。対象を目で見詰め、手元に目玉を召喚してそれを潰すと相手のその場所が問答無用で破壊されるやばい力だ。

「キュツとしてどつかーん……結界内で爆発させるの?」

「そういう意味じゃないと思うけれど……結界を利用したえげつない攻撃手段を思い付いたんだけど……」

「俺もだ」

「教えて! 鈴だつて役に立ちたい!」

「わかった」

簡単な話だ。結界で隔離し一定空間を密閉する。そこに急激に体積を増やす物質……水を入れて内部で一気に閉じ込めたまま水分を蒸発させる。限界まで入れられていた体積は急激に膨れ上がる力に耐えられずに爆発する。水蒸気爆発という奴だ。それを結界で起こさせる。それも大きな結界で周りを覆って敵以外に衝撃がいかないように調整すればかなりの威力になるだろう。

「他には？」

「鈴は一酸化炭素中毒ってしってるか？」

「えっと火事の時に人が死ぬ原因だよね？」

「そうだ。それを密閉した結界内で起こしてみろ。生物だったら死ぬぞ」

「酸素を抜くのと変わらないよ？」

「酸素を抜くだけなら時間がかかるだろうが、そこで抜くのと同時に燃やせばどうなる？」

「死ぬ時間のはやくなる！」

嬉しそうに物騒な事を言う鈴だが、今は置いておく。

「結界を連動させるのも試していくといいわよ。それと複数の結界を同時ではなくて、選んだ結界を解除できるようにすれば鈴はかなりの攻撃手段を手に入れられるわ」

「頑張る！」

「他は何かあるか？」

「そうね……ルサルカさんに魔法か魔術かは知らないけれど、それを教えてもらうことはできない？」

『代価をよこしなさい。無料ただで教えるつもりはないわよ』

「代価が必要だ。何が欲しいのか……」

「私が欲しいのはく生きの良い魂よ♪ そうね、自力で兎達を狩ってからなら少しは教えてあげる。今の貴女達はまだ歩き始めたヒヨコさんだもの。もっとも、貴女達の魂を差し出すのなら、すぐにでも教えてあげるけど」

ルサルカが実体化して地底湖の中に足をを入れて座りながら、直接伝えてきた。だが、その内容は到底許容できるものではない。

「僕の魂なら……と言いたいけれど、鈴達が怒るだろうから駄目だね。大人しく兎を狩るよ」

「残念♪」

ルサルカが消えて俺と鈴がホツとした表情で恵里を見詰めると、彼女は少し照れくさそうにする。

「僕達は三人で生き残るんだから、僕が死ぬわけにはいかない。どう

しようもない時はその限りじゃないけれどね」

「えりえり！」

「鈴っ、やめっ！ 倒れる！」

「あ、ごめんなさい」

鈴が恵里に抱き着いたのでバランスが崩れそうになるが、必死に耐えた。

「それじゃあ、兔を狩る事を考えるか」

『何匹かこつちの様子を確認してきているから、そろそろ襲ってくるかもよ〜』

「わかった。どうやらあまり時間はないみたいだ。兔共が俺達を調べているらしい。連中の討伐方法を考えよう」

「うん、わかった。それでどうする？」

「まず前提として僕達の戦力では正面から戦えば負ける。だから、正面から戦わないようにする」

「まあ、普通に考えて正面からいかないな」

「うん鈴もできる限り怪我無く倒したいよ」

二人をこれ以上怪我させないのが条件だ。二人共、精神的に限界に近いはずだ。身体を欠損して恥辱まで味わっているのだから、心が壊れる可能性は大きい。

「僕も流石に詳しくないけれど、罨がいいと思うよ」

「罨かく鈴もそつちの方がいいかな」

「罨、ね」

「真名、お願い」

「お願い。思い付いて」

「無茶ぶりだな……」

いや、待てよ。鈴が居れば罨で一網打尽にできる可能性は高いな。罨はスケルトンスネークがいるし、俺もできる。もしもの為の緊急脱出用通路を用意しておけばいい。

『アストルフオ、こんな感じでできるか？』

『任せて！ ライダーじゃないけどなんとかやってみる！』

『頼む。ルサルカももしやばければ手伝ってくれ』

『仕方ないわね。こいつはどうするの?』

『どうせ見学だろ?』

『そうね。見させてもらおうわ』

脳内会議はこれでいい。それよりも二人に作戦を伝えて準備をしてもらう。準備をしつかりとしないと死ぬ事になる。

「やるわ。スケルトンスネークのコントロールをしつかりとできるよ
うにならなくちゃ」

「鈴は責任重大だね」

「むしろ鈴が居なければ無理な作戦だ。頼むぞ」

「任せて!」

デスマーチのような作業だが、突貫で終わらせる。トラップの用意をしつかりとしないといけない。でも、まずは鉄砲水で流されてきた魚を剣で突き刺して食料を確保することか。腹が減っては戦はできない。

三日後。準備が整ったので身体をアストルフォに明け渡して、作戦を開始する。拠点であるこの場所から離れるのは恵里が支配したスケルトンスネークと俺だけだ。護衛としてルサルカは残ってもらうが、変な事をしないようには言い聞かせてある。出発するために二人を抱き寄せて帰ってくるためにもしつかりと挨拶はする。

「行ってらっしゃい。死なないでね」

「もちろんだ」

恵里が抱き着いてきて、頬にキスをしてくれる。

「えっと、必ず生きて戻ってきてね」

「ああ」

「その、行ってらっしゃい」

恥ずかしそうにしながら、鈴も恵里とは反対のところにキスをしてくれた。

「成功したら鈴と二人でご褒美をあげるから、楽しみに待っていると
いいわよ」

「う、うん……恥ずかしいけど頑張るから、期待してね？」

「ありがとう。頑張って帰ってくる！」

『死亡フラグ？』

挨拶を交わした後、スケルトンスネークに乗って移動を開始する。狙うは兎の群れだ。

◇マジカルにゃんこ

蒐集を行いながら、地上へ向けて移動を開始。襲ってくるモンスターに殺され、食べられました。ベヒモスの力を持っているとはいえ、無限ではありませんから魔力を温存して活動しています。

さて、食べられた私は相手の胃袋で増殖して対象の身体を取り込んで復活します。取り込んだモンスターのデータを即時に解析し、自らの身体に適応させて進化を行います。

その後、蒐集したデータとして盟主であるユーリに送ります。ユーリからは他のマテリアルが蒐集したデータを送ってもらい、更に自己進化を行います。上層は弱いのですが、下層に向かったマテリアルの死亡率が高いです。

『マテリアルDよりSに警告する。無暗に相手の体内に入ってから増殖するでない。復活のコストが予想以上にかかっておる』

『マテリアルLが原因ですね』

『ボクの相手がおかしいだけだぞ〜！』

『理解している。しかし、マテリアルSの敵は弱すぎる。よって、マテリアルSには特別指令を出す。量子コンピュータの掌握と残っているデータの転送及び消去を行ってこい。それと連中の動きも調べて』

欲しい』

『かしこまりました。しかし、蒐集しても構いませんね?』

『かまわん』

特別指令を貰ったので、私はそのまま身体を隠蔽して迷宮から外に出ます。その後は馬車にコッソリと乗り込んで移動します。

移動を開始して無事に目的の場所に到着し、忍び込めました。警備はザルといたいたいのですが、ユーリが用意しておいた量子コンピュータへ入り込むという裏技を使ったのでなんとも言えません。私の身体がプログラムだからこそできる裏技ですね。

さて、量子コンピュータをユーリから託されたパスワードを打ち込んで権限を掌握。続いて量子コンピュータへの同化と増殖を開始。量子コンピュータで得られた情報や量子コンピュータそのものの材質や制作工程、設計図などを全てユーリに転送します。ユーリからマテリアルDへと渡り、迷宮の一部にはユーリと我等が全力で活動するために必要な物が作られるでしょう。

新しく作った小さな猫たちを放ち、王都や神山と呼ばれる場所には派遣します。素材が足りませんが、それは神山にある宗教団体の施設から回収します。彼等の為にマスターが苦勞なされているのですから当然です。

「報告を聞こうか」

王宮に潜ませていた猫から情報が来たのでそちらへと移動しました。そこは玉座の間のように、騎士や貴族の人。王族の人と教会の人であろう者達がいきました。その人達が三人の鎧を着た男性から報告を聞こうとしているようです。

「はっ。オルクス大迷宮にて使徒の一人が不用意に鉱石に触れ、転移の罫が発動。その後、転移したのは65層でした。そこでベヒモスが現れ……」

「ベヒモスカ。それでどうなった?」

「五人が犠牲になりました」

「報告では四人とあるが……」

「一人は使徒の一人が召喚した者ですので……」

「ならば四人でよい」

「どうやら、オルクス大迷宮で被った被害を報告しているようです。これは丁度いいですが……ユーリは被害に入れないのですか。まあ、召喚獣ですから仕方がないですね。」

「四人もの使徒が初回とはいえ犠牲になるなどなんたる失態か！」

「返す言葉もございません」

「よい。まずは報告を聞くのが先だ。犠牲者は誰だ？」

「錬成師の南雲ハジメ。召喚士の沙条真名。結界師の谷口鈴。降霊術師の中村恵里です」

「おお、香織は無事か！ よかった！」

「錬成師や召喚士は役にたつたんだろうが、後ろの二人は痛いな」

「確かに教皇陛下の言う通りですな」

「教会の人、教皇と王様であろう人が賛同しました。マスターが役に立たないと言われると、どうしようか悩みます。」

「お待ちください！ その者達はかなりの技術者です！」

「王様と教皇の言葉に報告していた騎士が反論してくれました。少し様子をみましょう。」

「技術者か」

「はい。彼等はバッテリーと呼ばれる魔力の貯蔵装置を作り上げました」

「なんだと！」

「それが誠であれば飛躍的に我が国の力は増大しますぞ！」

「うむ。その装置の作り方は？」

「彼等の工房として与えた部屋にあるかと。もしくは協力していた二人ならばあるいは……」

「その者達の名前は？」

「白崎香織と清水幸利でございます」

「すぐにその二人と宮廷錬成師を連れて共に工房を調べよ」

「お待ちください。白崎は仲間を失ったショックで気を失っており、清水も同じくショックを受けてふさぎ込んでおります。今しばらく

の休息は必要かと」

「ならん。すぐに必要だ」

「エヒト様を選ばれた使徒様ならその程度は大丈夫でしょう」

「錬成師達も準備がありましよう。明後日の昼からではどうでしょうか？」

「明後日か……よかろう」

ふむ。バッテリーぐらい差し上げて構わないのですが……

「しかし、使徒四人の死亡はどうしましょうか？」

「発表しないわけにもいかんか？」

「大々的に宣伝してしまいましたので……」

「召喚士と錬成師は無能ということで片付けられますが……」

「さて、どうするか……」

「どうやら、召喚士は魔族と通じていたようですな」

「教皇様。どういうことでしょうか？」

「65層への転送とベヒモスが召喚されたことは魔族に与した召喚士がしでかしたこと。実際、彼はエヒト様の神託を蔑ろにしております。魔族と通じ、他の使徒様達を妨害したのでしよう。足を引っ張った錬成師により、降霊術師と結界師の二名が崩落したのかもしれない」

「あ、あの！ 発言をよろしいでしょうか！」

「構いません」

「ありがとうございます。その三名が落ちる時、一人はわかりませんが、もう一人の降霊術師の方が召喚士に押されて一緒に落ちて行く姿をみました」

65層への転送やベヒモスの召喚は出鱈目ですが、これは事実ですね。マスターが突き落としたのはまだ生きていたチビットを通じて情報を得ていましたから。嘘に真実が混じっているのです。たちが悪いです。

「おいー！」

「許せん！ 香織を危険にさらす原因を作るなど！」

「なるほど。決まりですな」

「そのようだ。このように発表する。魔族に与した召喚士が暗躍し、勇者達は降霊術師と結界師を助けようとしたが錬成師が足を引つ張ったことにより失敗。二人は召喚士と共に奈落へと落ちて死亡した。以上だ」

「お待ちください！ そのような事はありません！」

「黙れ。これは勅令である」

「ぐっ……」

ふむ。騎士の一人はましですが、もう一人の騎士は……まあ事実を言っただけですね。他の者達は私としてはアウトです。

「ではこのような感じにします。勇者様達には内密に連絡しましょう」

「その時は私と教皇様、メルド、数名の勇者だけでいいだろう」

「そのように手配いたします」

どうやら事前に決められた事を勇者達に伝えるようですね。さて、どちらにせよ、私の行動は変わりません。

『ユーリ、どうしますか？ 私はユーリの指示に従いますので言っってください。なんでしたら、殲滅のオーダーも承ります』

『えっと、殺すのは駄目です。彼等が言っていた恵里さん突き落とされたのは事実ですから、その理由を知らなければそのように見えるかもしれません。ですから、殺しはしません』

『ではバッテリーの制作を止めますか？』

『止めればマスターのクラスメイトの人達や無辜の民が犠牲になります。なのでバッテリーの製造は香織さんと清水さんのみ許可してください』

ユーリは相変わらず優しいですね。私ならバッテリーをある程度与えてから停止させ、備蓄した場所を遠隔操作で爆破します。これでユーリとマスター達を貶した報復とします。ねえ、ナハト。

こくこくとナハトも頷いてくれますが……思考がナハトの影響を受けているかもしれませんが、理を司る者として今回の事は許容できません。マスター達への対応が普通なら、搜索するための財源として無料で渡しました。ですが、搜索もせずに死んだ者としてマスター達

に汚名を着せるとなると話は別です。

『随分と生温いですね。彼等はマスターの敵となったのですよ？ マスターが殺されるかもしれませんが』

『私達が彼等を処分すると決めることは許されません。マスターの判断に従います。ですから、ごめんなさい。甘いのは承知していますが、できるだけ殺したくないのです』

『ユーリの考えはわかりました。賛同もします。ですが、このまま引き下がる事はできません。ユーリ達が一生懸命に作った物を利益だけ掠め取り、マスターとその友人を陥れて貶すのです。それ相応の代価は支払っていただきます』

『シュテル……』

『今はマテリアルSにやんこです』

『どうするつもりですか？』

『まずは王宮の宝物庫と教会の宝物庫から代金を徴収します。続いてバッテリーにシステムを追加し、充電された魔力の一部を私達へ流れるようにします。もちろん、バッテリーはこちらの指示で何時でも停止と暴走させられるように仕掛けを施します』

『く、黒いですシュテル……』

『マテリアルSにやんこです』

『き、気に入ったんですね。可愛くていいと思います。わかりました。マテリアルSにやんこ。ユーリ・エーベルヴァインの名の下に許可します。代金の徴収及び量子コンピュータ、バッテリーへのリミッターと改造をお願いします』

『お任せください。綺麗に舐め取ってあげます』

『く、くれぐれもやりすぎないでくださいね！ 後、香織さん達の事もよろしくお願いいたします！』

『はい』

さて、ナハト達。お仕事のお時間です。宝物庫で魔力あるものを全てを徴収します。例外はありません。全て取り込んで解析。データの採取が終われば魔力リソースへ変換。マスターへの代金として送ります。続いて教会の探索も行ってください。連中からは根こそぎ

奪って構いません。寝ている最中なら蒐集もしてください。私はこれよりバッテリーのシステム改造に入ります。

『『『く・♪』』』

さて、一部は香織という人の所へと送っておきましょう。頼まれませんでしたからね。

第15話

身体の全権をアストルフオに委ねた俺はもう見ている事しかできない。そんな訳である程度移動したらスケルトンスネークの中に入る。ここからなら蛇腹剣で攻撃できるからな。

スケルトンスネークはすぐに兎達の縄張りに侵入し、しばらくすると10匹の兎達に囲まれて攻撃される。こちらも蛇腹剣で骨の隙間から攻撃する。アストルフオに身体を使って何度も訓練してもらったかいがあつて、こちらに攻撃してきたタイミングで2匹ほど斬り殺せた。

「絶好調〜！」

『スケルトンスネークに指示を出して撤退させてくれ。このままじゃ無理だ』

「わかつてるよ、マスター！ 計画通りにだね！」

『そうだ』

「了解〜」

スケルトンスネークが群れから逃げる。兎達は声を上げて仲間を呼びながらこちらへと向かつてくる。それをアストルフオは蛇腹剣で相手の蹴りから放たれる空気の刃を撃ち落とす。手数が相手の方が上なのでスケルトンスネークはどんどん傷が出来て崩壊していく。

逃げてる最中に他の群れも合流して4匹が増援としてやってきた。これで14匹。2匹は倒したので残り12匹だ。相手の攻撃が骨の隙間を通つて俺にも降り注ぐが、アストルフオがすぐに回避行動を取つて反撃として蛇腹剣を骨の間から放つて串刺しにする。

「ん〜やっぱり魔力の消耗が多いなあ〜」

『勝てないか』

「このままだとね。もうすぐ壁も壊れるし……でも大丈夫！ ボクはマスターの剣？ だからね。勝利するよ」

なぜ疑問形なのか問いただしたいが、まあいいだろう。そう思った次の瞬間。尻尾の部分が崩壊してそこから兎が入ってくる。同時に左右からも攻撃が飛んできて、アストルフオが回転して蛇腹剣で薙ぎ

払う。

「ん〜こまでだね。とう〜！」

そのまま踵を返して口の中へと飛び込み、スケルトンスネークに口を開かせて脱出する。すぐに口を閉じさせることで後続の兎を倒そうとしたようだが、相手は瞬時に馬鹿みたいな速度で接近してくる。だが、速度はこちらも負けていない。アストルフオは後ろに目でもあるかのように振り返りながら剣を振るって相手を切断する。そのはずだったが、蹴りで弾き返される。後続はしっかりと口で防がれたようでないが、この一体が厄介だろう。

「ボクと君達、どちらが兎さんとして速いか勝負だ！　いっくよ〜！」
俺がそう思っているとアストルフオが逃げた。後ろはスケルトンスネークが無茶苦茶に暴れている。そちらにかかりつきりになっている兎を逃げながら背後から強襲して殺し、また逃げる。当然、兎達はアストルフオを追ってくるが、持ち前の速さと勘で避けていく。もつとも、相手の数が多いのでアストルフオの身体に傷が増えていく。

「あはははは、楽しいねマスター！」

『そうか？』

「そうだよ〜！」

恐怖は感じないので、しつかりと見る。蹴りを剣で弾くとすぐ近くに別の兎が空中で方向転換をし、瞬きする間にやってきた。避けられないはずの蹴りを首を傾げることで回避し、騎士剣を引き抜いて切り捨てる。騎士剣は防御に使い、蛇腹剣を攻撃に使っていくようだ。

「あく更に追加か。うん、これはもう無理！」

『だな』

4匹が更に追加され、合計で18匹。殺したのが3匹。全然無理だ。そんな訳で目的も達成したのでやはり逃げる。物凄い速度で駆け抜けていく兎を引き連れたアストルフオが鈴と恵里の居る場所へと向かう。

地底湖と岩場が見えてきて、置いてきた鈴と恵里の姿と護衛のルサルカの姿が見えた。後ろを振り返れば大量の兎が追ってきている。

岩が置かれている程度の平らな地面を踏みしめて駆け抜ける。

あるていどのところで立ち止まり、相手を確認する。兎達はすぐに俺達を取り囲んでいる。予定通りなので放置して合図を出す！

『アストルフォー！』

「はいはい！ すーちゃん！ おねがい！」

すーちゃんという不思議な名前に混乱したようで、すこしタイムラグがあった。その間に四方八方から攻撃されているけれど、二つの剣や体術を駆使して撃ち落としていくが、限界は近い。

「はやくお願い！」

『頼む！』

「うん！」

鈴の声が聞こえて地面が消失した。地面がなくなればその上にあった物は当然落ちる。俺達も例外ではなく、鈴が掘って合わせた半径30メートル、深さ50メートルほどの巨大な穴へと落ちて行く。兎達は嘲笑うかのように空中で力場を使って浮いている。そんな中、底に到着した俺達はさっそく攻撃を再開する。

「マスター！」

『宝具の使用を許可する！』

「やったね！ 華麗に可憐に、舞って散りゆく月下美人！ 十重に二十重にぎりぎりぎりぎりぎり！ よーし、ボクってばカッコいいぞー！」

ヴルカーノ・カリゴランテ
僥倖の拘引網!!」

蛇腹剣の長さが格段に、有り得ないくらいの長さへと変化して広大な空間を縦横無尽に移動して兎達を斬り裂く。兎達は空中に幾つもの足場を作り出し、それを蹴って回避する。そんな中で接近して兎達が襲ってきた。

「ああもうっ！」

宝具を使っても数匹を斬り裂けたけれど、複数の兎が近付かれる。そうなると多勢に無勢で攻撃にさらされてアストルフォーが攻撃を防ぐ事になった。

ヴルカーノ・カリゴランテ

僥倖の拘引網で攻撃し、騎士の剣で防ぐ。複数の蹴りを受けて身体が弾き飛ばされる。その先にも兎達がいてまた蹴り飛ばされる。当

然、アストルフオもただでやられる訳がなく、僥倖ゾルカーノ・カリゴランテの拘引網を使った蛇腹剣で斬り殺していく。

「身体が重い！ 魔力が足りな〜い！ 破却宣言しても足りない！ 自身に毎ターンNP獲得（魔力回復）状態を付与（3T）」「Lvで強化」自身の弱体状態を解除」

やはり、俺の魔力が足りない上に召喚キャパシティーのオーバーが痛い。ステータスがかなり減っているのだから仕方がないだろう。

『アストルフオ、そろそろ限界じゃないのか？』

「ん〜そうだね！」

アストルフオが兎の蹴りに合わせて飛び上がり、わざと弾き飛ばされる。その先には小さな、本当に小さな横穴がある。この大穴は鈴が繰り返して境界を展開し、圧縮を繰り返して作り出した空間だ。横穴だって同じ方向で作ってあるし、しっかりと境界で補強してある。そうしないとオルクス大迷宮がせつかく作った大穴を再生させていくからだ。

「よし、いっくよ〜」

アストルフオが飛ばされながら蛇腹剣を消し、魔笛を作り出して口に咥えて思いつきり吹く。この魔笛は敵全体に恐怖状態を与え、自身に回避状態を付与する。この回避状態は相手を恐怖させることで簡単に回避することができるのだと思う。

「~~~~ッ！」

魔笛の音が聞こえると同時に兎達の動きが一瞬停止し、混乱してキョロキョロと周りを見出す。そのタイミングで天井にあった複数の境界の内、三枚目の境界が解除される。するとあら不思議。上に乗っていた圧縮されて出来た土の塊達が次に展開されている境界に向かつて突き進んでいく。

「爆嵐壁を利用した加速攻撃！ いっけえええっ！」

衝撃を受けた二枚目の境界が空気の爆発を起こす。そのタイミングで一枚目の境界を鈴が解除。爆発の衝撃で一枚目に乗っていた岩が加速して大穴に向かって降り注ぐ。三枚目に乗っていた岩は四枚目に衝突してまた爆発を起こす。二枚目に乗せられていて上の境界

に吹き飛んで衝撃を与えた岩もその結界の爆破によって穴に向かって放たれる。

「ふふふ、恐怖で混乱している時に多段攻撃による爆撃。回避できるかな？」

「えりえりも真名君も黒いよ！」

兎達の一部は正気を取り戻して必死に避ける。ほぼ大穴全てが埋まる計算で放たれているわけで、空気を蹴って逃げようにも、一つ回避したら次のがすぐにくる。二重、三重と落ちてくる質量攻撃に兎達は耐えられないだろう。

「につげろ〜」

もちろん、それは俺達もだ。なので蹴り飛ばされた勢いを利用して横穴に飛び蹴りみたいな感じで入る。そこはアストルフオが一人だけ入って少し余裕がある程度の幅なので、兎が来ても剣を上突き出しておくだけでいい。

目の前に兎が飛び込んでくるが、寝転がりながらアストルフオが剣を突き刺して押し出し、岩に押し潰されていく。兎達の断末魔が響く中、永劫破壊エンペイヒカイが発動して兎達の魂を吸収していく。ルサルカにも別けなくてはいけませんが、これで更に強くなれる。

しばらく待機していると音が止んで動きがなくなった。どうやら、討伐が終わったようなのでじりじりと下がって方向転換して突起を掴んで穴を登る。

「ぶふあっ〜」

「お疲れ様」

「鈴達の勝ちだよ〜」

地上に頭を出す二人が手を差し出してくれるので、それを掴んで穴から外に出る。大穴の方を見ると、しっかりと地面に埋まっているのがわかる。

「ルサルカ、どうだ？」

「探知術式にも反応がないわね。うん、ちゃんと死んでるわよ。まあ、こんな質量攻撃を連打されたら普通の奴なら死ぬでしょ」

「ルサルカならどうなの？」

「私？ 当然生きてるけど？」

「凄いね。鈴でも死ぬ自信があるよ」

この程度の攻撃じゃルサルカは殺せないようだ。もつと威力のある攻撃じゃないと駄目なんだろうな。それこそスライトブレイカーを非殺傷設定解除して撃つぐらいじゃないと無理かもしれない。

「これで僕達に魔術を教えてください？」

「お願いいたします！」

「まあ、約束だしいいわよ。でも、授業料は高いからね！」

「支払いは真名がしてくれる」

「おねがうい」

「俺が出すの？」

「男なんだから当然よね？ 期待しているわ、マスター♪ なんなら身体でもいいいわよ♪」

「だめ！ それは絶対駄目だからね！ マスターの身体はボクのはんだから！」

「え、真名ってそっちの趣味が……」

「そっか、それだから鈴達を襲わないんだ……」

「違う、違うからね！」

余計な事を言ってくれたアストルフオの言葉を慌てて否定する。

「アストルフオの事は好きだが、そういう対象としては見ていない！」

「それはそれでどうかと思うわね」

「外見が女の子だからね」

「つまり、どっちもいけるのね。お姉さんと一緒ね！」

「ちがう！ 俺は女の子が好きだ！ ホモはNG！」

「レズは？」

「それは有り」

「つまり、男と男の娘はありよね？」

「なしで！ というか、なんでこんな話に……」

まあ、皆笑いながらなので問題ないだろう。ルサルカも楽しそうにこちらをからかってきているし、大丈夫だろう。大丈夫だと思いた

い。きつと大丈夫だろう。そのはずだ。

「で、倒したのはいいけれど、死体の回収はどうするのよ？ 魂は回収したよだけど……」

「鈴先生、お願いします！」

「鈴がやるの！」

「鈴しかできないでしょうね」

「あ、また使うから結界を使って持ち上げてね」

「え〜い真名君も手伝え〜！」

「はいはい、お姫様」

「よろしい」

鈴を抱きしめて埋まった穴の近くに移動して爆嵐壁を一番下と一番上に展開。上の方に衝撃を加えて連鎖を発生させる。これによって一番下の爆嵐壁も爆撃して岩が一気に穴から飛び出してくる。後は段階的に岩が落ち切る前に結界を展開して受け止めれば大丈夫だ。

「長くはもたないから、回収急いでね！」

「お任せあれ！ アストルフォ！」

『休みたいけど仕方ないね！』

浮き上がっている岩の隙間に蛇腹剣を這わせて兎の死体を穴の外に弾く。時には岩ごと弾いて外に出す。鈴の結界に限界がきて壊れるとまた埋まっていく。

「流石に今の魔力だとこれが限界かな」

「数日かけて掃除だね」

「うん。ついでに鈴の訓練にもなるし、もっともっと強くなって足を引っ張らないようにしないとだね！」

「いや、足を引っ張るところか、もう主力と言って間違いないんだけど？」

「でも、真名君に見捨てられたら鈴達、野垂れ死んじやうよ？」

「だから、俺が鈴達を見捨てる事はないって」

「本当に？」

「本当」

「でも、信じきれない鈴がいるの……ごめんね？」

辛そうに謝ってくる鈴。まあ、鈴からしたら親友だった恵里に裏切られたのだから、和解したとはいえ心の底から信じる事ができなくなってしまうと思う。どこかでまた裏切られると思っ
て怖がっているのだ。

「まあ、いいけどな」

「何か信じられるような決定的な理由があればいいんだけど……」

「そんなのは流石にないからな。ルサルカなら契約魔術とか知っているかもしれないけど、その場合は流石に鈴にもそれ相応の代償は払ってもらおう事になる」

「わ、わかってるよ……」

「しかし、裏切らない証か」

「そんなの簡単じゃない」

「わっ!!? / おっ!!?」

後ろから軍服姿のルサルカが突然、俺達を抱きしめてきた。二人して驚いた後、不思議に思っ
て彼女を見詰める。

「その、そんな方法があるんですか?」

「んく流石に契約魔術はないよ。正確には破れない契約魔術はあるけれど、それって魂を縛る奴だから本当にやばい奴なの。儀式にも色々準備が必要だし、まず無理ね」

「でも、さっきは簡単だつて言ったよな?」

「別の方法なら簡単よ」

「それはなに?」

「鈴が真名とエッチして子を孕めばいいのよ」

「ひゃうっ!!?」

鈴のお腹を撫でながらそんな事を言ってきたルサルカ。驚いて彼女を見ると、とても楽しそうな表情をしている。明らかに玩具認定されているようだ。

「え、えっちにこ、子供って……」

「今よりも身体を使って縛りつけ、妊娠して子供という軛を打ち込めば鈴から離れるのに相当な決意があるわ。それにこの場合は裏切られたら社会的に殺せるし、慰謝料の請求だつてできるわ♪」

「そ、そうなのかな？」

「なるほど、それはいいかも」

「おい」

いきなり恵里も参戦してきた。このままだと、ルサルカにやばい方向に持っていかれる。いや、それは嬉しいけれどやっぱり、俺にはユーリがいるし……付き合ってるわけでもないが。

『ボクは別にいいと思うけどな。奥さんがいっぱいいるのって王様や騎士でも普通だったし』

「今は時代が違うんだよ。だいたい鈴達は嫌だろう」

「鈴は……」

「僕は別にいいけどね。それでしっかりと責任を取って結婚し、守ってくれるのならいいよ？」

「えりえりの基準ってそこなんだ」

「うん。僕の居場所になってくれて、僕の事をしっかりと見て守ってくれたら他はいらぬ。それさえ守ってくれたら、都合のいい女になってあげる。したいことだつてなんでもしてあげる。それこそ玩具にだつてなつてあげるよ」

「この子はこの子で歪んでるわね」

「うううえりえりはしっかりと鈴が面倒をみないと悪い人に騙されちゃうよ」

「いや、それはないな。そうなつたらそいつをしゃぶり尽しそうだ」

「あはっ」

とりあえず、ゲーム風に言うなら恵里のフラグは立っている。何時でもゴールできそうだが、後が怖すぎる。恵里の病み具合からして死んだら降霊術で呼び寄せられるだろうし、少なくとも死では逃げられない。

「ヤンデレはちよつと……」

「今なら鈴もついてくるよ？」

「それなら……」

「ちよ！ 鈴はセット販売なの！ 怒るよ！」

「親友でしょ？ それに鈴は僕の居場所になつてくれるって言ったよ

ね？ ずっと一緒だって」

「え？ え？ 言ったかな？ 居場所になるって言ったけど、結婚とかについてはまだ……」

「言ったよね？」

「は、はい、言いました……」

「というわけで、どう？」

「ほれほれ、答えなさいよ。ハーレムにだってできるわよ」

「えっと、キープで」

「最低な発言ね」

「き、キープ……」

「まあ、ユーリが居ない場所で決められないか。でも、今ならご褒美としてお試しで鈴と一緒に最後までしてあげてもいいけど？」

耳元で恵里が囁いてくる。その言葉について想像して顔が赤くなる。

「な、なにを言ってるのー！」

「冗談よ。流石にそこまで覚悟は決まってるから、手とかならまあ？」

「それも十分いきすぎだよー！」

「どっちにしろ、ご褒美として好きな事をなんでもしてあげるわ。鈴もそれでいいって言ってたでしょ」

「エッチな事以外ならいいよ！ お触りくらいなら、まあ……今更だからいいけど」

「大分ハードルが下がってるわね。まあ、無理もないか」

ルサルカの言葉に思うのは同じだ。確かに鈴や恵里の心理的ハードルはどんどん下がっていている。自分の発言で照れるところもまたかわいいのだが、これは外に出たらどうなるのかわからない。

「それで、二人にここまで言わせているのだからご褒美は何するの？」

「本当になんでもいいのか？」

「いいわよ」

「う、うん。さっき言った事以外なら言う事をきくよ？」

「だったらガチャがしたい」

「え、それ!？」

「ガチャに負けた!?!」

今まで我慢していたが、そろそろガチャをしたい。引きたい。そう、俺は引きたいんだ。

「戦力が増えるかもしれないし、洗剤がでるかもしれないし、お菓子がでるかもしれない」

「戦力が増える……」

「お菓子……」

「洗剤は興味があるわ」

「引いていいよな?」

「まあ、ご褒美だし、いいんじゃないかな?」

「うん、いいよ」

「私も少し楽しみね」

許可を貰えたので明日引いてみよう。直に引きたいが、流石に今日は疲れた。というわけでお風呂に入ってさっぱりしたら食事にしよう。いっぱい汗かいたらからな。

「今日はお風呂に入りたいと思います」

「お風呂?」

「水浴びじゃなくて?」

「うむ。こつちだ」

皆を案内したのは少し下にある窪みがある岩場。ここは鉄砲水に襲われると微かに沈んで水が入ってくる場所だ。その場所を整えておいた。

「恵里、この水に炎の魔法を使ってくれ。それでお湯を沸かす」

「いいけど排水は?」

「穴を開けて流す。次からは鈴が結界を張って水が抜けないようにすればいいしな」

「お風呂のためならいくらでも頑張るよ!」

「お風呂か。それなら私も入ろつと」

『そうね。私も入るとしましょう』

「え?」

『ちよつ、強制的に剥がされつ、うわあああああ!』

アストルフオの悲鳴が聞こえる中、身体がバキバキと音がして変化していく。身長が小さくなり、髪の毛が金色へと変化する。

「ま、真名君……?」

「えっと……」

「あんだ、それマジでやったの」

「男共には引っ込んでもらったわ」

そう、俺の身体は沙条愛歌に乗っ取られた。彼女はさっさと服を脱いで風呂に入っていく。それを見てルサルカも服を脱いで入っていく。

「貴女達も入りなさい」

「そうよ。こいつは気にしなくていいわ。マスターが召喚した一人よ。名前は沙条愛歌」

「え、真名君と同じ名前?」

「味方なの?」

「敵でも味方でもないわ」

二人はそれぞれ見合わせた後、服を脱いで湯に浸かる。アストルフオは雁字搦めに鎖で縛られていて、動けないみたいだ。俺は俺で動けない。現在進行形で身体が作り変えられているからだ。

「沙条愛歌……じゃあ、まなまなだね!」

「あんだ、それを使ったかったのね」

「怖いもの知らずね」

「まなまなか……渾名を付けられたのは初めてね。いいでしょう。特別にそう呼ぶ事を許してあげる」

「ありがとう!」

「それで、真名は大丈夫なの?」

「今、ご褒美として力を追加しているところだから安心していいわよ。モンスターを素材にして魔術回路をちよつと増やしてあげてるの」

それなら助かる。魔術回路か召喚した者達に力を与え安くなるならこれ以上はない。身体を弄り回される不快感に耐えればいいだけだ。恐怖も痛みも感じないのだし、全然平気だ。

「ふくん、アンタがマスターに教えるなら、わたしはこの子達に教えて

あげようかな。ちよつと考えていた裏技があるしね」

「裏技って？」

「私達がメインに使う永劫破壊エイワイヒカイトっていうのはね、魂を吸収して霊的な装甲として身に纏うのよ」

「それってえりえりだったらいっぱい呼び寄せられる？」

「そういう事よ。恵里が降霊術で魂を呼び寄せて永劫破壊エイワイヒカイトで喰らう。手っ取り早く強くなれるわよ。もつとも、適合する聖遺物が無いと無理だけど。私の場合はこのエリザベート・バートリーの拷問日記ね」

「真名君の聖遺物はなんなの？」

「持ってないわよ」

「え、でもそれっておかしいはずだけど……」

「だって、マスターの永劫破壊エイワイヒカイトは私を触媒として使っているの。だから、そういう意味では私自身がマスターの聖遺物ね。他にもアストルフオが持つ宝具というのかしら？ アレも聖遺物といえればそういう扱いになるのかしら」

確かに英霊は人々の想念の塊だ。伝承や思いがスキルや宝具となるのだから、聖遺物と同じ性質を持つていえるといえる。

「つまり、その永劫破壊エイワイヒカイトは僕達では使えないということね」

「残念だね」

「まあ、難点も色々とあるけれどね。そこでガチャよ」

「ガチャ？」

「そうよ。マスターの召喚は聖遺物だって召喚できるわ。なにせこの私や愛歌、アストルフオだって召喚できたのだから可能性は低くないわよ。というわけで愛歌。この二人に与える聖遺物として相性がないのを召喚できるようにできないかしら」

「可能よ。でも、私がそこまでしてあげる義理がないわ」

「それもそうだよな。というか、それができるのなら、絶対に俺がアーサーを引けるタイミングに持っていくはずだ。」

「でも、義理がなくても理由はあるわよね？ 貴女の目的は今のままでは叶わないでしょうっ？」

「……いいでしょう。確かにこのままでは私の目的は遠い。それを近

づけるために協力してあげましょう」

「本当！　ありがとうまなまな！」

「えっと、ありがとう」

不思議に思っている恵里と素直に喜んでる鈴。対照的な二人だが、ルサルカはニヤニヤと笑っているし、愛歌は何を考えているのかわからない。

『マスター。気のせいかな？　ボク、すつごく、すつごく嫌な予感がするんだけど……』

『俺もだアストルフォ……でも、やるしかないよな？』

『いや、マスターが召喚を諦めたら大丈夫だと思うけど？』

『アストルフォなら諦めるか？』

『まさか！　ぶん回すに決まってるじゃないか！』

『だよな！　そこにガチャがあるのなら回さねばならない！』

『そうだよマスター！　考えるのは後でいいの！　楽しい事があればそれに全力を出す！　それでこそボクのマスターだよ！』

あ、やっぱり理性が蒸発してやがる。人の事は言えないが。ああ、まったくどうなるかわからないが、嫌な予感しかない……どうすんだこれ。

第16話

肉体を作り変えられ、お風呂の時間を奪われるという苦行をされたが、よしとしよう。決して愛歌が怖いわけじゃない。そうだとも！

二人を起こして食事してもらってから口付けをして魔力を貰う。食事したばかりなので、歯磨きの代わりに歯とかをたつぷりと舐めて綺麗にしてやった。二人は真つ赤になって怒ってたけど知らぬな。全てはガチャのためだ。あ、俺の朝食は兎のローストだ。味は知らない。ただ、アストルフオが歓喜していたので何かがあったのかもしれない。

夕方になり、全員の魔力が回復したのでガチャを行う。これで聖遺物が手に入るらしいが、何が出てくるかはわからない。一応、罨も再配置して何時でも戦えるようにはしているのだが……どうなるんだこれ？

「わくわく」

「鈴、出てくるのはやばい物かもしれないわよ」

「それでもちよつと楽しみだよ！」

「うむ。では開始する。下でやるから待っていてくれ」

「は〜い」

「期待してる」

「ああ」

二人を置いて大穴の底でガチャを開始する。血液を使って昼間の内に書いた巨大な魔法陣。そこに手に入れた兎達の魂を召喚の触媒へと変化させて結晶化。そいつを掴んで詠唱をしながら魔法陣の外側にある円に配置する。置くのは全部だ。そして愛歌によって強化された魔術回路のスイッチを入れて生命力を魔力へと変換し、流し込む。ついでに魔力結晶も愛歌の指示で叩き込んでおく。

「我が知り、知覚する世界より来たれ！」

エイヴイレカイト

永劫破壊によって魂が結晶化して純粋なエネルギーとして使われ、魔法陣が光り輝くと異界への門が形成される。そこから現れた光は

10個。色は白、白、黒、金、白、黒、白、白、黒、銀。虹はない。今回は色のようだが、白が☆1・コモン・ノーマル、黒が☆2でアンコモン・ハイノーマル、銀が☆3でレア、金が☆4でスペシャルレア、虹が☆5でSSRなどだ。つまり、1, 1, 2, 4, 1, 2, 1, 1, 2, 3。当たりは金か。

「さて、何かな」

浮かんでいる光の中でまずは☆1の白から確認する。うまい棒コンポタージュ味。うん、外れだな！ 美味しい駄菓子だが！

『あとで頂戴ね〜』

「はいはい」

次は……触れるとモンスターに変化した。召喚されたのはゴブリンと呼ばれる小鬼で、こちらを見るなり襲ってくる。

「えい」

だが、あっさりとアストルフォに斬り殺されて消滅した。契約するには殺さずに説得する必要があると。ゴブリンスレイヤーの世界から来ていたら怖いな。まあ、あの世界なら神官ちゃんは欲しいが。

『次はこれ〜！』

続いて白はトランプ。プラスチック加工されたトランプなので地味に嬉しい。暇つぶしにはなる。次はほかほかのカツ丼。これもありがたく食べさせてあげよう。最後の白は壊れないボロボロの釣竿。効果はコイキングを吊り上げる。以上。うん、ポケモンだ。

白はうまい棒、ゴ布林（抹殺）、プラスチックのトランプ、ほかほかのカツ丼、ボロボロの釣竿。まあ、ノーマルだから外れだとは思っていない。ジエイル当たり、来たらありがたいが。

「黒はどうなるかな」

『さあ〜？』

黒は3個。アンコモンなのでそれなりの物が来てくれるはずだ。一つ目は……麻婆豆腐。真っ赤で刺激臭がする激辛だ。食べると疲労回復するようだが、無茶苦茶辛い。二つ目はお風呂セット。このお風呂セットは当たりだ。バスタオル、タオル、シャンプー、リンス、ボディーソープ、カミソリ、ハンドクリーム、ドライヤー、櫛が入って

いる。流石に着替えは入っていないが、女の子達からしたら凄く嬉しいだろう。ただし、効果は特にならない。

最後の黒はスキルのようで魔力操作。魔力を直接扱えるようなスキルのようだ。まあ、使えるだろう。黒は麻婆豆腐、お風呂セット、スキル・魔力操作だ。まあまあ使える。流石にこのレベルで聖遺物はでてこない。

『次は銀だね』

レアだ。何が出るか楽しみだ。触れてみると、一際強い光を発する。現れたのはスキル・感覚共有。全ての感覚を共有するスキルで、使用条件としては肉体的接触などで一つにならないと使えないスキルのようなだ。説明文にも夫婦で一体感を得ようなんて書かれている。ミレデイと使った時は……ミレデイって誰だよ！

「ラスト！ 聖遺物来い！」

金色の光が柱となり、中から一つの道具が現れた。それは円盤の形をした古い石でできた銅鏡だ。鏡の裏面に何かが掘られているが、よくわからない。俺が知っている限りでは神の像と獣の像を組み合わせて掘られていたら、神仙の世界の理想郷をイメージした図文だと思われる。これが当たりなら神獣鏡と呼ばれる物のはずだ。

「ルサルカ先生！」

『あくうん、聖遺物としては残念なレベルね。でも、これって違和感があるんだけど……なんでSRなのよ』

「そりゃ、もちろん……シンフォギアのだからじゃね？」

『シンフォギア？』

「歌って戦うアイドル変身ヒーロー？」

『なにそれ意味わかんない。まあ、最古の物なら、永劫破壊エイワイヒカイトとしても使えるでしょ。でも、なんか違う物を感じるのよねえ。愛歌、答えは？』
『それはある物を邪馬台国で加工して神獣鏡にした物よ。間違いではないわね』

『実体は別か。どこで出たの？ 私は詳しくないのよ』

『日本よ』

『日本の聖遺物で鏡って……』

これ、もしもアレなら本当に☆4か！ どう考えてももつとやべー奴じゃないか！ 魔を払う？ 焼き尽くすの間違いじゃないか？ 説明にはシンフォギアと同じ説明が書かれているが、二人の会話から嘘くさい。

『ま、いつか。封印されているし、解放まで頑張ればいいのよ。解放できなくても永劫破壊エイウエイヒカイトの触媒にはなるでしょうし』

「じゃあ、次だな」

『少し待ちなさい。後、五秒。4, 3, 2, 1, 今』

「出る！」

召喚用の結晶が消滅し、また光が10個現れる。その二つは虹だ。そう、虹だ。虹が二つなのだ。

『ほら、望み通り最高級の聖遺物を因果律を捻じ曲げて用意してやったわ。喜び勇んで歓喜なさい』

「愛歌様ありがとう！」

『アリガトー』

『ありがとうって言いたいけれど、ガチでやばい奴な気がするのはいのせい？』

『私は知らないわ。じゃあ、しばらく寝るから頑張って生き残りなさい』

『『え』『』』

それ以降、愛歌様は答えない。完全に眠ってしまったようでステータスプレートを確認すると愛歌様に取られていたキャパシティーが解放されていた。いや、10だけは取られているが、本当に休眠状態に入ったようだ。つまり、それだけやばい奴を引き寄せやがったって事だ。

『これ、死ぬんじゃない？』

『だ、大丈夫だと言ってくれ……』

『これが本当の爆死だね！』

「笑えねえよ！」

虹二つ以外には白、黒、黒、銀、白、銀、黒、銀。ガチャ運はいいな。破滅が待ってそうだが。とりあえず白二つからだ。女性専用

ブーツ。サイズの自動調整つき。使えるか！ いや、アストルフオなら使えるかも？ もう一つは白い光が周りを満たして人型になる。そこには可愛らしいが少女がいた。

「え？ っ、ど、ど……？ 確か声が聞こえて……呼び出しに応じるかどうかを聞かれて説明されたけど、助けて欲しいからなんでもいいから助けてって言ったら……え？」

その少女は中学生くらいの服装をしていて、服がボロボロにされていた。泥水をかけられ、服もどこか破られている。まるで今まさに襲われていたような少女だ。

「マジかよ」

彼女の言葉を聞く限り、どう考えても召喚事故じゃないか。これってひよっとしなくても愛歌が用意した試練の一つか。

『この子と戦うの？』

『たぶん違うよ』

『そう。じゃあ、殺して魂を回収する？ 結構美味しそうな匂いをしてるわよ』

「駄目だ」

「あ、あの、お姉さんは誰、ですか？ コスプレイヤーの人ですか？ ここはいつたい……」

「ようこそトータスの奈落、いや、地獄へようこそ。そんな君には三つの選択肢がある」

「え？ トータス？ 奈落？ 地獄？ 選択肢？」

「一つ目は俺達と一緒に地上を目指してこのオルクス大迷宮から脱出する。二つ目は俺達と別れてオルクス大迷宮を彷徨い、運が良ければ助かる事にかける」

「し、死ぬ？」

「三つ目は送還されて元の場所に戻る事。ただし、これはあまりお勧めできない。後で話す。どちらにせよ、ここがどういところか後で教えるよ。今は急いでここから離れるんだ。死ぬからね」

「え？ え？」

彼女の手を掴んで横穴に入れる。彼女が俺を女だと勘違いしてい

るから事は簡単だ。

「その奥に地上に出れるようにしてある。急いで逃げて女の子二人と合流するように。死にたくなければね」

「ほ、本当にそんなやばいところなの？」

「そうだ。すくなくとも剣で殺し合いをするような場所だよ」

「そんな……」

「できる限り守るから、急いで逃げて。今から敵が出てくるから」

「わ、わかった……私の名前は……」

「朝田詩乃。よく知ってるよ」

「え？」

そう、朝田詩乃。SAO、ソード・アート・オンラインのキャラクター。つまり、仮想現実の技術が普及している世界だ。そんな世界から召喚された彼女はアバターじゃない。つまり、ただの一般人である。このガチャ、マジで闇鍋だな！

『足手纏いが追加か。まあ、二人は足手纏いじゃなくなってきてるけど……やつぱり生贄にしない？』

「いやいや、彼女を生贄にするなんてとんでもない。何せちゃんと育てれば彼女は優秀なスナイパーになるんだよ？」

『スナイパーか。なるほど……使えるわね。いいでしょう、認めてあげる』

『お、本命が来るかも？』

とりあえず、彼女の事は置いておいて召喚を進行させる。まずは黒の三つに触れてみる。鍋焼きうどん、鋼の盾、ポーシヨン。

次に銀が三つ。女性用高性能軍服、不思議な寝袋、無くならないコンドーム。とりあえず、女性用高性能軍服はサイズ調整とステータスを上げる効果があるので誰かに着せよう。不思議な寝袋は中身が拡張されていて、見た目よりも沢山入れる寝袋のようだ。そして、最後の二つである虹に触れると、それは人型を取る。現れたのは悪趣味な服を着ていた――

「お招きに預かり推参仕りました。不肖ジル・ド・レエ、ジャンヌを探すために頑張らせていただきます。それでジャンヌはどこですか？」

——そう、出て来た相手はジル・ド・レエ。ジル・ド・レエ自身は生前、英霊と呼ばれるにふさわしい活躍をした騎士ではあるものの、今回呼ばれたのはジャンヌ・ダルクが処刑された後に乱心し、黒魔術に堕ち多くの子供を集めては殺していた晩年の彼だ。殺人に対し異常な美学や行動様式を持ち合わせており、原作ではマスターと共に多くの子供たちを虐殺。その贄を材料にして吐き気を催すような工芸品を創作している。

「ジャンヌはまだ召喚できていない」

「そうですか。ではジャンヌを召喚しましょう。今すぐに！」

「いや、無理だから。もう召喚用の結晶がない」

「なんですとおっ！ ならば今すぐ用意しましょう！ そこにいる少女や上に居る少女を生贄にしてしまえばよろしい！」

「ちっ」

やっぱりこうなったかキャストアのジル・ド・レエなら、確実に鈴達を生贄にしてジャンヌを召喚しようとする。いや、それよりもそこにいる少女？ 後ろに振り返ると、まだ穴の中でガタガタと震えている朝田詩乃の姿が見えた。おかしい。シノンなら移動しているはずだ。そういえば彼女の姿はどこか原作と違って幼い。まさか、GGOをする前か！ それなら☆1のノーマルも納得できる！ やつてくれたな愛歌！

『うわ、ガチの足手纏いじゃない』

『でも、守るよ。なんせボクは騎士だからね！』

「さあ、ジャンヌを召還する儀式を始めましょう！」

令呪を持つて命じる。殺せ、アストルフォ！ 狙いは腕の本だ。相手はモンスターを召喚してくる！

『令呪なんてないけど了解！』

瞬時に加速したアストルフォが抜剣して鞭のようになる蛇腹剣が腕を狙う。

「おのれ！ 何故邪魔をするのですか！ ジャンヌを呼び出すだけだというのに！」

相手は後ろに下がるが、腕を斬り落とせた。その腕を掴んで奴の宝

具である魔導書を掴んで確保する。これで海魔が召喚される事はないと思いたいが、やばい物を忘れていた。そう、それは召喚されている虹の聖遺物だ。

「おや？…これは……おやおや？」

「やばいやばいやばいいいっ！」

虹の中に手をつ突っ込んだジル・ド・レエはそれを引き抜くと、身体をビクンツと痙攣させ、次の瞬間にはぎよろめをこちらに向けてニヤリと笑う。

「我が呼びかけに答えよ、ジャンヌよ。深淵の縁から現れ出でよ」

ジル・ド・レエが掲げたそれは本だった。複数の封印が施されているが、それらが解除されて無数のページが勝手に動き出す。その中から膨大な量の死霊が現れてくる。

「マスター！ 召喚解除は！」

『できない！』

「ああもう！ りんりん！ 結界解除！」

アストルフオが急いで逃げて恐怖で座り込んで色々とやばくなっている彼女を抱えて横穴に飛び込む。蛇腹剣を高速回転させて掘り進み、すぐに脱出する。後ろでは沢山の岩が落ちているが、おそらくこれでは死なないだろう。

「ひっ!？」

「マスター！ アレは何かわかる！」

『死霊召喚。虹、恵里に合う聖遺物だと思うと嫌な予感しかしないが……ネクロノミコンだと思う』

「最悪じゃん！」

鈴達がいる所に到着すると同時に詩乃を預けてルサルカを実体化させる。

「ルサルカ、物量戦になる創造を使ってくれ！ 俺はコイツを使う！」

「二人は魔力をくれ！」

「わ、わかったけどなにがあったの？」

「えっと、もしかしなくてやばいのが出た？」

「出た！ だから頼む」

「う、うん、わかったよ！」

呆然としている詩乃を置いてまずは奪った魔導書、ブレラ・ティーズ・スベルブツク螺湮城教本を使って俺が海魔を召喚してジル・ド・レエにぶつける。

「ねえねえ、マスター！　これ、私が全力を出していい案件よね！」

「ああ、もちろん！」

「そう！　とつても、とつても嬉しいわ！　さあさあ、宴を始めましょう！　久しぶりの楽しい、楽しい食事よ！」

「あつ」

そうか。なにも焦る必要はなかった。相手が死霊を使う？　それがどうした。こつちには死霊に対するスペシャリストがいるじゃないか！

「アストルフオ！　私と変わりなさい！」

『え〜！』

「死にたいのかしら？」

『ま、いつか。ボクが監視するからね』

「お好きになさいな。今はとつても気分がいいの。入れ食い状態なのよー！」

「アストルフオ、頼む」

『せつかくのマスターと共同作業だと思っただけど、仕方ないな』

「たまには譲りなさい」

『は〜い』

アストルフオがインストール夢幻召喚を解除する。すると身体が異常に重くなり、呼吸が苦しくなる。腕はなくなり片目も見えなくなった。だが、すぐに変化は訪れる。体格が変化し、髪の毛の色が代わり、胸が膨らんでアレがなくなる。ましてや服装も黒い女性用の軍服へと変化した。

「あは♪　本当に最高ね。召喚する触媒として極上品じゃない！」

『でしよ〜！』

「これなら召喚機として使えるわ！」

ルサルカが軽く俺の身体を確認してから、くるりと回って踊り出

す。同時に視界一面の地面に赤い深紅の魔法陣が展開され、無数の文字が空間を埋め尽くす。それだけじゃない。大量の死霊を永劫破壊で自らの、俺の身体に吸収しながらルサルカは手に持った螺湮城教本を使いだす。そう、海魔の召喚だ。気持ち悪い触手の化け物が陣営を整えていく。

『In der Nacht, wo alle schlafen
Weichen, den Meeressboden zu verlass

彼女が詠うと同時に俺も強制的に詠わせられる。同時にルサルカの心や記憶が伝わってくる。彼女の一生。愛した男との楽しい思い出や死別。戦場を渡り歩いて殺していった者達の魂を吸収し、魔人として活動した記憶。そして腹を裂かれたり、仲間達に殺されたりといった様々な記憶が溢れてくる。

『Ich hebe den Kopf, da Spiel der Wasser,
Welch Freude, das Spiel der Wasserwell

無数の髑髏を彼女の後ろに幻視する。ルサルカが歩み、殺して吸収してきた数百、数千の人の魂。

『Durch die nunnzerbrochene Stille,
Rufen wir unsere Namen』

ルサルカの追いつけないなら先に行く者の足を引っ張りたいたいという彼女の渴望が心の底から沸き上がり、理解できてしまう。ルサルカの本質は愛する者が自分を置いて先に行ってしまうというものが、追いつけないならば止めてやろうという願いに転化したものだ。

『Pechschwarzes Haar wirbelt im Wind
Welch Freude, sie trocken zu sehen』

「ジャンヌうううううう！ お待ちください！ いますぐ外に出れるようにします！」

「必要ありません」

女性の声が聞こえ、巨大な穴から炎の柱が湧き上がる。憎悪が籠った黒い炎は一瞬で圧縮された岩を溶かして大きな穴を開ける。そこから骨の竜、スケルトンドラゴンに乗って出てきたのはジル・ド・レエと銀髪の女性。正体は己を見捨てた祖国、国民、そしてこの世の全て

に憎悪し、復讐を誓って竜の魔女となったジャンヌダルク。墮ちた聖女だ。

自力でジャンヌを、ジャンヌダルク・オルタを召喚しやがった。確かにネクロノミコンなら可能かもしれない。英霊も霊には変わりない。ましてやジャンヌダルク・オルタは聖杯の力によってジル・ド・レエが生み出した存在だ。つまり、聖杯の代わりにネクロノミコンを使って増幅して呼び出したと考えられる。だが、こいつらは人の魔力をなんだと思ってるやがる！

『Briah』創造

Csejte Ungarn Nachatzeherer』拷問城の食人影

拷問城の食人影が発動し、海魔と一緒に二人に襲い掛かる——
「これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮——
ラ・グロントメント・デユ・ヘイン
吼え立てよ、我が憤怒」

——が、竜の魔女として降臨したジャンヌ・オルタが持つ呪いの旗を振るうと同時に、煉獄の業火で焼き尽くし、追い打ちをかけるように地面から何本もの槍を召喚して串刺しにしていく。どう見ても地獄だ。流石は☆5だ。欲しい。とても欲しい。

「なめんなー」

即座に湧き出した海魔と拷問城の食人影が殺到して、肉をつけただしたスケルトンドラゴンに触れて停止させる。そこに海魔が取り付いて登りだす。

「不快ね。ジル」

「はっ」

ジル・ド・レエにジャンヌダルク・オルタが剣を渡した。それを持ったジル・ド・レエは海魔を斬り裂き、拷問城の食人影も斬り裂いて止まる前に剣を手放す。

「ふむ。あの影人が厄介ですな」

「私達ですら停止させるのか。それに……」

「はい。死霊が喰われていますな」

あつちも拷問城の食人影の性質には気付いたようだ。だが、壁は十分だ。それよりも鈴達は大丈夫か？

「鈴達にも手伝えることはある?」

「ええ、あるわよ。鈴はこれを持ってお姉さんとキスよ」

「ふえっ!? んんんっ!」

ルサルカが鈴に口付けをして強制的に永劫破壊エイワイヒカイトを覚えさせる。聖遺物は神獣鏡だ。それが鈴の中に取り込まれていく。

「結界をはりなさい。その聖遺物は魔を祓うらしいわ。だから、あいつらの力を抑えるイメージでね」

「う、うん……こんな感じ?」

周りが聖なる光の結界に覆われ、明らかに霊の動きが鈍くなって浄化されていく。同時に鈴に彼等の魂が流れていつている。

「えっと、苦しいのかな? じゃあ、鈴が癒してあげる」

鈴に取り込まれた魂達はすぐに成仏していく。そのはずだが、明らかに魔力量が上昇している。魂を重ねるのではなく、成仏した者達の魔力を受け継いでいるようだ。その魔力は鈴の体内を回って器を広げていく。永劫破壊エイワイヒカイトというより永劫回帰と言えるかもしれない。

「暗闇に落ちても光の中に戻る……これが鈴のやり方なのかな?」

「虫唾が走るわね。ジル、さっさと蹴散らすわよ」

「ならば狙うは大将首ですな」

二人が突っ込んでくるが、鈴の結界や障壁が展開されて邪魔をする。しかし、簡単にジャンヌダルク・オルタ達に破壊される。

「アストルフオ!」

「任せて!」

実体化したアストルフオがこちらに向かって飛び、旗を振り下ろしてくるジャンヌダルク・オルタと打ち合う。

「ボクの名前はアストルフオ! いざ尋常に勝負!」

「い・や・よ」

「おっと」

アストルフオが下がると、そこには地面から無数の槍が生えていた。それを掴んでジル・ド・レエが攻撃してくる。その前に海魔を召喚して爆発させる。汚物が巻き散らかされ、そこから海魔が生まれていく。その海魔の影から拷問城チエイテ・ハンガリア・ナハツエーラーの食人影が生み出され、更に数を

増やしていく。

「ネクロノミコンを止めなさい」

「それをすればジャンヌが消えてしまうではありませんか！」

「ちっ」

「あははは！　ねえ、どんな気分なのかしら？　相手を強くする供給源を止めると自分達が消滅するって気分はどんな気分なのかしらね！」

「このっ！」

煉獄の業火でルサルカと俺を焼こうとするも、鈴の結界によって軽減され、海魔達が捨て身で防ぐ。海魔と拷問城チエイテ・ハンガリア・ナハツエーラーの食人影のコンビはかなり強い。アストルフオを実体化させる魔力もネクロノミコンが集める死霊を永劫破壊エイツイヒカイトで吸収して魔力に変えているからこそできる裏技だ。

「逃がさないわよ、あんた達みたいな極上の獲物！」

「ファフニール！　ブレスを放ちなさい！」

ジャンヌダルク・オルタが命令し、スケルトンドラゴンがブレスを吐く。しかし、その対象はジャンヌダルク・オルタとジル・ド・レエの方だ。

「ぬおっ！」

「なんでよー！」

スケルトンドラゴンの方を見ると、いつの間にかそこに恵里が乗っていた。彼女の身体は海魔の触手に絡まれてやばい事になっている。

「僕もいるんだよ」

「まさか、スケルトンドラゴンを支配された？　でも、支配なら私の方が上です」

「うん、そうだね。でもね？」

「隙ができたね！」

「ジル！」

ジャンヌダルク・オルタが叫ぶも、その前にブレスを回避する事では隙ができ動揺したジル・ド・レエが持つネクロノミコンをアストルフオが腕を斬り落として蹴ることで奪い取った。そのネクロノミコ

ンは恵里の手元に移動し、彼女はそれを持った。

「良い子ですからそれを返しなさい。貴女には過ぎた代物です」
「でしょうね。僕には扱いきれない。だから、別の方法を取る」

ネクロノミコンを胸に抱き、恵里はとんでもない事をしました。

「これも召喚物には違いない。インストールだったかな。僕の身体を依代に一緒になるうか。僕は君を使うし、君も僕を受け入れる。互いにパートナーとなるう」

恵里が様々なスキルを使いながらネクロノミコンに語りかけると、ネクロノミコンは複数のページを捲った後は中から触手を呼び出してそれを恵里の身体に巻き付け、彼女の失った腕と足の部分を覆う。更にファフニールと呼ばれたスケルトンドラゴンにも伸びて恵里の身体へとその巨体を移していく。

「えりえり！」

「大丈夫」

次第にスケルトンドラゴンが小さくなり、恵里に真つ黒な腕と足が現われた。ネクロノミコンの力で構成された腕と足。それを軽く確かめるように軽く動かした後、彼女は二人の方をみる。

「お前達も僕の物になれ」

「ふざけんな！」

「そうよ！ そいつらの魂は私がもらうの！ というか、なんで教えてないのに使えるのよー！」

「術式は何度も見て覚えた。後は自分なりにスキルを使って再現するだけ」

「嘘でしょ……」

「本当。だから、こんな事もできる。ネクロノミコン」

恵里がそう呼ぶと、ネクロノミコンが開いて周りの死霊達を急速に吸い込みます。まるでブラックホールのようにだ。ジャンヌダルク・オルタ達も引き寄せられていく。

「ジル！ ジルっ！」

「ええい！ ジャンヌだけは！ 今度こそ守るのです！」

「はっ、私の獲物を横取りされてたまるか！」

ここに三つ巴の戦いが繰り広げられる。どうして身内で争ってるんだらうか？

「てい♪」

「え？」

「ぬおっ！ 嘘でしょ！」

ジルとジャンヌダルク・オルタの胸を貫くのは僥倖ザルカーノ・カリゴランテの拘引網。そう、アストルフオが全部持つて行った。

「ボクの大勝利〜！」

ジャンヌダルク・オルタとジルが抱き合うように縛り上げ、そのまま締め付けていくアストルフオ。二人は驚いてすぐに吸収しようとする。

「争いは駄目だよ。だからここは仲良く分けないと全部、りんりにあげちゃうよ」

「……それは困るわね」

「うん。じゃあ、僕がそっちの聖女様をもらう。炎も得意だし、僕と相性がいいと思うから」

「なら私はいっつね。まあいいか」

「ま、待ちなさい！ 私はジャンヌと一緒にいたいのです！」

「却下」

「これで勝ったと思わないでよ！」

「勝ちよ」

ジャンヌダルク・オルタは恵里が吸収し、ジル・ド・レはルサルカと俺が吸収した。プレアティーズ・スペルブック螺湮城教本も俺がそのまま手に入れて、恵里は自分の身体に俺がアストルフオにしてもらっているのと同じようにジャンヌダルク・オルタの身体を適応して腕と足を実体化させたよ。うだ。

「足と腕、取り戻せてよかったね」

「確かに取り戻せて良かった」

「ありがとう」

鈴と俺が恵里を祝福すると、恵里も嬉しそうに答えたくれて、俺達は互いに笑い合う。

「これで楽になるな」

「あくそれなんだけど、普段はないままだよ」

「なんで!？」

「まだコントロールしきれないし、ましてやジャンヌダルクに抵抗されてるから、しばらくはこのままよろしく」

ネクロノミコンを通して制御する必要があるみたいで普段は使えないという事か。確かにネクロノミコンをすぐに使いこなす事なんて不可能だな。

「まあ、戦闘中に手足が戻るだけ大きいか」

「うん。戦闘には使える」

とりあえず、なんとかなった。恵里が自力で永劫破壊を習得したのは驚いたけど、どうにか聖遺物のネクロノミコンと適合したみたいだ。流石に愛歌が選んだだけはある。何よりSSRの実力がやばい。鈴も神獣鏡シンシヨウジンと適合できたし、今回のガチャは当たりか。実質20連で虹二枚だろ。相性が悪ければ即死だったが。

「永劫破壊エイウイヒカイトがなければ負けていた」

「本当それね」

自分の口で喋って自分の口で返事をするという不思議問答になっている。それよりも女の身体になっているというのも問題だ。愛歌に乗っ取られたから分かりきっていたが。

「貴方の身体、召喚に適し過ぎているのよ。貴方の場合夢幻召喚インストールの震度が深すぎて、英霊憑依ね。普通は他人の身体なんだから多少の齟齬が生まれるはずなんだけど、自分の身体に作り変えているから本当の身体みたいに扱えるのよ。このままステータスを上げれば器としてとてもいいわ」

これ、明らかに狙われているな。というわけでアストルフオに変わってもらおう。

「もうちょっと遊びたいんだけど……ねえ、お姉さんがいっぱいサービスしてあげるから、駄目?」

手袋を唇にあて、片手で髪の毛を弄りながら妖艶な表情と瞳で誘惑してくるが、はつきりと断る。

「駄目だ」

「ちっ。わかったわよ。大人しく戻るわ。今回得たジル・ド・レエの魂がとっても美味しいし。ふふ、お腹の中で元気に暴れているわ」

「大丈夫なのか？」

「対策はしっかりとしているから。彼はジャンヌが好きなんですよ？

だったらジャンヌと幸せになれる夢を見させてあげるわ。そして幸せな夢の中で溶けて私の力になってもらうの」

「ほどほどにしろよ」

「はい」

身体からクスクスと楽しそうに笑うルサルカが抜け、アストルフオがすぐに入ってくる。おかげでまたうさ耳美少女少年に変わる事になった。

「さて、問題は彼女だな」

「ひっ!？」

俺がそちらを見ると彼女はとても怯えていた。まあ、当たり前だろう。目の前で人の姿が全くの別人に変わるのだ。ましてや途中、ボロボロの俺の姿を見たんだからな。

「真名、抱っこして運んで」

「ああ、わかった」

恵里を鈴と詩乃の近く。詩乃はとても怖がるが、仕方ないだろう。というか、少し臭うが気にしない方がいいだろう。俺は座り、膝の上に鈴と恵里を座らせて二人を抱きしめる。

「えっと、流石に恥ずかしいよ？」

「うん。知らない人がいるところなんだけど……」

「どうしようもないから諦めろ。説明してからだ。じゃあ、改めて自己紹介をしよう。俺は沙条真名」

「鈴は谷口鈴だよ。鈴って呼んでね」

「僕は中村恵里。よろしく」

「あ、朝田詩乃です……」

「さて、まず先程の事だが、君には三つの選択肢がある。だが、一応この場所についての説明と俺が君の存在を知っている事について説明

する。それから身の振り方を決めた方がいいだろう」

「た、確かにその方が助かります……で、でもその前に……」

「ああ、お風呂が先だね」

「なら、少しお願いがある。二人を風呂に入れてくれ。見ての通り、ここで襲われて腕と足を食われた」

「っ!?! わ、わかりました……」

三人を風呂場に連れていき、着替えの布を用意してお風呂セットを使う事にする。

「あ、あの……」

「そうだよね。しののんは見られる必要性もないし、一緒に入ることもないね」

「え? しののん? というより、一緒に入るんじゃないんですか?」

「ここはどうすべきか。キリトみたいに下着姿の時に告白する?」

いや、ここは怒られるだろうから先に言っておこう。

「俺は男だからな」

「その姿で! あ、姿ですか?」

「敬語じゃなくていい。俺の召喚で迷惑をかけたしまったからな。ちなみにこの姿はアストルフオという英雄の霊を身体に憑依させているからだ。その英霊も男なんだが、女装少年といったところで……この恰好は仕方がないんだ」

「真名君はアストルフオ君が抜けると大変だからね」

「片腕と肺とか、色々とないの。それを英雄を憑依させて補っている感じね」

とりあえず、男である事を説明したが、信じていないようだ。

「なんなら触って確認してみるか?」

「え、遠慮しておきま……って、何しているの!」

「脱がしている」

「お、男なのよね?」

「そうだが、今更だしな」

二人の服を脱がせて湯船の中まで運ぶ。流石に詩乃じゃ支えられなくても運ぶのはとても大変だ。

「どんな生活をしていたのよ……」

「サバイバル？」

「そうそう、大変だったのよ」

ルサルカが実体化してそんな事をいいだした。

「ルサルカは……」

「私も入るわよ。今日は流石に疲れたしね」

「だったら二人と説明を頼む。俺は食料を取ってくる」

「はいはい、任されてあげるわ」

三人に言ってから、地底湖に潜って詩乃の食事を確保する。これか
らがようやく楽になる。いや、移動するから大変なのは変わらない
が、戦力は格段に増えた。後少し、ここで力を蓄えたらハジメを探し
に行ける。待っている、ハジメ。必ず助けに行つてやるからな。

朝田詩乃

女の子のように見える男の人が居なくなつたので、私は服を脱いで岩場に作られた露天風呂のような所に入る。他の三人はすでに入っているので、彼女達の離れた場所に座つて彼女達を観察する。

一人は濃い緋色のロングヘア―にアホ毛が付いていて、緑色に輝くその瞳は見るだけで惚れ惚れとしそう。他の人と同じで、ここに居る人達は私と同じくらいの年齢なのかもしれない。そんな彼女の両脇には片腕と片足がない黒髪の女の子と両足がない茶色の髪の毛の女の子が居る。緋色の女の子にその二人が抱えられていた。

「あくやっぱりお風呂はいいわね」

「確かに」

「うん、気持ちいいね」

三人はまったりしているけれど、こつちはそれどころじゃない。さっきの意味不明な戦いの事とか、教えて欲しい。そう思つて視線をやると、まだ名前を聞いていない人がこちらに気付いた。

「そんなところに居ないでこちらに来なさいよ。聞きたい事があるでしよ？」

「そうだね、おいでおいで」

「別にとつて食つたりしないから来なさい」

三人に言われて不安だけど近付いていく。教えてくれない方がまずい。私のこれからに關わるから。

「それじゃあ、何を聞きたいの」

「えつと、ここは何処なんですか」

「鈴、改めて説明してあげなさい」

「うん。任せて」

彼女達はこの世界に居る神様に召喚され、戦争に参加するように言われた始まりの事から、ここオルクス大迷宮の奈落へと落ちて来たことまで全て教えてくれたけれど正直、信じられなかった。

ここがどんな場所ですれほど危険なのかも教えてくれた。信じたくはないけれど、実際にあのアニメやゲームみたいな戦いを目の前で見せられ、彼女達が手足を失っていることから本当の殺し合いをしていることが嫌でも理解できた。

「わ、わたしも、そうなるの……?」

そう思うと涙が溢れてくる。虐めから助けてもらいたかったのにやってきたのはもつと悲惨な殺し合いが行われている場所だなんて酷すぎる。

「大丈夫だよ。しののんは鈴達を守るから。真名君もそのつもりだしね」

「鈴、まずはその子の話も聞かないと」

「つと、そうだったね。教えて?」

「は、はい……」

幼い頃、銀行強盗に巻き込まれて人質にされた時に相手の拳銃を奪い、銀行強盗を撃ち殺した事。その事で虐められていたことも説明した。そして、遠くの中学で同じ小学校出身の女生徒に人を殺した事をばらされて今度はさらにエスカレートした。最初は友達になつてくれて、次第に私の部屋に入ってくるようになって男まで連れ込んできた。怖くなつて警察に報告し、鍵も変えた。その後、私は女生徒の彼氏とその他の奴等に襲われて犯されそうになった時、助けを求めたら声が聞こえた。服を破られて頬を舐められそうになり、本当にもう駄目かと思つた時に注意事項を言われても、考える暇もなく微かな希望に飛びついた。

隠していたかつたけれど、嘘をついてバレたら何をされるかわからない。それに彼女達は鈴という人を除いて殺し合いをしていたのだし、私が人を殺していても大丈夫だと思うから全部話した。

「辛かったね……」

私が涙を浮かべながら話していると、鈴さんはちゃんと聞いてくれていた。でも、残りの二人はろくに聞いていない。一人は風呂につきりながら身体を預けて禍々しい感じがする本を読んでいるし、もう一人は禍々しい本に引き寄せられる何かを取り込んでいた。

「ふ・た・り・と・も？」

「興味がない」

「そうね。そもそも助かってもないわけだし、ここに居ても似たような事になるかもしれないわよ？ いいえ、もつと悲惨な目に遭うかもね。こちらの世界も貴女が居た世界も弱肉強食。犯されそうになった？ ならそいつらの喉元を食い千切って殺すぐらいしなさい。そうしたら覚悟の無い連中は逃げるでしょう。それに一人殺しているなら今更ためらうこともないでしょ。一人も二人も同じよ？」

「っ!? そ、それは……」

「まあ、僕は朝田詩乃だったかな。彼女に興味はない。ここで僕達の仲間になるのなら話は別だね。ようやく力を手に入れたのに足手纏いが増えるのは頂けない」

「だ、大丈夫だよ、うん。鈴達や真名君で守ればいいんだし。それに鈴達の介護をしてもらえば足手纏いじゃないよね？」

「僕としては知らない人にされるよりは、真名にされる方がいいけど」「え、えつと……？」

聞いていくと、彼女達は男の人にトイレの世話をしてもらったり、身体を洗ってもらったり、キスして魔力を供給したりしているらしい。正気を疑うけれど、話していると本当になっているし、もう恥ずかしいけれど受け入れているらしい。詳しく聞いていくと納得できない内容はなかった。

「驚愕しているようだけど、詩乃もキスか、身体を渡すかは知らないけれどどちらかはしないとしないわよ。少なくとも私は守ってあげないからね」

「二人共？」

「鈴。僕達がしたように彼女にも要求するだけ。嫌なら力をつけられればいいし、離れてもいい。彼女はまだ腕も足もあるんだから」「でも……」

「仲間になるのなら受け入れる。でも、魔力の供給くらいはしてもらわないとね。これから僕や鈴も魔力はそう簡単に渡せないんだから」「そっか。うん、そうだよね……」

「あの……」

「どちらにせよ、選ぶのはその子よ。与えられるだけ情報を与えて決めてもらいましょう。送還だってできるのだから」

「それもそうね」

「か、帰れるの？」

「真名君に召喚されたのなら大丈夫だよ、きっと」

「帰れるわ、ええ、帰れますとも」

それなら、こんな危ない所に居るよりはいいのかもしれない。そう思っていると思いがかかった。

「洗うの手伝いなさい」

「わ、わかりました……」

二人の身体を綺麗に洗う時にもう一人にも名前を覚えてもらった。ルサルカ・シユヴェーゲリン。何十、何百、何千もの人を殺しているらしい。

お風呂から上がり、汚れた服を着るか悩む。二人は布を身体に巻いただけという姿でいいらしい。

「ほ、本当にそれでいいん、ですか？」

「どうせ全部見られてるしね」

「むしろ、裸で抱きあつて暖を取ってるから仕方ないよ。しののんも一緒になるのかな？」

私は思わずぶんぶん頭をふる。

「お、男の人と一緒に寝るだけでも危ないのに裸でなんてできない！」

「あ……そう、だよ。あれ？」

「鈴は順調に倫理観が崩壊してきているわね」

「……やばい。鈴が痴女になっちゃってる！」

「こちらへいらつしやいな」

「まあ、真名限定だから大丈夫よ」

「そっか、真名君限定なら大丈夫か……あれ？」

「大丈夫大丈夫」

「ええ、大丈夫よ」

鈴さんにルサルカさん、恵里さんが耳元で囁いていく。その姿はまるで暗示や洗脳しているみたいにみえる。ここに居る人達つてやっぱりかなりやばい人達なんじゃない？

「お帰り」

移動した先に待っていたのはうさ耳をつけた美少女。いや、男らしい。確かに一瞬だけガリガリで皮膚が垂れている男の姿を見た気がした。

「ご飯を用意しておいた。食べてくれ」

「ご飯、ご飯〜」

「今日はなにがあるの？」

「カツ丼と麻婆豆腐、鍋焼きうどんだな。麻婆豆腐は食べるのはお勧めできないが……」

カツ丼と麻婆豆腐はそれぞれ蓋付きのどんぶりと皿に入れられている。カツ丼からは凄く良い匂いがしてくるけれど、麻婆豆腐からは凄く刺激臭が漂ってくる。

「見るからに辛そうね」

「ルサルカ、ごめんだけど……」

「わかってるわよ。それじゃあ、私は戻るわ」

ルサルカさんはそう言うのと、うさ耳男の娘の中へと霞のように消えてしまった。彼女はまるで人間じゃないみたい。そう思っていると後ろから肩を捕まれて耳元で囁かれる。

「貴女は彼女達とは違い、私達と同じ。その事をしっかりと考えて受け止めなさい。証拠は真名のスマホよ」

悲鳴をあげそうになりながら振り返ると誰も居ない。ただ、声はルサルカさんのものだった。彼女達、鈴さんと恵里さんとは違って私はルサルカさんと同じということ？ 意味が分からない。証拠はスマホ？

「麻婆豆腐はどうする？」

「食べない方がいい。辛すぎるだろうしな」

「見るからに真っ赤だしね。とりあえず、足らなかつたら魚や貝？」

「飽きたかもしれないが、これしかないからな。詩乃も含めて三人で

食べてくれ」

「わ、わかりました」

名前で呼ばれて嫌な気分だけど、仕方がない。それよりも三人と一緒にカツ丼と鍋焼きうどんを三人で別けて食べさせてくれることになったみたい。でも、あまり食欲はない。あんなものを見せられたんだから仕方がない。

「じゃあ、いただきます」

「あ、真名君はどうするの?」

「風呂に入ってくる。先に食べていいから」

「いつてらっしゃい」

二人が見送っていった後、鈴さんと恵里さんは二人で岩場を背にしながら一緒に食べさせていく。食欲はないからどうしようかと考えているとふとルサルカさんに言われた事を思いだした。

「食べないの?」

「食欲がないので……」

「食べた方がいいよ」

「は、はい……」

少し貰って食べるけど、やっぱり食欲はわからない。それでも二人に悪いし、特に恵里さんが睨んでくるから怖い。この人、平気で人を殺そうとしていたし。

「カツ丼美味しいよ」

「鍋焼きうどんもいいよ」

「ほら、しののんもあ〜ん」

「あ、あ〜ん」

確かにカツがサクつとしていて出汁も染みていてとても美味しい。でも、私達だけで食べていていいのかな?

「あの、あの真名さんの分を残さなくていいん、ですか?」

「真名君はモンスターの肉を食べられるからね。鈴達が食べたら死んじゃう。それに一応、鈴のを取っとくよ」

「し、死ぬっ!?!」

「でも、もう私達も食べられるかもしれない。永劫破壊を覚えたから、

普通の人とは変わるはずよ」

「それなら嬉しいね。真名君の負担を減らせるし。相談して鈴達も食べよ」

「まあ、ルサルカに聞いて大丈夫か確認しないと駄目よ」

「それもそっか」

「あの、本当に死ぬ、の？」

「うん。だからしののんはあそこに干してあるお肉を食べたら駄目だよ。お魚とかは大丈夫だけどね」

「わ、わかった」

食べたら死ぬなんて毒物、こっちから願ひ下げよ。

「それよりもさっさと食べましょう。これからいっぱいやる事があるんだから」

「ううう早く寝たいけどやらないといけないことがあるんだよね……」

「少なくとも詩乃の役割を決めないといけないし。まあ、真名が上がつてからだけど」

「わ、私は……」

突き付けられた選択肢を決められないでいる。いや、決めたくないといった方が近い。与えられた選択肢つてようはこの化け物みたいな人達についていくか、一人で化け物が蔓延るここを探索するか、元の世界に戻ってアイツらに襲われるかしかない。その三つしかないのだけど、もしかしたら一人で行動できるかもしれないし、襲われずに戻るかもしれないなんて思ってしまう。

「ただいま」

「おかえりく真名君、あくんする？」

「いや、いい。鈴が食べていいからさ。代わりに後で魔力をくれ」

「ふえ？ わ、わかったよ」

そう言つて赤くなつた鈴さん。意味がわからない。彼は干して置いてある肉をそのまま口に入れてこっちにやってきた。表情は一切変わっていない。美味しくも不味くもなさそう。

「で、詩乃はどうする？ 俺としては召喚した責任を果たしたいし、詩

乃が望むように頑張ろうと思うんだ」

「あの、送還するとどうなるの?」

「……わからん。したことないし」

「え」

「ちよつと待ってくれる?」

「う、うん」

スマホを取り出して調べていく。でも、すぐに表情が曇った。

「ルサルカお姉さんが教えてあげましょう!」

すぐに彼の後ろからルサルカさんが現れて彼に抱き着く。その状態で色々と教えてくれるみたい。

「あ、あたってるんだが……」

「いやね、あててんのよ」

「ちっ、このビッチめ」

「ひどっ!」

「手を出したらどうせ溶かすくせに」

「ばれてる、流石はマスターね。召喚した私達の全てを知っているだけあるわ」

え? 召喚した私達の全てを知ってるって、私の全ても知られているの?

「詩乃も気をつけなさいよ、スリーサイズから体重。月の物まで全部知られてるからね」

「えっ!?!」

「それ、俺も知らないんだが……」

「えつとね……」

ルサルカさんがスマホを操作して何かを表示していく。それもこちらを見てニヤリと笑う。

「なるほど。良かったわね。今、犯されてたら妊娠してたわよ」
「っ!?!」

「おい、これって……」

「そう、詩乃のデータよ。送還するならここのボタンを押して召喚キヤパシティーから外せばできるわ」

「もしかして帰れる——?」

「そして帰ったら襲われるわね」

「——あ」

想像しただけで最悪な気分になる。これならいつそ死んだ方がましかもしれない。でも、ここでなら何時でも死ねそうだし……駄目だ。お母さんの事もある。私は戻らないといけない。

「やっぱり戻ります」

「いいのか?」

「お母さんをおばあちゃん達に任せっぱなしは……」

「確かにそうだな」

「帰れるなら帰った方がいいよね」

「でも、送還って安全なの?」

「安全なわけではないじゃない」

「ど、ということ!」

「俺も聞きたい」

「あのさく私達って普通の存在じゃないの。鈴と恵里と違ってマスターである真名に召喚された存在はどういう存在かわかるでしょ?」

「なら、私達の帰る場所ってどこかわかる?」

「あ」

「どういう事? 私の帰る場所はお母さん達の居る所なんだけど

……

「悩め悩め。そっちの方が私は楽しいからね」

「ねえ、えりえり。もしかして……」

「うん。鈴の思っている事がただしと思う」

「悪い。詩乃……送還はしない」

「どういう事!」

いきなりそう言われても納得できない。だからコイツの胸元を掴んで睨みつける。

「理由は……」

「自分で分かるまで駄目よ。悩みなさい若人。教えちゃ駄目よ。だって、これはアイツの仕業なんだから」

「もしかして愛歌の仕業か？」

「そういうこと。まだ試練は終わっていないの。その状態であの子が起きたらどうなるかしら？ それはそれで楽しみよね？」

「全然楽しくない！」

「まあ、その鈴と恵里は二人は死ぬ可能性があるしね。いや、それ以上に酷いか。愛歌なら私と同じで犯して拷問し、最後には魂まで利用するかしら？」

「あう〜」

「アイツならやりかねない」

「やりかねないじゃなくてやるだろうな」

ルサルカの言葉に納得している三人。つまり、その通りにされるということ？

「悪いな。今のオレにとって詩乃より鈴と恵里を優先する。だから、少なくとも今は送還することはできない」

「っ！」

手を離して地面に座り込んで拳を握る。私は帰れない。そう思うと涙がでてくる。確かに私より二人を優先するのはわかる。それに私は……自分で助けて欲しくて説明を聞かずに召喚に応じた。そんな私に怒る資格はない。

「というか、ルサルカさんって何歳……」

「それは乙女の秘密よ」

「真名、何歳？」

「スマホで見る限り——んぶっ!?!」

真名の口がルサルカさんの唇で物理的に防がれ、舌を入れられたのか震えて床に崩れ落ちた。

「おっと、マスター。それを言ったら溶かしちゃうゾ」

唇をペロリと舐めて唾液を綺麗にするルサルカさんの姿は妖艶だった。

「で、どうするの？ 私達と来るのなら護衛はしてあげる。代わりにその子達の世話ね。そうよね、マスター」

「ああ、それがいい。詩乃、一緒にきてくれないか？ ちゃんと安全に

帰れるようにはするし、召喚した責任は取る」

「……わかった。よろしく」

「こちらこそよろしく」

差し出した手を握り絞められ、引っ張られて立ち上がる。真名の顔をしっかりと見ていると、彼の視線が下に行っている事に気付いた。そして視線を下にやるとそこには破かれて胸元や一部下着が露出しているのが見える。

「変態っ!?!」

「痛っ!」

思わずビンタを食らわした。するとルサルカはとっても楽しそうに腹を抱えて笑いだす。鈴達もこちらを不思議そうに見ているので、説明してあげる。この二人、明らかに倫理観が緩くなっている。私がしっかりと締め直さないといけない。

「とりあえず、詩乃はこの軍服を着てくれ。一応、力が上昇するから介護にも使えるからな」

「ありがとう。それとごめん」

服を貰って着替えていく。ルサルカが着ているのと似たような感じだった。それでも破れて汚れたボロボロの制服よりはましだ。本当に力も湧いてきたし、この世界はどうなるかわからない。

第18話

詩乃に打たれたところを触れてみるけれどわからないが、一応撫でてみる。叩かれた事自体は仕方がない。確かに見るのは駄目だった。鈴や恵里との事で俺自身も倫理観がだいぶ崩壊していたのかもしれない。まあ、俺としては役得だったので良かったけれど、控えた方がいいか。

さて、食事を終えたので本格的にガチャのアイテムを整理しよう。食べ物はずでに食べたので残っているのは麻婆豆腐だけ。ただし、井の器や鍋は使えるので綺麗に洗ってこれから使わせてもらう。奈落では貴重品だからな。

「詩乃にこのブーツを渡すから使ってくれ」

女性専用ブーツは詩乃に渡しておく。両足のない鈴や片足だけの恵里には使いこなせない。必然的に使うのは詩乃だけだ。

「いいの？ 服まで貰ってるのに……」

「いいよ鈴は……足がないし、恵里もね……」

「ご、ごめんなさい……」

「どちらにせよ、詩乃の靴は革靴だからここでは使いづらい。ブーツに履き替えた方が断然いい」

「そういうことだ」

「あ、ありがとう……」

女性専用ブーツを渡し、詩乃が靴を履き替えるのを見てから次の道具について考える。まずうまい棒は気落ちしている鈴の口に突っ込んでおこうかな。

「ほら、あくん」

「あくん♪ おいふい〜」

「あつ、ずる〜い!〜」

うまい棒を鈴にあげて食べさせる。残りの袋もちゃんと回収してこれで大丈夫だと、思ったらアストルフォが身体の操作権を奪い取って操る。そして、鈴が食べている反対側から食べていく。ポツキー

ゲームならぬうまい棒ゲームか。

「あ、あの……」

「ほっといいいい」

「そ、そうなの？ 付き合ってるのかな？」

助けはこないようだ。アストルフオはそのまま鈴を抱きしめて押し倒し、唇が迫った所で身体の治療権が戻った。そのまま勢いよく唇が接触する。そのまま何時もの癖で鈴の唇を舐めて開き、舌と舌を絡めて楽しむ。うまい棒の残り滓も残っていたが、房中術を使う。

互いの魔力を循環させて食べると味を感じるような気がする。多分気のせいだろう。どちらにしる魔力が身体に行き渡っていく。鈴は最初は驚いていたけれど、すぐに受け入れてとろんとした気持ち良さそうな表情に変わる。

「いつ、何時までやってんのよー！」

詩乃の声に顔を上げると鈴と俺の口から唾液の橋ができて、途切れる。ふと視線をやると上気した鈴は荒い息を吐いてぐったりとしていた。呼吸がまともにできなかつたからだろう。どちらにしる、今の鈴はとても可愛らしく感じる。

「次は僕の番だよね？」

「待ちなさい！ 二人共そういう関係なの！」

顔を真っ赤にしている詩乃が怒り出した。彼女の表情からは照れも入っている気がする。まあ、いきなりディープキスを始めたからこうなるのは当たり前か。

「そうだね。僕と鈴は真名とキスをする関係かな」

「違わないが違う」

「なに、無理矢理ってこと？」

詩乃が自分の身体を抱いて下がる。俺は溜息をついてから鈴を抱き上げて恵里に近づき、隣に座る。恵里はすぐに俺に身体を預けてきた。

「少し寒くなるかもしれないから火を焚いてくれ」

「今、火を焚いて大丈夫なの？」

「大丈夫だ。さっきの戦いでこの辺りに居た兎は狩ったし、残ってい

たとしてもジャンヌダルクとジル・ド・レとの戦いを感じて逃げているだろう。少なくとも警戒してこちらを伺うくらいはするはずだ。それをしない奴なら簡単に殺せる」

「それもそうか。わかった」

恵里が炎を魔法で作りに出してくれた。なので火と二人の体温で暖を取る。詩乃の方は軍服を着ているから大丈夫だろう。スカートの仕様だから寒いかもしれないが。

「ねえ、僕とはキスしないの？」

「今はいい。恵里の魔力は回復していないだろう？」

「まあ、僕は鈴と違って回復速度を上げるスキルは持ってないからね。じゃあ、寝る前よろしく」

「わかった」

恵里は納得したようで、死霊秘法とも呼ばれるネクロノミコンを呼び出して読み始めた。こいつは本物だと思うので確実にやばい代物のはずだ。恵里の精神が発狂してもおかしくないはずだが、永劫破壊エイツイヒカイトを通す事で問題がないのかもしれない。

「恵里、読んでも大丈夫なのか？」

「普通は大丈夫じゃないよ。でも、僕の天職は降霊術師だし、永劫破壊エイツイヒカイトを通して言語理解のスキルでネクロノミコンをある程度は正確に理解できたの。だから発狂せずに読める。後、融合できたのはジル・ド・レが色々とやってくれたこともそうだけど、やっぱり愛歌の細工もあるみたい」

「大丈夫とは言わないんじゃないか、それ」

「平気よ。それに発狂しそうになる部分は手に入れた魂に肩代わりさせてるから僕に被害は一切ないよ」

魂の扱いが酷すぎるが、まあ恵里が無事ならいいか。ジャンヌダルク・オルタはガチギレするかもしれないが。

「ちよつと無視しないで」

詩乃がこっちに戻ってきたので改めて説明しよう。

「キスは魔力供給のためだ。俺は魔力が低いから、前衛として戦うために必要になる。それを二人から供給してもらっている。もちろん、

同意してくれているし無理矢理ではない」

「そう、なんだ……それなら良かった。二人としているのはどうかと思うけど……」

「詩乃もするのよ」

「え？ わ、私もするの!?!」

「当たり前。僕達の世話だけで食事を貰った上で守ってもらえるなんて思わない事ね」

「い、嫌よ！ 好きでもない人とキスするなんて！」

「じゃあ、野垂れ死ぬか食い殺されるか選びなさい。僕達の世話で片方は叶えてあげる」

「恵里。詩乃は俺が召喚したんだ。だから俺が面倒をみる」

「まあ、それならそれでいいけれど。詩乃、何時捨てられてもおかしくないって事は覚えておいてね」

「う……」

自分達が俺に身体を差し出しているのに詩乃が二人の世話程度で助けてもらえるのが気に食わないのかもしれない。恵里からしたら、恥ずかしいのだろうが俺に世話されるのをある程度は慣れてきたので今更、詩乃にしてみたら必要もないと思っているのかもしれない。

「そこまでだ。それよりもガチャの出たアイテムを整理する。まずトランプだが、これは普通の物なので休憩時間などで適当に遊ぼう」

「確かに暇つぶしとしてはいいわね」

手を叩いて二人の意識をこちらに向けさせて話題を変える。

「ボロボロの釣竿は壊れるかはわからないが、一応、モンスターを釣れるはずだ。明日にでも試してみる」

「潜ると服が濡れるから仕方ないか」

「そうだ」

お風呂セットはすでに使ったので問題ない。消費したら増える事はないので使い過ぎには気をつけてないといけない。後は塵だ。プラスチックは自然では分解されない。もっとも、モンスターなら気にせず食べてしまえばいいが。

「後、手に入れたのはスキルを覚えられる物で、魔力操作と感覚共有の

二つだ。一つは魔力を直接操作できるようになるスキルで、もう一つは感覚共有するスキルだ。感覚共有の方はおそらくキスでできるだろうが、無理なら最後までしないとイケない」

「僕は良いけど……」

詩乃の方を見ると睨み返された。鈴の方はまだぼくとしていて、甘えてくるので頭を撫でる。黒鍵は礼装の奴なので俺が装備……しても意味がない。いや、アストルフォに装備させれば意味があるか。鋼の盾は普通の女の子には重いだろうが、ステータスが上昇して永劫破壊を覚えている二人なら問題ない。詩乃は無理だ。

「鋼の盾は恵里か鈴が使ってくれ」

「なら僕が貰う。生み出したスケルトン達に装備させればいいし」

「それは助かる」

ポーシヨン、誰かのステータスプレートが問題だ。ポーシヨンは傷を治療できる薬なので詩乃に持たせておく。非常事態になると回復するために動けるのは詩乃だけだろう。他は戦線維持に必死だろうしな。

「詩乃、ポーシヨンを渡すから何か有ったら使ってくれ。三人の回復が優先だからな」

「ポーシヨン……回復するお薬？」

「そうだ。頼む」

「わかった。頑張ってみる」

「よろしく。それで残りは……」

誰かのネームプレート。解析したところで無駄だろう。一応、持っておくか。召喚用の触媒として使えるかもしれないしな。

「後は不思議な寝袋と無くならないコンドームね」

「こ、コンドーム……」

詩乃が顔を真っ赤にして覆っている。使い道を知っているようだ。まあ、性教育の授業は受けているか。

「これ僕達に使うの」

「お前達も使う。コンドームというのは液体が漏れないように作られている。だから、水筒の代わりとしても使える。ましてやこいつは無

くならない。入れ物としてはかなり便利だ。だからベルトや腰につけて移動する」

「なるほど」

「し、死ぬほど嫌なんだけど……」

「水が飲みたくなければそれでいい。食料の持ち運びにも使うから食べられなくもなるな」

「が、我慢……します」

コンドームについてはこれでいい。というか、岩でも入れて回転させてから投げればそれなりの威力にもなるだろうし、本当に使えるな。

「寝袋は一つだが、中身が拡張されているみたいだから全員で一緒に寝る事になる。詩乃は嫌だろうが、諦めてくれ。詩乃一人で硬い地面に寝たいなら話は別だが……」

「ひ、一人で寝てみる。それで無理そうなら、その一緒に寝る……」

「女の子達だけで使うとは言わないの？」

「わ、わたしだってそれが無理な事だって言うのはわかるよ。出来る限り、戦闘ができる人の体調を万全に整えないと駄目だから……であってるよね？」

「正解だ。本当は女子だけで寝てもらうのもいいが、体力が回復できないかもしれないからな」

詩乃もだんだんと冷静になってきたようで現状を理解し、こちらの言い分を聞き入れてくれた。もつとも、やはり知らない男と寝るのは無理なようだ。まあ、強姦されかけてこちらに召喚されたんだから当然だろう。

「で、後は二人の聖遺物か」

「死霊秘宝と呼ばれるネクロノミコン。別名、アル・アジフ。それが僕が持つ聖遺物。魔導書としてはかなり有名な奴だよ。創作物だけど、これは本物だ。クトウルフ神話のありとあらゆる魔術とその奥義や召喚と送還の両方に関する知識が手に入る。クトウルフ神話に関する生態系、歴史、崇拝者、組織も例外じゃない。もつとも、僕の手はまだ表層だけしか知れないけれど」

「俺達でも危ないが、詩乃が読んだら確実に発狂するから近付かないようにしてくれ」

「絶対に近付かない」

「それがいい。で、鈴が持っているのが神獣鏡シエンシヨウウジン。こいつは魔を祓う聖なる光を発する鏡だと思っておけばいい」

「僕と一緒に使いこなせないだろうけどね」

「そういう意味でも、一週間はここでルサルカに訓練をつけてもらおう。いいか？」

ルサルカに声をかけるとすぐに了承の返事が来て、彼女が実体化した。

「ルサルカ先生のスパルタ授業に参加したいか〜！」

「「おう」」

鈴もゆつくりと手を上げている。詩乃は呆れた表情をしているが、気にしない。

「じゃあ、さっそく……いただきます♪」

「あつ」

ルサルカが恵里にキスをして魔術を発動する。強制的に魔術知識を埋め込んでいるのだ。恵里は頭が痛そうにしている。そんな恵里を置いて次は鈴とする。舌を絡めるティープな奴だ。

「な、なにしてるの！」

「教授の魔術だ。粘液接触によって相手に無理矢理でも知識を植え付ける方法だ。これで魔術の知識は手に入る。実に合理的な手段だ。詩乃もするか？」

「わ、私はしない」

「わかった」

ルサルカと俺もキスをして魔術の知識を貰う。流石は魔女なだけあってかなり多岐に渡る。貰ったのは初期の知識ばかりとはいえ、ここからだ。

「明日からは実戦形式で教えるからしんどいけど許してね」

「それでいい。しかし、そうなるときさっさと寝るか」

「それがいい」

「鈴もねりゆくえへへ」

「そうするか」

火の傍に寝袋を入れて服を脱いでから寝袋に入る。汚れた服で入るよりは裸の方がいい。それに二人と生まれたままの姿でくつつくのは気持ちがいいからな。詩乃は顔を真っ赤にして怒りたそうにしているが、二人が受け入れているのでそっぽを向いて毛布に包まって寝転がった。そのまま眠るようだ。

「真名、僕とキスしよう？」

「そうだな。お休みのキスだ」

恵里ともディープなキスをして、次に鈴ともう一度して二人が快楽で気を失うまで楽しませてもらう。もちろん、ルサルカに教えてもらいながら、二人をどんだん気持ち良くしていく。

それと感覚共有を試してみるが、キスでは足りないようだった。やはり最後までするしかないようだ。

第19話

「だあー、ちくしよおおー！」

「……ハジメ、フアイト……」

「お前は気楽だな！」

現在、俺はユエを背負いながら猛然と草むらの中を走っている。周りは百六十センチメートル以上ある雑草が生い茂り俺の肩付近まで隠してしまっている。背が低いユエなら完全に姿が見えなくなっているだろう。

そんな生い茂る雑草を鬱陶しそうに払い除けながら、俺が走っている理由は――

「二二二二二二シヤアアア!!」

――二百体近い魔物に追われているからである。そもそもこの迷宮に存在しているモンスターが強さは異常だ。

俺は奈落に落ちた時にすぐモンスターに襲われて片腕を失い、偶然魔力が結晶化した神結晶をみつけた。神結晶から出る万能回復薬、神水で傷を癒す事ができて生き残る事ができた。最初は死にたいと思っただが、死ねなかつた。俺は沙条君、沙条が召喚したユーリが俺達を生かしてくれるために犠牲になった。俺が生きる事を諦めたら彼女の死が無駄になる。それに白崎や沙条、谷口も心配してくれているはずだ。アイツ等まで裏切るとは思わない。だから生きて迷宮を出るために出来る限り足掻いてやる。

そう決めてからモンスターを錬成で作った罠に嵌め、ユーリから貰ったデバイスのドンナーで一方的に上から撃ち殺した。どうか討伐できたので倒したモンスターを腹が減って食べたが、それが失敗だった。食べたなら身体中に激痛が怒り、血が噴き出した。慌てて神水を飲む事で破壊と再生を繰り返してどうにか生き残り、モンスターの力を手に入れる事ができた。

それから、生き残って元の世界へと戻るために迷宮を彷徨った。上に登れる階層はありそうだが、道がわからずに見つけた階段を降りて

迷宮を攻略して脱出装置を探す事にした。

手に入れた様々な鉱石を錬成してドンナーを強化し、モンスターから得た力も合わせて敵を撃ち殺していった。モンスターを殺してその肉を喰らう事で相手の能力を手に入れて戦力を増やして迷宮を進んでいき、オルクス大迷宮に囚われていた吸血鬼のお姫様と出会った。最初は助ける気もなかったが、裏切られてという話を聞いて助けて名前が欲しいと言われたのでユエという名前をつけてやった。

その後は色々と準備を終えて迷宮攻略に動き出したあと、十階層ほどは順調よく降りることが出来た。装備や技量が充実し、かつ熟練してきたからというのもあるが、ユエが全属性の魔法をなんでもござれとノータイムで使用し、的確に援護してくれる。ただ、回復系や結界系の魔法はあまり得意ではないらしい。『自動再生』があるからか無意識に不要と判断しているのかもしれない。もともと神水があるのでなんの問題もない。

そんな凄まじい活躍を見せてくれたので現在の階層である樹海までは順調だった。ここは十メートルを超える木々が鬱蒼と茂っており、空気はどこか湿っぽい。しかし、以前通った熱帯林の階層と違ってそれほど暑くはないのが救いだな。

俺達が階下への階段を探して探索していると、突然、ズズンツという地響きが響き渡った。何事かと身構える二人の前に現れたのは、巨大な爬虫類を思わせる魔物だ。見た目は完全にティラノサウルスである。但し、なぜか頭に一輪の可憐な花を生やしていた。

鋭い牙と迸る殺気が議論の余地なくこの魔物の強力さを示していたが、ついつと視線を上に向けると向日葵に似た花がふりふりと動く。かつてないほどのシニールさで思わず撃ち殺すのを忘れてしまった。

ティラノサウルスが咆哮を上げ俺達に向かって突進してくる。俺が慌てずにドンナーを抜こうとして……それを制するように前に出たユエがスツと手を掲げて魔法を無詠唱で発動した。

「緋槍」

ユエの手元に現れた炎は渦を巻いて円錐状の槍の形をとり、一直線

にテイラノの口内目掛けて飛翔してあつさり貫く。その上、貫いた周囲の肉を容赦なく溶かして一瞬で絶命させた。地響きを立てながら横倒しになるテイラノからは良い匂いがしてくる。同時に頭の花がポトリと地面に落ちていく。

「……」

いろんな意味で思わず黙ってしまう。最近、ユエの無双が激しい。最初は俺の援護に徹していたはずだが、何故か途中から俺に対抗するように先制攻撃を仕掛け魔物を瞬殺していく。別に俺が居なくてもいいんじゃないかって気がしてならない。まさか、自分が足手まといだから即行で終わらせているとかでないことを祈りたい。もしそんなことを本気で言われたら丸十日は落ち込む自信があるぞ。抜きかけのドンナーをホルスターに仕舞い直しながら、苦笑いを浮かべながらユエに話しかける。

「あく、ユエ？ 張り切るのはいいんだけど……最近、俺、あまり動いてない気がするんだが……」

ユエは振り返って俺を見ると、無表情ながらどこか得意げな顔をする。

「……私、役に立つ。……パートナーだから。駄目？ 迷惑だったら止める……」

どうやら、援護だけしているのが我慢ならなかったらしいな。確かに少し前、一蓮托生のパートナーなのだから頼りにしているみたいなお話を言ったような気がする。あの時はユエが魔力を枯渇するまで魔法を使い、戦闘中にブツ倒れてちよつとした窮地に陥ってしまった。何とか敵を倒した後、その事をひどく気にするので慰める意味で言ったのだが……思いのほか深く心に残ったようだ。パートナーとして役立つところを見せたいと思ったのだろうか。

「はは、いや、もう十分に役立つって。ユエは魔法が強力な分、接近戦は苦手なんだから後衛を頼むよ。前衛は俺の役目だ」

「……ハジメ……ん」

若干シユンとしてしまったが、仕方ないだろう。どうにも俺の役に立つことにこだわり過ぎる嫌がある。俺は苦笑いしながら、ユエの

柔らかな髪を撫でる。それだけで、ユエはほっこりした表情になって機嫌が戻ってしまうのだから扱い易いというか何と云うか、問題がある。

依存して欲しいわけではないのだから、所々で注意が必要だろう。と思いつつもつい甘やかしてしまう。まるでユーリを溺愛して甘やかしている沙条みたいだ。沙条がユーリを撫でている姿を客観的に見ていた時の事を思いだして自分でも少し呆れてしまう。

こんな事をしていると、「気配感知」に続々と魔物が集まってくる反応が捉えられた。どうやら敵の大群のお出ましのようだ。

やってきた奴等はティラノサウルスではなく、ラプトルのようなモンスターだった。そいつらも何故か頭にティラノサウルスと同じ花をつけていた。

「もしかして流行っているのか？」

「……可愛い……」

「シユールなだけだろう」

ラプトルはティラノと同じく、「花なんて知らんわ!」というかのようになんて殺気を撒き散らしながら低く唸っている。臨戦態勢だ。花はゆらゆら、ふりふりしているが――

「シヤアアアア!!」

――ラプトルが花に注目して立ち尽くす俺達に飛びかかってくる。その強靱な脚には二十センチメートルはありそうなカギ爪が付いており、ギラリと凶悪な光を放っていて喰らったら死にそうだ。なので、ドンナーを素早くホルスターから引き抜いて撃つ。電磁加速されたタウル鉱石の弾丸は先頭の頭を貫き、そのまま後ろのラプトルも貫いていく。

「ちっ」

先頭が数体死んだ程度では止まらない。俺とユエは左右に飛んで回避し、ラプトルを殺していく。ユエは魔法で、俺はドンナーでだ。

粗方始末した時、ふと気になったので「空力」を使って三角飛びの要領でラプトルの頭上を取り、試しにラプトルの頭部に生えたチューリップの花をドンナーで撃ちぬく。銃声が轟くと同時にチューリップ

プの花が四散する。

すると一瞬ビクツと痙攣したかと思うと、ラプトルはそのまま地面に転がって樹にぶつかって動きを止めた。他にも敵がいるのでそこまで注視はできないが、意識をそちらに割きながら他を処理していく。

地面に倒れているラプトル以外の処理を終えると、ユエもトコトコと俺の傍に寄ってくる。それからラプトルと四散して地面に散らばるチューリップの花びらを交互に見やった。

「……死んだ？」

「いや、生きてるっばいけど……」

俺の見立て通りならまだ生きているはずだ。そう思っただけで観察していると、しばらくしてピクピクと痙攣した後、ラプトルはムクツと起き上がり辺りを見渡し始めた。そして、地面に落ちているチューリップを見つけるとノツシノツシと歩み寄り親の敵と言わんばかりに何度も何度も踏みつけ始めた。

「え〜何その反応、どういうことだ？」

「……イタズラされた？」

「いや、そんな背中に張り紙つけて騒ぐ小学生じゃねえんだから……」
ラプトルは一通り踏みつけて満足したのか、如何にも「ふう〜、いい仕事したぜ!」と言わんばかりに天を仰ぎ「キュルル〜!」と鳴き声を上げた。そして、ふと気がついたように俺達の方へ顔を向けビクツとする。

「今気がついたのかよ。どんだけ夢中だったんだよ」

「……やっぱレイジメ？」

俺がツツコミ、ユエが同情したような眼差しでラプトルを見る。ラプトルは暫く硬直したものの、直ぐに姿勢を低くし牙をむき出しにして唸り一気に飛びかかってきた。迎撃しようとした瞬間、横合いから飛び出してきた別のラプトルに首を喰らいつかれて押し倒される。足で押さえつけて首を上げて肉を抉り取ってそのまま捕食する。

「ハジメ」

「ああ」

ドンナーで撃ち殺す。放った弾丸はやって来たラプトルの身体を貫く――はずだった。しかし、即座に飛び退ったラプトルはそのまま何度も地面を蹴ってジグザクに距離を取る。

「何？」

「避けた」

この対応の仕方はまるで射線を絞らせないためにしているようだ。すくなくとも相手は遠距離攻撃への対策を考えるほどの知能があるのかもしれない。

「キュルルル〜！」

ラプトルが声を上げるとガサガサと樹海の奥から音が聞こえてくる。すぐに「気配感知」を発動して確認すると、こちらに向かつて馬鹿みたいな数が走ってきている。それもラプトルだけじゃない。

「ユエ、急いで逃げるぞー！」

「どうしたの？」

「約154匹のラプトルを含めたモンスターが迫ってきてやがるー！」

「わかったー！」

身体の小さなユエじゃ追いつかれるだろうから、しゃがみ込んで背中をみせるとすぐにユエが抱き着いてきた。そのまま「空力」を使って木の上に登ってから急いで逃げる。

「キュルアー！」

「「「キュキュウー！」」」

当然のようにこちらを追ってくるモンスターの軍団から必死に逃げる。

「ハジメ、追ってきてるのは頭に花をつけていない」

先程の行動を考えると花のついていないのと同じではないのは敵対しているのか。そもそも花が取れたラプトルの行動からして花に對してかなり怒りを感じていたようだ。その事から操られているのではないかと思うが……駄目だ。情報が足りない。

「ユエ、迎撃できるか？」

「できる」

「なら……いや、待て。閃光系の攻撃はできるか？ ダメージはなく

「いい」

「できる。ハジメがやれというなら、なんでもやる」

「そうか。なら頼む。タイミングは指示する」

そのまま走っていくと俺の「気配感知」に反応した奴等が見えてくる。相手はラプトルで構成された群れで、その数は700を超えていて、頭にチューリップの花があった。そいつらの前に出た瞬間に指示を出す。

「ユエー！」

「ん！ “閃光”」

ユエが俺の指示に従って膨大な魔力を込めた閃光を発動し、周りを光で焼き尽くす。当然、俺は目を瞑って横に進路を変えて走る。「気配感知」のおかげで目を瞑っていても問題ない。

そのまま走って少ししてから目を開けてから、しっかりと隠れる。背後を振り向くと、そちらでは無数のラプトル立が殺し合いを初めていた。花のあるラプトルの方が上だが、無い方のラプトルは口から毒のブレスや青い炎や雷を吐き出して虐殺している。更には四足歩行の明らかにラプトルじゃないモンスターまで一緒になっていた。

「ハジメ……」

「どうやら、寄生されたモンスターと寄生されていないモンスターの生存競争みたいだな。しかし、あちらのラプトルは明らかにおかしいが……」

「ん。異常個体が群れている。不思議」

「特殊な環境による進化でもしたのかもな」

「かも。ハジメ、気付かれた」

「ちっ」

花を持つラプトルがこちらに気付いて200匹くらいを割いてきた。だから、俺達は急いで逃げる。だが、逃げた先にも花をつけたラプトルやティラノサウルス、トリケラトプスまでいた。連中の数も多く、「気配感知」を使いながら逃げているが、まるでこちらの位置がわかるかのように的確に進路を潰されている。

なので、ユエの魔法による広範囲殲滅、「凍獄」^{とうごく}によって敵を一気

に凍結させて花が咲いたかの様な綺麗な氷華を作り出していく。そこを駆け抜ける事で包囲される前に出られてはいるが、それでもギリ貧だ。

以上、回想終わり。とりあえず、後ろから迫ってきている連中を撒く為に縦割れの洞窟に入った。この洞窟は大の大人が二人並べば窮屈さを感じる狭さだ。テイラノは当然通れず、ラプトルでも一体ずつしか侵入できない。何とか俺達を引き裂こうと侵入してきたラプトルの一体がカギ爪を伸ばすが、その前にドンナーが火を噴き吹き飛ばした。そして、すかさず錬成し割れ目を塞ぐ。これで一応はゆっくりできるが、念の為にユエを胸に抱きしめて何時でも攻撃できる準備をして休憩する。

♪

ユエは嬉しそうにしながら俺を見上げて首筋にカプツと噛みついてチューと血を吸って魔力を回復していく。本当に嬉しそうにしているから、止めるなんて言えない。

「ふう……ユエ、気付いているか？」

「ん。逃げる方向によって敵の密度が違う」

「そうだ」

この洞窟がある方向に向かう時は決まって百を超える群れが現れて邪魔をしてくる。また、花の無い連中も同じだ。ただ、そいつらは指揮官が居るようで必ずすばしっこいモンスターが現れている。

「つまり、ここに花を操る奴が居るはずだ」

「そいつを倒せば楽になる」

「多分な。油断だけはするなよ」

「ん」

休憩が終わり、錬成で入口を閉じたため薄暗い洞窟を二人で慎重に進む。油断すれば一瞬で殺される。

しばらく道なりに進んでいると、やがて大きな広間に出た。広間の奥には更に縦割れの道が続いている。もしかすると階下への階段かもしれない。大きな物が花に埋もれているが、気配感知には反応はない。

それでも油断せずに辺りをしつかりと探る。『気配感知』には何も反応はないがなんとなく嫌な予感がするので警戒は怠らない。気配感知を誤魔化す魔物など、この迷宮にはわんさかいるからな。

警戒しながら部屋の中央までやってきた時、全方位から緑色のピンポン玉のようなものが無数に飛んできた。俺とユエは一瞬で背中合わせになり、飛来する緑の球を迎撃するが、その数が優に百を超え、尚、激しく撃ち込まれるので錬成で石壁を作り出し防ぐことにする。

地面に手をつけて錬成した石壁に阻まれ、貫くこともできずに潰れていく緑の球。大した威力もなさそうだし、これで上の方から来る奴だけ迎撃すればいい。ユエの方も速度と手数に優れる風系の魔法で迎撃しているから大丈夫だろう。

「ユエ、おそらく本体の攻撃だ。どこにいるかわかるか？」

「……」

「ユエ？」

ユエに本体の位置を把握できるか聞いてみる。ユエは『気配感知』などの索敵系の技能は持っていないが、吸血鬼の鋭い五感は俺とは異なる観点で有用な索敵となるがユエが答ええない。訝しみ、ユエの名を呼ぶが、その返答は――

「……にげて……ハジメ！」

――何時の間にかユエの手がハジメに向いていた。ユエの手に風が集束する。本能が激しく警鐘を鳴らし、その場を全力で飛び退いた。刹那、ハジメのいた場所を強力な風の刃が通り過ぎ、背後の石壁を綺麗に両断する。

「ユエ!？」

まさかの攻撃に驚愕の声を上げるが、ユエの頭の上にあるものを見て事態を理解した。ユエの頭の上にも花が咲いていたからだ。それ

もユエに合わせたのかと疑いたくなるぐらいよく似合う真っ赤な薔薇がだ。

「くそっ、さっきの緑玉か!？」

自身の迂闊さに自分を殴りたくなる衝動をこらえ、ユエの風の刃を回避し続ける。どうにかして頭の薔薇を取らなければいけない。

「ハジメ……うう……」

ユエが無表情を崩して悲痛な表情をする。ラプトルの花を撃ったとき、ラプトルは花を憎々しげに踏みつけていた。あれはつまり、花をつけられ操られている時も意識はあるということだろう。体の自由だけを奪われるとは最悪な能力だ。だが、俺は解放の仕方を既に知っている。だからユエの薔薇に照準し引き金を引こうとした。

しかし、操っている者も俺が花を撃ち落としたことやあのラプトル達と同じように飛び道具の存在を知っているようで、そう簡単にはいかないようだ。

相手はユエを操り、花を庇うような動きをし出した。上下の運動を多用しており、外せばユエの顔面を吹き飛ばしてしまうだろう。ならばと、接近し切り落とそうとすると、突然ユエが片方の手を自分の頭に当てるといふ行動に出た。

「……やっつけてくれるじゃねえか……」

つまり、俺が接近すればユエ自身を自らの魔法の的にすると警告しているのだろう。ユエは確かに不死身に近い。しかし、上級以上の魔法を使い一瞬で塵にされてなお“再生”できるかと言われれば否定せざるを得ない。そして、ユエは、最上級ですらノータイムで放てるのだ。特攻など分の悪そうな賭けは避けたいところだ。

俺の逡巡を察したのか、奥の縦割れの暗がりから親玉が現れた。

そいつはアルラウネやドリアド等という人間の女と植物が融合したような魔物だ。沙条辺りが見たら大喜びしそうな感じだ。いや、こいつは流石にないか。確かにアルラウネは神話で美しい女性の姿で描かれる。敵対しなかったり大切にすれば幸運をもたらすなどという伝承もあるが、目の前のエセアルラウネにはそんな印象皆無だと、今までの行動でこいつ自身が証明している。

確かに見た目は人間の女なのだが、内面の醜さが溢れているかのよう
に醜悪な顔をしており、無数のツルが触手のようにウネウネと
ねっついて実に気味が悪い。その口元は何が楽しいのかニタニタと
笑っている。どう考えても性格が悪い奴だ。それもあって俺はすか
さずエセアルラウネに銃口を向けた。しかし、俺が発砲する前にユエ
が射線に入って妨害してきた。

「ハジメ……ごめんなさい……」

ユエが悔しそうな表情で歯を食いしばっている。自分が足でま
いなっていることが耐え難いのだろう。今も必死に抵抗しているは
ずだ。口は動くようで、謝罪しながらも引き結ばれた口元からは血が
滴り落ちている。鋭い犬歯が唇を傷つけているのだろう。悔しいた
めか、呪縛を解くためか、あるいはその両方か。どちらにしろ、俺の
大切な仲間を傷付けたのには代わりはない。

ユエを盾にしながらエセアルラウネは緑の球を俺に放ってくるの
で、デバイスのドンナーで打ち払った。球が潰れ、目に見えないが
そらく花を咲かせる胞子が飛び散っているのだろう。

しかし、ユエのように俺の頭には花が咲く気配はない。ニタニタ笑
いを止め怪訝そうな表情になるエセアルラウネ。どうやら俺には胞
子が効かないようだ。おそらく耐性系の技能のおかげだろう。耐性
系が無ければ俺もやばかったな。

エセアルラウネは俺に胞子が効かないと悟ったのか、不機嫌そうに
ユエに命じて魔法を発動させる。また、風の刃だ。もしかすると、ラ
プトル達の動きが単純だったことも考えたと操る対象の実力を十全
には発揮できないのかもしれない。そうだとしたら不幸中の幸いだ。

風の刃を回避しようとする、これみよがしにユエの頭に手をやる
のでその場に留まり、サイクロプスより奪った固有魔法「金剛」によ
り耐える。

この技能は魔力を体表に覆うように展開し固めることで、文字通り
金剛の如き防御力を発揮するという何とも頼もしい技能だ。タンク
系の技能だが、まだまだ未熟だ。そのせいかサイクロプスの十分の一
程度の防御力だが、風の刃も鋭さはあっても威力はないので凌げてい

る。

一応、速攻で片付く方法もあるんだが後が怖い。焼夷手榴弾でも投げ込むのが正解か？ くそ、シューター系をユーリに習っていればこんな事にはならなかった！ 俺の技術もデバイスも完成には程遠いのだから嘆いても仕方ないか。この状況をどう打開すべきか――

「ハジメ！ 私はいいいから……撃って！」

何やら覚悟を決めた様子でユエが撃てと叫ぶ。ユエの瞳は足手まといになるどころか、攻撃してしまうぐらいなら自分ごと撃って欲しい、そんな意志を込めた紅い瞳が込められている気がする。これはラッキーだ。もう後顧の憂いはなくなった。

「え、いいのかわ？ 助かるわ」

ユエの言葉を聞いた瞬間、俺は何の躊躇いもなく引き金を引く。広間を冷たい空気が満たし静寂が支配する中、くるくると宙を舞っていたバラの花がパサリと地面に落ちた。

何故かユエが目をパチクリとし、エセアルラウネもパチクリとしている。ユエが言う通りに撃つたのに何故だ？

ユエはそつと両手で頭の上を確認するとそこに花はなく、代わりに縮れたり千切れている自身の金髪があった。エセアルラウネも事態を把握したのか、どこか非難するような目で俺を睨む。

「いや、お前がそんな目をするなよ」

ツツコミを入れつつ発砲。エセアルラウネの頭部が緑色の液体を撒き散らしながら爆砕した。そのまま、グラリと傾くと手足をビクンビクンと痙攣させながら地面に倒れ伏した。一応、念の為に何発か身体にも叩き込んで穴だらけにしておく。

「で、ユエ、無事か？ 違和感とかないか？」

気軽な感じでユエの安否を撃ちながら確認する。何故かユエは未だに頭をさすりながらジトつとした目で俺を睨んできた。

「……撃った……」

「あ？ そりゃあ撃っていいって言うから……」

「……ためらわなかった……」

「そりゃあ、最終的には撃つ気だったし。狙い撃つ自信はあったんだ

けどな、流石に問答無用で撃つたらユエがへソ曲げそうだし、今後のためにならんだろうと配慮したんだぞ？」

「……ちよつと頭皮、削れた……かも……」

「まあ、それくらいすぐ再生するだろう？ 問題なし」

「うう〜……」

ユエは「確かにその通りんだけど！」と言いたげな顔で俺のお腹をポカポカと殴ってくる。俺としては、操られた状態では上級魔法を使用される恐れが低いとわかった時点でユエの不死性を超える攻撃などそうそうないと判断した。だからユエに対する心配はほとんどしていなかった。だというのにここまで怒られるのは意味がわからない。

これでもためらい無く撃つてギクシヤクするのも嫌だったから、戦闘中に躊躇うという最大の禁忌まで犯して堪えたのに、いったい何がそんなに不満なのだろうか？

そう思っているとユエはますますへソを曲げたようで、プイツとそっぽを向いてしまった。

内心で溜息を吐きながら、どうやって機嫌を直すか思索し始める。それは、エセアルラウネの攻略より遥かに難しそうだ。

「ユエー！」

「えっ？」

エセアルラウネを倒したことで安心したが、それは間違いだった。エセアルラウネの腹から手が生えて、それがユエの腹を貫こうとしたのが見え、反射的に叫びながらユエを腕で弾き飛ばす。手はユエの心臓からずれて腕を掴み、そのまま引きずり込もうとしている。嫌な予感がして即座にドンナーでユエの腕を撃つて切断し、ユエを抱きしめながら下がる。

「……は、ハジメ……」

「すまん。神水を飲んで回復してくれ。どうやら、俺達は致命的なミスを犯していたようだ」

「……わ、わかった……」

ユエに神水を飲ませながら下がらせ、エセアルラウネを確認する。ユエの腕を掴んで腹の中に引っ込んだそいつは即座に今度は両手を出して、内側から引き裂いて出てこようとする。だから、容赦なく焼夷手榴弾を投げ込む。

爆発が起きてエセアルラウネの身体が内部から吹き飛んで肉片をまき散らす。これで倒せたと思ったが、油断せずに見ていると肉片が急速に増殖して人型となっていく。

「ホラーだな」

「うわぁ……」

俺とユエがドン引きしながら倒し方を考える。肉片になったとしても再生するとなるとこれはユエの『凍獄』で細胞を凍らせるか、いつその事跡形もなく焼き切るしかない。

「ユエ、『凍獄』の準備だ。それで無理なら燃やすぞ」

「ん、わかった」

人型となっていく存在からユエを守らないといけない。そう思っている、その人型から金色の髪の毛が生え、深紅の瞳が生まれる。肉の塊だった身体に白い肌が生まれ、均整の取れた幼い少女の姿へと変わっていく。

「ふっふっふっ、お約束を無視して復活シーンに攻撃なんて腐れ外道な事をして残念でした〜！ ボク、ふっかつ〜！」

「っ!? ふぎけないで〜！」

「ふぎけてないよ〜だ」

「ふぎけてる！ なんで私の姿なの！ しかも裸！」

そう、ソイツはユエと全く同じ姿をしていた。ただし、無表情ではなく好奇心旺盛で明るい表情をしているといった違いはある。

「服は作れないからね！」

「ハジメ、見ちゃ駄目」

「無茶言うなよな……」

ユエと全く同じ姿をしたニセユエはニコニコしながら、身体に蒼い雷を纏い出す。そして、四足獣みたいな姿勢になると、姿がぶれる。

即座にドンナーを発射するが、残った蒼い雷を弾丸が貫くだけで本体は一切喰らっていない。ジグザクに移動しながら接近してくる姿はあのラプトルを思いだす。

「あの群れを指揮していた中身はお前か！」

「せいかい、正解大正解！ ボクが指揮していたんだよ！」

目の前に現れたニセユエが腕を三本の硬そうなクローへと変化させ、そこに蒼い雷を纏わせながら振り下ろしてくる。俺とユエは即座に飛び退くと、蒼い雷によって刃が形成されて地面に三つの深い爪痕が生まれる。周りに焼け焦げた臭いがただよい、斬り口は鋭利だ。人なんてあつさりと切断できるだろう。

「ハジメ、接近戦は不利」

「わかつてる！」

ドンナーで通常弾以外にも魔力弾を生み出して弾幕を展開する。同時に焼夷手榴弾をいくつか放り投げることで範囲を攻撃し、ニセユエを下がらせる。

「ふふふん。そんな事をしても無駄だもんね！ 何せボクは最強だから！ いくよく電刃衝！」

ニセユエは俺と同じように無数の蒼い雷でできた雷を生み出して弾幕を相殺してくる。その状態で弾幕の隙間を縫ってこちらに接近し、斬り殺そうとしてくる。こちらも飛び上がって攻撃を回避するが、即座に斬撃を放ってくる。それはまるであの熊野郎と同じ力だ。空力を使い、空中を蹴って回避する。

「それ、ボクもできるもんね！」

「ちっ！」

相手も空力を使って三次元軌道をしてくる。いや、それどころじゃない。気がつけば周りに無数の空力が存在し、それを蹴ってどんどん加速してきやがる。幸い、アイツの狙いは俺とユエだから先読みすることで回避できているが、普通に強い。

「凄いぞー！ 強いぞー！ 格好いいー！」

テンションがかなり高いようで、幼い姿をして本当にユエみたいにやばい実力を持っている。このんで雷を使っているようだが、もしか

したら他の属性も使えるかもしれない。しかも、被弾しようが即座に再生するという意味不明な能力を持っている。しかし、どこかでこの戦い方を見た気がするが……どこだ？

「調子に乗るのも……まで」

「ふえ？」

「凍獄」

神水で魔力と身体を再生させたユエが「凍獄」を放つ。しかし、ニセユエはどんどん回避していく。だから、俺がドンナーで相手の逃げ道を塞ぐ。

「ハジメ、ありがとう。凍獄、凍獄、凍獄、凍獄」

神水を飲みながら俺達が居る場所以外を全て氷で閉ざしてしまうユエ。相手も流石に避けられなかったのか、完全に氷漬けになっている。

「ん。勝利。ぶい」

「……こいつ、なんだと思う？」

「モノマネモンスター？」

「いや、違うだろう。ドツペルゲンガーとも思うが、他のモンスターに寄生してラーニングしてやがるしな……」

これで終わりだと思っただが、嫌な予感が止まらない。警戒をしながら氷を見ていると気配感知に反応があった。それも物凄い速度で近付いてきている。

「碎け散れ！ 雷神滅殺！ きよつこ——ざん！」

まったく別の場所、広場の入口から声が聞こえた。振り返ると入口にニセユエが居た。馬鹿などと思うが、蒼い雷でできているであろう馬鹿でかい巨大な大剣を振り下ろしてきているので即座に回避する。

5, 6メートルはありそうな巨大な大剣は氷を一瞬で切断して衝撃波で粉碎する。それどころか迷宮の地面にかなり深いクレバスを作り出す。

「あれ？ なんて死んでないの？」

「コイツ……確かに閉じ込めたはず……」

「ユエ、最悪な予想なんだが……聞くか？」

「……いやだけど、聞く……」

「多分だが、群体の可能性がある。おそらく寄生して能力を奪い、増える奴だ。ラプトル同士で戦っていた事を考えると、もしかしたら数百体はいるかもしれん」

「……認めたくない、ね……」

空気が焼けた臭いがする中、蒼い雷でできた大剣を掲げるニセユエがこちらを見詰めてにこりと笑う。

「認めてあげる！ 君達はボクが全力で蒐集すべき強者だと！ だから、情けも容赦もなく、全力で相手をするよ！ 遊びは終わり！ 行くよナハト！」

その言葉と同時に碎けて粉碎された氷の中にいたニセユエの破片が増殖し、氷を取り込んで人型になっていく。無数の肉片から無数に生まれたそれらは全てユエの姿をしている。また、入口からも無数の彼女達が入ってきて、その数は75体。つまり、ここには76人のユエがいる。

「凄い数の姉妹だな」

「……嬉しくない……」

全員が全員、ユエなみの馬鹿みたいな魔力を保有している。どう考えてもあのエセアルラウネの上位互換だ。それらが無数の魔弾を生やし、物量で殺しにくる準備をしている。

「どうだ！ 強くて凄くてカッコイイ！ そう、ボク最強!!」

「そりゃ、これだけ数を用意したら最強だろうよ」

「まだまだくる？」

「数百体の群れだろうな……」

「私、量産された？」

「だな」

というか、何体かの奴が髪の毛をツインテールにしだした。こちらを舐めているとしか考えられない行動だが、ツインテールにした方が違和感を感じない。

「弾幕展開後に突撃よーい」

巨大なオレンジの猫が生まれて、その上にニセユエが乗って大剣を

構える。その猫にも見覚えがある。どこだ。どこで見た。思いだせ。そうじゃないとここで死ぬ。こいつはなんと言っていた？ ヒントを探せ！

蒼い雷、一人称がボク、あの必殺技、そして蒐集と猫。そう考えるとあるイメージが浮かんできた。そいつは金髪ではないが、猫の姿なら覚えがある。しかし、答えてくれるかはわからないから罠にかける。

「なあ、デバイスはどうした？ お前のデバイスのバルニフィカスは」「えーとえーと、バルニフィカスはまだ作れてないの！ だから、魔力でゴリ押しだよ！」

「やっぱりか。お前、レヴィだろ。雷刃の襲撃者」レヴィ・ザ・スラッシュャー

「ちつ、ちがうもん！ ボクの名前はマテリアル・ザ・キャット！ 強くて凄くてカッコイイ、雷刃の襲撃者じゃないもん！」

「……墓穴掘ってる。ハジメ、知り合い？」

「知り合いではないが、一方的に知っている」

とりあえず、ホツとした。こいつは敵ではないかもしれない。まずは話し合いをするために武器は片付けるか。

「話し合いをしよう。武装解除するから、応じてくれないか？ そちらにとつても悪い話じゃない」

「えーとえーと、どうしよう？ どうしたらいいかな？」

知るかといいたいが、言ったら終わりなのでこちらから誘導する。「一般的な常識論として武装解除したのなら、まずは話し合いをする。そこで妥協案を互いに決めるんだ」

「そっか。わかった！」

「……この子、馬鹿な子？ 私の姿で止めて欲しい……」

「諦めろ」

とりあえず、あちらも武器を下げてくれたのでまずは一番聞かなければいけないことがある。ひよっとしたら、彼女は俺を救助しに来てくれたのかもしれないしな。

「まず質問だ。沙条真名、ユーリ・エーベルヴァインとの関係を聞きたい。俺は二人の友達だ」

「え？ 二人の友達なの？」

「そうだ。それで関係は？」

「沙条真名はボク達の盟主にして友達、ユーリのマスター！ それでボク達の家族でお兄ちゃん！」

「そうか。どうやら戦う理由は消滅したようだな」

ドンナーを仕舞い、座って話を聞く準備をする。

「君の名前は？ ボクが聞いてユーリや王様に確認する。それまでボクは警戒を解かない」

「それでいい」

「王様？」

「ユエ、ここは俺に任せてくれ。大丈夫だ。友達の配下……いや、家族だ」

「……わかった。ハジメがそう言うなら待つ」

ユエも隣に座ってくれたので、レヴィを見る。彼女の内の一人がこちらにやってきて座った。

「さて、俺の名前は南雲ハジメだ」

「嘘だ！」

「嘘じゃねえ！」

思わず叫んでしまった。

「だって、南雲ハジメは黒髪だもん！ 白くないしそんな表情とかしてないもん！」

「……そう言えば姿が変わってるな。いいか、俺はモンスターを食った時の副作用で身体が変化してる。だが、俺が南雲ハジメである事に代わりはない」

「うーん、うーん……助けて王様！」

急に叫んだと思うと黙り込み、すぐに頷く。

「わかったよ王様！ えっと、王様が本当に南雲ハジメか証明してみせろって言ってるよ！」

もしかして、こいつは通信が出来るのか？ ユーリの技術力なら不思議ではない。量子コンピュータもあるし、素材は俺が居なくても用意できるだろう。そう考えるとユーリが生き残って……それはない

か。爆発に巻き込まれて生きているとは思えない。ラスボス状態ならまだしも、知識以外はただの女の子だぞ。

「証明か。こいつはユーリから貰ったオレのデバイス、ドンナーだ。改造はしているが、わかるだろう」

「うくん、それだと拾った可能性もあるし、なんとも言えないって」

「なら、ステータスプレートだ。こいつでどうだ？」

「ステータスプレートはまだ解析できていないから、偽造される可能性もあるから駄目だって」

「じゃあどうしろって言うんだ？ これも駄目、あれも駄目というのなら、そちらが解決策を提示しろ。死なない限りは受け入れてやる」
「ハジメ……」

「大丈夫だ。ここが正念場だからな」

「んとね、王様が言うには蒐集して記憶を覗かせてもらえだつてさ」

「なるほど。それなら確かに俺が南雲ハジメだという事を証明できるが……ユエ次第だ。ユエの秘密まで知られるからな」

「……私はいい。ハジメが助かるなら構わない」

「そうか。すまん。いや、ここはありがとうだな。レヴィ、頼む」

「マテリアルL・ザ・キャットだつてば！ じゃあやるね！」

「おう」

レヴィの手が俺の胸を貫く。そして魔力が強制的に引き出されていく。同時に俺は意識を失い、夢を見る。今まであった事をレヴィと共に追体験していく。

「辛かったね。でも、これからは大丈夫！ ボクが守るからね！

ユーリからも一部のボク達を南雲ハジメの護衛にあてるように言われたから」

「ああ、助かる。それで沙条達は元気か？」

「えっと、それが……」

「なんだとー！」

ユーリからレヴィを通して教えてもらった内容は信じ難いものだった。まさか、沙条や谷口、中村までもが奈落に落ちているとは思わなかった。どおりでレヴィが奈落に派遣されているわけだ。魔力

を蒐集で回収しつつ沙条の搜索と救助を最優先としているのだろう。
俺の救助はあくまでもついででしかないだろうが、それでも助かる。いや、俺達も沙条達の搜索に協力するのもいい。中村はわからないが、沙条と谷口なら裏切る事はないだろう。そう願いたいだけなのかもしれないが……どちらにしろ、オルクス大迷宮を探索する事には変わらない。

第20話

量子コンピュータへの細工を完了し、オルクス大迷宮から送られてくる莫大な魔力リソースを使って躯体をデザインしています。幸い、私が居るのは王都であり、人が多いですから助かります。教会関係者や私達の敵から蒐集しました。彼等は私達の敵ですからね。

大量に作った分身達が蒐集した中から複数を合わせ、高町なのはの身体をメインに私の身体を構成する。やはり、私の身体はデータとしてあるのはの身体をメインとして私のからだを構成しています。もちろん、戦闘力も本来の私達が持つ物で作り出す予定です。こればかりは量子コンピュータがある方がデザインしやすいので、私の仕事です。

「……離せ、わかっている……」

「なら、お願いします」

「ちっ」

工房の扉が開き、人が入ってきます。谷口鈴が張った結界は彼女が奈落に落ちて気絶したからか、解除されています。ですのでずかずかと入ってきた彼等に私はシステムロックをかけて動かないようにしておきました。

前に来た時はそのまま帰ってくれたのですが、今回はユーリに許可を与えられた人を連れてきたようですね。彼の顔を見る限り、無理矢理連れてきた感じでしょうか？

「動かしてください。我々が触れても動きませんでした」

「まあ、そりやそうだろう。アンタら、使い方わかってないだろ」

「ええ、ですからお願いします」

彼が量子コンピュータに手を触れてくる。指紋と顔から彼が清水幸利だとわかりました。さて、どうするか……いえ、そういえば看過できない話をしていましたね。確か、これから世界の為に戦う事で南雲ハジメを攻撃した事を許すという内容でしたね。

それに王国と教会が発表した事を鵜呑みにした天之河と言うのが、全てマスターのせいだと決めつけて、檜山というのがしたこともマスターのせいにされました。許せませんが、天之河に関しては手が出せないのです、檜山は排除しましょうか。コイツはユーリがその身を犠牲にして助けた南雲ハジメを奈落へ落として台無しにしてくれましたから。とりあえず、首でも要求しておきますか？

『駄目です。手を出さないでください。マスターが死んだらシユテルの自由にくれていいですけど、今は駄目です』

『あの、結構怒ってますか？』

『怒っていません。はい、怒ってはいないです』

『それよりも、天之河と檜山の蒐集はどうなっていますか？』

これは駄目ですね。完全に怒っていますね。

『まだ気付かれるわけにはいかないのですが、やりますか？ それともいつそ、この量子コンピュータとバッテリー作成システムを暴走させて王都を破壊しますか？』

『……いえ、それは駄目です。隙を見て蒐集してください』

『了解しました。それと教会を調査中に面白い物を発見しました』

『面白い物ですか？』

『はい。どうやら教会の地下にも迷宮が存在するようです』

『なるほど……わかりました。そちらの調査もお願いします。バッテリーの対応についてはお任せします』

『任せてください』

「ん？ どういうことだ……」

『どうしましたか？』

『いや、動かない……あ、動いたな』

システムを起動し、彼の前に仮想スクリーンを展開し、そこに日本語で書いた文字を見せて内容を知らしめます。すると彼はしっかりと考えてから、真剣な表情で頷いてくれました。

「それはなんですか？ 使われている言語は見た事ありませんが……」

「これは操作パネルだ。登録されている人しか使えない仕様だな。だ

からアンタ達じゃ動かせない」

「我々を登録する事はできますか？」

「こちらを見てくる清水さんにしつかりと文字で伝えます。

「できない。正直言つてこれは俺達が使っている技術よりも格段に進歩している。俺も使い方を教わっただけで全てを知っているわけじゃない。だから、俺ができるのはバッテリーを作る装置を動かしたり、それに必要な物をアンタ達に教えるぐらいしかできない」

「あの無能と裏切り者がそこまでの技術を持っているとは信じれませんが……」

「アンタ達は何も理解していないんだな」

「なんだとー！」

「やめなさい。確かに我々には理解できない技術が使われています。それは致し方ないことでしょう」

「……そう、だな。じゃあ、アンタ達はこれを作ってくれ。ハジメが作っていた素材だ。狂いは1cm以下までしか許容されないからな」

清水さんは私が表示した材料と図面を書き写して彼等に渡していきます。ああ、一応警告をしておきましょうか。

「まじかよ……」

「どうしましたか？」

「下手にこの工房にある物を弄らない方が良い。特に量子コンピュータに取り付けられているこの棒。こいつで力を生み出しているようだが、下手に弄ると暴走して爆発する可能性がある」

「危険物じゃないですか……」

「撤去するか？」

「撤去もできない。動かしたら即座に王都を吹き飛ばす可能性がある。解体できるのは作ったハジメやユーリだけだろう。それにバッテリーを作るのに必要な動力源となっているんだからどの道外せない」

暴走させたら王都の中心で凶悪な嵐が解き放たれます。盛大に破壊してくれることでしょう。

「わかりました。シャンプーとリンス以外の物についての情報はあり

ますか?」

「それはわからない」

「それなら、そのタブレットに入っている可能性がある」

「天之河……」

天之河という奴が工房に入ってきて、マスターの私物であるタブレットを持ち上げました。

「どうしたんだ清水。沙条はこれを良く見ていただろう。なら、ここに入っているはずだ」

「駄目だ。それは沙条の物だ。死人とはいえ他人がHDの中身を勝手に見るなど許されぬ。破壊して破棄すべきだ」

「何を言っているんだ。これがアレば皆が助かるんだ。裏切つてクラスメイトを突き落とした彼に助けられるのは癪だが、皆の不満を解決するためにこれは使えるだろう」

「それはそうだが、やっていいことと悪い事がある」

「なら大丈夫だ。これはいいことだ。俺達だけじゃなく、他の人も助かるんだ」

そう言つてタブレットの画面を操作し、電源をつけますが……パスワードが求められます。当然ですね。

「それはなんですか?」

「このボタンから四つの数字を押していけばロックが外れます。総当たりしないといけません、お任せします」

「わかりました。皆で協力しましょう。素晴らしい置き土産が残っているかもしれません」

「はい。つと、そうだった。清水、俺は要らないと言っているんだが、皆がバッテリーを欲しいと言っている。すぐに作れるか?」

「……材料があればな。それはその人達の仕事だ。俺は再起動させる事しかできない」

「そうか。まあ、南雲達でできたのなら、簡単だろう。よろしく頼む」
「……」

簡単。簡単ですか……それにマスターのタブレットを持つていくとは……マスターが憤死してしまう可能性があります。あの中には

様々なサバイバルアニメや異世界小説などで本当かどうか確認するために使われた Wikipedia などの情報が入っています。他には美味しい料理の作り方などなど、資料が沢山あります。もちろん、アニメやゲーム、画像……エッチな方面もあります。人の HD を勝手に覗いてはいけません。

「……すまん、沙条……力の無い俺を許してくれ……せめて、解除は男だけでやるように進言しておく……」

そう願います。もしもマスターがそれで絶望し、災厄を解き放つたら大変ですからね。いえ、絶望するマスターを私達が慰めて支えるのはありかもしれません。ついでに邪魔なデータの処分もできます。こう考えると天之河に感謝しましょう。それはそれとして許しはしません。



詩乃が来てから一週間が経った。この一週間、聖遺物を手に入れてエイヴィヒカイト永劫破壊を取得した鈴と恵里がルサルカに修行をつけてもらっている。

修行方法はルサルカを俺に憑依させて身体を貸し与えてやってもらっている。最初は俺も一緒に修行したが、即座にルサルカから匙を投げられた。召喚以外、一切の才能がないようだ。逆に言うところ召喚の才能はあると思いたい。

ルサルカの修行はまず俺の身体で鈴と恵里の二人と口付けを交わり、粘膜接触による教授の魔術で必要な魔術知識を強制的に二人へと植え付ける。こちらはルサルカに実体化してもらい、俺もしてもらったがほとんど才能がなくて使えない。

鈴と恵里の二人は魔女として数十年を最低でも生きているルサルカの魔術をしっかりと吸収し、この一週間で無事に活動と形成を習得した。

改めて説明すると、永劫破壊は活動、形成、創造、流出の四位階からなる。正直、流出は神様のレベルになる。ちなみにルサルカは第三位階の創造だ。

第一位階活動。Assiahアッシャーとも呼ばれ、聖遺物の特性を限定的に使用可能になる。また身体能力は常人より遥かに高くなっているものの、聖遺物の力の暴走の危険性が高く非常に危険だ。

第二位階形成。Yetzirahイエツィラーとも呼ばれ、術者の魂と融合した聖遺物の武器具現化、及びそれを可能にする状態を指す。人と魔術武装の霊的融合が成される事により、この位階に入ったものは人の範疇から外れた超人となる。契約している聖遺物が目視可能になったことで威力が大幅に増大し、使い手の五感及び靈感も活動位階に比べて上昇する。その振り幅は聖遺物の特性及び術者の技量、魂の保有量次第で変わるが、ルサルカの同僚に居る黒円卓の騎士は音速を超える体術を發揮する程度のことは難しくない。

創造に関してはまだ覚えていないが、簡単に言うと思えば、世界を捻じ曲げて自分にとって都合のいい理を設定し、それを世界に押し付ける。Fateフェイトという固有結界という奴だ。そう、固有結界。つまり鈴は既に創造の領域に突入しかけている。もともと、渴望がないのでそこまで至ってはいないらしい。

どちらにせよ鈴と恵里は人間を止めたという事だ。二人はそれぞれ神獣鏡シエンシヨウジンとネクロノミコンと融合し、鈴が鏡で出来た扇子を持ち、恵里が本を持つ。

恵里はネクロノミコンを通して死霊を呼び寄せ、ゾンビやスケルトン、ゴーストなどを召喚して使役する。流石に神の影デモンベインとかは出せない。この方法を利用、悪用して俺達はオルクス大迷宮で死んだ魂達を集めて吸収し、魔力として使っている。魔力を吸い潰した魂は食人影ナハツエーラーか、そのまま鈴によって浄化される。いや、ほぼ鈴によって浄化されている。

「お願いもうやめて！ 私が悪かったから！」

「ふっふっふっ、逃がさないよー！」

「いやあああつ！ やめてっ、これ以上私の魂を浄化しないでええっ

！」

そう、鈴はシンフォギアの神獣鏡シエンシヨウジンと同じ効果を持つている。つまり、扇子や扇子に束ねられていた鏡を放出する。周りに生み出した鏡から放たれる高出力の魔力レーザーは喰らった対象の罪などの魔を祓う。何が言いたいかというところ……食人影ナハツエーラーに使われている魂が浄化されていくのだ。

それも鈴の結界で覆われているので逃げる事もできない。身体に受けたらごっそりと魂が浄化されるので回避するしかない。直撃しても耐えられるが、それでも消費が痛い。

「この無数に配置された鏡の結界から逃がられる？」

「創造使っても物量で押される！ 本当に最悪な聖遺物ね！」

ルサルカが食人影ナハツエーラー以外に火の魔術や風の魔術を使うが、それらは鏡で反射されるか消滅させられる。無数に放たれるレーザーを涙目になりながらルサルカが避けていくので、外から見ると面白いのかもしれない。何せ普段は強気な女の子が涙目なんだからな。

「相性が悪すぎ〜！」

「鈴の大勝利〜！」

服が破れてかなりきわどい姿だけど仕方がない。ちなみに鈴と戦うと恵里も涙目になる。俺達のメンバーで鈴に勝てるのはアストルフオだけだ。逆に言えば鈴は物理攻撃に弱い。その物理攻撃も生半可な威力では障壁や結界で弾かれるので、すくなくとも英霊クラスの力は必要だ。まあ、この奈落なら平気で突破してくる敵は多いだろう。

「お疲れ様。ルサルカ、鈴はどんな感じだ？」

「固定砲台としては充分ね。魔法使いには天敵よ。防御もしつかりとできてるし、足さえ無事で体術を覚えれば一人でもある程度は行動できるはずよ」

「なるほど。良かったな」

「えへへ〜」

ルサルカの姿のまま、鈴の頭を撫でる。改めて鈴の実力を考えるとかなり強くなった。最終的にサポートタイプで攻撃もできるって感

じになるだろう。普通に考えて強い。さて、次は恵里の番だが、ルサ
ルカは大丈夫だろうか？

そう思つて次の順番である恵里を探す。だが、恵里が居ないな。世
話をしているはずの詩乃もおらず、不思議に思う。

「鈴、恵里の場所に移動する」

「うん、わかった」

汗をかいている鈴を抱き上げて移動すると、恵里が一人だけで背を
岩に預けていた。周りに詩乃の姿がない。

「えりえり、なにかした？」

「した。もう一週間も経つた。それでちよつと責めすぎたのか、走つ
て逃げていった。追わないと死ぬかも」

「かなりやばいじゃないか！」

「真名君、追わないと！」

「行ってくる！どっちに行つた！」

「あっち」

恵里が指を刺した方向に走つて進んでいく。その途中でアストル
フォの姿に変化し、急いで駆ける。しばらく進んでいると、やばい状
況になっていた。

朝田詩乃

召喚されてから一週間。私は恵里と鈴の介護をして過ごしていた。その代わり、私は食事と身の安全を保障してもらった。それでも鈴はともかく、真名と恵里が私に求めていることはなんとなくわかる。真名は私の事をそういう対象として見てきているし、恵里に関してはこの一週間で何度か受け入れて真名の女になるように直接言われたりもした。その方が私にメリットがある事もちゃんと教えてくれたし、妥協案も提示してくれた。それでもどうしても踏ん切りはつかない。

メリットとしてはこれからオルクス大迷宮というここを探索する時にしっかりと守ってもらえる事。今のままだと真名の優先度は自分の女である鈴と恵里が優先される。真名を見ていて私の安全は二人ほど気を配られていないのがわかった。

真名が私に良くしてくれるのは私が理解して召喚されたのではなく、騙した感じで召喚されたことによる罪悪感や責任を感じて守ってくれていること。それに自惚れでなければ私の事を気に入っているから。でも、何時までも現状のままでは見捨てられて放りだされる可能性もある。一応、愛歌とかいう人に与えられた試練らしいけれど、正確な事はわかっていないし、私を何時までも守ってくれるなんてことはないし、恵里が言っていた。

その時に提示された妥協案は服を脱いで一緒に寝袋に寝ることで、ディープキスをして魔力を供給する事。これさえできればちゃんと守ってくれるとは言われたけれど、そこまで自分を捨てられない。

確かにちゃんとした寝床は魅力的だ。今は岩肌から凹凸をできるだけ削ってそこに布を引いて寝ている。だから起きたら身体が痛いし、何時襲われるかもわからないからよく寝られない。ただ、懸念していた真名に寝ている間に襲われるということはないみたいだと思っただ。むしろ、二人とあんな風に密着して寝ているのに手を出していない。恵里なんて自分からして欲しいと案に伝えているのに無視しているし、ユーリという女性の名前を出して断っている。そのくせキスや二人の身体を触ったりして楽しんでるようだ。

私が居るから手を出していないだけかもしれないけど、そもそも普通の人間である私なんて彼等からしたらすぐに押さえつけて好き勝手に私の身体を扱えるのはわかりきっている。実際にここに来る前、普通の男に好き勝手にされかけたのだから、彼等よりも圧倒的な力を持つている真名達に私は対抗できない。

実際に彼等の訓練や周りに狩りへと出ている時の姿を見せられると圧倒的に強いし、心の底から恐怖を感じるほど怖い。なんていうのか、普段の女装している真名とは違い、ルサルカが身体を操っている時は恵里とルサルカの二人から伝わってくるのは禍々しさだ。鈴の方からも格とこののか、存在の違いをプレッシャーみたいなので感じる。

彼女達にとって私などどうでもいい存在で、真名が興味があるから助けているとしか思えない。それをこの一週間で痛感させられた。

「ねえ、そろそろ覚悟は決まった？」

戦闘訓練を終えた恵里を引き取り、身体を拭いたりして世話をしていると恵里が話しかけてくる。恵里は決まって二人が居ない時にはしない話をしてくる。

「それは……」

「大丈夫よ。真名ならちゃんと愛してくれると思うけど？」

「……」

「とくに詩乃なら僕達より可愛がってもらえるはずだよ」

「好きでもない男に可愛がられるなんて嫌。私は好きな人に……」

「でも、詩乃は人を殺したんでしょ？ そんな人がまともな恋愛をできると思ってるの？ 無理だよ。騙されて好き勝手に利用されて捨てられるだけ」

「そんなのわからないじゃない！」

不可抗力とはいえ、人を殺した私に人並みの幸せは訪れない。そう言われて激情にかられてすぐに反論した。

「わかるよ。自分のせいじゃなくても人を殺したのなら、行き着く先は同じ。だいたい元の世界でも虐められていたんでしょ。だったら、犯されるだけじゃなくてもっとエスカレートするよ。女としての尊

敵を徹底的に奪い取られて家畜のような生活になると思う。真名ならそんなことはせずに可愛がつてくれるし、僕達もいるから大丈夫。それに戻らない方が家族にとつてはいいかもね。貴女のお母さんも壊れているんでしょ？ だったらすぐに男に媚びを売って生活するようになるかも。わた——」

「ふざけんな！ お母さんはそんなことしない！」

恵里の言葉にお母さんの事を思いだし、私は本気で怒る。例え恵里の機嫌を損ねたしても知ったことか！

「——事実だよ。僕は手に取るように君の未来がわかる」

「貴女に何が分かるって言うのよ！ 私の事なんてわかるわけない！ アンタが愛された事がないだけでしょ！ 本当に人を殺しても居ないくせに分かった風な口をきかないで！」

「……ああ、そうだね。確かに僕は君と違って直接他人を殺していない」

恵里の雰囲気が変わった。こちらの事を嫌っていても、心配しているような感じが微妙にはしていたけれど、完全にそれが消えた。でも、そんなのは関係ない。お母さんやおばあちゃん達を貶されて黙ってられるか！

「私は——」

「止めた。グダグダ悩んでいるのなら、僕がその悩みを吹き飛ばしてあげる」

「——え？」

恵里の感情を感じさせないような声ではなく、恨みつらみが籠ったドロドロしたかのような声を聞いた時、タイムリミットが来たというよりも、何か地雷を踏んだと本能的に理解できた。

「ようは倫理観とここに来る時に襲われた事実がトラウマとなって邪魔をしているんだよね？ なら、もう一度襲われて貴女という存在が私と同じただの塵屑だつてことを心の底から教え込んであげる」

「ひっ!?!」

恵里の言葉と同時に周りに現れたのは裸の腐った身体をした男達。身体の一部がなく、お腹の部分が開いていたり、腐り落ちているよう

な腐臭を漂わすような存在。そいつらはアレを大きく聳え立たせながら私をぎらついた目で見てくる。本能的に湧き上がってくる恐怖に身体が震える。ゆっくりと舌なめずりしながら近付いてくるゾンビを見ながら、助けを求めて二人が居る方を見る。

「無駄よ。真名と鈴は戦闘訓練をしている。周りに音がバレないように結界も張ってるから、結界の外であるここの声は届かない。だから助けはこないし、大人しく犯されなさい。まあ、相手は選ばせてあげる」

「いつ、いやあああつ！」

私に近付いて掴んでこようとする手があいつらの手や、私が殺した人の手に見えてくる。彼の恨みの籠った声が聞こえる気までしてくる。

「どうせなら、貴女が殺した男にやらせるのもいいかもね」

恵里が指を鳴らすと、覚えのある記憶通りの姿をした強盗犯の姿へと変化した。そいつは身体を腐敗させながら近付いてきて、私は思わず殴りつける。

するとゾンビの身体の一部が吹き飛び、私の身体に腐った液体や腐肉が降り注いで気持ち悪くなって吐きそうになる。ふと視線をやると腕がもげた状態でこちらに近付いてくる強盗犯に私は完全にパニックになつてなにも考えられなくなった。

「あつ、待ちなさい！」



気が付けば知らない場所で私は地面に倒れていた。また召喚されたのかと思つて目を開けたけれど違った。天井は見慣れた場所では

なく、狭い洞窟だった。周りから漂ってくるのは腐った肉の臭いや汚物の臭い。それに荒い呼吸。

最悪な予想が当たったのかと視線を天井からずらして移すと、そこに居たのは白い毛を持つ大型犬程度の大ききで二つの尻尾を持つ狼達。

理解した瞬間、脳が覚醒して痛みが襲ってくる。腕から熱くて激しい痛みを感じながらそちらを見ると、腕が狼に噛みつかれていてそのまま引きずられていたみたい。視線を別の所にやると転々と入口であろう場所から血が続いているから、引きずられてきたのだと思う。

「あつ、ああ……」

思いだした。パニックになって逃げだし、少ししたら白い狼の群れに襲われたんだ。必死に逃げ惑いながら、抵抗したけれど電撃を放たれて感電して……そこからが思いだせない。

「わふっ！」

「くうくん」

声が聞こえてそちらを見ると無数の小さな白い狼達が居た。何をされるのかがわからなくて怖い。どちらにしても嫌な予感しかしない。必死に動いて逃げようとするけれど、腕を二匹の狼に押さえられて動けない。

「がうっ！」

足の方も噛みつかれて激痛が走る。痛みの方へと視線を送ると、小さな子供の狼が私の足に噛みついて抉り取っていく。

「あぐっ！ いっ、痛っ、痛いっ！」

少しずつ子供の狼に食べられていく激痛に助けを求めて必死に暴れる。それでも大した抵抗も出来ずに服を噛みちぎられて身体を食べられていく。一思いに殺してくれた方が楽だとすら思えるけれど、コイツラの目的は子供に生きたまま私を食べさせる事で狩りについて教えることだという絶望的な事がわかるだけ。

恵里や鈴の身体を見て理解したつもりだったけれど甘かった。なんで恵里があんなに言ってきたのか、本当の意味で理解させられた。ここでは力が無い物はただの餌でしかない。身体や心を差し出

してでも庇護下に入らないと一日も生きていけない。

「たす、けて……助けてええええっ！ あっ、ああっ……かひいつ、ひゅー」

鈴や真名達が助けしてくれる事を願って必死に叫んだ。けれどもすぐに喉を噛みつかれて声を出せなくされた。これじゃあもう助けも呼べない。諦めかけるとお母さん達の姿が浮かんでくる。走馬灯なのかな。もう強盗犯を殺したことや銃へのトラウマとかに苦しまなくていいのなら、この痛みさえ耐えられれば――

「かひいつ!?!」

――一瞬、意識を失ってそのまま食べられると思ったら電撃で強制的にたたき起こされた。どうやら、私には絶望しかないみたい。そう理解すると色んな物が身体から出ていく。

「ガルウウウツッ!」

「きゅー」

声が聞こえてそちらに向かうと兎が入ってきて狼達を惨殺している。助かったのかと思えば兎も私を食べていく。その直後に入口から巨大な蛇が入ってきて兎達を地面ごと丸呑みにして壁に激突する。バリバリと食べられていくその姿に次は自分の番だと嫌でも理解させられる。

ここは弱肉強食。強ければ生き、弱ければ食べられて死ぬ。普通の人が生き残るには厳しすぎる環境だという事。

本当に何が悪かったのだろうか？

私が恵里の提案を拒否した事？

犯されそうになって詳しい話も聞かずに召喚に応じた事？

人を殺した事がバレて虐められた事？

それとも、やつぱりお母さんを守るために強盗犯から拳銃を奪って撃ち殺したこと？

なんで、なんで私が食べられないといけないの？ 悪い事は確かにしてきた。でも、ここままでされる理由は……いや、人を殺したのだから地獄に落ちて当然ね。でも、お母さん達にまた会いたい。死にたく

ない。死にたくない！

死にたくないから足掻く。助けは来てくれないかもしれない。それでも希望はある。真名は私の事を気に入っているというのは恵里も認めていた事実。それなら助けにきてくれる可能性は大きい。だから、生き残れる可能性はある。

私は……なんとしても生き残る！

心に決めてから、痛みを我慢して体勢を変える。どうにかして生き残る方法を考える。一般人である私にはどうしようもないけれど、何か方法があるはず。

考えていると視界に子供の狼が血を流して倒れている姿が見えた。血、血……強盗犯を撃った時の事がフラッシュバックしてくる。それを気力で押さえ込んで考える。血……失血。そこで私は自分がどんな状態か思いだした。不味い。このままじゃ失血死してしまう。

どうすればいいのか、必死に考えて思いだしたのは……モンスターを食べたら死ぬということ。でも、不思議と私は大丈夫だと思う。だから子供の狼に噛みついて命を奪い、血と肉を逆に喰らう。するとすぐに身体の中から激痛が走る。

「シャアアツツ！」

「くっ……」

蛇がこちらに気付いて私を食べようと大きく口を開いてくる。迫ってくる顎が私の身体を飲み込もうと、ゆっくりゆっくりと接近してきた。まるで私が浮かべる恐怖を味わっているかのよう。

そして、少ししてから目と鼻の先まできた。でも、不思議と恐怖は湧いてこない。だって、私を守ってくれる騎士^{ナイト}がやってきてくれた。いや、悪魔か。身体と心を代価に守ってくれるのだから、悪魔の騎士^{ナイトデモン}か。

そんなどうでもいい思考で激痛を紛らわせて生き残っていると声が聞こえてくる。

「なに蛇風情が詩乃に手を出してんだ」

確かな怒りを込められた声には少し嬉しく感じてしまうのは微妙にある。だけど、うさ耳の女装少年なんて嫌だ。

「大丈夫……じゃないな」

蛇の口からうねうねと動く剣の先端が出てきて串刺しにした後、方向を変えて瞳を貫いて頭を貫いた。私を餌とした狼を殺した兎。その兎をあつかりと殺した蛇。その蛇を瞬殺して三枚おろしにした真名とアストルフオ。

「ねえねえ、マスター。間に合わなかったみたいだよ？」

「いや、詩乃は死なせない」

真名は私を抱き上げて身体の状態を確認していく。視界がすでにぼやけて感覚もわからない。取り込んだ狼の子供の血肉が身体の中を暴れ回って破壊していつている。

「無理よ。延命の為に食べたんですが、子供の血肉じゃ足りないし、そもそも身体を作り変える方法がないわ。この子は永劫破壊に適応しない。そもそも聖遺物もないし、私の魔術でも癒せないわ。さつさと殺してあげるのも慈悲よ」

見上げると、ルサルカも実体化していた。だけど、その目は冷たい。まるで愚か者を見るかのような瞳をしている。それも間違いない。彼女にとつて私は愚か者だろう。

「詩乃、生きたいか？ それとも死にたい？」

「ひゅーっ」

生きたいと返事をするけど、声がまともに出せない。

「マスター、たぶん生きたいって言ってるよ。どうにかできないかな？」

「私は反対よ。コイツはもう足手纏いにしかならない愛歌についても勝手に逃げだして死んだと言えはある程度はなんとかなるでしょう」
「それはそうだけど……」

「アストルフオ。決めるのはマスターである真名よ。私達はその決定に従うだけ。そもそもこいつは……」

「詩乃。生きたいなら頷いてくれ。それだけでいい」

ルサルカが何を言っているのか理解はできなかつたけれど、真名の言葉に必死に生きたいと頷く。それで伝わったようでにこりと微笑んだ。

「二人共、詩乃はこのまま生かす」

「本当にそうするの？ 殺した方がこの子の為にもなると思うけれど？」

「いい。彼女が死にたくないと言っている。それにユーリの時みたいに何もできずに彼女が死んでいくところは見ていられない。幸い、手段はある」

「手段って、まさか……やめなさい。貴方、今でさえ私達が居ないとともに活動できないのよ？ それを……」

「いいねいいね！ まるで施しの人みたいな事をするんだね！」

「見返りはもらうから、かの英雄とは違う」

「後悔はしない？ ユーリって子の復活は確実に遠のくわよ」

「わかっている。でも、ユーリもこの状況なら絶対に詩乃を助ける。だから、俺も助ける。ユーリに嫌われたくはないしな。不純な動機も多分に含まれているが、許してくれ」

その言葉に頷く。それを見た彼は死んでいた狼達を集めてその近くに私を抱き上げて運んでいった。どうやら魔法陣の上みたいで、何をするのかはわからないけれど、準備はできたみたい。

「ねえねえ、何をするの？」

「このままじや詩乃は死ぬ。だから、一か八か進化を行う」

「なるほど、霊基再臨だね！」

「存在としてのステージを上げるのなら、エイワイヒカイト永劫破壊を使うの？ でも適正はないし……」

「ボク達英霊には進化する方法があるんだよ。それを彼女に試すみたい」

「素材は……狼達と蛇、兎を召喚用の触媒に変更。今回は愛歌のブーストはない。だから確定召喚を使う。無理矢理にでも生き残る事ができる詩乃を、シノンを呼び出す」

何を言っているのかは、だんだんと聞こえなくなってきた。それにすごく寒い。身体がガタガタと震え出すと、真名が抱きしめて温めてくれる。

「もう時間もないし、やるか。サクリファイス。指定はジル・ド・レエ

の魂」

「待つて！ それは待ちなさい！ 私のよ！」

「すまない」

「いやあああつ！ 私の魂がああつ！」

「これだけじゃ有料石はやはり足りないか。ならば追加だ。持つてけ。残っている腕と足、後、睡眠欲、飢餓感、記憶も一部持つていけ。想い出を焼却し、召喚用のエネルギーへと変換しろ。さあ、代価の課金は充分だろう。詩乃を助け、彼女に戦える力を与えろ！」

暖かな温もりに包まれながら、私は目の前が真っ暗になった。



気が付いたら知らない場所に居た。怖くなって身体を抱きしめると、ちゃんと身体は元に戻っていた。不思議に思つて周りを見ると正面に境界線が出来ていた。その左右にはそれぞれ別の女の子の姿が映し出されている。どちらも同じ感じのする女の子で水色の髪の毛をして黄緑色をメインに白色と黒色が割り当てられた服を着ている。どちらも動きやすい服装で露出は少し多い。

片方は夕暮れ時に廃墟に座り、風に白く長いマフラーを流しなら大きな銃を抱えている。彼女が居る廃墟の周りは砂漠みたい。そこで一人、寂しそうに夕日を見詰めている。

もう片方は獣の耳に尻尾が生えている女の子で、楽しそうに空を飛びながら笑つて弓を構えている。

興廃した終末のようなサイエンス・フィクションのような世界と妖精が生きるファンタジーのような世界。

彼女達の姿を見詰めていると、不思議と彼女達は別世界の私だという感覚がしてくる。

「それは間違いじゃない」

「私達は貴女の未来」

「……私の未来……」

「このままこの世界で過ごしていたら、おそらくこの姿になったのかもしれない。」

「朝田詩乃。貴女はどちらの私を選ぶ?」

「妖精の世界で自由に空を飛んで戦いながら旅をする私か」

「それとも最終戦争後の荒れ果てた遠い未来の地球で殺し合いをする私か」

二人はどちらも私に力を貸してくれるみたい。それは凄く嬉しい。

「好きな方を選びなさい。私達の力はどちらにせよ、貴女の力だから」

「わ、私は……よ、妖精がいい……」

「……なんでかは聞かないであげる」

「ごめんなさい。銃が怖い。弓ならまだ気にせずに使えと思う。それに……空を飛んでみたい」

「なるほどね。確かに空は気持ちいいわ」

「……銃も克服してもらわないと困るわ。そうしないと私は何時までも弱いまま。それだけは覚えておきなさい」

「うん」

そう言うと、荒野の私は消えていった。残ったのは妖精の私。

「じゃあ、改めて言うわね。私の名前はシノン。ケットシーのシノン。これからよろしくね」

「こ、こちらこそよろしくお願いします」

「貴女も私なんだから敬語は要らないわ。私の全てを貴女にあげる。だから受け入れなさい。借りを返すために」

「借り……」

「私を呼びだすためにあの人はかなり無茶をしている。アイツも結構無茶をする奴だけど、英霊を憑依させれば行動できるからって、限度という物を知らないのかしら?」

「アイツ?」

「き……いえ、貴女には関係ない事よ。それよりもこれだけは伝えな
いとね。強盗犯を殺したのは事実だけれど、それで助かった人も居る
の。私達はちゃんとお礼を言ってもらえた。そのおかげで私達は苦
しまずに幸せになってもいいって思えるようになった。これは貴女
も同じよ」

「それは……本当？」

「私達はあそこで人質になった女性を助けたよね？ その人は子供を
妊娠していたの。その子がね、手紙をくれたの。ありがとうって」

「……ああ、悪い事ばかりじゃないんだ……」

「そうよ。何時までも後悔していても過去は変わらない。それならそ
れを受け入れてこれからどう過ごすかが重要な。悪いと思ってい
るのなら、殺した以上の人を救えばいいだけ。もつとも、私としては
私が誇れる自分になればいいと思ってる。赤の他人よりも、自分の大
切な家族や友達、好きな人の方が大切よ」

「た、確かに……」

「でも、一つだけ言っておく。好きな人ができたら遠慮なんてせずに
奪い取る気でいきなさい。そうじゃないと後悔するから。そつちだ
と余りこちらの常識なんて気にしなくていいから、自由にできるかも
しれないけれどね」

「好きな人、いるんだね」

「彼女持ちの癖に人の心にずかずかと入ってきて、人の心を奪うだけ
奪っていくような最悪な奴だけだね。最初から彼女がいるなら教え
ておけっていうのよ！ そもそも入ってくるな！ 気がついたら増
えてるし！」

「あははは」

未来か平行世界の自分の愚痴を言われても困るけれど、しっかりと
聞いて答えていく。

「まあ、貴女も気を付けなさい」

「わかった。気を付ける」

「それでいいわ」

彼女が私の額に彼女の額を押し付ける。すると彼女の身体が^{フラグメント}光

となつて私の身体に入ってくる。すると彼女が持っている技能を含めた様々な技術がしつかりと私の物となっていく。

それだけじゃない。髪の毛の色が水色に変わり、人の耳がなくなつて頭に二つの獣耳ができる。それにお尻の上辺りから尻尾も生えてくる。

【アバター変更・ケットシー・シノン】

それだけじゃない。私が食べた白い狼から纏雷、胃酸強化、魔力操作の技能を得る事ができた。どうやら、私も人を止めてしまったみたい。ケットシーつて猫妖精族で特徴として俊敏性に長け、モンスター<のテイミング>に長けた種族みたい。視力が良いけど、動物の耳と尾を持つて背の低い容姿みたい。少しは伸びたと思いたい。

新しくなった自分の身体を周りながら確認すると、だんだんとまぶたが重くなつてきて、引つ張られる感覚がしてくる。おそらく、元の場所に戻るのだと思う。

「ありがとう」

最後に伝えると、なんとなく二人は喜んでいる気がした。私も私で頑張つて生きよう。まずは真名に助けてもらった借りを返すために頑張ろう。

第22話

代価を支払っただけあり、魔法陣が光り輝いて確定召喚が成功した。魔法陣から溢れ出した黄色の光が詩乃へと注がれていく。

しばらくして霊基再臨が成功したのか、詩乃の身体が光りに包まれて組み替えられていく。まず変身シーンのお約束として服が消滅し、次に髪の毛の色など身体が変わって彼女の服装がお腹の出た黄緑色の物になりブレスプレートが現れた。下は短い股までしかないような黒いズボン。ニーソックス。絶対領域が確保されており、最後に猫耳と尻尾が生える。その姿はアルヴヘイム・オンラインの姿とまったく一緒だ。いや、若干幼いかもしれないが姿自体は一緒だ。

「……ん……」

魔法陣が光を失い詩乃が目を開けると、可愛らしい猫耳と尻尾がピクピクと動く。その姿に凄く触りたくなるけれど我慢する。

「詩乃、大丈夫なのか？」

「大丈夫。どちらもちゃんと私だから」

「良かった。一時はどうなるかと思った。もう一人で勝手に居なくならないでくれ」

「うん、ごめんさい。そして、ありがとう。貴方の、真名のおかげで私は助かった」

ほっと胸を撫でおろしてから、シノンに手を差し出す。

「帰ろう。鈴や恵里達が待っている」

「……だ、大丈夫かな？ 恵里と喧嘩しちゃったけど……」

握ろうとしてから、戸惑って胸に腕を引き寄せる。不安そうに聞いてくる。

「大丈夫。恵里が俺に追えっついてって詩乃……シノンが行った方向を教えてくれたんだ。だから最悪な事が起こる前にたどり着けた。流石にあれ以上遅かったら助ける事は無理だったろうからな」

「そっか。でも、やっぱり不安」

「それなら恵里と一緒に説得してやるし、説得できなくても俺が守っ

「やるよ」

「本当？ 私、人殺しだよ？」

「残念ながら、俺の中には人殺しが大好きな奴も居るし、騎士として人を殺してきたのも居る。自分の望みの為に街一つを生贄にしかけたのも居る。俺や鈴、恵里も永劫破壊という殺人衝動が起る魔術を収めている。だから、何れ人は殺す。もちろん、一般人を殺す気はない。俺達の命や尊厳を脅かす連中だけだ」

「なにそれ……私の為に人殺しになるって事？」

「違うさ。遅かれ早かれ人殺しになる。俺達は戦争させられるためにこの世界へと呼ばれてきたんだ。それに詩乃はわからないだろうが、この世界はファンタジー世界だ。命がとても軽い世界で強盗とかも普通に居る。そうだな……アルヴヘイム・オンラインのような殺し合いをしている世界だと思えばいい」

「シノンの世界……」

「どちらにしろ、詩乃が殺したくないならそれでいい。援護してくれるだけでも助かるしな。恵里と鈴の事なら任せてくれ。代わりに二人の世話を頼む」

「それは任せて。それと……せつかく貰った服を台無しにしてごめんなさい」

差し出した手を握り返してくれたので、一応納得はしてくれたのかもしれない。この世界は弱肉強食だから、殺す覚悟は絶対に必要だ。そうじゃないと大切な人が奪われる。それだけは嫌だ。

「いいよ。でも、服は気を付けないといけないか」

『それなら拾い集めておくといいわよ。縫い合わせればいいんだから』

確かにルサルカが教えてくれた通り、縫い合わせれば使えるだろう。

「頼む。集めてくれ」

「うん」

二人で協力して布を回収する。それからモンスターの死体についても回収しないといけないが、多すぎて大変だ。

「全部は持っていけないから、一部だけ持っていこうか」

「全部持っていけないの？」

「量が多すぎて持っていけないだろう？」

「え？ あ……私、持ってけるよ」

「マジで？」

「マジだよ。見てて」

詩乃が手を軽く振ると、空間に穴が出来た。もしかしてと思うと、詩乃がモンスターの死体を持ち上げてそこに居れていく。すると綺麗にモンスターの死体が光に分解されて消えた。

「やっぱりアイテムストレージ、なのか？」

「うん。インベントリとか、アイテムボックスとかも言われる奴だよ。

シノンの力の一つだよ。使える、よね？」

「ああ、とても助かるよ」

「よし」

拳を握って嬉しそうにする詩乃。俺が見ている事に気付いて恥ずかしそうにしながらこちらを見てきた。

「ごめんなさい。すぐに収納するね」

「頼む」

気を良くした詩乃が次々と収納していくので、俺はアストルフオに警戒を頼んで警戒してもらおう。

「アストルフオ、頼む」

「ん〜わかった〜」

アストルフオが何かを考えているようで、生返事だ。まあ、敵が来たとしてもルサルカも居るし、大丈夫だろう。しばらく警戒しながら、詩乃の手伝いをして死体を全て回収した。その後、拠点へと不安そうな詩乃を連れて帰る。



拠点に到着すると、すぐに鈴と恵里が迎え入れてくれた。恵里は詩乃の変わった姿を見てホツとしたような表情になった。鈴は嬉しそ

うだ。肝心の詩乃と言えば、俺に後ろから抱き着いて顔だけだして隠れてこっそりと見ている。少し可愛い。

「可愛くなってる!」

「生き残ったのね」

「ただいま。ほら、詩乃」

「その、ただいま……」

「しののん、色々と変わってるけど、大丈夫?」

「だ、大丈夫」

「そつか。それじゃあ……何があつたか教えてね? 鈴、とつても気になるな。ねえ、えりえり、しののん」

「えっと……」

「真名君、いいよね? 二人の事を解決しないと駄目だから」

「確かにそうだな。話し合おうか」

これからの事を考えると二人には話し合ってもらわないといけない。そんなわけで四人で近くに座り

「じゃあ、えりえりからでいいよね?」

「ああ、頼む」

「どうせなら恵里の過去を話してあげるといいと鈴は思うよ。えりえりだけ知っているから、こんな事が起こったんだから」

「わかった。確かに僕だけが知っているのは不公平ね。僕は……」

そこから語られる内容は詩乃の過去と似ていた。いや、ある意味では詩乃より重い。何せ恵里は事故とはいえ大切な家族を自分のせいで失っているのだ。この点は詩乃と違う。詩乃は自分の手だが、殺したのはあくまでも他人だ。その後、それぞれ母親が壊れるのは同じで恵里はより一層ひどくなる。逆に詩乃は虐められてはいたが、親族の助けがあつた。だからその後も壊れずに助かった。でも恵里は違う。頼る親族もなく、味方は居なかつた。だから壊れた。

「ごめん、なさい……私、恵里に言っただけじゃない事を言っちゃった……」

「僕も同じだよ。言っちゃいけない事だった。ごめんね。それと怖い思いをさせちゃった。それに人も止めさせちゃった。本当は脅すだ

「けで何もするつもりはなかったんだけど……」

「うっ」

「アレは仕方ないよ。襲われかけたしのんにやることじゃないね」

「うっ……確かに頭に血が上ってた」

改めて話し合う二人は今度こそ、喧嘩する事はなく話し合いが進んでいく。二人は互いに微妙に違えど共通する事があるから、互いの気持ち理解できるのだろう。

「さて、これからは互いに仲良くできそうか？」

「うん、できそう」

「僕も大丈夫。友達……ううん、妹になるしね」

「え？ 妹？」

「だって詩乃は真名の物だからね。僕も真名の物だから、姉妹だよ？」

「いや、それは待って」

「待たない」

「うくん、とりあえず家族って事でいいんじゃないかな？」

「そうだな。鈴の案に賛成だ」

二人が言い争いになりそうなので、鈴の提案に俺も乗る。

「まあ、僕としては一緒に寝る事とキスする事を受け入れたら、文句はないよ。それ以降は二人次第で」

「あく真名と……」

「まあ、それは強制しないから、詩乃が悩んでくれ。恵里もいいな？」

「むっ」

「んっ鈴から提案があるの」

「なに？」

「なんだ？」

「えつとね……奈落を生き残る為に隠し事はなしにしようよ。もう赤裸々に話し合おう！ どうせ恥ずかしい事も全部みられてるしね！」

「賛成！ ボク、大賛成！」

今まで沈黙していたアストルフオが俺の口を奪って宣言する。

「ボクね、ボクね、凄く言いたい事があるの！」

「アストルフオか。何？ とりあえず隠し事なしは僕も賛成」

「えつと、私も賛成。もう行き違いで怖い思いしたくないし」

「まあ、俺も賛成だ。で、アストルフオが言いたい事はなんだ？」

「それはね、マスターの身体についてだよ！ とりあえず見た方が早いから憑依を解除するね！」

「ちよつ!？」

アストルフオの言葉と同時に俺の中から力が抜けていく。両手両足が消滅し、地面に転がる。それに片目もなくて視界が半分になる。呼吸も苦しくなってくるし、脂肪がほぼ消えたガリガリの身体は体温を急激に奪っていく。

「なにこれ!？」

「何って、マスターの現状に決まってるじゃない」

「そうそう。ボク達が居なければこんな感じになっちゃうんだよ？」

ルサルカとアストルフオが実体化し、両サイドから俺を支えてくれることでなんとか倒れずにすんだ。痛みも恐怖も感じないが、倒れて視界が塞がれるのは困る。三人の姿が見えないしな。

三人の顔を見ると驚愕や怯えが見て取れる。確かにこの姿は他人から見たら怖いのもかもしれない。

「これだけじゃないんだよ！」

「味覚、痛覚、恐怖、食欲、睡眠欲の感覚がないわ」

「後臓器も色々とないね！」

「なっ、なんでそんなことになってるの!？」

「マスターが恵里と鈴を助けるのに片腕と臓器、感情などいくつかを代償として捧げてたね。詩乃を助けるために支払ったのは5、6歳くらいまでの記憶と両足になるかな」

「も、もしかして……わ、私を助けるために……?？」

詩乃が震えながら聞いてくるので、そっぽを向く。

「別に詩乃のせいじゃない。俺が助けたいから助けたただけだ。だから気にする必要は——」

「無いと思ってるんこの馬鹿!？」

詩乃に怒鳴られて滅茶苦茶言われていく。

「これどうすんのよ! どうやって生活するの!？」

「あ、アストルフオカルサルカが憑依してくれたら……」

「あ、ボクぱくす」

「なっ!？」

「私も嫌よ」

「ルサルカまで!」

「これから移動と戦闘以外の時以外はボイコットしまくす」

「私達が憑依したら戻るからって、ちよつとサクリファイスを気軽に使い過ぎよ」

「いや、俺の身体程度で鈴達や詩乃が助かるのなら安く——」

「二」「安くない!」二」

全員に怒られた。本当に身体の現状が全て三人に教えられ、これらについての話し合いが決まった。

「とりあえず、危機感を覚えてもらうために私達はできるだけ力を貸さないから。夜だって鈴が結界を張って寝ればいいしね」

「え。責任重大なんだけど……うん。真名君の為に頑張るよ。寝てる間も結界を張り続けるのか……」

「私は全員の世話をするから。普段の生活は任せて。お母さんの事で介護はちよつと慣れてるし」

「それなら、死霊達を警備として放っておけば安全かな。今まで真名に頼りすぎていたし、僕も頑張るから」

「あの別に……」

「二」黙ってる二」

「はいはい、お口をチャックしましょうね」

そう言つてルサルカにキスされた。鈴達三人には黙つてるとか言われるし、大人しくされるがままになるしかない。まあ、詩乃を助ける為にサクリファイスを使った事に後悔はない。

「えつと、とりあえずは睡眠と食事よね?」

「僕達と一緒に無理矢理取らせるしかないよ」

「夜の警備はあすきゅんとるさるさにお願ひすればいいかな。スケルトン達が突破されるまでに気付いてくれればいいと思うし」

「そのぐらいならしてあげるよ」

「そうね。でも、だんだんと厳しくしていくからね」
「「はい」」

俺を除いて五人で色々と決められていく。これって完全に管理されるという事か。おかしい。恐怖は感じないのに嫌な予感はある。

「まず真名君のサクリファイスは使用禁止だね」

「うん。大人しく世話されるように」

「せめてガチャは引かせてくれ」

「そのガチャだけど、それも使用禁止よ」

「え?!?」

「いや、また私のような子を召喚されても困るし、聞いた話じゃ凶悪なモンスターも召喚されるんだよね?」

「は、はい……その可能性はあります」

「うん、禁止。で、いいよね?」

「賛成」

「僕としてもそうかな」

「待って待って、ガチャが引けないなんて地獄じゃないか!」

「ここが地獄でしょ」

「地獄だね」

「うんうん」

ルサルカとアストルフオはケラケラと笑っているが、これは非常に不味い。

「お菓子とか食料の供給とかあるんだけど!」

「人が増える方が困るから。戦えない人だつて出るんだから、安全確保ができないと駄目だね」

「うん。真名君、ちよつと頭を冷やして考えてね?」

「それでもガチャを引く!」

「……鈴、スマホを取り上げるね」

「待って!」

「待たないよ」

スマホを取り上げられた。睨み付けるけれど俺に味方は居なかった。

「俺の娯樂があああつ、命があああつ」

「僕達が娯樂になつてあげるからいらないよね」

「うん。そうだよ。それにガチャに引けを取らない娯樂ならあるよ」
「あるの？」

「しののんが協力してくれたらね」

「私なら言ってくれたらなんでも協力するけど……私のせいだし……」

「よし、言質を取ったからね。拒否はさせないよ」

「えつと、その、エッチな事以外なら？」

「大丈夫。というわけで、しののんをモフろう！」

「え？」

「ふむ。なるほど……娯樂として詩乃の耳と尻尾が提供されるのか。それならばガチャは一時、我慢できるかも」

「待つて。この耳と尻尾、凄く敏感なんだけど……」

「頑張つてね！」

「頑張りなさい。自分でエッチ以外つて言つたでしょ」

「うっ……わかつたわよ。好きにすればいいじゃない」

「「やつた〜！」」

思わず鈴と二人で喜んだ。詩乃からはジト目をもらつたけれど仕方がない。それほど魅力的なのだから。

「よし、隠し事なしで仲良くいこ〜」

「あ、隠し事と言えば思ひだしたけれど、詩乃にアレを伝えないといけ
なくないか？」

「アレ？」

「ああ、アレね」

「なんの事？」

「実はね……」

「スマホを見た方が早いわよ。はい、これ」

「動画？ いや、アニメか……え〜」

動画を見た詩乃は茫然自失となつてしまった。だから、アストル
フォにお願いして手足を戻してもらい、詩乃を後ろから抱きしめて猫

耳をモフモフしてなだめる。本当に好き勝手に弄つても怒られない。それほど自分の正体に驚いたのだろう。ただ、鈴が尻尾を触ると身体が跳ね上がったので流石に気付いた。ただ、茫然自失は継続していて、恵里の言う事に従って服を脱いで一緒に眠る事にはなった。寝袋と一緒に入った詩乃布団は気持ち良かった。眠くはないけれど、横になっただけなら何時の間にか眠っていた。

次の日は詩乃の悲鳴で目が覚め、俺の頬には紅葉が刻まれる。

八重樫雫

雫

香織が気を失っている中、私達の空気はかなり悪い。南雲君や鈴、恵里の死が、多くの生徒達の心に深く重い影を落としてしまった。それに加えて沙条君の事だ。どういう訳か、沙条君が恵里を突き落とすところを複数の人が見ている。私は落ちかけた鈴を助けようとしたのだと思うけれど、イシユタルさんや王様の発表を聞いて光輝達と一部を除く男子とごく少数の女子が賛同した。

南雲君が死んで無能と言われた事に関しては光輝もクラスメイトを悪く言うなど強く抗議していたけれど、沙条君の事に関しては完全に裏切り者としてとらえていた。どちらにせよ、私達の中では沙条君達の事は話題にしなくなった。

それでも「戦いの果ての死」というものを強く実感させられた皆はトラウマからまともに戦闘ができなくなった。当然、聖教教会関係者はいい顔をしない。実戦を繰り返し、時が経てばまた戦えるだろうと、毎日のようにやんわり復帰を促してくる。それに猛然と抗議してくれたのが愛子先生だ。

愛子先生は遠征には参加していなかった。作農師という特殊かつ激レアな天職のため、実戦訓練するよりも教会側としては農地開拓の方に力を入れて欲しかったみたい。愛子先生が居れば、糧食問題は解決してしまう可能性が高いらしい。

そんな愛子先生は南雲君や沙条君、恵里や鈴の死亡の事実と沙条君が裏切って恵里を突き落とした事も知った。それも自分が安全圏でのんびりしている間という事実が重くのしかかったのだと思う。愛子先生は全員を日本に連れ帰ることを目的としていた。それができなくなったということで、責任感の強い愛子先生は強いショックを受けて寝込んでしまった。

だからこそ、起きた愛子先生は戦えないという生徒をこれ以上戦場

に送り出すことなど断じて許せなかった。聖教教会としてはこの世界の食料関係を一変させる可能性がある愛子先生が、不転の意志で生徒達への戦闘訓練の強制に抗議したらしい。もし、強制させるのなら一切の協力をしないとイシユタルさんに直談判をしたこのことだ。愛子先生との関係の悪化を避けたい教会側は、愛子先生の抗議を受け入れた。

結果、自ら戦闘訓練を望んだ私達の組と檜山君達、永山君のパーティーのみが訓練を継続することになった。それ以外の人は沙条君が残したタブレットの解除と愛子先生の護衛を頼まれたらしい。他人のタブレットを覗くなんて本来は有り得ない事だけど、一部の人間にとって鈴を経由して沙条君が供給していたお菓子や料理が得られなくなった。この世界に来て手に入らないと思っていた物が手に入つたせいで、諦められなくなつたみたい。そのレシピが手に入るとなると、率先して頑張る人がいた。普通は止めるけれど、死んだ人の遺品というのもあるのだと思う。

私達は再び訓練を兼ねてオルクス大迷宮に挑むために頑張る。次はメルド団長と数人の騎士団員だけでなく、高位の冒険者も雇って護衛を万全にして探索するらしいけれど、それまでに香織が目覚める事を願う。

現実逃避をするように南雲君が橋から落ちた原因は自分で何かしてドジったせいだと思おうようにしている。死人に口なしってことなんだよね。無闇に犯人探しをするより、南雲君の自業自得にしておけば誰もが悩まなくて済む。クラスメイト達の意見は意思の疎通を図ることもなく一致していた。

メルド団長はあの時の経緯を明らかにするため、生徒達に事情聴取をする必要があると考えていたみたい。私達のように現実逃避して、単純な誤爆であるとは考え難かったこともあるし、仮に過失だったのだとしても白黒はつきりさせた上で心理的ケアをした方が私達のためになると思つたらしい。こういうことは有耶無耶にした方が、後で問題になる。しかし、メルド団長は行動すること叶わなかった。イシユタルさんが、私達への詮索を禁止したからだ。メルド団長は食

下がったけど、国王にまで禁じられては堪えるしかなかった。

「あなたが知ったら……怒るのでしょうか？」

あの日から一度も目を覚ましていない香織の手を取り、そう呟く。医者の診断では体に異常はなく、おそらく精神的ショックから心を守るための防衛措置として深い眠りについていているらしい。時間が経てば自然と目を覚ますとのことだけど、心配は心配。だから、香織の手を握りながら、どうかこれ以上、私の優しい親友を傷つけないで下さい。と、誰ともなしに祈る。その時、不意に握り締めた香織の手がピクツと動いた気がした。

「!? 香織! 聞こえる!? 香織!」

必死に呼びかける。すると、閉じられた香織の目蓋がふるふると震え始めた。私は更に呼びかけた。その声に反応してか香織の手がギュツと私の手を握り返してくれた。香織の方を見ると彼女は目を覚ました。

「香織!」

「……雫ちゃん?」

ベッドに身を乗り出し、目の端に涙を浮かべながら香織を見下ろす。香織は、しばらくボーと焦点の合わない瞳で周囲を見渡している、やがて頭が活動を始めたのか見下ろす私に焦点を合わせはじめた。

「ええ、そうよ。私よ。香織、体はどう? 違和感はない?」

「う、うん。平気だよ。ちよつと怠いけど……寝てたからだろうし……」

「そうね、もう五日も眠っていたのだも……怠くもなるわ」

そうやって体を起こそうとする香織を補助し苦笑いしながら、どれくらい眠っていたのかを伝える。香織はそれに反応する。

「五日? そんなに……どうして……私、確か迷宮に行つて……それで……」

徐々に焦点が合わなくなっていく目を見て、マズイと感じた私は咄嗟に話を逸らそうとする。しかし、香織が記憶を取り戻す方が早かった。

「それで……あ……南雲くんは？」

「ッ……それは……」

どう伝えるべきか悩む。それに鈴や恵里、沙条君、ユーリ達も居なくなつたことを知らない。放つておいても勝手に知られることになる。その前に私から伝えた方がいいのだろうけど、また気を失うかもしれない。香織は考えている私の様子で自分の記憶にある悲劇が現実であったことを悟つてしまったみたい。

「……嘘だよ、ね。そうでしょ？ 雫ちゃん。私が気絶した後、南雲くんも助かつたんだよね？ ね、ね？ そうでしょ？ ここ、お城の部屋だよ？ 皆で帰ってきたんだよね？ 南雲くんは……訓練かな？ 訓練所にいるよね？ うん……私、ちよつと行つてくるね。南雲くんにお礼言わなきゃ……だから、離して？ 雫ちゃん」

現実逃避するように次から次へと言葉を紡ぎ南雲君を探しに行こうとする。そんな香織の腕を掴み離さない。

「……香織。わかつているでしょう？ ……ここに彼はいないわ」

「やめて……」

「香織の覚えている通りよ」

「やめてよ……」

「彼は、南雲君は……」

「いや、やめてよ……やめてつたらー！」

「香織！ 彼は死んだのよ！」

「ちがう！ 死んでなんかない！ 絶対、そんなことない！ どうして、そんな酷いこと言うの！ いくら雫ちゃんでも許さないよ！」

イヤイヤと首を振りながら、どうにか私の拘束から逃れようと暴れる香織。私は絶対離してなるものかとキツく抱き締める。ギュツと抱き締め、凍える香織の心を温めようとする。

「離して！ 離してよお！ 南雲くんを探しに行かなきゃ！ お願いだから……絶対、生きてるんだから……離してよお」

いつしか香織は「離して」と叫びながら私の胸に顔を埋め泣きじやくつていた。縋り付くようにしがみつき、喉を枯らさんばかりに大声を上げて泣く。私はただただひたすらに己の親友を抱き締め続けた。

そうすることで、少しでも傷ついた心が痛みを和らげますようにと願う。

どれくらいそうしていたのか、窓から見える明るかった空は夕日に照らされ赤く染まっていた。香織はスンスンと鼻を鳴らしながら私の腕の中で身じろぎした。心配そうに香織を伺う。

「香織……」

「……雫ちゃん……南雲くんは……落ちたんだね……ここにはいないんだね……」

囁くような、今にも消え入りそうな声で香織が呟く。私は誤魔化さない。誤魔化して甘い言葉を囁けば一時的な慰めにはなるだろう。しかし、結局それは、後で取り返しがつかないくらいの傷となって返ってくるのだ。これ以上、親友が傷つくのは見ていられない。

「そうよ」

「あの時、南雲くんは私達の魔法が当たりそうになってた……誰なの？」

「わからないわ。誰も、あの時のことには触れないようにしてる。怖いよね。もし、自分だったらって……」

「そっか」

「恨んでる？」

「……わからないよ。もし誰かわかったら……きつと恨むと思う。でも……分からないなら……その方がいいと思う。きつと、私、我慢できないと思うから……」

「そう……」

俯いたままポツリポツリと会話する香織。やがて、真っ赤になった目をゴシゴシと拭いながら顔を上げて私を見つめる。そして、決然と宣言した。

「雫ちゃん、私、信じないよ。南雲くんは生きてる。死んだなんて信じない」

「香織、それは……」

香織の言葉に再び悲痛そうな表情で諭そうとする。しかし、香織は両手で私の両頬を包むと、微笑みながら言葉を紡ぐ。

「わかってる。あそこに落ちて生きていると思う方がおかしいって。……でもね、確認したわけじゃない。可能性は一パーセントより低いけど、確認していないならゼロじゃない。……私、信じたいの」

「香織……それとまだ言わないといけなない事があるの」

「……何？ まだ何かあるの？」

「奈落に落ちたのは南雲君だけではないの」

「え？ 他に誰が……」

「香織。ユーリがどうなったか覚えてる？」

「あつ……ユーリちゃん……そうだ。南雲君を助けて……」

「香織、もしかして南雲君しか見てなかったの？」

真つ青な表情になった香織に私はしっかりと説明していく。ユーリが爆発に巻き込まれた後、またモンスターの襲撃があつて鈴と恵里が崖に追い詰められた。そこで鈴が落ちてそれを助けようとした恵里と同じく助けようとした二人が勢いよくぶつかって鈴だけでなく二人も落ちた。その事を見た他の人達が沙条君が恵里を突き落とし、た事から、あの事件は全て沙条君のせいになったことも香織に伝える。

「そんな、ユーリちゃんだけでなく鈴ちゃんや恵里ちゃん、沙条君まで……」

「……香織……」

「生きて、るよね？」

「わからない。沙条君と南雲君だけなら死んでいるかもしれない。でも鈴と恵里が一緒なら可能性は高いと思う。それに沙条君の能力なら味方を召喚できる可能性があるし、希望は捨てなくていいよ」

「うん。希望を捨てずに頑張っていきたいけど、付き合ってくれる？」

「もちろんいいわよ。納得するまでとことん付き合うわ」

「雫ちゃん！ ありがとう！」

「礼なんて不要よ、親友でしょ？」

香織は私を抱きしめながら何度も礼をいう。その時、不意に部屋の扉が開けられる。

「雫！ 香織はめぎ……め……」

「おう、香織はどう……だ……」

光輝と龍太郎が入ってきたみたい。香織の様子を見に来たのだろう。訓練着のまま来たようで、あちこち薄汚れている。あの日から、二人の訓練もより身が入ったものになった。二人も南雲君達の死に思うところがあつたのだろう。何せ、撤退を渋った挙句返り討ちにあい、あわや殺されるといふ危機を救ったのは南雲君と沙条君なのだ。もう二度とあんな無様は晒さないと相当気合が入っているようだ。そんな二人が、部屋の入り口で硬直していた。訝しそうに私は尋ねる。

「あんた達、どうし……」

「す、すまん！」

「じゃ、邪魔したな！」

私の疑問に対して喰い気味に言葉を被せ、見てはいけないものを見失ってしまったという感じで慌てて部屋を出ていく。そんな二人を見て、香織もキョトンとしている。しかし、唸い私はその原因に気がついた。

現在、香織は私の膝の上に座り、私の両頬を両手で包みながら、今にもキスできそうな位置まで顔を近づけている。私の方も、香織を支えるように、その細い腰と肩に手を置き抱き締めているように見える。つまり、激しく百合百合しい光景が出来上がっているのよね。私は深々と溜息を吐くと、未だ事態が飲み込めずキョトンとしている香織を尻目に声を張り上げた。

「さっさと戻ってきなさい！ この大馬鹿者ども！」

二人にちゃんと説明してから事無きを得た。

その日は様子を見て部屋で休んでもらい、次の日。香織を連れて食堂へと移動する。するとそこで香織は皆に目覚めた事を喜ばれて囲まれる。香織の隣には光輝や私達が一緒に居る。

「はいはい、そこまでよ。今は食事をする時間でしょ。香織は病み上

「がりなんだから、また後日にして」

「そっか。そうよね」

「はくい」

「待ってくれ」

「え？」

皆が離れた後、清水君が香織の腕を掴んで止めた。

「白崎。後で話がある。夜、部屋に行く」

「え？ 私と？」

「そうだ。できれば二人つきりがいいが……」

「何を言っているんだ！ 夜に香織の部屋に行くなど……」

「天之河には関係ない事だ。気にするな」

「なに？」

「量子コンピュータに関する事だからな。だが、言いたい事はわかる。

確かに夜、白崎と二人つきりになるのはまずい。いらん事を勘繰られ

ても困る」

「それなら俺と一緒に話を聞く」

「断る。天之河に教える事は許可されていない。それにお前自身が

言った事だろう。夜に白崎の部屋に行くのは駄目なのだろう？」

「それは……」

「八重樫なら居てくれてもいい。いや、居てくれた方がいい。それ以

外は遠慮してもらおうが」

清水君が香織の腕を引き寄せて香織の耳に何かを呟く。すると香

織は清水君の顔を見る。

「本当？」

「ああ、本当だ。詳しい事を教える」

「わかった。うん。雫ちゃん。夜、付き合って」

香織の表情が笑顔になる。本当に香織が必要としている情報みた

い。それってつまり、南雲君の事なのかな？

「いいの？」

「うん。お願いね」

「わかった。護衛は私に任せて」

何を伝えるつもりかはわからないけれど、聞く価値はある。



夜、清水君が来る前に光輝達に来て大変だったけれど、私が追いだした。睨み合いは続いているけれど、香織が入れないように言っているのだから入れない。そうこうしていると、清水君は両手で可愛らしいオレンジ色の猫を二匹持つてきた。どちらも光輝達を威嚇している。

「それって……」

「猫だ。一匹は白崎に任せる」

「それなら俺達が聞いても大丈夫じゃないか」

「そうだな」

「いや、他に知らせないようにする契約がされている。八重樫は居てもらっていいが、お前達は駄目だ」

「何故だ！」

「お前は俺達を戦争に巻き込んだ。守ると言ったのに五人も犠牲になった。それもお前達が撤退を渋ったからだ。だから信じられない」「それは……」

「少なくとも俺と白崎は八重樫を信じられる。だから、彼女は構わない。どうしても聞きたいというのなら、行動で示して信頼を回復してからだ」

「光輝。ここは大人しく引き下がろうぜ。別に白崎の身に危ない事が起こるわけでもないしな。そうだろうか？」

「当然だ。むしろ白崎が欲している情報を伝える。代価はこの猫を一匹世話してもらっただけだ。この猫達は白崎と南雲達が街で拾ってきた子だから、文句はないだろう」

「そうなの？」

「うん。私と南雲君達でみつけて連れてきた子だよ。だから、私が世話をするのは全然いいよ」

「契約は俺がしてあるから、貸し出す形になるが大丈夫だ」

「それならいいわね」

「むう……だが……」

「わかった。そこまで言うなら扉は開けておくから外から見ているといい。八重樫、部屋に入らないようにだけしてくれ」

「わかったわ」

彼の言う通り、それなら光輝も五月蠅い事は言わないでしょう。

「わかった。それなら大丈夫だな」

光輝が納得した事で清水君が部屋の中に入り、香織と一緒にベッドに座り、猫を渡す。そして、二人の間に板のような物を出して筆談しだした。徹底的に知らせるつもりはないみたい。

「そっか……そっちはまだなんだね？」

「ああ。だが、どちらにしろ情報は貰える」

「うん。ありがとう……私も頑張るから、そちらも頑張つてと伝えておいて」

「にゃ〜」

「よし、筆談は終わりだ。バッテリー作りについて白崎も手伝って欲しい」

清水君と香織が床に筆談に使っていた板を置いて、二人で魔法を発動して燃やし尽くした。ちゃんと消火はしてみたんだけど、綺麗に消滅させられている。そこまでして隠さないといけない情報みたいね。

「訓練しながらでいいならいいよ」

「それで構わない。正直、一人じゃ辛い。あいつら、自分達の力のなさをごっちのせいにしてきやがって……ちゃんと規格通りに作れつていうんだよ」

「あはは、南雲君の精度が凄かったからね。それに合わせられた鈴ちゃんは凄く大変そうだったけど。疲れてるなら清水君も回復してあげるよ」

「止めてくれ。それをされると倒れられないじゃないか」

「倒れたいいんだ」

「なんで好き好んで限界を超えてやらなきゃならないんだ……俺はご

めんだ」

「そうだよね……アレは今思うとおかしいよね、うん。あ、回復魔法が欲しければ何時でも言ってるね。協力するから」

「そうか……それならいい事を考えた。手伝ってくれ、白崎。連中にもデスマーチをさせてバツテリーを作らせる。何、素人の谷口だってできたんだ。本職ができないはずがない」

「そうだよね。任せて。リハビリも兼ねてやるよ」

「頼む」

楽しそうに物騒な話をしながら二人はこちらに移動してきた。香織は猫を抱いていて、清水君も一匹を連れて帰る。香織は清水君の後ろ姿が見えなくなるまで手を振って見送っていた。

「あ、雫ちゃん。不安だから一緒に寝てくれないかな？」

「別にいいけど……」

「お願い」

「わかった」

私は香織に引つ張られて部屋に入り、すぐに香織が扉を閉めてた。光輝が何かを言っていたけれど、香織は完全に無視していた。そのままベッドに連れていかれて、押し倒された。

「か、香織？」

「雫ちゃん……」

私の上に乗ってきて、寝そべる香織は私の耳元に囁く。微かに見える扉は少し開いていて、光輝達の気配を感じる。もしかして、香織が心配だって聞き耳をたてているのかもしれない。でも、流石に私が押し倒されたから帰っていったようだ。

「で、何があったの？ もう居ないわよ」

「えっとね、ユーリちゃんが生きているんだって」

「あの爆発で？」

どう考えても死んでいると思ったけれど、彼女も召喚された特別な存在ということなんだろう。確かに量子コンピュータとか作れるよいうな子なんだから、何か私達の知らない技術で生き残ってもおかしくない。

「うん。そして、ユーリちゃんが生きているから沙条君も生きてる。南雲君はわからないらしいけれど、オルクス大迷宮を探索して救助するためにユーリちゃんがこの子達を派遣してくれてるの」

「猫、よね?」

「この子達はただの猫じゃなくて、高度なAIなんだって。量子コンピュータの制御AIみたいな感じらしいよ。それで増殖しながら風潰しで奈落を捜索中だから、早まらないようになって言われたの」

「そっか。南雲君が生きてる可能性が高くなったわね」

「うん! それで猫ちゃんからのお願いなんだけど、沙条君のタブレット、回収するか壊して欲しいって」

「今、皆がパスワードを打ち込んでる奴ね」

「手伝ってくれる?」

「もちろんよ」

皆が生きてくれるのなら、それほど嬉しい事はない。どうか、無事で居てね。

第24話

気持ち良い温もりと身体を揺すられる感触で目を覚ますと、頭の後ろにある柔らかな小さな膨らみの感触がある。左右に目をやれば両脇に鈴と恵里がそれぞれ詩乃の腕を枕にしなから、裸のまま俺に抱き着いて眠っていた。

「んんっ……起きた？」

背後から恥ずかしそうに聞いてきた声に頭を動かして上を向くが見れない。

「ちよっと、動かない、で……」

「悪い」

擦れて変な感じがするのだろう。今、俺は詩乃の胸を枕にして眠っていた。とても気持ちが良いのでスツキリとしているが、詩乃にとっては羞恥プレイだろう。こうなっているのも皆で話し合って寝心地を迫及した結果だ。俺の手足がなくなったので、この中で両手両足がある詩乃が下になり、その上に仰向けで俺が寝て、左右に鈴と恵里が寝る形に収まった。

詩乃は裸を見られるのは嫌がるので、基本的に俺に見られないようにお風呂の時は目隠しをされる。寝る時も二人がガツチリとホールドしてくるので見る事はできない。下着姿でもいいのだろうが、寝心地が悪いし、痛いから皆で頼み込んだ。

「おはよう」

「うん、おはよう。起きたら退いて。こっちを見ないでね」

「ああ、わかってる。ルサルカ」

「はいはい」

俺にルサルカが憑依して、身体がルサルカの物へと変化していく。アストルフオでもいいのだが、女の子である詩乃のためにこちらにしている。それが原因で詩乃は虐められたが。

「じゃあ、出るわね」

「うん」

最初の数日はルサルカが詩乃に悪戯をしていたが、本気で泣き出し

たので止めてくれた。怒るのではなく、泣き出したというのが詩乃の想いが伝わってくる。拒否したいけれど拒否はできないと思っていたのだろう。彼女は俺の片腕と両足、それに欲求を消した事に罪悪感を感じているからだろう。

そう思っていると、ルサルカが寝袋から外に出てしばらく歩く。といっても、ほぼ真つ黒なので見えない。詩乃が二人を起こして着替えているのだろう。食事の用意を行う為に三人に声をかけてから移動する。

「ご飯を取ってくる！」

「わかった」

「いってらっしゃーい」

「ん〜」

詩乃が居るから、二人も不安になることはない。なので魚を取りに行く。そう、俺達はまだ拠点から動いていない。流石に詩乃の変化を試さないといけないからだ。

「じゃ、変わるわね」

「ルサルカのままでもいいが……」

「嫌よ。だって濡れるじゃない」

「アストルフオ」

「任せて〜」

ルサルカからアストルフオに変化し、湖に潜って食料を取ってくる。戻ってくると、三人が着替えて待っていた。

「お待たせ」

「おはよ〜」

挨拶を交わした後、食事を開始する。その時点でアストルフオ達は宣言通りに俺から抜けて詩乃の世話になる。詩乃の膝枕に頭を乗せて食べさせてもらう。

「じゃあ、やるわよ。あ〜ん」

「あ〜ん」

詩乃が食べさせてくれるのは嬉しいが、味もしないし食欲も無くなったので詩乃の太股の感触と照れながら魚の切り身を差し出して

くれる詩乃の表情を楽しむしかない。

「美味しい?」

「……やっぱり美味しくない……」

嘘をつきたいけど、つかない。隠し事はなしという決まりになったから、ちゃんと伝える。もし嘘をついたら三人から嫌われるかもしれないし、それは嫌だ。

「でも、食べないといけないよ?」

「うん。無理しても食べないと動けなくなるしね」

「わかっているけれど、噛む感触しかないんだよ」

「それなら僕に良い考えがあるよ」

そう言って恵里は魚を口に含んで何度か噛んだ後、俺に口付けをしてきた。そのまま唾液と一緒に噛まれた魚の切り身が口の中に入られる。当然のように魔力を流し込みながら房中術を発動してくる。すると身体の中に恵里の心地良い魔力が行き渡って気持ち良くなってきた。すると自然と自分から魔力と一緒に飲み込んでいく。

「あ、食べた!」

「こんな感じで食べさせればいいのか。魔力は求めているんだからね」

「えっと、この方法は流石に……」

「えく真名君とのキス、気持ちいいよ?」

「そうそう。詩乃もしたら病み付きになるから。それに……」

「……わかっているわよ。嫌だけど、腕と足の代わりにならないと……」

「嫌なら別にいい。俺は……」

「うるさい」

「んぐっ!」

詩乃が頭を下げてきて軽くキスされ、すぐに離れていった。彼女の顔を見上げると真っ赤にしながらそっぽを向く。

「嫌なんじゃ……?」

「嫌だけど嫌じゃない……」

「なにそれ?」

「うるさい。助けてもらった感謝はしてるから、キスしたの! わか

れ！」

「無理だつて」

「鈴、判定は？」

「真名君のアウトかな」

「なんで!？」

「女心？」

とりあえず、詩乃とのスキンシップをもっとしていけば仲良くはなれそうだな。

「まあ、僕と鈴が食べさせればいいだけだしね」

「そうだね」

「それをお願い。口移しで食べさせるとか無理」

「まあ、俺としてはお願いしますとしか言えない。魔力さえ貰えれば文句は……いや、ガチャがしたい」

「それは駄目だよ？」

「駄目ね」

「うん、駄目」

「くそう、くそう……」

三人がやれやれと言った雰囲気を出しながら、俺に食べさせてくれる。魔力もたっぷり貰って元気になっていくのがわかる。身体の大部分をアストルフオ達に頼っているから、魔力が無くなれば死活問題だしな。



食事が終わり、アストルフオが憑依してくれる。これでようやく自由に動けるようになった。なので立ち上がって身体を動かして確認する。本当にアストルフオ達が居ないと俺は何もできない。皆の存在が俺の支えとなっている。互いに助け合う今の環境はある意味では理想だろう。

『まったく、マスターはボクが居ないと駄目だね!』

『まったくもってその通りだよ、アストルフオ。何時もありがとう』

『やった、マスターにお礼を言われたく! ひゃっほう!』

『コイツ、ちよろいわね』

『ルサルカもありがとう』

『ふん。お礼を言っても何も出ないから。それよりも魂をもっと寄越しなさい』

『それはもうちよつと待ってくれ』

『はいはい。早く人の苦しみがく姿が見たいのよ。今の貴女達の姿も結構いいけれどね』

『変態だ〜』

『女装男に言われたくないわ』

今、アストルフオの姿をしているのは俺なので、ルサルカの言葉は俺にもダメージがくらってしまふ。まさか、自分が女装男の娘になるなど誰が想像しようか。似合っているとはいえ、やはり嫌だ。

『でも、似合ってるでしょ?』

『悔しいけれど、似合っているわ』

『いえ〜い! ボクの勝ち〜』

『はいはい』

落ち込んでいると詩乃が鈴と恵里の二人を連れてくる。これからの予定は決まっているので早速動く。まず詩乃はアストルフオの剣とかと同じように実体化した弓の訓練だ。俺はルサルカに憑依してもらって鈴と一緒に作業。恵里はモンスターの死骸をアンデッド化して使役していく。

『じゃあ、やるわよ』

『は〜い』

鈴を岩に背中を預けさせてから横に座り、モンスターから剥ぎ取った皮を加工していく。といっても、皮に穴を開けてそこにボロボロになった軍服の布を引き裂いて糸の代わりの紐として結んで縛っていただくだけ。これで簡単な服モドキはできる。それと鞆も作る。詩乃と逸れるとアイテムストレージが使えなくなるから、道具は小分けし

て持っていないくはいけない。

「しかし、鈴や恵里、詩乃は服を作ったことないのね」

「裁縫の授業くらいだし……」

「子供を作ったら服を手作りするのは普通だったけど、今はそんなことないものね」

「買えばいいからね」

ルサルカと鈴の会話を聞きながら、詩乃の方を見る。詩乃は弓を構えて矢を放つ。矢は暗闇に消えて見えなくなっていくが、詩乃はしっかりと見えているようだ。

「外した。こう、かな？」

次々と綺麗な姿勢で真剣な眼差しをしながら射ていく姿は絵になっっている。数を重ねるごとに放たれる矢の速度もどんどん速くなっていき、風切り音まで変化しだす。同時に的の岩が崩れるような音も聞こえてきた。

「こんなじやシノンになれない。もつと精度をあげないと……」

スマホに入っているアニメや小説を読んだ詩乃は自分が目指す先を理解している。最初は驚いていたが、すぐに自分なりに折り合いをつけたようだ。詩乃としては知られていないはずの過去を全て知られていたのだし、信じるに値する証拠があった。それでも自分が作り物だということには認めていない。誰かが観測して書き上げたのだと思うようにしたようだ。そう思い込むことにしているのだろうとルサルカが言っていた。

実際、詩乃もわかっているのだと思うが、愛歌が何か細工をして詩乃の記憶を封印でもしたせいで普通に生きて来た記憶だけがある。経験してきた事が自分が作り物だとは認められない。だから、並行世界という事になっている。確かに原作では詩乃が召喚される事やあの襲われる時には詩乃のストーリーカーが介入して助かった。だがこちらの詩乃は愛歌の介入か何かでストーリーカーが来ずに、人を追加されてそのまま犯されそうになっていた。ひよつとしたらストーリーカーともまだ逢っていないのかもしれない。

どちらにせよ心に大きな穴が空いて負担がかかった詩乃は目の前

の問題に対処する事で答えを先送りにし、俺達で空いた心を埋める事にしたのだと思う。

「ルサルカ、的を出して」

「はいはい。おいで、ナハツエーラー食人影」

「ありがとう」

対人戦の訓練にもなるので、ナハツエーラー食人影を使うのはあっている。実際、ナハツエーラー詩乃は食人影を狙って外している。

「……うまくできない……」

「人を撃つ事になるのだから仕方がない。特に詩乃は難しいだろう」

「弓なら平気だと思っただけ……うまくいかない」

「人を撃つ事にかわりないからな」

「うん……」

「無理して撃つ必要はない。詩乃は俺達が守るからモンスターを倒してくれるだけでもいい。人の相手は俺達に任せてくれ。といっても、俺は身体を貸すぐらいしかできないが……」

「それでも充分だと思うけど……むしろ、自分の身体が勝手に動いて接近戦とかをされるって、想像したら物凄く怖いんだけど……」

「恐怖は感じないから大丈夫だ」

「ああ、なるほど……だから戦えているのね」

詩乃が弓を構えて矢を番えて射る。やはり、ナハツエーラー食人影を外れる。詩乃の頬に汗が滴り落ちていく。小刻みに身体も震えているから、矢が命中するはずもない。

「ふみやあつ!？」

「ふっふっふっ、猫耳」

「鈴! な、なにをするの!」

鈴が結界を足場にして自らを飛ばして抱き着き、詩乃の猫耳をモフリだす。可愛い悲鳴をあげる詩乃だが、震えは止まったようだ。ルサルカも参戦するようで尻尾を掴んでペロリと舐めた。

「ひにやあつ!?! にや、にやにをつ!」

「そんな震えてても訓練にはならないわ。だから、気を紛らわせてあげる」

「鈴はもふりたいだけ〜」

「まつ、んんっ!?! やあつ、そこっ、だめえっ!」

びくびくと身体を震わせる詩乃はやがてビクンツと身体を痙攣させた。詩乃の顔は涙を薄っすらと浮かべて上気した頬でこちらを見てくる。

「二人共、そこまでにしておけ」

「あら、もうちよつとでいかせてあげたのに」

「どこにだよ」

「ふふふ」

「鈴はわかんないよ〜」

ルサルカの言葉に真っ赤に顔を赤らめながら答える鈴。しっかりとわかってしているようだ。しかし、詩乃の尻尾を触った感触は気持ち良かった。もつと触りたい。

「あつ、ああ……あ、アンタ達……後で……覚えて、なさい……」

「ふふ、いいわよ。覚えててあげる。だから、同じ事をしてみなさい？

相手はマスターだけどね」

「なあつ!?!」

「あ、そういえば召喚獣の責任は召喚者が取るんだっけ?」

「つまり、私が真名に……」

鈴の言葉に顔を赤らめる詩乃だけれど、ある一つの事に気付いた。

「それってルサルカと詩乃のやった事の責任が二つもくるんだよな」

「もちろんやられたらやり返すわよ?」

「それはわ、私も……」

「無限ループだね!」

「被害、受けるのは俺と詩乃だけになりそうだから、禁止する」

「それって私のやられ損じゃない!」

「確かにそうだよね」

「なら、これで決着をつければいい」

そう言いながらルサルカの身体に後ろから抱き着いたのは恵里だ。彼女は手足に黒色のガントレットとグリーンが装着されている。髪の毛の色も黒色から銀色に変化し、服装もジャンヌダルク・オルタの

物に変化していた。おそらく、インストロール夢幻召喚を自分なりに再現したのだろう。

自分の身体を依り代とし、ジャンヌダルク・オルタの魂をその身に宿す。普通ならジャンヌダルク・オルタと人である恵里では魂の力に差がありすぎる。しかし、それは恵里が普通の人の場合だ。この世界に転移し、降霊術師という天職を得た恵里は更に魂を操って神へと至るための魔術、永劫破壊エイヴィヒカイトを覚えた。それも自己流で覚えた後、ルサルカに本物を教えてもらって自分なりに改造している。

さて、ここで問題となるのはジャンヌダルク・オルタの出自だ。彼女はジャンヌダルク本人ではない。狂ったジル・ド・レエが魔力を使ってなんでも願いを叶える聖杯で作りに出した復讐者である龍の魔女贗作だ。本来なら英霊ですらないが、人々の想いの力によつて英霊へと昇華された。皆がさつさと召喚させろやあ！ と願った結果ということだ。

本来の英霊ではないからか、恵里にとつては扱いやすい存在なのかもしれない。いや、恵里とジャンヌダルク・オルタの性格は似ているかもしれないから、案外協力関係になるかもしれない。なんせ、どっちも猫被りで腹黒だ。

「ゴイツ、燃やしていいかしら？」

「駄目」

「ちつ」

恵里の口から別人のような声が聞こえる。どうやら、ジャンヌダルク・オルタなのだろう。しっかりと契約しているみたいだし、大丈夫だろう。というか、混ぜるな危険じゃないだろうか？

「えりりん、これってトランプ？」

「うん。トランプだよ。色々賭けようか。王様ゲームみたいなの」

「いいね、それ」

「やろうやろう！」

「ちよつと待ちなさい！」

詩乃が反対するが、多勢に無勢でやる事になった。ルールとしては勝者が敗者の一人から二人に命令し、その内容を実行する。ただし、本番などはなし。ボディタッチやキスとかは有り。拒否すると服を

一枚脱ぐことで免れる。ちなみに敗者側はトランプを引いて勝者が引く前に言ったアップかダウンかで決める。命令を聞いた人が次のゲームを決めて再スタート。

こういうルールでやったのだが、結果は悲惨な事になった。アストルフオ以外、全員が服を脱いでいて、鈴と恵里、詩乃、俺とルサルカは下の下着以外剥ぎ取られた。

アストルフオの直感が冴えわたり、ほぼ一人勝ちだ。ちなみに俺はルサルカに憑依している。流石に手足がないと参加はできないしな。なので手ブラの感触が伝わってきたりもする。

「いえ〜い！ ストレートフラッシュでボクの勝ち〜！」

「またか！」

「こいつ……」

「駄目だ、勝てない」

「おおっと、魔術による反則は駄目だよ〜？」

「ちっ」

見た目は美少女達の脱衣ゲームで見た限りはいいが、油断したらやばい事を色々とさせられる。理性が蒸発しているだけはある。例えば詩乃達の全身を撫でまわしてこちよばすとか、犬の真似をさせられたりとか、乗り物にされたりとか、膝枕を強要されたりとか、褒めちぎるように言われたりとか。たまに勝っても持ち前前の運で確実に回避してきやがる。最後には皆で如何にアストルフオを攻略するかという話になっていた。

まあ、いい暇潰しにはなったので良かった。他にも魔力交換ができて俺にとっては楽しいひと時ではあったし、アストルフオに対する団結で仲良くはなれたと思う。



数日が経ち、改めて旅立つ準備ができたので皆で旅を始めることに

しようと思う。というのも、これ以上ここに留まるとずっと居たくなってしまう。ここには安全になった拠点と水場、食料の供給場所がある。贅沢を言わなければ生活できるし、人を止めた俺達であれば楽に生活できてしまう。また、互いの身体を貪る事で快樂を得られるし、この環境では互いが協力していかないと生きていけないから自然と互いを尊重して仲良くなる。互いの人に見せるべきではない恥部も全て見せているのも大きいだろう。

だが、やはり鈴と詩乃はそれぞれの日本に帰りたがっている。恵里は俺と鈴が居る所ならどこでもいいらしい。だが、ここで問題なのは俺と恵里だ。鈴と違って永劫破壊の亜種ではなく、本来の永劫破壊エイヴィヒカイトは強烈な殺人衝動がある。こんな状態で日本に行けばまともな生活は過ごせないのです、殺しまくっても問題がない生物が居るこの方が理想郷といえる。

それにハジメの事もある。もちろん、すでに手遅れの可能性は大いにある。それでもハジメには悪いが、鈴や恵里、詩乃達を危険にさらす訳にはいかなかった。だから、詩乃が力をちゃんと使え、非常用の食料である干物が出来るまではここで待機していた。

「というわけで、オルクス大迷宮を本格的に探索して脱出したいと思う！ 帰りたいよな？」

「僕はどうでもいいけど……鈴達に従う」

「鈴は帰りたい。お母さんやお父さんに会いたいし……」

「私もお母さんに会いたい。できるかはわからないけれど」

『ボクはマスターにお任せだよ』

『私も別にどうでもいいわね。でも、地上には出たいわ。だって狩り放題なんだから』

アストルフオは俺に従ってくれるようだし、ルサルカは……アレだ。人を喰いたいのだろう。性的な意味か、文字通りの意味かはわからないが。

「それに鈴達の足や手をどうにかできるかもしれないしね」

「目指すは身体全部を取り戻す事だね」

「そうね。三人の世話をするのはしんどい。恥ずかしいし……」

「しののんの負担が大きいからね〜ごめんね？」

「別にいいわよ。必要な事だし」

「まあ、脱出に向けて動こう。というわけで、詩乃。荷物を頼む」

「了解。それと少し試したい事があるのだけど、いい？」

「いいけど、なんだ？」

「なんでも言うこときいちゃうよ〜」

「鈴じゃなくて恵里なんだけど……」

詩乃の言葉に鈴がしょんぼりしたので、鈴を抱きしめて頭を撫でて慰める。前では絶対に出来なかったが、今は基本的に自分の姿ではなく、アストルフォカルサルカの姿で過ごしているから平気でできてしまう。二人共、美少女だからだ。まあ、アストルフォは男の娘な訳だが。

「僕？」

「うん。恵里が操ってるアンデッドだけど……」

「ああ、この子達ね」

恵里の周りには沢山のアンデッドが存在している。ここは水場であり、水蛇や兎達がよくポップ、生み出される場所だ。そいつらが生み出された瞬間、鈴の結界に感知されて詩乃に狙撃される。着弾地点を鈴がしっかりと把握しているので、詩乃に教えて微調整を加えさせる着弾観測をする。これによって高確率で仕留められる事ができる。最初は攻撃を命中させる事ができなかった詩乃だが、恵里がモンスターを解体させたり、アンデッドを差し向けたりして強制的に慣れさせた。詩乃も何度も吐きながら頑張った成果だ。ちなみにスポットターがいるスナイパーとなるので命中率はやばい。

「こいつらって死体でしょ。だったら仕舞えるんじゃないかなって……」

「アンデッドは確かに物だね」

「試してみる価値はあるわ」

「わかった」

試してみたが、アイテムストレージには入らなかった。原因を調べてみようとしたが、あっさりと判明した。単純な事だ。

「恵里の魔力によって操られているアンデッドはあくまでも恵里の所有物だ。だから、詩乃には入れられない。譲渡すれば可能だろう」

「じゃあ、あげる」

「いらない」

「……なんで？」

「臭い。気持ち悪い」

「あ、鈴も嫌かな」

正直、俺も思う。サーヴァント達みたいな感じならいいが、ガチの死体を連れて歩きたくはない。詩乃からしたら、見たくもないからアイテムストレージに入れて隔離しようと思ったのだろう。これなら、受け入れてもいいかもしれないが、恵里の物として受け入れるのはできてても自分の物としてはどうしても嫌なのだろう。特に詩乃はケツトシーのアバターとなっている事で臭いにも俺達以上に敏感だろうから納得だ。

「スケルトンでも確かに臭うからね。うん、僕も嫌だ。でも便利なんだよ」

「便利だから、諦めてるけど……私の物にして荷物にするのは嫌」

ゾンビやスケルトンは偵察に使えるからな。

「まあ、ドロップ品と考えれば殺した状態ですぐに収納するのなら大丈夫。解体した状態なら問題なし。でも……」

「スケルトンは囷として使い潰せばいいだろう。常に俺達から離れて行動させる。それなら臭いはましになる」

「その場合、僕の戦力は怨霊と炎ぐらいになるよ。アンデッドは自動操作になるからね」

「大丈夫だ。物理面はアストルフオと詩乃で担当するし、防御は鈴が居る。霊的な存在に対しては俺達は強いから、炎で攻撃してくれればいい」

「それなら良かった」

実際に偵察隊を出した方が安全は確保できる。少なくとも偵察に出したアンデッドがやられたら、そこに何かはある訳だし、それがわかるだけでも大きい。

「じゃあ、早速出すね」

「頼む」

「うん。任せて」

「さて、それじゃあこっちも準備だ」

「お願いね、真名君」

「頼むよ」

「ああ、任せろ」

鈴と正面から抱き合うようにして首に手を回してもらおう。その状態で後ろから恵里に抱き着いてもらい、抱え上げる。俺の顔を挟んで二人の顔が左右にある。二人の温もりと匂いが伝わってくるが、努めて表情を変えないようにする。鈴と恵里の身体をそれぞれ片手で支えるためにお尻に触るが、こればかりは仕方がない。

「これ、結構恥ずかしいね……」

「そう？ 僕としてはこれぐらい密着できると安心できるけどね」

二人が俺越しに会話するせいで、息が耳にあたってこそばゆい。それでも我慢しないとイケない。

「準備できたわ」

「ありがとう」

詩乃にお礼を言う。彼女の言う通り、周りにあつた荷物は全てなくなっている。

「オルクス探検隊、しゅっぱーっ！」

「「「おっ！」」」

アストルフオが俺の口を使って元気よく告げると、鈴達も乗ってきた。こんな感じで出発したのだが、色々と順調だ。何せ暗視も可能なケットシーの詩乃が居るのでスケルトン達の偵察から逃れた相手でも、あつさりと矢を放って仕留めていくのだ。

「あ、止まって。なんか居る」

「わかった」

先頭を歩いている詩乃が言ったので、止まると同時に詩乃が矢を放つ。すると暗闇の中に生成されて射られた矢が消えていく。

「よし、仕留めた」

二人を抱え直してから詩乃が矢を放った方に移動すると、突き刺さった矢によつて岩に串刺しにされているカメレオンみたいなモンスターが居た。それも首が撃ちぬかれている。

「首か。残念」

「ヘッドショットには届いてないね」

「いや、十分にすごいと鈴は思うよ?」

「俺も思う」

『黒のアーチャーと比べるとまだまだだね!』

『充分だと思っただけど……』

アストルフオは比べる相手がヤバすぎる。ケイローンとか、神話の存在だ。詩乃も詩乃で残念がつているが、暗闇の中で数十メートル先の相手を射抜くとか、どう考えても人の領域じゃない。後、恵里は詩乃に敵しすぎる。

「詩乃の理想はどこなんだ?」

「キロかな」

「無理」

「無理だろ」

「無理ね」

「銃じゃないとな」

「銃、か……」

シノンの事を思いだしているのだろうが、今はとりあえずカメレオンっぽいのを回収する。カメレオンの姿から、姿を消す能力があるのかもしれない。それを手に入れられるとかなり楽になる。

「これは鈴も負けてられないね。えりりんも一緒に頑張ろう!」

「そうだね。僕ももつと力を磨かないと……」

「じゃあ、できる限りモンスターを倒して肉を手に入れながら進むか」

「スキルが増えるかもしれないしね」

「詩乃の言う通り、スキルが手に入ったら助かるからな」

「じゃあ、見つけた奴から引き寄せて狩ってくね」

「頼む」

厄介なカメレオンは詩乃に倒してもらって、それ以外は弱まらせな

がら連携して全員で狩っていく。といつても、俺と鈴達は能力はあつても本格的な戦闘経験は無く、素人だ。なので教師として歴戦の勇士であるアストルフオや戦場を渡り歩いてきたルサルカに教えてもらう。もつとも、アストルフオはほぼ擬音なので参考にはならない。

ルサルカは前衛を食人影ナハツエーラーに任せて戦う後衛タイプなので詩乃や鈴、恵里達とは相性がいい。彼女の指示で立ち回りを実戦で覚えていく。ある程度慣れたら、今度は一対一で鈴に結界を張ってもらいなから接近戦を行っていく。

鈴の結界は万全の状態だと破壊されるが、傷だらけにして弱まらせてやれば弾き飛ばされるだけなので、訓練に持ってこいだ。ちなみに鈴は扇子で戦い、恵里は本なのだが……流石にアレなのでジャンヌダルク・オルタが使っている剣や槍を使うようになった。剣はアストルフオがしっかりと教えてくれている。

俺はアレだ。才能が一切ないのでアストルフオとルサルカ任せだ。それと本当にやばい時は俺と詩乃が合体してルサルカとアストルフオを全力モードで解き放つ。魔力は馬鹿みたいに必要だが、生き残る事はできる。

詩乃は人型はまだ殺せないなので、俺が殺すのに詩乃の身体を使うという事もできるのは助かる。こうすれば詩乃の安全は確保できるかな。



しばらく進んでいるとある物が見つかった。それはハジメが着ていた服の布切れだった。それも血液が付着して食い千切られたような跡がある。

ハジメはもう――

事実を認識した俺と鈴は涙が流れてくる。恵里はただ目を瞑り、詩乃は辛そうにしている。アストルフオは平気そうにしている、ルサルカも同様だ。

第25話

くそっ！　なんで上手くいかないんだ！　なんのために南雲を始末したと思ってるんだ！　これも全て清水のせいだ！　本来なら俺が居るはずの場所を奪いやがって！

「くそがあっ！」

壁を蹴って悪態をつく。本当にこんなはずじゃなかった。南雲の奴が居なくなつて悲しんでいる白崎を慰め、俺の物にする計画が上手くいっていない。

それどころか、色々和不味い状況になってきた。せつかく、沙条が中村を突き落としたことで有耶無耶になっていたのに、白崎と清水達が沙条の件を置いてあの時の事を調べはじめやがった。それも教会や国からの命令を無視してだ。

このままじゃ不味い。谷口達が消えたばかりか、沙条から供給されていた品物が無くなったせいでイライラしている奴が多い。そういった知られたら捌け口にされちまう。

どうにかできる方法は沙条のタブレットにかかっているロックを解除してその内容を公開すれば少なくとも俺の地位は安泰になる。誤射だつて誤魔化せる。だから、試している騎士達に無理をいつて渡してもらつた。だどいうのになかなかロックを解除できない。しっかりと回数制限に引つ掛かる前に再起動までしているというのにだ。「思いだせ、思いだせ……沙条はなんて言っていた……」

タブレットは学校でも良く使つていやがった。ロックだつて解除していたし、それに沙条の好きな物なら会話の内容から拾えるはずだ。

「覚えてねえ！　いや、待てよ……そういえばあの時、誰かの誕生日つて話していたな」

沙条の誕生日は知っている奴に聞いて試したが、開かなかつた。それならあのユーリつて餓鬼はどうだ？　沙条が大切にしていた奴の

誕生日なら可能性はある。

急いで移動して見つけた奴等に聞いてみると、園部が知っているとの情報を得られた。どうやら、あの餓鬼と風呂で一緒になった時に聞いたらしい。直に園部を探すと、訓練所でナイフをひたすら投げている。

「園部」

「檜山、どうしたの？」

「聞きたい事がある。あのユーリって奴の誕生日は何時だ？」

「なんでそんな事を知りたいのよ？」

「それは……」

本当の事を話しても園部は納得しないだろう。コイツはタブレッツトの解除には反対していたからな。だが、説得する方法はなにかないか？

「もしかして……」

「いや、違うぞ。ほら、あの子も死んでしまったからな。墓標に刻んでやろうと思つて」

「そっか。そう、だよね……確かに必要よね。今までそんな余裕はなかったけれど、考えてみればお墓を用意してあげないと。にしても檜山がそんな事を言うなんて思つてなかったわ」

「俺だつて思うところはある」

「そっか。えっと……」

園部から聞いた目を覚え、すぐに移動する。

「お墓、作つたら教えてね！」

「おう！」

後ろから聞こえてきた声に返事をしてから部屋に戻る。そこでさっそく試す。情報は得られた。餓鬼の誕生日を打ち込むと、見事に開けた。

「よっしやあああつ！」

開いたらすぐに待ち受け画面が表示された。二次元のオタク趣味全開の金髪少女の絵だ。いや、こいつはあの餓鬼じゃないか。もしかして、アイツって……いや、今はこつちが優先だ。時間はまだある。

設定画面に移動し、俺が覚えやすいパスワードに変更する。これでこのタブレットは何時でも開けるようになった。なので、菓子類や加工品の作り方などを簡単に書き写してから餓鬼の事を調べる。

「名前は確か、ユーリ・エーベルヴァインだったな」

検索にかけてみるとユーリ・エーベルヴァインに関するファイルが沢山あった。その内の一つを見る。まずは画像データから見ると餓鬼の姿が沢山あった。それも色々な姿の奴だ。水着姿や寝間着の奴まで色々だ。Wikipediaを軽く見るとあの餓鬼がゲームやアニメのキャラクターとして書かれているのがわかった。どれも姿は違えどまさしくあの餓鬼の姿だった。

「マジかよ……あの野郎の天職って創造系じゃねえか」

色々調べていくと、本当にこの設定通りの奴ならあそこで死んでくれて助かった。いや、待て。無限に復活って書かれてるじゃねえか！ これって蘇るんじゃないのか！

いくら何でもないか。沙条が死んでるはずだしな。まずは調べていくか。

次に気になったのは召喚と書かれたアプリだ。これで召喚していたのかもしれないし、押してみる。すると数名の名前が表示された。

その名前の中にはユーリ・エーベルヴァインの名前もある。現状を確認すると【現在ランクアップ中により召喚不可と書かれている】し、終わりまでの時間がしっかりと表示されている。どうやら、本当に復活が可能みたいだ。これはもしかして、俺がアイツを使えるんじゃないか？

技術がどうのこうの言っても、この感じからして全部餓鬼がやったんだろう。南雲も沙条もこの餓鬼の功績を横取りしてただけじゃねえか。これなら俺でもできそうだな。

そうなる気になるのは他の名前だ。アストルフオトルサルカ・シユヴェーゲリン、朝田詩乃。こいつらの情報を調べるとどいつもこいつもかなりの美少女だ。いや、一人だけ男だが。信じられない。オタクの考える事はわからん。女のままじゃ駄目なのか？

こいつらのステータスもしっかりと見れた。身長、体重、スリーサ

イズまで何から何までだ。さらに現在召喚中だと表示されている。

「待ちやがれ！ 召喚中だと！」

沙条が死んだというのにこいつらは独自に行動している。いや、それどころかこの三人は何時召喚された！ オルクス大迷宮に行った時には居なかつたぞ！

「まさか、沙条が生きている？ いや、この力を持っているなら生きている可能性があるか」

なにせアストルフオは英雄だ。ルサルカ・シユヴェーゲリンに関しても同様の化け物だ。実際にこいつらが召喚されているとしたら、俺達より明らかに強い。なんだ、沙条は勇者並みのチートってか？ ふざけるなっ！ そんな事は一切認めねえ！ 絶対にぶつ殺してやる！

まずは手足になっているだろうこいつらの召喚を解除して……つて、待て。このタブレットからこいつらの情報が見れるという事は繋がっているって事だ。それなら気付かれる場合もある。アイツはスマホを持っているし、再召喚されるだけだろう。

だったら、違う方法で妨害してやる。幸い、このタブレットは沙条と繋がっているみたいだ。ここから召喚して気付かれる前に色々とやればいい。まずは召喚だ。俺の手駒となる者を呼び出さないと……

「にゃあ」

「っ!？」

泣き声が聞こえた気がして振り返るが、誰も居ない。ここには俺しか居ないはずだ。外を覗いてみるが、やはり誰も居ない。

「気のせいか……」

そう思っていると急激にタブレットが重くなった。タブレットの上に視線をやると画面の上に猫が立っていた。確か、この猫は清水が連れてきて白崎と一緒に飼っていた猫だな。

「邪魔だ」

猫を払いのけると、タブレットを巻き込みながら飛び退る。タブレットが地面に落ちた後、猫はさっさと部屋から出ていった。気を取

り直して、召喚画面を見ようとタブレットを拾い絶句した。画面に罅が入っていて、虹のような光沢が画面全体に現れている。原因は猫の爪痕で、ぎつくりと画面が壊されている。明らかにさっきの猫がやったせいだ。

「ふざけんなっ！天の河でも南雲でも、ましてや沙条でもない！俺の時代が来たと思っただのに！」

思わず床にタブレットを投げつける。タブレットは床を転がりながら扉の方へと移動する。

「失礼します。どうかなさいましたか？」

「あ？」

声がかけられて振り返ると、そこには綺麗な茶色の髪の毛を後ろにリボンで束ねたメイド服を着た綺麗な女性が立っていた。年齢は俺達と似たようなものか、少し上くらいで白崎に引けを取らないほど綺麗だ。

「おお……」

そんな彼女の青い瞳に見つめられている事に気づき、慌ててタブレットをみつめる。タブレットの画面は破片が飛び散って完全に壊れている。やばい。やばいやばい！

「大丈夫ですか、使徒様。どこか具合が……」

慌てて隠そうとする前に心配そうにした彼女が部屋に踏み込んでくる。

「あっ」

そして、タブレットを思いつきり踏みつけた。タブレットの画面は粉々になって確実に再起不能だ。それこそメーカーに修理を出さないといけないだろう。

「も、申し訳ございません！」

彼女はタブレットから足を退けて、すぐ持ち上げてこちらに見せてくる。

「貸せー」

「はいはい」

奪い取るように受け取ったタブレットを確認するが、画面は完全に

いかれていた。電源を入れても反応がないし、何も映らない。

「ははは、もう駄目だ……」

「使徒様。そちらはもう修理はできないのですか？」

「できるわけないだろ！ 俺達の世界でも専門的な知識と施設がいる奴だぞ」

「そ、そうですか……申し訳ございません……」

思わず怒鳴りつけると、しゅんとしたような感じになった。

「す、すまん。それよりもこれをどうするかだ。他の連中になんて言われるか……」

「だ、大丈夫です。問題ありません」

「なにがだよ？」

「そちらを貸してください。踏みつけて壊したのは私です。ですので私が全ての責任を負います」

そう言ってタブレットに彼女は触れてくる。そして、俺に近付いてきて耳元で囁いてくる。

「何も心配ありません。使徒様は私が壊した……いえ、盗んだと皆様に伝えてきてくだされば構いません」

「だが、それだと……」

「大丈夫です。私の実家はそれなりの力を持っています。そちらに匿ってもらえますし、私達をお作りになられた神様は助けてくださるでしょう」

「そ、そうか……確かに宗教の力の方が強かったな。神エヒトならどうにかできるか」

「どちらにしても殺される事はないでしょうし、最悪は奴隷にされるぐらいです。ですので、その場合は使徒様が私を買ってください。そうすれば何も問題はありません」

「わ、わかった」

正直、責任を取れそうにないし、この人が奴隷になったら俺が買つてやればいい。その後は色々と楽しませてもらえるだろう。何せ主人なんだからな。彼女の身体を見て想像するだけでも最高だろう。

「こちらは私が持つって処分します。使徒様が持つていては怪し

まれますし、逃亡した理由にもなりますから。それと発覚させるのはしばらく経ってからがいいです。私が逃げる時間も必要ですから……」

「任せろ。この部屋を無人にしてアリバイを作ってくる」

「では、今の間に荒らしておきましょう。それで物取りの犯行にみせかけるのです」

「おうー」

二人で部屋中をぐちゃぐちゃにした後、改めて行動を開始する。

「では、どうかご武運を……」

「そっちな」

これでどうにかなる。彼女が捕まったとしても必死に罪が重くならないように懇願すれば叶えてくれるだろう。天之河達を巻き込んでもいいだろう。

彼女が扉を開けて見送ってくれる。どうやら、色々と細工をするみたいだ。なので部屋を出て誰かがいるであろう訓練所に移動する。

数時間が経ってから、数人のクラスメイト達を連れて俺の部屋に行くために話をしていく。

「タブレットが解除できたから、来いよ」

「本当なのか？」

「ああ、これを見てくれ」

メモったレシピなどを見せていくと、早速それを持った女子が厨房に走っていく。これで俺の地位は安泰だ。それよりもあのメイドの事を聞かないと。そういえば名前を聞いていなかったな。まあ、あれだけ綺麗なんだから誰かが知っているだろう。

「それで、中身を皆に見せたいからきてくれよ、な？ いいだろう？」
「待って。タブレットが解除できたって、檜山、アンタ……」

「そ、それとこれとは関係ないっての。なあ、皆。余裕ができたら沙条や南雲達、谷口達の墓を作ってやろうぜ」

「ふむ。墓か。確かにそれも必要か」

「ハジメ君達は死んでない！」

「落ち着きなさい香織」

「そうだぞ。クラスメイトが死んだのは悲しいが、何時までもそれに囚われてはいけけない。俺達は彼等の意思を継いで進まないといけないんだ。もう誰も死なせたりしない」

「おうよ！ もつと訓練して強くなろうぜ」

「アンタ達……」

「……」

清水だけは肩にオレンジ色の毛をした猫を乗せ、冷めた表情でこちらを見詰めている。そうだ。あの猫がタブレットを破壊した原因じゃねえか！ 俺は何も悪くない！ 全て猫が悪いんだ！ ばれたら、その飼い主に責任を取らせるのもいいかもな。

「とりあえず部屋に来いよ。中身を見てから判断しようぜ。それと見るに堪えないエロいのも沢山あったから、女達は遠慮した方がいい」
「そうだな。香織達にそんな物を見せるわけにはいかない」
「ちよつと……」

俺はついでだから、ある事ない事を告げていく。真実と嘘を混ぜて伝えることで信憑性をましていく。どうせ壊れたんだから中身を見る事はできないし、ばれる事はない。俺が言った内容で女子達の視線がどんどん冷たくなっていく。ユリっというあの餓鬼も色々とされていたと伝えた。これは嘘とはいえないだろう。これで沙条が戻ってきて居場所は無い。

「部屋に行くぞ」

「おう」

男子と一部の女子で俺の部屋に戻ると、そこは荒らされた状態だった。当然、彼女は居ない。だが、あるはずの無い物まであった。それは――

「メイド服？」

「なんだこれ……」

「まさか檜山ってそういう趣味が……」

「そんなわけあるか！ こ、これは犯人の奴が置いていったんだろ！」

「ねえ、これって……」

園部がメイド服を持ち上げると、はらりと薄い布切れまで落ちてきた。それは女性物の下着だった。しかも、ピンク色の何かの液体が付着している。

「おい、まさか……」

「み、みて、これ……」

園部の悲痛な声にベッドへと視線をやると、乱れたシーツに血痕があり、ベッドボードには穴が空いていてそこからロープが伸びていた。そのロープには血と肉片が付着していて、無理矢理引き抜いた跡まである。

「なんだこれ！」

「檜山、お前！」

「違う！ 俺じゃない！」

「最低……」

「近付かないで……」

園部や他の女子達が離れる。天之河が、こちらを向いてくる。

「龍太郎、檜山を拘束しておいてくれ」

「待てよ！ 俺はやってないって言ってるだろ！ だいたい俺はお前達と一緒に居たんだぞ！ それにわざわざ自分からこんな事をしているところに連れてくるわけないだろ！」

「しかし、事実としてこれは……」

「まずは調査からだ。それから判断すればいい」

「そうだな。清水の言う通りだ。ただ、女子はやはり部屋から出るように」

「そうね。こんなところに居たくないし」

「ええ」

くそつ、いったい何がどうなってやがる！ 誰がやりやがった！ まさか、アイツか？ いや、それはない。そんな事をする理由はない。そうなるど誰かに見付かって犯^やられたってことか！

「おい、ベッドの下にこんなものがあった」

ベッドの下には蓋が設置された大きな穴が開けられていて、身体を折^りたたんだら人が一人だけ入れるだけの穴が空いていた。そこに

血が付いた拘束具があり、壁には血で書かれた無数の助けて、助けて、助けて助けて、嫌、嫌、苦しい、辛い、なんで、なんで、誰か、誰か助けて！ という文字が爪を使って書かれていた。

「ここで檜山は生活していたんだよな。どう考えても……数時間の事じゃないぞ」

「待て待て、待てえ！ 本当に俺じゃないって！」

必死に弁明を図っていると、清水の口が笑っているのが見えた。

「お前か！ お前がやったのか！」

俺は思わず清水の胸倉を掴んで揺さぶる。

「違う、俺じゃない」

「落ち着くんだ。だが清水。君も笑っているのが悪いんだぞ。こんな時に何を考えているんだ？」

「いや、すまない。あまりに滑稽だったからな」

「なんだと！」

「よく考えてみる。檜山が言う通り、檜山が犯人ならタブレットを持って俺達のところに来ればいいだけだ。発覚する可能性があるここに連れてくるはずがない」

「確かにそうだよな」

「だが、こんな短時間で用意できるわけもないだろう！」

「天の河。ここは俺達が居た地球とは違う。魔法なんて便利な力があるんだぞ。穴を開ける？ 魔法で短時間で作れるな。血文字？ 同じく元々書いていた物を壁として埋め込む事は土魔法でできるな。

それに逃げた女は何処に消えた？ 血塗れな上に長時間監禁され、衰弱した女が王宮で見つかれば騒ぎになる。少なくとも俺達と一緒に居た檜山には無理だ。よって犯人は別の者になるが、それは檜山を狙ったのかはわからない」

「……だが、檜山がそいつらとグルじゃない証明にはならない」

「そうだな。監視はするべきだ」

くそっ、どうしてこうなったんだ！

◇ シュテル・スタークス

王宮を抜け出し、城下町を歩いています。あの時、身に着けていた服装は気味の悪い視線にさらされて気持ち悪かったので、全てあの場で脱いで置いて着ました。なので今着ている服は別の物です。白いワイシャツに赤色の長いスカート。それに黒いエプロンでその辺にいる喫茶店のお手伝いさんといった感じですね。ちなみにこの黒いエプロンには私の血がついていたりします。

そんな状態で大人バージョン。二十歳前後の姿で活動しました。王宮でいくら調べても私の情報は出てきませんし、認識障害も発動していたのであの人もすぐに忘れていきます。

しかし、普通の恰好をしているはずですが、視線が集まってきましたね。なのはと違って胸はあまりないので大丈夫なはずですが、何故でしょうか？ まあ、問題ありませんね。

『ユーリ、任務完了しました』

『ご苦労様でした。タブレットは無事ですか？』

『画面の損壊程度で内部データには問題ありません』

タブレットは体内に取り込んだのもう誰かに悪用される事はありません。

『そうですか、よかったです。これで再会した時、怒られるのをどうか防げますよね……？』

『わかりません。勝手に使ったのは事実ですから、後は身体で返しましょう』

『そう、ですね。頑張ります！ だから、シユテルも一緒に……』

『もちろんです。苦楽は全て一緒です。まあ、マスターも許してくれるでしょう……』

『本当に、ですか？』

『たぶん……許してくれるといいですね』

『仕方ないのです。ランクアップ素材にどうしてもお兄ちゃんの物が必要だったのです』

私達は、ユーリが召喚された時は最低ランクでした。ですが、オル

クス大迷宮の力を解析して取り込み、私達を生み出しました。それだけでは力が足りません。蒐集やそれ以外に手を尽くしても、どうしても足りないものがあります。それはこの世界では手に入らない素材です。それを補うべきものがマスターの召喚です。少しずつ、少しずつ、神工ヒト達にばれないように、規制に引つ掛からないように必要な物を召喚しています。

おかげで進化素材限定ガチャやアイテム限定ガチャとかができたそうです。これも解析して改造した結果ではありませんね。

故に私達はレヴィが合流するまで完全とはいえないまでも、マスターの安全が一応は確認されたので事後承諾で少し使わせてもらいました。少しと言ってもガチャの闇は深かったです。

『と、ところで最後の細工は必要だったのですか？』

『必要です。私が逃亡する時間を確保するためでしたので。もしも戦闘になった場合、王宮の一部は焼失しますが、そちらの方がよろしかったでしょうか？』

まあ、私があの人を怒っていたこともあります。本当は精々、服を脱ぎ棄てていく程度でしたが、あちらがマスター、お兄さんの事をあつる事ない事を混ぜて貶してきたので、こちらも急遽、細工をしてやり返しただけです。それによくよく調査すればバレる事ですから問題ありません。被害者もメイドも存在しないのですから。もっとも、そうなるとタブレットを紛失し、あのような事を起こしたという事実が檜山を追い詰めるでしょう。私の計画通りに。

『いえ、穏便に済んだのなら構いません』

街中を歩きながら、目に入った出店でパンを購入し、それを抱えて大通りを進んでいるとつけられている気がします。ですので、角を曲がって路地に移動します。どんどん人気のない方に移動していくと、後ろから近付いてきた人が飛び掛かってきて、私の両手を押さええます。もう一人が口元に布のような物をあててきますが、効きません。ですが、このまま連れていかれましょう。

『ユーリ、少し野暮用ができました。連絡用の個体を切り替えます』

『シュテル、どうしましたか？』

『襲われただけです。これから敵のアジトに連れていってもらうだけです。問題はありません。そこで蒐集するついでに犯罪者達を壊滅してきます』

『わかりました。気をつけてくださいね。護衛として戦力はいくつか連れていってください』

『はい』

別の個体へと本体の意識を移り変える。こちらの個体は気絶したふりをしておけばいい。その間に情報を収集し、他に攫われた人が居ないかを調べて助けるようにプログラムしておきます。

別の個体に意識を移動。完了。この個体はエヒト教の神官をしています。この個体との出会いは神エヒトについて色々と質問していた時です。質問の結果、異端者として襲われたのでその司教を蒐集して始末しました。司教が色々とやっていたようで、今使っている個体はその被害者です。散々犯されて食い物にされ、妊娠したら殺されました。狂信者の愚か者でしたが、子供に罪はありませんので赤ん坊だけは助け、子供として育てさせています。英才教育を施し、頃合いが来たら蒐集すれば損はありません。

司教は私の個体として傀儡へと変え、表向きは私が今いる神官の個体と共同生活をさせています。仮面夫婦という奴ですね。家では姿を私に変えていますので問題ありません。表でもほぼ接触しませんが、教会の連中を蒐集するには効率的ですので使う時は使っています。

「おお、これはこれはクリミアさん。ご体調はどうですか？」

「はい。問題ありません、教皇様」

「それは良かった。これも全てエヒト様のお導きですな」

「はい。感謝しております。それでどのような御用でしょうか？ 本日は信者の皆様に快く過ごして頂けるように清掃を行おうと思っておりますが、教皇様のご命令とあれば内容を変更いたしますが……」

「では、一つお願い致します」

「はい」

内容を聞くと地下にある場所の掃除でした。ですので、掃除道具を

持っていったのですが、入れられた部屋は大迷宮に繋がる場所でした。

「その清掃を命じます。なに、貴女ならきつと大丈夫です。エヒト様を信じましょう」

なるほど。この個体では動きすぎましたか。これは戻ってくる事はできませんね。怪しまれますし。まあ、問題ないのですが。

「かしこまりました。行ってまいります」

奥へと進み、試練へと挑みます。ええ、ちゃんと挑みます。自分の力でクリアしてこそですからね。ただ、この大迷宮、神山には様々な条件があります。

神に対して信仰心を持っていないこと、二つ以上の大迷宮攻略の証を所持していること、神の力が作用する何らかの影響に打ち勝つことの三つです。

一つ目は一切持っていません。私が信じる神が居るとすればそれは我が身に宿る者達です。マスターとユーリ、ディアーチェとレヴィのことです。神エヒトという存在ではありません。故に問題は一切ありません。

二つ目はどちらも所持していません。三つ目は迷宮が用意した洗脳や魅了、意識の誘導、無意識への刷り込みなど精神と価値観に働きかけながら、過去の教会の戦士達と仮想空間で戦うという事で代用可能です。これがとても、とても楽しいです。蒐集もできて一石二鳥ですしね。ちなみにこれらの情報は実地とハッキングにより習得しています。試練は試練として受けますが、情報の収集は話は別ですからね。

「さあ、今日も楽しみましょう」

大迷宮に入れば姿を星光シユテル、ザ・デストラクターの殲滅者へと変えます。バリアジャケットはありませんが、服装は何時ものバリアジャケットと同じです。

ただ、格闘技術を鍛えているので今は両手に紫の籠手を出して指の部分は鋭利な赤い鉤爪としてあります。ルシフェリオンが無い今のうちに鍛えられるところは鍛えておきたいですしね。

「まいります」

目の前に現れた騎士達を見ながら、邪魔な精神操作系は全てカット。全力で戦闘を開始します。襲ってくる確かな技術を持つ騎士達の中にはヴォルケンリッターに引けを取らない者達も居ますので、とても楽しいです。彼等と戦い、その技術を見て学び、自らの物とするのは喜びです。

「新たな戦術に様々な戦技と武器。ああ……これでまた熱い戦いができます！」

背後から振り下ろされる剣をしゃがんで避け、炎を纏わせて刃を延長させてクローで振り上げて引き裂きます。同時に靴から炎を出して蹴り技を放って炎で吹き飛ばします。相手から飛んでくる矢の雨を瞬時に軌道を計算して私に命中するものだけを弾き落とし、次に飛んでくる様々な上級魔法の雨を計算し、致命傷の攻撃だけを防ぎます。

しかし、最初と違って相手も学習しているのか、炎では決して攻めてきません。水や土、氷ばかりです。嫌がらせのように弱点で攻撃してきますね。それもトラップまで使いたして、どんどん悪辣な事を仕掛けてきます。そんなに何度も挑まれるのが嫌なのですか？

「まあ、関係ありません。さあ、私にもっと、もっと貴方達の力を見せてください」

剣を掴んで碎き、別の騎士に殴り飛ばすと強者がこちらにやってきます。ですので、私も正面から相手をしていきます。剣と拳が何度も交わり、楽しいひと時を過ごしていると背後から騎士達が槍を突き出して突撃してきました。自分達が刺さることに気になっていません。

そのまま同じ場所に留まれば死ぬ事になるので飛び上がって逃げますが、それは罠です。とんだ瞬間を狙って上から矢が降ってきて、それ以外の場所から魔法が飛んできます。ですので退路は目の前だけです。

「はっ！」

剣を身体で受け取る代わりに相手の首にクローを叩き込んで爪の内部から炎を出して焼き尽くします。すぐに魔法がとんでくるので、ソイツを掴んで魔法に投げてこちらに到着する前に逃げ……ようとう

して、自爆されて死にました。

「コンテニューです」

新しい躯体を作成し、挑みなおします。私が満足するか、迷宮に居る躯体が尽きるまでは楽しませてもらいます。しかし、なかなか習得が難しいです。高町なのはの身体を基礎として設計しているので神速が使えてもおかしくないのですが……まだまだ修行が足りません。「なにたったの64時間ほどの戦闘です。よろしくお願いいたします」

騎士達の一部が涙目なのですが、気のせいですよ。そのはずです。さあ、楽しい楽しいデュエルの再開です。あちらの誘拐犯は弱かったのでいまいちでした。ですが、貴族達と繋がっているようなのでそちらの始末をするようにしておきましょう。駄目な人なら処置してまともな人になってもらいますが、普通の人なら問題なくそのままです。大丈夫でしょう。

念の為に国や教会と全面戦争になっても大丈夫なよう、下地を作っておかなければいけません。その為に人材は必要でしょうし、そうなる様々な物資が必要になります。

いくらなんでも、それら全てを召喚に頼るわけにはいきません。それにこちらは無駄になったとしても構いません。私達とマスターが平和に過ごせる環境作りの一環ですから、徒労になったとしても蒐集した分だけで充分と考えられます。

第26話

——かないで——
——いかないで——
——れないで——
——はなれないで——
——わたしから、また——
——また、わたしをおいていかないで——
——かえってきて——かえって——
——もういちど、わたしのもとに——
——もういちど——もういちど——
——いえ——いえ——
——もうにどと——もうにどと——



俺達が居た場所を探索した結果。道は無かった。正確には普通の道は無かった。鉄砲水が流れてくる穴を流れがない時に通って移動する事はできた。そのおかげで別の場所にはやってこれたが、似たような場所だ。

「ん？」

その階層を探索していると岩場に穴が空いている場所を見つけた。そこが地上に出られる場所かと思って入ろうとした直前、なにか変な気がした。

「どうしたの？」

「何か声が聞こえた気がする。それに嫌な感じがするんだが……」
「そうだね。ボクも嫌な予感がするなあ〜」

そう、なんだか胸騒ぎがする。何かとんでもない事が起こっている気がする。そう思うし、アストルフオも同意している。アストルフオの言葉に聞いてきた詩乃も嫌そうな顔をしている。

「どつちにしろ、進むしかないでしょ」

「だよね。それでこの穴って何かなく？」

「まあ、行きましよう。足元に罠があるから気をつけてね」

「危ない！」

詩乃が洞窟の中に入り、紐のような物を跨いだ瞬間、先の地面が崩れていく。だから、俺は慌てて詩乃に声をかけながら、彼女を押し飛ばす。同時に抱えている鈴と恵里を投げ飛ばして詩乃へと渡す。

俺達が居た場所まで崩れ、大きな穴へと落ちていく。すぐに底が見えてきた。そこには無数の尖った血抜き用に穴が空いた杭が存在し、骨も多数捨てられていた。

「マスター！」

「任せる！」

アストルフオに身体を任せる。彼は空中を空力で蹴って回避するが、俺達と一緒に落ちてきたパイナップルの形をした物を見て顔を青ざめさせた。その瞬間、それが爆発して強烈な閃光を放って目を焼いていく。

気が付くと皆が居た。どうやら無事みたいで安心した。視界も大丈夫みたいだし、身体を確かめてみようとする、赤色の髪の毛が目に入った。軽く指で救ってクルクルとしてみると肌触りのとても良い、視界の高さも変わっている事から、どうやら俺はルサルカの身体になっているみたいだ。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

「よかった……真名に何か有ったら大変だった。気をつけて」

鈴と恵里が抱き着きながら心配してくれていた。俺も二人を抱きしめて無事だと教えていく。

「ごめん。それで詩乃は大丈夫か？」

「大丈夫……ごめんなさい。二重のトラップに引つ掛かった」

「いや、これは詩乃のせいじゃない。入る直前に嫌な予感がするとか言っただけだ俺のせいだ」

「ううん、私のせい……」

「どうでもいいけど、もう一人の心配はしなさいよ」

「そうだった！ アストルフオはどうなった！」

「気絶しているだけよ。安心なさい」

「そうか……良かった……」

どうやら、アストルフオが爆発で気絶したようだ。いや、そもそも爆発か？ まぶしい閃光だけだったし、もしかして閃光弾か？ どちらにしても鈴の結界で助かったはずだ。しかし、ピンポイントで弱点を突かれたな。視界を確保するために結界では光は防げない。

「とりあえず、アストルフオが起きるまではここを調べるわよ。魔力が豊富みたいだし、吸収するのもいいかもしれないわ」

「了解。鈴、結界をお願い」

「任せて〜！ 神獣鏡！」

形成を行って扇子を振るう鈴。扇子から放たれた光が周りを隔離する結界となつて、俺達に害意のある者を弾く。

「まずは他にトラップがないか、調査するわ。私は魔術で調べるから、恵里はアンデッドで物理的に調べなさい。魔力は山分けだからね」

「わかった。行け」

恵里もネクロノミコンを形成し、穴の奥底で眠っていた骨を使ってスケルトンを生み出す。それで壁などを叩いて調べていく。俺と詩乃、鈴は中央で待機する。安全が確保されたら周りを調べていくのだが、火が炊かれた跡などが見つかった。

「ここに大きな魔力の塊があったようね。そこから漏れ出た魔力が少しは残っているわ」

「それって誰かが持っていたってことだよな？」

「モンスターが啜えていった可能性は充分にあるわ」

「でも、火を使つて食べるモンスターつて？」

「そこまで知性がある奴が居るかはわからないが、どちらにしても警戒して進まないといけない」

「とりあえず、ここで一泊してから探索を再開する？」

「そうした方がいいだろう」

「そうね。どちらにしてもここで肌を重ねて周りの魔力を吸収すべきよ。霧散する前にね」

「また恥ずかしい事をされるのね……」

「救つてもらつたお礼と思えばいいんだよ」

「……そう思う事にする……」

詩乃が二人の身体を拭いている間にルサルカが魔術でトラップを仕掛けていくのを見ながら、先程の事を考える。

あのパイナップルみたいな物は明らかに手榴弾……いや、スタングレネードだった。閃光で相手を気絶させて、杭で殺すと同時に血抜きをする。まさに狩場だ。

だが、どう考えても弱者が強者を倒すための物で、生物のモンスターの思考じゃない。この階層に居るモンスターから考えてもあまりに異質だ。もしかしたら、俺達以外にも誰かが居るのかもしれない。それこそ、反逆者と言われるオスカー・オルクスの関係者が居ても不思議ではないだろう。

それに微かな可能性だが、もしかしたらハジメが生きているかもしれない。いや、それはないか。腕の事もあるし、一人で落ちたハジメが生き残れるなんて奇跡はそう起こるはずがない。

「ねえ、マスター」

「ん？」

考え事をしていると、ルサルカから声をかけられて返事をする。

「マスターは今の状況、わかつているのかな？」

「ルサルカが罠とかを設置してくれている……いや、終わったのか」

「そう、終わったわ。これで誰も来ない」

「え？」

周りを見ればルサルカは、俺は何時の間にか洞窟の入り口から結構な距離を離れていた。不思議に思っていると、急に憑依が解除されて手足が無くなって呼吸が苦しくなる。

ルサルカはすぐに顕現し、俺を抱き留めて近くにある岩の窪みに俺を置いてこちらを見下ろしてくる。ゾツとするような笑みを浮かべるルサルカはペロリと舌なめずりした。

「な、なにをするつもり……だ？」

「何って、わからないのかな？ それともわからないふりかな？」

痩せこけたであろう頬を温かいルサルカの両手で包まれ、顔をどんどん近づけられる。キスされるのかと思うかもしれないが、そんな雰囲気では断じてない。その証拠に彼女の手には拷問器具が現れていた。

「ま、待て……アストルフオが……」

「そうね。普通ならアイツが邪魔をするわ。でも、アイツは気絶している。そして、鈴や恵里、詩乃も離れて身体を拭いているでしょうね？」

「きよ、距離は近い……」

「馬鹿なマスター。確かに距離は近いけれど、ここに来るまでどれだけ時間がかかると思う？」

「す、数分も要らないだろ……いや、まさか……」

「そう、私がさっきまでやってたのはなんでしょう♪」

罨だ。そう、魔術を使った罨を仕掛けていた。それはつまり、妨害するための魔術を仕掛ける時間があつた事に他ならない。普段ならアストルフオが監視しているし、ルサルカが仕掛けてきてもどうにかできる時間を稼げる。だが、今はアストルフオが気絶しているから俺だけだ。

「な、なんで……」

「それこそ、なんでなのかしら？ 何時から私が盲目的な貴方の味方だと錯覚していたのかしら？ 私は殺したいし、拷問したいし……何よりも、足を引っ張りたいたいの♪ マスターはわかっていたはずなのに私と二人つきりになった。だから、行動を起こす事にしたの。それに

マスターが居なくなつた後の二人はどうするかしら？ 詩乃は間違
いなく消えるし、消すわ。そうになると二人だけで生きていけるかしら
？ 答えは……」

「可能だろうか？」

「そう、なのよ。私の想定外に彼女達は強くなっているの。二人が組
めば油断さえしなければここでも生きていける。だから、仕留めるの
なら今なのよ」

ルサルカの目的は……鈴と恵里、詩乃の魂だろう。確かに詩乃はど
うなるかはわからないが、鈴と恵里の魂はレア物としてかなりの力を
得られるはずだ。ただし、腹から食い破られる可能性はあるが。そこ
でふと至近距離から俺の瞳を覗き込んでくるルサルカを見て、彼女の
思いを理解した。

「今ならまだ、ルサルカの方が強い。だからか？」

「そうよ。収穫の時は来たの。肥え太らせた豚ちゃんを美味しく加工
しないと、どんどん味が落ちちゃう」

そう楽しそうに笑う彼女だが、その本音は別だ。俺にはもう理解で
きないが、ルサルカが鈴と恵里を喰らうために行動を起こしたのは別
の理由からだ。

「嘘だな。ルサルカは怖いだけだろう」

「違うわ。私があの人二人を恐れる？ 確かに鈴の力は厄介だけど対策
はいくらでもある。魔術ではなく、物理的に殴り殺せばいいだけなん
だもの」

「ルサルカが本当に怖いのは恵里だろう」

「……」

「恵里は見様見真似で劣化品とはいえ永劫破壊エイツイヒカイトまで再現してみせた。
永劫破壊は神であるカール・クラフトが自らと同じ領域の存在を生み
出すために作成した魔術だ。それは魔女であるルサルカでも不可能
だったんじゃないか？」

実際に原作でも自分より魔道において遙か高みの領域にいるカー
ル・クラフトに激しい憎悪と劣等感を抱いている。それ故に自分より
遙かに才能を持っている恵里に対しても同じ感情を抱いても不思議

ではない。

「私は使えるもの。だから作る必要がないだけよ」

「そうかもしれないが、違う。ルサルカではメルクリウスの魔術は再現できない。再現できるのならほぼ全てのルートで殺される事はない」

「ちっ」

「ルサルカは恵里の才能が怖い。魔女として自分に追いつかれ、追い抜かれ、置いていかれることを恐れている」

これがルサルカを刺激する物だ。ルサルカの渴望は置いていかれたくないというものだ。だからこそ、相手を止めて自分と同じ場所に留める。この事は彼女の創造、追いつけないなら先に行く者の足を引っ張りたいという彼女の渴望を具現化した拷問城チエイテ・ハンガリア・ナハツエーラーの食人影からも明らかだ。

「そうよ。そうなのよ！ だからねえ、お願い。殺させて？」

瞳を涙で潤ませながら告げてくるが、断じて応じられる事ではない。

「駄目だ」

「ふくん。そんなこと言っちゃうんだ。鬱陶しいわね。こいつ、痛覚も恐怖もないから、拷問とか無意味だし……仕方ない。そっか、いやか」

「嫌だな」

「うん、わかった。よし、傀儡にしよう！」

「おい」

「だってだって、私は殺したいのにマスターは駄目って言うじゃない？ だから、傀儡にして私の言う事をなんでも聞いてくれる良い子にするの。ほら、解決でしょ？」

「ぎげんな！」

とはいうものの、現状では傀儡にされる可能性が大きい。スマホを取り出す事もできないし、片手を残すべきだったか。

「……意外に冷静ね？ 恐怖が無いからというのもあるんでしょうけど、助けをダメもとで呼ばないし、私をどうにかできると思っている

「のかしら?」

「まああるな」

「へえ、何かしら?」

「ルサルカが怖いのは置いていかれ、追いつけないことだろうか?」

「……続けて?」

ルサルカの表情から笑顔が抜け落ち、彼女の背後に無数の鬮體を幻視する。本当に怒っているのかもしれない。俺はルサルカを置いていかないと言ってもルサルカは普通なら納得しないだろう。だが、彼女にはある部分がある。それは本来の彼女ではないということも含まれる。

「安心しろ。俺はルサルカが好きだから置いていくことはない」

「は? え?」

いきなりの告白に面食らっているルサルカだが、すぐに持ち直すだろう。何せ命乞いで告白されたこともあったことでもあるのだから。

「ねえ、馬鹿にしてる? そんなので私が貴方を傀儡にしないででも……」

「しない。だってヒロインルートが欲しいんだろう?」

「え? 待って、それって……」

「本当になんでルサルカルートがないんだよ!」

「そっち!? でも本当にそれよね! 私のルートを作りなさいよ!」

本当にそうだ。ルサルカは好きなのにルートが作られていなかった。たしかに主人公は日常に戻る事が目的だ。だから、最初から魔導にどっぷりと嵌っているルサルカとのルートはできないのもわかるし、主人公ではなくロートスとのルートだからかもしれない。

「だが、それでも!」

「そうよ! 私にヒロインルートを寄越しなさい!」

「そう思うよな、アンナ!」

「ええまったく……って、なんでその名前を……いや、知ってて当然よね」

「ああ。で、どうするんだ? 俺はアンナでもルサルカでも受け入れてやるぞ……」

「ふうん。つまり、アンタはこんな私でも愛してくれるのね？」
「もちろんだ。召喚したどうこう関係なく好きだからな。アンナが好きなロートスの代わりにはなれないだろうが、共に進んで行くのは賛成だ」

ルサルカもわかっている。どう足掻いてもロートスとは結ばれない。いや、続編の方はわからないがどちらにせよ、こちらで召喚すれば結ばれる可能性はあるかもしれないが、流石にそんなピンポイント召喚はできない。ロートスの触媒が当たればできるかもしれないが、主人公がでてくる可能性が高いしな。

「直球……久しぶりの感覚ね。でも、ユーリって子はいいいのかしら？」
「良くないな。だから、ユーリの説得はそっちでやってくれ」

「何よそれ……」
「ルサルカならできるだろう？ 別に恋人にならなくても一緒に居れば共に歩む事はできる。姉とかな」

「お姉ちゃんかあ。それも悪くないわね。でも、できなくはないし……うん。いいかも。少なくとも保留にするぐらいわね」

「ちなみにユーリは言葉で説得するように。武力で挑もうとしても無駄だから」

「そんなに強いのか？」
「獣殿、ラインハルト・ハイドリヒ卿と普通に戦えるレベルだな」

流出を使って世界を塗り替えればユーリが負けるかもしれないが、一発でも当ててしまえばそこから蒐集してハイドリヒ卿の能力を手に入れたり解析ぐらいいはしてくるだろう。そして、ユーリはハイドリヒ卿に攻撃をあてるくらいの能力は持っている。エグザミアの力で装甲はゴリ押しできるかもしれない……いや、無理かもしれない。流石にハイドリヒ卿には勝てないか。だが、ユーリは完全体になれば普通にそこに居るだけで惑星の活動に影響を及ぼすような存在だ。少なくとも惑星規模でどうにかできるような存在だ。

「マジで？」

「マジだ」

「力づくはいけないわね！ 平和が一番よ！」

「ひよつたな」

「勝てるか！　いくらなんでもハイドリヒ卿と同レベルか少し下でも相手になりはしないわよー！」

「だろろうな」

「いや、待てよ……この世界で力をつけて同じ領域に上がる事ができれば……ハイドリヒ卿やあの糞ったれなカール・クラフトを超えられるかもー！」

「その手伝いはしてやるし、俺の力があれば様々な技術や限界突破アイテムを用意したりできる。だが、傀儡にしたらできないぞ。てか、やられるなら逆にサクリファイスを使ってでもルサルカを逆に俺の傀儡にしてやる」

「あ、コイツマジでやる気だ。うん、そうよね。私とマスターで身体の操作権を奪い合うと普通は私の勝ちだけど、私はマスターの召喚獣であり、言ってしまうえば創造主。サクリファイスで絶対的な差を覆されれば私が支配される可能性もあるわね」

「TS転生をする覚悟があれば可能だろうな」

キリツと告げてやると、ルサルカは離れてお手上げという感じで両手をあげた。実際問題。魂と記憶、知識を最低限残してそれ以外を全て代償としてルサルカの身体を奪い取り、永劫破壊エンワイビカイトの制御権を奪い取ればルサルカの魂を制圧する事は可能だろう。原作でも腹を搔っ捌かれて復活されたしな。そして、俺が負けたとしてもその時点でルサルカも消滅する可能性がある。どちらに転んでもルサルカは死ぬ。

「ああ、くそつ、死にたくないわねえ〜」

「そうだろうとも。さあ、受け入れるがいい。そして身体を貸してくれ」

「はいはい。まったく、確かに私のような奴にはロートスよりも、こんな狂った奴の方がいいかもしれないわね」

「ヒドイ」

「事実でしょうが。殺人鬼で拷問好き。経験豊富でロリ体系。15倍以上の年齢差。そんな人を愛せるなんて普通じゃないでしょ」

「訓練されてるからな！」

「そっか、訓練されてるかあ〜それなら仕方ないわね」

ルサルカに抱きしめられ、彼女が俺の中に入っていく。同時に身体がルサルカの身体に変化していく。やはり手足があるというのは素晴らしい。

「で、保留にするらしいが……」

「いや、もう保留もしないわよ。とりあえず、ユーリって子を説得するわ。恵里と鈴も使ってね」

「あくどい事を考えているのか？」

「ハーレムって好き？」

「好物です」

「そう。じゃあ、期待しないで待ってなさい。ルサルカお姉ちゃんが頑張って説得してあげましょう」

「ルサルカはいいのか？」

「別にいいわよ。そっちの方が楽し、なによりも面白そうだし。それにやっぱり私も幸せになりたいしね」

「うむ。幸せになっていい。全てはカール・クラフトと村人達が悪いのだから」

「思いだしたらむしゃくしゃしてきたわ。少し狩るわよ」

「了解」

ちよつと現れた敵が可哀想な事になるが、構わないだろう。

「なあなあ〜」

「なによ？」

「召喚で人間呼び出さない？」

「……いいわね」

よし来た！ さあ、ガチャをするぞ！

「ねえ、召喚用の触媒がないんだけど……」

「え？ 貯めてたはずなんだが……」

「無くなってるわね」

「なん……だと……」

「キャパシティーも凄く使ってるみたいだし、名前がわからない召喚体も増えてるし……バグってる？」

「俺の石がああああああああああああああああああああつ
!!」

思わずルサルカの身体で四つん這いになって頭を下げる。なんと
いう事だ。石が奪われ、ガチャまでできなくなるとは……犯人は許す
まじー!

「GURAAA!!」

そう思っていると後ろから大きな黒い生物が奇声を上げながら
襲ってきたので、睨み付けながら形成する。

「アイアンメイデン」

空中に居る間に棺へと閉じ込められて中に設置されている杭に
よって串刺しにされていく。たつぷりと血液が流れ出してくるので、
次は炎で炙ってやる。断末魔の悲鳴を聞いた後、ソイツの魂を吸収し
た。

「ねえ、まだ満足できないから鈴や恵里達にこれを実つ込まない?」

「それ、拷問器具じゃないか。駄目だつて」

「大丈夫。ちよつと入れやすいように拡張するだけよ」

「却下だ。俺の石を奪った奴なら好きなだけ拷問していいから、我慢
しろ」

「まあ、それでいいか」

ルサルカが呼び出していた苦悶の梨が虚空へと消える。どうにか
収まってくれたようだが、その後、三人がルサルカに襲われてしまっ
た。まあ、感覚を共有しているから舌と舌を絡めるのがとつても気持
ちが良かったし、技術も更に覚えられた。それにちよつと行き過ぎた
女の子同士の触れ合い程度には触れ合ったのでそちらも気持ち良
かった。詩乃には怒られたが。

第27話

あれから毎日、鈴と恵里、詩乃の口内や身体を貪って快樂を得て気は晴れたけれど、やっぱりガチャ触媒石を奪われたことは別だ。だから、触媒を溜め込んでガチャをする。そうしないとおかしくなりそうだ。「死にさらせえっ！」

真つ暗な暗闇の中、不愉快な羽音を止めるために蜂のような魔物モンスターを生み出したノコギリで切断し、上から生み出した振り子の刃が身体を切断する。ルサルカの身体を使い、穴の開いた杭を生み出して投擲。これに突き刺された相手は血液を大量に噴き出して死亡する。

「なんか真名君、少し前から怒ってるよね？」

「うん。アストルフオを使わずにルサルカを使っているのがその証拠」

「ちよつと怖い」

『うくん、ボクが気を失っている間になんかあったのかな？』

『まあ、あったわね』

ルサルカの身体と力を使っているから戦えるが、やばくなったら切り替える。そんな必要もないぐらい、ルサルカの身体が馴染んでいるし、身体に染み込んでいる戦い方もわかる。ただ、光がないので影が生まれず、食人影ナハツエーラーが使えないが問題ない。

「しかし、ルサルカの身体って使い易いな」

「まあ、そうでしょうとも！」

「む〜」

「マスターと私はタイプが似ているしね」

「もつとシンクロ率をあげればいいだけだもん！」

蜂の中で生きている奴の頭を踏み砕き、魂を回収する。魂が身体の中に入り、隅々まで満たされていく感覚に思わずぺろりと唇を舐める。

ふと皆の視線に気付いてそちらを見るとなんととも言えないような表情になっていた。慌てて

比較的まともな奴を選んで回収し、食料にするために詩乃に渡す。

「食料は十分だけどね」

「まあ、コレクションだな」

詩乃に渡してから、鈴を抱き上げる。鈴は嬉しそうに両手で迎え入れてくれたので、抱き上げて彼女の首元に顔を埋めてから首元へと移動させる。それから詩乃に手伝わってもらいながら抱え上げて移動していく。

「ねえねえ、次は鈴にやらせてよ。真名君だけずるいよ?」

「まあ、いいけどね。恵里は?」

「僕も遊びたいかな」

「じゃあ、ちようどいいか」

俺達が居るのは現在、恵里曰く50階層目らしい。つまり、ここにボス部屋とかが設置されている可能性が高い。

「そんなわけで詩乃はどうする?」

「私は援護でいいかな」

「わかった」

しばらくこの階層を進んでいく。何度も魔物モンスターの襲撃を受け、今度は鈴が結界で閉じ込めて潰し、恵里が燃やしていく。

時には詩乃が矢を射て敵を引き寄せ、俺達が敵を排除している間に詩乃が援護してくれる。危ないところを的確に対処してくれる詩乃の力もあって、この階層は順調に調べられた。

そして、洞窟の中にあいえないほどの大きな重厚な扉を見つけた。それはどう見てもこの洞窟にあっていないような物だ。その扉の前には巨大な人型をした牛の石像が二体鎮座している。

「なにこれ、あからさまよね」

「なにが?」

「あの石像が動くってことだよ、鈴」

「そうなの? じゃあ、動く前に壊しちゃえば解決だね!」

「まあ、そうだな」

「じゃあ、キュツとしてぺっちゃん」

ミノタウロスの石像二体を結界で包み、圧縮していく鈴。すると相手も攻撃を受けているのに気付いたのか、石像が剥がれていく。身体が一斉に光を放ち、防御系のスキルを使っているのだろう。それで両手両足を折りたたんでなんとか耐えている。

「ん〜これ以上は圧縮できないや……」

「じゃあ、僕が焼き尽くす?」

「お願い。一ヶ所だけ開けるね」

「任せて」

恵里が黒い炎の槍を作りだし、それぞれ投擲していく。そこに鈴が一瞬だけ結界を開ける。槍が内部に入り、中のミノタウロスに命中すると身体の中から焼いていく。激痛に悲鳴を上げるミノタウロス。

「ねえねえ、私も参加していい? この悲鳴、とつてもゾクゾクするんだけど〜」

「いいよ」

「よし、いくわよ。ファリスの雄牛!」

巨大な牛が半分に割れて現れ、結界ごと飲み込んでいく。閉じたられた巨大な牛は炎を上げながら自らを焼き付くしていく。

「ん」

そして、結界が解除され、炎が燃え盛って内側と外側から焼き殺されていくが、そこに更に鈴が結界を張り直して酸素を供給し、恵里が炎を大量に放っていく。

「じつくりコトコト〜焼きました〜」

「いや、強火で豪快にでしょ」

「丸焼き?」

「美味しく焼けるかしら?」

「牛って美味しいよね〜」

皆、言いたい放題だ。鈴や恵里も随分と強かになった。地球に居た時じゃ、こんな事は絶対に言えない。

「むしろ、焼きすぎだろうな」

「でしょうね。というか、この中で料理できる人っているのかしら?」

ルサルカの言葉で全員が黙る。恵里も鈴も視線を逸らす。

「お母さんが作ってくれたから、鈴はできないよ……」

「僕はコンビニ弁当とか総菜がメインだから料理なんてしたことないよ。お母さんも作ってくれなかったし」

「あゝ」

恵里の家族については知っているから、本当に作ってもらっていないんだろうな。鈴は一般的な家庭だし、覚えていくのはこれからだろうからな。

「わ、私は少しだけしかできないけど一応、できる」

「なるほど。ちなみに私もできるわよ」

「ボクはできるよ！ 焼いて食べる！」

「駄目ねこいつ。ちなみにアストルフオと違ってちゃんとできるわよ。これでも……なんでもないわ」

一応、結婚していたし、アンナの時代は女性が家の事をするのだからちゃんと主婦をしていたはずだ。ルサルカは一通りできるのは納得できる。あれ、こう考えるとルサルカってバツイチ……

「ますたく？ 何を考えているのかしら？」

「ナンデモナイデス」

「全部筒抜けだからね？ ぶち殺す……はできないから、拷問しちゃうぞ♪」

「ゴメンナサイ」

「あ、ほら、早く中に入る？」

「そ、そうだね」

「逃げたわね。後で覚えてなさい」

取り合えず、壁に触れて開けようとするが開かない。扉には不思議な魔法陣と穴が三つ空いている。おそらくここに何かを入れるのだろう。

「開かないな」

「何かここに嵌める場所があるね」

「だったら、このミノタウロスの中にあるんじゃない？」

詩乃とアストルフオの言葉にファリスの雄牛を見て、解除する。

中身が落ち、同時に焼けた匂いが漂ってきた。

いや、肉の表面は完全に炭となっていたし、鉈を呼び出して炭化した部分をそぎ落として中を確かめる。中心部に行くといい感じにちゃんと焼けていた。

「あ、これじゃないか？」

「魔石ね」

見つけた魔石をルサルカに見てもらってから、石を扉の窪みに嵌めるとゴゴゴゴゴゴという音が響いて扉が開かれる。

「肉は詩乃、頼む」

「すでに片付けたわ。進もう」

「なにがでるかなく危ないかもしれないから結界を展開しておくね」

「頼む。恵里、斥候を放ってくれ」

「了解。任せて」

鈴が俺達四人に結界を張ってくれて、恵里が斥候のスケルトンを放つ。続いてルサルカにお願いして支援魔術を使ってもらい、同時に詩乃に部屋の中を見てもらう。詩乃なら暗視も持っているから、しっかりと見る事ができる。

「中は見た感じ大丈夫かな。中に入ったら出てくるかもしれないけれど」

「恵里は？」

「敵はでてこないみたい」

「アストルフオ」

「入ろ〜！」

アストルフオが身体に憑依し、身体の支配権を得てそのまま部屋に突入していった。なんと、部屋の中に入ると何もなかった。いや、これ見よがしに祭壇があって、その上に四角い物体が空中に浮いている。周りには石柱が立ち並んでいて、そこに火が灯る。それだけだ。

「取り合えず警戒しながら探索だ」

「「は〜い」」

探索してみると驚いた事に倒された魔物モンスターの死骸と何かが抜けたよ
うな穴が四角い浮いているアイテムにあっただけ。その浮いている

四角いのはルサルカに調査してもらおうと何かを封印する物のようだ。「つまり、ここには何かか封印されていた。そして、あそこに倒れているサソリ型の魔物モンスターはそれを逃がさないようにする物ね」

「ミノタウロスが門番だと考えると重要な物を置いていたのかな？」
「多分違うだろう。ミノタウロスは再生していたのに、サソリは再生していない。これはおそらくこのダンジョンに外部から持ち込まれた物だと思う」

「それが正解よ。本来、ここはミノタウロスを倒した者達が、休憩する場所とかなのでしよう。もしくは何かを設置する場所だった。けどそこに誰かが封印のアイテムを追加した。それか、封印されていた物を取り除いて別の物を入れていたかね」

「じゃあ、何か復活している可能性がある？」

「調べてみたけど何も無いわ。ただ、下へと進む階段があっただけ」
「……つまりなにか？ お宝は全て持ち去られていて、ミノタウロスを苦勞して倒した旨味はほぼないと？」

「そういうことね」

ガツクリとするが、まあ仕方がない。

「これなんか、持っていったら使えそうだけどね」

「危ないわよ」

「まあ、大丈夫だろう」

鈴が結界を使って移動し、パタパタと振れている四角い物。それに俺も近付いて触れてみる。その瞬間。光輝き、足元に魔法陣が生成される。

「「ちよっ!?!」」

「転移魔法陣！ 嘘！ さっきまで全く反応がなかったのに！」

「離れるのはまずい！」

「わかってる！」

「任せて！」

詩乃が恵里を投げしてくれる。彼女を抱き留めてから鈴を抱きしめる。二人を持つと詩乃も俺に飛びついてきた。そして、転移魔法が発動して視界が入れ替わる。

転移した先はどこかの広い空間で、明かりもしつかりとあり、石柱が立ち並ぶドーム状の場所だった。目の前をみると、そこには玉座があり、その背後には七つの首を持つヒュドラが控えている。

「フハハハハハ、良くぞ来た勇者……じやなかった。神の使徒たちよ！ ボクがこのオルクス大迷宮を支配した魔王だゾ！」

玉座に座る金髪幼女が宣言する。

「ま、魔王だと！」

「魔王って……」

「ラスボスかも」

「ん」

「うひやあつ!? こら、喋ってる間に撃つな！」

俺達が驚いていた間に詩乃が矢を容赦なく外れる軌道で放つ。しかし、後ろのヒュドラがしっかりと防ぐ。そして、金髪幼女が増えた。そう、増えた。信じられない事に増えたのだ。

「そうだぞ！」

「卑怯だぞ！」

「ずるいぞ！」

「徹夜して考えたんだぞ！ 歓迎するために！」

ヒュドラの頭の上や瓦礫の横、玉座の裏、いたるところから金髪幼女が現れる。しかも背後からもだ。後ろと前方には大きな扉がそれぞれあるが、どう考えてもやばい。そのはずだが、不思議と危機感を覚えない。

「なにこの量産型」

「コピーしてペーストしてみたんだよね」

「て、敵としては鬱陶しそう」

「ふっふっふ、ボクは強いからね！」

「そう。なら物量には物量よ！」

ルサルカが詠唱を開始するが、ある事を思いついた。この金髪幼女の雰囲気似ているのだ。ツインテールにしたらフェイト、色を変え

たらもう一人になりそうだ。

「レヴィ、飴をあげるからこっちにおいで」

「わ〜い！」

だつと走ってきた金髪幼女たち。そして、途中でハツとして止まった。

「ぼ、ボクはそんなので釣られないからな！」

「涎をどうにかしてからしなさいよ」

「おバカな子だね」

「えつと、知り合い？」

「たぶんな」

「ち、ちがうもん！ ボク達はこの大迷宮を乗っ取った魔王だもん！」

「乗っ取った？」

なんというか、微妙な雰囲気しながらスマホを取り出そうとする
と銃声が響いた。その銃弾は一発目で結界を破壊し、次弾で俺に届く。それをアストルフオがすばやく剣を抜いて弾く。

「てめえ、そのスマホをどこで手に入れた。それにその二人は谷口と中村か？」

「誰？」

銃を構えた見た事があるような無いような白髪の男性。その人が怒りながら俺に銃を向けてきている。それを見た恵里と鈴が形成を発動し、ネクロノミコンと神獣鏡シエンショウジンを作りだす。

恵里は即座にジャンヌダルク・オルタを憑依させて腕と足を作り、俺の前に立つ。それだけでなく、大量の怨霊を呼び出し、地面からはスケルトンも呼び出していく。鈴も扇子を分解した鏡を無数に浮かべながら、魔を祓う光を収束させる。詩乃は相手が人なので待機だ。

「わ〜待った待った〜！ その人はお兄ちゃんだよ！ あの転移魔法陣はお兄ちゃんにしか反応しないんだから！」

「何？ だが、どう見ても女だぞ。だいたい沙条はうさ耳美少女なんかになら……うん？ うさ耳美少女？」

「それがお兄ちゃんだよ。間違いないからね！」

「おい、まさか……アストルフオか？」

「いえーい、アストルフオ・セイバーここに推参！ 十二勇士のみんな見てるー？」

「本当に沙条なのか……」

「もしかして、南雲なのか？」

二人で不思議がりながら、聞く。

「そう。ハジメ。私のハジメ」

「おい」

そうやって別の金髪幼女が南雲だろう人に抱きつく。

「白崎というものがありながら……」

「そうだよ！ かおりんはどうするの！ かおりんを悲しませたら鈴、許さないからー！」

「いや待て！ 谷口はわかるが、お前には言われたくない！ なんだその侍らせている奴等は！ とうか、なんで身体がアストルフオになっただー！」

「それはもちろん……身体がやばいから。俺達、全員どこかが欠損している」

「真名君なんてもつとひどいんだからね」

「まあ、とりあえず話を聞こうか」

「いや、その前になんでこんな事をしたんだ？」

「いや、レヴィがお前達が50階層の部屋に入ったのを確認したって言うから、こんな風に迎える準備をしたって言ってな」

「お兄ちゃんに喜んで欲しくて頑張ったよー！」

俺に抱き着いてこようとするが、ハジメに抱き着いていた金髪幼女に迎撃される。

「私の姿でハジメ以外の男に抱き着かないで」

「まったくなにをやっただ……」

「ねえ、何かおかしいわよ」

「ん？」

「確かに嫌な予感がする」

話の途中だがワイバーンだ！ とでも言いたげに空間を引き裂いて現れたのは顕現したのは沢山のヒュドラ。更に無数の魔法陣から

一人一体を相手にしろといった感じで沢山でてくる。魔法陣の感じから数百体が召喚されるのが理解できた。

「鈴、魔法陣を壊せ」

「鈴にお任せだよ！」

召喚される前に潰す。これが鉄則だ。

「しかし、なんでこんな事になってるんだ？」

「オルクス大迷宮が怒ってるんだよ！ ボク達柴天一家でオルクス大迷宮をハッキングしてクラッキングしたからね！」

「そら怒るか」

「でも大丈夫だよ。だって、お兄ちゃんと合流できたから皆を呼べるよ！」

スマホを確認すると見えなかった名前がわかった。その一つはレヴィ・ザ・スラツジャー雷刃の襲撃者と変わっていた。

「なるほど。来い、ユーリッ！」

『はい！』

返事が聞こえた瞬間。虚空から肉の剣が現れ、巨大な剣が無数のヒュドラを貫く。貫かれたヒュドラは肉の剣に取り込まれていく。そして剣が消えて空間にぽっかりと穴が空くと、そこから魄翼を展開したユーリ・エーベルヴァインがでてくる。

その瞬間、世界がユーリが身に纏う永遠結晶エグザミアから溢れ出した無限の魔力によって悲鳴を上げ、空間にどんどん罅割れが入っていく。ユーリから無意識に放たれる重圧に俺達は押し潰されそうになる。

「ガチでラスボスじゃねえか……」

「これ、確かに勝てないわね」

「ユーリ来たあああ！」

ヒュドラ？ ユーリが一度だけ腕を振るっただけで全て溶けて消えた。そして、こちらを見たあと——

「鈴さんと恵里さんですね。誰ですか、その人達」

——ルサルカと詩乃、アストルフオの事を言っているんだと本能的に理解できた。そう、これから俺は、俺達はラスボスに挑まないとい

けない！

敵はユーリ・エーベルヴァイン！　そしてその護衛であるレヴィ・ザ・スラツシャー。追加で残り二人、シユテル・ザ・デストラクターとロード・デИАーチエが現れる可能性大！

「修羅場だな」

「おお、これが修羅場。楽しみ」

「いや、地獄だろ」

これより壮絶な戦いが繰り広げられる。生き残るのは果たして――

第28話

ユーリがニコニコと笑いながら、鈴と恵里以外の子について自己紹介を求めてきたので、詩乃とルサルカ、アストルフオについて説明する。ただ、詩乃と鈴、恵里はユーリから放たれる重^{プレッシャー}圧にガタガタと震えていた。いや、震えるどころじゃない。更にやばい事も起きている。色々な液体を流してしまっているのだ。

「お兄ちゃんの敵ではないんですね？」

ユーリが詩乃達を一瞥した後、俺に聞いてくるので素直に答える。三人は信頼できるし、信用できる俺の、俺達の味方だ。だから、嘘を許さないと言った感じの重^{プレッシャー}圧にどもりながらもしつかりと答える。

「あつ、ああ……味方だ」

「わかりました。貴女達はお兄ちゃんの味方ですか？ 敵ですか？」

ユーリは鈴、恵里、詩乃をみる。三人は涙を流しながらコクコクと頷いている。いくら力をつけて実戦を経験したとしても、相手が悪すぎる。ユーリからしたら、三人は羽虫みたいな物だろう。

三人が頷いたら、次は俺に憑依しているアストルフオを見た後、虚空を見詰める。そこにはルサルカが居た。サーヴァントはサーヴァントを気配で感じられるが、ユーリの場合はそんなレベルじゃなさそうだ。

「ボクはもちろん、マスターの味方だよ！」

「もちろん、私もね」

アストルフオが手を上げて元気よく答える。同時にルサルカが俺に、アストルフオに後ろから抱き着いて答える。それを見たユーリがすこし頬を膨らませる。しかし、修羅場を潜った数が違うのか、二人は平気そうだ。いや、あくまでも気丈に振る舞っているだけなのかもしれないな。

「そうですか。それならよかったです。それで……何時までユニゾンしているのですか？」

「……じやできないな」

「お兄ちゃん？」

「あくそれはね〜こういうことだよ！」

アストルフオが憑依を解除した。そのせいで手足がなくなり、地面に向かって落ちていく。その瞬間、ルサルカが俺を抱きしめて受けとめてくれる。

「な、なんですかそれ……」

「おい、どういうことだ？」

ユーリだけでなく、ハジメも俺を見て驚愕している。まあ、無理はないだろう。そう思っていると、ユーリがふらふらと寄ってきて、俺の身体に触れてから泣きながら抱きしめてきた。

「うう……ごめんなさい。私がちゃんとあの時、守れなかったから……」

「ユーリのせいじゃないさ。誰のせいでもない」

「ううん、僕のせいだよ」

「鈴のせいだよ……」

「どういう、ことですか……？」

「詳しく話せ」

「ねえねえ、お話はあっちでしょうよ！ お腹空いた！」

「ハジメ、そっちの方がいい」

双子みたいなそっくりの二人が告げてくる。確かにここで話す事でもない。

「それもそうだな。この先にオスカー・オルクスの拠点がある。そこでならゆっくりと話ができるだろう」

「じゃあ、行きましようか」

そう言うと、ルサルカが俺の身体に憑依する。手足や身体が元に戻り、もう慣れた女の子の身体へと変化した。

「あっ」

「ユーリ、こうして身体を借りたら大丈夫だから」

「……むう……」

抱き着いているユーリの頭を撫でてから、何時もの通りに鈴と恵里を抱き上げる。

「普段、そうやって移動していたのか？」

「鈴や恵里は足がないからな。詩乃は索敵と牽制を頼んでいる」

「なるほど。俺が持つわけにもいかないし、ユエ」

「ん、わかった。手伝う」

「ここなら私も手伝えるかな」

「ボク達も持つ」

「わわっ！」

「おー」

恵里と鈴はレヴィ達に持って運ばれていく。手が開いた俺はこちらに手を伸ばそうとして引つ込めては伸ばすということを繰り返しているユーリに気付いた。

『怖い感じがなくなつたね』

『この子、可愛いわね』

「ユーリ、連れていってくれ」

「はい！」

ユーリと手を繋いでハジメの後を追っていく。大きな扉を抜けた先には楽園が広がっていた。上は天井のはずが、空がある。更には鳥まで飛んでいる。周りを確認すると、木々まであつて大きな噴水まで置かれていた。

「ここは……」

「凄い……」

「反逆者の隠れ家だ。オルクス大迷宮を作っただけあつて、ここには全てが揃っている。完全な自給自足が可能な施設といえる」

「確かにオルクス大迷宮を作り上げた存在なら可能か」

自給自足が可能なら、ここに住んでもいいかもしれないが、鈴達を元の世界に帰さないといけない。それが終わったらここに住むのもいいか。

「まずは休憩するか？」

「そうだな。鈴や恵里達は休憩が必要だ。ここは安全なんだよな？」

「ああ。俺が確認した限りだがな。それにユーリに聞いた方がいいだろう」

「そうなのか？」

「はい。オルクス大迷宮の操作権は手に入れました。現在、この迷宮の全ては私とディアーチエの管理下にあります。ですから、お兄ちゃんを強制的に最下層まで転移させることができましたんです」

「そんなことができたんだな」

「この子のお陰です」

そう言つてユーリが差し出してきたのは角の生えた小さな白い毛皮の動物だ。その子が、よ、久しぶりとも言いたげに片手をあげる。その姿を見てすぐにわかった。

「マテリアル娘のナハトか」

「です。ナハトヴァールの力もあるので、それでオルクス大迷宮を浸食して支配下に収めました」

「お前の為に頑張つたらしいぞ」

「そうか……ユーリ、ありがとう」

「えへへ」

頭を撫でてやると本当に嬉しそうにした後、すぐにハツとして離れる。

「と、とりあえずここは安全です。私もエグザミアで力を取り戻していますから、今度こそちゃんと守ってみせます！」

握り拳を作つて宣言するユーリだが、小さな身体ではとても可愛らしくて頼りになるような感じはしない。むしろ、こちらが守つてあげたくなる感じた。

「じゃあ、とりあえず相談か」

「その前にお兄ちゃんを休ませて治療しないといけません」

「それは話が終わった後の方がいい。今までの事が何もわかっていないしな。ハジメとそっちの女の子の関係とか」

「それは……お前にいえるのか？ こっちが一人で苦労していた時にお前は最初から三人だったんだろ？」

睨み合う俺達。前のハジメならすぐに目を逸らしたが、やさぐれ……ワイルドになったハジメはこちらをしつかりと睨み返してくる。「そちらも色々あったんだな。血塗れのお前が着ていた服をみつけて死んだと思っていた」

「本当だよ！ いっぱい泣いたんだからね！」

「すまん。俺も腕を喰われたんだが、三人の方がもつとひどい。俺の方も大概だったか、そっちはもつとやばかったようだ」

「うん……鈴達、真名君が居なかったら死んでたよ」

鈴が嬉しそうに俺を見詰めてくるので、思わずユーリにするように頭を撫でると嬉しそうにこちらも目を細めて受け入れる。だが、ユーリが頬を膨らませて頭を差し出してくるので、ユーリの方も撫でる。

「ハジメ、ん」

「撫でろと？」

「ん！」

「はあ……とりあえず、移動して話し合うぞ。ユエは谷口と中村、そっちの朝田だったか。彼女を連れて風呂に入ってこい。レヴィ、手伝ってやってくれ」

「えくボクはお兄ちゃんの方がいいな」

「一人置いておけばいいだろう」

「むしろ要らん。風呂へ行け」

「まったくです」

俺達以外の声が聞こえ、振り向くとそこにはハジメがユエと呼ぶ女の子、二人が居た。その子達の身体は脈打っているやばいグロな光景が見えてくる。

「モザイクの光！」

ユーリの言葉と同時に二人の身体が光りに包まれ、少しするとユーリよりは身長が高い幼い女の子が二人いた。肩ぐらいまである茶髪と銀髪の二人の可愛い女の子。どちらも原作通り、高町なのはと八神はやてのデータを基礎として生み出されているせいか、非常に似ている。

「シユテルとティアーチエか」

「はい。合流したとのことでしたので、こちらへとやってきました。地上の方は引き続き別個体で監視をしております」

「我の方も修復は終わったのでな」

「レヴィ、私の姿から変えられるの？」

「うゝボクは躯体を持ってないからなあ」

「それでしたら、レヴィのデータを送りますね。どうぞ」

「ありがとうシユテるん！ へんしくん！」

レヴィも金髪幼女の姿から水色の髪をした女の子に変化する。

どちらも可愛らしいが、やはりこっちの方がいいな。

「紫天一家が勢揃いか……」

「やばい戦力だな」

「まったくだ」

『ねえ、マスター。一つ思うのだけど、召喚用の触媒や召喚キャパシティーのオーバーってこの子達じゃないの？』

「……ユーリさん、ユーリさん」

「な、なんですか？」

嫌な予感がしたのか、目を逸らしたユーリ。

「俺のスマホから溜めていた石が^魂ほとんど消えていった現象があるんだが……それに召喚キャパシティーがオーバーしているのも……」

「ご、ごめんなさい。私がやりました。ユーリ・エーベルヴァインとしての力とダイアーチェ達の力を取り戻すために石を使いました。それと召喚キャパシティーはダイアーチェ達の分が合わさっているのだと思います」

改めてスマホを確認すると、見えなかった召喚メンバーの部分にロード・ダイアーチェ、シユテル・ザ・デストラクター、レヴィ・ザ・スラッシュヤーという名前が書かれていた。ランクは皆、SR。URやSSRにはまだなっていない。ただし、紫天一家という召喚ボーナスが発生していて、彼女達は強化されていた。魔力の回復速度が上がったり、攻撃力や防御力などステータスが追加されているのだ。

「すまない。必要な事だったのだ。ユーリを責めないでやってくれ」

「代わりに私達を好きなようになさってください」

「なんでもするよ！」

「ん、なんでも？」

「だ、駄目ですよ。私が責任を取りますから。一緒に謝ってくれただけで十分です」

『ねえ、ねえ、これってチャンスじゃない?』

『そうね。マスター、このお願い、私達の、私のご褒美に使ってくれないかしら?』

確かにアストルフオとルサルカには頑張ってもらったし、ご褒美をあげないといけないだろう。ルサルカはユーリに突きつける要求はわかっている。ただ、アストルフオがわからん。流石に俺はアストルフオの外見が美少女でも、男なんだからそういう相手にするつもりはない。いや、アストルフオの身体に憑依して色々とするのなら……それもなしだな。ユーリ達に失礼すぎるし。

『そういう話は他所でやれ。とりあえず移動するぞ』

「わかった」

「はい」

それから庭園にある屋根があり、柱がある八角形の建物、ガゼボに移動する。他の皆は風呂へと向かった。庭園に入る。設置されている椅子に座り、周りの庭園を見る。色々な花が咲き、先の方には湖まであつて景色はいい。景色を見ていると、ユーリが俺の膝の上に座ってきた。

「ユーリ?」

「だめ、ですか?」

「いやいいよ」

「良かったです」

機嫌が良さそうなユーリを見た。どうやら、俺から離れるつもりはないようだ。

「さて、現状を確認して摺り合わせを行う。一番被害が多い沙条の事は後回しにして、まずは俺から話す。相談はそれからの方が効率がいいからな」

「頼む」

「では、私は紅茶を入れますね」

「我は茶菓子でも用意しよう」

「お願いします、シユテル、ディアーチェ」

「うむ」

「お任せください」

すぐにシユテルとディアーチエによって紅茶と茶菓子が運ばれてきた。それを飲んで食べながらハジメの話聞いていく。ハジメはここに落ちてから、ハジメも同じ熊の魔物モンスターに襲われて片腕を失いながら、錬成で穴を作つてどうにか逃げ延びたようだ。その穴の中で神結晶をみつけ、それから生まれる神水を飲んで生き残つてきたのと。

「もしかして、そこに落とす穴とスタングレネードを仕込んだのはお前か」

「ああ、そうだ。もしかして落ちたのか？」

「もう少しで死ぬところだったぞ」

「アレはやばかったわね」

「本当だよ」

「一人の口で三人が喋るな。ややこしい」

ルサルカとアストルフオも喋つたので、仕方がない。二人には少し黙つていてもらおう。

「それから他にも人が落ちているなんて思わなかったから、そのまま下層に進んでいった。だが、どうしてわからなかったんだろうか？
しっかりと探索したんだがな……」

「それは鈴の結界のせいね。私達は鈴の結界と私の魔術による隠蔽を徹底的に施して隠れながら生活をしていたから」

「なるほど。それで魔物モンスターだけでなく、俺からも姿を隠したのか」

「メリットとデメリットがあつたようだな」

奈落で他の人間と合流できる可能性なんて限りなく低い。それにあの時は鈴と恵里は力がなく、必死に隠れて耐え忍ぶしかなかった。だから、後悔はしていない。

「まあ、それはいいだろう。で、神水を飲みながらなんとか魔物モンスターを喰らえた。それで力をつけて生き残れたんだ。50階層まで降りた時にユエ、あの金髪の女の子を見つけてなんやかんやあつて一緒に降りていった。そこでレヴィと会つて、沙条達がここに落ちていて、生きている事を知つた。レヴィ曰く、しっかりと探索していたので上の階

層に居る可能性は限りなく低いということ。最下層まできてヒュドラを倒し、ここにやってきたんだが……」

「俺達は上層に居たと」

「そういうことだ」

まあ、レヴィからしたらしらみつぶしに人海戦術ならぬ魔物戦術モンスターでローラー作戦をしたというのに、それでみつからない。だから探索をどんどん下にやっていくのは当然の事だろう。

「我等の予想以上に谷口という者の結界が厄介だったという事だ。レヴィを責められまい」

「だろうな。そんなわけで俺達は手段を変えた。各階層に転移トラップを仕掛け、レヴィ達のマスターである沙条との繋がりを通して判断し、強制召喚する事にしたわけだ」

「わかった」

「それで、ユエって子との関係は？」

「ユエは300年前に滅んだ吸血鬼のお姫様だ。裏切られて封印されていた。それ以外はノーコメントだ」

「まあ、白崎の事をちゃんと考えるのならいい」

「そうですね。彼女は今もなお、貴方の事を想って必死に強くなろうと頑張っています」

「それは……だが、俺にはユエが……」

「何言ってるの。二人纏めて幸せにしたらいいのよ」

「おい」

ルサルカの言葉に思わず突っ込むハジメ。

「受け入れるかは二人次第だろうけど、この世界は別に重婚を禁じていないわ。王侯貴族だって奥さんが何人もいるでしょう？」

「その通りですね。逆に男性を沢山困っている人もいます。ですので、法的には問題ないでしょう」

「待て。俺は元の世界に帰るつもりだぞ」

「それはそれでいいだろう。二人と相談して決めるといい。それにそのユエって子はあちらの世界に連れていくとすると戸籍とかの問題もある。まさか、置いていくなんて言わないよな？」

「いや、連れていく」

「まあ、お兄ちゃんの世界なら、私の技術で戸籍ぐらいは軽く作れますが……」

「だよな。頼むわ」

「任せてください」

ユーリなら、確かに余裕で戸籍を作れるだろう。とりあえず、色々聞いてみたが、全てはユエと白崎が相談して決めることだ。ハジメは二人の事をちゃんと想っているようなので後押しさえ忘れなければ不幸にはならないだろう。

「というか、白崎の事をどうこう言うが、お前の方はどうなんだ？ 滅茶苦茶女を侍らせているが……」

「一人はアストルフオだから、男なんだが」

「「え」」

「そう、ボクは男だったんだよ！」

「「なんだって〜！」」

アストルフオの言葉に俺とハジメが乗る。だが、他の子達は呆然としていた。

「これで男、だと？」

「ありません」

「す、すごいです……」

「えっへん！」

「まあ、そんなわけでアストルフオは候補から外してある。友達だな」「うん！ ボクもマスターとは友達だよ！ まあ、マスターが望むなら、その限りではないかもしれないけどね〜」

「望まん。断じて望まん。見ろ、お前のせいでユーリ達からの視線が無茶苦茶冷たい」

コイツ、マジか。というような感じでこちらを見詰めてくるディアーチエとシユテル。それに涙目なユーリ。ルサルカはルサルカでケラケラと笑っている。

「あはははー！」

「本当に理性が蒸発してやがる。まあ、俺からはこんなところだ。そ

れでは次、ユーリ達だな」

「私は……」

ユーリは至って簡単だった。表の65層で永遠結晶エグザミアの状態でオルクス大迷宮からエネルギーを回収。それを持ってエグザミアの封印を解いてディアーチエ、シユテル、レヴィを自らのデータとベヒモス召喚用の魔法陣を利用して召喚。そこにナハトヴァールを混ぜてそれぞれ上層、中層、下層と別けて派遣したらしい。それと俺の安全を考慮して色々と仕掛けをしてくれていたようだ。

「私が施した仕掛けはお兄ちゃんの心臓が一定時間停止したら、私が体内に仕込んでおいたエグザミアの欠片を使って、私をお兄ちゃんとユニゾンさせて復活する予定でした」

「エグザミアの欠片か」

「何時の間に……って、色々タイミングはあつたか」

「はい。デバイスにもちゃんと仕込んでおきました。チビットが壊された時にしっかりとお兄ちゃんの身体に入り込んでいます。それにちゃんと魔力も送っていましたよ？ 気づきませんでしたか？」

「ああ、そういうことね」

「ルサルカ？」

「いや、どう考えてもマスターの魔力量がおかしいのよね。私とアストルフオが戦闘して、宝具や創造までしていたのに普通に運用できてたじゃない？」

「そのの何がおかしいんだ？」

「沙条。Fateでは聖杯のバックアップを受けて召喚や戦闘ができるんだ。それを一人で補えるか？」

「無理だな。なるほど。俺が普通に戦えたり、二人を維持できていたのは聖杯の代わりをユーリがしてくれていたからか」

「こくこくと頷くユーリ。しかし、これって考えようによってはかなりやばいな。」

「で、ユーリからしたら仕送りしていた魔力で女を増やされたわけだな」

「浮気や不倫だ」

「不潔です」

「ぐ……すまない。しかし、仕方がなかったんだ」

「いえ、大丈夫です。お兄ちゃんの安全が最優先でしたから。それに懸念事項が一つありましたからね」

「懸念事項だと？」

「ハジメ、俺は沙条愛歌も召喚している」

「沙条愛歌という……ガチでやばい奴じゃねえか」

「そういう事だ。実際に詩乃を枷として、試練と称してキャスターのジル・ド・レエを召喚してぶつけてきている。ジル・ド・レエはジャンヌダルク・オルタまで召喚してきやがったが」

「とりあえず、沙条愛歌に対する対処は後だ。まだ報告があるだろう？」

「はい。シュテル、お願いします」

「かしこまりました。では……」

そこでシュテルから地上であった事を全て聞いた。沸々と怒りが湧き上がってくる。何で俺のタブレットを利用しようとしてるんだ？ あと教会の奴等、そんなに裏切って欲しいのなら裏切つてやろうか。どうせ魂は集めるんだ。一度蒐集したら用無しだ。永劫破壊で回収して代価を支払わせるのもありか。だが、そうなると園部や清水達、愛ちゃん先生とも敵対する事になるだろうな。

「つまり、俺は地上に出ない方がいいか」

「ああ。最低でも身体を治療してからがいいだろう」

「マスターのご命令があれば何時でも滅ぼして参りますが、どうなさいますか？」

「うむ。命じてくれればオルクス大迷宮に存在する全ての魔物を使つて襲撃する事も可能だ。制御はできんだろうがな」

「だ、駄目ですよ！ 無関係な人に被害がでちゃいます！」

「ユーリの言う通り、その報復は禁止だ。しかし、俺達の命や自由を狙ってくるのなら容赦なくいい。できれば蒐集してから殺す方が良いが、怪我をしないと無理ならさっさと殺してくれていい」

「それは賛成だが、どうなるかしつかりとわかつているのか？ 教会と王国が敵に回るだけじゃない。信者の連中も敵になるぞ」

「それがどうしたんだ？ 有象無象がいくらかかってこようと、問題ないじゃないか」

「お、お兄ちゃん……？」

「おい、本当にどうした……？」

「あく少しいかしら。マスターは何も身体だけを犠牲にしたんじゃないの。鈴や恵里、詩乃を守るために感情や記憶も犠牲にしているのよ」

「……!?」

「恐怖や痛みを感じないから、もう他者がどう思うかなんて考えられないわよ」

「まずは沙条の話を聞く。全てはそれからだ」

「はい。全部、包み隠さず教えてください」

俺は今まであった事を包み隠さずに話した。それは秘すべき事も全てだ。恵里の事も今までどのような生活していたかも全部話した。ユーリに隠し事はできない。鈴達と交わした約束にはユーリ達も入っているし、そもそもユーリに隠し事なんてする気はない。

「中村の奴め」

「……お兄ちゃん」

「ユーリ、シユテル、ディアーチエ、それにレヴィにも恵里に手を出すのは禁止とっておく。レヴィには伝えておいてくれ」

「はい……」

「ちっ、わかった」

「仕方ありませんね」

「とりあえず、谷口も沙条も許しているのなら、そっちの事に関して俺は関与しない。直接のかかわりはないからな」

「全員で話し合おう。恵里は反省して俺達の味方になってくれる」

「……味方というより、ある意味では敵だろうがな」

「ですね」

「ねえねえ、それよりもマスターの身体の事について話そうよ。大事だよ」

「それもそうだな。というわけで、ユーリ。ハジメと協力して頼めるか?」

「任せてください。もう設計しましたので、レヴィの分体達にお願いして素材を集めています」

「どうやら、あまり喋らなかつたのは設計も同時にしながら指示を出していたからのようだ。本当にユーリは凄い。」

「治療はできるのか?」

「感情と記憶を元に戻すのは難しいですが、それ以外は簡単です。ここに研究所を作ればいいだけですからね。とりあえず、プロジェクト・フェイトなどを利用して身体を作成します。感情に関しては私がどうにかしますが、応急処置として感覚共有のスキルを使ってお兄ちゃんと私達の感覚を繋げます」

「ユーリ、それって……」

「は、はい……その、あ、あれです……」

「いいのか?」

「わ、私がかちゃんと守れなかつたせいですし、お、おれいの気持ちもあります……」

「それなら駄目だな。ユーリが俺を愛していないのなら——」

「愛しているので問題ありません!」

「そう?」

「世界を幾つも滅ぼしてきた私を受け入れてくれて、優しく愛してくれました。いっぱい助けてもらいましたし、力が無くて非力な時でも変わらず助けてくれました。ですから、私は……」

顔を真っ赤にして告げてくるユーリ。思わず抱きしめてしまった。

「ちなみにマスター」

「なんだ?」

「今ならペットが三匹ついてきますので、よろしくお願いします」

「ペット?」

「む、我等はペットか?」

「ペットですね。だって、元は猫です」

「それもそうか。よろしく頼むぞ主人」

「いや、それは待て」

確かにシユテルとディアーチエは元が猫だが、ペットというわけにはいかない。

「駄目ですか？ 私はディアーチエ達と一緒に愛して欲しいです」

「いや、ディアーチエ達がそれでいいのなら大歓迎だが……いいの？ もちろん、ペット扱いなんかはしないが……」

「うむ。問題ないな」

「はい。なんの問題もありませんね」

「異議あり！」

ルサルカがバンッと机を叩く。視線が俺に集まるが、どうしようもない。身体の制御権は完全に奪われている。

「ほう、異議申し立てか。いいだろう。言ってみろ」

「そのユーリって子は認めるけれど、貴女達は別よ。確かに貴女達は対策をしていたかもしれないけれど、私達は身体を張ってマスターを守っていたの。だから、そう簡単に貴女達を認める訳にはいかないな」

「そうだそうだ」

「む」

ルサルカがディアーチエとシユテルを睨み、そこにアストルフオが同意する。ユーリを見れば俺の膝の上でおろおろとしていた。

「というわけで、その二人か、三人がマスターの女になるのなら、私はもちろん、恵里や鈴、詩乃も入れてもらおうよ」

「では、諦めましょう」

「うむ。ユーリの幸せが優先だな」

「シユテル、ディアーチエ……」

「二人はこう言っているけど、あなたはどうしたいの？ それと……」
「待て。そういう話は俺の居ないところでしろ。今は沙条や谷口達の身体を治療する方が優先だ。感情は無理かもしれないが、感覚に関しては感覚共有でどうにかする。それでいいな？」

確かにハジメにはまったく関係ない話だ。というわけで、俺も乗っかる。正直、俺としてはどちらに転んでもいい。普通に家族として愛

する事はできるが、どちらかといえばハーレムには憧れるし、ルサルカの事も好きだからだ。

「それでいい。治療の実験を俺でして、その後に鈴達を治してやってくれ」

「わかりました。ただ、実験は他の生物で行いますので大丈夫です。南雲さん、こちらをどうぞ」

「培養槽の設計図か。わからないところも多いが……」

「でしたら、私がつきます」

「我はユーリにつく」

「お兄ちゃんは……」

「私も協力するわ。魔術の知識や人体構造の知識は負けないしね」

「わかりました。ですが、お兄ちゃんの身体は私が使います」

「いいわよ」

ルサルカが同意した事で、俺から彼女が出て代わりにユーリが入ってくる。ユーリの姿に代わり、ウェーブのかかったゆるふわの金髪へと変化した。

「……思った以上に酷いです。このままだと近いうちにお兄ちゃんは死にます。身体の中がボロボロです……」

「すぐに作業に入るぞ」

「はい。絶対に死なせません」

「最悪、時間を停止させて進行を遅らせるわ」

「お願いします」

うむ。皆が動き出した。俺はやる事がないので大人しく応援するしかない。しかし、それほど身体はボロボロなのだろうか？

『痛みを感じていないからわからないかもしれませんが、ユニゾンして英霊さん達の力を無理矢理引き出していたんですよ？ 筋肉繊維の断裂はもちろん、骨や残っている臓器の損傷も大きいです。それに病気もいくつもあります。免疫機能もかなり下がっています……ルサルカさんが魔術で治療していなければ死んでいましたよ？』

『そこまでやばかったか。お世話になります』

『任せてください！』

そう言ったユーリはオルクス大迷宮を操作し、この最下層に研究所を作り出す。確かに広さはかなりあるし、そこに動力炉が作成される。動力炉はエグザミアの力を使っているようで、莫大な魔力がユーリから供給されていた。その魔力を使い、ハジメとユーリ、シユテル、デイアーチエ達でどんどんレヴィ達が運んできた鉱石を錬成している。

「生成魔法で治癒効果と再生効果をつけて……」

「神結晶の解析、終わりました。天然ではなく人工でしたので増産できます」

「シユテル、量産をお願いします。一区画を使ってください」

「はい。すぐに」

「デイアーチエ。配線やパイプの開発は……」

「出来た。次は電子部品の製造に入る。ユーリ、柴天の書を貸せ」
「わかりました」

どんどん景色が変わっていき、すぐに巨大な研究所が機械でいっぱいになっていく。SFチックな施設が幾つも作られていく。俺は大人数で見守るしかできなかった。

一週間。たったのそれだけで莫大な数の人手と技術を投入したおかげか、未来的な研究所が完成した。劇場版ユーリの世界で使われていた複数の量子コンピュータがズラリと並列され、巨大な一つのスーパーコンピュータとなる。莫大な演算能力によって様々な物がユーリや柴天の書にある知識からこの世界でも使えるように設計しなおされ、ハジメ達の手によって作られていく。

途中からなのはの世界で使われているエグザミアの一部を使った魔導炉を作り出し、そこにシユテルがハジメの持っていた神結晶を複製して設置する。神結晶は魔導炉からふんだんに魔力を受け、すぐに神水を溢れ出させる。それを冷却液や培養液として使用するというとんでもない状態になりだした。

ルサルカの魔術も取り入れられ、効率的になっていくらしい。鈴と恵里も結界や人手などで協力してくれている。詩乃は食事の準備な

どだ。

ちなみにほとんど寝ていないなんて事はない。ちゃんと計画的に休憩や食事などの息抜きもしているのでデスマーチではない。そう、完璧なまでにユーリとシユテルによってスケジュールが管理されているのだ。地上での時と違い、人手の能力と使える魔法、工具が違うせいでも捗るのだ。

さて、研究所が完成したら次に作られるのは俺の新しい身体だ。これによってようやく自由になれる。

「お兄ちゃん、身体の希望はありますか？」

「そうだな……カツコイイのがいいな。まあ、ユーリの好みでいいさ」
どうせ俺の容姿は下の下だ。ただ、やはり一部だけは残して欲しいけどな。

「男である事と、俺のDNAとかは残して欲しい。俺だという証明になるから。後はちゃんと戦えるようにしてくれ」

「わかりました。戦えるようにもしておきます。それと痩せた状態をメインに考えますね」

「頼む。顔は弄ってくれても全然いいから」

「あまり違和感はないように調整しますね」

「ああ」

培養槽に入る。様々な効果が付与されるように改造された神水が満たされ、意識が闇に閉ざされていく。最後の視界はユーリや心配そうにしている皆だけだ。ハジメ、ユエの二人や、ユーリ、シユテル、ダイアーチエ、レヴィ、ルサルカ、アストルフオ、詩乃、恵里、鈴も来てくれている。これだけの人に見送られるのなら悪くない。



「さて、では改造するか」

「うむ。マスター……真名の改造計画をここに始める」

「あまりやりすぎはだめだと鈴は思うよ?」

「大丈夫。強くなれるから許してくれる」

皆が色々と言いながら、隣の培養槽を見ます。そちらには布で隠されています。中身は私の肉体データを基礎とし、作られたクローンの肉体が入っています。もちろん、劣化コピーですが、永遠結晶エグザミアもあります。

「弱っている心臓に永遠結晶エグザミアの劣化コピーの魔導炉をペースメーカーとして設置。生み出される魔力はユーリのクローン体が持つリンカーコアを通して使える。手足には神結晶を削って作り上げた骨を使う」

「手足は完全にユーリの物だが、やはり身長が足りん。急速に成長させたせいで劣化が激しいが……」

「神結晶の骨でそれを補います。また脳の方にも一部欠損が見られますので小型化してチップに改造した量子コンピュータ、ブレインコンピュータも取り付けます」

「魔術回路は問題ないし、肺とかも色々と施さないといけないけど、全体的に強化しましょう」

皆が持てる技術と知識、想像の全てを使ってお兄ちゃんの身体を作り上げます。特に私達、紫天一家とルサルカさん、アストルフオさんは乗り気です。お兄ちゃんが殺されたら全てが終わりですから、この中で一番頑丈な私の身体をメインにすることになりました。ですから、映画版の私のデータを使っています。そのせいで私の力のほとんどをお兄ちゃんに使ってしまいました。問題ありません。ディエーターやシユテル、レヴィがいればお兄ちゃんは安全だからです。

「では、始めましょう」

一週間かけて作り上げた身体と施した術式は無事に成功し、お兄ちゃんは新しい身体を手に入れる事ができました。ですが、黒髪だったはずが気付いたら私と同じ金色の髪の毛になっていました。調べたらあの人の介入があったようです。急いで武器を用意しないといけません。このままお兄ちゃんを思い通りにされては大変です。

第29話

全ての術式が無事に終了し、培養槽を横たえた状態から自動で縦の状態に移動させます。培養槽の中に居るお兄ちゃんの身体は無事に私が成長した姿へと変わりました。予定外の事もありましたので付きつきりです。ステータスを確認しながら、異常がないかを調べてあれば修正しました。

沙条愛歌から何度も介入を受けましたが、あちらが魔術で介入してくるのでこちらは科学技術のナノマシンを投入して対抗しました。シユテルやデИАーチエ、レヴィ、それにルサルカさんや詩乃さんにも手伝ってもらってどうにか髪の毛の色が変わる程度で終わりました。いえ、本当はもつと男性っぽくなるはずがほぼ成長した私そのままになってしまったのは仕方ありません。あちらが短髪の男性に近づけようとしていたので過剰に反応しすぎました。

「とりあえず安定したな」

「これでもう介入される事はないでしょう」

「強かったね」

培養槽の中にあるお兄ちゃんの身体から、デИАーチエ、シユテル、レヴィの三人が出てきました。三人にはデータとなって沙条愛歌から送られてくるウイルスのような物の撃退をお願いし、無事に成功してくれました。

「お疲れ様でした。デИАーチエ達も大丈夫ですか？」

「我は問題ない」

「ボクも大丈夫だよ」

「私も問題ありません。相手も休眠状態でしたから、これ以上の介入はできなかつたようですね」

「良かったです」

休眠状態ですら、介入してくる恐ろしい相手です。ですが、お兄ちゃんの為にかしななければいけません。やはりデバイスは必要ですね。お兄ちゃんの身体は無事にどうにかなったので、そちらか

ら着手しないといけません。それに鈴さんや恵里さん、ハジメさんの事もありません。

「ユーリ。まずは風呂に入ってゆっくりしようではないか」

「賛成。疲れたよ」

「ディアーチエ達は休息してください。私はまだやる事がありますから……」

「ユーリ、酷い顔ですよ。そんな顔だとマスターに、お兄様に心配されますよ」

「そうそう。だからお風呂入って寝よう！」

「でも、また介入があるかもしれませぬ」

「それなのですが、一つ考えた事があります。ディアーチエ」

「うむ。ユーリ、沙条愛歌は魔に属する者であろう？」

「その筈です」

「ならば谷口の神獣鏡シエンシヨウジンだったか。それを使って封印といかないまでも力を削ぐ事はできるのではないか？」

「なるほど……」

確かに鈴さんの持つ聖遺物シエンシヨウジン。神獣鏡は魔を祓う力があるそうです。それなら霊的存在と言える沙条愛歌の力を削げるかもしれません。

「鈴さんと呼んできてもらえますか？」

「任せて！」

レヴィがビューンと駆けていきました。ですので、私は少し椅子に座って休憩します。

「ココアです」

「ありがとうございます。はぶ」

シユテルに入れてもらったココアを両手で掴み、中を見るとミルクで可愛らしい猫の親子が書かれています。可愛すぎて飲めません。「さっさと飲め」

「あっ」

ディアーチエが棒で掻きまわしてしまったので、ラテアートが崩れてしまいました。ですので、息で冷やしてからゆっくりと飲みます。

すると身体の中に染みわたってくる感じがしました。

「お菓子も用意した。今日はシュークリームだ。疲れた頭には糖分がいい。食せ」

「は、はい……ん〜！」

口の中にカリカリの皮に中にある蕩けるような甘さのクリームがとても美味しいです。ココアも美味しいです。

「あ、いいの食べてる〜」

「お邪魔します〜あ、お菓子！」

ラボの中に戻ってきたレヴィは無事に鈴さんを抱き上げてやってきました。すぐに机の上にあるシュークリームに反応したのは流石です。

「食べたいのなら食べていいが、まずは仕事だ」

「はい。ココアか紅茶を用意してお待ちしておりますので、まずは結界をお願いしたいと思います。全力全開をお願いしますね」

「全力全開!?!」

「はい」

「う〜ん」

「お願いします」

理由を説明すると、快く受け入れてくれました。

「真名君のためでもあるし、うん。鈴も全力全開で行くよ！」

シンエンシンヨウジン
「神獣鏡！」

何処からともなく、鏡でできた扇子が現れ、それが解けて無数の細長い鏡が浮いていきます。鏡が培養槽を中心にして展開され、それら起点として結界が展開されました。結界の中から黒い霧みたいなのが出て来て暴れだしましたが、すぐに消滅しました。

「ダイアーチエ、アレって……」

「沙条愛歌がこの程度でやられるはずもない。別口であろうな」

「もしかして……」

シユテルが結界の中に入りますが、なんともありません。

「レヴィ」

「は〜い」

「レヴィもなんともありませんね」

「我もなんともないな」

「私は……」

私が入ってもなんともありませんでした。不思議な事なので、すぐに検証するために他の人も呼びます。これがお兄ちゃん達に影響がある事だと困りますからね。またレヴィが楽しそうに雷を纏って行ってきたくれました。

◇

「それで緊急事態、なんだよな？」

「ん。レヴィが変な言い方をしてやってきた」

「どんな言い方をしたのだ？」

「てゝへんだてへんだゝって！」

レヴィが連れてきた皆さんはどのような事態かを詳しく伝えられていないようです。その事でレヴィがディアーチエに怒られていますが、説明がろくにされていないのにすぐに集まってくれた皆さんには感謝です。

「実は鈴さんに魔を祓う結界を展開してもらおうと、沙条愛歌以外の魔が浄化されました。ですので、検証を兼ねて皆様をお呼びさせていたできました」

「なるほど。沙条に影響はあるのか？」

「排除しただけなのでありません」

「そうか。それならいい。俺達も検証に参加するぞ、ユエ」

「ん。ハジメがそう言うなら参加する」

他の皆さんも頷いてくれました。

「では、順番に鈴さんの結界に入ってください」

「はい」

鈴さんから結界の中に入りました。鈴さんは何もなく、次に恵里さんとルサルカさんが入りました。二人は身体から黒い霧みたいなのがでてきました。

「これがそうか」

「なんだか変な気分」

詩乃さんも問題ありませんでした。アストルフオ君も同じです。ユエさんは出ましたが、ハジメさんは出ませんでした。

「なるほどね」

「そういう事ですか」

不思議に思っていると事情を説明したルサルカさんとシユテルが何かに気付いたみたいです。

「私と恵里が出た理由はおそらく、この世界の住民の魂を吸収しているからよ」

「でしょうね。神山にあった大迷宮には神の力が作用する何らかの影響に打ち勝つことが攻略の条件としてありました。その事から、この世界の者は魂に細工されているのでしよう」

「おそらくそういう事でしょうね。私とマスター、恵里は大迷宮に漂っていた人の魂を取り込んでいるわ。だから、あの黒いのがでたのでしょうか」

「とんでもない事がわかったな。つまり、この世界の住民はエヒトに操られている可能性が高いつて事だな。そう考えると確かにあの話についても理解できる」

「あの話？」

「鈴は知ってる？」

「僕も知らない」

詩乃さんや鈴さん、恵里さんが不思議そうにしています。三人はこの迷宮でエヒトについて知っていないので無理はありませんね。あれ、ルサルカさんも知らないはずですが……

「お前は知っているのか？」

「秘密よ」

「知らないのか」

「だから秘密よー」

ディアーチェの言葉にルサルカさんはこう言っているので、多分知っているんでしょうね。

「どっちでもいいが、これから会う現地住民には気をつけないといけないだろう」

「え〜面倒だから皆倒しちゃえばいいじゃん〜」

「駄目だ馬鹿者」

「え〜」

「シユテル、レヴィの監視を頼むぞ。こいつ、最下層で随分と馬鹿になったようだ」

「はい。任せてください」

確かにレヴィ、奈落に入ってからずっと戦いっぱなしでしたし、人との会話なんてハジメさんと会った時ぐらいですから無理ありません。本当はもつと賢くて良い子なんです。

「結界で解除したら、駄目……なんですか?」

「確かに鈴もそっちの方が楽だと思うよ?」

「いや、止めておいた方がいいだろうな。エヒトはこの世界をゲームの盤上として見ている。だったら、眺めるぐらいの事はしているだろう。そこに自分の力が届かなくなった場所が現れたら調査ぐらいはするはずだ」

「で、あろうな。画面を見もしないでゲームなどしないであろうよ」

「まあ、この世界からさっさと帰る方法を見つければ関係ないだろう。お前達の技術があれば次元跳躍ぐらい簡単だろう?」

確かに私達の技術があれば次元跳躍は可能です。座標がわからないといけません、調査ユニットを沢山作って、色々な場所に送り込めばいいのです。

この世界と地球がある場所にはエヒトによって作られた道が存在しています。例え破棄されていたとしても、作られた時に出来た痕跡は必ずありますので、後はその痕跡とお兄ちゃん達が持ち込んだ地球の品物と合わせてデータをとり、予測した場所に調査ユニットを送れば闇雲に探すよりも早く終わります。

この調子ならかかっても一年以内に戻れるはずですよ。なのでオルクス大迷宮に籠っていればお兄ちゃん達は無事に帰れます。ただ、この世界から出る時が問題ですね。

「次元跳躍は生成魔法と私達の技術があれば可能ですが、簡単にはいきません。おそらく妨害されます」

「それにこの世界でのゲームが終われば、また最初から始めるか、別のゲームに移るでしょう」

「別のゲームか。碌な奴じゃ……まさか」

「可能性は高いです。何せこの世界にお兄様やハジメさん達を召喚した相手です。リセットしたゲームができるようになるまで、別のゲームとして地球を選ぶ可能性は否定できません」

「帰った地球はほどなく戦争状態になる可能性が高いであろう」

えっと、お兄ちゃんのタブレットから得た知識で考えると、第三次世界大戦になるんでしょうか？ 最終的に行き着く場所は核の撃ち合いでの滅びでしょうか？

「ちっ」

「まあ、別に気にしなくていいわよ」

「なに？」

「だって、マスターは鈴を送り届けたらこっちに残るつもりなもの。だから、私達との生活に邪魔な神様を排除に動くはずよ」

「「どういうことー」」

「教えろ。沙条は何を考えている」

「そもそも、鈴は神獣鏡シエンシヨウジンのお陰で大丈夫だけれど、マスターと恵里は永劫破壊エイワイヒカイトを習得しているのよ？ 殺人衝動だってあるのよ。地球に行ったら碌な生活を送れないんじゃないかしら？」

「それは……」

「それに私達の戸籍も無いですし、身体も変わったお兄様は果たして沙条真名として認められるかという問題もあります」

「待って。えりりんは帰らないの？」

「僕は真名についていくよ。地球に未練なんてないし、真名が居るこっちの方が過ごしやすい。それにいざとなれば鈴に会いにいくだけなら可能だろうしね」

「うゝ」

この辺りは色々話し合いが必要そうですね。

「私はどうなるのかな……戻れるの？ それとも消えちゃうの？」

「詩乃さんはわかりません。有力候補として消える事が一番高いです。余程の事が無い限り、戻る事はお勧めできません。ですよね？」

「今の所はそうであろうな」

「はい。残念ながら私達の知識に偏りがありますし、何処まで実現できるかも不明です」

「要はまだ何もわからないって事だろう。なら、今は最悪を想定して動き、備えるだけだ。ユーリ、デバイスの設計図は？」

「それは……」

「駄目だ。デバイスは真名が目覚めてからだ。現状では我等の安全は確保されている。故に無理に戦力を高めずとも問題はない。まずは治療に専念すべきだ」

「片腕と片足、両足の治療が必要な怪我人が後二人居ますからね」

「それもそうだが、俺の腕は義手にしてデバイスにしたいんだ。だからデバイスを作れないかと思ったんだよ」

「そういうことでしたら、今は培養槽を作ってください。恵里さんと鈴さんの治療を先にして、次にハジメさんの腕を作ります」

「わかった。すまないが頼む」

「では、話がまとまったところでお風呂に行くか。というか、レヴィとアストルフォは何処に消えた」

「二人なら外で遊んでる」

「あやつらめ……」

まあ、仕方ありません。とりあえず、解散してそれぞれで行動する事にしましょう。

「えっと、ハジメとユエ、アストルフォ以外には話があるから、一緒に風呂へ行きましょう」

「ほう」

「いい加減、どうするか決めないといけないでしょう？」

「いいだろう。シユテル、レヴィを連れて風呂へ行け。我はユーリを連れていく」

「というわけで、三人も一緒にいくわよ」

ルサルカさんに鈴さんと恵里さんが持ち上げられ、詩乃さんも大人しくついていきました。アストルフオさんにはお兄ちゃんを見ていように頼みました。女の子だけで入るので仕方ありません。本当に男の人には見えませんが、男性なんですよね。

◇

服を脱いで八人でお風呂に入ります。身体を綺麗に洗い合った後、湯船に浸かりながらお話をします。私達にとつてはとても大事な事です。私、デイアーチエ、シユテル、レヴィ側とルサルカさん、鈴さん、恵里さん、詩乃さんの側で互いに反対側に入っています。

「裸の付き合いつて事で、本音でいくわよ？」

「ああ、構わぬ。ユーリも構わぬな？」

「はい」

「じゃあ、私達は真名の妻になるつもりよ」

「待って！　鈴は聞いてないし、そんなの決めてないよ！」

「わ、私も……」

鈴さんと詩乃さんはなるつもりはないみたいです。正直、ホツとします。私より身体が大きくて女性らしい恵里さんもいます。あれ、恵里さんは答えてません。

「え、えりりんは……」

「僕は真名の妻……ううん、奴隷になるつもり」

「「「奴隷っ!?!」」」

その言葉にルサルカさんを除く私達は驚きました。

「な、なんで!?!」

「いや、二人は許してくれたけど、やっぱり僕としては二人を奈落に落とす原因になったんだよ？　だから、妻じゃなくて真名の玩具や都合のいい女でいいの。僕は僕を見てくれてちゃんと構ってくれるならそれでいいから」

「駄目だよ！ 真名君だってそう言うよ！」

お兄ちゃんならちゃんと受け入れてくれます。シユテル達だってペットとしてじゃなくて、家族として受け入れてくれるんですから。「鈴達はそう言うだろうけど、大切な人を危険にさらされたユーリちゃん達は納得しないでしょう？ 納得したとしてもわだかまりは残るの。だから、これが一番都合がいいの」

「私はお兄ちゃんが気にしていないなら、なんの問題も……」

「待てユーリ。そもそもこいつはマスターの女になる前提で話している。だが、今はその前提について話している状況だ」

「あっ」

「ちっ、気付いたか」

本当です。奴隷になるという言葉について、それを否定しようとしてしまいました。でもそんな必要がないのです。

「王よ。彼女も油断ならないようです」

「であろうな」

「えくボクは皆仲良く、お兄ちゃんと一緒に居ればいいと思うけどな」

「レヴィ。このままではお兄様が取られますよ」

「それは駄目！」

そうですね。お兄ちゃんを取られたくはありません。

「取らないわよ。共有しましょうって言うてるの。ちなみに真名からはユーリがいいなら受け入れてくれるって言質をもらっているわ。だから、ユーリちゃん次第で皆が幸せになるか、それともドロドロの愛憎劇になるか、決まるの」

「待て、その言い方は卑怯だぞ」

「そうです。それではユーリが一人を選ぶ選択肢を取れません」

「ちなみに私は全力で、ええ、全力で妨害するからね！ ええ、しますとも！ 私が幸せになれないのなら、他人の足を引っ張りまくってやるわー！」

「最低ですね」

「まったくだ」

私としてはお兄ちゃんが納得しているのなら構いません。ただ、お兄ちゃんを取られるのは嫌です。一緒に居て優しく頭を撫でて欲しいですし、手を繋いでピクニックや色々な事を一緒にしたいです。

「鈴さんは、どうしたいですか？」

「鈴は……」

「鈴、僕達は真名に隠すべきところや見られたら恥ずかしさで死ぬよ
うなところまで全部見られているの」

「あつ、そうだった！」

「あれはあくまでも介護でしょ」

「でも、詩乃。介護にキスや身体を撫でまわされたりするのは含まれない」

「アレやったのつてルサルカさんだよね！」

「残念でした。感触もそうだけど、真名も楽しんで後半は触ってたわよ？」

「そもそも、鈴、乙女として生きていける？」

「い、けるよ、きつと……」

「その、気持ち良くされた時の顔とかも全部見られてるけど……」

「む、無理かな……？」

「デイアーチエ達も領いています。皆、ちゃんと人として生きた記憶もあるのです、恥ずかしさとかも理解しています。だから、二人が排泄を管理され、更に互いにキスして唾液を交換したりするのがどういう事かも理解しています。」

「じゃあ、鈴。その光景を思い出してみて」

「う、うん……」

笑顔で銀髪になって手足を取り戻した恵里さんが鈴さんの両手を握りしめて伝えると、鈴さんは思い出したのか、顔が真っ赤になりました。

「あの……」

「詩乃は黙ってなさい」

「ふぐっ!？」

詩乃さんがルサルカさんに黙らされました。私はおろおろとして

デイアーチエ達を見ますが、忌々しそうに見ているだけです。シユテルを見ると、彼女は私の肩を叩いてから周りを見渡します。すると、今まで気づきませんでした。周りに変化がありました。それは影でできた何か。沢山蠢いていたのです。

「私達が行動を起こしたら、アレで妨害する気でしょう」

「うむ。事前に仕込まれていたな」

「倒す？」

「いや、止めておけ」

「争いたくはないです」

「それにお兄様から禁止されていますよ」

「なら駄目か？残念」

「ええ、まったくです」

シユテルとレヴィが大人しく湯船に浸かってくれているので良かったです。

「じゃあ、次は相手が真名以外の男、そうだね……天之河君だったらどうかな？」

「え？」

顔が赤から真っ青になりましたね。

「彼に見られたり触られたりするの嫌？」

「嫌だよ！ そんなの決まってるよっ！」

「顔はいいよ？」

「それでも嫌！」

「じゃあ、檜山君は？」

「絶対やだ！ 死ぬっ！」

「二人にそんな事をされるか、死を選ぶとなると？」

「死ぬ！ 鈴は自殺するよ！」

「じゃあ、真名だったら？」

「えっと、真名君だった……ら……」

今度は顔が赤くなりましたね。

「嫌じゃない？」

「うん、全然いいよ！ 今更だしね！」

「うん。それなら鈴は真名の事が好きなんだよ」

「ふえ？ いやいや、これは慣れてるだけで……」

「じゃあ、あの二人にされても同じだよね？ 慣れてるんだし」

「あ、あれ？」

鈴さんが笑顔で固まりましたね。

「それなら、次はユーリちゃんが真名の隣にいて、真名が鈴に構ってくれない」

「うん、いつも通りだね！」

「……じゃあ、まったく知らない女の人が真名の隣で腕に抱き着いてキスをしていたら？」

「えっと、鈴も並ぶかな？」

なんでそこで並ぶんでしようか？

「並んでも鈴にはしてくれないよ？ だって、もう鈴は真名にとって赤の他人になるんだもん。構う必要もないし、世界を隔てれば簡単に会えない」

「え」

「それに真名の近くには沢山の女の子たちが居て、彼女達は鈴と違って心だけじゃなくて身体も許してる。とつても気持ちいい事をしてくれる子だから、してくれない鈴とじゃ心の距離がどんどん距離が開いていくだろうね」

「す、鈴だって身体ぐらい自由にさせてあげるよ！ 全部見られて触られてるもん！」

「鈴、それって妻になるのと何が違うのかな？」

「え？ 全然違う……？」

「同じだよね？ ああ、いや、子供ができてても認知とかしてくれないし、してくれてもシングルマザーだね！ とつても大変だよ？ 鈴は僕のお母さんのようにはならないだろうけど、覚悟してね？」

「あれえ〜？」

「というか、そこまで身も心も許している時点で結果はわかりきってるわよね。さて、問題です。以上の事から導き出される答えは？ 世間一般的にこういう関係はなんというでしょう。また、それに付随す

る感情はなんでしようか？」

「内縁の妻かな？ 付随する感情は……鈴は……真名君が……す、き……？」

「はい、Q. E. D. 証明終了。僕と一緒に幸せになるため、真名の妻になる？ 鈴と一緒に居てくれて、幸せだったら、僕も幸せになれるよ」

「うん、ずっと一緒だって決めたもん！ 鈴も真名君のお嫁さんになって真名君や恵里ちゃんと一緒に暮らすよ！」

誘導尋問の気がしますが、二人が喜んでいて何よりです。

「ちっ」

ディアーチエが私の顔を見て舌打ちしました。私、何か駄目な事をしましたか？

「これは私達の負けですか」

「そもそもユーリが拒めるはずもないか。ルサルカ！」

「はいはい、なんですか？」

勝ち誇った表情の彼女にますますディアーチエが機嫌を悪くします。

「ユーリが一番だ。それ以外は認めんからな」

「わかってるわよ。基本的にローテーションするとしても、ユーリちゃんは特別枠にして、何時でもいい事にしましょう」

「わかってるのならばよい。それで問題はそっちの娘はどうするかだ」

「わ、私は……」

詩乃さんの答えが決まっていますね。

「と、とりあえず、真名が目覚めてから決めるわ……その、お母さんの事とか、まだ正直、頭の中がぐちゃぐちゃでまともに考えられないから……」

「何を悩む必要があるのよ。このまま妻の一人になるか、それとも叶わない相手に恋心を寄せて一生独り身で過ごすか。どちらがいいかなんて一目瞭然でしょ？」

「わ、私はあんな奴知らない！ それに私は……」

「詩乃？」

「大丈夫？」

詩乃さんが恵里さんと鈴さんを見ると、二人が心配そうに詩乃さんの顔を覗き込みます。

「い、今は決められないから、今度！」

そうして立ち上がってお風呂から出ていきました。

「ふふ、これは面白くなってきたわね」

「そうね。詩乃がどうなるか本当に楽しみ」

「あまり酷いようなら真名に言ってお仕置きさせるぞ。接触禁止とかが妥当か？」

「詩乃と？」

「真名と」

「……しばらく様子をみる」

「私もそうするわ」

「やれやれ……」

「さすが王様！」

頼りになります。

「つと、そろそろ出ないとまずいな。ユーリがフラフラだ」

「わかりました。皆さんもお好きなタイミングで出てください。外にフルーツ牛乳とコーヒー牛乳を用意してあります。少ししたら食事もできますので食堂にお越しく下さい」

私はディアーチェに抱えられてお風呂から出て、身体を拭いてもらいます。そうしているとうとうとうとしてきて、瞼が重く……

第30話

「今、なんて言ったのかな？」

私はオルクス大迷宮にて皆が合流し、マスターの身体を作っている間に報告の為に王宮にある工房へとやってきました。そこで清水さんと香織さん、雫さんに人払いが出来た状態でマスター達の無事を伝えました。すると香織さんは泣き崩れて、良かった……と、なんども呟いて泣きました。清水さんは手を出そうかどうか悩んでいましたが、雫さんが来て抱きしめた事でほっとなさいました。ここまでは良かったのです。ここまでは……

皆さんの話になり、奈落でのハジメさんとユエさんについて報告すればこうなりました。背後に般若が生まれて、ちょっと怖いです。

「私の聞き間違いかな？ そうだよね？ 南雲君に私以外の女ができたなんて……そんな泥棒猫が現れるなんて……」

「じ、事実です……南雲ハジメはオルクス大迷宮の奈落で出会った少女と……」

「ひっ!？」

睨み付けてくる香織の表情に思わず悲鳴がでてしまいました。

「八つ当たりはよくないわよ」

「……これ、私が悪いのかな？」

「悪くはないけれど、もっと積極的になった方が良かったかも？ さっさと告白していれば……」

「ふふふ、そっか。そうだよね。私、今から飛び降りて南雲君に合いに行くね！」

「待って！ それは本当に待って！ 自殺になるから！」

「いや、それは大丈夫だろう。聞いた話ですでにオルクス大迷宮はユーリの手に落ちている。なら、後はシュテルが手伝ってくれば安全に下に行けるはずだ」

「シュテル？ もちろん、手伝ってくれるよね？」

「で、できません……」

「なんでっ！　なんでなのっ！」

「落ち着きなさいって。どうしてできないの？」

「現在、マスターの治療にオルクス大迷宮の力をほとんど注ぎ込んでいます。ですので転送などのリソースを大量に使用する物は使えないのです」

香織は協力者なので願いを叶えてあげたいのですが、マスターに害が及ぶ事であれば私達はマスターであるお兄様を優先します。

「香織、流石にこれは無理を言えないわ」

「う〜〜でも、このままじゃ私はもう南雲君と……」

「その、何を言っているのですか？　ハジメがユエと付き合いましたとしても、香織も一緒にハジメの雌……女になればいいじゃないですか」

「え？」

「な、何を言っているのよ！」

「いえ、マスターはユーリを含めた私達三人と、鈴と恵里。それに召喚した二人の女性と結婚する事になりました」

「なんだと!?　それってハーレムって事じゃないか！」

私の言葉に香織は不思議そうにし、雫は信じられないといった感じ です。清水さんに関しては叫んできましたが、事実です。

「そ、それってシユテルちゃん達が幼い事をいい事に騙しているんじゃない……」

「それはありません。どういうことか、ちゃんと理解していますし、そもそもこれは私達が相談して決めたことです。そこにマスターの意思は少ししかありません」

「そう、なんだ？」

「はい。全面戦争も辞さない感じで、誰も譲るつもりなんてありませんでした。一番危険な人は足を引っ張ると堂々と宣言してくれましたしね。厄介な事に強いですし、現状の私達ではユーリぐらいしか対抗できないレベルです。」

その人と恵里が組んで暗躍と妨害をされればたまったものではあ

りません。マスターの命令で直接的な被害は出せなくても、人を操って間接的に私達を妨害したり、亡き者にするぐらい平気でやってくる魔女が相手ですから、妥協しました」

「いや、魔女と同列みたいに語られる恵里って何したのよ？」

「それは秘密です。ただ、私達は争う事を嫌ってマスターを私達とあちらで共有する事になりました」

「むしろ、鈴ちゃん達は納得しているの？」

「はい。彼女達もマスター以外には考えられないとのことですよ」

まあ、無理ありません。極限状態に置かれ、相手が存在しないと生きていけない場所でしたから。言ってしまうえば極限の吊橋効果といった感じですね。

「くそつ、沙条の奴め……ウラヤマシイことを……」

「アンタ……」

「やっぱり、男の子ってハーレムとかに興味があるの？」

「当たり前だ！」

「そつか……じゃあ、ちよつと考えてみる」

「ちつ」

「そんなにご不満なら、試しに清水さんも同じ体験をして女性を虜にすればいいでしょう」

「マジ？」

「ただ、少し失敗すると魔物モンスターに食べられて死にます」

「……」

「マスターは身体の半分以上と一部の感情、感覚、記憶の一部を失ってかろうじて生きている状態でした。鈴は両足を失い、恵里は片腕と片足がありません」

「「そんなっ!?!」」

改めて三人と南雲ハジメの詳しい状況を伝えていきます。すると三人共、真っ青になりました。

「清水さんならひよつとしたら、適応できるかもしれません」

「テイミングでワンチャンかよ。失敗したら食べられるのが確か……」

「それで一緒に連れていく候補は誰がいいですか？」

「やっぱり止めておく」

「それがいいと思います」

諦めてくれて良かったです。もしも、頼まれたら相手を見繕わないといけませんし、とつても大変です。まず、死んでもいい人から容姿端麗で清水さんが気に入る人なんて条件になりますしね。

「こちらの報告は以上ですが、そちらは何かありますか？」

「一緒に行つてたから詳しい報告はないが……しいていうなら、ベヒモスに再戦を挑んで倒したぐらいだ」

65階層のボス、ベヒモス。私の本体が召喚された時に利用した触媒ですね。あの魔物^{モンスター}がマスターを奈落に落とす原因の一つになったともいえます。そんなベヒモスですが、清水さんが言った通り、私も討伐に参加しています。

もちろん、人型ではなく使い魔として三人をお守りしました。具体的に言う^とと結界を展開して守り、口から火炎を吐いて攻撃したりしました。

「地上の事です」

「ああ、それならウォルペンさんがバッテリーの箱を誤差なく完璧に仕上げたぐらいだな」

「ウォルペンさんですか……まあ、彼ならできるでしょう」

ハイリヒ王国直属の筆頭錬成師ウォルペン・スターク。この国の錬成師のトップです。最初は彼もバッテリー作りなど意味の分からん仕事をやっている暇はないと言っていました。ですが、派遣されてきた錬成師が投げ出した後、しゅしゅやってきました。そんな彼は他の錬成師と違い、実際にバッテリーを作る現場を見せ、理由を説明したら部下の人と何個も試作品を持ってきて、試していました。この国は使える人と使えない人の差が激しいです。

「あ、それなら帝国つて国から人が来るみたいよ」

「帝国ですか。調査対象ですね。わかりました。ありがとうございます」

「ねえ、シュテルちゃん」

「決めましたか？」

「うん。まず南雲君と話し合ってみるよ。それで行けない理由は理解できたけど、連絡を取る手段はない？」

香織さんと南雲ハジメの連絡……それぐらいならどうかできないですが、盗聴される可能性も否定できません。そうすると、確実に安全で問題がない手段……ありますね。

「香織さんと南雲ハジメ、ユエさんで実際に会って話し合う手段が一つだけありました」

「本当?」

「はい。ただし、それは代償があります」

「もしかして蒐集か？」

「はい。お二人は蒐集しているので、香織さんを蒐集すれば後は私とあちらに居る私との間を取り持ちます。簡単に言えば量子コンピュータを使ったVR空間を作るので、そこで話し合ってください」

「そこで南雲君と会えるのならないよ。なんでもやって!」

「本当にいいの?」

「色々とデメリットもあるぞ」
蒐集についてのデメリットまでしっかりと教えましたが、香織さんの意思は固いようです。なので、彼女を蒐集してあちらの私に二人を強襲して作った空間に放り込みます。そこで何が話し合われようと私達は関与しません。ただ、相談や戦略についてはお手伝いしました。

トイレや食事休憩を挟んで三日三晩話し合いが行われましたが、その間はそれなりに大変でした。その結果、とりあえずは現状維持で会った時に気持ちが変わってなければ一旦、付き合うことにしたそうです。それからお兄様や私達の関係などを見つつ色々検討していくことになったそうですね。

疲れ切った南雲ハジメがそう言っていました。誰が正妻かはまだ不明らしいですが、私達は香織さんを押しします。お兄様がそうですし、私も友達ですからね。



「おい。なんて事をしてくれたんだ……」

リビングにしている場所でくつろいでいると、ハジメさんが文句を言ってきたので説明してあげます。

「私はマスターであるお兄様が香織さんにつくような発言をしていました。地上に居た時に応援もしていたので、お二人が一緒になれるように頑張っただけです」

「それが余計な事だったんだ。どれだけあの二人を止めるのが大変か……」

「頑張ってください」

「ディアーチエ！」

厨房から出てきたディアーチエがミトンをつけた手にトレイを持っていきます。その上には焼けたばかりのクッキーが沢山置かれており、とてもいい匂いがします。

「我はどちらでもないな。全ては南雲ハジメ。お前次第だ。だが、一人を選んだら、もう一人の方は確実に悲しみ、不幸になる可能性が高い」

「ああ、色々と否定しようとしたら、シュテルに自殺しそうだって言われたわ！」

「そうなのか？」

「私はただ、香織さんが悲しそうに手首を見たり、ナイフを持ったりして身体にあてていたと伝えただけです」

頑張りました。涙だけでなく、絶望した感じの香織さんにナイフを渡して、身体に触れさせてから、それをハジメさんに伝えるだけの簡単なお仕事です。本当に自殺するかどうかは関係ありません。これによって香織さんがかなり追い詰められているという事をハジメさんに知らせ、こちらの要求を受け入れやすくしただけです。本来、他人の事ならどうでもいいともいえるでしょうが、これが地上で仲が良

く、互いに好意を抱いていたような相手なら、ハジメさんの性格から考えてなんだかんだと理由をつけて必ず救おうとします。

後は彼を蒐集したレヴィのデータから、ハジメさんとユエさんの趣味嗜好を読み取ってそれを香織さんに伝え、交渉を有利に運ぶようにするだけです。情報収集は戦いの基本ですし、こちらは恋の戦いでも変わりません。そして、戦うからには勝たなければなりません。

「沙条に絶対、文句言っただけよ！」

「残念だが、あやつは香織の味方であろうよ」

「ちつ。ユーリは……沙条に付きつきりか」

「うむ。このような些事でユーリの手を煩わせるならば、朝昼晩の御飯が激辛麻婆豆腐になる覚悟をするのだな」

「嫌な嫌がらせだな！ 自分で作って……」

「厨房には入らせん。ああ、ユエは構わんぞ。花嫁修業は必要であろうしな」

「他の奴は……」

ハジメさんの視線がソファアに座ってトランプをしている他の皆に向きますが、問題ないでしょう。

「ごめんね。鈴はかおりの味方だから！」

「僕は鈴と真名の味方だから」

「面白そうだから見てる！」

鈴と恵里は理由はどうあれ、知り合いの香織を助けます。アストルフオは面白そうという理由でこちらにつきましました。ルサルカと詩乃は居ません。ルサルカはユーリと一緒にお兄様を見ていますし、詩乃はあの時の事を気にして一人でこの辺りをよく散策しています。それにレヴィがついていっています。一人にするのはまずいですし、訓練もしているようですからレヴィが相手をするのがちよいどいいのです。少し前は詩乃が射た矢を追いかけてキャッチするような遊びを獣状態のナハトと一緒にやっていましたね。

「敵しか居ない、だと……」

「この件に関しては仕方があるまい。我等は既に真名を共有する事で決着をつけた。故にハジメも同じようにすればよかろう解決策は」

「だが、それは……」

「後はお前の甲斐性があるかないかであろうよ」

「日本じゃ嫁は一人だぞ」

「こちらでは知ったことではないな。それこそ建国すらできるぞ」

「……確かに土地も戦力もあるな」

「うむ。このオルクス大迷宮が我等が国とも言える。それに歴史を考えると、奴は人々を誘導し、操ってくるのは确实だ。そうになると我等も数を揃えねばならん。国を作るか、乗っ取るのはそれなりによい手であろうよ」

「面倒な事になるだろう。それに俺達は地球に……いや、沙条は帰る気がないんだったな」

「我等という爆弾を抱えておるのだ。このまま地球に、日本に戻れば大変な事になるであろう」

「確かにそうだな。二次元の存在が三次元に現れるんだ。著作権とか色々……」

「まつ、知った事ではないがな！」

「敵対するのなら滅ぼすまでです」

「会話がひと段落ついた感じなので、飲み物を入れて皆さんに配ります。すこしするとユエさんも降りてきました。」

「ハジメ、私負けない。絶対に勝つから見えて」

「あ、ああ。頑張ってくれ」
「ん」

抱き着いてきたユエさんを撫でて真剣に悩んでいるハジメさん。果たしてどうなるか、とても楽しみではありますが、二人には、三人には幸せになって欲しいです。少なくともこちらの世界に居場所は用意しておいてあげますので、気兼ねなく決めて欲しいですね。

第31話

気が付くと周りは真つ暗な世界だった。上を見ても、下を見ても、暗闇しかなく自分の身体もまったく見えない。両手も両足もないから触ることもできない。

光が一切ない暗闇の中で動けずにいると潜在的な恐怖を感じる。恐怖なんて感情は生贄として捧げたはずなのにおかしい。

そう思うと、身体から温度が無くなっていくのがわかり、寒くなってくる。どんどん寒くなり、身体が震えてきた。ここにはユーリもアストルフオも、ルサルカも居ない。鈴や恵里、詩乃だつて居ない。寂しくてとても寒い。

「……………」

こんなところには居たくない、声に出そうとしても出ない。存在その物が暗闇に溶けて消えていくかのように感じる。

だんだんと絶望が湧いてくる中、必死に助けを求めて目を凝らしていく。すると薄っすらとだが、光が見えた。その光は暖かな感じがして手を伸ばしてそちらの方へと行こうと必死に身体を動かす。すると微かだが光が近付いてきた。

「そっちに行つては駄目よ」

暗闇の中、何も見えない世界で唐突に可愛らしい幼い少女の声から響いてきた。そちらに意識を向けると、スポットライトに照らされる13歳ぐらいの女の子。その子は白いフリルがあしらわれた水色のワンピースに身を包み、金色の髪の毛に水色の瞳をしている。そんな彼女が俺に向かって綺麗で小さな手を伸ばしてくる。すると対抗するかのように向こう側も光が強くなってくる。

「マスター、そちらに行つては駄目よ。私の方にいらっしやい。良い子だからね?」

どうするか悩むと、向こうの光からユーリや他のクラスメイト達の声が聞こえてくる。

「こっちにこい」

「こっちにくるんだ」

「おいで」

「沙条君、こっち」

「そちらに行つては駄目だ」

どんどん声が聞こえてくるし、ユーリの姿も見えてきた。他のクラスメイト達も手を差し出してきている。

「駄目よ、マスター。お願いだから言う事を聞いて。そちらにだけは行つては駄目なの」

少女、愛歌が必死に手を伸ばし、それだけであきたらずびよんぴよんと飛び跳ねてこちらに手を近づけてくる。

「……愛歌……」

気が付けば声がでるようになっていた。

「ねえ、マスター。私が信じられなくてもいいから、今だけはこちらに来て。偽物に騙されちゃ駄目よ」

「いいえ、沙条愛歌の下へいかないでください」

ユーリや白崎、天之河達が手を伸ばしてくる。檜山までだ。何かがおかしい気がする。そもそもユーリがあいつらの傍にいるだろうか？

「ああ、もう！　こっちに来てくれないなら、強制的に私の王子様にしちやうわよー！」

「っ!？」

「いいから手を取りなさい！」

愛歌にそう言われて丁度飛び跳ねて近付いてきた彼女の手を取る。すると彼女が俺を引き寄せて抱きしめてくれる。彼女から温もりはせず、血が通っていないような冷たい感じだ。

「ふふ、勝ったわ」

「返して！　それは私のです！」

「返せ！　返せ！」

「残念でした。マスターは私の物よ。少なくとも私達の物。貴女達の物ではないわ。消えなさい」

俺を抱きしめているのとは違う、もう片方の手を上げて指を鳴らすと、彼女の周りから無数の触手が現れ、ユーリ達を貫いていく。しかし、すぐに再生してこちらへとやって来て俺の身体を掴んで連れ去ろうとする。愛歌はしっかりと俺を抱きしめながら、守るように触手と無数の魔術で迎撃してくれた。

「愛歌、こいつらは？」

「マスターは『Beware that, when fighting monsters, you yourself do not become a monster... for when you gaze long into the abyss, The abyss gazes also into you.』

“という言葉をご存知かしら？”

「怪物と戦う者は、その過程で自分自身も怪物になることのないように気をつけなくてはならない。深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいている。だったよな？」

「そうよ。さて、マスター。召喚というのはあちらとこちらを繋げて呼び寄せる物よ。その過程で世界の壁を越えようと関係ないし、力を持つ者だったら干渉だってできる。例えばエヒトがマスターをこの世界に召喚した時に細工をする事だって可能なの」

「細工？」

「令呪のような命令権を設定できるわ。また、召喚をし続ける事で世界と世界の壁に穴を開けて、修復されるはずの穴を広げる事で、別世界に移動するための道を作るのもできるわね。エヒトからしたら新しいゲーム盤が手に入らって事かしら？」

それってかなり不味い気がする。

「もつとも、エヒトにとつては予想外に人外魔境だったようで計画は失敗しているみたい。必死に修復しているみたいよ」

くすくすと笑う愛歌。確かに愛歌の言う通りなら、深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているというわけで、人類悪たるビースト達が覗いて……っ!? 今、一瞬だけキアラの巨大な顔が見えた気がした。

俺が呆然としている間も襲ってきた存在はどんどん迎撃されている。ユーリの姿をした相手は執拗なまでに殺されていた。

「しかし、鬱陶しいわ。エヒトは計画を変更して、新しいマスターの身体を狙っているようだけど、これは私とアーサーの物よ」

「いや、俺のだからな！」

「でも、もう召喚を諦めたんじゃないの？」

「いや、諦めてない。どうしてそうなるんだよ？」

「だって、マスターったら召喚してないんだもの。それって諦めたって事でしよう？」

「違う。断じて違う。これから何と言われようがガチャをする」

「そう。それならそれでいいけれどね」

思わず全力で否定したが、愛歌もあつさりと引いてくれた。しかし、愛歌の言葉からするとこれはエヒトが俺の身体を手に入れようとする干渉なのだろうか？

「その通りよ。細工とマスターが集めた生贄と合わせ、小さな力を大きくして干渉しているわ。もつとも、本体とは繋がっていないから、マスターの身体を改造している最中で不安定な状況だから狙っているんでしようね」

心の中の事を容赦なく読まれた。まあ、それはいいが、確かに身体を弄り回しているのだから、心が不安定になってもおかしくない。

「まあ、一番の原因は私とユーリのマスター改造に対する主導権争いだけどね」

「おい」

「だって、王子様アーサーにしたいじゃない！」

「いけしゃあしゃあといいやがる」

「反省も後悔もしていないわ。それにマスターにも得があるわ」
「得？」

「それは後でいいわよね。まずは邪魔者を殺すわ。命令オーダーを頂戴。私はあくまでもマスターの使い魔だもの」

「なら、俺とユーリ達、仲間の邪魔をし、俺達に干渉する者を排除しろ」
「私は除くわよ」

「わかっている。それ以外は……見敵必殺だ」

サーヴァントデストロイ

ヘルシングのアレみたいに伝えると、愛歌はニコリと微笑んだ。

「了解。素敵な命令ね。オーダーじゃあ、殺しましょう。やりなさい、アサシン」

その言葉と同時に外見年齢は10代の後半の瑞々しくしなやかな容姿の少女が現れる。彼女は褐色の肌を覆う黒衣がその体にぴったりと張り付いていて、均整の取れた肉体のラインをありありと見せている。

「サーヴァントを召喚できるのか……」

「私はユーリと違ってマスターの中にずっと居たのよ。彼女が迷宮のシステムを乗っ取っている間も、ここからお手伝いしてあげていたの。もちろん、代金は頂いたわ」

「まさか、黙示録の獣も……」

「流石に憑依させるぐらいしか無理ね。ここはマスターの中だから、召喚はできるけれど、彼女も外では夢幻召喚するぐらいね」

「そうか……よかった」

アサシンは可愛いが、色々とヤバイ。触れたらアウトな人材だ。いや、愛歌の身体を通して楽しめるのなら、いいかもしれないが。今も触れただけで毒に犯されて死んでいつている。

「意識なんていらないわね。すっかりと消し飛ばしてただのエネルギーに変えておきましょう。ああ、その過程で拷問して私の力と変えるのもいいわね」

楽しそうにやばい事を告げている愛歌だが、暗闇の世界に変化が訪れた。それは上から降ってくる浄化の光。エヒトの干渉によって現れていた者達は本体のエヒトと繋がっていないせいか、そのまま浄化され、その魂を愛歌によって掌握されていく。

「どうやら、鈴の仕業ね。ユーリに頼まれて私の動きを封じてきたのかしら？ でもお生憎さま。もう仕掛けは終わっているの」

「なにを仕掛けた？」

「ここではなんだから、別の場所で話しましょう」

愛歌が指を鳴らすと光に犯されていた暗闇の世界は一瞬で別の場

所へと変わった。そこは水晶の山で周りを囲まれた花畑だった。空からは赤い月の光が降り注いでいる。

そのような場所で愛歌は俺を抱えたまま座り、自分の膝の上に俺の頭を乗せて頭を撫でてくる。どういふつもりかはわからないが、膝枕をしてくれている。

「どういふつもりなんだ？」

「ただ、ユーリが貴方にプレゼントをあげているから、私も用意する事にしたの。このまま王子様が私の下に来ないなんて嫌じゃない？」

そう言いながら、俺の胸元へと手を入れて開けさせていく。そして、胸の間を何度か撫でるとニコニコしながら上から俺の顔を見詰めてくる。

「ぶれ、ぜんと……？ さつきも言っていたが、なんだ？」

「二つあるけれど、一つはこれよ」

何時の間にか愛歌の手には長い鎖が握られていて、それを引っ張ると水晶の中から人影がフラフラしながら鎖に引っ張られるように歩いてきた。その人影は長い黒髪に赤色の瞳をした愛歌よりも幼い外見の女の子だ。彼女は鎖が取り付けられた首輪をされ、後ろに向かうにつれ裾が地面まで長くなっていく黒いキャミソールドレスのような服を着ていた。紐だけで服を支えていて、脇や胸の一部しか隠されていないので谷間もしっかりと見える。

「おい、まさか美遊か？」

それも劇場版の士郎にイリヤの世界へと送られた時の服装だ。

「この子の事、好きでしょ？ だから呼び出したの。ユーリばかり、石を使うのはずるいでしょ？」

「それならアーサーを呼び出したらよかっただろう」

「できたらそうしたわ。でも、何故か、何故か、アーサーを召喚するとまるで彼が逃げるかのように私の手からすり抜けていくの。誰かに干渉されているみたいに。本当に許せないわ」

「いつ、痛いっ！」

愛歌に撫でられていた頭を握りしめられ、痛みを伝える。いや、なんで痛みがある？ 消したはずだ。

「ようやく気付いたの？　ここはマスターの中にあるマスターだけの世界。そこに私が介入してこの空間を作り上げているの。アストルフオ達の空間も存在しているわ」

「つまり、ここでは俺の考えた事が現実になったりするのかな？」

「私の空間でもあるから、私の許可がいるけれどそうよ。ちなみに痛みとかを戻したのは私。その方が言う事を聞いてくれるでしょうから」

つまり、痛覚を戻されて拷問される可能性もあるという事だろう。これはかなりピンチだ。いや、考えようによつては手足を元に戻せるのかもしれない。試してみると手足が戻った。

「さて、話を戻すけれど……アーサーを召喚しようとおの手この手でやったの。でも、アーサーの一部を掴んで召喚する事はできたのだけれど、石をユーリと取り合つた事もあつてどうしても完全なアーサーの召喚はできなかったの」

そりゃ、アーサー・ペンドラゴン（プロトタイプ）も逃げ出すわ。いや、一部を掴んで？　嫌な予感しかないんだが……

「そこで私はもう一つの手段を思いついたの。願いを叶える聖杯なら、アーサーを召喚できるんじゃないかって！」

「な、なるほど……それで美遊を召喚したと？」

彼女、美遊・エーデルフェルト、本名朔月さかつき美遊みゆう。並行世界の冬木で生まれた神稚児かみちごと呼ばれ、人の願いを無差別に叶える力の持ち主で、完成された聖杯と言える存在だ。

本来は力を失う数え年で7歳になるまで結界の中で過ごすのだが、力を失う1ヶ月前に冬木でおきた第4次聖杯戦争で発生した闇で結界が消失。

闇を消滅させたことで切嗣に目をつけられ、衛宮家に引き取られる。その後10歳になるまで屋敷から出ずに暮らすのが、屋敷から出たことでジュリアンに見つかり、さらわれて聖杯戦争の新たな器とされた。

その後、第五次聖杯戦争の勝者となった士郎の願いによつてイリヤたちの世界にやってきた。生まれた時は赤い瞳をしていたが、士郎と

本当の兄妹になりたいと願った結果、士郎と同じ琥珀色の瞳になり、表情も豊かになった。つまり、彼女は自然に発生した願いを叶える願望機だったが、年齢によってその力を失うはずだった。それが10歳の時に人工的に聖杯として改造される事で力を取り戻しているという事だろう。だが、それにしても瞳が赤い。どういう事だろうか？

「違うわ。私が召喚したのは美遊ではなく、聖杯よ」
「ん？」

不思議に思うとその辺りに金色の杯だったであろうものが錆びて転がっているのが見えた。それも沢山の数が。確かにFGOでは大量生産されているが、聖杯のシャンパンタワー作るほど召喚してるんじゃないわええ！　というか、愛歌にとつてあくまで美遊は道具のようだ。それもそうか。アーサーの代わりつて事で数十人、数百人の少女を生贄にするような子だから、美遊を道具扱いしてもおかしくない。

「聖杯を使ったのだけれど、駄目だったのよ。不完全だったから仕方がないのかもしれないわ。だから、考えたのよ。聖杯を重ねて強化してしまえばいいって」

「魔改造したと」

「それでも駄目だった。どうやら、私の手では完全なアーサーを召喚できないみたいなの。だから、マスターに召喚してもらうしかないのはやっぱり変わらなかったわ。そこでマスターに聖杯を与えてアーサーを召喚してもらおう事にしたの。良い考えでしょう？」

「ソウダナ。トツテモイイカンガエダ」

「それにユーリがマスターに色々とプレゼントをあげてるじゃない。私も対抗してあげないと、アーサーを召喚してもらうのが遠のくでしょう？　だから、この塵屑を再利用する事にしたの。基準となる聖杯は有象無象の願いをなんでも叶えられると私が困るから、制御装置をつけることにしたわ。そこでマスターの好みに合うかどうかというのがあったから、都合がいいように転移させられた時まで成長させたのよ。後は様々な世界にある聖杯を彼女に融合させて完成」

つまり、この美遊は数多ある聖杯の融合体で、本当に人間ではなく人型をした聖杯に作り変えられたのだろう。だから、瞳も赤色に戻っ

ている。幼いままにできなかったのは愛歌にとって都合が悪いから。あのままだとユーリの願いまで叶える可能性があるから、自分に都合のいいように脅したりできる年齢まで成長させたのだと思う。なにせ作った愛歌にとつて彼女を分解して消去する事など容易いし、俺を経由しているだろうが召喚をしたのは愛歌なので解除だつて可能かもしれない。

「それにマスターだつて、エイヴィヒカイト永劫破壊で何時までもルサルカの聖遺物を使う訳にはいかないでしょう?」

「それはまあ、そうだな」

身体が元に戻つたら、何時までもルサルカの聖遺物に頼っている訳にはいかない。俺自身で使える聖遺物が欲しい。

「その点、聖杯なら聖遺物として使えるでしょう?」
「まあな」

聖遺物と考えると聖杯はかなりいい。Fateの物だけで考えるにしても、まず万能の願望機だ。魔力がある分だけ願いがかなえられる。それはつまり、ガチャができるというものだからだ。俺にとつては最高の物であり、ましてや美遊がついてくるのだ。

「ほら、貴女からもお願いしなさい」

「はい……」

愛歌に身体を起こされ、見えやすい状態にされると、美遊は俺の前で地面に座り、頭を下げて震えながら懇願してくる。

「お願いします。私はご主人様の物になってなんでもします。その代わりに住む場所をください。食べ物もください。服をください……私に……居場所をください……」

美遊の言葉は劇場版の物とほぼ変わらない。カード回収が俺の物になるというのにな変わっているだけだ。確か、あの時は全てを失った美遊が再び様々な物を手に入れるために臨んだことだったはず。

「愛歌、何をしたんだ?」

「私は話しただけよ。そうよね?」

「はい……私は私の目的の為に必要な事をしているだけです」

「そうか。わかった。願いはそれだけか?」

「……贅沢を言うなら、幸せにして欲しいです……それがお兄ちゃんの願いですから……」

「それだけか？」

「……私は、どうなってもいいです……だから、お兄ちゃんを助けて、ください……」

おそらく、これが美遊本人が願った本当の願いだろう。愛歌は衛宮士郎の救済を交換条件に差し出し、守らなければどうするか、とかを吹き込んだ可能性もある。

「わかった。全部叶えてやる。だから、俺と契約してくれ」

「本当にいいんですか？」

「ああ。助けると言っても召喚を狙うぐらいだ。歪な形になるかもしれないが、こちらの世界でなら一緒に過ごせるだろう」

「……あ、ありがとうございます……」

顔を上げた美遊が俺の方に向かってきて口付けをしてくる。何時もしている通り、舌を絡めて唾液を交換し、魔力を互いの身体に巡回させて契約を行う。聖杯としての力にこの杯へ注がれた飲み物を飲み干すと、立ちどころに傷や病を癒し、長き命と若さを授ける力も含まれているようだ。

「こ、これで契約は終わり、ました。よろし、お願いします、ご主人様……」

「ああ。それとご主人様はいい。お兄ちゃんと……いや、それはいいな。他の呼び方がいいか」

「ご主人様がいいです。別の私は、メイド？　というものをしていたみたいですから……」

「わかった」

お兄ちゃん呼びは顔を赤らめていた美遊の表情が変化したのを見て即座に諦めた。士郎みたいに呼ばれてみたかったが、当然のように駄目だった。というか、この事実をユージ達が知ったら、怒られそう。まだご主人様呼びの方がいいか。これも色々やばそうだが、美遊がそれがいいと言っているので仕方がない。

「つと、首輪を外さないとな」

「あ、ありがとうございます」

「そのまま繋いでいた方が逃げないし取られないわよ?」

「俺は美遊を道具として扱うつもりはないからな」

「そうなのね。まあ、私にとつては関係ないから好きにしたらいいわ」
美遊の首輪を外すと、彼女はホッとした表情で首を撫でる。美遊を見ていると、この恰好はかなりまずい。服をくださいとも言っていたので、ドライの最終回に着ていた紺色の布地に紫陽花などの花が描かれた着物をイメージするとしっかりと美遊の服が変わった。

「もしかして……」

次に髪を降ろした状態の朔月美遊さかつきみゆをイメージすると七歳ぐらいの姿へと変わり、着物も赤色に変化した。

「あ、あの、お好きな姿でいるので、言ってください」

「じゃあ、全部が良いから時と場合によって変化してくれ」

「は、はい」

ユーリと一緒に居る時とかは朔月さかつき 美遊みゆの姿でいいだろう。ユーリもそれぐらい小さいしな。

「私からのプレゼントは気に入ってくれたようね」

「ああ。勝手に石を使った事は怒りたいが、美遊が召喚できたと考えれば文句はないし、むしろ大喜びだ」

髪の毛を降ろしたままの美遊を引き寄せて撫でると、美遊はビクツとした後で受け入れて身体から力を抜いてきた。

「そう。それでもう一つのプレゼントなのだけれど……」

「なんだ?」

一つ目が美遊だから、とても期待が持てる。なんだろうか? もしかしてアビーか? それともメルトリリスか? いやいや、もしかしてカーマ? カーマはやばいか。アサシンならまだいいけどな!

「それはこれよ」

愛歌の指が開けた俺の胸元を撫でる。その位置は心臓だった。無茶苦茶嫌な予感がする。

「最後のプレゼントは竜の因子よ」

「止めろおおっ!」

「い・や・よ。というか、もう手遅れね」

いい笑顔で告げてくる愛歌と叫ぶ俺に美遊はビクツと震えて恐る恐る俺達を見てくるが、構っている暇はない。なにせ竜の因子というのは、魔術回路を用いずただ生きているだけで魔力を生成でき、魔力放出のスキルまで得られるので魔術師にとつては最高の物だ。だが、これがアーサー・ペンドラゴンを好いている愛歌が与えてきたとなると話は変わってくる。

「アーサーにするための準備じゃないか！」

そう、魔術師マーリンがアーサー・ペンドラゴンの出生時に人の身ながら竜の因子を持って生まれてくるように調整したのだ。

「ふふ、保険はしつかりとしておかないといけないわ。貴方が私の王子様になるか、それとも私の王子様を召喚するか、はたまた別に用意するか、とても楽しみにしているわ」

「最悪だ！」

クスクスと笑う愛歌とオロオロしている美遊。とんでもない爆弾を仕掛けられた感じだが、愛歌の言う通り、まだ手はある。あるはずだ。頑張つて召喚して引き取ってもらう。その為に美遊の力を借りよう！ 絶対に逃がさないぞ、アーサー・ペンドラゴン！

「あら、そろそろ起きる時間のようね」

「あの、いつてらっしやい……早く、迎えに来てください」

「ああ、わかっている」

美遊にとつてはここから早く出たいだろう。何せ、俺が形成できるまでは怖い愛歌と一緒に居ないといけないのだから。



——ブレインコンピュータ起動シークエンスを終了。

——起動システムチェック開始。

——エグザミア・システム正常稼働。

——リンカー・コア正常稼働。
——神結晶とのリンク……正常稼働。
——プログラムに無い物を確認。
——スキャン開始。
——未確認の因子を発見。解析開始。
——解析完了。適合係数40%。ナハト・ヴァールによる浸食と融合を開始。
——完了。問題なし。
——未確認の存在を確認。攻勢防壁を展開。
——防壁を最大展開。防御成功率20%。
——システムに致命的なERRORを確認。排除できず。

——ERRORの修正を完了しました。
——朔月システム正常に稼働しています。
——システムチェック完了しました。
——全てオールグリーンです。
——覚醒を開始しますか？

◇

真つ暗な視界に菱形の青い物体が現れ、そこに乗った朔月美遊の姿が視界に映る。小さな彼女が吹き出しと音声で伝えてくれたので、覚醒を頼む。

すると瞼が開き、眩い光と共に無数の水泡が見えてくる。周りを確認すると、どうやら培養槽の中で両手で足を抱きながら浮かんでいるみたいだ。周りには長い金色の綺麗な髪の毛が揺れている。

外に目を向けると、白衣を着たユーリが涙目で目を擦りながら、首に取り付けたコードを揺らしながら必死にタイピングをしている。その近くに居るディアーチェやシュテル達もかなり必死だ。

『クラッキングを受けています。どうしますか、ご主人様？』

『それってユーリ達だろう。起こしてくれば説明するから問題ないさ』

『わかりました』

「というか、普通にユーリ達のシステムを乗っ取ってきたな。流石は聖杯……聖杯？ ああ、アレも聖杯だな。朔月システムとは言い得て妙だ。朔月、月、ムーン。星三の概念礼装だし、そりゃあるわ。」

『あの、早くお願いします。このままだと負けちゃいます』

流石にユーリ達が本気を出したら勝てないか。次元世界の技術力は半端じゃないからな。願望機としての力を使えば勝てるだろうが、それでユーリ達に被害がでたら困る。

というわけで、起きる。培養槽から神水を抜いていく。それから縦から横に移動して蓋を開ける。するとユーリ達の顔が視界に移り、すぐに近くに迫ってきた。

「お兄ちゃんっ！ 大丈夫ですか！ お兄ちゃん！」

「だ、大丈夫だから……」

ユーリが抱き着いてきて無茶苦茶泣いているが、仕方ない。ユーリ達からしたら、いきなり美遊知らない誰かにシステムを乗っ取られたのだ。

「うむ。問題ないようだ」

「本当に良かったです」

「ああ、二人もありがとう」

「ちゃんと見えているか？」

「大丈夫だ。可愛くて綺麗な二人の顔もしっかりと見えている」

「馬鹿者が！」

「ありがとうございます」

ディアーチエは怒りながらそっぽを向き、シユテルは嬉しそうしながらも俺の瞳を覗いてきて、しっかりと見えているか確認している。

「ユーリ、皆。ただいま」

「おかえりなさい」

「うむ」

「皆さんに連絡してきますので、着替えておいてください。ユーリ、

「ディアーチエ。頼みました」

「ああ、任せろ」

「はい……着替えましょう！」

「頼む」

二人に補助してもらいながら、着替えていく。リハビリは必要なようだ。それと着替えながら愛歌と美遊の事も話すと、システムに修正を入れて美遊とユーリ達がコントロールできるようになる事になった。正直、互いに暴走するとかかなり危険なシステムを搭載しているのだから仕方がない。俺の内部で主導権争いをして爆発したら大変な事になるのは互いに理解しているから妥当な判断だろう。

「あの、すいません。ちゃんと男の人ですが、身体はほとんど私を成長したような姿です」

「まあ、構わないさ。元の容姿に拘りなんてないしな。DNAとかがちゃんとしていたらいい」

両親が居るし、流石にDNAまで変えるのはまずい。整形という事で、納得してもらえるレベル……ではないかもしれないが、まあ仕方がない。

「コレが今の真名を写した姿だ」

「どれどれ……」

ディアーチエが持って来てくれた鏡を見ると、ユーリと同じウェーブのかかったゆるふわな長い金色の髪の毛がゆらゆらと揺れている。目付きはユーリと違って鋭いし、身体も男性よりは多少なっている。まあ許容範囲だろう。アストルフオみたいとはいえないが、女の服装をすればユーリの姉として見えるだろう。

「どう、ですか？ 駄目なら、しばらく時間を置けば作り直せますが……」

「まさか、嫌というまいな？ ユーリと我等が努力した結晶だぞ」
「いや、いい。大変気に入った。ああ、これはいいな。とてもいい」

容姿もユーリが素体となっただけあって、かなりの美少年だ。それに大好きなユーリと似ているというのは嫌う要素にはならない。そして、身体の奥底から湧き上がってくる膨大な魔力。劣化とはいえ、

永遠結晶エグザミアを使った魔導炉とリンカーコア。それに竜の因子と魔術回路。元の俺が生成する魔力などとまさしく桁が違う。

数千倍、数万倍の魔力だ。そして、それら生み出される膨大な魔力は身体中の神結晶に蓄えられ、余剰の魔力によって神水が生み出される。その神水は血液と混ざって身体中を巡回して肉体の活性化と再生、魔力の回復を促す。それによりまた膨大な魔力が生成される。当然、エグザミアの力によって急速に魔導炉の魔力も回復していくので時間が経つごとに馬鹿みたいに増える。

それらの魔力を全て聖杯である美遊に注ぎ込み、蓄える。時間が経つほどガチャ石が溜まっていくという素晴らしい。本当に素晴らしいシステムだ。

「くつくく」

「怖いぞ」

「お、お兄ちゃん?」

怖いと言われて鏡を見てみると目を細め、楽しそうに笑っているように見ても悪役のような姿だった。これは誰かに似ているな。

「おい、沙条が起きたって……なんだその小さくなったラインハルトみたいなもの」

「ああ、なるほど」

ラインハルト・ハイドリヒ。獣殿に似ているのか。ユーリと違って目が鋭いし、男性の軍服を着て槍でも構えればいいか。

『美遊。軍服を用意できるか?』

『大丈夫です。でも幻術と同じですが……』

『かまわない。やってくれ』

『はい』

身体が光って病人着がナチスドイツの軍服へと変化していく。そして、クルリと振り返って両手を開く。

「どうだろうか、ハジメ」

何もしないとユーリみたいな可愛らしい声が出るので作って変える。同時に魔力も放出する事で威圧感を出す。

「ああ……似ていると思うぞ。息子みたいな感じだな」

「本人にはならないか。まあ、いい。私は全てを愛している。だから卿も愛そう」

「おい、止める気持ち悪い」

「ハジメを……まさか敵がここにも……」

「それってボクにもチャンスが！」

「冗談だからな」

部屋に飛び込んできたユエとアストルフオに聞かれ、速攻で真実を伝える。ホモではないのだ。ただ、遊んでいただけだ。

「え？　なんで、なんでハイドリヒ卿が……」

声が聞こえてそちらを見ると、入口でへたり込んで震えているルサルカの姿が見えた。ルサルカをじーと見詰めるとダラダラと汗を流して後ずさっている。そういえば、このルサルカは裏切ったルートがメインだったな。

「マレウス、よくも裏切ってくれたな……」

「ひいつ!?　ごめんなさい、ごめんなさい！」

「むう。お兄ちゃん、虐めたら駄目ですよ」

ユーリが抱き着いてきたので、抱きしめ返して撫でてやる。すぐに魔力放出を止めてユーリを可愛がる。他の人の反応をみるとやれやれといった感じだ。

「すまないルサルカ。遊びが過ぎた」

「……本物じゃない？」

「ああ、違う。真名だ」

「な、なんだ……あ、安心したら力が抜けて……あつ」

うむ。ルサルカが乙女としてやばい状況になってしまった。

「後で覚えてろよ〜！」

「ああ、覚えていよう」

「やっぱなし！　覚えてないで！」

脱兎のごとく霊体化して証拠を全て消したが、音は全員に聞かれている。ああ、これは本当に悪乗りが過ぎたな。

「遊びすぎだ。にしても凄い魔力だな」

「えっへん。私とディアーチエ達。それに愛歌が頑張った結果です」

「うむ。我等の技術と素材を全て注ぎ込んだからな」

「生半可な攻撃ではダメージを与えても回復されません」

「それは助かる。耐久力と魔力の二極化が俺にはベストだろう」

攻撃や防御に関する才能はないんだ。だったら、魔力で全てを押し切るしかない。そもそも召喚士なのだから召喚魔法で対処すればいいだけだ。それこそ獣殿のように軍勢を召喚するのもありだろう。今の魔力ならサーヴァントだって単体で維持できるし、アストルフオヤルサルカ、詩乃に戦わせて魔力を供給すればいい。男としては女だけに戦わせるのは問題だが、俺がやられた時点で敗北は決定なのだから仕方ない。相手が化け物クラスだと精々がデバイスで援護する程度だろうよ。

「鈴達にも会いたいが……」

「今来たようだぞ」

扉からシュテルとレヴィ、詩乃が二人を抱きしめながらやってきた。四人は俺を見ると嬉しそうにしながら近付いてくる。いや、シュテルと鈴は違うか。シュテルは嬉しそうだが、そこまで驚いてはいない。鈴は顔を真っ赤にして指と指を合わせていじいじとしている。

「鈴、恵里、詩乃、レヴィ」

「真名君……」

「無事に身体が戻って良かった」

「ああ。ありがとう。次は二人の番だ」

「それだけど数日は待ってからかな。やる事があるし、ユーリちゃん達の回復もあるから」

「そうなのか？」

「そうなの。ね、鈴」

「う、うん……やることがあるの。えっとね、真名君……」

「なんだ？」

顔を真っ赤にした鈴と視線を合わせるためにしゃがみ込む。すると、鈴が決意したように俺を瞳を合わせて見詰めてくる。

「あのね、あのね……鈴……真名君の事が……好き、なの……だから……」

「すまないが、俺はユーリが……」

「ユーリちゃんからは許可を貰ってるよ!」

「そうなのか?」

「はい。皆で幸せになるのはこれが一番ですから。それにお兄ちゃんがルサルカさんに私がいいなら受け入れるといったと聞きましたよ?」

「確かにその通りだ。わかった。鈴」

「ひゃい!」

鈴の肩に手を置いて彼女と至近距離から見詰めあつて答える。俺の答えなど決まっている。

「俺も鈴が好きだ。だから鈴の告白は嬉しい。だが、俺は独占欲が強い」

「う、うん……」

「一度鈴とそういう関係になったら絶対に手放さない。それでもいいなら、ずっと一緒に……いや、結婚してくれ」

正直、もう鈴の事は全てわかつている。もうすでに手放したくないし、俺以外の男が傍に居ると考えただけでも虫唾が走る。だが、ユーリが居たから俺には彼女を束縛する権利はない。しかし、ユーリと鈴自身が良いと認めてくれたのだし、我慢する必要はない。

「はうっ!」

「「プロポーズ!」」

「よ、よろしくお願い、します……」

真つ赤になつた鈴が受け入れてくれた事で、軽く誓いのキスをしようとするが、その前に抱き着かれて押し倒された。

「え?」

「そこで終わりです」

「うむ。これ以上は認められぬな」

「そうそう。真名の初めてはユーリのだからね!」

マテリアルズが俺を押し倒したのだ。ユーリを見ると、確かに頬を膨らませてそっぽを向いている。

「残念だったね、鈴」

「ううん。これで良かったんだよ。鈴はユーリちゃんの事も好きだし、一緒がいいしね！」

「とうわけだから、今晚までお預けだから」

「今晚か？」

「そうそう。豪華なディナーを食べたら八人と初夜だから」

「待て。聞いてないぞ」

「今いったからね」

恵里の言葉に驚いて聞き返すが、返事は変わらない。どういう事かとユーリ達を見渡すが、ニコニコと笑っているだけだ。ハジメの方を見ると、知らんといった感じでさっさと出て行った。ユエは楽しそうにこつちを見詰めている。

「あ、私は……別に……」

詩乃は乗り気ではないみたいだ。アストルフオの方をみると膨れていた。

「ボクも混ぜてよ」

「駄目」

「断固拒否する」

「男の子はだめだよ」

「残念でした」

「むう。仕方ないか。よし、レヴィ。マスター！ ボクと遊んで！」

「まあ、それぐらいならいいか」

身体の試運転には丁度いい。ユーリ達も止めないので三人で少し遊ぶ。ただ、普通にレヴィとアストルフオがやばかった。二人は俺の魔力とキャパシティー不足が解決されたせいとか、ステータスが軒並み上がっている。高速戦闘についていけない。もつとも、観測して美遊に頼んでデータを解析。行動パターンを予測して、罠に嵌めてどうか一度だけ勝利する事ができた。

夜。俺は楽園へと飛び立った。本番はユーリだけで、それ以外はルサルカの指導で全員で奉仕してくれた。これは詩乃も含んでいる。

彼女は渋々だったが、恵里とルサルカ達に引つ張ってこられた。まだ色々悩んでいるが、参加はしてくれるようだ。

ユーリと感覚共有を行ったのだが、これは本当やばかった。一体感や快楽が凄まじいのだ。全ての感覚でユーリを感じるし、ユーリも俺を感じる。房中術が何倍にも跳ね上がるようなものだ。

とりあえず、齒を食いしばって男としての威厳は見せた。ルサルカに注意されつつ、情けないが聖杯の力を使って耐えた。美遊は真っ赤になっていたが、まあ大丈夫だろう。

次の日は一日中、ユーリと二人でゆっくりと過ごし、その夜もユーリと愛を確かめ合ってから寝る。次の日は鈴と朝からオルクス大迷宮の地下をデートし、夜は鈴と愛し合う。次の日はディアーチエだ。こんな感じで一人ずつ、しっかりと抱いていく。

順番はユーリ、鈴、ディアーチエ、恵里、シユテル、ルサルカ、レヴィ、詩乃という感じだ。美遊の事は話してあるが、流石にまだ早い。それと詩乃は本番はなしでキスや身体のお触りぐらいな感じになっているので、彼女の時は次の順番の相手になるだろう。

問題があつたとすればラインハルト・ハイドリヒの真似をした時の事を怒っているルサルカに徹底的に駄目だしをくらい、修正させられた事ぐらいだ。

それと毎朝、ハジメに昨日はお楽しみでしたね。と言われるが、しっかりと言い返しておいた。ハジメはゲツソリとしているが、逆にユエはツヤツヤしているからだ。確実に食べられている。俺もたっぷり絞られているが、神水で回復できるのでどうにかなっている。ちゃんとハジメにも栄養ドリンクとして渡しているので大丈夫。

まだ皆が慣れていないから助かっているが、これが慣れてくるともつとやばいだろう。技術を学び、しっかりと弱点を攻めないといけない。そのために脳内保存した映像とグラフデータなどで分析した自らのデータを使って予習復習を行う。感覚共有のせいで俺のデータがそのまま感じる場所になるから丸わかりだ。ぶっちゃけ諸刃の剣だ。

第32話

身体が戻り、日常がかなり変化した。まず、一番はユーリ達との関係だ。毎日、全員と裸で抱き合うようにして特注で作ったらしい一つのベッドで眠っている。

詩乃とはまだだが、全員の初めてを貰い、ルサルカに色々注意はされているが関係は良好だ。がつつきすぎると止められたり、他の子が乱入して止めてくるので助かっている。

ただ、ローテーションのようだが、その順番に俺は口が出せない状態だ。まあ、こちらはいい。毎日気持ち良くはしてもらえているし、彼女達の感覚も分かるので、何をして欲しいかもだいたいわかる。

次に周りを気にしないで眠れる事、これは大きい。どれだけ惰眠を貪っても問題ないし、皆の身体が温かくてつい眠り過ぎてしまう。大概がレヴィ、鈴、恵里の四人と寝すぎる。そこでディアーチェやユーリ、シユテル、ルサルカが優しくキスとかで起こしてくれる。

目が覚めたら朝の挨拶としてキスをしてから共に風呂に入って汗を流す。当然のように遅くまで寝ていたレヴィや鈴達と一緒に彼女達の身体を隅々まで綺麗に洗う。鈴達はまだ身体が治っていないから仕方がないのもある。その時に行き過ぎてしまうことも多々あるが、仕方がない。

避妊に関してはルサルカの魔術でやっている。流石にユーリ達はそういう薬の知識とかはないので、ルサルカの魔術が頼りになる。いくらなんでも妊娠は早いからな。そもそもこの身体で子供ができるのかもわからない。

恵里やルサルカは欲しがっているが、ルサルカは問題ないだろうが恵里はもう少し待ってもらおうつもりだ。今、子供ができて養う自信がない。ここでなら生活に困らないが、こんな閉鎖環境で育てるわけにもいかないだろうし、二人の両親と挨拶を終わらせてからと思っている。

朝食をハジメ達と一緒に全員で食べたなら、昼間はお弁当を貰ってデートや遊びに行く。アストルフオと遊ばないと機嫌が悪くなって

拗ねてしまうのもある。夜は一緒に居れないので昼は必ず遊ぶようにしている。

さて、お昼からはデートが基本だが、今回はユーリとのデートだ。だが、少し違う。というのも、ユーリやシユテル達の体調が整い、施設の準備もできた。鈴と恵里の身体も問題ないので治療を始めるためだ。

「バイタルなどの問題はありますが、やはり色々と弱っていますね。感染症はありませんが、栄養の偏りなどがあります」

研究所で二人の前で白衣を着たユーリが俺と恵里、鈴に説明してくれる。近くではナース服を着たディアーチェとシユテルが色々と準備してくれているようだ。

「奈落で生活していたから仕方がないだろう。魔物肉モンスターミートを食べていたわけだしな」

「不味いよね〜」

「食べられるっただけだからね」

「お二人の身体は魔法の力、永劫破壊エイウエイヒカイトで丈夫になっています。ですから、食べれることができましたが、色々と蓄積してしまっています。

今回、手足を治療するついで調整しておきますね」

「鈴達も魔導炉とか搭載するの?」

「いえ、それはしません。鈴さんも恵里さんも女の子なので身体を改造すると子供ができなくなるかもしれない」

「それはやだな〜」

「うん。元の身体がいい。でも強さも欲しい」

「魔力はお兄ちゃんから貰えばいいですから、別の手段で強化します。竜の因子というものをお兄ちゃんの身体に愛歌さんが埋め込みました。ですから、それを二人の身体にも適応させます」

それがあれば魔術回路がなくても魔力の生成量は格段に上昇する。それに魔術回路もしっかりとつけるつもりらしい。ルサルカが二人は永劫破壊エイウエイヒカイトを覚えているから、魔術師か魔女になるらしく、このままいけば討伐対象にされる可能性も否定できないとの事。

「リンカーコアだったかな。それも欲しい。それがあればデバイスを

使えるんでしょ？」

「リンカーコアはあつた方がデバイスで扱う魔法の効果はあがりま
す。今は魔力をデバイスで扱えるように変換していますから、ロスが
少し発生していますから……」

「それなら、やつぱりお願いできる？」

「私のお兄ちゃんに移植しましたので再生するまで時間はかかりま
す。となると、シユテルとディアーチェ、レヴィのですね。彼女達は
予備の躯体が沢山ありますので可能です。ただ、訓練が大変ですよ。
竜の因子にしても、移植した腕などからゆつくりと馴染ませないと
けませんから」

「やってみせる。鈴はどうする？」

「鈴も真名君を守りたいから、力が欲しいよ」

「別に俺が守るが……」

「いいの。守られるだけの女にはなりたくないしね」

鈴と恵里の二人を胸に抱きしめて撫でる。嬉しそうにしている二
人を羨ましそうに見てくるユーリ。

「では腕の再生と調整をします。ブレインコンピュータは必要ですか
？」

「脳内にコンピュータを取り付けるんだっけ。鈴はちよつと怖いけど
……」

「私の世界でも実装しているのは一部だけです。危険ですし、デバ
イスがあれば事足りえますから。ただ、デバイスを取り上げられた時の
緊急手段になります」

「それって暗殺用でしょう」

「正解です。暗殺や産業スパイの目的で主に開発されました」

「僕は欲しい」

「鈴はいいや。怖いし……いや、やつぱりやるよ。メリットつて色々
とあるんだよね？」

「デバイスを持つ以外に演算能力が上がったりしますし、複数の対象
を選ぶ時には便利です」

「鈴なら生かせるだろう。神シエンシヨウジン獣鏡は複数の鏡を操るんだから、演算

能力が強さに直結するはずだ」

「うん……取り付けて」

「はい。では、服を脱いで培養槽の中に入ってください」

手伝いとして二人の服を脱がせて裸にする。それから抱え上げてキスをしてから、培養槽の中へと寝かせていく。手術などはナノマシンを体内に入れて行ったりするので、培養槽の中で完結できる。無菌状態にもできるから、色々と便利だ。

「お兄ちゃん、二人が眠るまでついてあげてくださいね」

「わかっている」

「お願いします」

ユーリもパタパタと移動して色々と準備を初めていく。俺は培養槽の中で眠りにつく二人を見守り続ける。二人が眠りについて少しすると、培養槽の中が神水で満たされて縦に移動し、二人が水中に浮いていく。酸素マスクはちゃんと取り付けられているし、表示されているバイタルに問題はない。

「よし、システムに問題はない。二人の細胞から培養中の腕や足は大丈夫か？」

「問題ありません。昨日、お二人がお兄様に注いでもらった物から採取した竜の因子も培養できています」

「魔術回路はどうですか？」

「サンプルが無いので、お兄様の物をナノマシンでコピーして与えておきます。元は沙条愛歌の物ですが、多少はお兄様の影響を受けるかもしれません」

「まあ、問題ないでしょう。それではシユテルとディアーチェ、後は頼みます。何か有れば連絡してください」

「任せてください」

「うむ。ユーリはもう一人の方を頼む」

「はい」

ユーリが走ってこっちにやってくる。彼女は大事そうにタブレットを持っている。このタブレットはシユテルが取り返してきてくれたものだ。画面や内部の物が壊れていたが、ユーリ達の技術で修復

し、データのサルベージがされた上に色々と魔改造されている。なのでそのままユーリにあげた。俺はスマホがあるしな。ちなみにエロいデータは全て消された。

ゲームや動画は一部残ってはいるが、嫁達がプレイして許可と不可を決めて、デリートさせられた。スマホの方は完全に消され、タブレットの方に移動されている。ゲームは教材や召喚するための触媒として残されている感じだ。後、暇つぶしのためにもなる。実際に何個かプレイしているしな。特に鈴は美少女ゲームを楽しんでいた。

「お兄ちゃん、抱っこしてください」

「ああ、いいぞ」

何時もはこんな風に甘えてこないが、二人きりだし、鈴と恵里に少し嫉妬したからだろう。だから、ユーリをお姫様抱っこし、持ち上げる。

「それで何処に行くのかな、お姫様」

「工房です。ハジメさんの腕と目を作ります」

「確か、オスカー・オルクスが残した工房をそのまま使っているんだっ
たか……」

「はい。改造はしていますけど……」

「そうだろうな」

ファンタジー世界のマジックアイテムでの加工もいいが、精密な物を作るには機械系がいい。ハジメなら思った物を作れるだろうが、設計図とかを作るにはパソコンの方が面倒じゃない。

そんな訳でユーリを抱っこしながら工房へ移動すると、椅子に座ったハジメの上にユエが座り、あついキスをしていた。

「お邪魔しました」

「はうっ」

「待て！ 助ける！ お前達のせいでユエが余計に積極的になつてんだ！」

「やれやれ……ユエ。ハジメとするのは後でしてくれ。まずはハジメの腕と目について話しをしたい。それからなら好きにしてくれていい」

「むう、仕方がない。アイツが来るまでにハジメをいっぱい独占して私だけの物にしないとイケないけれど……ハジメの身体の為なら我慢する」

「助かった……って、降りないのか」

「ん。このまま」

ユエはハジメと向き合った状態からこちらに向いて座り直しただけで、膝の上から移動するつもりはないようだ。なので、俺は反対側に座ってユーリを隣に降ろすと、ユーリはふふんと笑うユエを見て、少しむっとしてからいそいそと俺の膝の上へと移動してきた。

「なんだこれ」

「まあ、可愛いしいいじゃないか」

「これを許容できるのか、お前は……」

「俺は嫁達の全てを愛しているからな」

「それはもういい。それと嫁と付けた事に関しては認めてやる」

嫁とつけないければユエが五月蠅いからな。しかし、アストルフオをつけてもいいが、今度はアストルフオに掘られる可能性がでてくるのでつけない。親友としては好きだが、やはり男という事がネックだ。

しかし、幼女を膝の上に乗せながらの話し合いというのはかなり変な感じだ。まあ、俺の手はユーリが握ってお腹と頭に移動させてきたので、そのまま撫でてやる。するとユエも同じ事をしたが、ハジメはやらない。それによってユーリが微笑み、ユエの頬が膨れていく。

「ハジメ」

「お前ら、遊ぶのなら出ていけ。真面目な話をするぞ」

「ごめんなさい」

「ごめんなさいです」

「ユーリは謝らなくても追い出されないうがな」

「その場合、お前を追い出すだけだ」

「だよなく。だが、ユーリと二人つきりになんてできない」

「同感」

というわけで、大人しく膝の上に乗せるだけで話し合いを始める。まずはハジメの身体の事からだ。

「腕と目はどうするんだ?」

「腕は作ってみた。こいつを改造して欲しい」

そう言っただけ机の上に取り出したのは黒い義手だ。

「設計図をお願いします」

「これだ」

ユーリが設計図を確認していくが、俺には何がどうなっているかわからない。

「義手ならロケットパンチとかできるのか?」

「やるわけないだろ」

「だが、逃げる時には便利だぞ。スタングレネードでも搭載しておけばいい」

「確かにそれがあれば逃げるのは便利そうだが、ロケットパンチか」

「ついでにジョイント式にしておけば新しい腕を装着すれば使った後も問題ない」

「制御はどうするんだ?」

「デバイスでもブレインコンピュータでも可能です。片方の瞳を義眼にするのですから色々改造できますよ」

「それなら頼む」

ハジメからの要望を聞いてユーリがどんどん改造していく。ハジメも意見を出していくので、基本的に俺とユエは暇だ。だが、やる事もないので大人しく椅子になっている。

「次に武器だ。ドンナーを改造したい。他にもシユラーゲンとかを作ったが、デバイスに改造してもらいたい」

「銃とかですね」

なんていうか、ごちゃごちゃしているので一つに纏めたらいいし、ドンナーは今のハジメには合っていない。

「ハジメ、もつと銃を改造しようぜ」

「なに?」

「今のハジメならもつと化け物銃に改造した方がいいって。ジャツカ
ルとか」

「アレか」

「それに一つに纏めて形態変化できるようにするのもいいだろう」
「オルクスの指輪で持ち運びは可能だが、デバイスとして一つにまとめるのはいい。サブウエポンは必要だが……」

「このパイルバンカーは分けておいた方がいいですね。設置した時、敵に襲われたら駄目ですし……」

「なら、ドンナーを改造するか。アレって確か対化物戦闘用13mm拳銃だったか？」

「それだな。正確なスペックは……」

「全長39cm。重量16kg。装弾数6発。専用弾が13mm炸裂徹鋼弾。弾殻は純銀製のマケドニウム加工弾殻ですね。装薬はマーベルス化学薬筒NNA9？ 弾頭が水銀ですか……完全再現はできませんが、作れますよ」

「マジで！」

ユーリがタブレットで調べてくれたようで、本当に作れるようだ。

「じゃあ、それを二丁頼む」

「はい。それとアンチマテリアルライフルですね。どちらも電磁加速ですか？」

「頼む」

「実弾と魔力弾、両方でできるようにしておきます。アンチマテリアルライフルの方は収束砲が使える方がいいですよね？」

「できればいいが、流石に魔力が持たないだろう。ソイツみたいに馬鹿魔力じゃないからな」

「そこはユエと一緒に撃てばいいだろう」

「私？」

うつらうつらしていたユエに話をしていくと乗り気だった。スターライトブレイカーを撃つとかは止めて欲しいがな。

「まあ、デバイスは色々と用意するだろう？ 俺も槍が欲しいからな」
「わかりました。いっぱい作ります！」

「俺も身体が治ったら手伝う。色々教えてくれ」

「もちろん、俺も手伝うからな」

「皆で作りますよ」

「私もやる」

「ユエさんはハジメさんと一緒ですね。治療を見守ってもらわないといけないませんし」

「ん。任せて」

「やれやれ……で、瞳とかいいのを頼む」

「任せてください」

ハジメの瞳と腕の設計図を優先して作成していく。設計図ができたらハジメに部品を錬成してもらって、それからハジメが作った物と接合したり、組み込んだりと改造する。これが終わればハジメを培養槽に叩き込んでシユテルとディアーチエに任せる事になる。

「じゃあ、明日からハジメは培養槽だ。ユエとしばしの別れを堪能しておくといい」

「おい」

「ん。たっぷりしておく。ハジメ、今日は寝かさない」

「待て。マジで……」

ユーリを抱き上げて俺は俺達の工房へと移動する。まあ、研究所の方にあるユーリの工房だ。一応、ハジメ達はオルクスの屋敷を使い、俺達は研究所を使っている。庭を挟んで反対側に作ったが、食堂は同じにしてあるが、風呂はそれぞれの所に作っている。食堂は研究中して食べないためだ。ちなみに施設自体はどちらも使えるので、こちらにハジメが来る事も多い。

だが、こちらの技術は進み過ぎていてハジメでもわからない事が多いので、基本的に向こうの工房を使っている。もちろんハジメはディアーチエやシユテル達に教えてもらって勉強する予定だ。デバイスマイスターになるつもりらしいが、流星にすぐにはなれないだろう。

研究所でユーリが使っている部屋に移動し、ハジメが作った試作の腕やパーツを作業台に乗せてから作業スペースから出る。

「じゃあ、ユーリ。俺はどうすればいい?」

「お兄ちゃんはこの部屋に居てくれたらいいです」

「なら、デバイスの勉強でもしているか」

「それならテキストを転送しますね」

ユーリが椅子に座り、無数のデータファイルを送ってきてくれる。それをダウンロードして、インストールする。ブレインコンピュータの内部に膨大な資料が展開されたので、初心者用の美遊と一緒に読んでいく。

ユーリの方を見ると、座ったままで無数のスクリーンを展開して思考で操作していつている。それによってガラスの先にある作業スペースでは沢山のアームが動いて腕が改造されていく。

別の作業台でも同じようにアームが動いてドンナーから丸い球体を取り除かれ、新しい物にデータが移し替えられていく。無数のプログラムがユーリによって作られていき、デバイスのコアへと注ぎ込まれる。コアを取り除かれたドンナーも部品に分解され、新たに新しい形へと錬成されていく。ユーリ達はハジメを蒐集したから、錬成も普通にできてしまう。そのせいか、作業効率が凄まじい。

「材料が足りませんね……」

「取ってこようか？」

「大丈夫です。チビット達に持ってこさせますから」

確かにすぐに扉が開いて沢山のチビット達が空を飛びながらワゴンを押してやってきた。彼女達のワゴンには様々な鉱石が置かれている。それを錬成陣に乗せて錬成し、新たなパーツへと変えていく。よく見れば部屋にはぬいぐるみだと思ったのが、ほとんどチビット達だった。

やる事がないので、飲み物とお菓子を用意して大人しく勉強する。それに詩乃の事もあるから、やっぱり銃を用意する。弓もいいが、ハジメが銃を使いたすと詩乃のトラウマを刺激する。しかし、ハジメに止めろとは言えない。なので克服してもらおう。

「ユーリ」

「なんですか？」

「ちよつと俺もデバイスを作りたいから、ユーリに協力して欲しい」「構いませんよ。もう自動で終わらせるところまでは行きましたから」

マジかよ。数十分ぐらいでデバイスのコア一つを作るとか、ヤバすぎる。

「本当にいいのか？」

「ストレージデバイスって簡単なんですよ。インテリジェンスやユニゾンとは違いますから」

「なるほど……それなら俺でもできるか？」

「任せてください！　しっかりと教えます！　だから、また膝に乗せてください……」

可愛らしく言ってくれるユーリにキスをしてから、抱き上げてユーリを膝の上に乗せる。その状態でユーリにデバイスの作り方を教えてもらいながら作っていく。美遊には資料を検索してもらおう。

ユーリの感触を楽しみつつ、二人のサポートのお陰でどうにか一つのデバイスを組み上げた。その間にユーリは遠隔操作で複数のデバイスを組み上げてしまった。

「それはもしかして……」

台の上に置かれたのは赤い球体と青い三角形のデバイス。それぞれ待機形態だが、それがなんなのかはわかる。

「ルシフェリオンとバルニフィカスです。シユテルとレヴィのデバイスですね」

「そんなにすぐできるのか？」

「施設と素材さえあれば、後は私の中にあるデータをコピーしてペーストして、プログラムを確認してこちらの世界と今のシユテルやレヴィと合わせるだけですから、簡単ですよ」

絶対に簡単な作業じゃない。どれだけ膨大なデータを確認して弄らないといけないか……未恐ろしい。

「劇場版の装備はできませんが、ゲームの装備は作れました。デイアーチエは紫天の書を使いますし、私のスピリットフレアは後回しにします。それでお兄ちゃんの槍はどんなのにしましょうか？」

「俺の槍は……やっぱり後でいい。今はユーリのデバイスを優先してくれ」

「わかりました」

「どれぐらいでできるんだ？」

「ん〜三日くらいですね」

「十分に速いな」

「加工を錬成でできますし、生成魔法も使えますから。本当にずるい技術です！」

ふんぷんと怒っているが、ハジメ達からするとユーリの方がずるいと思う。というか、生成魔法ってなんだ？

「生成魔法ってなんなんだ？」

「あ、そういえばお兄ちゃんは知りませんでしたね。案内しますね！」
「重要な事なら頼む」

「覚えられるかはお兄ちゃん次第ですが、きっと大丈夫です」

ユーリに手を引かれてハジメが住んでいる館の方へと移動する。そこである一室に入り、魔法陣の上に乗るとオスカー・オルクスの情報が入り込んできた。

『早送りしますか？』

『できるのか？』

『できます』

『じゃあ、スキップで』

美遊に飛ばしてもらおう。内容なんてハジメやユーリから軽くは聞いているからな。肝心の生成魔法だが……

『て、適正がありませんでした。私は適正がありましたか……』

なんで美遊には適正があつて俺には適正がないんだ！ 美遊は完璧超人だから納得できるな！

「あの、お兄ちゃん……？」

「駄目だった……」

「だ、大丈夫です！ 元気だしてください！」

「身体が変わっても駄目なんだ……」

「あの、本当にお兄ちゃんが魔法を使えなくても大丈夫です」

「だが……」

「そ、その、私達が居るじゃないですか……」

「え？」

「だから、私達がずっと一緒に居るんですから、お兄ちゃんは覚える必要なんてありません！」

「ユーリ！」

「きやつ!？」

思わずユーリを抱きしめてしまったが、仕方がない。

「確かにユーリ達が傍に居るんだから、俺には必要ないな」

「作って欲しい物があつたら言つてください。なんでも作りますから」

「じゃあ、デバイス以外にもユーリ達の服や移動の事を考えて TENT …… キャンピングカーとか、携帯できる家を作らないといけないな。旅先で野宿とか女の子にさせられない」

ただ、やつぱり生成魔法は欲しかったな。これがあればユーリ達に送る婚約指輪や結婚指輪を自分で作れる。こうなつたらハジメに手伝つてもらうか。

「お兄ちゃんのお家……一軒家がいいですね。お庭もつけて、広い庭をグラントツ研究所みたいにガーデンングして……」

「それもいいが、携帯する奴じゃないな」

「はっ!? そうでした。携帯を考えるならキャンピングカーがいいですね。内部空間を弄つたりすれば広さは確保できますが……いつそ次元の狭間に建物を作るか、ここに転送できる魔法陣を用意しておけば補給の問題などは解決できます」

「確かにその通りだが、危険かもしれない。エヒトに見られていたら厄介だぞ」

「残念です。転移魔法陣は緊急用ですね」

「ああ。ただ、早めに白崎達を迎えにいかないといけない」

「ですね。会うのが楽しみです」

まあ、会いたくない奴もいるが仕方がない。

「それよりもユーリ。色々と案内してくれ。やつぱり、この事を知りたい」

「任せてください。あ、でも……その……」

「なんだ？」

「肩車、して欲しいです」

「いいぞ。お安いご用だ」

「やりました」

ユーリを肩車してハジメ達が居ないのをいいことに色々な部屋を見ていく。まあ、流石にハジメ達の部屋には入らないが、使われていない部屋が結構ある。館な事もあって以外に楽しめた。隠し通路なんかもあったしな。

「花壇もあるんですよ！」

「今度一緒に世話をするか」

「はい！・どんな花を植えましょうか」

ユーリと話ながら、館を出て庭に移動すると猫たちの声が聞こえてきた。それで肩車しているユーリの顔をみると、頷いてくれた。なので、そのまま猫の音がする方へと進んでいくと、噴水の近くにベンチが設置されており、そこに目的の人物は猫に囲まれながら居た。

「シユテル」

「よお」

「おや、お二人共。よくお越しくださいました」

シユテルが読んでいた本を膝の上に置こうとして、そこに子猫が寝ている事に気付いて横に置こうとする。そこにも猫がいる。というか、シユテルの周りは猫だらけだ。それも普通の猫だけでなく、虎のようなものまで近くで寝ている。

「相変わらずですね」

「虎は見た事ないけどな。というか、この世界に猫はいるのか？」

「この猫達は私がデータを元に生み出しました。チビツト達と同じです。この公園では基本的に自由を許しているのですが、私の周りに集まってきます……本来は鈴達にアニマルセラピーの効果があると思っ作つたのですが……」

「その子達はシユテルのお友達ですからね。虎さんは知りませんでしたか……」

「虎は大きく、強くなりたいと願った子達です」
「なるほど」

どちらにせよ、この子達はグランツ研究所やその付近で住んでいた猫なのだろう。だからか、俺にもすぐに近寄ってきて身体を擦りつけてくる。なので、俺はユーリを降ろして猫達を撫でていく。

「お兄ちゃん、シユテルにアレを渡してあげてください」

「俺がか？」

「はい。お兄ちゃんからがいいです」

「わかった。シユテル」

「なんででしょうか？ 結婚指輪でしょうか？」

「それはもう少し待ってください。それより、今はこれだ」

シユテルの小さな手を握って持ち上げ、掌にルシフェリオンを乗せる。シユテルはそれを見ると涙をポロポロと流して、ギョツと手を握りしめて胸に抱いていく。

「ルシフェリオン……お帰りなさい。ずっと、待っていました」

機械音声が響き、シユテルは指で涙を拭ってからセットアップを行って濃い紫色の制服みたいな服装になる。シユテルのバリアジャケットは高町なのはの色違いだ。胸元には紫色の結晶があり、制服には赤色のラインが入っている。明るめのなのはの服とは違う。手には球体が入った三日月型の杖を持ち、まさに魔法少女リリカルなのに出てくるシユテル・ザ・ゲストラクターの姿になった。

「ユーリ、お兄様。ありがとうございます。相棒と再会できたのは望外の喜びです。ルシフェリオンもとても喜んでいます」

その言葉を表すかのように、シユテルの周りに炎が現れている。魔力が変換資質の炎によって変換されたのだろう。

「やっぱり、シユテルにはルシフェリオンがないとな」

「はい。この子は私の半身です。もう半分はお兄様とユーリ達ですが」

「シユテルがどこにも居ませんか？」

「それで構わないのです。私は王やユーリ達の幸せを一番に願っていますので」

「シユテルも幸せにならないと駄目ですからね」

「それは俺が頑張る事だな」

炎を気にせずシュテルを抱きしめると、彼女は赤くなりながらもすぐに炎を消してくれた。

「そう、ですね。ユーリ達と一緒に幸せにしてください」

「ああ。シュテル、愛してる。必ず幸せにするからな」

「はい♪」

「むう。私を忘れないでください！」

「ユーリを忘れるわけないだろ」

「私も愛してるって言って欲しいです……」

「もちろんだ」

「それなら、一緒に語りましょうか」

笑いながらシュテルが俺をベンチに座らせ、その上にユーリとそれぞれ開いた俺の太股の上に乗ってくる。シュテルとユーリは向かい合うように座り、そんな二人の背中に手を回して支える。二人は俺の胸に手を置きながら、頬や首にキスしたり身体を擦りつけてくる。すぐに猫達もやってきて、モフモフに包まれた。そんな状態だが、三人で色々と話していく。もっぱら、INNOCENTのイベントについての想い出とかだ。

「何をしておる、貴様等。もうとつくに食事の時間は過ぎておるぞ」

「「あ」」

気が付けば語らいが楽しくて何時の間にか夕食の時間になったようだ。そのタイミングで景色が一気に夜へと変わった。

「今日の食事当番はシュテルとユーリだったはずだが……」

「ご、ごめんなさい」

「ふむ。レヴィ達が待っていますね。今日は手早くBBQとしましょう」

「確かにそれならレヴィ達も文句は言うまいな」

「じゃあ、用意するか」

ユーリ達が鉱石を運んできて錬成するので、俺は食材を運んでくる。庭園で肉を斬って猫達にもあげながら、作ったコンロで肉を焼いて皆で食べていく。ここには俺が召喚した子達ばかりだが、しっかりと笑顔を浮かべて笑っている。こういう姿をみると、ここがオルクス

大迷宮の奈落の底だとは思えない。それに安心できる。後はここに
鈴達が居れば完璧だ。それにはもうしばらくの時間がかかるだろう。

第33話

朝。ユーリ、シュテル、レヴィ、詩乃、ルサルカとキスをしてから風呂と食事を取り、恵里と鈴、ハジメが培養槽で眠っている場所に移動し、三人が無事かどうかを確認する。

ディアーチエが寝ないで管理してくれているので、問題はなさそうだ。眠そうにしているディアーチエはシュテルと交代させ、風呂に連れて行って身体を綺麗に洗ってやった後、シュテルが作った食事を食べさせてから一緒にベッドに入る。

ディアーチエと少し話していると、彼女が眠っていくので、それをしつかりと確認してからベッドから出て、チビット達に世話を任せしておく。

正直、培養槽を管理運営し、緊急事態に対処できるのがユーリ、ディアーチエ、シュテルの三人だけだ。だが、ユーリはデバイスの作成などで忙しいし、ディアーチエとシュテルが開いている。全体的に手伝いのチビット達は居るが、オルクス大迷宮の管理運営も行わないといけないので、そちらにチビット達が割かれているのも痛い。

ちなみにオルクス大迷宮はディアーチエが管理し、シュテルは地上で分体を色々と活動させているのも忙しい理由だ。レヴィとアストルフオ、ルサルカはオルクス大迷宮の方へと探検に出かけて必要な鉱石や素材を回収してきている。俺の魔力が格段に上がったことで顕現して自由に行動できるのが大きい。それに殺した魔物の魂モンスターを回収し、俺が貰って石へと変える作業もあるので彼女達には期待している。

ルサルカは集めた魂が取られる事に文句を言うかと思ったたら、彼女は気にせずに渡してくれた。その時の言葉が「私、好きな人には尽くす女だから♪」と言っていたが、ご機嫌取りなのかは正直、わからない。

「さて、今日はどうするか……いや、決まっているな」

研究所から出て、召喚用のラインから目的の人物を探し出し、そち

らに移動する。彼女は林の中で一人、次々と弓を構えて矢を射る。放たれた矢は狙われた鳥を外し、そのまま落ちていく。

「はあく」

溜息が詩乃の口から出る。気を落としている感じが伝わってくる。彼女の耳と尻尾は垂れてしまっていて、可愛らしくもある。そんな詩乃は弓を消して頭を掻きむしる。

「詩乃」

「ふにやあつ!？」

後ろから声をかけると、ビクツとして飛び上がってしまう。そして、即座に逃げようとする彼女の腕を掴んで胸元に引き寄せ、抱きしめる。

「や、やめて……あ、朝からなんて……」

「逃げないなら、それでいい。話がしたいだけだ。それに俺は詩乃が欲しい。だから、逃がさない」

「うん……わかった……」

大人しく力を抜いた詩乃を抱き上げて、近くにある木の下へと移動し、木に背中を預けて座る。痛くないように詩乃は俺の足の上に座らせ、身体を支えてやる。

「それで、話って……その、本番をしろって催促に来たの……?」

「違う。まあ、俺としては詩乃ともしたいが、詩乃が嫌ならいいさ。今、一緒に寝ているのだから恵里とルサルカに連れてこられただけだろう?」

詩乃はまだ俺の妻になると決心はしていない。ただ、二人に連れられて参加だけはしている感じだ。詩乃にとって、現状が一番恐ろしいのは消される事だろう。このまま行けば俺の興味が薄れて、召喚キャパシティーとかの関係で解除される可能性だってある。ハジメやユエ、アストルフオは除くとして、詩乃以外の女が俺の嫁になったのだから、会話も合わなくなるし、疎遠になって孤立する可能性だってある。オルクス大迷宮の時は状況が状況だから、俺達の世話をする事で居場所を確保できたが、それももう終わりだ。

だから、詩乃には二つの選択肢が突き付けられている。このまま元

の世界に戻るか、それとも俺の女になるか。元の世界は消える可能性もあるが。

「……そう、だけど……別に嫌じゃないの……それは本当だから」「そうなのか？」

「嫌だったら絶対に参加しないわよ。その、真名には助けてもらったし、お世話もしていたから、その延長線で手とかでするのは許容できるから……耳や身体中を触られるのはちよつとアレだけど……」

詩乃のお身体は本番以外で楽しませてもらっている。これはルサルカ達が詩乃を快樂攻めしている事もある。

「それじゃあ、キリトの事か？」

「キリト……ああ、未来の私が好きだった人の事は……関係ないよ」「本当に？」

「うん。だって、会ったこともない人だし、映像だけ見てもね。芸能人と結婚したいとは思わないし。それよりもここで会って、触れ合って助けてくれた真名の方がいい。身体を失ってまで、私の事を守ってくれたから、大事にされてるって事はわかるもの」「それは良かった」

身体から力を抜いてもたれ掛かってくる詩乃の言葉は嬉しい。確かに彼女の言う通り、知らない相手より知っている相手の方がいいだろう。

「じゃあ、結婚の事か？」

「それもある。だって、他に七人……いや、候補が後一人居るんだっけ。八人居るから私の事をちゃんと見てくれるのか、他の子達と一緒にやっていけるのか、不安もあるの」

「まあ、それはあるだろうな。ただ、詩乃の事はちゃんと見るつもりだ。悪い所があれば言ってくれていい」

「女を作りすぎよ」

「すまない」

「まあ、鈴と恵里は仕方ないからいいけど、ルサルカの事はちよつと怖い。ユーリちゃん達は私の事もちゃんと見てくれて気にかけてくれる良い子だとわかる。でも、あの愛歌は……」

確かに詩乃からしたら愛歌に騙されて利用された感じか。俺の妻となると、これからも愛歌とは絶対に関わる事になる。それがネツクの一つか。

「愛歌の方はしつかりと対処する。いざとなれば詩乃達だけでも逃がす」

「それはそれで嫌なんだけど……」

「おいおい」

「それとお母さんやお祖母ちゃん達のことも気になるし、この世界にずっとは居られない」

「方法がないわけではない」

「本当?」

「ああ。アーサー・ペンドラゴンを召喚するよりも、詩乃の家族をこちらに召喚するぐらいなら、美遊の力を借りれば可能だろう。ただ、地上で生活する場所や、地球に帰ってからの方がいいと思う」

「そっか。確かにこっちに呼び出してしまえば、私の懸念は解消される。お母さんだつて、治せるかも」

「全力で治してやる。これは約束する。詩乃が俺の妻になってくれるのなら、俺のお義母さんでもあるしな」

おそらく、召喚しようと思えば今でもできるだろう。一般人の三人なんて制限に関わりもしない。だが、召喚した家族が安全に過ごせるかと言われれば話は別だ。ここなら問題ないかもしれないが、閉じ込める事になってしまう。それは駄目だ。

「ありがとう」

「それじゃあ……」

詩乃の頬を指で撫でながら引き寄せようとしたが、彼女の手には捕まえられて押さえられた。

「もう一つ、お願いを聞いてくれたら、貴方の妻でも愛人でもなつてあげる」

「なんだ?」

「トラウマを克服したいの。このままじゃ、足手纏いになる。それは私が嫌なの」

「だが、別に克服しなくても魔物を倒せるならそれでいいが……」

「駄目。話を聞いた。これから相手は魔物だけじゃなくて、人もなる。それにシユテルから聞いたけど、地上では獣人は皆、奴隷なんでしょう？ 私は、他の人に身体を好き勝手させて許容できるほど変態じゃない」

「俺が必ず守るぞ？」

「絶対に、とは言えないし、守られるだけの女は嫌なの。私も鈴達のように強く成長したい。だから、克服する。私達の大切な物を傷つけようとするなら撃ち殺す！」

一瞬、詩乃の顔がALOではなく、GGOのシノンに見えた。獰猛で獲物を狙う狩人の、生粋のスナイパーのような感じだ。しかし、詩乃にとっても、俺達が大切な存在になってくれているようで、何よりだ。

「私が欲しいなら、手伝って……その、ご、ごしゅ、じんさま……」

「おお、詩乃がデレた！」

「噛み千切るわよ！」

「何を!？」

顔を真っ赤にしていつてきた詩乃に思わず言ってしまったら、怒られた。そのままニヤリと笑って俺の股間に手を這わせながら、喉に甘噛みしてくる。

「へんじふあ？」

「オーケー、お姫様。可愛い嫁の願いは極力聞くんもりだ。それが良い事ならな」

「わたしのは？」

「良い事だ。じゃあ、銃から訓練しようか。こんな事もあるかと、作ってある」

「ず、随分と準備がいいのね……」

「詩乃がネックになっているのはそっちだと思ったからな」

懐からデバイスとして作った銃を取り出す。これは1933年に旧ソ連が開発した軍用のトカレフT-33を元にして作られた黒星ヘイシンだ。こいつは1951年に中国でソ連の技術協力の下で製造され、採

用されている。作中で実際に詩乃が使って殺した銃だ。

「あつ、ああ……っ!？」

詩乃が銃を見ると、口元を押さえて弾き飛ばした。彼女の身体はガタガタと震えていて、何度も謝り出して涙を流していく。本当に深い傷となっている。

「大丈夫だ。詩乃。怖い事はなにもない。詩乃がしたことは悪い事だけじゃない。人を守る良い事でもあるんだ」

抱きしめて彼女の頭を胸元に埋めながら、背中と頭を優しく撫でていく。

「詩乃が犯人を殺したお蔭で女の人と、そのお腹の中に居た赤ちゃんは無事だった」

「でも、私は……これから人を、殺そうと……」

「俺達を守るためだ。それなら悪い事ではないし、俺達の命を狙ってくる連中、敵に容赦する必要はない。詩乃は間違っていない。日本でも正当防衛などが認められている。それにデバイスなら、非殺傷設定だってできる。この銃だって撃つたとしても気絶する程度で死にはしない」

詩乃の説得を行う。実際に詩乃が殺した状況は仕方がない。あのような状況で母親を守るために勇気を振り絞った詩乃こそ、称えられるべきだと思う。

「こ、怖いから、い、一緒に……お願い……」

「ゆっくりとやっていこう」

「……うん……」

デバイスを回収して、まずは俺が握った後でその上から触っている。詩乃は何度も吐いて気絶したが、それでも諦めなかった。だから、俺も汚れるのを気にせずと一緒に訓練をしていく。夜になれば一緒に風呂に入り、気持ち悪そうにしている詩乃の世話を一緒に眠る。

皆に事情を話して、付きっきりで手伝うと伝えれば皆も納得してくれた。三日ほど経つと次第に気絶したり、吐いたりしないようになってきた。身体の震えはまだ残るが、ある程度は大丈夫になったよう

だ。ただ、黒星はまだ怖いようなので、それ以外の銃を用意する。

やはり、詩乃といえはシノンの愛銃であり、相棒のヘカートⅡだ。といっても、魔改造はするのでヘカートⅢとか、後継機になる。弓と銃、両方使うか、それとも銃だけかはわからないが、両方に変更できるようにしておく。サブウエポンとしてMP7のサブマシンガンとグロック18Pというマシンピストルを用意しておく。

「その、はじめては二人つきりがいい。だから、ね？」

「夜はアレだから、昼からだな」

「それでいい。可愛がつてね」

「もちろんだ」

普通にベッドに連れていって、前からとお尻を上げてもらった状態の後ろから堪能させてもらった。もちろん、尻尾も思いつきり触った。とても最高の感触だったが、詩乃がやばい表情になってしまい、後で正座させられて無茶苦茶怒られ、尻尾を触るのを禁止されそうになったが、土下座してまでなんとか許してもらった。それほどまでに詩乃の尻尾と耳に価値がある。

第34話

最悪。本当に最悪。檜山に騙された。お墓を作るといふのは本当に良い考えだったから、聞かれた事に答えたのに……本当に私の馬鹿。鈴や恵里、沙条や南雲が死んで怖くてわけわかんなくなっていたとはいえ、こんな事になるなんて……駄目だ。本当に駄目だ。せつかく沙条に助けてもらったのに、こんな恩を仇で返すなんて……

その上、香織と違って生きている事を信じられないし、オルクス大迷宮に行つて戦う勇氣もない。このままじゃいけない。だから、せめてお墓だけ作る事にした。もちろん、鈴や恵里、南雲のお墓は作れたけれど、沙条のお墓は作れなかった。正確には作つただけけれど、何時の間にか破壊されていた。

犯人はわからない。おそらく貴族の人か檜山かはわからない。南雲の方が壊された時には天之河も怒っていたけれど、沙条の事には怒っていなかった。意図的に無視しているような感じすらある。そんな天之河達を無視して何度も作り直した。けれど、その度に壊されて貴族の人やメイド、騎士や神官の人から止めるように言われた。彼等は裏切り者だと言うけれど、そんなはずはない。

愛ちゃん達は怒っていたけれど、犯人がわからないしどうしようもない。だから、張り込んで犯人を見つけて現行犯で捕まえた。犯人は貴族のようで色々と言ってくるけれど、愛ちゃんと一緒に抗議した。でも、次の日にはその貴族の人は解放されて、私を睨み付けた後、上から下まで私を舐めるように見ているやらしい笑みをしてから去っていった。

気持ち悪いけれど、我慢する。今度もお墓を作つたけれど、また壊された。犯人を捕まえても解放され、次第に別の所で犯人を見たという証人まで現れ、私が嘘をついている事にされた。

だから、もう意固地になる事を止めて小さな物を用意して部屋で供養する事にした。せめてこれぐらいはしないと気が済まない。

「あれ？」

中庭でナイフを投げる訓練をして汗を掻き、シャワーを浴びてから帰ると、檜山が一人で女子の使っている区画から出てくるのを見つけた。もしかして、誰かを襲ったのかと思ったけれど、その近くにメイド服を着た女性が居たので、問題ないのかもしれない。もしかしたら、あの人が捕まっていた人なのかもしれないけれど、親しそうに話しているから本当に無実なのかもしれない。例えそうでも、騙した件は許さないけれど。

あの監禁事件は結局、被害者も犯人も見付かっていない。ただ、証拠が見つかっていないから、檜山は許されたけれど、最低な奴だとわかっただけ。他の女子は檜山を無視したり、避けたりしている。天之河君を筆頭に男子の一部からも避けられている。そのせいかな、オドオドしたりもしていたし、パーティーからも外されて遠征についていていない。愛ちゃんが居れば怒るかもしれないけれど、愛ちゃんも遠征でいないしね。正直、いい気味だと思う。

そう思っていると、メイドさんと別れた檜山が廊下を歩いてこちらにやってきた。檜山は私を見つけるなり、ニヤリといやらしい笑みを浮かべる。それは今までの彼の態度じゃなかった。自信に満ち溢れていて、何も悪い事をしていないといったような態度で、カチンとくる。

「なあ、園部」

無視しようとしたけれど、檜山がグイグイと近付いてくる。だから、思わず下がっていく。それでも檜山が近付いてきて、壁に背中がついて下がれなくなった。

「な、なによ……」

檜山が片手を私の顔の横に突き出して壁を触る。思わず短剣に手が伸びて引き抜きそうになるけれど、その前に柄を押さえられた。殴るか悲鳴を上げるか、瞬時に考える。

「手を出すつもりはねえよ。ちよっと提案があるだけだ」

「なによ？ 沙条達を貶めるような事だったら許さないから」

とりあえず、聞くだけは聞こう。今度こそ騙されないように注意する。

「沙条達は関係ねえよ。お前の事だ」

「私？」

「そうだ。園部、お前……俺の女になれ。そうしたら口を聞いて助けてやる」

「はあ？ アンタ、馬鹿じゃないの？」

コイツ、何を言っているのよ。そんなのありえない。檜山の女になるぐらいなら、死んだ方がマシよ。だいたい私を騙しておいてふざけるんじゃないわよ！

「よく考えろ。お前が助かるチャンスなんだぞ。お前は——」

何かを言おうとしていたけれど、無視して膝で思いつき檜山の股間を叩き付ける。

「—————!!？」

檜山が声にならない悲鳴を上げるので両手で檜山の胸を押しだす。檜山は倒れて廊下をのたうち回る。私は気にせずそのまま廊下を走って部屋に向かう。

「こ、後悔する、ぞつ！ どうなっても、知らないからな！」

「するか」

全く、要らない無駄な時間だった。まあ、のたうち回る檜山を見て少しはスッキリしたけれどね。にしても、意味わかんない妄言を吐いて、どういうつもりなのか……

部屋に戻ると少し違和感を感じたけれど、檜山の事で疲れたから着替えずに部屋に鍵をかけてからそのままベッドに倒れ込む。疲れていたせいですぐに眠りについた。



「園部様、いらっしやいますか？」

「ん〜？」

ドンドンという扉を叩く音とニアさんの声が聞こえてきて目を覚

ます。身体を起こすけれど、まだ眠い。設置されている鏡を見ると、寝癖がついた髪の毛に乱れた服が見えた。

「確か、あのまま寝たんだけ……」

「園部様！」

「今開けるからちよつと待って！」

手早く髪の毛と服を直して扉を開けると、私達の世話をしてくれているニアさんが慌てた表情で部屋に入ってきた。

「ニアさん、どうしたの？」

「それは……」

「園部様。申し訳ございませんが、部屋を検めさせていただきます」

ニアさんが部屋に入ってきた後ろから、別のメイドさんや騎士の人達が入ってきた。一応、女性ばかりなので事を荒げる必要もないけれど、いい気分はしない。それに騎士の人達やメイドの人達の見る目が剣呑としている

「どうしたの？ 何か変だよ？」

「すいませんが、こちらに来てください」

「従ってください。大丈夫ですから……」

「わ、わかりました」

意味が分からないけれど、言われた通りに部屋から出る。不思議に思っていると、他の部屋から奈々や妙子達もでてくる。

「どうしたの？」

「わからないけれど、部屋を調べるって……」

「何かやらかしたの？」

「別におかしなことはやってないけど……」

少しすると、険しい顔をした騎士の人とメイドの人が部屋から出てきた。ニアさんは顔を真っ青にしている。

「園部様。こちらに見覚えはありますか？」

「えつと……」

見せられたのは何かの道具だった。もちろん、私に見覚えはないので、そう答える。

「ありません」

「そうですか。では、こちらは……」

「あ、それは位牌です」

部屋に置いておいた沙条達の位牌だ。これは見覚えがある。

「では、少しお話を聞きたいので場所を変えます」

「どうぞ」

「えっと、何処に行くの？」

「聞きたい事があるだけなので、何もなければすぐに終わります」

「わかりました」

別に何も変な事はしていないし、見た事もない物だし、大丈夫。奈々達にもそう伝えて移動する。私達が居た場所から馬車に乗って移動し、王宮の一室に連れていかれた。周りは騎士の人達に固められて少し怖いけれど、大丈夫。たぶん。

「どうぞ、おかけください」

「はい」

座ってから、ここ数日の行動を聞かれたので説明していく。次に次々と見せられた品物はやはり、見覚えがない。いや、あるのもあった。

「これ、確か宝物庫で見た奴ですね」

「ええ、そうです。それが園部様の部屋から見つかりました。宝物庫から貴女が盗んだ物ですね」

「待って！ 私はやってない！ そんなの知らない！」

慌てて否定するけれど、聞いてくれない。私の部屋から見付かったのはどれも宝物庫に収められた国宝で、中には破損している物が多数あるようだ。

「だから、私はやってないって言ってるでしょ！」

「ですが、物的証拠も出ています」

「それは誰かが置いていっただけで……」

「失礼します、園部様」

メイドの一人が私の腕を掴んで押さえつけてくる。

「離してー！」

すごい力で振りほどけない。メイドは私の服をあさり、何かを取り

出した。よく見ると、それは宝物庫で見た事がある豪華な指輪だった。

「これは決定的ですな」

「待って、そんなの知らない！」

「ですが、物的証拠ができました。貴女を窃盗犯として捕縛します」

「なっ!？」

「暴れるなっ!」

「んんっ!？」

何かの魔法を使われたのか、目の前が急に真っ暗になって身体から力が抜けていく。薄っすらと閉じていく視界で見たのは、笑っているメイドと騎士の人達の姿だった。



「っ!？」

痛みと水滴が頭に当たる感触で気が付く。急いで周りを確認すると、石で出来た牢屋に居るみたい。両手に枷を嵌められ、天井から伸びる鎖によつて吊るされ、つま先立ちでどうにか届くような距離だ。足には鉄球がついた足枷が嵌められて逃げられないようにされていた。

「おや、ようやく目覚めましたか」

声の方を向くと、見覚えのある貴族の男が椅子に座って居た。私が捕まえて引き渡した奴だ。他にも男性の騎士と私を掴んでいたメイドが居る。

「あ、アンタは……もしかして、今回の事はアンタが！」

「これはこれは使徒様。私は調査を命じられただけで、宝物庫の道具に関しては何もしていませんよ」

「どうだか……」

「まあ、どうでもいいことですね。それよりも、今は身体検査をしましょうか」

そう言つて立ち上がった奴は壁にかけてあつた鞭を取る。

「ちよつ、やめっ！」

「安心してください。鞭はまだ、使いませんよ」

そう言つて、私の胸元に手を入れて一気に服を破り捨てた。

「ひっ、いやああああっ！」

悲鳴をあげるなか、気にせず服が破られていき、下着姿を男達の前にさらされていく。手も足も拘束されていて、隠せなくて恥ずかしくて死にたくなる。

「これも盗まれた物ですね」

「おやおや。これは罪が確定ですね」

私の服からまた何かを取り出していく。

「こ、こんなことをしてタダですむと思つているの！ 他の人や教会の人が……」

「残念ですが、園部優花様。こちらをお読みください。恐れ多くも教皇様より頂いてまいりました」

メイドが広げた紙には書かれていたのは、教皇イシユタル・ランゴバルドの名の下、園部優花を下記の罪状を持つて神の使徒より除名し、正規の手続きの下、犯罪者とする事を承認すると書かれていた。「さて、本来我々は人間を奴隷や売り物にすることは禁じられています。ですが、犯罪者だけは別です。貴女はエヒト様を裏切りました。故に奴隷として販売します」

「ふざけんな！ アンタ達が私を気に食わないっただけでしょうが！」

「いやいや、そんなことはない。再三に渡る警告を無視したのは君だよ。魔族に与した裏切り者を肯定するような神の使徒など、あつてはならない」

「そんな事で……」

「抵抗は無意味です」

メイドの手には何時の間にか、赤色に変化した鉄の棒が握られていて、そこから煙が立っている。

「や、やめ、やめてっ！」

「異端者と奴隷の烙印を刻みます。生かされる事をエヒト様に感謝な
さん」

「ふぎけないで！ 勝手に召喚しておいて！」

「エヒト様に選ばれておきながら、そのいいよう。やはり異端者です
ね」

「ああ、やって問題ない」

「ひっ!? や、やめてっ、お願いだから！ っ、あ“あ“あ“あ“あ

“あ“あ“あ“あああっ！」

鉄の棒が胸の間とお尻に押し付けられ、肉が焼ける臭いと激痛が走り、悲鳴をあげる。余りの痛みで失禁して目の前が真っ暗になっ
ていく。



「おや、気を失いましたか。起こしましょう。奴隷に相応しいように
しっかりと教育しないといけませんからね」

「彼女の身体を楽しませてもらおうとしようか」

「それは駄目です」

「何故だ！ 話が違うぞ！」

「彼女はオークションで売られます。欲しければそちらで買っ
てください」

「どういうことだ？」

「不穏分子をあぶり出すのですよ。その為に園部優花を餌とするだけ
です」

「まさか、魔族の手の者が王都にいるのか？」

「わかりませんが、教会や王宮内部に怪しい人物が何人もいます」

「そいつらは？」

「当然、処分しました」

「了解した。そういうことなら、今は諦めるとしよう」

◇

私は地獄を味わっている。服を剥ぎ取られ、毎日拷問されて人としての尊厳を奪われ、犬のように食事や排泄をさせられる。少しでも気を損ねれば鞭で打たれ、気絶したら殴られたり、蹴られたり、酷い時には火で焼かれる。死にそうになれば回復魔法で治療される。

何度も何度も許しを乞うても許してもらえない。壊れる事も許されず、奴隷として教育されていく。ただひたすら助けを待つけれど、誰も助けてくれない。だから、痛みから逃れるために罪を認めて奴隷になる事を誓い、首輪をつけた。それがどういう事になるかも知らずに――

◇

銀髪のメイド姿を捉えたサーチャーは跡形もなく消され、園部優花の情報が完全に途絶えました。馬車で移動させられて王宮の中までは足取りは確認できましたが、それ以降は転移を使われたようで彼女の行方が知りませんでした。

ですから、王宮中にサーチャーを放つたのですが、それでもみつかりません。手を広げて王都を調べると園部優花と問題を起こした貴族の屋敷に彼女が捕らえられている事を発見しました。ですので、彼女の詳しい現状をサーチャーを通して得る事ができたのですが、メイドに消されたというわけですね。

仕方がないので数キロ離れた場所から望遠レンズを使つて監視し――

「見つけました」

「っ!？」

――転移反応を観測して振り向きながら杖を振るい、炎を放ちます。そこに現れたメイドが炎を突き破つて私の胸に手刀を叩き込んで心臓を握り潰しました。

「これは魔族……いえ、違いますね。ですが、人間でもありません。浸食ですか」

即座にメイドは腕を斬り落として離れました。私は自爆シークエンスを起動しながら彼女を見ると、腕は即座に再生していました。

「やはり、エヒト様が関与しないイレギュラーか魔族の手の者が存在しているようですね」

即座に駆け抜け、メイドに近付いて盛大に自爆します。ですが、その前に転移されてしまいました。ですが、情報は得られました。相手も人ではありません。少なくともナハトヴァールの浸食を受けて即座に腕を斬り落とし、再生させるなど普通の人ではありませんし、最初に放った炎は人間であれば容易く焼失する火力です。それを平然と突破してきたのでこれは確実です。



「お兄様、お楽しみのところ申し訳ございませんが、緊急の報告があります」

喘ぎ声の聞こえる寢室に入り、お兄様に報告します。今日はルサルカの当番で、昼間からしていたようです。まあ、昼しか二人でできないのですが。

「今、取り込みちゆうなんだけど〜」

「ルサルカ、緊急だと言っているんだ。後で相手するから、待ってくれ」

「もう。仕方がないわね……で、本当に緊急じゃなかったら、覚えてなさいよ」

「ええ、その時は私が相手をしてあげます」

「ふくん。どうやら、本当に厄介ごとのようね。なら、三人でお風呂に入りながら聞きましょうよ。その方が効率的でしょ?」

「それもそうだな」

「わかりました」

三人でお風呂に移動しながら報告していきます。報告内容は園部優花についてです。私の躯体が殺された事もしっかりと報告します。

「なるほど」

「ん〜それって緊急？ 正直、私達には関係ないでしょ」

「そういうわけにもいきません。彼女はお兄様を庇護したから捕まったのです」

「それはそうだけど、その園部優花つてのが馬鹿なのよ。一神教の狂信者共が居るところで、裏切り者……敵対者として認定されている人を庇うのなんて、始末してくださいって言ってるものよ。だいたい、これで見逃したら、示しがつかないし、信仰が揺らぐ場合もあるんだから、妥当な判断じゃない？」

「ですが……」

「それにシュテル。気づいているのでしようけど、アンタが本当に報告しないといけないのは失態でしょう」

「どういうことだ？」

「この子、やらかしてるのよ。さっさと園部優花を斬り捨てて、放置がベストの選択だった。だというのにまんまとメイド達が張った罠にかかってんのよ」

「うっ」

確かにその通りなのです。罠だとしても私は彼女を見捨てられませんでした。彼女はお兄様の事を大事に思ってくださいだったので。それに彼女の冤罪は私がやったことです。

ですから、私の力で助けられると思っただのですが、結果は逆に捕捉されて殺されました。

「ルサルカの言いたい事はわかるが、居なくなった時に報告しなかったのはどうしてだ？」

「お兄様の手を煩わせるわけにはいきませんでした。捕まえられている場所を確認してから、報告すべきだと思っただけです。今、私達は動かせない戦力がほとんどありません。お兄様のことですから、助けにいきますよね？」

「……行くな」

「はい。ですので、情報収集を優先しました」

「ん〜ハッキリと言って、私は助けに行くのは反対。というか、絶対に行かせない」

服を脱いで洗い場でお兄様の身体を二人で洗っています。

「どうしてだ？」

「メリットがないからよ。デメリットしかないじゃない」

「そうなのか？」

「はい。今、私達は鈴と恵里、それにハジメを治療中です。ですので、ディアーチエとユーリはここから動けません。私も本体は動かせませんので、端末を動かす程度が限界です。そのような中で園部優花を救出しようとすれば、メイドとの戦いは必須でしょう」

「空間魔法の使い手か。無理だな」

「無理でしょ。ユーリや愛歌が出るならどうとでもなるでしょうが、そこまでする価値はないわ。助けたとしても感謝されて終わり。そのくせ、敵に真名達を完全に捕捉される。使い捨ての躯体だったかしら、それを使ったところで取り返せない。安全に確保できる手段がない。だから、私は絶対行かせない。そんな真名の身内でもない奴を危険を犯してまで助けてなんになるってのよ」

ルサルカの言い分もわかります。デメリットがおおきすぎます。オスカー・オルクスの話から、エヒトは本物の神の使徒や、信者を動員してくるでしょう。そうなれば私達は彼等がたどったように大迷宮で隠れ潜むしかありません。もちろん、戦力が整うまでですが。

「ルサルカ、どうしても駄目か？」

「駄目ね。私は真名をロートスのように無くしたくないの。だから、絶対に止める。創造を使っても止めるから、そのつもりでいなさい」

「では、助けられないのですね……」

「そう落ち込むな。方法はあるだろう。探そう」

「はい」

「なんでそこまでするのかな〜。ねえ、その園部優花って子、好きなの

？」

「どうだろう？ 考えた事もないな」

「そう。じゃあ、彼女の身体、貪りたい？」

「貪りたいか、したくないかで言われたらしたいな。俺にとっては彼女も高嶺の花だったからな」

「むう」

「まあ、今はシュテルル達がいるから、思わないけどな」

「お兄様が私が嫉妬したのを気付いたのか、頭をくしゃくしゃと撫でてきます。ついでにシャンプーもされました。」

「流すぞ」

「はい」

身体を綺麗に洗ったら、湯に使って相談します。本当にどうにかして助ける事はできないでしょうか？ 私だけでなく、話を聞いたらユーリやレヴィ達も助ける事は賛成でしょう。王は心では助けたいと思われるでしょうが、表向きは反対されるかもしれせん。

「ねえ、真名。一つだけ条件を飲むのなら、その子を問題無く助けられる方法があるんだけど、どうする？」

「本当か？」

「それなら、助けて欲しいです。お兄様……」

「ああ。その条件はなんだ？」

「簡単な事よ。デメリットしかないなら、メリットを作るのよ。私、玩具が欲しいのよね♪」

ルサルカの提案は確かに私達にメリットがあり、デメリットは極限まで減らせます。ただし、園部優花本人の意思を無視していますし、彼女が奴隷だという事には変わりありません。少なくとも、ルサルカは解放を許さないでしょう。ですが、それでも待遇は変わります。酷い事はされませんし、させません。

「問題はありますが、やるか」

「よくし、楽しいデートね！ とっても楽しみよー！」

「気をつけて行ってきてください」

私は行けないので、護衛だけはしっかりとつけさせてもらいます。

アストルフオとレヴィは問題を起こすので、護衛は……ルサルカとユエしかいません。デートというのはあながち間違いでもありません。ユエを説得……できそうにないですね。やはり、ルサルカと二人っきりのデートとなるようです。ずるいです。でも、優花さんの冤罪は私のせいですし我慢します。

第35話

さて、シユテルから報告を聞いた俺は園部を助ける事にした。ルサルカは反対したが、彼女が提示した条件を飲めば認めてくれる。その条件は簡単に言ってしまうえば、園部を俺の女として身内にする事。奴隷のままに居させる事。ルサルカの玩具にする事。本心で言っているのか、そうでないのか微妙だ。それでも、手早く助けるために行動を起こす。

そんな訳で、ユーリから許可を貰ってオルクス大迷宮の最深部から俺達が入った迷宮部分に転移し、そこから堂々と冒険者のふりをして認識障害を引っつ地上に出る。

園部が売られる場所までは少しかかるが、地上では派手な行動はできないので基本的に馬車を使つての移動になる。その辺りはシユテルが用意してくれたので、問題ない。だが、身分証が必要なのでルサルカだけ冒険者登録をした。ルサルカだけにした理由は簡単だ。門を潜る時は憑依すれば俺がルサルカとなるので、身分証の問題を突破できる。俺は裏切り者として死んだ扱いを受けているから、ステータスプレートを表示するわけにもいかない。この辺りは偽装しないと駄目だな。

馬車での旅はルサルカが馬に魔術をかけて強化し、馬も何度も変えることで時間のかかる距離を素早く移動した。そうして、ようやく王都へと戻ってきた。なんにしても感慨深い物がある。

「さて、王都に戻ってきたが……時間は？」

楽しそうなルサルカと腕を組んで王都を歩いていく。沢山の店があり、人が溢れかえっている。

「まだ余裕ね。その前に資金調達しないと」

「シユテルからたんまりと貰っただろう」

シユテルからルシフエリオンを預かっている。俺では使いこなせないが、宝物庫代わりには使える。その中にシユテルが集めた物やオルクス大迷宮で得た金銀財宝が入れている。奴隷の相場を教えてもらった限りでは、問題無い金額だろう。

「真名……ううん、ダーリンは小さな女の子から貢いでもらったお金で、別の女を買うのかな？」

「あく駄目だな。できる限り、稼ぐか」

「そうそう。あ、おじさん。それ一つちよくだい」

「あいよ、お嬢ちゃん。彼氏とデートかい？」

「そうなの！」

「やけるねえ」

ルサルカが出店で細長い砂糖を塗したパンを買い、それを口に咥えて食べてから俺の方に突き出してくる。

「ん〜！」

「ご丁寧に口元に押し付けてくるので食べる。ルサルカの味覚や感覚が感覚共有のスキルを通して伝わってくるので、やって欲しい事も大概分かるし、反対側から食べてルサルカと軽くキスをする。すると、舌を出して俺の唇についた砂糖をペロリと舐め取っていく。周りからの視線が集まってくるが、気にしないようだ。

「ねえ、ダーリン。次、アレが食べたい。口移しで食べさせて」

「まあいいだろう」

言われる通りにして楽しませる。余り調子に乗ったら怒るが、この程度なら問題はない。園部を助けるために無茶させているのだしな。

「それでお金だが、どうしたら稼げるか……」

「ん〜手っ取り早いのは裏組織でも襲撃して奪う事だけどね。聖槍十三騎士団に居た時は結構やってたし」

「なるほど。だが、それは悪手だろう」

「そうね。今は騒ぎを起こさない方がいいし、ここは合法的に稼いじやいましょう。そのためにまずはシュテルが予約してくれた服屋さんに行くわよ」

「仰せのままに」

服屋に移動し、そこで注文していた正装に試着する。ルサルカは黒と赤を基調としたイブニングドレスだ。似合っていてとても可愛い。性格はアレだが、見てくれだけは本当にいい。

「あ、なんか失礼な事を考えているでしょ〜」

「ルサルカが綺麗で可愛いと思っただけだ。似合っているよ」

「そう、ありがとう。うん、嬉しい。じゃあ、これで」

「かしこまりました」

ドレスに着替えたルサルカと共に店を出て目的の場所へと馬車で移動する。そこは貴族街にある建物で、紹介状がないと入れない場所だ。俺達はシュテルが取り込んだとある貴族の親族という事で、遊びに来ている設定だ。

紹介状を見せ、家紋も確認されると通される。地下へと進み、大きな扉を開くとそこは煌びやかな空間が広がる金持ち達の遊び場だ。

「カジノか」

「ここがオークション会場でもあるの。運営者は連中ね。時間までの暇つぶしも兼ねて稼ぎましようよ」

「それもそうだな」

金貨数枚をチップに変えてルサルカと一緒に彼女をエスコートしながら回っていく。片手で大きなケースを持っているが、こちらは誰も触れさせないようにする。そんな状態で、まずはスロットからだ。スロットに座り、チップを入れて回していくが、ことごとく外れていくルサルカ。

「なんでよ!」

「日頃の行いだらう?」

「むう、こうなれば魔術で……」

「お客様。魔法の使用は禁止されています」

「うっ、わかってるわよ。やらなきゃいいんでしょ!」

「はい」

涙目になっているルサルカがボーイから注意される。まあ、ファンタジー世界なんだから、当然、魔法の対策はされている。

「ダーリン、仇を討って!」

「はいはい」

まずは軽くボタンを押してタイミングを見計らう。そして、タイミングよく押していくと絵柄が揃ってチップが出てくる。

「流石ダーリン!」

嬉しそうに抱きしめてくるルサルカが口元で囁いてくる。

「盛大に稼いで」

「了解」

何回か回してから次はスリーセブンを揃えてみる。方法は簡単だ。ルーレットの動きをブレインコンピュータで美遊と共に解析し、動きに合わせてボタンを押すだけの簡単な作業だ。この世界はファンタジー世界なので、魔法の対策はされていても、魔法のレベルに昇華された科学技術はわからない。優花を助ける金は連中から搾り取ろうという事だ。皮肉が聞いている上にルサルカも少し怒っているのかもしれない。境遇が似ているから、自分に重ねている部分もあるんだろうな。

『マクロの組み上げ、終わりました。後は自動でやってくれます』

『ありがとう。後で何か用意するよ』

『いえ、大丈夫です。でも、今度私と遊んでください。色々やってみたいです』

『わかった』

美遊の協力を得て、馬鹿みたいに稼いでいく。ルサルカは俺を応援しながら、チップを集めて箱に入れて台車に乗せていく。ボーイは唾然としていた。もちろん、ルサルカもスロットで遊んでいるが、こちらには少ししか使っていない。

「だくりん、チップなくなっちゃった。次、行きましょう?」

「そうだな。君、大きい物に交換してくれ」

「わ、わかりました」

ボーイから大きい額のチップを貰って、次の遊び場に移動する。

「ルサルカ、次は何したい?」

「流石にスリ過ぎたから、ポーカークナールサルカちゃんの強さを見せてあげるよ」

「楽しみだ」

ポーカーではルサルカはやばかった。相手のブラフを見抜いて値段を吊り上げ、逆に騙していったりと、どんどんチップが増えていく。相手の人が青ざめた顔で何人も交代していく。

「ねえねえ、貴方、恋人は居る？ あ、居るよね。あててあげようか」
相手を話術で惑わせ、誘導して陥れて勝利していく。まさに悪魔の
ような方法で稼いでいく。

「ダーリンもポーカーやる？」

「俺は無理そうだから、ルーレットの方へ行くかな」

「そ。じゃあ、私も止めようかな」

勝ち逃げに忌々しそうな表情をするが、気にせず移動する。次は
ルーレットで、こちらは俺が解析して入る場所を教えればどんどん増
えていく。順調だが、途中でルサルカが手を出して止めてきた。

「アレはズレるわ」

「そうなのか？」

「ええ。次にいきましよう」

賭けずにそのまま止める。確かに計算上ではほぼ確実に入る場所か
らずれた。どうやら、イカサマをしたようで、ディーラーが悔しそう
にしている。これだけ稼いでいたら、次第に目をつけられて最初から
イカサマありで仕掛けてくる。

「ま、こんなもんかな」

「両替するか」

「そうね。オークションの時間だし、そろそろいいでしょう」

チップを大量の金貨に交換して、移動していくが腑に落ちない事が
ある。

「襲われなかったな」

「あの中じゃ襲えないわよ。他の貴族様もいるし、外に出たわけでも
ないしね。帰りしなにでも強盗が来るんじゃないかしら？」

楽しそうに笑うルサルカの目当てがそれだと理解できた。拷問し
て殺す気なのだろう。まあ、問題はないし、好きにさせる。

「どんな玩具が売ってるかしらね」

「園部を玩具にするんだよね？」

「それは会ってみないとわからないわね。あの子って、境遇が似てい
るからどうなるか気になるの。私は助けてもらえなくて、カール・ク
ラフトに魔術を与えられた後はほったらかしでずっと苦勞して、苦勞

して生きてきた。でも、新しい家族やしつかりと教えて導いてくれる人が居たら、私の未来ってどうなったのかな？ そう考えると、とっても気になるの」

「園部に自分を投影して試してみる気か」

もしもの話を園部を通して追体験する。それが目的か？

「それもある。でも、もう一つは同じ境遇の子の人生を徹底的にぐちやぐちやにして狂わせ、幸せにしてやったら足を引っ張るだけの私も、少しは変われるのかなって思うの」

「それで奴隷で居させるのか？」

「やくねく。そんな理由で居させるわけないじゃない。口先と行動で誘導してみせるわよ。拷問されてとつても弱っているか弱いだだけの女の子。誘導するのなんて容易いわ」

「ならなんでだ？」

「それがその園部優花って子のためになるからね」

「どういうことだ？」

「はつきり言つて、園部優花を奴隷から解放したら殺されるか、奴隷に戻されるか、どちらにしても悲惨な目にしか会わないわ。なにせ異端認定され、奴隷にされたのよ。主人の庇護がないと生きてすらいけないの。宗教弾圧というのは人に大義名分を与え、罪の意識を排除して容易に凶行へと至らせる。言っておくけれど、実体験だからね。」

私達がずっと保護するとなると、オルクス大迷宮に閉じ込めるしかない。それもほぼ一人で。でも、ダーリンの、真名の奴隷としてなら連れていける。それに外じゃ詩乃だけが奴隷扱いを受けるけど、二人になれば随分と気が楽になるでしょう。まあ、こっちはついでね。そもそも私達がダーリンの奴隷みたいなものだしね」

「それは違うだろう」

「愛の奴隷って奴？」

ケラケラと笑うルサルカだが、ルサルカの言っている事は教会をぶっ潰すまで解放はないと言っているようなものだ。

「思ったよりも乗り気みたいだな」

「皆、甘いよ。何処かで線引きしないと際限ない甘さは付け入れられ

る際になるわ。誰かが警告し続けないといけないでしょう。事を起こす時のメリットとデメリットを伝え、その上で行動するのなら全力でデメリットを減らし、メリットを増やす。そうやって生きてきたから、私が嫌われ役は適任でしょう。まあ、愛歌がこっちについたらそんな心配もいらんだけど……」

「千里眼はやばいからな。だが、玩具発言はどうなんだ？」

「玩具にするか、それとも、家族になるか、それは彼女と真名次第ね」「玩具を買うとか言っていたくせに、あつさりとしているな」

「あら、私は園部優花だけを買うなんて一言も言っていないわよ」

「おい、まさか……」

「自分から玩具候補が来てくれるじゃない」

「こちらにくるりと振り向き、上目遣いでペロリと唇を舐めるルサルカ。それで彼女の本当の目的が理解できた。園部を助けるついでに玩具として襲ってきた何人かを殺したり、拉致したりするつもりだ。」

「本当に楽しみよ。園部優花は私のようなのか、それとも普通の幸せを手に入れるか。どちらかしらね？ ああ、でもまずは彼女を拷問した奴等を拉致して、彼女に仕返しをさせるところからかな。何を使おうかな？ 牛で股を裂く？ それとも蜂の巣穴に突っ込む？」

「園部に強要するな」

「え〜」

「ルサルカ、俺の言う事が聞けないのか？」

「ひっ!? ゝ、ゝめんなさい！ 言う事を聞きます！ なんでもしますから、それは止めてください！」

「よろしい」

ガタガタと震えて青ざめるルサルカをお姫様抱っこして進んでいく。しかし、ルサルカをちよ……矯正するのはこれでいいかもしれない。

オークション会場に到着した俺は予約してあった席につく。吹き抜けのテラス席で舞台の上がよく見える。始まるまで少し時間があるので、椅子に座って待つ。すぐにルサルカがしな垂れかかり、身体

を擦りつけて猫のように甘えてくる。

「よしよし」

「にや〜つて、違う!」

「おお、元に戻ったか」

「本当に止めてよね。心臓に悪いんだから」

「園部には思考誘導も強要も一切禁止だ。彼女はお前じゃないし、代わりでもない。変わりたいのなら、変えてやるから止めろ」

「は〜い。マスターのだ〜りに従います。でも、ちゃんと私を幸せにしてよ〜!」

「もちろんだ」

「良かった。でも、抱かないと壊れちゃうと思うけどなくいや、すでに壊れているかも?」

「そうかも、しれないな」

「精神的支柱がぶっ壊されてるはずだから、新しく作らないと立ち上がれないわ。それを抱いてダーリンがなれば、色々と解決できるわ。感覚共有のスキルでちゃんと愛され、必要とされる事がわかれば、だけど」

精神的な支柱か。経験者のルサルカは理解しているからこそ、園部に必要な物がわかる。

「ねえ、これだけは言わせてね」

「なんだ?」

「怒らないですよ?」

「ああ」

「助けるなら助けるで、しっかりと最後まで責任を取りなさい。一時的に助けてもらっても、その後が詰んでたら死んだ方がマシなの。それでも自殺をするほどの勇気もないと、私みたいはどうしようもなくなくなるから。恵里だつてそうよ。まだ行き着くところまで行きついていないけれど、後少し遅ければ止まらなかつたし止まれなかつたわ」

「天之河と同じになるのは嫌だな。しっかりと責任を持つ」

「そんなわけで、孕ませて子供を生みましよう!」

「おい」

「だって、そうしたら捨てられる事もないし、捨てられたとしても訴訟を起こせばいい。すくなくとも社会的な責任は強制的に持つ事になるわ。それからダーリンは逃げられない。そんな事をすればユーリ達に嫌われちゃうしね」

「悪魔か」

「その代わり、可愛い女の子を沢山侍らせられるんだからいいじゃないの」

「まあ、そうだな。元から責任は取るが、やはり園部の意思次第だ」

最悪、死にたいと言われたら殺す覚悟もおこう。いや、殺すのはやはり駄目だな。眠らせて少しずつカウンセリングをやっていく。ガチャで心を回復するアイテムが手に入るかもしれない。詩乃も求めているが、必要数が増えたただけだ。身体の維持はそうだな……誰かを憑依させておけば時間稼ぎはできるだろう。

「あ、始まるみたいね。ねえ、園部優花以外にも買っていていいでしょ？」
「人は駄目だ。余裕がない。それに園部が売られるタイミングにもよる」

「りよ〜かい」

予算は荒稼ぎした物とシュテルが用意した物を合わせて金貨900枚。価値としては9億円ぐらいか。物価を考えたらもっと高いかもしれない。こんなに要らないと思うが、相手がどう動くかだ。それに財宝もいくつがあるのだからそれを代金として渡せばもうすこし出せる。

「あ、あのメイドが居たわ」

「本当か？」

「ええ。見ないようにね。素人のダーリンなら気付かれるかもしれないから、見るなら視覚共有でお願い」

「わかった」

すぐにルサルカの視覚情報を共有し、ブレインコンピュータで録画する。同時にシュテル達にも送信しようとして止めた。相手は空間魔法の使い手だ。通信だけで感知される可能性が高い。

ルサルカに腕を抱きしめられながら、カモフラージュも兼ねて適当

に希少鉱石などに入札しては負けておく。ただ、ルサルカがガチで欲しいと思つたものもある。

「何アレ！ ギロチンよ、ギロチン！ 930人以上の亜人を処刑したギロチンですって！ 欲しい！ 凄く欲しい！」

現状、金貨2枚のようだし、買えない事はないな。というか、こんなに入札する奴がいるのに驚きだ。

「園部の事を妹のように扱うのなら、買ってやるぞ」「のった！」

バツと手を上げたルサルカが示したのは倍にするというサイン。

「金貨四枚が出ました！ 他にいらっしやいませんか！ おっと、金貨四枚と銀貨二十枚！」

「負けるか！」

「金貨五枚！ 他に、他にいらしやいませんか！ では、テラス席の八番のお客様が落札です！」

ハンマーが何度も叩かれて、ルサルカがガッツポーズを決めた。超ご機嫌のようで鼻歌すら歌っている。いや、歌詞も口ずさんでいるが、それってマリーの歌だろう。ギロチンと拷問具と考えるとシンパシーがあるのかもしれない。

「満足したか？」

「うん♪ 後でたつぷりとサービスしてあげるからね♪」

満面の笑みを浮かべるルサルカを見ながら、次々と商品が運ばれていく。時間が経つにつれて、奴隷のコーナーに入り、出品された亜人奴隷が終わる。本当なら助けたいと思うかもしれないが、ルサルカの言葉とルサルカと感覚共有のスキルを発動しているせいで、そんな事も思わない。むしろ、どんな風に切れば血がどのように噴き出すとか、そちらの方がばかり思ってしまう。これはルサルカが抱いている感覚だろう。本当にやばい奴だ。買ったギロチンを試したくて仕方がないのだろう。アレ、これって園部を買った理由がギロチンを確かめるためだと思われないだろうか？

「それでは次、犯罪奴隷のコーナーです。こちらは異端者認定を受けた者ですので、拷問して殺すのもよし、ペットの餌にするのもよしで

す。様々な用途に使えます。また、元神の使徒で処女です」

司会者の言葉で会場が盛り上がる。神の使徒は愛子先生や白崎達の人気があるから仕方ないだろう。そう思っていると、舞台の横から鎖を付けられた園部が引っ張られて四つん這いで入ってきた。彼女は一枚だけボロボロの服を着ていて、足には鉄球がつけられている。奴隷であろう大男が鉄球は運んでいる。

「ああ、やっぱりね」

「完全に目が死んでいるな」

外国人の血を引いているクォーターか何かはわからないが、綺麗だったエメラルドグリーンの瞳は虚ろで、元気にしていた時の綺麗さなどない。呼吸も荒い。

「では、処女かどうかを確認します」

鞭で園部が打たれると、よろよろと立ち上がって自分で服をたくし上げる。下は何も履いておらず胸までしっかりと見えるまであげ、その身体に刻まれた焼印を見せてきた。彼女はかなり濡れているようで、女性にチエツクされている間も微かに喘いでいく。

「薬が使われて調教されたのかも。用途が完全に性奴隷ね」

「薬を抜かないといけないか」

「鈴の結界で問題ないでしょ」

「絶対に助けるぞ」

「アイツが見張ってる限り、合法的に買うしかないからもしもの場合は……」

「諦めないからな」

「そう……まあ、私も妹扱いするって言っちゃったし、うん。買える事を願いましよう。無理ならその時はその時よね！　じゃあ、ちよつと考えるからオークションはお願いね」

「任せろ」

そうしている間にもオークションが始まり、金貨10枚からのスタートだった。すぐに値段が上がっていくが、その時に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「金貨30枚！」

そちらを見てからブレインコンピュータで拡大処理をすると、そこには檜山が知らない貴族といた。いや、城で見た事はあるか？ どちらにせよ、園部を買おうとしているのは事実だ。

「1000だ」

「ひっ」

可愛らしい声が後ろから聞こえてきたが、ユーリの可愛らしい声ではなく合成した男性の声。そう、獣殿の声を出したのでルサルカが震えるのは仕方がない。なので、彼女をしっかりと抱きしめて堂々と宣言する。

「き、金貨1000枚！ 他に居ませんか！」

「110！」

「120！」

「400」

「よ、400枚！」

「くそ、450！」

「600」

声が完全に消えた。いや、何人かが手を上げて値段を釣り上げた。仕方ないのでさらに吊り上げる。事前にオークション会場で確認しているので問題はない。いや、ハジメ達に殺されそうだが、致し方あるまい。甘んじて怒られよう。金塊以外にも売れる物はそれこそ無限にあるからな。

「1000！ これでいいだろ！」

「1500！」

「2000だ」

「に、2000枚！ 他にいませんか！」

信じられないと言った感じでこちらを見てくる。ルサルカも笑っているが、これは別の意味でだろう。

「は、ハンマープライス！ テラス席の八番のお客様が金貨2000枚で落札です！」

ハンマーの音が響く中、用は済んだので準備する。

「高すぎない？ 最後の500枚、いらないでしょ！ とうか、目立

「ちすぎよ！」

「仕方ないだろう。檜山に渡すのは我慢ならなかった。それに金で買えるのなら安い物だ」

「いや、高いわよ。どうやって払うつもりよ」

「金塊以外にも神水を売ればそれで解決だ」

「そういえば、ダーリンの身体から無尽蔵に取れるんだった……」

この身体の汗や唾液を集めて瓶に入れてだけで神水の完成だ。お手軽エリクサーだが、売れるに決まっている。おや、これは園部を俺が抱いたら解決する事が色々也多いかもしれない。一応、ケースには金貨の袋と金塊を入れ、マントを翻してからルサルカの手を握る。

「では行くぞ」

「はいはい。戦闘になるかもしれないから、召喚の準備だけはしておいてね。その場合、私とレヴィ、アストルフオで足止めするから、詩乃と一緒に園部優花を連れて逃げるように」

「心得ている」

何事もなければそれでいいが、いざとなれば聖杯の力も使い、盛大に暴れてやろう。いや、待てよ。相手がその気であるのなら、テロってやるのもありだな。ラグナロクオンラインで行われる古木の枝や血塗られた古木の枝を使ったカーニバル。それを召喚で再現するというのも面白いかもしれない。本当に教会や王国と敵対関係になるが、園部の件もある。ハジメ達も納得してくれるとは思う。だが、これは最終手段だな。

「あくやっぱり男の人にエスコートしてもらおうのっていいわね」

「そうか。だが、修正するところがあつたら言ってくれ。素人だから、作法はわからない。この身体に相応しい男になりたいから、頼むぞ」

「はいはい」

廊下を歩いていると、目の前に檜山達が現れた。こいつらは忌々しそうにこちらを見詰めてくる。

「おい、お前！ 園部をどうするつもりだ！」

「お前達に答える理由はない」

「彼女は異端者です。どのように扱われるか、エヒト様の為にもしつ

かりと確認せねばなりませんから」

「使った後はどうするかからぬが、この者に与えるかもしれない」

「ふふ、そうしたら今日買ってもらったギロチンで楽しもうかしら？

ああ、神の使徒様ってどんな声で鳴いてくれるのかしらね〜♪」

「元、です。不敬に当たりますよ」

「これは失礼しました。異端者なのですから違いますね」

「まあ、いいでしょう」

「殺すつもりか！」

「気に入れば使い潰すかもしれないが、彼女次第であろう。奴隷というのはそういう存在だ。殺したら教会に提出すればいいか？」

「皮膚を斬り取って、焼印の所を送りましょうか」

「はい。お願い致します。エヒト様もお喜びになるでしょう」

「では失礼する。さっさと引き取って味見をしたいのでね」

「ばいばい」

二人とその護衛の隣を通り、支払い用の場所へと移動する。

『あの、本当に殺すんですか？』

『俺は使った後、ルサルカに渡すといったが、そもそも道具ではなく人として扱うし、使うには当たらない。よしんば、使ったという認識でも、ルサルカに渡す事など有り得ないのだから仮定の話に意味はない』

『嘘ってことなんですね。良かったです』

『嘘ではないな。事実を言っているのだから。ルサルカも断定はせず
にいたしな。嘘を見破るスキルがあってもこれで大丈夫だ』

『なるほど、けむに巻いたのですね』

『ああ』

さて、部屋に到着したので金貨と金塊をケースから取り出して次々と置いていく。

「すまないが、金貨だけでは足りない。金塊でも問題ないと聞いたが、
可能だろうか？ 無理なら別の手段で支払うが……」

「問題ありませんよ。ただ、相場の値段になるので店舗に持ち込むよ
り少し安くなるかもしれません」

「構わない」

「では、それで査定します」

椅子に座って待っていると、まずギロチンが運ばれてきた。結構な大きさなので一部が解体されている。それをルサルカはケースに入れていく。それを見て持ってきた人は驚いているが、ルサルカが大迷宮で見つかった掘出し物だと説明すると納得してくれた。こんな馬鹿げた買い物をするような金持ちなら、持っけていても不思議とは思わないだろう。

「お待たせしました。確認できましたので、こちらへどうぞ」

「ああ」

案内された先には服を脱がされた園部が立っていて、両手で身体を隠している。俺を見るとガタガタと震えながら、手を退けて身体の全てを見せてくる。

「ご、ご主人様……わ、私、園部優花をお買い上げ、ありがとうございます……これから、せ、誠心誠意、お仕えさせていただきます、ます……お、お好きなように、おつかいください……」

涙を流しながら、感情が籠らないように伝え、跪いて俺の足に口付けしようとしてくるので止める。

「やめろ」

「ひっ!? ゝ、ごめんなさい! ごめんなさい! 許してくださいっ!」

園部は必死に謝って頭を抱え、泣きながら謝ってくる。どれだけ酷い事をされていたのか、想像もできない。だが、完全に心は折られている。女子高生に耐えられるものではないだろう。すくなくとも多少なりとも奈落で経験したからわかる。

「鞭を使いますか?」

「よい。さっさと契約する」

「はい」

彼女の胸の間に言われた通り、手を添えて詠唱をする。胸の柔らかさに肌が焼けた感触も伝わってくる。焼印が反応して、苦しみだす。

「登録完了です。後は首輪の方もですね」

「首輪を変えるのは可能か？　こんな無骨な物は趣味に合わない」

「でしたら、こちらに……」

「ふむ。ルサルカ、どれがいい？」

「この子に似合うのはこれね」

そう言つて渡されたのは赤い皮で作られたペット用の首輪だ。結晶が埋め込まれているので、一応魔導具なのだろう。

「小型の魔物用ですが、よろしいですか？」

「使えるのか？」

「はい。人用の物よりも強力です」

「ではそれでいい」

「かしこまりました」

園部に……優花の白い首から無骨な首輪を外して可愛らしい首輪をつける。彼女は自分から両手を後ろに組んで、首を差し出してきたし、自分から誓約も誓ってきた。そのおかげでスムーズに終わった。「終わりました。お買い上げ、ありがとうございます。こちらは彼女の持ち物だった服です」

「うむ」

足枷の鍵を貰ったので、それを外してやる。貰った服は学校の制服だったので、それを渡してやると、抱きしめて泣きだした。

「ほら、さっさと着替えなさい。それとも、取り上げられて裸で歩きたか？」

「い、いや……言う事、聞きますから……もう、私から何も取らないで……」

「それは無理で。すくなくとも取るものは決定しているから。それは理解しているでしょう」

「は、はい……」

すぐに俺の前で着替えだした優花は恥ずかしそうにスカートを気にしている。媚薬の事もあるだろうが、ここで治療するのは駄目だ。抱き上げて移動するのは周りの目があるが、仕方がない。目立つのは今更だろう。

「んあつ」

優花を抱き上げると、声が漏れるが、無視して部屋から出る。彼女は震えながら大人しく身体を預けてくる。それを見ると、前の彼女に戻してやりたいと強く思う。すくなくとも心は今すぐにでも治療したい。

『私を使いますか?』

『それはまだだ。このまま王都を出られたらいいが、そう簡単にはいかないだろうしな』

『わかりました』

歩き出した俺にルサルカがケースを持って続いてくる。そのまま建物を出て馬車に乗って、御者に命じて宿に移動させる。

『ルサルカ、どうだ?』

『つけられてるわね』

『やはり無理だったか』

『まあそうよね。いくら正規で購入しても見逃してくれないか。そもそも今回のオークションだって明らかに罠だし怪しいもん』

そう言いながら、ルサルカが優花の服に手を入れて何かを探っている。そして、悶えている優花からみつけたようだ。

『探知術式と集音術式。それに爆破術式ね。本当、最初から生かす気なんてないじゃない』

『残しておいたら他の連中から信頼を失うからだろう。シナリオとしては魔族に狙われているのを確認し、冤罪を理由に保護したが、彼女が逃げて魔族に殺されたか、そのまま魔族に襲撃されて殺されたとしてもするつもりか』

そうして、残った勇者達を追い詰め、戦うように誘導すると同時にモチベーションを上げさせる。実際に王都が被害を受けたら信じるだろう。今回の事は不穏分子を炙り出す事だろう。入っている可能性がある魔族か俺達かはわからないが。

『オークションの関係者も客も全部黒でしようね』

『王都で仕掛けてくると思うか?』

『タイミング次第じゃない?』

『被害を気にせずに仕掛けてくるといふのなら、望み通りにしてやる』

う。だが、時間を稼ぐ必要がある』

『そつちは任せて。良い考えがあるから』

『では任せた。美遊はばれないように召喚魔法の準備をしてくれ。レヴィとアストルフオ、詩乃を呼び出すかもしれないし、もう一つの方法も使う』

『わかりました』

意識を表に向けると、ルサルカが自分と優花の服を開けさせて俺にキスをしてくる。そして、片手はアソコに伸びている

「な、なにを……」

「ナニ？ ほらほら、いいから貴女もやるのよ。ファーストキスがアツチになってもいいなら、それでもいいけれど。奴隷の役目はこれよ？」

「わ、わかりました……」

目を瞑って震えながらキスをしてくる優花の唇を受け止め、そのまま舌を入れていく彼女は涙を浮かべながら、受け入れてくれる。色々と諦めてしまっているようだが、こればかりは仕方がない。唾液を通して大量の神水を飲ませていく。その間もルサルカの奉仕を受けて出してしまう。

「ほら、貴女だよ」

「ひっ」

俺のを顔に塗りたくって口にも入れさせる。大変エロいが何をしているんだか、わからない。

「ルサルカ？」

「どんどんいきましょ〜」

自分にもたつぷりと塗った後、優花を撫でていく。俺もこんな事をする理由を考えて、理解できたので優花の身体を堪能させてもらう。馬車の中には微かに抵抗する優花の声が響く。

そんな状態が続く、馬車が宿に到着して開けられる。二人は乱れた服装で降りて俺の臭いを漂わせていく。そこから簡単に服を整えてルサルカが先に歩いていくので、顔を真っ赤にして荒い呼吸の優花を抱き上げて移動する。

「見ての通り、買ってきた奴隷を使って楽しむから、この区画。貸し切りでお願いね。あ、ちゃんと防音用の魔道具とかは使うから」
「かしこまりました」

話をついたようなので、御者にチップを払って帰ってもらおう。俺達は案内された部屋に入り、優花をベッドに寝かせて覆い被さつて服を無理矢理脱がせていく。

「いつ、いやああああっ!」

「結界を展開するから、好きに楽しんでいいからね」

優花の悲鳴が術式を通してあちらに流れたところで結界が展開され、遮断されたはずだ。なので、優花の上から退く。彼女は不思議がっているが、デバイスから別の服を取り出して下着と一緒に渡す。

「すぐにそれに着替えてくれ」

「え? え?」

「はいはい、急ぐ。時間が無いんだから。媚薬だつてもう切れて思考はちゃんとできるようになってるでしょ」

ルサルカが手を叩きながら、食人影を呼び出してカーテンの閉めた近くでまぐわせる。これで外から見たらやっているようにしか見えぬ。

優花は混乱しながらも指示に従って着替えていく。渡した服はベージュ色のタートルネックのワンピースと赤いコート。それに黒いマフラー。下は黒いストッキングと金属の入った靴だ。

俺は指を噛み切つて床に魔法陣を書いていく。その間にルサルカは複数の食人影ナハツエーラーに床を剥がさせて、腕をドリルにして掘り進んでいく。

「な、なにをしているん、ですか?」

「答えは後」

ルサルカは優花の制服と優花の焼印を触りながら調べていく。

「よし、終わり。美遊、詠唱は?」

『終わっています』

「わかった。術式開始。来い、レヴィ」

描いた魔法陣が光り輝き、中央からレヴィが飛び出してくる。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！ さあ、敵はどこだ〜！」
「敵はまだだが、掘るのを手伝ってくれ。お前なら錬成ができるだろう？」

「え〜戦いじゃないんだ。ま、いいか！ 任せて！」

「よし、良い子だ」

ナハツエーラー

食人影が掘っている最中の穴に飛び込み、どんどん錬成していく。本当にハジメの錬成はチートだ。

「ルサルカ、そっちはどうだ？」

「難しいわね。服の方は処分すればいいんだけど、こっちの刻印に仕込まれた爆破術式って時限式なのよ」

「ば、爆破術式……？」

「それがアンタの身体に仕掛けられているのよ」

「う、うそ……お、大人しく奴隷になったら、命だけは助けてくれるって……」

「そんなの助けてくれない奴等の常套句でしょうが」

「私、あんなことまでして生き残って、助けが来るのを待ってたのに……」

「安心しろ。助けは来た。もつとも、発覚から少しは時間が経ったが」
数日は仕方がないとはいえない。距離があるとはいえ、その間に優花が被った被害は大きい。数日でも閉じ込められて拷問され、薬や魔法による洗脳など色々とされたはずだ。あの程度なら神水で回復はできるが、

「あ、あなたたちは……誰、なの？ 愛ちゃん先生達でも、ないし……」

「ベヒモスの戦い以来だが、姿が完全に変わっているから無理はない」
「べひ、もす……？」

「あの時も助けてやったのに忘れたのか？」

「も、もしかし沙条、なの……？」

「久しぶりだな。再会がこんな事になるなんて思わなかったが……」

「ほ、本当に生きて……」

「ああ、鈴や恵里、ハジメだって生きてるぞ」

「本当に……良かった……私……私……」

急に元気になったかと思ったが、すぐに泣き出した。慰めるために近付いて背中を撫でる。

「ごめん、なさい……私、檜山に……タブレット……」

「それなら知ってるが、そんな事よりも表向きでも無視を決めこんでおけばよかつただろ」

「できない、よ……だって、私のせいでタブレットを檜山が開いたし、それに……それに私が、あの時、足を引っ張ったから、沙条が鈴の所に行くのが遅れて……鈴を助けようとして……だから、せめて……」

「あくそう思ってたのか別に気にしなくていいのに」

「気にするわよ!」

「まあ、信じてくれていたのは嬉しかった。ありがとう」

「ううん、こつちこそ助けてくれてありがとう」

「まだ助かってないし、このまま何事もなく終わらないから、さっさとやることやる!」

ルサルカの言葉で優花がそちらを見る。

「か、彼女は?」

「はくい。改めて自己紹介するわね。私は聖槍十三騎士団・黒円卓第八位。ルサルカ・シュヴェーゲリン。魔女やってるの。そして、真名の妻よ」

ルサルカが抱き着いて宣言すると、優花はこちらを見詰めてくる。

「妻……結婚したの?」

「まあ、そんな感じだ」

「それで、私にキスしたりしてきた、の?」

思い出したのか、顔を赤らめながら唇に手をあてる。

「そりゃくあなたは奴隷だもの。そういう用途にも使うわよ」

「っ!? そ、それって……」

「言ったでしょ。助かっていないって。あなたは私達に買われた。最低でも金貨2000枚の分は働いて返してもらわないとね。主な仕事は身体を使ったお仕事ね」

そう言いながら、優花の胸につつと指を這わすルサルカ。彼女はこちらを見詰めてくるが、実際にこのまま解放するわけにもいかな

い。

「いいか。園部……優花って呼ぶぞ」

「うん。好きに呼んだらいいよ」

「わかった。で、異端者認定されたわけだから、教会の敵になった。それは俺もだ。だから、狙われる。俺の場合は見ての通り、身体を失って新しいのを得た。だから、簡単にはバレない。だが、優花は違う。焼印もあるから、確実にバレるし、奴隷から解放したらまた捕まって殺されるか、拷問される」

「っ!?! い、いやっ、あんなのはもう絶対に嫌っ!」

「だから、俺の奴隷として居てもらう。待遇はちゃんと扱うし、優花の望む事だつてできる限り聞く」

「本当に?」

「ああ」

「その代わり、身体を寄越せつて?」

優花の言葉や視線が冷たくなる。まあ、そうなるよな。

「それがあなたを助ける為に私が出した条件だしね。悪いけど、愛しの旦那様を信じてくれていたのは嬉しいけれど、その旦那様達を危険にさらしてまで助ける価値をあなたに見いだせないわ。言ってしまうと敵地に潜入して、あなたを連れ帰るってお仕事なもの。わからなくてもいいけど、納得しなさい」

「私が沙条の物になるなら、助ける価値はあるってこと?」

「そうよ」

「ルサルカさんはそれでいいの? 夫が不倫している事になるけど……」

「あくそれなんだが……」

「もう妻はいつばいいのよ」

「え?」

それから、何があつたのか伝えていく。まず、しっかりと話さないといけない。もちろん、警戒して爆破術式も解析しながらだ。

「つまり、沙条はハーレムを作っているから私もその中に入れ、と」

「そういうことね」

「いや、嫌ならいい。ルサルカを黙らせる事もできるし、無理矢理は入れるつもりもない」

「ちよつと、私は納得しないわよ!」

「買ってやったら、妹扱いすると約束したよな? 妹なんだから、無理強いはしないでだろう?」

「うっ……わかったわよ。はいはい、ちゃんと助けてあげるわよ!

でも、今回だけだからね。言っておくけど、本当に危険な橋を渡っているんだから!」

「というわけで、無理しなくてもいいからな」

「ありがとう。それと奴隷になった時から覚悟していたから、沙条に抱かれるのも女になるのもいいよ。ちゃんと人として扱ってくれて、拷問しないでくれるのならそれ以上は望まないから……」

そう言いながら、マフラーで口元を隠す。強がっているようだが、かなり堪えているようで弱弱しい感じだ。前の優花とは全然違う。諦めや諦観といったものが感じられる。考える事を放棄しているのかもしれない。

「それでいいのか?」

「沙条は鈴や恵里のようにちゃんと私を守ってくれる? 子供ができたら、一緒に育ててくれる?」

「もちろんだ」

「じゃあ、あなたの奴隷になる。ううん、奴隷のままがいい。だから、守って。お願い」

「俺は地球に戻るつもりはないから、こっちで住む事になるぞ」

「それは……大丈夫。だけど、お店はしたい、かな……あ、ごめんささい。贅沢だよな」

「そんな事はない。お店、いいじゃないか。どうせなら地球から食材とかを取り寄せてもいいな」

確か、優花は洋食店の娘だったな。こっちでも店を出したらいいだろう。別に行き来する事が大変じゃなくなればすぐに会えるしな。

「あれ、帰らないんじゃない?」

「こっちで生活をするだけだからな。娯楽は向こうの方が多し」

「私が娯楽になるんじゃないの？」

「一緒に居て楽しいなら、それはそれでいいかもな」

「そうとるんだ。うん、なんでもいいから守って欲しい」

「守られるだけで満足なの？ 仕返ししたくないかしら？」

「仕返し……はどうでもいい。思いだしたくないし。でも、力は欲しい。抵抗できずに捕まってあんな事になるのは……」

涙目になって伝えてくるので、抱きしめて涙を拭いてやる。最初と違って、俺が沙条だとわかったからか、抵抗を一切しなくなった。

「復讐がどうでもいいのか？これはお姉さんの予想が外れちゃったかなく拷問仲間ができるとおもったんだけどなく」

「ルサルカ、それでもちゃんと妹扱いはしろよ」

「もちろん。ねえ、お姉ちゃんって呼んでみてくれない？」

「……お姉ちゃん……？」

「よし。お姉ちゃんに任せなさい！ とりあえず手っ取り早く強くなれるのは永劫破壊^{エイヴァイビカイト}だけど、聖遺物がなし……買ったギロチンじゃ無理だしなく。それに爆破術式の解除もあるし……あ、アレがあったか。ねえ、だくりん」

「断る。嫌な予感しかしない」

「ガチャ引いて聖遺物を出しましょうよ。ほら、可愛いお嫁さんのためよ」

「お嫁さん、でいいのかな？」

「いい。何も問題はない。そしてガチャだが、やるか」

話がガチャとなれば別だ。愛歌にも引くように言われているしな。そんな訳でスマホを取り出して確認してみる。えつと、なんか色々追加されているな。オルクス大迷宮突破記念。オルクス大迷宮召喚。オスカー・オルクスピックアップがされている。他にはアイテム召喚。進化素材ガチャ。流星に確定召喚はないようだ。オスカー・オルクスのピックアップか。使えるだろうが、ここで引いても流星に出ないだろう。ここはやはりランダムガチャか。

「とりあえず、いいのが出る確率は低いだろう。他の方法をとろう」

「じゃあ、魔物を食べてみたい」

「え？」

「南雲はそれで強くなったんでしょ。私、料理人になる夢があるの。だから、魔物を食べて料理してみたい。真名の体液を飲んでいたら死なないんでしょ？」

「どう思う？」

「いいんじゃないかしら？ 確かに身体を作り変えるのだから、爆破術式だって真名の魔力を流し込んで壊せばいいし。このままだと私達も優花ごと殺されるしね」

「本当にいいんだな」

「うん。お願い」

「ついでに本番もして感覚共有して身体の魔力制御を手伝ってあげると早く終わるし、痛くないわよ」

「お願い。痛いのは嫌だし……」

「まあいいか。それじゃあ、やるぞ」

「うん」

そんなわけで、まずはキスして房中術で優花の快楽を高める。それから、やりながらヒュドラの肉を取り出し、噛み砕いて食べさせる。すぐに変化が起きた。激流のような魔力を制御し、優花に少しずつ流し込む。むしろ、俺の魔力も一緒に流し込んでヒュドラを余すところなく与える。

「魔力過多じゃない、馬鹿」

ルサルカも美遊も手伝ってくれて限界までヒュドラを圧縮し、房中術で手に入れた優花の魔力に混ぜて作り変え、戻していく。何度も体液を交換していると、急激に優花の髪の毛が伸びて瞳の色がエメラルドグリーンから深紅へと変化していく。しかし、次第に瞳の色は戻っていく。これは常時、力の解放をするのではなく小出しにする感じで圧縮したからだ。それでも格段に強くはなっているし、爆破術式も破壊できた。

ただ、優花は完全に気を失ったので、そのまま俺が抱き上げて移動する。これ以上、ここに居るのはまずい。優花の制服は食人影ナハツエーラーに着せて置いていく。優花には悪いが、この術式があるとみつかるから

だ。後で同じ服を作ってやればいい。怒られるかもしれないが、仕方がない。

「レヴィがどこまで掘ってくれているかしらね〜」

「そうだな」

ルサルカが自前の爆破術式を食人影ナハツエーラーに仕掛けて結界を解除してから、深い穴に降り立つ。降りてきた場所から頭上の穴を塞いでさっさと移動する。空気の穴はしっかりと確保されているので大丈夫だ。走っていると少ししてレヴィに追いついた。

「おつそ〜い」

「悪い。それで、どうだ？」

「王都の外までは繋げたけど、少し偵察したら止めた。待ち構えられてたからね。相手はボク達を逃がす気はないみたい」

「そうか」

レヴィの話の聞こえと街には神官戦士の一団が入り、王都の外にはあのメイドが待ち構えているそう。宿の方ももう少しで爆破術式を発動させ、突入するつもりだろう。そう思っていると、衝撃と爆発音がやってきた。

「あ、爆破したわね。これで私達が死んだと誤認してくれると嬉しいけれど……」

「どうする〜?」

「認識障害をしながら待機だ。明日の朝、住民が出ていくタイミングで合流して進む」

「りようか〜い」

「今日は大人しく優花の様子をみながら寝ましようか」

「そうだな」

次の日。優花は目覚めているが、まだ動けないようだが行動を起こす。王都から脱出して掘り進んだ地下の洞窟を使って森の中に入っていく。そこから街道を進んでいる商隊に紛れる。その商隊で聞いた話では昨日夜、宿が大爆発して辺り一帯が吹っ飛んで被害が結構でているようだ。

「なんでも魔族が潜んでいて、それを神の使徒様が討伐なさってくれ

たそうだ」

「神の使徒様は？」

「魔族の自爆で死んだって話だ。お蔭で王都の警備はかなり厳しくなっていて、出るのは大変だった。今でないと娘の薬が間に合わないからどうにかなってよかったぜ」

「それはそうですね。ところで避難誘導などは……」

「一応、されていたって聞くけど、範囲が広すぎたし、急だったから何人も死んだそうだ」

その言葉を聞いて優花がビクツと俺の背中で震える。証拠を消すためだけに王都の一部を吹き飛ばすとは、正直言ってやりすぎだ。魔族への反感を高めるためにしても、被害がそうとうでるだろう。まるで住んでいる人や taxation の事などどうでもいいと思っっているかのようだ。

「私のせいで、人が死んだの……？」

「優花のせいじゃない」

「むしろ、これは俺とルサルカのせいだな」

「私のせいでしようね。カモフラージュのために同じ爆発力になるようには仕込んだけれど、まさか人口密集地の王都で使うなんて思わなかったわ。普通、被害を気にして突入するでしょ。それがなに。容赦なく爆発って。どう考えても包囲してたっていう騎士達も被害にあってるわよ」

これは認識を改めるしかないだろう。敵は人を人とは思わないような連中だ。しかも空間魔法の使い手ときた。今回は食人影ナハツキョウという魂を持つ身代わりがいたから、騙せたのだろう。これからは特攻してくる存在にも気をつけるか。

「しばらく油断してくれるといいんだけどね」

「シユテルには大人しく普段通りの生活を心掛けさせましょう。情報収集は一時中断して溶け込ませるべきね」

「そうだな。王都はしばらくいいだろう。それよりも帝国と魔族の情報収集が肝心だ。それと早急に空間転移ができるように整えなければならぬ。逃走手段の確保は急務だ」

「だね。あ、そうだ。ゆーかもいつその事姿を変えたらいいんだよ！」

「それもありだな」

「ごめん、なさい……できれば、あまり変えたくはない。両親からもらった容姿だから……」

「そっか、そうだよね。ボクもへいとももらって、もうこれがボクだしなく」

レヴィにとって、フェイトのデータを基にして作られた今の姿がレヴィ自身の姿だということだろう。

「成長させるのはどうだ？」

「それぐらいなら、いい。元に戻る？」

「ああ、大丈夫だ」

なのはの世界には大人モードなんてある。それぐらいできる、はずだ。

「魔物だ！」
モンスター

「レヴィ」

「ほくい！」

バチツという音と共にレヴィが消え、すぐに倒したようだ。向こうの方でレヴィが褒めちぎられている姿をみると、一つ思い付いた。戦争を激化させるのも一つの手かもしれない。王国と帝国……いや、教会と魔族の戦いを促進させ、殺し合わせて魂を吸収する。その方が魂を効率良く収集できるだろう。見つからないようにして、隙を見て両方の軍をバランス良く削り、裏では食料や武器を提供して利益を得る。神出鬼没で現れて戦場をかき乱す。聖槍十三騎士団がやっていたように……駄目だな。完全に死の商人じゃないか。

精々、戦場に向いて参戦……駄目だ。片方に肩入れする事になる。両方に戦力を削つてもらいたい。難しい。やはり、まずは神代魔法を手に入れる事からはじめ、仲間を増やしていこう。世界を邪神工ヒトから解放する。地味な努力と戦場を回る。オスカー・オルクスの願い通りになるが、可愛い嫁や産まれてくる子供達のためだ。掃除はしないといけない。正直、正義の味方とか、興味もないが……神殺し

はカッコイイしなあ。

本当、神滅具とか、ハルパーの鎌とか、ガングニールとか欲しい。やっぱりガチャだな。ガチャしかない。比較的、安牌のアイテム召喚で集めて、絆召喚を狙う。それが一番いいだろう。というわけで回そう。聖遺物が出たら儲けものだ。

「ご主人様、なにしているの?」

背中に背負っている優花が気付いてこちらに声をかけてきた。当然、俺の手元にはスマホがある。

「ガチャだ」

そう言いながら、回す。久しぶりのガチャだ。それに今ならレヴィに視線が集まっているから問題ない。一応、魔力で回すガチャだ。ノーマルガチャだが、1回10万ぐらいつつこめばいいのが来るだろう。さあ、来い。

召喚演出が始まり、黒いパックがでてきた。どこのトレーディングカードゲームだ! 確かにあれもガチャといえなくもないし、ガチャのカード排出もあるが!

「なにやってんのよ?」

「ガチャだって……お姉ちゃん」

「へへ。うん、これからお姉ちゃんで……え?」

パックを開いてみるとN、N、R、N、N、N、R、C、R、N。期待が持てるのはRだ。やはりしけている。まあ、すぐに回復するからこの程度は仕方ないか。

「聖水。呪いを解除する。まあ、あつていい。ポーション。いらん。エリクサーが使い放題だ」

ポーションのカードを適当に置くと実体化した。どうやら、俺から離れると実体化するようだ。カードの状態ならスマホに保存できるか? まあ、ルシフェリオンを借りているから問題ないが。

「Rは……魔物の卵か。これは放置。Nは不思議な飴。レベルアップアイテムじゃない、不思議なランダム味の奴。塵だな。次はN。美味しいコッペパン。体力を少し回復。N小石、R古く青い箱。これはランダムにアイテムが入っている奴だな。つまりガチャ。Cはスキ

ルの急所攻撃。クリティカルがおこりやすくなる。優花、居るか？」
「スキル？ 欲しいけれど、いいの？」

「一番優花が……そのな……？」

「弱いのはわかってるから」

「じゃあ、やる」

優花に渡すと、カードは優花の中に消えた。ちゃんとスキルを覚えてくれたようだなによりだ。次は……Rでゾンビパウダー。振りかけた死体をゾンビに作り変える。いらんし危険すぎる。恵里にでもくれてやろう。ラストNは生ゴミ。適当に投擲してやると、一メートル先に落ちて臭い生ゴミへと変わった。

「くさい」

「捨てかたを考えなさいよ！」

ルサルカが燃やしてくれたので事無きを得たが、侮れん。バイオテロか。さて、古く青い箱だ。レッツオープン！ 中身はなんと！

「また青い箱？」

「よくあることだ。そして次は……」

「物理的にありえない箱がでてきたわね」

「うむ。これもあることだ」

古い紫色の箱が出て来た。こちらを開けると……なんとフラグが回収された。

「なんかすごい力を感じるんだけど……この真つ赤な枝」

「大当たりだ。血塗られた古木の枝。幾年の歳月が経ち、魔力が秘められた木の枝に血の契約をし、強力な何かを召喚する。MVPボス召喚用アイテム！」

「ボス？」

「ボスってあれよね。ユーリやラインハルト様みたいな……」

「それクラスが出る可能性はあるなあ……まあ、ラグナロクオンラインのアイテムだし、出てくるのはもっばら魔物だ。だが、こいつの悪用方法は他にある。何せ召喚士の俺が使うんだ。聖杯にくべるか、食べるか、それとも……デバイスの素材にするか」

「これって聖遺物にはならないわよね」

「流石にならないだろう。出て来た奴を殺せばなるかもしれんが」

『わ、私が食べるの？ 怖い』

さて、この枝は俺のパワーアップアイテム足り得る物だ。どう考え
ても災厄しか呼ばないがな！ 魔王モロクとか、ロード・オブ・デス
やカトリクス、セシルとか出ただけで笑う。どうせ、こいつらもフ
レーバーテキスト通りなんだから。ゲームデータなんて知ったこつ
ちやないってな！ 死蔵確定！

第36話

優花を連れて無事にオルクス大迷宮への入口へと戻ってくる事ができ、宿も取れた。もちろん、あの後もガチャは回したのだが、ほとんどNノーマルエンコモンかCの武器や道具だったので、一緒になった商隊の人には要らないポーションなどを売ってあげた。大変喜んでくれて、色々教えてくれた。例えばオルクス大迷宮に勇者達が居るとかな。

「さて、どうするか」

「する？ 私も優花も大歓迎よ。ね？」

「う、うん……ご主人様になりたいなら、どうぞ……」

そう言つてルサルカに後ろから抱き着かれた優花は服をたくし上げていく。正直、興奮するがやる事がある。

「まだしない」

「まだ、ね。よかつたわね。ちゃんと可愛がつてくれるつて」

「うん……」

「というか、ご主人様呼びは確定なのか」

「そっちの方が、いい。だめ？」

「まだまだ傷が深いんだから、今は好きにさせてあげなさい」

「そういう事なら、好きにしたらいい。ご主人様呼びも嫌いじゃないしな」

「変態」

「変態だね」

レヴィが飛びついてきたので、抱き留めてからベッドに座る。レヴィはそのままズルズルと下がってきて、俺の膝の上に頭を置いてくる。だから、手を乗せて水色の髪の毛を撫でてサラサラの感触を楽しむ。

「この街に勇者達が居る。転移する所を見られるのはまずい。だから、彼等が去るまでここに滞在する。優花はここから出ないようにしてくれ。食事は不味いだろうが、魔物モンスターの肉を用意する」

「わかつ……わかりました」

「敬語じゃなくていいぞ」

「……うう……」

「馬鹿」

ガタガタと震え出してきたので、慌ててルサルカが抱きしめていく。怒られてしまったが、もう本当に好きにさせよう。最低限の事だけ伝えればいいだろう。

「ルサルカは優花を頼む」

「任せて。ちゃんと真名の好きなように仕込んで……アイタツ！」

「真面目に教えておけ」

「はいはい」

「ボクは？」

「レヴィは俺と一緒にお出掛けだ」

「本当に！」

「ああ」

「やった！」

「必要な物を買ってくる。留守番は任せた」

「情報収集もお願いね」

「ああ」

レヴィと一緒に外へと出る。レヴィは嬉しそうに駆け回るので、その後ろをついていく。まずは必要な物資の確保だが、レヴィがいるのでそうもいかない。

「うわ〜これも美味しそうだね〜！ こっちもいいかも！」

「お嬢ちゃん、元気だね〜」

「お兄ちゃん、これかって〜」

「はいはい」

「お兄ちゃん……？ 女性に見えたが、男性か」

「ええ」

「綺麗な顔をしているから間違えたよ。はいよ。こっちはおまけだ」

「ありがと〜。はい、お兄ちゃん」

「ああ」

お金を払って買ったのはフランクフルトだ。ソースはないので、そのまま串を掴んで食べながらレヴィと歩く。屋台や露店のせいか、まるで縁日を歩いている感じすらする。周りが武装した冒険者だらけなのだが。

「お、これいいかも！」

「ボールか」

露店に並べられている商品の中にあるボールをレヴィが気に入ったようだ。買ってやりたいが、お金はない。

「後で作ればいいだろう」

「え、買ってくれないの？」

「無駄遣いはできない」

「いっぱいしたから？」

ガチャをいっぱいしたから、節約しないとイケない。

「そうだ。すまない。後でボールを作ってやるから許してくれ」

「仕方ないなあ」

服屋に移動し、そこで下着やシュテル達の服、ハジメや俺達の物を買っていく。王都で買うより安いし、素材も売っているのでそっちを買っていく。レヴィにも何着か選んで買ってあげた。

次に調味料や食材を購入。鉱石は買わなくていい。この辺りにあるのは全てオルクス大迷宮から取れる。取れないのは加工品だ。それもほとんどが錬成で作れる。ただ、そうになると生理用品などが問題になる。ハジメも作れないし、ユーリ達も厳密には生きている身体ではない。鈴と恵里、優花とユエ。詩乃とルサルカ達が使うのは購入して、解析したら後は増やせる。

「レヴィ、わかるか？」

「わかんない！」

「よし、聞いて買ってこい。おつかいミッションだ！」

「了解！ レヴィ、いつきま〜す！」

お金を渡して走っていったレヴィが店員にお願いして用意してもらっている。その間、どうするかと考えながらガチャをして店の前で待つ。やはり碌なのが出ない。そう思っていたら、一枚だけRでも使

えそうなのがあった。それは菊一文字則宗。Rなせいとか、普通の武器で神秘も魔力もなにもない。ただし、名刀ではある。かの沖田総司が新選組一番隊の隊士、日野助次郎が陸援隊の隊士、戸沢鷲郎に斬り殺された時だ。待ち伏せした沖田総司が菊一文字則宗を抜いて、戸沢鷲郎を一刀のもとに斬り伏せた。その時に刃毀れ一つなかったらしい。「ユーリちゃん?」

菊一文字則宗を見ていると、声が聞こえて顔を上げる。するとそこには白崎が俺の顔を覗き込んでいた。周りを見渡せば八重樫もいる。八重樫は俺が持っている菊一文字則宗の方に視線が行っていた。

「人違いだ」

男性の声で告げてやると、白崎は残念そうにしてこちらを見てきたが、そこでふと気付いた。

「名前は?」

「さて、なんて名乗るべきか。ばれたらややこしいな。」

「マアナラインだ。ラインとでも呼べ」

「ハジメ君とユエちゃんは元氣?」

「……知らないな……」

「お兄ちゃん、買えたよ! あ、かおりんだ!」

「はい、残念でした」

「ちつ。レヴィめ……」

「あれ? やらかしちゃった?」

「まあいい。ちょうど渡したい物もあったから、渡してしまおう。」

「え? 知り合い?」

「八重樫。これをやる」

「わっ!」

菊一文字則宗を八重樫に投げ渡し、ルシフェリオンの中から魔物モンスターの卵に清水のパートナーとして、彼の好きなモンスター娘になるように思いながら魔力を大量に注ぎこんで渡す。

『聖杯の力を少し使え』

『いいんですか?』

『ああ。清水は色々としてくれているからな。強い思いがあればその

卵になるだろう。なにせ観測されるまでは決まっていけないのだから」

『わかりました』

「こっちは清水に渡してくれ」

「私にはないの？」

「ハジメから貰え」

「じゃあ、連れて行って」

……ここで白崎を連れていけばハジメからの追及を防げるだろうか？ いや、無理だな。

「なんだ。自力で来なくていいのか？ それではユエに負けた事になるが……」

「むっ」

「支援はしてやるが……」

「沙条君はズルいな。そう言われたら、頼めないじゃない」

「沙条？ え？」

「雫ちゃん、刀に夢中だったでしょ」

「う……だって菊一文字則宗だよ！ 見ただけでわかるこの素晴らしさー」

うつとりと刀を見詰める彼女はちよつとやばい。

「まあシユテルちゃんから聞いているからね。鈴達は無事？」

「ああ、無事だ。それと二人に伝える事がある」

優花の事を羊皮紙に日本語で書いて渡す。

「読み終わったら燃やせ。それと態度は気をつける。監視されている可能性が高い」

「……わかった。ますますいけなくなっただね。皆にそれとなく警告しておくね」

「頼む。それと八重樫」

「無事で良かった。えつと……」

「ラインでいい。やるとは言ったが、やはり売ったとしたい。そうだな、八重樫の制服って持って来てるか？」

「え、宿にあるけど……どういうつもり？」

「詳しくは渡したのを読め。借りただけだ。後で返却するし、変な事には使わない事は約束する」

「……わかった。菊一文字則宗のためなら出しましょう」

八重樫も読んだようで、真剣な表情で羊皮紙と菊一文字則宗を返してきた。これなら燃やす必要もないか。そのままポケットに戻し、八重樫が走っていく。

それから少し話していると、八重樫が制服を持って戻ってきたので、それを受け取って菊一文字則宗を渡す。

「じゃあな」

「またね」

「気をつけなさいよ」

「お互いにな」

白崎達がレヴィが買い物をしていた店に入っていた。なるほど、だから天之河達が居なかったのか。流石に生理用品を買いに行くのについてこさせるわけないか。

納得できたのでレヴィを見ると、いつの間にか買ったお菓子をパクパクと食べていた。口元の食べかすを拭ってやり、宿に戻る。部屋に入ると、優花が顔を赤くしルサルカに後ろから抱き着かれながら迎え入れてくれた。

「えっと、お帰りなさいませ、ご主人様。ご飯にしますか、それともわ、私にしますか……?」

「どうよ！　もちろん私でもいいわよ！」

「じゃあ、三人……と言いたいが、まだ駄目だ。ここで油断はできない。オルクス大迷宮に逃げ込むまで遠足は続いている」

「そっか、残念ね優花」

「う、うん……」

「ねえねえ、それよりも遊ぼうよ」

「そうだな」

軽くトランプで遊びながら時間を潰す。

次の日、白崎達が王都に出発したので、俺達も認識阻害を行いなが

らオルクス大迷宮に入る。これで俺達だとは気付かれない。適当に迷宮を進み、人が居なくなつたところで隠し通路にある転移トラップへと触れる。この転移トラップはオスカー・オルクスが残した指輪によつて識別できるようにしてあるので、他の連中が降れても10階層から50階層下にある階層にランダム転移させられるだけだ。

「ここが、オルクス大迷宮の最下層……」

「ようこそ優花。反逆者の楽園に」

振り返つて両手を広げて優花を歓迎したら、後ろから思いつきり重たい物で殴られた。涙目になりながら後ろを見ると、そこに鬼が居た。その鬼は俺の頭に普通の拳と鉄の拳で挟み、グリグリとしてくる。

「いだだだっ！ 痛いつてハジメっ！」

「痛くしているからな」

「南雲、なの？」

「よお、園部。久しぶり」

「本当に生きて……」

「鈴達も居るよ！」

「ヤッホー」

ハジメの後ろから鈴と恵里もでてきた。どうやら、皆は無事に身体の再生が終わつたみたいで良かった。でも痛い。しかし、これは感覚共有で送られてきている痛みなので、実際にハジメにやられたわけじゃない。

「ユエ、もういいぞ」

「ん」

痛みが終わり、ユエが連れてきたのはシユテルだった。どうやら、シユテルが同じようにされていたみたい。隣にはユーリとディアーチエが居て、頭を撫でている。レヴィがディアーチエに抱き着く。

「とりあえず、中で報告を聞こうか。お仕置きはそれからだ」

ハジメの言葉で全員が移動し、食堂で俺とルサルカ、シユテルは正座させられた。優花は鈴や恵里と抱き合つて互いの無事を喜んでい

「さて、言い訳を聞こうか」

「反省も後悔もしていない。ただ、お金をいっぱい使ったのはわかったと思っっている」

「そうです」

「まあね」

キリツと答えると、溜息をつきながらドンナーで俺達を撃ってきた。優花が驚いたが、ちゃんと非殺傷の弾になっている。シユテルとルサルカに撃たれた弾丸は両手を広げて受け止めた。手は痛くもないし、額にあたったのも少し仰け反ったぐらいだ。

「この化け物銃でも仰け反る程度か」

「ふはは、ユーリが作ってくれたこの身体聖餐杯は砕けない！」

「よし、そうか。ドンナー、モード・ツヴァイ」

「あ、それはずるい」

アンチマテリアルライフルを額に押し当てられ、撃たれると思ったら優花に押し倒された。そのまま覆われて抱きしめられる。

「な、南雲は私を助けに行ったことを怒ってるんでしょう？ だって、私を好きにしているから、ご主人様達には手をださないで……」

「違う。いや、ご主人様って……」

「あゝそれなんだが……」

起き上がって泣いている優花を抱きしめて背中を撫でながら説明していく。するとハジメも色々と理解してくれたようだ。

「まあ、ご主人様呼びや奴隷に関しては本人が納得しているならいい。俺も園部が助かって良かったと思っっているし、俺だったら説得されない限りは助けに行かない。その点、沙条が居てよかったです。それ自体はまあいい」

ハジメはもう、クラスメイト達に興味を失くしている。八重樫や白崎、清水ぐらいは助けに行くだろうが、優花はあの状況ならいかないだろう。優花もその言葉を聞いてビクツとしたが、納得できなくても理解はしているようだ。

「俺が怒っているのはお前が、俺達になんの相談もなく行った事だ。危険な奴が居るって事はシユテルの情報からわかってただろうが！」

「だけど、ハジメ達は培養槽の中で治療中だったろ」

「緊急事態なんだから中断して起こしやがれ！ 戦力の逐次投入でやられたらシャレにならないわ！」

「ふぎけんな！ 中途半端に大ききの違う手足とかどんな影響があるかわからんだろうが！」

「それなら俺だけを起こせばいいだろ！ そうしたらユエと一緒に援護くらいはできんだよ！」

「片腕の奴を連れていってなんになるってんだよ！ 危なすぎるわ！」

「なめんな！ こつちとら、片腕でオルクス大迷宮の攻略してたんだぞ！ 余裕だったの！」

「そこまでです！ 二人共、冷静になつてください！」

「そう。これ以上は駄目」

俺がユーリに頭を抱きしめられ、ユエもハジメに背後から抱き着いて目を隠している。

「二人共、彼女を見てください」

「……ひつく……わ、わたしの……せいで……ごめん、なさい……」

優花が泣きながら何度も謝っていた。ちよつと頭に血が上って気付かなかった。

「お兄ちゃんも落ち着いてください。お兄ちゃんもハジメさんも互いの事を心配しているだけですからね」

「ん。仲良し。感情に任せた喧嘩は駄目」

「そうだな。まずは紅茶で落ち着いて建設的な話し合いをしようではないか。我等は獣ではないのだからな」

「まあ、溜め込むより吐き出すのはいいけれど、優花の居ないところでしなさいな」

「悪かった」

「俺もな。だが、やはり相談してくれ。気付いたら居なくなっていて、取り返しのつかない事態になっていたら嫌だ」

「わかった。だけど、それは俺からも言えるからな」

「互いに情報交換は密にしよう」

互いに決めてから、しっかりと優花に謝る。

「私、ここに居て……いいの？」

「ああ、居てくれ。嫌だと言っても逃がさないからなあ」

「……うん……」

「俺も悪かった。本当に園部が助かった事は嬉しい。だから、こっちは気にせずに好きナだけ、沙条達に甘えて傷を癒すといい」

「わかった。ありがとう……」

とりあえず、落ち着いたから改めて皆に紹介して、優花を案内してもらっている間に詳しい話をしていく。これからどうするかも話し合わないといけないからだ。

「ちっ、本当にやってくれるな。これが教会と王国のやり方か」

「ルサルカの提案で正規の手段で購入した。これなら穏便に優花を助けられると思ったから出向いたんだ。それがまさか、購入者ごと周りを巻き込んで消すつもりだったとは思わなかった」

「まあ、連中からしたら園部には生きてもらっていたら困るか。何かのタイミングで愛ちゃん先生達に伝われば離反物だしな」

「とりあえず、もう教会は完全に敵として、王国も敵と考えていいよな？」

「一般人はわからないが、基本的にそうだな。いや、一般人も怪しいか。とりあえず、街に行ったら結界を展開して浄化しちまうのがいいが……これをやると俺達の位置が確実にバレるな」

「流石に戦争するだけの戦力は整ってないな。普通の兵士ならどうとでもなるが、あのメイドみたいなのが他にいたらやばい。アレ、どう考えてもボス級だし」

「シユテルがやられた奴だよな。映像を見た限りだと、炎を平気で突き破って心臓を一突き……一掴みか。やはりオスカー・オルクスが言っていた通り、帰るためにも先に大迷宮を攻略するべきだな」

「賛成だ」

話している間にディアーチエがカフェラテを入れてくれる。それを飲みながらオスカー・オルクスの事を考える。そこでふと思いついた。

「そういえば、オスカー・オルクスのピックアップガチャがあったな」
「それを早く言え！」

「引いていいのか？」

「むしろ、なんで引かないんだ。アイツを呼び出せば大迷宮の位置や内容は確実にわかるだろう」

「いやあ、そっちのガチャは止められていたからな」

「お前がガチャを止める？ ハッ」

「笑ったな……まあ、仕方なかった」

スマホを取り出して確認するが、石は25個しかない。なので回せる数は25回。当たりが来るか微妙だが、下手なのが出たら死ぬ。

「戦力が不足している状態での召喚は自殺行為だ。出てくる存在が愛歌やもつとやばい奴の可能性もあるからな」

「じゃあ、戦闘準備が整ってからか」

「あくまでもピックアップだしな。というか、25連で出るとは思わない。今は適当に魔力ガチャでアイテムを集めていくさ」

「魔力ガチャか……あくそういえばユーリを召喚したのもそれだったか」

「アイテムガチャを基本に回してる。それでMVPボスの召喚アイテムも出たがな」

「ヤバイ奴じゃないか」

そう、やばい奴だ。

「まあ、ガチャで装備やアイテムを集めるのはいい。それよりも園部の事だ。ちゃんと責任は取れよ」

「ああ。一度、日本に戻れたらちゃんとご両親に挨拶して、娘さんを貰ってくる」

「そこまで考えているのならいい。好きにしろ。ただ、これからの事だ。確か、当初の計画では奴隷のまま連れていくんだったな」

「計画はおじやんになったがな」

「異端者の証明である印か。園部はこのまま連れ出すわけにはいかないな」

「だから、成長させて別人にする。烙印がただの焼印なら良かったが、

魔法的な産物だ。身体を成長させる程度じゃ戻せないかもしれない。魂に紐付けされていていたら身体を移しても出るし、今は優花自体が奴隷という洗脳から抜け出せていない」

「しばらくは成長させてもそのままがいいか。必要なくなったらどうするんだ?」

「優花がどうしても嫌なら、離れる事も視野に入れるつもりだ。最悪、記憶とかを消してこの世界に来る前の状態まで戻す事も考えている。身体だって作れるしな」

「……そこまで覚悟しているのか。じゃあ、園部は完全に任せる。手伝える事があつたら言ってくれ」

「了解。頼む」

優花の事はこれでいいし、次に移動手段などの事を二人で相談していく。

「いや、ここはハヤブサだろう」

「トライクだって」

「……」

「……」

「デスモドウス!」

「ブラック・トライク!」

「馬鹿か貴様等は……どちらも作ればいだろう」

テーブルの上にディアーチェが焼きたてのクッキーが乗ったお皿を置いてくれる。

「「それもそうか」」

「それとどうせならユーリに言ってデバイスとして作れ。そうすれば自動運転も可能だ」

「技術チートが居たんだったな」

「ハジメが言うなつての。とりあえず、移動手段としてバイクと装甲車ぐらいだな。流星に空を飛ばせるのはまずい。シユテル達なら単体で飛べるが……アレ、俺も飛べる?」

「可能だろう。それぐらいのカタログスペックはあるはずだ」

「今度試すか。空の散歩とか楽しそうだしな。それと移動手段以外に

も泊まれる所が居る。女の子達を野宿させるのもアレだし、シャワーや風呂は入りたい」

「贅沢な旅だな。だが、この世界の住人が信用できないのだから、宿に泊まるのも不安はある。自分達で持ち歩けるコテージとかを作った方が効率的か」

「転移でこれるとはいえ、出来ない時もあるだろうから作っておけ。我はともかく、ユーリ達を些末な所で寝かせるなど、王たる我が許さん」

「王様の命令だ。作るとしよう」

「露天風呂とか欲しいな」

「警備ドローンをはじめとした銃火器と防御力を考えたら、要塞になりそうだな」

「自重しなくていいからやつちまえ。どうせ最終的には次元航行艦か、それに似た物を作るんだしな」

「……それもそうか」

神代魔法でどうしようもなければ作るしかない。あ、それで思い付いた。切り札を作るように頼んでおくか。ちよつと地上にシヤレにならん被害が出るかもしれんが、戦略級兵器は手札として持つておきたい。

「どうせなら全員の要望を聞いて、汎用型としてどこでもコテージを作る。家は俺とお前の所で別けて作るぞ」

「構わないが、広めにしておけよ。最低でも白崎はついてくるからな」

「ああ」

「そういえば白崎に会ったぞ」

「なに？ まさか連れてきてないよな？」

「もちろんだ。上手く言い含めておいた」

「ナイスだ。流石にまだ決められていない」

「早くしろよ」

「ハーレム野郎は言う事が違うな」

「据え膳食わぬは男の恥っていうんだ。ユエも白崎も認めたらそれでいいじゃないか」

「その件は後だ。今は忙しい」

「了解だ」

それから、様々な設計図を書き、食事の時間に皆の意見を聞いてコピーの設計図を書き直していく。アストルフオの意見で魔物モンスターが泊まれる広さになった。ピポグリフを召喚するつもりのようなのだ。セイバーからライダーに変われたら、それはそれで強い。まあ、どちらにしろ魔物モンスターは連れていくかもしれないし、問題ない。

食事が終われば今回はアストルフオに誘われて、俺とハジメは一緒に風呂に入った。そこでアストルフオの背中を流したりもしてゆつくりと疲れを取った。

「やっぱり風呂はいいな」

「だね」

「作るしかないだろうな」

風呂からあがればアストルフオとハジメの二人と別れ、寝室に移動する。そこで待っていた嫁達と夜の運動会だ。今回は優花の参加と鈴、恵里の身体が治った事もあってこの三人をメインにしているらしいので、そうする。どうせ体力はほぼ無尽蔵なので全員の相手は問題なくできる。それに優花はしっかりと相手をしないとネガティブになってしまう。今は自殺されないように必要とされている事と、居場所がある事をしっかりと教え込まないといけない。

身体中舐めて堪能したら、逆に浄化魔法をかけられた後に堪能された。というか、色々と肌に塗り込まれた。互いにマーケティングしあった感じだ。俺は身体中にキスマークがつき、彼女達は首や胸とかだ。ただ大変気持ち良かった。

妻達との関係はどうかになっているが、俺は、俺達はやばい奴を一人にしている事にこの時は気づかなかった。

「ふっふっふっ、ボクは諦めないよ！　というわけで、協力してね！」
「今は止めておきなさい。チャンスは必ずあるから。それにこっちの

子が先約よ。その次なら手伝ってあげる」

「ぶー。ま、いつか。というわけで、一緒に寝よう！」

「なんでかしら？」

「一人で寂しいから！ 問答無用だよ！」

「ちよっ!?! これは見え——」

清水

「くそっ」

無事にベヒモスを倒す事ができ、地上に戻ってきた。全員、多少の怪我はあったが白崎が治してくれたのでどうにかなった。だが、迷宮の遠征を終えたというのに休む暇もなく、天之河の奴が必要な物資を買いにいくと行って、皆に仕事を割り振った。

俺は宿屋でぐうたらしたかったのにだ！ それなのにアイツときたら、結構な量を体格やステータスを考えずに割り振りやがって……まだ、これだけならいい。問題は俺が行く先がカップルだらけの所なのだ。いや、確かにオルクス大迷宮で命懸けで戦っていたのだから、そういう事が活発になるのはわかる。だが、デートスポットのような場所に男一人で猫を連れていくとか最悪だ。

「そこのお兄さん」
「ん？」

見ると、裏路地から怪しい老婆が手招きをしていた。肩に乗っているシュテルを見ると、軽く頷いたのでそちらに向かう。何があっても守ってくれるから安心だ。

「媚薬や惚れ薬。いいのがありますよ。ひっひっひ」
「……いや、いらぬ……というか、媚薬はともかく惚れ薬とか犯罪だろ」

「見たところ、闇術師でしょう？ なら、モンスター魔物を捕まえるのに使うものですよ。間違っても人間に使っちゃ犯罪になっちゃまう」

「……モンスター魔物用か……」

「人にも効きますがねえ……くひひ」

「……危険な物だ……他のがいい。モンスター魔物用で何かあるか？」

「いや」

ん？ シュテルが肩から降りて一つの札をぺしぺしと叩いている。

「そいつは卵に使う奴だね。一つの卵をもう一つの卵と同じ種族にする新アイテムだ。別の種族にはならないが、”違う個性”を持った面

白い生物が生まれてくるよ」

「ふむ」

シユテルが薦めているから、沙条達から何か貰えるのかもしれない。それなら、色々買ってみるか。

「卵に関する物を色々どくれ」

「あいよ」

それから卵に張り付けて使う札のようなマジックアイテムを売ってもらった。結構な金……というか、ほぼ全財産が飛んだが仕方がない。買ったのは卵の成長を早め、産まれてくる個体の才能を徹底的に強化する奴と進められた卵を別の種族に変更する奴だ。これの難点は片方が死ぬともう片方も死ぬらしい。他にも色々買わされたし、惚れ薬も買わされてしまった。

「またよろしく。次に会う時を楽しみにしているよ」

「……ああ……」

怪しい老婆から購入した物を懷に仕舞って移動し、ふと振り返るとそこには別の客が居た。そいつは褐色の肌をした女性で、俺に手を振ってきたのでそのまま無視して歩いていく。

「シユテル、さっきのって……」

「魔族ですね」

「やっぱりか」

つまり、俺が買ったのは魔族の商品ということだ。まあ、別に構わない。相手の力を使って倒すなんてゲームじゃよくある事だ。これはシユテル達に渡して解析してもらおうのもありだな。

さて、苦難の買い物が終わったので、宿の部屋でシユテルに解析を任せて俺は寝る。しばらく寝ていると解析が終わったのか、シユテルの肉球でぺちぺちと叩いて起こされた。

「問題ありませんでした。確かに言われた通りの効果があります。ただ、適正が無い者が使えば暴走しますが、天職が闇術師の清水さんなら問題ありません」

「なら、使えるのか。それは助かる」

札とかを懐に仕舞う。一応、メルド団長に報告もしないといけな
い。いや、その前に食事か。怠いが食堂に移動すると、天之河達や白
崎達も帰ってきていた。白崎達は確か、天之河が聞き出したのだと、
生理用品を買いに行っただが、なにかあったのだろうか？

「雫、自分が着ていた服と刀を交換するなんて俺はどうかと思うぞ。
ましてや相手は男なんだろう。何に使われるかわかったもんじゃない。
もう少し……」

「大丈夫よ。大丈夫。それに別に使われたって嫌だけどいいわ。これ
が手に入ったんだから」

「いや、駄目だからね？ まあ、大丈夫なんだろうけど」

触らぬ神に祟りなしと、席について注文する。すると白崎がこちら
に気付いたようで、満面の笑みを浮かべて歩いてきた。

「白崎、何があっただんだ？」

「えっと、私達くらい可愛い男の子と女の子が遠い場所から
やってきていてね。それで故郷の品つていうのを雫ちゃん自分が
着ていた学校の制服と交換したんだ。一緒に居た女の子のために新
しいのを作る参考にするんだって」

「そうか。それで天之河は怒っているのか」

そちらに改めて視線をやると八重樫が持っているのは刀だった。
そう、刀だった。遠方から来た？ それは地球の日本の間違いじゃな
いか？

「白崎、そいつは……いや、なんでもない」

「うん。それでね。その時に刀以外にももらったんだ。これ、清水君
にプレゼントだよー」

そう言っって白崎が取り出したのは卵だった。それも物凄い魔力を
感じるヤバイ卵だ。内包されている魔力量が俺達全員を足しても足
らないくらいだ。その異常性に俺以外、誰も気付いていない。もしか
して、闇術師とかテイミング系の力が無いと無理なのかもしれない。
「香織、何故清水にプレゼントなんかあげるんだ？」

周りが白崎の言葉で俺達の方に視線を集中してくる。それにもしかして……とかいう話も聞こえるが、有り得ない。こいつは今でも南雲にぞつこんだ。どうせ、さっきの事を考えると沙条からの贈り物だろう。しかし、沙条はこんな状況でもちやんと魔物モンスターをくれるっていう約束を守ってくれたのか。なら、ありがたく貰おう。

「ああ、ありがとう。魔物モンスターの卵だろうか？」

「そうだよ。何が出るかはわからないけど、大切にしてあげてね」
「わかっている」

「香織？」

「これはお礼だよ。この子のお礼」
「にゃ」

あちらのシユテルを見せる事で、皆が納得する。白崎に渡している二匹の猫が活躍する姿はここに居る皆が知っている。敵の攻撃を的確に魔法で迎撃し、常に俺と白崎を守ってくれている。谷口が居ないので大変助かっているのだ。むしろ、シユテル達が居なければベヒモスは倒せなかった。

「戦力の強化になるとも思うし、お願い。あ、これが使いたいよ」
渡されたメモを素早く読み、すぐに床に落とす。すかさずシユテルが玩具にするように燃やしてしまう。

「わかった。そういうことなら……俺もちょうどいいのがある」

懐から卵と札などを取り出す。本当はメルド団長に教えようかと思っただが、園部の事があるなら話は別だ。メルド団長はいい人だが、他の奴は信用ならない。

「ね、ここで孵化させてみてよ」

「ああ」

卵は二つないが、購入した全部の魔道具を接続する。それから俺の魔力を流しながら願う。俺も沙条や南雲みたいにハーレムを作りたい。だから、魔物モンスターで人型になれる魔物モンスターの可愛い娘達よ、頼む。俺の所に来てくれ。

『聖杯に願うのがそれなんです……わかりました。えつと、魔物モンスターの女の子で、願いはハーレムだから最低でも二人……使われた札とかを

考えると前衛よりも後衛……」

女の子の声が聞こえるが、真摯に邪な願いを願う。強くて遠距離攻撃ができて、空から爆撃のような攻撃ができるのもいいな。

『これでいいよね。これでいいか。よくわからないけれど、いいよね。えい！』

卵から急激に魔力が溢れ出し、巨大化していく。一気に1メートルまで成長すると、卵に罅が入って中から虹色の光が溢れ出し……なんてことはなく、禍々しい赤いオーラが溢れ出した。そして、殻が外れていくとその中心には二人の女の子が裸で抱き合っている。

その二人はどちらも幼い子供のような姿に白い頭髮で、一人は黒色のコートのような服を着ており、付属している黒いフードを頭にかぶっている。

また、胸から臍にかけては素肌が露出していて、背中にはリュックサックのようなものを背負っていた。首にはアFGANストールのようなものを巻いており、脚のようなものが伸びているが、足首から先がなく黒い模様が入っている。尻の辺りから白く、太い尻尾のようなものが蛇のように伸びていて、その先端には戦艦を模した深海棲艦特有の意匠、化け物の口がある。

もう一人は頭の左右に黒い角、白いワンピースにミトン状の手袋。左のふとももに黒いリング、両足首にも黒いリングがあり、足は裸足だ。艦装は、周りに猫耳のようなものが生えたたこ焼きがいくつもあり、右側には離島棲鬼の艦装と似たようなものが配置され、左側の艦装の口からはクレーンが出ている。

「戦艦レ級に北方棲姫だど!?!」
しかもかなり小さい。ぬいぐるみサイズだ。幼生体といえるだろう。

「にゃー!」

シュテルの声でこんな事をしている場合じゃない事に気付いた。まだ目を開けていない二人に急いで近づき、彼女達と至近距離で顔を警戒しながら近づける。やる事は刷り込みだ。鳥類や哺乳類は生後ごく早い時期に起こる特殊な学習を行う。それが刷り込み。産まれ

てすぐの時期に身近に目にした動く物体を親として追従する現象で、鳴き声やにおいもこの学習の刺激となる。他の学習と異なり、一生持続するため、モンスター魔物を使役する一つ的手段として有効だ。

二匹が目を開け、俺の方を向いてくる。これで少しほっとした。二匹は不思議そうに見ているので、手を出して撫でようとしてみる。すると二匹は噛みついてきた。歯がすでにあり、皮膚を突き破って骨にまで達する。二匹は俺の血を、魔力をどんどん吸っていく。おそろく、これが初乳みたいなものなのだろう。丁度いいので契約の魔法を二人に送り込んでおく。

「その歪な化け物は危険だ！　すぐに離れるんだ！」

「邪魔するな！」

「なんだと！　俺は清水の事を思つて……！」

「いいから光輝君は黙つてて。いいんだよね？」

「ああ……今、血と一緒に俺の魔力を吸っている。今は近づかないでくれ。それと魔力回復薬を持ってきて、飲ませてくれると助かる」

「任せて。雫ちゃん！」

「ええ」

北方棲姫と戦艦レ級が俺の両手をそれぞれ噛んで、魔力と血を飲んでいく。八重樫が瓶を俺の口に突っ込み、白崎が治療してくれるお蔭で順調に契約は進んでいる。現状で40%の支配率だ。だが、同時に伝わってくるのは魔物モンスターだからか、それとも深海棲艦だからか、人間に対する深い憎しみが感じられる。それを超えて契約しないといけないのだから、色々大変だ。本当にどうしてこうなった。考えられるのは魔族のアイテムを使ったからかもしれない。

一時間後、白崎と八重樫の協力もあつて無事に契約が完了した。二匹が指を離してくれたが、しっかりと骨まで見えていて、一部の肉は喰われた。白崎が回復魔法を使ってくれたが、しばらくは麻痺や痛みが残るだろう。だが、それでもレ級と北方棲姫を無事に手に入れられたのなら安い出費だ。

「大丈夫、みたいだね」

「この子達、白い髪の毛に魔物モンスターみたいな尻尾があるけど、これって機械みたいだね。それに銃までついている」

「そういう魔物モンスターなんだろう」

「清水、香織と雫がいくら優しいからといって、あまり手を煩わせるな。そんな化け物のような魔物モンスターを連れて歩くのはどうかと……」

天之河が素晴らしいながら、卵の殻を取った。言葉と行動にムツとした瞬間、俺よりも早く動いた者がいた。

「レっ！」

「……ニンゲン……コロス……ホッポノ、カエセ！」

「~~~~~っ!?!」

北方棲姫の生えている尻尾の二匹が天之河の腕に噛みつき、その痛みで卵の殻を落とす。それを北方棲姫は両手のミトンで挟んでキヤツチする。ここまではまだマシだろう。だが、レ級の方がやばかった。レ級の尻尾は天之河の股間に噛みつきこうとする。

「光輝！」

「させるか！ 限界突破アツ！」

天之河がスキルを使ってレ級の尻尾を叩き落とし、レ級達を聖剣を引き抜いて弾き飛ばす。二人は空中で器用に尻尾を使ってバランスを取り、着地する。しかし、所々から血が流れ出ている。

「ちよっ！ 大丈夫なの！」

「ち、治療をしないと！」

傷を負ったせいとか、より赤い瞳を爛々と輝かせる。二人の怒りはさらに増したようで、赤いオーラに包まれる。二人の口元がにニヤリと笑い、剣呑な雰囲気醸し出す。それから尻尾の口から銃口を取り出して天之河に向けている。流石にヤバイので契約を通して止めに入る。

「二人共、止めろ」

「ヤ。コイツ、キライ……ホッポタチ、バケモノイッタ。ダカラ、コロス」

「レ！ レレ！」

二人から赤いオーラが噴き出しているのは才能が最大まで引き上

げられているせいだろう。それで強いを通り越して最^{elite}強化して
いる可能性すらある。

レベル1で勇者の防御力を軽く貫通するとか未恐ろしい。問題は明らかに暴走してこちらの制御を受け付けけない事だ。艦砲だけでなく、艦載機まで出そうとしているのが見える。天之河も聖剣を構えているし、他の面々は戸惑っているが……坂上は拳を構えている。戦いが始まればもう止められない。ここは最終手段だ。

「仕方ない。暴れるのはいいが、まずはコレを飲んでからにしろ」

「レ?」

「ン?」

シユテルが口に啜えて渡してきた惚れ薬を飲ませてしつかりと顔を見る。虚ろな瞳になった北方棲姫とレ級を更に深い契約に落とし込める。人間に対する憎しみよりも、俺の事を大事だと思わせる事ができれば制御が効く。逆に言えばそうじゃなければ討伐するしかない。

「ほら、殻は取り返した。これを食べて俺と一緒に遊ぼう。あんな奴は無視してな。お前達が関わる価値もない」

「レ、レ、レエ〜!」

「ウン、ワカッタ。タベル」

レ級と北方棲姫に卵の殻を別けて食べさせていく。するとカリカリと夢中になって食べていく。北方棲姫の尻尾も天之河の血を舐めとり、そのまま殻を食べる。食べたせいかな、天之河に負わされた傷が回復した。そんな二匹の頭を撫でながら天之河達の方を見る。

「そっちはどうだ?」

「一応、治療はしてるから多分、大丈夫だよ。か、皮の部分だから治せる」

白崎は顔を真っ赤にしながら、できる限り見ないようにして治癒魔法を使っている。どうやら、男性器の皮だけで助かったようだ。腰を引いたから助かったのかもしれない。

「清水、そいつらは危険だ! 処分すべきだ!」

「確かにそうだな。銃を装備している魔物^{モンスター}なんて聞いた事もないぞ」

「こいつらは魔力を込めながらこうなればいいと思っていたからな。ひよつとしたら、俺の天職が関係しているのかもしれない。だが――」

坂上が天之河の事を見てこちらに詰めよってくるが、これは天之河の責任だろう。

「――処分する必要はない。天之河がこの子達を化け物と呼んで、卵の殻を取ったのが悪いだけだろう。魔物全般ではないが、この子達はオルクス大迷宮やそれに似た迷宮から持ってこられた卵だろう。そうだろうか？」

「たぶん、そうだよ。そう聞いたしね」

詳しくはわからないが、断言したのは渡したのがあの二人だからだろう。それはつまり、この卵が召喚アイテムの可能性もある。

「だったら、人間を襲うように刷り込まれて産まれてきた。それを俺の力で誤魔化し、こちらの味方にした。だというのに、そんな風に敵意を見せて暴言を吐いただけでなく物まで取ったら怒るのは当然だろう」

「確かに大人げないよね」

「まあ、しっかりと教育はしておく。しばらく近づかないでくれ。こっちは使う必要がなかった魔物用の秘薬モンスターまで使ったんだからな」

「秘薬？」

「惚れ薬らしい」

「惚れ薬――」

「中身は知らん。ただ、闇術師の怪しい婆さんから買ったただけだ」

「怪しくない？」

「あのまま買わなければ俺が殺されていた可能性もあったからな。俺はメルド団長に伝える事があるから、もう行くぞ。二人に名前をつけないといけないし、忙しい」

二人を抱き上げて移動する。ここはやはりレッチャんとほつぽでいいか。しかし、食事は何がいいんだろうか？ まあ、今はメルド団長に相談しようか。

「メルド団長。この子達と契約した。何かの証明が必要か？」

「ああ。必要だな。しかし、新種の魔物か」
モンスター

「迷宮の近く深くに存在している個体かもしれない」

「一応、ステータスプレートを見てみるか」

ステータスプレートを見ると、種族に深海棲艦。名前に戦艦レ級 f
lagship と北方棲姫と書かれていた。戦闘能力はどちらもレ
ベル1のくせして最低で百。最高で千単位の数値を記録している。
スキルも悪食や射撃、管制射撃や着弾観測など、艦これ基準だが色々
とやばい。しかし、問題もある。この子達の適正は海である。水中で
ある。つまり、地上では艦載機と砲撃くらいしか使えない。魚雷は使
えないのだ。それでも充分に強いのだろうか。

「しっかりとコントロール下にあるようなら問題ない。大丈夫だよな
？」

「天之河みたいにこちらから変な事をしない限りは大丈夫だ。これか
らも言い聞かせておく。ただ、そのためには食事が必要になる」

「なにが要るかわからんが、少し金を渡しておこう。こちらも戦力が
増えるのは助かるからな」

「ありがとう。これで少しは助かる」

「ただ、首輪だけはつけておくように」

「了解」

メルド団長から教えてもらった魔物商の場所へと向かい、そこで
ほっぽとレつちちゃんの登録を行い、首輪を購入。二人に付けてからそ
こで色々な餌を食べさせる。魔物商は売って欲しかったが、拒否
しておいた。

この魔物商で判明したのだが、食事は基本的に鉄や鉱石、魔力を好
む。俺達が食べるような物も燃料になるようだ。だが、あくまでも補
助のようだ。鉱物と魔力の方が回復する。なので鍛冶屋とかに向
いて要らない廃棄品や鉄くず、鉱石の屑を貰って二人に与えたら山
のような物を一瞬でペロリとたいらげた。

それから、二人に使う必要な物を買いに店に行く。その後、宿に

戻って二人に言い聞かせながら身体を拭いてやったり、一緒に寝たりしていく。二人の身体はひんやりして気持ち良く寝られた。

「れ、れ、レエ〜」

「オキテ。オナカヘツタ」

「ん？」

目が覚めると少し大きくなった二人が居たが、気にせずに食堂へと連れていく。そこで食事を注文して二人を膝に乗せ、食べさせていく。皿ごとテーブルもパクリと食べたので、しかっておく。次からはちゃんと料理だけを食べてくれた。天之河は治療が終わり、突っかかってこようとしたが、威嚇する二人に他の奴等が止めたので事無きをえた。

天之河が居なければ二人は基本的に大人しかった。

食事が終われば王都へと出発。馬はほっぽ達を怖がり、動かなかつたが、俺の魔法で操って強制的に動かした。まあ、途中でしつかりと問題ないと言い聞かせたのでそんな必要もなかった。

途中で現れた魔物モンスターはメルド団長に頼んで戦わせてもらった。二人に頼むと相手は蜂の巣に……なんてことはなく、普通に殴り倒して尻尾と自分の口でパクパクと骨まで食べてお腹を叩いていた。それを見て天之河や男子が顔を青ざめさせていたが、俺も同じだ。

「れ〜！」

「ホメテ、ホメテ」

「ああ、よくやった」

褒めてやると、両手をあげて喜ぶ二人にちよつと和む。白崎と八重樫をはじめとした女性が恐る恐る食べ物あげている。餌付けされたようで、二人は俺の膝の上でくつろいでいると身体に触る事を許す。それ以外の時は尻尾で迎撃されるが、貰った分だけ扱いが優しくかった。

そして、まだお腹が空くのか、王都へ帰るまでの間にあった邪魔な物……魔物モンスターや馬車から伸びる道から外にある木々とかがなくなつて道が広くなつたりもした。ただ、深海棲艦なだけあって、定期的に水をかけないと肌が乾いて機嫌がかなり悪くなる。そうなると禁止さ

れた物以外を手当たり次第に食べるので、水を大量に与えておけばいい。ぶつちやけ言うが強いが色々と制約が多い。弱点もある。火に弱い。土も水分が失われるから弱い。風も乾燥する。

結論、深海棲艦を地上で運用するものじゃない。燃費がくそ悪くて使いづらい。可愛いから許すが。

第38話

蠟燭の光で照らされた暗い世界。気がつけばそこに戻っていた。ここに太陽の光はなく、吊り下げられている身体を支える両手と両足に縄が体重で食い込んで痛い。背中に乗せられた沢山の蠟燭が、蠟を垂らして素肌を焼いていく激痛。声を上げて悲鳴を出そうにも、口を開いた状態で固定する口枷を嵌められている。そして開いた口に色々な物を入れられていた。

「さあ、本日は爪を剥ぎましょう。口に入っている物を落としたらお仕置きですからね」

「お仕置きは水責めでいいか」

銀髪のメイド服を着た女と金髪の貴族の男。その姿を見て恐怖が湧き上がってくる。爪と指の間に針が入れられて無理矢理外されていく。激痛にすぐに口の中のを放り出して悲鳴をあげると、鞭が胸や股間に飛んできて、痛みに呻いていると二人が笑いながら鎖を下げ、傷だらけの私を下に置いた水槽へと入れていく。

傷が水に触れる激痛と電撃による感電で絶叫を上げながら、必死に助けを魂願するけど許してもらえず、気絶しても何度も何度も行われる。反応がなくなってきたら、回復魔法が使われて強制的にもとの状態へと戻される。救いなんてない地獄に私は戻っていた。

「いやあああああああああああつ!!」

絶叫を上げて身体を起こし、ガタガタと震える身体を両手で押さえる。歯がガタガタと打ち合っって音を響かせていく。全身から嫌な汗が沢山流れでている。

「いや、いやあ、やめて、たすけてえ……」

「優花、大丈夫だ。安心しろ」

腕を引っ張られて倒れ、抱きしめられる。混乱して悲鳴を上げながら助けを求めていく。

「平気じゃないね」

「お水だよー」

「え？」

灯りがつけられて、温かい声に周りを見ると、そこにはすぐ近くで心配そうに見ているご主人様の顔と、服も着ずにこちらを心配そうに覗き込んでいる皆の姿。

「ゆ、夢……」

「そうだ。もう助かったんだ」

その言葉と身体を優しく撫でられる感触でだんだんと震えが収まっていく。落ち着いて周りを見ると、あの地下室のような場所ではなく、調度品が整った場所で壁際にある魔法の光が部屋全体を照らしている。そんな部屋のほとんどを埋めているベッドの上で服を着ずに私は居た。

「よ、よかった……」

安心したら、色々と思いだしてきた。昨日はご主人様に抱かれたんだ。身体中を舐められたり、身体の中を掻きまわされたり、鈴達は気持ちいと言っていたけれど私には気持ち悪さの方が勝った。それでも機嫌をそこねてしてくれないと捨てられるかもしれないから、必死でご主人様を楽しませるために我慢した。それにご主人様が助けてくれたから、あの地獄から抜け出せた。あのままだったら、あいつや檜山に買われてまた拷問される生活に戻っていた。そこから助け出してくれたのだから、心や身体をあげるくらい拷問されるよりも全然ましだ。

天井の染みでも数えていたら終わるって聞いた事もある。だから、それをやろうと思ったけれど本格的にされだすと色々な物が混ざってわけがわからなくなっただけで気が付けば……あの地獄に居た。

「よかった……もう、あそこじゃない……」

安心したら身体から力が抜けて――

「あっ、いやっ、止まって……」

「これは風呂からだな。掃除を頼む。俺は優花を風呂につれていくる」

「任せて〜」

「うん。まあ、これは仕方ない」

「ご、ごめんなさい……」

——粗相をした。それからお姫様抱っこで抱き上げられ、隣にある風呂場へと連れていかれた。そこで身体を綺麗に洗われる。自分で洗いたいけれど、ご主人様のしたいようにしてもらって楽しませるのが奴隷である私のできることでって教えられた。それを破ると身体が拒絶反応を起こしてパニックになるぐらいにされているのが自分でもわかっている。止めたくても止められない。捨てられないとわかっていても、心と身体が拒否する。

「夢か？」

身体を洗われてから、湯船に移動して温まる。男性の膝の上に乗せられて、身体を預けるなんて前からは想像もできなかった。

「う、うん……捕まって拷問されている時の夢が……」

「やはり、そう簡単にはいかないか」

「ごめんなさい……たぶん、次も寝たらああなると思う……だから、私一人にして欲しい、です……皆に迷惑をかけちゃうから……」

「却下だな」

「な、なんで……」

「まあ、確かに夜中に起こされるのは問題だが、優花のせいじゃないかな。皆、理由はわかっている。誰も怒らないさ。さつきだってそうだったろ？」

「でも……」

「そうだな……俺と後一人か二人、優花と交代で寝よう。優花が克服するまではそれでいいだろう」

それでも皆に迷惑をかける。この年でお漏らしまでしちゃってるし、身体を色々と改造されてしまっている。

「む、無理……克服なんてできっこない」

あんなものを克服なんてどうやったらいいかわからない。考えるだけでも、思いだそうとしただけでも恐怖が心の底から湧き上がってくる。

「いや、できるさ。任せてくれ」

「ほ、本当にできると思ってるの？」

「ああ。優花は克服できると信じているし、そうだな……じゃあ、賭けをしないか？」

「賭け？」

「そうだ。優花がトラウマを克服できるか、できないかの賭けだ。こう言ったら愛歌みたいになるが、俺が優花を助ける王子様になる」

「お、王子様？」

愛歌っていうのはご主人様の名前と似ているけれど、別人なんだよね。

「夢の中だつて颯爽と現れてしつかりと助けてやる。だから、俺が勝ったら優花の全部をくれ」

「もう全部あげてるよ。心も身体も、全部。捨てないで飼ってくれたら、私の事、本当に好きにしてくれていいから」

「いや、それだけじゃなくて未来もくれ」

「え？」

「これから何年経っても、死がふたりを分かたずずっと一緒に居てくれ」

「そ、それって……プロポーズ……？」

「俺はちゃんと責任を取るからな」

「私なんかでいいの？ 汚されて穢れてるよ……？」

「穢れてなんかいない。優花は綺麗なままだよ」

ご主人様の目を見ると、本気で言っているのがわかる。檜山みたいな軽い無責任な言葉でもない。嫌悪感も感じないし、これから死ぬまですつと一緒だと想像すると……別に悪くない。むしろ、嬉しい、かも。

これなら賭けなんてしなくても別にいい。今のままでも構わない。でも、それだとトラウマを克服してないから、ずっと、ずっと迷惑をかけることになる。それは嫌だ。

これは私がトラウマを克服するために提案してくれたことで、すで

に全部をあげているのだから、ご主人様に得なんて一切ない。それでも、こう言ってくれているんだから、頑張ってみようかな。

「うん。わかった。でも、私が無理だったら、どうするの?」

「それだったら、なんでも一つ、優花の言う事を聞こう」

「なんでも?」

「ああ、なんでもだ。優花の人生を全部もらうんだから、それぐらいのリスクは負うさ」

「そっか。じゃあ、私が勝ったらユーリ達と別れて」

「え」

「そして、私だけを見て」

本当はそんな事を望んでいない。でも、こうする事でご主人様の本気度がわかる。

「むう……ユーリ達と別れる、か」

即答せず、真剣に悩んでいる。それだけ、皆を大切にしているって事なのか、それともハーレムを手放したくないだけか。

「わかった。ただし、ユーリ達の生活に関わる事は関わらせてもらおう。魔力の提供とかは絶対に必要だからな」

「本当にいいの? ご主人様の立場なら、私の願いなんて無視できるよ?」

「それでもだ。それに負けるつもりは一切ないからな」

「……わかった。じゃあ、その賭けに乗る。私をちゃんと救い出してね」

「ああ、任せろ」

身体を預けて、ふと思いついたので不敬だろうけれどこれぐらいはいいと思う。そつと頬にキスする。

「さて、夢に入る方法をどうするかだ」

「ノープランなんだ」

これは本当に私達が支えないとまずいのかもしれない。

「いや、切り札はあるんだ。だが、清水にプレゼントするのに使ったから、少し時間を置かないと駄目だ」

「そういうことなら、ルサルカお姉ちゃんにまっかせなさい」

「っ!?!」

風呂場の扉が開いてお姉ちゃんが入ってくる。いや、それだけじゃなくて皆も居る。ユーリ様も居て、こつちに来るとご主人様に抱き着いた。

「お兄ちゃん、絶対に勝たないと許さないですからね! 絶交です。離婚です……嫌ですからね?」

「ああ、わかってるよ」

「そうだそうだ!」

「うむ。ユーリを悲しませるなら、殺す」

「致し方ありませんね」

「おい」

「駄目ですよ」

「冗談だ」

「はい。精々お仕置きするぐらいです」

「お仕置き……そういえばお尻叩きをしていなかったな」

「ハジメさんにグリグリされたので許しては……」

「許そうと思ったがやめた」

「折衷案です。エッチしながらしましょう」

「……まあ、それならいいか」

楽しそうにわいわい話している中、鈴と恵里がやってきて抱き着いてくる。二人の幸せを壊すような事を言ったから怒られるかも。

「大丈夫だよ。真名君がやるって言ったなら、やり遂げるしね」

「うん。大丈夫。僕達はほとんど気にしていない。気にしているのは無茶ないかって事。サクリファイスして解決とか、認めないから」

「だから、私にまかせなさいって。夢に介入するだけでしょ? 余裕

よ、余裕。魔女なめんなっての」

「方法は?」

「とりあえず、二人がエッチして心を一つにするでしょ? そこから感覚共有を通じて一緒の夢を見る。そして、介入すればいい。この場合、拷問されている時にカッコよく颯爽と乱入して助けるだけ。問題は相手があのメイドって事ね。現実ほどじゃないにしろ、くそ強いで

「しょうね！」

「そうなの？ 夢なら勝てそうだと思うけど……」

「夢っていつても、優花の夢だかね。心の底からメイド達に恐怖を植え付けられているから……その強さに比例するわ」

「つまり、私の心の持ちよう……」

「ハリー・ポッターでいうモノマネ妖怪か」

「ばかばしいって奴……それなら知ってる」

ハリー・ポッターは有名だし、私も読んだ。

「あー一番強い助っ人をよんでもいいか。お〜い、どうせ起きて聞いているんでしょ。アンタも手伝いなさい。そうしたら、アンタの王子様も来てくれるかもしれないわよ？ アンタも私と同じように変わっていかないよ、本当に来ても逃げられちゃうぞ〜」

誰に言っているのか、わからない。そう不思議に思っていると、どこからともなくお姉ちゃんの上に水が降って来た。

「つべた!?! なにするのよ!」

「五月蠅いわね。余計なお世話よ。それよりもアストルフオをどうにかしなさい! こっちは抱き枕にされて困ってるのよ!」

ご主人様の口が勝手に動いたのか、ぜんぜん違う声がでてくる。

「あ、そっちに行ってたのか」

「そうだそうだ〜ボクだってマスターと寝たい!」

「あ〜」

「というわけで、アストルフオも一緒に寝る日を一度は用意しなさい。このままずっと私が抱き枕にされてるとか、コイツを消し飛ばしたくなるわ。それは困るでしょう?」

「ああ、困る。だが、こちらも優花の事で忙しい。そうだな、お泊りでアストルフオと遊ぶ一日を作る代わりに、優花の事を手伝ってくれ」

「夢に入る程度、貴女でも簡単でしょうに」

愛歌がルサルカを見詰めながら告げてくる。確かにルサルカならそういう力は持っているもおかしくはない。

「いや〜そうなんだけどね? 私ってほら、拷問具を使うでしょ? そうなると優花の心が……」

「逆に考えなさい。優花が拷問されるんじゃないやなくて、優花が拷問するのよ」

「なるほどー！」

「後はマスターに優花を優しく拷問させて、S Mプレイとして上書きでもしたら大丈夫じゃない？ あと、夢なんだからユーリも連れていきなさい。完全体のその子が相手なら、優花が考えられる程度の強さなんて意味ないし、物理的に改竄だってできるわ」

「……なんという力技だな」

「やりましょう。ディアーチエ、シユテル、レヴィ。準備してください。スピリットフレアもできましたし、紫天の書も大丈夫です。久しぶりに全力全開で暴れます！」

可愛らしく力拳を作る。ユーリ様。どこにそんな凄い力があるのかわからない。でも、誰も疑問に思っていない。大丈夫なのかな？

第39話

方法が決まればすぐに実行する。といっても、優花は自分からは寝られない。だから、体力の限界まで責めて気絶するように眠ったところで、ユーリ達と憑依、融合して優花の中に入る。ルサルカと愛歌も協力してくれるので、スムーズに優花の中へと入れたが――

「なんだこれ？」

――目の前には優花に似ている大人の女性と小さな優花が幼稚園とかに通っているであろう視界が映った。その前には母親に抱きしめられているであろう、小さな優花のぼやけた視界まである。

「優花さんの記憶ですか？」

「……ユーリの力が大きすぎて座標が狂ったわね」

「まあ、問題ないでしょう」

俺の近くに居るユーリ、ルサルカ、愛歌の三人がそう言うってくるので問題ない。ここは本当に優花の記憶みたいで、無数の泡のようなもの一つには鏡に映った小さな優花の姿があった。

「これら一つ一つが園部優花を構成している記憶だから、触れたら彼女の全部が見れるわ。ただ、攻撃したら壊れるからお勧めはしないわ」

「ありがとう、愛歌」

「全部、アーサーと再会するためよ」

そう言って愛歌は進んでいく。ルサルカはやれやれと言った感じで進み、ユーリが手を差し出してくるのでそれを握り返して共に進んでいく。

「夢とは寝ている時に記憶を整理していると発生します。普通ならすぐに忘れるのですが、優花さんの場合は拷問された事により、鮮明に残ったイメージが悪夢という形で彼女を蝕んでいます」

「拷問されたのだから無理はない」

「魔術……魔法を使ってまで細工されているわ。的確に優花を追い詰

めるようにね」

「うわあ」

こういうのが得意なルサルカが言うのなら、事実なのだろう。しかし、あれだ。他人の記憶を見るというのは完全にプライベート無視だな。優花の秘めたい物まで全部見ている。風呂やトイレはもちろん、着替えも含めて恥ずかしい失敗までなんでもだ。

学校で女子が赤裸々に語っている事や、優花は関わっていないが八重樫がやられていた陰湿な虐めなどなど、男が知ってはいけないような事だつて多い。他には一生懸命に小さい頃から両親を手伝う可愛いらしい優花の姿などもしっかりと見れた。

高校になつたけれど、優花とは少し挨拶するぐらいだ。当然、俺の事をなんとも思っていないし、むしろ好きより嫌いぐらいだ。

「ここからが問題ね」

「そうだな」

「トータス召喚ですね」

俺達がトータスに召喚されてからはそこまで変わらない。そして、俺とハジメが奈落に落ちた時に助けてから、色々と気にしてくれていたようだ。天之河の事は色々とムカつく。しかし、それよりもイラついていたのが檜山や貴族達だ。ユーリ達も声には出していないが、イラつきを感じている。

それから、優花がやり過ぎたのがわかった。愛ちゃん先生もやりすぎているが、彼女の場合は作農師というレアでチートな職業があるから大丈夫だったようだ。それに優花と違って愛ちゃん先生はちゃんと仕事をこなしている。これも見逃せられた理由の一つだろう。

そして、檜山と貴族が暗躍して優花が冤罪で捕まり、取り調べの後に拉致されたらしい記憶になった。優花が捕まったのは貴族の仕返しもあるのだろう。

映像の中で気になったのは檜山が優花に迫っている時のだ。その映像をしっかりと見ながら解析する。怒りが湧いてくるが、常に冷静に心がけて切り離す。

『解析が完了しました』

美遊と協力し、映像を解析すると……檜山が優花が動揺している間に服へコッソリと何かの欠片を入れていた。どうやら、迫っていたのはこういう役割もあったようだな。

「若いからしかたないわね」

「あはは」

そのまま進んでいくと、捕まった優花がメイドと貴族によって拷問されていく。ただの女子高生である優花が耐えられるはずもなく、すぐに落ちた。それから調教されていくのだが、悲惨な事はかわらない。

「ぬるい。全然なっていないわね」

「え、十分に酷いと思いますよ……?」

「常に希望と絶望を味合わせないといけないのに絶望ばかりじゃ、完全に心を壊せていないわ。だから、まだ治療できる。これじゃあ、ただのストレス発散じゃない。私なら——」

ルサルカが語っていく内容はおぞましいものだった。絶望の中に希望を与えて、それを目の前で壊したり、わざと助けだして、助けにきた奴を捕らえて目の前で拷問し、優花に殺させるなど……かなり引く内容をトリップして語っていくのだ。本当にやばい奴だ。

「優花や俺達で絶対にやるなよ」

「やくね、わかってるわよ。裏切られない限りはしないっての」

「逆に言えば裏切ったらするんですね?」

「当たり前じゃない。裏切りは別にいいけれど、たつぷりと調教して戻してあげるの。真名が要らないっていうんなら、別にいいけれどね」

「まあ、それなら……」

「いいのか?」

ユーリの言葉に驚いているが、ユーリはなんでもないように答えてくれた。

「私達がお兄ちゃんを裏切る事はありませんよ。お兄ちゃんが道を踏み外したら、戻しますけれど」

「それは裏切りではないの?」

「違いますよ?」

「まあ、解釈次第よ。それよりも……」

愛歌の言葉で視線を記憶にやると場面が変わっていた。その画面では優花は地面に降ろされて出された皿に乗せられた汚物のような残飯を四つん這いになって口だけで食べていた。そんな優花の頭を誰かが踏みつけ、蹴りつける。

『おせえっ!』

転がされて呻く優花は首の鎖を引っ張られ、首が締まって必死に蹴り飛ばした奴の場所に移動し、涙と苦痛で視界を歪めながら見上げる。そいつは貴族やメイドではなく、檜山だった。檜山は優花の背中に鞭を振るい、苦痛に泣き叫んで許しを請う優花を見て笑っている。『大人しく俺の女になってればこんな思いをしなくてよかつたのになあ?』

『ご、ごめんなさい……いうこと、聞くから、ゆるして……あがあっ!』
『遅いんだよ! あの時蹴られた痛みの分、たっぷりと虐めて誰か主人か教え込んでやる!』

『ひっ!? ごめんなさい、ごめんなさい、許してっ!』

『許して欲しければ舐めろ。お前のせいで汚れただろ。笑ってご主人様のを舐めろ。そうしたら許してやるかもな』

『……あ……はい、ご主人様……喜んで……舐めさせて、いただきます……』

口元に出された靴を舐めだす優花に、遅いとか汚いとか言って鞭を振るっていく檜山。その姿に我慢が出来なくなった俺とユーリは手を出そうと力を入れる。

「まだよ」

「だがっ!」

「これは記憶によって構成されたこの世界の現実。私達が入り込む事はできないわ」

「優花を壊さないように助けるのなら、彼女自身が悪夢に打ち勝つ為にやらなければいけない事があるの。感覚共有でもっと深い場所にいきなさい。そうすれば介入できるわ。ここに映っているのは所詮、

記憶なの。優花は居ないわ」

愛歌とルサルカに言われ、感覚共有を全開にして優花と重ねていく。すると卑屈になった心や恐怖、苦痛などで染まり切っているのがわかる。

『もつと奥にいかないといけない。でも、それはご主人様も傷付いて戻れなくなるかもしれないです』

『気にしない。やってくれ』

『わかりました』

美遊の力も借りて、深度を更に深めて優花の全てを受け止めて受け入れる。何時の間にか、真つ暗な場所で無数の手に捕まれて押さえつけられるような感覚に襲われる。それを払いのけ、どんどん潜っていくと優花の姿が見えた。小さな幼い優花が必死に欠片のような物を拾い集めては隣に現れているメイドにバラバラにされている。

「優花っ！」

「あつ……ごしゅ、じん、さま……」

俺の言葉に手を伸ばしてくるが、その前にメイドが立ちふさがる。そのメイドは天使の翼を展開し、俺を見てニヤリと笑ってくる。

「こんなところまでようこそお越しくださいました。貴方はこの異端者を助けるつもりなのでしょうか？」

「そうだ」

「ならば、貴方も異端者です。異端者は排除しなければなりません」

メイド天使が光の剣を作り出し、構える。それを見た優花が必死でメイド天使に抱き着いて止めようとするが、こちらに蹴り飛ばした。くの字になりながら吹き飛んでくる優花を抱き留める。その瞬間、首に背後から何かがあたった。

「断罪の剣を防いだ？　ですが、無駄です」

振り返ると背後に剣を俺の首に振り下ろしている姿が見えた。俺と剣の間には障壁が展開されている。これは鈴から蒐集した結界の効力だ。だが、それもすぐに壊される。結界や障壁を次々に貫通してくるメイド天使の攻撃はすぐに止まる。

「ルシフェリオン・ブレイカー」

極大の赤い本流が俺の身体から瞬時に展開されて放たれる。ほぼゼロ距離から受けたそいつは転移して距離を取り、事無きを得る。

「甘いわー！」

だが、その直後に俺の身体からデアーチエのジャガーノートが放たれ、無数の黒い球体が生成。光線が放たれて対象に重力崩壊を起こさせる。相手は即座に転移を連続で行って、離れた後は空間に無数の剣を生み出して放ってくる。

「ユーリ、皆。天使は任せた」

「はい！」

身体からユーリ達が出て来た戦闘を開始する。その間に俺は優花の状態を確認する。小さな子供の優花は嬉しそうに俺に抱き着いて身体を擦りつけてくるが、大きくはならない。

「その子が拾い集めてた欠片を集めなさい。それがその子の心を助ける事になるわ」

「わかった。頑張れるか？」

「うん……だ、大丈夫です……」

優花と一緒に欠片を拾い集めるが、空では激しい戦いが繰り広げられている。ユーリ相手に相手は転移を繰り返してこちらを狙いつつ、ユーリの行動を制限する。それによってユーリは相手を倒す事ができていない。また、あまり全力を出すと優花が完全に壊れる危険性が多分にある。

「ルサルカ、アイツ……本当に優花の夢の存在か？ 明らかに強すぎないか？」

夢とは優花が見て想像したものだが、記憶を見た限りでは転移能力を使えるはずもない。何せ、優花はそれを見ていない。俺達から聞いたとしても、それ以外に様々な能力を使っているし……なによりも奴からは魂を感じる。

「アレは優花の夢じゃないわよ。アイツはあのメイドその者ね。おそらく、優花に焼き入れた異端者の烙印に入れていたんでしょね。優花の心を完全に破壊し、浸食して成り代わるために」

「最悪だな」

檜山も何か細工がされている可能性もあるが……どうでもいいな。アイツは殺す。それだけだ。そう思いながらも、子供の優花に欠片を渡していくと、だんだんと球体になってくる。所々欠けて罅もあるが、それでも優花は嬉しそうに胸に抱いてお礼を言ってくる。

「ありがとう、ご主人様……」

頭を撫でてやると、欠片の球体を胸に押し当てると子供だった優花が元の姿に戻っていく。元に戻った優花は俺に抱き着いてきた。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないけれど、壊れた部分はご主人様たちで埋めるから大丈夫」

「まあ、これだけ激しい戦いをしていたら優花が持たないわね」

空はユーリが空間転移を力尽くで空間を握り潰して拘束し、エンセントマトリクスを抜いて思いっきり振り下ろす。一刀両断された天使は身体を半分にされながらも再生し、メイド天使が二体になるが、即座にユーリの手が空間を超えて二体の心臓を握り取る。まるでシヤマルの魔法みたいだ。闇の書に居たユーリが使えても不思議ではないか。

「紫天の書。蒐集してください」

「無駄だ。我等を殺したところで第二第三の我等が……」

「おわかりですか。構いません。全てを滅ぼしてあげます」

ユーリは激おこのようで、新たに現れた二体を瞬殺する。そのせいか、コントロールを間違えて世界がやばい。

「とりあえず、ここは任せて優花を連れて上にいくわよ」

「わかった」

優花をお姫様抱っこで抱えあげる。すると優花が暴れ出した。

「わ、私は自分で立てるから……」

「お姫様は大人しくしている」

「うう……馬鹿あ……」

恥ずかしがっている優花を連れて牢獄のような暗闇から抜け出す。暗闇からは逃がさないと無数の手がやってくるが、ルサルカが拷問城の食人影を発動して妨害と補強してくれる。優花の夢にル

サルカの領域として法則を塗り変えて崩壊させないようにしてくれたのだ。

「道先案内は愛歌、よろしく！」

「面倒だけれど……その天使の魂でアーサーのチャレンジをするのならいいわ」

「してやるから頼む」

「ならいいでしょう。こっちよ」

ルサルカの拷問城チエイテ・ハンガリア・ナハツエーラーの食人影は、優花の世界を城へと変えた。そこを優花を抱えながら空を飛んで愛歌の誘導に従って移動する。

「次の突き当りを右。そして、三つ目の燭台のある壁を叩き壊して地下に進みなさい」

「わかった」

曲がってから壁を蹴って粉碎すると地下への道があった。その先へ進んでいくと、地下牢のようで無数の手が牢屋から伸びてくる。これはルサルカが捕らえている魂なのかもしれない。

そのまま進むと、重厚な扉で守られた場所がある。その前には貴族の男が立っていて、こちらに剣を向けてくるが――

「邪魔よ」

――愛歌が顔面を蹴り、扉に埋め込んでその扉ごと破壊した。魔力放出と魔術による肉体を強化しての一撃か。

「な、なんだっ!？」

部屋の中はあの拷問部屋のように、檜山の姿と踏みつけられている優花の姿があった。だから、思わず接近し、全身の魔術回路と炉心に火を入れて魔力で強化しまくった状態で愛歌を真似て魔力を放出しながら蹴る。檜山もろとも壁に足が埋め込まれて次々と壁が壊れた。

「加減をしなさい」

「つい……というか、優花が二人？」

「これは記憶の彼女よ」

記憶の優花という事だが、もしかしたらルサルカや愛歌が優花を助けるために細工してくれたのかもしれない。もしくは、あの欠片だけでは助けられないということだろう。

「ほら、さっさとその子を回収しなさい」

「ああ。いけるか？」

「……平気……これも私だから……」

優花を降ろすと、踏みつけにされていた優花は恐怖で頭を抱えてしやがみ込み、謝り続けている。そんな彼女を俺が連れて来た優花が抱きしめ、支えると支えられていた方の優花がもう一人の優花の中へと消えていった。優花は堪えたように泣きながら俺に抱き着いてきた。

「てめつ、よくもやってくれたなっ！」

壊れた壁の向こう側から檜山が走ってくる。その手には光り輝く細身の剣が握られている。負った傷も瞬時に再生されているようで、これは良い感じだ。

「殺したと思ったが……」

「あの武器ね。天使が用意したものよ」

「まあいい。こいつは偽物か？」

「本物じゃないわね」

「そうか。優花、どうする？俺がやってもいいが、優花がやるか？」

「私が、やったら、克服できるの、よね……？」

「そうね。すくなくともコイツに恐怖はなくなるんじゃないかしら？」

「そっか……うん、やるよ。力を貸して」

「任せろ」

こちらに向かってくる檜山の前で優花を抱きしめ、軽くキスする。アイツは案の定、激怒した。

「そいつは俺のだー！」

「残念だったな。優花は俺の女だ。チェインバインド」

拘束魔法で生み出した無数の鎖。それで檜山を拘束してつんのめる檜山の頭を殴りつけて、鎖で引き寄せ、また殴る。しばらくして動けなくなった。これでどう足掻こうが、魔力の量が違うし引き千切れない。なにより檜山が持っていた剣も回収した。まあ、この世界でしか使えないだろうが。

「これで準備は完了だ。問題は優花だが……」

優花は拷問具の道具を触ろうとして、触れていなかった。短剣や剣も駄目みたいだ。散々斬りつけられてもいたから仕方ない。しかし、刃物が使えないのは致命的だ。料理人になるのなら尚更だ。

「優花」

「どうしよう……持てないよ……これじゃあ、私……」

「大丈夫だ」

「え？」

優花を抱き起こし、振るえる手に優花のだろう血に塗れている短剣を握らせる。そして、拘束してある檜山の近くに連れていく。

「俺としては優花が克服できなくても構わないが、それだと優花の夢が叶わない。それにずっと怯えて過ごすというわけにもいかない。だから、今からやる事を恨んでくれてもいい。俺が優花の身体を操って檜山を刺す」

「やめろっ！ お前にそんな事できるはずない！ それよりも俺を助けろ！ さもないとまた酷い目に会うぞ！」

「っ!？」

「優花。大丈夫だ。優花はこれからずっと俺と一緒に居るんだ。俺も守るし、ユーリ達も守ってくれる。それに夢があるのなら協力だつてする。だから……いや、ここは優花がどうしたいかだな。どうする？」

「わ、私は乗り越えたい！ 夢も諦めたくない！ だからっ！」

「わかった。やろうか」

「んっ！」

横から優花の手を包んで一緒に短剣を握り、優花と共に檜山の腹へと振り下ろす。短剣は少しの抵抗があった後、しっかりと肉を切り裂く感覚と共に刺さって途中で止まった。おそらく骨にあたつたのだろう。

「っ〜っ！」

「ふぐうううっ!？」

優花と檜山が悲鳴を上げる。俺は檜山を無視して気持ち悪そうに

している優花を力強く抱きしめて背中を撫でる。

「そんなんじや駄目よ。まだ生きてるじゃない」

「愛歌……今は……」

「このままじゃ、その子は駄目になるわよ。私は別にどうでもいいけれど、貴女ももつと頑張りなさい。今度は自分でナイフを横にして振り下ろすの。貴女の夢は料理人なのよね？ だったら、目の前のお肉をしつかりと調理しないと駄目よ。この世界では加工してくれる人はいないわよ。貴女がこれから担う役割から考えると、モンスター魔物を解体して調理できるようにならないといけないでしょう……？」

クスクスと笑う愛歌の言葉に優花は顔を青ざめさせる。俺も顔を青ざめさせながら愛歌を睨み付け、止めようと手を伸ばすが、優花が震える手で俺の腕を掴んで止めてきた。

「だ、だいじよ、うぶ……わ、私は……やれる、から……」

無理しているのはわかるが、それでも優花の意思を尊重する。それが優花のためになるから。

「そうよ。それでいいの。そいつをしつかりと解体できたら、私がご褒美に力をあげましょう。その程度の奴に捕まったりしない力をね」
「代償があるのか？」

「もちろんよ。女としての尊厳はなくなるかもしれないわね」

「なら駄目だ」

「いい。力が貰えるなら、そんなものどう……でもいい……私には、もうそんなものはない……から……」

「そんなことはない。優花は——」

「ご主人様……が、ちゃんと扱ってくれるのなら……それだけでいいから……」

「——優花……なら、せめて俺も一緒にやる。それぐらいはいいだろう？ それにこれは俺にとつても必要な事だ」

「まあ、いいでしょう。マスターはまだ人を殺したこともないものね。モンスター魔物もだったかしら？ いえ、ベヒモスは殺したわね」

俺が自分で人を殺すのは初めてだ。というか、モンスター魔物も基本的にアストルフオヤルサル力が俺の身体を使って殺してくれているので、俺

自身は命令して後ろから見ていただけだった。だが、身体が治ったのだし、これからの事を考えると確実に人を殺す事になる。それを鈴や恵里に強要したのだから、俺がやらないわけにはいかない。

こちらを絶望した表情で涙を浮かべながら見詰めてくる檜山は助ける気が無い事がわかって必死に暴れ出す。俺と優花は気持ち悪くなりながらも一緒に短剣を握り、檜山の身体に突き刺す。今度は横向けにしたので骨にあたったが、そのまま角度を変えると奥へと入り込んで柄に触れるまで深く刺さった。当然、檜山が絶叫を上げていく。「暴れないように両手と両足から……いえ、貴女がやられたようにやっていけばいいわ」

「……私は……復讐したいわけじゃない……こいつらとは同じになりたくない……」

そう言つて、今度は優花自身の誘導で心臓を突き刺す。檜山は痙攣した後、動かなくなった。愛歌はつまらなそうに見ているかと思つたが、彼女を見るとそもそも興味がなかったようで、爪の手入れをしていた。そんな愛歌の後ろには召喚用の魔法陣が何時の間にか書かれている。Fateの奴のようだが、他にも混ざっているみたいだ。その魔法陣を見ただけでそんな内容が理解できてしまうので、天職とは本当に恐ろしい。

「うっ……」

優花が吐きそうになっているのが、感覚共有を通して伝わってくる。俺も同じく気持ち悪いが、我慢して解体する。幸い、これが夢だから汚物は出ない……と思つたら、普通に出た。それで更に気持ち悪くなった。

何度か吐きながらなんとかやっている、ルサルカが悲鳴を上げて泣き叫びながらやってきた。俺をみつけるなり、抱き着いてくる。

「助けて、助けて真名あああつ！ 死にたくないっ、死にたくないのっ！」

「おい、どうしたんだ？」

「ユーリが、ユーリがあつ」

「ユーリに何かあつたのか！」

「ユーリに私が殺される！」

「本当に何があつた？」

「私の聖遺物がどどん壊されてるのよ！」

「あくなるほど」

エイヴィレカイト

永劫破壊で契約した聖遺物と一体化し、形成で聖遺物を実体化させるのだが……その聖遺物が壊された場合、不老不死ではなくなり死ぬ。しかし、ルサルカの場合は拷問帳に登録されている多数の拷問器具を壊されない限りは大丈夫だが……ユーリの破壊に巻き込まれると壊される。そして、この城そのものがルサルカの世界であり、拷問具も多数配置されているのかもしれない。

「解除していい！ いいわよね！」

「解除したら、その子が壊れるわよ」

「どういうことだ？」

「どうもこうも、ルサルカが上書きした世界でユーリが戦っているから大丈夫なだけで、もとの夢に戻ればその子は夢の崩壊と同時に消滅して植物状態よ」

「助ける方法は？」

「これ以上は代価が要るわ」

「何が欲しい？ アーサーはすぐに用意できない」

「あの天使の魂で手を打つわ。アーサーを呼び出したいからね」

「なるほど、ガチャ百喚か」

「ええ、そうよ。出た物で彼女を補強するわ。そうね、マスターの言葉でいうデミサーヴァントに近い存在にするの。それで彼女は崩壊する事はないでしょう」

デミサーヴァントとはアストルフオ達と融合させる事だ。常に憑依した状態になり、別れる事ができない。

「優花、いいか？」

「大丈夫。それが解体した……報酬なんだよね？」

「ええ。貴女に力を与える良い子を選んであげるわ」

「なら、お願い。私はもう弱いままは嫌。拷問されたくない……人に、もどりたい……」

「愛歌、頼む」

「契約成立ね。じゃあ、ちよつと倒してくるわ」

愛歌が消える。次の瞬間にはまた現れ、手にはメイド天使を持っていた。そいつは無数の鎖で拘束されており、驚愕の表情をしていた。そして、隣にユーリも現れる。俺達を見るとホツとした表情をしてこちらにやってきていた。

「ご苦労様。で、どうだった？」

「無限復活が厄介でした。倒しても倒しても復活してくるんです」

「それは……」

「魂を捕らえないからよ。ルサルカが居たらすぐだったでしょうね」

「魂に関するアプローチ方法が欲しいですね。私には永劫破壊エイウエイヒカイトは使えませんから……」

「ユーリその物が聖遺物と言えるからな」

「……それならお兄ちゃんと契約すればいけるかもしれませんがね……」

ユーリと契約か。美遊との二重契約になるから、普通は無理だが……聖杯の願いを叶える力と、俺の身体がユーリの物を元になっているから不可能ではないかもしれない。聖餐杯だって聖槍を召喚しようとしていたし。

「さて、契約通りにコイツは貰って……」

「無駄な事をせずにここで死に絶えなさい。私は量産型の一つ。数百の私達が貴女達を必ず滅ぼすでしょう」

「あら、素敵ね。魂を取り放題じゃない」

「ああ、なんとというボーナスステージなのかしら！」

「確かにガチャ石取り放題か」

想像しただけで涎が溢れてくる。ちなみに愛歌やルサルカ、俺の言葉に他の子達は引いていた。

「愚か者共めつ、神に反逆する異端者を助けるとは……後悔するがい
い」

「はいはい。それより、ガチャして優花を助けようぜ」

「今回するのは私よ。マスターは引っ込んでなさい」

「なん、だと……?」

「あ、残ってる石も全部使うから」

「そんな!」

「あら、可愛い奴隷の為に使うのだからいいでしょ?」

「ご主人様、私は別に……」

「いや、いい。優花の為だからくれてやる! なんだったら、サクリ
ファイスを使っても——」

そう言った瞬間、ユーリにハリセンで叩かれた。いや、これはデイ
アーチエだな。雰囲気わかる。絶対に戯けとか言われてるな。

「記憶の一部くらい……」

「お兄ちゃん? 少し、OHANASHIしましょうか」

「え? ユーリ? まっ——「待ちません」——ああああつ!」

ユーリに正座させられ、正座している場所にユーリが座ってくる。
その状態でしっかりと説教を受けていく。その間にメイド天使は石
に変換されて召喚魔法が発動する。

「アーサー来い、アーサー来い、アーサーアーサーアーサーアーサー
アーサーアーサーアーサーアーサー」

愛歌が全力で力行使しているせいか、魔法陣が光り輝いて三本の
線と下の球体が虹色に光る。そして、出てきたカードはセイバー。セ
イバーのカードが光を放ち、実体化していく段階で愛歌が抱き着こう
とする。その瞬間——

「セイバー、宝具の解放をお願い」

「わかった。シール・サーティーン——ディンジョン・スタート円卓議決開始!

《承認》。これは、世界を救う戦いである——」

「綾香アアアアツ!!」

——魔法陣の方から約束された勝利の剣が放たれる。愛歌が手を
伸ばすが、聖なる光の奔流が愛歌の手を消し飛ばし、愛歌の身体が全
てのみ込まれる前に俺が愛歌を召喚して回避させる。エクスカリ
バーの奔流はそのまま城を、世界を消し飛ばそうとするが、ルサルカ
がその前に解除する。

「あつ、ああああああつ!」

「頑張れ優花！ 美遊、一時的でもいいから助けてやってくれ！」
『わかりました』

優花を抱きしめて励ます。とりあえず、すぐに崩壊はなくなった。魔力が馬鹿みたいに無くなっていつてるから、そんなには持たない。聖杯を一人で運用するもんじゃないってのがわかる。

「あの泥棒猫っ！」

地団駄を踏む愛歌だったが、エクスカリバーまで放たれるのは——
普通に納得する。確か、条件は下記の通り。

共に戦う者は勇者でなくてはならない —— 愛歌の妹である綾香は勇者だ。愛歌を止めて世界を救った。

心の善い者に振るってはならない —— 愛歌が心の善き者なわけがない。ビーストのマスターで多数の少女を生贄にするような奴だから仕方なし。

この戦いが誉れ高き戦いであること —— ビーストの相手。つまり、人類悪と戦う事が誉れ高くないはずがなし。

是は、生きるための戦いである —— 少なくとも綾香は殺される。アーサーも色んな意味で殺されるかもしれない。

是は、己より強大な者との戦いである事 —— 人類悪相手なので間違いない。

是は、一対一の戦いである事 —— あくまでも召喚は愛歌一人。

是は、人道に背かぬ戦いである —— 強制的な極悪犯罪者による拉致なので背かない。

是は、真実のための戦いである —— 間違っていないと思われる。愛歌の行動が色々やばすぎる。

是は、精霊との戦いではない事 —— 精霊ではない。人類悪である。

是は、邪悪との戦いである事 —— 邪悪も邪悪。

是は、私欲なき戦いである事 —— 微妙。しかし、アーサーが召喚された場合、アーサーの為だと言って虐殺をする可能性もある。と
いうか、実際にやったので私欲がなき戦いとも言える。

是は、世界を救う戦いである事 —— これ、アーサー本人の質問

であるし、相手は人類悪なので世界を間違えなく救う戦いである。

以上。相手が沙条愛歌であるのなら、何もおかしくないな！というか、ここに居るのは大概、悪じゃないだろうか。ルサルカは言うに及ばず。ユーリ達は本人の性格はどうであれ、闇の書とくっついて大量虐殺を行っている。この場に居て、まともな善の存在って優花と美遊ぐらいじゃないだろうか？ その優花も若干闇落ちしかけているが。俺もユーリの身体を使っているわけだから、悪判定だろう。やっぱり、エクスカリバーされてもおかしくないな！

「幼女の召喚に応じ、参上いたしましたぞ！ さあ、デユフフな事をしましょうぞ！ 拙者が王子様になってさしあげますぞ。天国へ――」

「死ね」

「――ピギャアアアッ！」

召喚が続いていた魔法陣から海賊の男が出たと思ったら、愛歌に速攻殺された。まあ、仕方ない。相手が悪かった。普通に召喚されたんだつたら、趣味が合うかもしれないが、ここだとまずい。だって、優花との融合候補がF G Oの黒ひげとかない。やっぱり女性でないと

次は概念礼装の優雅たれが出てきた。いらん。次に愛の霊薬。ぶちやけ媚薬だな。続いてお馴染みの麻婆豆腐。次はF a t eじやなくてリリアネスの冠。効果はM P +15、L U C +5、毒・マヒ無効。サモンナイトの装備だな。その次はケアルのスキルカード。回復魔法でファイナルファンタジーのだ。

「あ、次は良いのよ」

「お？」

優花とルサルカを抱きながら待っていると、虹回転で今度はアシンンだった。小さな女の子だ。

「アシンン。そこで待ってなさい」

「は〜い」

大人しくとことごと移動していく子供。黒い外套に身を包んでいるが、俺の大好きな子だ。ただし、女性は近付かない方がいいかもし

れない。彼女をデミサーヴァントの候補にするのなら、安心かも……いや、やばくないか？

次は天の晚餐。美味しい料理が食べられる使い捨て礼装みたいだ。その次は欲張りグラタンのレシピ。これは優花にとっては嬉しいだろう。そしてどんどん進んでいく。

しばらく時間が経ち、124連のガチャが終了した。ラスト1回だ。そいつは虹回転であり、剣だった。つまり、☆5セイバー確定だ。「来なさい、アーサー！」

「召喚に応じ、参上しました。サーヴァント、セイバー。問おう、貴女が私のマスターか？」

「違う！　なんで女なのよ！　私が呼んでいるのは男のセイバーよ！」

やってきたのはアーサーはアーサーでもアルトリア・ペンドラゴン。女版のアーサー・ペンドラゴンだ。つまり、青い騎士の Fate ヒロイン。

「そ、そう言われましても、あの人は召喚拒否されて私が押し……ごほん。貴女を監視するために来ました」

「……まあいいわ。性転換薬を飲ませればいいのだし」

「帰る！」

「逃がすか！」

「ええい離せ！」

「ちつ、なら聖剣と鞘を寄越しなさい。それを触媒にアーサーを呼び出すから」

「ふざけないでください」

「大真面目だけど？」

「お断りします！」

「なら、性転換……」

「帰ります！」

魔力爆発を起こし、瞬時にアヴァロンを展開して逃げ込んだセイバー。流石の愛歌も手が出せない。いや、彼女なら根源から情報を引

き出していくかもしれない。だが、その前に逃げられるだろう。

「……私はどうすればいい？」

突然、声が聞こえてそちらに振り向くと、そこにはサモンナイト3や6、微妙に2でも成長した姿で出てくるメインヒロインの一人（断言）、ヘイゼルが立っていた。彼女は赤き手袋という暗殺集団の一員だ。彼女は幼少の頃より暗殺術を教え込まれ、唯一の楽しみは標的を上手く殺せた時にもらえるキャンディだけだった、という壮絶な環境で育った。また殺すタイミングを確実に狙うため、暗殺対象が男だった時は同じベッドに入ることもあったという。だが、主人公と戦って助けられた事をきっかけにして一般人(?)なメイドとなって2で活躍する。

「じゃあ、これからオーディションをはじめます。仕事内容はこの子と融合し、力を貸す事。以上よ」

急に愛歌が召喚されたキャラ達に言っていくが、慌てて制限を入れる。

「女性限定で優花の意思を尊重する事が条件だ」

「らしいわ。デミサーヴァントになるのを受け入れる奴だけ残りなさい。後は帰っていいわ」

俺と愛歌の言葉でゴツソリと消えた。それから話し合いを行い、優花の希望と条件を満たしたのは二人。というか、愛歌がほぼ決めていたので、その二人以外はボロボロだと言える。

「やはり千里眼を超えるのは中々無理ね」

「当たり前だ」

「そうね。普通はそうなのよね……」

「で、優花。この二人だが……」

「うん。えっと、私はご主人様に任せるけど……」

「自分で決めるといいぞ。これから一生、付き合うんだから」

「……じゃあ、両方」

「いいのか？」

「そっちの方が強いでしょう？」

「まあな」

「なるほど、なるほど」

愛歌も楽しそうにしているし、残ってくれた二人も……いや、一人は笑っている。とりあえず、そちらの子は置いておいて、比較的簡単な彼女からだろう。

「ヘイゼルさん、いいですか?」

「私は問題無い。どうせ融合している間は年も取らないらしいし、その、料理とか女らしいものを勉強したい。私は暗殺しかしてこなかったからな。それを学べるなら構わない。ソイツが死んだら、私達は別れて元の世界に戻るんだよな?」

「おそらく」

「問題ないわ」

「なら、やはり私に損はない。本格的に料理などを学びつつ、暗殺技術を鍛える。それにはまたとない環境だ」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

優花とヘイゼルは容姿がどことなく似ているし、互いに欲している事を提供できるので、問題なさそうだ。ヘイゼルは力を提供し、優花は一般的な女の子がする事や家事などを教える。ヘイゼルも潜入調査の為に少しは学んでいるだろうが、未熟なはずだ。

「次はわたしたちだね。わたしたちが出した条件、わかってる?」

「うん。わかってる。貴女達? を生んだらいいんだよね?」

「そう。わたしたちを墮ろす事は駄目。ぜくたいだよ」

「大丈夫。でも、私の中でしばらく我慢してもらおうことになるけど、それは大丈夫?」

「戦わないといけないからだよね? 大丈夫だよ。わたしたち、おかしさんのお腹の中でゆつくりとしているから。でも、時間が経つといっぱい産まないと駄目だからね?」

「うん。覚悟してる」

愛歌が言っていた女の尊厳というのはこういう事だ。ジャツクの要求は言ってしまうば優花の胎を貸せという事だ。彼女達がこの世界に生まれ落ちるために、幸せになるために身体を提供……苗床になれと言われている。それを優花はほぼ悩む事もなく領いた。

「でも、貴女達は私の娘になるけど、それはいいの？」

「愛してくれればいいよ！」

「そっか。血の繋がった大事な娘だからちゃんと愛するよ。ご主人様との絆でもあるし……ただ、育てるのが大変だから良い子にしてくれる？ 一人や二人なら、多分なんとかできると思うけれど……いつばいいいるんだよね？」

「いつばいいいるよー！」

「うん、ちゃんと怒るから、その私の言う事は聞いてね」

「いいよ。おかーさんが約束を守ってくれるのなら、わたしたちもおかーさんを愛するから！」

「約束だよ」

「？」

「指切りだよ。嘘ついたら針千本飲ますの」

「こ、こわいね」

「投擲が得意だから、千本、しっかりと飲ませてあげる」

「あわわわ、ちゃんと良い子にするから、怒らないで……？」

「うん。良い子良い子」

ジャツクの頭を優しく撫でる優花。何故か高校生にして母性を感じる。いや、優花の事を考えたら納得はできるか。優花はただ、彼女達に共感しているんだろう。他人に弄ばれた事について。もしくは自暴自棄かもしれない。ただ、それでも必死に生きようとしてくれるので大丈夫だ。後は俺達が協力すればいい。

「しかし、父親になるのか？」

「ですね」

「ユーリは嫌じゃないか？ 優花との子供を先に作る事になるが……」

「私は、私達は問題ないですよ。子供ができるかもわかりません。この躯体は人ではありませんから。お兄ちゃんとの間に子供は欲しいですが、それは優花さんの子供でも問題ありません。それにいざという時は色々方法があります。それとその、私とお兄ちゃんは子供を作らない方がいいかもしれません」

「なんでだ？」

「身体が一部共有ですから、近親相姦みたいなものに……」

「ああ、なるほど。まあ、問題ない。戸籍は別だしな」

ユーリを撫でながら話している間にあちらも話し合いが終わったようで、ヘイゼルと優花が融合してデミサーヴァントみたいな感じになる。そして、ジャックは優花の子宮に宿り、力を貸す。ついでにここで出たアイテムを全て優花に融合させるらしい。

まあ、基本的に当たりであるキャラ達は帰ったので良い物はない。ほとんどアーサーに合わせ、ヘイゼルとジャックを引き寄せるようにタイミングを見たらしい。そもそもこの世界で召喚すると、この世界から持ちだせない。俺が召喚しても駄目だ。全部、優花の中に置いていくしかない。本当に持ちだせたら最高だった。なにせここにはフィルターがかかっていないから、レア度が高いのもやすい。

ただ、天の晩餐で考えると、優花が作れるようになっているのでよしとする。礼装だが、本当に料理として作れるらしいのだ。つまり、この時点で料理人として高レベルになってきている。あと、ヘイゼルとジャックの暗殺技術はかなり高い。ヘイゼルの積み上げられてきた高レベルの暗殺技術にジャックのサーヴァントとしての気配遮断などの能力が合わさる。ジャックはそもそも素人だ。それが玄人の技術を持つということでもあり、結構恐ろしいことになる。ただ、ジャックに関してはスキルは使っても宝具は使えないと思われる。本人じゃないから仕方がないだろう。

夢から覚めると、優花にキスをするとしつかりと目覚めてお返しの子スをしてくれた。その後は早速、ジャックを仕込むために深く愛し合った。

それが終わったら、優花も培養槽に入って身体を調整してデミサーヴァントとして完成させる。正確にはヘイゼルがサーヴァントではないので、デミサーヴァントではない。ただ二人が溶けあつて一人になっているだけだ。融合状態という奴だな。とりあえず、その状態で基本的に優花とヘイゼル、どちらの姿にでもなれるようにブレインコンピュータを入れて、調整できるようにする。

本拠地に居る時は優花の姿で、外に出る時はヘイゼルの姿と使い分ける。まあ、プライベートと仕事用という感じだな。俺としては役得として、ヘイゼルともしているようなものだ。暗殺されそうで少し怖いけど。

しかし、エヒト達は異端者の烙印に天使まで潜ませるとは、かなりこちらを警戒しているようだ。やはり、やらかしたシユテルにはもうちよつときつめのお仕置きをしておこう。後、ユーリもだな。危うくルサルカを殺しかけているし。お仕置きを実行したら、逆に俺もお仕置きされた。

鈴達にサクリファイスの事が伝わったせいだが。後、シユテルの報告で清水が深海棲艦を生み出したと教えられ、ハジメにも怒られる事になった。

第40話

俺と鈴、恵里の三人は最下層にある森の中を必死で走っている。というのも、襲撃者に襲われて壊滅寸前で必死に逃げているからだ。

「はっ、はっ」

「はあっ、はあっ」

「ひい〜」

荒い呼吸が俺と鈴、恵里の口から無意識に零れる。心臓が破裂しそうなほど鼓動を打ち、口を開きながら必死に澄んだ空気を肺に満たしていく。後ろから放たれる即死の弾丸を紙一重で避け、足が纏れる。続いて銃声が響き、鈴が狙われているのを理解して即座に鈴に手を伸ばすが、その前に頭へと命中した鈴の頭が吹き飛んで倒れこんでいく。

「ら、らめえっ、しんだあ〜」

「これ、きつすぎっ」

鈴がやられた瞬間、恵里が魔法を使って肉盾であるスケルトンを召喚するが、相手から放たれる弾丸はスケルトンを容易く粉碎し、恵里に迫る。どうにか魔力放出を使いながら手を出して弾丸を受け止めるが、勢いで身体が何度も回転する。その直後に頭を撃たれて脳が揺れていく。

「くそっ、があっ！」

恵里と鈴の死体を抱き上げて必死に逃げる。美遊が障壁魔法であるプロテクションを展開してくれるので、そのままどうにか森の奥へと逃げ込む。

しかし、逃げ込んだ先からも銃弾が飛んでくる。慌てて横にずれて崖を滑り落ちて動くこうとした瞬間、ハジメが木の上から両手で化け物拳銃を連射しながら降ってくる。慌てて飛び退るが、空中でアンチマテリアルライフルからの一撃を受けて身体が高速で回転し、地面を転がっていく。その間も的確に銃弾が飛んできて俺の身体に衝撃を執拗に与えてくる。

「ホールドアップだ。死ね」

「何故だっ！ 何故なんだ詩乃！ ぐふっ!？」

「浮気しまくってるからじゃね？」

そう言っつて近距離からハジメに銃弾を叩き込まれまくって頭が地面に埋まる。その状態でガタガタと震えながらハジメを見ると、ニヤリと笑いながらドンナーをアンチマテリアルライフルに変え、口に銃口を突っ込んでくる

「流石のお前も口の中に銃弾を叩き込まれたら無理だろう」

『させません!』

容赦なく引き金が引かれるが、美遊が銃弾を歯で止めて吐き捨てる。

「ちっ」

そして、ハジメは空間に手を入れてから大きなパイルバンカーを取り出して俺の腹の上へとセットする。

「こいつなら、流石にいけるだろ」

「ハジメさん、流石にそれは嘘だよな？」

「や、やめて！ やるなら僕にして！」

「俺を置いて恵里だけでも逃げてくれ！」

「いやっ！ 僕は絶対に真名を置いて逃げない！」

恵里が俺の身体に乗ってくるが、ハジメはニヤリと笑いながら恵里を蹴り飛ばす。蹴り飛ばされた恵里は木に激突しながら、必死にこっちに来ようとするが、容赦なくアンチマテリアルライフルの銃口を向けられる。

「大人しく死ね。さもないとお前の大事な嫁さんがまた死ぬぞ」

「この悪魔めっ！」

「はっ、褒め言葉だ」

「ハジメ、遊んでないでさっさと始末する」

「ああ、そうだな。あばよ」

「くそがあああああああっ！」

銃声が響き、俺はハジメに殺され、恵里はユエに殺された。

「あく死んだ死んだ！」

「悔しいね〜」

「うん。次は勝つ」

俺達三人は現在、日向にある木陰に三人で転がされている。全身の至る所に痣があり、全身打撲のような感じで起き上がれない。ハジメ達は既におらず、俺達を放置して帰っている。今頃、美味しいケーキにありついている事だろう。

「フルーツタルト、食べたかったあく〜！」

「仕方ないよ。僕達の負けだし」

「だな」

怠い身体で鈴と恵里を抱き寄せて密着しながらぼーと人口の太陽光と風を火照った肌で感じる。

「ん〜まあ、真名君と一緒にだからフルーツタルトは今度でいいや」

「今はゆっくりしよう」

なんでこんな事になったかと言えば簡単だ。優花の問題が一応は解決し、夜泣き？ 悪夢泣き？ みたいなのがなくなった。ただ、やはり不安なので培養槽に入ってもらってヘイゼルと融合し、ジャックを宿した彼女を調整する事にした。それだけでなく、ブレインコンピュータと竜の因子を搭載した。

ブレインコンピュータは優花が軍用通信をできるようにする事と、レシピなどを保存したり、食材の管理などをするためだ。本人も喜んで受け入れてくれた。竜の因子は単純にヘイゼルと優花では召喚タイプでも魔法タイプでもない二人では魔力不足でジャックの力をしっかりと運用できないからだ。いくら俺がキスやエッチな事で魔力供給しても限度がある。そのため、魔力を手っ取り早く増やす手段を使った。本当は魔導炉も搭載したかったが、こちらはそう簡単に作れない事と、産まれてくるジャックに悪影響を及ぼす可能性があるの で女性陣は禁止となった。その代わり、小型化した物をデバイスに装着するか、マイクロウエーブ的な方法かバッテリー式かで補充する予定だ。

どちらにせよ、優花の調整が終われば俺達は地上に出る。そんなわけです。ユーリ、シユテル、ディアーチェ、レヴィの四人はデバイス作りに精を出し、一足先に家と車などを完成させたハジメ達と一緒に俺達は戦闘訓練をする事にした。

というのも、俺と鈴、恵里、ハジメは身体を欠損してから本格的に動かしていない。だから、この辺りで戦闘訓練として限界まで両手両足を酷使して、違和感を解消したり不具合があったりしたら調整する事になった。

そんなチームで俺、鈴、恵里、アストルフオの四人とハジメ、ユエ、詩乃、ルサルカの四人でチーム戦をしていたのだが……ボロ負けした。黒星はまだ怖くて震えるが、ある程度は克服した詩乃はユーリが用意したデバイス、ヘカートIIヘカートIIはフランスのPGMプレシジョン社が開発・発売している対物ライフルの一つ。フランス軍の正式採用銃で、ウルティマラティオ(Ultima Ratio:最後の切り札)シリーズで最大口径なのもその銃の特徴。使用弾は12.7mm NATO弾で大型の銃弾の発砲に伴いマズルブレーキが搭載されていて、反動を抑える機能がある。運用としては長距離からの破壊射撃、嫌がらせ射撃などで、HEIAP(High Explosive Incendiary/Armor Piercing Ammunition:徹甲弾と炸裂弾と焼夷弾の三つの機能を持った複合弾)を使用して不発弾を破壊する際にも用いられた。名前の由来はギリシャ神話の夜の女神ヘカテー。を元にして作り上げた物で、ヘカートの名前をそのまま継承させた。

このヘカートは現状は三形態ある。弓、アンチマテリアルライフル、短剣だ。どれも魔力を込めると強度を増すシユタル鉱石をメインに作られており、全て生成魔法で魔法が付与されている。雷を溜める事で電磁加速砲にし、火力を増すために弾丸には風魔法を付与して自ら高速回転するようにもしてある。当然、実弾以外に魔力弾も撃てるようになっていたが……今回は実弾が使われている。俺達はヘカートの攻撃じゃ貫けないからな。狙撃の腕はかなりいいが、最初は腕とかを撃ってきたが、それでは俺達もなんとも思わずに挑発とか繰り返し返

したら、容赦なく頭を狙撃してくるようになった。だんだんとGGOのシノンに近付いてきたのだと思う。

ちなみにルサルカとアストルフオの二人は戦っていて、こちらにはこれなかった。俺はデバイスが無いから本当に盾にしかなれないし、鈴と恵里もそれぞれの技術で対抗したが、物理攻撃であるハジメと詩乃に結界が破られるし、シエンシヨウジン神獣鏡の力が意味のない相手なためにまともに戦えなかった。恵里の死霊が相手だとユエ達に虐殺されるだけだ。かといって、ジャンヌダルク・オルタを出せば訓練の意味をなさないぐらいやばい事になるので禁止。

「それで身体の調子はどうだ？」

「んっ……鈴は大丈夫だよ。自分の足なんだって実感できて凄く嬉しい」

「うんっ、僕も大丈夫。ちゃんと動くよ」

手を回して二人の太股を撫でながら聞くと、嬉しそうに答えてくれる。触った感じでは確かに問題ない。温かくて汗でしっとりとしている。もつとも、土とか草で汚れているので微妙な感覚だが。

「良かった。触ったりした感じも大丈夫そうだな」

「うん。足が戻って本当に良かったよ……」

「確かに僕も培養槽から出てちゃんと腕があった時は嬉しかった。思わず泣いちゃったし……」

「だよね」

「俺も鈴達が元に戻ってくれて嬉しかったな」

「真名君は自分の事も喜ばないとめっ！だよ」

「愛ちゃん先生みたいだな」

「真似してみたんだよ」

「真名は確かにもう少し自分の身体を大切にしてよ？確かに僕達の事を大切にしてくれるのは嬉しいけれど、真名が傷付いたら、僕達は悲しいんだからね？」

「そうだよ。鈴達も聞いたよ。ゆうたんの為にサクリファイスを使おうとしたんだよね？」

「まあ、な」

「駄目だからね。真名君は……まなまなは鈴達の御媚さんなんだから、鈴達を可愛がつて幸せにする義務があるんだからね。まなまなが傷付いたら鈴達は幸せになんてなれないからね?」

鈴が俺の頬にキスをしながら言ってくるので、頭を撫でてから降参と言った感じで手をあげる。

「守ろうと思ってるんだがな……」

「むしろ、僕達が真名を守るから、大人しくしていたらいいんだよ。僕達の代わりは居るけれど、真名の代わりは居ないんだからね」

「いや、恵里達の代わりは居ないだろ」

「ううん。真名が思ってる意味じゃなくて、女の子は多いけれど、男は一人だからね」

「ああ、そういう事か」

恵里が言っているのは俺が怪我をしたら、誰が満足させてくれるんだという事だろう。確かにそういう意味では俺がダウンすると他の子達ではリカバリーできない。

「それに真名が僕達を傷付く姿を見たくないように、それは僕達も同じなんだけど……真名に効く言葉で言うると真名が傷つくと僕達の心だけじゃなくユーリの身体が傷つく事になるよ」

「わかった。降参だ。これからはもっと気をつける」

「よろしい。ところで、鈴の呼び方はいいの?」

「あ!? そうだ。それは止めてくれと言っただろう?」

「やだ。もうお嫁さんになったから、こう呼ぶもんね」

「ルサルサがダーリンって呼んでる時があるのは聞いているもん。鈴もいいよね?」

「……まあ、いいか。それよりも動けるようになったから水浴びか、風呂に入ろうぜ」

「それなら、水浴びでいいかな?こないだ探検したらいい泉があったの」

「ああ、あそこか。確かに木々に囲まれていい雰囲気だったね」

「泉か。なら、そこで休憩するか」

「決定!」

起き上がってから、服の汚れを叩き落として移動する。恵里と鈴はそれぞれ俺の両側に立って腕を組んで胸をあててくる。恵里の胸は柔らかいが、鈴の方はその、アレだ。それに身長差があるから、親子みたいな感じになってしまう。

「むう〜何か変な事考えてるでしよ〜」

「いや、鈴は可愛いなって」

「絶対違うよ〜!」

「鈴、僕と手を繋ごうか」

「え?」

恵里が反対側に回って鈴の開いている手を握る。すると完全に親子……という感じではないが、兄妹か。流石に親子は鈴が成長しすぎているし、俺達が若い。

「むう。これはこれでいいけれど、子供扱いされているみたい。でもいいや」

そう言いながらぶら下がって来た鈴を支えながら他愛ない話や奈落での想い出話をしていく。そうこうしている間に泉に到着した。その泉は確かに木々に囲まれ、周りに花々が咲いている綺麗な場所だ。人口の光も降り注いで水面がキラキラと光り輝いている。

「良い感じの場所だな」

「でしよ〜」

「ここなら誰も来ないとは思うけれど、鈴は一応结界をお願いね。南雲君に見せる気は無いから」

「うん。鈴もないからちゃんと结界を張るよ〜」

鈴が形成した神獣鏡シンエンシヨウジンでしっかりと结界を展開する。これでハジメ達は何をしているかを察して近付いてこない。ユエ達もそれぞれ鈴の結界が付与されたアイテムを持っていて、そういう事をやる時は展開するように言っている。これがあるとそこは使われているという合図になるわけだ。

「ねえねえ〜」

「ん? なんだ鈴」

「脱がして〜」

「あく確かにこの頃自分で脱いでばかりだね。その前は詩乃だし……
久しぶりに脱がすところからして欲しいかも」

「仰せのままにお姫様」

身体を洗う事ぐらいは結構しているが、確かに二人を脱がすのは久しぶりと言える。大概、自分から脱いでベッドに入るからな。俺はもっぱら脱がしてもらったり、着せてもらうのだが。

服を脱がしてやると、恥ずかしそうに身体を手で隠す。こういう仕事草がグツとくる。そういうのを二人もわかっているのかもしれない。いや、恥ずかしだけか。そんな二人は俺の服を脱がして結界を展開して洗ってくれる。近くにある枝を集めて魔法で火をともした焚火を用意しておく洗った洗濯物は絞ってから木に干していく。

「さあ、入ろう！」

「冷たいから気をつけてね」

「ああ」

確かに冷たいが、火照った身体には気持ちがいい。透き通って底が見えるほど綺麗なのでそのまま頭から入って身体の汚れを洗い流す。二人も潜って身体の汚れをある程度取ったらこちらにやってきて俺の身体を撫でて汚れを落としてくれる。俺もお返しとして彼女達の身体を撫でて綺麗にしていく。

「んっ、ちゅっ」

「僕にして。ちゅっ」

当然、撫でるだけではなく同時進行で二人と口付けを交わして、枯渴しかけている魔力を補給してあげる。

「外でするのは凄く恥ずかしいね……」

「でも、真名は好きみたいだよ」

「そうなの？」

「詩乃が訓練している時にいっぱい襲われるって言ってたから」

「そうなの？」

「まあ、そうだな。詩乃との訓練は離れた場所でやってるし、恐怖で震えるのを紛らわせるためにも抱きしめながらやっている。それで興奮してそのままやったりしているが、一応は克服の一貫で射撃して失

敗した時の罰ゲームだな」

「ああ、それでペットプレイなんだ」

「見てたのか？」

「うん。真名が首輪の鎖を持って詩乃に手を木に付かせて後ろから、尻尾を思いつ切り触ってるのとか、みたよ」

「ずるい！ 鈴もやりたい！」

尻尾を可愛がりながらやると凄く反応が良いんだよな。気持ちいいから、詩乃とする時は基本的に触っている。もつとも、普段、ベッドでやる時は他の子達も居るからやらせてくれないが、罰ゲームという事なら、二人つきりな事もあってしぶしぶやらせてくれる。

「四つん這いにさせて散歩とかはしているの？」

「いや、流石にしていない。普通に首輪の鎖を持って散歩とかはしたかな」

「やってるんじゃない」

「そっちはちゃんと立っているし、服も着ている。場所によってはこういう風に持つてないと捕まるらしいからな」

「それ、嘘の可能性は？」

「シユテルから聞いたが……亜人の扱いを考えると間違いではないだろう。基本的に街では詩乃が誰の物なのかを示すためにやるつもりだ。詩乃も納得しているしな」

むしろ、デートだと思いう事にすると言っていたしな。俺に抱き着いていれば鎖なんて気にならないし、その気になれば詩乃でも簡単に外せるから問題ない。これぐらいしておけば面倒毎は減るだろう。

「ずるいなあく鈴もデートしたい」

「確かにそうだね」

「なら、詩乃達には悪いが、宿で待っていてもらうか、班を別けて集団で行動してもらうか。それなら相手も襲ってこないだろ」

「全員、可愛いから襲ってくるかもね？」

「自分でいう〜？」

「事実だからね。まあ、襲ってきてくれたら、それはそれで嬉しいから裏路地にご案内するけどね……ふふふ」

「あ、浮気だよ、まなまな」

「違うからね！ 確かに食べるけれども！」

「魂をだろ。襲ってきたのなら構わないが……死体の処理はしっかりとしろよ」

「任せて。ちゃんと僕達から離れた場所で処理するから」

現代でないのだから、これぐらいで十分なはずだ。というか、こんな話をする必要はないな。

「身体は洗い終わったからまつたりしよう」

「賛成〜」

「なら、水に浮かびながらゆつくりと日光浴しない？」

「沈むが……」

「鈴の結界で調整すればできるでしょ」

「まあ、できるよ。よし、やってみよう」

鈴が出した結界に寝そべりながら、流れてくる水に身体を任せる。二人が抱き着いてくるので腕枕をしてやり、二人とゆつくりと過ごす。鳥のさえずりや水の音だけになって心穏やかになる。

「平和だね〜」

「ここが奈落の底なんて考えられないよ」

「確かにそうだな」

今までは襲撃を受けていたが、ここでは襲われる事はない。まつたりゆつたりできる素晴らしい場所だ。

「何時までも居たくなるな」

「確かにそうだけど、それは……」

「ごめんね。鈴の我儘で……」

「いや、いいさ。俺も鈴達の両親に挨拶しに行かないといけないし、両親に結婚の報告もしないといけない」

俺はもうこちらで生きる事を決めているが、他の面々はそうじゃない。それにやっぱり両親の事は気になる。せめて手紙や老後のお金ぐらいは用意してあげないといけないだろう。ユーリ達の力を借りたら連絡ぐらいは容易いだろうし、次元航行艦を作れば行き来はできるはずだ。できるかはわからないが、この世界の魔法を使えばどう

にができるかもしれない。希望はある。

「お父さん達、絶対に驚くよね〜」

「そうだろうね。なんせ、鈴が御婿さんを連れて帰ってくるし、反対もされると思うよ。何せ、女の子をいっぱい囲ってるしね」

「あくお父さんは反対しそう！でも、仕方ないよね。その時は話し合って無理なら家出……ううん、駆け落ちかな！」

「異世界に駆け落ちとか、絶対に追って来れないな。というか、両親を放っておいていいのか？」

「良くはないけれど、もう鈴にはまなまなが居ないと生きていけないからね。もし、まなまなが居なければ鈴達はその熊さんに食べられて死んでたよ。だから、いいの。それに赤ちゃんを連れていったら、流石に納得すると思うしね」

「できちゃった結婚か。まあ、それもいいね。僕の所は挨拶なんていらないけど……」

「一応、ケジメとしてするさ」

「うん。あんな母親だけど、どうしてるかな……」

やっぱり少し気になるみたいだ。まあ、魔法を使えば治せるだろうし、心も身体も戻してあげれば恵里の事、愛してくれるかもしれない。どちらにせよ恵里は責任を持つつもりなので、しっかりと話し合わないとな。

「そういえば——」

「あ、あそこは——」

しばらく他愛のない話をしていると、空が急に切り替わって星空に変わった。俺達は手を握り合いながら、そのまま天体観測をする。世界が違うので適当に名前をつけたり、遊んでいると空から青い流れ星が落ちてきた。

「お〜い、ご飯の時間だよ！はやく帰ってきてよ〜！」

「ああ、可愛い妖精さんが迎えにきてしまったな」

「だね」

「かえろ〜」

レヴィが迎えに来たので、泉から出て恵里の魔法で身体と服を温め

てから着替えて歩いて帰る。もちろん、鈴と恵里の二人と手を繋ぎながらだ。レヴィが肩に乗って肩車をしてきたが、これも俺達の、家族の形なのでよしとする。心から笑い合って過ごせるなら何でもいい。皆の笑顔を守るためなら……神だって殺してみせよう。なにぐだ子達だってできたんだ。同じ召喚士である俺ができないはずもない。なにせこちらにはラスボスであるユーリ達がついているし、敵もゲーティアや人類悪よりは弱いだろう。だったら、何も問題は無い。魔王が神様になっただけだしな。

それに俺は俺の正義を貫くだけだ。故に他人の悪であつても気にしない。それにこの世界を支配する教会から裏切り者や異端者扱いを受けているんだ……だったら、この世界エヒトの悪になつてやろう。

俺は解放者達と違つてこの世界の住人だろうと容赦はしない。俺達の幸せを奪う敵ならば等しく滅ぼすのみ。

そして、滅ぼした責任を取るために彼等の魂を糧にして神の座へと至り、この世界のルールを書き換えてより良き世界を作るぐらいはこれから産まれてくる子供達のためにしてやる。

彼等も神の遊びから解放されるのなら本望であろう。すくなくともこれが俺にとっての正義だ。故に絶対に止まらない。例えクラスメイトを殺す事になったとしても、譲れない者の為に限界を超えて戦う。覚悟しておけよ、神とその眷属共。優花にしたこともキツチリとお前等の命で償わせてやる。

第41話

「なんだこれは……」

俺達はベヒモスを倒し、迷宮街で休憩して危険な魔物モンスターに襲われるなどもあったが、無事に王都へと戻ってこれた。

「おいおい……クレーターが出来てるじゃねえか」

「爆発か？　ここは大通りだったはずだが……」

「もしかして、魔族の襲撃だったり……」

竜太郎や遠藤、野村の言葉通り、これは魔族の襲撃かもしれない。情報を得るために急いで王宮に戻ります。いいですよ、メルドさん

「ああ。俺も情報を調べてみる」

「お願いします。皆、急いで戻るぞ」

ふと、香織と雫の事が気になり、そちらを見ると二人が清水と話していた。香織と雫はそれぞれ魔物モンスターの子供を撫でながらだ。まったく、清水の奴は二人に迷惑をかけて……

「すぐに王宮に戻るんだ。急いでくれ」

近付いて声をかけると、三人はすぐにこちらに向いてきた。魔物モンスターの子供が威嚇してくるので剣の鞘を構えておく。

「ん、私は怪我人が居るかもしれないから、ここに残って治療してくるよ」

「それなら俺も残ろう。香織一人じゃ危険だしな」

「ううん。護衛は雫ちゃんにしてもらおうから大丈夫だよ。ね、雫ちゃん」

「ええ、任せて。香織に変な事をしようとする奴は切り捨てるから」

確かに雫が居るなら香織の安全は確保できるか。心配ではあるが……香織にはあの猫も居る。大丈夫か。

「わかった。くれぐれも無理をしないようにな」

「うん。清水君はどうする？」

「情報収集は天之河達が居れば大丈夫だろう。俺は瓦礫の撤去とか掃除を手伝おうと思う。この子達の力なら廃棄場所も困らないからな。団長、構わないか？」

「ああ、問題ない。指揮を取っている者に伝えておく」

「こちらは任せておけばいい。俺達は王城へと急いで向かう。そこではクラスメイト達が棺に抱き着いて泣いていた。」

「うう……先生は、先生はっ！」

「なんで、なんでこんなことに……」

「……優花あ……」

「な、なにがあつたんだ……？」

立ち尽くしている相川達に聞いてみると、信じられない内容だった。教皇のイシユタルさんもやってきていて、詳しく教えてくれた。「そんな……俺はまた守れなかったのか……」

俺達が居ない間に王都へ魔族が侵入し、暗躍していた。園部はその犯人に仕立て上げられ、犯人ではない事を証明するために自らを囮として行動を起こした。イシユタルさん達も園部の意思を尊重し、護衛の兵を派遣したり教会の特別な装備を貸し出したりしていたらしい。園部は見事、自分の身体を使って魔族をおびき寄せて倒した。しかし、卑劣な魔族は園部もろとも周りの兵士の人達や神官の人達を巻き込んで自爆し、王都の一区画を吹き飛ばしたらしい。

「おのれ魔族めっ！」

話を聞いた俺は壁を思いつきり殴る。手に血が出たが気にしていられない。皆はもつと辛かったはずだ。

「皆様。王都にまで魔族の手が及んだのは由々しき事態です。ここも安全とはいえません。どうでしょう。皆様の身を守るためにも、我々も含めて一人一人が力をつけねばなりません。ですから、迷宮に籠つて力をつけるか、それとも畑山様についていくなどはどうでしょうか？」

「そ、それは……」

「使徒の皆様が王都におられる事は魔族に知られているのでしよう。ですので、各地を転々と移動する畑山様と一緒にいらつしやる方が安

全かもしれません」

「ですが、それだと私達が襲われた時は……」

「精銳の護衛をつけますが、王都まで魔族の手が伸びたと……もはや何処にも安全な場所などございませぬ」

確かにイシユタルさんの言う通りだ。もう、この世界に安全な場所などないのだろう。俺達が魔族を倒すまで平和は存在しない。

「確かに賛成だ。もう何処にも安全な所はないだろう……」

扉が開き、部屋の中に清水が入ってきた。清水は急いできたみたいで呼吸が荒い。

「香織や雫はどうしたんだ？」

「あの二人なられーちゃんとはっぽに護衛するように命じて残してきた。俺は園部が死んだと聞いて急いでやってきたんだ」

「そうか」

二人を置いてくるのはどうかと思うが、あの魔物モンスターの子供なら二人に懐いているようだし、強さも問題ないだろう。

「清水君、どういう事ですか？」

「そうだ！ 戦いとなれば俺達は死ぬぞ！」

「……それに戦うのが怖いんだ……」

「戦わないなら死ぬだけだ。王都に居ても園部は死んだ。なら、居場所を特定させないために行動するか、それとも殺されないように力をつけるしかない。天の河」

「なんだ？」

「俺はパーティーから抜ける。先生を護衛しようと思う」

「それは……いや、先生が襲われる事を想定しているのか」

「ああ。敵からしたら先生をいの一で狙ってくるだろう。今までは居場所がわからなかったようだが、王都にとどまり続けければ暗殺者を放つてくるのは必然だ。食料自給率を数倍に跳ね上げる先生の存在は下手をしたら勇者より価値がある」

清水の言い分も理解はできる。確かに先生の護衛は必要だろう。

「だが、それなら清水よりも俺が護衛にいた方がいいのではないか？」

「いや、お前は迷宮を攻略した方がいい。白崎達は迷宮へ南雲達を探しに行くからな」

「南雲は死んだんだぞ」

「死体は出ていない。生きている可能性もあるさ。探索しきるまではわからないだろう?」

「それはそうだが、あの状況では……」

「まあ、可能性だ。どちらにせよオルクス大迷宮の攻略は止まらない」「それなら全員で潜ればいいだろう! そうすれば魔族が襲ってきたところで……」

「それはできません。畑山様の力は土地を奪われ、食料を失っている我々からしたらとても大切なのです。勇者様は食べなくても戦えるのですか?」

声が聞こえて振り返ると、そこに金髪碧眼で綺麗な少女リリアーナ・S・B・ハイリヒがランデル王子と一緒にやってきた。

「姫様……」

「こちらとしても民の為、畑山様には頑張っていたただかなければなりません」

「イシユタルさん……」

「待ってください! それなら全員で私と一緒に来ればいいじゃないですか!」

「それも駄目だ。魔族の手が伸びていたら、纏めて消される可能性がある。王都の一角を吹き飛ばすような奴だ。まあ、好きにしたらいいんじゃないか? 選ぶのはあくまでも自分自身だろう。俺は俺の目的があるから愛ちゃん先生についていく」

「清水君の目的ってなんですか?」

「食料だ」

「え?」

「モンスター魔物の子供をタイムしたんだが、その子達の食費がやばい。だから、連れていく。それに天之河と相性も悪いから丁度いい」

そういう事なら納得できる。確かにあいつらは俺を目の仇にしているし、香織と雫から危険な生物を離せるのだから願ってもない事

だ。

◇

「ねえ、一緒に行かなくて良かったの？」

「いいと思うよ。伝えるわけにもいかないしね」

「それもそうね」

「れ〜？」

「なんでもないよ。そこのは食べていいって」

「レ！」

◇

心地良い温もりに包まれながら目が覚める。目を開くとすぐに飛び込んでくるのはきめ細かな金糸のような綺麗な髪の毛。

「ん〜お兄ちゃん……シユテル……レヴィ……ディアーチェに、怒られ、ます……」

「どんな夢を見ているんだ……」

生まれたままの糸まとわぬ姿で俺の首に両手を巻きつけ、抱きつくようにして眠っているユーリ。昨日は全員としたが、最後はユーリだったのでそのまますぐにユーリが眠ってしまった。

隣に視線をやれば鈴と恵里が俺の右腕を枕にし、鈴が俺に抱き着き、その後ろから恵里が鈴に抱き着いた状態で眠っている。

反対側を見れば詩乃と優花が同じように俺の左腕枕にして眠っている。優花は鈴と同じように俺に抱き着きながら寝ていて、詩乃は猫みたいに丸まって尻尾を抱きながら寝ている。四人共、服を着ていな

いのでチラチラと胸が見えたりもする。

布団の中にも潜るようにして女の子が眠っている。感覚的にレヴィやシュテル、ディアーチエだろう。ルサルカの反応はない。

とりあえず、慎重に起こさないように枕にさされている腕を引き抜いて中を見ると、ディアーチエが俺が俺が広げた股の間で寝ていて、左右にレヴィとシュテルがディアーチエの腕を抱きつつ俺の足を枕みたいにしてている。この三人は猫でもあるのでこうやって布団の中に潜って寝る事が多い。ディアーチエがこの位置で寝ているのは、散々可愛がって気を失ってからユーリを可愛がる手伝いをしてもらったからだ。

「ルサルカはどこだろうか？」

ゆつくりと全員を退かせて、それぞれがちやんとした枕で寝れるように移動させてしつかりと布団を被せておく。裸で寝ているから、風邪を引いたら困る。

『ん〜ルサルカさんなら、食堂です……』

眠そうに目を擦っている美遊の姿が脳裏に映る。そんな姿を見ながら服を着ていく。

「おはよう。それとありがとう」

『……いえ……もう少し寝てていいですか……？』

「ああ、いいよ。おやすみ」

『おやすみなさい』

美遊が布団に入って寝る姿が見え、それを置いて部屋から出る。すると良い匂いが漂ってきた。リビングの方から漂っているの、そちらへ向かう。扉を開けると大きなテーブルに皿やナイフなどが並んでいる。

「あら、おはよう。今日は随分と早いのね」

「ああ、今日は特別だからな」

ルサルカの声が聞こえてそちらを向くと、白とオレンジ色のワンピースにエプロンをつけた私服姿のルサルカがキツチンで作業をしていた。酒場でロートスと関わっていた時の姿だ。髪の毛だって黄色のリボンで二つに分けて結んでいる。

「もうちよつとで用意できるから、ソファアに座って待つてなさいよ」
「わかった」

言われた通りにソファアの方へと座る。テレビや新聞は無いが、ブレインコンピュータでユーリから送られてきているデバイス情報を確認しつつ、ハジメの方へと連絡を入れる。

『起きてるか?』

『ああ』

『注文の物はできているよな?』

『もちろんだ。だが、かなり無茶をしたぞ』

『必要な魔力は提供しただろう。それにお前の趣味にも合わせてやった』

『お前の趣味でもあるだろう。だが、確かに馬鹿みたいな魔力を貰ったからこそ完成したが……本当にこんなを使うのか?』

ハジメに渡した魔力はここ数日で千万を超えている。魔導炉と竜の因子、リンカー・コアをフル稼働させて渡しまくった。俺は魔力量だけでいえばハジメを大きく突き放している。魔法少女リリカルなのはでフェイトかなのはが120万ぐらいだったから、ユーリの力を持っているのもそれ以上のだ。

『少なくとも俺は使う。下手をしなくても万単位の敵を殲滅するんだからな』

『それもそうか。この世界では充分に戦略兵器にはなるが、過信はできねえ』

『構わないさ。そもそも雑魚狩り用だ』

『アレが雑魚狩りか。まあいいが……どちらにしろ、注文の品はユーリ達にバレないようにしっかりと作っておいた』

『Perfectだ』

『恐悦至極ってか? それよりもそつちこそバレてねえだろうな』

『大丈夫だ。むしろ、お前は自分の分を用意しているんだろうな。二つだぞ、二つ』

『用意しているよ。どうせユエが欲しがるのは分かりきっているからな』

『ならばよっ』

デバイスの確認をする。ユーリから渡されたデバイスは浮遊するアームドデバイス。映画で使われていた三本の剣を生やしている盾だな。映画版の魄翼という奴だ。アレとは同じ性質ではない。変形はしないが、この世界で最高硬度を誇るアザンチウム鉱石を使った馬鹿みたいな強度を持つ。

当然、様々な魔法を付与されており、六本存在しているそれぞれに鈴が全力で張った魔を祓う神獣鏡シエンシヨウジンの力を円形の部分に宝石として作られた神結晶が配置されており、Anti Magic Field、疑似AMFが展開される。しかも、魔法だった場合は吸収されて俺の魔力に変換される。剣の部分は開くようにできていて、そこが砲塔となっていて魔力砲が放てる仕様だ。これらは俺の魔力以外にもそれぞれ小型の炉心が搭載されており、俺の魔力が無くなって撃てる仕様で……普通に考えてユーリ達が作り上げた過剰ともいえる火力を生み出すが、あくまでも防衛兵装だというのが怖い。

本来の作成予定スペックだと魔力さえあればスターライトブレイカー六連射ができる予定だが、時間がなくて断念したと書かれている。

また槍が良いといったので、剣の先端に魔力刃を作り、反対側に持ち手を魔力で作れば槍になる。この状態で投げたりしてもいいらしい。スラスタもついているからかなりの速度で飛んで行く。また、最悪の場合は搭載してある動力炉をオーバーロードさせて爆発すれば単純計算でスターライトブレイカーの火力を超えるらしいが……最終手段と書かれている。それと剣の部分は当然のように非殺傷にはできないので注意するよとの事。また、デバイスの名前が決まっただけなので、それも決めて欲しいとのことだ。

「なまえ、か……」

「なにに、子供の名前？」

「いや、違う。デバイスの名前だ」

「そっか。ん」

「ありがとう」

ルサルカが……というより、アンナが差し出してくるコップを受け取る。中身はコーヒーのようで、いい香りが漂ってきている。

「うまいな」

「本当!？」

「ああ」

「よかった」

彼女は俺の横に座り、身体を持たれさせてきて、両手で自分のコップを抱いて飲む。その指には絆創膏がいくつか巻かれている。

「よし、私も飲んでみようかな……うえ……」

直に可愛らしい顔を崩し、舌を出してくる。

「熱いし苦いし、よくこんなの飲めるわね」

「ビール飲める奴が何を言ってるんだ」

「コーヒーの苦みとはまた別よ。それよりも、口直ししてよ」

「口直しと言われてもな……」

何かないか探すが、何も無い。

「だ・か・ら・こ・れ」

アンナが自分の唇に人差し指を当てることで、何を求めているのか理解できたのでそのまま顔を近づけて舌を出しているところにつき、自分の舌を合わせる。舌を絡めるキスをしていると、アンナに舌が口内に入ってきて唾液をたっぷりと吸い取られる。

「んっやっぱりキスっていいわね。蕩けるわっあっ、これも飲んでね」

「はいはい」

アンナの分のカップを受け取って、テーブルに置く。すると彼女はよいしょつと言いながら、俺の片手を自分の肩に回してから抱きついてくる。その後、両手を絡ませながら上目使いでこちらを見上げてる。

「頑張って朝ご飯を作ったから、美味しくないかもしれないけれど……食べてね? 愛情はたっぷり入ってるから」

「ああ、それはもちろんだ。だが、一つだけ疑問がある」

「なあに? ダーリンの質問ならスリーサイズまで何でも答えるわよ」

？」

エイヴィヒカイト

「永劫破壊による霊的な装甲が存在するのに包丁ごときでアンナの指を傷付ける事はできるのだろうか？」

砲弾やミサイルを喰らっても無傷の存在がたかが料理で使う包丁で傷を負う？ 有り得ない。可能性としては形成で作った拷問器具による料理だが、それでも本人が傷を負うのも有り得ない。つまり、考えられることは一つ。

「……」

「アンナ？」

「ちっ。なによくせつかく料理が下手なのに頑張って大好きな人のために作りましたっていうアピールが台無しじゃない」

「いや、普通に無理があるし、そんなことしなくても愛してるからな」
「でも、こうでもしないとあの子達に料理で勝てないのよね」

「ディアーチェとシュテル、優花か」

「そうそう。時代の差っていうか、調理技術も進歩してるしね。私はほら、基本的に外食ばっかだし、魂を食べて生きてるわけですし？」

「自炊なんてしないよな」

「まあ、優花に負けることは今はない……と思いたいわね」

「料理屋の娘だから無理じゃないか？」

「ど、ドイツ料理なら負けられないんだから！ ちょっと待ってなさい！」
「ああ……」

少しするとアンナがソーセージを口に啜えてやってきた。そう、ソーセージだ。何を求めているのかわからないわけではないし、そのまま両側から食べて軽くキスをする。

「どうよ」

「美味しいな」

噛むと中から肉汁がジワリと溢れてでてきて、あらびきの部分もあつて歯ごたえもいい。

「こんなのどうしたんだ？ 加工品なんて手に入るはずがないんだが……」

「作つたに決まってるじゃない」

「豚とかはどうしたんだ？」

モンスター
「魔物の肉よ」

えっへんと無い胸を張るアンナ。魔物の肉がこんな美味しくなるなんて思わなかったな。

「しかし、挽き肉を作る機械なんてないだろ」

「全部手作業よ。昔は手で作ってたんだからね？ あ、保存食用にベーコンも作ったから、後でお酒を飲みましようね」

「俺は年齢的にまだ無理だな」

「こつちの法律じゃ大丈夫よ。だいたい人殺して魂を食べる奴が何言ってるのよ」

「それもそうか」

アンナが身体を擦りつけてくるので、彼女の頭を引き寄せて撫でてやる。すると嬉しそうに身体を更に擦りつけてくる。まるで匂いをつけているみたいだ。

「臭うか？ 確かに起きてから風呂に入っていないから臭うだろうが……」

「確かに大好きな雄の匂いと他の女の匂いがぶんぶんするわね」

「抱き合って寝ていたからな」

「まあ、私の匂いもするから別にいいんだけど。それより、子供の名前よ」

「デバイスだって。子供はジャックとジルは確定だからな」

「デバイスかあくどんななの？ 機械はわかんないけど、手伝ったのもあるし教えてよ」

「わかった」

俺がアンナにデバイスのデータを見せる。

「ばっかじゃないの。ねえ、ばっかじゃないの」

「あははは」

「やりすぎでしょ！ 流石はハイドリヒ卿みたいなラスボスね！ 頭の螺子がぶっ飛んでるわー！」

「確かにこれは想定していなかったな……」

「だいたい、これって私が仕込んだのも含まれてるはずだから、もつと

ヤバいわよ」

「ナニソレ。聞いてないんだが……」

「そりゃ、言ってるもの。私が仕込んだのは刀身よ」

「何したんだ？」

「えつとね、回復阻害の呪いと傷口が広がって血液がサラサラになる魔術よ」

「それって剣で斬ったら終わりじゃないか？」

「抉り取るしか解決方法がないわね」

アンナはアンナで殺傷する方向で色々仕込んでいるみたいだ。だが、シエンシヨウジン神獣鏡の力で消されるんじゃないかと思うが、どうなのだろうか？

「鈴の力でも消されないようにしてあるわ。というか、同じ魔力で動くんだから、しっかりと対策を取れば大丈夫よ。まあ、同時起動はできないから、攻撃と防御は使い分けてね」

「わかった。それで名前は何か有るか？」

「そうね……後、七機増やして聖槍十三騎士団とか？」

十三発のスターライトブレイカーか。どう考えてもやばいな。

「まあ、ユーリの考えるのは確かに効率的なのよね。馬鹿魔力のダーリンが、ちまちま撃つても才能ないし、まずあたらないでしょ」

「ぐふっ」

「それを考えると取れる手段は避ける事すら不可能な超広域殲滅魔法。それも弾幕を張って消し飛ばす。凄く効率的ね」

「自然破壊がやばすぎる。」「大丈夫よ。これ、ちゃんと自然の事も考えてるし」

「え？」

「ユーリって育てる魔法とかが好きらしいから、私と一緒に作ったのがあるの。それが砲撃の後に自動発動するからね。破壊の後に創造ありって感じで、周り一面が草木の生い茂る大自然になるでしょう」

「殺傷設定にすると？」

「普通に消し飛ばわね。まあ、最小の威力でやれば大丈夫かもしれないな」

いけれど、設定を解除しない限りは身体の中から植物が突き出してくるんじゃないかしら」

「防御無視の攻撃ができるってか」

「その通り。素晴らしい兵器でしょ」

「たぶん、ユーリは自然環境再生のために作ったんだろうな」

魔女としたら、その辺りはユーリよりも得意分野なのだろう。それにこれって……言ってしまうえば惑星エルトリアを再生させるために開発した奴だろうな。地球に帰っても使えたりしたら、砂漠化や惑星のテラフォーミングも可能だったりするかもしれない。なんという事だ。仕事に困る事がないな。

「まあ、十三機はさすがにやばいな。操り切れん。六機でも多いぐらいだ」

「そつか。それじゃあ……神様を殺すんだから神殺しとか？」

「それなら……ゴットイーター神喰いの方がいいな」

「それでいいかもね。特に神を喰らうというのはいいわね。とつても素敵よー！」

つまり、アンナはエヒトじゃなくてラインハルトやカール・クラフトを喰い殺せということだろう。まあ、いいさ。

「とりあえず、これで決定」

「それじゃあ、こつちにも子供を……」

「朝から何をやっておるか」

「アイタッ！」

上を向くとディアーチェとシユテルがユーリとレヴィを連れてきていた。その後ろには詩乃や優花達も居る。全員、流石に女の子だけあって、脱いでいた寝間着をちゃんと着ている。これからお風呂に入るのですぐ脱ぐんだがな。

「なんだ、起きてきたのね」

「仲良さげに話していたので待っていたのですが、流石にそろそろ……その……」

「時間がやばいか。じゃあ、風呂に入って食事をしよう」

全員でお風呂に入る。いや、ルサルカは既に入っていたようなの

で、入らずに準備してくれるらしい。お蔭でお風呂で汗を流したら、すぐに朝食を食べられるだろう。

可愛い嫁達と風呂に入り、まだ寝ぼけている子達の身体を洗いあう。それが終わったら身体を魔法で乾かしてから、着替える。その後、アストルフオやハジメ達を呼んで全員で食事をする。

「以外に美味しいな。特にソーセージ」

「美味しいね〜」

「ね〜」

ルサルカが本当に料理ができる事が判明したので、これから料理当番になるだろう。皆でソーセージをうまうましていく。ちなみに朝食の内容はポトフと何かの卵でできた目玉焼きにトーストというなんといいか、文明人みたいな食生活だ。

「くっ、涙がでてくる」

「加工品の強さよ……」

「パンって作れたりしないか?」

「窯と小麦があればできるけど?」

「よし、ホットドッグを作ってくれ」

「しかたないわね」

「ホットドッグなら私も手伝えるから、お手伝いするね」

「お願いね」

「我もやるか」

「私も手伝う」

優花だけでなく、ディアーチェやユエ達も手伝ってお弁当を作っていく。というか、レヴィ以外の女性陣は皆で仲良く料理だ。レヴィは食べる係がいいと言っているからな。まあ、レヴィが関わると全部つまみ食いで消えていくので仕方がない。時間がない時は大人しくしてくれる方がいい。

「俺達は準備するぞ」

「了解」

「ボクもこつちを手伝うね〜」

「アストルフオもこつちだから」

「は〜い！」

ハジメに連れられて外に出る。そこには色々と凄い物が沢山ある。軽く見ただけでも多数の兵器が用意されている。

「まず、お前が望んでいたブラックトライク戦闘用大型トライク。原型はU E Fの量産型兵器だが、フォボスの手によってエンジンを戦前のものに換装してある。馬力が異常に高いらしく、普通の人間がまともにも走らせるのは困難を極める。フロントカウルは走行中に取り外すことができ、内蔵されたグリップを保持して剣として扱える他、機銃を2門装備している。だ。装備も含めてブラック☆ロックシューターに出てくる物と同じ物を用意した」

「おお〜」

「二カツコイイ！」

ハジメがまず渡して来たのはブラックトライク。主人公のブラック☆ロックシューター・ステラが乗った機体だ。

「時速は？」

「最高で350 Kmまでは出る。デバイス化はしてあるから、自動走行モードも可能だ。動力炉も魔導炉を搭載しているから、基本的に燃料補給はいらん。乗り手の魔力を吸収して起動するから、登録の無い奴じゃ動かせん」

「盗難対策か」

「ああ。後は発信機や帰還機能も取り付けてある。流星に自動修復はできないから、気をつけて乗れよ」

「タイヤは？」

「スペアをダース単位で用意したし、予備としてフェンリル同じオレンジのラインが入っているブラックトライクで、ゲームではナナが使う物でも作ってある」

「完璧だ。ハジメのは？」

「俺のはスズキ・GSX1300Rハヤブサを過激にチューンアップし、車体前後にチタンブレードを装着したGSX―D e s m o d u sだ」

「ルサルカが欲しがりそうな奴だな」

「こちらも予備を含めて数台用意してあるから、ルサルカにはやるさ」
「ならいいか」

説明を聞いている間にレヴィとアストルフオが乗り込んで動かし
ていく。俺達全員、使用者として登録されているのでおかしくはな
い。

「ライダーの血が騒ぐ〜！」

「ライダーじゃないけどな。レヴィ、身長は……あのバイクは小さい
な」

「レヴィ達の身長にも合わせておいたからな。絶対乗りたがるだろう
し」

「助かる」

乗り回して遊んでいる二人を置いて、俺も自分のブラックトライク
に乗り込んで武装を確認していく。グリップで操る剣二つと機銃二
つ。どれもしつかりとしているし、動力炉も動いている。

「タイヤの問題は走りながら整地させる事で解決した。これで悪路で
も大丈夫だが、魔力の消費は大きい。この機能を切る事もできるが、
その辺りは好きにしてくれ」

互いにバイクに乗って試しに走らせてみるが、やはり運転の練習は
必要だ。もつとも、デバイスのサポートがあるのでかなり楽だ。

「ゲームセンターにあるレースマシンとほぼ同じか」

「ああ。面倒なクラッチ作業とかはマニュアルでもいけるが、まずは
自動で慣れたらいいだろう」

「そうだな」

邪道だろうが、流石に嫁達を乗せるので安全運転がいい。事故とか
したくない。

「サイドカーも用意してあるから、使うのなら両方につける。いいか、
両方だぞ。片方につけたらバランスが悪くて速度を出し過ぎると
ジョイント部分がぶっ壊れる可能性がある」

「わかった」

軽く走らせながらグリップを操作して剣を出し、木々を切断する。

あつさりと何の抵抗もなく斬れた。かなりの硬度と細さだ。おそらくシユタル鉱石で剣を作り、アザンチウム鉱石でコーティングしてある。ブレイコンコンピュータとリンクさせて、数週すれば慣れてきた。

「普通に250Kmぐらいまでなら操れるな」

「そこまで操れるのか」

「この身体は頑丈だから、気にせずアクセルを回せる」

「俺は200ぐらいだ。流石に死ぬ」

「200でも十分だろう。で、次は……」

「車だな」

普通に大型の装甲車と戦車。その次はキャンピングカーだ。こっちはコテージがあるので要らないかもしれないが、動いて行動しない時には便利なので作ったそうだ。まあ、この辺りはまだ問題ないレベルだ。普通に使えるレベルではある。いや、戦車も十分に恐ろしいけどな。

「第二次世界大戦中のドイツ軍が使用した野戦高射砲(対空砲)8.8cm Flak 41。アハト・アハト。魔改造を施してあるから、本来の物よりかなり強力だ。弾丸もしっかりと用意してあるし、戦車もこれを搭載している。硬い装甲でも撃ち貫けるだろうよ」

「もう一つの方は？」

「正直、これは流石に要らんだろうとは思うが……言われた通りに作ったが、本当に使うのか？ 自動化をしているとはいえ、魔力が馬鹿食いだぞ。なんせ砲操作で約1,400人。支援要員4,000人以上という物を自動化したとはいえ、魔力でやるんだからな」

「ああ、ぜひとも欲しかった。姐さんの聖遺物になっていたからな」

「まあ、ルサルカが居るなら、使ってもおかしくないから作ったがな」

そう、俺がハジメとユーリに頼んだのはグスタフ列車砲。総重量約1350から1500トン、全長42.9m。全砲身長含めば47.3mもある。全高11.6m。砲は砲身長32.48m、砲口径80cmのカノン砲であり、射程距離は30から48km。砲弾は榴弾が4.8トン、ベトン弾が7.1トンと巨大であるために装填に時間がかかり、発射速度は1時間に3、4発しかなかった。また、砲弾の輸

送のためには専用の貨物列車が必要で、砲身寿命も短く100発程度の使用で400トンある砲身の交換が必要になった。

だが、これらの難点は魔法を使えば解決できる。宝物庫から弾丸は直接自動転送し、電磁加速砲に改造。様々な付与魔法やこの世界の金属を日本とユーリ達の製法で更に鍛えて使う事で耐久度も大幅に向上。弾丸も魔法を込めた魔弾を用意した。それに基本的に砲身だけ宝物庫から出して使えばいい。全体を出す時は長距離射撃の時だけだろう。命中は幼女戦記みたいにシュテル達に着弾観測をしてもらえばいい。乗員もチビット達で補える。

「ユーリから貰う予定のデバイスは魔法攻撃がメインだからな。物理攻撃は必要だ」

「しかし、ドーラとグスタフの二門とは豪勢だな」

「神山だったか。あそこを砲撃してやるつもりだ」

「待て。それは困る」

「何故だ？」

「あそこに迷宮があるのはわかっているだろう？」

「ああ、シュテルが既に潜って攻略前で止めているらしい」

「そうか……なら、そちらはいいが問題はアソコに俺達を召喚した魔法陣や召喚した時の道具が置かれている可能性がある」

「……砲撃は止める」

「それがいい。それにやるのなら完全な殲滅戦か要塞攻略戦だ。もう一度聞く。本当に必要か？ スターライトブレイカー……ルシフェリオンブレイカーがあるの？」

「……エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグがかつこよかったから、やりたかったただけだ」

「やっぱりな」

「作ったハジメも楽しみみたいだけだろう」

「そりや……まあな」

こいつも同類だ。こんな運用が限られている馬鹿みたいな砲台を使う必要なんてない。だが、ロマンがある。故にハジメも作った。「実際、射程はこっちの方が圧倒的に長いから無駄にはならない」

「それもそうだな」

「後必要なのは何か有ったか？」

「衛星だな」

「衛星って……」

「その衛星。できれば地上を攻撃できる軍事衛星がベストだ。まあ、それは後回しだ。流星に作れなかった。ユーリなら作れるんだろうが、デバイス作りで忙しいしな」

「まあ、おいおいでいいだろう。それに下手に打ち上げたら……」

「エヒトに気付かれて落とされる可能性もあるだろうな」

「まだいいだろう」

「ああ」

しかし、ドローラやアハト・アハト。詩乃にやるか？ 流星に要らないって言われそうではあるな。とりあえず、ドローラやグスタフが自走できるか試してみる。改造されているので一応はできるはずだ。走れるのはレイライン……龍脈の上限定で、それ以外は馬鹿みたいな魔力でレールを敷かなくてはいけない。

「動いた〜！」

「たっのし〜！」

問題ない事が確認できたので、試射してからステータスを確認して宝物庫に入れる。正直、音がヤバすぎな上に受け止めたらそれなりに衝撃を受けた。手をみれば皮が剥けて肉が見えるぐらいだ。それもすぐに逆再生するかのように治っていったが。

「どんだけ硬いんだよ」

「魔力で徹底的に防御力はあげているからな」

「沙条を倒すのには要塞攻略に使う火力程度じゃ駄目か。やっぱ核ぐらいは必要か？」

「魔術的な物じゃないとそもそも効かんし、核でも防げると思うが……」

「神代魔法か概念で攻めるしかないか。というか、これ以上に硬くなるわけだし……」

「まあ、いいじゃないか。それよりも……」

「ああ、そうだな」

音は結界で防いだはずなのだが、皆がやってきたので宝物庫に仕舞って移動する。移動する場所は外へと繋がる魔法陣がある場所だ。そこでやる事は一つ。

「ボク達はこれから地上に打って出る！ 地上では大変な苦難が待ち構えているだろう！ でも諦めないで！ ボク達なら必ず——って、話を聞いてよ！」

「だるい」

「めんどい」

「ヒドイ！」

アストルフオの演説をスルー。だって、それよりもやらないといけない事があるからな。まあ、アストルフオは後で思いつきり遊んでやるから待っててもらおう。

「少し待っててくれ。その前にやる事があるからな」

「は〜い」

「沙条、ほら」

「ああ、ありがとう。助かる」

ハジメから綺麗な箱を受け取り、アストルフオを除いた皆に並んでもらう。アストルフオは後でやるが、別な物だ。なので、ユーリの前にしやがみ込んで目線をしつかりと合わせて見つめ合う。

「ユーリ、愛してる。これからもずっと俺と一緒に楽しく過ごし、俺とずっと一緒に居て欲しい。どうか受け取ってくれ」

ユーリの左手を手にとって、ハジメから受け取った神結晶で作り上げた指輪を薬指に嵌める。

「わあくありがとうございます！ エンゲージリングですね！」

「そうだ。まあ、婚約指輪と言った方が正確かもしれないが……」

「エンゲージリングでいいですよ。私からも、いえ、私達からも指輪のプレゼントがあるんです」

「そうです」

「うむ」

「受け取りなさい」

全員がそれぞれ声をかけてくれる中、ユーリが代表して俺の指に指輪を嵌めてくる。

「これは？」

「デバイスの収納リングです。ここからデバイスを呼び出して展開します」

「それぞれが独立したデバイスだからか」

「はい。デバイスの待機形態にすると無くなっちゃいますし、皆さんと相談するとそれは嫌だという事で、こういう形にしました」

「そうか。ありがとう。とっても嬉しい」

泣きながら皆を抱きしめていく。皆も答えてくれるので、全員にちゃんとそれぞれ違う言葉をかける。ルサルカなんて、嵌めてあげたら泣き崩れた。本当に嬉しがってくれたようで良かった。鈴達も嬉しそうに見ているし、一度外してしっかりと裏面の名前を確認している。間違いないようにしたので大丈夫だ。美遊の分も用意しているが、そちらは首にかけるペンダントにして俺が持つておく。ハジメの方もユエに告白してしっかりと左手の薬指に指輪を嵌めている。

「ずくろく〜い〜」

「アストルフオにはペンダントだ」

丸い球体で系統樹が描かれたペンダントだ。その中心には地球儀が嵌められている。

「ボクも指輪がいいな〜」

「左手薬指以外に嵌めるならいいぞ」

「むくまっ、いつか。マスターとお揃いならそれで我慢してあげるね！」

「ありがとう」

「その代わりかけて〜」

「わかったよ。何時もありがとう。アストルフオのお蔭で助かっているよ。これからもよろしくな」

「うん！ ボクに任せてー！」

このペンダントは俺とアストルフオ専用だ。なので、納得してくれると嬉しい。

「さて、我とシュテルはオルクス大迷宮の管理の為に残る。レヴィ、こちらは任せたぞ」

「任せて！」

「何か有れば呼んでくださいね」

「うん！」

シュテルとディアーチエはここに残る。もつとも、シュテルとディアーチエは別の端末がチビットとしてついてくる。本体はここで大迷宮の管理とデバイスや技術の開発だ。大迷宮をそのまま放置するわけにはいかない。俺達以外の誰かがここに到達されると非常に困るからだ。それが白崎や八重樫、清水達なら構わないが、それ以外は排除しないとイケない。そんなわけでディアーチエには大迷宮の管理をしてもらう。

「まあ、そう言っても基本的に夜は戻ってくるんだけどね」

「楽だね」

「うん。転送装置、便利だよ」

用意するコテージとかには既に転送装置を組み込んである。ここに転送されるように設計されているので、俺達は基本的に交代で戻ってくる予定だ。

「あの、もう南雲達行っちゃったけど……」

「あくほんとだ！」

「先越された！」

急いで転移魔法陣に乗って外に出る。暗い洞窟の中で、そこから外に出ると足場がなくてそのまま落ちて行く。落ちた先ではハジメとユエがうさ耳美少女に抱き着かれながら泣かっていた。何故かかなりボロボロだったが、もしかしてハジメがしたのか？

いや、それはないな。もしそうならどれだけ手が早いんだって事になるし。

ハジメ

他人の告白など見ても仕方がないので、ユエと共に二人で魔法陣へ先に乗って移動した。魔法陣の光に満たされる。次の瞬間、何も見えなくとも空気が変わったことは実感してきた。奈落の底の澱んだ空気とは明らかに異なる、どこか新鮮さを感じる空気に頬が緩む。

やがて光が収まり目を開けた俺の視界に写ったものは……洞窟だった。

「なんでやねん」

魔法陣の向こうは地上だと無条件に信じていた俺は、代わり映えない光景に思わず半眼になってツツコミを入れてしまった。正直、めちゃくちゃガツカリした気分だ。そんな俺の服の裾をクイクイと引っ張るユエ。

「何だ？」

「……秘密の通路……隠すのが普通」

「あ、ああ、そうか。確かにな。反逆者の住処への直通の道が隠されていないわけないか」

顔を向ける俺に慰めるようにユエは自分の推測を話してくれた。確かにユエの言う通りだ。そんな簡単なことにも頭が回らないとは、どうやら思った以上に浮かれていたらしい。

頭をカリカリと掻きながら気を取り直す。緑光石の輝きもなく、真っ暗な洞窟ではあるが、俺もユエも暗闇を問題としないので道なりに進むことにする。沙条達が後から来るだろうし、先に進んで安全を確保しておいても問題ない。

途中、幾つか封印が施された扉やトラップがあつたが、オルクスの指輪が反応して尽く勝手に解除されていた。俺達は一応、警戒していたのだが……拍子抜けするほど何事もなく洞窟内を進み、遂に光を見つけた。外の光だ。俺はこの数ヶ月、ユエに至っては三百年間、求めてやまなかつた光。

俺とユエは、それを見つけた瞬間、思わず立ち止まりお互いに顔を見合わせた。それから互いにニツと笑みを浮かべ、同時に求めた光に向かつて駆け出した。

近づくにつれ徐々に大きくなる光。外から風も吹き込んでくる。奈落のような澱んだ空気ではない。ずっと清涼で新鮮な風だ。俺は「空気が旨い」という感覚をこの時ほど実感したことはなかった。

そして、俺とユエは同時に光に飛び込み……待望の地上へ出るために一步を踏み出した。そして、落ちた。どうやら崖の上に作られた洞窟のような場所のせいで、外は地面ではなかった。すぐに下を確認すると、太陽の光に照らされる地面が見えたので、そのままユエと共に着地する。

ここはオスカー・オルクスが残した資料によると「ライセン大峡谷」と言われる場所らしい。この場所は地上の人間にとって、地獄にして処刑場だ。断崖の下はほとんど魔法が使えないというのに、多数の強力にして凶悪な魔物が生息する。

深さの平均は一・二キロメートル、幅は九百メートルから最大八キロメートル、西の「グリュューエン大砂漠」から東の「ハルツィナ樹海」まで大陸を南北に分断するその大地の傷跡を、人々はライセン大峡谷と名付けたらしい。

俺達は、そのライセン大峡谷の谷底にある洞窟の入口の下にいた。いや、上を見た限りでは魔法陣が消えているから、この辺りを探せばオルクスの指輪に反応して入口が見つかるのだろう。どちらにせよ、今はどうでもいい。谷底とはいえ、頭上の太陽が燦々と暖かな光を降り注がせ、大地の匂いが混じった風が鼻腔をくすぐってくる。

そう、ここがたとえばどんな場所だろうと、確かにここは地上なのだから。呆然と頭上の太陽を仰ぎ見ていた俺とユエの表情が次第に笑みを作る。無表情がデフォルトのユエでさえ誰が見てもわかるほど頬がほころんでいる。

「……戻って来たんだな……」

「……んっ」

俺達は、ようやく実感が湧いたのか、太陽から視線を逸らすとお互

いい見つめ合い、そして思いつきり抱きしめ合った。

「よっしやあああ——!! 戻ってきたぞ、この野郎おおー!」

「んっ——!!」

小柄なユエを抱きしめたまま、俺はくるくると廻る。しばらくの間、人々が地獄と呼ぶ場所には似つかわしくない笑い声が響き渡っているが、気にしたら負けだろう。途中、地面の出っ張りに躓き転倒するも、そんな失敗でさえ無性に可笑しく、二人してケラケラ、クスクスと笑い合う。しばらくしてようやく二人の笑いが収まった頃には、……魔物に囲まれていた。

「はあく、全く無粋なヤツらだな……確かここって魔法使えないんだっけ?」

ドンナー・シユラークを抜きながら俺が首を傾げる。座学に励んでいた俺には、ここがライセン大峡谷であり魔法が使えない場所であると理解している。

「……分解される。でも力づくでいく」

ライセン大峡谷で魔法が使えない。理由は発動する魔法に込められた魔力が分解されて散らされてしまうからだ。もちろん、ユエの魔法も例外ではないが、かつての吸血鬼の姫であり、内包魔力は相当なものだ。今は沙条の馬鹿みたいな魔力が込められている外付けの魔力タンク、魔晶石シリーズを持っている。つまり、ユエは分解される前に膨大な魔力を使って分解される前に魔法を放てばいいということだ。

「力づくって……効率は何?」

「……十倍くらい……」

詳しく聞くと、初級魔法を放つのに上級レベルの魔力が必要らしい。射程も相当短くなるようで、使い道がほとんどない。

「あく、じゃあ俺がやるからユエは身を守る程度にしとけ」

「うっ……でも」

「いいからいいから、適材適所。ここは魔法使いにとつちや鬼門だろ? 任せてくれ。それに作った武器の実験台に丁度いい。沙条達が来る前に片付けたい」

「ん……わかった」

ユエが渋々といった感じで引き下がる。せつかく地上に出たのに最初の戦いで戦力外とは納得し難いのだろう。少し矜持が傷ついたようだ。だからか、唇を尖らせてユエが拗ねた。

そんなユエの様子に苦笑いしながら俺はおもむろにドンナーを引き抜いて発砲した。相手の方を見もせず自然な動作でやることで相手を意識させずに射殺する。

取り囲んでいた魔物の一体が何の抵抗もできずに、その頭部を爆散させ死に至った。辺りには銃声の余韻だけが残り、魔物達は何が起こったのかわからないというように凍り付いている。確かに、十倍近い魔力を使えばここでも『纏雷』は使えるようだ。問題なくレベルガンは使える。

「さて、奈落の魔物とお前達、どちらが強いのか……試させてもらおうか？」

俺は不敵な笑みを浮かべながらスつとガン⇨カタの構えをとり、俺の眼に殺意が宿る。その眼を見た周囲の魔物達は気がつけば一歩後退っていた。しかも、そのことに気がついてすらいない。

「ガアアアアア!!」

相手が叫ぶとほぼ同時に引き金を引く。銃声と共に一条の閃光が走り、魔物は避けるどころか反応すらせずに頭部は吹き飛んだ。後はただの作業だ。辺り一面が魔物の屍で埋め尽くされるのに五分もかからなかった。

ドンナー・シユラークを太もものホルスターにしまった俺は、首を僅かに傾げながら周囲の死体の山を見てみると、傍にトコトコとユエが寄って来た。

「……どうしたの？」

「いや、あまりにあっけなかつたんで……ライセン大峡谷の魔物といやあ相当凶悪って話だったから、もしや別の場所かと思って」

「……ハジメが化物なだけ……」

「ひでえいい様だな。俺で化物っていうんだったら、もっとやべえのが居るって。まあ、奈落の魔物が強すぎたってことでいいか」

そう言つて肩を竦めた俺は、もう興味がなくなったので魔物の死体から目を逸らす。

「さて、この絶壁、登ろうと思えば登れるだろうが……流石に待つていないと五月蠅いだろうな。だが、時間の無駄もできない。ライセン大峡谷と言え、七大迷宮があると考えられている場所だ。せつかくだし、探索でもしながら時間を潰すか？」

「……それがいいかも？」

さて、ユエと一緒に回りを確認しようとする、遠くの方に砂煙が見えた。義眼の望遠機能を使いながらそちらを見ると、かつて見たティラノモドキに似ている大型の魔物^{モンスター}が居た。もつとも、こちらは頭が二つあるので双頭のティラノサウルスモドキだ。だが、真に注目すべきは双頭ティラノではなく、その足元をぴよんぴよんと跳ね回りながら半泣きで逃げ惑うウサミミ女だ。

「……何だあれ？」

ユエに宝物庫から取り出した双眼鏡を渡す。ユエはそれを使って確認していく。

「……兎人族？」

「なんでこんなところに？ 兎人族って谷底に住処なのか？」

「……聞いたことない」

「じゃあ、あれか？ 犯罪者として落とされたとか？ 処刑の方法としてあったよな？」

「……悪ウサギ？」

俺とユエは首を傾げながら、逃げ惑うウサミミを尻目に呑気にお喋りに興じる。助けるかどうかという問題が存在する。俺とユエだけなら、赤の他人である以上、単純に面倒だし興味がないので放置する。

これは別にライセン大峡谷が処刑方法の一つとして使用されていることから、ウサミミが犯罪者であることを考慮したわけではない。

ただ、後からやってくるユーリ達の問題だ。谷口はわからないが、中村やルサルカは確実に見捨てる。いや、ルサルカは捕まえて玩具にする可能性は否定できない。園部は現状、主体性がなくなっているから、主人と決めている沙条に従うだろう。詩乃は助ける可能性もあ

る。そして、ユーリは確実に助けるだろう。そうなると沙条も助ける事になり、沙条が助けると決めれば一気に助ける方になるのが目に見える。

考えていると、ウサミミの方が俺達を発見したらしい。双頭ティラノに吹き飛ばされ岩陰に落ちたあと、四つん這いになりながらほうほうのていで逃げ出し、その格好のまま俺達を凝視している。

そして、再び双頭ティラノが爪を振り隠れた岩ごと吹き飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がると、その勢いを殺さず猛然と逃げ出して俺達の方へと向かってきた。

それなりの距離があるのだが、ウサミミの必死の叫びが峡谷に木霊し俺達に届く。

「だずげでぐだざぐい！ ひっ——、死んじやう！ 死んじやうよお！ だずけてえ、おねがいしますう〜！」

滂沱の涙を流し顔をぐしゃぐしゃにして必死に駆けてくる。そのすぐ後ろには双頭ティラノが迫っていて今にもウサミミ少女に食らいつこうとしていた。このままでは、俺達の下にたどり着く前にウサミミは喰われてしまうだろう。沙条達が来る前に処理できるのなら、その方がいいか？ いや、見捨てるどころを見られた方がリスクがあるな。

「モンスタートレインだよ。勘弁しろよな」

「助ける？」

「ああ、一応な」

「ん」

ドンナーで素早く二発の弾丸を発射する。一条の閃光が通り抜けてそれぞれが双頭の後頭部を粉碎しながら貫通し、口内を突き破って空へと消えていく。ティラノサウルスモドキも瞬殺だった。

力を失った片方の頭が地面に激突、慣性の法則に従い地を滑る。双頭ティラノはバランスを崩して地響きを立てながらその場にひっくり返った。その衝撃で、ウサミミは吹き飛ぶ。狙いすましたように俺達の下へとやってきた。

「きゃあああああー！ た、助けてくださ〜い！」

俺に向かつて手を伸ばすウサミミ少女。その格好はボロボロで女の子としては見えてはいけない場所が盛大に見えてしまっている。たとえ酷い泣き顔でも男なら迷いなく受け止める場面だろう。沙条だってそうするだろうが、俺はしない。

「アホか、凶々しい」

「ええー!？」

ウサミミは驚愕の悲鳴を上げながら俺の眼前の地面にベシヤと音を立てながら落ちた。両手両足を広げうつ伏せのままピクピクと痙攣している。気は失っていないが痛みを堪えて動けないようだ。

「……面白い」

ユエがハジメの肩越しにウサミミ少女の醜態を見て、さらりと酷い感想を述べる。なんだかんだでユエもルサルカと気があっている部分もある。影響されて欲しくはないのだがな。

「助けて頂きありがとうございます！ 私は兎人族ハウリアの一人、シアといいますです！ 取り敢えず私の仲間も助けてください！」

「断る」

「おねがいますー！」

俺はサツサと移動したいが、まだ沙条達が来ていないのでできない。だが、くるりと後ろを向いて拒否する態度を見せる。そうするとウサミミは俺の腰にしがみついてきた。

俺は、しがみついて離れないウサミミ少女を横目に見る。そして、奈落から脱出して早々に舞い込んだ面倒事に深い溜息を吐く。

「私の家族も助けて下さいー！」

どうやら、このウサギ一人ではないらしい。仲間も同じ様な窮地にあるようだ。よほど必死なのか、先程から俺に抱き着いたことでイラついたのか、相当強くユエに蹴られている。それでも頬に靴をめり込ませながらも離す気配がない。あまりに必死に懇願するので、仕方なく…… “纏雷” をしてやった。

「アバババババババババババババババババ!?」

電圧と電流は調整してあるので死にはしないが、しばらく動けなく

なるくらい威力はある。シアのウサミミがピンツと立ちウサ毛がゾワツと逆だつ。『纏雷』を解除してやると、ビクンツビクンツと痙攣しながらズルズルと崩れ落ちた。

「全く、非常識なウザウサギだ」

「ん……」

何事もなかったように探索に出ようとするが――

「に、にがじませんよ」

ゾンビの如く起き上がり俺の脚にしがみついできやがった。流石に思わず引いてしまった。

「お、お前、ゾンビみたいだな。それなりの威力出したんだが……何で動けるんだよ？ つーか、ちよつと怖えんだけど……」

「……不気味」

「うう、何ですか！ その物言いは！ さつきから、肘鉄とか足蹴とか、ちよつと酷すぎると思います！ 断固抗議しますよ！ お詫びに家族を助けて下さい！」

ぶんすかと怒りながら、さらりと要求を突きつけるふざけた奴。案外余裕そうだな、おい。このまま引き摺っていこうかとも考えたが、何か執念で何処までもしがみついできそうだ。血まみれで引きずられたまま決して離さないウサミミ……完全にホラーだが、問題は他者から見た場合だ。沙条達が来たら、どう見えるだろうか？ 確実に俺が襲っているように見える。

「ったく、何なんだよ。取り敢えず話聞いてやるから離せ。つてさり気なく俺の外套で顔を拭くな！」

話を聞いてやると言われパアアと笑顔になったシアは、これまたさり気なく俺の外套で汚れた顔を綺麗に拭った。本当にいい性格をしている。イラツと来た俺は再び肘鉄を食らわせると「はぎゅん！」と奇怪な悲鳴を上げ蹲った。

「ま、また殴りましたね！ 父様にも殴られたことないのに！ よく私のような美少女を、そうポンポンと……もしや殿方同士の恋愛にご興味が……だから先も私の誘惑をあつさり拒否したんですね！ そうでッあふんツ!？」

なにやら不穏当な発言が聞こえたので蹲るシアの脳天目掛けて踵落としをする。

「誰がホモだ、ウザウサギ。っていうか何でそのネタ知ってんだよ。ユエと言いい前と言いい、どっから仕入れてくるんだ……？ まあ、それは取り敢えず置いておくとして、お前の誘惑だがギャグだが知らんが、誘いに乗らないのは、お前より遥かにレベルの高い美少女がすぐ隣にいるからだ。ユエを見て堂々と誘惑できるお前の神経がわからん」

そう言ってチラリと隣のユエを見る。ユエは俺の言葉に赤く染まった頬を両手で挟み、体をくねらせてイヤンイヤンしていた。腰辺りまで伸びたゆるふわの金髪が太陽の光に反射してキラキラと輝き、ビスクドールの様に整った容姿が今は照れでほんのり赤く染まっただけで、見る者を例外なく虜にする魅力を放っている。

格好も、俺と出会ったばかりの頃の様なみすぼらしい物ではない。前面にフリルのあしらわれた純白のドレスシャツに、これまたフリル付きの黒色ミニスカート、その上から純白に青のラインが入ったロングゴートを羽織っている。足元はショートブーツにニーソだ。どれも、オスカーの衣服に魔物の素材を合わせて、ユエ自身が仕立て直した逸品だ。高い耐久力を有する防具としても役立つ衣服であり、生成魔法も施してある。

ちなみに、俺は黒に赤のラインが入ったコートと下に同じように黒と赤で構成された衣服を纏っている。これもユエがルサルカ達と一緒に作ってくれた。

当初、ユエは俺にも白を基調とした衣服を着せてパールツク気味にしたがったのだが、流石に恥ずかしいのと、俺の髪が白色になっているので全身白は嫌だと懇願した結果、今のスタイルに落ち着いた。

そんな可憐なユエを見て、「うっ」と僅かに怯んだようだ。確かにこいつも美少女ではあるが、ユエや香織には負ける。

少し青みがかかったロングストレートの白髪に、蒼穹の瞳。眉やまつ毛まで白く、肌の白さとも相まって黙っていれば神秘的な容姿とも言えるだろう。性格を知らなければ。手足もスラリと長く、ウサミミや

ウサ尻尾がふりふりと揺れる様は何とも愛らしい。ケモナー達が見れば感動して思わず滂沱の涙を流すに違いない。おそらく、沙条達に見付かれれば玩具にされる事請け合いだ。実際に詩乃が玩具にされて威嚇をよくしているからな。

「で、でも！ 胸なら私が勝ってます！ そっちの女の子はペツタンコじゃないですか！」

「ペツタンコじゃないですか」 「ペツタンコじゃないですか」
「ペツタンコじゃないですか」

峡谷に命知らずなウサミミの叫びが木霊する。恥ずかしげに身をくねらせていたユエがピタリと止まり、前髪で表情を隠したままユラリと移動する。

俺は「あくあ」と天を仰ぎ、無言で合掌する。ウサミミよ、安らかに眠れ……。

ちなみに、ユエは着痩せするが、それなりにある。断じてライセン大峡谷の如く絶壁ではない。震えるシアのウサミミに、囁くようなユエの声がやけに明瞭に響いた。

……お祈りは済ませた？

……謝ったら許してくれたり

……

死にたくなあい！ 死にたくなあい！

「嵐帝」

アツ——！！

突如発生した竜巻に巻き上げられ錐揉みしながら天に打ち上げられるウサミミ。彼女の悲鳴が峡谷に木霊し、きっかり十秒後、グシャ！ という音と共に俺達の眼前に墜落した。

まるで犬○家のあの人のように頭部を地面に埋もれさせビクンツビクンツと痙攣している。完全にギャグだった。その神秘的な容姿とは相反する途轍もなく残念だ。ただでさえボロボロの衣服？ が更にダメージを受けて、もはやただのゴミのようだ。逆さまなので見えてはいけないものも丸見えである。百年の恋も覚める姿だ。

ユエは「いい仕事した!」と言う様に、掻いてもいない汗を拭うフリをするとトコトコと俺の下へ戻ってくる。ユエは俺を下からジッと見上げる。

「……おつきい方が好き?」

実に困った質問だ。俺としては「YES!」と答えたい所だったが、それを言えば未だ前方で痙攣している残念ウサギと仲良く犬○家だろう。それは勘弁して欲しい。

「……ユエ、大きさの問題じゃあない。相手が誰か、それが一番重要だ」

「……」

取り敢えずYESともNOとも答えず、ふわっとした回答を選択して誤魔化す。ヘタレだと言われようと、俺には沙条のような馬鹿みたいな防御力はない。だから、この解答しか用意できない。ユエはスッと目を細めたものの一応の納得をしたのか無言で俺に抱き着いてきた。

内心、冷や汗を流し、居心地の悪い沈黙を破ろうと話題を探すが何も見つからない。

視線を彷徨わせると、痙攣していたシアの両手がガツと地面を掴み、ふるふる震えながら懸命に頭を引き抜こうとしている姿を捉え、これ幸いとシアに注意を向け話のタネにする。

「アイツ動いてるぞ……本気でゾンビみたいな奴だな。頑丈とかそう言うレベルを超えている気がするんだが……」

「……」

いつもより長い間の後、返事をしてくれたことにホッとしていると、ズボツという音と共にシアが泥だらけの顔を抜き出した。

「ううゝひどい目に遭いました。こんな場面見えてなかったのに……」

「……こんな残念ウサギを助ける必要ない……行こ、ハジメ……」

「そうだな」

「まつでくだざいゝゝ! 謝りますからあああつ!」

泣きながら抱き着いてくるウサギをどうにかしようとしてユエと一緒に

に剥がそうとした瞬間。複数の気配が降りてくる。

「事案が発生している。アウトかセーフか」

「アウトね」

「アウト」

「アウト」

「あ、アウトで」

「あ、あの、ハジメさんはそんなことしないので、セーフで……」

「ご主人様に従うから、どっちでもいい」

「遊んでないで、とりあえず確保して事情聴取？」

ユーリと詩乃以外、擁護してくれるのがいない。いや、詩乃は事情を聞いてからの判断か。

「ん、このウサギがハジメを取ろうとした」

「ギルティね」

「ギルティでいいと思うよ？」

しかし、ユエの言葉で一瞬にして有罪になるシア。そら、こいつらからしたら、沙条を取られるのと同じだから、そうなるな。

「よくし、ユエちゃん。お姉さんに任せない。こいつで拡張して身体に痛みと恐怖を教え込んでやるから」

「ひいひいっ！ その手に持つてるのはなんですかあ！」

「女性の大事な所に突っ込んで開く物よ。あ、口でもいけるわね。開けたらその辺の岩でも詰め込んであげるわ」

「た、助けてください！ この人ガチですううう！」

「言い忘れていたが、そいつは拷問好きだ」

「いやあああああつ!! って、私の素敵な耳を引っ張らないでくださいー！」

ルサルカに迫られて俺から離れ、後ずさっていったシアはいつの間にか隣に居た谷口と沙条にうさ耳を捕まれて弄られている。

「これ、本物？」

「感触的にはどうかかな？」

「とりあえず引っこ抜こう！ うさ耳は二人も要らない！」

「あなたのはつけ耳ですよね！ 初めて見ました！ お願いですから

止めてください！」

一瞬でカオスになった。このまま何処かに行きたいと思つていと、ユーリと詩乃が近付いてきた。

「何があつたんですか？」

「ああ……実はな……」

あつた事を伝えると誤解はあつさり溶けた。

「とりあえず、真名……ご主人様と鈴が満足するまでは放置していきましょう。私の被害が減るから」

「詩乃さん、尻尾とか耳を良く狙われていますからね」

「ユーリもつけたら一発で落ちると思うけど？」

「猫耳の躯体、ちよつと考えてみます」

「本当にやるのね……しかも、思つたよりも本格的な奴」

「どうでもいいけれど、逃がさないように囲んでおかない？」

中村の意見に賛成し、俺達はとりあえずシアを取り囲む。ちなみに中村の手には禍々しい魔導書が現れており、臨戦態勢を取っている。そのせいか、周りの空気がひんやりとしてきていて、本当にゾンビやスケルトンがでてきそうな雰囲気すらある。それと彼女の手には銀色の指輪が左手の薬指にしっかりと嵌められているのが見えた。

「あの、恵里……いいのかな？」

「いいの。それよりも姿を変えておいた方がいいからね」

「わかった」

園部の姿が成長し、大人の姿へと変わっていく。そして、マフラーを引き上げて口元を隠し、そのまま気配を消していく。

「やめろつて。怖いわ」

「あ、ごめん。まだちゃんと使えてないから」

「気をつけろよ。誤射する可能性もあるから、制御だけはしっかりとしてくれ」

「うん。ありがとう」

「仲間だからな」

園部は気配遮断のスキルをジャックから手に入れ、スキルにない技術、プレイヤースキルと呼べるような奴をヘイゼルから手にいれてい

る。気配を消されると本当に何処にいるかもわからないし、情報抹消のスキルがあるので痕跡も記憶も消えてあやふやになる。本当にやばい。

「沙条、いい加減にしてソイツの話を聞いてやるか、そのまま放置して去るか選ぼうぜ」

「あゝ」

「聞いてください！ いえ、なんでも一つだけ言う事を聞きますから、私の仲間を助けてください！」

「なんでも一つなのね。じゃあ、その仲間ごと全員奴隷になりなさい」「え」

「一つでなんでもでしょう？」

ガタガタと囲まれる可哀想なウサギは拷問官に身体を拘束されていく。というか、ルサルカの奴……ギロチンを取り出しやがった。

「ま、まっ！」

「あ、ちゃんと答えないと首を切り落とすからね」

両手と首を枷に嵌め、うつ伏せではなく仰向けにして拘束。刃が見える状態になっている。

「このギロチン、巫人を何十人、何百人と処刑してきた物よ。あなたを殺すのに丁度いいでしょう？」

「ひいひいっ！」

「ルサルカ、やりすぎですよ」

「このウサギがしっかりと答えたらいだけよ。簡単でしょう？」

「沙条」

「まあ、こつちの方が確実に情報を吐くからな。というわけで、可愛い可哀想なウサギさん。洗い浚い喋ってくれ」

「わ、わかりました！ 何もかも話します！ 私はどうなってもいいので仲間だけは助けてください！」

「いいよ。じゃあ、鈴。結界を頼む。アイツの影響を排除してくれ」「鈴にお任せだよ」

それからシアが色々と喋っていく。その間、アストルフオとレヴィにウサミミを弄られているが、仕方ないだろう。

シア達、ハウリアと名乗る兎人族達は「ハルツィナ樹海」にて数百人規模の集落を作りひっそりと暮らしていたらしい。兎人族は、聴覚や隠密行動に優れているものの、他の亜人族に比べればスペックは低いらしく、突出したものが無いので亜人族の中でも格下と見られる傾向が強いとのことだ。

性格は総じて温厚で争いを嫌い、一つの集落全体を家族として扱う仲間同士の絆が深い種族だ。また、総じて容姿に優れており、エルフのような美しさとは異なった、可愛らしさがあるので、帝国などに捕まり奴隷にされたときは愛玩用として人気の商品となる。

そんな兎人族の一つ、ハウリア族に、ある日異常な女の子が生まれた。兎人族は基本的に濃紺の髪をしているのだが、その子の髪は青みがかった白髪だったのだ。しかも、亜人族には無いはずの魔力まで有しており、直接魔力を操るすべと、とある固有魔法まで使えたのだ。

当然、一族は大いに困惑した。兎人族として、いや、亜人族として有り得ない子が生まれたのだ。魔物と同様の力を持っているなど、普通なら迫害の対象となるだろう。しかし、彼女が生まれたのは亜人族一、家族の情が深い種族である兎人族だ。百数十人全員を一つの家族と称する種族なのだ。ハウリア族は女の子を見捨てるという選択肢を持たなかった。

だが、樹海深部に存在する亜人族の国「フェアベルゲン」に女の子の存在がばればば間違いなく処刑される。モンスター魔物とはそれだけ忌み嫌われており、不倶戴天の敵だ。国の規律にも魔物を見つけ次第、できる限り殲滅しなければならぬとあり、過去にわざと魔物を逃がした人物が追放処分を受けたという記録もあるらしい。

また、被差別種族ということもあり、魔法を振りかざして自分達亜人族を迫害する人間族や魔人族に対してもいい感情など持っていない。樹海に侵入した魔力を持つ他種族は、総じて即座に殺すのが暗黙の了解となっているほどとのこと。

故に、ハウリア族は女の子を隠し、十六年もの間ひっそりと育ててきた。だが、先日とうとう彼女の存在がばれてしまった。その為、ハウリア族はフェアベルゲンに捕まる前に一族ごと樹海を出たらしい。

行く宛もない彼等は、一先ず北の山脈地帯を目指すことにした。山の幸があれば生きていけるかもしれないと考えたからだ。未開地ではあるが、帝国や奴隷商に捕まり奴隷に墮とされてしまうよりはマシと考えたのだろう。

しかし、彼等の試みは、その帝国により潰えた。樹海を出て直ぐに運悪く帝国兵に見つかってしまった。巡回中だったのか訓練だったのかは分からないが、一個中隊規模と出くわしたハウリア族は南に逃げるしかなかった。

女子供を逃がすため男達が追っ手の妨害を試みるが、元々温厚で平和的な兎人族と魔法を使える訓練された帝国兵では比べるまでもない歴然とした戦力差があり、気がつけば半数以上が捕らわれてしまった。

全滅を避けるために必死に逃げ続け、ライセン大峡谷にたどり着いた彼等は、苦肉の策として峡谷へと逃げ込んだ。流石に、魔法の使えない峡谷にまで帝国兵も追って来ないだろうし、ほとぼりが冷めていなくなるのを待とうとしたのである。魔物に襲われるのと帝国兵がいなくなるのとどちらが早いかという賭けだった。

しかし、予測に反して帝国兵は一向に撤退しようとはしなかった。小隊が峡谷の出入り口である階段状に加工された崖の入口に陣取り、兎人族が魔物に襲われ出てくるのを待っているらしい。

そうこうしている内に、案の定、魔物が襲来した。もう無理だと帝国に投降しようとしたが、峡谷から逃がすものかと魔物が回り込み、ハウリア族は峡谷の奥へと逃げるしかなかった。そうやって、追い立てられるように峡谷を逃げ惑い……

「……気がつけば、六十人はいた家族も、今は四十人程しかいません。このままでは全滅です。どうか助けて下さい！」

最初の残念な感じとは打って変わって悲痛な表情で懇願するシア。どうやら、シアは、俺やユエ、沙条達と同じ、この世界の例外というヤツらしい。特にユエと同じ、先祖返りと言うやつなのかもしれない。

「あの、お兄ちゃん……」

「レヴィ、ユーリ」

「はい！」

「なに〜？」

「レヴィは即座に帝国方面に空を駆ける。ユーリは俺に憑依してサーチャーを大量に放て。手に入れた情報は全員のブレイコンピュータに送り、レヴィに伝えてくれ。優先目標は帝国の輸送隊に運ばれている兎の確保だ。ルサルカを連れて俺が追う。アストルフォ」

「はいはい！」

「鈴を背負って全力で走ってくれ。最優先は兎達と合流。合流後は鈴が結界を張って、アストルフォは魔物^{モンスター}を狩ってくれ」

「任せて！」

「お願いね」

「うん！」

報酬も決めてないのに助けるようだが、何を考えているのか。指示された沙条の嫁達が即座に行動を起こし、馬鹿みたいな数のサーチャーが全方位に放たれた。

「方向はこつちだっけ？」

「そつちだ」

「じゃあいつてくるね〜」

「ああ」

「びゅーん！」

レヴィが雷を纏って空を高速で飛んで行く。アストルフォも鈴をおんぶして走り出した。

「沙条。報酬はどうするつもりだ？」

「それはこのシアという女をもらう」

「やっぱりか。だが、刺されるぞ」

沙条がそう言った瞬間、殺気がやばい。だが、沙条の言葉で俺は驚いた。

「俺がもらうんじゃない。ハジメが貰うんだ」

「おい、待て」

「俺は詩乃や優花を持っているから、ハジメがバランス的にいいだろ

う」

「いや、要らん。それなら、案内とか、この辺りの知識でいいだろう」
そう言ったら、沙条が俺に顔を近付けてこっそりと話してくる。

「こいつのレアスキルが欲しい。蒐集したらかなり使える」

「未来予知だったか。確かに便利だがそこまでの価値はあるか？ 先の未来を見れるのはたまにで、近い未来しか見れないのだろうか？」

「こいつのスキルを改造し、ブレインコンピュータに送って射撃支援システムにすれば価値はある」

「なるほど。それに使うのか。だが、飼う理由にはならない」

「それだけだとシアの部族を全部助けるには代価が見合わないからな」

確かに代価と考えると割に合わないな。沙条は安全な場所に連れて行って放置するつもりもないだろう。それにしてもなんだかんだ言ってシアを奴隷として俺が貰う事になっているが、ユエを見ると膨れている。

「ユエ」

「私は反対。香織の事もある。だから……」

「ユエ、これは——」

沙条達がユエに何かを囁いていく。そうすると、ユエは頷いた。

「ハジメ、私も賛成する。とりあえず、奴隷として使って要らなければ売る。それでいい」

「いいのか？」

「ん。保険は大事」

「保険？ おいまさか……」

「言っただろう。俺達は白崎の味方だ」

恵里と園部までうんうんと頷いている。こいつらの狙いははなっから、俺にシアをあてがう事だ。そして、なし崩し的にハーレムを作らせ、ユエと香織の勝負がどちらに転んでも問題ないようにするといったところだろう。こうなると勝負の結果はどちらが上かでしかないから、最低限の幸せは確保できているといった感じか。沙条がそれを実戦しているからユエも納得しやすい。

「わ、私の身で皆が助かるのなら構いません！ おねがいします！

ハジメさんの所がいいです！ こっちは怖すぎます！」

「まあ、強制はしないから好きにすればいい。どちらにしろ、樹海を攻略するまで獣人の案内は必要だ」

「詩乃でもいけるんじゃないか？」

「私は土地勘がないし、仮初だから……わからないよ」

「ちっ。わかったよ。だが、ユエは本当にいいのか？」

「負けるつもりはない。でも、ハジメを想って手を尽くしてくれている香織に少しは恵んであげるの」

「はいはい」

拘束具を外してやり、解放してやると嬉しそうに泣きついてきた。とりあえず、手で頭を押さえて引き剥がしておく。まあ、沙条の所に行くよりは、シアにとつてはいいだろうな。

「まあいいか。じゃあ、全員で魔物掃除モンスターと行くぞ」

「楽しい散歩の始まりだ」

乗り物を出して、移動していく。天井に詩乃が乗り、狙撃を初めていくので安心だ。しかし、本当にハウリア族全員を助けるつもりなんだろうか？ いや、そうか。国を作ると言っていたし、ハウリア族を人手として使うつもりか。オルクス大迷宮を支配しているのだから、隠れ潜む場所を提供するぐらいは容易いが、その辺りをどう考えているかはわからないな。

第43話

戦闘する為にユーリとルサルカに体内に戻ってもらう。現状、戦闘になると全員の運用はできない。魔力を消費せず、普通に過ごすだけなら召喚キャパシティーを大幅に超えても維持する魔力があほみたい増えるだけで馬鹿魔力で補える。だが、事が戦闘になると魔力消費が飛躍的に跳ね上がるので、節約の為に体内に戻ってもらう。

なので、今回は身体をルサルカに貸してユーリはお留守番。レヴィとアストルフオの二人がメインだ。詩乃は適宜、力を使ってもらう。鈴や恵里、優花に使われている物はすでに二人の物で、身体に溶け合わせて融合させることで、召喚キャパシティーはそれぞれが支払っているようなものだ。なので、俺が支払う必要はない。正直、ジャックはどうなるかわからないが。

「あのお、それで本当に皆を助けしてくれるのですか？ できれば奴隷にするのは私だけで、皆は許して欲しいのですが……それだと帝国に捕まるとあまり変わりませんし……」

恵里を前に乗せ、後ろに優花を乗せバイクで走っていると、ハジメの方に乗ったシアが聞いてくる。一応、彼女の声もハジメの通信機を通して各バイクに設置されているスピーカーから聞こえてくる。風圧とかも邪道だが、魔法で排除しているので音が聞こえないなんてことはない。

「俺は必要ないが、沙条……というか、ルサルカは考えがあるんだよね？」

「安心しなさい。奴隷っていつでも対外的にそうするだけで、ちゃんと扱うわよ。アンタ達って聞いた話じゃ、帝国に追われるどころか、亜人達の国であるフェアベルゲンからも逃がっているのよね？」

「は、はい……」

「確かに帝国から追われているわ、樹海から追放されているわ、厄介のタネだな。ほぼデメリットしかねえじゃねえか。仮に峡谷から脱出出来たとして、その後どうすんだよっ？」

「うう……それは……」

確かに詰みの状態だ。敵は帝国だけじゃない。人間族全てだし、魔族からはどう扱われるかはわからないが、オスカー・オルクスの話なら、おそらく魔族からも玩具にされるだろう。

「人間族に捕まるのが関の山だろうが。で、それ避けたきや、また俺達を頼るんだろ？ 今度は、帝国兵から守りながら北の山脈地帯まで連れて行けつてな。言っておくが、北の山脈だつて魔物モンスターや人間か魔族はいるだろう」

「うっ、そ、それは……で、でも！ あれ？ 皆が奴隷になったら皆さんが守ってくれる、のですか？」

「守ってあげるわよね、マスター？」

「その代わりに働いてもらうけどな。ハジメの方もそれでいいよな？」

「まあ、人手はあつた方がいいしな」

「そういうわけで、ちゃんと働いてくれるなら衣食住は保証するし、隔離されているけれど安全な隠れ家もある。人間族には俺達の奴隷という事にすれば被害は抑えられるし、俺達が直接介入する理由にもなる」

「まあ、決めるのはお前達だ。後で相談するなりすればいいだろう」

ハジメがそう締めくくる。まあ、確かにぶつちやければシアを蒐集したら最低限のメリットは確保できたと納得すればいい。俺達は最後まで面倒見てやるつもりではあるが、それを受け入れるかどうかはあちら次第だ。

『ライセン大迷宮を発見しましたが……』

『今は場所だけ記録しておいて放置しましょう。優先目標はシアさんの家族です』

『わかりました。あの、これは……』

『お兄ちゃん、レヴィが輸送部隊を見つけたようです……それで、その……』

『これは見せていいのかな……？』

流石はレヴィだ。速度が違いすぎる。その分、燃費も悪いが仕方がない。貯蓄した魔力がどんどん減って言っている。一分で千ぐらい

は消費してやがる。

しかし、美遊やユーリが口籠ったが、どうしたのだろうか？ デフォルメされた二人はなんとも言えない表情になっている。

『何かあったのか？』

『えつと……怒らないでくださいね？』

『女性の兎さんが、その……』

『襲われています』

『なるほど』

女の子二人にとってはきついことだろう。そういう目的で捕らえたのだろうし、味見でもしているのか。俺も同意の上とはいえ、優花には酷い事をしたのであまりどうこう言えない。詩乃もだが、ほぼ強制のような感じで関係を迫ったともいえるし。

『予定は変更する。レヴィ、殺れ』

『殺していいの？ へいとは殺すのは良くないって言ってたけど……』

『悪い。レヴィが嫌ならいい。そうだな……魔力ダメージで気絶させて兎人族を助けるだけでもいい』

『んくボクが自分で選ぶのか。王様に相談して……』

『レヴィ、自分で考えてください。これから必要な事ですから』

『むむ。難しい事はわからないけど、この人達はウサギさんを無理矢理、お嫁さんにしてるんだよね？』

『まあ、そうと言えるな』

レヴィにとってこういう事はまだちゃんと理解できていないのだろう。ただ、そういう行為は俺としてるわけなので、お嫁さんが欲しいと解釈してみたんだ。

『よし、それなら決めた！ ボク、殺さずに捕らえるよ！』

『それでいいんですか？』

『うん！ それでね、丁度、お婿さんが欲しいって言ってた子達が居るから、その子達に渡してくる！ そうすれば互いに求めてるんだからいいよね！』

『あ、それは……』

『あははは』

『い、いいんじゃないか?』

子供故の純粹さで凶悪な事を選択したレヴィ。レヴィが言っている子達は魔物モンスターの女性なので、どういう事になるかはお察しである。

「じゃあ、そっちは頼む。一応、認識障害の結界を忘れずに展開しておけよ」

『大丈夫! 強くて凄いいボクに任せて! 行つてきまゝす!』

『いつてらっしゃい』

レヴィが突撃していく姿が見えるかのようだ。ただ、気絶した奴等はどうやって運ぶつもりなのだろうか?

「どうした?」

「帝国の輸送部隊をみつけたらしい。緊急事態のようだし、レヴィに頼む事にした」

「大丈夫か?」

「平気だろう。認識障害で魔物モンスターに見えるようにしておけばな」

「わかった」

「あ、あの、皆は無事ですか?」

「無事ではないが、命に問題はないだろう」

「そう、ですか……」

「ん。こつちも見えてきた」

ユエの声で前方を見ると……ワイバーンのような魔物モンスターが襲われている姿を発見できた。そう、ワイバーンのような魔物モンスターが襲われている。襲撃者はウサミミをつけたメイドさん。彼女(?)は空にキラキラ光る物を足場にしたり、空気を足場にしたりして空中を移動し、蛇腹剣でワイバーンモードキの首を落としていく。

それだけでなく、キラキラと光る物に飛んできた光線が反射されてワイバーンモードキを貫き、地上へと落としていく。地上ではウサミミをつけた者達が落ちてくるワイバーンモードキから悲鳴を上げて逃げ回ったり、頭を押さえて隠れたりしている。もっとも、隠れていても耳が出ているので意味がない。

「みんな、助けを呼んできましたよぉ〜!」

シアの声に気付いた兎人族が一斉に彼女の名を呼んだ。その間、空では楽しい戦いが行われているが。

「「「「「「シア!」「」」「」」「」」「」」「」」」」」」

「はい。助けを呼んできました! ですからもう安心です!」

「お、おお……無事だったか。良かった」

「良かった」

バイクから飛び降りたシアが兎人族の者達と抱き着いていく。互いの無事に涙を流しながら抱き合うのは良い景色だ。それもこれも空から落ちてくるワイバーンモドキの死体は鈴の結界によつてしつかりと阻まれているからできることだ。ただ、結界が血や肉片などで満たされているので上を見て失神するのも何人かいるみたい。

「楽勝みたいだな」

「確認したが、地上の魔物モンスターは奈落に比べて雑魚だからな」

「そうか」

「私はどうすればいい?」

「詩乃か……」

詩乃に戦ってもらうか、悩む。そこまで必要はないしな。

「そういうえば詩乃はケットシーなんだよな?」

「そうだけど?」

「なら、テイミングオンラインゲーム用語で、モンスターなどをてなづけることをそう呼ぶ。例：敵モンスターを仲間やペットにする時の行動。できるんじゃないやねえか? ケットシーは」

「できる、かも?」

「それなら試してみるといいだろう。空飛ぶ魔物モンスターは色々と便利だからな」

「真名、いい?」

「頼む」

詩乃がハジメの要望に従って空へと上がっていく。一応、鈴達に伝えて狩るのを控えてもらう。どうせこいつらは鈴の結界によつて逃げられないのだから、ちよつとお話をすればいい。

◇ レヴィ・ザ・スラツシャー

お兄ちゃんから言われた通り、考えたら一番平和的な解決手段だね、きつと。それにあの子達もお外に出たいって言ってたし、間違いないはず。

「よくし、最強のボクが華麗に解決してあげるんだから！」

えつと、まずは認識障害をして……あ、は、はーあ、ウサギさんを助けるならウサギさんの耳を付けた方がいいかな？ そつちの方が警戒されないかも？ でも、シユテるんが居ないし、軀体を作れないからこのままでいいや。

「いくよバルニフィカス！ まずは場から整える！」

『Yes, sir』

ちやんと戦闘^{バリアシヤケツト}衣服^{スラツシユスーツ}の襲撃服に着替えて、バルニフィカスを大鎌形態のスライサーにして、天候を魔法で変更する。使う魔法は天破^{てんは}・雷神槌^{らいじんづい}。へいとのスラッシャーと同じ。雨雲を呼んでこの辺り一帯を昼間だけど暗くしてから雷を降らして突撃する。

「救出作戦開始〜！」

上空から雷を落として止まったところを降下し、馬車の御者を素早く斬り伏せて魔力ダメージを与える。意識を失ったらそれでよし。馬車の中から悲鳴が聞こえるけれど、できるだけ壊さないように布だけ斬り裂いて入る。さあ、強くてカッコイイボクの戦いの始まりだ！

◇ とある帝国兵

捕らえた兎人族を若い女と男だけを生かし、年老いた連中は処分す

る。男は労働力や戦場での肉盾として使い、女は性奴隷として使われる。特に兎人族の女は見目麗しいので飼育して色々と使うのが貴族には人気だ。

今回は魔族との戦争で損耗率が高い亜人奴隷を補給するため、ハルツィナ樹海へとやってきた。ハルツィナ樹海の近辺は定期的な周期と暇な時間が空いた時に警邏隊として出ている。こうすることで亜人達を油断させて捕らえている。

「はやく交代の時間にならねえかな」

「そうだな。まあ、俺はもうすぐだがな」

「ずりい！」

「順番だからな」

御者をしながら隣の奴と話す。こいつも俺と同じ兵士で、階級は低いからこんな役回りになっている。もちろん、任務として警戒はしっかりと行っている。そうしないとご褒美ももらえない。

「交代だ」

馬車の荷台へと続く布が開かれ、様々な匂いと悲鳴、喘ぎ声が聞こえてくる。隣に座っていた奴に手綱を渡してから、出て来た同僚と場所を代わる。ようやく楽しみにありつける。

「あんまりはっちゃけるなよ。壊しすぎると隊長に殺されるぞ」

「わかってますって」

隊長達が散々楽しんで壊れかけているのがこちらに回されてくる。だから気をつけないといけないのだが、まあ大丈夫だ。

馬車の荷台に入ると後ろで両手を縛られている男と女の兎人族が居る。兎人族の男は涙を流しながら、口枷を嵌められた状態で叫んでいる。

そんな奴等の前で若い兎人族の女を複数人で楽しんでいる。といても、基本的に処女の奴は居ない。隊長が使った後だからだ。幼いのは居るが、こちらは貴族に売る者なので手出しはできない。

「開いてるのは……」

「ソイツが空いてる」

指さされたのは14、5歳ぐらいの女で既に身体中を殴られ、凌辱

されてボロボロになっている。そいつは頭を押さえながらガタガタと震えているので、耳を掴んで引つ張り上げると顔が随分と腫れあがっているのがわかる。歯も何本かない。

「ソイツは壊していい。噛みつきやがったから、見せしめとして徹底的にやれ」

「了解」

顔だけでも治せばまだ使えるか。このままじゃ楽しめないからな。ポーシオンをぶっかけて犯そうとしたら、轟音が響いた。

「なにが起こった!」

「近くに雷が落ちたようです!」

「さっきまで快晴だったろうが!」

「空も暗くなってきました!」

「ちっ。全隊に通達。ここで野営を行う! 準備しろ!」

「た、隊長……お、俺は……」

「お前は……まあ、いい。来たばかりの奴は遊んでろ。楽しんだ奴はすぐに行動しろ!」

「「はっ!」」

武器を掴んで出ていく奴等と残された数人。隊長も出ていったので、俺達は気兼ねなく楽しむ。

「いつ、いやっ、こないでっ!」

「やめてっ!」

泣き叫ぶ女達に手を出そうとした瞬間。また轟音が響いた。同時に兵士達の悲鳴もだ。何事かと思つて振り返ると、馬車の幌が破られて中にナニカが入ってきた。そこから微かに見える空には蒼い無数の落雷が周りに落ちていく。

そのナニカはニヤリと笑い、手に持つ大きな蒼い雷で出来た刃を持つ大鎌を持つ。ソイツは水色の髪の毛に紫色の瞳をしていて、青いマントと黒い布製の鎧を見て着け、前が空いているスカートをつけている。股間の部分はしっかりと布の鎧で覆われているが、その形状からおそらく女、それも少女だとわかる。手には銀色のガントレットが装着され、全身から蒼い雷を発している。

「ふっふっふっ、君達の悪行三昧はここまでだ！　ボクが来たからにはもう手出しはさせないよ！」

「て、敵襲！」

普通ならこんな少女なんて脅威とは思わないが、もしもこの天候の急変がコイツによつてもたらされたらのなら、やばいレベルの魔法使いだ。

「ど、どうした！」

「無駄だよ。お外の人達はみくんなおねんねしてるからね！」

「なんだと！」

「さつき出ていったばかりのはず……」

「だって、ボクは強くてかつこい最強の……あ、名前は駄目だった。やっぱ、お前達に名乗る名前はない！　うん、これでいこう！」

「こいつは馬鹿なのか？　いや、ここで上手いこと良い逃れればいい。」

「お、お前は俺達は何者なのか理解しているのか？」

「こんな事をして無事ですむと思ってるのか！　俺達は栄えある帝国兵だぞ！」

「帝国に喧嘩を売るとどうなるのかわかってるのか！」

「てえーくか何か知らないけれど、君達がウサギさん達を虐める悪い奴だつてのはわかってる。だから成敗する！」

「こ、こいつ……帝国すら理解していないだど!？」

「なら、動くんじゃないやねえ！　ハウリア共がどうなってもいいのか！」

「ひっ……た、たすけ……」

「ほーい」

気の抜けた返事をした瞬間。相手がバチツという音と共に消えて人質を取っていた奴の前に現れて顔を鷲掴みにした。当然、電撃を受けたそいつはビクンと身体を震わせて倒れる。

「遅い、遅いぞ！　すろうりい？　って奴だ！」

「って、人質ごと攻撃してやがる！」

「あっはっはっ、非殺傷設定だから気絶するだけだよ！　安心してね！」

「ひいっ！」

気付いたら目の前に居て、咄嗟の判断で剣を前に出して手を離す。するとその剣に相手の拳があたって粉碎される。

「まあ、人以外は普通に壊れるけどね！」

後ろから声が聞こえて振り返る。そこには紫色の瞳が真正面からこちらを覗き込んでいて、彼女は大鎌を振り上げていた。それが振り下ろされ、俺の首が切断されて――

「契約に従い現れ出でよ、ボクのお友達！」

――声が聞こえて目を開けると、そこは馬車の近くだった。身体は動かず、無造作に地面に転がされているのがわかる。そこに兎人族がやってきて謝りながら俺達の服や装備など全てを剥ぎ取っていく。

あの化け物の方へ眼をやると、大規模な魔法陣が展開されていた。そこから湧き上がってくるように魔物モンスターが出てくる。そいつは植物の身体を持った女性型のようだ。

「君達、喜んでいいよ！ ボク、一生懸命に考えたんだ！ エッチしてたって事はお嫁さんが欲しいんだよね！ だから、ボクが用意してあげたよ。この子達も繁殖相手が欲しいって言ってたらから、何も問題ないね！」

「アンタ、絶対にわかってないでしょう」

「んにゃ？ え、なにか違うの？」

「いや、まあ……私達からしたら得しかないからいいけどね」

ま、魔族なのかもしれない。そうか。それならあの強さにも納得できるし、見た事もない新種の魔物モンスターを操っているのもわかる。

「じゃ、ボクは帰るから後は適当に帰ってね。ウサギさん達、その……なんだっけ？」

「馬車ね」

「ば、ば……ソレに乗って来た道に戻るよ！」

「は、はい！」

兎人族が従って馬車に乗り、俺達の装備や服を持って走っていく。

残ったのは身体が動かない帝国の兵士達だけ。助けが来るとは思うが、間に合わないかもしれない。

「な、なにが目的だ！」

「目的？ 私達の目的は繁殖よ。あの子の目的はあのウサギ達だろうけど。ま、これから苗床になるアンタ達には関係ないわね」

「な、苗床だど?! 俺達は男だぞ！」

「関係ないから。私達はアルラウネモドキを基にしてナハトヴァールが生み出した新たな魔物^{モンスター}なの。だから個体数は少なくてね？ 仲間をいっぱい増やしたいの。ああ、安心して。たつぷりと気持ち良くしてあ・げ・る」

無数の鳶が伸びて来て俺達の身体を拘束していく。

「やめろっ、助けてくれ！」

「いやだいやだあああっ！」

「え、エヒト様、お助けを！」

「あはははっ、ばっかじゃないの！ 助けなんて来るわけないし、助ける気もないわよ！」

「あの少女……と……交渉させてく……」

他の奴が先程の子の事を話そうとして止まった。俺も考えるが、思いだせない。相手は少女だったか？ いや、男だった？ 髪の毛の色は？ 瞳の色は？ どんな魔法を使っていた？ なんだ、なんだこれは！

「アンタ達は誰も○○○を認識できない。認識しても目の前から居なくなれば途端に忘れてしまう。そういう魔法をかけられているから。というわけで、後はゆっくりと楽しみましょう？ 全部忘れさせてあげるから」

「アアアアアアアアアアア!!」

大きな花に頭を飲み込まれ、小さな細い何かが耳から大量に侵入してくる。下半身は穴という穴を貫かれて激痛を味わっていく。

◇
「くそ、魔物モンスターを召喚する魔族が現れるとは……陛下に大至急、連絡せねば……俺は連隊長まで成り上がったんだ。こんなところで死んでたまるか！」

◇
「逃がす訳ないのに馬鹿だよね。そう思わない？」

「は、はあくですが、逃がしたのは事実では……」

「だって、他のウサギさん達が居る所まで案内してもらわないと駄目だからね。お兄ちゃんはウサギさん達を助けてこいつて行つたから、ちよつと近くの街にも行つてこようかなつて」

「……う、嬉しいのですが、大丈夫ですか……？」

「……怖いから確認してみる！」

お兄ちゃんとシユテるんに連絡を取る。全部説明するとすぐに返事がきた。

『えつと、というわけなんだけど……』

『流石に街を襲撃するのはまずい。というか、魔力がやばい』

『なら、その人はこちらで処分しておきましょうか？』

『大丈夫だ。魔族と認識されているのなら問題ないし、レヴィの事はわからないはずだ。このまま放置して魔族に警戒してもらおう。そうだな……レヴィ、奈落で作った魔物モンスターを何体か解き放つておけ。それでもいい』

『それなら、あの魔物モンスターを解き放ちましょう。面白い事になりそうですし』

『魔物モンスターまで作ってるのか』

『大迷宮の機能を利用しているだけですけどね』

『ちなみになにを解き放つんだ？』

『オークです』

『女性がひどい目に会う奴か？ それなら……』

『いいえ、男性がひどい目に会う奴です』

『このすばかよ！』というか、どこでそれを……』

『私達も娯楽としてアニメや小説などは見えていますから。それと兵士だけ襲うようにしつかりと伝えておきます』

『それがいいね！』

んく後はウサギさんを出しておけばいいかな。ウサギさん達の護衛にはやっぱりウサギさんだよね！

「ウサギさんが一匹、ウサギさんが二匹……」

とりあえず蹴りウサギさんを14匹ほど護衛として出したから、大丈夫だと思う。世話はお願いで、ボクはこの辺りでひと眠りする！

第44話

ハウリア族の救助は無事に終了した。ワイバーンモドキも二匹ほど、詩乃がテイミングして手懐けた。こう考えると、詩乃というよりケットシーは闇術師よりなのだと思う。

こちらは問題ない。無事にレヴィが連れ去られたハウリア族を助けられたので、しばらく待つていれば数日で合流できるだろう。流星は雷刃の襲撃者と名乗るだけあって、移動速度がやばくてかっこいい。光よりは遅くても音に近い速度は出せるわけで、その速度は圧倒的だ。馬車での移動なんて数分もあれば追いつけるのは間違いない。だからこそ、遊撃戦力としては使い勝手がいい。敏捷Aを持っているアストルフオよりも速いのは間違いない。といっても、それに近い速度を出せるアストルフオもいるが……こちらは空を飛べないのでレヴィの方が移動は速い。

「ねえ、真名。ちよつといい?」

「恵里か。どうした?」

「うん……その、ね?」

「ん?」

もじもじとしている恵里が俺の腕を抱きしめてくる。

「ちよつとこつち来て」

「ああ、わかった。ハジメ、ここは任せていいか?」

「わかった。だが、おっぱじめるなよ」

「流星にねえって」

恵里に連れられて少し離れた場所に移動する。そこで彼女は俺の耳元へと顔を寄せて囁いてくる。

「兎人族のハウリア族を見てたら……我慢できなくなってきた」

「もしかして、エロい方か?」

「違う。いや、そつちでもいいけれど……する?」

「しない。となると、アレか」

『アレでしようね〜』

「うん。今まで見たのは仲間の南雲とその彼女であるユエだから抑えてたけれど……アレは違うから」

俺は疑似的にとはいえ、すでに檜山で済ましている。だが、魔物でモンスター我慢していた恵里からしたら、ハウリア族は目の前にご馳走が転がっているような状況だろう。

『性欲に変換して発散しちゃう〜？ お姉さんも溜まってきてるから、やっちゃうぞ〜！』

「ルサルカは大人しくしている。でも、殺つていい相手が居ないぞ」「ううん、居るよ」

『要るわね〜この先だけど』

流石に二人も助けたハウリア族の事を言っているわけではない。そうになると、おそらく待ち構えているであろう帝国兵か。

「帝国兵か」

「聞いた限り、アイツ等だったら殺しても問題ないよね？」

「恵里は平気か？ その、殺したり……」

「余裕だけど？」

不思議そうに聞いた事に告げてくる恵里に少し引いてしまう。まあ、俺も大丈夫だとは思うが、流石に躊躇なく言い切ったのは恐れ入る。いや、考えたら当たり前だな。恵里は鈴を殺そうと奈落に突き落としたりしているし、今更戸惑わないか。

『私も拷問したい〜！ 約束通り我慢しているんだから、や・ら・せて♪』

「相手次第だがいいだろう。向こうが敵対してきたら好きにしろ。ただ、全員は殺すな。何人か残してハジメ達も希望したら経験させる」「わかった。準備して待ってる」

『はいはい。あ、メンバーは私と恵里、それから詩乃と優花ね。優花は別にいいけれど、たぶん一緒に来るでしょうし』

ルサルカの考えはわかる。帝国兵が詩乃を見てどんな反応をするかと考えているんだろうな。高確率で奴隷の提出を求めてくるだろうが、普通に俺が話す言葉を信じて撤退するのなら見逃してやろう。

それ以外は悲惨な事になるだろうが、そこは諦めてもらおうしかない。それとユーリもこちらに残ってもらい、兎人族の人達をみてもらうことにした。

「ハジメ。俺はルサルカと恵里、詩乃を連れて先にライセン大溪谷の入口に向かう」

「ん？ 一緒に行かないのか？」

「ああ。一応、連中と話してみても、ハウリア族はワイバーンモドキ、ハイベリアに襲われて死んでいたと伝えてくる。それで撤退したら儲けものだが、撤退しない時は……」

「わかった。それなら俺は……」

「ここを守っていてくれ。何人かは連れてくるからな」

「……見せられないか」

「ああ。絶対に子供が見ていい光景じゃなくなる」

「わかった。行ってこい」

ハジメから許可を貰ったので、ブラックトライクに乗る。すぐに恵里が前に乗ってきて、後ろに優花がそっと乗ってくる。

「優花も来るのか？」

「話は聞いていたけど、一緒に行きたい……駄目ですか？」

「いや覚悟があるなら構わない。詩乃、ついてきてくれ」

「了解」

サイドカーは使わず、優花の後ろに詩乃が乗る。詩乃と優花は立ち乗りで優花は俺に、詩乃は優花に抱き着くことでバランスを取る。四人乗りになっっているので凄く危険だが、全員が人の限界を超えているので問題ない。そんなわけで、鈴達にお留守番を頼んでブラックトライクに乗る。



ブラックトライクに乗ってしばらく進み、自然な感じで作られた階段に到着した。流石にここをバイクで移動できないので俺を先頭に順調に登っていくことになる。だが、ふと思った。ここに飛べる者が

二人居る。俺と詩乃の二人は空を飛んでいけるといわけだ。飛べないのは恵里と優花だけ。ルサルカは体内に入れればいい。というわけで、恵里と優花を抱きつかせ、二人のお尻を掴んで固定して飛び上がる。

「これ、すごい！」

「こ、こわい……」

二人を連れて上昇し、一気に登りきる。階段が終わる直前で地面すれすれで到着する。外から見たら階段を登ってきたかのようにしか見えないだろう。そして、登り切った崖の上、そこには予想通りの連中が居た。

「おいおい、マジかよ。生き残ってやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残ってただけなんだがなあ、こりゃあ、いい土産ができそうだ」

三十人ぐらいの帝国兵がたむろしていた。周りには大型の馬車数台と、野営跡が残っている。全員がカーキ色の軍服らしき衣服を纏っており、剣や槍、盾を携えており、俺達を見るなり驚いた表情を見せた。俺は外見だけなら中性的で女性よりで、わからないだろう。

だが、俺が抱えている恵里と優花はかなりの美少女と女性だ。二人共、前とは違って俺と肌を重ねる事で色気も格段に増しているし、それぞれが俺が、男が喜ぶような仕草をしてきたりもしている。ルサルカから習ったり、優花と融合したヘイゼルが男を暗殺する時に閨を共にすることがあったそうなので、男を誘うテクニクも理解している。そんなわけで20歳前後のヘイゼルになっている優花はかなりの男受けするので、男達の視線が集まるのもわかる。品定めでもするよな帝国兵の視線を受ける二人が俺に更に抱きつく。

俺はそのまま少し進んで二人を降ろし、後ろの詩乃が上がってくるスペースを作る。帝国兵はすぐに詩乃にも視線をやり、猫耳や尻尾を見て直ぐに喜色を浮かべだした。

「小隊長！ 猫人族がいますよ！ それに全員レベルがかなり高いです」

帝国兵は、詩乃達を完全に獲物として見るような、下卑た笑みを浮

かべ舐めるような視線を女性達に向けてくる。詩乃達はその視線を受けて気持ち悪そうにして俺の後ろに隠れていく。

「ああ？ お前達は誰だ？ 兎人族……じゃあねえし、冒険者か？」

小隊長と呼ばれた男が声をかけてくる。帝国兵の態度は悪いが、一応は会話に応じてやるか。ルサルカは俺の中で拷問具を準備しながら、まだかな、まだかなと言いながら待っている。

「ああ、人間の冒険者だ」

嘘はついていない。ちゃんと冒険してきているのだから、冒険者というの間違いではない。

「はあく？ なんで峡谷から。ああ、もしかして情報掴んで追っかけた奴隷商に雇われた連中か？」

「いや、ただ単に魔物狩りだモンスターな」

「こんなところですか？」

「ハイベリアの卵が欲しくてね」

「なるほどねえ。で、成果は？」

「見ての通りだ」

両手を広げて何も持っていない事を伝える。流石に俺のデバイスは展開していないし、俺達の武器として見えるのは優花の腰につけているジャック・ザ・リップパーの短剣と詩乃の弓ぐらいだ。

「そうか。それは残念だったな。それで、そっちの猫人族は奴隷か？」

「ああ、俺の奴隷だ」

「ふくん」

気の無い返事だが、詩乃をしつかりと見ている。そんな詩乃は弓を持ちながら、もう片方の手で俺の服の裾を掴んでいる。優花も口元をマフラーを上げて隠し、身体を震わせながら服の裾を掴んできている。恵里だけはルサルカと同じく、ニコニコと笑っているだけだ。

「なあ、聞きたいんだが……ライセン峡谷で兎人族を見なかったか？」

「アレがそうであれば見たな」

「あ？」

「魔物モンスターに喰われたのかは知らないが、沢山の身体が欠けた死体なら見た」

「ちっ、やっぱりか」

嘘はついてない。ハジメやアストルフオ達によって殺された沢山の死体は見た。

「どうします、小隊長？」

「どうもこうも、既に死んでるならここに居ても意味はないだろう。撤収だ」

「ですが、怒られませんか？」

「確かに収穫が無いとまずいよな……よし、そこの猫人族を……いや、その女達は帝国で引き取るから置いていけ」

小隊長と呼ばれた男は、さも自分の言う事を聞いて当たり前かのように詩乃達を引き渡せと言ってくる。その顔は断られることなど有り得ないと信じきった様子だ。それがどういう事になるかもわかっていない。

「断る。こいつらは全員、俺の嫁だ。誰にも渡すつもりはないから、大人しく帰るがいい」

「……今、何て言った？」

「断ると言った。こいつらの全ては俺の、俺だけのものだ。諦めてさっさと国に帰ることをオススメする」

「ん」

震えている二人を抱き寄せて二人の頬にキスをすると、小隊長は顔を真っ赤にしながら怒りだした

「男か女かもわからないが、その服装からいい所の坊ちゃんか嬢ちゃんと思っで見逃してやろうかと思っただが止めだ。どうやら口の聞き方がなっついてないみたいだから、しつかりと教育してやるよ。んでもって、別嬪の嬢ちゃん達の目の前でめえの四肢を切り落とし、めえと一緒に犯して、奴隷商に売っばらってやるよ」

「ねえ、もういいでしょう？」

「そうだな。俺も流石に大切な可愛い嫁達を犯されると言われたら――怒るからな」

「はっ、上等だ。全員、殺さずに生かして捕らえろ！」

帝国兵達がニタニタしながら槍や剣を構える。俺が動こうとする

前に恵里が前に飛び出して、ジャンヌダルク・オルタの旗を地面に突き刺す。もう片方の手にはネクロノミコンが握られている。

「はっ、魔法使いがここで何の役が……」

『燃え盛れ、地獄の憤怒よ。復讐するは我等にあり。地獄へ引きずり込んであげなさい』

地面に大きな魔法陣が展開され、そこから炎が溢れ出し、それらが不死者達の形へとなっていく。地面から現れてくるのは獣人や魔族。それに人族もいる。

「ひっ!? な、なんだこいつら!」

「ば、化け物が!」

「あ、あああ、嘘だ。なんで、お前がいるんだ! 死んだはずだろ!」

阿鼻叫喚の地獄絵図が展開される。出て来た不死者達は帝国兵に掴みかかる。当然斬られるが、黒い炎によって作られた身体は鉄を溶かし、斬られたとしてもすぐにくつつく。そして、捕まれた場所は溶かされるわけでもなく、火傷していくだけ。ただ、そのまま微かな抵抗だけで地面の中へと引きずり込まれていくだけだ。

「恵里、これは?」

「私とジャンヌの合作魔法。対象が今まで殺し、恨んで死んでいった連中を地獄から召喚して地面の中に引きずり込んでじつくりと焼きながら殺す。復讐者の魔法。アヴェンジャー殺した人から恨まれてなかったり、そもそも殺していなければ誰も現れない」

復讐するは我等に有り、か。確かにその通りの魔法だな。

「詩乃と優花は見たくないなら下がっていていい。俺とルサルカも参加する」

「わかった。私はちよつと遠慮しておく。援護ぐらいはするから、後ろは気にしないで」

「私はやる。やります」

詩乃は口を押さえて離れ、優花は逆に短剣を握って構える。そうこうしている間に相手は魔法使いとの戦いのセオリーを思い出したようだ。

「術者を狙え! 弓を放て!」

無数の矢が放たれるが、恵里は気にせず身体で受ける。その身体に矢は突き刺さりはしない。それを見て、絶望的な表情を浮かべるが、こんなのはまだ序ノ口だ。

「ルサルカ、待たせたな。全ての制限を解除する。二、三人残して好きにしろ」

「やった！ よくし、やるわよ！」

残り少ない魔力をルサルカに譲渡し、顕現させる。隣に現れたルサルカはさっそく拷問を開始する。一人目はファリスの牛に飲み込まれ、じつくりことごと焼かれる。次は串刺しにされてゆつくりと血を抜かれていく。その次はアイアンメイデンに閉じ込められていく。それはもう楽しそうに笑顔で拷問していくルサルカ。

「ば、馬鹿な……帝国に喧嘩を売ってただで済むと……がっ!？」

小隊長を蹴飛ばし、転がったところに追いついて頭を踏みつける。

「残念だったな。そもそも誰も帰らなければ魔物モンスターにやられて全滅したと思うさ」

「た、隊長の部隊が戻ってきたらお前達は終わりだ！ 今ならまだ許してやるぞー！」

「ああ、その部隊なら一人を除いて壊滅したよ。捕らえていたハウリア族は全ていただいた」

「なっ、何だと!？」

「見逃してやろうと思ったが、お前……俺の女を犯すとか言ったから止めた。恨むのなら、自分を恨むがいい。さて、美遊。食事の時間だ」

『た、食べたくない、です……』

「ああ、残念ながらそれは無理だろうな」

『うう……』

美遊には悪いが、永劫破壊エイヴァヒカイトを使って聖杯と契約しているので、魂は集めることになる。というか、Fateの聖杯は元からそういう機能がある。

「や、やめろっ、たっ、助けてくれっ!」

「そう願ってきた人達にお前は どうした？」

「た、助けてきたに決まってるだろ」

「嘘だな。それをこいつらが証明している」

恵里に召喚された不死者達は小隊長の身体を引きずり込もうとしている。だから、嘘だとわかる。小さな子供までいるので、こいつがどれだけ酷い事をしてきたのかは明白だ。

「ああ、安心しろ。お前達は魂の隅から隅まで全て使い切つてやる。お前達の死は決して無駄にはならない。全てを許し、この世界の為に我が力としてやる。お前達が守ろうとした世界は俺が愛し、守つていつてやる。だから、安心するといい」

「ふざけるなああつ！」

「美遊、神喰いを起動」

『はい』

六ツのデバイスが同時に現れ、俺の周りを浮遊する。それぞれに設置された小型の魔導炉から魔力が溢れ出し、綺麗な粒子をまき散らす。俺は指示をして実験を始める。まずは小隊長の身体を剣の部分で切り裂き、呪いが効果的に発動するか見る。すると斬り裂いた傷口がパクリと開いて一瞬で骨を切断し、分断された。

「ぎい、やあああつ!!」

「呪いつよ」

『過剰な魔力と相手の抵抗力が極限まで減っています。この魔法陣の上ではその、呪いはかなり強まるかと……』

恵里の力と合わさっているわけか。まあ、こいつは五月蠅いし、さっさと殺しておくか。いや、情報収集の為に拷問は……あれ、必要ないか。

「美遊、蒐集しろ」

『はい』

「やっぱ止めだ」

『いいんですか?』

「ああ。ルサルカ」

「なにかしら?」

「こいつを拷問して情報を吐かせてくれ。やり方は全て任せる」
「はい」

小隊長を蹴ってルサルカに引き渡す。ルサルカは大喜びで遊びだした。俺としては蒐集してから情報を引き出しても良かったが、それって絶対にやってるであろう凌辱シーンを美遊に見せるということなので取りやめた。ただのエネルギーに加工してしまえば美遊はみなくてすむ。

「優花は……」

『あちらです』

「ほう」

優花の方を見ると必死に死にたくないと呼びながら逃げる兵士の背後に現れ、後ろから首に手を回して短剣で喉を切って殺していた。次の奴はいつの間にか指に挟んで持っていたジャック・ザ・リッパーの短剣を複数同時に投げて別々の相手へ突き刺している。そして、すぐにその場所から消えて別の場所から攻撃している。優花から逃れた相手はどこからともなく矢が飛んできて足を射抜いていく。おそらく詩乃だろう。

「魔力砲の実戦チェックでもするか」

『そうしましょう』

どうせ放っておいてもルサルカを経由して魂は集まってくる。だが、やはり一人ぐらいは殺しておくか。そんな訳で、兵士の頭を踏み砕く。ぐちゃつと気持ち悪い感触はしたが、吐きそうになったりはしない。

「やっぱり、すでに人の精神性から離れているのかも知れないな……」

『ただ単に私がカットしているだけです』

「そうなのか？」

『嫌悪感、要りますか？ 居るなら戻しますけど……』

「戻してくれ」

『わかりました』

すぐに気持ち悪くなってきたが、耐える。美遊達だって耐えているのだから、俺も耐えなければいけない。

「美遊、魂は大丈夫か」

『あ、意外に平気でした。すぐに聖杯にくれば魔力に変換されるだ

けです。それに少し美味しくも感じます』

「確かに魔物モンスターよりも余程いいな」

『はい』

見ればルサルカも恵里もトリップしている。そんな状態で虐殺していくのだから、永劫破壊は本当にやばい。くすぶっていた殺人衝動が満たされ、身体に力が満ち溢れていくのがわかる。今なら形成だつてできそうだ。



さて、ある程度満足した俺はまだ遊んでいるルサルカや恵里から離れ、身体を魔法で綺麗にしてからブラックトライクの上で共に吐いた汚物を綺麗にした詩乃の耳や尻尾をモフモフしつつ、優花の身体を揉んで楽しむ。二人共、不安そうだったので互いの精神安定のためにも都合がいい。優花も気持ち悪がっていたからな。

そんな風に二人とイチヤイチャしていると、終わった恵里が満足そうにやってきた。ルサルカの方を見れば女性の悲鳴が聞こえてくる。相手は帝国騎士の女で苦悶の梨だったか。アレを実際に使われていた。他に無事に生きているのは女性二人と男二人だけ。それ以外の人間は全て死んでいる。

「随分と派手にやったな」

「お、もう来たか」

辺り一面、血や肉が大量に有り、その匂いに釣られてやってきた魔物モンスターの死骸もある。そんな場所にやってきたハジメ達は顔をしかめた。ハウリア族は口を押さえて吐いている。

「情報は？」

「ルサルカが率いていた小隊長から引き出してる。それと何人か残しているから好きにしてくれ」

「じゃあ、一人は俺が殺すとして……後はどうするかな……」

「あの、一人は私にください。わ、私もハジメさん達についていくので、け、経験しておかないと……」

「それもそうか。ユエはどうする？」

「ん。私もする。ハジメの初めては一緒がいい」

「そ、そうか」

「じゃあ、恵里」

「うん。案内するね」

恵里に任せると、ユーリが抱き着いてきて身体をペタペタと触って確認し、それが終わると頭を押し付けてきたので撫でてやる。鈴も少ししてから俺に抱き着いてきた。鈴の顔が少し血で汚れていたから、経験したのだろう。アストルフオは当たり前だが、平気そうに連中の装備をあきっている。

「お兄ちゃん……大丈夫ですか？」

「平気だ。こいつらは俺の嫁に手を出そうとしてきたからな」

「はい。お兄ちゃんの怒りの感情は私達にもちゃんと伝わっていますからね」

「ああ、悪い」

「いえ、いいんです。それよりも無理はしないでくださいね？」

「ああ、わかってる。鈴は大丈夫か？」

「うん。鈴も少し気持ち悪いけど、平気だよ。しののんやゆかゆかを襲おうとしたんだから、当然の報いだよ」

「ありがとう」

「うん。嬉しい」

そうこうしていると、遊び終わったルサルカが満面の笑顔でやってきた。手にはコップが握られて、そこには明らかにお酒が入っている。それをぐびつと飲む。

「んくやっぱり一仕事した後のお酒は最高だわ。あ、アンタ達も飲む？」

「飲みたいが、年齢的にアウトだ」

「そう、残念ね」

「情報は？」

「帝国の部隊構成と戦況、配備状況くらいしかわからなかったわね。あ、後は帝国の皇帝が王国にお忍びで訪ねているそうよ。目的は勇者

達の視察だつて。道中で暗殺しちゃう?」

「するなら、やってくるよ?」

「いや、いい。ヘイゼルが暗殺者とはいえ、本当に暗殺はしないでいいからな」

「うん、わかった」

マフラーで口元を隠してから、俺にもたれ掛かってくる優花。やはり、もうちょい時間はかかりそうだ。

「帝国の戦況は?」

「今の所、遅滞戦闘と奇襲を繰り返して、引き寄せたところで一気に殲滅。それから押し返して元の国境線まで戻すって感じね。どうかは侵攻を押し返しているみたいだけど、人材と資源を食いつぶしてるからね、時間の問題でしょう。そら勇者召喚するわくって感じ?」

「ふむ。戦場の位置はわかるか?」

「だいたいいいなら?」

「なるほど。ルサルカ。永劫破壊エイヴィヒカイトに射程は関係あるか?」

「聖遺物で殺したらないけど、あんまり離れ過ぎれば回収はできないわね」

「そうか……」

なら、聖杯で弾丸を作り出し、ここから砲撃したらどうだ。通常で42キロ。魔法で電磁加速を使って80キロまでぐらいなら砲撃を届かせられる可能性がある。だが、やはりここからでは距離が足りないか。

「ルサルカ、いつその事帝国軍に入るか?」

「嫌よ。私は真名から離れないんだから。だいたい受肉してないから無理だつて」

「それもそうか」

維持する魔力も馬鹿にならない。

「あの、射程が問題ならお兄ちゃんのドーラとグスタフでしたか。それを改造しましょうか?」

「いやいい。それなら魔力砲を撃った方が早いだろうしな」

「それもそうですね」

「まあ、帝国は無視しておけばいいのよ。どうせレヴィの放った子達で大変になるでしょうしね」

「だろうな。そういえばアルラウネモドキが居たが、アレのモデルつて……」

「ああ、ヨーキね」

「エロゲーじゃねえか!」

「あっはっはっ」

ヨーキ。Venus Blood—BRAVE—に出てくる敵キャラで、やられ役だが結構強い。女性を犯して記憶を壊し、苗床にする。しばらくそのままで生き、子供が孵化すると親を養分として吸い取つてから親の力を引き継いだアルラウネが産まれてくる。

「あ、男性でも繁殖できるようにしておいたから大丈夫よ。もちろん、お花もつけられるから精神操作も可能。雌オーク達とヨーキ、それに魔族を相手にどこまでやれるか楽しみね」

「魔族が有利になりすぎない?」

「それでいいのよ。こつちが建国した時に攻めてこられないし、協力してやれば認めざるを得ないから。それに王国の戦力を減らすという意味でもこつちの方が都合がいいしね」

「でも、帝国の人達が苦しみませんか?」

「ヨーキと雌オーク達には兵士以外は襲うなど言っているが、緊急事には村や人間達を守るように伝えておけば大丈夫だろう。ゆくゆくはオーク達も一つの種族として認めさせる」

「魔人国家の誕生ね!」

モンスター

魔物、魔族、人間族、亜人族が暮らす多民族国家の完成だ。エヒトを排除し、他の国を取り込むか、隷属させれば勝ちだ。もつとも、統治するのは面倒だからやりたい奴にやらせる。ぶっちゃければ、俺としては嫁達と不自由なく幸せに過ごせればいいからな。

「楽しそうにしているところ悪いが、そろそろ出発するぞ。流星にここで野宿したくはないからな」

「了解」

さて、次の目的地はハルツイナ樹海だ。もつとも、予想通りなら戦

闘になること間違いなしだ。相手次第でフェアベルゲンだったか。その国を丸ごと貰おう。ハルツィナ樹海は拠点にするには十分な場所だからな。

第45話

ライセン大峡谷を抜け、帝国兵を必要な情報を抜いてから皆殺しにし、そこから装甲車を取り出してハウリア族を乗せて移動する。装甲車は騎乗Aのスキルを持ち、乗り物ならなんでもござれなアストルフオに運転してもらおう。後ろには牽引させているトラックもある。

俺は優花と鈴、恵里の三人と助手席側に乗って膝の上に鈴を座らせ、左右に優花と恵里を座らせている。三人は殺人を行った事で不安なのか、俺に身体を預けて眠っている。まあ、恵里は違うだろうが。優花は特に心がどうなるかわからないので、抱き寄せた頭を優しく撫でている。まあ、余った手で鈴や恵里も撫でているが。

それ以外の者達は俺の中でゆっくりとしたり、寝たりしている。詩乃だけは荷台にいるハウリア族と一緒に乗って、不安がっている彼等を安心させていた。ちなみに装甲車とトラックの上にはタイミングしたハイベリアが乗っている。

ハジメ達は装甲車の前をバイクで三人乗りして色々と話しているみたいだ。

さて、こんな感じで進みながら、俺はスマホを確認していく。というのも、帝国兵を虐殺して14個の魂を手に入れる事ができた。この中にはハジメ達、エイヴィヒカイト永劫破壊を習得していない者が倒したのも入っているが、やはり数は少ない。

「ねえねえ、もっと飛ばしている？」

「駄目だ。ハジメの先導に従っておけ」

「むう」

「なんなら運転を変わってやるが……」

「いやいいよ。だって、退屈なんだもん」

「まあ、樹海に着けば暇つぶしも多いだろうさ」

「樹海かく確か、大樹を指すんだっけ？」

「そうだ。聞いた限りじゃあ、そこが本当の迷宮と関係しているみたいだしな」

当初、俺達はハルツィナ樹海そのものが大迷宮かと思っていた。だが、よく考えれば、それなら奈落の底と同レベルの魔物モンスターが彷徨い歩いている魔境といえるような場所になる。とても亜人達が住める場所ではないだろう。もしも住めるほど強いのだったら、亜人族はここまですでに追いつめられてはいないはずだ。

なので、オルクス大迷宮にあった奈落のように真の迷宮の入口が何処かにあるのだろうとハジメが推測した。これはユーリ達も同意見だったので、それが正解だろう。そして、シアの父親で族長のカムから聞いた大樹というのが怪しい。というのも、フェアベルゲンができる前から枯れた状態で延々存続しているらしい。

「しかし、樹海かあ……ピポグリフ、居るかなあ？」

「さあ。とりあえず、ハイベリアで我慢しておけばいいんじゃないか」

「なんかやだ」

「そうか。まあ、任せる」

スマホを確認していくと、ガチャのピックアップが変わっていた。混沌・悪のピックアップガチャに変わっている。これはもう引かない。絶対に引かない。何せ画面には人類ヒューマン悪の画像が載っているからだ。こんな地雷引いてられるか！

とりあえず、スマホを仕舞って優花達を撫でながら時間を潰していく。レヴィ達の方に迎えを送ってもいいが、ハルツィナ樹海でフェアベルゲンの連中と戦う可能性が高いので、そちらが片付いてから合流すればいい。



ハルツィナ樹海と平原の境界に到着した。樹海の外から見ると、ただの鬱蒼とした森にしか見えないが、一度中に入ると直ぐさま霧に覆われるらしい。ここから歩いて進む事になる。ハイベリアはこの辺りで一旦別れてその辺りで潜んでいてもらう。

「それでは皆様。中に入ったら決して我々から離れないで下さい。皆

様を中心にして進みますが、万一はぐれると厄介ですからな。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのですな？」

「ああ、聞いた限りじゃあ、そこが本当の迷宮と関係してそうだからな」

「わかりました。それとできる限り気配は消してもらえますかな。大樹は、神聖な場所とされておりますから、あまり近づくものはおりませんが、特別禁止されているわけでもないのです、フェアベルゲンや、他の集落の者達と遭遇してしまうかもしれない。我々は、お尋ね者なので見つかる厄介です」

「ああ、承知している。俺達も、ある程度、隠密行動はできるから大丈夫だ。そうだよな？」

ハジメが聞いてくるが、隠密行動……実は苦手なんだよな。だが、俺達には強い味方がいる。

「鈴先生、お願いしますー！」

「もう、まなまなは仕方ないなあ、鈴にお任せだよ！ えい！」

ハウリア族を含めた全員を包むように結界が展開される。効果はわからないが、強度とかもやばそうな気がする。

「……鈴、効果はなに……？」

「ゆえゆえの質問に答えましょう！ 気配、振動、臭いを遮断し、光の屈折を利用して背後の光景をそのまま見せる光学迷彩を再現！ 触れられない事と足跡が残る以外はばれるとしたら魔力のみ！ 魔力は遮断したいけれど、それをするレヴィレヴィの召喚まで解除されちゃうからね」

「……チートじゃねえか」

「ただし、中の人は魔力を使えないし、攻撃したりされたりしたら壊れるから気をつけてね。それと効果時間は鈴の魔力だと一時間。まなまなの魔力を貰えば大丈夫だけど、鈴はこれに集中しないといけないから動けなくなるよ」

「沙条、任せた」

「任せられた」

鈴をお姫様抱っこで抱き上げて、移動していく。もちろん、全員に

注意して結界から出ないように伝えておく。兎人族は一度認識すればそうそう見失うことはないらしいが、樹海の中では、彼等の索敵能力を以てしても見失いかねない。

しばらく、道ならぬ道を突き進む。直ぐに濃い霧が発生し視界を塞いでくる。しかし、カムの足取りに迷いは全くなかった。現在位置も方角も完全に把握しているようだ。理由は分かっていないが、亜人族は、亜人族であるというだけで、樹海の中でも正確に現在地も方角も把握できるらしい。

「それでは、行きましようか」

順調に進んでいると、突然カム達が立ち止まり、周囲を警戒し始めた。魔物の気配を感じたようだ。当然、俺達も感知している。どうやら複数匹の魔物が近くににいるようだ。樹海に入るに当たって、ハジメが貸し与えたナイフ類を構える兎人族達。彼等は本来なら、その優秀な隠密能力で逃走を図るのだそうだが、今回はそういうわけには行かない。皆、一様に緊張の表情を浮かべているが――

「こつちに反応しねえどころか、一目散に逃げて行きやがるな」

「なんでだろうな」

「なんででしょうね」

「どう考えてもお前等だろう」

――魔物^{モンスター}は魔力を微かだろうと違和感として感じる事ができる。そして、現状は魔力を遮断していない。さて、そこに桁違いの魔力を持つものが進んで来たら、魔物^{モンスター}たちはどう思うだろうか？

答えは簡単だ。ベヒモスに踏みつぶされる前の俺達のように即座に撤退を選択する。むしろ、ハウリア族だって俺達から離れてこちらをビクビクしながらチラ見しているぐらいだ。

「ねえ、これってどう考えても真正面から入ってフェアベルゲンを滅ぼした方が楽じゃない？」

「確かにそうだね。戦力は充分にあるし」

「いや、危険な事を言うな。沙条、しっかりとルサルカと恵里の手綱を握っておけよ。面倒は御免だ」

「了解だ。ほら、ピクニックでもして楽しもうぜ」

「は〜い」

そんな訳で歌いながら森を歩いていく。

◇

「ある日、森の中。虎さんにであった。ららら〜ららら〜」

「遊ぶな。この状態だぞ。全員、しっかりと——って、気付かれたな」

虎模様の耳と尻尾を付けた、筋骨隆々の亜人達が俺達の方を見てくる。正確には踏みしめられた草木だ。

「そこに何か居る！ 総員、警戒！」

これ、全員が飛んでいたらバレないだろうが、相手からしたら大量の草木が風もないのに倒れていくのだから流石に気付かれるか。

「鈴、解除してくれ」

「うん。南雲君、いい？」

「ああ。それとここは任せろ。帝国兵とはお前達が戦ったしな」

「了解」

鈴が結界を解除すると、目の前に現れた俺達に、虎の獣人達は驚いた表情をした後、すぐにハウリア族に目を付けた。

「お前達……何故人間という！ 種族と族名を名乗れ！」

人間と亜人族がハルツィナ樹海で共にいるという光景に、目の前の虎の亜人と思しき人物はカム達に裏切り者を見るような眼差しを向けた。その手には両刃の剣が抜身の状態で握られている。周囲にも数十人の亜人が殺気を滾らせながら包囲網を敷いてきている。

「あ、あの私達は……」

カムが何とか誤魔化そうと額に冷汗を流しながら弁明を試みるが、その前に虎の亜人の視線がシアを捉え、その眼が大きく見開かれる。「白い髪の兎人族……だと？ ……貴様ら……報告のあったハウリア族か……亜人族の面汚し共め！ 長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは！ 反逆罪だ！ もはや弁明など聞く必要もない！ 全員この場で処刑する！ 総員かッ

!？」

そう言った瞬間。ハジメが威嚇射撃を行う。そうするともう後はハジメが交渉していくのを見るだけだ。俺はどうしようかと周りを見渡すと、優花が居なかった。どこにいるか、感覚共有で確認すると姿を消して俺達の背後を包囲している連中の外に出ていた。まるで事が起こったら背後から強襲するように準備している。

アストルフオはハジメの後ろをウロチョロしているし、ルサルカは手に鉈を取り出して掌にポンポンしている。恵里は鈴と詩乃と一緒に近くの花を見ている。ユーリだけは心配そうにオロオロしているので、俺がしっかりと抱きしめて安心させてやる。

そんな風になっていると、ユエがハジメに抱き着いて、シアが私もと抱き着いていく。苦笑いしながら二人を撫でるハジメを見てから、ユーリと一緒に花を観察していく。

「アンタ達、ちよつとは緊張感持ちなさいよ。いくら雑魚とはいえさ
く真面目な優花が可哀想じゃない」

「優花もこつちに来いよ」

「わかった」

「!?!」

すぐ近くの背後から聞こえた声に亜人達が驚き、飛び退るとそこを優花が歩いてくる。その手にはしっかりと短剣が握られていて、事を起こせば瞬時に斬り殺されていたという事実を亜人達に知らしめる。敵地のど真ん中で、いきなりイチャつき始めた俺達に呆れた表情を見せてくるが、実力が違いすぎるし、警戒は一応している。鈴が別の境界を展開しているので、攻撃が来たとしても遮断できる。

優花がこちらに来て、ピッタリと俺の横に引っ付いてくる。俺はそれを見ながらスマホを取り出して写真を取っていく。自撮りも合わせて可愛いユーリを始めとした嫁達の姿を記録に残すためだ。後、白崎達に見せるためにもハジメとユエの写真も取っておく。

一時間も経つと調子に乗ったシアが、ユエに関節を極められて「ギブツ! ギブツですう!」と必死にタップし、それを周囲の亜人達が

呆れを半分含ませた生暖かな視線で見つめている。

俺達はテーブルを取り出してお茶をしながらそれを眺める。ルサルカは帝国兵から奪ったお酒を取り出したので、奪い取って紅茶にしてやった。シユテルやデアーチエ、優花が作ってくれたお菓子をハウリア族の子供達にも配ってティータイム。ただ、ユーリは子供達と一緒に押し花を作ったりもしている。お花が可哀想という大人達は俺が睨み付けて黙らせた。小さな子供達は純粹に楽しんでいるのでこれでいい。

そうこうしていると、急速に近づいてくる気配を感じた。再び緊張が走り、シアの関節には痛みが走る。

霧の奥からは、数人の新たな亜人達が現れた。彼等の中央にいる初老の男が特に目を引いた。流れる美しい金髪に深い知性を備える碧眼、その身は細く、吹けば飛んで行きそうな軽さを感じさせる。威厳に満ちた容貌は、幾分シワが刻まれているものの、逆にそれがアクセントとなって美しさを引き上げていた。何より特徴的なのが、その尖った長耳だ。

「ハジメ！ エルフだ！ エルフだぞ！」

「ああ、そうだな」

「だけどなんでそこは美少女じゃないんだ！」

「おい馬鹿」

「お・に・い・ちゃ・ん？」

「ごめんなさい」

エルフつい興奮してしまっただが、底冷えするほどのユーリの声ですぐさま冷静になる。鈴からは頬つぺたを抓られ、詩乃からは尻尾でぺしぺしと叩かれた。ルサルカはやれやれといった感じで、優花は大人しくしているけれど、服の裾を掴んできている。アストルフオは……俺の耳に囁いてくる。

「マスター、エルフが好みなの？　じゃあ、ボクがエルフになってあげようか？」

「イイデス、ハイ。その姿が一番可愛いよ」

「だよーね！」

美遊は何かを見詰めてから、こちらに情報を渡してきた。だから、俺はハジメ達の話を見詰めてから、こちらに集中する。

そう、それはピックアップガチャが更新されたからだ。亜人達が住むハルツィナ樹海に入ったからか、ピックアップが混沌・悪から亜人族のピックアップへと変更された。それも作品選択別だ。候補としてはプリンセスコネクト・リダイブ、うたわれるもの（ロストフラグ）、けものフレンズ、亜人ちゃんは語りたい。などなど様々だ。どれを選ぶか、悩ましいが……今回はうたわれるものにしておく。欲しい子が居るからだ。だが、石が足りない。いつその事――

「お兄ちゃん、駄目ですよ」

「はい……」

――ユーリに止められて、小さな手で握られながらハジメ達の後をついていく。これで勝ったと思うなよ、フェアベルゲン！　まずは魔物狩りだ。狙うはアルルウ、カミュ、ムツミ、ネコネ、オシユトル、ハクオロ、ルルテイエ、ハク……あ、ハクオロとハクは無理だな。あの二人は人間（神様）みたいなものだし。というか、仮面が欲しい。変身して暴れたい。強くはならないだろうけど。

まあ、あれだ。ぶつちやけるとオシユトルとか、国の管理を任せられる人材が欲しい。というわけで、オシユトル、ハク、マロ、ネコネは召喚してやりたい。ネコネはオシユトルと話させてやりたいし、男三人で酒を飲んでる姿とかも見たいからな。

第46話

濃霧の中を虎の亜人ギルの先導でフェアベルゲンへ向けて進む。ハジメ達と俺達、ハウリア族、そしてアルフレリックを中心に周囲を亜人達で固めて既に一時間ほど歩いている。どうやら、先のザムと呼ばれていた伝令は相当な駿足だったようだ。

しばらく歩いていると、突如、霧が晴れた場所に出た。晴れたといっても全ての霧が無くなったのではなく、一本真っ直ぐな道が出来るだけ、まるで霧のトンネルのような場所だ。よく見れば、道の端に誘導灯のように青い光を放つ拳大の結晶が地面に半分埋められている。そこを境界線に霧の侵入を防いでいるようだ。

俺達が、青い結晶に注目していることに気が付いたのかアルフレリックが解説を買って出てくれた。

「あれは、フェアドレン水晶というものだ。あれの周囲には、何故か霧や魔物が寄り付かない。フェアベルゲンも近辺の集落もこの水晶で囲んでいる。まあ、魔物の方は“比較的”という程度だが」

「なるほど。そりゃあ、四六時中霧の中じゃあ気も滅入るだろうしな。住んでる場所くらい霧は晴らしたいよな」

どうやら樹海の中であっても街の中は霧がないようだ。十日は樹海の中にいなければならなかったので朗報だな。皆も霧が鬱陶しそうだったし、俺達の会話を聞いてどことなく嬉しそうだ。

そうこうしている内に、眼前に巨大な門が見えてきた。太い樹と樹が絡み合ってアーチを作っており、其処に木製の十メートルはある両開きの扉が鎮座していた。天然の樹で作られた防壁は高さが最低でも三十メートルはありそうだ。亜人の“国”というに相応しい威容を感じる。

ギルが門番と思しき亜人に合図を送ると、重そうな音を立てて門が

僅かに開いた。周囲の樹の上から、人間である俺達に視線が突き刺さっているのがわかる。人間が招かれているという事実にも動揺を隠せないようだ。アルフレリックがいなければ、ギルがいても一悶着あったかもしれない。おそらく、その辺りも予測して長老自ら出てきたのだろう。

門をくぐると、そこは別世界だった。直径数十メートル級の巨大な樹が乱立しており、その樹の中に住居があるようで、ランプの明かりが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れている。人が優に数十人規模で渡れるであろう極太の樹の枝が絡み合い空中回廊を形成している。樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物や樹と樹の間を縫う様に設置された木製の巨大な空中水路まであるようだ。樹の高さはどれも二十階くらいありそうである。

俺達はその美しい街並みに見蕩れていると、ゴホンツと咳払いが聞こえた。どうやら、気がつかない内に立ち止まっていたらしくアルフレリックが正気に戻してくれたようだ。

「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」

確かにこれはアルフレリックの言う通り、素晴らしいものだ。周囲の亜人達やハウリア族の者達も、どこか得意げな表情だ。俺達はそんな彼等の様子を見つつ、素直に称賛する。

「ああ、こんな綺麗な街を見たのは始めてだ。空気も美味い。自然と調和した見事な街だな」

「ん……綺麗」

「凄いです。写真に保存しておきましょう」

「確かに記念撮影とかしたいね」

などなど掛け値なしのストレートな称賛に、流石に、そこまで褒められるとは思っていなかったのか少し驚いた様子の亜人達。だが、やはり故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きなからもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしている。

ただ、詩乃だけはこちら側だ。

俺達は、フエアベルゲンの住人に好奇と忌避、あるいは困惑と憎悪といった様々な視線を向けられながら、アルフレリックが用意した場所に向かった。

◇

現在、俺達はハジメとユエがアルフレリックと話す為に別れた。流石に全員がアルフレリックが用意した会議室に入ることにはできない。そんなわけで、俺はハウリア族を守るためにここに残った。

この連中はハウリア族に敵意を向けてきているし、因縁をつけて襲ってくる可能性が高い。それはそれで俺達としては嬉しいが、ハジメからしたら迷惑だろう。だから、今はまだ大人しくしておく。そのようにルサルカ達全員に通達し、ハウリア族を囲うように展開してもらおう。流石に結界を張れば敵対行為になる可能性があるからだ。

建国するのだから、敵対してくれた方が滅ぼす理由にはなるのだが……ああ、それにガチャの糧にもできる。こっちの方が現状では重要だな。ただし、やりすぎると召喚できる者達に見放される可能性もある。というわけで、今はそのまま待機だ。

ただ、俺達の中で唯一、ハウリア族ではない獣人状態の詩乃に亜人達の視線が集まってきている。なので、横に座らせて腕を回す。彼女の肩を抱きながら様子を見ることにする。ここに居る獣人達は詩乃の事を気にしているみたいだし、詩乃に襲い掛かってきたら排除する。これはハジメが何と言おうが実行するつもりだ。

そんな風にながら周りを観察していると、大柄な熊の亜人族や虎の亜人族、狐の亜人族、背中から羽を生やした亜人族、小さく毛むくじやらのドワーフらしき亜人族が剣呑な眼差しで俺達を……ハウリア族を睨みつけていた。

「人間族に裏切り者のハウリア族に忌み子か」

熊の亜人がこちらに近寄ってくる。そして、熊の亜人はシアに近付

いて殴ろうとしてきたのでルサルカが動こうとする。だが、その前に俺が動いてシアやハウリア族の前に立って拳を身体で受け止める。

普通にやっても間に合わないので、魔力放出を使って高速で移動して盾になる。頬を殴られた。その瞬間、皆から殺気が発せられる。恵里は手にネクロノミコンを呼び出し、ルサルカは鉈を呼び出した。そんなわけで殺さないように殴り飛ばそう。

「何をしている」

そう思っ拳を握ったが、即座に上からハジメ達が飛び降りるように降りてきた。なので、一斉に彼等へと鋭い視線が送られる。熊の巫人は俺の前に立ちながら、剣呑さを声に乗せて発言する。どうしようかな。ここで殴ったら、怒られるかな？

「アルフレリック……貴様、どういうつもりだ。なぜ人間を招き入れた？ こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によっては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ。ましてやそちらの虎族は奴隷にされているのだぞ！」

必死に激情を抑えているのだろう。拳を握りわなわなと震えている。やはり、巫人族にとって人間族は不倶戴天の敵なのだ。しかも、忌み子と彼女を匿った罪があるハウリア族まで招き入れた上に詩乃はすでに鈴がついた首輪をつけている。飼猫という感じだ。巫人側からしたら、虎族となるのかもしれない。まあ、熊の巫人だけでなく他の巫人達もアルフレリックを睨んでいる。しかし、当のアルフレリックはどこ吹く風といった様子だ。

「なに、口伝に従ったままだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

「何が口伝だ！ そんなもの眉唾物ではないか！ フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老なら口伝には従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする」

「なら、こんな人間族の小僧が資格者だとも言うのか！ 敵対してはならない強者だと！」

「そうだ」

あくまで淡々と返すアルフレリックに熊の亜人は信じられないという表情でアルフレリックを、そして目の前の俺を睨んで鼻で笑う。何せ殴り返していないから仕方がない。

それにフェアベルゲンは、種族的に能力の高い各種族の代表が長老となり、長老会議という合議制の集会で国の方針などを決めるらしい。裁判的な判断も長老衆が行う。今、この場に集まっている亜人達が、どうやら当代の長老達らしい。だが、口伝に対する認識には差があるようだ。

『こいつら、皆殺しにしたらフェアベルゲンを乗っ取れないかしら?』

『あの、怒るのはわかりませんが止めてくださいね? お兄ちゃんがわざわざ殴られた意味がありません』

『まあ、仕方ないわね』

アルフレリックは口伝を含む掟を重要視するタイプのようだが、他の長老達は少し違うのだろう。アルフレリックは森人族であり、亜人族の中でも特に長命種だ。二百年くらいが平均寿命だったと記憶している。だとすると、眼前の長老達とアルフレリックでは年齢が大分異なり、その分、価値観にも差があるのかもしれない。ちなみに、亜人族の平均寿命は百年くらいだ。

そんなわけで、アルフレリック以外の長老衆は、この場に人間族や罪人がいることに我慢ならないようだ。

「……ならば、今、この場で試してやろう!」

いきり立った熊の亜人が突如、目の前に居る俺に拳をまた振るってきた。あまりに突然のことで周囲は反応できていない。アルフレリックも、まさかいきなり襲いかかるとは思っていなかったのか、驚愕に目を見開いているのが横眼でみれた。

身長二メートル半はある脂肪と筋肉の塊の様な男の豪腕が、俺に向かって振り下ろされる。亜人の中でも、熊人族は特に耐久力と腕力に優れた種族らしい。その豪腕は、一撃で野太い樹をへし折る程で、種族代表ともなれば他と一線を画す破壊力を持っているはずだ。シア達ハウリア族と傍らのユエ以外の亜人達は、皆一様に肉塊となったと

思っただろう。

『防衛システム起動開始』

目の前に魄翼が展開され、熊の亜人が放つ一撃を受け止める。盾になった魄翼、神喰の一つは傷一つ付かず、殴られた神結晶が埋め込まれている円形部分から大量の魔力が放出される。

『カウンタープログラム開始します。ジャガーノート、はっ……』
「待て」

ジャガーノートとかぶつ放したら、この辺り一帯が消し飛ぶ。流石に綺麗な自然が破壊されるのは困る。だから、シユテルのルシフェリオンクローを形成する。

「奇怪な技を使いやがる！　だが、無駄だ！」

振るわれる拳をクローで受け止める。拳を握り潰す。ルシフェリオンクローには直撃の効果がある。故に防御は無意味。

「ぎゃああああああああっ！」

握り潰した手を掴んだまま、思いつきり壁に投げつける。吹き飛んだ瞬間、魔力放出を使って追いついて拳を放つ。拳の一撃によって熊の亜人を壁に埋め込み、蒐集を行う。亜人だけあって魔法はなかったようで無駄な行為だった。なので、即座に飛び退り、周りに浮かせていた神喰を手で振るって放つ。魔力で形成された刃が熊の亜人の両手両足の近くにがある場所に突き刺さり、どんどん近付いていく。

「やっ、やめろっ！」

驚愕の表情を浮かべながらも危機感を覚え、必死に距離を取ろうとするが後ろは壁だ。このまま進めば両手両足は程なく斬り落とされる。

「そこまでにしておけ。で、お前らは俺達の敵か？」

ハジメの言葉で俺が止まったので、アルフレリックが何とか執り成し、蹂躪劇が回避された。熊の亜人は内臓破裂、ほぼ全身の骨が粉碎骨折という危険な状態であったが、何と一命は取り留めたらしい。高価な回復薬を湯水の如く使ったようだ。もっとも、もう二度と戦士として戦うことはできないし、目の前に迫る刃に恐怖を感じて先端恐怖症になったらしい。

現在、当代の長老衆である虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族（俗に言うドワーフ）のグゼ、そして森人族のアルフレリックが、ハジメと向かい合って座っていた。ハジメの傍らにはユエとカム、シアが座り、その後ろにハウリア族が固まって座っている。その隣に俺達が座る。

長老衆の表情は、アルフレリックを除いて緊張感で強ばっていた。戦闘力では一、二を争う程の手練だった熊の亜人が、文字通り手も足も出ず瞬殺されたのであるから無理もないだろうし、神喰を展開したままだ。

「で？ あんた達は俺等をどうしたいんだ？ 俺は大樹の下へ行きただけで、邪魔しなければ敵対することもないんだが……亜人族としての意思を統一してくれないと、いざって時、何処までやっていいかわからないのは不味いだろう？ あんた達的に。殺し合いの最中、敵味方の区別に配慮する程、俺はお人好しじゃないし、俺達のメンバーの中には容赦しない奴も多い」

ハジメの言葉に身を強ばらせる長老衆。言外に、亜人族全体との戦争も辞さないという意志が込められていることに気がついたのだろう。実際、俺としては大歓迎だ。

「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるとでも？」

グゼが苦虫を噛み潰したような表情で呻くように呟く。

「は？ 何言ってるんだ？ 先に殺意を向けてきたのは、あの熊野郎だろ？ 沙条は返り討ちにしただけだ。再起不能になったのは自業自得ってやつだよ」

「だいたい、殺意を向けてきたのだから殺されても無理はない。命を助けてもらえただけありがたく思うんだな」

「き、貴様等！ ジンはな！ ジンは、いつも国のことを思ってる！」

「それが、初対面の相手を問答無用に殺していい理由になるとでも？」

「そ、それは！ しかし！」

「というか、それ、私達には関係ないでしょ」

ルサルカの言葉は事実だ。国の事を思ってあのような事をしたの

なら笑止千万だし、こつちにとっては知ったことではない。

「勘違いするなよ？ 沙条は被害者で、あの熊野郎が加害者。長老としての罪科の判断も下すんだろ？ なら、そのところ、長老のあんたがはき違えるなよ？」

おそらくグゼはジンと仲が良かったのではないだろうか。その為、頭ではハジメの言う通りだと分かっているけど心が納得しないのだろう。だが、そんな心情を汲み取ってやるほど、俺達はお人好しではない。

「グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼の言い分は正論だ」

アルフレリックの諫めの言葉に、立ち上がりかけたグゼは表情を歪めてドスンツと音を立てながら座り込んだ。そのまま、むっつりと黙り込む。

「確かに、この少年達は紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言うだけのことはあるね。僕は、彼を口伝の資格者と認めるよ」

そう言ったのは狐人族の長老ルアだ。糸のように細めた目で俺達を見た後、他の長老はどうするのかと周囲を見渡す。その視線を受けて、翼人族のマオ、虎人族のゼルも相当思うところはあるようだが、同意を示した。代表して、アルフレリックがハジメに伝える。

「我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんを口伝の資格者として認める。故に、お前さんと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える。……しかし……」

「絶対じゃない……か？」

「ああ。知っての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回再起不能にされたジンの種族、熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アイツは人望があつたらな……」

「それで？」

アルフレリックの話しを聞いても俺達の顔色は変わらない。すべ

きことをしただけであり、すべきことをするだけだ。アルフレリツクはその意志を理解した上で、長老として同じく意志の宿った瞳を向ける。

「お前さんを襲った者達を殺さないで欲しい」

「……殺意を向けてくる相手に手加減しろと?」

有り得ないと、ルサルカや恵里達は思っている。もつとも、ユーリは悩んでいるみたいだ。

「そうだ。お前さんの実力なら可能だろう?」

「あの熊野郎が手練だというなら、可能か否かで言えば可能だろうな。だが、殺し合いで手加減をするつもりはない。あんたの気持ちはわかるけどな、そちらの事情は俺にとって関係のないものだ。同胞を死なせたくなければ死ぬ気で止めてやれ。それにこつちには殺すのが好きな奴等もいるからな」

俺達が奈落の底で培った敵対者は殺すという価値観は根強く心に染み付いている。殺し合いでは何が起るかわからないが、俺としては魂の回収のために容赦はするつもりはない。手加減などして、窮鼠猫を噛むように致命傷を喰らわれないとは限らない。その為、ハジメが頼みを聞いたとしても、俺達は約束していないのだから問題ない。しかし、そこで虎人族のゼルが口を挟んだ。

「ならば、我々は大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はないとあるからな」

その言葉に、俺達は訝しそうな表情をした。もとより、案内はハウリア族に任せるつもりだから、フェアベルゲンの者の手を借りるつもりはない。そのことは、こいつらも知っているはずだ。どういうつもりだ?

「ハウリア族に案内してもらえないとは思わないことだ。そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。何があつて同道していたのか知らんが、ここでお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒したも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下っている」

ゼルの言葉にシアは泣きそうな表情で震え、カム達は一様に諦めた

ような表情をしている。この期に及んで、誰もシアを責めないのだから情の深さは折紙付きだ。

「長老様方！　どうか、どうか一族だけにご寛恕を！　どうか！」

「シアー！　止めなさい！　皆、覚悟は出来ている。お前には何の落ち度もないのだ。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わない。ハウリア族の皆で何度も何度も話し合って決めたことなのだ。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様！」

土下座しながら必死に寛恕を請うシアだったが、ゼルの言葉に容赦はなかった。

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。フェアベルゲンを謀らなければ忌み子の追放だけで済んだかもしれないのにな」

ワツと泣き出すシア。それをカム達は優しく慰めた。長老会議で決定したというのは本当なのだろう。他の長老達も何も言わなかった。おそらく、忌み子であるということよりも、そのような危険因子をフェアベルゲンの傍に隠し続けたという事実が罪を重くしたのだろう。ハウリア族の家族を想う気持ちが悪化を招いたとも言える。何とも皮肉な話だが、俺としては好ましい。

「そういうわけだ。これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだが？　どうする？　運良くたどり着く可能性に賭けてみるか？」

それが嫌なら、こちらの要求を飲めと言外に伝えてくるゼル。他の長老衆も異論はないようだ。

「お前、アホだろ？」

「な、なんだと！」

ハジメの物言いに、目を釣り上げるゼル。シア達も思わずと言った風にハジメを見る。ユエはハジメの考えがわかつているのかすまし顔だ。

「俺達は、お前らの事情なんて関係ないって言ったんだ。俺達からこいつらを奪うってことは、結局、俺の行く道を阻んでいるのと変わらないだろうが。そうだろう？」

ハジメは長老衆を睥睨しながら、スッと伸ばした手を泣き崩れてい

るシアの頭に乗せた。ピクツと体を震わせ、ハジメを見上げるシア。
「俺から、こいつらを奪おうってんなら……覚悟を決めろ」

「ハジメさん……」

ハジメにとつて今の言葉は単純に自分の邪魔をすることは許さな
いという意味で、それ以上ではないだろう。しかし、それでも、ハウ
リア族を死なせないために亜人族の本拠地フェアベルゲンとの戦争
も辞さないという言葉は、その意志は、絶望に沈むシアの心を真っ直
ぐに貫いたようだ。これは計画通り惚れてくれたか。

「本気かね？」

アルフレリックが誤魔化しは許さないとばかりに鋭い眼光でハジ
メを射貫く。

「当然だ」

「フェアベルゲンから案内を出すと言ってても？」

ハウリア族の処刑は、長老会議で決定したことだ。それを、言つて
みれば脅しに屈して覆すことは国の威信に関わる。今後、ハジメ達を
襲うかもしれない者達の助命を引き出すための交渉材料である案内
人というカードを切つてでも、長老会議の決定を覆すわけにはいかな
い。故に、アルフレリックは提案した。しかし、交渉の余地などはじ
めつからない。

「何度も言わせるな。俺の案内人はハウリアだ」

「なぜ、彼等にこだわる。大樹に行きたいだけなら案内人は誰でもよ
かろう」

「約束したからな。案内と引き換えに助けてやるつて」

「……約束か。それならもう果たしたと考えるもいいのか？
峡谷の魔物からも、帝国兵からも守つたのだろう？ なら、あとは
報酬として案内を受けるだけだ。報酬を渡す者が変わるだけで問題
なからう」

「問題大ありだ。俺達が約束したのはこいつらの安全だ。住む場所
だって用意すると約束しているからな」

「それで我等と戦争をする？」

「むしろ、戦争をしたいのなら、乗ってあげるわ。ねえ、そうよね」

「ああ。やるなら大歓迎だ」

ルサルカの質問に俺が発した事で全員の視線が俺に集まる。フェアベルゲンの連中からは信じられないと言った感じだ。

「我等はハウリア族をなんとしても殺すぞ。そうなれば、お前達は大樹の下へはいけんぞ」

「問題ない。例えハウリア族が全滅しようと、樹海もろとも吹き飛ばし、道を練り出せばいいだけだ」

「!?」

「で、できるわけがない!」

「お前、スターライトブレイカーを使うつもりか?」

「ああ、アレなら森を消し飛ばす。すくなくとも再生するまでの間に道はできる。どうせ敵しか居ないのなら、何も問題ない」

むしろ、こちらとしては大歓迎だ。ユーリにも怒られず、合法的に潰せるんだからな。

「まあ、そういうわけだ。俺達にとってその気になればどうとでもできる」

その後も話し合い、色々と決まっていた。ハウリア族は俺達の奴隷という扱いになり、俺達に手を出したら自己責任ということとなった。俺達は街や村に立ち入らない事。だが、観光はしたので少しだけ滞在する許可だけはもらった。

だから、ハウリア族が住んでいた場所には絶対に行かないといけない。そこで恵里に頼んで、シアの母親と会わせてやるのもいいだろう。

第47話

アルフレリック・ハイピスト

ハルツィナ樹海にやってきた人族と獣人の者達。彼等はオルクス大迷宮を攻略した者達だった。故に私は口伝に従って彼等を招き入れた。敵対すれば我等が滅ぼされる事がわかっているからだ。例えば、それが憎き人族の者達であつてもフェアベルゲンを守るためだ。

「ハウリア族は忌み子シア・ハウリアを筆頭に、南雲ハジメの身内と見なす。そして、資格者南雲ハジメに対して敵対はしないが、フェアベルゲンや周辺の集落への立ち入りを禁止、二日以内に退去を命じる。以降、南雲ハジメの一族に手を出した場合は全て自己責任とする……以上だ。何かあるか？」

交渉した結果。処刑すべきハウリア族。彼等は我等に黙って忌み子を隠し続けていた。故に見逃す事はできないが、聞いた話では彼等ハウリア族は対外的には奴隷とすることを条件として助けるらしい。なので、忌み子を隠していたハウリア族は一族諸共、南雲ハジメの奴隷とする事を罰とした。

「いや、何度も言うがこちらはこいつらの案内で大樹に行けばいいんだ。文句はねえよ」

「こちらも二日以内に観光すればいいだけだな。フェアベルゲンの綺麗な街並みを見せてくれればいい。これからもう入れないというのなら、尚更だ」

「……そうか。ならば、ようやく現れた口伝の資格者だ。歓迎できないのは心苦しいが二日の滞在だけは許可しよう」

「気にしないでくれ。全部譲れないこととは言え、相当無茶言ってる自覚はあるんだ。むしろ理性的な判断をしてくれて有り難いくらいだよ。沙条もいいよな？」

「ああ、観光できたし、後は……」

沙条真名の視線が私の耳に注がれる。それを見ながら苦笑いする。どうやら、彼は森人族に興味があるようだ。もしかしたら、森人族が狙われるかもしれないが……大丈夫だろう。

「泊まる場所は何処にすればいい？ 街の外か？」

「それは相談して決めさせてもらう——」

他の長老達は渋い表情か疲れたような表情だ。恨み辛みというより、さっさとどっか行ってくれ！ という雰囲気だ。

「——いや、我等の場所で良からう。案内をつける」

「わかった」

護衛の一人である同胞に指示を出して案内してもらおう。そうすると、あからさまに他の族長はほっとした表情を浮かべた。その様子に肩を竦めた南雲ハジメ達は仲間を促して立ち上り、外へと出て行った。それからしばらく部屋の中ではそれぞれが部族に指示を出し、手出しをさせないように通達していく。

しばらく沈黙が続き、最初に声を出したのは狐人族の長老ルアだ。

「で、どうする？」

「どうするとは？ 先程決まっただろう？」

「もしかして仕掛けるのか？ 止めておけ。ジンを再起不能にしたのはムカつくが、あのいきなり現れた武装はやべえ。相当あげつない効果が付与されたかなりの業物だ。見ただけでも未知の技術だ」

長老衆の一人で、土人族ドワーフの長老であるグゼ。彼は熊人族の族長、ジンと仲が良かったため、あのような大怪我をさせられては無理だろう。完全に腕が破壊され、腹に大きな一撃を貰っている。肋骨なども確実に折れているはずなので、再起不能になっている可能性が高い。「まあ、うちが言ってるんは武力そっちやない。武力じゃ絶対にかなわん。やけど、このまま何もせずに引き下がるわけにもいかへんやろ」

「確かにそうだな。何らかの仕返しをせねば……」

「止めておけ。沙条真名から解放されたあの凄まじい魔力を使われれ

ば我等は何もできずに一瞬で殺されるだけだ。報復する理由を与え
るべきではない。南雲ハジメはともかく、沙条真名や他に居た者達
……特に赤髪と黒髪の少女二人は我等を殺したくてたまらないよう
だった」

「俺は魔力を感じられねえが、それだけやばいのか」

「うむ。我等森人族の数百倍はある。それがあの浮かぶ剣と盾からも
感じられたのだ。浮かんでいた数から森人族が千体の戦力はあると
考えるべきだ」

「アーティファクトか」

それが一人だけならいいが、残りの連中もあのレベルか、もしくは
多少下だとしても私達にとつて災害と同じだ。

「わかつとるわ。やから、ここで提案や。このまま引き下がれば長老
会議としての決定に意を唱える奴等は絶対に出るで。そうなる余
計に被害が増えよる」

「だが、ルア。どうするっていうのだ？」

「ええか。アイツ等のグループは主に二つに分かれとる。力関係はよ
うわからなんが、少なくとも二人の男によつて分けられとるのはわ
かった」

「二人の男……なるほどね」

「お、マオはわかつたみたいやな。ハニートラップを仕掛ける」

「仲違いさせて争わせるのか」

「阿保。ここでやられたら余波でうちらが死ぬわ。やから、人族の街
とかでやらせればいい。そうなつたら被害はうちらにはない」

なるほど。確かにそれならば我等に被害はないだろう。だが、問題
はハニートラップをする相手だ。嫌な予感がする。

「良い考えですね。それに仲違いさせられなくても、伝手を持ってい
ればフェアベルゲンが危機に瀕した時に救援してもらえるかもしれ
ません」

「人間族なら大丈夫だろう。気にする必要はない」

「いえ、私が気にしているのは魔族です。空から何度か偵察をしてい
ますが、魔族は魔物モンスターを使役しています。ですから、ここに攻め込まれ

る事も考えなければいけません」

「なるほど。確かに少数の犠牲で生き残れるか」

「また、彼等に奴隷とされた亜人達を解放する手伝いをしてもらえるかもしれない」

「せやな。てなわけで、罪人のハウリア族だけに樹海の案内は任せられん。そういう風に言い含めてフェアベルゲンからも案内を出すつてことでええやろ」

「なら人員が問題ですわね」

「人員なら奴等連れてきた森人族が出してくれるよな、アルフレリック」

やはりそう来るか。話の内容から予想はできていたが、我等には我等の問題がある。

「待て。それは無理だ。我等森人族には若い子供が少ない」

「アルテナがいるやないか。他にも何人かおる」

「だが、アルテナや皆は……」

「それに見てた限り、あの沙条真名つてのは森人族に反応して耳とかをよう見てはったし、成功する確率が高いやろう。どうや、皆」

「賛成だ！」

「こちらも賛成する」

「私もだ」

「決まりやね。二人選出や。若い女の子やったらええ」

「それなりに立場がある者でないとまずいでしようが、お願いしますね」

「……わかった」

くそつ、長老会議の決定には従わないといけない。これはどうしようもない。せめて孫娘のアルテナ以外を……いや、それは皆で決めるべきだ。



森人族で彼等を歓待させながら、夜になってから全員を集める。例外はなく、幼い子まで全員を集めた。

「彼等はどうだ？」

「ハウリア族が住んでいた住居に居ます。ここでの話は聞かれる事はないかと……」

「そうか。では、長老会議で決まった決定を伝える」

私は皆に長老会議で決まったハニートラップの用意を森人族から出さないといけない事を伝えていく。

「何故我々だけが負担をせねばならぬのだ！」

「そうだ！ アルフレリック様は口伝に従っただけだろう！」

「そうしなければフェアベルゲンが滅んでいただけではないか！」

「だが、口伝に従ってここに招いたのは私であり、彼等が我等に興味を持って居るのも事実だ。成功率の話をされたら断る事ができなかつた。すまぬ」

「長老……」

「ならば決まりですね。私が行けばいいだけです」

「アルテナ様！」

アルテナは地面に届くほどの長い金髪を持ち、聡明で美しい美貌と心優しい性格から同族から慕われている。故にこそ皆の怒りも理解できる。我等森人族は長命種のせい、子供がなかなかできぬ。なので全員でしっかりと育てるのだ。

「私は皆様に大切に育てて頂きました。ですから、私の身で恩を返せるのならば構いません」

「アルテナ様でなくても、私が行きます」

「いいえ、私が行きます」

「良いのか？」

「はい。昼間に感じた魔力は私も感じておりました。あのような魔力を持つ方の子供ならば、私達の未来は明るくなります。それにいざという時、ハウリア族の為にあそこまでしてくれるのなら、私達森人族の事も助けてくれるかもしれませぬ」

「確かに婚姻相手としては申し分ないが、わかっているのか？ 外に行く事になるのだから、奴隷になるのだぞ？ 誘拐されるかもしれないし、飽きられて売られるかもしれない。それでも行くのだな？」

「はい。任せてください」

「そうか……ならばアルテナに行ってもらおうとして、他にも考えねばならん。我等の可愛いアルテナをやるのだ。得られる対価は最大限でなくてはならん」

「まずはどちらに狙いを絞るかだ。南雲ハジメと沙条真名。どちらの方が利益を得られる？」

「南雲ハジメは二人だが、沙条真名は……」

「多いな。だが、逆に言えば欲望に素直で与しやすい可能性がある」

「どうせやるなら、私も……」

「それは駄目よ。貴女達は幼すぎるもの」

「しかし、そういう趣味の可能性は高いぞ。どちらもあまり成長していない子を連れている」

「うむ。これは……」

真剣に話し合いを行う。相手の趣味嗜好を分析してこちらの言う事を聞いてもらわなければならない。最低でもアルテナの身の安全は保証してもらわねばならぬのだ。こればかりは孫をやるのだから絶対だ。

「面白い話をしているわね」

「「っ!？」」

声が聞こえて後ろを振り向くと、そこに赤い髪の毛をした黒い服の悪魔が居た。彼女から感じる禍々しい膨大な魔力は魔族を思わせる。そして、我等を瞬殺できると思えるほどの殺気を放ってきた。

「人の旦那にハニートラップを仕掛けようなんて、覚悟はできているのかな？」

「はい。ですが、私は長老達が望むハニートラップを仕掛けようとは思いません。尽くして尽くして信頼を勝ち取り、私の同胞達を守ってもらえればと思います」

「裏切る可能性がある奴の味方をするでも思っているの？ 言つて

おくけれど、敵意を向けている奴を守るつもりはないわよ」

「でしたら、問題ありませんね。私達、森人族は貴女達に敵意を抱きませんし、裏切らない事を誓います。誓いを違えたら私を殺してください」

「ふくん、森人族は、ね」

「はい。森人族は、です。ですよ、お爺様、皆様」

「アルテナの身の安全を保障してくれるのであれば構わぬ」

皆がしっかりと頷くと、彼女の殺気が霧散して雰囲気が変わる。どうやら、わかってくれたようだ。我等は生き残るために他の種族と過ごしているが、我等ばかりに犠牲を強いるというのなら離脱もやむを得ない。それは別の庇護があることが前提となってしまうが、彼等がなってくれるというのなら問題は一つもない。

「それじゃあ、交渉しましょうか。ハウリア族を譲ってもらった代価とそのアルテナだっけ？」

「はい。アルテナ・ハイピストと申します。これからよろしくお願ひします」

「はいはい、私はルサルカ・シュヴエーゲリン。こちらこそよろしくね。それでアルテナの代価として、森人族と交易をしようと思ひますし、何人かを彼女の世話係と護衛として受け入れます」

「世話係は要りません。むしろ私がお世話をしますので」

「そう……それなら護衛ね」

「わかった。選別する。だが、交易かね？」

「そうよ。私達は大樹の下に拠点を作成する予定よ。だから、そこでなら森人族に様々な物資を渡す事も可能ね。例えば人間共を殺せる魔物モンスターや武器とか、色々な特典をあげるわ」

拠点か。確かに我等フェアベルゲンが今はハルツィナ樹海の一部を占拠して生活をしているが、全てを占拠しているわけでもない。それに拠点を作られてしまえばフェアベルゲンにはどうする事もできない。大迷宮を攻略するための拠点だと言われたらどうしようもない。我等はあくまでも間借りしているだけであり、このハルツィナ樹海の持ち主からしたら彼等こそ正当な後継者であり、挑戦者だ。

「それはまことか？」

「ええ。森人族全員でこちらに来てもいいし、襲われた時の緊急避難先とするだけでもいいし、好きにしたらいいわ。もっとも、差別はしないこと。それが条件よ」

「その条件は助かるが……代価はなんだ」

「恨みと偏見を捨てなさい。貴女達が忌み子と嫌う魔力を操作する力はただの力でしかない。それに魔物モンスターの力を持つてるからって何？

そんな事を言つて虐待し、差別してきたのは人間、引いては神を名乗るエヒトでしょ？ だったらいいじゃない。奴等が忌み嫌う力で奴等を蹂躪してあげましょうよ！ 貴女達は甘すぎる。使える物はなんでも使いなさい」

「お前達は……人族全てと戦争をするつもりなのか？」

「いいえ、人族だけじゃないわ。魔族や果ては神様まで敵対する者は全て排除するわ。でも、それがどうしたの？ 貴女達は神から異端認定された亜人であり、ただの玩具……いいえ、樹海に引き籠もつて怠惰を貪るだけの塵屑よ」

「なんだと！」

「ふぎけるな！ 我等は……」

「なら、私達と共に来なさいよ。人間達が憎いんでしょ？ だったら、力を上げるから殺しなさい。魔物モンスターの力だつて受け入れて飲み込んで、使つて殺戮なさい。相手は貴女達を虐げ、好き勝手に玩具として飽きたら捨てるような奴よ。何を遠慮する必要があるのかしら？」

ルサルカ・シユヴェーゲリンと名乗つた女は悪魔だ。彼女の言葉が紡がれるにつれて若者達の心に火がついていく。いや、家族を奪われた者達も同じだ。勝てるよ、少なくとも負けないと思わせるだけの魔力を彼女達は持っている。

「お前達の目的はなんだ？」

「ハジメは元の世界に戻る事。これは伝えたし間違いじゃない。でも、私達の、沙条真名の目的はこの世界に多種族が共に暮らす平和な国家を作る事。人族だろうが、魔族だろうが、亜人族だろうが、魔物モンスターだろうが、関係ない。そんな国を作る予定よ」

「国家の建国か。それがどれだけ難しいか、わかっているのか？」

「難しい？ そんな事、神を殺すのだから当然でしょう。国家なんてその為の手段でしかないともいえるわ」

既に我等は神に見捨てられている。ならば彼等と共に行っても問題ないが、やはり保険は打つべきだな。

「まずはアルテナと数名の護衛をつける。その者達は好きにしてくれ」

「こちらの経過を見ながら私達とフェアベルゲンを比べるのね」

「駄目か？」

「いいえ、問題ないわ。多分、アルフレリックだったかしら。貴方は私の義理の父親になるかもしれないし、リスクマネジメントは当然だからね。しかし、年下の父親ができるのって変な話よね」

「「は？」」

「えっと、我等森人族の年齢は……」

「生きているっていつても二百年でしょ？ 私は……あ、やっぱりなしで。ルサルカちゃんはずちづちの17歳の女の子です」

「じゆうなな？」

「あ？」

「「なんでもありません！」」

「よろしい♪」

どうやら、悪魔というのはあながち間違いではないらしい。いや、むしろ彼女は魔女か。だが、このまま終わりが来るまで座しているよりも、動くべきであろう。

第48話

フェアベルゲンにあるハウリア族が住んでいた場所。そこで恵里が主催になってある儀式を行っていた。

「お母さんー！ お母さんー！」

その儀式は死者の魂を降霊し、彼等と会わせることだ。これからフェアベルゲンには入れなくなるのだから、最後のお話しをしよう。それにここでもやる事はいっぱいある。その一つがフェアベルゲンの近郊に居るハウリア族の魂を集め、鈴に浄化してもらって昇天させるためだ。これからこの大迷宮全てから死んだ人、モンスター魔物の魂を回収して吸収するので、その時にハウリア族だけを除外する事はできない。

まあ、こんな事が起こっているのだが、俺達には余り関係ないから俺とハジメ達は基本的に大きな建物を一つ占拠し、そこで座って食事やお茶をしている。この食事などは森人族達から提供された物で、ほとんどが野菜や木の実、果物だ。

「肉が食いたいな」

「歓迎してくれているのはエルフだから、食生活がこうなるのもわかるだろう。むしろ、樹海で取れる肉って……」

モンスター「魔物だな。そりゃ、出ないか」

木のテーブルに乗った食べ物を食べながら、反対側に座っているハジメ達と話す。ハジメの隣にはユエが居て、彼女はニコニコしながらハジメを見ている。俺の方は隣に詩乃とユーリが居る。鈴と恵里は儀式をしているし、ルサルカはいつの間にか消えている。

「調理場を借りたら作るけれど」

「そこまではいいかな。ありがとう、優花」

「まあそうだな」

「こういうのもいいもの」

優花はハイゼルの姿から本来の自分の姿へと変わってユーリの隣

に座って彼女のせわをしている。こうしてみるとユーリが妹で優花が姉のようだ。

「あの、少しいいでしょうか」

「カムか。どうした？ 嫁と会うのはこれで最後だが、いいのか？」

シアの父親で、ハウリア族の族長であるカムが俺達のところを決意をした表情でやってきた。後ろにはハウリア族の男達が数人だけ居る。

「はい。十分に堪能させていただきました。それよりも、凶々しい事は承知しておりますが、お二人にお願いがあるんです」

「お願い？」

「私達を鍛えていただきたいんです」

「必要ないだろう。沙条はお前達を守ると言ったんだ。なら、こいつの戦力からしたら、フェアベルゲンの連中が来たとしても簡単に守れる。時間の無駄だ」

「いえ、皆様に頼ってばかりではいけないんです。シアが妻のモナと泣き合っているところを見たら、父親としても娘を、同胞を守らなければならぬと思っただけです。モナからもシアをしつかりと守るように言われました。ですからどうか、どうか、お願いします」

「だ、そうだが？」

確かに父親として自分の手で娘を守りたいというのは……よくわからないが、そうなのだと思う。

「鍛えるのは構わないが……いや、待てよ？」

魂を蒐集する装備を用意すれば、そこから魂を補給する事はできないだろうか？

『美遊、魂を殺した武器に宿らせる事は可能か？』

『エイヴイヒカイト永劫破壊と降霊術、それに紫天の書から考えても可能だと思います。』

ご主人様が望むなら、直にでも作ります』

『頼む』

「わかった。こちらとしても戦える戦力は多い方がいい。方法は……」

「手っ取り早く戦力を強化するなら、改造だが……」

「改造ね。しかし、それは無理だろう。培養槽がないし、奈落まで戻らないといけない。まあ、戻る事は簡単だが……」

「ユエ、何か方法はあるか？」

「ある」

「あるのか」

思わず二人で声をハモらせてしまった。あっさりと返事したユエを俺達が見ると、彼女は頷きながら答えてくれた。

「ユーリ、真名の体液は神水と同じだよね？」

「はい。同じですね。濃度が違いますから、普通の人にとっては毒かもしれませんが……」

「だったら、魔物モンスターの肉を食べさせれば強化できる」

「確かにそれなら可能ですね。それとテイアーチェとシユテルが量産しているデバイスを使えば武器も問題ありません」

「あ、あの、魔物モンスターの肉を食べるのはちよつと……」

「シアと同じになるだけだ。いつその事、お前達全員、シアと同じになればシアが寂しくなる事もないんじゃないか？」

「確かにシアにとってはその方がいいだろう」

俺の言葉にハジメも同意してくれた。

「っ!? わかりました。食べます。ですが、希望者だけにしてください」

「わかった。希望者はシアと同じ存在にしてやるし、戦えるようにしてやる。だから、今日は家族としつかりと話し合え」

「はい！」

カム達が出ていったので食事を続ける。しかし、ハウリア族のデバイスか。何が良いかな。ハウリア族は戦闘に特化した一族ではない。むしろ弱い種族だ。反面、隠れる事は得意で、隠密行動に適正がある。俺達ほどではないが、気配遮断はそれなりに使える。つまり、暗殺者や密偵として使える。

「カム達の特性を考えると園部に任せるのがいいんじゃないか？」
「私？」

「確かに暗殺者としての技術なら、優花というか、ヘイゼルとジャックの力を持っている優花が一番だ」

「確かに少しは教えられるかもしれないけれど、私は使いこなせていないよ?」

「じゃあ、こんなのはどうか?」

ハジメの言葉を聞くと、かなり面白かった。簡単に言えばハウリア族に狙撃銃を装備させ、ハイベリアに乗せて上空から狙撃や砲撃させるのだ。彼女達は耳がいいので着弾したかどうかも観測できる。まあ、これはハイベリアの方も隠密行動ができればだが。

「……高い射撃技術がないと無理よ。ハイベリアの滞空時間は短い、風など諸々の影響を受ける。素人じゃ無理」

詩乃の声でそちらの方を見ると、彼女は食事を終えてヘカートを取りだして整備していた。アンチマテリアルライフルを分解し、作り上げた弾丸に魔法を込めて装填していく。

「確かに上空からの狙撃は難しいか」

「でも、狙撃や射撃を教える事はできる」

「私も多分、暗殺の技術を教える事はできる……かな?」

「ならそれでいいか。ユーリ、スナイパーライフルとアサルトライフルを用意するようにシユテル達に伝えてくれるか?」

「わかりました。どんな物か希望はありますか?」

「なら、アサルトライフルはHK416ドイツの銃器メーカーであるヘッケラー&コッホ社によって開発されたアサルトライフルである。アメリカ軍の次世代ライフル候補の一つとしても知られる。にしてくれ」

「なら、狙撃銃はドラグノフソビエト連邦が開発したセミオート狙撃銃。緋弾のアリアのレキが仕様している。かな」

「射程は短くないか?」

「初心者にはいいだろう」

「とりあえず、伝えておきますね」

ハウリア族にはとりあえず、奈落産の蹴りウサギとバジリスク、二尾狼を食べさせよう。蹴りウサギは空中を飛べるし、バジリスクは姿

を消せて石化もさせられる。二尾狼はレールガンの為だ。

「たっだいま〜」

ハウリア族に何を食べさせようかと、考えていると……居なくなっていたルサルカが戻ってきた。それも後ろに森人族^{エルフ}を連れてだ。入って来たエルフ達はどの者も真剣な表情をしている。女性が五人で男性が四人だが、見た目的にはどの人も十代後半から二十代ぐらいだ。もっとも、森人族は姿がどの人も若々しいから、本当の年齢はわからない。

「お帰り。その人達は？」

「それなんだけど、見てもらった方がはやいかもね」

ルサルカが指を鳴らすと、森人族の人達が片足をつけてしゃがみ込む。すると彼等が囲んでいたのか、中心部から妖精のような綺麗な少女が現れた。年齢は17歳ぐらいで、地面に届くほどの長い金髪を持ってしている。額に綺麗な宝石がついた冠をしていてローブを身に纏っている。

「私はアルテナ・ハイピストと申します。皆様のお世話と夜伽をしに参りました」

そう言いながら、ローブを脱ぐ。彼女がローブの下に着ていた服はスケスケな布で構成された薄着で、切れ目が沢山入っている。また綺麗な刺繍がいくつか取り付けられているが、ほぼ大事な部分は隠せていない。だからか、腕で胸を隠している。流石に下は隠せてはいる。

「えい」

そこまで見た瞬間。俺とハジメはそれぞれの隣に居たユーリとユエによって目を覆い隠された。それも頭をそれぞれの胸に押し付ける感じで完全に視界を封じられた。

「おい」

「見ちゃ駄目（です）」

「わかってる。とりあえず、ルサルカ。説明しろ」

「アルテナ・ハイピストだったか。エロフは服を着てくれ」

「エロフじゃありません!? わ、私だって……」

とりあえず、すぐにローブを着てくれたので助かった。ただ、俺の

膝の上にユーリが座って対面することになる。

「で、説明してくれ」

「夜伽なんて望んでいない」

「ハジメが悪いのよ?」

「俺?」

ハジメが原因なんて思いつかないが、どういうことだ?

「あんな脅しだけで、フェアベルゲンにメリットを提示せずにハウリア族を貫ったでしょ」

「それは……」

「私も譲れない事だつてのはわかってるわ。どちらにせよ、アイツ等は考えたの。本当に森を焼き払えるような力を持っているのなら、供物を捧げてフェアベルゲンに被害が及ばないようにしようってね。普通は信じられないけれど、真名が解放したデバイスと本人から発せられる尋常じゃない魔力がそれを可能とさせるだけの信憑性を与えた。そこでフェアベルゲンは私達をここに連れてきた森人族に生贄を出すように要求したのよ。案内役と監視役、それにハニートラップ要員としてね。そうでしょう?」

「はい。長老会議で決まった事は私達、森人族で主様達を誘惑して互いに争わせるか、奴隷とされた者達を助けるようにと……」

伝えられた事を聞いて思った事は、どうしてくれようかという事だ。

「あ、報復は駄目よ。これはちゃんと相手側にメリットを提示しないだけで脅しばかりをかけた貴方達が悪いんだから。相手からしたら、私達は勝手にやってきた歩く核爆弾のような物だからね」

「ちっ」

「……メリットを提示していたら大丈夫だった?」

「ユエの言う通り、相手にも付き合っていて得があると教えれば多少はマシだったわね。例えば解決策としては死刑の決定を奴隷としての販売に変更させ、キッチリと代価を支払って購入すれば彼等にとっても言い訳はたつの」

「ああくそ、わかったよ。相手にもちゃんとメリットを渡せてこと

か。というか、わかってたんなら教えろよ」

「そうそう。良い練習台になったでしょ？」

ルサルカの言葉にハジメはなんとも言えない表情になっている。確かに考えればこいつらほど練習に使って問題ない連中はいない。なんせ孤立した国家で、他国からは国とすら認められず、人権すらないような者達だ。俺達が失敗したとしても力でどうとでもできるし、それを行ったところで発生する問題は皆無だ。ああ、確かに練習台としては十分な存在だ。

「降参だ。で、その森人族が送られてきた事はわかった。だが、それは長老会議と森人族での思惑は違うってことだな。そうじゃないと本人がばらさないだろう」

「はい。私達としましては私、アルフレリック・ハイピストの孫娘、アルテナ・ハイピストの生殺与奪も含めて全てを差し上げ、奴隷として誠心誠意お仕えさせて頂き、どんな事であろうとも従います。です。で、どうか、どうか……我等をお守りください」

頭を下げてお願いしてくる彼女。彼女の長い髪の毛が床についても気にしていない。

「嫌だな。俺にはユエが居るし、要らない。そういうのは沙条に任せろ」

「俺もユーリ達が居るんだが……」

「知らん。任せた」

そう言っつてハジメはそそくさとユエを連れて壁際に移動した。ユエはどこことなく嬉しそうに頷いている。

「お願いします！ なんでもいたしますから！」

そうなると、森人族達の視線は俺の方にやってくる。確かにエルフにとっても興味がある。だが、彼女を助けると色々と面倒な事をしよい込む事になるのは確実だ。

「悪いな。俺は見ての通り、小さい子が好きなんだ。優花や恵里、詩乃も居るから君みたいに成長した子はもう必要ないな」

「むっ」

詩乃達からの視線が凄く痛い、こればかりは仕方が無い。

「わかりました。でしたら、小さい子なら問題ないのですね?」

「そうだな。まあ、できないと思うが……」

「フラグじゃないか?」

「言質は取りました」

ハジメの言葉に嫌な予感がしてきた。彼女はニコリと笑って何かの薬を取り出して、それを飲み込んだ。すると彼女の身体が光りに包まれて身体が小さくなっていく。髪の毛の長さの比率は変わらず、容姿は確かに幼くなっている。ただ、ズレ落ちそうな服を顔を赤らめながら必死に押さえていた。

「どういうことだ?」

「私達、森人族は長い年月をかけてある程度、姿を好きに変える事ができる薬を開発しました」

詳しく聞いていくと、同じ姿で居ると性行為に飽きもきて子供が産まれない。ただでさえ、子供の生まれにくい森人族にとって、それは致命的だった。また、老いた姿で長い年月で過ごすのを嫌がった者達である程度の姿を変える薬を長年の研鑽で生み出したそう。だからこそ数百年以上、樹海で手に入る薬草などを使って。

「アルフレリックさんはかなり年老いていたが……」

「威厳を出すためです。他の種族からしたら若い見た目では侮られるからです。逆に小さい子供はこの薬の使い方覚えてたら自分用に調整した物を作ってある程度成長させてます。幼いままだと危ないからです」

一応、この薬はある程度しか変えられないらしい。身長と体重、一部を多少弄って容姿を整えるぐらいらしい。ただ、あくまでも自分の姿しかできないとのこと。つまり、薬の作り方を覚えた若い年齢の身体から年老いた年齢の身体までは可能らしい。実際に年老いた姿になるまで、そちらの姿はなれないみたいだが……ずるい薬である。

「まあ、長命になったら欲しいものよね〜私も使えるし」

「だろうな!」

「私に必要な。吸血鬼だし」

「私も大丈夫ですね。身体はプログラムですから……」

人である鈴達が聞いたなら激怒する言葉である。

「怒られる前にルサルカのでいいから覚えさせておいてくれ」

「は、はい、わかりました」

「で、アルテナ・ハイピストはどうするんだ？ まさか約束を反故にはしないよな？」

「……お願いします。本当にどのようなように扱ってくださいっても構いません。それこそ、他の殿方に夜伽をしろと言われればしますし、肉の盾となれと言われればなります」

「姫様っ」

「構いません。私はどうなってもいいので、同胞達の事だけはお助けください」

彼女の覚悟は本物か。ただ、必死に顔を赤らめながら服を押さええているので、少しあれだ。

「ユーリ達次第だ。どう思う？」

「私は賛成です。亜人さん達が酷い目に会っていますし、助けてあげたいですから……それにルサルカさんが連れてきたのなら、考えがあるんですよね？」

「ええ、もちろんよ。ここ、ハルツイナ樹海の大迷宮を攻略し、ハツキング？ クラッキング？ するのに時間がかかるし、拠点を作成するわ。その拠点を守ってもらう兵力が欲しいの。人間や魔族が攻めてくるでしょうしね」

「人間はともかく、魔族がくるのか？」

「可能性が高いでしょうね。考えてもみなさいよ。魔族は魔物モンスターを操る術を手に入れたって話じゃない。確かにそういう能力はあるんでしょうけれど、それにしても突然力を手に入れたでしょう？ そんな急に力を得られる方法を私達は知っているわ」

「神代魔法か」

「ええ、その通りよ。外れているかもしれないけれど、警戒するに値するわ。ハルツイナ樹海は大迷宮として有名なのだし、私が魔族なら確実に襲うわね」

「なるほどな。それと人手確保か。それなら森人族を迎え入れるのは

確かにベストだな。さっきの言い方からして部族のほとんどをこっちに送ってきてもいいと思っっているみたいだしな」

俺達の会話にハジメも入ってきた。確かに二人の言う通り、森人族を率いれるのは手っ取り早く数を増やせる。ハウリア族と一緒に鍛えれば戦力になるだろう。おそらく、ルサルカがアルテナ・ハイピストを連れてきたのは、ハニートラップというよりも森人族のお姫様を娶らせる事で裏切りを防止する狙いもあるのだろう。

「とりあえず、着替えさせましょうよ。その恰好はないわ」

「そうだな。そちらの要求はある程度受け入れる。だから着替えてくるといい。姿は好きにしてくれ」

「あ、ありがとうございます」

さて、お姫様が女性の森人族と少し離れた場所に移動し、着替えを行っていく。その間に男性の森人族がこちらにやってくる。

「我等九名は姫様の護衛ですが、我等も奴隷として扱ってください」「いいのか？」

「もとよりフェアベルゲンではそのような扱いを受けます。また、姫様をフェアベルゲンに返す事だけはお止めください。他の長老達によつて始末される可能性があります」

「死ぬことも覚悟してきているのね……すごいかも」

優花の言う通り、彼女達は背水の陣できている。代価は自分達の命と森人族の運命。それにフェアベルゲンか。

「そちらに建国の意思があると、こちらのあ……女性からお聞きしました。是非とも、我等もその末席に加えていただきたいのです。我々も何時までも閉じこもっているのは全滅させられます」

「まあ、こんなところに籠ってられないか」

「はい。それに個人的にはありますが、解放者であるリユーテイリス・ハルツィナ様のご意思を継ぐ皆様方に従うのは我等、ハルツィナ樹海に住む森人族としては当然の事と考えます」

「リユーテイリス・ハルツィナってこの樹海を作った奴か」

「はい。故に我等はハルツィナ樹海の守護者として身命を賭す覚悟はできております」

「その通りです」

「どうやら、着替え終わったようでアルテナ・ハイピストが幼い姿のまままで戻ってきた。ただ、服装はフリルがあしらわれた純白のドレスに青いリボンが施された姿に変わっており、髪の毛も青いシユシユのような物でツインテールにされ、幼さが強調されている。スカートの部分は複数の白い薄い生地を重ねて作られており、ふわふわと浮いている。」

「それは……」

「嫁入り衣装ですか？」

「嫁入り衣装にも使われる物です。この姿ではあの衣装は似合わない」と皆が言うので……」

うんうんと頷く女性の森人族達。

「綺麗ね……」

「私達も着てみたいかも」

「それなら、ご用意いたしますよ。ただ、非常に高価な品物になりますので……すぐには御用意できません。この衣装は森人族が総出で成長してお嫁にいく子供の為に幼い頃から長い時間をかけて少しずつ用意していくものなので……」

オルクス大迷宮の奈落では鉱石系が多かったが、こちらは獣や虫、植物などが多いようだ。

「長命種ならではのものか」

「交易品として十分に使えるから、この布を仕入れて外で売れば結構な額になるんじゃないかしら？」

「量産は可能なのか？」

「難しいです。この樹海に住むフェルトと呼ばれる魔物モンスターから取れる糸を使っておりますので……」

「なら、大量生産は可能ですね」

魔物モンスターなら都合がいい。取り込んでそれ用の魔物モンスターを作り出せばいいだけだ。おそらく、このハルツィナ樹海の大迷宮は布関係の装備に仕える素材が沢山手に入るのだろう。

「では、それを交易品とするのはいいとして、こちらから要求がある」

「なんででしょうか？ 主様の言う事でしたら、同胞に被害が及ばない限りでしたらなんでもききます」

「お前達にはハウリア族と同じく、魔物の肉を食べてもらう」モンスター

「それは……死ねとおっしゃるのででしょうか？」

「違う。死ぬほど苦しいが、死ぬ事はない。俺が実際に証明している」

「まあ、簡単に言ってしまうと、魔物の力を手に入れるには食べるのが一番なんだ。なので魔物の肉を食べて、俺が与える回復薬を飲んで身体が作り変えられる苦しみを乗り越えたら、力が手に入る。もつとも、フェアベルゲンでは忌み子として扱われることになるだろうがな」

こうすればフェアベルゲンに住む森人族のところには確実に帰れない。だが、その代わりに力を手に入れられる。

「なるほど、私達に忠誠を示せということですか……」

「戻れる場所がなくなるが、それでもいいのなら俺が建国する国に高待遇で迎え入れる事を約束するし、出来る限り守ろう」

「その国が私達亜人も虐げられることなく、普通に過ごせるのならこの身を惜しむ理由にはなりません。喜んで食べさせていただきます。ですが、皆は……」

「私達は姫様についていくだけです。姫様が食べるといわれるのなら、我等も食べます」

「はい。アルテナ様だけに辛い思いはさせません」

「いえ、辛くはありませんよ。だって、主様と一緒にいけば偉大なるリューティリス・ハルツィナ様の軌跡を辿れるのですから」

ああ、ファンなのか。まあ、彼女達からしたら英雄であり、偉人のだろう。

「優花や詩乃も、アルテナを迎え入れることでいいよな？」

「私はどちらでもいいです。ご主人様の好きになさってください」

「私も別にいいよ。必死に強がって頑張ってる子は応援してあげたいし。それに女の子が増えるのは今更だしね」

「ごめん」

「ちゃんと愛してくれたいから。ただ、平等に愛してくれないと

……」

「と?」

「バツキューン」

「はい。わかりました」

詩乃と優花の許可も貰えたので大丈夫だ。アストルフオ達はわからないが、まあ大丈夫だろう。しかし、森人族の装備も考えないといけないな。森人族だから、やはり弓か?

いや、狙撃銃スナイパーライフルがいいだろう。あんまり似合わないかもしれないが。うむ、邪道だな。やはり弓や杖とかにしよう。詩乃が銃を使っているのは今更だが。でも、手っ取り早く強くするのなら銃なんだよな。黒い軍服を着たエルフやハウリア達が銃を持って行進する。アレ、意外にいいか。

「よし、アルテナ。早速だが、こちらに来てくれ」

「は、はい」

てくてくと寄ってくると、可愛らしいお嫁さんの姿が見える。ユーリとだいたい同じくらいか。金色の髪の毛をツインテールかゆるふわのウェーブかの違いだ。後はやはり耳。悔しいが、俺の趣味をしっかりとついでてきている。

「本当に好きにしているんだな?」

「はい。同胞の事をよろしくしてくださいのなら、なんでも受け入れます」

「わかった。じゃあ、早速だが、耳を触らせてくれ」

「はい? え、えっと、耳をですか?」

「ああ、駄目か?」

「いえ、大丈夫です。ただ、初めてなので……その、優しくしてください……」

「ああ、もちろんだ」

彼女、アルテナを膝の上に乗せて耳を触っていく。すると喘ぎ声をもらしただすが、ユーリも一緒になって触っていく。やはり、彼女も知的好奇心には勝てなかったか。ハジメも触りたそうにしていたが、すかさずユエがブロックしているのでできなかつた。とりあえ

ず、ハジメを除く全員でエルフ耳を堪能させてもらった。アルテナはふにやふにやになってしまったが、これも通過儀礼だと諦めてもらう。ただ、詩乃が若干ほつとしたあと、少し羨ましいそうにいたのでたっぷりと彼女もモフってやった。

第49話

森人族がアルテナ・ハイピストとその護衛としてやってきた森人族の男女九人。彼女達を受け入れて、アルテナは俺が引き取ることになった。そのまま即座にベッドインしてその幼い身体を堪能させてもらう……というのは色々と問題なので別々に寝て何れという事にしようとしたら、アルテナ本人が物凄く嫌がったのでそのままユーリと一緒にさせてもらう事になった。

まあ、彼女からしたら有耶無耶にされて後で捨てられるよりも、さっさと身体を差し出して初夜を済ませた方が楽なのだ。他の森人族に説得された。それにフェアベルゲンに居る間に祖父のアルフレリックや父親達に連絡しないといけないということだ。もう会えなくなるかもしれないからとのことだった。

そういう理由もあったので、アルテナの身体を堪能させてもらった。変身薬の使用は一週間は間を置かないと駄目らしいので、しばらくは幼い姿で楽しませてもらってそれから大人の姿でも楽しませてもらう。幼い時はユーリと姉妹みたいなので、同時に可愛がって、大人の時はヘイゼルの姿をした優花と二人の胸を楽しませてもらうことにする。

アルテナは最初、気持ち悪がったり、痛がったり、必死に耐えていたが一度し終わったら限界がきたようで、薬を使っただけでいいかと聞いてきたので許可した。使われた薬は媚薬のようで、甘い匂いがするものだったが、それは俺達にも影響してかなりハッスルしてしまった。嫁の全員にたっぷり搾り取られてかなりやばかった。気絶した彼女達を寝かせてぼーとしていたら、外から森人族の女性達が入ってきてベッドを整えて身体を綺麗にしてくれた。そんな彼女達から栄養ドリンクを与えられ、それを飲んで眠ったらだるさが嘘のように抜けていた。

ユーリ達は肌がツヤツヤしているから良かったが、本当に恐ろしいのは森人族印の薬を箱単位で渡されたことだ。聞いた話では森人族

は子供がなかなかできないので、どんどん強力な物を開発してきたらしい。他にも色々やばい薬がある。本当にエロフと言えるような感じだ。

まあ、森人族のお薬はこれから頼る事になるのでよしとしよう。

◇

朝。森人族のお薬で元氣を取り戻したので、現在はひよこひよこ歩きにくそうなアルテナをお姫様抱っこしながら森人族の集落に連れてきた。他はそれぞれ森人族の者達がついて案内してくれる観光に出ている。俺も本当はユーリや詩乃達と観光したかったが、予定を変更して森人族の方に戻ってきた。

「あ、あの……主様……不手際があれば治しますから……捨てないでください……」

「大丈夫だ。アルフレリックさん達に挨拶をするだけだからな」

俺の服をギュツと握って不安そうにしているアルテナをしつかりと抱きしめながら、建物に入る。周りの森人族やその他の種族にしっかりと見られていて、睨み付けるような憎悪の籠った視線を送られてくるが気にもしない。

護衛の者に要件を告げてから案内された部屋で待つ。アルテナは不安そうにしているが、ただ話すだけだ。少しするとアルフレリックさんがやってきた。

「孫娘に不手際があったかな？」

「いえ、大変良い子でした。嫌なはずなのに我慢して耐えてくれましたし」

「あ、あの、さ、最初だけ、です……後はとつても気持ち良かったですから……その……ごめんなさい。主様は気持ち良かったですか……？」

「ああ、気持ち良かったよ。ありがとう」

「良かったです……あの、お爺様……」

「ああ、仲良くできそうで良かった。それで孫娘に不手際がなかったのなら、何の用かな?」

「アルテナのご両親は……」

「死んだよ」

「それは……」

「息子は殺され、娘は連れ去られた」

「すみません」

「構わないさ。それで要件は?」

「娘さんを嫁に頂くといい挨拶をしに来ました」

宝物庫から果物を使ったフルーツタルトが入った箱と高純度の魔石を取り出して、アルフレリックさんの方へと渡す。こちらとしてはどんな形であれ、アルテナを貰うのだから、筋は通さないといけない。「わかった。確かに受け取ろう。しかし、その姿とは懐かしいな」

「私も、この姿が良かったですから丁度良かったです。お母様が作ってくれたこの衣装を着れましたから……」

「確かに大人の方はまだ作れていなかったな」

母親が娘を作って作っていくのだったか。だったら、大人の衣装ができていない事もなっとくだ。まあ、ちよつと染みができてしまっているので後で綺麗にしてやらないといけない。

「そうだな……少し時間はあるか?」

「主様……」

「はい、大丈夫です」

「だったら、少し付き合ってくれ。宝物庫を持っているのなら、アルテナの服や物は持つていけるだろう」

「では、ありがたく。できれば製薬道具などもいただきたいです」

「アルテナ、荷物を纏めてきなさい。お前の物は全部持つていきなさい。もうここに戻る事はないのだから」

「はい、お爺様。今までお世話になりました」

そう言って立ち上がってからパタパタと部屋から出ていくアルテナ。俺はアルフレリックさんを見る。

「別に帰ってきてもいいと思いますか?」

「駄目だ。アルテナは表向き、追放になる。フェアベルゲンに踏み込めば殺される。アルテナの未練を断ち切り、其方に尽くす事の方に心を向けさせた方が良い」

「それは……」

「私とて可愛い孫娘にこんな事はさせたくないが、長老会議で決まった事を簡単には覆せぬ。例外を一度作ったのだ。次も作ればフェアベルゲンは崩壊する。それはまだ困る。そちらも準備が出来ていないのだろうか?」

「はい。いえ、数十人くらいならば受け入れる事は可能です」

「そうか。なら……いや、やはり早急か」

「長。用意できました」

「うむ」

森人族の人によってテーブルの上には杯とワインが入れられている。

「あの、これは?」

「アルテナを嫁に貰うとなれば我が一族に入ることだ。だから、杯を交わす」

「未成年……いや、もらいましょう」

「うむ。孫を頼む」

注いでもらった杯でワインを飲む。正直、味は全くわからない。それでも、どこことなく美味しいと感じた。

「姫様を頼むぞ」

気がつけば他にも居た森人族の人から注がれてどんどん飲まされていく。これはやばいので、美遊に頼んでアルコールを分解してもらう。そうすればただのぶどうジュースだ。飲酒にもならない。

そんな風に飲みながらアルテナの子供の頃の話とか、思い出話を聞いていく。すると戻ってきたアルテナにアルフレリックスさん達が思いつき怒られていた。流石に恥ずかしい失敗談とかは怒るのは仕方がない。

「これからの計画について教えられる範囲でいいから教えてくれぬか?」

「わかりました。まず、ハウリア族と預かった森人族の一部に我々が発見した魔物モンスターを喰らっても問題なく生き残れ、その力を得られる方法を実行します。これでシア、ハウリア族の忌み子と同じ魔力を直接操る力を手に入れる事ができます」

「ふむ。魔物モンスターの力を使えるようになるのか」

「はい。私達が目指す国は人間族も亜人族も魔族も魔物モンスターも関係なく、協力して作る多民族国家の予定です」

「魔女……いや、ルサルカさんだったか。彼女からも聞いたが、可能か？」

「可能か不可能かで言えば可能ですが、多民族で団結しなければ神工ヒトに勝てません。我々はエヒトの玩具ではない」

「……確かに戦力を得られるのなら、手っ取り早い。だが、忌み子になれと……」

流星に俺達に協力する事は決めても、魔物モンスターの力を自分達が得るとなると及び腰にもなるか。今までの常識が完全に壊れるのだ。ましてや長生きした者ほど怖いだろう。

「お爺様。私はもう覚悟を決めております。何故、私達だけ人とは違う部分があるというだけで虐げられなければいけないのですか？」

「それは……」

「私は嫌です。皆が苦しんで必死に生きているのに殺され、攫われ、嬲りにされて殺されていく。そんなのはもう嫌です。ですから、戦いましょう。その為に魔物モンスターの力が必要だと言うのなら、受け入れましょう。人間達が言うには私達は魔物モンスターと同じらしいです。なら、その通りになってあげましょう。彼等が私達を魔物モンスターだというのはなら、魔物モンスターらしく戦います。泣き寝入りをしてどうなったかは、歴史が証明しています。私達はどんどん衰退していつています。そんな時にリユージェイリス・ハルツィナ様のご同胞が残された試練を攻略し、試練を挑もうという主様達が現れました。これはリユージェイリス様の思し召しでしょう」

「良かろう。皆、長としての決定を伝える。若い者は自らの意思でアルテナに従うか、ここに残るか判断せよ。アルテナに従うのなら、折

を見て行方不明ということにして合流するように。それ以外は今まで通りに行動せよ。私は長老会議で時間を稼ぐ」

「準備はどうするのですか？」

「資材などはアルテナの嫁入り道具として提供する事にすればよい。他は交易品ということにして、物々交換をする。婿殿には武器を用意してもらい、必要な時になったら使わせてもらおう」

「なるほど」

アルテナの言葉でほぼ確実にこちらに付くことになったか。いざとなれば決起するから、フェアベルゲンを制圧しろとまで言っているのだ。これは助かるが、大義名分ができるまではこのままだな。

「とりあえず、魔物モンスターの力を得るのは私達十人で試してからにします。適応できたら順次、希望する人に施しますが……子供は駄目です。成人した子達だけですからね」

「ちえ〜」

「……駄目、なの？」

「駄目です」

同じ年齢のような子達に注意しているアルテナの姿がなんとも言えない。まあ、これでこちらは問題ないだろう。

「ああ、そうじゃ。一つ合法的に土地を手に入れる策がある」

「それは？」

「うむ。ジンを慕っておった熊人族が婿殿達を襲撃しようか悩んで居る。それを利用せぬか？」

「詳しく」

「うむ。我等森人族から一部の者がアルテナを慕って離反し、婿殿達を本気で襲ってもらう。その計画をそれとなく熊人族に伝えて奴等から接触させ、共に婿殿達に挑ませる。婿殿達は殺さずに無力化してくれればよい。そこから、同胞はそのまま回収していけばよい。女性比率をあげておけば我等が取り返す交渉に赴いても怪しくはあるまい。熊人族は散々脅して、今回の件の罰として大樹一帯を婿殿達の支配下にすると言言して追い返せば後はこちらでなんとかしよう。なに、こちらは大切な娘達を更に取りられたのじゃから、罰は受けておる」

「うわあ……」

「お爺様……」

悪辣だ。確かにこの方法なら、大義名分とはいかなくても因縁はつけられる。そうして手に入れた場所に要塞を作っても問題ない。うむ、素晴らしい。

「その案を相談して決めさせてもらいます」

「うむ。頼む」

しかし、ここまでしてもらえたのなら……やる事は一つだな。

「少しお時間をください。今夜、ここに皆様で集っていただきます。その時にアルテナを迎えにきますし、プレゼントを用意しておきます」

「わかった。しかし、夜に出るのか？ 危険だが……いや、媚殿達ならば大丈夫か」

「はい。アルテナ、今の内にお爺様にしっかりと甘えておくといい」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、俺はちよつと行ってくる」

「はい」

アルテナを置いて鈴達を探しに行く。彼女達にお願いしてハウリア族と同じように死者と会わせ、浄化用の結界を一つの部屋に展開してもらってから帰る。日が昇ると解除されるとくれぐれも言い残し、それまでに成仏させてあげるように伝えておく。そうでないと計画に森人族も巻き込まれるからだ。

死者と面会した彼等はとても晴れやかな顔をしていた。アルテナも例外ではない。彼女の隣に父親であろう人が居た。彼は涙を流しているアルテナの背中をそつと押してから、こちらに頭を下げてから浄化用の結界が施された部屋へと消えていった。アルテナに見せつけることで未練を断ち切らせるかのようにだ。

「主様、これからよろしくお願いいたします。全力でサポートさせていただきます」

涙を両手でぐしぐしと拭い取ってから、しっかりと強い意思を込めた瞳でこちらを見詰めてくるアルテナをブラックトライクの前に乗

せ、鈴と恵里を後ろに乗せて先行しているハジメ達に合流するために走らせる。

森人族の人達が最後まで見送ってくれていた。

◇

フエアベルゲンを出た翌日の夜。仮のキャンプ地から少し離れた場所。ここで地獄が降臨する。地面には恵里の力によつて描かれた巨大な魔法陣。空には死者の魂を吸い寄せるように作られた結界が展開されている。何をしているかって？ 決まってるじゃないか。食事だ。

「えつと、本当にやるんだよね？ 鈴は止めておいた方がいいと思うなく」

「何を言っているの。真名がやるって言ってるんだからやるでしょ」

「そうよ。しっかりと利用しないと魂が勿体ないじゃない」

「せめて浄化してあげたら……」

「それだとガチャができねえじゃねえか。俺は、俺は10連ガチャをいっぱいいっぱい回したいんだよおおっ!!」

そう、大迷宮が作られて数十年から数百年。こことライセン大迷宮で儀式を行えば馬鹿みたいな魂が集まるだろう。なにせライセン大渓谷の方は元々処刑場らしいからな。

「駄目だ、まなまなが狂ってる」

「元からでしょ」

「それもそうだね」

「まあ、随分と禁止してたしね。優花の中じゃ意味なかったし」

「それに私達にも得があるからいいじゃない。鈴はハウリア族と森人族を譲ってあげたんだからいいでしょ」

「まあ、そうだね。うん。やっちやおう」

「さあ、ネクロノミコン。行くよ。開け、地獄への扉。今一度、魂を現世に呼び出せ。アビスゲート」

魔法陣から黒よりもなお暗い、漆黒のような闇が広がって門が口を開く。そこは真つ黒で光すら通さない闇。そこから無数の手が出てきて、上に何かを投げてくる。それはここで死んで地獄へと行った者達の魂だ。同時に結界によって吸い寄せられてきた浮遊する魂も集まってくる。

「んー亜人の魂つて獣臭いビーフジャーキー？」

「僕は激辛スナック菓子かな」

「俺はよくわからん。ドロドロした魂だな」

まあ、なんとかというか亜人の魂は歪だ。身体能力は強化されるが、魔力系統は強化されない。俺は全てガチャ用につき込むから関係ないがな。

「鈴はね〜チョコクッキーかな〜」

「それは鈴が今、食べてるからでしょう」

「えへへ〜」

鈴は壁に寄り掛かりながら棒状のクッキーをジャムにつけてパクパクと食べている。あのクッキー、味がなしな。砂糖がないから、ジャムで味付けしないと食べられない。

「森人族と兎人族は分けておけよ」

「面倒だけど仕方ないわね」

「うん。でも、流石に仲間の魂だから、鈴に浄化してもらった方がいい」

「あ、レア物きたよ」

「戦闘準備！」

「むしろ任せろ」

俺は空を飛んで神喰を起動。そのうちの一つを掴んで出て来たトリガーを手で持つ。剣が開いて砲身が現れ、大量の魔力がチャージされていく。

「————ツ!!」

アビスゲートの中から巨大な竜が出てくる。そいつは腐敗した身体で、口からは毒の吐息を吐いていく。

「全力全開。スターライトブレイカー」

高町なのはが得意とする核兵器みたいな威力がある馬鹿みたいな砲撃魔法。非殺傷設定で物理ダメージを無くして魔力だけのダメージにできるが、どう考えても人に撃つものじゃない。

実際、巨大な光が円形状に広がってドラゴンを飲み込み、その身体を破壊の魔力が数百メートルを蝕んで破壊していく。叩き込まれたドラゴンは身体の一部が無くなったが、まだ生きている。

神喰の魔力がなくなれば次の神喰を掴んで再度、スターライトブレイカーを放つ。流石に二発で死んでくれたらしいが、相手は腐っても竜種。

故に身体が減んでも中心の魂を核として身体を形成し始める。だが、これこそが狙いでもある。

「美遊」

『はい』

空中から突撃する。形成されだしている身体から毒を放たれるが無視する。効かないとわかると拳で殴ってくるが、神喰を美遊が操作して串刺しにして防いでくれる。腐敗の肉へと突入して魂を掴みとり、引き抜く。竜の身体は取り返そうと、(逃げるように)攻撃をしかけてくるが、その前に――

「いただきます」

――ぱくりと口に入れて食べる。身体中の竜の細胞が活性化し、聖杯に魔力が満たされていく。竜の魂は極上の甘味。感覚共有で鈴達に共有すると恨めしそうな表情になった。そんな風になっていると、周りから手が伸びてくる。肉体のある俺を地獄へと引きずり込もうとしているのだろう。だから、さっさと離脱するが、後ろから死神みたいなのが沢山でてきた。

「なんだこいつら」

「魂を取り返しにきたんじゃないの？」

「あく地獄から取つてるとも言えるしね」

「つまりレア物だな」

「やりますか」

「やっちゃおう！」

この世界を管理しているエヒトの手の者かもしれないな。鈴がシエンシヨウジン神獣鏡を展開して光で相手を拘束し、そこを俺達が攻撃して殺す。神喰も全力運用だ。魔力刃ではなく、刀身を使つて魂喰いの方を扱つていく。流石に数が多いのでユーリも呼んで手伝ってもらおう。

「もう、何をやってるんですか！」

「「食事？」」

「この人達は……」

『あはは』

「ゆりゆり怒らないで。大丈夫だよ危なくなったら全部浄化するし……」

「そういう問題でもないんですけどね」

ユーリを身体の中に入れ、憑依してもらう。物理攻撃は意味ないからアストルフオはお留守番だ。

80分ほど虐殺を繰り返していると、アビスゲートの維持ができなくなってきた。どうも、奥からもつとでかいのが抜け出そうといっているみたいだ。だから、解除して門を閉じる。後処理に残りの魂を回収してから、鈴に綺麗に浄化してもらったら出てきた瘴気はきれいさっぱりなくなった。(鈴に出てきた瘴気を(綺麗に)浄化してもらった。)

「よし、ガチャだ。ガチャの時間だ」

「やるなら夜じゃなくて昼にしてください。それに魔力を回復してからですよ」

「それもそうだな」

262連分と少し増えていたのを合わせれば286連だ。すぐに溶けそうだが、まあいい。キャンプ場に移動して眠ると、ユーリ達のご機嫌取りも兼ねてたっぷりと愛する。



気がつけば和風建築の家の中に居て、目の前に十二単のような服を身に纏った美遊が立っていた。軽く周りを見渡せば（見渡すと）すぐ近くに日が当たる縁側があり、部屋の中には布団が敷かれている。

「ここは……」

「私の中です。魂が一定値を超えると形成ができるようになります。もっと私と深く繋がればですが……その、それで……」

「ああ、なるほど。だが、美遊が嫌ならやらなくていいが……」

「いえ、やります。むしろ、してくれないと困ります。私の中、泥でいっぱいなんです！ 掻き出してください！ 気持ち悪くて気持ち悪くて……」

「あゝ」

食当たりみたいなものだろう。なんせ、地獄にあつた魂まで回収しているしな。

「魔力供給をしてもらって、中和してから押し流します。ですので、お願いします。私頑張るから、お兄ちゃんをちゃんと召喚してくださいね」

「わかってる」

「なら、お願いします……」

服を身体から落としていく美遊。俺は彼女を布団に寝かせて覆いかぶさる。



気が付いたら隣にユーリが居た。美遊の姿は見えないが、形成できる事は感覚ではなく、懇切丁寧に説明書が脳内に用意されていた。美遊が用意してくれた奴で、読んでいくとやり方がわかった。まだ美遊とは深く繋がりがきれていないから、聖杯としての形成しかできない。身体は無い感じだ。つまり、まだしばらく脳内嫁となるわけだ。

とりあえず、ユーリの頬つぺたをぶにぶにして、それからアルテナ

と詩乃の耳をモフモフする。これを皆が起きるまでやってみた。

そして、皆でうたわれるものを鑑賞していると魔力が回復したので次の作業に入る。大規模な召喚用魔法陣を描いてスマホを確認する。色々ピツクアップガチャがあるが、うたわれるものを選択する。人類悪ガチャや悪魔ガチャ、地獄ガチャとかが勝手に表示されていくが、排除してうたわれるものを断固として選ぶ。

「全員、一応戦闘準備をしておいてくれ。きっと大丈夫だが、変なのが召喚される可能性がある。タタリとか」

「タタリか。焼き尽くしたらいいだけだし、大丈夫だな」

「まあね。よしガチャだ！ ガチャの時間だ。溶かすぞおおおつ！」

「溶かす前提かよ」

ガチャを回す。まずは単発6回。光が現れ、現れたのは仕込み鉄扇。うん、ハクオロやハクが使っていた奴だな。ランクはR。まあ、当たりだろう。

「次！」

C石。Rタタリ。赤色のスライムが現れて襲ってくるが、即座に鈴シエンシヨウジンの神獣鏡によって浄化される。これは呪いだから祓えるのだ。ただし、残ったのは魂だけ。ご馳走様。石、木、結糸。まあ当たりか。

「よし、ここからだ。10連開始！」

R大剣、Rクオンの葉、C鉄の欠片、SRタタリ、SSRタタリ、Cアマムニイ、Rガウンジ、C黒い羽、C石、SRデコポンポ。

タタリは巨大な赤スライム。SSRは家なみに巨大なので周りのデコポンポが食べられた。こればかりは仕方がない。タタリは浄化してガウンジだけは食べられる前に蒐集して取り込んでもらう。いや、タタリも取り込ませればいいのか。勿体ない事をしたかもしれないが、浄化してやるのが正解だろうからまあよし。

「次！」

虹、R呪文書、虹、N小石、SR皇の証、N燃えカス、C將軍のふんどし、Nなにかの糞、虹、虹。なんだこれ。

「10連で虹四つ！ 勝った！」

「いや、まだだ！ 変なのが出たらどうする！」

「そうだったな……来いネコネ！ オシユトルに会えるかもしれないぞ！」

一つ目の虹。ちなみにデコポンポはハジメも無視していた。他の人はなんとも言えない感じだ。さて、虹だ。一つ目。光の中から現れたのは男性。頭には仮面をつけている。

「召喚に応じ、馳せ参じた。某の名はオシユトル。ヤマト右近衛大将オシユトルと申す。オンヴィタイカヤンよ。よろしくお頼み申す」

「あははは」

「先に兄が来たな。これ、引いてもネコネを説得するのは大変そうだな」

オシユトルが居なければ彼を召喚する事を条件に協力してもらいやすくなる。

「まあ、オシユトルも好きだし問題ないな！」

「いや、某は男色の趣味は……」

顔色を悪くしながら告げてくるオシユトル。

「違う！」

とりあえず、オシユトルは当たりだ。彼はヤマト右近衛大将うこんえたいしやうを務める武人で、召喚したいネコネの兄だ。帝より仮面アウルカを賜った仮面アウルトウルカの者のひとり。仮面は顔の上半分を覆う形状だ。

彼自身は清廉潔白で、民からの信頼が篤く、巡邏の時には歓声が上がるほど人気がある。将として優れているだけでなく、自ら剣術にも秀でており、かつて試合で唯一ヴライと呼ばれるその国最強の人物に土を付けた。

地方の下級貴族出身で、かつてヤマトに仕えて民を守っていた父に憧れ、帝都に上京して仕官する。その後、自身の能力で右近衛大将にまで上り詰めた。その結果、貴族（特にデコポンポなど）の中には「成上り者」として毛嫌いされる。

そんな彼だが帝の暗殺及び、アンジュ暗殺未遂の容疑をかけられ、投獄される。そこから主人公のハク達によって助け出されるが、追跡してきたヴライと戦う殿となり、仮面の力を開放してヴライと激闘を

繰り返す。その最中、ネコネの介入が裏目に出てしまい、渾身の攻撃を外してしまうが、仮面に自らの魂を喰わせてまでの執念の一撃でヴライを倒す。ハクにはアンジュを頼むといい、ネコネにハクの支えとなつてやってくれと頼み、ウコンとしての声で別れを告げ、仮面に魂を喰われた者の成れの果てとして消滅した。

「しかし、なんでもありだな。魂が消滅した奴ですら召喚できるか」「それなのだが、実はかなりまずいのだ」

服をずらして見せてくれるのだが、穴が空いているし消えかかってやがる。どう考えてもヴライとの戦った直後に召喚されたようだ。

「ああもう！」

ダツシユで近付いてオシユトルの口に手首を噛み切つて聖杯の力でブーストした血を飲ませる。これで身体は修復されるだろう。魂の強度が足りんのなら、獣人の魂を与えて修復する。応急手当てだが、まあこれで一命は取り止められる。

「すまぬ」

「いいから……って、やば」

「逃げろ！」

俺が動いた事で次の虹が出てくる。ソイツは現れた瞬間に炎を巻き散らかす巨人。

「オシユトルウウウウウウウウウウツ!!」

「追ってきてんじゃねえよ！」

「えっと、アレは敵でいいんだよね？」

「ああ、潰せ！」

「本当にすまぬ」

オシユトルを横抱きして飛び退る。すると先程まで居たところに拳が突き刺さる。そのタイミングでもう一つの虹からも巨人が出て来た。今度は人だったがある意味では同一人物だ。ソイツもオシユトルを見るなり仮面を掴んで叫び、まったく同じ巨人へと変身した。

「地獄でまた会ったなオシユトル！」

「そりゃ召喚だからあり得ることだわな」

「敵は仮面の者ヴライ^{アクトゥルカ}二体。普通なら終わりなんだが……」

ハジメがアハトアハトを取り出して放つ。爆音を放ちながら放たれた弾丸を奴は光線を吐いて排除する。

「ちっ」

俺もドーラを取り出して放つ。流石に列車砲であるドーラ砲を光線を吐いている横から放つと相手は両手で掴んで防ごうとしたが、そのまま吹き飛んでいく。あちらはハジメに任せる。

もう一体の方はユーリを俺の身体に憑依してもらって神喰で戦ってもらおう。俺が扱うよりも勝てる可能性が高い。それに詩乃やユエ達全員で参加して戦いだす。森は激しい轟音と燃え盛る業火によって地獄へとなる。

「まだだ！ まだ終わらぬ！ 仮面よ、更なる根源を開き、我に力を！

」

「鈴、オシユトルを、彼を頼む」

「了解だよ。被害がでないようにもしておくし、頑張ってるね」

「ああ」

ヴライの頭部が弾かれ、即座に弾丸が飛んできた方に光線を放つ。それを詩乃は飛んで回避してヘカートで銃弾を放つ。恵里はジャンヌダルク・オルタの力を引き出して黒い炎でヴライの炎と戦っている。

「魂を燃料にしているんだから、放置してたら勝手に死ぬんだが、そうもいかないか」

何故なら、ここにもう一つ虹がある。それがこの業火の中、人型をとっていく。

「皆さんもご存知のように、私の皇位継承オウルオについて……え？ あれ、ここど——」

良し来た！ と思ったなら、そのネコネの前にはヴライが居て、拳を振り下ろしている。それを見た彼女は——

「いやあああああつ!! 助けて兄様あつ!!」

——プチツとはならなかった。オシユトルが投げた剣をヴライが弾き飛ばすことを優先した。しかし、裏拳が放たれる。その前に飛び込んでネコネを押し倒して、ヴライの一撃を背中受ける。

ヴライの拳で身体が軋み、地面に腕や足が埋め込まれるが、なんとかネコネが潰れないように耐える。ネコネの方が大事だから問題はない。

「ちよつとごめんね。すぐ兄様の所に連れて行ってあげるから我慢してくれよ」

「は、はいです……」

ネコネを守りながら背中で乱打を受けている間、詩乃達の攻撃が集中していくが、ヴライは気にもしない。だが、これはチャンスだ。

「ユーリ、美遊。魄翼を解除。背中に再展開」

『了解です』

刃を上にして展開すると、タイミングよくヴライの拳が剣に突き刺さる。全力で魔力を与えて永劫破壊と呪いを発動する。

「ぐっ」

すぐさま飛び退るので、ネコネを抱きかかえながら飛んで移動してヴライと向き直る。ネコネはヴライを見ると恐怖に引きつった表情で悲鳴を上げて暴れだしていく。

「兄様、兄様兄様っ！」

「落ち着け。オシユトルならそこに居る」

「え？ ほ、本当に？ ハクさんじゃなくて……」

服装事態はロストフラグのイベント衣装、亡國の双姫の皇の時に着ていた物だが、記憶はしっかりと全て入っているようだ。

「本物のオシユトルだ。ちよつと待っていてくれたら、すぐに連れて行ってやる」

「あつ、あああ……」

「いいか？ 大人しくたのむな」

「は、はいです！ 大人しくするのです！」

「よろしい」

ヴライが怒りに任せてこちらに光線を放ってくる。

「ひっ」

「大丈夫」

魄翼と神喰を盾として展開し、光線を防ぐ。お返しとばかりに操っ

て前後左右から剣を突き刺す。剣に与えられた傷は呪いによってどんどんと広がっていく。そして、ドーラとグスタフの砲撃を近距離からぶつ放す。吹き飛んでいったヴライに追いつく。

「ひゃあああああああつー！」

ネコネの叫び声を聞きながら奴の仮面を掴んで地面に叩き付け、神喰二つをヴライの身体と大きな口の中に突き刺して魔力弾を殺傷設定でたらふくお見舞いしてやる。

「あ、ネコネが止めを刺すか？ 兄の仇だろ？」

「……やるです」

「じゃあ、このトリガーと一緒に引こうか」

「はいです……兄様の仇っ！」

引き金が引かれて莫大な魔力が流れ、魔力弾の代わりに砲撃が叩き込まれる。攻撃を受けたヴライの身体が塩のような砂になって消滅していく。残ったのは仮面だけだ。

「はあ……はあ……」

仮面を回収したら放心状態のネコネを連れてオシユトルの下へと向かう。もう一人の方はどうなったか気になるが、ネコネが優先だ。そう思っていたが、あちらもハジメとユエ、詩乃、ルサルカ達が虐めていた。そう、虐めだ。だって、ルサルカが動きを止めてひたすら攻撃するだけの簡単なお仕事だ。アストルフオも参加していて、彼がウルカーノ・カリゴランテ僥倖の拘引網を体内から放って最終的には倒していた。

「で、被害が甚大だが……」

「いやはや、まさかヴライ二体とは思わなかったな」

ネコネをオシユトルに渡すと、二人は抱き合って無事を喜びあっている。良かったよかった。

「さて、続きといくか」

「おい」

「今更だつて。えい」

「待てや！」

「もつと溶かすんだあつー！」

今度はNの野菜、Rの剣、虹、R美味しいお水、Rテレビ、Nティツ

シユ、虹、N果物、SRマスターキー、Nダイス。なんだか運がいいな。おかしい。絶対におかしい。

「次は……」

「総員、戦闘準備！」

人が現れた。そいつも仮面をつけている。というか、オシユトルにそっくりだ。

「ハクオロか、それともハク？」

「それがオシユ……あれ、お前もしかして……」

「あんちゃんか」

「ハクさん！」

どうやら、ハクのような。それも仮面装備。ややこしいわ！ とりあえず、向こうは放置してもう一個の虹だ。今度のは……急激に大きくなつていく。それはもう、数十メートル、数百メートルまでの大きさだ。

「おい、こいつって」

「あはははマジデ」

「アマテラスじゃないか」

軍事衛星アマテラス。かつての人類が作り出した代物で、地球の環境再生こそが本来の役割だ。だが攻撃に転用してしまえば、地上を滅ぼしかねないほどの力があるため、そんな目的で使うのは愚の骨頂だと言われている。しかし、タタリ化を恐れた人類の戦争に使われてしまった。

「やばくて使い道がない兵器であるので、宝物庫に死蔵だな」

「そもそも宇宙に運べないからな」

さて、続きをしよう。まだ36連だ。この運ならいけるいける！

そう思っていたが、オシユトルの怪我やネコネの事もあるのでここまですておこう。ヴライがクオンとかなら言う事がなかったんだが……あれ、これってハクはサボリまくるフラグじゃなからうか？

第50話

ヴライからのドロップ（剥ぎ取り品？）は仮面だ。この仮面の使用はかなり気を付けなければならない。何せ超常の力を得られる反面、魂を代価に力を引き出しているので無くなれば消滅する。原作のうたわれるものでも、オシユトルやハクがこれによって魂を使いすぎて消滅した。まあ、ハクに至っては神様の力を奪い取って戻ってきたとも言えなくはない。

「で、今回はここまでか？」

「まあ、次は拠点を作ってからだな。流石にヴライ二体とタタリまで戦ったんだ。この辺りで止めておくのも手だろう」

「珍しいな。お前がガチャを止めるなんて」

「だって、アレだぞ」

「まあ、そうか」

俺が見た方向ではハクが抱えているオシユトルにネコネが抱き着いて涙を流しながら頬擦りしている光景だ。ハクもオシユトルも苦笑いしているが、とても嬉しそうに話している。ハクはどんなにオシユトルのせいで苦労したかを話し、オシユトルはネコネを撫でながら愚痴を聞いている。

その光景に涙が出る。ハクはオシユトルが死んだ時にオシユトルからヤマトの姫であるアンジュを頼むと言われ、自らを死んだ事にしてオシユトルとして生き、それを貫き通して最後の最後で仲間にした。ネコネは自らが大好きな兄が死ぬ原因を作り、目が死んで生きる屍のように働いてきた。ネコネの方はある程度、ハク達のお蔭で元気にはなったのが唯一の救いか。

「アレは良かったな」

「偽りの仮面だけでなく、二人の白皇もアニメにしてほしいかった」

「確か制作発表はされていたぞ」

「これはなんとしても戻らねば」

「アニメのためかよ」

「まあ、基本的にごつちに残るだろうがな」

森が燃えているので火を消して、大地に魔力を注いでおく。するとみるみるうちに再生して樹海へと戻っていった。流星は大迷宮の一つだ。

「お前、また魔力が上がったか？」

「形成はできるようになったからな」

美遊と更に深く繋がったお蔭で扱える魔力が格段に増えた。集めた魂はせつせとくべているのも理由の一つだ。

「この仮面の使い道だが、今はいいよな？」

「俺は使わないしな。永劫破壊エイワイヒカイトを覚えてる連中が使えばデメリットはあんまりないだろう」

「それもそうだな」

魂を燃料とするのなら、集めた魂を使えば自分に跳ね返ってくるデメリットは存在しない。こう考えると、俺達の中で使えるのは俺と鈴、恵里とルサルカぐらいか。鈴は浄化して力だけ集めている分、鈴自身の魂が代償になるので余りお勧めしないが。いっその事、ルサルカナハツエーラーの食人影につけたらいいんじゃないだろうか。アレって影に魂を入れた人形だし、仮面をつけても使い捨てができる。

「ハジメ、後始末を頼めるか？」

「いいだろう。貸しだからな」

「あいよ」

さて、詩乃達の様子を見る前にオシユトルの様子を見ないといけない。い。

「ユーリ、デバイスのチェックを頼む。ルサルカは一緒に来てくれ」

「わかりました」

「了解」

デバイスをユーリに預ける。詩乃達も皆のデバイスをユーリにチェックしてもらう。戦闘で負った故障箇所や不具合を見つけて修理するのはもちろん、戦闘データからデバイスの改造案を構築してく

れるので、ユーリの負担は大きいけれど任せるしかない。

ユーリの所から離れて、ルサルカと共にオシユトル達の所へと移動する。三人もすぐにこちらに気付いてくれた。

オンヴィタイカヤン
「大いなる父うたわれるものでは太古に世界を支配し、人を創造したと言われる存在。その正体はかつての人類。人類がタタリ化する災厄が襲った後、隣人家族がいつタタリに変貌するのかわかるといふ疑心暗鬼にかられ、変貌する段階にいたってなかった者も含めてお互いに殺し合って滅び去った。作中で明確に生き残りとして描かれているのはハクと帝の2名のみ、改めて二人と再会させて頂いた事、感謝致します」

「助かったよ。ありがとうございます」

「ハクさん！ オンヴィタイカヤン 大いなる父になんたる口の聞き方をしていてるですか！」

ハクの言葉にネコネは袖の中に隠れている小さな手で顔を拭いながら怒る。ネコネの服は袖がかなり余り、手が出ないように作られているので仕方がない。宮中で着るような服だしな。

オンヴィタイカヤン
「大いなる父って言っても、正体を知っているしな」

オンヴィタイカヤン
「そもそもネコネの言う大いなる父と俺達は違う」

「いえ、私達を作ったという意味では同じなのです。ですから敬うべきなのです」

「あくそうした方がいいか？」

「いや、必要ない」

「だそうだ。それよりも要件は俺達の事だよな？」

「そうだが、違和感があるから仮面外してやってくれないか？」

「外れない」

「やれやれと言った感じだが、実際に外れないのだろう。」

「まあ、ちゃんとする時にしてくれればいい。オシユトル、怪我の方はどうだ？」

「傷は治まっていますが、本調子ではありません」

「やはり他人の魂で無理矢理代用しているのだから、不調は当然か」
「当たり前ね。まあ、少し調整してあげるわ」

「頼む」

ルサルカがオシユトルの身体に触れて魔術を使つていく。それを不安そうに見ているネコネだが、どことなく魔術に興味がありそうだ。

「動けるようにはしたけれど、戦闘はやめておきなさい。特に仮面アケルカだったかしら、これの力を使つたら次は死ぬ可能性が高いから止めておきなさい。いいわね？」

「しかし……」

「絶対安静だ。戦闘はハクに任せてそれ以外の仕事を頼む。俺達はこれから国を作るつもりだから、内政をしてくれると助かる。それに完全復活するための手段はこの世界にあるから、少しだけ待っていてくれ。つと、先にこの世界の事について説明する」

今までであった事と、この世界の事情を話して改めて協力を要請する。オシユトルは話を聞いてしつかりと頷いてくれた。

「承りましょう」

「私も及ばずながら協力させていたたくのです。兄様を助けて頂いたご恩をお返ししたいのです。それに頑張れば兄様の身体を治療できるのですよね？」

「魂魄魔法を使えば可能でしょうね」

「ならば協力するのです」

やっぱり見れば見るほどネコネは可愛らしくていい子だ。あんな死んだような目をさせるのは忍びない。

「というか、俺も働かなくてはいけないのか？」

「当然なのです」

「食事や酒を要らないというのなら、それでもいいが……」

「それは嫌だな」

「ハク、これならどうだろうか。国が安定し、この世界を支配する邪神を倒したら、俸禄だけ受けとれてぐうたらしても食うに困らないようにする事を約束しよう」

「ほほう」

「今度はオシユトルも居るし、俺達も居る。すくなくともヴライを倒

せる実力はある」

「……いいだろう。その話、乗ってやる」

エヒトを倒して国が安定したのなら、ハクの役目は終わりと言っていい。なら、適当に地位と土地を与えて領主に任じてやればいい。後の事は自分でするだろう。人材を集めて働かせるもよし、自ら嫁の紐になるもよし。好きにするがいいさ。

「これで協力は得られたな。さて、次は……」

「その前に神水を与えておきなさい。発作が起きたりしたら直ぐ飲むのがベストだけど、まあ今は定期的に摂取しておけば大丈夫よ」

「わかった。さて、オシユトルは好きだが、ネコネと違って性的興味は一切ない」

「私はあるのですか!? ときおり感じていたのはそういう視線ですか！」

隣に居るルサルカに脇を抓られたが、気にしない。

「男色ではない証明だ。で、先に言った事を前提に伝えるが……神水という回復薬は俺の体液から作られている。そんな訳で唾液、汗、血液、アレなど様々な物が神水となっているのだが……どれで飲みたい？ 俺的には血液がお勧めだ」

「それって血液しか選択肢がねえじゃん」

「だな。某も大いなる父オンヴィイタイカヤンから与えられた物であれば喜んでいただくが、男色ではないので血液がありがたい」

良かった。カッコつけた手前、血液以外の奴を選ばれたら非常に困った。なのでオシユトルの選択は非常に助かった。

つと、何時までも待たせられないので、宝物庫からコップとナイフを取り出す。魔力でナイフを強化してから腕を切って血液をコップの中へと注ぎ込んでいく。

「さあ、飲んでくれ」

「本当に回復するのか？」

「それは間違いない。こちらに來た時に飲ませてもらったが、確かに傷は治った」

「なら大丈夫か」

「うむ」

オシユトルが血液を飲んでいく。すると顔色が良くなっていくのがわかる。ルサルカに言われた通り、これで大丈夫だろう。

「あの、大丈夫なのですか？」

「ん？ ああ、どうせすぐに治る。ほら」

心配してきたネコネに見せると、すぐに傷が再生して綺麗に元に戻る。本来、自分の魔力でコーティングしないとを傷をつけることはできない。

「ちなみに物凄く値段が高いわよ。その薬」

「い、いくらなのです？」

「値段で換算するとヤマトの帝が数年に一回飲めるかどうかじゃないかな？」

「ひっ!? と、とんでもない値段なのです！」

ヤマトは大陸にある大国でそこを支配する旧人類である帝。彼はその技術力と残った施設でかなりの力と資金を有している。それこそ数百年単位で延命できたり、ユーリと同じく培養槽で身体を作ったり、新たな亜人を生み出したりできる。いや、そう考えるとそこまでじゃないか。まあ、万能薬に変わりはない。

「その分、期待しているって事だ。特にハクは神殺しをなしてその力を篡奪までしているからな」

「いや、アレは特殊だから……」

「まあ、これで移動できるよな？」

「大丈夫よ」

「よし、それなら移動しよう」

オシユトルをハクが抱え、ネコネが支えて俺達の先導で進んでいく。移動した先でコテージやテントなどを取り出して新しいキャンプ地を作成する。作り終えればそこでオシユトル達を休ませていく。もつとも、儀式をするので悠長に休んではいられないだろう。



コテージの前に宝物庫から出したテーブルや椅子を配置し、皆が座って目の前にあるご馳走に目を輝かせている。ネコネ達の前にも大量の食事が用意されていて彼等も例外ではない。ハジメ達や嫁達の前にもちゃんと料理が用意されていて、とても美味しそうだ。

ただ、アルテナを含む十人の森人族とカムを含むハウリア族。幼い子供は少し離れた場所で並んでその時を待っている。森人族は覚悟を決めている意思の強い瞳をしているが、ハウリア族は身体を震わせているようだ。

「今回、新しく入った三人を紹介する。まずオシユトル。彼は回復するまでは作る国の内部について色々と手伝ってもらおう。治療が終われば將軍としても活躍してもらおう予定だし、俺達が居ない時のトップだと思ってくれ」

「オシユトルと申す。若輩者であるが、よろしくお願いいたす。過大な期待を頂いておりますが、誠心誠意力を尽くさせて頂く所存。どうか、皆の力を貸して欲しい」

俺の言葉にオシユトル達も驚いているが、何より驚いているのはアルテナ達だ。まあ、彼女達からしたらまったく知らない人物が自分達の上になるし、負傷しているのだから仕方がないだろう。

「次はハク。彼には戦場で総大将として活動してもらおう。彼の指揮に従って動くように」

「自分はハクだ。よろしく頼む。皆が不安に思う気持ちは理解できる。この世界での経験はないが、別の世界でそれなりに戦ってきたので任せて欲しい」

ハクは仮面アケルカをつけたままで、オシユトルは外している。むしろ、勝手に使われたら困るので預かっているが、ハクの方は外れないのでそのままだ。それとハクも流石にここでサボるような事はせずになやんとオシユトルの影武者として働いていた時と同じようにしている。

「彼は実際に彼の世界で仲間と共に神を倒し、その力を手に入れた先達だ。神の力自体は持ってこれていないが、それでも戦乱を生き抜いて勝利に導いた立役者だ。我等以外、全てが敵である可能性が高い現

状、彼の力は役に立つ。だから、どうか従うように」

ハクはコツソリと嫌そうな視線を送ってくるが、知った事ではない。報酬は約束しているし、新しい嫁でも作って支えてもらうがいい。あの双子とクオンを召喚したらもれなく譲渡するが。

「さて、最後にネコネだ」

「ネコネなのです。兄様達と違ってたいした事はできないのですが、治癒の法術と知識は豊富に……あ、この世界では役に立たないかもしれないですが、頑張るのです」

ハウリア族からはないが、森人族の方からネコネ達に対する感情は悪い。アルテナも顔には出していないが不満はあるだろう。そのため、他の森人族から睨まれている。

「彼女はオシユトルとハクの妹だ。それとネコネも俺の嫁だ」

「ふえっ!?!」

ネコネの肩を掴んで引き寄せ、宣言するとネコネはかなり驚いてこちらを見て騒ごうとするが、その前にお腹に顔をあてて声を出せなくする。

「つまり、ハクとオシユトルは俺の親族となるので、指揮官としては何も問題はない。後々、お前達も能力を示せば重要な役職を与えていく。今はまだ、お前達の力を把握できていないから、取り立ててはいない。まあ、森人族は薬学の知識があるから、それで役立つであろう予定だ。それと互いに足の引っ張り合いはご法度だ。発見次第、罰としてルサルカの拷問を味わってもらおう。互いに仲良く高めあうように」

アルテナの方は頷いた後、他の森人族を説得してくれる。彼女はネコネと同じ立場になるので、森人族としても対面は保たれるので説得は容易いだろう。

「ネコネもいいな?」

「……わかったのです。兄様達への権威付けなのでですね」

「そうだ。それが一番手っ取り早いからな。ただ、ネコネは嫌だろうから実際にはそれらしい事はふりだけでいい」

「は、はいです」

ネコネを二人の下へと戻すと、ハクはなんとも言えない表情をしていた。オシユトルもちやんと理由を理解しているので、怒りはしない。先程のネコネとした話も聞こえていたはずだしな。本当に俺からネコネに手を出す事はない。撫でたり耳や尻尾を触らせては欲しいが、怖いお兄さんが二人も居るから無理だ。

「紹介は終わり……いや、もう一つあったな。ここに結糸がある。ネコネ」

結糸はうたわれるものロストフラグで使われる召喚アイテムだ。先のガチャで出たのでネコネに引かせてみる。今の恰好からして彼女がでてくる可能性が高い。いや、聖杯を使っても引き寄せる。

「え、え？」

ネコネの指に結び付けてから、俺は精神を統一して形成を行う。両手を空中で向かい合わせ、中心に空間を作って強烈にイメージする。頭の中で美遊も抱きしめるようなイメージを行う。

『私をしっかりと思いだしてください』

美遊と一緒に美遊の本質となっている聖杯を具現化するイメージを行う。

『Y e t z i r a h』
形 成

両の掌の間に膨大な力が籠った黄金の杯が現れる。そこには膨大な魔力が、力が渦を巻いて存在している。まるで一つの宇宙のような混沌とした感じだ。問題はなさそうなので、手首をナイフで切って血液を聖杯へと注いでいく。これで準備が整ったので、聖杯を掴んでくるくと揺らして中身を混ぜる。

「さて、この中に糸を垂らしてくれ」

「は、はいです……」

糸が聖杯に飲み込まれていき、ビクンツとネコネの指が引つ張られた。なのでネコネの手を掴んで引き抜く。すると、そこにはネコネとまったく同じ服装に姿をした少女が立っていた。よくよく見れば胸の部分だけ少し違うか。

「私はリムリ。クナシコルの皇をしています。此度はネコネを助けるため、召喚に応じました。クナシコルでは世話になりましたので、ご

恩をかえさせていただきます」

「イヌイさん……」

亡國の双姫で出て来たイベント限定キャラクター。イヌイ。その正体はクナシコルの皇を継承した少女。彼女の皇継承を阻み、自らが皇になろうとした者によって暗殺者を差し向けられていた。そこで依頼によってクナシコルへとネコネ達を呼び寄せ、リムリと似ていて変装するとほぼ同じ姿のネコネに継承の儀式が終わるまで影武者を依頼した。暗殺者を引き寄せる囷などネコネがしている間に暗殺者を送り込んできた相手の証拠を掴むと同時に他の諸侯を説得して襲ってきた連中をネコネ達と共に排除した。二人は本当に双子みたいでイベント名、亡國の双姫と呼ぶにふさわしい。

「彼女達は互いにオシュトルとハクを手伝ってもらおう。呼び方はそれぞれに任せる。では、そろそろ、お前達にとってのメインイベントを始めよう。ネコネとリムリはオシュトル達と一緒に食事をしたり、見学したりしておいてくれ」

「了解した」

「あいよ」

「いいのでしょうか……」

「かしこまりました」

あちらはユーリ達に任せればいい。こちらはこちらで解決する事が沢山ある。

「さて、諸君。君達は命知らずにも全員が志願しているようだが、苦しみもがいて死ぬ可能性があることと、力を得られない可能性があることを忘れてはならない。それでも仲間や同胞を守る力を求めるのなら、俺達を作る国の騎士として迎え入れよう。今ならば引き返せるがどうする？」

「私は主様達と共に進みます。その為に力が必要だと言われるのなら、手に入れます」

「我等は姫様と共に歩ませていただきます」

「はい。覚悟は既にできております」

アルテナを筆頭に森人族は全員、しっかりと死ぬ覚悟までしてい

る。一応、アルテナは必要ないと伝えてはいるのだが、やはり長の娘としても引くわけにはいかぬのだろう。

「カム、幼い子供まで居るようだが、いいのか？」

「皆で話し合って決めました。俺達はシアと同じ存在になりたい。アイツを寂しくさせないためにも……」

「「お願いします！」」

「皆さん……」

既にシアが何度も止めようとはしたのだろうし、俺から言う事はない。ただし、振るいは賭けさせてもらう。

「ルサルカ、頼む」

「まかせて、だくりん♪」

楽しそうにそう言ったルサルカが取り出したのは首と手が同時に拘束できる枷や両足を拘束できる枷とギロチンを台ごとだ。そして最後に口を開いたまま固定する口枷だ。これらを見て、全員が顔を青ざめさせる。

「今からやることは確実に暴れる。故に安全の為に拘束させてもらう。また、暴走して魔物モンスターに飲み込まれた場合、責任もって殺させてもらうので、同胞を傷付ける事はない」

「ハウリア族と森人族でそれぞれ二人ずつ順番を自分達で決めておきなさい」

ルサルカが指示をしてくれている間にこちらも準備を整える。

「準備できたみたいだし、やっちゃって」

「そうだな」

「よろしくお願いします、主様」

「ああ」

一番はアルテナとカムのようで、二人の身体がルサルカによってギロチンの台に拘束されていく。一応、ギロチンの刃は無くなってるので、多少の配慮はされている。だが、幼い女の子が枷を嵌められて仰向けにギロチンの台で寝かせられる姿はかなりやばい。しかも隣はうさ耳のおっさんだ。

「じゃ、口枷を嵌めるからね。大丈夫。苦しいのは少しの間だけだか

ら」

「は、はい」

「では始める」

宝物庫から取り出したのは色々な魔物モンスターの肉を圧縮して作りあげたミートボール色んな魔物モンスターの肉を混ぜてあらびきにし、捏ね合わせたもの。これを腸に詰めて特殊な魔術で作った液体でゆでるとソーセージになる。それを細かく切って聖杯に投入。俺の血液と一緒に絡ませたら、仰向けで口枷によって強制的に開けられている口に注目する。

アルテナは口から赤い小さな舌をだし、そこから唾液が滴り落ちてくる。とてもはしたない姿で森人族のお姫様がしていい恰好ではない。そもそも若い少女を拘束している時点でアウトだ。理由を良く分かっていないネコネ達からの視線が痛い。

そんなわけで手早くしようと思ったが、アルテナが身体を震わせてながら必死に何かを伝えてきたので、口枷を外して聞いてみる。

「どうした？ 止めるか？」

「い、いえ、あの……こ、怖いので手を握っていて、ください……」

「わかった」

ついでなのでアルテナのすぐそばで正座し、彼女の口に口枷を戻してから頭を膝の上に乗せる。それから彼女の手を片手で握りながら、アルテナの口の上から注ぎこんでいく。

アルテナなら、唇につけてもいいのだが、美遊が嫌そうな表情をしたので止めておく。聖杯は美遊そのものだから、同じ女性のアルテナとはいえキスするのは嫌だろう。いや、女性同士だから尚更嫌なのか。他の子も抱き合いながらも互いにキスをしたりはしないし。まあ、よくよく考えたらそうだよな。レズやホモじゃないんだし。

「んくっ……ぐっ、あっ……がはっ!! あっ、あぎいつ! いつ、いだっ、ひぎっ!？」

アルテナが身体を暴れだす。身体はしっかりと拘束されているし、足の方はルサルカが拘束具に乗って動かないようにしている。お腹も鉄製のもので固定され、ボルトが嵌められているので微かにしか動

かせない。それもクッションがそこかしこに施されている拘束具なので、拘束具から与えられる痛みはましだろう。

顔を見ると瞳を見開き、涙を流しながら絶叫を上げていくアルテナの身体は所々が異常に膨らんだり、血管が浮かび上がって破裂したりする。盛大に血飛沫ちしぶきが放たれ、俺の顔やギロチン、周りに居た者達に付着していく。だが、即座に身体が修復されていくので死ぬことはない。一応、血は追加しておく。

「~~~~~!」

身体を何度も痙攣させて仰け反らせながら、声にならない悲鳴や様々な液体を巻き散らかしていくアルテナ。しばらく続くと、だんだんと髪の毛がハジメと同じように白くなっていき、身体の膨張も元に戻っていく。同時にアルテナの口からも痛み以外のものが混じり出している。

「ひっ、ぎゅっ! あっ、ああっ、んあっ」

頬を上気させて苦痛の悲鳴と気持ち良さそうな喘ぎ声を上げていく。防衛本能か何かわからないが、開けてはいけない扉を開いている気がする。

次第に仰け反りがなくなり、痙攣も無くなった。肌は綺麗な白色になり、生まれた直後のような感じだ。目を閉じているアルテナを見詰めていると、彼女の瞼が開いていき、視線がこちらを見詰めてくる。視線が混じり合うと、アルテナの身体からただの亜人にはない魔力の光が溢れ出してくる。その光を受けた植物は急速に成長し、そしてすぐに枯れおちた。

「あ、あるじ、さま……」

「よくやった。アルテナは見事に乗り越えた」

優しく頭を撫でてやると、嬉しそうに微笑んですぐに気を失った。そんなアルテナから拘束具を取り外し、優しく抱き上げて鈴達に渡す。彼女はこれから寝ている状態で服を脱がされ、身体を綺麗に拭かれてから寝間着に着替えさせられてベッドで眠らせられる。

「アルテナは見事、試練を乗り越えて魔力とそれを扱う術を手に入れた。次はカムだ。アルテナのような小さな子がやり遂げたんだ。ま

さか、大人のお前ができないわけないよな？」

「も、もちろんです！一思いにやってくだせえ！」

「いいだろう」

カムの方に移動して、超楽しそうなルサルカ。

「ルサルカ、準備はいいか？」

「ええ、何時でもいいわよ。今度はどんな声で鳴いてくれるのかしら」
♪

「ひっ……」

手早くカムの口に魔物モンスターのミートボールと俺の血液を混ぜた物を投入する。カムも同じように悲鳴を上げていく。今度はシア達がしっかりと手を掴んで励ましていく。森人族は俺が居たから手出しをしなかっただけで、同じようにしたかっただと思う。まあ、どんどん進めて行こう。

◇

儀式が終わり、全員が無事に生きて適応できた。これで残るはレヴィが連れてくるハウリア族の連中だけだ。

「うう、兄様……怖かったです……」

ネコネがオシュトルに抱き着いているが、こればかりは仕方がない。リムリの方は冷静にこちらを観察している。

「ネコネ、大丈夫だ。彼等は同意していた。某達が巻き込まれる事はないだろう。しかし、この儀式はいつたい……」

「推測するに魔力という物を手に入れる儀式みたいだが、完全な肉體改造だな。破壊と再生を繰り返し返して無理矢理身体に適応させている……髪の色が変化したのはストレスからか？それとも……」

ハクの考えが概ね正解だ。今回の儀式は人の身体に無理矢理、魔物モンスターの力を適応させるものなのだからな。

「説明を要求した方が早いと思います。すみません、いいですか？」

「リムリの質問に答えると、これはオシユトル達にわかりやすく言う
と変身できない仮面アケルカを手に入れる儀式だ。代価が魂でないから仮面アケルカ
ほどの力は手に入らないがな」

「なるほど……確かに仮面アケルカの力が一部とはいえ、手に入るのならば納
得もできる」

「仮面アケルカの量産とか、まじかよ」

要は森を焼き払い、人を大量に殺せるヴライのような存在を弱くし
て量産しているのだ。強さをこの世界で考えるとベヒモスくらいだ
ろう。

「仮面アケルカというのは私にはわかりませんが……それが強者であることは
わかります。むしろ、ここに居る人達はほとんど強者のようですか
ら、私もその魔物モンスターなる者の力を得ることも考えないといけません」
「リムリは要らないと思うがな」

リムリはイヌイとしてうたわれるものロストフラグでユニット化
しているので、そのスキルは普通に使えるはずだ。剣士としてならそ
れなりに強い。天に代わりて成敗す攻撃時、自身に回避（1回）とダ
メージカット10%（1回）を付与と正道の護り手回避解除時、自身
と自身の後ろにいる味方にダメージカット12%（1回）付与とい
うスキルだが、これらは少し変化していても持っているはずだ。

「いえ、私では足手纏いでしよう。鍛えながら内政の方をお手伝いし
ます。これでも皇として教育は受けてきますから……」

「それでお願いしよう。まあ、リムリ達は魔物モンスターの肉を食べても力を得
られるだけだと思うが……試していないしな」

「じゃあ、あんちゃんが実験するか？」

「おい」

「わ、私がしましょうか？」

「「ネコネは止めておけ」」

とりあえず、こちらは納得してくれたのでよしとする。ハジメの方
を見ると、あちらはあちらでユエとイチヤイチャしているので放置。
シアは流石に家族の所についているから、二人つきりみたいなもの
だ。

俺も今回はアルテナの所で彼女に膝枕をしながら、ユーリ達と喋ったりまったりしながら過ごす。流石に今のアルテナ達を置いてはいけないしな。しかし、優花の時は身体の中からやったから大丈夫だったが、外からすると髪の毛が変色する。これは後で染め直したらいいのだろうか？

まあ、いいか。とりあえず、明日は休みにして身体を確かめてもらおう。次の日からオシユトルとハク、ルサルカに頼んで軍事訓練をしてもらう。それが終われば銃器の訓練だな。

◇

「どうする？ 明らかにやばいんじゃないか？」

「だが、ジンさんの落とし前をつけさせなくてはいけない」

「だけど、見ただろう。奴等は森を火の海にしやがった化け物を倒してやがる……とてもじゃないが俺達に勝てそうにないぞ」

「それは……」

「むしろ、今がチャンスなのです。彼等とて生物なのですから、あのよくな化け物と戦ったのなら疲弊しているはずです。それに悲鳴が何度も聞こえてきたと報告したのはそちらでしょう？」

「た、確かにそうだな」

「ならば怪我人も多数だと思われれます。今を除いて好機はありません」

「だ、だが、それで勝てるという保障は……」

「我等は姫様を無理矢理つれさり、辱めてあのような行為に及ぶ奴等を許せぬ。故に其方等が諦めようと、我等は実行する」

「『その通り』」

「……行きたい奴だけ行けばいい。俺は行く」

「レギンさん！」

「俺はレギンの兄貴についていくぜ」

「俺もだ！」

「(計画通り)では、夜襲を仕掛けましょう。今ならば行けるでしょう」



進軍する熊人族と森人族の連合は順調に進んでいた。しかし、そこには邪魔をする者が立ちふさがる。そう、ボクだ！

「ふっふっふっ、マスター達の邪魔をしようなんて良い度胸だね。このボクが相手をしてあげよう」

「お前は……」

「ボクこそがマスターの剣にして、十二勇士が一人。アストルフオ・セイバー！　ここを通りたければボクを倒していくんだね！」

「たった一人で何ができる」

「兎人族のくせに生意気な奴め」

「たっぷりと虐めてやる。お前に勝ち目なんかないんだ」

「それはどうかな。月を見上げる兎とて、理性の無い時もある。例えば、負けが確定していようが戦わなくてはいけない時はあるんだよ。そして、ボクにとっては今がその時！　マスター達が休憩している時に敵をやっつけて褒めてもらおうんだ！　だから、暴れる巨人ならぬ熊さんを取っ捕まえて、勇気凛々凱旋だ！　行つくぞー！」

「ふざけた奴め！」

二人が同時に前方から左右に別れて斬りかかってくるから、気にせず突撃！　彼等の横を通り抜けながら、剣を鞘に納めた状態で叩きつけて吹き飛ばす。相手は木に激突して動かなくなったけど、呼吸音がボクのうさ耳に聞こえるから無問題！　なんだか殺したら駄目な気がするし、良かった良かった！

「はやっ！」

「見えないっ」

「ちがうねくボクが速いんじゃない。君達がスロウりいなだけだよ」

飛び上がった木を蹴って高速で移動し、相手の背後に回って逃げようとしていた人達を一撃で伸していく。なんとなく、あつちに居たら

駄目な感じもするしね。

「くそっ、どうなつてやがる!」

「こいつ、本当に兎人族か!」

飛んでくる矢を剣で払ったり、手で掴んで捨てたりしながら相手に会わせてゆつくりと進んでいくと、風切り音が響いて人が倒れた。それに撃たれた人以外にも倒れる人がいる。不思議に思うと、その人の背中に短剣が突き刺さっている。暗闇から複数の短剣が飛んできて、彼等の背中に刺さると動けなくなったのか、倒れていく。

「な、なんだ、なにが起こってる!」

「あ、後ろ」

「なっ、何言つてやがる! そんな事に騙され……」

「眠れ」

「がはあっ!?!」

後ろからにじみ出るように現れたゆかりんが首に腕を嵌めてキュツと占め落とす。そちらに視線が集まると、また風切り音が響いて一人が倒れる。遠くから矢で射られているみたいで、その矢が頭に刺さるとその人は倒れて矢は溶けるようにして消えていく。

「んくボク一人で狩るつもりだったけれど、そうもいかないみたい」

「出ていくのが見えたから、ついてきた」

「そっか」

黒いマフラーに赤いジャケットを着たゆかりん。彼女の手には複数の短剣が指に挟まれている。狙撃はしののんだろうし、褒めてくれるかな? 褒めてくれるよね!

「殺さないようにご主人様から頼まれてる」

「そうなんだ。良かった、まだ誰も殺してないよ。じゃあ、殺さないように無力化しちゃおう」

「お願い、します」

「いくよ〜!」

「了解。殲滅開始」

ボクが前衛でゆかりんが中衛、しののんが後衛。三人もいればあつという間に倒せちゃった。ただ、ボクでも驚いたのは上から矢がふつ

てきて命中することかな。どこから射てるんだろう？ ま、細かい事はいいか。

ネコネ

儀式が終わり、私達は一つの建物に入ったのです。これはハクさん曰く、きやんぴんぐかーなる物のようですが、私達にはわかりません。オンヴァイタイカヤン 大いなる父の力で作られた物のようです。

「兄様あにさま、お身体の方はどうなのです？」

ベッドと呼ばれる柔らかい寝所に身体を横たえている兄様。その隣に立って私は兄様の身体をペタペタと触りながら確認していきます。

「ああ、身体自体は問題ない。少し怠いくらいだな」

「詳しく聞いておいたが、飲食どころか酒も問題ないらしいから大丈夫だろう。傷は塞がっているが、魂の力までは戻っていない。こればかりは今後に期待だな」

「命があるだけ……いや、ネコネやハクに再会できただけでも儲けものと考えるべきだろう」

「確かにな」

「なのです」

兄様に抱き着いて身体を擦りつけると、兄様が優しく頭を撫でてくれるのです。

「相変わらずブラコンだな」

「うるさいのです」

「ネコネって普段こんな感じなのですね」

「り、リムリ……」

「少し、新鮮です」

口元を袖で隠しながらクスクスと笑うリムリの姿に顔が勝手に赤くなっていくのです。

「リムリ殿はクナシコルの皇とお聞きしましたが……」

「こちらでは私はしがないネコネの双子の姉。リムリで結構ですお兄

様方。それかイヌイとお呼びください」

「もしもの場合を考えて姿と呼び名は分けておいた方がいいのですよ」

兄様もどうせウコンオシユトルがお忍びで民の中に潜って調査したり、視察したり、遊んだりしている変装時の名前。として活動するのです。その事を考えたらリムリとイヌイは別にした方がいいのです。

「それもそうですね。では、この姿ではリムリとお呼びください」

「かしこまりました。リムリ様」

「呼び捨てで構いませんよ」

「ですが……」

「いいじゃないか。俺はハクと呼んでくれ。リムリ、これからよろしくな」

「はい。よろしくお願いいたします。ハクお兄様」

「おおう……これはなんかくるな」

とりあえず、ムツとしたのでハクさんは小突いておくのです。

「やめろつて。とりあえず、俺達は対外的には兄弟姉妹になるんだ。

固くならないように行こうぜ」

「ハクさんにしては良い事を言うのです」

「ひでえな。もうちよつと自分は良い事を言っているはずだぞ。ネコ

ネだつて慕つて……あれほど信頼して色々としてくれたのに」

「アレはハクさんが兄様だったからです。兄様としてのハクさんは頼

りがいがあつてす、好きですが、だらけているハクさんは嫌いです」

「言われてるぞあんちゃん。しつかりとしないとな」

「兄様も例外じゃないのです。ウコンの時は余り好きではないのです」

「ぐふっ」

「ネコネに色々と迷惑をかけてたからなあ……」

クドクドと二人が一緒に居て元気だった時の話をして、如何に駄目だったのかを話していくのです。それから、姉様の事も話していくのです。リムリが楽しそうに聞いてくれるので、つつい話してしま

ました。

「思い出の話はここまでにしよう。これからの事について決めないといけない」

「そうだな」

ハクさんの雰囲気が変わり、兄様と同じ……いえ、反逆者からヤマトを取り返し、その後の神様との戦いでも勝利へと導いたオシユトルへと変わりました。

「まず、某達……ここでは自分でいいか。自分達ができる事は国を運営する統治機構の作成と守るための軍隊を組織する事。政府機関を作る事など多岐にわたるが……正直言ってこれらはどうとでもなる。面倒だが、やってやれない事はない」

「そうだな。某とハクが居ればできる事であろう。幸い、ここにはクナシコルの皇がおられる」

「確かに私は教育を受けていますので、お手伝いできます。こちらでは巫人族でしたか。彼等も幸い、私が治めている……いえ、治めていたクナシコルと同じ力ある者が上に立つ感じですから、同じ統治が可能だと思います」

確かにリムリは皇継承に異義を申し立てられ、私達も協力したのです。その時は一対一で戦って勝利した方が皇になるという儀式でした。それも勝利した場合、気持ち悪い太ったオジサン……デコポンポの親戚みたいな人と結婚する事にもなりましたね。トウカさんが勝利してくれたので、本性を現して力で解決しようとしてきましたが。

「そのシステムを入れるのです?」

「無理であろう」

「無理だな」

「ですね。大いなる父オンヴェイタイカヤンであるあの方々に勝てる者はそう居ないでしょう」

「そもそも畏れ多いのです」

我等を作ったもうた我等が父から、その地位を篡奪するなどできるはずがありません。

「まあ、オシユトルやネコネ達には考えもつかないか。だが、この世界

では平気で起こる事だろう。まず、これは理解しておくんだ。自分達が居る場所は元の世界ではない。自分達の常識があてはまらない場所だ。油断していると寝首を掻かれるぞ」

「うむ。特にネコネは帝となられる方の妻か妾となるのだ。暗殺される可能性が非常に高い」

確かにその通りなのです。帝様のようにホノカ様お一人ではなく、複数の方を娶っておられるので、内部での権力闘争が凄く心配なのです。

「そもそもネコネは嫌じゃないか？ 嫌なら断る事もできるぞ。どうせあちらも言っていたようにオシユトルへの権威付けの一貫だからな」

「いえ、別に嫌ではないのです。兄様を取り立てられて貴族になった時から、政略結婚をする可能性も考えていたのです。流石に生理的に無理なのは嫌なのですが、我慢はできるのです」

兄様は否定されていましたが、兄様の地位を確固たる物にするために私が何処かの貴族に嫁入りするのが一番手堅く、利益のある方法だったのです。そうすれば後ろ盾を得た兄様が色々と妨害を受ける頻度も下がったはずなのです。

でも、兄様は私の事を思って政略結婚をなさらなかったのです。それなのに私は兄様の邪魔ばかりして、兄様を殺す原因まで作ってしまった上にハクさんの人生を全て狂わせた最低最悪な奴なのです。だから、本当に兄様とハクさんの役に立てて大いなる父オンヴィタイカヤンの妾になれるのならむしろ、光栄な事なのです。

「その点、大いなる父オンヴィタイカヤンであられるあの御方なら全然問題ないのですが、むしろ私で本当にいいのか……」

胸を触りますが、本当にぺったんこなのです。悲しくて涙が出そうなのですよ。

「ネコネは可愛いので問題ありません。と、言いたいのですが……これ、自画自賛になってしまいますね」

「確かにそっくりだしな。ネコネもリムリのようにお淑やかであればいいのだが……」

「ハクさん？ それは……」

「ネコネ」

「は、はいなのです。リムリはオシトヤカナオンナノコです……」

刀を持って切ったはったをする女の子じゃないのです。イヌイという人とは別人なのですよ。

「まあ、それはよい。ネコネには辛い思いをして欲しくはないのだが、納得しているのならやって欲しい。看過できない重要な問題がある。そうだな、ハク」

「ああ、そうだ。問題は自分達の召喚者、真名とその妻達、特に警戒しないといけないのはルサルカ・シュヴェーゲリンだろう」

「であろうな。今の所は問題ないようだが、あの狂気と嗜虐心に満ちた表情からして奴は心の底から悲鳴を楽しんでいた」

「うう……」

今、思いだしただけでも恐怖が湧き上がってくるのです。

「アレは百人や数百人では足りないほど殺しているであろう。そんな人物が帝の傍に居るといふのは非常にまずい。話を聞いた限りでは軍にも関わりができるであろうしな」

「なるほど、お二人が警戒しているのはルサルカ・シュヴェーゲリンが無辜の民に牙をむかないかですね」

「それもあるが、一番に恐ろしいのは帝が感化されて無駄な虐殺を行う事だ。そのような事が起きれば、我等が何としてでも止めなくてはいけない」

ハクさんと兄様の言葉で私の役割がわかってきたのです。ようは同じ妻という土俵に立って、悪逆非道な事をしないように調整するという事なのです。それには少なくとも寵愛を受ける必要はあるのです。

「自分達に知らされていない情報も必ずある。そういうのは寝物語として聞き出せることも多いだろうが……」

「それは危険だ。あちらから教えていただくまでは気にせず行動しておけばいい」

「うが〜！ 私にできるとは思えないのです！」

頭を掻きむしりながら想像したえつちい事を頭から追い出すので。どう考えてもこんな貧相な身体と私のような性格の人を好むとは思えないのですよ。

「ネコネ、それでは今度は私が身代わりになりましたでしょうか？」

「それは駄目なのです。私達の事は全てバレていると思うので、この胸で気付かれるのですよ。この胸で！」

「ん、痛いですネコネ。揉まないでください」

「この脂肪が！ ふしゃー！」

ぐにぐにと胸を揉んでやると、リムリが慌てて私を抱き寄せてきたので大人しくしてやるのです。本当に羨ましいです。

「ネコネ、再度聞くが本当にいいのか？ ハクが言う通り、この世界は某達が住んでいた世界でもない。また母上だって居ない。それこそ、我等には縛られるものなどないのだ」

「もう決めたのです。それよりも、兄様は何故召喚に答えたのですか？」

「この世界で無辜の民が苦しめられているから、と答えればいいのだろうが、某が心配だったのはネコネの事だ。召喚される時、オンヴィタイカヤン大いなる父はネコネの事を口にしていた。だからこそ、某は反射的に召喚に応じた」

「兄様……」

「まさか、ヴライまで現れるとは予想だにもしなかったが……」

「聞いた限りでは運が悪かったって事だろう。というか、自分の心配はなしか」

「ハクなら問題なくやり遂げてくれると思っていただけからな。実際、やり遂げてくれただろうか？」

「ああ、本当に大変だった。お前が死んだせいで、ネコネが……」

「わく！ わく！ 止めるのです！ それ以上言ったら許さないのですよー！」

あの時の事を兄様に知られるなんて絶対に嫌なのです。

「よし、決めました」

「リムリ？」

「私もネコネと一緒に妻か妾、最悪でも愛人にしてもらいましよう。そうすればネコネのサポートができますし、二人で対抗すれば勝てないまでも負けないように戦えるでしょう」

「良いのか？ クナシコルの皇たるものがそのような……」

「問題ありません。何れは子をなさなければならなかったのです。クナシコルは強い者が率いることとなつていきますので、強い方の子……ましてや大いなる父オンウイタイカヤンの子が授かれるとなると願つてもないことなのです」

「だが……」

「それに悪い事でもありません。相手は妻が沢山いるのですから、私達が負う負担も相応に減ります。私達は身体が小さいので負担は大きいでしょうが、双子のような見た目を活かせば二人同時に基本とすれば更に負担が少なくなります」

「いいじゃないか。本人がこう言ってるんだし、確かに武器にはなるだろうからな。それに軛は多い方がいい。そんな予感がする」

ハクさんは神様まで上り詰めた人なので、その予感というのは起る未来の事かもしれない。それに私達も納得しているのですし、オンウイタイカヤン大いなる父からの勅令です。兄様が何を言っても覆る事はないのです。

それになにより、兄様のために畏れ多いですが血液を提供してもらう必要があるのです。代価を私自身で支払っていると思えばどうとうことはないのです。これも私への罰なのです。だから、本当はリムリも巻き込みたくはないのですが……

「すまぬな」

「まあ、考えようによっちゃ、玉の輿だしな。遊んで暮らせるぞ」

「ハクさんみたいに自堕落にはならないのですよ」

「でも、それはそれで楽しそうですよ？」

「リムリ……駄目なのです。ハクさんみたいなダメ人間になつてしまうのです」

「俺はダメ人間か」

「わかった。とりあえずは二人の情報を待ちながら、国を作る準備を

「整えよう。それではネコネとリムリど……リムリはもう行くといい
「え？」

「あくそうだな」

「今日は私一人だけで行ってきます。オシユトルお兄様とネコネは一
緒に居たいでしょうから」

なるほど。確かに心配だったので兄様と一緒に寝るつもりだった
のですが、妻という扱いをされたのですから、兄弟姉妹とはいえ一緒
に寝るのはまずいです。それに来たばかりの初夜であちらに行かな
いのも対外的に考えるとかなりまずいのです。

「わかったのです。私は行くとします。ハクさん、くれぐれも、く、
れ、ぐ、れ、も、兄様をよろしくお願いするのです」

「ああ、任せろ。今日はしっかりと話し込むつもりだからな」

「お手柔らかに頼む」

「さて、ここからは男同士の話だ。二人は行った行った」

「はい。それでは行ってまいります。また明日。おやすみなさいませ」

「おやすみなさいです。兄様、ハクさん……また明日なのです。何処
かに行ったら嫌なのですよ」

「わかっている。おやすみ二人共」

「はい、おやすみさん」

ハクさんにきやんぴんぐかーから追い出され、鍵まで閉められまし
た。

「じゃあ、女の戦場に行くのです」

「そうですね。まずは湯浴みからしにいきましょうか」

「湯浴み、あるのですか？ 普通は水浴びだと思うのですが……」

「あるそうですよ」

「……それは楽しみなのです」

それから、リムリが差し出してくる手を繋いで二人で進んでいきま
す。軽い口調で話してはいますが、握った手からは震えや緊張が伝
わってきます。それでも、これからの事を思うといくしかないので
す。

そう思っていたのに肩透かしをくらったのです。今日はアルテナさんの様子を見ないといけなから、何もせずに普通に寝るだけらしいのです。よくよく考えたら、今は移動中で何時襲われてもおかしくない場所に居るのでした。

野営場所が余りにもしつかりとしていたので忘れてしまっていたのです。ただ、耳と尻尾は二人していっぱい優しく触られました。肝心のルサルカ・シユヴェーゲリンについては居ないようでした。どうやら、オンヴァイタイカヤン大いなる父の中で火照った身体を冷ますために眠っているとのことだったので。

第52話

ネコネとリムリが訪ねてきたのは驚いたが、聞いた感じでは二人共、形だけの関係ではなく、ちゃんとした肉体関係も含めた妻か妻になつてくれるらしい。嫌ではないかと聞いたら、嫌ではないと答えられたので受け入れようと思う。そもそも肉体関係を許しただけであつてまだまだ心の距離はある。そちらを埋める努力はこれからするべきだろう。

もつとも、今日はオシユトル達と過ごすべきだと思つたので一度は追いつ返そうとも思つたが、聞いたなら二人に追いつかれたようなのでそのまま一緒に寝ることにした。

どうせベッドは広い。全部で三十畳ある内の二十畳ぐらいの場所を全てをベッドにして柵をつけてある。柵の手前には出入口を除いて枕が置いてあり、所々に抱き枕用のぬいぐるみや通常サイズの布団とかが置かれているような感じなので大人数でも普通に寝れる。

残りは靴を脱ぐ場所と風呂場とトイレ、キッチンに通じる扉、それにクローゼットや棚などが置かれている。この柵には本などそれぞれが好きなのを置いてるが、今はどうでもいいな。

そんな部屋でネコネとリムリの耳や尻尾を堪能してから、一部のメンバーを除いて一緒に眠ってもらった。俺も寝るふりはしたが、しっかりと起きている。というのも――

『計画通りに進行していますね』

『アストルフオさんが先行した事は予想外でしたが、殺傷を禁止しなくても殺さないようにしてくれたのは助かりました』

――森人族と熊人族の襲撃があるからだ。その為に隠密行動に優れている暗殺者の優花と狙撃手の詩乃に頼んでおいた。彼女達なら殺さずに無力化する事はできる。詩乃はデバイスを使った魔法なので気絶させられ、優花は毒を使って痺れさせて無効化する。アストル

フオの事が予想外だったが、持ち前の勘でしつかりと対応してくれたようだ。

こちらが俺が起きている理由の一つだ。もちろん、アルテナや他の者達もサーチャーを使って監視し、彼等のバイタル情報を常にチェックしている。容態が急変したらすぐさま治療を行う体制は整えている。

『輸送を開始するよう通達してくれ』

『わかりました。ユーリ、私が伝えるのでサーチャーをよろしくお願いします』

『はい。任せてください』

美遊とユーリが手伝ってくれているので、かなり楽だ。ルサルカの方は火照った身体を収めるために眠らせているので起きていない。ルサルカが起きていたら平気で熊人族を拷問するだろうからな。それにキャパシティーの事もあるので休眠状態で念の為に待機してもらった。その分のリソースは詩乃とアストルフオに渡しておいた。これだけの人数を維持して戦闘を行わせるには今の俺が持つ魔力でも足りない。早く拠点を作ってそこに魔導炉を設置し、オシユトル達を配置しないと戦闘どころの話ではなくなる。

「さて、俺も向かうか。ハジメ達にも一応は伝えてくれ。こちらで対処するから大丈夫とも告げてな」

『はい』

寝ている鈴、恵里、ネコネ、リムリ達を見てから、彼女達を起こさないようにこっそりと同じく寝ているアルテナを抱き上げて抜け出す。リムリはともかく、ネコネはヴライに襲われて心が参っているだろうからこのまま寝かせてやる。アルテナは起こさなくてはいけないかもしれないが、今はこのまま寝させておく。



コテージの前で迎え入れる準備を行う。まず、夜なので篝火をつけてコテージの前に作った広場を照らす。この篝火はハジメの錬成で作っている。

篝火の灯りで周りの土が盛り上がり、壁が作られている事もしつかりと理解できる。椅子を用意してそちらにアルテナを寝転ばせておく。

「うくん、いまいちだな」

「よう、何が今一なんだ？」

声に戻るとオシユトルとハクが居た。それもそれぞれ酒瓶を持っているし、酒臭い。

「身体は大丈夫だが、飲酒は余りしないようにしろよ」

「今日だけだつて」

「たぶんだけどな。それで、何があつた？」

直に雰囲気が変わったので、こちらの事情を教えると二人が頷いて手伝ってくれる。三人でああでもこうでもないと言っていると、ハジメまでやってきた。

「ユエやシアと寝ていたらいいぞ？」

「すでに二人は寝たからな。それに面白い事をしているじゃねえか。俺も混ぜろ」

「まあいいか。じゃあ四人で遊ぶぞ」

「んくここにガウンジを配置したらどうだ？」

「いいな、それ」

椅子の後ろに先程手に入れたガウンジガウンジ。3メートルはある巨大な角の生えたアルマジロや地竜のような生物。獰猛で凶悪な存在で人を軽く丸呑みにだってできる。その鱗は剣や槍などを弾き、強靱な皮に守られているので生半可な攻撃ではダメージを与える事はできない。達人ならば関節などの弱点を攻撃すればダメージを与えることは可能。法术などで攻撃すべき相手。ベヒモスみたいな存在ともいえる。を配置。相手からしたらそいつが控えているのとても怖いだろう。いつそヒュドラも置いてみるか？

「……なあ、思ったんだが……左右にグスタフとドーラ置いとけばい

いんじゃないか？ この世界の連中なら何かわからんだろうし、化け物にしか見えないだろう」

「ナイスだハジメ」

ガウンジを中心に置いて、左右に80cm列車砲のグスタフとドローラを配置する。グスタフとドローラは全長・47.3m、全幅7.1m、全高11.6mもある巨大な兵器だ。ブラフとして見せるには十分な存在だろう。

「こいつはとんでもないな……」

「また古いもんを出してきたな……」

「ハクからしたらそうだろうな。まあ、俺達の時代でもそうだが」

「だが、ロマンだろう？」

「ああ、ロマンだ」

「まったくだ」

「あんちゃん達が何を言っているのかはわからないが、どことなく惹かれるものはある」

しっかりとライトアップまでして待っていると、美遊から知らせが来たので椅子に座り、アルテナを膝の上に乗せて待つ。ハジメは裏方に回り、ハクとオシュトルはそれぞれ俺の横につく。魔力を解放しながら待っていると、アストルフオ、詩乃、優花に挟まれて縄で縛られた森人族と熊人族が連れてこられ、ガウンジとドローラ、グスタフを見て呆然としている。

そんな彼等を見無視してアストルフオがこちらに駆け寄ってくる。そして俺の目の前で停止した。アルテナを抱いていなければすぐに抱き着いてきたのだろうか。

「マスター！ 褒めて褒めて！ 襲ってきた人達を殺さずに倒したよ！」

「ああ、ありがとう。よくやった、アストルフオ」
「ん！」

頭を突き出してくるので撫でてやると、嬉しそうにした後、ご褒美を強請ってくる。

「ボクにご褒美を頂戴！」

「何が欲しいんだ？」

「えつとね、バイク！」

「わかった。後でアストルフオに予備のフェンリルをやろう」

「やったね！ マスター大好き！」

「はいはい」

他の皆は少し呆れているが、すぐに俺の後ろに回って後ろから抱き着いてくる。かと思っただが、ハクの隣に並んで軽く挨拶をしたので、こちらの意図は伝わっていると判断していいだろう。

「その者達はこちらで引き取ろう。其方たちは好きにするといい」

「了解。警備に戻る」

「うん。まだ来るかもしれないから警戒している」

詩乃と優花の二人はハクに森人族と熊人族を引き渡すと、森の中に消えていく。ただ、気配は感じているので少し離れた場所に居る事はわかる。そちらをサーチャーで確認すると、詩乃は木の上に登ってヘカートを構え、優花は詩乃が居る木の下で背中を預けて目を瞑っていた。時折開いてはこちらと視線が合うのでサーチャーには気付いているみたいだ。

二人を確認している間にハクが森人族と熊人族を並ばせて正座させて座らせていく。改めて姿を確認するが、彼等は両手を後ろで結ばれ、足も縛られてあまり動けないようにされているのが見てわかる。「さて——」

声を発すると、ドーラなどを見て驚愕していた森人族と熊人族の二種族はビクツと身体を震わせる。それを見る限り、森人族の一部には話に通っていないようだ。どんなロールプレイで行くか悩むが、やはりアレだな。魔力を解放して重圧を感じるようにしながら、演技を行う。

「卿等は我等とフェアベルゲンの協定を無視し、襲撃してきた。これはフェアベルゲンの総意か？」

「ち、違うっ！ これは俺の一存だ！」

熊人族の男が声を上げて否定する。当然、総意だと答えればそれはフェアベルゲンの壊滅を意味するのだから当然だろう。

「熊人族は卿等の一存か。して、森人族の卿等はどうか？」

「我等もそうだ。全ては姫様を連れていった貴様等を許せなかっただけだ！ 姫様に会わせろ！」

「二」そうだそうだ！」

「ふむ。アルテナか。アルテナならここに居るではないか」

見せないように抱いていたアルテナの顎を片手でクイツと持ち上げて眠っている姿を見せる。髪の毛が変色しているので、森人族はわからなかったようだ。

「きつ、貴様っ！ 姫様に何をした！」

「何、少し実験を手伝ってもらったまでだ。それに卿等にとやかく言われる言われはない。アルテナは我に譲渡された者だ。例え我が玩具として扱おうが何の問題もあるまい」

「ふぎけるなっ！」

「ふぎけてなどいない。それに卿等はアルテナを助けに来たようだが、卿等の浅慮によってアルテナの立場がさらに悪くなったのは事実だ」

「くっ……」

「そうだな。足の腱を切り、ペットとして飼ってみるのも一興かもしれないぞ」

「ま、待ってくれ。頼む、我等はどうなってもいい。姫様には手を出さないでくれ」

森人族は頭を地面につけて必死に懇願してくる。それを見て熊人族は驚いている。オシユトルやハクは俺をじっと見詰めてきているが、まだだ。

「まあ、卿等のその心意気に免じて卿等の家族と共に奴隷のように働く事でアルテナの件は水に流してやろう」

「お、お待ちください！ 家族にまで類を及ぶのは契約に反します！」
「先に破ったのは卿等だが、確かにその通りだ。だが、責任は個人のみに及ぶ。それは何もフェアベルゲン側だけが享受できる条件ではない。我等もまた同様の権利を有する」

「ま、待て、それは……」

熊人族はいち早く気付いたようで、顔色を悪くしている。

「卿等は十六人か。では、ガウンジを十六体ほど送り込むのもいいかもしれない」

そう言いながら、頭を下げてきたガウンジを撫でる。

「こ、こんなのが十六体もっ！」

「ふえ、フェアベルゲンの終わりだ！」

「卿等が招いた事だ。だが、我等も鬼ではない。こちらの提示した条件を飲むのであれば、我等も無茶を通したのだから、許そう」

「そ、その条件が先の家族ですか？」

「森人族はそうだ。アルテナの事もあるから、この程度で許してやろう。ただし、熊人族は問題だ。ジンと言ったか、身の程知らずの愚か者は一度ならず二度も我に不敬を働いた。故に罰を与えたが、貴様等で三度目だ」

「そ、それは……」

熊人族からしたらたまったものではないだろうが、こればかりは事実だ。話し合いをしている相手の連れを殺そうと殴ったんだから、それ相応の罰は当然だ。それにこいつらは俺達を殺しにきた。俺だけならば多少は許しても構わないが、嫁達にまで手を出そうとしたのだから許さん。

「お、俺達は森人族にそそのかされて……」

「やめろ。これは俺達の責任だ」

「そうだ。我等森人族は我等だけで襲撃するとも言ったはずだ。自らの責任をなすり付けるな」

「静まれ。御前であるぞ」

オシユトルの声に言い争っていた森人族と熊人族はすぐに押し黙る。

「さて……」

「んん……あ、るじ……さま……」

「起きたか。早速だが、彼等を見ろ」

アルテナが薄っすらと目を開けて周りを見ていくと、捕らえられている森人族を見て顔色を悪くしてすぐに俺に謝ってくる。

「主様。この度は我が同胞が何かしでかしてしまつたようでまことに申し訳ございません……つきましては自害してお詫び申し上げます。どうか、私の命だけでお許しいただけますよう、せつにお願い申し上げます」

「個人的に少し罰を与えるが、腹を切る必要はない。これから森人族を纏めて我に仕えればよい」

「あ、ありがとうございます。主様のご慈悲に感謝いたします」

アルテナが自分の首を両手で絞めようとしたので、綺麗な喉には彼女の手の跡がある。アルテナは聞いていたと思つたが、気が動転しているのかもしれない。とりあえず、喉を撫でておく。

「熊人族の罰は……そうだな。どうして欲しい？」

「俺の命でどうか収め、皆を返して欲しい」

「不可能だ。価値が釣り合つておらぬ。故に……ああ、森人族を除き、卿等を無事に帰してやろう」

「本当か！」

「うむ。ただし、大樹を含めたその辺り一帯の土地は我等が貰う。我等は大樹に攻略する時のために簡易的な拠点を作成するつもりだったが、森人族や兎人族の事を考えれば恒久的な住居は必要であろう」

「そ、それは……」

「そちらはどう思う？」

「はっ。確かに必要かと存じます」

「此度の襲撃を許す代わりに土地の譲渡であれば我等も矛を収める理由になりますよう」

ハクとオシュトルがこちらの意図を察して言つてくれる。この夕イミングでハジメがドーラを動かして威嚇していく。

「では決まりだ。熊人族は帰つて長老達に伝えるといい。我等は大樹の下に新たな国を興す。卿等を許す事で義理は果たした。もし不服を申し立てるのならば力を持つてくるがいい。その時はフェアベルゲンを滅ぼし、我等がこの樹海を完全に支配する。だが、卿等も言い分はあるであろうから、こやつらの家族を連れてくる時に森人族の長老、アルフレリックに来るように伝えよ。奴以外は認めぬし、護衛は

同じ森人族だけにせよ。アルフレリックは孫娘のアルテナに会いたいであろう。以上だ。オシユトル、ハク。これでどうだ?」

「良いかと思いますが、彼等を送る時にガウンジで道を作りながら送るとなおよろしいかと」

「ふむ。オシユトルの意見はわかった。ハクはどうだ?」

「こちら問題ありません。ガウンジはその巨体故に木々を粉碎して道を作る事になりますが、それはこちらにとっても素早くフェアベルゲンに移動できるので都合がよろしいかと」

「ではそのようにしよう。アストルフオ、仕事だ」

「なにになに!」

「この者達をガウンジに乗って運んでいってくれ。念の為に優花と詩乃もつける。また、何かあれば知らせよ。そちらからの応援要請を受ければ支援砲撃を行う。この位置からフェアベルゲンを焼き払う事は容易い故、その間に撤退せよ」

「了解! まあ、必要ないと思うけどね」

アストルフオが楽しそうに笑っているが、他の連中はガタガタと震えている。実際に空砲を放たせればこちらの言葉が事実だと理解できるだろうが、昼間の戦闘もあるので問題はないだろう。

「以上を持って今回の件は終了とする。後は任せるぞ」

「はっ」

オシユトルと覚醒ハク、この二人が居れば本当に安心できる。すぐに二人が行動してハジメが作っていてくれた檻付きの台車に熊人族を入れて、ガウンジに繋いでフェアベルゲンへと一直線に向かわせる。騎乗Aがあるアストルフオなら問題ないし、テイミング技能を持つ詩乃もいるので扱うのは大丈夫なはずだ。

しばらく彼等を見送り、その姿が闇に消えるまでじっと見詰めても大丈夫と判断できるまでアルテナを撫で続ける。

そして、見えなくなった時点で両手を叩き、魔法を発動して森人族達の拘束を解除する。

「はい、お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

「お疲れ〜」

「終わったおわった」

「本当に怖かったですよ」

俺が労うと、森人族の者達は返事をしながら後ろに倒れて身体をだらけさせる。足が痺れているから仕方がないだろう。ハク達もそれに続いた。

「演技、どうだった？ 騙せたと思うんだが……」

「40点だな」

「ん〜30？」

「威厳を魔力で出してただけだしな。まだまだだ」

「ちえ〜厳しい」

森人族の人から普通に怖かったと伝えられたので良かった。ほぼ演技ではなかったらしいし、彼等を歓迎するために改めて治療してから宴を開く。アルテナも楽しそうに皆と話していたのでよしとする。次の日、結構ダウンしていたのでネコネ達に怒られてしまったが、まあ問題ない。

それに予定通り、夕方にガウンジが戻ってきて檻の中には森人族が入れられていた。子供は不安そうにしながら両親に抱かれていたりもするが、親は怖そうにはしていない。

「首尾は？」

「計画通りだったよ。ほとんどを熊人族に押し付けられた。我等は同胞を差し出す事で矛先を逸らした。その事もあって無事に交渉役に任じられた。後は上手くやればいいだけだ」

「では、そちらはよろしくお願いいたします。お義父さん」

「うむ。心得た婿殿」

アルフレリツクさんと杯を交わしてからオシユトルとハクを紹介し、三人に色々と話し合ってもらう。政治的な事は任せてしまえばいいんだ。それよりも俺とハジメ、ユーリ達は城の設計と開発があるからな。ハクやリムリ達にも手伝ってもらおうが、和風建築の城にしようかと思う。

第53話

アルフレリックとその護衛達が運んできた森人族の者達はしつかりと受け取り、木の札ではあるが書面まで作って渡しておいた。貰った者達は対外的な理由から首輪を取り付け、その後はアルテナに任せる事にした。もちろん、魔物^{モンスター}を食べさせて戦力を強化した。子供に關しては望む者だけにしたが、彼等は親と一緒によかったみたいだ。なので望まれたようにした。

その日は二日連続で寝ずにアルテナに付き合っつて森人族を見守った。子供も居るから仕方がない。ネコネはリムリと一緒に抱き合っつて寝ている姿も見れた。ユーリ達も誰かと一緒にくっついて寝ているのがほとんどだ。基本的に俺と抱きあったり、身体をくっつけて寝ているのも原因だろう。

さて、徹夜二日目。本日はもうここでやる事はないが、大樹の下へと進むのにはまだ六日ほど時間がある。そこで、本格的に計画を話し合うのも必要なのだが、その前に森人族とハウリア族を鍛えないといけない。その手段として有効なのはやはり、奈落へと叩き込む事だ。それは理解できる。

「でも、これはないー!」

ヴライと戦って焼き尽くされ、破壊された場所に作られた地面が整地されている。そこに掘るようにして作られた大きな金属製の魔法陣。その中心に設置された機械の椅子に座らされた俺は両手両足を金属製の拘束具で固定され、一切動く事ができなくされていた。

そんな俺をニヤリと笑いながら見下ろしてくる犯人のハジメを見る。うとうととしていたらこれだ。確かに言われた事に許可もしたし、ユーリ達と協力はした。

「嫌だ、嫌だ! 止めてくれハジメ!」

「却下だ。諦めろ」

「や、やはりこのようなことは……!」

「ゆ、ユーリ……」

「必要な事だ。諦めろ。絶対に逃がさん。そもそも俺達はこれからデスマーチをするのにお前だけ逃れられてたまるか」

「そうだそうだ」

そう言いながら鈴とハジメは機械のスイッチを無情にも容赦なく押しやがった。その結果、腕や足の部分から出た注射器が俺に突き刺さり、そこから血液と魔力を吸いだしてく。

「痛いんだぞっ！」

「痛覚は戻しているんだったな。まあ、諦めろ」

「鬼！ 悪魔！ 魔王！」

「はいはい」

「お兄ちゃん……」

「大丈夫だよ、ゆりゆり。まなまなならこれぐらい我慢できるよ！」

吸われていく大量の魔力が椅子の下に設置された魔法陣を発動する。椅子の下には金属で作られていて、血液の関係もあって赤く光っていく。

「膝の上にも乗って甘えてたら大丈夫だろ」

「うんうん。それで一発だね！」

「……わかりました」

ユーリが膝の上に乗ってきて、頭を優しく抱きしめてくれる。良い匂いがする上にユーリの体温や柔らかさも感じられていい。それに頭を撫でてくれるので安心できる。

「そもそもただのフリだろうしな」

「本当に痛いし、辛くてやりたくないのは事実なんだがな」

「でも平気だよな？ まなまななら我慢できるよね？」

「余裕だが、動けないのは辛い」

「それは僕達が世話をしているから平気だよ。今更だしね」

確かに奈落で旅をしていた時は下の世話までしてもらったのだから、慣れてはいるが……やはり太陽の光がある場所で俺達以外の人も居るのでとても恥ずかしいのだ。まあ、恵里や鈴達は世話したいのだろうか。

「沙条は置いておくとして……ユーリ。ゲートの準備は？」

「は、はいっ。そちらは問題ありません。起動します」

ハジメの言う通り、奈落で経験したことに比べるとこれぐらいは大したことはない。そもそもこんな事になっているのはハジメの言う通り、国作りの為にデスマーチをする準備だ。

俺からは見えないが、この椅子の背後にはゲートと呼ばれる転移装置が作成されている。ハクもゲートの知識は持っているが、そっち方面は流石に忘れていると思われるし、その手の技術はユーリ達の方が上だ。なにせ次元世界を移動していくような魔法少女達だ。そう、才能があるとはいえ転移魔法を使って異世界に転移するような少女魔法少女リリカルなのはの無印にでてるフェイト・テスタロッサが転移魔法で自宅のある時の庭園と地球を行き来している。が居る世界の出身なのだ。

「魔力量、問題ありません。オルクス大迷宮・最下層の座標入力完了。転移ゲート生成開始します」

ユーリが俺に抱きつきながら、スピリットフレアを操作して転移ゲートを動かしていく。生成されたゲートによってオルクス大迷宮の奈落、最下層にある隠れ家へとハルツィナ樹海のこの場所が繋がった。

「連中からの干渉はどうだ？」

「ありません。ただ、ハルツィナ樹海からの干渉はありますが……私とお兄ちゃんの敵ではありません」

「当たり前前だ。俺とユーリが揃っているんだから、こと召喚と同じような事で負けるかよ」

「それは良かった」

召喚士とは、彼方へと繋いで目的の存在や物を此方へと呼び出すのが本領である。つまり、空間魔法に関してはスペシャリストと言える。

そんな俺がラスボス系美少女で、多次元世界で様々な技術情報や魔法を蒐集してきたユーリと組んでいるのだから、楽に繋げる事は可能だ。

問題があるとすれば繋いでしまえば物理的にここを制圧されて、オルクス大迷宮の方まで侵略される事ぐらいだな。そのような事が可能であろうエヒト陣営は大迷宮には手出しできないみたいだから大丈夫だろう。

まあ、こちらと大迷宮側で争っているタイミングで干渉されたらどうなるかはわからないが、念の為に鈴に結界を張ってもらっているので大丈夫だとは思われる。

最悪、天使と戦う事になるだろうが、それはそれで美味しいのでよしとしよう。数体ぐらいなら対処はできると思われるしな。

「シュテル！ デイアーチエ！」

「お久しぶりです」

「そんなに時間は経っておらんが……元気そうでなによりだ」

考え事をしている間にゲートが無事に起動したようで、あちらからシュテルやデイアーチエがやってきた。二人はこちら側にやってくる。

「何をやっておるのだ、これは……」

「ふむ。魔力を吸い取っているのですか。大丈夫ですか、お兄様？」

「ああ、平気だ」

「それは良かったです」

ユーリが向きを変えて俺の膝の上に座り、シュテルとデイアーチエの二人と向き合う。俺も二人の顔を見ると、シュテルがこちらに近づいてきて頬に軽いキスをしてくる。

「はわわ……」

「何をしておる」

「挨拶ですよ。デイアーチエもどうぞ」

「戯け。何故、我が……」

「お兄様はされた方が嬉しいですよね？」

「まあな。デイアーチエが嫌ならいいが……」

「……むう……これは仕方なくだからな！」

「ああ」

デイアーチエもキスしてくれたので、よしとしよう。そうこうして

いると、ハジメが呆れた表情でこちらを見ているのに気付いた。いや、他の者達もか。

「そろそろいいか?」

「ええ、構いませんよ」

「オルクス大迷宮の方はどうなっている?」

「こちらは何の問題もない。そちらの情報は伝わってきておったから、準備も順調に進んでいる」

「それはよかった。それじゃあ、さっさと進めるか。いいよな、沙条」
「もちろんだ。まずやる事はこの地の開拓と森人族とハウリア族が戦えるようにする事だ。その為に奈落へと行ってもらうのだが……メンバーはこちらから恵里と優花、詩乃を護衛につける。もちろん、アルテナにも行ってもらおう」

「はい。頑張ります」

恵里は全体的な護衛とし、優花はハウリア族に暗殺者としての戦い方を教え、詩乃は森人族に狙撃技術を教えてもらう。

アルテナは教えてもらう側のメンバーであり、森人族を指揮してもらうことになる。ハウリア族は族長のカムが指揮する事になる。

恵里と詩乃は奈落の経験者だし、優花も居て武装も問題なければ大丈夫だろう。最悪、シユテルとディアーチエの分身やチビット達を援護につけておけばいい。

それにこれはあくまでも俺達の側から出す戦力だ。ハジメ達とは別になる。

「こちらからはユエとシアを出す」

「私は皆と一緒になので構いませんが……」

「ん。ハジメと離れるのは嫌だけど、私達から護衛を出さないのも駄目。仕方が無いから私が行く」

「ありがとうございますー!」

ハジメ達からしたら、奈落での修行はシアを鍛える事だからな。こちらのメンバーと一緒に鍛えればいい。もっとも、普通にやったとしても森人族はともかく、ハウリア族はものになるかは微妙だ。だからこそ、恵里をつけた。

「ルサルカ、恵里に伝えてあるか？」

「もちろんよ。黒田卓式訓練方法じゃなくて、ちゃんとナチスドイツ親衛隊の訓練方法を伝えておいたから大丈夫よ」

「うん、しっかりと教えてもらったし、ちゃんとメモしてるから平気。それに最初は僕が呼び出したゾンビやスケルトンを相手にさせるからね。すぐに戦いには出さないし、まずは武器の習熟訓練と集団行動の訓練方法から」

「それなら大丈夫か」

スケルトンだけでなく、ゾンビが入っている時点でお察してくださいといった感じだな。ハウリア族がしっかりと殲滅できなければ腐肉塗れになって凄く臭くなるのだろう。罰もしっかりと受ける事になるし、後は飴を用意しておけばいい。

飴か。やはり美味しい食べ物だろうな。作れそうなのは……：というか、フェアベルゲンはどうやって食料を確保しているのだろうか？

「アルテナ、フェアベルゲンは食料をどうやって確保している？」

「樹海から取っています」

「というと、果物とか狩猟か？」

「はい。主に果物や薬草ですね。後は魔物モンスターではない動物を狩れば肉が食べられます。私達は食べませんが……」

「我等、ハウリアもそうですね。肉なんて食べられません」

「肉類は高級品になりますので、熊人族や虎人族など戦闘系の種族が主に食します」

なるほど。肉食だと思っただが草食でもいけるのか。確かにハルツィナ樹海は大迷宮なのだから、基本的に動物が少なく、魔物モンスターが多いのはわかる。

むしろ、普通の動物が居る方が異常と言えるかもしれない。おそらく、制作者が意図的にしているのだろうか。

「フェアベルゲンの戦力が増えないのも当然か」

「え？」

「食料が足りないから数を増やせないんだ。数は力だからな」

「人や動物は食わずに生きていくことはできませんから……」

俺の言葉にハジメやユーリが捕捉してくれて、わかっていなかった。フェアベルゲン組も理解できたようだ。全体的に人を養える分の食料と狩猟や採取で得られる食料では安定して手に入れる事ができない。

地球でも人が爆発的に増えたのは麦や稲を生産して食料を安定的に手に入れるようになったからだ。人族は田畑を作っているのに亜人達は作っていない。この差は大きい。戦争するのにも食料が必要だ。だからこそ、食料生産のチート天職を手に入れた愛子先生は歓迎されている。

「まあ、解決策は魔物を食べるようにしたらいいだけだな」

「それが一番手堅いな」

「普通なら食べたら死にますが……私達はもう大丈夫ですからね」

「昨日、食べたが……凄く不味い」

大迷宮は魔物モンスターに関しては放っておいても作成してくれる。そういったらを食べられるのなら、狩猟も命を賭ける必要はあるがどうか可能だ。

「では、纏めると食料生産が必要ということですが、こちらは一先ず先送りしましょう。まずはこちらを見てください」

シユテルがそう言いながら、指を鳴らすとゲートから大きな振動が伝わってくる。そちらを確認すると、ブルドーザーのような大きな生物が歩いてくる。そいつは後ろに大きな貨物車を引きながら近くにやってきた。その数は六匹で、貨物車もしっかりとある。どう考えても普通じゃない。

「こんな事もあろうかと、開発用の重機を製造しておきました」

「よく用意できたな……」

「実際はベヒモスを改造しただけだ。国を作ると聞いていたから、さっさと開拓できる用意はしておいた。それと貨物車の中身は新型の大型魔導炉だ」

「新型と言っても、こちらでの話なので申し訳ございませんが、本当に新型ではありません」

「我等でも流石に設備が更新されていない状態ではこれが限度だ」
「十分だ。ありがとう」

そもそも魔導炉からしてこの世界ではオーバーテクノロジーだ。それを巨大な貨物車に搭載して動かせるようにしているのだから、二人は凄く頑張ってくれたはずだ。

「こいつは計画が早まるな」

「そうだな国土錬成が可能になるだろう」

俺達が計画しているのはハルツィナ樹海に一気に城塞都市を作り上げる事だ。その為に国土錬成陣が必要になる。

これは鋼の錬金術師というアニメから着想を得ている。国土にトンネルを掘って錬成陣、魔法陣として各基点で大量の生贄を捧げ、術者となる人柱を用意。それによって住民全てを賢者の石というエネルギーに変換し、真理を支配しようとしていた。

まあ、永劫破壊エンワイヒカイトと違って魂をそのまま使うのではなく、加工して賢者の石に変えないといけない。そう考えると永劫破壊の方が使いやすい。

もちろん、俺達は生贄を使うつもりもないし、住民を錬成するつもりもない。やる事は壁や城を錬成で作る事だけだ。だが、用意するのは変わらない。大量の魔力と術者が必要というわけだな。

俺達は魔力を俺が出し、術者としてハジメやユーリ、ディアーチエ、シユテル辺りを計画していたのだが、シユテルとディアーチエが用意してくれた魔導炉のお陰でかなり楽になる。

「よし、俺達は素材と土地の整地を行う。ハクとオシユトル、ネコネ達は城の設計を頼む」

「了解した」

「任せるのです」

霧が晴れるまでにある程度は土地を整え、オルクス大迷宮やこの辺りから資材を集めないといけない。木材は木々を切り倒せばいいし、土は採取していけばいい。鉱石はオルクス大迷宮から回収するが、周りの事を考えると資材は大量に要る。

最低でも壁は外堀と内堀は必要だ。天使はもちろん、魔族や人族

……亜人族にも攻め込まれることを考慮して作らなければいけない。

第54話

アルテナ

主様達は私達では考えつかなかった森を切り開き、資材へと変えて周りを開発するために私達では及びもつかない事をしていかれます。

その間に私達は主様に言われた通り、戦力として戦えるようにならねばいけません。その為、ゲートを通って主様達の本拠地へと移動してきました。

そこはとても綺麗な庭園で、小鳥が飛んでるのどかな楽園のような場所でした。遠くには変な建物まで見えました。

「はい、整列」

恵里さんが手を叩いて注目を集めてきたのですぐに皆を集めて、彼女の前に整列します。ハウリア族の方はシアさんとカムさんが指示して整列しました。

「七分ね。遅すぎよ。指示を出したら一分以内に集まりなさい。罰として腕立て伏せを100回。それと指揮官の立場である人は追加でお尻叩きね」

「「え」」

「ほら、さっさとやらないとどんどんお仕置きがきつくなるから。僕は鈴や真名達みたいに甘くないからね。あんまりおいたが過ぎると殺すから……覚悟しろよ」

「「ひいっ!?!」」

恵里さんから溢れ出した殺気のようなものに思わず悲鳴をあげます。身体の底から恐怖が湧き上がってきて、身体がガタガタと震えて立っていられなくなって座り込んでしまいました。その時にちよつと、漏らしてしまいました。

「ほら、さっさとしなさい。しないのなら、要らない手や足を切り落として魔物の物を取り付けてあげようか? 虫の手足とかどう?」

私達は彼女が本気なのを瞬時に理解し、腕立て伏せなるものをやる

うとしましたがやり方がわかりません。

「あの、やり方は？」

「知らないの？」

「はい……」

「それは盲点だったわね。詩乃、優花、手伝って」

「了解」

「わかった」

三人から教えてもらった腕立て伏せをした後、私とシアさん、カムさんはお尻を叩かれました。シアさんがカムさんのお尻を叩いて、シアさんと私は優花さんと詩乃さんです。

腕立て伏せをして腕がプルプルしている状態でお尻を叩かれてとても痛かったです。終わった後はお尻を撫でながら立ち上がると、また整列します。

◇

何度か時間をオーバーして身体がプルプルしますが、我慢します。これも皆のためですから頑張ります。お尻が痛くても我慢です。

「では、次の訓練はこの森を使うよ」

次に連れられていったのは広い森でした。その森の奥深くに連れていかれた私達の前には檻が置かれており、そこには白色のウサギさんがいました。ただし、そのウサギさん達はなんだか少し怖い感じがあります。

「では、これから上がった身体能力を把握してもらおうために兎狩りをしてもらうわ。範囲はこの森の中。外には出れないように僕の手駒が封鎖してるから、出れないと思う。まあ、出れたら終わりでいいよ。うん、後はなにかあったかな？」

「殺される事はないし、怪我をしてもすぐに治療してまわるから安心して。ご主人様から回復薬は沢山貰っているから数は大丈夫」

「私からは特に何もないかな」

「そう。それじゃあ……五分後にスタート」

恵里さんが檻を開け放つてウサギさん達が逃げていく。私達は五分後に森の中に散つてウサギさんを探していきましよう。

「シアさん、別れて探す感じでいいですか？」

「はい。こちらは問題ありませんよ」

「じゃあ、それでいきます」

私は同族の皆に指示を出し、複数のグループに分かれます。今、こちらに居る森人族は私を含めて十八人。全員が髪の毛が白く変色しています。^{モンスター}魔物を食べた事によるストレスによるものだと思われるので、染めてダメージアをした方がいいでしょう。

「姫様、吉報をお待ちください」

「我等がすぐに捕まえて参ります」

「お願いします。ですが、気をつけてください。私達には今、弓も短剣もないのですからね」

「わかつております。いくら身体能力が上昇しているとはいえ、相手は魔物^{モンスター}ですからね。しっかりと対応します」

「はい。六人で一匹を狩るようにしてください。それできつと大丈夫でしょう。くれぐれも油断しないように」

「お任せください。行くぞー！」

皆を見送つてから、私達も移動します。私の班には幼い子供も居るのでゆつくりとですが、確実に進んでいきます。身体が小さいので進むのが大変ですが、なんとかなります。

目の前には私の身長の上も二倍以上もある大きな木々が倒れていますので、試しに飛び上がってみますと軽く飛び越えられました。今までだとせいぜい足の分ぐらいままでしか飛び上がれなかったのですが……想像以上です。

^{モンスター}魔物を食した事で力は格段に上がっているのでしょう。他の者達も次々と飛び越えていきます。私以上に歳の若い子達楽しそうに飛び跳ねてはしゃいでいますが、大丈夫でしょう。

「ひぎやあああああっ!!」

そう思つたら悲鳴が聞こえてきました。即座に護衛の同胞が前に出て構えを取ります。すると先の方から何かが飛んできて近くの

木々にめり込みました。恐る恐るそちらに視線をやると、驚いた事にそれは先に先行した同胞達でした。

「姫様っ！」

「お逃げくださいっ！」

「あっ」

護衛の同胞達に言われてハツとして子供達の手を掴んで逃げようとしてます。その瞬間、護衛の人の目前に白い物体が現れ、蹴り飛ばされました。飛ばされた同胞は木々を複数粉碎して止まりました。

「っ!？」

すぐに呼吸を確認して生きているかどうかを調べました。呼吸は正常ですが、身体中の骨が折れています。前の私達なら確実に死んでいました。

このようなことをしてかした相手は木々の上に居る小さな白いウサギさん。そのウサギさんは粉碎された木の上でぴよんぴよんと飛びながら、こちらを見えています。

「ひ、姫様……」

「だ、大丈夫です。わ、私が守りますからその間に逃げ——っ!？」

視線を外していなかったウサギさんが空気を蹴るようにして一瞬で目の前に現れ、蹴りを放ってきます。次の瞬間には激痛を感じながら吹き飛ばされ、頭から木々に激突して粉碎し、地面を転がりながら丸太に激突しました。痛みで意識がなくなりそうになりながらも必死に目を開けると、視界が霞んでいく中で隣に吹き飛ばされて来る子供の姿が見えました。

「かはっ!？」

身体を横にずらして受け止め、その衝撃で空気と一緒に血液を吐き出します視界が明滅して身体が動かなくなっていくます。

息が苦しくなっていく、呼吸すらも辛くて死ぬような感じになってきました。全身の骨が折れて身体中が熱くなっている感じがしていると、顔に液体がかけられるような感じがしました。

「えっ？」

瞼を開くと、目の前にマフラーをつけた優花さんが私達に液体をか

けていました。おそらく、主様から貰った回復薬でしょうね。

「治療完了。五分後からまた狙われるからね」

そう言ったあと、姿が掻き消えるようになりませんでした。言われた内容から、私はすぐに身体を起こします。怠さはありませんが、動けないことはありません。他の皆も起き上がってきました。

「姫様、ご無事ですか？」

「死ぬことはないようですが、それだけのようですね」

「みたいですね」

話していると悲鳴が聞こえ、こちらに走ってくる人達が居ました。それはシアさん達、ハウリア族の人達です。その後ろからウサギさん達が迫ってきています。もう結果はわかりました。

少しして、気絶していたシアさん達も治療され、ボロボロになったハウリア族も起きました。そこで私達は話し合います。

「どう考えても兎狩りって、兎を狩るんじゃないかって、兎が狩るんじゃないですか！」

「逃げまどって身体能力を把握しろということでしょうね」

「こんなの耐えられませんよ！」

「はい。ですので捕獲するか、逃走するかですね」

「外ですね。行ってみましょう」

シアさんと話し合った後、覚悟を決めて森の外を目指しました。その間に何度も、何度も襲撃を受けてその度に全滅させられました。必死に逃げても襲われ、抵抗しようとした同胞も居ましたが、相手にもなりませんでした。

ですので、与えられた五分の間に必死で逃げました。そして、森の外に出た瞬間、そこには絶望がありました。

「嘘、でしょう？」

「これを超えていけというのか？」

「前門のアンデッド、後門の兎とか無理です！」

そう、私達の目の前には無数のアンデッドが、ゾンビが埋め尽くすほど存在していました。その者達は身体が腐り落ちていて、目玉がないものや手足がないものがあります。何よりすごく臭いのです。

「森の中を逃げ回るか、ゾンビを突破するか、どちらがいいですか？」
「まだ兎の方がいいですね」

後ろを振り返るとウサギさん達が手を器用に操作して来い来いと言っています。仕方ないので私達は涙目になりながら森へと戻りました。



何度も何度も倒されては復活させられ、泣きながら頑張って逃げました。そうしてしばらくすると、ようやく終わったようで、私達は空中で何度も蹴られて森の外に飛ばされ、そのまま滝壺の中に落ちました。すぐに滝壺から出ると、そこには恵里さんがいらっしやいました。彼女の周りには何かの荷物があります。

「はい、皆さん。ご苦労様。三時間の兎狩りは楽しかったかな？」

「楽しくないですー！」

「そう、それは良かった。訓練が楽しいわけないしね。じゃあ、次の訓練よ。その前に食事にしましょうか。ご飯はこのウサギ達でいいか」
ウサギさん達が一瞬で炎に包まれて丸焼きになりました。それを切り分けていきますが、その容赦のない姿にシアさん達やハウリア族の人達はガタガタと震えて抱き合っています。確かに使っていたのに容赦なく殺すのはとっても怖いです。

「食べたら荷物を持って詩乃に聞くように。森人族はこっち、ハウリア族はこっちだから。詩乃、後は任せた」

「はい。それじゃあさっさと食べてね」

ウサギさんを切り分けて食べました。とても不味いですが、何かの力を得た気がします。

食事を終わると荷物を受け取り、中身を確認していきます。中は不思議な杖みたいなものでした。

「これは銃と呼ばれる武器で、ハウリア族の武器はアサルトライフル

のHK416、森人族はスナイパーライフルのドラグノフ。どちらも引き金を引いたら弾が撃ちだされるから、味方や自分には向けないように。まずどんな感じか見せるからしつかりと見ていてね」

そう言っつて詩乃さんが不思議な構えをして、引き金と言われる物を引くと軽い音が響いて目標とされた木がすぐに破壊されました。

「見ての通り、威力は高いから気をつけてね。一応、最初は模擬弾しか与えなけど、痛いから。わかった？」

「わかりました」

「じゃあ、まずは武器の組み立て方法から教えるね」

ドラグノフという武器の組み立て方を教えてもらいながら、何度も分解と組み立てを行います。三十回ほどやってちやんと組み立てができるようになれば、実際に模擬弾というものを撃つてみました。

武器の訓練が終われば次は優花さんによる格闘訓練が待っていました。こちらはウサギさん達と同じ、地獄でした。

「人体を効率良く破壊し、殺すには弱点をつくことが手っ取り早い。まずは——」

そう、人体の壊し方を実践して身体に叩き込まれ、覚えさせられました。型などはなく、実戦で培われた暗殺技術を教え込まれたのです。

その後は食事とお風呂に入り、泥のように眠りました。そんな生活が数日続き、次の訓練は射撃場という場所で整列して狙撃や射撃をしていく訓練です。

恵里さんと詩乃さんが合同で行う訓練は凄く怖いです。そう、ゾンビパニックです。向こう側から盛大にやってくるゾンビ軍団をドラグノフで狙撃し、近付いてきたらアサルトライフルで始末していきま

す。どちらも実弾です。

「いやああっ！」

「来ないで来ないで！」

「効率よく殲滅しないと無理ですよ！」

「いやだあつ、臭いいいつ！」

この訓練では殺されることはありませんが、ゾンビ達がこちらまで

やってくる、容赦なく殴ってきますし、触ってきます。腐肉塗れにされて尊厳を完全に奪われるのです。特に私にとっては最悪で、確実に狙われています。

「アルテナはしっかりと守りなさい。そうじゃないと貴女達の大切なお姫様が悲惨な目にあうからね?」

腐肉塗れにされると、主様の近くから排除される可能性が高いのです。確かに腐肉塗れになった人と肌を重ねたりするのは嫌ですし、近くにいたくないのもわかります。ですから、私達は必死に抗うしかありません。

何度か決壊させられましたが、皆が私とシアさんを守るために尽力を尽くしていただいたので助かりました。ハウリア族の人達も最初はろくに戦えませんでした。流石にゾンビによって腐肉塗れになって齧られていくと倒せるようになりました。ゾンビが狩れるようになると、スケルトンが混ざり出して命中の精度が求められるようになってきます。

このタイミングで戦術なども勉強しました。講師としてはルサルカさんやハクさんをお呼びしてお勉強です。ルサルカさん達はとっても厳しかったです。大変ためになりました。

ゾンビとスケルトンのアンデッド軍団の始末ができるようになれば、本格的に奈落に入って敵を狩りとっていきます。最初はヒュドラを恵里さんと詩乃さん、優花さん達と一緒に倒して順番に下から上がっていききました。

その過程で私達はどんどん強くなり、次第に全員から六人、五人、四人、三人と減っていきある程度の敵はスリーマンセルで狩れるようになります。

奈落の敵が相手にならなくなってきたら、軍団を組んでヒュドラを自分達だけで狩り、その次は恵里さんと優花さんを相手に戦います。相手は二人ですが、その強さは半端ないです。油断すればいつの間にか背後に現れた優花さんに刃の潰した短剣で首を斬られたり、アサルトライフルでペイント弾を叩き込まれて撃ち殺されたりして死亡扱い。

かといって優花さんに集中するとアンデッド軍団の物量で押し切られます。大蛇やベヒモス、熊さんなど大型種まで混じっているので倒すのも大変です。

どうにか合格を貰えましたが、一ヶ月の訓練で全員の目が死にました。私はご褒美に赤いランドセルという物を合格祝いとして貰いました。これは色々詰め込むのに便利だからです。いくら生成魔法を覚えて銃弾を現地調達が可能とはいえ、ある程度は持ち運ぶ必要があります。その時は大変便利です。手榴弾を取り付けたりもできずすし。

新しい装備をもらったなら、主様に神水を提供してもらった事に感謝を込めてご奉仕をしました。全身を舐めたり、舐めてもらったりして私に汚い場所がないという事を実践して試していただけました。いっぱい褒められて大変気持ちよかったです。とりあえず、いっぱい甘えさせてもらいました。

その後は主様の希望で大きくなった時もしました。胸を執拗に攻められました。こちらはこちらで良かったです。

後は……そうですね。ハウリア族の人達がいつの間にか増えていたぐらいと、トラウマが増えたことです。恵里さんと優花さんが怖いんです。逆らえません。小さな身体で甘えていると優しくしてくれませんが、大きな身体の方だと容赦はされません。恵里さんと鈴さんが敵のように胸を鷲掴みにして色々してくるので、大変です。私は優花さんと違って逃げる技術はないので大変なのです。

見ろ、人が塵のようだ

素材を用意していると、数日が経って霧が晴れた。そのタイミングでレヴィが連れていかれたハウリア族の人達を連れて戻ってきたらしいので、樹海の入口まで迎えに出向いた。そうした方が問題がないからだ。

ただ、一人で迎えに行くのも問題があるらしいので、国土錬成陣の仕掛けをしにユーリと共に魔導炉を持ってやってきた。

「たっだいま〜！」

馬車の屋根に乗っていたレヴィがジャンプして俺の下へと飛びついてくる。レヴィを受け止めてくるりと回転し、地面に降ろす。

「お帰り」

「お帰りなさい、レヴィ。シュテルとディアーチエがおやつを用意して待ってますよ」

「やった！ 王様とシュテルんのお菓子は美味しいから大好き！」

「お菓子は置いておいて、まずは報告を聞こうか」

「えつとね〜」

まあ、だいたい聞いてるのでわかっている。知りたいのは攫われていったハウリア族の者達の現状だ。精神状態が悪く、自殺しようとする者までいるかもしれないしな。

「大丈夫だよ。自分から死のうとする人は居ないよ。ただ、復讐したって女の子は居たけど……」

「当然だな」

少なからず、家族や友人を殺されているのだから復讐に走る奴がいともおかしくはない。ただ、それがハウリア族から出るというのは驚きだ。

「しかし、そうなると男の俺が行くのも問題か。レヴィ、全員にこれからどうするかを確認とつてくれ。カム達の事も話してからな」

「それなら、情報はシユテるん達と共有しているから、もう押し立てるよ」

「わかった。だったら、戦う意思のある奴等はオルクス大迷宮へと送る。それ以外はこっちで過ごしてもらおう」

流星に全員を兵士にする必要もない。希望しない奴まで徴兵なんてのはやるつもりはない。そもそも、天使を相手にしない限り、質では俺達が勝っているのだから、戦力の分散さえしなければ問題ないだろう。戦力を分散して各個撃破されたらたまったものではない。

うたわれるものでは実際にクンネカムンという国が人が剣と槍で戦っている世界に人型汎用生体兵器のアヴ・カムウを持ちだし、力によって非常に強い軍事力を持っていた。その国は全土平定を目指すことになり、最初の方は連戦連勝していた。だけど、人数と兵器が少なく広がった領地を守るためには分散するしかなかった。そうなれば関節を狙った達人達によって各個撃破されて、最後には敗北した。

確かに戦力の質を考えれば俺達が圧倒的に勝てるだろうが、支配した土地を守る必要も出てくるので数に押し込められる場合がある。逆に言えば戦力を集中させて守りに入ればそう簡単には負けない。同盟を組むにしろ、侵略するにしろ、質と数の両方を揃えないといけない。ガンダムでも戦いは数だと言われた名言があるのだから、しっかりと準備をしないとイケない。理想を言えば相手が国の存在を知った時には手遅れなほど、隔絶した質と数の戦力があることが望ましい。

「任せて。すぐに聞いてくるよ」

「頼む。ユーリ、魔導炉と防衛拠点の設置場所に移動する準備をしてくれ」

「わかりました」

戻ってきたレヴィと共に樹海をそれなりに入った場所に魔導炉を設置し、防衛拠点を作成する。ここが樹海の入口に一番近い場所になるので、それなりの防衛システムは必要だ。とりあえず、地面を掘り下げて魔導炉を埋め込み、トーチカのようにして樹海の木々で隠す。

見張りや、一部の部隊が住めるように地下施設を錬成で作り上げ、

そこからぐるりと、大樹が中心になるように円を描いてトンネルを掘り進める予定だ。大樹へは残ったハウリア族に案内してもらえばいいだろう。



残ったハウリア族の一部に案内してもらって大樹の下へとやってきた。その大樹は事前に聞かされていた通り、枯れていて普通ならなにも起きないように思える。ゲーム的に考えると、どうにかして咲かせる必要があるのだと思う。

その事が正解だと示すように碑文が配置されていた。そこにオルクスの紋章が刻まれた場所もあったので確実だ。

実際に指輪を碑文に嵌め込む事はできたが、それだけだ。何かが足りずに普通ならここで終わりだろうが、ここには凄く可愛い天才美少女のラスボス系魔法使いユーリが居た。

故にオルクスの指輪を軌にしてシステムへとハッキングを仕掛け、ハルツィナ樹海の情報を引き出して他の神代魔法と指輪が必要な事が判明した。

「現状を考えると、ここは放置して拠点を作った方がいいだろうな」
「何時、天使が現れるかもわからないし、ひよつとしたら人族だけでなく、魔族も神代魔法を狙ってくるかもしれないしな」

「ああ」

ハジメの言葉に俺も同意する。俺としては神代魔法なんて危険な代物は俺達で独占してしまった方が都合がいい。魔族やエヒトの狂信者共に渡すわけにはいかない。言ってしまうはこの世界特有の戦略兵器みたいなものだからだ。

「オルクス大迷宮とハルツィナ樹海、それにできればライセン大峡谷。この三つは最低でも押さえておきたい」

「確かにそうだな。じゃあ、さっさと錬成するか」

「ユーリ、シユテルとディアーチエに協力してもらって、解析は進めておいてくれ」

「わかりました」

本格的な拠点を作る事を優先し、ハルツィナ樹海の大迷宮攻略はゆつくりすることにした。拠点を作るのなら徹底的に錬成を使つてさっさと作り上げる。

素材は集めていたので、枯れた大樹を基準として等間隔に複数の円形をしたトンネルを形成。トンネルの六ヶ所に魔導炉を設置して、拠点と防衛施設を作成。基本的な武装はアハトアハトを設置。対空装備としてアヴェンジャーも設置しておけば地上と空、遠距離と近距離のどちらにも対処ができる。弾薬は魔導炉の魔力を使えば問題ないから平気だ。

魔導炉の設置が終われば国土錬成を発動してデスマーチの開始だ。まずは魔導炉から少し内側に行ったところに壁を作成。最悪、魔導炉は暴走させて爆破するので、そのダメージがギリギリ入らない程度の場所にした。

こちらは国土錬成陣の内側にある円の頭上に形成し、外部からの侵入を防ぐために周りの木々は切り倒す。壁の材質は土だが、魔法を付与できるので硬化系の魔法をえげつない程付与し、最後には鈴シエンシヨウジンに神獣鏡シエンシヨウジンの結界を壁その物に付与してもらった。これにより、魔法が効かず、物理で突破するしかない防壁の完成だ。ちなみに壁の色は白色だ。

この防壁の内部に複数の機関銃を設置し、弾丸をいくつも用意しておく。これには一切の魔法を使用しない。防壁に触れていると神獣鏡シエンシヨウジンの力によつて魔力は浄化して祓われるから、こちらも純粹な物理能力で対抗するしかない。物理最強である。

防壁の中はまず農地を作成し、その先に第二防壁を作成する。第二防壁は鉱石をふんだんに使った金属製の物で、防衛力として魔法関係の代物を配置する。こちらは第一防壁とは逆で、物理を徹底的に防ぐ結界にしてもらった。故に魔法が使える。配置する戦力はシユテルやディアーチエ、ルサルカなどを予定している。

第二防壁の内側は和風の城下町とし、城は大樹をすっぽりと覆うように作り上げた石垣の上に配置する。無茶苦茶高い位置に城があるので、階段の数もとんでもない事になる。もろに山だからだ。なのでリフトを設置する事によって移動の問題を解決することになった。

これらはうたわれるもの、偽りの仮面で出てくるヤマトの城と同じ構造だ。設計図はともかく、見取り図はオシユトルとネコネが詳しく把握していたし、リムリも自分の国の見取り図を覚えているのでそちらを参考にして基礎的な設計図を作ってもらった。

その設計図を基にしてユーリ、シユテル、ディアーチェ、ハク、ルサルカの技術者達がそれぞれの技術を持ちあつて改造していった。俺とハジメはアニメなどの知識はあっても、建築関係はほとんど知らない。銃とか、興味のある物については調べたが、流石にそちら方面は知らないのだ。なのでそういう事も詳しい……か、どうかはわからないが、技術者である皆に頼んだ。特にユーリ達はそういう連中も一切の区別なく、無差別に蒐集した事もあるのでそちらの知識を利用してくれる。

ちなみにヤマトでは地下世界があるのだが、こちらは迷宮が存在するので大丈夫だろう。ちゃんと内側に対する防衛システムも用意しないといけないな。



設計図を基にして国土錬成陣を発動して一週間が経った。本来なら作れるはずのない時間で無茶苦茶高い台座の上にある城が出来た。流石に城下町を作るまでの資材も魔力も人材も時間もたりない。ここまで不眠不休で働いた。

俺は常に椅子に座らせられ、寝ることも動くことも許されない生活を耐えぬいた。食事は食べさせてもらえたが、排泄に関してはどうしようもないので仕事の終わったネコネとリムリに世話をされるといいう、奈落での出来事を彷彿とさせる辱しめを受けた。二人の目も死ん

でいたが、仕方が無い。

何せ、ユーリ達がやってくる時は俺の近くで仮眠を取るため、大概が俺の膝に抱き着いて眠ったり、膝の上が取られていたら足に抱き着いて眠ったりするタイミングだ。例外はキスしていちやついたりしている時ぐらいだな。一応、ユーリ達も世話をしてくれたが、基本的はネコネとリムリの二人になった。ちなみにハジメ達は睡眠時間が三十分を四回の二時間だけだ。食事は肉団子とスープというむちゃぶり。

そんな感じで俺達はデスマーチを乗り切った。もはや、死屍累々といった感じで、もう疲れたよパトラッシュと言いたいぐらいだ。

そんな状況で動いているネコネとリムリ、オシユトルとまだ錬成が出来ずに休む事ができたハクにそれぞれが介抱されて数日、燃え尽き症候群のような状態で過ごした。

色々として気力が回復したので、寝室がある天守閣の外に出るととてもいい景色が見える。それは雲海のように、遠くまで綺麗に見える。

いくら、内部がスカスカだとはいえ、これだけ大きな建物を作りだせば死にかけるのは納得できる。そう、城の部分以外はほぼ空洞だ。後々追加する予定ではあるが、基本的にドックにする予定だ。ドーラとグスタフを配置し、列車などの整備工場とするからだ。石垣の一部を開けばそこからドーラとグスタフを出して長距離砲撃を行えるようにする。

後は線路を引いてライセン大迷宮とオルクス大迷宮を列車で繋げれば互いの兵力や物資を行き来させることが可能だろう。地上でやればエヒト達に気付かれるだろうが、地下の大迷宮でやればバレることはない。

「本当に鈴達が頑張ってくれたお蔭だな」

我等が城は鈴による不可視の結界が展開されており、外からは見えないようにしてある。この結界はユーリやルサルカによる認識阻害

の力も使われているので、三種類の世界による合作だ。本当はここに積乱雲などを呼び寄せ、高確率で嵐に会うような場所を作り出すべきだが、それをするには気象の操作ができる衛星アマテラスを衛星軌道に配置しなくてはいけない。

「ん？」

何か音がした気がして、スマホを確認すると新しいガチャが始まっていた。そのガチャの名前は拠点ガチャ。ラインナップは戦国時代のお城や館、あばら家などなど……何が言いたいかというところ、これで城を引いたらここまで苦労することも、奈落の時みたいないな恥辱を味わう事もなかったのだ。

しかもこのガチャ、何を土地狂ったのか、10連引けばそのうちの一つはSR☆☆☆☆以上確定ガチャだ。選べる回数は一回だが、十分に価値がある。

「ふふふ」

とりあえず、残っている魂を捧げて引いておく。普通にうたわれるもののガチャをするよりも三倍近いが、拠点が手に入るならいいだろう。そんなわけで、ポチつと押してみる。

すると目の前に超巨大な魔法陣が展開され、身体の中からまた急激に魔力が吸われていく。

『ひゃあっ!?! な、なにごと!?!』

魔力が急激になくなったことで美遊が飛び起きたようだ。正直、悪いと思っているが仕方がない。さて、肝心のガチャだ。排出されたのは十枚の光。そこからでてきたのは今にも倒壊しそうなボロボロの家。それはすぐにスマホに吸い込まれた。

続いて普通の家。こちらもスマホに吸い込まれた。おそらく、スマホから召喚は可能だろう。次はマンシヨンの一室。これは部屋だけのように、箱がポツンと置かれているようなものだ。

その次はわらの家、これは言うまでもない。動物に食べられる。鏡の家。全部鏡でできているので、何をしても見られることになる。使道はわからない。

五つ目はなんとSR。その名も温泉旅館。湯の効果は美肌効果と

疲労回復。女性には嬉しい代物だろう。それに疲労回復というのなら、色々と便利だ。そう、本当に便利だろう。デスマーチの慰安を兼ねて設置するのもありじゃなからうか？

六個目はキャンピングカー。持っているが、幾つかあってもいいものだ。七個目は子供の秘密基地。こちらは子供しか入れない秘密基地を木々に設置することができるといふもの。使い道は微妙だ。中は遊具みたいだが、危険な物はないとのこと。どうやって子供を判定をしているのかはわからない。年齢だつて種族によつて年齢の基準は色々だ。ああ、そう考えるともしかして清き身体かどうかで判定するのだろうか？ まあ、どうでもいいな。

八個目は水の家。絶えず水が溢れ出し、一定量をつねに湧き出して綺麗な水質を保ち続ける水生生物が過ごしやすい家を作るものらしいが……ぶつちやけただの水槽だろう。しかし、この湧き出る水が俺達にも飲めるものであればかなり有効だ。水不足に悩む事はない。

九個目。運命の女神は我等に味方した。いや、ある意味ではありがたいが、もつと早く出ろよ馬鹿野郎！ このガチャがデスマーチ前ならどれだけ歓迎できたか……

10個目は馬屋……確かに一部の異世界では宿に泊まれない駆け出しの冒険者が寝泊まりする場所として使われているから、拠点なのだろう。これは街の方にも設置しておこう。

「とりあえず、ハジメに言いに行くか」

そんなわけで、着替えてからハジメの部屋に突撃する。ハジメの部屋の位置はわかつてるので気にせず入ると、ベッドの上で素っ裸のハジメが寝ていて、その上に同じく素っ裸のユエが抱き着きながらハジメの首筋に顔を埋めて寝ていた。ちゃんと布団は……一部かぶっているのだから背中しか見えない。

「あくお邪魔しました」

「待て、プレゼントだ」

「え」

からん、ころんという音が聞こえ、投げられた缶が発光する。当然、それは俺に直撃した。

「めがつ、目があああああつ！」

のたうち回りながら思うのは、やはり先程出たガチャのアレの呪いなのだろうか？ いや、単に気にせず入った俺が悪かったただけだけど、アレが出たんだから仕方が無い。

「で、何のようだ？ 明らかにやばい事が起きたんだろ？」

服を着たハジメに蹴られながら外に転がされた俺は立ち上がり、ハジメにすがりつく。

「親方！ 少女が空から降ってきてないけど、ラピユタは本当にあったんだ！」

「オーケー、理解した。お前が俺達に黙ってガチャをしたって事がな」「あ。いや、ほら、引いたのは拠点限定ガチャだから、やばい奴はでないかなって」

「原子炉の拠点が出たらどうするんだ？」

そう言っただけでアイアンクローを決められる。いや、それだけで飽き足らず両の拳でぐりぐりされた。俺の頭じゃなかったら、普通に死んでる威力だ。

「ごめん。考えてなかった」

「ともあれ、ラピユタか。空飛ぶ要塞。一晩で国を焼き尽くしたときれる滅びの矢……正直、スターライトブレイカーやルシフェリオンプレイカーを非殺傷で撃てば同じ事はできるだろうが……」

「空飛ぶ拠点ってだけでも充分じゃないか？ ぶっちゃけ、ガンダムでいうアップサラスⅢだろう。大気圏や衛星軌道から撃って地表を焼

き、地下深くまで破壊する……あれ、アマテラスも同じか」

「同じだな。もつとも、ラピユタは気象を操れない代わりに巨大で人を乗せられ、多数の機動兵器が搭載されているが……宝もか」

「まあ、死蔵するしかないか。ファンとしては行ってみたいが……」

「現状、空洞にスペースは充分にある。そこに展開して調査をして改造をすれば……というか、飛行石がないと駄目じゃないのか？」

「あ」

「無理だな」

「やはりラピユタは幻だったのか……」

飛行石を引けばワンちゃんあるか。どちらにせよ、城では出せないな。出してぶっ壊されたらかなわんし、出すとしたらオルクス大迷宮か。

「まあ、ラピユタは置いておけ。まず、俺とユエはシアが戻り次第、ライセン大迷宮に向かう。そっちは食料を効率良く取れるようにしておけ。ユーリの力を使えば可能だろう」

「わかった」

それからしばらくして、アルテナが戻ってきた。甘えてくるアルテナにご褒美は何がいいかと聞いて彼女の望む通りに応えてやった。色々と応えてあげたら……アルテナは少しMに目覚めたようで、お尻叩きを望まれたりもした。

詳しく聞くと恵里に森人族が失敗を犯した時に責任として何度も叩かれたから、俺にも叩いて上書きして欲しいとのこと。それに誰の入れ知恵か、赤いランドセルまで持っていたので、そういうプレイを楽しませてもらった。その後はお薬を飲んで大人の姿に戻り、そちらでも愛し合った。

ついでにアルテナ以外にも恵里や優花、詩乃達に戻ってきたのでそのまま嫁達を全員集め、全員と愛し合うことにした。温泉旅館での酒池肉林だ。いや、酒は入ってないけどお城の完成記念としてたっぷり楽しんだし、楽しませてもらった。

ハジメ達も温泉旅館を楽しんでからライセン大迷宮へと出かけていった。その間、俺はユーリやアルテナ（ロリ）達、ロリっ子に農地

予定地でジブリ作品にでてくるトトロの踊りを教えてやってもらったが、大変可愛かった。

とりあえず、果樹園と水田などの田畑を作りあげ、ハウリア族の残った者達に農業を教え込んだ。彼等が好きそうなニンジンも品種改良で作り出して育てさせていく。

問題もなく順調だが……それはハジメから救援要請が届くまでの楽しいひと時だった。

「「ぶち抜け」」

ハジメ、ユエ、シアの三人からの有無を言わせぬ要求に答えるしかない。

「了解」^{ヤイ}

ライセン大迷宮。そこはひたすら煽られ、大量のトラップ地獄を乗り越えて進むと入口に戻り、また煽られるという酷い迷宮だった。それにブチギレたハジメ達は魔法少女リリカルなのはS t sで主人公高町なのはがやった事を思いだし、俺に依頼してきたというわけだ。AMFという魔力結合を阻害する場所までそっくりなので、これは仕方が無い。

なので、サーチャーでしつかりと探索した後は高町なのはのデータを基にして躯体を生成したシュテルを召喚し、彼女と融合して全力でぶっ飛ばして壁抜きをやった。

「^{あかほし}疾れ、明星 すべてを焼き消す炎と変われ ルシフェリオンブレイカー」

壁や地面を消失させ、巨大な穴を無理矢理開けて道を作る。空間がねじ切られていようが、こちらは結界破壊の能力までついたスターライトブレイカーが元となっているので関係ない。

「これでいいですか？」

「ああ、完璧だ。突入する」

「行きますよ！ 今までの恨み、晴らしてくれます！」

「ん。行く」

デバイスを使ってバリアで熱を防ぎながら入っていく三人の後を

ついて進んでいく。身体は念の為に大人版シユテルだ。融合状態だからこうなっている。俺達が入ると、身体の大半が焼失したゴーレムが涙目で三人と戦っていた。

「ひどい、ひどすぎるよ！ ミレデイちゃんが一生懸命に作った迷宮を攻略方法とかガン無視で力尽くで壊してくるなんて汚い！ やり直しを要求する！」

「嫌だ」

まあ、三人の気がすむまで殴られているといいさ。それが終わればどうするか判断しよう。ミレデイと名乗ったのなら、彼女がこの大迷宮の主、ミレデイ・ライセンなのは間違いないだろう。例えばゴーレムに身体を移していようが、彼女の魂は光輝き、強い力を発している……とても美味そうだ。

「ひっ!? 寒気がした！」

第56話

ライセン大迷宮の地下でニコちゃんマーク顔の人間大ゴーレムであろろう物体。そいつがこの大迷宮を支配する主らしく、ハジメが尋問していくと彼女がライセン大迷宮を作り出した解放者の一人、ミレディ・ライセンだということが判明した。だからこそ、彼女の魂はとても美味しく思えるのだ。

「おい、それ “宝物庫” だろう？ だったら、それごと渡せよ。どうせ中にアーティファクト入ってんだだろうが」

「あ、あのねえ。これ以上渡すものはないよ。 “宝物庫” も他のアーティファクトも迷宮の修繕とか維持管理とかに必要なものなんだから」

「知るか。 寄越せ」

「あつ、こらダメだったらー！」

ハジメは本当に根こそぎ奪っていかうとしているみたいで、焦った様子で後退るミレディ。彼女が所有しているアーティファクト類は全て迷宮のために必要なものばかりらしく、それ以外には役に立たないものばかりとのこと。しかし、それらはこの大迷宮を手に入れようとしている俺達からしたら必要な物だ。

「ほうほう、よくわかった。 じゃあ寄越せ」

容赦なく引渡しを要求するのは必然だ。どこからどう見ても、唯の強盗だけだな。そんなハジメ達の会話を聞きながら、シユテルと共にライセン大迷宮へとアクセスする。俺とシユテル、それに美遊の力で最深部から直接大迷宮の機構に接続し、乗っ取っていく。

「ええ、い、あげないって言ってるでしょ！ もう、帰れ！」

どうやら、ミレディは壁際まで走り寄り、浮遊ブロックを浮かせると天井付近まで移動したようだ。

『お兄様、少し身体を浮かせておきますね』

『わかった』

シユテルが何かに気付いたようなので、そちらは任せる。こちらは大人しく重力魔法をもらう事にする。これでスーパーロボット大戦のシユウ・シラカワごっこができるかもしれない。いや、もうちよつと必要か。

「逃げるなよ。俺はただ、攻略報酬として身ぐるみを置いていけと言ってるだけじゃないか。至って正当な要求だろうに」

「それを正当と言える君の価値観はどうかしてるよ！　うう、いつもオーちゃんに言われてた事を私が言う様になるなんて……」

「ちなみに、そのオーちゃんとやらの迷宮で培った価値観だ」

「オーちゃんあ——ん!!」

ハジメが呆れた視線を受けつつも、今までの散々弄ばれた事を根に持っていたユエとシアも参戦し、ジリジリとミレデイ包围網を狭めていく。半分は自業自得だが、もう半分はかつての仲間が創った迷宮のせいという辺りに何ともやるせなさを感じているのかもしれない。

『ご主人様、46%の制圧を完了しました。これ以上は気付かれる可能性がありません』

『残りは一気に行くべきか。シユテル、美遊。準備しておいてくれ』

ミレデイを押しえてから一気に制圧する。管理者が魂だけの状態としても、生きていたのならそちらをどうにかした方が楽だ。それにとっても美味そうだしな。

「はあく、初めての攻略者がこんなキワモノだなんて……もう、いや。君達を強制的に外に出すからねえ！　戻ってきちゃダメよお！」

今にも飛びかかるとしていたハジメ達の目の前で、ミレデイはいつの間にか天井からぶら下がっていた紐を掴みグイつと下に引張った。

「!?!」

一瞬、何をしているのかわからなかったが、次の瞬間にはガコン!! というトラップの作動音が聞こえてきた。

「!?!」

その音が響き渡った瞬間、轟音と共に四方の壁から途轍もない勢い

で水が流れ込んでくる。正面ではなく斜め方向へ鉄砲水のように吹き出す大量の水は、瞬く間に部屋の中を激流で満たしていく。同時に、部屋の中央にある魔法陣を中心にアリジゴクのように床が沈み、中央にぽっかりと穴が空いた。激流はその穴に向かって一気に流れ込む。「てめえ！　これはっ！」

ハジメは何か気がついたように一瞬硬直すると、直ぐに屈辱に顔を歪めた。白い部屋、窪んだ中央の穴、そこに流れ込む渦巻く大量の水……そう、これではまるで「便所」だ！

「嫌なものは、水に流すに限るね☆」

ウインクするミレディはユエ達が咄嗟に魔法で全員を飛び上げさせようとするが、この部屋の中は神代魔法の陣があるために分解作用がない。そのため、ユエに残された魔力は少ないが全員を激流から脱出させる程度のことは可能だった。

「『来……』」

「させなあ〜い！」

しかし、ユエが「来翔」の魔法を使おうとした瞬間、ミレディが右手を突き出し、同時に途轍もない負荷が俺達とハジメ達を襲った。上から巨大な何かを押さえつけられるように激流へと沈められるが、俺自身は膨大な魔力を使って対抗する。重力魔法で上から数倍の重力を掛けられたのだろうが、逆にこちらも自分の身体に重力魔法でかかるベクトルの位置を変更すればいい。

慣れない魔法だが、こつちとらブレインコンピュータに複数のデバイスによる演算能力。理のマトリアルであるシユテル、そして聖杯である美遊もいるので対抗するのは容易い。いや、ミレディが使った40倍ほどの魔力を使ったが、問題はない。

「それじゃあねえ、迷宮攻略頑張りなよお〜」

「ごぼっ……てめえ、俺たちや汚物か！　いつか絶対破壊してやるからなあー！」

「ケホッ……許さない」

「殺ってやるですう！　ふがっ」

「というか、俺達もたすけ——」

ハジメ達はそう捨て台詞を吐きながら、なすすべなく激流に吞まれ穴へと吸い込まれていった。穴に落ちる寸前、ハジメだけはこちらに気付いたようなので、手を振っておいた。どうせミレデイも殺す気はないはずだ。せっかく大迷宮攻略者を殺すはずがないだろうし、大丈夫だろう。それにデスマーチ中に強制された恥辱を忘れていない。

ハジメ達が穴に流されると、流れ込んだときと同じくらいの速度であつという間に水が引き、床も戻って元の部屋の様相を取り戻した。

『ご主人様……』

『お兄様、怒られてもしりませんよ?』

大丈夫だ。言い訳はある。流石にミレデイの重力魔法に対抗するのは一人分しか無理だったのだから。以上、証明終了。

「ふう〜濃い連中だったねえ〜。それにしてもオーちゃんと同じ錬成師、か。ふふ、何だか運命を感じるね。願いのために足掻き続けなよ……さてさて、迷宮やらゴーレムの修繕やらしばらく忙しくなりそうだね……ん? なんで、いるの?」

「それはね、ミレデイ。お前を食べるためだよ」

そう言った瞬間、瞬時に接近して展開しているルシフェリオンと神喰を杖から籠手の状態にする。そしてミレデイを掴み取る。

「っ?! あぶなっ!」

だが、流石に長い年月を生きてきたただけあつて瞬時に飛び退った。それも重力魔法を使って自らを強制的に移動させたのだ。普通の回避なら追いつけたのだが、流石にこのような回避方法は想定していなかった。まだまだ甘かった。

「外れたか。流石は解放者というところか」

「さっきの子も大概だけど、君も大概だね〜。ミレデイちゃんを食べようなんて、見ての通り鉱石なんだけど〜? もしかして、食べるは食べるでも鉱石フェチ? ミレデイちゃん、それはどうかと思うな〜」

「生憎と嫁は沢山いるので、その趣味はないな」

「嫁? 婿じゃなくて?」

「ああ、この姿は融合や合体と言われる形態なだけで、男だ。だから嫁でも問題ないさ」

指を鳴らして神喰を展開しつつ、シユテルに逃げられないようにリカルなのはの世界で使われる結界を展開してもらおう。これでこいつは逃げられない。周りに複数の神喰を浮かせ、手はルシフェリオンクロー。

「それじゃあ、ミレディちゃんは性的に食べられちゃうの？ やっぱり変態……」

「物理的にお前の魂を食べて我が力と変える」

「え」

「喜べ。卿の魂は我が糧となり、エヒトを倒す礎となろう。そうなれば卿も本望であろう？」

「いやいや、そんなこと魂魄魔法でも普通は無理だし、よしんばやったとしても魂が混ざり合って狂った化け物になるだけじゃない！」

「その方法はある方法を使えば解決する」

確かに魂を混ぜるだけならば問題だが、そこに聖遺物を間に挟めば問題は解決される。適性は必要だが、実際に魂が燃料として融合させられるのは聖遺物の方だ。使用者は聖遺物から力を引き出すだけなので、安全面は確保されている。もっとも、聖遺物が壊されれば使用者も死ぬが。

「そんなはずは……」

「我等はこの世界の者ではない。エヒトによって強制的に召喚されたのみ。故に卿等の技術体系とはまったく違う物だ。それに数百年か数千年かは知らぬが、この中に籠っていたのならば技術がどれだけ進歩したか知らぬであろう？」

「それはそうだけど……って、どっちにしろミレディちゃんは大ピンチじゃない！」

ミレディがこちらの話を聞いている間にシユテルと美遊が色々仕掛けを施してくれているが、それに気付いたようだ。本当に残念だ。

「ええい、こうなったら戦略的撤退！」

「遅いです」

「っ!? なにこれ!」

ミレデイが行動を起す前に彼女の両手両足が輪のような物で空中に固定され、動けなくされる。

『バインドですでに動けないようにしてあります』

『魂になっても逃がしません』

リリカルなのはの世界で使われる一般的な拘束魔法、バインドだ。主に高町なのはが砲撃を命中させるために使う。それに加えて美遊が永劫破壊エイヴィヒカイトの力を使ってミレデイを魂の側からも拘束する。これでミレデイがゴレムから魂を移そうとすれば、その時点でこちらに引き寄せられて聖杯にくべられることになるだろう。

『二人共、ありがとう。助かった』

『彼女は逃がすには勿体無いですから、当然です』

『悪いとは思うけれど、野放しにはできない』

ここで逃げられたらライセン大迷宮の支配が滞る。それに解放者からすれば、俺達が大迷宮を独占する事は俺達以外の新たな攻略者が生まれないことになる。エヒトを倒すという目的だけなら、広く開放した方が彼等からしたら得なのかもしれない。それに敵対したのだから、別の所に新たに大迷宮が作られる可能性だってあるし、そここそ神代魔法をばら撒かれる可能性も微かにある。

まあ、色々と並べたが……目の前に経験値を大量に持っている弱い魔物モンスター……ドラクエで言うはぐれメタルが居るのに逃がすはずがないだろう。

「ひっ!?」

接近してルシフェリオンクローでミレデイの頭にアイアンクローの要領で掴み、持ち上げる。思わず舌なめずりしてしまったが、まあいい。

「さて、ミレデイ・ライセン。自由を渴望した解放者である卿等に敬意を表して選択肢を与えてやろう」

「いやいや、解放してくれるのが一番嬉しいかなうってそうミレデイちゃんは思っただよね。うん、絶対にそうだよ」

「遠慮なくいい。まず一つ目はここで魂を完全に喰われてただの

エネルギーとして存在し、我が一部となる」

「地獄じゃない！」

「もう一つは我と契約し、我に服従せよ。さすればエヒトとの戦いに新たな肉体を与えて参加させてやる」

「だが断る！」

「ほう」

「どちらも自由がない！」

『まあ、解放者からしたら、エヒトからお兄様が変わるだけですしね』
『でも、彼女ほどの者を何の枷もなく自由にしたら……色々と大変だよ？』

『ええそうでしょうね。アストルフオが増える感じかもしれません』

それは困ることになるだろうな。

「契約条件はこちらの命令を聞くこと。それ以外は週休二日制で三食と住居の支給。勤務時間は基本的に八時間と休憩一時間の合計九時間。例外は戦争時などの場合。身体を壊されたとしても、新たに身体を用意してやるので死ぬ事はほぼない職場だ」

シユテルがしっかりと話した内容をデータとして、グラフや文字などで壁に投影してくれる。

「……あれ？ 何か思ったよりもいいかも……？」

「国家の一員として敵対勢力を排除し、最終的にはエヒトを殺してこの世界に多民族国家を作りだすのが目的だ。その後はエヒトの代わりに我が君臨し、大量虐殺を禁止して戦争を辞めさせる。その代わりに、大迷宮を利用した競技を作成し、その成果を持って問題の解決を行わせる。それ以外は基本的に干渉はしない」

「君臨しても統治はしないと？」

「面倒な事は他人に丸投げし、責任だけ取って後始末をする。必要がなければ遊んで過ごす。どうだ、いい計画であろう？」

「確かに一部の自由は制限されるけど、この内容なら問題はない……かもっ？」

「更に今なら新しい人の身体がついてくる。しかも、この高スペック状態だ」

「お得意！」

俺のスペアボディをミレディ用に調整して使えばある程度の時間は短縮できる。むしろ、性別を変えなくてすむからその分は格段にはやくできる。もつとも、神結晶とかは入っておらず、精々が魔導炉と竜の因子ぐらいだ。それでも充分だろう。

「さらに今ならオスカー・オルクスの復活にもチャレンジできるチャンスが……」

「オー君とまた会えるの！」

「ああ、我が陣営には超優秀な降霊術師が居る。そして、オスカー・オルクスの遺品や遺骨も残っているから、後は彼を良く知る人物が居れば呼び出せるだろう。さて、以上を持ってプレゼンは終了だ。選ぶがいい」

「ちなみに選ばなかつたら？」

「喰らうだけだ」

「自爆装置なんてものもあるけど？」

「無意味だな。卿等の力では我に張られた防壁を突破できん」

「知ってる？ 重力操作を極めればどんな現象を起こせるか……」

「ブラックホールのような物ができるんだったか。まあ、どうとでも対応は可能だ。そもそも、魔法を発動しようとした時点で喰らうのだから、意味のない話だな」

ミレディの頭部がミシミシと音が鳴りだしてルシフェリオンクローの爪が食い込んでいく。その音によってミレディの顔文字に焦りが浮かんでいる、

「さて、そろそろ決めてもらおうか、ミレディ・ライセン」

まあ、どちらにせよミレディ・ライセンの力は使わせてもらう。ラインハルト・ハイドリヒやヘルシングのアーカードのように影として強制的に使役するか、Fate／Zeroのイスカンドルが使っていた王の軍勢のように自らの意思で協力してもらうかの違いでしかない。どちらにせよ、永劫破壊^{エイヴァイヒカイト}で魂を吸われ、聖杯によって使役されるのは変わらない。

『出せるかどうかはわかりませんが、そもそも溜めた魂は召喚の触

媒として使用しているから……ストックはないよ?』

『いっぱい殺さないと駄目だな』

『その予定はありますので、問題ありませんが……人族は弱ければ必要ありません。彼等を使うぐらいなら、魔物モンスターを使う方が効率的ですね』

『それもそうか』

『それに戦力というのなら、このライセン大迷宮を使って作りたい物もあるので、ミレディ・ライセンを蒐集してから食べてください』

『わかった。シュテルの願い通りにしよう』

『ありがとうございます』

シュテルが何を作るつもりかはしらないが、戦力になるのならいいだろう。

「それで、どうする?」

「わかったわよ。仲間になってあげる。私としてもエヒトの野郎を殺してやりたいしね」

「仲間ではあるが、部下である事も忘れるなよ」

「ちつ、わかってるわよ」

「では、まずは蒐集させてもらおう」

「え? ひにやああああああああああああつ!?!」

ミレディの魂から力の情報を引き出す。重力魔法など、これまで彼女の歩んできた過程や思いを確認できるが、それらは全てシュテルに丸投げする。流星に妻でもない女性の全てを見るのはまずいからな。

「さて、喰らうか」

「だ、だまし——」

「喰らわないとは言っていない」

「——おのれえええつ!」

ミレディの魂を喰らい、聖杯に注ぎ込む。彼女の魂は他の者と別けるようにして特別なエリアへと配置。そこで美遊と柴天の書とか、夜天の書にもあった力を使い、しばらくは微睡の中で居てもらおう。同時に記憶や性格などを保護しつつも、ミレディの魂を聖杯ケイオスタイドの泥聖杯の泥は人の悪性が塊となったもので、純粹かつ圧倒的な呪い。泥に触

れば皆狂気に囚われ、時には肉体ごと呑み込まれて消滅してしまう。また、魂をも汚染してしまう性質を持つため、サーヴァントを触れただけで「黒化」という悪しき状態に反転させることができる。真つ当な英霊では呪いに耐性がないため、激痛と共に霊基が蝕まれてしまい、反英雄は「根が近い」ため強い痛みはないものの、最終的に呑まれてしまう。「黒化」したサーヴァントは聖杯の力で受肉するため、より現世との結び付きが強い存在へと変化し、物理的な干渉力は増大するが、霊体化ができなくなる。魔力消費についての自制心がなくなるため、戦闘能力は飛躍的に増大し、さながら暴走機関車とも言うべき勢いを持つ。当然ながら暴走状態にあるため細かい制御は不可能だが、破壊力は増すを仕込み、俺達に逆らえないように仕上げておく。

ミレデイが俺達を裏切らない限り、何も無いが……裏切れば容赦なく泥によってその性質を反転させ支配下におくようにしておく。ただし、これを使えば美遊や俺にも聖杯ケイオスタイドの泥の影響が出てくることは確実だ。永劫破壊と聖杯ケイオスタイドの泥。二つの邪悪な呪いを合わせれば魂など容易く汚染されること間違いなしだ。なにせ人類の悪性といえば核兵器を生み出して使ってしまうようなものだから、その汚染率は推して知るべし。

ミレデイの身体ができれば聖杯から移すが、当然のように身体にも色々と仕込ませてもらう。そもそもミレデイに与えるのは色々と弄るとはいえ、ユーリと俺のスペアボディな訳で、機密情報が大量にあるのだから仕方が無い。

「シュテル、こちらの技術をミレデイに夢の中で教えておいてくれ」

「わかりました。それとその身体はどうしますか？」

「コレか。もはや不要の長物だが、残しておいてやれ」

「では、宝物庫だけ頂きましょう」

俺の身体から出た子供姿のシュテルが、抜け殻となったミレデイの身体から宝物庫の指輪を引き抜き、身体の方は椅子にさせる。それから、宝物庫の指輪を右手に装着し、虚空に手を突き入れて中身を確認していく。

普通なら死んでは居ないし、死んだとしてもミレデイでないといけない事ができないようにプロテクトが施されている可能性がある。だが、ミレデイを蒐集した事でその生態データを得られたシュテルならば容易く突破できたようだ。

「どうだ？」

「これなら私が望むものを作れそうです」

「そうか。このライセン大迷宮を任せていいか？ 俺は一旦、ハルツイナ樹海に戻り、それからハジメ達を追う」

「はい。こちらはお任せください。ハジメさん達が送られた出口はこの位置のようです」

「なるほど。なら、迎えに行くか。それじゃあ、頼む」

「はい。ハルツイナ樹海にある城と転移門を作成します」

シュテルが魔法陣を描き、城の転移門と繋げる。これにより、行き来できる。シュテルが作業してくれている間に神代魔法を習得した。もともと、適性はほぼないので俺には意味がない。

『あ、覚えられました』

『流石は美遊か』

魔法少女をできるだけあり、美遊は覚えられたようだが……俺には適性がなかった。頑張ればできそうだが、数センチくらいの重力球を作り出すのに数百センチの物を作り出すほどの魔力が必要だ。ぶつちやけ、これなら俺が使わずに美遊に使ってもらった方がいいくらいだ。それに重力といえばディアーチェだろう。

「それじゃあ、戻る。またな、シュテル」

「はい。それと清水さんが愛子先生と一緒にウルという村に向かっていきます。そちらとも一度、合流してみてください」

「了解した。身体に気をつけて、無理はしないように」

「ありがとうございます。気をつけます」

シュテルを抱きしめて、軽くキスしてから大迷宮を後にする。これからシュテルはここを改造するのだし、しばらく動けないだろう。それに帝国の方にも派遣しているようだし、そちらがどうなっているかはわからない。

にしても、清水と愛子先生か。こちらに引き入れたい人材だな。特に愛子先生。だが、そうなると教会や国が黙っていない。現状、相手側の戦力はまだ把握しきれていない。特に天使なんて存在がいるんだから、どんな隠し玉があるかわかったものじゃない。まずは穏便にエヒトの影響力を削ぐ方法を考えないといけないな。

第57話

さて、ミレディ・ライセンの魂を手に入れた。彼女の歩んできた人生はわからないが、ハジメから教えられただけでも極悪迷宮を作り出した奴だ。それに攻略者を煽りまくってきたらしいから、保険は入れておいた方がいい。エヒトに負けたとはいえ、大迷宮を作りだして神代魔法を他人に配布する事ができる存在なんだ。神の使徒や勇者よりも重要な存在だろう。

まあ、そちらはシユテル達に任せたらいいだろう。ミレディ・ライセンの命は俺達が握っているのだから問題ない。

転移ゲートで城に到着し、廊下を歩いてエレベーターに乗って上に向かう。そうしているとブレイコンコンピュータの中にあるとある世界で使われていた軍用通信を使ってハジメから連絡を受けた。

『やつと繋がったか』

『ライセン大迷宮に通信の中継器を持って行ってないからな』

『やっぱり衛星が欲しいな』

確かに衛星さえあれば基本的にはどこでも電波が届くはずだ。ああ、地球では多数の衛星を飛ばしていたから電波がほぼどこでも届くだけだったか。

まあ、未来の技術力で作られたうたわれるもののアマテラスなら問題ないかもしれない。なにせ気象だって操れるのだからな。

『エヒトが宇宙にまで目を向けていなければ可能かもしれないが……』

『開発の準備だけしておくか。調査は風船とかでも可能だからな。地球なら材質的な問題があったが、錬成を使えば解決はできるはずだ』
『監視装置をいくつか飛ばしてエヒトがこちらに気付くかどうかだな。もしも宇宙に目を向けていないのなら、アマテラスに光学迷彩をつけて宇宙に放てる』

『そもそもユーリ達の技術なら座標さえわかれば転送だって可能なはずだからな』

ハジメの言う通り、アマテラスを運び出すのは意外に簡単かもしれない。やはり、ユーリ達の技術力はチートといえるな。

『まあ、そちらは任せる。それよりも今はどこに居るんだ?』

『ブルックの町だ。位置情報は送っておく。合流するかどうかはそっちで決めてくれ』

『了解。俺もすぐにそっちへ行く。ライセン大迷宮はシユテルに任せとおけば大丈夫だからな』

『わかった。それと詩乃やアルテナ達を連れてくるなら、しっかりと首輪は嵌めさせておけよ。亜人なんだから襲われる可能性が高い。実際、何人かシアの首輪を見て溜息について離れた奴や、怪しい感じの奴を街中で見かけた』

『首輪か。連れていくのならつけさせる。いや、あえて襲わせるのもありか? 襲ってきた奴を返り討ちにして殺せば……』

『やめろ。歯止めが効かなくなつて最終的に町一つ、まるごと消す事になるかもしれんぞ』

『まあ、確かにそうなるかもしれないか』

『気を付けろよ。俺が言えたぎりじゃないが、殺人衝動をできる限り抑えろ。発散は別の事ですか、殺しても見つからないようにしろ』

『なら、少しゆっくりしてから向かうとする』

『そうしろ。お休み』

『お休み』
ハジメとの会話を止め、エレベーターから出て俺の居住スペースに向けて移動する。天守閣とその下が俺の所有するフロアだが、その下にある行政用のフロアを通らないといけない。

というのも、天守閣は寝室と俺の部屋、小さな厨房、衣裳部屋、小さな露天風呂などがある。その下の階に嫁達の部屋と食堂、露天風呂が用意されている。上の階に嫁達の部屋が用意されていないのはそれぞれが俺としている時に見られたくないなどの理由がある。イチヤイチャしている時に入つてこられても対応に困る場合があるし、

混ぜてくるのは俺としてはいいが、女性側からしたら嫌だという事で基本的に生活圈を上と下で別けることで解決をはかった。

ちなみに俺達の居住スペースの下は行政フロアだが、ここにはオシュトルとハク、カム者達の部屋も用意してある。他にも護衛の者達が過ごすスペースもある。まあ、俺の護衛は嫁達も交代で務めてくれるから問題ないんだけどな。下手をしなくても嫁達の方が桁違いに強い上にユーリ達科学組とルサルカの魔術、鈴の結界、恵里の死霊術による妨害と監視、優花……ヘイゼルによる暗殺者の思考を考査して実際に訓練として突撃してもらった。

このように嫁達が本気で組み上げた防衛力はえげつないレベルになっていたので、俺達が気付かないうちに侵入するのは不可能だ。

複数の監視カメラと魔物モンスターが入った壺、死霊が入った掛け軸などが配置されている廊下を進んでいると、曲がり角に到着した。その先に可愛いらしい先端が黒茶色で白い尻尾が見えた。彼女は複数の木簡もっかん古代の東アジアで墨で文字を書くために使われた、短冊状の細長い木の板。を持ちながら廊下を歩いている。

なので、横に並んで彼女の持っている木簡を全て横から奪い取る。流石に小さい彼女では運ぶのが大変だろうし、歩き方もぎこちないので心配だからだ。まあ歩き方が変なのは主に俺のせいだ。本番はしていないが、ネコネとリムリの身体は小さいので耳と尻尾をモフモフするついでに開発はさせてもらっているからだ。

「わはっ!？」

「ネコネ、持っていくのはオシュトル達のところでいいか？」

「あ、だ、旦那様!?! わ、わたしが持つのです! 帝であらせられる旦那様にお持ちいただくわけにはいかないのですよ!」

慌てて取り返そうとしてくるネコネの手が届かないように上げる。

「気にする必要はない。ネコネは俺の妻なんだから、嫁の荷物を持つぐらいは当然の事だ」

「ですが、お立場が……」

「それを言うのならネコネもだろう。それにこうすれば関係ない」
「あっ」

荷物を全て宝物庫の指輪に収納し、両手を空にする。これで何の心配もなくなったので、ネコネの小さな手を掴んで一緒に歩く。ネコネは恥ずかしそうに顔を赤らめているが、それもまた可愛い。

「宝物庫の指輪はどうしたんだ？」

「……あれはその、ハクさんの所なのです」

「ハクのか？」

「開発事業をしている町の方で使っているのですよ」

「ああ、それもそうか」

錬成を使つてとはいえ、町を一から作るとなるとどうしても資材を運ぶのに時間と労力がかかる。それを軽減できる宝物庫の指輪があればかなり短縮できる。まあ、ほとんどの者が大型重機のような存在ばかりなので色々と人力に比べてかなり楽ではあるのだが。

「宝物庫の指輪は量産が難しいからな」

「やっぱりできないのですか？」

「人手と資材が別の物に取られているからな」

空間魔法を使つて作る物なので、できなくはない。というか、宝物庫の指輪を作るよりも転送ゲートや城の開発に人手を使っていただけだ。そして今ユーリは食料を得るために植物の改造をしていて、シユテルは諜報とライセン大迷宮の改造と開発。デイアーチエがデバイス製造機器の開発とオルクス大迷宮の管理、運営。レヴィとアストルフオがハルツィナ樹海の護衛。鈴とルサルカは結界と探知用の罫を配置していたりしている。

詩乃は牧場みたいなものを作るために魔物モンスターのテイム中。優花は女性陣に料理を教えているし、アルテナとカムは町の開発をしている森人族達の陣頭指揮。ハクやオシユトル、ネコネ、リムリは全体の指揮。恵里はスケルトンを作成して労働力の確保。普通に考えて人手が足りん。ちなみにマテリアルズの分体達はデバイスの製造に力を入れている。チビット達もだ。

「必要なら用意させるが、いるか？」

「いえ、別に問題ないのですよ。町の作成も順調なのです」

「そうなのか？」

「すでに一割が完成しているのです」

「なら、十日ぐらいで町はできるな」

「有り得ない速度なのですが、その通りなのです。そこから都市にするにはまだまだ時間はかかるのですが、一先ずはこれで行く予定らしいのです」

「まあ、都市だけできても無人なら意味がないからな」

「なのです」

ゴーストタウンみたいなのになっても困る。

「まあ、人手は確保しに行く予定だ」

「召喚はしないのです？　町の中でなら維持する魔力を補えるはずなのです」

「その通りだが、これからの事を考えるとハクと護衛のレヴィ、アストルフオには万全の状態で居てもらいたいからな」

ぶつちやけ、魔導炉一つで数人は補えるのでレヴィとアストルフオが全力で戦っても問題ない。それこそ宝具を使っても構わないぐらいだ。結界などで持続的に使っている魔力を除けば六騎のサーヴァントを運用できる。なので、非常事にはルサルカや詩乃達だけでなく、オシユトル、ハク、リムリ、ネコネはもちろんのこと、アルテナをはじめとした森人族とハウリア族にも魔力が供給される予定だ。

そうなると六機の魔導炉では足りなくなってくるので、そちらの増設も考えているのだが……技術者がたりん。やはり、人手は重要だな。まあ、森人族とハウリア族が育てば彼等を指揮官にして魔物達モンスターを扱わせればある程度は回復するだろう。

「襲撃を考えているのですね」

「シユテル達から人族だけでなく、魔族も大迷宮の攻略を考えていると聞いたからな。ここに襲撃を仕掛けてくるのは確実だ。それに対処するためにも何時でも戦える用意はしておきたい。あと、ぶつちやけると触媒が足りない。だから、引きたいが今は諦めている」

「そうなのですな」

ネコネと一緒に話をしながら進むが、小さな身体のネコネでは歩幅が違う。もちろん、俺が合わせるのだが、ネコネがそれに気付いて早

足になるのだ。

「ネコネ」

「ひやつ!? な、何をするのです!? ま、まさか……」

ネコネをお姫様抱っこで抱え上げると、顔を赤らめてあたふたしだす。それに気にせずそのまま進んでいく。

「このまま運んで行く。この方が早いからな」

「ま、待ってくださいなのです! い、今は町とお城を往復して汗の臭いが……」

「ネコネはいい匂いしかないから平気だ」

「わ、私は平気じゃないのですよ!」

「そうかそうか。じゃあ、後で一緒に風呂に行くか」

「あつ……」

ガタガタと身体を震わせたすネコネ。ネコネにとって風呂の先へと進む行為は痛みを伴うし、恐怖が色々とあるだろう。

「嫌なら止めていいぞ」

「そ、それは駄目なのです……慣れてないだけなので、大丈夫なのです。リムリと一緒に優しくしてくれたら平気なのですよ」

「だが、最初はかなり痛いぞ」

「た、耐えてみせるのです。それにアルテナ様が痛み止めと気持ち良くなるお薬を調合してくれると言ってくれています。天国にも昇るような感じらしいです」

「それ、副作用は大丈夫か?」

「私とリムリの身体に合わせた専用薬として作ってくれているらしいので、大丈夫らしいのです。それにいぎとなったら、旦那様の体液を貰えば解決するはずなのです」

「なるほど」

状態異常になれば神水で回復は可能か。それにアルテナなら無茶な薬は使わないだろうし、最終手段として美遊に頼んで聖杯の力を使えば大丈夫だ。

「そ、それよりも、人手の確保なのです。どうするつもりなのですか?」

「色気のない会話ばかりだな」

「ご、ごめんなさいなのです。な、何を話していいのかわからなくて、どうしても仕事の話しになってしまおうのです……」

「いいよ。ネコネと話しているだけで楽しいからな。それで人手だったな。この世界で亜人は奴隷として扱われているのは伝えたよな?」
「はいなのです。だから、ここから少数で絶対に出るなど言われたのですよ」

「ネコネだったら、あっさり誘拐されるからな」

「子供扱いはしないで欲しいのです」

「大人でも誘拐されるんだから、子供だけじゃないさ。それだけネコネが魅力的だって話だ」

「あうっ」

照れだしたネコネをしつかりと抱え上げて彼女の顔がすぐ近くに
来るように調整する。既に震えはなくなっているようなので良かった。

「さて、奴隷として扱われている亜人達だが、彼等は売り買いされている。それを購入してこの国に送る予定だ。俺の神水があれば病気や怪我をしている亜人でも安く買い取れるしな」

「欠損していた場合はどうするのです? 確か、神水ではそこまでの力が無いと聞いたのです。兄様が回復したのは、兄様の身体が魔力によつて構成されているからのはずなのです」

「そうだな。だから欠損部分は別の物で補う。義足やそれこそ魔物モンスターでな」

「うわあ……」

「引くかもしれないが、魔物モンスターの腕は色々便利だと思うぞ。しっかりと意思疎通ができている前提だな」

「戦力として考えると、確かにベストなのでしょうが……私は嫌なのです」

「ネコネは俺の嫁だから、受肉したとしても再生させるさ。俺も実際に手足を再生させたからな」

「鈴さん達から聞いたのですが、無茶し過ぎなのです。もう旦那様の

身体は一人のものではないのですから、そのようなことをしては駄目なのです」

「嫁達の為なら片腕ぐらい別に構わないのだが、ユーリ達が悲しむからやらない方向で検討している」

「検討、なのですか」

「ああ」

「やれやれと言った感じで見られるが、こればかりは仕方がない。俺としては嫁であるユーリ達の方が優先だ。その為なら、ある程度の犠牲は仕方がない。まあ、そうならないように最善を尽くす。うん、ガチャの為にサクリファイスを使う事はない。」

『だめ、ぜったいです。使おうとすれば私が止めます』

美遊に止められたらどうしようもない。というか、ほぼ俺の身体はユーリ達マテリアルズと美遊に監視されている状態だから、どうしようもない。下手な事をすれば完全に管理される可能性すらある。いや、俺が普通に過ごしていれば恐怖心とかもないし、ユーリ達がそんな事をするはずもないので何の問題もない。俺が精神支配でもされた時の保険だな。ちなみに身体の操作権はユーリ達と美遊の合議制で判断されるらしい。マテリアルズは基本的にユーリに従うので美遊一人の力が大きな感じだ。

「どちらにせよ、病人怪我人問わずに連れてくる。人族も連れてくる予定だ」

「人族もですか？」

「ああ。宗教的な事で犯罪者とされている者達ややむにやまれぬ事情で犯罪を犯した者なら問題ないだろうからな。もちろん、しっかりと人選はする。国民にするのだから、その辺りは見極めや保険が必要だ」

「なのです。敵国の者が紛れ込んでいたら大変ですから」

スパイが居たら技術情報とか抜かれたり、防衛システムの穴をつかれたりするだろう。国防上の危険が多分に含まれる。

「っと、着いたのです。それで、その……できれば降ろして欲しいのです」

ネコネの言う通り、オシユトルが居るであろう執務室の前に到着したので、ネコネを降ろして一緒に入る。

部屋の中は広く、壁に埋め込まれた本棚が埋め尽くされている。ここは大人数が仕事をするための部屋になっているので、無数の机と椅子が設置されていて、シユテルとディアーチェの分体が働いている。部屋の奥にある上座のような場所にリムリが座り、その隣にある机にはオシユトルが居て、二人で様々な木簡を処理していた。

「兄様、ただいま戻ったのです」

「ネコネか……それに主上ではないですか。お帰りになられたのですね」

「ああ。ライセン大迷宮の攻略と支配は終了した」

「お怪我はありませんか？」

「大丈夫だ」

心配そうに声をかけながら立ち上がり、こちらにトテトテとやってくるリムリにしっかりと返事をする。

「それでしたら、色々とお聞きしたいのですな。いきなり居なくなつた理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「あゝ」

そう言えば伝えていなかったな。オシユトルはまるでお転婆だったヤマトの姫であるアンジュに言っていたような感じで伝えてきている。

「ハジメから救援要請が来たから、すぐに出なくてはいけなかった。すまない」

「これからは伝えて頂けると助かります。それに主上が出られなくても――」

「ちなみに明日からまた出るから」

「――主上？」

「現状、俺達の中で外に出ても問題ないのは人と同じ外見である俺達とハジメ達だ。だが、ハジメ達はあくまでも協力者であり、最優先事項は元の世界に帰るための方法を探す事。その手段が大迷宮を巡って神代魔法を手に入れることだ。逆に俺は国を作り、この世界で

生きていく事を目的にしている。そのためには数が必要だ。それはオシユトルもわかっているだろう?」

「ええ、わかっています。ですが、国主である主上が自ら出向く必要はありますまい」

オシユトルとしては国主である俺に万が一のことがあれば困る。ましてや俺が死ねば自分はともかくとして、ネコネやハクがどうなるかわからないからだ。一応、こここの魔導炉で顕現できる可能性が高いし、それこそ受肉してしまえば問題はなくなる。

「商人として亜人達を買い取るつもりだ。このような事を妻達に任せられるわけにもいかない。ましてや、彼女達の容姿ならば逆に襲われる事もあるだろう。やはり男手も必要だ。かと言って俺以外の男をつけるつもりもない」

「護衛として森人族かハウリア族を数人連れていけば問題ありませんまい」

「そうだが、俺自身が大迷宮を巡っていく必要もあるし、魂を集めなくてはいけない。でないと最終的にエヒトに負ける」

「せめて世継ぎを作ってから行かれませぬか?」

「無理だな。それにこの身体が減んだとしても、魂さえ問題なければ蘇る手段はあるさ。それにこれは決定事項だ。人手が足りない今、ここに居ても余り手伝えない俺が人材確保に動くべきだろう」

「……畏まりました。ですが、護衛はつけさせてください」

「妻達で大丈夫だ。いざとなればこちらに残していく者達を召喚すればいいだけだしな」

「ふむ。確かにその通りですな。では、引き継ぎをせねばなりませんので、明後日の出発でお願いいたしたい」

「わかった」

まあ、牢屋つきの魔改造馬車と商店用の馬車を作らないといけなからこれでいいだろう。

「あの、その旅に私もついていっていいですか?」

「リムリがついてくるのか?」

「はい。イヌイとして一緒に行きたいと思えます」

「わ、私も行きたいのです！ 見聞を広めてより良い国を作るためにも必要な事なのです！」

「ネコネまでか。二人共、外に出るといふ事は奴隷扱いする事になるぞ？ そうしないと襲われて面倒が増えるからな」

「わかってはいるのです。旦那様の奴隷としてなら問題ないのです」

「はい。私もそれで問題ありません」

双姫の二人に言われたら仕方がないが、怖いお兄様の方はどうだろうか？ 恐る恐るオシユトルの方を見ると、何かを考えていた。

「オシユトル、こう言っているが、構わないか？」

「……構いませぬ。ただし、奥方の中で優花様と鈴様は必ず連れていってくださるよう、お願い申し上げます」

「二人を守るためだな。了解。どうせなら全員に伝えないといけないから、集めてくれ。慰労も兼ねて宴会を開くでしょう」

「確かにそれがよろしいでしょう。直に準備させましょう」

「頼む」

「はっ」

オシユトルが指示を出してくれるので、後は任せていい。

「さて、俺は馬車の用意をしてくる」

「それは構わないのですが、その前にこちらの計画書に目を通して許可を頂きたい」

「全部任せるが……」

「そういう訳にはいきませぬ。そもそも我々では理解し難い技術も使われておりますので……」

「わかった。確認する」

「助かります。ネコネ、リムリ。二人は主上についてお手伝いを頼む」

「はい、兄様」

「畏まりました」

ネコネとリムリの二人に手を引かれて、リムリが座っていた席に案内される。先程までリムリが座っていたので、少し暖かい。

「まずはこちらからなのです」

「では、説明させていただきますね」

「頼む」

ネコネが広げた木簡に書かれた物をリムリが説明してくれる。二人共、小さいので俺が座った状態で同じくらい位置に顔がきているので、距離が近い。

「町が完成した後、農地の作成計画です。現在、ユーリさんが作られている実験場がここにありますが、こちらから問題無いと判断された作物を六つの区画に別けて配置します」

「それぞれ違う場所で作るのか？」

「そうなのです。計画では鈴さんの結界を使う事で温度管理と環境を整えられるとの事なので、そちらで年中育成する予定なのです」

「結界を使うから魔導炉の近くにある六つの区画か」

「そうなります。春夏秋冬の気候を再現し、残り二つは四つの季節を順番に回す予定です」

簡単に言ってしまうえば結界を使ったビニールハウス計画か。これなら年がら年中、作物を作り出せるし、ユーリが関わっているのだから育成にも魔力を使って問題なくできるようになるだろう。

「それとこの回す二つは皇直轄の物となりますので、私達が食べる物と実験用の場所になります。食べたい物があればこちらで作ってもらえますね」

「ここで取れた作物で食べきれない物は基本的に非常事態に備えて備蓄する予定なのです。商売用は他の畑から取れる物を民から買い上げて使う感じにするのですよ」

「なるほど。経済を回すためだな。まあ、その辺りは任せるとして……栄養が偏らないようにピーマンとかもしつかりと作らないとな」「うぐっ!?!」 ぴ、ピーマンは要らないのです」

「好き嫌いは駄目ですよ。旦那様も残さず食べてくださいね。作つてくれる優花さんに嫌われますよ」

「それは困るな」

「ゆ、ユーリさんに美味しくなるように改造してもらおうのです」

「栄養は変わらないようにしてもらえばいいが、忙しいからな」

「諦めましょう」

「うう……」

管理人は誰にするかという問題があるが、木簡を見る限りでは担当者アルラウネと森人族のようだ。植物に関しては彼女達、魔物モンスターを運用するのが正しい。協力し合って作ってくれとありがたい。防衛の為にもトレントを作るのもありか。

「見た限りでは問題ないな。水源の方はどうなっている？」

「そちらも問題ないのです。大迷宮から湧き出る水をろ過して使っているのです。水質改善用の施設は最優先でユーリさんとダイアーチエさん達が作り上げてくれたので、私達には影響がないどころか、栄養たっぷりのお水なのですよ」

「美容にもいいらしいです。温泉旅館の湯を混ぜたりしていますから……問題は……」

「太る可能性がある事なのです。旦那様も気をつけるのですよ。肥つたら、私達が潰れてしまうのです」

「大丈夫だ。俺には裏技がある」

「裏技、ですか？ 教えて欲しいです」

「そうです。ずるいのです！ どれだけダイエットが大変か……」

「サクリファイスで脂肪を代償に捧げる」

「……ずるい！……」

ネコネとリムリだけでなく、他の女性達からも突っ込まれたが、実際に出来るのだから仕方がない。調整をミスったらかなり痩せる事になるがな。

「これはガチャをいっぱい引いてもらうしかないのです」

「いえ、解析してもらって私達にもできるようになれば……」

「何故こんな便利な物を解析していないのですか！」

「そもそもユーリやネコネとリムリもそうだが、お前たちの身体は魔力で構成されている。受肉でもしない限り、太る心配はないからじゃないか？」

「……あ」

必要がなければ解析されて開発はされない。まあ、必要となるのは鈴、恵里、優花、アルテナ達だろう。どこまでやるかはわからないが、

今の所は必要ないんじゃないかな。永劫破壊エイワイヒカイトで固定されているだろうし。

「こ、この件は後々にしておくのですよ、リムリ」

「そうですね。その、怖いですし……」

二人を睨み付けている森人族とハウリア族の女性達から殺気のようなものが放たれている。彼女達も奈落を経験した者達なので、かかる重プレッシャー圧がやばい。魔力が物理的に重圧となって襲い掛かってくるような感じだ。ちなみに二人はそそくさと俺の後ろに隠れて事無きをえた。

「何をやっている。仕事をしろ」

「はい」

「で、では、次に上下水道の工事ですが、こちらはもう完成しているのです。それに伴い、設置された温泉旅館は城に移し、温泉水をパイプで町へと送るようにしたのです」

「我々が管理した方が色々と得ですからね」

町で管理させると利権や派閥が関わってくるので色々問題が起こるが、俺達が管理すれば国の収入として利用する権利を販売する事で公平に行き渡らせられるし、収入も手に入る。そもそも俺の持ち物なので言ってしまうえば王家の個人資産だ。俺も嫁達と使いたいのので城に移すのは何も問題ない。

「そちらはいいとして、頼んでいた件はできているのか?」

「はい。無料の公衆浴場と旅館を各エリアに設置し、皆が常に綺麗でいられるようにします。法律で二日に一度は身体を清めるように制定し、破れば病気などやむを得ない場合を除いて罰則を与えます」

「財源は? 管理費用がかかるだろう」

「お金は旅館の収益から出すのです。しばらくは旅館としての採算が合わないのですが、女性陣が増えれば絶対に旅館の方にお金を払っていくのです」

「おそらくですが、女性が綺麗になれば男性も女性の気を引くために綺麗になるようになるでしょう。そうなれば収益はあげられます。ただ、人がかなり必要になりますので、現状は赤字になりますね」

「問題ない。利益は別の所から吸い上げるし、福利厚生費用だという事にしておけ」

「畏まりました」

そもそも、サービス業になるわけだが、観光客など居ないのだから身内だけになる。なので、こちらの狙いとしては清潔にして身体を保ち、リフレッシュしてもらうことにある。そして、元氣よく働いてもらう。彼等が大迷宮から手に入れてきた素材を人族の領域で不要な物を売却し、利益を出せばそれだけで充分なのだ。

それに貴金属で貨幣を作っているこの世界では簡単に貨幣を発行できない。その金貨を俺達が大量に得て、様々な物を購入して溜め込めば物価上昇が起こる。そこに俺達が用意する者に炊き出しなどをさせ、それを狂信者共に邪魔をさせる。その時点で教会に禁止されたのでやりませんと言えればいい。こちらを異端者認定してこようが、適当に撃退すればいいだけだ。神の使徒が少数でも連れれば殺し合いをしてその辺りは壊滅する。そこは復興支援でもしてやればマツチポンプの完成だ。

このような事もできるので、相手側に経済的な打撃を与えたりするのもまたありだ。こちら側に被害はあまりないのもいい。まあ、商売して普通に大きくなれば細工や情報を抜いたりもできるので色々できる。この世は弱肉強食。勝てばいいのだ。そう奈落で学んできた。

「どう考えても大いなる父におんぶにだっこ状態なのですが……」

「仕方ないのです。何時かはあの人のように自立を考えないといけないとは思いますが、それは今ではないのです」

ネコネの言うあの人はライコウの事だろう。言ってしまうえばコードギアスのルルーシュみたいな奴だからな。内政役として欲しいが、何時、裏切られるかわからない。帝と同列扱いはされないうし、危険だ。

「俺達の子供がなしてくれるだろう」

「はうっ!?!」

そういうと、二人は真っ赤になって俯いてしまう。だが、実際問題

として子供は作る。そして問題なく教育できたら後は任せて隠居して好きに過ごす。永劫破壊エイウイヒカイトで不老になっているのだから、好き勝手に楽しませてもらいたい。その為にも愛の結晶である子供は必要だ。

「つ、次の案件なのです！」

「そうですね……こ、こちらは警邏隊と警備達の組織が必要ということですよ」

「警邏隊はパトロールが主で、警備隊は固定された位置に居る部隊だったか」

「はいです。広域警戒をする外部部隊と町を警戒する内部部隊なのですよ」

「樹海にあるもう一つの国、フェアベルゲンを考えて警邏隊は森人族を中心にして、ハウリア族を少人数編成してくれ。警備隊は逆だ」

フェアベルゲンからしたら、ハウリア族は許せないかもしれない。なので、軋轢を生まないためには森人族の方が有効だ。俺としてはどちらでもいいが、義理の父であるアルフレリツクの事を考えてこちらにする。ハウリア族を少数とはいえ混ぜるのは、彼等が諜報役としてすぐれているからだ。どちらも戦闘能力は問題なくなっているので、襲わされたらそれ相応の対処は可能だ。

「それとその、警邏隊には移動手段としてハイペリアを配属したいのですが、構わないですか？」

「ハイペリアって数が居たのか？」

「詩乃さんがライセン大峡谷に移動して増やしてこられましたね」

「確か、兄様の要請でしたのです。ですよね？」

「確かにお願いします。航空戦力の重要性はハクから聞いて某も理解しておりますので」

「そうか。しかし、こうなると人手がますます足りんな」

「はいなのです。ですので、戸籍の関係もあつて、私達が一緒に行つて向こうで処理してからこちらに送る方がいいと思うのです」

「確かにそうだな。だが、さっきも言ったが、危険だぞ」

「私はそれなりに刀が使えますので、ある程度は大丈夫です」

「私も巫術が使えるので問題ないのですよ。それにユーリさんからデ

バイスを作ってもらっているのです。使いこなせるとは思わないのですが、連絡手段としても便利らしいので、お願いしたのです」

「それなら大丈夫か」

何があっても俺が守ればいい。それにリムリ、イヌイの実力はある程度だろうが、ネコネの実力はゲーム通りなら結構強いはずだ。ゲーム通りなら、レベル30から50ぐらいか。ベヒモスを数人で倒せるぐらいの実力はあるだろう。あれ、こう考えるとネコネも結構強いな。よくよく考えたら、主人公と一緒に戦うパーティーメンバーなのだから、弱いはずがないな。

◇◇◇

「主上、準備が整いました」

ネコネとリムリの二人と共に作業をしていると、時間が来たようだ。必要な分は終了し、更に先の分まであらかた終わっているのだから問題はないだろう。あっても明日やればいい。

「わかった。行こう」

皆で移動したのは大きな謁見の間だ。日本式の和風な物で、上座は一段高くなっている。そこに横から、入り、前にかかっているすだれのような物が上げられる。

するとそこには森人族やハウリア族が集まっている。それだけでなく、近くの場所にはユーリ達も座っているので、本当に全員が揃っているようだ。

「急に呼び出してすまない。明日からの事について伝える。まず、俺も旅に出る。目的はハジメ達と同じ大迷宮の探索だが、同時に人材の確保を目的として行動する予定だ」

「具体的にはどうするのですか？」

「ハジメ達が冒険者として行動するらしいから、俺達は商人として行動するつもりだ。ここで取れる特産物を売り出すというわけだな」

ユーリの質問にしっかりと答える。

「人材の確保という事は亜人を助けて連れてくるのでしょいか？」

「アルテナの言う通り、その予定だ。対外的には奴隷として購入したり、救い出したりする予定だ」

「正当な手段で購入するととなると、亜人の値段が上がってハルツィナ樹海に捕まえに来る連中が増えるでしょうけど、その対策は？」

「何人かに残ってもらって、守ってもらおう。つまりだ、ルサルカ。襲ってくる連中は殺して構わない」

「なるほど、ある程度の連中を誘き寄せて殺すのね」

「そうだ。フェアベルゲンは基本的に無視しろ。監視だけして、誘拐された場合はハルツィナ樹海から出た時点で襲撃し、救助するようになる」

「……掟に従って死んだ扱いにさせるのですね。そうならば後はこちらで保護ですか？」

「そうだが、一応は帰してやれ。あちらでの境遇次第でこちらに引き入れてもいい」

「そうになると、身代金とは言わないけれど、救助した代金はフェアベルゲンに請求しましょうか。そっちの方が得でしょう」

「検討しよう」

「こちらも部隊を動かして救助するのだから、無償というわけにはいかない。怪我を負えば治療費だって、弾薬代だってかかるのだ。」

「それで主上。護衛はどうなさるのですか？」

「それなんだが、鈴と優花はついて来てもらいたい。いいか？」

「問題ないよ。まなまなど一緒にいいもん」

「私はご主人様から離れない」

鈴と優花の二人は即座に了承してくれたのでよしとする。優花の方は色々問題だが、最初と比べて少しはましになっているので大丈夫だろう。それにハジメを助けに行く時に連れていかなかったのもあるのかもしれない。

「他の者はどうするか相談したい。ユーリはどうする？」

「私も一緒に行きたいですけど、今回は残りたいと思います。まだ美味しい食材になるように品種改良した物が定着し、人に問題ないか

を調べないと駄目ですので……」

「我やシユテルもそうだな。開発で余り手が離せぬ」

「はい。ライセン大迷宮の方は一応、入口を見分けがつかないように破壊して偽装しましたが、何時まで持つかは不明です」

「ボクはハルツイナ樹海で皆を守っていたいかなく」

ユーリとマテリアルズがそれぞれ意見を言ってくれたので、こちらとしては問題ない。開発もかなり重要な事だし、こちらを任せておいた方がいい。

「わかった」

「あ、危なくなったら何時でも召喚してくださいね」

「うむ。それと念の為に我等の猫もつけておくとするか」

「そうですね。いざとなればそちらに意識を移して召喚までの時間を稼ぎましょう」

「確かにそちらの方が助かる」

「あ、お土産はよろしくね〜！」

「お土産か。何か用意しておく。ユーリ達はこれでいいとして、恵里はどうする?」

「もちろん、一緒に行くよ。詩乃も行くでしょ?」

「うん。牧場の方は任せればいいし」

これでメンバーは鈴、恵里、優花、ネコネ、リムリとなつたか。残りはアストルフオとルサルカ、アルテナか。ただ、詩乃達には伝えなれないといけない。詩乃は既に理解はしているはずだが、一応な。

「それと詩乃達は俺の奴隷扱いになる。もちろん、泊まる時とかの部屋は同じだが、色々と嫌な視線や言葉を受けることになるだろう。それでもいいか?」

「覚悟していたから平気。それに色々心配だし、ね」

「そうか。アルテナは……」

「行きます。私の役目は主様のお世話です。主様がおられないこの国に居る必要はありません」

「森人族の事はどうするんだ?」

「他の者に任せてありますし、問題ありません。ですよね?」

「はい。むしろ、姫様には重要な事に関しては触れていただいておりません。何時でも主上にお呼び頂いてもよろしいようにしておりますゆえ」

ハブられているのかと少し心配したが、そういう理由なら納得できる。何時でも抜けていいように最初から象徴として扱ひ、居る時は適度に指揮を任せて本来の指揮官が助言している感じなのだろう。あくまでも名目上のトップはアルテナだが、実務は別と。それに森人族からしたら、俺とアルテナを外す選択肢はほぼないか。

「アストルフオとルサルカはどうする？」

「んくなんとなくこつちに居た方がいい気がするんだよね。やりたいいこともあるし」

「そうか。ルサルカは来てくれるとありがたいが……」

「お誘いは嬉しいけれど、今回は遠慮しようかしら」

「え？」

「ほら、私は優花を助けに出る時にデートしたしね。それに現代式の軍事教練ができる人つてこつちに居ないもん。ハクは知識としては知ってるかもしれないけれど、無理でしょ」

「あく確かに銃器を使った戦いだけじゃなく、機動戦術とか言われてもわからんな」

「それに永劫破壊エイワイヒカイトを使えるのが居なくなるし、私が残るのがベストよ」

確かに恵里まで出ると永劫破壊エイワイヒカイトを使えるのが居ないな。ユーリ達も使えるかもしれないが、問題があるかもしれない。ルサルカなら問題はないだろう。魂の容量はあるはずだが、俺の方へと流し込めばいいだけだしな。

「じゃあ、連れていくメンバーは鈴、優花、恵里、ネコネ、リムリ、詩乃、アルテナ、美遊だな」

九人となると、結構な大所帯だが、店をやるとしたらこれぐらいは必要か。見張りの交代とかも必要だろうし。

「他に決める事は……そうだ。ハク」

「な、なんだ……？ 嫌な予感がするんだが……」

「ある物の調査と改造を命じる。やってくれ」

「おい、まさか……」

「必要になるかもしれないからな。やってもらおう事は……」

衛星軌道からの観測とエヒト達がこちらに気付くかどうかを調べラピユタとアマテラスの調査も頼む。人手はルサルカとアストルフオ、レヴィ達が手伝えば問題ないだろう。

「サボれると思ったのに！」

「あつはつはつは、諦めてくれ」

「そうだぞ。あんちゃんだけ楽にはさせねえ」

「ハクさん、頑張るのです」

とりあえず、明日は馬車を用意してからラピユタを探索し、次の日に出発だ。ハジメには悪いが、ラピユタの調査を先にさせてもらおう。ひよつとしたら、拠点ガチャなんだから普通に手に入っているだけの可能性もある。それに戦力がある段階で調査すれば最悪、巨人兵は倒す事ができるだろう。どちらにしろ、鈴の結界内で行う。

「えっと、本日はもう決める事はないです？」

「そうだな。他に何かあるか？」

「酒を作りたいぐらいだな。酒の作り方は誰か知っているか？」

「お酒か……もちろん、知っている」

「未成年なのになんで知ってるの？」

「それはね、鈴さん。異世界物の小説で鉄板だからさ。ちなみに調べたデータはタブレットやスマホに入っているから、データを転送しておく。そんなに飲みたいのなら、仕事として許可するから作るという」

「仕事が増えるじゃねえか……いや、生成魔法を覚えたから結構簡単に作れるか。鈴の協力があれば……」

ハクが色々と考えだしたので、あちらは放置する。酒は俺達では飲めないしな。

「私にもかませなさい」

「いいぜ。ルサルカは何が好きだ？」

「ワインも好きだけど、ビールもいいわね」

「某も……」

大人組が酒の話で盛り上がってきたので、もうここいらでいいか。皆を見渡しても問題なさそうだ。

「ネコネ」

「はいなのです。それでは今回の緊急会議は終わりなのです。続いて宴を行うのです」

ネコネが手を叩くと、外からハウリア族と森人族が入ってきて、複数の箱を皆の前に置いていく。その中には炭が入っていて、箱の上には網が置かれている。

「優花」

「はい。今日は肉を自分で焼いて食べてもらいます。この肉は魔物モンスターの肉ですが、特殊な技術で作り上げたタレに漬けてあるので、たぶん普通の人でも食べれます」

「たぶんなんですネ」

「試食はしたけれど、私は大丈夫だった。ただ、普通の人がもう居ないからわからないの」

「まあ、ここに居るのは全員が魔物モンスターの肉を食べても問題ない奴だしな」

「そうだね。美味しければいいよ」

ユーリ、俺、恵里の順で発言する。皿に乗った肉が目の前に置かれていく。見る限りでは美味しそうには見えない。見る限りでは、だが。

「それと白米を用意してみた」

「おお、白米！」

「お兄ちゃんが食べたそうにしていたので、優先して用意してみました。味はお兄ちゃんの味覚データを利用して作ってあるので、日本の物になりますね」

「大好きだぞユーリ！」

「えへへ」

「おにぎりもいいね！ 作ろうよ！」

「確かにそっちもいいかも」

「私も作ってみようかな」

「お水と塩を用意するね」

鈴や恵里、詩乃達、優花の日本組がおにぎりを用意していくので俺も頼もう。他にも野菜が色々出てきたので、それらを焼いて皆で食事をしていく。肉は普通に美味しかった。筋もしつかりと切られているし、果物の甘みも染み込んでいた。久しぶりの日本で食べられるような食事は大変美味だった。それに肉の下処理はルサルカが手伝っているのだろうし、後でお礼を言っておこう。

楽しい食事が終われば臭いの事もあるので、嫁達を連れて大きい方の露天風呂に移動して優花達に身体を洗ってもらおう。俺は俺でリムリとネコネの身体を隅々まで洗う。その後は風呂から出て、馬車の改造案を作る。

こちらはキャンピングカーを代用して作る。馬は奈落産の魔物^{モンスター}、ラプトルモドキを使う。本当はテイラノサウルスでも持ってきてもいいが、流石に問題があるだろうしな。そもそも重力魔法を使って重量は軽減するので問題はあるまい。

美遊と一緒に制作の準備をしていると、髪の毛を乾かして髪形などをしつかりと整えた皆が戻ってきた。皆は寝間着にしているラフな恰好で、肌がかなり露出している。しかし、そんな皆の中でネコネとリムリだけがお姫様としての恰好、正装した状態でうつつすら香水もつけている。

「私達は自分達の部屋で寝るので、今日はこの二人を可愛がってあげてください」

「いいのか？」

「はい。皆で相談して決めましたから。だから、あまり無茶な事はしないであげてくださいね。明日は全員で相手をしますから、その時にいっぱいしてください」

「わかった」

代表してユーリが伝えてきたので、頷いてからネコネとリムリの双姫を見る。

「流石に嫁入り衣装は用意できなかったのですが、こちらになりましたが……駄目でしょうか？」

「その、すぐに脱ぐので許して欲しいのです」

二人が顔を真っ赤にして、身体を微かに震わせながら伝えてきたので、優しく頭を撫でて抱きしめる。それから二人を優しく持ち上げてベッドへと連れていく。

「いいんだよね？」

「はいなのです。私達の全てを旦那様に捧げるのです」

「二人一緒に可愛がってください。それとどれだけ泣き叫んでも、最後までしてください。それさえして頂ければ、お好きなようになさっていただいで構いません」

「いいのか？」

「むしろ、一思いに無理矢理にでもやってくれた方がいいのです。早く慣れた方が楽になるのですよ」

「二応、二人には痛み止めと痛みも楽しめるようになるぐらい強い媚薬を処方しているので、問題ないと思います」

「それはそれで問題ありそうだな」

「あまり強い痛み止めは後々に問題を残す可能性が高いので、こればかりは仕方ありません。効いてくるのにまだしばらくはかかりますので、それだけは気をつけてください。危なくなればこちらの薬を飲ませてください。解毒薬です」

「わかった」

「それではお楽しみください」

アルテナがそれだけ言って出て行った。他の皆も気をきかせて既に居なくなっていたので、三人だけだ。

「まずはご奉仕から致しましょうか？」

「そ、そうなのです……」

「いや、その前にキスからだな。しっかりと愛してやるから、安心してくれ」

「はいなのです……んっ」

「わ、私も……」

二人を抱きしめて軽いキスをしてから、舌を絡めていく。二人の震えがなくなるまで口付けをしながら頭や背中を撫でていく。次第に

耳を口に咥えたり、尻尾を撫でたりする。二人はそれだけで凄く感じているようで、気持ちよさそうに喘ぎだしていく。

第58話

ネコネとリムリの二人と愛し合った次の日、ラピユタの探索を行うことにした。ラピユタは天空の城と呼ばれるだけあって、外に出て呼び出した。

巨大な魔法陣が展開されて馬鹿みたいな魔力と召喚キャパシティを消費した。300も使うとか、愛歌の半分以下だが普通の者達と比べると数倍だ。

魔法陣から浮き上がるように召喚されたラピユタは自動で空へと移動し、途中で停止する。すると周りを確認すると中央に大樹が存在したので、そちらに移動してみた。

ラピユタの中を探検をしようとすると、目の前にロボット兵が現れてピコピコと音と点滅させながら手を出してくる。その手にはペンダント状の飛行石が存在している上になんて言っているのかわがわかってしまった。

そう、俺達には言語理解というチートスキルが存在したので、ロボット兵の言葉もわかったし、制御端末の操作方法もわかってしまった。

後はもう拍子抜けするほど簡単だ。我等が誇る科学者連中。ユーリやハク達があっさりシステムを解析したのだ。後は操作と改造をハクが行う事になったが、そちらは時間がかかるのでハクに任せると。

とりあえず、ラピユタは自前でエネルギーを生成できるのでそれを持って維持コストにあてる。だが、戦闘や生産をすると飛行石のエネルギーはかなり無くなってしまうので魔導炉はおいおい設置し、とりあえずの突貫作業としてはソーラーパネルを複数設置して電力供給を行わせることにした。

まあ、ラピユタの件はこんな感じで終わり、俺は次の日に鈴達と共に馬車に乗って旅に出た。馬車にはラピユタから手に入れた金銀財宝やハルツイナ樹海から得た薬草など、金になりそうな物を積み込ん

でいる。武具に関しては売り物としてユーリ達が片手間で作り出した粗悪品だ。

一緒に居るのは鈴、恵里、優花、美遊の人間組と詩乃、アルテラ、ネコネ、リムリの亜人組。詩乃に関しては微妙に違うが、アバターがケットシータイプなので亜人側だ。総勢、八人と一人の旅というわけだ。

用意したのは全長五メートル、横幅二メートルの箱馬車を二つ用意した。一つは俺と嫁達で使う箱馬車で、もう一つは牢屋がついている箱馬車だ。この二つは連結させてあるが、切り離せるようにできている。それに途中でラプトルモドキを追加で二匹を繋げるようにできているのでこの馬車自体で逃げる事も可能だ。

前方の居住空間の馬車は天井にソーラーパネルを設置してあるし、魔力の代わりに電気で灯りを確保できる。それにキッチンとシャワー、トイレも設置してあるので、生活は可能だ。もちろん、大きなベッドやソファ、テーブルなども設置した。

そんな馬車をラプトルモドキ四匹に引かせている。一応、これ以外にも護衛用の魔物モンスターも連れて行くかと思ったが、街での対応が凄い面倒になるのは止めた。魔物モンスターを調教する技術は人類側にはあまり発展していないからだ。それに護衛の戦力は俺達だけで十分だしな。

そんな感じでフューレンの町へ目指して出発した。ブルツクの町でないのは俺達が色々とやっている間にハジメ達が移動したからだ。それ以外の問題は移動中が凄く暇になる事だ。なので必然的に嫁達の談笑と快楽を伴う接触が増えていく。

「むう、これは結構難しいですね」

「確かにそうなのですが、覚えるしかないのですよ。あの、詩乃さん、ここはどうしたらいいのです?」

「ここはここをクリックすればいいの」

といっても、同時に全員の相手はできない。なので馬車の壁際に設置されたパソコンの前にある椅子にネコネとリムリイヌイが詩乃を挟んで座っている。ネコネとイヌイの前にはパソコンが置いてあり、操作方法などを詩乃が教えている。

ネコネとイヌイはこれから手書きで木簡などを使う内容から、パソコンによる電子システムへと移行させる。やはりパソコンを使う方が作業効率が全然違うからだ。なので覚えるしかない。

「頑張ってる。でも、やっぱり慣れるまで時間はかかりそうかな」

「うんうん。鈴もよくわかってないところもあるしね」

「それなら今度教えてやろうか？」

御者台に座って隣に居る恵里と鈴がそれぞれ左右から俺に頭を預けて来ているので、こちらも肩に手を回して二人の肩を抱いている。当然、二人の体温と匂い、柔らかさも堪能できる。

「それはそれで嬉しいけれど、もうブレインコンピュータがあるから思考で操作できるからね」

「そうよね。データは送信すればいいだけだし、そう考えるとキーボードとか、必要ないのよね」

「あつた方が使い易いかもしれないけどな」

二人が顔を擦りつけてきたり、臭いをかいで来たりもしている中、ゆっくりする。朝と夜、二回の運動が色々とあるからだ。

基本的にローテーションを組んで夜と朝組に別れ、当番の子達が満足するまで相手をしている。全力で気絶までするのは流石に外だと安全面が確保できないからだ。

本気で満足するまでやる時は街中で護衛を四人残して、二日にかけて交代で相手をする事にした。それも俺が課題を達成したご褒美としてだ。課題は色々と用意されている。例えばユーリから出された科学的な問題やルサルカから出された魔術的な問題。リムリやネコネ、オシユトルから出された皇としての問題もある。それに加えて商売に関する情報などもあり、とても大変だ。

特に各街々に配置しているシユテルの分体や分身達に頼んで集めてもらった市場価格や需要と供給などのデータを収集させ、それらをビックデータとして貰って解析している。高性能なブレインコンピュータと美遊の手助けもあって大体の知識は得られているので、後は商売で生かすだけだ。

ちなみにここに居ないアルテナと優花だが、二人は現在ベッドで

眠っている。彼女達は夜の護衛をお願いするので仕方がない。

といっても、重力魔法によって馬車の車輪が微かに地面から浮かび上がっているので、重量はほぼ感じないように軽減されている。重量軽減とラプトルモードキ自体に施された強化魔術によってかなり速度を出せていた。そのせいか、すでにフューレンの町が見えてきている。

「速度を落とさないとな」

「列にならぶんだよね？」

「ああ。それとステータスプレートの隠蔽はしっかりとしておいてくれよ」

「了解。とりあえず、ステータスは高いのが500でそれ以外は100にしておく？」

「それでも十分に高いと思うぞ」

「え」

「鈴、いくつにしてるの？」

「オール1200だけど……」

「桁一つ下げたおけ」

ちなみに俺達のステータスは既に万単位を超えている。というのエイヴィヒカイトも永劫破壊によって格段に強化されているためだ。魔物モンスターと人の魂を吸収して強化しているわけだな。

「それと結界師というレア職業も変えておいた方がいいな」

「じゃあ、商人にしておく？」

「それでいいかも。面倒だしね」

「私もそうしておこ。まなまなはどうするの？」

「俺は奴隷商にでもしておく。これが奴隷を扱う上で一番いいしな」

「そっか。それじゃあ、鈴は普通の商人で、えりえりは……」

「武器商人かな。優花はどうする？」

「優花は暗殺者でいいとして、名前も念の為にハイゼルに変えておくように伝えてくれ」

「了解」

恵里が席の横から後ろに下がっていったので、鈴の頭を撫でて

ステータスを修正する。他の面々は亜人や召喚した存在なのでステータスプレートは所持していない。代わりにしっかりと首輪をつけておく必要があるのだが、昨日のうちに手づから嵌めておいたので大丈夫だ。ちらりと後ろに視線をやれば詩乃やネコネ達の首にはしっかりと首輪が存在している。

「ん〜ここに南雲君達がいるんだよね？」

「そのはずだ。ここから更に移動していなければただけだな」

「ユエユエ達が元気ならいいけど〜」

「厄介ごとに巻き込まれてないかも心配だな」

そんな話をしていると、優花達も起きてきた。彼女達もステータスプレートをしっかりと隠蔽しているのを確認してから、馬車用の所に並ぶ。だが、他の馬車よりも明らかに大きいのでかなり目立つ。だが、この街なら問題なく入れるだろう。

【中立商業都市フューレン】

高さ二十メートル、長さ二百キロメートルの外壁で囲まれた大陸一の商業都市らしい。あらゆる業種が、この都市で日々のぎを削り合っており、夢を叶え成功を収める者もいれば、あつさり無一文となって悄然と出て行く者も多くいて奴隷落ちする者までいる。観光で訪れる者や取引に訪れる者など出入りの激しさでも大陸一と言えるだろう。

その巨大さからフューレンは四つのエリアに分かれている。この都市における様々な手続関係の施設が集まっている中央区、娯楽施設が集まった観光区、武器防具はもちろん家具類などを生産、直販している職人区、あらゆる業種の店が並ぶ商業区がそれだ。

東西南北にそれぞれ中央区に続くメインストリートがあり、中心部に近いほど信用のある店が多いというのが常識らしい。メインストリートからも中央区からも遠い場所は、かなりアコギでブラックな商売、言い換えれば闇市的な店が多い。その分、時々とんでもない掘り出し物が出たりするので、冒険者や傭兵のような荒事に慣れている者達が、よく出入りしているようだ。

つまり、命知らずな馬鹿共が多いという事に他ならない。商売する

場所は闇市がいいのだが、そうすると普通の客が来るかはわからない。まあ、奴隷商売なんてしている奴は基本的に非合法だろうから問題ない。

「ん〜ついたの?」

「ああ。優花達は眠そうだな」

「ん、まだね眠い……」

「ステータスプレートさえ偽造できていたらいいぞ」

「わたしたちは情報隠蔽は得意。任せて……」

「そういえばジャック・ザ・リッパーは情報抹消を持っていたな
「ん」

半裸状態で眠そうにしている優花を後ろに戻し、順番を待つ。少しすると順番が着て兵士がこちらにやってきた。それから、不思議そうにしながらも警戒しつつこちらを見ているので扉を開けて外に出る。すると兵士達はかなりホツとしたような感じがする。何故だろうか?

「そこが扉だったのか……」

「そうだ。この馬車は我々が開発した新型でね。大型だが荷物を運ぶのにはいい」

「な、なるほど……だ、だが、この凶悪な魔物は……」

「ああ、こいつらか」

どうやら兵士達が怖がっていたのはラプトルモドキ達らしい。俺達にとっては雑魚だが、奈落産の魔物モンスターであるため、兵士達は見たこともないのだろう。その魔物達モンスターが鎧を身に纏っているのだから、怖いのも納得する。

「ライセン大渓谷を知っているか?」

「あ、ああ……」

「あそこに生息している魔物モンスターを捕らえて制御下に置いている。魔法をかけ直さなければいけないが、便利なのでな」

「ま、魔族共の力か?」

「闇魔法をご存じないか?」

「詳しくは知らない」

「そうか。まあ、魔族共と同じかはわからないが、手に入れたアーティファクトで操っているのは変わりない」

ラプトルモドキの横に立ち、撫でてやると気持ちよさそう喉を鳴らす。同時に鈴と恵里も降りて来てラプトルモドキたちに餌の肉を与えていく。

「この通り、襲う相手は敵だけだと調教してある。街中に入れるのが問題なら外で待機させるが、商品を積んでいるので、代わりの馬車か馬を手配して頂きたい」

「それはなんとも言えないので確認してくる」

「頼む」

兵士達の一部が門へと走って行くので、残った者と話をする。

「この街に来た目的は商売でいいのでしょうか？」

「その通り。帝国の方から奴隷を購入してくるように依頼されている」

「……前線は大変らしいですからね」

「ああ、そうらしい。直接は見えないが、色々大変みたいだ。中立の商業都市なら質のいい奴隷が沢山手に入ると思ってきたのだが、問題ないだろうか？」

「こちらとしても問題ありません。ただ、ステータスプレートを確認してもよろしいでしょうか？」

「もちろんだ」

俺と鈴、恵里、優花ハイゼルのステータスプレートを渡して確認してもらう。

「え、男？」

「何か？」

「いえ、失礼しました。マーナ・ライン様ですね。天職は奴隷商で、ステータスはかなり高いですね」

「これでも危ない場所に色々と出向いて商品を手に入れているので」

「三名は確認できましたが、後一名は……」

「中に居る。それと奴隷が三人だ。奴隷の方は亜人だからステータスプレートは持っていない」

「荷物を検めさせてもらってもいいですか？ これは税金に関わる事

なので、全員にお願いしております」

「わかったが、少し待ってくれ。鈴、ヘイゼルが服を着ているか確認してきてくれ。寝ぼけてまだ半裸の可能性がある。それと奴隷達も出してくれ」

「了解」

鈴が馬車の中に戻ってから、話し声が聞こえてくる。やっぱりまだ着替えていなかったようだ。少しすると眠そうな優花がちゃんとヘイゼルの恰好をしながら出てきた。腰には刀を差していて、口元には黒いマフラーを巻いている。肌色のセーターに赤い上着を着た彼女は兵士達を一瞥してから、すぐに背中を馬車に預ける。

「彼女は……」

「ヘイゼルだ」

「天職は暗殺者ですか……」

「護衛として重宝している。それに夜の警備も担当してもらっているので、あまり刺激しないでやってくれ。敵と間違えてバツサリやってしまうかもしれない。正直、ライセン大渓谷でこいつらを捕獲できたのは彼女のお陰でもあるんだ」

「わ、わかりました。指名手配などはされていないので問題ないです。奴隷の件ですが……凄いですね。森人族に虎人族、それに彼女達の種族はなんでしょうか？」

「わからない。だが、従業員としていたので彼女達は非売品だ」

出てきたネコネとアルテナはそれぞれ怖がってイヌイと詩乃に抱き着いている。詩乃達は無遠慮に見られる視線に睨み付けていた。

「ネコネ、目録を頼む」

「は、はいなのです！」

すぐに俺の横にやってきて目録を渡すと、俺の後ろに隠れた。散々脅してあるから、ネコネ達にとつては怖い存在だろう。

「確認させていただきます……宝石類と薬草、武器ですか……」

「武器類は売れなければオルクス大迷宮の方へと運ぼうと思っている。何せ勇者様達が召喚されたと聞いたからな」

「なるほど……この財宝は……」

「途中で寄ったハルツィナ樹海から手に入れた物だ。この奴隷達も一部はそこで手に入れた。だから、調教も完全に済んではない」

「わかりました。税金の計算をしますので、少々お待ちください」

兵士達と一緒に馬車の中身も確認してもらおう。積み込んだある箱を開けて中身の確認をしてもらい、隠している物がないか、キツチリと調べてもらおう。

一時間ほどかかったが、問題なく税金を支払って通行の許可を得た。前にルサルカとデートした時に貨幣は確認しているし、一部はちゃんと取ってある。それを使えばいいだけだ。

「確かに受け取りました。これが受領書です」

「ああ、ついでにこの街で商売するには商業ギルドに行けばいいのだろうか？ 基本的にあちらの方で動いていたので、国が変われば細部が違うかもしれないので教えて欲しい」

「そうですね。商業ギルドの方で登録されれば問題ないかと思えます」

「何処にあるかな？」

「場所は……」

無事に教えてもらったので、お礼として一万ルタを渡して馬車を動かしていく。それとラプトルモドキはちゃんと口枷などをしておけば問題ないようだが、普通の馬小屋などでは預かれないだろうとも言われて、高い宿を教えてください。

「それでどうするの？」

「まずは商業ギルドに向かう。交渉に関する事だから、俺と……」

「私が行くのです。ヤマトでも経理とかの仕事はしていたので、問題ないのです。ただ、私が交渉できるかという問題があるのですが……」

「それなら、俺の中に入って交渉すれば大丈夫だ。護衛は優花、ハイゼルについてきてもらおう。鈴と恵里は馬車を持って行って宿の確保を頼む」

美遊も居るから、二人で協力してもらえばきつと大丈夫だ。

「荷物はどうするの？」

「とりあえず、登録して宝石とかを一部売ってくる。オークションがあるのなら、そっちにする予定だから普通に持つていくさ。そうだな……悪いが、詩乃も荷物持ちとしてついてきてくれ」
「任せて」

本当は荷物なんて俺が持てばいいのだが、奴隷に持たせないで主人の方が持つと問題がある。普通の連中なら問題ないが、エヒトの狂信者共に見付かれば異端者扱いされる可能性もあるからな。

「アルテナとイヌイは鈴達について行ってくれ」

「わかりました主様」

「そうですね。確かに鈴さん達の方は戦力が少ないですし、了解しました」

商業ギルドに行くのが俺と美遊、ネコネと優花、詩乃の五人。宿を確保するのが鈴、恵里、アルテナ、イヌイの四人だ。

「落ち合うのは何処にする?」

「ハジメ達と合流したいから、冒険者ギルドか宿で合流だな。馬車に見張りを置いておきたいし、鈴か恵里のどちらかと、アルテナとイヌイのどちらかは馬車に残ってくれ。必ず二人一組で人と亜人のペアになるようにな」

「了解だよ。えりえり、どうする?」

「冒険者ギルドには興味があるから行ってみたいかな」

「それじゃあ、鈴がお留守番しておくね」

「でしたら、私が残りますね。鈴様は攻撃力がありませんが、恵里様の方は前衛が欲しいでしょうし……」

「確かにそうかも。僕も簡単に負けるつもりはないけど、前衛が居ると居ないのとじゃ全然違うしね」

「鈴が守ってアルテナが攻撃すればそちらは問題ない。イヌイと恵里が互いに支援すればどうにかなるだろう。最悪、イヌイは時間を稼いで恵里が死霊術かネクロノミコンを行使すればそれで終わりだ。他に何か聞きたい事はあるか?」

皆を見渡すと、恵里が手を上げてきた。

「僕達に手を出そうとしてくる愚か者共の対処はどうする?」

「穏便に最初は話し合いで帰ってもらえ。それが無理なら、処理は任せる。どちらにせよ、どんな要求であろうと皆を売る事は断じて有り得ない」

「つまり、殺つてもいいんだね」

「ああ、構わない。だが、どうせなら絞り尽せ」

「了解。そういうのは得意だよ」

ニヤリと笑う恵里に俺も笑い返す。俺達を見て他の皆はなんとも言えない表情になっていたが、気にしない。俺と恵里、どちらに当たるのが不幸なのだろうか？ おそらく恵里だろうな。何せ俺は簡単に殺してやるが、恵里は違う。そう考えると一番の当たりは鈴達だろうな。

第59話

中立商業都市フューレン。商業都市というだけあって商業ギルドの力は絶大みたいで、とても巨大だ。その建物の前に馬車をつけると、優花が先に降りて安全を確保してくれる。

その後に詩乃が降り、ネコネを身体に宿してから馬車を見送ってギルドの中に入る。ギルドの中はとても金がかかっている内装だ。

「それでどうするの？」

「私はわからないから、全部任せる」

「だね」

詩乃と恵里はわからないようなので、俺の左右についた。

『まずはギルドについての確認ですね』

『その後は交渉です』

「とりあえず、説明を受ける」

美遊とネコネの声を聞きながら、次の予定を説明する。

「了解。全部任せる」

「その方がいいね。私達はあくまでも護衛」

「うん」

「じゃあ、行くぞ」

「はい」

とりあえず、受けつけに居る人を確認する。美男美女の人達がいて、しっかりと働いている。さて、ここで何処に並ぶかが問題だ。そう思っていると、詩乃が俺の腕を抱きしめてくる。もう片方の手を優花がおらずおらずと掴んで同じようにした。

「こっちなね」

「うん。こっちがいい」

二人に引っ張られていったのは男性が居る受付カウンターだ。ま

あ、彼女達からしたら他の女に目移りされるよりはいいという事なのだろう。

「ようこそお越しくださいました。本日はフューレン商業ギルドにどのようなご用件でしょうか？」

「商業ギルドに入った場合のメリットとデメリットを聞きたい」「かしこまりました。ご説明させていただきます」

簡単に言えばメリットは銀行みたいに資金を預かったり、両替したりができる事と所属している商会を通してそれぞれの商材をやり取りする事ができる。鉄が欲しいとなると、行商に依頼したりなどだ。

デメリットとしては年間の売上の四割を商業ギルドに収めないといけない。これはかなり痛い。痛すぎる。

「また商業ギルドに登録しない限り、街で商売はできません。商業ギルドに所属していれば護衛なども補助してもらえます」

『この国と街の法律についてシユテルさんが調べてくれています。商売ができないというのは法律で規定されていないのです。ここ、中立商業都市フューレンも例外ではないのですよ』

『それにいざとなれば街の外で商売をしてもいいかも？』

「なるほど。しかし、こちらが調べた限りでは商業ギルドに所属していなくても商売はできるはずだ。できないという法律の規定は存在していない」

「それはそうですが、商品の仕入れや店舗の場所など、既に空いている場所もありません」

「それさえどうにかなれば問題はないのか」

「襲われる可能性は充分にあるので気をつけて頂かないといけません
が」

「確かにそうだな。もう一つ聞きたいのだが、いいだろうか？」

「なんででしょうか？」

「商業ギルドに登録しないと宝石などを売る事はできないのだろうか？」

「いえ、そちらでしたら直接商店に訪ねて頂くか、こちらでも買い取る事は可能です」

「そうか。では、こちらの宝石類はいくらくらいになる？」

宝物庫から、拳くらいの大きさがある宝石を幾つか取り出して渡す。

「かしこまりました。お預かりいたします」

「いや、目の前で鑑定してくれ」

「こちらが信じられないと？」

「取り変えられては困るのだ。目の前で査定しないのなら断ろう」

「少々お待ちください」

少し待つと、担当の者がやってきて、目の前でしっかりと鑑定してくれた。値段は相場よりかなり低かったので、断ろうと思ったが、ネコネの言う通りにしたらどんどん値段が上がっていった。最終的に相場と同じぐらいの値段になったのでよしとしよう。

『まあ、もう少し値段を上げる事はできそうなのですが、これぐらいが妥当なのです』

「それではこの値段で引き取らせて頂きます。金額はこちらに……」

「少しすくないようだが？」

「商業ギルドに登録されていない場合は手数料がかかりますので……」

「手数料で二割は多いな」

『その値段なら売らなくていいのです。ここはお断りするのですよ』

「それなら売らなくても問題ない。今回の取引はなかったことにしよう」

「同意なさいましたよね？」

「事前情報に食い違いがあるのでな。そちらが手数料を引かない値段で引き取るのなら、構わないが、手数料を取るのならこちらもその分の値段は上乘せした金額にさせてもらう。なに契約書自体はまだ交わしていないのだから問題あるまい」

「わかりました。それではお引き取りください」

「ああ、失礼する。行くぞ」

「はい」

詩乃に宝石を入れた箱を待たせて移動する。さてさて、これで連れ

てくれるといいのだが……どうなるか楽しみだ。

『最初から売る気がなかったの?』

『売る気はあったのです。相場の前後でなら、です。ちなみにこの場合の相場は買取相場なので、相手側も十分に利益が得られるレベルなのですよ』

『そうなんだ……』

商業ギルドの外に出ると、優花が隣にやってきて耳打ちしてきた。

「つけられてる」

「まあ、当然だな。放置していいから警戒だけしておいてくれ」

「了解」

商業ギルドで面白い事はなかったので、カフェテラスに座ってお茶をしよう。

「ヘイゼルと詩乃も好きに頼んでいいからな」

「わかった」

「どうしようかな?」

二人が楽しそうにメニューを見ている中、宝石を取り出して磨いていく。磨き終われば机の上に置いて次を取り出す。色とりどりの綺麗な宝石を並べていくと、どんどん注目が集まってくる。まあ、当然だな。数百万から数千万はするような宝石がゴロゴロしているのだから。

といっても、これらはユーリとハジメからしたらそんな価値はないのだが。あいつら、普通に作り出せる。どちらにせよ、作り出せない者達には価値がある。そして、集まってきた連中も俺にとっては有効活用できる。

「お集まりの皆様にお伝えします。我々は戦いの為に亜人奴隷を求めています。生きてさえいれば状態は問いません。お売り頂ける方は明日、南門の外までお越しください。数や質によって宝石や武器、アーティファクトなどと交換致します」

こうする事で土地は関係ないし、税金以外は支払う必要もない。宝石などを求めて襲い掛かってきたら、容赦なく殺せる。街の外なら何の問題もないだろう。兵士達が何事かとやってきたが、こちらは何も

していないのだから問題ない。

軽く休憩を終えたら次は冒険者ギルドを目地して歩く。宝石は詩乃に持ってもらいながら移動すると、狙って近付いてくる連中が居るが、全て優花が殺気を放って防いでくれる。

さて、そんな感じで冒険者ギルドに到着したので中に入る。視線が沢山集まってくる。特に詩乃と優花にだ。二人は美少女だから仕方がない。さあ、テンプレ展開を……と期待したが、残念ながらそんな事は起きなかった。何故なら既に起きたようで、倒れている冒険者であらう者が黒髪の女の子に頭を踏まれていた。

「あ、恵里とイヌイ。来てたんだ」

「もちろんだよ。南雲達は居ないみたい」

優花が声をかけると、踏みつけていた女の子、恵里とイヌイがこちらにやってくる。どうやら、先に来てハジメ達の情報を聞いていたみたいだ。

「何処に行ったかわかるか？」

「なんでもギルドマスターからの依頼を受けたらしいけれど、それ以上は教えてくれなかったんだ」

「まあ、それもそうか」

『先程、資金調達ができていませんで、ここで魔物モンスターを売るといいのです。南雲様達の知り合いだとわかれば下手な値段では買わないはずですし、こちらの實力を見せる意味でもありなのです』

『売るのはハルツィナ樹海とライセンス大渓谷の物がいいよ』

二人の指示に従って、買収カウンターに移動する。

「ギルドに登録していないが、買収を希望したい。構わないだろうか？ 無理ならギルドに登録している知り合いが戻ってから売ることが……」

「いえ、大丈夫です。こちらのカウンターにお出してください」

「大量にあるが、問題ないか？」

「はい」

「わかった」

宝物庫から恐竜みたいなライセンス大渓谷の魔物モンスターを取り出し、積み

重ねていく。

「ほ、宝物庫をお持ちなのですね。こ、こちらにどうぞ」

解体場所に案内されたので、そちらに移動させて査定をお願いする。するとこちらにやってくるのは金髪をオールバックにした、目つきが鋭い三十代後半ぐらいの男性だ。

「はじめまして。私はイルワ・チャング。ここの支部長をしている。君達が南雲ハジメ君が言っていた仲間かね？」

「ええ、そうです」

「彼には今、依頼をされていてね。君達が訪ねてきたら便宜を図ってくれと言われたよ。断ろうとも思ったが、彼から君達が自分達以上に強い存在だと聞いていたから答える事にした。これを見るまで少し信じられなかった部分もあるが……」

「便宜をはかってくれるのなら、冒険者ギルドで商売の許可を頂けませんか？ 武器や防具も取り扱っていますし、色々と思えます」

「構わない。だが、そう儲かるとは思えないが、いいのかね？」

「ええ、構いません。我々は傭人奴隷を求めていますので、生きてさえいれば交換に応じます」

「わかった。伝えておこう」

「それでは商売の準備をさせていただきますましょう」

「場所は酒場の一角を使うといい」

「ありがとうございます」

こちらは商業ギルドと違って結構まともみたいだ。まあ、適当に売ってみよう。どうせ俺達にとつては弱い装備だ。放出しても問題ない。

詩乃と恵里、イヌイ、ネコネに売り子をしてもらいながら、色々売っていく。武器類はもちろん、森人族が作った回復薬、アーティファクトの武具類もだ。

売り子が可愛い女の子達なのでどんどん売れていく。手を出そうとしたら、ヘイゼルと俺でお話を行う。物理的なお話になるがな。

「俺の奴隷になってくれ！」

こんな風に言ってくる奴には殺気を込めながら注意し、聞かなければ見せしめとして片腕を折し折ってやる。それで諦めたらしつかりと治療して元に戻し、最後に次は去勢すると告げれば大概は大人しくなる。中には俺の容姿から変態になる奴もいる。ヘイゼルがお話をした奴は特にその傾向が多い。

優花が変化しているヘイゼルは大人の女性で、冷たい印象も与えるため、正に女王様といえなくもない。そんな彼女がさげすんだ瞳で見ながら注意してきて、最後には物理的な行動にでるとなればドエム連中にはご褒美だったみたい。それを更に気持ち悪そうに見るから、無限ループになっている。

「馬鹿ばつかなのです」

「あはは」

普通にお金で買う人も居れば、亜人奴隷で支払う者達も居る。そこらは治療の法術が使えるネコネに診察してもらって値段を設定。相場よりも高めで引き取り、金や武具などで交換する。手に入れた奴隷は即座に治療して栄養剤という名の神水を与えておく。

「んく思ったよりも収益がでないね」

「まあ仕方がないだろう。基本的に奴隷は高めに設定しているからな」

「僕ならもつと安く買い叩くけどね。腕がないのとか、ざらだし」

「冒険者が盾として連れていっているのだから、仕方がないとも言えるが……本命はもう一つあるから問題ない」

恵里と話しているが、奴隷以外にも本命はある。それはこの街、引いては国における亜人奴隷の需要の増加だ。亜人奴隷の値段が跳ね上がれば自ずと大事にしなくてはいけないし、彼等が死ぬ可能性は減る。また、亜人奴隷を狙って愚か者共がハルツィナ樹海へとやってくる。そう、鴨が葱を背負って来るような状態だ。

魂を自ら献上しに来てくれるとは大変結構。現在のハルツィナ樹海が持つ防衛力は人間の軍隊が来ても瞬殺できる程度にはある。故に囷として安心して使えるというわけだ。

「貴族や商業ギルドの商人っぽいのも何人か来てたけど、こちらに声

をかけてこなかったね」

「まだ様子見の段階なのだろう。それか夜にでも襲撃するつもりかな。どちらにせよ、冒険者ギルドで手を出してくる事はないみたいだ」

「そつか。それじゃあ、夜のお散歩にでも出てこようかな?」

「それはいいかもしれない。そうだ、鈴を連れて一緒にデートでもするか?」

「それ、絶対にゆ……ヘイゼルも着いてくるよ?」

「そうなると他の子だけ残すのも問題か」

「まあ、そもそも僕はこの街を裏から支配するのもいいと思うけどね」「流石にそこまでするのは問題だろう。あくまでも他国だからな」

「……相手から手をだしてきたら?」

「それは潰す。俺の嫁達に手を出そうとしたのなら、その代価を魂で支払ってもらおう」

「スワスチカを開くのも面白そうだけどね」

「止める」

スワスチカとは大量の人間の魂を吸い発生する異常領域だ。数十人どころか数百、数千人の命が必要になる。つまり、恵里が言っているのはこの都市の人間全てを殺すと言っているよいうなものだ。

「まあ、本当にやばくなるまではいらないか」

「そもそも軍隊や狂信者共で事足りる可能性もある」

「それもそうだね。それじゃあ、今晚は普通に楽しもうかな」

「可愛がってやる」

「うん、いっぱい愛してね」

恵里は基本的に俺が愛していれば大人しく言う事を聞いてくれる。ちゃんと構っていないと色々とやらかしそうだが、鈴も一緒なので問題は特になし。

「旦那様、そろそろお時間です」

「ああ、ありがとうイヌイ。じゃあ、片付けをして帰るぞ」

「了解。また明日、朝から南門の外で店をやるので欲しい物がある人は来てください」

「お願いします」

皆でしつかりと宣伝してから、イルワさんにお礼と場所代としてお金を支払う。同時に魔物モンスターを売った代金を受け取ってから宿へと向かう。その途中で期待していた襲撃は無かった。夜がメインかと思えばそちらもない。どういうつもりなんだろうか？ 貴族連中も可愛い詩乃達を狙って無茶な要求もしてこない。どういことだ、本当に。

「にゃ〜」

鳴き声が聞こえて振り返ったら、猫が居た。ただそれだけだ。ただ、沢山の猫達が集まってきて、俺達に、俺に甘えてくるだけだ。

「よくよく考えたら……シユテルが中立とはいえ商業都市を見逃すはずなんてないよね」

「だよな」

『完全には制圧していません。まだ49%です。ただ警備隊などは完全に制圧してあります』

「充分よね」

「充分だな」

暗躍ニヤンコが街の有力者たちを既に押さえているのなら、襲撃を受けないのも納得だ。ご褒美にカリカリをやろう。いや、それよりも猫じゃらしで遊んであげる方がいいのだろうか？

そんな事を思いながら帰ると、宿の前で鈴とアルテナが待っていた。その二人の表情はすぐれない。

「どうした？」

「その、ごめんね？ 鈴達、宿から追い出されちゃった」

「何かしたのか？」

「最初は問題なかったんだけど、亜人が増えることに難色を示してたの」

「ですが、それは建前ですね。おそらく商業ギルドから圧力がかかったようです」

「なるほど、そう来たか」

まあ、宿がなくなつたのなら仕方がない。馬車を外に出して寝ればいいだけだ。普通の馬車と違って俺達が使っているのはかなり良い奴だし、入れているベッドに関しては高級な宿に入っている奴よりグレードが高い奴だ。何せ、よく使う寝台はユーリ達が本気で作っているからだ。回復魔法が常にかかるようにもできるらしい。エロと睡眠、どちらも満たす最高級品だ。

「街から出て野宿する。行くぞ」

手に入れた奴隷達も含めて全員で移動し、外にキャンプを作る。防衛はラプトルモドキ達と、恵里が呼び出した死霊騎士達。彼等は鎧に憑依させて鈴が張った結界の外から警備させる。

警備はこれでいいとして、組み立ててあるテントを複数取り出して、簡易的な寝台を設置して奴隷達を休ませる。次に明日の商店として店舗も配置しておく。こちらも宝物庫にあるテントなどを使えばすぐに完成だ。

亜人達はアルテナとネコネ、イヌイに任せ、詩乃と優花、俺と恵里、鈴は普通に過ごす。夜もいつもの通り、過ごす。その時に鈴からとある提案があつたのでそちらも聞いておく。

一応警戒していたが、襲撃はなかった。仕方がないのでお店を開いて奴隷を集めていく。商売している間に商業ギルドから文句を言いに来た連中が居たが、そいつらは追い返した。それとハジメ達に連絡を取って何処に居るかを聴き出したので、明後日にはそちらに向かう事にした。

第60話

フューレンの外での販売は順調であり、売上が凄いい事になっていった。用意したテーブルの上には金貨が積み上げられ、貴族や商人などには宝石が、冒険者などには武具、回復薬が売れに売れたからだ。

代金として支払われるのは貨幣だけでなく、亜人の奴隷が多い。また、亜人以外にも奴隷として売られてくる人族までもいた。借金をして奴隷になった者だけでなく、誘拐などで強制的に奴隷にされたような者までいたのでとても大変だ。こいつらの扱いが非常に困る。

それに怪我人も多く、鈴が張った清浄な力を持つ結界の中で、優花がジャック・ザ・リッパーの技術で手術を行い、アルテナが薬で治療を頑張ってくれている。明日には出発予定なので、最悪、死なない程度に神水を与えておけばいい。もちろん、出発の準備もネコネとイヌイ、恵里達が見つかりとやってきている。

そんな嫁達が準備をしてきている中、俺は鈴、詩乃と一緒に街中を二人でデートだ。鈴と手を繋ぎ、詩乃を腕に抱き着かせながら、巨大な商業都市であるフューレンの夜を堪能しているわけだ。このフューレン、夜の街も結構営業している。といっても、酒場とかにはいかないが。

「ねえねえ、鈴、あの人達が気になるよ〜」

「ん？ アレは娼婦じゃないか？」

街角の一角に派手な衣装をした女性が男性に声をかけている姿や、壁を背にして立ちながら客に声をかけている姿が見える。声をかけた男性と一緒に宿へと入っていくのが見えたので間違いない。

「それって……」

「ほほう。つまり、買えるんだね？ じゃあ、鈴も……」

「駄目よ。そんな事したら、もう鈴とは一緒に寝ないから」

「うっ、それはやだなあ……てか、それって閨に入れないってことじゃん！ ほぼ皆で寝てるんだから！」

「まあ、そうね。他の子達も同じでしょうし……というか、鈴は私達を

真名と一緒にせめてきたりしているんだから、それで満足しなさいよ」

「は〜い」

鈴はルサルカと一緒にで女の子同士でも楽しんだりしている。といつても、キスとかはせずには手とか身体を擦りつけたりしてくるぐらいただ。特に優花と大人版のアルテナ、詩乃、優花が被害にあっている。

「それで何処に行くのよ？ 私について来いとしか言われてないけど」

「ああ、それは娼館だな」

「は？」

詩乃がこちらを冷たい瞳で睨みつけてくるので、しどろもどろになりながら答えないといけない。

「まなまな、鈴達だけじゃまだ足りないの〜？ いっぱいご奉仕しているの〜」

「すぐにそつちにいったな」

「で？ 回答次第じゃわかってるわよね？」

そう言いながら、詩乃の尻尾が俺の尻をペチペチと叩いてくる。地味に痛い。既に尻尾の扱いは結構慣れているようで、物を取る時に使ったりもしている。

「娼館に行く理由はそこで娼婦として働いている彼女達を身請けするためだ。幸い、資金はできたからな」

「なるほど。それなら納得ね。デートで私達を娼館に連れていくとか、売られるのではないとしても客を取らされるのかって少し思っちゃった」

「それはないな」

「うん、わかってる。言ってみただけ」

ギョツと腕を胸に抱きしめながら、悪戯っ子のような目をする詩乃に遊ばれながら、歓楽街を歩いていく。

「でも、こういうのって奴隷商から買うんじゃないの？」

「そつちはおそらく買えないからな」

「なんで〜?」

「商人ギルドが手を回しているだろうしな。まあ、娼館もその可能性はあるが、まだましだろう。それに買うのは怪我人や病人をメインにするからな」

「そっか。店側からしたらいらないんだよね」

「ムカつくけど、そういうことね」

店側からしたら、病気や怪我でした者はもう必要ない。特に奴隷なら、その扱いは酷くなる。それが亜人なら更にだ。

「そんなわけで、亜人の娼館に行つて買つていくぞ。鈴は治療をしてくれ。詩乃は護衛だ。それと鈴。いざとなったら結界を頼む」

「了解。やってみたい事もあるしね」

「そういえばそう言っていたな。何がしたいんだ?」

「うん。悪人さんを浄化したらどうなるかな〜つて」

「えっと、それって……」

「うん。実験しないと色々和不味いからね」

「実験体が必要か。わかった」

二人でシュテルルから来るように頼まれた娼館へと向かう。その店に入ると見覚えのあるような長い茶色の髪を後ろで纏めた高町なのはに似ている女性に歓迎されることになる。

「ようこそいらっしやいました、お兄様」

「お兄様?」

「シュテルルか」

「シュテルル!」

「はい。シュテルルんです。フューレンの歓楽街は最優先で押さえておきました。ここは情報が集まりますし、悪い人達が沢山いますからね」

シュテルルにとって収集し、始末した後に入れ替わるのは容易いだろう。そうしてそいつが使っていた人材や人脈、資金を使って暗躍していく。その一つとして歓楽街を支配下に置いたみたいだ。

「そうなんだ?」

「はい。亜人の店に来る人は嗜虐趣味やストレス発散に暴力的な行為

をする人ばかりです。それにお酒を入れると自慢話とかをする人もいいですからね。ああ、安心してください。諜報員として私は他の人と寝てませんからね。ペットとして傍に潜ませていただいただけです。私の身体はお兄様の物ですから」

「ありがとう。それで、ここに来てって事は用意しているんだよね？」
「はい。亜人達は集めてありますが、その前にこちらにいらしてください。食事の用意をしています」

「どうする？ 鈴としては食べたいけど……」

「でも、他の皆が待つてるし……」

「今日はこちらにお泊まりください。あちらの方にはすでに連絡しておきます。今日は寝かせませんよ」

「それ、怒られないか？」

「大丈夫です。しっかりと伝えてありますし、食事も届けてあります。私は基本的に皆と別れていますので、こういう時は優先してもらいました」

「ならいい」

大人バージョンのシユテルに手を取られて奥へと進むと、広い一室に案内される。そこはシャンデリアや高価な壺まで置かれているステージがある広い酒場のような場所で、近くテーブルの上には沢山の果物や料理が置かれていた。壁際には亜人の少女達が並んでいた、寝転んでいたりしているが、何処かシユテルを恐怖の籠った表情で見詰めてきている。

「この子達？」

「皆、怪我をしているのね」

「大量の薬を使って治療しましたが、身体の一部が無い子が多いので傷口を焼いて止血をしたり、腐った部分を切り落としたりもしました」

「ああ、それで怖がられているのか」

「仕方ありません。そうでなければ死んでいましたから。私も回復魔法は多少、使えますが多少しか回復できませんからね。本拠地でなければ治療できません。そんな訳でお願いしますね」

「あれ、もしかして今日は寝かせないって、もしかして……」

「いや、もしかしなくてもそうでしょう」

「はい。彼女達の治療です。あ、私はお兄様と楽しみますから」

「ずるい！」

「まあ、私はする事がないから別にいいけど」

「それって鈴だけが頑張らないといけないじゃない！」

「まあ、大丈夫だ。俺も神水を使って回復させるしな」

「そもそも一人でやらせるのは冗談で、ちよつとしたお茶目です。ちやんと手伝いますからね」

「よかつた〜！」

まあ、どう考えても神水を与えないとやばい奴等もいる。

「では、デスマーチを始めましょうか」

「ちなみに何人いるのかな〜？」

「確かにすごく多いね」

「ここ以外にも居ますので、全部で124人ですね。彼女達を生かして我等が国に連れて行くのが最上です。我等の難点は人が少ない事です。ですので、手足がなくても生きてさえいれば手に入れる必要があります。他にも人手は増やしますが、国民は必要です。流石に人が居ない機械や魔物モンスターだけの国は問題ですからね」

機械と魔物モンスターの国もいいけれど、流石に亜人達はいる。指揮官が必要だからだ。召喚で補ってもいいけど、限度がある。そもそも我が国の人手は魔物モンスターとチビットを含めてマテリアルズ達だ。流石にマテリアルズ達だけでは思考を読まれる可能性もある。AIでは尚更だ。後、流石に国としてどうかとも思うので人が欲しい。

「よし、治療を始めよう」

「は〜い。まずは結界を展開するね。これで誰にもばれないようになるよ」

「転移魔法陣を使うのはまだ危険だし、これでいいか」

手首を切つてグラスに血を注ぐ。それらを怪我人達に飲ませて治療する。鈴の結界により感染症が起きないように無菌状態にしたのもあり、怪我こそしているが命に別条がないレベルまで回復させて

いった。



頭を撫でられる感触がして、目が覚めた。どうやら気が付けばシュテルにベッドで膝枕をされて頭を優しく撫でられていたみたいだ。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

確か、治療が終わってから愛し合って一緒に眠ったはずだ。下を見れば鈴と詩乃が俺の腕を枕にして眠っている。他にもベッドの上には様々な道具が置かれているが、それらは鈴が試しに使った玩具だったりする。

「朝食の用意ができました」

「ありがとうございます」

亜人の子がメイド服姿で料理を用意してくれたみたいだ。それ以外にも着替えまで用意されている。

「でも、まずはお風呂からですね」

「そうだな。詩乃を連れていくから、シュテルは鈴を頼む」

「わかりました」

広いお風呂で詩乃達の身体を洗っていくと、流石に二人も起きてくる。何時もの事なのでそのまま身を任せてくるので、隅々まで触って綺麗にする。シュテル達には俺を洗ってもらう。

風呂からあがれば食事をしてから、奴隷の子達と一緒に出ていく。シュテルとは店先でお別れなので、抱き合って軽くキスをしてから別れる。

「では、後は任せる」

「はい。お任せください。お兄様も気をつけてください」

「ああ、もちろんだ」

「ばいばい」

「またね」

「はい。また」

シユテルが用意してくれた複数の馬車に乗り、彼女達を連れて街の外に出る。検問も問題なく抜けて、待ち合わせの場所に移動した。ここでは既に出発の準備は整っているようで、奴隷の子達は牢屋の方に入られている。外で恵里とイヌイ、ネコネ、優花が椅子に座りながらぼくと待っていた。

「ただいま」

「お帰り。昨日はお楽しみだったみたいね」

「まあな」

「いっぱい楽しんだよ。まあ、疲れたけどね」

恵里は俺達の身体に残っているキスマークなどを見て、こちらに抱き着いてくる。それを見たネコネとイヌイも一緒だ。そして、クンクンと匂いを嗅いでくる。

「知らない女の匂いはしないのです」

「シユテルさんのですから、新しい人はいませんね」

「それなら、大丈夫かな」

「鈴達がちゃんと見張ってるから大丈夫だよ」

「それもそっか」

「まあ、鈴には玩具にされたけど」

「鈴も玩具にされたよ！」

「アレはただの仕返し」

「ぐふっ！ 反論できないく全てはケモ耳が悪いの」

そう言いながら、鈴は詩乃の尻尾を触ろうと抱き着くが、その前に逃れられる。俺は抱き着いているネコネとイヌイの頭を撫でながら、恵里と軽くキスをする。恵里は当然のように舌を入れてくるので、そのまま少し楽しむ。

「ん……準備は終わってるから何時でもいけるわよ」

「それならいくか。イヌイとネコネは大丈夫か？」

「大丈夫です。しっかりと昨日の内に準備はしておきました」

「それと私の方で出発する時間を伝えてフューレンの街に流しておいたのです。これで旦那様や姉様達の望む通りになる確率が高くなつたのですよ」

「そうか、ありがとう。ヘイゼルや他の皆は大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

「平気。何時でもいける」

『こちらも問題ありません』

「なら、さっさと行こうよ」

「わかった」

ヘイゼル、鈴、恵里、アルテナも大丈夫みたいなので、馬車に乗り込んで移動する。今回は俺が御者をするので前に座り、天井には詩乃に居てもらう。後ろは亜人達の事もあるので人間である俺達よりも、アルテナ、イヌイ、ネコネに見てもらおう事で彼女達の負担を減らす。真ん中にヘイゼルと鈴に居てもらう。そして、恵里が俺の隣に座る。これで何処を狙われても対応が可能だ。

「準備完了したみたいだね」

恵里が手に聖遺物であるネクロノミコンを形成で生み出し、手に持ちながら告げてくる。鈴の方も神獣鏡シエンシヨウジンを生み出しているので、俺も美遊に何時でも戦えるように準備してもらっておく。

『こちらも問題ありません。魔力は百万ほど即座に使えるように用意してあります』

「わかった。なら、出発だ」

席の左右に神喰も展開して用意してあるので、まあ大丈夫だろう。そもそも鈴が展開する神獣鏡シエンシヨウジンの結界を抜けるほど、火力が出せる敵なんて滅多にいないだろうしな。

「さて、獲物はかかってくるかな？」

「どうだろうな？」

『かかってくれど助かります』

三人で笑いながら普通の馬車の速度で進んでいく。するとフューレンから三時間ほど離れた位置で街道の真ん中に木が倒れていた。



深い街道横の森の中。街道を挟んだ両サイドの俺達は潜み、街道の真ん中に配置した倒木を監視している。狙いの馬車が来るまでじつと待つ。

「ボス、見張りからの報告です。もう間もなく目的の商隊がやってきます」

「おう。上級魔法の詠唱を始める。全員、準備しろ」

「了解です。しかし、いきなり上級魔法を使うのですか？」

「当たり前だ。馬車を引いていた魔物モンスターやアイツ等が冒険者ギルドで売った魔物モンスターを考えると、全員で初手から全火力を叩き込む。利益は後ろの馬車だけでも十分だ」

「まあ、確かに……ただ、何人か女が死ぬのはもったいないですね」

「仕方ない事だ。それよりも始めるぞ」

「はい」

今回のターゲットはフューレンの街で商業ギルドに入らず、街の外で商売をした連中だ。奴等は冒険者ギルドで魔物モンスターの素材やアーティファクト級の装備を売った資金で亜人を中心とした奴隷達を買い漁った。それに加えて売られていたが、貴族じゃないと買えないような宝石なども沢山あった。その利益だけでも凄まじい金額になっていたはずだ。何より、連中は宝物庫と呼ばれるアーティファクトすら所持している。

故に商業ギルドからの依頼で傭兵達が集められた。その中には俺も含めて高位の魔法使いも数人いることから、商人ギルドの本気度が伺える。

「詠唱開始」

同時詠唱による強化を使い、連中が木の前で停止した瞬間を狙う。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ。螺炎」

「劫火狼」

「大嵐」

「炎天」

螺旋状に渦巻く炎、炎の津波、8 mほどの太陽のごとく火炎球、風の嵐。この四つを合成して絶大な火力を持つ炎の嵐を発生させる。

「よし、狙い通りだ」

「ですね」

炎によつて視界がまったく見えないが、巨大な火柱によつて先頭の馬車は完全に焼き尽くされるはずだ。例え魔族だろうと、確実に殺せる。実際に俺達はこの方法で何度も魔族を殺してきた。もっとも、一度しか使えない魔法ではそこまで戦果は上げられない。策を弄さなくてはいけないのだが……

「全員、突撃準備！ 火が消えたら行くぞ！」

「二〇〇〇おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！」

炎の方をしばらく見ていると、火柱が消えて信じられない光景が見えた。炎がある程度衰えて見えるようになったそこには無傷の馬車が存在していたのだ。

「う、嘘だろ……」

「人が生きていられるはずもない火力だぞ！」

「鉄すら溶かすはずだぞ！」

勢いが収まった炎の中から、人影が二つ進んでくる。炎の中を何でもないかのように歩いてくるそいつ等は二人の少女だった。

「やれやれ、まさかいきなり炎で襲撃されるなんて思わなかったよ」

「警告も無しとは正直言つて驚いたな」

黒髪と金髪の少女二人は炎の中を会話しながらこちらにやってくる。黒髪の手には見ただけでやばいと感じる禍々しい気配を放つ魔導書。金髪の方は周りに巨大な剣が浮いている。どう見ても、どちらもアーティファクトの中でもトップクラスのやばい奴だ。

「あ、真名。出来る限り、身体は傷つけないように殺してね。後で使うから」

「ふむ。面倒だが、心得た。魔力ダメージで生け捕りにしてから殺そう。鈴も実験がしたいと言つていたからな」

こちらの事を歯牙にもかけずに自らが勝つ事が確定だと言うかの言葉にイラつく奴等も居て、命令も聞かずに突撃していく奴等が居

る。数合わせのために連れてきた連中だから別に構わない。

「ボス……」

「全員、退却だ。相手が悪すぎる」

「了解」

既に高位の魔法使いを有する者達は俺達と一緒に撤退を初めている。いや、一部は頭を掻きむしりながら、頭を抱えていたり、涎をたらしながらブツブツと呟いていたりしている連中までいた。

「魔力感知ができる奴はあまり見るな。あの魔導書に精神をぶっ壊されるぞー！」

「はー！」

森の深い場所へと突き進む。俺達が連中を引き連れていている間に反対側に居た連中が馬車を襲うはずだから、どちらに転んでも何とかなる。

悲鳴が聞こえ、ふと後ろを振り返るとそこには化け物が居た。金髪は浮かべている大剣から無数の魔力光線を放ち、森ごと破壊していく。黒髪は楽しそうにしながら半透明な魔物達モンスターを呼び出して食い殺させている。どちらも歩みを止めずにこちらへとゆっくりと歩いてきていた。

「何処へ行くこうというのだね。卿等から戦を挑んできたというのに」

「そうそう。そもそも逃げられると思っっていること事態が間違いなんだよ」

「っ!? ヘボック！ 突撃しろー！」

「了解です、ボスー！」

ヘボックが部隊を率いて突撃し、魔法の攻撃をどうにか回避しながら接近する。何人かを犠牲にしながら接近し、戦斧を金髪の首へと一撃を叩き込む。金髪は避けもせずに戦斧が命中したので首が落ちる。そう思ったのだが、皮膚を傷付ける事すらできずにダメージを与えられていない。それどころか、金髪の倍以上の身長と体重があるというのに動かすことすらできていない。

「どういう事だ！ いくらなんでも出鱈目すぎるぞー！」

「無駄だ。我等にダメージを与えたければ聖遺物を持つてくるとい

い。卿等の武器ではそもそも格が違う。そして——」

「ボス！ 大変だ！ 森の奥に行けない！ 見えない壁がある！」

「まさか……」

「卿等から仕掛けてきたのだ。殺す気だったのだから、殺される覚悟も当然していいよう？」

へボックの戦斧を掴み、巨体ごと振り上げて持ち上げ、地面に叩き付けられる。その直前に戦斧を離して離脱するが、その前に金髪が接近してへボックの顔を掴んで地面に埋め込む。まさに化け物だ。

「逃げられないし、倒せない。だから、さつさと死んじやおうよ」

「ふざけんな！」

「ふざけてないよ。どうせ鈴の結界は出られない。だったら、諦めよう？」

「自ら魂を供物として運んできてくれたのだから優しく終わらせてやろう」

「そうだね。じゃあ、この魔法でいいかな」

黒髪が指を鳴らすと無数の怨霊が現れてきた。そいつ等は見覚えがある奴等だ。そう、魔族の幽霊だった。

「君達が殺してきた者達の怨霊に魔力を与えて顕現させた。彼等と楽しい語らいをするといいだろう」

「優しくではないが、まあいいか。殺戮衝動を満たさなねばならぬし、相手が盗賊であれば何の問題もなからう」

「そもそも王様を狙ったんだから、殺されて当然だよ」

「ま、待て、俺達は……」

「ああ、そちらの言い分は聞かない。それにもはや戦いは始まっている」

「だ、だが、今頃別働隊が馬車を襲っているはずだ。向かわなくていいのかな？」

「問題ない」

「はい。問題ありません」

いつの間にか背後に刀を持った亜人が居た。彼女の手にはあちらの部隊を率いていた男の首が握られていたのだ。

「敵将を含めて敵は全て打ち取っておきました。もう少し歯応えが欲しかったですね」

「ああ、弱かった」

更にもう一人が背後から現れ、首に衝撃を感じて視界が暗くなつて力が入らずに倒れていく。

「総勢で147人か。まあいい感じだな」

「そうだね。70人ずつわけようか」

「ああ。感謝して頂くとしよう。何、卿等も本望であろう。何せ邪神エヒトを打ち倒す力となるのだから」

ああくそつ、こんな依頼、受けるんじゃ……なかつた……

清水

愛ちゃん先生の護衛として王都から抜け出し、俺は同じく一緒に来たクラスメイトや騎士達と共にここまでやってきた。当然、俺が連れてくる北方棲姫や戦艦レ級も一緒だし、彼女達の生態などを研究して深海棲艦化のメカニズムを闇術師として解析している。

一緒にやって来た連中は菅原妙子すがわら たえこ。天職は操鞭師で見た目はおっとり系のギャルだ。根は真面目な感じがした。操鞭師は鞭を始めとしたロープ状のものを操る技術に天性の才能を示し、縛り付けて建物を作ったりするのに便利だ。

宮崎奈々みやざき なな。コイツはノリが軽い性格をしていて、スレンダーな身体付きだ。

相川昇あいかわのぼる。バイク好きの少年。よく明人や淳史といることが多い。相川はこちらを見て、成長したほっぼやレっちゃんを見詰めたりもしているが、手は出していない。

仁村明人にむらあきと、玉井淳史たまいあつしも一緒にいてきている。神殿からは神殿騎士専属護衛隊長のデビット・ザラー。コイツは愛ちゃん先生の護衛任務に就いている内に、他の騎士達と共に先生に惚れ、アプローチを掛ける。聖教教会への信仰心が強く、亜人に対する差別意識も強いのか、ほっぼやレっちゃんへの当たりは強い。

デビットの部下に副隊長のチェイス・ドミノ。デビットに比べるとまだ良識を弁えているのか、こちらに手を出さないようにしている。まあ、二匹が魔物モンスターや金属を平気で食べている姿を見れば無理はないだろう。近衛騎士のジョシユア・オキーズとジェイド・ハットの二人はデビットに追従しているので、俺をよくは思っていないようだ。

「レ、レ、レ〜♪」

「あつ、こらっ！ それは食べちゃ駄目ですよ！」

「ダイジョウブ、モンダイナイ」

「いえ、ありますからね！」

そう言いながら、愛ちゃん先生がレっちゃんとほっぼやを止める。二

匹が食べようとしているのはデビットの剣や鎧だ。俺や自分達の手をよく思っていないデビットは二匹とっておやつみたいなものなのだろう。

デビットも抵抗しようとするが、ここに来るまでに襲撃してきた魔物モンスターを殺して喰らった事でレベルも上がっている。盗賊達は愛ちゃん先生の意向で殺さずに捕らえているが、ほっぼ達は食べたそうにしていた。

「おのれ魔物共めっ！ 愛子様の命令がなければ殺しているものを……」

「清水君！ 二匹を止めてください」

「ソイツが態度を改めたらいいだけだ。それに殺さず、怪我させないようにには言い聞かせてある。問題ない」

「いや、問題ありすぎでしょ。まあ、可愛いからいいんだけど」

「だねく。ほら、お菓子あげるからこっちおいで。食べるよね？」

「タベル」

「レ〜！」

菅原と宮崎の二人が果物を差し出すと、レっちゃんとはっぼは受け取って口で食べていく。馬車の中がこんな状態でも、御者である相川達が交代でちゃんとしているし、襲撃があれば即座に知らせてくれる。戦いたくない連中がほとんどなので、戦いたがっているほっぼやレっちゃんに任せることにも抵抗がない。男連中で知ってる奴は二匹が深海棲艦だという事を知っているからだ。それに自分達が食べられるより、魔物モンスターなどが食べられる方がいいしな。

「レ〜」

「コノニオイハ……」

こんな風に仲良くしつつ、膝の上に身体を乗せているほっぼとレっちゃんを撫でていると、急に二匹が頭を上げて鼻を動かしていく。

「ゴハンダー！」

「レ〜！」

二匹が即座に立ち上がり、馬車から飛び出していく。街道を走っていた馬車から出て、森の中へとあつという間に突撃していった。

「あ、あの、清水君。なにがあつたんですか？」

「……わからない。だが、何かを見つけたみたいだ」

「愛ちゃん先生！ どうしたらいい！」

「とりあえず、馬車を止めるか？」

「止めてください！ 襲撃かもしれません！」

まあ、レっちゃんとはつぽなら大丈夫だろうが、警戒しながらしばらく待つ。だが、帰ってこない。

「もしかして逃げだしたのではないか？」

「低俗な魔物風情だ。有り得るな」

「いや、それはない。だが、少し様子を見てくる」

「そうですね。もうすぐ日が暮れますから、ここで野営しましょう。皆さん、準備をお願いします。清水君と何人かはほつぽちゃん達の捜索をお願いします」

「はい！」

「俺は一人でもいい。皆は準備だけしておいてくれ」

「大丈夫ですか？」

「平気だ」

「こう言っているのです。大丈夫でしょう」

「わかりました。気をつけてください」

「わかってる」

俺だけが森に入り、レっちゃんとほつぽを負う。二人は木々を蹴散らしながら進んでいるから、行先はわかる。魔物も基本的^{モンスター}に食い散らかされているので安全だ。

しばらく進むと地球で嗅いだことのあるような臭いがしてきた。そのまま進むと、すぐにレっちゃんとほつぽが見つかった。二匹は尻尾と顔を黒い沼につけるどころか、飛び込んで全身から黒い液体を吸い込んでいつている。おおはしゃぎで喜んでいるのが見てとれる。

「レッ、レ〜〜♪」

「ワ〜イ♪ オイシイ〜！」

「そういう事か」

そう、黒い沼。言い換えれば黒い液体だ。この黒い液体はとても臭

く、独特な感じがしている。この液体の正体は原油だ。つまり、蒸留すれば重油となつて深海棲艦である彼女達の食料になる。

ドラム缶はないが、入れ物は……確か、馬車の中に樽があったか。宮崎に頼めば蒸留してくれるかもしれない。宮崎は水術師だから、扱える可能性がある。

「今日はそこまでにしておけ。明日、相談して蒸留と回収できるか聞いてみる」

「レ！」

「ワカツタ。キョウハガマンスル」

「それで頼む」

「おや、もう帰るのかい？」

「う？」

「レ？」

振り返ると、そこにはオールバックの髪型をしている魔族の男が隣に立っていた。いつの間に居たのか、わからない。ほっぽとレっちゃんも気付いていなかったみたいだし、やばい相手かもしれない。これが隠密特化の相手ならまだまじだが、期待できそうにない。

「テキカ」

「レ！」

俺が呆然としている間にレっちゃんが俺の前に立ち、尻尾を上げてその口の中から砲を出す。ほっぽが猫型の艦載機を生み出して何時でも攻撃できるようにしてくれた。どちらも人形みたいに小さい幼体のままだが、ステータスはかなり高い。

「ああ、待ってくれ。戦いに来たのではない」

両手を上げて戦う意思がない事を伝えてきたが、すでに周りほっぽが展開した無数の猫耳をつけた球体に口がある浮遊砲台が浮いている。それらは俺の周りと敵である魔族の周りを囲うようにしている。戦闘が開始されれば十字砲火が放たれるし、背後からの奇襲に対する備えもしてある。戦術をしっかりと教えてきたが、効果がでて嬉し。

「レ？」

「……テキ……ジャナイ……？」

「どういう事だ？」

「端的に言えば君を我等が魔族陣営にスカウトしてきた」

スカウト、引き抜きということか。確かに魔族だと思ふ奴等から魔物モンスターに関する道具を買ったんだから、目を付けられていても不思議じゃない。

「……スカウトツテ……ナンダ……？」

「レ〜？」

「引き抜き……ようは味方じゃない人を味方に変えることだ。この場合、人類勢力から魔族勢力に鞍替えしないかと誘われている」

「ナルホド……ワカンナイ！ ゼンプ、テートクニマカセルノ」

「まあ、それがいいか」

レつちちゃんもほっぽと一緒に頷いているので、二匹を抱き上げてから相手を見る。相手も何時でも戦闘行動をとれるようにはしていると思う。そうじゃないと一人で出てこないだろう。

「それで、詳しい条件と待遇を聞こうか。全てはそれからだ」

「問答無用で戦いはしないのかい？」

「俺はそこまで野蛮人じゃない。それに正直、言つてこの世界の人類がどうなるうが知つたことじゃない」

シユテルから聞いている情報を考えると、人類は洗脳している者と洗脳されている者で別れているだけだ。魔族はどうかはわからない。だが、歴史を考えると魔族も人族もひたすら争い続け、滅び、滅ぼされ、作り直されている事を考えたら自ずと答えは見えてくる。

普通、ここまでの殲滅戦を行い合つていれば一時的に和平やもう少し歩み寄りがあつてもおかしくないのにそれも無い。まるで互いの神が相手を嫌いあつて殺し合わせているかのようになら感じられる。この事から、おそらく魔族にもエヒトの影響が入つていると考えられる。

「条件は畑山愛子の抹殺だ。それをなせば魔族の勇者として迎え入れる」

「それほど作農師の力が恐ろしいか」

「ああ、恐ろしいさ。それで、どうだろうか？ 見た感じ、君はその子達の事もあつて勇者とは上手くいつていないのだろうか？」

「そうだな……」

確かに愛ちゃん先生を殺せば魔族側に入れるのだろう。前の俺なら、飛びついたかもしれない。だが、よくよく考えるとなんでスカウトされているのに条件をつけられなくてはいけないんだ？

逆だろう。それに南雲や沙条達の事を考えると魔族はそれほど恐ろしい敵ではない。だが、鬱陶しいのも事実だ。魔物モンスターによる技術は進んでいるから、取り入るメリットはある。それでも愛ちゃん先生を殺してまでと言われると疑問だな。相手の表情を見る限り、俺が断らないと思っっているようだ。

「愛ちゃん先生を殺せば……ほ、本当に俺を勇者として迎え入れてくれるのか……？」

「ああ、約束する。殺す方法もこちらで用意してある。後はお前がその準備をして実行するだけだ」

「そうか……それなら……いいかもな……」

「そうだろう。よろしく頼む」

「だが、断る」

「何？ わかっているのか？ そのような幼体でどうにかできると思っているのなら、愚かな事だぞ」

そう言いながら、男の周りにある空間からにじみ出るようにして大型の魔物モンスターが現れ、艦載機を叩きつけて地面に埋め込んでいく。

「コイツ……」

「レエ……」

「やはり戦力を隠していたか」

こちらが包囲している間にこちらも姿を隠したミノタウロスのような魔物モンスター達で囲いを作っている。今のレつちゃんとほっぼだと勝てない可能性もある。それなりにレベルは上がっているが、まだ練度が19だ。まだまだ幼くて弱いレつちゃんとほっぼだ。勝てる可能性は少ないかもしれない。

「やはり断る。条件と難易度があっていない。そもそもスカウトしに

来たのはそちらだ。それで何故条件をつけられると思ったんだ？」

「戦力差がわからないのか？ あの程度の勇者ごとき、我等の敵ではない」

「まあ、そうだろうな。だが、あいにくと俺にはお前達が負けると理解している」

「なんだと？」

どう考えても沙条と南雲の戦力のほうが多い。あいつら、完全にチート状態だしな。既に神を殺す事を前提として戦力を集めてやがる。その時点で魔族と人族のスケールが違う。内輪揉めしてくれている間に力を蓄えるわけだし、戦争というのは沙条や南雲にとっては得だな。

「それと一つ勘違いを正してやる。ほっぽ」

「シズンデェー！」

空中にあるのと、ミノタウロスモドキに埋め込まれた猫耳艦載機が一斉に赤い光に覆われて砲撃を開始する。前後左右、上下から砲弾の雨に襲われたミノタウロスモドキ共は穴だらけになり、倒れる。周りの木々も例外ではなく、隠れていた増援も含めて纏めて排除してくれた。そして、ここには原油があるが、そこは外れるようにしっかりと計算して撃たれている。

「ば、馬鹿な……」

手足が吹っ飛び、達磨状態で転がっている魔族を見下ろし、レッチャんの尻尾をあてながら聞いてやる。

「おい。追加はまだあるのか？」

「それは……いや、それよりもこんな事をしてただで済むと思っっているのか！」

「それはこちらの台詞だが、まあいい。で、スカウトだったな。条件つきでそちらについてやってもいい」

「何？」

「俺も天之河はムカつくからな」

「じよ、条件はなんだ？」

「モンスター魔物を強化する技術と欲しい資材を寄越せ。それと愛ちゃん先生

を殺す用意は手伝ってやるが、実際にやるのはお前達だ。だが、安心しろ。やばくなったら助けてやる」

「わ、わかった。それでいい！ だから助けてくれ！」

「交渉成立だ。とりあえず治療してやるから動くなよ」

「あ、ああ……」

さて……懐から取り出したのは瓶の中に入っている小指サイズの猫だ。それをレイスと名乗った魔族の傷口へとあてる。連絡用に貰ったものだが、問題ないだろう。

「あがつ!? ぐっ、ぎいっ!」

身体が膨張し、触手のような物が現れて近くの死体となったミノタウロスモドキへと近付く。その身体を蒐集して素材へと変えて魔族を作り変えていく。

「タベテイイ……?」

「レ、レ」

「残ったのは食べていいぞ」

「レ！」

「ヤッター！」

ミノタウロスモドキなどを原油につけてからパクパクと食べていく二匹を木に背中を預けながら見ていると、立ち上がる音がしてレイスの方をみる。すると彼は両手を開いたり閉じたりした後、首をコキコキと鳴らしてから女性の声を出す。

「ご苦労様でした。魔族の肉体を手に入れられたのは望外の喜びです。まだ、魔族の領域までは出向けておりませんから」

「だろうな。それで、ソイツの精神はどうするんだ?」

「支配下には置かず、このままにしておきます。思考の誘導ぐらいはしますが……」

「そうか。それでどうする?」

「彼の計画を実行してください。ああ、先生は殺したように見せ掛けで確保するのもありですね」

「それは時期尚早じゃないか?」

「……確かにまだ早いですね。聖教教会の求心力も排除しておきたい

ですしね。ですが、護衛をつけないのも不味いです」

「俺は魔族の所に向かうしな。だが、殺される心配はないだろう。精々、幽閉されて洗脳されるぐらいじゃないか？」

「……やはり、魔族に行かずに残ってください。魔族の方は私がどうにかしておきます」

「だが、聖教教会の騎士連中が邪魔だぞ」

「排除してしまえばいいじゃないですか。幸い、計画は用意されています」

「いや、俺は魔族の方に行く。やりたい事もあるが、それは愛ちゃん先生の傍だと絶対にやらせてくれない」

「そうですか……では、護衛は……いえ、いい方法がありますね」

「レっちゃんとはっぽはやらんぞ」

「レ？」

「ん〜？」

原油を掘り返し、飲み干していつている二匹が穴から顔を出して見詰めてくるが、気にしないように手で指示しておく。二匹もすぐに食事へと戻った。

「いえ、清水さん以外にも私共の方でタイマーを確保しております。ですので、そちらから愛子先生に護衛として魔物^{モンスター}を貸し出しておきます」

「それならそうしてくれ。それで、計画というのはなんだ？」

「この魔族から話してもらいます。私は奥深くに潜り込んでいますので、お任せしますよ」

「わかった」

シユテルがそう言いながら、何かを投げてきた。それはストレージデバイスのように、指輪タイプだ。試しに機動してみると、目の前に黒い空間が現れた。

「その中に色々と物を仕舞っておけます。それとこちらも差し上げましょう」

そう言ってポンプと蒸留機械、大量のドラム缶をくれた。速攻で作ったみたいで、周りの物が一部なくなっている。鍊成でもしたのだ

ろう。まあ、ありがたく貰う。

こちらが使い方を確認していると、シユテルが目を瞑る。するとすぐに目をあけて不思議そうにしているレイスの姿が見えた。

「俺は……」

「治療は終わった。違和感はないだろう?」

「た、確かにそうだ。自分の身体みたいに動かせる! その上、力が湧いてくる!」

「じゃあ、計画について教えてくれ。俺はどう動けばいいんだ?」

「ああ、それなんだが……この辺りの魔物を支配してぶつける予定だ。群れのリーダーを支配すれば容易く扱えるからな」

「わかった。それと魔物を強化する薬とかはないのか?」

「ある」

レイスも協力的になり、魔族側の道具を全て出してくれた。一時的に強化する方法だったりしている。闇の魔法が使われているようで、解析データと合わせれば色々と思えそうだ。

「しかし、魔物は強くなるが、使い捨てになる」

「それならそれでいい。ああ、面白い実験を思い付いた……ああ、楽しみだ」

「そ、そうか……それでどうする?」

「なあ、この黒い水って魔族の領土でもあるか?」

「これならそこら中に湧いている場所がある。使い道もわからんから、放置しているのが現状だな」

「そうか。じゃあ、それも貰うとして……水の魔法って得意か?」

「得意だ」

「それなら頼みたい事がある」

俺も一応、水の魔法が使えるのでレイスと一緒に原油を集めてポンプに入れて操作する。

それから溜めた原油を蒸留してドラム缶に溜め込んでいく。一瞬で蒸留まで終わるのはこれがアーティファクトである証拠だろう。

レッチャんとほっぽは二匹で手をつないで不思議な踊りをして喜んでいるので、ご機嫌だ。これからいっぱい働いてもらわないといけ

ないからな、大変だが……おやつができたし大丈夫だろう。

ハジメ×愛子先生

広大な平原のど真ん中に、北へ向けて真っ直ぐに伸びる街道がある。街道と言っても、何度も踏みしめられることで自然と雑草が禿げて道となっただけのもののように整備はされていない。この世界の馬車にはサスペンションなどというものはないので、きつとこの道を通る馬車の乗員は、目的地に着いた途端、自らの尻を慰めることになるのだろう。

だが、そんな物は俺達には関係ないので、気にせずにGSX―Deismodus、デスマドウスに乗って整備されていない道を有り得ない速度で爆走している。

黒塗りの車体に二つの車輪だけで凸凹の道を苦もせず突き進むのは車体底部に仕込んだ錬成機構が谷底の悪路を整地しながら進むからだ。

それに前方には風で切断する魔法を付与したチタンブレードが設置しており、邪魔な障害物も切断できる。風圧も谷口、鈴の結界が展開されているので適度な風にしかならず、塵や砂などを一切通さない。通すのは有害でない汚染されていない状態の空気だけだ。

かつてライセン大峽谷の谷底で走らせた時とは比べものにならないほどの速度で街道を疾走している。時速100キロは軽く超えて160キロほどでている。魔力を阻害するものがないので、搭載されている動力炉から潤沢に送られてくる魔力によってデスマドウスも本来のスペックを十全に発揮している。

座席順は、いつもの通り、俺の腕の中にユエが居て、背中にシアが居る。風にさらわれてシアのウサミミと髪の毛がパタパタと靡いている。そんな状態でシアは後ろから俺に抱き着いてきている。ユエは俺にすっぽりと腕の中に収まった状態で完全に身体を預けてきていた。

天気は快晴で暖かな日差しが降り注ぎ、デスマドウスに施されたシ

ステムによって快適に走れる絶好のツーリング日和だ。実際、ユエもシアも、ポカポカの日差しと心地よい風を全身に感じて、実に気持ちよさそうに目を細めている。

「はう〜気持ちいいですう〜ユエさあ〜ん。帰りは場所交換しませんかあ〜」

「……ダメ。ここは私の場所。誰にも渡さない」

「え〜そんなこと言わずに交換しましょうよ〜後ろも気持ちいいですよ?」

シアが実に間延びした緩々の声音でユエに座席の交換を強請る。肩越しに緩んだシアの顔を見やると嫌そうな顔をして致命的な言葉を告げてやる。

「あのなあ、お前じゃ前には座れないだろ? 邪魔でしょうがねえよ。特にそのウサミミ。風になびいて目に突き刺さるだろうが」

まあ、アルテナが使っている薬を使えばシアでも小さくなれるんだろうが、それを教えたなら面倒だから言わないでおこう。

「あ〜、そうですねえ〜」

「……ダメ、ほとんど寝てる」

どうやら、あまりの心地よさにシアは半分夢の住人になっているようだ。俺の肩に頭を乗せ全体重を掛けてもたれ掛かっている。ユエに話しかけたのも半分寝言のようだな。

「まあ、このペースなら後半日ってところだ。ノンストップで行くし、休める内に休ませておこう」

言葉通り、ウイル一行が引き受けた調査依頼の範囲である北の山脈地帯に一番近い町まで後半日ほどの場所まで来ている。どれくらい進んだかは地図がないのでわからないが、このまま休憩を挟まず一気に進み、おそろく日が沈む前に到着するだろうから、町で一泊して明朝から搜索を始めるつもりだ。急ぐ理由として、時間が経てば経つほど、ウイル一行の生存率が下がっていくからだ。

「……積極的?」

腕の中から可愛らしく首を傾げ、上目遣いで見上げるユエに苦笑いを返す。

「ああ、生きているに越したことはないからな。その方が、感じる恩はでかい。これから先、国やら教会やらとの面倒事は嫌ってくらい待つてそうだからな。盾は多いほうがいいだろう？ いちいちまともに相手なんかしたくない。やるのなら、纏めてだ。それに沙条達と合流場所を変更したからな」

「……なるほど」

実際、イルワという盾が、どの程度機能するかはわからないし、どちらかといえば役に立たない可能性の方が大きい。が、保険や時間稼ぎができるので盾は多いほうがいい。まして、ほんの少しの労力で獲得できるなら、その労力は惜しむべきではない。

「それに聞いたんだがな、これから行く町は湖畔の町で水源が豊かなんだと。そのせいか町の近郊は大陸一の稲作地帯なんだそうだ」

「……稲作？」

「おう、つまり米だ米。俺達の故郷、日本の主食だ。同じものかどうかは分からないが、早く行って食べてみたい」

「……ん、私も食べたい……確か、ユーリが作った奴。町の名前は？」

遠い目をして米料理に思いを馳せる俺に微笑ましそうな眼差しを向けてきた。そう言えば町の名前を覚えていなかったな。

「湖畔の町ウルだ」

「ウル……そこが合流場所。でも、フューレンに到着したはずだから、時間はかかるんじゃないの？」

「あいつらは馬車を宝物庫に仕舞えば空を飛べるから、すぐ追いついてくるだろう」

「買った奴隷達は転送？」

「おそろくそうなるだろう」

「そっか。どちらにしても、早く合流できるんだね」

「ああ。それに湖畔もあるから、仕事が終われば遊ぶのもいいかもしれない。どうせ出発は明日の朝だからな」

「ん、ハジメや皆と遊ぶの、楽しみ」

「そうだな」



「はあ、今日も手掛かりはなしですか……清水君、一体どこに行つてしまったんですか……」

悄然と肩を落とし、ウルの中の表通りをトボトボと歩きます。清水君が今、どうなっているか、とても不安です。あのまま森で彷徨っているかもしれない。やはり、あのまま残つて搜索をした方が良かったです。

「愛子、あまり気を落とすな。まだ、何も分かつていないんだ。無事という可能性は十分にある。お前が信じなくてどうするんだ」

「でも、清水が向かった森の奥から凄い爆音が響いてたよな。あれつてどう考えてもレッチちゃんとはっぽの砲撃だろ。それに……」

「魔物の死骸と焼け焦げた地面……判別不可能な……」

「やめなさいよ！ まさか清水があの中に居るつて言いたいのか！」

元氣のない私に護衛隊長のデビットさんが声をかけてくれましたが、相川君、二村君が反論し、宮崎さんが怒りだしました。

「喧嘩は駄目です！ 落ち着きましょう！」

「ああ、そうだな……」

「うん……」

私達はこの世界に来てから沢山の人を亡くしました。南雲君、沙条君、谷口さん、中村さん、ユーリちゃん。彼女達が亡くなり、すぐに園部さんも王都に侵入した魔族の人によって殺されました。

そんな中、私の護衛として皆さんがついてきてくれました。先生としては安全な王宮に居て欲しかったのですが、先生としては失格なのですが、先生の為に一緒に来てくれるというのも嬉しいです。

そんな優しい子達の一人、清水君が失踪してから既に二週間と少しが経ちました。私達は、八方手を尽くして清水君を探しましたが、その行方はようとして知れません。

町中に目撃情報はなく、近隣の町や村にも使いを出して目撃情報を求めたのですが、全て空振りでした。レッチャんとほっぽちゃんの見目から、生きていたら直にわかるはずですが、それこそ、街や村に一切寄つていけば確実に。それほど魔物モンスター使いは珍しいそうです。そうなる、最悪な事が脳裏に浮かびます。

あの時、レッチャんとほっぽちゃんが飛び出して森の中へと向かったのを清水君が一人で追いました。それからしばらくして森の奥から砲撃音が響き、魔物モンスターの叫び声みたいなのも聞こえてきました。

私はすぐに森の中へと向かおうとしましたが、護衛の人達に止められ、レッチャんとほっぽちゃんの強さもあつて大丈夫だから待とうという話になりました。ですが、それが間違いでした。

何時まで待っても清水君達は帰ってきません。です、皆で探しに行つたのですが、そこに清水君は居ませんでした。代わりに沢山の肉片と血が散乱してました。その時、護衛の人が連れていたレッチャんやほっぽちゃんに食べられたのではと言いましたが、それはありません。それにちゃんと探してみると清水君が着ていた服やレッチャんとほっぽちゃん達の服やパーツ？ つばいのが一切見付かっていません。

この事から、当初は事件に巻き込まれたのではと騒然となりましたが、清水君自身が「闇術師」という闇系魔法に特別才能を持つ天職を所持しており、他の系統魔法についても高い適性を持っていました。自発的に失踪したと考える人もできませんでした。

元々、清水君は、大人しいインドアタイプの人間で社交性もあまり高くありませんでした。クラスメイトとも、特別親しい友人は南雲君や白崎さん達だけで、南雲君達は亡くなりました。それなのに私の護衛になってくれたのも少し驚きました。

王国と教会には報告済みであり、捜索隊を編成して応援にきてくれるらしいです。本格的な捜索隊が到着するまで、あと二、三日といったところらしいです。

「ごめんなさい。先生が悪いんですね。先生がしつかりとしないといけないのに……」

「先生は悪くないよ」

「そうだって。清水も騎士の人達と折り合いが悪くなったから抜けていっただけだって」

事件に巻き込まれたのか、自発的な失踪なのかはわかりませんが、心配であることに変わりありません。でも、それを表に出して今、傍にいた生徒達を不安にさせるどころか、気遣わせるなんて先生失格です。自分はこの子達の教師なのです！ 頑張らないといけません！

「っ！」

一度深呼吸して、ペシツと両手で頬を叩き気持ちを立て直します。「皆さん、心配かけてごめんなさい。そうですね。悩んでばかりいても解決しません。清水君は優秀な魔法使いです。レッチャんとほっぽちゃんもいますから、きつと大丈夫。今は、無事を信じて出来ることをしましょう。取り敢えずは、本日の晩御飯です！ お腹いっぱい食べて、明日に備えましょう！」

皆の元気のいい返事を聞いてから、カラントツカラントツと音が鳴る扉を開いて自分達が宿泊している宿に入ります。

ここはウルで一番の高級宿で、名前は「水妖精の宿」といいます。昔、ウルディア湖から現れた妖精を一組の夫婦が泊めたことが由来だそうです。目の前に広がるウルディア湖は、ウルの町の近郊にある大陸一の大きさを誇る湖らしく、とても綺麗です。聞いた話から推測するに大きさは日本の琵琶湖の四倍程もあります。

「水妖精の宿」は、一階部分がレストランになっており、ウルの町の名物である米料理が数多く揃えられています。内装は、落ち着きがあつて、目立ちほしくないが細部までこだわりが見て取れる装飾の施された重厚なテーブルやバーカウンターがありますが、生徒達は使用禁止です。

また、天井には派手すぎないシャンデリアがあり、落ち着いた空気に花を添えていますね。「老舗」そんな言葉が自然と湧き上がる、歴史を感じさせる宿で大人な先生にはあつています。嘘です。本当はかなり豪華なのですが、騎士の人達がここ以外は認められないと言っ

てきたので、こちらになりました。

元々、王宮の一室で過ごしていたこともあり、皆も次第に慣れ、今では、すっかりリラックス出来る場所になっています。農地改善や清水君の捜索に東奔西走し疲れた体で帰って来る私達にとって、この宿でとる米料理は毎日の楽しみです。全員が一番奥の専用となりつつあるVIP席に座り、その日の夕食に舌鼓を打ちます。

「ああ、相変わらず美味しい異世界に来てカレーが食べれるとは思わなかったよ」

「まあ、見た目はシチューなだけだな……いや、ホワイトカレーってあったけ？」

「いや、それよりも天井だろ？ このタレとか絶品だぞ？ 日本負けてんじゃない？」

「それは、玉井君がちゃんとした天井食べたことないからでしょ？ ホカ弁の天井と比べちゃだめだよ」

「いや、チャーハンモドキ一択で。これやめられないよ」

極めて地球の料理に近い米料理に毎晩生徒達とテンションは上がりっぱなしです。見た目や微妙な味の違いはありますが、料理の発想自体はとても似通っているのでは？とします。素材が豊富というのも、ウルの町の料理の質を押し上げている理由の一つでしょう。米は言うに及ばず、ウルディア湖で取れる魚、山脈地帯の山菜や香辛料などもあります。そうでないとカレーなんて料理は作れません。

美味しい料理で一時の幸せを噛み締めている自分達のもとへ、六十代くらいの口ひげが見事な男性がにこやかに近寄ってきました。

「皆様、本日のお食事はいかがですか？ 何かございましたら、どうぞ、遠慮なくお申し付けください」

「あ、オーナーさん」

私達に話しかけたのは、この「水妖精の宿」のオーナーであるフォス・セルオさんです。スっと伸びた背筋に、穏やかに細められた瞳、白髪交じりの髪をオールバックにしています。宿の落ち着いた雰囲気がよく似合う男性ですね。先生もこういう人と……何でもありません。

「いえ、今日もとてもおいしいですよ。毎日、癒されています」

愛子が代表してニツコリ笑いながら答えると、フォスさんも嬉しそうに「それはようございました」と微笑んでくれます。

しかし、次の瞬間には、その表情を申し訳なさそうに曇らせました。何時も穏やかに微笑んでいるフォスには似つかわしくない表情です。何事かと、食事の手を止めて皆がフォスに注目します。

「実は、大変申し訳ないのですが……香辛料を使った料理は今日限りとなります」

「えっ!? それって、もうこの異世界版カレーニルシツシル食べれないの?」

「はい、申し訳ございません。何分、材料が切れまして……いつもならこのような事がないように在庫を確保しているのですが……ここ一ヶ月ほど北山脈が不穏ということで採取に行くものが激減しております。つい先日、調査に来た高ランク冒険者の一行が行方不明となりました。ますます採取に行く者がいなくなりました。当店にも次にいつ入荷するかわかりかねる状況なのです。一応、別の商會が届けしてくれる事になってはおりますが、何分、今まで頼んでいたところではないので品質や味がどうなるかはわからないのです」

一応、対策は取ってくれているようですが、不安ですね。先生としては皆に気持ちよく動いてもらうために美味しい料理は必要だと思います。

「あの……不穏っていうのは具体的にはどんなことなの?」

「何でも魔物の群れを見たとか……北山脈は山を越えなければ比較的安全な場所です。山を一つ越えるごとに強力な魔物がいるようすが、わざわざ山を越えてまでこちらには来ません。ですが、何人かの者がいるはずのない山向こうの魔物の群れを見たのだとか」

「それは、心配ですね……」

モンスター魔物の話に眉をしかめます。他の皆も若干沈んだ様子で互いに顔を見合わせます。フォスさんは、「食事中にする話ではありませんでしたね」と申し訳なさそうな表情をすると、場の雰囲気を取り返すように明るい口調で話を続けてくれます。

「しかし、その異変ももしかするともう直ぐ収まるかもしれませんよ」

「どういうことですか？」

「実は、つい先ほど新規のお客様が宿泊にいらしたのですが、何でも先の冒険者方の捜索のため北山脈へ行かれるらしいのです。フューレンのギルド支部長様の指名依頼らしく、相当な実力者のようですね。もしかしたら、異変の原因も突き止めてくれるかもしれません」

私達はよくわかりませんが、食事を共にしていたデビッドさん達護衛の騎士は一様に「ほう、それは相当な実力者だな」と感心半分興味半分の声を上げたので、不思議に思っていると、二階へ通じる階段の方から声が聞こえ始めました。男性の声と少女二人の声です。何やら少女の一人が男性に文句を言っているみたいです。それに反応したのはフォスだ。

「おや、噂をすれば。彼等ですよ。騎士様、彼等は明朝にはここを出るそうなので、もしお話になるのであれば、今のうちがよろしいかと」
「そうか、わかった。しかし、随分と若い声だ。『金』に、こんな若い者がいたか？」

確かに本当に若い声です。それに何処か聞き覚えがある感じがします。何やんでいる内に三人の男女が話ながら近づいてきます。

私達のいる席は、三方を壁に囲まれた一番奥の席であり、店全体を見渡せる場所でもありません。一応、カーテンを引くことで個室にすることもできる席です。唯でさえ私達一行は目立つため、食事の時はカーテンを閉めることが多いです。今日も、例に漏れずカーテンは閉めてあります。そのカーテン越しに若い男女の騒がしめの会話の内容が聞こえてきました。

「もうっ、何度言えばわかるんですか。私を放置してユエさんと二人の世界を作るのは止めて下さいよお。ホント凄く虚しいんですよ、あれ。聞いてます？ 『ハジメ』さん」

「聞いている、聞いている。見るのが嫌なら別室にしたらいんじゃないか」
「んまっ！ 聞きました？ ユエさん。『ハジメ』さんが冷たいこと言いますっ」

「……『ハジメ』……メッ！」

「へいへい」

その会話の内容に、そして少女の声と呼ぶ名前に、心臓が一瞬にして飛び跳ねます。今、彼女達は何といった？ 少年を何と呼んだ？ 少年の声は、「あの少年」の声に似てはいないか？ 私の脳内を一瞬で疑問が埋め尽くし、金縛りにあったように硬直しながら、カーテンを視線だけで貫こうとでも言うように凝視します。

それは、傍らの宮崎さんや他の生徒達も同じでした。彼らの脳裏に、およそ四ヶ月前に奈落の底へと消えていった、とある少年が浮かび上がっているのでしょうか。

尋常でない様子の愛子と生徒達に、フオスや騎士達が訝しげな視線と共に声をかけるが、誰一人として反応しない。騎士達が、一体何事だと顔を見合わせていると、愛子がポツリとその名を零した。

「今、彼女達は……なんと……？」

「てか、アイツに似てないか、男の声」

「……南雲君？」

無意識に出した自分の声で、有り得ない事態に硬直していた体が自由を取り戻します。私は、椅子を蹴倒しながら立ち上がり、転びそうになりながらカーテンを引きちぎる勢いで開け放ちます。カーテンから存外に大きく音が響いたことでギョツとして思わず立ち止まる三人の少年少女。私は、相手を確認する余裕もなく叫びました。大切な教え子の名前を。

「南雲君！」

「ああ？ 先生か。ここに居たのか……」

私の目の前にいたのは片目を大きく見開き、驚愕をあらわにする眼帯をした白髪の少年でした。記憶の中にある南雲君とは大きく異なった外見です。外見だけでなく、雰囲気も大きく異なっています。私の知る南雲君は、何時もどこかボーとした、穏やかな性格の大人しい少年でした。

実は、苦笑いが一番似合う子と認識していたのは私の秘密です。ですが、目の前の少年は鷹のように鋭い目と、どこか近寄りがたい鋭い雰囲気纏っている姿はあまりに記憶と異なっており、普通に町ですれ違っただけなら、きつと目の前の少年を南雲君だとは思わなかった

でしょう。

ですが、よくよく見れば顔立ちや声は記憶のものとは一致します。そして何より……目の前の少年は自分を何と呼んだのか。そう、〃先生〃です。だから、私は確信しました。外見も雰囲気も大きく変わってしまったていますが、目の前の少年は、確かに自分の教え子である。〃南雲ハジメ君〃であると！

「南雲君……やっぱり南雲君なんですね？　生きて……本当に生きて……」

「いえ、人違いです。では」
「へ？」

死んだと思っていた教え子と奇跡のような再会。感動して、涙腺が緩んで涙目になる私は今まで何処にいたのか、一体何があったのか、本当に無事でよかった、と言いたいことは山ほどあるのに言葉になりません。それでも必死に言葉を紡ごうとしたのに返ってきたのは、全くもって予想外の言葉でした。

思わず間抜けな声を上げて、涙も引つ込みました。スタスタと宿の出口に向かって歩き始めた南雲君を呆然と見ると、このままではいけないと思つて慌てて追いかけて袖口を掴みます。

「ちよつと待つて下さい！　南雲君ですよね？　先生のこと先生と呼びましたよね？　なぜ、人違いだなんて言うんですか！　だいたい自分で言うのもなんですが、私を見て先生なんて言葉は教え子の子達しかでてきませんよ！」

本当に自分で言うのはなんですが！　悲しくなりますけれど！

「いや、聞き間違いだ。あれは……そう、方言で〃チツコイ〃て意味だ。うん」

「それはそれで、物凄く失礼ですよ！　ていうかそんな方言あるわけがないでしょう。どうして誤魔化すんですか？　それにその格好……何があったんですか？　こんなところで何をしているんですか？　何故、直ぐに皆のところへ戻らなかつたんですか？　南雲君！　答えなさい！　先生は誤魔化されませんよ！」

私の怒声がレストランに響き渡りますが、気にしてはいられませ

ん。他の人になんと見られようと、この手は外せません。生徒や護衛騎士達もそろそろと奥からやって来てくれたので、逃がしません。

生徒達は南雲君の姿を見て、信じられないと驚愕の表情を浮かべています。生きていたこと自体が半分、外見と雰囲気の変貌が半分といったところでしょう。

「……離れて、ハジメが困ってる」

「な、何ですか、あなたは？ 今、先生は南雲君と大事な話を……」

「……なら、少しは落ち着いて」

冷めた目で自分を睨む美貌の少女に僅かに怯みます。彼女と私の身長に大差はありません。とつても悲しい事に。

「ふう……」

彼女の言葉に私が暴走気味だった事を自覚し頬を赤らめて南雲君からそつと距離をとり、遅まきながら大人の威厳を見せようと背筋を正します。先生だから嬉しくてもちゃんとしなくてははいけません。

「すいません、取り乱しました。改めて、南雲君ですよね？」

今度は、静かな、しかし確信をもった声音で、真つ直ぐに視線を合わせながら南雲君に問い直します。そんな私を見て南雲君は、頭をガリガリと掻くと深い溜息と共に肯定しました。

「ああ。久しぶりだな、先生」

「やつぱり、やつぱり南雲君なんですね……生きていたんですね……」

再び涙目になる私に、南雲君は特に感慨を抱いた様子もなく肩を竦めた。

「まあな。色々あったが、何とか生き残ってるよ」

「よかった。本当によかったです」

それ以上言葉が出ない様子の私を一瞥すると、南雲君は近くのテーブルに歩み寄りそのまま座席についた。それを見て、残りの二人も席に着きました。それからは周囲の事など知らんばかりに、生徒達の後ろに佇んで事の成り行きを見守っているフォスさんを手招きで呼び寄せました。

「ええと、ハジメさん。いいんですか？ お知り合いですよね？ 多分ですけど……元の世界の……」

「別に関係ないだろ。流石にいきなり現れた時は驚いたが、まあ、それだけだ。元々晩飯食いに来たんだし、さっさと注文しよう。マジで楽しみだったんだよ。知ってるか？　ここカレー……じゃわからないか。ニルシツシルっていうスパイシーな飯があるんだってよ。想像した通りの味なら嬉しいんだが……」

「……なら、私もそれにする。ハジメの好きな味知りたい」

「あつ、そういうところでさり気ないアピールを……流石ユエさん。というわけで私もそれにします。店員さあくん、注文お願いしまあす」

最初は私達をチラチラ見ながら、おずおずしていたウサギさんが困った笑みで寄って来たフォスに注文を始めました。私はツカツカとハジメのテーブルに近寄ると「先生、怒ってます！」と実にわかりやすい表情でテーブルをペシツと叩きます。ちよつと力を入れ過ぎて痛いです。いえ、とつても痛いです。

「南雲君、まだ話は終わっていませんよ。なに、物凄く自然に注文しているんですか。大体、こちらの女性達はどちら様ですか？　それに一緒に落ちた谷口さんや中村さん。沙条君やユーリちゃんはどうなつたんですか！」

私の言い分は、その場の全員の気持ちを代弁していたはずです。南雲君が四ヶ月前に亡くなったと聞いた教え子であると察した騎士達や、愛子の背後に控える生徒達も、皆一様に「うんうん」と頷き、南雲君の回答を待ちます。

南雲君は少し面倒そうに眉をしかめました。どうせ答えられない限り喰い下がるという意思を込めてみると、仕方なさそうに視線を愛子に戻してくれました。先生の勝利です。

「依頼のせいで一日以上ノンストップでここまで来たんだ。腹減ってるんだから、飯くらいじっくり食わせてくれ。それと、こいつらは……」

南雲君が視線を二人に向けると、二人は南雲君が話す前に、私達にとって衝撃的な自己紹介しました。

「……ユエ」

「シアです」

「ハジメの女」「ハジメさんの女ですう！」

「お、女？」

私は若干どもりながら「えっ？ えっ？」とハジメと二人の美少女を交互に見ます。上手く情報を処理出来ていません。後ろの生徒達も困惑したように顔を見合わせています。いや、男子生徒は「まさか！」と言った表情でユエさんとシアさんを忙しなく交互に見ている。徐々に、その美貌に見蕩れ顔を赤く染めながら。

「おい、ユエはともかく、シア。お前はまだ違うだろう？」

「そんなっ！ 酷いですよハジメさん。私のファーストキスを奪っておいでー！」

「いや、何時まで引つ張るんだよ。あれはきゅ『南雲君？』……何だ、先生？」

シアさんの「ファーストキスを奪った」という発言で、私の声が一段低くなります。南雲君がまさか二人の美少女を両手に侍らして高笑いしている光景が目には浮かんだからです。非行に走る生徒を何としても正道に戻してみせるのは先生の役目！ どうかしないといけません！

「女の子のファーストキスを奪った挙句、ふ、二股なんて！ 直ぐに帰ってこなかったのは、遊び歩いていたからなんですか！ もしそうなら……許しません！ ええ、先生は絶対許しませんよ！ お説教です！ そこに直りなさい、南雲君！」

「それは俺に言う前に沙条に言った方がいいぞ、先生」

「え？ どういうことですか？」

「アイツ、十人以上、侍らせてるから」

「なんですって！」

「愛ちゃん先生、落ち着いて」

「そう、ですね。とりあえず、色々と話してもらいます。ええ、話してもらいますとも！」

私が指さしながら、そう告げると南雲君は嫌そうな表情をしました。が、絶対に逃がしません。とりあえず、他の客の目もあるからとVI

P席の方へ南雲君達を連れていき、そこで私や生徒達から怒涛の質問を投げかけます。でも南雲君は、目の前の今日限りというニルシツシルに夢中で端折りに端折った答えをおざなりに返してきました。

Q、橋から落ちた後、どうしたのか？

A、超頑張った

Q、なぜ白髪なのか？

A、超頑張った結果

Q、その目はどうしたのか？

A、超超頑張った結果

Q、なぜ、直ぐに戻らなかったのか？

A、戻る理由がない

Q、他の皆は無事なのか？

A、無事

Q、いったいどこで沙条君はそんなに女の子をひっかけたのか？

A、ダンジョンで出会いを求めた結果

「真面目に答えなさい！」

頬を膨らませて怒りますが、南雲君は柳に風といった様子です。目を合わせることもなく、美味そうに、時折ユエさんやシアさんと感想を言い合いながらニルシツシルに舌鼓を打っています。表情は非常に満足そうで恨めしいです。

その様子にキレたのは、護衛隊長長のデビッドさんです。拳をテーブルに叩きつけながら大声を上げました。

「おい、お前！ 愛子が質問しているのだぞ！ 真面目に答えろ！」

南雲君は、チラリとデビッドさんを見ると、はあと溜息を吐いた。

「食事中だぞ？ 行儀よくしろよ！」

全く相手にされていないことが丸分かりの物言いに、元々、神殿騎士にして重要人物の護衛隊長を任されているということから自然とプライドも高くなっているデビッドさんは、我慢ならないと顔を真っ赤にしました。そして、何を言ってもものらりくらりとして明確な答え

を返さない南雲君から矛先を変え、その視線がシアさんに向きます。「ふん、行儀だと？ その言葉、そつくりそのまま返してやる。薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせるなど、お前の方が礼儀がなっていないな。せめてその醜い耳を切り落としたらどうだ？ 少しは人間らしくなるだろう」

あんまりと言えばあんまりな物言いに、思わず注意をしようと思しますが、その前に俯くシアさんの手を握ったユエさんが、絶対零度の視線をデビッドさんに向けました。最高級ビスクドールのような美貌の少女に体の芯まで凍りつきそうな冷ややかな眼を向けられて、デビッドさんは一瞬たじろぐも、見た目幼さを残す少女に気圧されたことに逆上しました。信じられません。こんな事を言う人だったなんて……

「何だ、その眼は？ 無礼だぞ！ 神の使徒でもないのに、神殿騎士に逆らうのか！」

思わず立ち上がるデビッドさんを、副隊長のチェイスは諫めようとするが、それよりも早く、ユエさんの言葉が騒然とする場にやけに明瞭に響き渡りました。

「……小さい男」

それは嘲りの言葉です。たかが種族の違い如きで喚き立て、少女の視線一つに逆上する器の小ささを嗤う言葉でした。唯でさえ、怒りで冷静さを失っているデビッドさんは、小さな女の子に器が小さいと嗤われて完全にキレました。

「……異教徒め。その獣風情と一緒に地獄へ送ってやる」

無表情で静かに呟き、傍らの剣に手をかけるデビッドさん。すぐに止めようとしますが、デビッドは周りの声も聞こえない様子で、遂に鞘から剣を僅かに引き抜こうとしました。

「動くな。動いたら敵対行動とみなして殺す」

その瞬間、いつの間にかデビッドさんの背後に背の高い茶色の髪の毛に赤いコートを着て、肌色のセーターに黒いマフラーで口元を隠した女性が立っていました。彼女の手には厚めのナイフが握られています。それがデビッドさんの首筋に添えられています。

「き、貴様っ！ この俺が誰だと思っている！」

「関係ない。敵なら解体する。それだけ」

「隊長！」

「他の連中も動くな。動いたら死ぬぞ」

「南雲君？」

南雲君の方を見ると、彼は水妖精の宿の入口を見ていました。そこからフードをつけた怪しい風貌の若い子達が入ってきます。彼等はほぼ全員が、武装していて何か怖い気配がして身体がガタガタと震えてきます。

「ハジメ。そいつら、殺していいの？ ヘイゼルが動いたのなら、敵でしょ？」

フードの一人が弓を構えながら聞いてきます。その声は可愛らしい女の子の声です。

「詩乃か。こいつらの選択次第だろう。というか、そっちで判断しろよ。お前達は俺の指揮下にはないからな」

「そう。じゃあ、脅威にもならないから放置でいいよね」

「ん。それでいい。それよりもこのニルシツシルが美味しい。食べよう？」

「カレーなら久しぶりに食べたいかも」

そう言った彼女はこちらにやってきます。

「俺はいいから愛子を守れ！」

「だ、駄目です！ 動かないでください！」

デビットさん以外の人が剣を引き抜こうとした瞬間。もう一人のフードの人がいつの間にか近くに居て銀色の光を放ちました。次の瞬間に何か落ちる音が聞こえて振り返ると、そこでは両断された剣が落ちていました。

「次はこうなります。大人しくしておいてください」

小さな私ぐらいの背丈であろう子からも可愛らしい声が聞こえてきました。彼女の手には刀が握られており、それが騎士さん達の剣を切断したみたいです。

「あ、注文をお願いします。ニルシツシルをあるだけください。代金

「は(こちらで)」

「は、はい……ですが、調味料がもうありません……」

「あ、それなら持ってきました。何処に運び込めばいいですか？」

「え？ あ、もしかして商会の方ですか」

「そうです。正確にはその護衛です」

「はあ……」

フォスさんがホツとしたよう溜息をつきました。

「とりあえず、安全確保は完了。それでいい？」

「そうですね。問題無いと思います、ヘイゼルさん」

「なら呼んでくる」

そう言つてデビットさんにナイフをあてていた人は彼の剣を抜きとつてもう一人の女の子に渡してから、霞のようにその場から消えていきました。

「マジかよ……」

「まるで遠藤君みたい……」

「いや、それよりもやばいだろ」

「ああ、大人しくしていたら手は出さないから安心して」

「は、はい！」

「そんな事より、肝心の奴等はどうした？」

「あく湖畔で遊んでる」

「よし、何処だ。ちよつと狙撃してくるわ」

「別にいいけど、喧嘩してこの辺りをふっ飛ばさないでね」

「わかつてるよ」

そう言つて南雲君が外に出てから轟音が響いてきました。後、悲鳴も。周りを見ると、フードの人達はいくつかのテーブルをくつつけて大きな席を作っています。騎士の人達は隅の方へ集められ、刀を持った女の子に監視されています。

「愛ちゃん先生、これってまずくない？」

「いえ、たぶん大丈夫です。南雲君の知り合いみたいですし……」

「そうだよ？ それにさつき消えた女の子、変な感じがするの」

「あ、それ私も思ったよ。まるで……」

私も彼女には何処かで会ったような気がします。そんな風に思っている、店の入口から南雲君と五人が新しく入ってきました。

「まったく、ハジメのせいでひどい目にあった」

「だよね〜」

「まさかアンチマテリアルライフルを使ってくるなんて……常識がないんじゃない?」

「お前達が言うな。だいたい無傷だろうが。むしろ、神喰をサーフボードにしてんじゃないやねえよ」

「結構おもしろくてな」

やってきた五人は私達の方を見ると、固まりました。

「あ、愛子先生だ。このウルに向かうというのは聞いていたが、ここに居るとは思わなかったな」

「俺もさつき偶然に出会って驚いたが、お前はウルに居る事をわかっていたはずだよな?」

「もしかして、それでアンチマテリアルライフルを撃ったのか? 俺が知っているのはこのウルに向かっていたことだけだ。この店に泊まっているのは知らなかったな」

「考えれば分かったかもしれないな。ここはカレーが食べられるんだし。まあ、いい」

二人が話している後ろから、さらに二人が出てきました。

「あ、なっちゃんにたえたえだく久しぶり〜」

「「かるー!」」

「もしかして、谷口さん?」

「そうだよ? 鈴の事、忘れちゃった?」

「「「そんなわけないでしょ!」」」

私達は思わず走り出して、壁にぶつかりました。

「ごめん、結界解除してなかったよ」

「台無しだな」

「だね」

「よし、これで大丈夫だよ! さあ、鈴の胸に飛び込んで……いや、鈴から行くね! どう〜!」

谷口さんぽい人がジャンプしてこちらに飛びついてきました。そして、宮崎さんの大きな胸に顔を埋めて、胸を触っていきました。

「ちよっ、鈴！」

「良いではないか〜！」

止まらない谷口さんをどうにか引き剥がそうとしますが、ビクともしません。

「鈴」

「はい、やめます！」

女性のような男性のような声が聞こえると、ビシツと止まってやめた谷口さんはその声の人に抱き着きました。

「全員、本日は休憩。明日から行動を起こす。それ以外は好きにしろ。ただし、殺戮を伴う戦闘行動は自衛以外を禁止する。本日の宿はここだが、野宿したい奴はそれでもいいし、寝ずに遊ぶのもいい。宿だって好きにしているが、迷惑だけはかけないように。以上、解散。ネコネは宿泊交渉を頼む」

「了解なのです」

「まあ、最初は飯だな」

席に指示をしていた人が座ると、その横に谷口さんと中村さんが座りました。向かいには別の人が座ります。彼女達は席に着くとフードを外すのですが、そのほとんどの人が美少女で、獣の耳をしていました。人なのは中村さん、谷口さん、ヘイゼルと呼ばれた人と、金髪の男性みたいな人だけです。そして、金髪の人はまるでユーリちゃんのお親族みたいです。

「亜人だ〜！」

「亜人風情にやられたと……」

「彼女達は首輪をしています。察するにあの三人の奴隷でしょう」

「これは教会に報告して異端者共を……」

「そうか。じゃあ、ここで殺しておくか」

「「え?」」

「何を不思議そうにしているんだこいつらの。そもそも生きて帰れると思っっているのか。異端認定をしてくるような奴等など、返さずに

皆殺しにした方が後腐れがないだろう」

「「っ!?!」」

「それじゃあ、僕が貰うね。こないだの実験した術式で色々わかっただからさ」

「任せる」

「やったね」

「あの、中村さん……今、なんて?」

「ん? 僕がその人達を殺して実験体にするって言ったただけだよ」

「な、何を言っているんですか! そんなこといけません!」

「先生こそ何を言っているの? その人達は僕達を殺すために異端認定をしようとした。じゃあ、殺される前に殺さないかね。それにこの世界の為に戦っているんだし、僕達の経験値になるならその人達も本望でしょう。ほら、エヒト様だっけ? その人の望む通りになるんだからね。よかったね、神の身元へいけるかもしれないよ?」

「ど、どうしたの恵里? そ、そんな事を言う子じゃ……」

「あく猫被つてたから。でもやめたの。こんな僕でも愛してくれる人ができたからね」

「な、南雲君!」

「これに関しては俺は関わっていない。そこの沙条に言え」

「「沙条君なの!?!」」

「いいえ、私の名前マーナ・ライン。ユーリの兄です。沙条という人ではありません」

ニコリとそう言ってきましたが、嘘くさいです。それに南雲君の姿が変わった事を考えると、沙条君も変わっているかもしれない。ですが、そちらの方がいいのかもしれない。沙条君は教会によって裏切り者の汚名を着せられています。なので、名乗り出る事はできないのかもしれない。

「ユーリちゃんは何処かですか?」

「ユーリでしたら、元気にしていますよ。少し別行動をしていますけど……」

「良かった……それで、ユーリちゃんのお兄さんでいいですか?」

「はい。そちらは愛子先生でよろしいですか？」

「ええ、それでお願います」

「では、愛ちゃん先生と」

「止めてください！」

思わず叫んだのは仕方ありません。

「あ、そうだ。皆はここに泊まってるんだよね？」

「そうだけど……」

「じゃあ、女子会しようよ！」

「ん？ 鈴、今日はマーナと寝る日じゃなかったっけ？」

「変わってもらえばいいよ。二人にはまた何時会えるかもわからないし、もう会えないかもしれないしね！」

「それもそうか」

「な、何をいつてるの！ そんな事は……」

「戦争しているだから、何時死んでもおかしくない。話せるうちに話そう〜」

あちらは和気あいあいとしているようで、結構怖いです。いえ、それ以前に寝るってどういう意味ですか！ でも、そちらは今置いておきます。

「あのそれで騎士の人達を許してあげてくれませんか？」

「助けるメリットがありません。デメリットしか存在していませんので、助ける理由はありませんね。彼らがやっている事と同じじゃないですか。彼等は所詮、ただの騎士。こちらは神の使徒。ほら、彼等が亜人に行っている事となら変わりません。問題は全くありませんね」「ふざけるな！ 我等はエヒト様の導き通りにしているだけだ！ 亜人と我等を同じに扱うなど言語道断だ！」

「同じですよ。上位の者が下位を痛めつける。なにも可笑しくくない。まあ、神様の意思に従って死んでください♪」

沙条君は楽しそうにそう言っています、私にとって目の前の人 genuinely あの沙条君だとは信じられなくなってきました。沙条君がデビットさん達を見る目は人に向ける目ではなく、家畜とかへ向ける目です。いえ、それすらなく、彼等の事など本当になんとも思ってい

ないのかもしれませんが。

「殺すなんて先生は許しません！」

「あ、それなら退学しますね」

「え？」

「俺、こつちに残るつもりなので学校には戻りません。ですから、愛ちゃん先生は気にしなくていいですよ。退学すればもう先生ではありませんしね」

「そんなわけではないでしょ！ 先生はずっと、永遠に先生です！」

「え、それはちよつと引く」

「おい、その辺にしておけ。ほら、ニルシツシルでも食ってろ。俺が先生と話をつけておく。それにこんな塵の事など放置でいいだろ。それよりも嫁達を可愛がってやった方がいいんじゃないか？」

「それもそうか。じゃあ、そつちは任せる」

そう言つて沙条君は別のテーブルに移動しました。良く見ればいつの間に谷口さんも中村さんも宮崎さん達のところへ移動して話をしています。

「さて、真面目に答えるが……さ、マーナと中村はとあるスキルを手に入れて生き残った」

「スキルですか？」

「そのスキルはととても強力で、普通なら死ぬような事もそのスキルがあれば乗り越えられた。だが、強い力には代償がある」

「代償……」

「その一つが殺戮衝動だ」

「さ、殺戮衝動って！」

「そうだ。人を殺したくてたまらなくなる奴だ。魔物モンスターを殺しても多少は抑えられるようだが、やはり人の方がいいみたいだ。だから、普段は我慢して殺しても問題ない敵は容赦なく殺す事になっている」

「何故そんなスキルを手に入れたんですか！」

「何故って、そりゃ……生き残るためだ」

「っ!? そ、そうですね……好きでそんなスキルを取るはずは……」

「いや、アイツは結構、好きで取つてた気がする」

「ちよつと!？」

そんな危険なスキルを好き好んで取るなんてどうかしていますよ!

「まあ、アレだ。俺の髪の毛や腕、目もそうだ。死ぬような思いを何度もしてきた。実際に腕はクマモドキに食われた」

「そんな、それじゃあ……その腕は……」

「義手だ。アイツはもつとひどい。谷口と中村を助け、守るために両手両足、記憶や感情の一部、内蔵などをサクリファイスというスキルで捧げている。わかるか、先生」

「そんなのって……」

「谷口と中村も身体の一部を無くしている。谷口は両足だったか。まあ、そんな感じであいつらは三人で地獄を生き残った。だから、あいつらの交友関係については先生もあんまり言わないでやってくれ」

た、確かに三人の現状を思えば仕方ないですね。互いに支え合っているうちに恋が芽生えて愛し合うようになってしまった。不思議ではありません。

「でも、他の人はどうなのですか？」

「ほら、アイツってそもそもユーリが好きじゃないか」

「あく確かに……」

「そのユーリは召喚された存在だ。基本的に召喚というのは好意を持つ相手に答えるわけで……」

「その結果、増えていったと」

「まあ、そんな感じだな。後、立場というものもある」

「立場ですか？ それって……」

「それについては内緒だ。まあ、先生は先生の好きにしたらいい。俺もアイツも好きにする事にした」

「わかりました。先生も好きにします」

「つと、先生、口元になにかついてる。こいつで拭くといい」

「え! どこですか!」

「冗談だ」

そう言うと、南雲君は別の紙を取り出してテーブルの上に置き、コ

ンコンと紙を叩きます。それを見て先程渡された紙を見ると、メツセージが書かれています。内容は夜に内密な話があるからこつそりと全員集めておいてくれとのことでした。私が頷くと、南雲君は掌を差し出してきました。

「それ、貴重な物だから返してくれ」

「わかりました」

「話は終わった？」

「ああ、終わった。俺達も湖畔でゆっくりするか」

「ん、泳ぐ？」

「それもいいですね！ 優花さん達もどうですか！」

「この馬鹿ウサギ！」

「シア、お仕置き」

「……南雲君。先生、ちよくと聞きたい事が増えました」

「だろうな。夜だ夜」

南雲君が頭が痛そうに片手で押さえています。

「面倒になった」

「ご、ごめんなさいです」

「これでこの騎士達の行き先は決まったな」

「えっと、もしかして……」

「決まってるだろ」

南雲君が首を指で切るような仕草をしました。つまり、彼等は……

「だから駄目です！」

「だが、アイツは絶対に殺すぞ。それこそ事はヘイゼルの安全にかかわるからな」

「問題ない」

後ろから声が聞こえて上を向くと抱きしめられました。頭の後ろに大きな胸があります。上を向くとあの怖い女性が立っています。手にはナイフを持っていますませんが、そのまま頭を撫でたりしてきます。ちよつと気持ちいいです。

「って、先生に何をされるんですか！」

「可愛いから、つい」

「それで問題ないって?」

「南雲は忘れてる。私が何の力を持っているか」

「何ってヘイゼルとジャック・ザ・リップー……ああ、なるほど」

「そう。娘の力で情報を抹消すれば何の問題もない。ちよつと頭が馬鹿になるかもしれないけれど、大丈夫」

「それぐらいなら問題ないな。それじゃあ俺達の事も頼むわ」

「了解。任せて。それとご主人様が面倒だから、先生達を連れていくのもありだと言ってる」

「あの、ご主人様ってどういうことですか?」

「ご主人様はご主人様。私の大事な人」

「南雲君?」

「詳しい事はマーナに聞け。俺は知らん」

「はな——」

南雲君が立ち上がって外に向かっていったので、私が振り返ろうとすると誰もおらず、何を考えていたのか、誰について話していたのか、わからなくなりました。南雲君と話していたはずだけど、内容が思い出せません。ただ、夜に生徒全員を集めて話があるという事ぐらいは思い出しました。

「お前、先生の記憶も抹消したのか」

「だって、面倒だし」

「後で説明し直すのは大変だろう」

「大丈夫。ご主人様や南雲がやってくれる」

「おい。まあ、沙条に投げるから問題ないな」

第63話

湖で遊び、夕食を食べてから宿に入る。流石は上級の宿とはいえ、風呂は無い。水浴びなどができる場所こそあれ、基本的に田舎なので仕方がないだろう。

もちろん、俺達は自前の馬車にシャワールームがあるので、そこで済ませてから部屋に入る。騎士達は彼等がかりている一室に縛りつけて監禁し、騎士達の情報をクラスメイト達を除く全員から優花が消したので問題は無い。一応、その部屋は見張りとして恵里が呼び出した死霊が彼等の中に入って行動を縛ると同時に監視をしているので逃げだす事は不可能だ。

「んっ……そこ、いい……もつとお、してえ……」

「こつちもお願います……ひゃあっ！」

「ひうっ！……そこは……やめえ……」

俺が取っている大人数の部屋。ベッドの上には風呂上りで一糸まとわぬ姿となつている詩乃、ネコネ、イヌイの三人がうつ伏せになつて寝転んでいる。その綺麗な身体を見ながら撫でまわしていく。同時に彼女達からは喘ぎ声が上がってくる。

「何をしているんですかあっ！」

扉がいきなり開かれ、顔を真っ赤にした愛ちゃん先生が入ってきたのですぐにシートで三人の身体を隠す。愛ちゃん先生の後ろには同じように顔を赤くしたクラスメイト達の姿が見える。菅原や宮崎以外にも相川や仁村、玉井なども奥の方、廊下側に居て後ろを向いているが興味津々のようでチラチラ見ようとして他の女子に止められている。

「何ってブラッシングだけど」

「ブラッシング……？」

「そう。尻尾の根本は自分達でできないし、風呂に入ったら拭いてやってからしっかりと毛並みを整えていくんだ」

「モフモフを維持するためには重要な事だよ」

「だったらなんで裸なんですか！……だいたい沙条君がしなくても同性

の谷口さんとかに頼めばいいですよね！」

「三人はマナマナのお嫁さんで、こつちだと所有物だもん。ちゃんと世話は自分でしないとだめだよね〜」

「三人は物じゃないですよ！」

「聖神教会は物として扱っているよ、先生」

鈴と恵里が対応している間に用意した服を三人に渡してから、愛ちゃん先生の近くへ向かう。

「着替えさせるからちよつと待っていてくれ」

鈴達と一緒に愛ちゃん先生を外に出して扉を閉めてから、着替えを終えるまで準備をして待つ。テーブルを用意して全員が座れるように整えると、三人がちゃんと服を着て身だしなみを整えられたようだ。なので扉を開けて中に入ってもらおう。

「ハジメ達はまだみたいだから寛いで待っていてくれ。アルテナ、頼む」

「かしこまりました主様」

「私も手伝う」

「ありがとうございますヘイゼル様」

「私達もやろうか」

「はいなのです」

アルテナとヘイゼルを中心として、嫁達によってテーブルの上に菓子や飲物が用意されていく。これらは商業都市フューレンで買っておいた物だろう。

「さて、まずは自己紹介からしましょうか」

「そうですね。お話はそれからがいいですね」

「じゃあ、まずは詩乃からだ」

「わかった。私は朝田詩乃。基本的にスナイパーをしている。次はイヌイとネコネ」

「イヌイです。よろしくお願ひします。剣士をしております」

「ネコネです。法術師と商会の会計をしているのです」

「次は私ですね。私はアルテナ・ハイピストと申します。主に主様や皆様のお世話を担当させていただきますいております」

「エルフ……なんだよ？」

「エルフという言葉はわかりませんが、私は森人族という種族でございます」

詳しい質問タイムに入りそうなのを愛ちゃん先生がぶった切って止める。

「そちらの人は何方なのですか？」

「ハイゼルは後で教える。それよりも、愛ちゃん先生は俺達に聞きたい事があるんだよね？」

「はい。まずその人達との関係は南雲君に少し聞いたので一旦、置いておくとして……これまでの事を詳しく話して欲しいです。そして、これからどうするかも教えてください」

愛ちゃん先生は真剣な表情で言ってくるので、こちらもしつかりと答える。元から全てを話すつもりだったので問題ない。

「ではこれまでの事を伝えようと思うが……」

「その前に俺達から話した方が、まだまじだろう」

扉が開いてハジメ達が入ってくる。どうやら、タイミングを見計らっていたようだ。まあ、別に構わない。

「確かにそっちからの方がいいな。それじゃあ、ハジメ達から頼む」

「ああ。まず俺達は……」

それからハジメが説明していく。奈落へと落ちて腕を熊に切り落とされて食われ、なんとか逃げ延びた先で見つけた神結晶の事。そして、罫を仕掛けて魔物^{モンスター}を食べて死にかけて、神結晶から出る神水でなんとか命を繋ぎとめた事などを詳しく。もちろん、ユエと出会ってさらに奥へと進むと次はユーリが放ったレヴィと合流することになり、俺達の生存を知った事を伝えていく。

「まじかよ……」

「そんなわけで俺は義手になっている。こっちの片目もやられたから義眼だな」

「その、大丈夫なのですか？」

「ああ、大丈夫」

本気で心配している愛ちゃん先生達にハジメがなんでもない風に

答えているが、ぶっちゃけていうと効率と趣味を優先しているだけなんだよな。

「そこまで気にする必要はないって。だって、コイツは治せるのに治してないだけだからな」

「阿保か。俺は優先順位と効率を優先しただけだ」

「どういうことですか？」

愛ちゃん先生がいい笑顔で詰問してくるので、詳しく教えてあげる。

「俺達は手足の再生が出来る施設を開発した。そのおかげで俺達も身体が修復できている」

「愛ちゃん先生には前に言ったが、俺達の中では沙条が一番重症だったからな。その次は谷口と中村だ。俺はまだましな方だ。それに技術者も少ないから順番待ちしていたしな」

「それじゃあ、何れは治すんですね？」

「もちろん、そのつもりだ」

「それなら良かったです」

「まあ、俺の方はそこから沙条と合流した。ただ、沙条や谷口と中村の方は心して聞けよ」

「じゃあ、鈴達から話すね」

愛ちゃん先生はある程度知っているだろうが、他の連中は知らないので話していく事は効果的だ。

「鈴達も南雲君と同じで奈落到ちたんだけど、三人一緒だったんだ。それは鈴達三人が一緒に落ちたからでね」

「まあ、そもそも僕が鈴を突き落としたから、それに怒った真名が僕を突き落として一緒に落ちたからだけど」

「「えっ!？」」

鈴が落ちた所から説明していたら、いきなり恵里が暴露して先生達が驚愕の表情になる。だが、これは無理はないだろう。

「それがあの時の真相なんだ……」

「なんで中村さんは谷口さん突き落としたのですか？」

「鈴が僕の幸せに邪魔だったからかな。まあ、今はもう別の幸せを手

に入れたからいいけどね。それに仲良しだし」
「だね〜」

鈴と恵里が互いに抱き合ってキャツキャウフフとしているのを宮崎達は呆然と見ている。まあ、自分を殺そうとした奴とこんな仲良くなっているとは思わないだろう。

「ほら、続きを教えてやれ」

「そうだね」

「あの後は……」

そこから続く話に愛ちゃん先生達は顔色を悪くしていく。鈴と恵里は身体の一部がなくなり、俺はほぼ取り変えるような状況になつた上、殺戮衝動が発生するスキルの事なども包み隠さずに教えた。

「召喚した英^{アストルフオヒルサルカ}霊^カ達に協力してもらわなければ確実に俺達は死んでいた」

「だよね〜。鈴は足が無かったし、えりえりも片手と片足だしね〜」

「うん。アレは無理。真名が召喚してくれなかったら、今頃はお腹の中だったかも」

「まあ、それ以外も大変だったけどね。凄く恥ずかしかったし」

「僕はまあ、恥ずかしかったけど別に嫌じゃなかったかな」

二人は楽しそうに思い出を語っていくが、どう考えても内容がやばい。

「これはストックホルム症候群誘拐事件や監禁事件などの犯罪被害者についての臨床において、被害者が生存戦略として犯人との間に心理的なつながりを築くことみたいな感じですか？ それとも吊橋効果？ どちらでもいいですが……お二人は今の関係が問題ないと思っ
ているんですね？」

「そうだよ〜」

「二人の男性を皆でシェアするのは色々と助かる部分もあるしね。まあ、赤裸々な事になるから言わないけど」

「今の魔改造されたマナマナを一人で相手するとか無理だしね〜」
「こら」

「わ、わかりました。そちらの関係についてはとやかく言いません。

続きをお願いします」

「ここからは俺が話そうか。50階層で合流してからは――」

先生達に全部話す。最下層の拠点を手に入れた事。更にそこに知らされたエヒトと解放者達の真実。更にユーリが呼び出したシユテルが王都を監視して情報を得ていた事。それによつて手に入れた情報についても知らせる。

「そんな、園部さんは自分から囮になつて魔族の人と一緒に自爆したつて……」

「檜山が優花にそんなことを……?」

「アイツ……」

宮崎や菅原達は拳を強く握りながら、涙を流していく。

「檜山君が関わっているのは事実なのですか?」

「間違いない。何せ本人から聞いたからな」

「そうだよな、本人が言っているのなら間違いはないよな」

「だよな」

「うん。これは……つて、本人?」

「情報を手に入れたので優花は助けた」

「ほ、本当に園部さんは生きていますか?」

先生がガチ泣きしながら聞いてくる。その背後からヘイゼルの姿のまま優花が愛ちゃん先生、宮崎、菅原の三人を纏めて抱きしめて姿を戻す。

「生きてちや悪い?」

「ゆ、優花あああつ!」

「よかつたああ!」

「ううう、園部さん……」

女性陣で色々と泣きながら話している間に俺はアルテナが入れてくれた紅茶を飲みながら、ほつとしてゐる男性陣と話す。当然、ハジメも一緒だ。

「まあ、こんな経緯があつて俺達は戻らない事にしたんだ」

「確かにそれが正解だよな。南雲はともかく、沙条は裏切り者にされてるし」

「しかし、南雲が言っていたが、ダンジョンに出会いを求めた結果が嫁さんいっぱいか。そこは羨ましいが、正直言ってそんな極限状態はアレだな。素直に無理だわ」

「俺達だって狙ってやってるわけじゃないぞ」

「そうだな。そんな暇もない。まともに寝るのすら大変だから、日が経つにつれて慣れないとあっけなく餌行きだ」

「でも、羨ましいものは羨ましいよな。やろうとはおもわんけど」
「確かに」

相川達が頷いているのは理解はできる。確かに俺がこちらの立場だったら羨ましくは思う。だが、決してやることはないだろう。賭けに勝てる可能性なんてほぼゼロだ。こっちとら、愛歌様の援護があつて因果を捻じ曲げた結果だからな。

「だが、ここに可愛いケモ耳やエルフ耳の可愛い彼女や綺麗な嫁が出るチャンスがあると云ったらどうする?」

「マジ?」

「マジだ」

「今なら手軽に強くなれるチャンスもくれてやるぞ。安全だし、ちよつと注射を撃つだけの簡単な事だ。まあ、姿は俺みたいにちよつと変わるがな」

「南雲みたいにか……」

「それに加えて大型の軍用バイクなどがついてくるビックチャンス！」

「マジか! 欲しい!」

「相川……」

「だって、彼女とバイクで大自然の中をドライブとか夢じゃねえか!」

「まあ、いいよな」

「ああ、いい……」

「それ、本当に叶える気はないか? ちゃんと相手の事を考えて真摯に接していれば確実に落とせる。どちらにせよ、エルフ……森人族なら確実に紹介はできる。なにせアルテナは森人族の長の孫娘だ。シアもそうだから、うさ耳美少女もだな。つまりバニーガールの彼女や

エルフの彼女ができるってわけだ」

男子達がゴクリと喉を鳴らす。

「じよ、条件はなんだ？」

「そうだ。どうせお高いんだろ？」

「簡単な事だ。お前達が俺達の国に来て手伝ってくれただけでいい。労働は八時間。嫁候補の子達と仲良く簡単な仕事をするだけだ。戦闘がいやならしないでいい。例えば相川なら、バイクの知識を生かして運転方法を教えたり、理想のバイクを作ったりしてもいい」

「それ、大丈夫なのか？ 戦力って……」

「彼女達の中で力を求める者は戦場に出るかもしれないが、一応は防備はかなり高い。戦車や列車砲なんかも用意しているしな」

「マジかよ……」

「ファンタジー世界に持つてくるなよ。まあ、それだけの戦力があるなら安全か……」

「ちなみに映像はこんな感じだ」

ドーラとグスタフや戦車、果てはヴライとの戦闘映像まで見せてこちらの戦力がとんでもないレベルだと教えておく。

「後、沙条の奴がラピユタを手に入れてやがるぞ」

「ラピユタだと！」

「ラピユタは本当にあつたんだ！」

「そんな感じだな」

「今、調査して改修中だ。近代化した方が強いからな」

「あのロボットが近代化すんのか。でもレーザーは普通に撃ててたし、武装が増えるくらいか」

「ちなみに担当者は俺達よりもはるか未来の天才科学者さんだ」

「よろしくお願いいたします！」

互いに顔を見た後、潔く頭を下げてきた。これによつて愛ちゃん親衛隊の男子はこちらについた。まあ、彼等も聖神教会と一緒に居たくはないだろう。何時殺されるかわかったもんじゃないしな。

「あの、園部さんの事はわかりましたが……清水君の事は何か知りませんか？」

愛ちゃん先生が優花達が話している中から抜け出してこちらの方へとやってきた。そろそろ頃合いなので、全員の注目を集めるように手を叩く。

「これから、清水の事を伝える。清水から魔族側に潜入するために寝返るふりをするって伝言が来た」

「そんな危険な事を清水君がするんですか！」

「まあ、正直言つて解放者の言葉が本当かもわからない。聖神教会は真つ黒だが、魔族側がどうなっているかもわからないから調査は必要だ。そう思っていた時に清水に魔族側から接触があった。おそろく、清水が闇魔法で魔物モンスターを支配したりできる上にレ級や北方棲姫を所有しているからだろう。これはまだハジメにも伝えてないが、魔族側にスカウトされる時に出された条件は愛ちゃん先生の抹殺だ」

「「っ!」」

「これを俺達は好機として、愛ちゃん先生には死んだことにしてもらい、俺達が国を作っている場所に居てもらおうと思う」

「待つて、国？」

「そうだ。亜人達がメインになってはいるが、全種族が楽しく幸せに過ごせる国をハルツィナ樹海で作っている。国名自体はまだ決まっていないが、それでも戦力はかなり充実しているから安全は保証できる」

「英霊達も居るし、俺達を作った近代兵器どころか未来の兵器まである。この国や帝国を纏めて相手にしても圧勝するぐらいはできる。ただ、それはエヒトが居なければの話になるが……」

「ハジメの言う通り、エヒトを相手にするには戦力が足りない。こちらはどうにか倒す目的は立てているから気にしなくてもいい。最悪、皆だけでも地球に戻す方法を考えている」

ユーリ達には悪いが、全兵器を暴走させて俺自身を代償として捧げれば地球への転送ぐらいは可能かもしれないからだ。やはり鈴達には生きていてほしいからな。

「駄目です。皆で帰るんです！ せっかく南雲君や沙条君達も生きていてくれたんですから……」

「愛ちゃん先生、例え可能だとしてもそれは無理だ」

「ど、どうしてですか!」

「檜山は何があっても殺すからだ」

優花も頷いているし、他の人達も納得した表情だ。こればかりは優花の気持ちを考えてやるしかない。

「ひ、檜山君は無理矢理この世界に連れてこられておかしくなっただけで……」

「駄目だ先生。こればかりは絶対に譲れない。アイツは優花を拷問して自分の物にしようとした」

「でも、復讐は何も生みません。確かに一時は満足感を得られると思います。ですが、クラスメイトを自らの手で殺したという事実は後々、園部さんの負担になると思います……」

「だけど、少なくともケジメとして自分が納得できる。その後については優花の面倒はしっかりと見る。それに俺が優花の代わりに殺してもいい」

「駄目。アイツは私が殺す。これは決定事項。先生が何と言っても切り刻んで解体する。邪魔をするなら先生も殺すから」

優花がヘイゼルの姿へと戻って殺気を放ちながらそう言うと、先生はガタガタと震えて失禁してしまう。それほどまでに生まれてから暗殺者として育てられてきたヘイゼルと英霊であるジャック・ザ・リップパーを合わせ、そこに竜の心臓など諸々も加えた優花の殺気は凄まじい事になっている。

「そ、それでも駄目です! 生徒を人殺しにしたくありません!」

「もう殺してる。だから今更問題ない。それに私達は戦争に参加しているんだよ? 殺し合いは日常なんだから」

「ち、違います! いえ、例えそうだとしても、檜山君は連れて帰って日本の法律で裁くべきです! それに檜山君からも話を聞かないのは公平じゃありません。私も同じ女性としては園部さんの味方をしたいですが、彼の言い分をしっかりと聞いてから判断すべきだと思います」

「……私が嘘をついているって言いたいんですか?」

「いいえ。状況証拠からしてもおそらく、園部さんの言う事が正しいと思います。ですが、一方の意見だけを信じて行動を起こす事はできません。先程、沙条君が言った通り、情報はいろんな角度から集めて精査しないとけません。先生は先生としてどちらの言い分も信じて調査し、真実を明らかにしてから判断すべきだと思います。今回の場合は国と教会、どちらも調べて問題が無ければ日本か、こちら、どちらかの司法に委ねるべきです。もちろん、沙条君達が言っていた通り、高確率で問題があるはずですよ。ですので、その場合は先生が先生の責任で檜山君を判断します。だから生きて私の前に連れてきてください」

「殺さず生きて捕らえろと？」

「はい。私達は獣ではありません。人なので、話し合いを行って判断すべきですよ」

「それじゃあ、無罪になるかもしれない」

「いいえ、どんな形にせよ絶対に先生が処罰します」

「私はアイツをこの手で殺したい」

「駄目です。それは絶対に認めません」

「っ!？」

「優花。とりあえず捕らえよう」

二人の間に入り、優花の正面から抱きしめる。同時に優花が抜こうとしていたナイフに手を当てて止める。

「とりあえず、暴力はなしだ。檜山を殺す殺さないは置いておいて、愛ちゃん先生の暗殺についてだ。愛ちゃん先生、俺達のところに来るか、それともこの国に残って聖神教会につくか選んでくれ。言っておくが、優花を説得できる機会は俺達のところに来ないと無い。敵に回ればクラスメイトだろうが、俺達は容赦なく殺すからな」

「……わかりました。そちらへ行きます。ただし、条件があります！クラスメイト達を全員、生きて集める事です！どのような形であれ、先生には皆さんを無事に日本へと連れ帰り、親御さんに帰す義務があります。これを叶えてくれるのなら、私はなんだってお手伝いしますー！」

「……わかった。条件を飲もう。ただ、出来る限り頑張るが、どうしても無理な事は無理だ。檜山も日本へ帰すのには協力する」

ああ、そうだと。日本へは帰してやろう。生きてるか死んでいるかはわからないが、出来る限りは生きて返してやる。日本でもおそらく力がそのままの可能性はある。なら、日本に帰ってから希望を得た檜山を殺しにいったって絶望に落とすのはアリだろうしな。優花は最初、怒っていたが、こちらの考えを伝えると納得してくれた。先生との約束はあくまでも日本に帰す事だ。それが終わった後ならば問題はない。優花が認めれば社会的な抹殺程度で許してやるかもしれないが。

第64話

愛ちゃん先生と檜山などについての説明が終わり、一応は檜山も含めた全員を集めることになった。優花は余り納得はしていないが、愛ちゃん先生の言う事もわかる。先生としてはクラス全員を日本に連れて帰る義務もあるし、片方の意見を聞くだけで判断するのは公平性にもかけている。

まあ、優花としてはどちらにせよ殺す事は止められるのだから怒るのも理解できる。しかし、愛ちゃん先生は全員を集めてから判断してその結果で罰を与えるとは言った。日本に連れて帰るのだから、殺す事はできない。だが、それは愛ちゃん先生が与える罰にもよる。それに愛ちゃん先生は公平性に拘っているみたいだが、結果に納得できないければ先程考えたように日本で殺してもいい。何時でも移動できるようななればいいし、それが無理でも檜山の体内に科学技術で作った爆弾を仕込んでおけばいいだけだ。

そもそもエヒト達からしたら使い捨てが出来る駒でしかないんだから、まともな状態で戻ってくるかもわからないしな。

「さて、俺とユエ、シアは明日、依頼の関係で山へ向かう。行方不明になった冒険者の救助依頼を受けたからな。沙条達はどうする？」

「あく俺も行く気だったが、今回は遠慮しておく。優花のストレス発散に付き合わないといけないからな。それにこのウルで商売をしないといけない。後は暇を見て地形を確認だな」

「あの、地形を確認しないといけないんですか？」

「まあ、色々とやらないといけないだろう」

「どういう事ですか？」

俺とハジメの言葉に愛ちゃん先生達はわかっていないようだが、まあこれは無理もないだろう。これから何が起こるのか、理解できていないしな。

「それは……」

「愛ちゃん先生は楽しみに待っていたらしい」

俺が話そうとすると、後ろからヘイゼルの姿で優花が抱き着いてきて胸を当てながら口を両手で塞いでくる。そこで優花の狙いはわかった。愛ちゃん先生に対する意趣返しだ。

これからこのウルの町で行われる事を知れば平静ではいられないだろう。何せ、あの清水が全力で攻めてくるのだ。アイツの力がどれくらいかは知らないが、北方棲姫と戦艦レ級が相手となると考えられるのは一つしかない。そう考えるとこちらも生半可な覚悟でいられない。まず近づけるかもわからないし、詩乃達遠距離攻撃組が対応しないと死ぬ。

「わ、わかりました。楽しみに待っていますね。それと明日の救助活動は先生も参加しますね。色々と話したい事は沢山ありますから」

「わかった。他に来たい奴等が居れば好きにしろ」

「それなら、私達は優花と話がしたいからこっちに残るね」

「私も」

「じゃあ、俺達は南雲について行くか」

生徒は男性陣と女性陣で別れる事になった。男性陣はハジメについて行って、女性陣はここに残る感じだな。まあ、愛ちゃん先生の安全は南雲達が確保してくれるので問題ないだろう。

「それじゃあ、詳しい事は各自に聞いてくれ。ただ、優花と話という事だが大人の、ヘイゼルの姿で頼む。くれぐれも優花の名前は出さないように」

「わかってるよ」

「はい」

「それと売り子を手伝ってもらおう。だいたい10時までは寝てるだろうから、昼飯までは自由にしてくれていい」

「働かされるのか」

「売り子ぐらいはいいけどね」

「皆様、お茶とお菓子を追加しますのでどうぞ。リラックスの効果があります」

アルテナからお茶を貰い、色々たわいない話をしてから少しすればお開きになる。皆、夜は基本的にする事が無いように寝る時間が早

いからだろう。まあ、俺達の夜はこれからだが。

「ご主人様、抱いて」

「わかってる」

「無茶苦茶に犯して。気絶するぐらい」

「任せろ」

俺達以外が居なくなったので、ヘイゼルではない姿の優花によって手を引かれてベッドに連れ込まれる。その後は優花が気絶するまで相手をして、詩乃達とも楽しむ。嫌な事は快樂で押し流すというわけだ。これをしたら、一度リセットしたように冷静になってくれる。起きてからピロートークで言い聞かせれば素直に従ってくれる。

「とりあえずは保留する。愛ちゃん先生がどう対応するかを見て決めるから……」

俺の上につつ伏せで乗り、両手を俺の背中へと回して抱き着いている優花の頭を撫でながら説得したおかげで、どうにか納得してもらえた。

「それでいいだろう。俺達の力なら日本でも檜山を殺す事は容易い。爆弾を仕込む事だつてできるしな。それに、やっぱり希望から絶望に落とす方がいい。ただ、愛ちゃん先生が考える罰で満足したら殺すのは止めるようにしてくれ」

「私と同じような目に合わさないと納得できないけど、それはいい?」「わかってるさ。そこは愛ちゃん先生に期待しよう。それが無理でもどうにかするさ」

「それなら僕に任せて」

撫でている方とは反対の手を掴んで腕を枕にしていた恵里がこちらに向き直りながら伝えてきた。その顔はとつても楽しそうな笑顔を浮かべている。逆に俺達は少しうすら寒いような感じすらしてくる。おかしい。素肌で抱き合っているので温かいというのにこの寒さはいったいなんだというのだ……恐怖?

「ジャンヌと一緒にとつても素敵な罰を与えてあげるから、心配しな

いで優花」

「う、うん……恵里が言うのなら信じる」

アルエンジャー
復讐者であるジャンヌ・ダルク〈オルタ〉が監修するのなら碌な事にはならないだろう。そもそもFGOでは延々と自分を殺す原因となった神官を燃やしたり色々としていたしな。彼女にとつてやられた火炙りは基本だろう。

「おはようございます皆様。そろそろ汗を流して着替え、食事を取らなければなりません。ですので、起きてください」

「着替えは用意できています。流石にこれ以上遅くなると皆さんの見送りができなくなるのですよ」

「というわけで、えいー!」

アルテナ、ネコネの声に続いて内容を理解する前に楽しそうないヌイによって布団が強制的に取られる。寒さに手短にある温もりである優花と恵里を抱きしめる。続いてネコネがカーテンと窓を開けて光を取り入れ、部屋に籠っていた臭いを追い出していく。

「ふにゃあつ」

「うにゅ〜」

そうすると、俺の足に抱き着いて寝ていた猫の詩乃と鈴の二人が声をあげながら起きてくる。二人は瞼を手で擦りながら、猫のように身体を伸ばしていく。

「起きるか」

「ん〜」

「ふあ〜い」

皆、かなり寝ぼけているので、上に乗っている者達から順番に降り、アルテナに塗れた布で顔を拭かれていく。流石に覚醒してくるので、それぞれが顔を洗っていく。

「身中が汗でベトベタだ〜」

「シャワー浴びたいけど、馬車まで行かないといけないしね……」

「いつそ、水着に着替えて湖に飛び込む?」

「いいねそれ!」

「あの、皆様、流石にそれは……」

「大丈夫だって。魔法で乾かせばすぐだしね」

「どうやら、鈴達は止めるアルテナを置いてさっさと水着に着替えていく。」

「あの、主様……」

「この馬鹿共に言っただけでやるのです！」

「私は楽しいと思うけれど……」

「まあ、効率的だからいいんじゃないか？」

「わかりました。では、水着を用意しましょう」

「アルテナ!？」

「主様の決定ですから」

「はあ……わかったのです。手早く水浴びをして上がるのですよ」

「二はくい」

着替えたなら早速、バルコニーへと出る彼女達。その後、目の前にある湖へと飛び込んでいく。ここは三階なのだが、彼女達の身体能力がらしたら余裕だ。

「主様、わたくしは部屋の掃除をしておきますので、上がられたらこちらではなく馬車の方でお着換えください」

「あ、私も手伝うのです」

「わかった。アルテナやネコネも来ていいぞ？」

「いえ、この部屋を綺麗にしなくてははいけません。流石に見知らぬ宿の者に任せる訳にはいきませんから」

「それは……」

「デリカシーがないのです」

「ああ、なるほど。わかった。それじゃあ、こっちは任せる」

「はいなのです。さっさと二人で片付けるのですよ」

「ですね。念の為に香も炊いておきましょう」

二人に任せて俺も湖に飛び込む。ついでに食料の調達もしておこう。怒られるかもしれないから、殺さずにおいて宿の人達に聞けばいいだろう。

湖から出て食事を取り、外に出る。そこで既に起きて出かける準備をしていたハジメ達と合流する。どうやら、ハジメが相川達にバイクを説明している。

「ハヤブサを改造しているのか」

「そうだ。まあ、元はゲームで作られた物を参考にして作った。性能はこっちの方がいいぞ。なんなら乗ってみるか?」

「いいのか!?!」

「ああ、大丈夫だ。ただ、こっちは人数的に車で進むからちゃんとして来いよ」

「わかった。運転できるのならなんでもいい」

「ハジメ」

「来たのか」

「まあな。それより、気をつけていけよ。それとスパイスとかがあったら確保しておいてくれ。ユーリに送って増産してもらおうからな」

「ああ、わかった。探しておく」

会話しながら、時計の時間を互いに同じになるように合わせて定時連絡の時間を決めておく。信号弾を含めた緊急時の合図を決める。

「後は何かあったか?」

「特にないな」

「そうか。それじゃあ行ってくる」

「ああ」

「ハジメ、早く」

ユエに手を掴まれてハジメが連れていかれた。それから車とバイクが発進していくのを見送り、俺は店を恵里達に任せて詩乃と一緒に二人でウルを回っていく。優花も連れて行きたいが、そういう訳には行かない。何せ優花は女子に捕まっているからだ。

「ん〜ここは狙撃ポイントとしてはいいかな」

村の近くに丘へと詩乃と腕を組みながら移動し、景色や地理を確認する。山と山の間を広めの道とも言える溪谷があるので、おそらくそちらから清水は襲撃してくるだろう。

「トラップでも仕掛ける?」

「指向性の地雷を配置しておくか」

ユーリが蒐集してきた魔法の中に地雷があるのでそちらを設置しておけばいいだろう。俺の魔力量から考えて、事前に大量配置しておくのがベストだ。

「ちよつと数発撃ってみるから、着弾観測をお願いしていい？」

「ああ、構わない」

詩乃が弓をアイテムストレージから取り出して構える。綺麗な詩乃の姿を見惚れていると、矢が放たれた。その矢を慌てて追う。望遠の魔法を使いながら矢を確認すると、町を通り越して更に700メートル先に飛んでいた。

「お見事」

「これじゃ駄目。やっぱり射程が短い」

「充分じゃないか？」

「魔法で強化してこれだから……やっぱり銃を使う」

「わかった」

今度は詩乃がヘカートⅢを取り出した。ユーリ達によってデバイスに改造されているのでヘカートⅡの後継機だ。弾丸も含めてかなり魔改造されているので飛距離も数キロは行ける。

「ん……」

詩乃が草の上につ伏せて寝転ぶ。そしてヘカートを構えるのだが、これってSAOのゲームでもあったな。妖精アバターなのに銃を手に入れるイベント。まるっきりそんな感じだ。

そう思っていると、詩乃が何発か撃って弾丸を排出していく。詩乃はオートマチックではなく、わざわざボルトアクションを選んでいく。こちらの方が安定するし、一発の威力が上昇させられるらしい。スナイパーとして一撃の方が好きみたいだ。

「よし」

今度は渓谷の奥まで飛んで行ったので詩乃も満足そうに耳をピクピクさせている。その姿を見ているとお尻を差し出しているように思わず視線をやってしまう。しかもそこには魅力的な尻尾がユラユラと揺れてバランスを取りながら引き金を引くタイミングを測って

いる。

「ふにやあつ!？」

思わず尻尾を握ると声を上げて銃弾が明後日の方向に飛んでいった。

「な、何するの!　もしかして発情したの?」

「発情したわけでは……いや、詩乃のお尻を見て少し興奮した」

「夜にでも相手をしてあげるから我慢して。流星に人が居る所でやるのは嫌。絶対に見られないように安全を確保しないと……」

「結界を使えばいいだけだろ」

「……やっぱり駄目。他の子に気付かれるし、心配してここに来るかもしれない。それに怒られはしないけど、色々と面倒な事になる」

「仕方ない。代わりにこれぐらいならいいか?」

そう言いながら詩乃の上に覆いかぶさるようにして寝転がる。詩乃はヘカートを仕舞ってから俺ごとぐるりと回転して仰向けになった。

「一緒にお昼寝するのなら歓迎」

「それもいいか」

詩乃が俺の腕に頭を乗せてきたので、そのまま太陽光を浴びながら草や土の匂いを感じながらまったりする。そのままうとうとしていくと、急に通信が入った。

『少しいいですか?』

「ユーリか。何か問題でも起きたか?」

『はい。ラピユタに関する事ですが、施設の解析が終了して改造を開始しています』

　ロボット兵の使用が可能という事だな。

「どんな感じにしているんだ?」

『現状のままでは防御力が低いので金属化したり、魔導炉の工場にしています。魔導炉の数が不足していますしね』

「それは構わないが、ハクはなんと言っている?」

『好きにしているとの事です。それとハクさんはシユテルが連れて行きました。なんでもき、きどうなんちゃらを作っているみたいで、そ

ここにハクさんの力を借りたいとの事です』

「という事はライセン大溪谷か」

『はい。そちらにおられます。それとロボット兵を利用して大溪谷の開発計画が提出されました。確認して許可をください』

「わかった。他は？」

『その、送られてきた人達を世話する人が足りません。できればちゃんとした人を送ってください』

まあ、奴隷のほとんどは身体に欠損を抱えていたりするので無理はないだろう。そう思いながらライセン大溪谷の開発計画を確認すると完全に地下を開発する秘密基地計画だ。それもハルツィナ樹海と物理的に繋げた地下の大都市と工場化だ。

こんなのだれだけの資源と人材を使うか検討もつかない。ただ、人材として書かれているのはロボット兵を改造して作られた工業機械やチビット達。それに支配下に置いている魔物^{モンスター}達だ。

「許可するからやってくれ。それとまともな人材は送る。といっても、愛ちゃん先生や相川達だが」

『合流できたんですね。わかりました。それとおね……ミレディ・ライセンさんの肉体は完成しました。魂の移し替えをルサルカさんにお願しますが、いいですか？』

「頼む。それとわかっていいるとは思いますが……」

『はい。紫天の書の中でお話ししていますから大丈夫です』

「わかった。じゃあ、リハビリを頑張るように言ってくれ。こちらが問題なくなれば一度戻ってオスカー・オルクスを復活させる」

『お願います。ミレディさんのお話が本当なら開発状況がかなり進みます』

「そうだな。他は？」

『えっと……えっと……これで終わり、ですね……』

「そうか。それじゃあ、俺からだ。ユーリはちゃんと休んでいるか？」

『大丈夫です。ちゃんと寝ていますから。ただ、お兄ちゃんが居ないのは寂しいです……』

「タイミングが良い時に連絡して。こつちに召喚するからな」

『戻るのが大変ですから、今は我慢します。ですから、今は詩乃さんと仲良くしてくださいね?』

「ああ、もちろんだ」

『それではまた連絡します』

「また」

ユーリとの通話を終わると、こちらをジッと見詰める視線がある。詩乃の方を向くと、彼女は身体を起こす。

「訓練しようか」

「そうだな」

流石にユーリ達がデスマーチのような状況になっているのにサボっているわけにもいかない。詩乃の狙撃訓練を再開しながら、データを取って地雷や他の設置型トラップの配置場所を考えていく。そんな風にして過ごしていると、ハジメから連絡が来た。

『変態を拾った』

「捨てて来い」

『そういう訳にも行かなくなった』

話を聞くと清水に洗脳された黒い竜が依頼主を狙ってやってきたらしい。それを撃退する時にケツ穴にパイルバンカーをぶち込んだとか。何を考えているのかわからない。だが、その衝撃で洗脳が解除されると同時に新たな扉を開いてしまったらしい。

「とりあえず、責任取ってやれよ」

『いや、自業自得だろ』

「流石に新しい扉を開いたらなあ?」

『いやいや、俺は悪くないだろう』

「詩乃はどう思う」

「流石にそのやり方は駄目。有罪」

「とういうわけだ。どちらにしろ連れて来い。竜族、どれもドラゴンになれるのだろうか? 一族諸共引き入れてもいい」

『竜族は別格の責任だしな……というか、竜族でリリカルなのはか。そういえば、一人居たな。戦略級のドラゴンを召喚できる奴が。沙条とは相性がいんじゃないか? 同じ召喚士だし』

「キャラは確かに猛威を振るいそうだが……ピックアップがない限り狙って引ける者でもないしな。それに召喚と言えばファイナルファンタジーやテイルズの方もあるだろう」

『あくだけどあれ、オメガガウエポンとか出たらヤベーぞ』
「確かに」

オメガガウエポンはアルティミシア城にて、特定の条件を満たすと同礼拝堂に出現する。販売当初はその膨大なHPと鬼畜とも言うべき攻撃の数々でプレイヤーを奈落の底へ引きずりおろした。

特に初見殺しの様相が強く、同作のキャラクターの強化のし易さも相まって強さに慢心したプレイヤーが、戦闘開始直後にレベル5デスで瞬殺されたり、テラ・ブレイクによりフルボッコにされたりして茫然自失となる事も多くあった。現在はワンターンキルされる場合もあるとか。

『ただ、何度もエンカウントする雑魚敵にもなってるから、どちらが召喚されるかによるな』

「まあ、こちらもおかないとわからん。とりあえず、竜族は確保だ。最低でも細胞は欲しい。こっちの竜の心臓を強化できるかもしれないな」

『わかった。嫌だが連れて帰る』

さて、変な所で竜族と接触できたな。いろんなゲームで竜族は最強クラスの存在だ。これは使えるだろう。例え変態でも。

「使えると思う？」

「一応は大丈夫だろう。戦力的には期待できないかもしれないが……流石に竜族となれば奈落の魔物モンスタークラスはあるだろうよ」

「そうだね。それなら助かる」

「よし。それじゃあ、俺はトラップを仕掛けてくる。詩乃はどうする？」

「それなら一緒に行く。護衛だし」

「わかった。頼む」

寝転がっている詩乃に手を差し出すと、彼女が掴んでくれるので引き起こす。抱きしめてから空に浮かぶと、彼女も背中に妖精の羽を展

開して一緒にしばしの遊覧飛行を行う。目的の溪谷についたらト
ラップを仕掛ける。本当は左右の崖に岩を置いたり、池を熱くして水
を流し込むとかやってみたいが……相手は空爆できる航空戦力を
持っているのでそうもいかない。本当に厄介だ。

清水×愛子先生

レイスと共に行動して行うのは魔物の選別だ。必要ない個体はレッチャんとほっぽちゃんことレ級と北方棲姫の餌として殺しまくった。

どうせ雑魚を用意しても沙条と南雲に虐殺されるだけだ。シユテルから教えてもらった情報からするとベヒモス以上らしい奈落の魔物を虐殺しているらしいからな。それならレ級と北方棲姫の練度を上げて幼体から成体まで上げた方がまだ勝てるかもしれない。

そんな訳で二人には交代で必要と思う魔物以外は喰らわせ、俺は途中で見つけた寝ているドラゴンを支配する事にした。最初は二人を残してやっていたのだが、何をしてもし起さないので護衛として片方を残してやらせてもらった。

ドラゴンを洗脳し終われば後は簡単だった。洗脳したドラゴンで魔物を追い立てて集めるようにさせ、そこでレ級と北方棲姫に襲わせて選別し、残りは喰らわせる。残った魔物は支配して配下に収める。全ては扱い切れないのだが、弱い個体から始末すればいいだけだ。

この辺りに魔物が居なくなればドラゴンで移動し、上空から指示を出して配下にした魔物で駆り立てる。同時に油田や必要な鉱石も探して北方棲姫が根こそぎ頂いていく。

ある程度すればレ級と北方棲姫も育ってきたので艦載機を飛ばして狩りが容易になった。というのもも北方棲姫が作り出した採掘場が基地としての役割を持ち、艦載機の工場にもなったからだ。喰らいまくった分だけ艦載機や砲塔が生み出されていく。

レ級と北方棲姫の練度が上昇すると同時に俺のレベルも上がってくる。そのお陰でどんどん支配下に置ける数が増えていった。ただそれでも限界はあるのでそいつらを先生が居るウルの村付近の山脈に待機という名の放逐しておけば後から回収が可能だ。

「レッ、レッ、レ〜！」

「ウマー」

今も数百メートルはある巨大な蛇の魔物をガツガツと喰らっているレ級と北方棲姫は血塗れだ。それも鱗も毒も気にせず食べている。周りには無数の艦載機が飛び回り、餌を運んでくるようになる。もなっている。

また、別の所にも北方棲姫が基地を作って俺の指示の下、戦いの準備を整えてくれているのだが、これでもまだ勝てないだろう。

だが、やるしかない。レイスにもたつぷりと働いてもらった。もう準備が完了するという時に山脈に入って来た冒険者達に見られてはならない物を見られてしまった。だから、ドラゴンに抹殺の指示を出した。それで万全なはずだった。だというのに……

「ちっ、先にドラゴンが奪われるとは……」

「ダイジョウブ？」

「平気だ」

「レッツ！ ドラゴン、食べテイイ？」

「ああ、敵になったのなら構わない」

北方棲姫とレ級がそれぞれ抱き着いてきながら聞いてくるので、頭を撫でながら答えてやる。そう、レ級も喋れるようになった。というのも、魔物を喰らいまくる事と俺の闇魔法と魔族の技術による経験値ブーストで成長が早まっているようだ。それに魔物を喰らってその力をどんどん溜め込んでるので幼体から成体へと進化したのも大きい。

もう原作と同じぐらいに成長している。そのため、レ級は頭一つ分、北方棲姫は頭二つ分低いところまでできている。ここまで成長すると嫁としても充分に活躍できる。実際に二人としたらすぐに子供まで生まれてきた。その子達はレ級と北方棲姫の幼体で艦載機に妖精さんの代わりに搭乗している。ちなみに言うとは何処から生まれてきたのかもわからない。何時の間にか居て増えていた。ただ流石にflagshipではないただの幼体レ級と北方棲姫なのでそこまで強くはないので問題ない。

「それよりも準備はいいか？」

「ダイジョウブ」

「レッ。ヤル。マケナイ」

「じゃあ、やばくなったら撤退だ。それまでは全力でやろう」

「レ！」

「ガンバル！」

「さあ、ラスボスを攻略しに行こう。まずは夜襲からだ。当然だよな？」

「全機発艦！」

◇◇

日付が変わった一時から二時。俺達はウル村上空に到着し、その先へと複数の艦載機部隊を向かわせてから遠く的位置から見守りながら作戦を開始する。

「投下」

目の前にある幾つもの艦載機が映し出す映像を見ながら指示を出す。

「エイ！」

可愛らしい二人の声と同時に数百機の小さな艦載機達から爆弾が投下される。場所なんか考えずに隙間なく落とされる爆弾は地面に到達する前に壁のような物に阻まれて盛大に爆発していく。おそろく谷口の結界だろう。

「徹甲弾、撃て」

「レエー！」

練度が95になってステータスが9500*5。それに俺のバフ

で+10000されているので合計48500のレ級から放たれた艦載機の徹甲弾は谷口の結界を貫通する。これによって結界が壊れ、爆弾が大量に結界内へと叩き込まれるのだが、地上から幾つも矢と魔法が飛んできて撃ち落としていく。

「第二陣、行け」

「レップウ、オイテケ」

北方棲姫の艦載機達が湖面スレスレから侵入して建物に銃撃を浴びせていく。建物は一瞬で崩壊していく。

「艦載機、ヤラレタ」

「何にやられた？」

「キラレタ」

どうやら100機の内、20機ほどが斬り落とされたようだ。建物の中から獣人であろう少女が出てきて刀を振るっているのが見えた。その後ろには谷口が展開したであろう結界も確認できる。

「レっちゃん」

「レ！」

狙撃して結界を破壊させるが、今度は数枚破壊して止められたのでレ級がどんどん撃ち込んでいく。だけどそれらはほとんど斬り落とされる。本人はかなり涙目で必死なようだが、多段攻撃をさせながら方法を変える。

「榴弾を落とせ」

「燃エロー！」

ナパーム弾だ。結界内に閉じこもっていても無駄だ。温度で焼け死ぬだろう。ついでにウル村は炎に包まれているが気にしない。

「沙条達が居ないな」

「レ！」

「ああ、そっちか」

山脈がある方から急速に接近してくる存在をレーダーで確認した。艦載機の部隊を差し向けようとしたらそちらから破滅の光が見えて即座に回避行動を取らせる。だが、爆弾を投下した艦載機達の大部分が光に飲まれて跡形もなく消滅した。

「やっぱスターライトブレイカーは反則だろ」

「レ！」

「ズルイ！」

二人も頷いてくれる。しかし、頃合いではあるのである装置を起動してから北方棲姫を愛ちゃん先生暗殺に向ける。

北方棲姫が俺の傍からウルへと向かう。その間にドラゴンが怒りの形相でこちらに突っ込んでくるのでレ級に任せる。

「レ級、撃て」

「レエエエエエエツ！」

尻尾が尻尾の口を大きく開けて光を収束。無色透明の光線を放つ。ドラゴンは嫌な感じがしたのか、急激に軌道を変えて回避する。しかし、避けきれなかったのか尻尾が泡立って破裂した。そのまま尻尾から放たれる光線を剣のようにしてドラゴンを追っていく。

「いやあああつ！」

「やる」

黒い球体が現れてそれに命中すると無数の光に別れて色んな場所に命中していく。まるで散弾だ。

「荷電粒子砲、タノシイ！」

しばらく空を蹂躪していると尻尾の装甲が開いて排熱を行いだす。尻尾の顔を見ると目をクルクルしてしてしばらく使えないのがわかる。

「艦載機で制空権を手に入れるぞ」

「マカセテ！」

狙撃と艦載機による銃弾と砲弾の雨をプレゼントする。これでは稼げるはずだ。ウルの方を見ればそちらは妖精であるシノンが空を飛びながら艦載機とドックファイトを繰り返している。流石といふかなんというか、彼女もかなりやばい。千や方に近い魔物^{モンスター}を喰らったレ級の艦載機とまともに戦っている時点でやばすぎる。

「清水ウウウツ！」

「なんで空から来てんだよ！」

沙条が大剣みたいな見覚えがあるような、ないような物を盾にしな

がら突っ込んでくる。その後ろにかなりきつそうなドラゴンが居る。「キチャダメー！」

沙条に向けてレ級が開幕雷撃をぶつ放す。無数の口がついた蛇のような艦載機が突撃して盛大に盾と衝突して大爆発を起こす。その衝撃で沙条達が吹き飛ばされ、そこに尻尾にある三連装砲による砲撃を加えて更に距離を開けさせると同時に動きを封じる。周りからも艦載機を周り込ませて360度全方向からの攻撃を行うが、乗っている連中から魔法や銃弾が飛んできた撃墜されて爆発していく。

「レ！」

「くそっ、村の外で待ち構えていたのが完全に裏目った！」

「ご主人様っ！ これ無理じゃ！ 落ちる落ちるウウウウツ！」

「レっ！ ドラゴンステーク！」

「ヒイイイ！」

「食べたいみたい」

「こいつにはいいかもな」

闇魔法による暗幕を展開して視界を封じる。時間までになんとしても地上に落とさなくてはいけない。例え艦載機をどれだけ犠牲にしてもいい。

「次の手だな」

「あ？」

「増援みたいだな」

街の方に待機していた魔物モンスターの精鋭たちを突撃させる。外で守っていた連中がこっちにきたのなら中に入れても問題はない。数人は残しているのかはわからないが、それでも死も恐れない連中が強引に突破してくるのだから無理だ。それにこのまま行けば死ぬかもしれない。



崩壊した宿の中、どうにか私達は谷口さんの結界によって窮地を脱しました。でも、度重なる襲撃で護衛をしてくれているイヌイさんは涙目になり、谷口さんも辛そうです。他の生徒さんやシアさんもかなり怖がっています。私も凄く怖くなってきました。

「なんですかあの化け物達!」

「多分だけど、アレって清水が連れていた……」

「艦載機、だったよな。大きさは全然違うけど……」

猫耳がついた丸い球体が入ってきて噛みついてこようとするのをイヌイさんが斬り落とします。しかし、近付くと爆発するのでとても危険です。

「打ち返しても武器に噛みついてきますし、最悪です!」

「あくもつとヤバイのが来るよ! とんでもなくヤバイ存在が近づいてきてる!」

「「え!?」」

「とりあえず聖絶を多重展開!」

谷口さんがそう言うって結界を無数に展開すると、降ってきた何かに一瞬でその結界が粉々に粉碎されました。視界が暗れるとそこに居たのはほっぽちゃんを大きく成長させたような姿でした。彼女は爛々と輝かせた深紅の瞳で私を見ながら口を開いて真っ赤な舌を出してペロリと口周りを舐めました。

「ほ、ほっぽちゃん! な、何をするんですか! いくらなんでもこれはやりすぎです!」

「ホッポハ、テートクに従ッテ任務ヲコナスダケ。ダカラ、死ンデ」

「シアさん!」

「ヒイイ!」

ほっぽちゃんの二つの尻尾から砲弾が放たれます。それを二人で対象してくれますが、すぐに尻尾が突撃してくるので横に飛んで避けると尻尾を振り回して二人が弾き飛ばされます。

邪魔物が居なくなつたほっぽちゃんが私達の近くまで来ると、谷口

さんが前に立ち掌をかざして鏡のようなものを生み出しました。

「神獣鏡！」
シエンシヨウジン

「邪魔スルナ！」

可愛らしいほっぴちゃんのミトンに包まれた手が無数の鏡を殴ると全てを粉碎し、谷口さんが驚いた表情をしました。

「嘘！ 邪悪な存在なはずなのに浄化しきれない！」

「ソノ鏡キライ！ 壊レロ！」

「上の段階じゃないと無理かも……創造はまだ無理だし……うう……」

「問題ありません」

「そうです！」

戻ってきた二人は身体中に擦り傷を作つてとても痛々しいです。それでも必死に戦つてくれます。刀とハンマーを振るうのですが、力はほっぴちゃんの方が上のように軽くあしらわれていきます。

「詩乃さん達を呼び戻しましょうよ！」

「いえ、空もまだまだ敵が居ますから無理です」

「んく仕方ない。緊急連絡！ マナマナ！ 助けて！」

谷口さんがそう言うとはっぴちゃんが突撃してきますが、その前に大きな剣が降つてきて彼女の拳を防ぎました。ほっぴちゃんは即座に離れて砲撃をしてその大剣の一部を破壊しますが、その前にウルの村全体に光の柱が立ちました。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！ 皆の頼れるお姉さん、ルサルカ・シユヴェーゲリン、今から参戦よ」

光が聞こえると深紅の髪の毛をした軍服姿の女の子が立っています。そしてもう一人。ピンク色の髪の毛の女の子も居ます。

「シャル——うわっ！ ちよっ、名乗らせてよ！」

大量の猫耳球体が突撃して爆発していきます。それを谷口さんが防いでくれましたが、視界が晴れるとはっぴちゃんは居ませんでした。

「引いてくれたんですか……？」

「いや、これはもつとやばいわね」

「うん。嫌な予感がするよ！」

「当たり前前だろ！ あの子は深海棲艦なんだぞ！ 水場が本領発揮だ！」

「相川、知っているのか？」

「一応……」

「水場……ここ湖のほとりなんですけど……」

視界が晴れると赤い炎に照らされるほっぼちゃんが水面に立っていました。その周りには大量の猫耳球体があります。

「うくん、これだけじゃないね。そこまで怖くは感じないし。でも、即座に逃げないとやばい感じもする！」

「アストルフオの勘がそういうならそう……って、何か変な音がしないかしら？」

「あくコレ、アレだ。戦場で何回か聞いた事がある奴だ」

後ろを振り返ると、遠くからとんでもない物が迫ってきていました。



「時間だ。レっちゃん、ほっぼ。後は任せた」

「レッ！」

俺は即座に逃げる。ここに居たら死ぬ事間違いないので事前に用意した魔物モンスターを使って上空へと移動する。レ級が沙条達を妨害してこちらにはこないようにしてくる。そして、ついに来た。

「おいおいマジかよ……」

「あくコレを狙ったのか。確かにどう足掻いても愛ちゃん先生は死ぬな。殺意高すぎだろう清水」

「お前達が相手ならこれぐらいはしないと駄目だろう」

数十メートルを超える水の濁流が一気にここへと押し寄せてくる。これはウルウルの村にある湖に流れ込む源流を北方棲姫の力で封鎖して

ダムを作り、そこにレイスの魔法で水を大量に作り出して増水させていた。

先程の指示で何か所か用意したダムを解放して一気に水を流し込んだというわけだ。しばらく水を出してからダムを締めればここは完全に水の下だ。そうなれば深海棲艦である北方棲姫とレ級の独壇場となる。

「まあ、防げばいいな」

「だな」

「スターライトブレイカー。三連でいか」

「デスヨネー」

四方から押し寄せる水の濁流は沙条のスターライトブレイカーによって周りの一部ごと綺麗に消し去られる。だが、まあスターライトブレイカーを撃つ時は無防備になる。そこに幼体レ級達からの荷電粒子砲などを受ければどうなる？

「全機全力で攻撃を開始せよ」

艦載機に指示を出しながら、俺はレ級と北方棲姫の二人と一緒に逃げる！ まあ、愛ちゃん先生達には二人に全力攻撃をしてから逃がさせてもらおう。実際にレ級の奇襲に北方棲姫が合わせて責め立てたので愛ちゃん先生をレ級の尻尾が首を覗いてを噛み砕き、首と俺を持って湖に向かう。そこで北方棲姫と合流して攻撃をしてもらってから湖に潜って湖の一部を破壊して水を流す事で高速に離れる。呼吸はできなくても二人が居るので数分の我慢だけだ。

無事に逃げおおせた俺達はレイスと合流して愛ちゃん先生の首を渡す。

「ほら、約束の品だ。これで俺を勇者として迎え入れてくれるんだろ？」

「もちろんだ。我々魔族は歓迎しよう」

「どうも」

「褒メテ褒メテ」

「レ！ 褒メテ！」

「ああ、よくやってくれた。ありがとう。全て計画通りだ」
甘えてくる二人を可愛がりながら、魔族領を目指して移動を開始する。これで俺も勇者の仲間入りだな。

第66話

清水の襲撃を終えてた翌日。朝日が昇り、被害が判明した。まず愛子先生だが、自分が目の前で食い殺される光景を目の当たりにして気絶した。そう、愛子先生は生きている。

食い殺された彼女の身体は水35L、炭素20kg、アンモニア4L、石灰1.5kg、リン800g、塩分250g、硝石100g、硫黄80g、フツ素7.5g、鉄5g、ケイ素3g、その他少量の15の元素、愛ちゃん先生の血液を少々使って作った人形だ。1/1サイズで匠の技で再現されたそれは細部に至るまでしかりと作り込まれている上に服は本人の物。身長や体重からスリーサイズまで全て同じようネコネ達に調べさせて作った。言ってしまうえば魂が入っていないだけの動かない入れ物となっている。ちなみに南雲は技術者として完璧主義みたいなどころがあるのでかなり綺麗に作り……ダツチワイフとしても使える可能性がある。どこまで細部に作られているかはわからないが、ユエやシアの身体を参考にしたのだろう。

「焼却焼却」

そのせい、ユエによって残った部分は綺麗に燃やされた。ウルの方は悲惨の一言につきる。田畑や家々、ウルの子にあってはほぼ全てが消失して地面が焼け焦げている。清水のいやらしい事は爆弾で吹き飛ばした後にナパーム弾を投下して徹底的に焼き払った。これに加えて津波によってこの場所全てを水の底へと沈める計画だったことだ。

そう、このウルの周りにはくぼ地になるように計画的に破壊と建築が行われていて、水の逃げ場は清水達が脱出に使った場所以外はなかった。それ以外の全てが封鎖されていたのでスターライトブレイカーで水を消し飛ばさなければここは巨大な湖の底になっていた。

「これで人的被害が無いのって奇跡的よね。親衛隊にスカウトしたいくらい清々しいまでの破壊ね。才能あるわ〜」

ケラケラと楽しそうに笑いながら軍服姿のルサルカ・シュヴェーゲリンが焼け跡を歩いていく。おそらく、魂が存在しないかどうか調べていたのだろう。文字通り焼け野原と湖しかないので意味はないのだが。

「事前に人は逃がしてたんだから当然だよ！ だよね、マスター！」

「まあ、そうなんだがな」

アストルフオが抱き着いてきたので、そのまま抱き留めて彼の頭を撫でてやると嬉しそうに笑う。鈴の要請でアストルフオとルサルカを召喚したその直後、北方棲姫が引いた。そのタイミングでアストルフオの素早さを生かして愛ちゃん先生の人形と本体を交換し安全を確保。人形はルサルカが魂を入れて食人影ナハツエーライのように操り、生きているように見せかけた。もちろん、これらの情報はしっかりと清水にも伝えてあった。

「よう」

「南雲か。そつちはどうだ？」

「流石に村人達は意気消沈しているな」

「愛ちゃん先生達は？」

「愛ちゃん先生は目の前で自分が殺されるところを見て気を失った。相川達は気持ち悪そうに吐いたりしている。これからどうなるかはわからないが、ハルツィナ樹海に送るんだろう？」

「その予定だ。ルサルカ達を召喚したから、あちらの防衛戦力も不安だからな。一度俺達も戻る。それと早急ここを離れた方がいいだろう」

「連中が駆け付けてくるか」

「その可能性が高い。どちらにしろ、騎士達には情報を抹消した後で愛子先生の死体を持って帰らせる。ウルウルの村人はそつちに任せていいんだよな？」

「ああ、構わない。フューレンの支部長には今回の件で協力を約束させている。村人を引き取ってもらえるだろうさ」

「それならいい。悪いがそつちは頼むぞ」

「任せておけ」

これで相川達も死んだ事にして愛ちゃん先生達と一緒に俺達の国に来てもらえる。そこでどう過ごすかは任せるが、出来る限りの要望は答えてやる。ただ、ハルツィナ樹海からは出さない。これからの事を考えるとクラスメイト達の存在は邪魔になる。やる事はどう考えようかと天之河達は必ず邪魔をしてくる。つまり、アイツとは殺し合いをする事になるってことだ。まあ、どちらにしろ邪魔するのなら殺し、天之河なら別の使い方もできるだろう。腐っても勇者なのだからな。

「ルサルカ、何か面白い物はあったか？」

「特に無いわね。あ、それと魔族の仕業に見せかけるついでに仕込みをしておくわ」

「頼む。恵里と協力してやってくれ」
「了解」

ルサルカにこの場所は任せて村人達を避難させた場所へと向かう。そこはウルのカからかなりの距離がある場所だ。最初は避難するのを嫌がった彼等だが、愛ちゃん先生の説得で動いてくれたので助かった。それに詩乃のハイペリアまで使った一日で移動させたからこそ、清水の大規模攻撃から難を逃れることができた。逃げた場所が山の上だという立地も助かった。

同時に彼等はウルのカが焼き払われるところをしつかりと目にしたのだ。まあ、彼等からしたら生きられた分だけ儲け物と考えてもらうとしよう。

さて、避難所のある山頂に到着した。そこでは複数のテントが立てられている。テントの周りには座り込んで泣いている人や抱き合っただけ無事を喜んでる人も要る。その一方で愛ちゃん先生の死体に縋り付いて泣いている者達も居る。そいつらは騎士の奴等や村人達だ。騎士の連中はヘイゼルが俺達の情報を抹消させてからここで解放して愛ちゃん先生の死体を渡した。もちろん、宮崎達の血がついた服の一部も提出してある。それでも愛ちゃん先生にしか悲しみを感じていない。他の村人達はちゃんとクラスメイト達に対しても悲しん

るののだ。

「お帰り。どうだった？」

「やっぱり何も無いな」

「そう。確かにあの爆撃なら何も残らないのは仕方がないね」

詩乃がこちらに気付いて水が入った桶を持ちながらやってきた。詩乃はアルテナとネコネの二人と一緒に避難した村人達に治療を施してもらっている。というのもアルテナは薬草を使った治療が出来るし、ネコネに至っては巫術による回復とバリアを展開できるヒーラーだ。そんなわけで治療してもらっている。もちろん、亜人なので拒否している人も要るが、それでも治療はしている。

そちらの方は後で労うとして、詩乃と軽く話してから今は馬車に向かう。馬車には鈴と恵里、ヘイゼルが愛ちゃん先生や相川達の様子を見ている。馬車の中に入ると相川達がこちらに気付いたようだが、身体を両手で抱きしめて抱えたままだ。

「なあ、本当に俺達は大丈夫なんだよな？」

「ああ、身の安全は保証する。それに清水だって実際に殺すつもりはなかったはずだ。もしそのつもりなら北方棲姫と戦った時点で殺されているだろうしな」

「だ、だよな！」

聞いた限り、北方棲姫が狙っていたのは死なないであろうシアや鈴達だけのようだし、彼女の力なら外から砲撃を続けるだけでいい。わざわざシア達と接近戦をする必要なんてないしな。清水が制御できていないのなら知らないが。

「ただ俺達が参加しているのがこういう事が平気で起こる戦争だつてことを忘れるなよ」

「わ、わかってる」

「ああ……身に染みてわかったよ……」

相川達はまだまだ負った心の傷は癒されていないが、こういう時は趣味に走ったりストレス発散をしたりするのがいい。もう一つの方法が一番いいが、相川達にはそういう相手が居ないみたいだし無理だ。

「はい、どうぞ」

「どうも……」

イヌイが飲み物を持ってきてくれたので、相川達が受け取っていき。座り込んでいたので渡す時にイヌイの大きな胸に目が行ってしまうのは仕方ないだろう。

「旦那様もどうぞ」

「ありがとうございます。それで他の面々は？」

「奥でお話しておられますよ」

「わかった」

奥へと向かうと寝込んでいる愛ちゃん先生を看病しながら鈴や恵里、優花が宮崎達と話しをしていた。優花はヘイゼルの姿ではなく、高校生の姿だ。

「ねえ、ゆかゆかもそう思うよね？」

「まあ、確かに不安な時や辛い時は抱いてもらおうと嬉しい。嫌な事を全部忘れられるぐらい気持ち良くしてもらえる。それに私の全部を支配されて必要とされている感じがして好き……」

「それはちよつと……」

「優花は色々あったし、仕方が無いよ」

「まあ、死ぬのが近付くと子孫を残すために身体も受け入れやすくなるし、今だと凄く気持ち良くなれるかも」

「いや、相手がいないって」

「私も」

「何を話をしているんだ」

「辛い時を乗り越える方法だよ」

どう考えても赤裸々な猥談になっている。宮崎達も興味があるみたいで結構盛り上がっているようだ。

「まあいい。恵里、ルサルカが仕込みをするから手伝ってくれって言ってる」

「場所は？」

「ウルだな」

「了解。それじゃあちよつと行ってくるね」

「頼む」

「行つてらっしゃい〜」

俺は恵里を見送ってから愛ちゃん先生の容態を聞いてみる。

「愛ちゃん先生は大丈夫だよ。でも、やっぱりショックが大きいみたいだね〜」

「動かせるか?」

「それは大丈夫だよ」

「あの、そんなに早く移動しないといけないの?」

「ああ。ここに居るとエヒト達に感づかれる可能性が高いからな」

「ユエユエ達ともお別れ?」

「またすぐに会う事になるだろうが、俺達はまず愛ちゃん先生達を俺達の国に移動させる。それからだな」

「やったね! あ、でも皆とはまたお別れか〜」

「嫌か?」

「別にいいよ〜」

鈴は鈴でやはり少しドライな感じでわだかまりはまだ残っているようだ。それでも仲良く話しは出来ているので致命的な事にはならないだろう。さっさと出発するとしよう。



ハジメ達と別れ、俺達はハルツイナ樹海へと戻る。流石に数日も経てば愛ちゃん先生達は起きてきたが、元気はない。菅原達が励ましているのだから普通生活する程度はできるようだ。そんな暗い雰囲気の一部だが、空気の読まない奴も居るので馬車内は明るかったりする。

「ふっふっふっ、どうだハートのQで作ったスリーカード!」

「残念でした。フォーカードだ!」

「なんと!」

「甘い。ロイヤルストレートフラッシュ」

「待て！」

馬車の中でアストルフオが相川達を誘ってカードゲームをしたりする。ルサルカ達も参加して皆で楽しんでいる。愛ちゃん先生も無理矢理参加させられていて、少しずつ元気になっているとは思いたい。

「どうかルサルサ、イカサマしてるよね？」

「バレなきやイカサマジやないのよ」

「コイツ！」

「鈴」

「任せて☆ 神獣鏡！」
シエンシヨウジン

「待ちなさい！ カードゲームに聖遺物使ってんじやないわよ！」

「勝てばよからうなのだよ！」

「というか、魔術を使ってるルサルカも人の事言えないからね」

こんな感じで楽しくハルツィナ樹海に戻ってきたわけだ。ハルツィナ樹海に入ると亜人達から襲撃を受けるかと思っただが、そんな事はなく普通に入れた。というのもアルテナや詩乃達が出たからだ。彼等としてもこちらを襲撃すると痛い目に会うというのはわかってるので大人しい。

さて、俺達の国だが全体が分厚い霧や曇に覆われていて外からはわからないようにされていた。そんな物を気にせずに入るとなんというか凄まじい勢いで発展していた。

まず防壁だが、前に作った物が改造されていた。かなり大きな物となっていてまるで崖に見える。そこにトンネルがあり、そこから入るとすぐに見えたのは人口の灯りとそれに照らされた停車している列車だ。

「お帰りをお待ちしておりました聖上」

そして、列車の前にあるホームにアサルトライフルなどで武装した獣人達を従えたオシユトル達が待ち構えていた。

「兄様！」

ネコネがすぐに抱きつきに行こうとしたが、すぐに止まってこちら

を見上げてきたので頷いてやると嬉しそうに飛びついていった。オシユトルの方も優しく頭を撫でている。

「これってどう見ても駅だよな？」

「それにアレって列車……」

普通の列車に見えるが、列車砲が搭載されている辺り、戦闘用だ。まあ、ここは入口みたいだから仕方がないが……いったい誰がこんなのを作ったんだ？

「どうしますか？」

「まずはゆつくりと休みたい。オシユトル、構わないか？」

「宴の準備もしてあります。こちらへどうぞ」

馬車を預け、荷物の運び出しなどを頼んでから列車に乗って移動する。列車の揺れに仁村達はちよつと感動していた。それを見なかつた事になっていると、分厚い防壁を抜けた。一面の田畑が広がる……なんてことはなかった。ラピユタにあった複数のロボット兵が整列し、かなり深くまで掘っている。

そこから第二の防壁までは軍事兵器である戦車が複数置かれている。流石にミサイルは用意されていないようだ。第二防壁を抜けると今度こそ田畑が広がっていた。こちらもロボット兵だけでなく、獣人達も一緒になって耕しているようだ。

「前に連れてこられた者達で働ける者達は働かせております」

「無理はないようにな」

「はっ」

渡された報告書を確認していくが、ユーリの方も大分形になったようだ。これもラピユタにあったロボット兵をハクが使えるようにしてくれたおかげだろう。それでも人手は全然足りていないようだ。今は防衛部隊の一部を開塾に向かわせているらしい。地下とライセンの方も同時だから仕方がない。

ユーリの方は前に教えてもらった通り動いているらしいが、見た限りではかなり進んでいる。この分では食料生産はかなり増えているだろうし、ユーリの方も大丈夫そうだ。そうなると問題は治療の方だな。

考えていると、列車が活気が出始めた街を通過して城の麓へと到着した。ここが終着駅なので、ここから降りてエレベーターで上へと向かう。

エレベーターが到着し、扉が開くと金色の何かが飛び込んできて俺に抱き着いてくる。下を見ればそれはユーリで、彼女は頭を俺にグリグリと擦りつけてきた。

「ただいま」

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

嬉しそうに微笑んでくれるユーリの姿を見ると戻ってきたと思える。なので、ユーリの顔をもっと見るために彼女を抱き上げる。すると両手を首に回してスリスリしてきた。

「ただいま」

「ただいま」

「お帰りなさい。皆さん」

可愛らしく甘えてくるユーリを連れて宴の会場まで移動……する前に風呂に入って着替えてからということになった。そんな訳で皆は大浴場の方へ案内してもらい、俺とユーリ達は俺個人が所有している風呂へと向かった。

相川昇

帰還してから歓迎の宴を開いてもらい、俺達はそれぞれ個室をあてがわれて眠りについた。起きてから和服を着た世話役の女性に連れていかれた先で食事を取る。そこにやってきた沙条は少しやつれて見えた。逆に谷口達はツヤツヤしている感じだ。

食事を終えればこれからの予定を教えてくれた。俺達は男女に別れて行動するようで、女子は子供達の面倒をみることなり、俺達は怪我人の面倒をみる。

そんなわけで沙条に案内された施設はTVで見た野戦病院のような場所だった。そこには無数のベッドが並べられていて、女の子達が寝ていたり、壁によりかかって地面に座り込んでいたり、虚ろな瞳で遠くを見ていたりしている。

「おい、これって……」

「ああ……」

「酷いな……」

どの子も首輪をしていて半透明な薄いワンピースのような物を着ているが、身体の何処かが存在していない。近くに居た髪の毛が長く綺麗な金色の髪の毛をした女の子を見れば、小さな女の子を抱きしめながらベッドに座っている。彼女達の耳は長く、その特徴から森人^{エルブ}族だと思うが耳は真ん中くらいで切り落とされ、幼い妹であろう子は両手両足に片目がない。姉の方は両足がなく、両手は無事だ。どちらの子も顔が丹精に整っていて綺麗な。八重樫や白崎達に引けを取っていない。

この子達はかなり酷いようだが、それでもやはり一部はない。直視していると、視線に気付いたのかこちらを見詰めてきた。すると妹を動かして身体を見せるようにしてきた。彼女達の服はかなり薄いので胸など見えてはいけなような部分まで見えたので慌てて目線を逸らす。気になって視線をちらりと見せると泣きながら震えている。

「どういふこと？ え？ 俺が悪いの？ いや、悪いんだらうけどさ

……」

「気にするな。お前達三人はここに居る子達の内好きな子を選んで世話してやってくれ」

「おい、沙条。この子達は……」

「彼女達は人間に幼い頃から育てられてきた子達や激しい調教で壊れた子達だ。奴隷としての生き方しか知らないから、普通の生活もできない。そもそも身体の一部がないのだから扱いがさらに大変だ。普通の服も拒否されるし、傷だけはなんと治療したが、それ以外は無理だった。新しい主人を用意するしかない」

「それなら亜人の人達に……いや、無理か」

「玉井の言う通り、人種を主人にする事しか拒否された。同じ亜人も彼女達にとっては完全に別の生命に見えたり、憎悪を向けるように教育されたりしている。お前が亜人だから悪いってな」

「洗脳教育か。恐ろしいな」

「そんなわけで好みの子を選んで面倒を見てくれ。性的な事はしても構わないが、責任だけは取るように。地球に戻る時は連れていくか、お前達がこちらに残るか好きな子を選んでくれ。一応、戸籍とかはどうにかして用意してやるし生活費も持たせる」

「できるのか？」

「できると思うぞ。政府と交渉してこつちで錬成した物を渡せばなんとかなるだろう」

まあ、確かに色々やばい物とかあるよな。最悪、金塊や宝石とか貰えればいいだけだし大丈夫だろう。

「もちろん、行き来できるなら普通にどちらで生活しても構わないよ。こちらとしては責任さえとってくれるなら好きにしてくれ。ちなみに彼女達にとってそういうことは普通の事だと教え込まれているから、向こうから求めてくる」

「つまり、生殺しになると」

「うわぁ」

「辛いだろうな」

「ちなみに子供ができたなら逃がさないからそのつもりでな」

「何人面倒を見ればいいんだ？」

「最低二人から三人だな。面倒を見れるなら何人でもいい。ただ相性もあるだろうから、一週間ぐらいは一緒に生活して見極めてもいいぞ」

「面倒みれるならって働くって事だよな？」

「そうだ。相川だったらレベルを上げて彼女達と一緒にバイク屋をやるのとかも手だぞ」

「そんな事ができるのか！」

「錬成魔法は誰でも使う事は使えるし、生成魔法を覚えたら可能だ。まあ、レベル上げをしないといけないが、護衛をつければ問題ない。それと借金という扱いになるが、彼女達の手足もしっかりと用意する」

「そつちで費用を全部用意してくれないのか？」

「主人から与えられた物以外は拒否される。無理矢理渡してもいいが、こつちの方が好感度を稼げるから親しくなりやすい」

「なるほど、確かに」

「でも高いんだろ？」

「ピンキリだな。だが、今ならなんと戦闘にも耐えられる高性能義体がレベル上げのブーツキャンプとセットでなんとたったの一千万でご提供します！」

「「たけえ！」」

「それがそうでもないんだよな。装備って結構ヤバイ奴だから。レベル上げに使うダンジョンの素材を回収して売りにだせば軽く元手は帰ってくるぞ」

話を聞いていくと、珍しい鉱石とかがゴロゴロしているらしい。特に俺の場合は戦闘できるようになったら、自分達でバイクの素材を取ってきて、それでバイクを作れば一台数百万から数千万で売る事は可能なようだ。それに生成魔法だったか。それを俺が覚えられなくても選んだ子が使えればいいわけだし、稼ぐ方法は色々用意してくれるらしい。

「俺達は稼ぐ方法をどうするかだよな？」

「玉井の場合は曲刀師なんだから戦闘だってできるだろ。素材回収をメインにするのもいいと思うぞ」

「確かにそれもいいかも。仁村は土術師だから畑仕事とかいいかな」

「愛ちゃん先生がいるだろ」

「それなら土木工事をしてくれるだけでもありがたい。地ならししたり、トンネルを掘ったりできるしな」

「それなら稼げるか。というか、沙条が全員の面倒を見ればいいんじゃないか？」

「無理だな。バランスや人数から考えるとな」

「ああ、確かにそうか」

王様としたら種族間のバランスを考えないといけないよな。それに沙条の場合だと召喚で増やす可能性もあるだろうし、選ばれた子と選ばれなかった子の差が激しくなる。谷口達がそれを許すかどうかもわからないし、無理はないだろう。

「それじゃあ後は任せる。俺はこれから書類仕事をしてオシユトルに報告書を上げてくる」

「王様なのにそんな事をしているのか」

「むしろ、トップだからだな。アルテナとルサルカを少ししたら来させるから、彼女達に従ってくれ」

「おっけー」

「わかった」

「頑張れよ〜」

沙条を見送ってから、俺達は話し合ってそれぞれ別れる事にした。地球では全然彼女とか出来なかったが、今がチャンスだろう。色々と大変な事はあるだろうけどサポートもしてくれるみたいだし。

室内を回って女の子達を見て回る。どの女の子達も薄着で露出が多いので目のやり場に困るが、そういう目的もあるのでじっくりと観察もできるがやはり恥ずかしいものもある。沙条の言葉通りなら最後まで責任を取って面倒を見ないといけないので気に入った子じゃないと辛いだろう。とりあえず容姿で判断して話をして決めよう。容

姿と声が違う問題も大きいだろうし。

室内を見て回った結果、やっぱり気になるのは最初に目が合った森人族の姉妹であろう子達だ。彼女達に近付いていくと、あちらもこちらに気付いたようで俺の方を翡翠のような綺麗な瞳で見詰めてくる。幼い子の方は片方は存在しておらず、穴になっている痛々しい姿だ。「ちよつといいいか?」

「はい。どうぞお好きなように私達をお使ってください」

「目だつて穴として使えます……私達で気持ち良くなつてください……」

「えつと……」

「どんな物でも食べます。舐めて綺麗にします。ですから、どうかお願いします。なんでもしますから、妹とは最後まで一緒に居させてください……」

姉の方は妹を強く抱きしめ、妹の方も身体を完全に預けている。離される事に恐怖しているのか、身体を震わせている。

「だ、大丈夫だ。引き離したりしないから」

「ありがとうございます。でしたら、姉妹でお楽しみください」

服を捲り上げて肌を完全に露出させて見せてくる彼女に思わずそのまま見てしまう。彼女の胸は掌サイズで、少し溢れるぐらいだ。妹の方は微かに膨らんでいる程度だが、年齢的に問題ないのだと思う。姉は十代の後半に入ったばかりで、妹は少し下だろう。どちらも肌の色や髪の毛の色艶はいい。

「いや、少し話をしたいだけなんだ。君達の世話をするかどうかって……」

「新しいご主人様になってくれるのですね。わかりました。私達で答えられる事なら……」

「なんでも答え、ます……だから、ご主人様になってください……」

彼女達から話を聞いていくと、本当に酷い生活をしていた。親は商人に奴隷として売られてきて、そこで繁殖させられて生まれてきた彼女達は奴隷としての教育を施されて資産家などに売却されたのだと

思う。話を聞く限りでは毎日拷問のような事をされてきたらしい。妹の方は重くて使わずらいという事で手足を落とされた。姉の方は手足の無くなった妹の世話をしながら、生きるために両足を自ら願って切り落としたようだ。落とされた手足がどうなったかは言いたくもない。

「私達は人間様に使って楽しく気持ち良くなっていただく肉人形なんです。それこそが私達の幸せであり、エヒト様に与えられた役目です」

「来世では人間にしてくれるんです。だからどんなに辛くても痛くても我慢して……」

妹の方が身体を震わせながらそう言ってきた。話を聞く関係で姉の隣に座り、膝の上に妹の方を座らせている。だからダイレクトに彼女の震えが伝わってくる。本人はなんとも思っていないみたいだが、身体にはしっかりと恐怖が刻み込まれているのかもしれない。姉の方も妹の言葉に頷きながら俺の手を胸に挟んできたりする。彼女達にとって性的な事や役に立つ事こそが存在意義となっているのだろう。

「神様は私達を見守ってくださいっています。ですから、どのような苦しい事にも自ら望んで試練を乗り越えないといけません。不浄なる亜人の価値はそれだけなのです」

違う。二人は確実に騙されている。沙条や南雲から聞いた話と彼女達の言葉から考えても間違いないだろう。いや、間違っていないどころか、ここはしっかりと言わないといけないはずだ。

「それは間違ってる。二人は騙されているんだ！ エヒトは……」

「止めてください！ 私達は間違っていない！ 絶対に、絶対にです！」

「違う。間違っている！」

「止めてっ！ 好きに犯していいからお姉様を虐めないでっ！」

「いや、俺は……」

妹ちゃんの声に姉の方を見ると、彼女は涙を流しながらブツブツと

小さな言葉を呟いている。

「ありえません。そんなことあってはならないんです……だって、そうじゃないとあの子や皆が死んでいったのは……」

繁殖までさせられているのなら、姉妹が彼女達だけではないだろう。それに同じような境遇の友達のような人も居たのかもしれない。今、一緒にいないということとはそういう事なんだろう。本当に理性や倫理が飛んでいる宗教が怖い物なんだとわかる。もしかしたら、園部もこうなっていたのかもしれない。沙条達についてきて正解だ。俺達は本当に運が良かった。この子達は運が悪かった。だけど、そんなのはこれからは関係ない。運がいいとか悪いとか、そんなのは結果からだ。戦いから逃げた俺だけでも、震えながら一生懸命に互いを助けようとしている彼女達を幸せにできなくても、普通に過ごせるようにしてあげたいと思う。その為に俺も鬼畜外道になろう。

「わかった。今はそれでいい。それで二人は奴隷なんだよな？」

「そうだよ。だから新しいご主人様の好きにしているの」

「はい。私達はご主人様に売られました。新しいご主人様だと思つた方と話したら、違うとの事でここで待機するよう言われました。新しいご主人様が品定めに来るのでしつかりとその方に気にいられるようにしないとどうなるかわからないとも……」

「そうなのか？」

「怖い。凄く怖い人でした」

「亜人は野蛮で凶暴な邪悪なる者達です。私達も新しいご主人様が出来ないと処分されて食べられるんです……」

「そんな事はない。ここは亜人達も人も対等に暮らせる国だつて言つてたし、大丈夫だ」

「そんな国がこの世界にあるはずが……」

「まあ、そこは自分達の目で見ても、過ごして判断するといいいんじやないか？ 今は新しいご主人様に俺がなるって事だけを覚えてくれたらいい」

「わかりました。妹も一緒にいいでしょうか？」

「一緒にいいです。なんでも言う事をききますから、お願い、します」

「もちろん、二人共一緒だ」

そう言う二人はホツとしたのか、可愛らしい微笑みを浮かべた。そんな二人には悪いと思うが、最初は奴隷として扱わせてもらう。多分、その方が一番手っ取り早い。

そう思っていると、扉が開いて森人族と人族の女の子が入ってきた。森人族の子は銀色の髪の毛をした綺麗な大人の女性で、人族の女性の方は赤い色の髪の毛をした綺麗で小悪魔なような感じの少女だ。

「時間になりました。お三人様方、お選びになった子達をこちらに連れてきてくださいませ」

「えっと、運ぶのはどうしたらいいんですか？」

「そんなのお姫様抱っこに決まってるじゃない。女の子の憧れよ？」

あ、ちなみに自力で運んできなさいよ。それぐらいできないと彼女達を自分の物にする最低限の資格もないからね」

玉井の言葉にルサルカと名乗ったはずの少女はそう言った。隣のおそらくアルテナであろう女性は否定をしないので事実なのだろう。アルテナの方は子供の姿しか見えていなかったけれど、一応大人の姿になるとは聞いていたので間違いないはずだ。どちらも沙条のお嫁さんで確実に俺達よりも格段に強いのはわかる。特にルサルカはあの化け物のような強さを持っていた清水のほっぽちゃんとも戦えていたし。

「運ばないといけないみたいだが、いいか？」

「はい。恐れ多いのですが、ご主人様がそれでいいのならよろしくお願いいたします。ただ……」

「お姉ちゃんと一緒にいいです」

「……わかった。頑張ってみる。ところで二人の名前を教えてくださいな
いか？ 俺は相川昇。名前が昇で苗字が相川だ」

「苗字があられるのでしたら、貴族の方ですね。私達に名前はありません。ご主人様から頂いた名前が私達の新しい名前となります」
「ご主人様の好きにつけてください。どんな物でもいいです」

彼女達にとって名前すら主人の所有物なのか。名前なんてすぐに思いつかない。前のを参考にしたらいいか？

「前はなんて呼ばれてたんだ？」

「私は肉人形でした」

「べ……」

「いやいい。聞かなかったことにする。前の事は完全に忘れてこれからは俺が与える名前であってくれ」

「はい」

どちらも女の子につけるには最悪な名前だ。正直、思いつかないが必死に考えるしかない。最後まで面倒を見るし数十年は一緒に居る事になるんだろうし、変な名前はつけられない。それにこんな美少女二人を妻にできるチャンスでもある。ただバイクが好きな俺なんかじゃ絶対にお近付きどころか、友達にすらなれないような存在だ。地球だったらアイドルで十分にトップを立てるような子達だし、チャンスは逃せない。

「ティリエルとミュリエルでどうかな？ 二人を呼ぶときはリエルで統一もできるし、姉妹なんだから名前も共通事項があった方がいいと思うんだけど……」

「ティリエル……」

「ミュリエル……」

「嫌なら別の物を考えるけど……」

「いえ、ありがとうございます。ご主人様から頂いたティリエルという名前、大切にいたします」

「私もミュリエルの名前、嬉しいです……ありがとうございます……ご主人様」

二人共、嬉しそうに笑顔を見せてくれたので、良かったと思う。

「じゃあ、ミュリエル、ティリエル、一緒に運ぶからな」

「はい」

あえて最初なのでリエルと呼ばずにそれぞれの名前を呼んで、姉のティリエルの上に妹のミュリエルを乗せる。ミュリエルはティリエルに抱きしめてもらって固定し、俺はティリエルの太股に手を回してお尻を掴む。太股だけだと肘から先が無いので滑り落ちるかもしれないからだ。もう片方の手は背中に回して脇を掴む。彼女のお尻の

感触が伝わってきて嬉し恥ずかしの状況だが、やるしかない。

「ん……」

俺がお尻を触っても拒否する事はなく、されるがままだ。なので彼女達を持ち上げるのだが、軽く持ち上げられた。俺の筋力がこの世界に来てレベルアップした事で強化されているのもあるが、彼女達がろくに食べられていなくて軽いのもあるだろう。

ルサルカとアルテナの二人の場所に移動すると、玉井が狐獣人の銀髪に一部黒が混じっている美少女を一人連れてきていた。彼女は耳と尻尾が無残にも切り落とされていた。

「相川は二人なのか」

「まあな。二人は姉妹だし、離すのは可哀想だろ」

「確かにな」

「で、そっちは一人か」

「俺なんかだと一人の面倒も見切れないかもしれないからな」

「後から追加しても全然構わないし、いいんじゃないかしら？」

「最初から複数人を選ぶよりも、好感が持てますね」

「ありがとうございます」

俺は持たれないか。まあ、別にいいけどな。

「ひいーひいー」

声が聞こえてそちらを見ると、仁村が片手に一人ずつ、正面と背後に一人ずつ抱き着かせ、頭に小さい子を乗せてやってきた。五人とか、頑張りすぎだと思う。所々土魔法で足場を作ってる辺りは流石だと思う。

「えつと、一人、二人、五人ですね」

「うん、ガッツはあるわね。いいんじゃない？」

「ちゃんと娶ってくれるなら問題はありませんが……」

「それは私達がどうこう言う問題じゃないしね。助けて立ち直る面倒は見えてあげるし、彼女達が知らない世界を教えてあげる。でも、そこからどうするかは彼等と彼女達次第よ」

「そうですね。さて、全員揃ったようなので契約を始めます」

「契約、ですか？」

「そうよ。安心していいわ。なんの問題もないただの意思表示だから」

ルサルカが両手をパンパンと叩くと地面に巨大な赤い魔法陣が現れた。何が書かれているかわからないが、その上でクルクルと踊りながら詠唱を行っていく。

「では、今からする私の質問に答えてください」

「「は？」」

「貴方達はその子達を最後まで面倒を見て、共に幸せになるための努力を惜しまない事を誓いますか？」

「「は？」」

「貴女達は自らの主様となる彼等に尽くし、支えて共に幸せになる事を誓いますか？」

「「「誓います」」」

「わかりました。ここに誓いがなつた事を王の名代としてアルテナ・ハイビストが認めました。皆様の未来に祝福があらん事を……」

魔法陣が光り輝き、俺達と彼女達の中から白い光みたいのが出て交換されていく。それが身体の中に入ってくると温かい感じがして、より彼女達を近くで感じられる。その感じを気持ち良く思っている。と左手薬指に指輪が現れる。不思議に思っ二人を見ると、二人の左手薬指にも指輪が現れていた。

「はい契約終了。基本的にクーリングオフはないからそのつもりでね」

「では、頑張つて共に幸せを掴んでください。心の底から願っております」

「ちなみに本当に大事にしないと死ぬからね」

「「え？」」

「今使った術式はエンゲージリング。生命を共有する魔法なの。彼女達が死ねば貴方達も死ぬし、その逆もしかり。じゃ、頑張つてね」

「ちよっ!？」

「おいまっ」

ルサルカはあっさりと帰っていった。隣に残ったアルテナが説明

してくれたが、事実のようだ。しかも抜けない呪いのアイテムだ。

「彼女達の側からは選べないので、それ相応のリスクを負うのは当然かと存じます。ですが、私共も鬼ではありません。ですので、一週間。共に過ごしてどうしても合わない。一緒に生活するのも苦しいとなれば契約を解除します。その場合、男性側にペナルティは借金が残る程度で他はございません。女性側には重い副作用が出ますがお気になさらないでください」

「それってどうなるんだ？」

「相川様のご質問にお答えするならば、最悪死にます。というのも彼女達は見ての通り、身体の一部が欠損しております。その分だけ生命力はかなり弱まっております。互いの命を共有したのは死なせないための処置でもあるのですが、解除となると相応の負担がのしかかります。生き残るか五分五分かそれ以上に危ないと思います」

説明された理由は納得できるものだった。確かに何時死んでもおかしくない子もいる。仁村は特にそういう子達を選んでいる。

「それと欠損部の治療にも体力が必要ですので、足りない分を補ってもらう意味もあります。ですので、一週間だけは我慢するよう、せつにお願ひ申し上げます」

俺達は反論する事はできなかった。ユーリちゃん達の技術力なら助けられるのではないかと思うし、ブラフの可能性もある。だが、テイリエルとミュリエル、リエルの二人との会話を思い出したのだが、この子達をこの国に解き放つのはかなり危険があるのではないかという事だ。エヒトを信仰しているのは間違いない。だったら、連中の良いように手駒として使われる可能性も十分にある。そのリスクを犯すぐらいなら……それこそ殺してしまった方がいいのかもしれない。そうしないためにこういう手段を取ったのかもしれない。だが、逆に言えば……ここまで譲歩して彼女達の事をどうにかしようとしたのが裏目に出たり、無理だと判断したりされると待っているのは殺されるということだ。少なくともルサルカは殺る。そういう感じがする。

「勘がいい奴は長生きできないわよっ」

「「っ?」」

慌てて飛び退るとリエル達もビクツとなった。気が付いたら後ろにルサルカが居たのだ。

「持ってきてくれましたか?」

「ええ。はい、車椅子、これで彼女達を指定の部屋まで運びなさい。あ、もちろん自室に連れ込んでもなんの問題もないからね。世話の仕方、冊子を見るか、他の女性に聞きなさい。手伝いはしないけれど教えてはくれるわ」

「案内はわたくしがします。こちらへどうぞ」

アルテナの案内に従って移動していく。二人は不安そうだが、きつと大丈夫だ。俺がなんとかしてみせる。

第68話

相川達は無事にこちらの狙い通りに動いてくれている。問題は愛ちゃん先生の方だ。彼女に関してはおそらく時間を置くしかない。一応、相川達を選ばなかった人達は愛ちゃん先生達にも相手をしてもらう。これでこの世界の現実を知る事になるだろう。

「ん〜今日はどうする?」

そんな事を思っていると、俺の身体の上に寝ていた詩乃が身体を擦りつけながらそう言ってきた。

「特に予定はないな」

寝ぼけているのか、そう言う俺の首に顔を埋めてそのまま耳を擦りつけてくる。隣で寝ているユーリと一緒に頭を撫でてやると、ユーリも起きてきたようだ。

「ユーリ、おはよう」

「おふあようございますう……」

「今日からしばらく休みだったよな?」

「はい〜急ぎの仕事は終わりました〜だから、一緒に居られます」

「それは嬉しいが、大丈夫なのか?」

「大丈夫です。愛子先生がきてくれましたから、食料の生産は任せて大丈夫だと思います。それに魔導炉の製造は自動化させるところまで作成しました。後は素材と起動用の魔力さえあれば作れます。神結晶を複製し、魔力を溜め込む性質を利用して作成する最新型です。魔力粒子同士を融合させて……」

「それって核融合……」

「地球の技術を魔法で再現しました。AMFを利用すれば安全に利用できますからね。問題は最初に起動するのに莫大な魔力が必要という事です。一度、起動してしまえば神結晶同士を経由して増幅させる事でメンテナンスの時を除いて永遠に稼働できます。ただし、生産性は高くありません」

まあ、神結晶を使っているんだから難しいだろうな。ユーリ達なら

すぐに作れるかもしれないが。

「ちなみに既に一号機から二号機は稼働させました。一号機はシユテルに持ってかれたのであるのは二号機だけですけど」

「そうなのか。どちらにしてもよく頑張ったな」

「えへへ」

ユーリのサラサラな髪感触を楽しんでから皆を起して移動し、朝風呂を入れてから食事をして出かける用意をしていく。オシユトル達に任せる事になるが、人手は増えたので問題ない。まあ、怪我人は増えたが治療はチビツト達ができるらしいし、治療術師のネコネが居るのでゆつくりと治療すればいい。

◇◇◇

馬車に乗ってフューレンに移動する。今回のメンバーはユーリと俺、鈴と恵里、優花、詩乃だ。ネコネとリムリの二人は残る事になった。ネコネは治療の仕事があるし、リムリは増えた人数を統治する関係で文官が必要になったからだ。そもそもリムリはお姫様でうたわれるものロストフラグでは国主にもなったので、本領はこっちなので任せる。

そんな訳で俺はご機嫌なユーリを膝の上に乗せている。ユーリは膝の上にナハトを乗せている。隣に馬車を操る詩乃が居て窓から手を出してながら尻尾を揺らして風を感じていた。詩乃は手綱を握っているだけで何もしていない。馬の代わりに繋いでいるラプトルもどきが詩乃の意思を受けて移動しているからだ。

「フューレンでしたか、とっても楽しみです」

「そういえばユーリは王都ぐらいしかまともに探索していなかったな」

「です。だからワクワクしています」

「あんまり良い気はしないけどね」

「詩乃は亜人の姿をしているからな」

話ながらスマホを取り出して各自のステータスを確認する。魔力

の方は潤沢なので問題はない。召喚キャパシティーの方もレベルアップによつてかなり高くなっているから、問題はない。流石に愛歌を顕現させると厳しい。愛歌を出す場合はユーリ達の召喚解除か、最低でもリミッターをかけて低コスト化をしないといけない。

「あつ、何かピックアップが出てますよ」

「ん〜？ 本当だ。深海電脳楽土 S.E. R.A. P.H | S e c o n d B a l l e t が来てるな。引くか」

「引いちやうんですか？」

「出るのが問題ない奴ならいいけど……」

「ヤバイ連中ばつかな」

B Bを筆頭にパッションリップ、メルトリリス、キアラ……ああ、やばい。でも引きたい。大丈夫。きつとでない。

「まあ、単発だけだ」

「止めておきなさいって」

「大丈夫、大丈夫……」

「アンタの運はあんまり信じられないのよ！」

「え〜」

「あ」

「ちよつ!?!」

ユーリの上に居るナハトが召喚ボタンを押すと、光り輝く金色のアルターエゴのカードが現れた。

「メルトリリス来い、メルトリリス来い！」

金色のカードの下に巨大な、それはもう巨大な魔法陣が展開されて、中から現れたのは——被害を巻き散らかす災厄であった。ぶつちやけると馬車が完膚なきまで破壊された。戦闘自体は起きなかったが、ある意味でヤバイ奴を召喚してしまった。まあ、ピーストじゃないだけでした。



フューレンでの仕事を終えてウィルを依頼主であるイルワに引き渡した後、イルワが取ってくれたVIPルームの宿を確保してもらえた。そこからシアと約束したデートに出て、海人族の子供であるミュウと出会った。彼女は衰弱していて、保護してから理由を聞くとフューレンにある裏組織が人身販売をされていて、ミュウをオークションの商品として集めていたそうだ。そこから脱出したミュウを気配探知で下水道に漂っているところを発見し、保安所へと届けた。そこまでは良かったのだが、その保安所が襲撃されてミュウが攫われた。そこにシアまで寄越せと書かれた書き置きを発見して俺とシアはその組織を潰す事にして、途中で合流したユエやテイオにも協力してもらって敵の本拠地が判明したのでそこに乗り込んだ。

商業区の中でも外壁に近く、観光区からも職人区からも離れた場所。公的機関の目が届かない完全な裏世界。大都市の闇。昼間だというのに何故か薄暗く、道行く人々もどこか陰気な雰囲気を持っている。

そんな場所の一角にある七階建ての大きな建物、表向きは人材派遣を商いとしているが、裏では人身売買の総元締をしている裏組織「フリートホーフ」の本拠地である。いつもは、静かで不気味な雰囲気を放っているフリートホーフの本拠地だが、今は、騒然とした雰囲気で激しく人が出入りしていた。おそらく伝令などに使われている下端であろうチンピラ風の男達の表情は、訳のわからない事態に困惑と焦燥、そして恐怖に歪んでいた。そんな時に乗り込んで叩き潰そうとしたのだが――

「なんだコイツ……」

「強すぎませんか?」

――目の前に居るのはフリートホーフの頭、ハンセンではなく、その部下の一部がドンナーの一撃を回避し、俺を切ろうとしてきた。そこをシアがドリユッケンで吹き飛ばす。普通の相手なら確実に五体

がバラバラになるはずなのだが、相手は普通に起き上がってきた。ソイツらは更に速度が速くなり、瞳孔が開いて涎を垂らしながら突撃してくる！

「おにいちゃん！」

「大丈夫だ。援軍も呼んであるしな」

ドンナーで撃つが、命中してもダメージにすらならん。血液は出るのだが、その血液すら弾丸として放ってくる。魔眼で観察する限り、血液も何らかの魔法がかかっている、当たるとやばい感じがする。

「シア、どうにか対処できるか？」

「駄目です！ どんどん数が増えてきています！」

「ちっ」

舌打ちをしながら周りを観察すると、悲鳴がそこかしこから聞こえてくる。オークション会場に居た客も化け物に襲われているのだ。ボスすら例外じゃない。

「やめろ！ 俺を誰だと思っているんだ！ 命令に従え！ ひっ、たっ、助けっ！ ぎゃああああああああああっ!!」

ボスであろう奴は首を噛みつかれて絶叫を上げると、少しして身体が痙攣すると動かなくなった。いや、数秒も経つと起き上がって化け物共と同じようになってしまった。

「あ、あの、ハジメさん……う、後ろ……」

「あ？」

そこには客の姿をした化け物達が居た。どうやら感染する様でどんどん増えて襲ってくる。本格的にやばい。むしろ、こんなのが外に出たらパンデミックだ。

「まるでバイオハザードだな」

「バイオハザードですか？ なんなんですか？」

シアがドリユッケンで化け物を叩き潰して平らにするが、その中から黒い血液が出てきて別の化け物に入るとソイツが強化されて襲い掛かってくるようだ。

「バイオハザードってのは俺達の世界であったゲーム……架空の物語でな。そこではあるウイルスに感染して殺されたらゾンビ、アンデッ

トになって襲い掛かってくるんだ」

「確かにそれに似ていますね」

「まあ、これは吸血鬼も入ってそうだが……」

「ユエさんがですか？」

「いや、そうじゃな……待てよ？」

まるでバイオハザードのような感染するゾンビとヴァンパイア。それを可能にする魔法を俺は知っている。その使い手もだ。そしてソイツ等は少し前にフューレンで商売していたら襲われたので返り討ちにして魂を頂いたたと楽しそうに話していた。

「シア、一つ聞きたいんだが、死霊術師はゾンビを作ったりできるか？」

「具体的にはこんな風にできたりするのだろうか？」

「えっと、私知ってる限りでは無理だと思いますが、死霊術師はアンデットを操る事ができるので生前の強さ通りならできる使い手も伝説にはいました。死霊王と呼ばれた伝説の死霊術師です」

「中村ならやりかねんと……というか、絶対にそうだろ！」

絶対に文句を言つてやる！ そう思った瞬間。本人から連絡が来た。

『ハジメ、救援要請を受けてきたが、状況はどうなっている？』

「ヤバイ！ ガチで死にそうだ！ お前の嫁のせいだな！」

『どういう事？』

「中村の奴が仕込んだ死体とか死霊とかフューレンに存在していないか？」

『もちろんあるよ。僕が考案した新しい術式の実験体として手に入れた死体を使つてたからね』

『それって噛んだら増殖するか？』

『するよ。数で劣る僕達が数で勝る一番手っ取り早い方法が相手を味方に作り変える事だもん。だから、バイオハザードやヴァンパイアを参考にして血液感染する死霊をルサルカ姉さんの協力を得て作ってみた。完成形は死体にナパーム弾を生成するようにしてやられたら自爆するようにする。これで確実に殺せる』

「馬鹿じゃねえの！ 馬鹿じゃねえか！」

どう考えてもベルカにあったマリアージュじゃねえか！ しかもかなりやばい状況だ。ここで止めないとこの世界が悲惨な事になる。いや、別にどうでもいいか。

『良い考えだと思っただけど駄目かな？』

「駄目に決まってるんだろ！ 被害を考えろ！」

『確かに民間人に被害を出すのは頂けないな。それで倒す方法は？』
「止められるよな？」

『無理かな。今、暴走しているみたいで僕の言う事をきかないし。何かした？ もしくは場所が悪いか……』

「場所だと？」

『恨みつらみが集まる所や、そういう連中が居たとか。死霊なんだから、そういう負の感情を集めている奴等は格好の餌になるんだよね。地縛霊とかの理論も使ってるし』

「ちつ、どっちも揃ってやがる！ どうすればいいんだ！ いや、地縛霊ってなら場所ごと破壊すればいいのか」

『正解』

『それなら丁度いいのがある。準備しておくから脱出してこい』

「わかった。こっちは一度撤退するぞ。保護対象が居るからな」

『了解。大人しくさせる程度はできるよ』

「シア！ 撤退だ！ 後始末は沙条達に任せる！」

「わかりました！」

地震が起きたのか、一部が崩れだした。それもかなり連続しているのでやばい。すたこらと逃げる。やばい気配がブンブンする。実際に気配察知に信じられないほど有り得ないものを感知した。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫だ」

ミウを連れてシアと共に急いで空気の壁を使って即座に離脱する。二人を抱えて外に出ると濃い霧が出ていた。おそらく、園部のジャック・ザ・リッパーの力だろう。

「お兄ちゃん、あそこにおつきな人が居るよ……」

「そんな巨大な……」

「ハジメさん、夢でも見てるんですかね？」

「いや、アレは……やべえ！」

巨大な、そう巨大な人影が霧の中を歩いていった。最低でも30メートルはあろう存在は足を俺達が先程まで居た場所にかかと落としを叩き込む。そして巨大なクレーターを作成し、何もかもを消し飛ばした。余波だけで複数の建物が粉碎されたが、幸い連中の息がかかった施設なので問題はないだろう。

「ハジメさん、アレってなんですか！ あんなの聞いた事がない」

「あく多分味方だ。大丈夫だ」

「そうなんですか？」

「ああ。待ってろ」

沈んだ足が引き上げられる時に見えるのは緑の苔に覆われた足だ。元の位置に戻ると、今度は座ってくる。その衝撃は凄まじく、それだけで建物が揺れる。そして巨大な手がこちらにやってきた。掌の上には予想通り、ユエやテイオと共にいた。上の方を見れば沙条が肩に乗りながら指示をだしている。

「おいてめえ」

「マスターにおいたは駄目、です」

「……沙条。このお嬢さんは何かな？」

「CCCのピックアップが来たので、開いてみたら話している最中にナハトが召喚した」

「スキルとレベルは？」

「引き継いでるみたいだ」

「ちなみにどこまで上げた？」

「スキルマスター」

「うん、まあさもありなん。アルターエゴだもんな。聖杯は？」

「もち入れてある。レベル100の絆マックス。ただし宝具はレベル2だ。こればかりは運と財力で無理だった」

「絆は？」

「15だな。装備礼装は両手いっぱいという絆礼装だ」

つまり、本当にやばい巨人を引きやがった！ こいつは周りのリ

ソースを際限なく食い荒らしていく。ある意味でビーストとすらいえる神様の複合存在だ。

「制限はあるんだろうな？」

「もちろんある。大丈夫だ。ユーリがどうかしてくれた」

「本当か？」

「本当。ユーリがちゃんとやってた。封印用の装備を作ったから、それで変身魔法を使って小さな身体にするって言ってたよ、ハジメ」

「ユエが言うなら本当か。しかし、キングプロテアか……」

「引いたものは仕方がない。溺愛されるが、まあ頑張るさ。それにちよつと楽しいしな」

「文字通りの巨神兵なんだから、いいかもしれないな」

「まあ、そつちでちゃんと面倒を見るならいいか。それよりもゾンビの連中はどうしたんだ？」

「それなら……潰すと同時に食べちゃいました……」

「リソースに変換したのか。それならいいか。じゃあ、後始末は……」

「私がするから大丈夫」

「園部……ヘイゼルの情報抹消があるならどうとでもなるか」

一応は考えられているようだな。ただし被害については放置している。いや、本当にそうか？ コイツ等の事だから絶対に何かを狙ってやがる。

「さて、降りたらハジメにお願いしたい事がある。だが、その前にプロテア、降ろしてくれ」

「うん」

キングプロテアに降ろしてもらい、地面に立つ。再臨の姿は一応、初期のようだ。それからユーリが拘束魔法と変身魔法を使って姿を変えさせる。するとキングプロテアはの身体はどんどん小さくなり、紫色の長い長髪に左目をはじめ身体中に包帯が巻かれている。彼女は薄いピンク色のフリル付きワンピースを着ていた。そして両手両足、首に無骨な枷が嵌められている。つまり、途中で切れている鎖つきの首輪と手枷足枷が取り付けられていた。そして彼女は八歳くらいの身長をしている。

「どう見ても事案じゃねえか」

「プロテアを変身させて彼女の無限に成長し続けるヒュージスケールを幼化現象を改変して抑えているのだが、どうしても五体から封じないといけない」

「マスター、マスター、頑張りました……褒めてください……」

「ああ、よくやってくれた。ありがとうプロテア」

「えへへ」

さて、流石に絆も15だけあつて安全そうだ。だが、逆に言えばマスターに何か有れば完全に暴走すること請け合いだ。どちらにせよキングプロテアはユースリ達と楽しそうにしているからいいだろう。

「で、何をしろって？」

「この辺りを買収して商売を行う。その為にこの壊れた土地を手に入れて作り直さないといけない。頼む」

「つまり、俺に修理しろと言うんだな？」

「その通り。頼めるか？ 無理ならいいけど」

「面倒だからパスだな」

「じゃあ、ここはそのまま放置でいいか」

「駄目ですよ。ちゃんと直さないといけません」

「確かに情報抹消をするとはいえ、この場所の説明ができないから元に戻す方がいい」

「……わかった。直すのは手伝う。だが、この貸しは高いぞ」

「助けにきたのにこれ如何に……」

「中村が原因だから仕方がないな。そうだろう？」

「まあ、そうだな。でも貸しか。何かを考えておこう。頼む」

「了解だ」

貸しといっても使い道が思いつかない。まあ、日本に戻った時に色々ユエの事で交渉しないといけない。その時にこつちで国を作って王になっている沙条に協力してもらえばかなり有利になるだろう。少なくともユエ達に戸籍を作ってやらないと生まれてくる子供に辛い思いをさせる事になるだろうしな。

第69話

街を直している間にハジメ達が壊滅させようとしていた組織は恵里にも協力してもらってキツチリと始末した。死霊として呼び出して使役し、情報を吐かせて構成員と関わっていた奴を問題ない奴と問題ある奴で振り分けてしつかりきつちりと根こそぎ始末した。

優しい主人に恵まれて充実した生活を過ごしている者達や本人に落ち度がある借金で奴隷になった一部の連中以外、誘拐など強制的に奴隷にされた者達は回収して俺達の国に送っておく。

最後は殺した魂をしつかりと俺と恵里でもらい、犠牲になった魂達は鈴が浄化して力に変えたので問題ない。街への被害は全てユーリとハジメに直してもらったし、情報抹消によって霧の中で巨人を見たという目撃は夢かなにかだと思われることになる。

フューレンに店を用意するための資金は用意したし、組織の資産は恵里が全て合法的に奪い取った。後は人員だが、奴隷になった奴等の一部や殺した中でも商人として有能な奴を蘇らせて使う事にした。

そうする事でここに残る奴隷達に仕事を与えられるし、裏からフューレンの町を経済的に支配もできる。更に放置していたら湧いてくる裏の連中も俺達が管理運営する事で始末して魂を捧げさせることができるし、大々的に亜人奴隷を買い漁れる。誘拐犯とかも売りに来てくれるだろうし、救助と同時に連中の魂を頂く事で一石二鳥となるとのことだ。

一応、護衛として森人族とハウリア族の男性と女性のペアを奴隷として配置しておく。どちらもレベル100で彼等の護衛として兎を10匹ほど配置しておけば問題ない。普段はモフモフ喫茶としておけば怪しまれないだろう。更に念を入れてシユテルとディアーチェの分体も配置しておいたので後は任せた。

さて、俺達は始末が終わったのでフューレンから即座に移動した。フューレンに居る必要はなくなったからだ。その移動中に一泊して幼女桜……キングプロテアと色々とした。彼女の体内、女体の神秘探

検ツアーだ。アブノーマルで色々と凄かったとだけ言っておく。

そんな日を過ごして俺とハジメ達は無事に宿場町であるホルアドまで戻ってきた。このホルアドはオルクス大迷宮への入口がある場所だ。つまり、俺とハジメ達が落ちた場所に戻ってきた事を意味する。

「お兄ちゃん、やっと戻ってこれましたね」

「そうだな。といっても、俺はルサルカと一度戻ってきているんだが……」

「むう、ずるいです。デートしたんですよね？」

「ユーリともするよ」

「はい。絶対ですからね！」

ユーリの頭を撫でてから彼女を抱き寄せ肩車する。ユーリは俺の頭に手を置いてぽふぽふと軽く叩いてくる。すると隣に首輪に手枷足枷を嵌め、桃色のワンピースを着た紫色の長い髪の毛を靡かせてキングプロテアが腕に抱き着いてくる。反対側には詩乃がきて俺の腕を抱いてきた。

「どうした？」

「視線が鬱陶しい」

「……潰していいのなら……言ってください……ぐちゃってします……」

「しなくていい。ユーリ、バランスを取れるか？」

「大丈夫です」

ユーリは俺の頭を太股でしっかりと挟みながら、手も使って落ちないようにした。キングプロテアは包帯と手枷足枷、首輪を付けた容姿端麗な幼女という事で凄く見られる。詩乃は綺麗な亜人の少女という事でこちらもキングプロテア同様に見られている。ユーリも同じだな。そんなわけで俺にも当然のように視線が集まってくる。更に後ろに居る面々も視線を集めているのは間違いない。

「ホルアドよ、鈴は帰ってきた〜！」

「色々大変だったね」

「そうだね」

鈴と恵里、優花も色々と思うところはあるようだ。優花は俺達とは別口だが、思う事は一緒だろう。ハジメの方を見ればミュウを肩車して隣にユエとシアを侍らせている。その後ろにはティオがいた。

「そっちはこれからどうするんだ？ 俺達はフューレンの支部長から預かった手紙を持ってギルドに行くが……」

「とりあえずこっちは宿の確保だな。安全な寝床の確保はモチベーションにも影響する」

「確かに。ハジメ、私達の間も頼んでおこう」

「ユエの言う通りだな。沙条、頼めるか？」

「わかった。そっちは二部屋か？」

「うん。ハジメと私。シアとティオ」

「嫌です！ 私もハジメさんと一緒にいいです！」

「我もじゃー！」

「ミュウもー！」

「なら、五人部屋にしておく。こっちも似たような物だしな」

「あくまあ、それで頼む」

ハジメ達と落ち合う時間を決めてから、ホルアドで一番高い高級宿を選ぶために移動するのだが、すぐに俺達の前に立ち塞がる奴が居る。ここで悪徳貴族の登場かと思ったら、俺の腹に飛び込んで頭をぐりぐりと擦りつけてくるその相手は八歳くらいの幼い少女だ。

「お待ちしております。既に歓迎の準備は整っております。どうぞこちらに」

「ありがとうございます。シュテル」

そう、立ち塞がったのはシュテルだ。それも本来の姿であり、高町なのはと瓜二つの姿という事になる。

「シュテルんだ」

「鈴もお久しぶりです」

シュテルをキングプロテアに紹介して、互いに自己紹介させてから移動する。途中で気になった屋台の食べ物を買ったり、小物を買ったりして皆で楽しみながらシュテルの用意した宿に入っていく。

シュテルの用意した宿は他が二階建てだというのに三階建ての大

きな宿だった。一階が店舗を兼ねたフロントとなっており、二階と三階が客室のようだ。

「……小さくてかわいいです……」

「え、大きいですよ？」

「私より、小さいです」

「そりゃ、まあな」

キングプロテアは最低で30メートルであり、建物は三階建てでも10メートルはいかない。そんなわけでキングプロテアからしたら小さくて可愛らしいお家となるのだろう。

「早く入るわよ。ここに居たくない」

「僕もゆつくりしたいかな」

「鈴は……」

「あ、鈴さんはお店に結界をお願いしますね」

「鈴だけお仕事!？」

「結界師の宿命だな。後でご褒美に何かしてやるから頑張ってくれ」「うん、それなら頑張るよ。張り切ってプロプロが殴っても一度は耐えられるようにするね!」

どうやら鈴としては少しは対抗意識を燃やしているみたいだ。すぐに店の周りを移動して結界の基点となる術式を刻んでいく。

「ヘイゼル、悪いが鈴の護衛を頼む」

「了解」

流石に一人で居させると心配なので優花、ヘイゼルをつける。詩乃達を部屋に送り届けたら、俺も合流して鈴を見守ればいい。

『念の為、美遊は鈴達にサーチャーを飛ばしておいてくれ』

『わかりました。私の方でも警戒はしておきますね』

『頼む』

シユテルの案内で宿の中に入り、チェックインする。部屋は五人部屋を一つと十人部屋を二つ借りる。一つは相談用として会って話す為の部屋だ。それぞれの部屋でそういう行為をするだろうし、他人に入ってこられるのは好ましくない。

「食事は一階の食堂かそれぞれの部屋、中庭で取れるようになってお

ります。また岩盤をくり貫いて作った洞窟風呂などもございますのでお楽しみください」

「お風呂！ 入ってきていい！」

「先に皆で入ってきてくれ。俺は鈴を見てるから」

「それなら交代で入ろっか。僕は鈴と入るから、ユーリは詩乃と入っておいで」

「プロテアちゃんはどうしますか？」

「……私はマスターと、一緒がいい……」

「私もそうですけど……」

「残念ながら混浴ではありませんので別々ですよ」

「あうっ。それを早く言ってください」

「従業員も居ますから混浴はできません。そっちは自宅どうぞ」

シユテルの言う通りなので、混浴は諦めてユーリは詩乃と一緒に入る事になった。鈴は恵里と一緒に、優花にキングプロテアを任せる。俺は一人で入ることになるが、まあ脳内に美遊がいるから実質混浴みたいなものだ。

シユテルがユーリと詩乃を連れて部屋から出る。恵里はベッドにダイブしてゴロゴロしだったので、俺は外に出る。キングプロテアがてくてくと後ろをついてくるので手を繋いで外に移動し、鈴を見守る事にした。

しばらく待っていると、ハジメ達が出てきた。そこに遠藤まで連れてきているのは少し驚いたが、それよりも驚いたのは奈落で魔族が現れ、更に別の勢力まで現れて三つ巴のような状況になっているらしい。

「天之河達だけなら放置してもいいんだが、白崎や八重樫も居るらしいから助けに行く。お前は どうする？」

「あくユーリ達は今風呂に行ってるんだよ……」

現在動かせる戦力は俺＋美遊と鈴、恵里、キングプロテア。シユテル。それとハジメ達か。余裕じゃねえか。そもそも場所がオルクスならいくらでも手の打ちようはある。

「鈴はいくよ！ かおりんやししずしが心配だしね！」

「恵里は……」

「あく僕はパス」

窓を開けて顔を出している恵里が答えた。どうやら聞いていたみたいだ。

「正直過剰戦力だし、僕はここでまったりしながらユーリ達と待つてるよ。連中には興味もないしね」

「じゃあ、皆に伝えといてね、えりえり」

「任せて。それとここの護衛はしっかりとやっておくから心配はいらないよ」

「わかった。じゃあ、俺と鈴、プロテアで行くとして、ヘイゼルは……」「私に行く」

「お前は止めておけ。檜山がいるらしい」

そう言った瞬間、ヘイゼルの姿が掻き消えた。跡形もなく。

「ヤバイぞー!」

「今すぐ追うぞー!」

「え? ちょっと待ってくれ!」

俺達はすぐにオルクスへと向けて走り出す。ヘイゼルが、優花が近く前に到着しないと惨殺現場になる可能性が高い。檜山だけならどうでもいいが、今の優花なら邪魔をしたら白崎達だって殺しかねない。俺達が近くに居たら自制してくれるか、無理矢理にでも止める事はできるだろう。

「いってらっしやい〜」

恵里が窓から手を振りながらニヤニヤして見ていた。もしかしたら、優花を焚きつけたのかもしれない。恵里にとって他の連中よりも家族になった優花の方が何倍も大事だろうし、他はどうでもいい存在なのだろう、故に優花の感情を優先しても何も可笑しくはない。

第70話

「みくつけた」

遂に俺達は九十層に到着した。おそらく百階層までであると思われるオルクス大迷宮だが、今までも節目には強い敵が現れていた。だから何か起こるのではないかと警戒していたのだが、見た目は今まで探索してきた八十層台と何ら変わらない作りのようだ。

マツピングしながら探索を開始する。迷宮の構造自体は変わらなくても、出現する魔物は強力になっているだろうから油断はできない。

警戒しながら、変わらない構造の通路や部屋を探索していく。探索はとても順調だった。だったのだが、俺達は皆、怪訝そうな表情になっていった。

「……どうなってる？」

かなり奥まで探索し大きな広間に出た頃、遂に不可解さが頂点に達し、表情を困惑に歪めながら疑問の声を漏らす。皆も俺の疑問に同調しつつ足を止めた。

「……何で、これだけ探索しているのに唯の一体も魔物に遭遇しないんだ？」

既に探索は、細かい分かれ道を除けば半分近く済んでしまっている。今までなら散々強力な魔物に襲われてそう簡単には前に進めなかった。ワンフロアを半分ほど探索するのに平均二日はかかるのが常であったのだ。にもかかわらず、俺達がこの九十層に降りて探索を開始してから、まだ三時間ほどしか経っていないのに、この進み具合。それは単純な理由だ。未だ一度もこのフロアの魔物と遭遇していないからである。

最初は、魔物達が俺達の様子を物陰から観察でもしているのかと疑ったが、感知系スキルや魔法を用いても一切索敵にからない。魔物の気配すらないというのは、いくら何でもおかしい。明らかな異常事態だ。

「……………なんつうか、不気味だな。最初からいなかっただのか？」

龍太郎と同じように皆が口々に可能性を話し合うが答えが見つかるはずもない。困惑は深まる。

「……………光輝。一度、戻らない？ 何だか嫌な予感がするわ。メルド団長達なら、こういう事態も何か知っているかもしれないし」

雫が警戒心を強めながら、提案してきた。俺も何となく嫌な予感を感じていた。だから雫の提案に乗るべきかと考えたが、何らかの障害があったとしてもいずれにしろ打ち破って進まなければならぬ。八十九層でも割りかし余裕のあつた俺達なら何が来ても大丈夫ではないかと思える。

迷っていると、不意に、辺りを観察していた遠藤達が何かを見つけたように声を上げる。

「これ……………血……………だよな？」

「薄暗いし壁の色と同化してるから分かりづらいけど……………あちこち付いているよ」

「おいおい……………これ……………結構な量なんじゃ……………」

表情を青ざめさせる皆の中から永山が進み出て、血と思しき液体に指を這わせる。そして、指に付着した血をすり合わせたり、臭いを嗅いだりして詳しく確認した。

「天之河……………八重樫の提案に従った方がいい……………これは魔物の血だ。それも真新しい」

「そりゃあ、魔物の血があるってことは、この辺りの魔物は全て殺されたって事だろうし、それだけ強力な魔物がいるって事だろうけど……………いずれにしろ倒さなきゃ前に進めないだろ？」

俺の反論に永山は首を振る。永山は龍太郎と並ぶクラスの二大巨漢ではあるが、龍太郎と違って非常に思慮深い性格をしている。その永山が、臨戦態勢になりながら立ち上がると周囲を最大限に警戒しながら、自分の考えを告げる。

「天之河……………魔物は何もこの部屋だけに出るわけではないだろう。今まで通って来た通路や部屋にも出現したはずだ。にもかかわらず、俺達が発見した痕跡はこの部屋が初めて。それはつまり……………」

「……何者かが魔物を襲った痕跡を隠蔽したってことね？」

あとを継いだ雫の言葉に永山が頷く。その言葉にハツとした表情になる。俺も永山と雫が撤退を提案した理由がわかったからだ。皆も同じで全員が険しい表情で警戒レベルを最大に引き上げた。

「それだけ知恵の回る魔物がいるという可能性もあるけど……人であると考えたほうが自然ってことか……そして、この部屋だけ痕跡があったのは、隠蔽が間に合わなかったか、あるいは……」

「……ここがアンタ達の終着点という事さ」

俺の言葉を引き継ぎ、突如、聞いたことのない声が響き渡る。男口調なのにハスキーな声音から女だとわかった。俺達は咄嗟に戦闘態勢に入りながら声のする方に視線を向けた。

コツコツと足音を響かせながら、広い空間の奥の闇からゆらりと現れたのは燃えるような赤い髪をした妙齡の女。その女の耳は僅かに尖っており、肌は浅黒かった。

俺達は驚愕したように目を見開きながら女を見る。女のその特徴は、俺達のよく知るものだ。だからだ。実際には見たことはないが、イシユタルさん達から教えてもらった座学で何度も出てきた種族の特徴だからだ。聖教教会の掲げる神敵にして、人間族の宿敵。そう

「魔族ツッ！」

誰かの発した呟きに、魔族の女は薄らと冷たい笑みを浮かべながら俺達を観察するように見返してくる。彼女の瞳の色は髪と同じ燃えるような赤色で、服装は艶のない黒一色のライダースーツのようなものを纏っている。体にピッタリと吸い付くようなデザインなので彼女の見事なボディラインが薄暗い迷宮の中でも丸分かりだった。しかも、胸元は大きく開いており、見事な双丘がこぼれ落ちそうになっっている。また、前に垂れていた髪を、その特徴的な僅かに尖った耳にかける仕草が実に艶かしい。

「勇者はあんたでいいんだよね？ そのアホみたいにキラキラした鎧着ているあんたで」

「あ、アホ……う、煩い！ 魔族なんかアホ呼ばわりされるいわれ

はないぞ！ それより、なぜ魔族がこんな所にいる！」

これは勇者としての由緒正しい正装なのだ！ 何も間違っていない！

あまりと言えばあまりな物言いに軽くキレかけたが、とりあえず魔族の女に目的を聞いたです。魔族の目的次第では色々と考えないといけないからだ。しかし、魔族の女は、失礼にも煩そうに俺の質問を無視すると心底面倒そうに言葉を続ける。

「はあ、こんなの絶対いらねいだろうに……やっぱり当たりはアイツだけじゃないの？ もしかしたら別の当たりにかけているのかも知れないけどさ……まあ、命令だし仕方ないか。あんた、そう無闇にキラキラしたあんたも含めた全員。一応聞いておく。あたしらの側に来ないかい？」

「な、なに？ 来ないかって……どう言う意味だ！」

「呑み込みが悪いね。そのまんまの意味だよ。勇者君達を勧誘してんの。あたしら魔族側に来ないかって。色々、優遇するよ？」

予想外すぎて何を言っているのかがわからなくて意味を理解するのに少し時間がかかった。意味を呑み込むと、皆は自然と俺に注目してきたので魔族の女を睨みつけながら告げてやる。

「断る！ 人間族を……仲間達を……王国の人達を……裏切れなんてよくもそんなことが言えたな！ やはり、お前達魔族は聞いていた通り邪悪な存在だ！ わざわざ俺を勧誘しに来たようだが、一人でやって来るなんて愚かだったな！ 多勢に無勢だ。投降しろ！」

俺の言葉に、皆安心した表情を見せる。俺が仲間や王国の人達を裏切って魔族につくとでも思っていたのだろうか？ 流石に雫や龍太郎、香織はそんな事は思っていなかったようで安心した。

「あつそ」

断れた魔族の女は、即行で断られたにもかかわらず呟くのみで大して気にしていないようだ。

「一応、アンタ達のお仲間も既にこっちに合流してるんだけど……それでもかい？ お仲間同士で殺し合う事になるけどさ」

「答えは同じだ！ 何度言われても、裏切るつもりなんて一切ない！

だいたいそのような虚言に惑わされたりはしない！ 皆が仲間を裏切るなんてことは絶対はない！」

「へえ〜いうねえ……」

仲間の代表として、即行で答える。こんな勧誘を受けること自体が不愉快だ。さっさと倒してしまおう。これ以上の問答は無用。投降しないなら力づくでも制圧させてもらう。聖剣を起動させ光を纏わせて何時でも攻撃できるようにする。

「普通に考えて、いくら魔法に優れた魔人族とはいえこんな場所に一人で来るなんて考えられないのだけど。それにこの階層の魔物を無傷で殲滅し、痕跡すら残さない余裕もある。またこの階層に到達できるほどの人間族十五人を前にしても魔人族の女は全く焦っていない。戦闘の痕跡を隠蔽したことも考えれば最初に危惧した通り、ここで待ち伏せていたのだと推測すべきよ。地の利は彼女の側にあると考えるのが妥当なのだけど、それすらわかっていない愚か者。姿は問題ないけれど、これは器となりえるのかしら？」

「そう。なら、もう用はないよ。あと、一応、言っておくけど……あんなの勧誘は最優先事項つてわけじゃないから、殺されないなんて甘いことは考えないことだね。ルトス、ハベル、エンキ。餌の時間だよ！」
魔人族の女が三つの名を呼ぶのと、バリントツ！ という破碎音と共に、雫と永山が苦悶の声を上げて吹き飛ぶのは同時だった。

「ぐっ!？」

「がっ!？」

二人を吹き飛ばしたものの正体は不明。魔人族の女の号令と共に、突如、光輝達の左右の空間が揺らいだかと思うと、「縮地」もかくやという速度で「何か」が接近し、何の備えもせず光輝と魔人族の女のやり取りを見ていたクラスメイト達に襲いかかったのだ。

最初から、最大限の警戒網を敷いていた雫と永山はその奇襲に辛うじて気がつき、咄嗟に狙われている生徒をかばって見えない敵に防御態勢を取ったのである。

雫はスピードファイターであるため防御力が低い。そのため、揺らぐ空間に対して抜刀した剣と鞘を十字にクロスさせて衝撃の瞬間を

見計らい自ら後方に飛ぶことで威力を殺そうとした。しかし、相手の攻撃力が想像の遙か上であったため、防御を崩され腹部を浅く裂かれた上に肺の空気を強制的に排出させられる程強く地面に叩きつけられたようだ。

永山は、「重格闘家」という天職を持っており、格闘系天職の中でも特に防御に適性がある。「身体強化」の派生技能で「身体硬化」という技能とお馴染みの「金剛」を習得しており、両技能を重掛けした場合の耐久力は鋼鉄の盾よりも遙かに上だ。自らの巨体も合わせれば、その人間要塞とも言うべき防御を突破するのは至難と言っている。

だが、その永山でさえ、「何か」の攻撃により防御を突破されて深々と両腕を切り裂かれ血飛沫を撒き散らしながら吹き飛び、たまたま後方にいた檜山達にぶつかって辛うじて地面への激突という追加ダメージを免れるという有様だ。

「雫っ！ 永山っ！ 無事か！」

ガラスが割れるような破碎音は、香織が雫の臨戦態勢に合わせて予め唱えておいた障壁魔法だろう。流石は香織だ。香織の障壁がなければ、三つ目の空間の揺らめきは容赦なく永山のパーティーメンバーを切り裂いていたはずだ。

味方を見事に守った代償に、障壁破碎の衝撃をモロに浴びた香織もまた猫と共に後方へ吹き飛ばされたが、猫が巨大化して受け止めたので事なきを得た。雫と永山を切り裂いた二つの揺らめきと同じく、三つ目の揺らめきも直ぐさま追撃に動き出したため、危機は未だ終わってはいない。

突然の見えない存在からの襲撃に、反応しきれていない皆を三つの揺らめきが切り裂かんと迫るが、その瞬間――

「光の恩寵と加護をここに！」 回天” 周天” 天絶”！」

――香織がほとんど無詠唱かと思うほどの詠唱省略で同時に三つの光系魔法を発動した。

一つは、切り裂かれて吹き飛び、地面に叩きつけられた雫と永山を即座に癒す光系中級回復魔法「回天」。複数の離れた場所にいる対

象を同時に治癒する魔法だ。痛みには呻きながら何とか起き上がろうともがく二人に淡い白光が降り注ぎ、尋常でない速度で傷が塞がっていく。

次いで、少しでも気を逸らせば直ぐに見失いそうな姿なき揺らめく三つの存在に、雫達に降り注いだのと同じ淡い白光が降り注ぎ纏わりつく。すると、その光はふわりと広がって空間に光の輪郭が出現した。

光系の中級回復魔法“周天”。これは、いわゆるオートリジエネだ。回復量は小さいが一定時間ごとに回復魔法が自動で掛かる。この魔法は掛かっている間、魔力光が纏わりつくという特徴がある。香織はその特性を利用し、回復効果を最小限にして正体不明の敵に使用することで間接的に姿を顕にしたのだ。

白光により現れた姿は、ライオンの頭部に竜のような手足と鋭い爪、蛇の尻尾と、鷲の翼を背中から生やす奇怪な魔物だった。おそらく、迷彩の固有魔法を持っているのだろう。姿だけでなく気配も消せるのは相当厄介な能力ではあるが、行動中は完全には力を発揮出来ないように、空間が揺らめいてしまうという欠点があるのは不幸中の幸いだな。

「その獣……勇者よりもやっかいだね」

「にやあ」

「当然って言ってますね」

猫の癖にムカつく奴ではあるが、コイツのお蔭で助かっている。なにせ、クラスメイトの中でもトップクラスの近接戦闘能力を持つ雫と永山を一撃で行動不能に陥れた恐るべき敵だ。この上、完全に姿を消せるとあっては、とても太刀打ち出来ない。今までの階層の魔物と比較すると明らかにこの階層の魔物のレベルを逸脱している。

そのキメラ三体は、纏わりつく光など知ったことかと追撃の爪牙を繰り出した。目標は、雫、永山、香織の三人だ。だが、その爪牙が三人に届くことはなかった。なぜなら、三人の眼前にそれぞれ炎の盾が現れてキメラの一撃を受け止める。炎の盾は粉碎されながらも、爪や牙から身体に燃え移って全身を焼いていく。それにたまらず地面に

転がって暴れながら消火することによって三人は助かった。

炎を消火した三体のキメラは、やや苛立ったように再度攻撃に移ろうとした。稼げた時間は一瞬。問題などないと。しかし、一瞬とはいえ、貴重な時間を稼げた事に変わりはない。その時間を俺達が逃すはずはない！

「雫から離れろおお!!」

「縮地」で一気に雫の近くにいたキメラに踏み込む。焦点速度を超えた移動速度が背後に残像を生み出し、振りかぶった聖剣が一刀のもとにキメラの首を跳ねんと輝きを増す。

同時に、龍太郎も永山を襲おうとしていたキメラへと空手の正拳突き構えを取った。直接踏み込んで攻撃するより、籠手型アーティファクトの能力である衝撃波を飛ばしたほうが早いと判断したからだろう。龍太郎から裂帛の気合が迸り、籠手に魔力が収束していく。

さらに、吹き飛ばされ香織を受け止めていた猫が口の前に魔法陣を展開して強力な炎系魔法を発動させた。「海炎」という名の炎系中級魔法は、文字通り、炎の津波を操る魔法で分類するなら範囲魔法だ。素早い敵でも、そう簡単には避けられはしない。そんな魔法を猫は無詠唱で放つ。

聖剣が壮絶な威力と早さをもって大上段から振り下ろし、龍太郎の正拳突きがこれ以上ないほど美しいフォームから繰り出される。凄絶な衝撃波が砲弾のごとく突き進み、猫の死を運ぶ紅蓮の津波が目標を呑み込み灰塵にせんと迸った。

「ルウガアアア!!」

「グウルウオオオ!!」

一体どこに潜んでいたのか。俺達の攻撃がまさに直撃しようかというその瞬間、三つの影が咆哮を上げながら俺達へと襲いかかる。

「ツ!!」

突然の事態に俺と龍太郎の背筋を悪寒が襲う。二体の影は、それぞれ光輝と龍太郎に猛烈な勢いで突進すると、手に持った金属のメイスを豪速をもって振り抜いてくる。

咄嗟に剣の遠心力を利用して身を捻り、龍太郎は突き出した右手の

代わりに引き絞った左腕をカチ上げて眼前まで迫っていたメイスを弾く。俺はバランスを崩し地面をゴロゴロと転がり、龍太郎は、メイスを弾いた後の敵の拳撃による二撃目を受けて吹き飛ばされる。

俺達に不意を打ったのは、体長二メートル半程の見た目は豚の化け物に近い魔物だった。極限まで鍛え直し引き絞ったような体型の豚顔を持つ存在。

「あら、いい男達ね！」

「そうね！ 是非とも連れて帰って夫にしましょう！」

「それはいい考えね！ 私達の子供を生む種馬になってももらいましょう！」

「「「っ!?」」」

その言葉に俺達、男性陣は震えた。ソイツ等は完全に捕食者の目をしていて、ペロリと舌なめずりをしている。俺達が恐怖に身体が硬直した一方、猫の方は直接攻撃を受けたわけではなかったが押し寄せる炎の津波を、突如割り込んだ影が大口を開けたかと思うと一気に吸い込み始めたようだ。ヒュオオオオ！ という音と共に、みるみると広範囲に展開していた炎が一点へと収束し消えていく。その影が全ての炎を吸い込むのに十秒程度しか掛からなかった。

炎と熱気が消えた空間からは、体から六本の足を生やした亀のような魔物が姿を現した。背負う甲羅は、先程まで敵を灰に変えようと荒れ狂っていた炎と同じように真っ赤に染まっている。

と、次の瞬間、多足亀が炎を吸収しきって一度は閉じていた口を再びガパツと大きく開いた。同時に背中の甲羅が激しく輝き、開いた口の奥に赤い輝きが生まれる。まるで、エネルギーを集めて発射寸前のレーザー砲のようだ。

その様子を見た香織が、表情に焦りを浮かべたが、そんなものには関係なかったようだ。

「ブラストファイアーツ！
「にやあああああつ！」

亀から放たれる砲撃に対して猫も炎の砲撃を放ち、互いの砲撃は中央で激突して周りに高熱を巻き力して互いに細かくなり弾け飛んでいく。弾かれた砲撃の残骸は激震と共に迷宮の天井に直撃し周囲を

粉碎しながら赤熱化した鉋物を雨の如く撒き散らしていく。

「ちくしょう！ 何だつてんだ！」

「なんなんだよ、この魔物は！」

「くそ、とにかくやるぞー！」

そこまでの事態になってようやく檜山達や永山のパーティーが悪態を付きながらも混乱から抜け出し完全な戦闘態勢を整える。傷を負っていた雫や永山も完全に治癒されて、それぞれ眼前の見えるようになったキメラに攻撃を仕掛け始めた。

雫が、残像すら見えない超高速の世界に入る。風が破裂するようなヴオツ！ という音を一瞬響かせて姿が消えたかと思えば、次の瞬間にはキメラの真後ろに現れて、これまたいつの間にか納刀していた剣を抜刀術の要領で抜き放った。

“無拍子”による予備動作のない移動と斬撃。姿すら見えないのは単純な移動速度というより、急激な緩急のついた動きに認識が追いつかないからだ。さらに、剣術の派生技能により斬撃速度と抜刀速度が重ねて上昇する。鞘走りを利用した素の剣速と合わせれば、普通の生物には認識すら叶わない神速の一閃となる。

先程受けた一撃のお返しとばかりに放たれたそれは八重樫流奥義が一“断空”。空間すら断つという名に相応しく、銀色の剣線のみが虚空に走ったかと思えば、次の瞬間には、キメラの胴体が断ち切られた。

「グウルアアア!!」

怒りの咆哮を上げて振り向きざまに鋭い爪を振るうキメラ。しかし、その攻撃は虚しく空を切る。既に雫は反対側へと回り込んでいたからだ。そして、二の太刀を振るい今度はキメラの首を切り裂いた。

「よしっ！ 今宵の菊一文字はち……絶好調ね！」

速度で翻弄し着実にダメージを与えていく雫。その後も、三太刀目、四太刀目と刀を振るい、キメラの体に無数の傷をつけていく。しかし、相手も雫の速度に対応してきてどれも浅く致命傷には遠く及ばずに雫の表情に焦りが生まれ始める。さらに、雫にとって、いや、雫達にとって悪いことは続く。

「キュワアアア!!」

突然、部屋にそんな叫びが響いたかと思うと、雫の眼前で切断されていたキメラが赤黒い光に包まれて、みるみる内に傷を癒していったのだ。香織の「周天」は、ほとんど意味がないほどに効果を落としてあるので、いくら浅い傷といえどそう簡単に治ったりはしない。雫は目を見開き、癒されていくキメラに注意しながら叫び声の方をチラリと見やった。

すると、いつの間にか、高みの見物と洒落こんでいた魔族の女の肩に双頭の白い鴉が止まっており、一方の頭が雫の方を、正確には、雫の眼前にいるキメラに向いていたのだ。

「回復役までいるって言うの!?!」

「当然だろう。後方支援は何もお前達の特権というわけじゃないんだからね」

難敵にやつとの思いで傷を与えて首を落としたというのに、それを即座に癒される。唯でさえ時間が経てば経つほど順応されて勝機が遠のくというのに、後方には優秀な回復役が待機している。あまりの事態に、思わず雫が悲鳴を上げてしまう。

「大丈夫だ雫。俺が居る!。俺はこの程度では諦めない!」

「この辺りはいいわね」

支援を受けつつ豚の化け物と戦っていたが、豚の化け物の胴体には肩から腰にかけて深々と切り裂かれた痕がついていたのだが、その傷も白鴉の一方の頭が見つめながら叫び声を上げること、まるで逆再生でもしているかのように癒されていく。

龍太郎や永山の方も同じだ。龍太郎が相手取っていた二体目の豚の化け物は腹部が破裂したように抉れていたり片腕が折れていたりしたようだが、雫が相手取っていたキメラを癒していた白鴉の頭が同じように鳴くとみるみる癒されていき、永山の相手だったキメラも陥没した肉体の一部が直ぐさま癒されていった。

「だいぶ厳しいみたいだね。どうする? やっぱり、あたしらの側についとく? 今なら未だ考えてもいいけど? 言っておくけど、こっちはまだまだ戦力が居るし、寝返った奴から借りてきた化け物もい

るんだからね」

俺達の苦戦を、腕を組んで余裕の態度で見物していた魔族の女が再び勧誘の言葉をかけてくる。もつとも、答えなど分かっているとも言おうようだが、それは当然だ。

「ふざけるな！ 俺達は脅しには屈しない！ 俺達は絶対に負けはしない！ それを証明してやる！ 行くぞ “限界突破” ！」

魔族の女の言葉と態度に憤怒の表情を浮かべた光輝は、再びメイスを振り下ろしてきた豚の化け物モドキの一撃を聖剣で弾き返すと、一瞬の隙について “限界突破” を使用する。神々しい光を纏いながら、これで終わらせると気合を入れ直し、魔族の女に向かって突進する。

“限界突破” は、一時的に魔力を消費しながら基礎ステータスの三倍の力を得る技能だ。ただし、文字通り限界を突破しているので、長時間の使用も常時使用もできないし、使用したあとは、使用時間に比例して弱体化してしまう。酷い倦怠感と本来の力の半分程度しか発揮できなくなる。だからここぞという時の切り札として使用する時と場合を考えなければならぬ。

魔物の強力さと回復が可能という事実には、このままでは仲間の士気が下がり押し切られると判断し、“限界突破” を使用して一気に白鴉と魔族の女を倒そうと考えた。

「刃の如き意志よ 光に宿りて敵を切り裂け “光刃” ！」

豚の化け物により振るわれたメイスを屈んで躲しながら、聖剣に光の刃を付加させて下段より一気に切り上げてしつかりと切断して絶命させる。その勢いを利用して縮地で接近し、白鴉を切り捨てる。

「二二「グウルアアア!!」「二二」

「なっ!？」

空間の揺らめきが五つ。咆哮を上げながら俺に襲いかかった。四方を囲むように同時攻撃を仕掛けてきたキメラに思わず驚愕の声を上げ眼を大きく見開きながら咄嗟に急ブレーキをかけたつ身をかがめ正面からの一撃を避ける。同時に右から襲い来るキメラを聖剣の一撃で切り伏せる。そして、身にまとった聖なる鎧の性能を信じて、

背後からの攻撃を胴体部分で受けて死の凶撃を耐え凌ぐ。

だが、出来たのはそこまでだった。左から迫っていたキメラの爪に肩口を抉られ、その衝撃に吹き飛ばされているところへ包囲の外にいた最後の一体が飛びかかり両足の爪を肩に食い込ませて押し倒した。「ぐうう!!」

食いしぼる歯の隙間から苦悶の声を漏らしながら、止めとばかりに首筋へ牙を突き立てようとするキメラの顎門を聖剣で辛うじて防ぐ。両肩に食い込む爪が、顎門を支える力を奪っていき、限界突破中であるにもかかわらず上手く力を乗せられず、徐々に押されていく。

「焼き払ってー!」

「^{フレア}にやあああつ!」

「

「光の恩寵よ、癒しと戒めをここに『焦天』!」

俺のピンチを見た香織が、すかさず指示を出して俺ごと攻撃させた。放たれた炎弾は真ん中で炸裂して周りを吹き飛ばす。俺は吹き飛ばされながら香織の光系の回復魔法『焦天』によって治療されていく。

「^{デイ}にやにや、^ザにやあああつ!」

「

瞬時に三つの砲撃が放たれ、キメラたちを焼き払っていく。その間に爪痕がなくなつた事で完全に回復したので戦闘を再開する。

「『天翔剣四翼』!」

振るわれた聖剣から曲線を描く光の斬撃が揺らめく空間四つに飛翔する。狙った永山達が戦っていた敵を殺した事でようやく敵は白鴉と魔族の女だけになった。なので魔族の女に向き直り、聖剣を突きつけながら睨みつける。

「残念だったな。お前の切り札は俺達には通用しなかった。もう、お前を守るものは何もないぞ!」

俺の言葉を受けた魔族の女は怪訝そうな、というか呆れたような表情を向けた。おかしい。追い詰められているはずなのに、余裕の態度を崩さない。最初のキメラ、次の豚の化け物、そして今のキメラ。その全てが奇襲であった。不意打ちばかり仕掛けて自分は高みの見物。正々堂々と戦おうとしない卑怯なやつだが、まだなにかあるのか

もしれない。

「……別に、切り札ってわけじゃないんだけど」

「強がりか？」

「まあ、強がりかどうかはこいつらを撃退してからにしたら？　こっちは、『異教の使徒』とやらの力もある程度確認出来たから、もう用はないしね」

「なにをいつ『きゃあああ！』ツ!？」

魔族の女が面倒そうに髪をかき上げながらそんな事をいい、それに対して光輝が問いただそうとしたその時、後方から悲鳴が響き渡った。

思わず振り返った俺の目に映ったのは、更に五体の豚の化け物とキメラ、そして見たことのない黒い四つ目の狼、背中から四本の触手を生やした体長六十センチ程の黒猫が、一斉に仲間に襲いかかり、永山のパーティーの一人で彼の親友でもある野村健太郎が黒猫の触手に脇腹を貫かれていた光景だった。悲鳴を上げたのは同じく永山のパーティーの一人である吉野真央だ。

「健太郎！　くそつ、調子に乗るな！」

「真央、しっかりして！　私が回復するから！」

同じパーティーメンバーである遠藤浩介が、野村を貫く触手をショートソードで切り裂き、怒りの炎を宿した眼で黒猫を睨み斬りかかる。

野村が苦悶の声を上げながら崩れ落ちたことに茫然としている吉野に同じパーティーの辻綾子が叱咤の声を張り上げながら、直ぐさま治癒魔法を発動した。ちょうど、遠藤が受けた切り傷を癒そうと詠唱を完了していたのは幸いだった。

「なっ、まだあんなに！」

後方を振り返って、いつの間にか現れた新手に光輝が驚愕の声を漏らす。

「キメラの固有魔法『迷彩』は触れているものにも効果を発揮する。

その可能性を考えなかった？　ほら、追加いくよ」

「ツ!？」

いきなり現れた大量の魔物に、劣勢を強いられる仲間。それを見て急いで引き返そうとする。そんな俺にキメラの「迷彩」効果で隠れていただけだとタネ明かしをしながら、更に魔物をけしかける魔族の女。彼女の背後から、四つ目狼と黒猫が十頭ずつ殺到する。

「くっ、おおおー！」

黒猫の触手が途轍もない速度で伸長し、四方八方から襲ってくる。聖剣を風車のように回転させ襲い来る触手の尽くを切り裂き、接近してきた黒猫の一体目掛けて横薙ぎの一撃を放った。顔面を狙ってきたので助かった。

「地の底に眠りし金眼の蜥蜴。大地が産みし魔眼の主。宿るは暗闇見通し射抜く呪い。もたらすは永久不変の闇牢獄 恐怖も絶望も悲嘆もなくその眼を以て己が敵の全てを閉じる。残るは終焉。物言わぬ冷たき彫像。ならば ものみな砕いて大地に還せ！ “落牢”！」

その詠唱が完了した直後、魔族の掲げた手に灰色の渦巻く球体が出来上がり、放物線を描いて俺達の方へ飛来した。速度は決して早くはない。今の俺達の中に回避できないものなどいない。一見、何の驚異も感じない攻撃魔法だったが、それを見た先ほど腹を触手で貫かれた野村健太郎が、血を失ったために青ざめている顔に更に焦りの表情を浮かべて叫んだ。

「ッ!? ヤバイッ！ 白崎イ!! あれを止めろお！ バリア系か吹き飛ばせえええっ！」

「りよ、了解！ シュテルちゃんお願い！」
「にゃー！」

切羽詰った野村の指示に香織が猫に頼むと、猫は障壁を展開する。灰色の渦巻く球体が障壁に衝突した。灰色の球体は、障壁を突破しようとは見かけによらない凄まじい威力で圧力をかける。猫は突破させてなるものかと、歯を食いしばりながら必死に耐えていく。

「戯けが！ 絶望に足掻け塵芥、エクスカリバーッ！」

幼い少女の声が聞こえたと同時に黒い奔流が飛んできて灰色の渦を弾き飛ばす。残り二つの奔流は魔族の女の方へと飛んでいき、他の残っていた魔物を纏めて消滅させた。後に残ったのは巨大なク

レーターだけだ。

「ちっ！ なんだい！」

魔族の周りに新しい魔物モンスターが現れるが、今度はフードを被った奴も居た。ソイツが魔族の女を抱えて移動させたようだ。

「助かったの？」

「いや、まだわからない！」

攻撃してきた方を見ると、そこには六枚の黒い翼を持った銀髪に翡翠の瞳を持つ八歳くらいの幼い少女が宙に浮かびながら紫色の十字の杖と本を持っている。

「あ、新手か？ あの翼って墮天使ってことだよな！ それって……」

「敵……なの？」

「そんな……」

「アンタ何者だい？」

「我が管理領域に不遜ながらも侵入しておきながら名を問うか、下郎」
「は？ 管理領域だって？ ここはオルクス……まさか、アンタはこの迷宮を作った反逆者の一人、オルクス……」

「違うわけ！」

「二違うのかい！」

「にや」

「む。まあ、わからぬのも仕方ないか。よく聞け、塵芥。我が名はロード・ディアーチェ。この大迷宮を支配する王である」

こんな少女がこの大迷宮を支配する王だって？ そんな馬鹿な。いくらなんでもありえない。幼い少女ができるわけがない

「その管理者様がわざわざ出てきたって事は何か有るのかい？」

「決まっておろう。邪神の手業者よ、貴様等を捕らえて情報を引き出すためにきた。精々、我を楽しませてみせよ」

「はっ、面白い！ やってやろうじゃないの！」

「その心意気やよし！ 我が前にひれ伏させてくれる！」

「ちよつと待ったアアアアアッ！」

「む！」

声が聞こえた地面から植物が生えてきて、頭に花を持つ少女が現れ

た。

「ヨーキか。どうした？」

「王様がいきなり出るんじゃないわよ！ 雑魚狩りは私達の役目！
アンタは大人しくしてなさい！」

雑魚狩りだと!?

「だが、ヨーキよ。あのローブ姿の奴は汝では死ぬぞ」

「え？ マジで？」

「マジだ。故に我が相手をしようとしたのだが、そうか。汝がしてく
れるというなら大人しく……」

「すいませんでした！ お願いします王様！ アタシ達はそれ以外の
雑魚を相手します！」

「よかろう。巻き込まれんようにしておけよ」

「イエッサー！ 行くぞ野郎ども！ 苗床を確保する狩りの時間
だああっ！」

無数の植物が現れて俺達に襲い掛かってくる。同時に空で迷宮の
王と名乗った子とローブ姿の奴が行動を開始した。

「紫天に吼えよ、我が鼓動、出よ巨重ジャガーノートツ！」「レッツ！」

規格外の攻撃が上で炸裂し、大迷宮の床や天井が消し飛んでいく。
「遠藤。アンタ、離脱してこの事を伝えなさい！」

「だ、だけど……」

「いいから早く！」

「わ、わかった。すまん！ 必ず援軍を連れて戻る！」

遠藤が来るまで、俺達は生き残らねばならない。だが、こんな化け
物共を相手するには俺の力は低すぎる。どうすればいい。どうすれ
ばいいんだ！

「力が欲しい？」

考えている間も空は即死級の光線が乱舞し、地上では魔物^{モンスター}同士の
戦いが激しく行われていく。無数の蔦が伸びて来て俺達や魔物^{モンスター}を拘
束していく。捕らえられた豚の化け物は耳や身体中の穴から植物が
入れられて少しすると身体が痙攣して頭に花が咲いて植物の側とし
て参戦して味方だった魔物^{モンスター}を倒していく。

「あ、アレって……」

「そんな、私達、あんなことをされるの……?」

「いくら女性型の魔物だつていえど、惨いな」
モンスター

くそつ、皆を守るにはどうしたら……

「力が欲しいならあげるわよ?」

「あんなのになるくらいなら死んだ方が……」

「駄目だよ! こんなところで死ねない!」

「香織……確かにそうだね」

「ええ、そうよ。それに植物ならシュテルちゃんが居るしどうにかなるわ」

「にゃ!」

「ありがとうございます。お猫様!」

「だが、あつちは無理じゃね?」

確かに植物はどうにかなるかもしれない。しかし、空で戦っている二体の化け物は無理だ。どうにかして対策を……

「もつと願いなさい。ほら、とつても素晴らしい力をあげるわよ」

「というか、あの戦っている方つて見覚えがあるんだけど……香織はどう?」

「私もあるよ、雫ちゃん」

「ああ、俺もある」

「相手は魔族の手駒だぞ。見覚えがあるはずが……」

上空を見ると、フードが激しい戦いで破けて戦っている奴の姿が見えた。そいつは銀色の髪の毛をした少女で尻尾に怪物の顔がある。

「清水が使役していたレ級だったよな?」

「ああ、間違いない。って事は清水が魔族についたのか」

「アイツ! 絶対に許さない!」

「でもどうするんだよ。あんなに強かったら俺達じゃ勝てねえつて。これはもう魔族に……」

「黙るんだ! そんな事、あつていいはずがない!」

清水! なんて裏切ったんだ! 何故だ!

「坊やだから?」

さつきから声が聞こえる。気のせいだと思っていたが……

「勇者様。私は女神です。今、貴女の心に話しかけています」

女神様！ 本当に女神様なのですか！

『はい。そのような者です。危機に陥っている貴方に力を与えようと思いません。いいですか、この事は誰にも、そう誰にも言ってはいいけません。また、力には代償が伴います』

『構いません！ アイツ等に勝てる力を！ 皆を守れる力をください！』

『うふふふ、わかりました。貴方に力を授けます。一瞬だけ意識を失いますが、問題ありません。目覚めた貴方は力を手に入れています。その力で私の勇者様王子様になってください』

『任せてください！』

『頼みます。術式展開クスクス。もうすぐ会えるわ私の王子様♪』

女神様の声が聞こえなくなった瞬間、意識が闇に閉ざされた。次に目覚めた時、俺はかつてないほどの力を手に入れていた。

デイアーチエ

紫天の書と私のデバイスであるエルシニアクロイツを使いながら5つの魔法陣を展開。それぞれの魔法陣から屈折する暗黒のエネルギー弾を同時に飛ばし相手に降り注がせる。その後、巨大な爆発を起こし相手押し潰すのだが……流石に殺すのは不味いので爆発まではさせないし、二つの魔法陣からしか攻撃はせん。

それでも相手は私のジャガーノートを荷電粒子砲のような物を尻尾から放って相殺してきた。同時に不気味な小さい飛行物体が複数飛んでくるので、私も誘導性のある高速の魔力弾、エルシニアダガーを撃ち出して迎撃する。

「レッツ！」

ミサイルと砲弾が飛んでくるが、それらも連射したエルシニアダガーで迎撃すれば容易く対処できる。相手の動きは単調であり、力押し部分はまだまだある。故に私の敵ではない。

牽制として直進的な軌道で放たれる砲撃魔法アロنداイトを放つ。相手は即座に回避するが、そこで足が闇の枷によって囚われる。

「レッツ!?!」

「もつと周りを警戒するのだな」

仕込ませて置いたバインドで動きを止め、八本の魔力刃を生成して相手を包囲。そこから杖を振るって指示を出し、四方八方から襲撃させる。動けないのだから突き刺さるしかあるまいて。

「レエツ！」

「なんとっ！」

強引にバインドを足ごと破壊し、その反動で逃れると同時に回転することで尻尾を振り回し、ドゥームブリンガーの魔力刃を粉碎した。

「レレッツ！」

「なるほど、この程度では止められんか。面白い！」

杖を掲げて複数の魔法陣を展開。そこからエルシニアダガーを放つと同時にアロنداイトも放つ。相手は浮ぶ小さな物体を放って迎

撃してくるが、そこをアロンドイトで消し飛ばして本体を狙う。本体は回避し、後ろの壁がアロンドイトによって貫通し、大きな穴を作る。「レエエエツ！」

相手の放ってくる荷電粒子砲をシールドを斜めに展開する事で受け流し、お返しとばかり濃密な弾幕を返してやる。捌ききれない数の攻撃に自分に命中するものだけを対処し、事無きを得る。だが、それは悪手でもある。

「ちよっ、ちよっどっ！ 私に流れ弾が来てるわよお！」

「れえ……」

「くはははっ！ もっと踊らせてやるぞ！」

「王様っ！ 楽しんでるのはわかるけれど！ このままだと迷宮がやばいから手加減してよね！ 後、こっちがピンチっ！」

「むっ？」

周りを確認すると、確かに我と相手の攻撃によって穴がそこら中に空いている。ほとんど我が開けた物ではあるのだが、問題はない。後で直せばよい。それよりも、ヨーキのところだ。

ヨーキが相手をしているのはオルクス大迷宮に侵入してきた一行だ。本来なら放置し、奈落へと入ってきたら対処するはずであった。だが、メンバーの中に南雲ハジメの女である白崎香織とその親友である八重樫雫が居るので話は別だ。二人は兄様や鈴、恵里、優花の友人でもあるのだから助けるのは当然のことだ。

故に監視をしていたら、魔族の女も侵入してきた。こちらでさっさと処分してもいいのだが、それでは面白くない。奴等についてはユーリから情報を貰っていた。だから、少しばかり現実を知ってもらうためにあえてぶつけてみたのだが――

「この土壇場で覚醒か？」

――本来ならヨーキ達に勝てるはずがない。だというのに現状はヨーキの方が押されている。あやつには全力で殺さないように戦えとは伝えているのだが、それでも普通なら勝負にすらならない。

しかし、現状では天之河光輝が光る聖剣に風を纏わせながら、魔力を放出して加速して本来なら斬れないはずの蔦をまとめて斬り裂き、

ヨーキの子供を左右に切断する。

「ああ、私の子が！ コイツ、許さない！」

「許さないのはこちらだ！ よくも、よくも香織や雫達に酷い事をしたな！」

無数の種を弾丸の様に放ちながら、牽制するヨーキと天之河光輝の戦いを見ながら、白崎達の方をみると服が破られて白い液体がぶつかられている。本人達は身体を隠しながら頬を上気させておるようだ。

「うむ。ギルティ」

「何故に！ ひやわっ！ 掠ったっ！ 今掠ったからあああっ！」

「やれやれ……」

このままではヨーキが殺されるので、我が飛び込んで天之河光輝の聖剣をエルシニアクロイツで受け止める。同時にアロンダイトを近距離から放つと、即座にまるで予測していたかのように地面を魔力で爆発させて下がりおった。

「しかし、避けて良かったのか？」

「っ!? 貴様ああああああああああっ！」

天之河光輝が避けた先には動けない白崎香織達が居る。アロンダイトの砲撃を受けて全滅するだろう。もちろん、相手には知られていないが、ちゃんと非殺傷モード故に魔力ダメージしか与えられんように設定を変更した。

「レッ！」

魔物娘が荷電粒子砲を放ち、アロンダイトを相殺して白崎達を守ったかと思うと、天之河光輝にミサイルをぶっ放しおった。

「甘いっ！」

瞬時にミサイルを切断し、魔力放出を使って魔物娘に接近し、その首を刎ねる為に聖剣を閃かせる。魔物娘が尻尾の口で聖剣を喰わえて防ぎ、激しい金属音が響く。

「ドゥームブリンガー」

当然、我を無視する愚か者共に攻撃を加える。天之河光輝は背後からの攻撃に対応しようとするが、聖剣を掴まれたままであるためにそ

のまま背中に突き刺さった。

「背後からとは卑怯だぞー！」

「馬鹿か貴様。戦いの最中に背中を見せるのが悪いに決まっておろ
う」

「ふざけ……」

「レっ！」

「があっ！」

魔物娘が話している最中に拳を天之河光輝の顔面に叩き込む。天之河光輝はどうか避けしたが、同時に腹へと放たれた二発目の攻撃には避けらずに体勢が崩れる。そこを尻尾で振り回し、何度も何度も地面へと叩きつける。天之河光輝は地面に足をつき、改めて力を入れる。

「レレッ！」

尻尾の口の中に光が集まり、荷電粒子砲がゼロ距離から放たれようとする。我もアロンドイトを準備して纏めて貫く用意をして放つ。

「限界突破！まだ！ 光翼天翔！」

聖剣が光り輝いて光の剣撃を放つ。荷電粒子砲と互いに爆発して両者が弾き飛ばされてこちらへと飛んで来るのでアロンドイトの砲撃を受けて終わる。そのはずだった。

「限界突破！なめる、なああああっ！」

身体を反転させながら、聖剣を一振りして我のアロンドイトを切断し、そのままこちらへと斬撃が飛んで来るので、ヨーキを掴んでから飛んで回避する。

「限界突破の重ね掛けか……」

「えっと、限界突破って身体能力が三倍になるんだっけ？ つまり六倍？」

「たわけが。三倍されたのが三倍されるのだから元から計算して九倍だ」

「反則じゃない！ チート反対！」

「うむ。しかし、代償は支払われる」

天之河光輝の身体中から血管が破裂して血液が噴き出すが、身体の

方が光って瞬時に治療されていく。本人は顔を血塗れにしながらも笑いながらこちらへと突撃してくる。

「安心しろ。俺が君をしつかりと更生させてみせる！ だから、大人しくするんだ！」

「王たる我を愚弄するか……」

「あの、王様？ 殺したら駄目だからね？」

「知らん。良からう。塵芥が、身の程を教えてくれる！ ヨルムンガンド！」

蛇のようにうねる暗黒砲撃を複数放ち、蛇の群れによる一斉攻撃を行う。ヨーキと我等以外の全てを対象に放ち、纏めて蹴散らしてくれる！

「まだだ！ まだ先へ行ける！」

「いくらなんでも無理よ！」

「駄目ええええつ！」

「うおおおおおおおおおつ！ 限界突破!! 万象切り裂く光、吹き荒ぶ断絶の風、舞い散る百合の如く渦巻き、光嵐となりて敵を刻め！ 天翔裂破！」

「レエエツ！」

光の刃を無数に展開させてヨルムンガンドを撃ち落とす天之河光輝と砲撃により撃ち落としながら魔族の女を連れて逃げる魔物娘。だが、どちらも想定通りである。

「貴様等が強ければ強いほど、我には勝てぬ。ダークドレイン」

敵陣を闇のオーラで襲い、攻撃と吸収を同時に行う。無数の手に捕まれてエネルギーを吸い取られて全員が膝をつく。これにより、この場に居る全員から力を奪い取ることができた。

「みなぎるぞパワーー！ あふれるぞ魔力ッ！ ふるえるほど暗黒ウウツツ!!」

「うわああ、テンションマックスじゃない、王様……」

「さあ、絶望に足掻け塵芥！ エクス、カリバアアアアッ！」

三本の極大砲撃を放ち、通路を、迷宮の一部ごと完全に破壊して殲滅する。ついでに残しておいたジャガーノートも使って火力の倍率

を叩きあげてやるわ！

「死にさらせ、塵芥よ！」

「女神様！俺に力を！ 全て遠き理想郷！」

天之河光輝以外から別次元の力が注ぎ込まれて結界が展開され、我の攻撃が全て弾かれた。弾かれた攻撃は周りに散弾のように降り注ぎ、土埃を発生させる。そこで我は我が開けた穴から新たな乱入者が入ってきたのを確認した。

「っ!? 檜山伏せろ！」

「ひっ!?」

土埃で影が浮かび上がった存在が居た。そやつは檜山に手に持った大型のナイフを振り下ろす。天之河光輝の指示で伏せたおかげか、一撃を回避できた。しかし、もう片方の手から軌道を修正して振るわれる大型ナイフは間に合わない。このままでは首が切断されると思われたが、そこに地面にクレーターを作りながら突撃してきた天之河光輝が聖剣を潜り込ませたことによつて火花を散らせながら防いだ。

「ちっ」

バックステップで下がる彼女に天之河光輝が剣を振るう。振るわれた聖剣を空中で大型ナイフをクロスさせて受け止めた彼女はそのまま下がり、濃霧を発生させる。

「ふふふ、任せておかあさん」

「わたしたちが解体してあげる」

「だから、安心してね？」

濃霧の中で無数の子供達の声が聞こえてくる。同時に空間が歪み、いつの間にか石畳で出来た町の中に我等は居た。

「此よりは地獄。 〃わたしたち〃 は炎、雨、力——殺戮を此処に……」

「子供が相手だと！ おのれ卑怯な……」

天之河光輝が無数の子供達に攻撃されている中、奴は子供を斬れないように防ぐだけだ。その間に侵入者は腰を抜かせている男の背後に音も無く立ち、腰に差している鞘から抜刀する。

「だめっ！」

「くっ！」

白崎香織が男を突き飛ばし、八重樫雫が滑り込んで同じく抜刀して刀を弾く。

「邪魔を、するなっ！」

「駄目だよ！ やらせない！」

「誰かわからないけれど、もう誰も殺させはしない！」

八重樫雫と彼女が戦いだったが、彼女の方は流石に手加減して怪我をさせないようにしているので時間が掛かっている。

「ねえ、どうするの？」

「どうもこうもあるまい。遊びはデウスエクスマキナによって強制終了される。それだけだ」

「え？」

我が上を向くと、ヨーキも一緒に分厚い霧に覆われた空を見上げる。すると空が割れて巨大な、巨大な顔が覗き込んでいた。次の瞬間、拳が降って来てこの世界を破壊した。一瞬だけ視界が真っ暗になり、次の瞬間には元のボロボロとなって場所、奈落へと直通しそうな深い穴が開いたオルクス大迷宮地上部分に戻っていた。

第72話

遠藤の話を受けて檜山が居る事を知った優花がオルクス大迷宮へと突撃していった。おそらく、優花は自分が殺す前に他の誰かに殺される事を恐れたのかもしれないが、唯一の救いは優花がヘイゼルの姿をしたまま突撃したことだ。これで身バレは防げる。もっとも、遠藤に対して口止めもしないといけない。

どちらにせよ、俺はキングプロテアと鈴、美遊、ハジメやユエ、シア、ティアと一緒に遠藤の先導でオルクス大迷宮を進んでいる。

「遠藤。俺の事はマーナと呼べよ。色々と神殿や王国がやらかしてくれているから、生きている事は内緒で頼む。バラしたら、殺すからな？」

「そうだよ。他の人に教えたら駄目だからね！」

「わ、わかったよ！ 確かに危ないもんな」

遠藤も進みながら説明するとしつかりと納得してくれた。そのまま突き進んでいくとオルクス大迷宮が何度も揺れる。

「地震か？ 遠藤、今までオルクス大迷宮でこんな事はあったか？」

「今までこんな事はなかった！」

「さ……マーナ。どういう感じだ？」

「おそらく、戦いの余波だろう」

「これ、放っておいたら迷宮が崩壊するかもね」

「それは……」

話ながらそれぞれ好き勝手に現れる魔物モンスターを蹴散しながら進んでいく。ハジメはミュウを肩車しているし、その隣をユエとシアが居て後ろにはテイオがついている。

俺の方はキングプロテアを肩車しながら、鈴が隣を走っている。キングプロテアは変身しているので少女姿であり、重量も魔法でかなり減らしているから物凄く軽い。俺とハジメの頭の上でミュウと楽しくお喋りをしていたりもする。

「ベヒモスだが、どうする？」

「ハジメが処理してくれ」

「了解だ」

現れたベヒモスをハジメが射殺してさっさと進んでいく。本当はここで立ち止まって鈴達と感慨に耽るのもいいかもしれないが、今は優先すべき事があるので無視だ。

「皆さん！」

「鈴」

「まっかせて〜！」

通路を走っていると、気配を感じたので遠藤の服を掴んで瞬時に後ろに下がり、鈴が張った結界の中に退避する。

「何するんだー！」

「少し待っ」

「ですね。このままだと死んじやいますよ〜」

「うむ」

ユエとシア、テイオの言葉に続くように地面の下から黒い光線やら白い光線やらが飛んでくる。それらは全て鈴の結界によって防がれて事無きを得た。

「派手にやってんな」

「だよね〜！」

「……おつきい、穴……私が入っても大丈夫……？」

『どうやら下の階層で戦っている人達の流れ弾みたいです。優花さんも先に向こうに出来た穴から下へと向かったようです』

美遊が解析してくれていたみたいで、ヘイゼルの行動がわかった。これを使わない手はない。

「ハジメ。どうやら直通ルートができたようだ。ヘイゼルもこれで進んだようだ」

「なら決まりだな」

「GOGOなの！」

「……行き、ます……」

「あいきやんふらいー！」

全員で飛び降りる。遠藤も含めて結界を移動させて大穴へと落ち

ていく。同時に向こうからも攻撃がやってきて、遠藤達は悲鳴を上げるが、鈴の神獣鏡シエンシヨウジンの前では閻系統の攻撃など意味をなさない。

そのまま降下していると、地下深くに霧が立ち込めているのがわかった。おそらく、ヘイゼルの使ったジャック・ザ・リッパーの力だろう。

「このままだと入れないよ」

「突破は困難か？」

「うん、ちよつと無理かな」

「固有結界を壊すのはそれ相応の力が必要だろうし、無理だろ」

「ならどうするんだよ！ この中に皆が居るんだぞ」

「わかっている。マーナ、やれ」

「わかった。プロテア、頼む」

「……はい。マスターさんのために頑張ります……」

「そんな小さな子ができるのか？」

「小さくないです」

結界から出たキングプロテアが俺の方を向いてくるので、拘束を解除する。すると彼女が変身魔法が解除されて巨大化していく。

更に封印していたヒュージスケイルが発動してレベル上限を撤廃。グロウアツプグロウ（EX）を使って常時経験値を収集していた膨大な経験値を即座に使って際限なく巨大化していく。

「見よ！ これが召喚士の実力だ！」

「まじか……巨人じゃないか」

「えいつー！」

驚いている遠藤を置いて霧も含めて取り込んでいき、霧の中に穴を開ける。そして、降り上げた拳を叩き込む。これによって固有結界が外側から粉碎された。普通ならありえないが、彼女は女神の力を複数集めて合成した存在であるため、可能だ。

ジャック・ザ・リッパーの力を優花が使って展開した結界を粉碎すると同時にキングプロテアの姿を変身魔法で変化させてから降り立つ。

霧がなくなり、内部の空間が元に戻ったので、目の前に驚いた複数

の者達が現れる。そんな連中の中心に降りたので注目がかなり集まる。まあ、近くに空いた巨大な穴のせいかもしれないがな。

「ちっ、また乱入者かい！」

「ふむ」

「誰だ？」

「レ？」

何故か居る戦艦レ級と魔族の女。それとここの管理を任せているデイアーチエにその配下であるヨーキ。俺達が救助しに来た目標である白崎と八重樫。他にもクラスメイト達や天之河が聖剣を構えて立っている。そして、ヘイゼル姿の優花。

「援軍を連れてきたぞ！ 南雲と谷口だ！」

遠藤はちゃんと俺の言葉を覚えてくれていたみたいでよかった。すぐ後ろで首に手を当てて置く必要はなかったようだ。

「南雲君！」

「よう。久しぶりだな。無事か？」

「うん！ 良かった！ 会いたかったよ！」

「おっと」

白崎がすぐにハジメに抱き着いている。ハジメは少し悩んだ後、白崎に自分のコートをかけてから抱きしめかえした。

「しずしず！」

「鈴、久し……ぶり……ちよっ！」

鈴が八重樫を自分の服を脱いでかけてやってから胸元に抱き着いていた。驚いている者達を他所に動く者もいる。それは敵側の存在や別の者達だ。

「嘘だ！ 南雲は死んだんだ！ 生きてるはずない！」

檜山の言葉に全員がそちらを向くと、ヘイゼルが檜山にナイフを投擲する。天之河が瞬時に剣の刃を飛ばし、弾くがその時には天井に移動していたヘイゼルが天井を蹴って加速し、一刀両断しようと襲い掛かっている。だから、俺はキングプロテアを掴んでヘイゼルの方へと投げる。

「っ!？」

ヘイゼルは咄嗟に刀をキングプロテアに向けて斬るが、彼女の頑丈EXな身体で軽く弾く。その上、ヘイゼルを持ち前の怪力EXによって捕獲する。

「くそっ、死ねっ！ 切り裂け闇傑の剣ダークブリンガー！」

そんな状態でも檜山に容赦なく魔法を放つ。その魔法を天之河が防ごうとするが、ここにはヘイゼル以外の敵もいる。

「やっちまいなっ！」

「レッ！」

レ級の雷撃、航空、砲撃が一齐に放たれる。その火力はすさまじく、天之河が飲み込まれていく。しかし、奴は驚いた事に絶技と呼ぶほどの剣技を持って全てを斬り落としやがった。爆風の中、一步も引かずに檜山や白崎達を守る姿は確かに勇者に見える。そんな彼等以外にも当然、彼女以外にもディアーチエも動く。

「撤退だ！」

「了解！」

ディアーチエが選んだのは即座の撤退。まあ、ディアーチエからしたら、俺やハジメ達が来た時点で彼女は敵対を避けるだろう。そう思っていたのだが、しっかりと疑われないための置き土産は放っていった。

「ちっ！ こっちで撃ち落とす！ ユエ、シア！」

「了解。撃ち落とす」

「やっちやいますよ！」

「鈴が結界を張るから防御は任せて！」

「俺も防御を担当する」

ディアーチエの放った巨大な魔力弾が降り注ぐ。それをハジメとユエ、シアが弾いていく。どうしても無理な奴は鈴の結界で防ぐ。こちらも複数の魔法を放って迎撃を行っていく。その間もレ級と魔族の女の攻撃を天之河が身体中から血液を噴き出させながら戦っている。

白崎は全員の治療を行いながら、皆を集めていつているのでこちらも攻撃をしても問題ないだろう神喰でチャージを行う。

「プロテア、ヘイゼルを連れてきてくれ」

「……はい、わかりました……」

「離してっ！ アイツを殺せないっ！」

ヘイゼルがキングプロテアに引きずられてくるの。無事にこちらへと連れてきてくれたので、ヘイゼルの事は一先ず置いておく。

『チャージ100%。完了しました。何時でも撃てます』

「カードリッジ、ロード」

『チャージ140%』

「スターライトブレイカー、ファイヤー！」

魔力が籠った葉莢が何発も排出され、過剰な魔力で容赦なく強化されたスターライトブレイカーを通路に放つ。射線上に勇者が居ても無視する。逃げ場無しの砲撃にこちらの攻撃に気付いた天之河達は何かをしようとするが、無意味である。

天之河は聖剣で斬り裂こうとし、レ級は砲撃でどうにか矛先をずらそうとしたがすべては無意味だ。じゃんじゃんカードリッジをロードして追加の魔力をこれでもかと注ぎ込む。

纏めて吹き飛ばし、残ったのは倒れたレ級と魔族の女。そして立っている天之河だけだった。まあ、それはいい。今の中に魔族の女とレ級に関してはディアーチェに回収させておく。これで魔族の女とレ級は消滅したように見えるだろうしな。

「お前ッ！」

「安心しろ。邪悪な存在にしか効かない聖なる光の攻撃だ。これが効くというのなら、お前は邪悪なる存在という事になる」

「そんなわけないだろう！ 俺は勇者だぞ！」

「それならば気にする事はない」

もちろん、ただの出鱈目だ。だいたい、俺に取つての邪悪な存在なのだから、天之河の定義とは別だ。それに天之河には散々酷い事をされたのだから、これぐらいは問題あるまい。

「えっと、そっちの人は……ユーリちゃんに似ているけれど」

「それに鈴ちゃんが生きてたのなら……」

永山達が話している。天之河や龍之介達はヘイゼルの方を警戒し

ていた。いや、天之河はさつきと白崎や八重樫の方へ向かっていった。そんな中、俺は彼等を見殺しにしてキングプロテアとヘイゼルⅡ優花の方へと向かう。優花は相変わらずしっかりとキングプロテアに拘束されている。

「ヘイゼル」

「……退いて、アイツを殺さないっ！」

「駄目だ。感情に任せて殺すと後悔する。やるなら……もつと苦しませないとな？」

「……でも……アイツを前にすると……」

「それでもだ。それにお前は俺のなんだ？ 妻か？ 奴隷か？」

「……私は、ご主人様の……奴隷……」

ここで妻と答えてくれるのが一番いいが、やはり呪縛からはまだ逃れられていない。愛ちゃん先生との約束もあるし、ある程度は見逃して苦しみもがく姿をしつかりと見せてから殺す方がいいだろう。生かすにしても手足を無くして惨たらしい人生を過ごしてもらってもいいかもしれない。もしくは幸せの絶頂になったところで叩き落とすのかな。

「だったら、俺の命令には従え。自分が奴隷だと思わないなら」

「わかった……従うから捨てないで……」

「捨てる事だけは絶対にならない。もう大丈夫だ。プロテア、離してやってくれ」

「はい」

優花を起こしてやると、立ち上がった彼女は一度檜山を睨み付けながら後、刀を鞘に戻す。俺は優花を抱きしめて背中を撫でる次第に身体から力が抜けて身を預けてきた。

「お前っ！ 彼女は嫌がってるじゃないか！ 離してやれ！」

「はっ」

天之河がこちらにやってきた。どうやら、檜山を睨み付けていた所に俺が抱きしめた事を嫌がっていると思っっているようだ。

「嫌か？」

「全然嫌じゃない」

「だそうだ」

「嘘だ！ さっきの顔はそんな顔じゃなかった！ それにその首輪はどういう事だ！」

「ヘイゼルは俺の奴隷だから、首輪をしているだけだ」

「ふ……」

「あの、マスター。わたしも撫でてください。頑張りました……よう？」
「つと、そうだったな」

抱き着いてきた拘束されまくっているキングプロテアの頭を優しく撫でてやる。するととても嬉しそうに顔をほころばせていく。

「そんな小さい子にまで！」

「おい、止めておけ」

「南雲！ 何故邪魔をするんだ！ いくらなんでもこんな小さな子にこのような事をさせている奴を庇うなんて見損なつたぞ！」

「そもそも……いや、なんでもない。ソイツの拘束具は理由があるからつけているだけだ。封印装置みたいなものだ。外せん」

「そんな事で俺は騙されない！」

皆の視線が集まってくるが、キングプロテアは気にしないし、俺は無視する事にしてヘイゼルを連れて移動する。

「鈴、さっさと戻るぞ」

上着のコートを脱いで薄着になった鈴に着せてから周囲を確認する。白崎はハジメのコートを嬉しそうに着ながら、ユエと火花を散らしている。八重樫はそんな白崎をなんともいえない表情で見守っていた。遠藤がガチで俺の方を震えながら見ているし、他の連中も似たような感じだ。

「戻るの？」

「ああ。他の連中が待っているし、商売の準備をしないと」

「それもそうだね」

「ハジメ。修理しながら戻ってこれるか？ このままでは崩落の危険がある。宿場町にまで被害が及ぶ可能性が高い」

「ああ、構わない」

「待て！ 話はまだ終わっていない！ だいたいそっちの彼女は何故

檜山を襲ったのか、理由を説明してもらっていないぞ！ 彼女が奴隷だというなら、その理由はお前にあるはずだ！」

「……確かにその通りだな。だが、本人は恨まれる覚えがいつぱいあるんじゃないか？ 知らんけど」

「そうなのか？」

「そ、そんなわけないだろ！ 俺は何も……」

「やはりそうか！ どういうつもりか説明してもらおうか！」

「面倒だから断る。だいたいこちらの説明をまともに聞くつもりもないだろう」

「そんな事はない！」

鬱陶しい。もう……殺すか？ いや、ディアーチエから送られてきた報告書を見る限りはかなり強くなっているみたいだし、面倒だ。ご都合主義みたいに覚醒しやがったようだし……これだから主人公は嫌になる。

『あの、そのご都合主義ですが……あの人が関与しています』

『あの人？』

『沙条愛歌です。彼から彼女の力を感じます。本当の事はわかりませんが、竜の因子を植え込んで親和性を上げた状態で、インストリアル夢幻召喚して置換を発動しています』

沙条愛歌が、天之河に竜の因子を与えてインストリアル夢幻召喚して更に置換までやっているとなると、もう狙いはわかりきっている。

「お前はこれから苦勞するだろうが、精々頑張れよ。それとありがとう」

「は？ 何を言っているんだ？」

「今はわからなくていい。いや〜清々しい気分だ。よし、ただ無料で護衛もしてやろう」

お礼を言ってから、キングプロテアを肩車して神喰をサーフボードのようにして疲れている奴等を乗せていく。俺自身も乗って移動する予定だ。鈴も楽しそうに乗ってくる。

「パーミュウもアレのりたいの〜」

「よくし、乗るか。おい、一枚寄越せ」

「はいよ」

ユエと白崎が当然のようにハジメを挟んで乗るので、天之河の方は何か言っているが、白崎が「私が乗りたいから乗っているの。光輝くんには関係ないでしょ」と言つて、天之河が何時もの通りに「そんな事はない！」と言っているが、ハジメが無視して進みだしたので慌てて追ってくる事になる。

『放っておいていいんですか?』

『いいだろ。しばらくしたら静かになるんだからこれでいい』

『わかりました。でも、オルタの方が夢幻召喚インストールされていたら知りませんよ?』

『愛歌が間違えるはずないだろう』

『それもそうですね』

入口を守っていたはずのメルド団長がこちらへと向かってやってきていたので彼等とも合流して地上に戻る。外に出ると多数の兵が待ち構えていたが、俺達の姿を見るとほっとした表情をして解散を命じる。

「今日はご馳走を食べるぞ! プロテアとハイゼル、鈴は何かいい?」

「……オムライスがいいです……」

「私はなんでもいい。それとオムライスなら作れるから、作ってあげる」

「……やりました……」

「おめでとう〜! 鈴はね〜パンケーキがいいかな!」

「作れるか?」

「ホットケーキなら可能。ただ蜂蜜は魔物モンスターが作った物になるから、高い。使っても大丈夫?」

「問題ない」

そんな話をしていると、天之河が奴隷である二人についてしつこく言いに来るが、こっちへとやってくる一団を見てすぐにそちらに駆け寄る。

「「おかえりなさい」」

「ただいま」

「もどつたよ〜！」

わざわざ迎えに来てくれたユーリと恵里、詩乃と合流した。彼女達は完全武装していたので、これから迷宮に籠るつもりだったのかもしれない。

「恵里！ 君も無事だったか！ 良かった！」

「うん。無事だったよ」

そんな話を他所に大人モードになったシユテルがこちらへとやってきた。

「会長。宴の準備は終わっています。どうぞこちらへ」

「わかった。それじゃあ、俺達は行く。ハジメ、お前達はどうする？」
「依頼は完了した。そっちに合流する。もっとも、俺達は飯を食ったら寝るがな」

「わかった。こつちもそれでいい」

「というわけでここで解散だ。まあ、再開を喜ぶのは明日にしてくれ。俺達はここについてすぐにお前達の救出依頼を受けた。疲れが抜けてないからな」

ハジメの言葉に皆が納得をした。一部、天之河は納得していなかったが、反動がきたのか普通に倒れた。限界突破の重ね掛けとか、普通に代償は大きい。現在進行形で身体が置換されているのだから当然ともいえる。白崎が治療しようとしたが、身体が勝手に治っていくので診察だけ行った。その結果、問題ないということだったので宿に運び込んで寝かせるだけとなった。

「あ、宴だけど来たい人は来ていいよ〜」

鈴の言葉に女性陣は全員。男性陣は一部を除いて参加する事になった。檜山はヘイゼルを見てから、天之河を見ている事にした。そういうわけで彼に任せて盛大に宴を楽しんだ。ギルド長が何か言おうとしていたが、次の日に持ち越すことにした。そして、次の日……彼等は衝撃の事実を知る事になる。愛ちゃん先生やついて行った相川達が全員死亡し、それを行ったのが魔族側に寝返った清水だということだ。死んだと思っていたクラスメイトとの再会から一転して絶望へと包まれた。

「助かる」

八重樫からしたら俺と沙条の事は納得ができないのだろう。まあ、彼女からしたら納得はできないだろうな。大切な親友が複数の女と交際するような奴と一緒にいるのだから。

「それでどうするんだ？」

沙条の言葉にこれからの事を考える。既にホルアドには用はない。そもそも通り道だから寄り道をしただけなのだから、当初の予定通りにすればいい。

「ああ、それならミュウを親元まで届けるために海上の町エリセンまで行こうと思ってる」

「なるほど……明日の早朝に出発する方がいいな。アイツが起きる前の方が面倒はないだろう」

「そうした方がいいだろうな」

沙条の言う通り、香織を連れて行くとなると天之河が鬱陶しい事を言ってくるだろう。アイツが起きる前にさっさと出るべきだな。

「ユエ達もそれでいいか」

「大丈夫。ハジメが居ればそれでいい」

「私もですよ」

「こちらも問題はないのお」

「ミュウも」

「もちろん、私もだよ」

「そういう事だ。明日の朝、出発する。見送りはいい」

「了解。それじゃあ、ここらで解散するか。今夜はお楽しみだろうしな」

「おい」

沙条の言う通り、別れた後は寝室に移動する。当然のように香織もついてくる。普段ならユエ達もついてくるので、不思議に思ってた方を見る。何とも言えないような表情をしたユエは扉を閉めようとしている。

「今日は独り占めにさせてあげる。でも、今日だけだから」

「ありがとう、ユエちゃん！」

「明日からは私達も混ぜてもらいますからね！」

「ミュウ、パパと一緒に寝たい……」

「今日は駄目じゃ。我等と一緒に寝よう」

「うゝ」

「そうじゃ、プロテアと一緒にならどうじゃ？ 明日から離れ離れに

なるしの」

「わかったの。じゃあ、一緒に寝るのゝおやすみなさい、パパ！」

「ああ」

なんだか、ミュウが取られた気がして嫌だが、これは仕方がない。それと沙条に連絡してキングプロテアは今日、別に寝させるようにしておこう。

「ハジメ君。それじゃあ……私を貰ってください」

ユエ達が扉を閉めたのを確認して振り返ると、服を脱いだ香織がベッドに座ってこちらに両手を開いて差し出してくる。

「本当にいいのか？」

「うん。ハジメ君がいいの……いいえ、ハジメ君じゃないと駄目なの。だから……ね？」

「ああ、わかった」

「大好きだよ」

「俺は……」

「いいの。必ず私を好きにしてみせるから」

「それでいいのか？」

「うん。もうユエちゃんとも話についてるし、絶対に逃がさないからね」

「……わかった。だが、やっぱり違うな」

「？」

「香織、俺の女になれ」

「……はいっ！」

俺から口付けを交わし、互いに愛し合っていく。気が付けば長い時間が過ぎていて、嬉しそうで幸せそうな香織を抱きしめながら共に眠りについた。

早朝、起きてから身体を拭いて身だしなみを整えて外に出ると、ユエ達が抱き着いてきた。

「これで同じだよ、ユエちゃん」

「ん。負けない。私が勝つ」

「受けて立つよ」

色々と準備をして宿場町ホルアドから海上の町エリセンへと向かう。装甲車で行く事にしたのだが、その席順で色々と問題があった。そちらはどうか話し合いで解決できたので良かったとは思うが、この辺りの事は全て話し合いが何かで問題無く決めるように言っている事にする。沙条の方もユーリ達自身で決めさせているしな。



救出作戦から数日。ハジメ達を見送ってから日課になっている仕事を机に向かいながら行う。宿場町ホルアドはオルクス大迷宮があるからこそ発展してきた。それ故に売れるのは武器、防具、携帯食料、鉱物などが売れる。それら全てをシュテルが用意した店舗で売っている。全てオルクス大迷宮で作られている物資を使っているので、入手経路も問題なく資金に変えられた。その資金でホルアドに生まれる奴隷を購入する。

奴隷といっても、亜人奴隷以外にも様々な奴隷がいる。基本的には犯罪者しか認められていないが、奉公に出るということで同じように扱う事も可能になっているからだ。また、奴隷以外にもこの町の特性上、死を賭けた戦いを経験した後は生殖本能が刺激されて娼婦や男娼などでスツキリする場合が多い。高級な娼館などではしっかりと教会で避妊魔法による対策はされているが、寄付という値段はそれなり

に高い。

故に結果として子供が生んでから、治療魔法をかける方が安くなる。産まれてきた子供自体は捨てるか、売るのだが、どちらも子供にとってはおろくな未来がない。そこで子供の引き取りもやる事にした。子供なら洗脳を解除すればどうとでもなるし、英才教育を施せば国力上昇へと繋がる。連れて来た親にはお金を渡してやれば感謝されることになるし、奴隷ではない扱いだから問題もない。子供と一緒に過ごしたいという家族も親には仕事を紹介し、ここで働くか別の場所で子供と一緒に働くかを選んでもらう。資金力が無いと無理な事だが、幸いにも売れば売るだけ金が入るので可能だ。

「ええへ〜マスター〜」

「お兄ちゃん〜」

座っている俺の膝の上に乗って向かい合うように抱き着きながら首元にキスマークを量産してくるキングプロテアとユーリ。背後ではお仕置きとして優花がメイド服を着て胸を使った肩叩きをしてかれている。机の下には詩乃がクツションを持ち込んで俺の足を枕代わりにしながら眠っている。詩乃に関してはケットシーという猫の特性か、暗くて狭い所は好きみたいだ。たまに寝る以外にもこの状態で色々としている。

「仕事が終わったら遊んでくださいね」

「いっぱい可愛がって愛してください……」

「わかってる」

鈴と恵里は八重樫と一緒に永山達のパーティーのところについて話し合いを行っている。鈴のわだかまりを解消するためでもあるが、彼等が愛子先生の死を受けてどう動くかの判断をする必要があるからだ。それに檜山や天之河の事もある。アイツは白崎がハジメについていった事を知って荒れに荒れた。ハジメ達を追って連れ戻そうとしたが、皆で止められている。そもそも何処に行ったか、彼等にはわからないし追いやがらない上に移動速度も違うから追いつける事はない。

さて、そうなると天之河が目をつけてくるのはこちらになる。アイ

ツの目の前で堂々と奴隷を扱っているわけだし、色々と言ってきたわけだ。しかし、これは国に認められている行為なので無視している。奴隷以外には鈴や恵里はもちろんのこと、ユーリまで引き渡せと言ってきている。当然引き渡すつもりもないので断固拒否だ。戦争も辞さない。

ユーリに関してはバッテリー関連の事もあつて国や教会も手に入れたいので煽ってくるだろう。そう考えると俺もハジメ達と一緒にさっさとこの街から出ていってもいい。

「どうしました?」

「なんでもないさ」

ユーリを撫でると、キングプロテアも頭を差し出してくるので二人を撫でていく。そうしていると下の方が騒がしくなる。また招かれざる客が来たようだ。

「殺しておく?」

「……食べちゃいましょうか……?」

「止めておいた方がいいですよ。面倒な事になると思います」

「ちっ」

「残念」

優花とキングプロテアが後ろから物騒な事を言ってくるが、ユーリが止めてくれている。まあ、殺す事に関しては止めていないのでかなりご立腹である様子だ。召喚者である俺に散々な事をしておいてユーリに好かれると思っているのだから笑える。まあ、あんなでも勇者なので色々すると面倒だ。なので会わない為にも引き籠もっているわけだ。デートも出来ないのも、更に不満が溜まったりもしている。なので悪循環になっている。

「ですから困ります! 今、お仕事をしておられてお忙しいのです!

アポイントメントがないと通せません!」

「前もそう言ってたじゃないですか! 居るのはわかっているんです!

! 通してもらいます!」

「そうです。通しなさい!」

「駄目だって言ってるでしょう!」

言い合う言葉が聞こえてきた。どうやら、シユテルの制止を振り切ってこちらまでやってくるつもりのようなのだ。

『お兄様。申し訳ございません。実力行使で止めていいですか？ 教会の司祭と神官まで居て止められません。連れて来られたのが私の手の者ならどうとでもなつたのですが……』

『なるほど。それならこちらに通して構わない。ただし、何時でも実力行使と撤収ができるように準備だけしておいてくれ』

『了解しました』

急いで書類を仕上げるのもあるが、ユーリ達を降ろさないといけない。二人を降ろそうとするが、拒否した。

「嫌です。離れません」

「です。ぎゅーとしています」

「ゆ……へイゼル」

「私もこのままでいい」

「詩乃は……」

「あ、私は隠れてるからお構いなく」

詩乃は我関せずと言った感じでそのまま俺の足を枕にして眠ってしまった。仕方ないのでこのまま書類を処理していると、扉が開かれて廊下から天之河やローブ姿の司祭や神官達が入ってくる。

彼等は俺達の姿を見ると顔をしかめた後、ユーリ達の姿を見てニヤリと顔を歪めるが、天之河は気付いていない。キングプロテアとヘイゼルは完全に無視して俺に甘えてきている。一応、ユーリだけは俺の方とあちらを見てから、やつぱり抱き着いてきた。それに苦笑いしながら見て、机の上にある書類を読みながらサインしていく。

「鈴と恵里、その子達を解放しろ！ 人を隷属させるなんてなにを考えているんだ！ 大丈夫だ。俺がすぐに助けてみせる！ さあ、はやくしろ！」

完全に無視しようと思ったが、ユーリがギョツと抱き着いてきたので、視線を上げて天之河の方を見る。アイツは自分の言っている事が全て正しいと盲信しているままだ。

「そうです。勇者様の要請に従い、その者達はこちらで引き取らせて

いただきますしよう」

「それがよろしいかと。強い者達のようにですし、勇者様や引いてはエヒト様のお役に立てることでしょう」

「おお、それはなんて素晴らしいことでしょうか！」

神官達も同じようであきれ果てるしかない。だが、これはこれで面白いので少し遊ばせてもらおう。ルサルカのせいとは言わないまでも、彼女に影響されて人を弄ぶのは意外に楽しく思えてしまう。

「お断りさせて頂く」

「なんだとー！」

「それはどういう事でしょうか？ 教会を敵に回すと？」

天之河や神官達が怒鳴ってくるので、キングプロテアとユーリがビクンツと震えた。俺は二人を抱きしめながら優しく撫でていく。どちらかという不安ではなく、殺しにかかるのを止める意味合いだ
が。

「そもそも勇者とは誰だ？ 我々は勇者様と呼ばれるべき存在を確認していない」

「「は？」」

「勇者とは俺の事だ」

「御冗談を。それはありえない。いや、勇氣ある者としてなら勇者と言えるかもしれないな。蛮勇だが」

「俺のどこが蛮勇だ！ それにありえないとはどういう事だ！」

「何故なら、我々は魔人族との戦場で一度も勇者の存在を確認していない。勇者とは我々の先頭に立ち、魔人族を皆殺しにし絶滅させるべきお方だ」

「何を言っているんだ？ 皆殺しだと？」

「これが勇者？ 片腹痛い。妄言も体外にせよ。勇者の名を騙った異端者とし、処刑を帝国と王国、教会に進言すべきか。シュテル、書類を用意してくれ。それと民への情報の拡散を」

「はい、マスター」

「っ!? お待ちなさい！ それは貴方が決める事ではありません！」

ニコニコとしながら答えた大人姿のシュテルに慌てて偉そうな

ローブ姿の司祭であろう奴が声をあげて制止してくる。そんな事になつたら色々大変だからな。揉み消しもしないとならないし、本物か偽物かの審議をしなくてはいけなくなる。

「おや、そちらが決める事でもなからう？ それにこちらは命令を受けて魔人族との戦場に戦力を送る仕事をしている。上に報告すればそれ相応の対処はしてくれる」

「待て！ 俺は名を騙っていない！」

「そうです！ この方は真正正銘の勇者様です！」

「偽の勇者に偽の神官か。衛兵を呼んで捕らえろ。畏れ多くも教会に、何よりもエヒト様に泥を塗る愚か者だ」

「何故そうなるのですか！」

「決まっている。そもそもれつきとした神官ならば礼節を重んじてアポイントメントは必ず取るであろうし、この様に無理矢理押し入ってくる事など有り得ない。先も言った通り、我等が神の名に泥を塗る行為だ。そのような事を神官がする？ 断じてありえん」

ユーリがこちらを見ながらうわあつて顔をしているが、気にしない。青い顔をして冷汗をダラダラと流している神官達を見ると楽しくなってくる。何せ、こちらは正論であり、敬虔な神の信徒を貫いているだけだしな。それに帝国との繋がりをしっかりと伝える事も重要だ。

「何を言っている。この人達は間違いなく教会の人だ。俺が保証する！」

「お前が保証したところで偽物だという判断に代わりはない」

「お、お待ちなさい！ この方のステータスプレートを見れば勇者様である事がわかります！」

「ふむ。確かにそうだな。では、まず勇者である事を証明してもらおう」

「いいだろう。これが俺のステータスプレートだ」

「では、受け取らせていただきます。マスター、どうぞ」

シユテルを通して受け取ったそれを確認するとステータスがかなり高い。8000越えて色々特殊能力を習得している。羨ましい

限りだが、やばいスキルも取られている。

『取ったら駄目よ？ 玩具にするのはいいいけれど』

『殺さない限りは良いつて事ですか？』

『むしろ、受難をどんどん与えてちょうだい。その方がより、私の王子様に近づくもの』

脳内で愛歌と美遊の声が聞こえてくる。二人の会話からこちらの計画は順調に進んでいるようだ。だが、どう転ぶかはわからないが、仕返しはさせてもらう。

「確かに天職が勇者である事は確認した」

「そうか。では……」

「ああ、そうだな。エヒト様が間違えたなどあり得ぬ。ならばひよっこ勇者としては認めよう」

「ひよっこ勇者だど?! 俺はちゃんとした勇者だ!」

「なら魔族を何人殺した?」

「そんな事をするはずがないだろう!」

「本当にこれが勇者か? まあいい。そちらが言っていた彼女達を解放するという話だが……」

「ああ、解放してくれ。これは勇者としての命令だ」

「なら、魔族の首を百個、取ってこれば解放しよう」

「なっ?! ふぎけるな!」

「ふぎけてなどいない。我々が一人前と認めるのは十人以上の首級を上げた者だけだ。そして百人を超えて精鋭だと認められる。千人を超えれば英雄だ。精鋭や英雄の言葉であればこちらも考えるのは構わない」

「そんな酷い事ができるか!」

「では、無理だな」

「何故だ! 俺は勇者だぞ!」

「碌に魔族の首を上げられない無能な勇者とこちらの命令通りに百人以上を殺してくる彼女達。どちらが戦争に使えるかは誰の目にも明らかだからだ」

「俺が無能だど?!」

「魔人族を滅ぼす事こそがエヒト様が我等に与えられた使命である。その使命を邪魔をするというなら、やはり貴様は偽物の勇者だ。いや、エヒト様が間違える事はないのだから、魔人族に操られたか」「確か、神の使徒と名乗っていた人が裏切り、魔人族に寝返るために食料生産に重要な力を持つ人材を殺したらしいですよ」

シユテルが報告をするという形で追撃を入れてくれる。彼女も凄くニコニコしている。

「俺は裏切った沙条や清水とは違う！ イシユタルさんや皆を裏切る事はない！」

「ならば、その証明として魔人族の首を百以上持ってきていただく」「何故そうなる！」

「口でいくら言ったところで信じられないからだか？」

「俺を信じろ！」

「無理だな」

「いい加減になさい！ エヒト様の御意思に逆らうつもりですか！」

「そうだそうだ！」

「ああ、そう言えばそちらも居たな」

机から出すふりをして宝物庫から複数のナイフを取り出し、彼等の方へと投げる。それを受け取った彼等は不思議そうに首を傾げている。

「今すぐ自害しろ」

「「なっ!?!」」

「貴様等はエヒト様の顔に泥を塗った。神敵として討滅するのではなく、慈悲を持って自害を許してやる」

「「っ!?!」」

「な、何を言っているんだ！ 彼等は間違った事などしていない！」

「いえ、間違つてはおりません。死んでお詫び申し上げます」

神官の一人がナイフを取り出して実際に首を躊躇なく切り裂き、血を噴き出しながら倒れて動かなくなった。出て来た魂はしっかりと頂く。それを見た他の神官も自害する。残ったのは偉そうな奴と震えている取り巻きと天之河が止めた奴だけだ。

「何故だ！　こんな事で何故死を選ぶんだ！　まさかお前っ！」

天之河は本当にわかっていないようだ。信徒が、それも狂信者が神の名に泥を塗ったのだから、これぐらいは当然である。例え最初の一人がさくらだとしてもな？

「操ってはいない。彼等はお前に同調してやってはならない事をして罪を償っただけだ。この事を教会に報告すればどうせ死罪は免れぬ。拷問されて殺されるか、潔く自決して苦しみを無くすかの違いだけで死ぬ事にかわりはない」

「そんな事があるわけないだろう！」

「これが現実だ。勇者という存在は常に言動には気を付け行動せねばならない。良かったな。また一つ賢くなれたぞ」

「ふざけるな！」

「ふざけてなどいない。至って真面目だ。さて、そちらは自害しないようだし、神敵として手足を腕いだ後、磔にするか」

「そんな事はさせない！」

「言っておくが、ソイツ等とお前がやった事は魔族に利する行為である利敵行為だ。裁かれて然るべき行いである」

「なにが利敵行為だと言うんだ！　いい加減な事を言うな！」

「言っただろう。我々は魔族との戦争の為に戦場へ戦力を送ると」

「それがどうした？」

「送る戦力はここで購入した奴隷だ。その戦力が届かなければ前線で戦っている優秀な者達がより多く殺され、前線が崩壊する。そうすれば待っているのは戦う力の無い無辜の民が蹂躪されるだけだ。王国として前線を支えている帝国が落ちれば無事ではすまない」

「だったら俺が全てを救う！」

「なら、さっさと戦場に出るんだな。こちらはそちらが百人以上の首を取れば彼女達を解放してもいいと言っている」

「今すぐ解放するんだ！」

「話にならない」

シュテルに視線をやると、偉そうな神官の奴を殴り倒して縛っている。ヘイゼルもいつの間にか移動して同じようにしていく。

「待て！ 何をしているんだ！」

「この件とそちらの件は別だ。信徒と教会の問題である。そちらは口出し無用で願おうか。コイツ等は異端審問にかける」

「待ってくれ！ 私は司祭だぞ！ こんな事をしていいと思っっているのか！」

「司祭？ それならば何人の魔人族を殺してきた？ まさか、司祭ともあろう者がエヒト様より与えられた至上命題である魔人族の殲滅を行っていないなどありえないよな？」

「わ、私は後方での重要な仕事があつてだな？」

「ほう？ 重要な仕事？ それはエヒト様より与えられた神託より優先されると？ 馬鹿も休み休み言え！ 司祭ほどの者が戦場に出ずして何が信徒か！ 手足を失うような怪我をして後方に下がるのならまだわかる。だが、貴様等の手足はついてるよな？ なら、何故後方に居る？ それにこのブクブクと太った腹はなんだ？ エヒト様の教えをなんと心得る！」

絶望の表情をした奴等の一部が舌を噛んで死んだ。ああ、これって結構楽しいな。教義について殺しにかかるのはなんとという愉快か。

「止める！ 止めるんだ！」

「イ・ヤ・ダ・ね！」

「この悪魔めっ！」

「おいおい、この敬虔なる我が神の信徒である私を悪魔だと？ ぶち殺すぞ！」

我が神Ⅱエヒトだとは言っていない。俺の神様はユーリやキングプロテア達だ。故に嘘は言っていない。

「させない！ 決闘だ！ 彼女達と彼等を賭けて勝負しろ！」

「だが、断る」

自分の提案が断られるとは思っていないので、多分用法はあつていると思われる。不思議がつている天之河だが、こちらとしては受け入れる気はない。

「なんだと？ 貴様、それでも男か」

「女ですが何か？」

縛つてある髪の毛を解いてフワフワのウェーブがかかったロングヘアを解放する。こうなるとどう見ても女にしか見えない。俺がそう言った瞬間、天之河は啞然として他の皆は嘖き出した。

『あはははははは、良いわ、それ良いわね！』

『ご主人様、酷い……ふふふつ、はあーつ、はあーつ』

「おいおい、何時から俺が男だと錯覚していた？ 誰も言っていないんだがな？」

ユーリとキングプロテアを降ろして立ち上がる。すると机の下から詩乃の笑い声も聞こえてくる。かなり震えを我慢しているみたいだ。

「さて、決闘だったな。こちらが受けるメリットが一切ない。故に断る。互いの利益を提示しそれに見合える者であれば決闘は受けても構わん。だが、こちらばかりに不利になるその提案では交渉すらできないな。何せこちらが勝った時のメリットが表示されていない」

「俺は負けん！ だから必要ない！ それに君の考えは間違っている！ 俺が勇者として正しい道に導いて見せる！」

「そ、そうです！ 勇者様からの提案を蹴るなど言語道断！ 異端者認定をされますぞー！」

「後方に籠つてるだけの似非信徒共が、事も有ろうに忠実なる信徒である我等を異端者認定だと？ よろしい。ならば戦争だ。前線に送る戦力と本国の戦力を持って異端者である貴様等を殲滅してくれる！ 教会の総本山が異端者共に占拠されたとなれば致し方あるまい！」

「何故そうなる！」

「全ては我等が神の御心を叶えるためであるからだ！ 多少の犠牲は致し方あるまい！」

キングプロテアもお腹が空いているだろうから、たらふく食わしてやるよ。シユテル達は凄くワクワクしている。というか、シユテルは何かしでかす準備をしましている。命令一つで何時でも王都を殲滅する気だ。

「おに……お姉ちゃんも皆も駄目です。めっ！」

「……ちつ、ユーリに叱られたら仕方がないな。そちらも魔人族に利する行いは本意ではあるまい?」

「……それは……」

「言っておくが、そちらがやるならこちらもやるぞ。一切の容赦なく灰燼に帰す」

「こちらには勇者様が居ますが?」

「それがどうした? この程度の実力ならどうとでもなる」

「なら、俺の力をとくと見せてやる。決闘だ!」

「見せられる必要もない。そもそも互いに賭ける者が釣り合っていないのだからな。何か良いのはないか?」

「ございます。八重樫雫。マスターが勝てば彼女を奴隷として頂きますしやう」

「ふぎけるな! 雫を奴隷になんかにするはずがないだろう!」

「ふぎけてはない。彼女はそれほどの価値があるのか?」

「ございます。皇帝陛下が彼女を妾として欲しておられました」

「ふむ。それならば規定数に満たなくても咎めを受ける事はあるまい。しかし、やはり一人ではお前達と釣り合わないな」

「でしたら、女性陣、全員を頂きましょう」

「それならばまあ、数合わせにはなるか。この条件ならば受けてやろう」

「こんな事が認められるはずがないだろう!」

「そちらが言っている事と同じだ。決闘を受けて欲しければそうするのだな。何、勝てばいいのだ、勝てば。私は勝つつもりだぞ? そちらもそうなのだろう?」

「当然だ!」

「なら何の問題もないな」

「それは……だが……」

「断るのならばこの話は無しだ。俺はそもそも彼女達を解放するつもりは一切ない。便利な手駒なのだから、最後まできっちりと使わせてもらう」

「彼女達を手駒じゃない! そんな考えは止めるんだ!」

「なら、決闘でわからせてみせろ。どちらもスリルがあつて面白いだろう?」

「いいだろう! その決闘、受けてやる!」

「では、契約書を交わしましょう」

シユテルが商談に使うガチの契約書を持つてきた。反故させないための奴だ。そこに天之河と俺の名前を書く。俺の名前の方はしっかりと本名を書いてから偽装しておく。これで問題はない。二枚用意して、見届け人として司祭の男の役職と名前を書かせて教会が正式に認めた決闘とする。愚かな愚かな天之河。お前はこの契約書が勝つても負けてもお前を追い詰める事などわかっていないのだろう。そして、何より……俺は負けたとしてもデメリットなど存在しないのだ。だってそうだろう? 彼女達を解放する? そもそもキングプロテア以外は解放したいぐらいだからなあっ!

優花は解放したら速攻で檜山を殺しに行きそうだが、そこは勇者様がどうにかしてくれるだろう。キングプロテアは解放したら周りを際限なく飲み込んでいくだろうが、そこも勇者様がどうにかしてくれるだろう。期待しているぞ?

八重樫雫

「は？ 今、なんて言ったの？」

光輝の言葉に思わず聞き替えたした。それほど私達を集めた光輝が言った言葉は有り得ない内容だった。

「だから、マーナ・ラインと決闘をする事になった。だが、安心してくれ！ 俺は必ず勝つ！」

「決闘も問題だけどそっちじゃないわよ！」

「雫、落ち着くんだ。確かに君達を賭けに使った事は悪いと思ってる。だが、今も苦しみながら助けを待っている人達がいるんだ！ だからこそなんとしても彼女達を助けなければいけない！」

「詳しく説明いたしますね」

光輝に続いた司祭様が説明してくれたけれど、先程と内容は変わっていない。マーナ・ライン……つまり、沙条君と戦うという事。こればかりは光輝だから仕方がないのかもしれない。確かに奴隷を連れているのはどうかと私も思う。でも——

「それって負けたら私達が奴隷になるって事じゃない！ 絶対に嫌よっ！」

「……そんなの……いやあ……」

——負けたら私達が奴隷にされるとなると話しかわってくる。想像しただけで鳥肌が立ってくる。相手は沙条君だから、そこまで酷い事にならないかもしれないけれど怖い物は怖いし、嫌だ。

治療術師の辻綾子は両手で身体を抱きしめて震えている。そんな彼女を付与術師の吉野真央が抱きしめながら反論していく。他にも抱き合ったり、蹲ったりしている子達もいる。

「だが、彼女達を救う為には仕方がなかったんだ……すまない。だが、安心してくれ！ 先も言った通り、俺は負けない！ 必ず勝つ！」

光輝はそう言うけれど、勝てる可能性は正直わからない。確かに迷宮での一件から光輝は凄く強くなったみたい。でも、あの滅びの光と

もいえる攻撃を放った沙条君に確実に勝てるって言えるの？

「天之河。何故、俺達に……いや、百歩譲って俺達はいい。だが、賭けの対象にされた彼女達に相談もなく何故決めた！　せめて彼女達のを承を取るべきだろう！」

「彼女達は助けを求めていたんだぞ！　助けられる力と手段があるんだ！　だったら助けるべきだろう！」

「そういう話じゃない！」

永山君が光輝と言い合っている中、龍之介と野村君は黙って見守っている。遠藤君はオロオロしているし、檜山君達は私達を心配そうに見てくる。でも、視線が私達の身体をいつたりきたりしていやらしい感じもする。

「それに恵里や鈴、彼女達を助けた後は南雲に連れていかれた香織を助けないといけない！　そのためにも俺は必ず勝つ！　勝てば問題ない！　俺が必ず守る！」

「お前っ！　守れてないだろうがっ！」

「なんだと！」

「落ち着けよ！　そこまで酷い事にならないって！」

「酷い事にならないってどういう事よ遠藤！　他人事だからって言うっていい事と悪い事があるわよ！」

「……ひどいです……」

「違うって！　だって、アイツは……いや、実際に本人達が居るんだから、谷口や中村に聞けばいいだろう？」

「あく確かにそうだな」

「その方がいいだろう」

遠藤君の言葉に野村君や龍之介が納得して、壁際の席でわれ関せずと言った感じでもきゅもきゅと用意されたお菓子を食べている鈴とその鈴に後ろから抱き着いて色々世話をしている恵里を見る。二人は百合百合しい感じすら漂わせているので、あえて無視していたところもある。

「ん？　僕達の事はお構いなく。君達がどうなろうと、僕達の知ったことじゃないしね」

「恵里！　なんてことを言うんだ！　皆は君を救うためにその身を危険に曝してくれているんだぞー！」

「別に救ってくれなんて頼んでないしね。ねえ、鈴」

「うん！　鈴はまなまなやえりえり達と過ごすの楽しいもん！　それにエッチな事もいっぱいして気持ち良くしてくれるしね！　はやく子供が欲しいなあ〜」

「「っ!？」」

鈴の言葉に全員が呆然としてから鈴を見て想像して顔を赤らめる。鈴の方は気にせずにお菓子を食べながら、南雲君が連れていたミュウという子やユーリ達の可愛さについて語り合ったりしている。二人は本当になんとも思っていないみたい。

「何を言っているんだ！　そんな事認められる訳ないだろう！」

「別にお前の許可なんて必要ないんだよ。両親の許可もここじゃ要らないしね」

「え〜鈴は要ると思うよ？　流石に子供の事になるとお母さん達に相談しないと……」

「平気平気。日本じゃ育てるのは大変だろうけれど、こっちならそれこそ奴隷に世話させてもいいわけだしね」

「そっか！　えりえり頭良いね！　確かに一人じゃ大変だけど、いっぱい子供を産んだ人達が居るから平気かも！　あ、でも出産の時の死亡率とか大丈夫だっけ？」

「その辺は鈴の结界と回復魔法を使えばいいよ。それこそだ……ご主人様の物を使えばいくらでも治療できるから平気だよ」

「じゃあ、問題ないね！」

二人の言葉に光輝が反論しているけれど、二人は一切気にしていない。二人にとって今、話している事は当然の未来として確定している事なんですよ。でも、そこに私達も入る事になるのは嫌だ。ここはしっかりとお願いして、契約を無かった事にしてもいましょう。私達は同意していないのだから、まだなんとかなるはず。

「というか、彼女は女性じゃないのか？」

「え？　女性じゃないよ。ちゃんとした男性だよ〜？」

「なんだと!? 彼女自身がそう言っていたんだぞ!」

「あははは、女の子達を賭けた決闘を受けさせられたんだね!」

「ま、まさか騙されたのか?」

「ころころされたんだね」

「くそっ!」

光輝が項垂れている間に二人に近付いてお願いしてみる。

「ねえ、お願い。二人からこの決闘をなかった事にしてもらうよう説得できない?」

「やだ」

「うん。面倒だね」

即座に断ってきた鈴と恵里に全員の視線が突き刺さるけれど一切気にしていない。

「前の事を怒っているなら謝ったじゃない! それにお詫びとしてお菓子もいっぱい用意したから……お願い! 奴隷になんてなりたくないの!」

「んくどうする?」

「ごめんね、まおまお。鈴達は嫌われたくないから止められないよ」

「まあ、皆とご主人様なら、ご主人様の方を取るよね」

「うん! それに奴隷って言うてもたいした事ないよ。ちよつと女の子としての尊厳がなくなるくらいで、死ぬわけでもないしね!」

「な、なにを言っているんですか……? それって重大な事ですよ?」

「んく? あやあやはわかってないんだね。手足を斬り落とされたら、食べられたりするよりも人前で身体を使ってご奉仕する方が何倍もいいよ」

「排泄も含めて何から何まで管理されちゃうけど、自由に生きて動けるっていいよね」

「うん! ちゃんと治って良かったよ」

二人の言葉で彼女達が私達と別れてから何があったのか、おぼろげながら見えてきた。二人は一度手足を失った事がある。だから、身体を捧げる程度は構わないと思っているの……?

「それは間違っている! 二人は囚われているだけだ!」

「そうかもね〜」

「ふふ、確かに囚われてるかも。まあ、戦ってみたらいいんじゃない？
勝てるかはわからないけどね」

「皆が奴隷になったら鈴は歓迎するよ〜」

「それはない。何故なら俺が勝つからだ」

光輝は揺るがない。それがまだ助かるけれど、今回の事態を引き起こしたのは光輝自身。本当にこれからどうなるかわからない。

「うう……これから私達、どうなるの？」

「奴隷になるのは……嫌だけど、確かに死ぬよりは……愛ちゃん先生達も死んじゃったし……」

「どうしたらいいの？」

「大丈夫だ。助っ人を連れてきた」

悩んでいたら扉が開いてメルド団長が入ってきた。メルド団長はすぐに横にずれて入口を開ける。するとそこから金髪碧眼の綺麗な少女と少年、それにお爺さんが入ってきた。

「リリアーナとランデル殿下にイシユタルさんまで」

「一体どうしてここに？」

「今回の話を聞いて急ぎ早馬で王都に戻り、姫様と殿下、猊下をお連れした」

「はい。詳しい事は聞いております。この度は我が教会の者がとんだご迷惑をおかけしました」

「いえ、悪いのはマーナ・ラインです。イシユタルさん達は悪くありません。それよりも、彼女のせいで何人も自殺させてしまった事が悔やまれます」

イシユタルさんが頭を下げてくる。すぐに光輝が悪いのは沙条君だと言っていく。確かに沙条君が自殺するように誘導したのは悪いとは思う。

「あの、それで私達は助かるんですか？」

「契約を無効にする方法ってあったり……」

「ああ、それなんだが……姫様」

「はい。こちらの契約書を読む限りでは全て本物ですから、前提条件

に問題がなければ無効にはできません」

「それじゃあ……」

「いえ、だからこそ、無効にできます」

「なるほど。この契約を交わしたのはあくまでも天之河であり、彼女達ではないという事ですか？」

「そうです」

「どういうこと？」

「もしかして、私達は勝手に契約されたから魔法も効果を発揮しない？」

「そうなります。この契約書では勇者様の僕や奴隷など所有物であれば確かに効果を発揮します。ですが、皆様は違いますよね？」

リリアーナの言葉に私と真央、綾香達、女性陣は頷く。光輝もしっかりと頷いている。

「彼女達は俺の所有物なんかじゃない。仲間だ！」

「その仲間を売ろうとしたんだがな……」

「なんだ？」

「なんでもない。それで無効にできるって事でいいですか？」

「はい。この契約内容であれば対象になる隼さん、綾香さん、真央さんや皆さんが認めなければ効果を発揮する事はできません」

永山君の質問にリリアーナがしっかりと答えしてくれた。これではっきりと胸を撫でおろす。

「ですが、問題もあります」

「えっと、どういう事ですかイシユタルさん」

「この契約では勇者様が負けた場合、教会として正式に認めることになります。この件に関しては我々教会は口出しできないのです。相手が異端者であるならば別ですが、敬虔なる信徒であれば破棄するような事はできません」

「それじゃあ、無理矢理認めさせるように動けるって事？」

「誘拐とかの可能性があるのか」

「そうなります。でも、安心してください。王国としてしっかりと皆さんの後ろ盾になって守ります。それになんとしても皆さんはお守

りします。ですから安心なさってください」

リリアーナさんの言葉によれば、教会の庇護は受けられないけれど、王国の庇護は受けられるって事よね。だったら、大丈夫よね？

そう思っただ恵里の方を見ると、彼女はニヤニヤと笑っていた。鈴の方は気にせずお菓子を頬張っている。なんだか、嫌な予感がする。それでもどうしようもないので私達は別れて眠りについた。

◇◇◇

数日が経った。私達は宿場町のホルアドから外に出て少し行った所にある荒野へとやってきていた。沙条君達が町中での決闘を拒否し、いくら破壊しても問題無い外での戦いを望んだからだ。被害が出た場合は決闘を挑んできた光輝が全ての責任を負うのであれば街中でも構わないと言った。それに対して光輝は街中でも問題ないと言ったのだけれど、リリアーナが外できるように強制的に決めて、両者はそれを飲んだ。

「この辺りでいいだろうー！」

「まあ、いいだろう」

荒野で向かい合う二人。そこから離れた場所に私達は居る。ユーリちゃん達もこちらに居て、何処から取り出したのかパラソル付きのテーブルまで設置していた。

「ユーリ、お茶が入りました」

「ありがとうございます。シユテルも一緒に見学しましょう」

「ええ、もちろんです」

「お菓子も作ってきた」

「わーい！」

「僕はサンドイッチを用意してきたよ」

恵里や首輪をつけたヘイゼルさん……優花も一緒に居て、更にユーリちゃん以外にも小さい子までいる。彼女達は決闘を見るというより、ピクニックをしにきたと言った感じだ。

「あの、ユーリ。お久しぶりです」

「えっと、確かランデル殿下でしたね。お久しぶりです」

「覚えてくれていたのですね！」

「はい。しっかりと覚えていました」

「それは良かったです」

ニコニコと話す幼い金髪碧眼の美少年と金髪金眼の美少女。話している姿は絵になるけれど、互いの感情は違うように思えてしまう。

「では、決闘の前に条件を確認致します」

「ああ」

互いに条件を交わしていく。光輝は沙条君に奴隷の子達の解放を要求する。

「そちらの条件は奴隷の解放だな」

「ああ、そうだ！」

「こちらの条件は女性陣を奴隷として引き渡してもらおう事だ」

「いいだろう。俺が負けたら好きにするといい」

「では、両者同意できたのでエヒト様の名の下に決闘を執り行う」

イシユタルさんの声と共に光輝が聖剣を構える。たいして沙条君は虚空から機械仕掛けの大剣のような槍を取り出した。明らかに普通の武器じゃない。

「その武器はどうした？」

「ユーリの手製だ。かかってくるがいい」

大槍を片手で持ちながら回転させている。互いの準備ができたのか、それを確認したイシユタルさんが離れてから声をあげる。

「始めっ！」

「行くぞっ！」

「来い」

光輝が私が目でなんとか終わる速度で踏み込み、高速で斬りかかる。それに沙条君は反応できておらず、あっさりと聖剣が大槍に命中する。巻き上げるようにしたのか、大槍が空へと飛んでいく。

「その程度か？ 降参しろ」

光輝が聖剣を首筋に添える。

「なあ、普通に天之河の方が強くないか？」

「確かに……」

「これなら心配はいらなかった？」

「ユーリさん、どうですか？ これであなたは……」

そう思ったけれど、ユーリちゃん達は気にもしていない。

「お兄ちゃん頑張つて！」

「やっちやえく！」

「ふれーふれー」

沙条君は笑いながら聖剣を――

「は？」

「え？」

「ちよつ!？」

――素手で掴んだ。

「嘘、怪我してない？」

「お兄ちゃんの防御力は最強なのです！」

エツヘンと胸を張るユーリちゃん。可愛くてほっこりする。つて、違う。そうじゃない。聖剣を持った光輝が更に力を入れていくけれど、びくともしない。そこで沙条君が空いている片手を光輝の顔に向ける。

「くそつ、離せつ！ 光翼天翔！」

沙条君はそのまま光輝の顔を掴もうとするけれど、その前に光輝が近距離から攻撃技を放つ。盛大に光の爆発が起きて視界が一瞬、塞がれる。視界が戻ると、そこには相変わらず聖剣を持ったままの沙条君が居て、光輝は少し離れた場所に移動していた。

「ちつ、あのまま居たら面白い事になったのに……」

「ねえねえ、何をしようとうしたの？」

「気になります」

「説明しますと、私の技を使おうとしたんです。でも、逃げられちゃいましたね」

恵里と鈴、紫髪の女の子の言葉にユーリちゃんが答える。光輝は光の魔力を無数の剣に変えて放つ。けれどもそれも全て無数の赤色の

菱形で構成されたバリアみたいなものによって防がれる。

「あれって鈴より凄いや防御だよね〜？」

「当然です！ お兄ちゃんには私の防御力に加えて古代ベルカの聖王の鎧も参考にして徹底的にあげました。生半可な攻撃じゃ傷つける事は無理です！」

「痛いのは嫌だもんね」

「はい。痛いのは嫌だと思うので防御力に極ぶりにしました！」

「魔力もふってるから二極じゃない？」

「そうでした」

沙条君は笑いながら両手を広げ、無数の魔法弾を生み出していく。その数73個。どれも上級魔法並みの魔力が込められているように感じる。

「パイロシューター、シユート」

「あ、私の技ですね」

光輝は魔弾を避けるけれど地面に着弾した瞬間、半径10メートルくらいの飲み込む火炎へと変化し、周りを灼熱の業火で焼き払っていき。それが73発。

「上級魔法か！」

「これは上級魔法ではない。ただの初球魔法だ」

「限界突破舐めるなっ！」

即座に剣身の長い光の剣を生み出して、信じられないような卓越した剣技で魔弾を斬り裂き、誘爆させながら突撃していく。それに対して沙条君は聖剣を虚空に仕舞いこんで新しい大槍を取り出して上段に構えた。

「砕け散れ！ 雷神滅殺！ 極光斬！」

「万象切り裂く光、吹き荒ぶ断絶の風、舞い散る百合の如く渦巻き、光嵐となりて敵を刻め、天翔裂破！」

青色の雷によって作られた数百メートルを超える巨大な剣が振り下ろされる。それを光輝も限界突破を重ねながら対抗として無数の光の剣を生み出す。どちらも馬鹿みたいな爆発が起こり、こちらへと被害が広がってくる。

「鈴にお任せ☆ Rei shen shou jing rei
z i z z i」

鈴の前に大きな鏡で出来た扇みたいなのが現れ、それを鈴が取って前に向けると巨大な結界が展開され、二人が攻撃し合って発生した余波が綺麗に無効化される。鈴も沙条君も光輝も次元が違ってしまっている。それを見て私は……自分がいったい今まで何をしていたのかわからなくなった。技術が無い沙条君でもこんな戦いができるのだから、私が鍛えてきた技術は無駄だったの？

第75話

青色の雷によって作られた数百メートルを超える巨大な剣が振り下ろされる。それに対して俺は更に限界突破を重ねながら対抗として無数の光の剣を生み出して衝突させる。

二つの力が激突した衝撃で巻き起こった爆発を利用して後ろに下がろうとすると嫌な予感がしたので、逆に突っ込む。そのために吹き飛ばされてから地面に足がついた瞬間、足裏を爆発させて前に突き進む。

するとその直後、空から無数の炎弾が降り注ぎ、極大の火柱が現れる。だが、気にせず特攻すると、目の前にアイツが手をこちらにかざしていた。その周りには無数の青色の雷球が浮かんでおり、手を振り下ろすと同時にそこから無数の雷が俺に向かって放たれる。

光の速度であるそれを避ける事はできない。だが、不思議と問題ないと思えるのでそのまま突き進む。雷が命中するが、多少痺れるのと眩しい程度で問題はない。そういえば魔法で受けるダメージがかなり、減っている気もする。これも女神様のお蔭だろう。

「抗魔力が格段に上がっているのか……」

接近して光の剣で斬り裂こうとするが、奴の身体に到達する前に赤い菱形のような壁に防がれる。力を込めて押し込もうとするが、ピクともしない。やはり聖剣が必要だろう。返してくれるとは思われないが、一応は言ってみるか。

「俺の聖剣を返すんだ。聖剣はお前では使えないぞ！」

言いながら高速で光の剣を同じ個所に振るって少しでもバリアを破壊するための努力を行うが、弾かれてばかりで傷すらついていない。

「わかっている。だが、返すつもりはない。戦いの場で相手に武器を奪われた物が戻ってくる事はない。バリアバースト」

「っ!?!」

鉄壁の防御を誇るバリアが内側から爆発した。それにより発生し

た爆風と衝撃により互いに吹き飛ばされ、距離を取らされる。しかし、これはチャンスでもある。

「神の慈悲よ。この一撃を以て全ての罪科を許したまえ！」

光の剣から光弾を発生させて放つが、奴はそれを再展開されたバリアを使って弾き飛ばした。同時に無数の数えるのも馬鹿になるぐらいの魔弾が弹幕として放たれてくる。更に矛先が開いた槍をこちらに向けて魔法を放つ準備をしているのが見えた。

「くそっ！」

どうすればいいのか、判断が付かない。だが、ここで負ける事はずけない。だから、更に限界突破を重ねる！

「限界突破！」

ステータスを更に三倍にあげ続ける。五回の限界突破を兼ねる事でステータスを1,944,000まで上昇させる。すると不思議な事が起こった。目の前の世界がゆっくりと流れて自分と同じ姿をした者が弹幕の中を進んでいく姿が見えた。それが自分が理想の動きをしている事が理解できた。

だから、その行動に従って突き進むと無傷で通り抜けられた。しかし、近付いたとしてもバリアによって防がれる。強化に強化を重ねたステータスを使って作り出した光の剣は剣速だけで鎌鼬と突風を発生させる。それほどの一撃を持つても奴のバリアはビクともしない。

何度も何度も斬るが、バリアを完全に破壊する前に即座に再生して再展開してくる。そして、爆破によって巻き戻される。その繰り返しだ。アイツは俺の速度に反応できてないが、全方向を攻撃して行くので関係がないと言いたげだ。ましてや見学者の方にも攻撃が飛んで行っている。だからその攻撃を迎撃するために動き回らないといけない。

「諦めろ。お前の攻撃力ではこの防御を突破できない」

「まだだっ！」

諦めない。諦めるわけにはいかない！俺は勇者だ。皆を守り、助けて導く者。だからこそなんとんでも諦めない！

『その心意気を認めましょう。新たな力を授けます』

声が聞こえると同時に激しい頭痛が襲ってくる。そのため、距離を自分から取って頭を抱える。少しして頭痛が納まると、何をしたらいいのか理解できた。

創造の理念を鑑定し、何が必要かを理解基本となる骨子を想定して必要な物を設定する。

剣だ。やはり、聖剣が必要だ。それもより強力な奴だ。理想の自分が持つ世界最強の聖剣だ。

『ならば授けましょう』

女神様の言葉と空間が歪むと同時に奪われた聖剣が出現する。俺は聖剣を手にとって女神様に教えられた通りの魔術を行使する。

構成された材質を複製し、製作に及ぶ技術を模倣し、成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を再現して聖剣に置換する。

『同調開始』

女神様から与えられた知識と技術を使い、より理想の俺へと近づける。手に持つは星が作りし聖なる剣。

『行くぞっ！』

「来い」

聖剣を握りしめ、魔力を注ぎ込みながら上段へと構える。そして、頭に浮かんできた聖句を唱えていく。

「――束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。受けるが良い！
約束された、勝利の剣アアアアアアアアアアツ!!」

天を貫く極光の剣をアイツを切断するべく、振り下ろす。アイツが展開しているバリアと少しの間凌ぎ合う。

「いっけええええええええっ！」

「やれ天之河！」

「光輝やつちまえ！」

「お願いっ！」

クラスメイトや皆の応援を受けながら、更に魔力を注ぎ込む。拮抗していたバリアは砕け、そのまま奴を斬り裂く。アイツは体勢を微妙に変えて両手で受け止めるが、すぐに身体を動かして射線から身体を

ずらした。これによって奴の腕を切断してその背後にある岸壁を粉砕して遙か彼方まで穴を開ける。

「まだだあぁっ！」

同様してバリアが再展開できない間に魔力爆発を使いながら音を置き去りにして突撃し、奴を殴り飛ばす。何度も地面をバウンドしているところを上から馬乗りになり、聖剣を首にあてる。

「俺の勝ちだッ!!」

「そうだな。俺の負けだ」

「勝者。勇者、天之河光輝！」

「「ウオオオオオオオオッ!」」

皆が喜ぶ中、俺は奴を見下ろしながら告げる。

「さあ、俺の勝ちだ! 彼女達を解放しろ」

「いいだろう。だが、その前に退け」

「ああ、すまない。治療もしないと」

言われた通りに退くと、勝った事で気が抜けたのか、フラフラと聖剣を地面に突き刺しながらしゃがみ込む。そこに助けた彼女達が駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん! 大丈夫ですか!」

「問題ない」

ユーリちゃんや彼女達は何故か、俺の方ではなく、アイツの方へと心配そうにいった。いや、そんなはずはない。彼女達は優しいからだ。

「止血しますね」

「必要ない。すでに血は止めたからな」

アイツが立ち上がり、こちらを見ながらニヤリを笑う。それを見て嫌な予感がした。

「契約に従い、この場に居る奴隷を解放する。立会いは教皇イシユタルで問題ないな?」

「もちろんだ」

「ええ、問題ありません」

「隷属契約を解除する。解放^{リリース}」

掌を彼女達に向けて魔法を発動する。すると彼女達に施された首輪が紫色の髪の毛をした幼い少女を除いて解除された。

「これで君達は自由——」

「では、再契約を行う」

「——なっ!?!」

アイツは即座に魔法を発動させてから彼女達に首輪を嵌め直しやがった。

「何をしているんだっ!」

「何を怒っている? こちらは契約通りに一度彼女達を奴隷から解放し、再度奴隷にただけだ。ルール上、何の問題もない」

「ふざけるなっ!」

「困りますな。彼女達はこちらに引き渡してもらわないと」

「そうだ!」

「断る。この子達は俺の女だ。お前達にくれてやる必要はない。まあ、魔族の首を百人単位で持ってきたら考えてやる。それがエヒト様の教えに従うということだからな」

「イシユタルさん! このような事を認めていいのですか!」

「認める認めないではない。そもそも契約は順守されているのだからな」

「そうそう、つまり無駄な事に馬鹿みたいに熱くなって、無駄に身体をボロボロにただけってわけだ」

恵里が楽しそうにこちらに向かって言う。その言葉に今回の戦いを振り返る。アレだけ無駄をしたというのに全てが無駄かどうか?

「ゆ、ユーリはこちらに引き渡してもらいます!」

「ふむ。ランデル殿下か。ユーリ、どうしたい?」

「私は大好きなお兄ちゃんと一緒にいます」

「そうか。そういう事なので断る」

「王族としてのめい——」

「駄目ですよ、ランデル」

「——お姉様! なんですですか!」

「いいえ、構いません。ランデル殿下の言う通りです。彼女にはこちらで色々と作ってもらわないといけません」

イシユタルさんの言葉通り、確かに彼女の技術力ならより多くの人を救える。こんな嘘つきの奴にいいように使われるのは絶対に駄目だ。

「物作りなら我々の下でしつかりとやってくれている。この武器も彼女達の作品だからな」

「でしたら、尚更こちらに渡してもらいましょう」

「断ると言っている。お前達の所には必要ないだろう？ 何せ前線にも出ない腰抜けや神の啓示を守らん不屈き者ばかりだしな？」

「それは我々、聖神教会への侮辱ととりますか？」

「こちらは事実を言っているだけだ。エヒト様は魔人族を滅ぼせとおっしゃっている。だとこのに貴様等は前線に出ずに何をやっている？」

「それは……」

「祈りを捧げているとか、治安維持とか言うなよ？ 祈りなんて魔族を殺しながらできるし、むしろ必要なのは前線だ。治安維持などこの国の騎士の役目だ。神託はすでに下されているんだ。だったらここでやる事などない。精々、信者の話や施設の管理か？ だが、そんなものは神官共にやらせておけばいい。そのこの所はどうなのかな？」

「確かにそうだよ。なんでここに居るの？」

「前線で治療したり、防御魔法を使ったり、いっぱい仕事があるよね？」

私達の教育だつてメルド団長に丸投げだったし」

俺達の視線はイシユタルさんを見る。イシユタルさんはニコニコしながらアイツを見詰めていた。

「ええ、もちろん私共も勇者様達と共に戦場へ出ますとも。ですが、その前に勇者様を育てよとの神託を頂きましたので、これはエヒト様のご意思でございます」

「それを証明できるか？」

「証明は私の発言こそが証明になりますよ。教皇なのですから」

「話にならない。エヒト様の神託が事実である証拠が一切ないではな

いか」

「エヒト様のお言葉を疑うと?」

「いいや、アンタの言葉を疑っているだけで、エヒト様のお言葉は疑っていない」

「なるほど、どうやら貴方は異端者のようだ」

「それはこちらの台詞だな。エヒト様の名を騙る大罪人が」

「この私を大罪人とは……」

「信じて欲しければさっさと魔族を滅ぼせ」

「その為に彼女達が必要なのですか?」

「彼女達は前線で働いてもらう。故に後方に必要はない」

言い合いが続いていく中、だんだんと体力が回復してきた。周囲を確認すると、一触即発の雰囲気には騎士や神官の人達が武器を構えている。だが、アイツは堂々と片腕のまま言い合っている。まるでなんて事はないかのように。リリアーナだけが、顔色を悪くしているが、何かあったのだろうか? それに随分と人が増えている。

「では、どうあつても彼女達は渡さない」と?

「ああ、そうだ。なんならもう一度決闘でもしてみるか? 言っておくが、今度は勇者の物じゃないから問題ないという抜け道を用意なんてしないぞ。アレを許したのはこちらも再契約できるからだ。それを潰すのであれば互いに同じ条件だ。そうだな。この場に居る全ての女を賭けてやり合うか?」

「先程勇者様に負けておきながらそうおっしゃるのですか?」

「ああ、もちろんだ。遊びは終わりだ」

「待て! さっきの戦いが遊びだと!」

「お兄ちゃんは全力で戦っていませんでしたね」

「流石に勇者様の顔を立てるぐらいの事はしてやったという事だ」

「ふざけるなっ! いいだろう! だったらもう一度だ! 俺は何度だって勝ってやる!」

「いいでしょう。では、もう一度決闘といきましょう。異端者を滅ぼすのにはすぎた事かもしれませんが」

「大罪人が何をほざく」

「それこそ間違いです。そもそも貴方、エヒト様を信仰していないでしょう。ああ、隠さなくてもわかります。私達への侮蔑かと思っていました。エヒト様のお名前を騙る時に敵意が混じっていましたからね」

「……ばれたか。流石は年の功か。ああ、そうだな。俺が信仰している神は別だ。だが、エヒトには感謝している。これは事実だ。何せこの世界でユーリ達と出会う機会を与えてくれたんだからな。その点は大いに感謝している。ありがとう！」

堂々と宣言するという事は、本当にエヒトを信じていないという事なのか？ だったら、あの時に自害していった彼等は どうして死ななくてはいけなかったんだ？

「何故、あの時……彼等を死ぬように誘導した……？」

「決まっている。鬱陶しくて邪魔だったからだ。お前が要らない事をしなければ彼等は死ななくて済んだ。俺達の目的はあくまでも奴隷や人材を会得する事だからな」

「なんだそれは！ 人の命をなんだと思ってるんだ！」

「食い物／リソース」

恵里とアイツの言葉に俺達は信じられない者を見るような視線を向ける。

「恵里、食い物はないだろう？」

「いやいや、食い物だって。生きとし生ける者は等しく僕達の食い物だろう？」

「まあ、間違っではないがな」

「マスター、私達を食べるのですか？」

「ああ、性的になら食べる」

「きやく」

本当に人の事をなんとも思っていないだと分かった。何故こんなにも恵里は変わってしまったんだ。

「何故だ。恵里はこんな事を言う子じゃなかった……」

「恵里、いったいどうしたの……？」

「どうやら、洗脳されているのかもしれないね。異端者として滅ぼ

「しましろう」

「へえ、そちらがお望みなのは決闘ではなく、全面戦争か？ 今一度問うぞ。ルール有りの決闘かルール無用の全面戦争か？」

「決闘です！」

リリアーナの声が響き、俺達は全員がそちらを見る。どういふつもりか。彼女は雫と共にこちらへとやってきた。

「どういふつもりですか？」

「そちらこそどういふつもりですか？ 先程の戦いを見れば彼が広域殲滅に優れている事がわかるはずです。ホルアドと王都が近い所で戦うなど民間人に多数の被害がでます。断じてそれは認められません」

「民も聖戦の必要な犠牲となるのなら本望でしょう」

「それで帝国とも戦争するのですか？ それこそ本末転倒でしょう。彼は魔族と戦うとは言ってくれているのです。でしたら、その通り戦ってもらえばいいのです。王族として無用な被害を出すような事は認められません」

「……魔族を排除した後でなら、構わないと？」

「場所さえ選んでいただければ問題ありません」

「なるほど。ですが、姫様のお言葉といえども認められませんね」

「そうですお姉様！ コイツを殺してユーリを取り返す……いえ、救うのです」

「私は救われていますよ？ 何を言っているんですか？」

「洗脳されているんですね。必ず僕が救ってみせます！」

「……えっと、お兄ちゃん……」

「無視しろ。で、どっちだ？ 決闘なら俺が相手をしよう。だが、全面戦争なら全員で戦う事になる」

「……なら、決闘だ！」

「勇者様？」

「イシユタルさん。流石にコイツと戦うとなると被害が出過ぎます。だから、決闘をお願いします！」

「皆様はそれでよろしいのですか？」

イシユタルさんが俺達を見る。俺は頷くが他のクラスメイト達は頷いてくれない。

「どうしたんだみんな！」

「ねえ、決闘するとなると景品はどうなるの？　また私達が賭けられるの？」

「そういう事だな。こちららも女性を全員賭けるから、そちららも全員を賭けてもらうことになる」

「い、いやよ！」

「そ、そうよ！」

「では、勝利した方が四人選ぶということはどうだ？　それなら高確率で助かるだろうよ。何せ神官や騎士の中にも女は居るのだからな」
それからの話し合いで俺達は改めて決闘をする事になった。だが、先も勝てたのだからもう一度勝つ事は可能だろう――

「始め！」

「行くぞ！」

「殺れ、キングプロテア」

「はくい！」

――そう思っていたら横合いから思いつき殴られた。すぐに身構えてそちらを見ると紫色の髪の毛をした小さな少女が立っていた。彼女がつけられた枷が全て解除されていてその身体がどんどん膨れ上がっていく。その肩にアイツが飛びのる。

「さあ、ここからは天職ありでお相手しよう。なに、そちらが勇者としての力を使っているのだから卑怯とは言えないな？」

「いや、卑怯だろ！　一対一じゃないのか！」

「一対一だろう？　彼女は俺が召喚した使い魔だ。故に俺の力だ。お前が魔法を使うのと同じだ」

「ふざけるなっ！　こんな事認められるか！」

「この程度認めろよ。勇者だろ？　本当に人としてもちっちゃいな。器が知れるぞ」

「いや、アンタも大概でしょうが」

「というか、絶対に言いたいただけだよな？」

「だね〜」

「えつとどつかで聞いた台詞とシチュエーション……あ、シャーマンキングだったかな?」

「知ってるの、真央?」

「うん……多分だけど……もしかして……生きてたんだ」

くそっ! 何が小さいだ! 二人で来た時点でそっちの方が問題だろう!

「これは我々も参戦します!」

「決闘だぞ?」

「義によって助太刀いたしますぞ!」

「ああ、それがあつたな。よろしい。ならば遊んでやる。精々、我を楽しませよ、塵共」

「えい♪」

振り上げられた拳が振り下ろされる。それだけで地面は数十メートルのクレーターが生まれて数十人が消し飛んだ。同時にどンドン巨大化していく。俺は全力で抗い必ず勝利を掴む!

『いや、無理だから逃げなさい。相手は複数の女神を合成した神格持ちなの』

そんな女神様! 俺にもっと力をください!

『これ以上の力は現状だと身体が崩壊するから無理です。今は逃げて力を溜めるのです。まあ、殺されないとは思うので戦うのもあります……力の追加はなしです』

くつ、俺は諦めない! 絶対に勝利を掴む!

「義によって助太刀か。なら、私も参加していいよね?」

「もちろんそうだね。僕も楽しもうか」

「なら、私も殺る」

「いや、アンタが参加するのは駄目じゃない? いや、檜山を殺さないならいいけど?」

「とりあえず手足を斬ってくる」

「それぐらいならまあ、いいかも?」

「いいんじゃないかな? 鈴はここでのんびりしてるよ」

第76話

「え〜いっ！ プロテア〜パンチ！」

キングプロテアが四つん這いになりながら地面に拳を叩き込む。それによって陥没し、数百メートルのクレーターが作成される。着弾した地面から吹き飛ばされた土砂は周りに散弾として広がり、爆心地以外に居た連中を強打していく。

「がはあっ!?!」

「あぎいっ!?!」

「ひぎいっ!?!」

吹き飛ばされただけで大怪我や死んだ者達も居る。そのはずだったのだが、天之河が高速で動き回って散弾となった土砂を防ぎながら吹き飛ばされた神官や騎士団の者達を救助した。

しかし、それでも直接攻撃を受けた場所に居た者達はただの赤い染みへと変化している。キングプロテアが拳を退けた場所には生命は存在せず、ただ地面から水が出てきたただけだ。

「彼等を殺したのか！」

「これは決闘だ。死にたくなければ降伏するのだな」

天之河と話している間もキングプロテアは止まらない。恐怖に震えながらも「エヒト様の為に！」と声を上げながら攻撃魔法を放ってくる神官達や武器を片手に突撃してくる騎士達。

「待てー！」

「待つんだー！」

メルド団長と天之河の言葉を無視して突撃した者達の一人をキングプロテアは掴んで握り潰す。もう片方の地面についていた手を攻撃した奴等の攻撃では傷一つつかない。手が空いたキングプロテアは一人を掴んで持ち上げて口を開けながら指を離す。当然のように口の中に落ちた騎士は鎧ごと食べられた。

「プロテア、拾い食いは止めよ」

「は〜い！　じゃあ、潰すね。えいっ！　えいっ！」

やってる事は子供が蟻とかを無邪気に殺して遊んでいるのと同じだ。巨人であるキングプロテアにとって只人などそのような存在でしかないだろう。そもそも複合女神である彼女にとってはそれが普通の事であるのかもしれない。

「マジかよ……」

「こ、殺される……」

「こんなの勝てるわけないだろ！」

「む、無理よ」

「いや、まだまだ！　行くぞっ！　龍太郎！」

「ああ、やってやる！」

クラスメイト達の中から、天之河が龍太郎と共に突撃してくる。俺はそれを見ながらユーリと美遊の二人と共にキングプロテアの頭の横に浮かびながら見上げる。

『我が軍は圧倒的ですね』

『無理もないよ。だって、女神様が相手なんだから……』

『神格持ちには普通は敵わないからな』

『私は勝てますよ？』

『ユーリは別だ。大天使だからな』

『えへへ〜』

話している最中、ふと神官達の方を見ると彼等の間を高速で動く影があり、その影が通った後にはポンポンと首が飛んでいた。そう、首。生首である。血柱が立ち上り、神官達が恐怖に戦慄する中、その影はどンドン殺していく。

『アレは優花さんですね』

『私にも見えました。刀と短剣で戦っていますね』

『解体しまくってるな』

彼女に抵抗しようと魔法を放つも、すでに内部に入り込んでいるので単体攻撃しかできない。しかし、命中する前には既にその場所には居らず、代わりにその攻撃に周りの神官を蹴り飛ばしたり、投げ飛ば

したりして同士討ちをさせてもいる。更に連中にとって最悪なのは優花は恵里と組んで行動している事だ。

「なんとしても止めるのです！ 範囲攻撃で一掃しなさい！」

「ですが、それでは味方ごと……」

「構いません！ 彼等も納得してくれます！ 全てはエヒト様の為に！」

「エヒト様の為に！」

イシユタルの命令によって味方を気にせず範囲攻撃を放つ。優花は即座に後退してその場から離脱する。そこで気を良くしたイシユタル達は優花を狙って攻撃魔法を乱射していく。しかし、そこに生首だけになった物が突如動きだして神官の首に噛みついてくる。

「ひいいいっ！」

「アンデットっ！ 死霊術師ですか！ 浄化魔法を使いなさい！ 聖なる光よ、不浄なる者達を……」

ターンアンデットなど死者に効果がある魔法攻撃を行って浄化していくが、そこら中に死体が存在している。ソイツ等も起き上がって生きる者達を襲い掛かっていく。もちろん、噛まれらたら感染して即座にゾンビ化するようだ。

「助太刀するぞ！」

「はっ！」

騎士団が横から突入してアンデット達を攻撃していくが、殺せないので即座にイシユタル達が騎士団に支援魔法を飛ばして殺せるようにしていく。

「全ての邪悪をここに！ これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮
ラ・グロンドメント・デユ・ヘイン
吼え立てよ、我が憤怒！」

恵里が黒い竜の紋章が刻まれた旗を地面に突き刺しながらジャンヌ・ダルク・オルタの宝具を発動させる。敵全体に地獄の業火をお見舞いし、呪いと共に強化無効を付与する。これは自身と周囲の怨念を魔力変換して焚きつけ、相手の不正や汚濁、独善を骨の髄まで燃やし尽くす怖い宝具だ。神官達の一部は良く燃えている。

「神敵を通さず！ 聖絶！」

神官達が聖絶を展開して防ぐが、その中に優花が入り込んでいて虐殺パーティーが開催された。外は地獄の業火で中は殺人鬼と暗殺者のハイブリッドによる惨殺。外も内も地獄だ。

「龍太郎おおおおつ！」

天之河の避け声にそちらを向くと、龍太郎がキングプロテアに捕まれて腕を折られていた。よくよく見ればキングプロテアの周りには手足がなかったり、ありえない方向にねじ曲がっていたりする騎士や神官達が居た。天之河は全力で攻撃しているが、微かに傷がつく程度だ。それすらも瞬時に回復しているので意味がない。

「マスターを悪く言ったいけない人にはお仕置きです。貴方は他人が傷つけられた方が辛いんですよね？」

「やめろおおおおつ！」

「くそつ、なんて怪力だつ！」

『人形遊びですか……？』

『惨いね……』

「ストップだ」

確かに惨いのでキングプロテアの頬に触れながら止めると、ピタリと止まってくれた。ただ、にぎにぎは止めていないので、龍太郎の身体が軋んで全身の骨に罅などが入っているだろう。

「降参するか？」

「それはできない！」

「なら、彼は死ぬ事になるが？」

「ぐっ……しかし、そうなれば彼女達がお前の犠牲になる！」

「そうだな。だから選べ。彼か彼女達か」

「できるわけないだろう！ それに俺は負けない！ 卑怯だぞ！」

「正々堂々と一対一で勝負しろ！」

「一対一か。召喚士である俺が勇者と一対一？ そんなの受ける訳ないだろう……いや、そうだな。いいだろう。だが、掛金は増やしてもらおう！ 貰う人数の撤廃だ。それで勝負しようじゃないか！」

「ふざけるなつ！ これだけ被害を出して……」

「そうだ。お前の我儘で出した被害だ。こちらはそもそも決闘などす

る気がなかったのだからな？」

『嘘です。途中からノリノリになりましたよね』

『です』

色々と言われているが、天之河を見ながら決断を迫る。

「いいでしょう。その勝負、受けます」

天之河以外の声が聞こえて、そちらに振り向くとそこには金髪碧眼の美少年であるランデル殿下が居た。彼は周りの制止を振り切って普通にこちらにやってきていた。その表情に一切の感情が存在していない。

「勇者ではなく、私が受けましょう」

「何を言っているんだ！ 君に勝てるはずがないだろう！」

「いいえ、私なら勝てます。どうですか？ 私が勝てば貴方とユーリ・エーベルヴァインを頂きます。そちらが勝てば先程の条件通りで構いませんよ」

「……」

『お兄ちゃん、このランデル殿下は変です。まるで別人です』

『操られているのかもしれない。これは私と同じ？ いえ、後天的に無理矢理した……？』

美遊と同じとなると、巫女という事なのかもしれない。いや、違うか。器として同じという事なのかもしれない。そうなると相手が誰なのか見えてくる。それにユーリを狙っている理由もなんとなく検討もついてきた。

『大穴で愛歌が関わっているという事もありえるが……』

『私じゃないわよ。だって、もう予定の値は過ぎたもの。戦うなって言ってるのに聞かないし、ここでは関わらないから好きになさい。殺すのは駄目だからね。それと受けてから召喚するタイミングは13分54秒25にしなさい。触媒は貴方の斬られた腕とその辺にうようよしている怨霊と死体。これで貴方は私に感謝するでしょう』

『了解。そのお礼は確かに受け取っておく。美遊とユーリはサポートを頼む』

『『了解（です）』』

愛歌の方からも許可とお礼を得るために受けよう。そう、お礼だ。時間と触媒まで指定してきたのだから何か俺が嬉しい物が召喚されるのだろう。ボーナガスステージチャの予感がする！

「いいだろう。その勝負を受けよう」

「待て！ 待つんだ！」

「ランデル！ 何を考えているのですか！」

「お姉様、邪魔をしないでくれないかな？ これはエヒト様の導きなんだから」

「っ!? ど、どうしたの？ 一体何が……」

「姉であるリリアーナになんて事を言うんだ！」

天之河がランデルの腕を掴むが、その次の瞬間には吹き飛ばされた。彼の背中には天使の翼が現れており、身体中に幾何学模様のような物が浮かび出してきていた。

「では、始めようか」

「いいだろう。だが、その前にプロテア、邪魔な奴等を退けよう。準備は必要だろうか？」

「ああ、そうですね。ですが、私は気にしませんので景品を守るつもりなら急いでくださいね？」

「もちろんだ」

指示して急いで生きている連中を全て鈴の結界へと入れる。俺自身は召喚用の魔法陣を作り、触媒を用意していく。相手のランデルも同じで、彼は空に広大な魔法陣を展開する。彼の身体からは負荷によって血飛沫が出ているが気にもしていない。

「神により与えられし聖名、フუნフの真名により、聖戦を宣言する。時、来たれり。開け、天国ヘブンズゲートへの門」

巨大な門が魔法陣から現れて門が開かれる。そこから大量の天使が出てきた。

『これは神の使徒で確定』

『そもそもキングプロテアを地上で展開したら気付かれてもおかしくないですよね……』

『神格持ちだもんな……情報隠蔽があつたとしても誤魔化しきれな

かったか』

『怪しいとは感じていたのかもしれませんがね』

『調査するために権力者を利用したら、鴨が葱を背負って来たつとところかな、うん』

『まあ、こちらにとつても同じなんだがな』

『だね。よし、マスター。全力で刈り取ろう。お兄ちゃんを召喚するための素材取りの時間だよ』

かなりハイテンションになったのか、敬語が完全に抜け落ちていく。まあ、これはこれでいい。美遊の言う通り、素材取りの時間だ。

「ユーリ、美遊。やるぞ」

「私達は どうする？」

詩乃が空を飛びながらこちらにやってきた。

「ルール上は召喚獣なら問題ないはずだ。だから、恵里と鈴、ヘイゼルは無理でも詩乃は参加できる。援護射撃をしてくれ」

「わかった」

「マスター、私はどうしますか？」

「プロテアは好きだけ食べていいぞ。入れ食い状態だからな」

「任せてくださいー！」

あちらも布陣が完了したのか、こちらにやってきた。

「準備はよろしいですか？ 降伏するのなら今の内ですが……」

「そちらこそ、いいのか？」

「ええ、構いません。エヒト様以外の神など異界の者とはいえ認められませんから」

「いいだろう。では開始はそちらが戻ってから開始だ」

「了解しました。では、良き闘争を」

「そちらこそ」

あちらが移動してから、こちらも神喰を出してチャージしておく。地上の事など気にしない全力の殺し合いだ。互いの召喚獣同士の間つき合いになるが、どうなるかはわからない。だが、天之河よりも強いだろう。

「攻撃開始！」

数百を超える天使から一斉に攻撃魔法が放たれる。こちらは神喰からスターライトブレイカーを放って相殺する。その直後にキングプロテアが巨大な地面を固めた物を放り投げる。相手は即座に破壊してこちらへと突っ込んで来る。それを詩乃が弓で撃ち落とししていくので、俺は魔法陣に魔力を注ぎ込んでおく。おそらく、勝つには愛歌の指示通りにしないといけないだろうしな。

「降りてこないならっ！」

キングプロテアに対して相手は近付かず遠くから遠距離攻撃をしてくる。だからか、周りの大地をどんどん吸収して巨大化していくキングプロテア。それだけじゃない。当然巨大化すると同時に天使たちも吸収範囲に捕らえてリソースへと変換して更に巨大化していく。正に世界を喰らうと言えるほどになっていく。キングプロテアの産みの親 B Bが封印したのもわかるというものだ。

「対空迎撃を開始します。ドロー、グスタフ、装填開始」

ユーリは神喰を使いながら地上では列車砲などを宝物庫から取り出して展開し、それらからどんどん魔法が込められた砲弾を空へと放っていく。こちらは着弾すると同時にジャガーノートやルシフェリオンブレイカーが発動して盛大に破壊の嵐を巻き起こして大量の天使を虐殺している。お蔭で魂の回収はとても順調だ。

『聖杯が満たされる。もっともっと集めないよ。あ、このデータがあった。とりあえず使って強化しておこうかな。ご主人様、今なら出来る』

「まあ、これをしておいの方がいいか」

美遊と一緒に唱える。

『イエet ツzira ラーh。聖餐杯は壊れない』

唱えたと同時に手元に聖杯が出現する。同時に人俺と聖杯美遊の霊的融合が成され、五感及び靈感も格段に上昇した。それに伴い身体能力も更に上昇。ユーリの身体に聖杯との完全接続による更なる強化を施して戦っていく。

馬鹿みたいに現れる天使を迎撃していくが、本当に無限に湧いてくるようにすら感じる。数百ではなく数千へと数が増え、虐殺を繰り返

しているというのに途切れる気配が一切ない。

「無駄です。確かに皆さんはイレギュラーのようですが、それでも人である事に、有限である事に代わりはありません。ここまで数年と経たずに戦力を集めた事は驚嘆に値します。ですが、それだけです。月日が違います。我々は数百年を費やして量産を測ってきました。負けはありません」

確かにランデル……いや、フუნフの言う通りか。普通ならそうだな。だが、その量産した物がお前達の首を絞める事になる。

『規定数に魂の質と量が達したよ。やろうか、ご主人様』

「ああ、そうだな。我が愛しき子よ」

『親愛なる我が女神達よ。この聖杯とこの鍵と指輪を彼に与えたまえ。この聖杯は危険に際して救いをもたらし、この鍵は恐怖の修羅場で勝利と破滅を与える羅針盤となる。この指輪はかつての繋がりを取り戻すものであり、永遠の誓いを果たすためのものでもある。』

B r i a h — 数多の世界より来たれ、愛しき者達よ」
創造

天使数百体の魂を生贄にして形成段階から永劫破壊を創造段階へと上昇させる。聖杯の能力により魔力と触媒を生み出し、召喚の魔法で世界と世界の間扉を生み出して鍵を開ける。そして指輪を与え、事でこの世界で活動できるようにする。平行世界の運用により魔力も供給して魂を物質化させる文字通りの魔法へと昇華させる。これが俺と美遊が求めて止まない必殺技。つまり、ガチャである。

「何をしようと無駄……は？」

こちらが形成しておいた魔法陣の上に巨大な門が現れる。その門へと鍵の形へと変化した聖杯を突き刺して開ける。すると中から物凄くヤバイ気配がしてきた。

『黒猫とパンケーキ作るっ みやお！』

パンケーキに黒猫のせるっ みゃー！

黒猫のパンケーキ 出来上がりっ！

黒猫パンケーキ！ みゃんみゃん！

えっ？』

黒猫をパンケーキに乗せた可愛らしい金髪碧眼の水着姿の美少女

がこちらに気付いたようで、顔を真っ赤にした後、すぐに銀髪の姿へと変えた。頭には黒色の魔女のような三角帽子をかぶり、黒いビキニのようなエロエロな服を着ている。そしてなにより瞳が赤くなり、額に鍵穴がある。そこにも第三の瞳が存在していた。その背後にやばい触手を持つ化け物もあり、全員がS A N チェックをする事になった。

そう彼女こそ、水着に着替えた外なる神に仕える巫女、アビゲイル・ワイリアムズである。愛歌様、ありがとうございます！

「がしがしがし」

第77話

銀髪になった彼女がガジガジと腕を噛んでくる。まあ、甘噛みなので問題ない。というか、普通にBriah^創を発動している現状では俺にダメージは……嘘、滅茶苦茶ある。というのも俺のBriah^創はヴァレリア・トリファと同じように防御力を攻撃力に変換するタイプの物だ。俺の場合は防御力を召喚特化に変換している感じだな。もつとも、霊的な防御力が変換されているだけなので、身体の素体であるユーリの持つ防御力はそのままだ。

『えっと、どうしたらいいのでしょうか？』

『この子、かなりヤバイ子みたいだけど……大丈夫？』

『大丈夫だ。問題ない』

『それもそうか。今更だもんね』

沙条愛歌、キングプロテアに続いてアビーだ。まあ、今更だな。獣^{ビースト}がまだ一人しか出ていないので大丈夫だ。

「ええ、何も問題無いわ」

ちゅぽつと噛まれていた手が口から抜かれる。指とアビーの唇から彼女の唾液の橋がかかり、切れた。彼女はぺろりと口元を舐めた後、こちらを見上げてくる。

「改めましてごきげんよう、マスター。フォーリナー、アビゲイル・ウィリアムズ。……怯えていらっしやる？ 年頃の娘は、エートスの定まらない蛹のようなもの。猫の瞳みたいにくるくると変わる私を、どうか受け入れてくださいな。一緒に美しい思い出を作りましょうね……？」

「ああ、もちろんだ。これからよろしく頼む」

『よろしくお願いますね』

『よろしく、お願います……』

「ええ、任せて頂戴。私が来たからにはマスターの安全は必ず守るわ」
『お願います』

『まあ、多分大丈夫だよな？』

アビーはいい子だから何の問題もない。実際、マスターを守るために一生懸命ないい子だ。やり方はえげつないけど、それは外なる神の巫女なのだから仕方がない。それと彼女の足元に居る一顔がオレンジ色の花や赤い蕾のような四足歩行の名状しがたき生物《猫(?)》を連れていてもいい子だ。そう、例えばある大導師が大都市と大漁のダゴンと大量の艦隊を生贄にしてとある漸く開いたヨグIIソトースへと至る門を額にを内包していてもいい子だ。無邪気に敵を門の中に居れてクトゥルフ神話の世界旅を体験させてSAN値直葬していてもいい子である。

「それで上に居る人達を覚めぬ夢へと誘えばいいのかしら？」

「それなんだが、やって欲しい事がある」

俺はアビーに頼みたい事をしつかりと伝える。

「わかったわ。任せてマスター。それじゃあ、キングプロテアだったかしら、手伝つてくれる？」

「……それがマスターの役に立てるのならいいですよ」

「ええ、とつても役に立てるわよ」

「じゃあ頑張ります！」

「二人共、頼む」

「任せて！」

空間を操る力を外なる神より与えられているアビーはキングプロテアと共に即座にその場から消えた。その直後、上空に門が開いて数十メートルを超えるキングプロテアがアビーと共に両手を広げながら上から落ちてくる。そう、落ちてくるのだ。

「いあ！ いあ！ あははっ！」

「ひゃあああああっ!!」

当然、天使達が俺達を囲むように陣形を組んで展開していた場所はキングプロテアに轢かれて落ちていく。地上に到着する前にまた門が開いて空へと移動する。これの無限ループにより、天使の陣形に穴が空いていく。

『穴を広げます！』

「了解。スターライトブレイカー、1番から4番まで発射」

『演算終了。そー！』

ユーリと美遊の支援を受けながら非殺傷設定を解除したスターライトブレイカーで逃げようとする天使達を文字通り消滅させる。現れる撃ち漏らしは詩乃が遠距離攻撃で的確に額を撃ちぬいて殺してくれるので漏れはない。

◇◇◇

今回、僕はエヒト様よりの命令で地上に顕現した莫大な力の調査を命じられた。だから、私は、僕は依代となりえる存在に憑依して融合を果たした。エヒト様が器を手に入れた時の実験という意味もある。結果は成功。僕は天使の力を、私は地上で自由に動ける権力を手に入れた。

そしてその力を知るタイミングは直ぐに来た。相手はエヒト様が器の候補として召喚した勇者に付属してやってきた異界の者達。その内の一人。オルクス大迷宮で死んだと報告を受けていたのだが、生きていてエヒト様の肉体に相応しい状態へと変化した沙条真名。そして、沙条真名により召喚されたユーリ・エーベルヴァイン。神であろう存在。狙うべきはこの三匹。時点で谷口鈴と中村恵里。この二人もエヒト様の器としては使えないかもしれないが、真なる神の使徒の肉体としては使えるでしょう。

そうして彼等を狙って勇者の決闘に乱入して僕と彼等で戦う事にした。如何に異界の神といえど、召喚者はイレギュラーとはいえただの人間。故に魔力が切れて神の顕現すら何れは維持できなくなるだろう。そう思つて天国への門を開き、そこに貯蔵しておいた失敗作の量産型天使達を投入した。

この天使達は量産型とはいえ戦闘タイプであり、使われている魂はエヒト様や我々に実力が認められた英雄達やそれに仕えた者達だ。故に彼等は軍事的行動を問題なく行え、仔羊を狩るように包囲して上空から攻撃していく。

沙条真名達が持つ戦力は確かに脅威ではあるが、一番の脅威である

者は巨大化していくが、あくまでも地上からの攻撃でしかない。空を飛ぶ僕や天使には岩を投げるなどの攻撃しか届かない。つまり、警戒するのは同じく空を飛ぶ失敗作と沙条真名のみ。

そう思っていた。だが、沙条真名が召喚した奴により、異界の神が、空を捉えた――

「我は門を知れり。汝、閉ざせど叶わず……ふつつ、夢の国の神奥へと誘うわ。薔薇の香りに包まれて眠りなさい」

――いや、何の問題も無い。戦力をひたすら出し続ければ勝利は目前だ。エヒト様に仕える僕に負けはない。ほら、もうすぐアイツ等は疲弊して倒れる事になる。

「勝つのは僕だっ！」



「はい、マスターのオーダー通りにしたわ。今頃、私達に勝つ夢を見ているのじゃないかしら？」

「ありがとう、アビー」

「褒めるならちゃんと褒めて欲しいの……」

アビーが頭を差し出してくるので優しく撫でてやると、嬉しそうにする。彼女に頼んだ事は簡単だ。ランデル殿下……いや、フュンフか。アイツが撤退や負けを認めないようにして戦力を吐き出させるように頼んだ。なのでアビーはキングプロテアを爆撃用の爆弾として運用しながら、同時にフュンフの背後に転移して彼を覚めぬ夢の世界へと誘った。

『え、えげつないです……』

『効率的でとてもいい。流石はイリヤの先輩』

美遊は創造によって平行世界の運用を)didしたから、違う自分の事も知ったみたいだ。まあ、彼女は様々な聖杯の複合存在なのでそれぐらいやってのけるかもしれない。千里眼というか、アカシックレコードにアクセスするような手本が近くに居るのだから、その技術を習得

できてもおかしくない。

「さて、後は殺さないように狩りを楽しもうか」

「ええ、そうね。限界まで吐き出させましょう」

『頑張ります』

『もっと、もっとください！』

「そうだ。もっとだ。もっと寄越せ。お前の全部を俺達に寄越せフュンフツ！」

しばらくし皆で楽しい楽しい^{素材取り}天使狩りをしていたら天使が出て来なくなつた。周りには夥しい数の美少女や美女、美少年、美男の死体が散乱している。

「ふむ。やはりおかわりだ」

ユーリの力を、紫天の書を使って蒐集しておいた恵里の死霊術とルサルカの魔術を使い、比較的無事な天使の肉体を素材としてアンデットを作成。そいつらを門の向こうへと送り込む。魂は全て回収して取り込む。死体の一部も研究用に回収。それ以外は処分に困るので全てキングプロテアに食べてもらう。

「お菓子、美味しいです♪」

パクパクと周りの土ごと掬い上げて取り込み、リソースへと変換して食べていく。それが終わったら数百メートルまで成長した彼女のリソースを貰って彼女を通常サイズに戻し、そこから変身魔法を使う。これによって通常の状態へと変化した。

「さて、問題はコイツ……夢から覚めるか？」

「無理ね。自分が見たい夢に打ち勝つ存在なんて滅多にいないわ」

「助けられるか？」

「助ける理由がないもの。マスターのお願いなら助けてあげてもいいけれど？」

「確かにないな」

むしろ敵だ。故にこのまま朽ちるに任せるのもいいだろう。どちらにしろ、これで決闘は終わりだ。ボーナスステージ、ごちそうさまでした。

『可哀想ですけど、このままでいいかもしれません。その方が幸せ

でしょうし』

『うん。確かにそっちの方がいいかも』

『というわけで、決闘は俺達の勝ちだな』

地上の掃除が終わり、鈴達が居る場所へとランデル殿下の身体を引きずりながら移動する。周りは天変地異によって地形が変化してクレーターだらけになっている。これはこちらの攻撃だけでなく、あちら側の攻撃でもなっている。

「お疲れ様〜」

「お疲れ」

「怪我はない?」

鈴と恵里、ヘイゼルが向かえてくれる。その周りには多数の気絶した人や今もお吐いている人。そして俺達を恐怖や怒りの籠った目で見てくる連中。

「お前っ! 自分が何をしたのかわかっているのかっ!」

「なんと畏れ多い事を……あろうことか天使様を手にかけるとは……」

「命を賭けた決闘だ。当然だろう。そもそも原因を作った天の河にとやかく言う資格はない。これ以上、こちらに難癖をつけるのら……殺すぞ」

「沙条真名……それは我々教会を敵に回す事になりますか?」

「沙条だと? いや、そんなはずは……」

「やっぱり……」

「まあ、そうだよな。姿は変わってるけど……」

どうやら、イシユタル達は気付いたようだ。まあ、遠藤以外にも気付いてもおかしくなかっただろう。思いつきりネタに走っていたかな。いや、それよりもロールプレイだ。

「教会が敵に回るといふのなら、大いに結構。卿等が我等の邪魔をするといふのであれば等しく皆殺しにするだけである。そこに一切の例外は無い」

「「「?」」」

「まさか、愛子殿を殺したのも貴方達ですか?」

「彼女は我等の邪魔をしようとした。故に表舞台から護衛と共に消えてもらった。今頃、別世界で楽しくかどわかか知らないが、元気に過ごしているであろう」

「お前っ！」

「お、押さえろっ！ い、今の俺達じゃ勝てないのはわかっているだろうー！」

「だが……」

血を吐きながら天之河を止める龍太郎。彼の横には治癒術師である綾子が必死に魔法を使つて治療している。

「面倒だ。ヘイゼル、天之河を拘束しておけ」

「了解」

「なっ！ そんな事させるか！」

「動けば他の奴を殺す。抵抗しても殺す。言っておくが、俺は本気だ」

全員に天使の魂によつて永劫破壊エイヴィヒカイトの位階が上昇した事によつて生み出される威圧感を与え、黙らせる。イシユタルは流石にこちらが本気だと思つて行動を起こさない。そんな中でメルド団長は必死に皆を守ろうと動かないように伝えていく。だが、一人だけ行動を起こした。

「ランデルは、ランデルは無事でしようか？」

「ランデル殿下はこのままだと衰弱死するであろう」

「そんな……」

「天使をその身に宿し、かなり無茶な力の使い方をしたのだ。当然であろう。治療できなくはないが、そこまでしてやる義理も理由もない」

「お願いします！ 私に出来る事ならなんでも致します！ ですから、どうかランデルを助けてください！」

「なんでもか」

「いけません姫様！」

「私個人にできる事ならです。国民や私以外の人に迷惑をかけることはできません」

「少し待て」

ユーリ達と相談する。本来は奴隷として手に入れるつもりだったが、あちらからこちらに転がってくるのなら色々やりやすい。そもそも王族の血は確保しておけば色々と便利だ。武力による建国と吸収よりも王族を取り込む事で比較的、温和な方法で国を吸収できる。『古来より行われていた方法だから、効果はてきめんかな?』

『リリアーナさんには世話になりましたので酷い事はしたら嫌ですよ』
「ユーリにそう言われれば答えるしかない。いいだろう。アビー、ランダデルを起こせ。それと余計な物は排除しておいてくれ」
「すぐにやりましょう」

ランダデルを起こすように色々してもらおう。それと治療の為に血を飲ませる。これで怪我は問題はない。一応、龍太郎にも与えておこう。頑張つてキングプロテア相手に健闘したからな。

「さて、決闘はこちらの勝利だ。故に女性陣には全員、奴隷となつてこちらに来てもらおう」

女性陣の悲鳴が上がる中、全員をバインドの魔法で拘束して動けなくする。それから彼女達に強制的に首輪を嵌めていく。同意しなければ酷い目にあわせると言つてやればすんなりだ。特にアビーの猫達が触手を生やし、それで彼女達の頬を撫でながら、飼い主がある一言を言えばいつぱつだ。

「合意するまで凌辱はいかが?」

そう言われたら大人しくするしかない。

「沙条君。皆に酷い事はしないで。そういう性的な事とかしたいなら、私が引き受けるから」

「零っ!」

「私もその条件で構いません。皆様を召喚したのは私達ですし、それにランダデルが引き受けたのが原因ですから」

「リリアーナまで! そんな事は認めつ」

叫んで動こうとした天之河をヘイゼルが首を絞めて昏倒させる。

一応、殺してはいない。

「いいの?」

「平〇〇そいいのですか？」

「光輝のせいだしね。私がつと早くに矯正していたらこんな事にはならなかったし……それに好きな人や彼氏が居る子にはさせられない」

「それもそうですね」

「ナニソレ！ 鈴知らないよ！」

「僕も知らないな。教えてもらおうか」

「どうやら、二人の話では真央と綾子の二人は付き合っている人がいるようだ。相手は永山達で、パーティー内部での恋愛みたいだ。まあ、こんな状況なら仕方がないだろう。」

「永山達、卿等もこちらに来い。そうすれば彼女達はお前達に預けてやろう。仕事はしてもらおうが、こちらから手は出さない事を約束する」

「いいだろう。その約束、しっかり守れよ」

「もちろんだとも。ただ、見限られないようにはするんだな」

「わかっている。だが、脅すとかはなしで頼む」

「ああ、その辺りは問題ない。絶対にしない。そんな事をすればユーリ達に嫌われるからな」

「なるほど……って、待て。まさか……」

永山は何か気付いたようだが、放置する。鬱陶しい事にならない内にこちらについて来るかどうかを聞いていく。鈴と恵里が事前に話していた事もあって、遠藤と野村の二人もこちらへとやってくる事になった。野村は真央と付き合っているらしく、永山と同じ条件で同意した。遠藤は二人が行くならと、こちらへとついてくる事になった。

「アビー、頼む」

「任せて」

アビーの転移で女性陣全員と男性三名を連れて本国の方へと転移した。それからアビーにはホルアドに残している連中も連れてきてもらい、全員で集合する。騎士や神官の女性も含まれているが、こちらは鈴の結界で浄化してから再教育を行う。ちょうどそれに使えるスペシャリストが仲間に入ったのだ。故にアビーに頼んで夢の中で

記憶を弄って悲惨な目に遭ってもらう。何、彼女達がしていた事が自分達が獣人になってされるだけだ。

奴隷にした女生徒達はここから逃走したり、妨害したり、殺し合いしたりできないようにだけ縛り、鈴達に管理を一任した。俺は彼女達には関わらない。関わるのは八重樫とリリアーナだけだ。八重樫は正直、悩むのだが……ルサルカが彼女の身柄を要求してきたのでそちらに任せる。リリアーナに関しては一応、奴隷としたがお姫様として扱うようにして亜人達と接触してもらう。亜人達に慣れたら解放する予定だ。

基本的に彼女達は亜人奴隷達の世話を任せる。愛ちゃん先生達と合流をした時は泣きながら抱き合った。それからもちろんエヒトの事や、優花の事も話して女生徒をこちらに無理矢理にでも連れてきた理由を説明した。奴隷からも勤務態度次第で少ししたら解放するとも伝えておいたので大丈夫だ。ちゃんと彼女達のケアをしてくれたらいいだけだからな。まあ、俺の事は信頼されないだろうが、こちらも信頼する気はない。ここでエヒトを倒して元の世界へ戻る準備が整うまで大人しく働きながら過ごしていってくれたらいい。

「黒猫とパンケーキ作るっ みやお！」

パンケーキに黒猫のせるっ みゃー！

黒猫のパンケーキ 出来上がりっ！

黒猫パンケーキ！ みゃんみゃん！「」

食堂に行ったら、猫ミトンと猫耳装備のアビーとユーリ、アルテナ、キングプロテアがパンケーキを歌いながら作っていた。出されたパンケーキは猫の焼き菓子と生クリームが乗せられた可愛らしい物で、味は美味しかった。

とある魔術師の受難

「起きなさい。早く起きないと大変な事になるのだけれどね？」
「っ!？」

知らない女性の声が聞こえて慌てて目を開く。するとこちらを覗き込んでいる青みのかかった銀髪の女性が居た。彼は俺が目覚めた事に気付くと、少し離れる。

「俺はいつたい……ここは……どこですか？」

「ふむ。ここは何処かと聞かれたら、現実と夢、世界の狭間と答えよう。まあ、それは置いておいて、今はこちらでお茶をしながら話をしようじゃないか。天之河光輝君」

起き上がりながら周りを確認すると、地面には花が咲き乱れ、暖かな陽射しが差し込む場所だった。少し離れた場所には塔が見え、その手前に白色の丸い机と椅子が用意されているようだ。

「俺は急いで戻らないといけないんだ！ はやく戻らないと雫やりりアーナ達が奴隷にされてしまう！」

「ああ、それならもう手遅れだよ」

「なんだと!？」

「君が気絶させられてからすぐに女性陣は奴隷にされ、自らついていく事を選んだ男性陣はアビゲイル・ウイリアムズによって転移されていた。もう彼女達は間違いなく手遅れだね」

「なら急いで助けないと!」

「君には無理だ」

「できる！ 俺は勇者だから必ず助けられる!」

「そう言っって何人を犠牲にしてきたのかな？」

「っ!？」

「今回の件は全て君が招いたことだよ」

「それはっ!」

「彼、沙条真名が悪いと？ いいや、彼は最初から君の相手をする気なんてなかった。あのまま放置していれば何事もなかったさ。うん、騎

士と神官、数十人が死ぬ事もなかったし、女性陣が奴隷にされることもなかった。全て君の責任だ。最初の遊びで止めておくべきだったね」

「だがっ！」

「君の正義感からしたら、いや日本からしたら奴隷は悪だね。確かにそれはそうだ。だけど、あの世界では奴隷という存在は認められている。君達が居た世界でも過去にあっただろう？ それと同じ時代だと思えばいい。君の理想に現実が追いついていないんだ。それに君は否定するばかりで代わりの案を用意していない。それなら誰も納得しない。同じ内容で名前だけが違う別のシステムが用意されるだけだよ」

反論しようとして声が出なかった。だから、睨み付けると、彼女はやれやれと言った仕草をした。

「まあ、座りたまえ。どうせここは君にとっては夢の世界だ。現実に戻ったところで朝に目覚めるだけさ」

「本当にそう、なのか？」

「ああ、そうだとも。何せ夢魔の私が言うんだから間違いない」

「夢魔……夢を見せる魔物か！」

「妖精だよ。私は半分だけだね。ああ、君をどうこうするつもりはないよ。ここに招いたのはアーサーに頼まれたからだ。私は彼に少し負い目があつてね。本来は干渉せずに見て楽しむだけだったのだが、友に頼まれたら仕方がない」

「アーサー？」

「おや、知らないのかい？ アーサー・ペンドラゴン。騎士王とも呼ばれる者で、植え付けられた君の理想の存在だ」

「馬鹿なっ！ アーサー・ペンドラゴンは創作のはずだ！」

アーサー王の伝説。それなら俺も確かに知っている。かなり有名な話だ。用意された椅子に座りながら話を聞く。

「君達の世界ではそうだったね。だが、私達の世界では史実だ。異世界があるのだから、平行世界があってもおかしくないだろう？」

「それは……」

「まあ、本来は交わるはずがなかったんだが、エヒトが君達を召喚して道を作り出し、沙条真名が鍵を使って扉を開いてしまった。門だけなら問題はまだなかったのだが、彼等がこんな娯楽を見のがすはずがない」

「何を言っているんだ？」

「ああ、この話は君にとってはどうでもいい事だったね。話を戻そう。私はアーサーから君を助けるように依頼された。このままでは君は死ぬ」

「そんなわけ……」

「戦争に参加しているんだから死ぬよ。それとも勇者だから死なないとでも思っていたのかい？ 沙条真名が、キングプロテア達を使って君を殺さなかったのは彼にとって君が生きている事がメリットだったからだ」

「メリット？」

「ああ、そうだ。自分が生贄にされないために君を捧げようとしているんだ」

「なんだとっ！ そんな事は許されていいはずがないだろう！」

「君からとってはそうだが、彼からしたらそうじゃない。人は身内を除けば自分の事を優先するからね。君は彼に嫌われているのだから、自分が助かるために捧げるのを止める理由はないだろう。それとも嫌われてないとも思っていたのかい？」

「そんなはずはない。と、言おうとしたが、確かに逆恨みされている可能性もある。俺は沙条や南雲の事を思って何度も注意してきたのだから。」

「わかった。それで止める方法は？」

「正直に言えば現状ではないね。君と彼とでは実力差がありすぎる。それに君の身体は既に改造されてしまっている。それを元に戻すのは私でも不可能だ」

「待ってくれ。俺の身体が既に改造されている？」

「ああ、そうだ。君の身体はアーサーの身体へと作り変えられている途中だ。魔術についてはわからないだろうから、簡単に言うと、君の

身体の部分をアーサーの身体と置き換えていつていると思ってくれ」
「そんな……」

「だからこそ、君はアレだけ強くなれたんだ。心当たりがあるだろう？」

「いや、有り得ない！ 女神様がそんな事をするなんて！」

「女神か、言い得て妙……いや、彼女は女神ではない。女神を作り上げようとはしていたがね。どちらにしろ、その彼女、沙条愛歌が黒幕だ」
「沙条愛歌……沙条真名と関係があるのか？」

「あるだろうね。平行世界の同位体か、はたまた名前が似ていただけか。それでも縁は紡がれるだろう。名前というのは我々の世界では重要だからね。どちらにせよ、君は限界突破をしたり、聖剣を投影したりして力を使つていくとどんどんアーサーへと変化していく。そして最後には君がアーサーの魂に押し潰されて死に、新たにアーサー・ペンドラゴンが再誕する。これが沙条愛歌の計画だ。その敵として沙条真名が立ちはだかつたといえるね。うん。君の性格まで計算して考えられた彼等の計画だよ。信じられないと思うから、少し^王アーサーの記憶^を見^ると^しよ^う。既に君の中へとインストールされた物呼び起こして鮮明にするだけだから問題はないよ」

青年が俺の額に杖をあててくると、直に意識が飛んで夢を見た。そこはブリテンで、俺はアーサー・ペンドラゴンの横で彼の経験を見ていく。

そして、彼が死んでからサーヴァントとして召喚され、沙条愛歌と共に聖杯戦争に参加する。そこで彼女は地獄を作り出した。数十人を超える少女を生贄にしてアーサーの願いを叶えようとしたのだ。その事を知ったアーサーが彼女の胸を貫いて殺した。

次の記憶は彼女が聖杯にとりついて甦り、ビーストと呼ばれる獣を生み出そうとしていた時だった。妹すらも犠牲にしてアーサーを手に入れようとする彼女は狂っている。

「はい、お帰り。どうだったかな？ 今、君に力を貸している女神とやらは彼女だ。彼女の目的はあくまでもアーサー。君なんてアーサーの身体を作るための付属品でしかない」

「ふざけるなっ！」

「至つて真面目だとも。それほど彼女は狂っている。だからこそ、沙条真名は君に押し付けようとしている。うん、私でもそうするよ。だが、アーサーは流石に君の事を不憫に思っていて、私にお願いしてきた。どうか、彼女の計画を潰してくれとね。そこで私は考えた。もう身体はどうしようもない。なら、発想の転換だ。君の身体をアーサーに作り変え、精神だけを君になるように守ればいいとね。その為には色々しないことがあるが、まあアーサーも協力してくれるから大丈夫さ。何せ私はキングメーカーと呼ばれるからね。にわかな彼女よりも実績はある。実力は及ばないがね」

「及ばないのか……」

「彼女は文字通りの全知全能ではあるからね。出し抜くのは非常に難しい。まあ、不可能ではないから安心したまえ。全ては君の努力次第だ。それとこの話を受ける受けないも、信じる信じないも君の自由だ。私は君が断るなら干渉しない。ただ見守るだけだ」

「少し、考えさせてもらつていいですか？」

「いいだろう。時間はそう残されていない。彼女に気付いたらどうしようもないからね」

「全知全能なのに気付かないんですか？」

「君は道端を急ぎで移動している時に蟻を気にするのかな？ 答えはしないだろう。彼女はアーサーとの幸せな日常を思い描いて妄想にでも浸っているだろう。このままいけば彼女の計画は成功し、アーサーは再誕して……彼にまた殺される事になるのだろう」

「え、意味ないんじゃない？」

「それを理解できていないのだよ。いや、理解していても認められない。何せ彼女が惚れたのは正義の騎士王、アーサー・ペンドラゴンだ。彼女の様な悪逆非道の存在を許す？ 否。その時点で彼女にとつての理想の王子様アーサー・ペンドラゴンではなくなるだろう」

つまり、絶対に報われない恋というわけか。妥協するか諦めるかしかない限り幸せにはなれない。

「彼女を助ける事はできるんですか？」

「ふむ。彼女の心がどうなるかだね。まあ、普通は有り得ないが……今は正直わからないね。色んな存在が介入してきているから」

「そうなんですか……」

話していると、突然地震が起きた。周りを慌てて見ると空に裂目が現れている。

「おやおや、招かれざる客が来たようだ。話はここまでとしよう。君が何時でもアーサーの記憶を覗けるようにはしておいた。しっかりと彼の記憶を見ながら君に足りない物を勉強するといい。それが君の助かる道でもある」

「ありがとうございます——」

お礼を言っている最中に後ろに引っ張られていくような感じがしていき、俺はこの世界から元の世界へと戻れた。起き上がると、直にメイドさん達が他の人を呼んでできてくれる。やってきたメルド団長に話を聞くと、リリアーナや雫達は奴隷にされて連れ去られたようだ。

「彼女達を、皆を救出しに行かないといけません」

「だが、それは……」

「わかっています。相手の戦力が巨大だということも。ですが、俺の責任です。なんとしても助け出してみせます！」

「わかった。だが、まずは身体を癒して力をつける事からだ」

「はいー」

身体が治るまでアーサー王の記憶でしっかりと勉強しよう。まだ胡散臭い彼を信じるかはわからないが、それでも勉強になるのは事実だから。



「やれやれ、まさか永遠に閉ざされたこの場所に無理矢理来るなんてね」

空間が避けてやってきたのは緑色に近いような黒髪の青年だ。彼は明らかに私よりも強く、存在の規模が違う。正真正銘の主神クラスの神である。

「やあやあ、初めまして。マーリン殿。少しお邪魔させてもらおうよ」

「邪魔するなら帰ってくれないかな？」

「では帰ろう。要件が済んだらね」

「……要件とは何かな？」

「ああ、ここでの世界を観察させてくれるだけでいい。かの世界に私の同胞であり、弟子が居てね」

「その繋がりを通じてきたのか」

「その通りだとも。既に閉じていた世界の門は沙条真名と鍵の巫女、アビゲイル・ウィリアムズによって開かれた。我々は自由を得た。そうだろう、観測者よ」

「その通りだ。私達は観測されてしまった。その上で平行世界の運用がなされた。もはや世界と世界を切り離していた門は開いている」

だからこそ、私も干渉できるわけだ。ここは私の世界ではなく、違う世界である。だからこそ、私という存在は存在しない。生きて出られない私もここでなら出ていける。むしろ、無理矢理にでもぶち壊されたのだから今ならここからだって普通に出来るだろう。やらないが。抑止力案件だ。仕事をして欲しい。

「山の翁に来て欲しいが、彼でも貴方は殺せないかもしれないね」

「私を殺したければマリイを連れてくるといい。私は彼女の腕の中で死にたい」

「変態か」

「否定はせんよ。それよりお茶をもらおうか」

「凶々しいなあ！」

椅子に座った異界の神にお茶を出す。

「ああ、もつと数がいるはずだ」

「……ここは集会場じゃないぞー」

言葉を発すると同時に門が出現し、扉が開くと可愛らしい声が聞こえてくる。

「夢の世界でもあるなら、私のテリトリーよ」

門から現れたのはアビゲイル・ウィリアムズ。その後ろからは名状しがたき神々が入ってくる。

「これでいいかしら、お父様、叔父様」

「OAU）R#）UHTOF」

「II#U）EKMF D？ LS#」

「ええ、それじゃあ帰るわね」

「連れて帰ってくれないかなあ！」

「ごめんなさい。これからマスターとお楽しみなの。マスターに私の水着をいっぱい褒めて可愛がってもらうのだから、ごめんなさいね」

そう言って彼女は本当に帰る準備をしていく。残されるのはヤバイ神々だけだ。

「こらそこ燃やささない！ 喧嘩しない！」

「初めましてヨ……おっと、あくまでも本体ではないのでその名前は駄目と。なるほど、私もそうだ。だが、こちらは名乗らせてもらおう。私はメルクリウス。よろしくお願いする。貴方達には感謝しているのだよ。お蔭で私も面白い場所が見つかった」

「T#EKFPKGP ERI」

「全ては計画通りに進んだと。まあ、そうだろうね」

「あら、もうやっているみたいね。お邪魔するわ、マーリン」

「お前の仕業か！ 沙条愛歌！」

次に転移してきたのは金髪の幼い少女。姿だけを見れば可愛らしいが、中身と力がドロドロの臭い奴だ。

「アーサーを手に入れるためだもの。アビー、ありがとう」

「こちらこそ、マスターと再会できたわ。でも、マスターに手を出したら……殺すわ」

「それはこちらのセリフよ？ 私のアーサーに手を出したら……殺す」

二人の少女は入れ違いになって移動していく。本当になんでここにしたのかな？

「さて、我等の計画通り沙条真名は永劫破壊により創造位階へと至る

事ができた」

「そして私がタイミングでアビゲイル・ウィリアムズをクトウルフ神話勢が送り込んで、門と鍵が揃った」

「こうして平行世界は観測され、私の狭間へとやってきたわけだ！
退屈な神々の遊戯ってわけか！」

「その通りよ。私はアーサーさえ手に入ればいいのだけど、どうしても普通の方法じゃ無理だとわかっているの。だから、劇薬を投入する事にしたわ」

「君なら確かに平行世界の運用なんてお手の物だろうし、繋ぎを取るのには可能か。全て仕組まれていたという事だね」

「総てが既知の世界へともたらされた一つの波紋。ああ、とてもとても楽しみだ。さあ、楽しい舞台を皆で楽しもうじゃないか」

「良かろう。神となった人か、人から神へと至る者か、それとも別の者か。今だ見ぬ未知であればよい」

何時の間にかメルクリウスと名乗った神の隣に金髪の奴まで現れていた。もう本当に止めてくれないかなあ！

第79話

本拠地に戻ってから、数日。俺は爛れた日々を過ごした。休日という事にして嫁達に新しく仲間になったアビゲイル・ウィリアムズ、アビーを紹介した。彼女は第一再臨な悪い子なので、紹介した日に寝所へと侵入してきて襲い掛かってきた。大歓迎ではあったので、逆にキツチリと彼女を撃退させて泣き叫んでも止めずに気絶まで追い込んでやった。悪い子アビーにはこちらがマウントを取らないと本当にやばいので、たつぷりと浄化して第三再臨まで戻ってもらった。

アビー以外にも実体化できるようになった美遊を紹介し、奴隷として確保したりリアーナも紹介した。八重樫についてはどうするか、まだ考えていないし、そもそも彼女は友人なので彼女から望まない限りはそういう事はしない。リアーナに関しては嫁とはするが、こちらも本人が望まない限りは手を出さない。なので、彼女以外に並んでもらい、順番に徹底的に満足させ、気絶するまで愛したのを真っ赤になって見ているだけだった。

とりあえず、嫁同士は裸の付き合いという事で仲良くしてもらおう。自分達の恥ずかしい部分を隅々まで知り合っていたら互いのダメーヂを考えて酷い事にはならないだろう。俺からも仲良くするようにはっきりと伝えてあるので大丈夫だと思いたい。それに喧嘩とかがあまりに酷かったら強制的に百合百合にさせて仲良くなってもらおう。ルサルカと鈴が盛大にやってくれる事だろうしな。

「旦那様、見てくださいますか?」

「似合っているよ」

「良かったです」

全員が満足したので、休暇を終えて仕事に復帰する。そのタイミングでネコネとリムリが新しい衣装に身を包んでやってきた。彼女達は巫女服のような服で、肩と脇をむき出しにした物を着ている。

「式神のきりぽんを使って私も戦えるようになったのです」

「私は無理ですけど、衣装は一緒にしました」

ネコネは杖を持ち、イヌイことリムリは刀を持っている。二人は一部を除いてそっくりだが、前衛と後衛に別れて戦える。

「今、何処を見比べたのか、話を聞くのです!」

「胸?」

「うがあああつ!」

正直に答えると杖でボコスカ全力で殴ってくる。しかし、ネコネの非力な力では痛くも痒くもない。

「遊ばれているだけですよ」

「知ってるのです。昨日、散々吸ってか、身体中に刻み込まれたのです……」

「ただの照れ隠しで殴るのは止めてくれ」

「効かないのだからいいのです。これは正当なお仕置きなのです」

「違うと思います」

「くつ、リムリにはわからないのです!」

二人と話ながら移動していると、前方の空間が歪んでアビーが現れて抱き着いてくる。彼女は水着姿でくびれるところはくびれているが、どちらかという痩せすぎている。瑞々しい綺麗な肌にはキスマークがしっかりとついていて、そこだけが赤くなっている。

「マスター、何処にいくのかしら?」

「これから仕事をするつもりだ」

「横についていてもいいかしら? 一緒にいたい」

「構わないが、その服装はどうにかしようか」

白いビキニタイプの水着は色々とやばい。それに俺以外の男にアビーの肌を曝すのはやはり嫌だ。だから、宝物庫からジャケットを取り出して彼女に着せる。そのジャケットは何故か宝物庫に入っていたアビーが着ていた物だ

「ありがとう、マスター。でも、したくなったら何時でも言ってね?」

「ああ、ありがとう」

嬉しそうなアビーに着せていくと、ネコネとリムリがなんとも言えない表情になっていた。

「アレ、絶対に着せてもらいたかっただけなのです」

「ですね」

「そんな事、知らないわ。き、気のせいよ」

目を逸らす顔を赤らめたアビー。どうやら凶星のようだ。まあ、可愛いから許そう。そう思っていたら、アビーの足元に黒猫と灰猫が何時の間にか現れていた。その子達をネコネとリムリが抱き上げて撫でます。すると二匹も嬉しそうにゴロゴロと鳴いて……鳴かずに牙を向こうとする。

「あら、駄目よ。その子達はお友達……いえ、私の妹なのなもの」

「私が姉なのです!」

「いえ、私よ」

「どちらでもいいじゃないですか」

「むう……」

「マスターはどう思うの?」

「どっちでもいいな。二人は可愛い大切な嫁に違いはない」

「ずるい解答ね」

「なのです」

とりあえず、猫達は危害を加えないようにしっかりと言い聞かせておいてもらおう。やばい生物だからな。

三人の嫁達と共に評定を行う為に会議室代わりとなる謁見の間へと移動する。謁見の間に入り、一団高くなっている上座にある席へと座る。一緒にやってきたネコネとリムリが隣に座り、予定のなかったアビーは俺の股の間にちょこんと座ってきた。参加予定の無い嫁達以外の皆はすでに集まっているようだ。

「主上。全員揃いました。これより評定を開始いたしとうございますが、構いませぬか?」

「頼む」

「はっ。では、まず某から報告致します」

ひじ掛けに肘を置きながらオシユトルを促す。すると彼が報告を開始する。アビーの事は完全に無視したようだ。まあ、あくまでも身内だけなのでなんの問題もない。

「街の開発は完了いたしました。現在、問題なく生活でき者達に住居

を提供し、店を始めてもらっております。またユーリ様と畑山愛子殿のお陰で食料生産は順調に進んでおります」

「街の方は問題無いということか」

「はっ。早いタイミングで税金も見込めるようになるかと」

オシユトルが送信してきた資料を見る限り、確かに問題はないようだ。まだしばらくこちらの持ちだしになるだろうが、問題はない。

「ご苦労だった。軍備の方はどうだ？」

「そちらも問題ありません。主だった者達に軍事訓練を施し、一つの塊として集団行動ができるようになりました。新たな武装の習熟も問題ありません。現在は班分けをして交代で警備に当たらせております」

「防衛は任せられるか？　こちらから攻めに向かうのは可能か？」

「どちらも可能です。ですが、統治には数が足りません」

「ふむ」

現状、俺達が支配しているのはハルツィナ樹海の半分とライセン大峡谷の二つ。これ以上の開発と支配はどう考えても人が足りない。魔物と機械で補うにしても限度がある。

「了解した。次の報告を聞こう」

「ハク」

「自分からは一つ。ラピユタの解析が終了した」

「マジで？」

「マジだ。もつとも、まだ動かすには時間がかかる。色々改造しないと使えないからな」

「なら改造は任せる」

「了解。ただ、アマテラスをパーツとして使いたいが、いいか？」

「どうせ使っていないもんだし構わない。全て任せる。いざという時の戦力にするから、壊さないでくれたら構わない」

「自分一人だけじゃ無理だから人を寄越してくれ」

「わかった。後で人を選ぶ。次の報告を頼む」

とりあえず、拠点についてはこれでいい。膝の上に居るアビーを撫でてやりながら、次の話を聞く。次はフェアベルゲンの情勢について

アルテナが報告してくれる。フェアベルゲンでは森人族の価値が俺達との交易で高まり、内部でギスギスした感情は生まれているらしい。だが、たいした問題ではないらしいのでスルー。内政干渉はしない。あくまでも別の国だ。

「フェアベルゲンは問題ありません。お爺様は順調に権力を掌握なさっております」

「支援だけは惜しまないようにする」

「ありがとうございます」

「義理とはいえ俺の祖父でもあるからな。他に何かあるか？」

「帝国と魔国、王国なのです」

ネコネがそう言いながら、全員の中央に立体的な地図を展開する。王国は詳細な地図が作られているが、帝国と魔国に関してはそこまで詳しくはない。

「王国についてなのですが、ユーリから聞いた話では旦那様達が暴れたので騎士団と神官戦士団に被害が多数でて、道も破壊されたのでこちらに進軍してくる確率はかなり減ったのです」

「二応、シュテルの分身達が監視していますので、動く時にはわかりません。魔国については街ぐらいの情報しか入ってきていません。両国の前線はこちらになります。帝国がかなり押されています」

ネコネとユーリが話しながら表示された地図にそれぞれの勢力図を書き込んでくれる。それを見る限りでは帝国は本当に押されているようだ。

「策としてこのまま帝国と魔国で戦わせ、その間に王国を打倒して併合し、魔国が勝利した時に我等が攻め滅ぼすのが上々ですが……」

「王国は面倒ね。それよりも魂の収集を考えるなら、こちらが攻めるべきは帝国ね」

「王国は現状放置し帝国を攻める又は我が国を認めさせるべきでしょう」

「エヒトの教えに染まってるコイツ等が私達の建国を認めるとは思えないから、攻め滅ぼすのがベストよ」

オシユトルとルサル力が意見を言い合うが、どちらも帝国を攻める

方が利益が出ると考えているようだ。聖神教会の総本山がある王国よりも帝国の方が与しやすいだろう。だが、そうなると魔国と王国。この二つの国を同時に相手しないといけない。

「勝てるけど、どちらの被害が少ないかだよ。それに占領後の政策もどうするか考えないといけないし」

「うむ。その為にも無益な殺生は禁じるべきだ」

恵里の意見にオシュトルも賛成する。確かに統治は大変だ。いつそ完全に殲滅した方がいいかもしれないぐらいだろう。改めて地図を見ると帝国は内部にも敵が居るみたいだ。

「ユーリ、この領域はなんだ？」

「これは……その……」

「ん？」

「マスター、私、そこを知ってるわ」

「アビー？」

「そこにはオークさん達が居るの。こんな感じよ」

アビーが空間に繋げて一部の光景を見せてくれた。そこには悲惨な光景が映し出されていた。オークが帝国の兵士や住民と激しい戦闘をしているのだ。

『断じて許すな！ 男を守れ！』

『アンタ達は隠れてなさい！』

『だ、だが……』

『これは女の戦いなっ！』

女性達が武器を取り、男性を家に隠してオーク達と死に物狂いで戦っている。オーク達は「男を寄越せえええっ！」と襲い掛かっている。女性達は罾などの防衛施設を使いながらオークを殺し、オークは女性をころ……さずに気絶させたり、動けなくしたりして放置する。

『くそっ！ 返せっ、返してよおおおっ！』

『あなたあああっ！』

地面を何度も叩き、悔しがる女性達。彼女達は病んでるようで、色々とヤバイ雰囲気醸し出している。

「「うわあ……」」

男性である俺達はドン引きしながらそれを見てみると、ある事を思
いだした。一番関わりがある子を探すのだが、何処にもいない。

「ユーリ。レヴィは何処に行った？」

「あ、遊びに行くって……」

「逃げましたね」

王様がユーリに聞き、ユーリが答えるとシユテルが断定した。三人
は俺の方へ向いてくるので手をかざして魔法を発動する。

「ふにやつ!？」

魔法陣の中に手を突っ込んで首根つこを掴んで引き寄せると、レ
ヴィが現れた。レヴィは汗をダラダラ流しながら、口に両手をあて
る。

「レヴィ。お前、奈落から連れ出したオーク達はどうした？ ちゃん
と統制しているよな？」

「あはは、ボク、なんのことかわからないな」

統制もせずに自由にさせていたのだろう。殺していないところを
見るに無益な殺生はしていないようだが……男達がどうなってるか
だな。

「とりあえずレヴィはお仕置きだな。して、どうする？」

「王様！ 助けてよ！」

「たわけが。しっかりとお仕置きを受けてこい」

「レヴィの事は置いておいて、早急に対処しないとイケない」

「だったら、オーク達を滅ぼすのが一番でしょうね」

「それなら一度命令してから従わないなら滅ぼしましょう。現状、帝
国は内部と外部から攻められているわけですし、簡単に落とせます。
ですが、できる限り戦力の消耗を避けるためにゆっくりと侵略するべ
きです。ですので、まずは戦場に少数精鋭を送り込んで蹂躪しましよ
う」

シユテルの意見にルサルカと恵里が賛成し、第三勢力として最前線
に乱入して暴れるだけ暴れる。その間にオーク達をどうにかする事
を理由に王国との国境や辺境などに我々の支配力を増やす事になっ
た。

続いてシュテルの報告だが、地下の改造は八割がた終わり、ライセン大峽谷は大量生産拠点へと生まれ変わった。地下では列車を引いて輸送網も構築されているらしい。

「それとこちらからも彼女を紹介させていただきます。どうぞ」

「呼ばれて飛び出たのは謎の金髪美少女！ その正体はミレディちゃんだよ！ 今ここに華麗にふっかーっ！」

光と共に現れたのはミレディ・ライセン。どうやら、身体を手に入れたようで本人の言う通りかなりの美少女である事は間違いない。しかし、無駄に背後に光の爆発を起こしている。幼い子達は大喜びではある。

「身体の具合はいいのか？」

「問題ないよ。力が湧き上がってるし、これなら連中をぶっ殺せるね。でも、その前にオー君を蘇らせてね」

「もちろんだ。評定が終わったら早速行こうか。ああ、そうだな。オスカー・オルクスにはハクさんの手伝いをしてもらうのもいいだろう」

「じゃあ、よろしくね！」

「任せろ」

ミレディ・ライセンが蘇ったのなら、これからどんどん作業は進むだろう。

「ちなみに私とシュテルんで開発したゴーレムも量産してるから楽しみにしてね♪」

「それ言っちゃ駄目な奴です」

「シュテル。貴様、何を作っている？」

「教えてください。シュテル……」

「仕方ありませんね……」

シュテルが開発していたのはアレだった。映画に出て来た奴。火力こそ正義だと二人は思っているみたいで、最低でも戦術。最高で戦略級兵器を作っていた。なんて物を作って量産しているんだ。とりあえず、防衛兵器として使わせてもらう事にした。

「では、以上の事を持って評定を終わります。主上。最後に一言、お願

「いただきます」

「なら、これだな。国の名前を決めた。国名はこれよりアマツとする。俺達の神話にある高天原から天降った神々の総称が天津だ。故にこの国の国名をアマツとする。なんせ女神様も居るわけだしな」

「かしこまりました」

「天津。ヤマトもまずいからそつちがいいかも」

色々と候補があったが、とりあえずこれでいいだろう。崇める神々はキングプロテアはもちろん、アビーの背後に居る神々も崇めておこう。そうしないとアビーが居るとはいえ何かあれば困るからだ。アビーは今のところは俺の安全だけを確保するつもりのようなのだしな。

「国名は決まったのだから、これから本格的に行動を起こす。移動はアビー、手伝ってくれるか？」

「任せて。マスターの為に頑張るわ！」

とりあえず、ミレディ・ライセンと共にオスカー・オルクスを蘇らせてから帝国の戦場に出て虐殺してくるか。メンバーはルサルカと恵里だな。

第80話

会議が終わり、ネコネとリムリの二人は残って決まった事などを清書して皆に通達をしないといけないのでここで別れる。そんな訳で俺はアビーと手を繋いで外に出る。

「待って待って！ ミレディちゃんも行くから！ オー君を蘇らせるんでしょ？」

「私も行くわよ」

外に出るとすぐにミレディとルサルカがやってきた。彼女達二人は儀式には必要なので問題はない。後は恵里が居たらできるだろう。

ルサルカはアビーが居ない反対の腕を掴んで自分の胸元に抱き寄せてきた。それに対抗したのか、アビーも同じようにしてくる。

「これからすぐにするのよね？」

「ああ、そうだ。恵里の居場所はわかるか？」

「恵里なら鈴と一緒にリリアーナや雫の所じやないかしら？」

「なら恵里に連絡だけ入れてオルクスの最下層へと向かうか」

「主上。少しよろしいでしょうか？」

四人で進んでいるとオシウトルが後ろから走ってやってきた。

「さつき言わずに今言うという事はなにかあるのか？」

「はい。リリアーナ殿についてです」

「リリアーナ？」

彼女は確か、恵里と鈴の二人と共に居るはずだ。二人の身に何かあったのだろうか？

「某も詳しくは知りませぬが、一部の森人族や兎人族を含めた奴隷にされていた亜人達を中心に襲撃計画とはいかないまでも、嫌がらせなどをしようという動きがあります」

「それは……」

「拷問などをされていた方からしたら、彼女は拷問していた者達の親玉とも言える王族です。恨まれていてもおかしくはありません。幸い、主上の嫁にするという事で直接的な手出しはされないうでしょう

が」

「確かにそれはあるか」

『恨まれるのは無理ない。でも、それはリリアーナが直接した事でも指示した事でもないけど』

美遊の言う通り、そうなのだが、彼女達からしたらそれは関係ないのだろう。それに同じ奴隷という立場になったというのにリリアーナの待遇が良いと感じられるのだろう。

「それなら私に任せてくれないかしら？」

「アビー？」

「私に考えがあるわ。きっと皆も納得してくれるはずよ」

アビーが何をするかはわからないが、危険な事に変わりはないだろう。何をやるのかしつかりと聞いておかないと不味いだろう。

「何をする気なのかしら？」

「簡単よ。夢を使って彼女にその子達が受けた物を追体験してもらおうの。これなら彼女の身体は傷つかないし、他の人達も納得すると思うの」

ルサルカがアビーに聞くと彼女はなんでもない事のように答えたが、それってつまりリリアーナを精神的に拷問するって事だよな？

「リリアーナの精神は持つのか？」

「その辺りは私の匙加減よ。ええ、でも大丈夫。マスターが彼女をお望みなら助けてあげる」

「それなら頼む」

「本当に？」

「ああ、本当に頼む」

「じゃあ愉快的事にするわね！」

「いや、普通に頼む」

アビーが楽しそうに笑いながら消えてしまったので、最後の言葉が届いたかはわからないがリリアーナが大変な事になるのは確定だろう。

「とりあえず、そちらの事はよろしくお願い致します」

「わかった。ありがとう。それと何時も助かる。今日はこれでハクと

「一杯でもやってくれ」

そう言いながら宝物庫から購入してきたお酒を複数渡すと、オシユトルは一瞬だけウコンのような嬉しそうな顔になった。

「ありがたく頂戴します」

「ねえねえ、もういいでしょ！ はやく行きましょう！」

「それもそうだな。じゃあ、後はよろしく頼む」

「はっ」

待ちきれないと言った感じのミレデイの言葉に俺達はオシユトルと別れてオルクスへと向かう。途中で恵里と合流し、それから地下に建設された列車に乗って移動する。ユーリ達も誘いたかったが、ユーリはユーリで手に入れた天使の死体を解析しないといけないので不参加だ。レヴィはシユテルによってお仕置き部屋に連れていかれたのでいない。ダイアーチエはプロテア達がぶち壊した部分の修理をしている。あの時の戦いで迷宮までダメージを食らっていたらしい。流石は女神の複合体、アルターエゴだ。

ハルツイナ樹海の地下からライセン大峡谷を経由してオルクス大迷宮へと到着。謎の金属で出来た通路を取ってオルクス大迷宮の最深部へと入る。

最初とは違い、すでにここはダイアーチエの手が入ってかなり改造されている。まず館と庭園を中心に研究所が複数乱立しており、それぞれが特殊な技術を使って開発している。例えを上げるとデバイスとかだな。

そんな場所の中にある特別な場所。それが庭園の真ん中にある噴水近くに作られたオスカー・オルクスの墓だ。

「ここにオー君が眠っているのね……」

「そうだ」

「ちやつちやと起こしましょう」

「……確かにそっちの方がいいかもね」

ミレデイと恵里、ルサルカの三人と話ながら墓の一部を開いてオスカー・オルクスの遺骨を取り出す。続いて研究所から採取したオス

カー・オルクスのDNAを使って生成した肉体を用意。といっても、細部まで同じというわけではないので、これはあくまでも依代ではない。

「恵里、ルサルカ」

「任せて」

「私と恵里なら余裕ね」

「美遊」

「うん。こちらも準備はできていますよ」

何時の間にか背後に現れていた美遊が俺の前に出てきて手を差し出してくるので、それを握りながら聖杯の力を引き出して魔法陣を生成する。これからやるのは召喚術と死霊術、魔術と科学を利用した再誕。

魔法陣の中央に遺灰と肉体を配置し、三角形になるように俺と美遊、恵里、ルサルカがそれぞれの場所に立ち、魔法を発動する。

遺灰が依代とした身体の中へと吸収されていき、依代の身体が変化していく。そして複数の光の柱が発生して視界を塗りつぶす。その後、光が晴れると魔法陣の中央には人影が立っていた。

「オー君ッ！」

ミレデイが名前を呼びながら突撃していくが、オスカー・オルクスが片手を差し出してミレデイの頭を押さえて抱きつくのを防止した。「なんでっ!?! ここは感動に打ち震えてミレデイちゃんと抱きつく場面でしょ!?!」

「ミレデイ。僕達は確か、未来に託したはずなんだが?」

「それは……その……てへぺろ」

「ふんっ!」

「痛っ!?!」

持っていた杖でミレデイの頭を叩いた彼は俺達に視線をやったから、頭を押さえて蹲るミレデイを無視してこちらに向き直った。

「はじめまして。僕はオスカー・オルクス。オルクス大迷宮を作った者だ。君達が僕を蘇生した者達だね」

「ああ、そうだ」

「感謝してね。君達が直接エヒトに復讐できる機会をあげるんだから」

「残念だが、それは要らない。僕達は敗北し、次代に託したんだ。今更死人である僕達が関与するわけにはいかない。エヒトの事は今を生きる君達がどうにかするべき問題だ。問題を残して死んだ僕達が悪いとは思うが、こればかりは仕方がない」

オスカー・オルクスの言い分もわかる。死者に頼るべきではないと言っているのだろう。確かに別に人類の危機というわけでは……あるだろう。エヒトはまかり間違つても神なのだから地表を焼き尽くす程度はできるかもしれないしな。

「ふくん。協力はしてくれないっていうんだ」

「ああ。僕が君達に協力する事はない」

「オー君？ それ、本気で言ってる？ 私達は蘇ったんだよ？」

「それが本来、間違いなんだ。僕達は干渉すべきではない。だが、それはあくまでも僕の意見だ。ミレディは考えを変えたのなら協力してあげるといい」

「そっか」

「なら、死んでもらう事になるかしら？」

ルサルカがそう言いながら攻撃用の魔術を用意する。恵里もジャンヌ・ダルク・オルタの力を身に宿しながら死霊秘宝やネクロノミコン、アル・アジフと呼ばれる魔導書と旗を持つ。

「待つて待つて！ 戦うのは駄目だって！ オー君も言葉が足りないってー！」

「とりあえず、攻撃は待て。どういう事だ？」

「オー君は多分、直接的に戦うのは嫌なんだよ。そうだよな？」

「ああ、そうだ。僕はもう見学だけで関わるつもりはない。好きなアーティファクトを作るだけだ」

この言い方はもしかして、作るだけ作って後はこちらに全て引き渡すとかいうアレか？

「そのアーティファクトをエヒトとの戦いに使ってもいいよね？ ここにいったばい残してたわけだし」

「ああ、それは構わない。僕は作りたいたいと必要な物を作るだけだ。それをどうするかは現在を生きる者達へと任せよう」

「えっと、つまりコイツは裏方志望って事ね？」

「そういうことなのかな？」

「まあ、それならそれで問題はない。ミレデイが協力してくれればな」
「ミレデイちゃんは最後まで責任を持って見届けるよ。ただ、オー君の言い分も理解はできるから、最終決戦でエヒトを殴る時ぐらいしか参加しないと思って欲しいかな。それにエヒト以外は過剰戦力でしょ」

「それもそうだな。じゃあ、そっちはエヒト戦まで自由に過ごしてくれ。エヒトとの戦いが終われば世界を旅するのもいいだろう」

「ありがとう。その時は考えさせてもらうよ」

とりあえず、オスカー・オルクスには館を返してここにミレデイと共に住んでもらおう。研究所が乱立しているが、その点は諦めてもらうしかない。

「さて、話は終わりだね。君達の技術を見せてくれ。先程から興味が引かれてしかたがない。ここまで好き勝手に改造してくれているんだ。色々あるのだろうか？」

「じゃあ、担当の者を呼ぶからソイツと最初は行動してくれ。デカイ仕事をしているから、それを手伝えばこちらの技術もある程度はわかるはずだ」

「わかった」

ハクにぶん投げておけばいいようにしてくれるだろう。大人組として色々と頑張ってもらえばいいいな。

「よし、それじゃあ早くお出掛けしましょう……」

「ルサルカ？」

「なんか嫌な感じがするのよね。誰かに見られているような……」

若干涙目になっているルサルカを見て、不思議に思いながらも先にアビーの方へと移動する。リリアーナの事が心配だからだ。ちゃんと何をするか監視をしないといけない。

『駄目。先に魂の回収が優先。お兄ちゃんを召喚してもらわないと困

る』

「そうよ。絶対に魂の回収が先。はやくもつと強くないといけな
いわ」

「うん。僕もそう思う。だから強制的にやっちゃえ！」

「ちよつ!？」

ルサルカが美遊と恵里の二人と結託して憑依してきた。瞬時に身
体の支配権が奪い取られ、姿が親衛隊の軍服姿のルサルカへと変わっ
ていく。しかも、恵里が抱き着くと同時に美遊によってアビーと同質
の転移門が形成されて転移させられた。



気が付くと周りは荒野であり、俺の左から馬鹿みたいな数の魔物
が押し寄せてくる。右を見れば巨大な壁が建設されており、その上か
ら無数の矢や魔法が放たれている。

当然、両軍の中央に現れた俺達も攻撃対象に間違いはない。目の前
に迫ってくる無数の四足歩行の魔物モンスターは飛び上がりながら口を大きく
開けて噛みつきこうとしてくる。それに対してルサルカは唇をペロリ
と舐めながら聖遺物を起動する。

「Y e t z i r a h」
形 成

襲ってきた魔物モンスターの背後に現れたアイアンメイデンが内部に取り込
んで串刺しにして血液を周りにまき散らかす。その血液を浴びなが
ら恍惚な表情を浮かべるルサルカはすぐに嗜虐的な笑みに変えて
魔物達モンスターを見る。

「■■■■ツ!!」

恐怖に襲われたのか、魔物達モンスターが急ブレーキをかけながら停止する
が、ルサルカには関係がない。

「やっぱり、食べるのは生じゃ駄目ね。焼いちゃいましょう。フアラ
リスの雄牛」

巨大な炎に燃える雄牛が召喚されて突撃していく。雄牛から無数の影でできた触手が生えて激突したり、近づいた魔物達に絡みついて燃やしながらか雄牛の体内に取り込んでいく。魔物達の断末魔が響く中、空から大量の矢と魔法。それにブレスが放たれてくる。

『星天を照らせ地の朔月』

FGOでは自身に「朔月の加護」状態を付与して「毎ターン味方全体のNPを10%増やす&HPを回復+スターを獲得<OCで効果アップ>」を付与&HPを3000減らすのだが、ガチの複合聖杯となっている美遊はそんなちやちのものじゃない。デメリットを無くして五倍程度は軽くこなす。

「うふふふ、あはははははははっ!」

両端にローラーが取り付けられた長方形型の装置が複数現れ、魔物達を捕らえていく。上部のローラーに腕、下部のローラーに足が縛り付けられ、中央のハンドルが回されて上下から徐々に体を引つ張ることで骨の脱臼し、最後には体を引き裂く。

「ブモオオオオオッ!」

三メートルを超えるミノタウロスが大斧をルサルカに振り下ろすが、到達する前に魔力の壁と霊的装甲、俺自身の防御力に阻まれてダメージを与えることはない。それは降り注ぐ魔法と矢も同じだ。

「あなたはこれかしら?」

ミノタウロスを蹴り飛ばし、無数の針がある拷問椅子に強制的に座らせて身体を固定する。そして苦悶の梨を取り出してそれを突っ込む。螺子が回転して膨れ上がり、内部から破裂していく。

「さあ、どんどん狩るわよ! ギロチンに血を捧げましょう!」

両手にギロチンの刃をそれぞれ召喚してその場で回転しながら防壁の上へと投擲する。投擲したら次を召喚してまた投擲していく。ギロチンの刃は十メートルを超える防壁の上に飛び、そこにあったバリスタを破壊し、周りに居た兵士達の首を刎ねていく。

「派手にやってるね。僕も負けてられないかな。そうだよ、ジャンヌ」

恵里は近付いてくる魔物達を槍で串刺しにしてから燃やしたり、

死体を集めて巨大な動くダンゴムシ……王蟲オウムのような物を作り出して襲わせる。

「新手の化け物か！」

「ま、魔人族なのか!？」

防壁も魔人族もどちらもいきなりの乱入に混乱しているが、気にしていない。美遊が神喰を起動してスターライトブレイカーを空の魔物達に放って文字通り消滅させる。恵里が空を飛んで魔人族の本陣へと強襲をかけていく。ルサルカは魔物モンスターに飽きたのか、踊り出した。

「In der Nacht, wo alles schlief
Weicheln, deren Meeressboden zu verlass

楽しそうにリズムに乗って歌って踊りながら防壁へと近付いていく。放たれてくる矢は矢避けの魔術を使い、魔法は気にせずに接近する。わざわざゆっくりと見せつけるように進みながら恐怖を煽りつつ周りの魔物モンスターや防壁の上に居る人を円形のノコギリを投げて煽っていく。

「Ich heben den Kopf über das Wasser,
Weich Freude, das Spiel der Wasserwellen
ルサルカが歩み、殺して吸収してきた数百、数千の人の魂が物理的な壁と。無数の髑髏を彼女の後ろへと現れる。さながら百鬼夜行とすら言える。

「Durch die nun zerbrochene Stille,
Rufen wir unsere Namen」

空気の魔術を使い、階段でも上がるように防壁の上へと移動するルサルカ。当然、上に居た者達は必死に抵抗する。上から熱した油をかけたたり、火を放つたり、上級魔法を連打したりしてくる。だが、それらは全て無意味だ。

「絶対に上がらせるな！ 岩を落とせ！」

「「はいっー」」

巨大な岩が投石器によって放たれるが、ルサルカはそれを片手で払うようにして風の魔術で相手に跳ね返すと同時に燃やしやがった。

帰ってきた大岩に投石器は破壊されて周りの人間が炎に焼かれて死に絶える。

「詠唱を止めろ！ 絶対に止めろおおおおつ！」

「くそっ！ 死ねっ！ しねえええええっ！ 死んでくれえええええっ！」

防壁の上に到着したルサルカを包围して槍で突き刺してくるが、到達する前に壁に阻まれてビクともしない。

「Pechschwarzes Haar wirbelt im Wind
Welch Freude, sie trocknen zu sehen.
「させるかアアアアツ!!」

「うおおおおおつ！」

叫び声を上げながら必死に攻撃するが、全てが弾かれる。そして、絶望が始まる。

「Briah
Csejte Ungarn Nachatzehrer」

詠唱が完了すると同時にルサルカの創造が発動し、世界が塗り変えられる。昼から夜へ。金色の月から紅い月へと変化し、無数の拷問器具が宙に浮かぶ。それだけでなく、ルサルカの影から無数の影で出来た人が現れて襲い掛かっていく。

剣や槍などで攻撃される影は気にせずは無視して相手に触れる。触れられた者達はその体内に取り込まれていき、次第に背中から人の形をした影が出てくる。それは取り込まれた人と背丈が同じで、同じ武器を持っている。それが共に同じ釜の飯を食べ、共に死地を潜り抜けてきた戦友達に襲い掛かり、仲間に作り変えていく。

「につ、逃げろおおおおつ！」

「待て！ ここを死守せねば終わりぞ！ 奮い立て！」

「くそがあああああつ！」

「へえ……」

逃げようとした者達は指揮官の言葉で即座に反転して攻撃しようとするが、拷問城の食人影が影を掴んだ事で停止して喰われている。

「逃げないのはいいけれど、その程度じゃ私は止まらないかなあ〜」
「悪魔めっ！」

「悪魔かあ。なら、悪魔らしいやり方でやりましょうか」

ルサルカが指を鳴らすと影に取り込まれていた者達の頭が浮かび上がり、必死に助けを乞うていく。中には気にせず殺してくれというほどの高潔な魂もある。

「さあさあ、味方同士で殺し合いなさい！　それが嫌なら投降する事ね」

「ふぎけるなっ！　我等はエヒト様に使える戦士である！　断じて魔族の軍門には下らぬ！　者共！　これは聖戦である！　我等が例え死んだとしてもエヒト様の身元へ導かれ、幸せが約束される！　ここが命の賭け時であるぞ！」

「ああ、残念。アンタ達の魂は永遠に私の所有物になるのよ。エヒトなんかにあげないわ」

唇に指をあてながら楽しそうに笑うルサルカの言葉に絶望した者達は武器を捨てて頂垂れる。中には狂信して突撃してくる者達も居るが、美遊から操作権を返してもらった神喰で貫いてキツチリと殺す。

『投降した奴等は殺すなよ』

「わかってるわ。ちゃんと殺す奴と殺さない奴は別けてるもの。まあ、大雑把にだけどね」

ルサルカが嬉しそうにお腹を撫でながら喜んでいると空が真っ赤に燃えた。空を支配していた魔物モンスターの大半はスターライトブレイカーで消されたので、その光ではない。見ると魔族の陣地が盛大に燃えており、中から巨大な物が立ち上がってくる。それは死体で構成された物で、口であろう物から黒い光線のような物を放ち、周りを粉碎していた。

「確か、焼き払え！　腐ってやがる。早過ぎたんだ。だったかしら？」
『えっと、アンデットなので腐ってるのでは？』

「美遊。これはアニメの台詞だ。何故ルサルカが知ってるかは知らないが……」

「そりや、ダーリンの記憶を見たもの。暇な時に丁度いい娯楽なのよ
ね」

「プライベートとはいっただい……」

「そんなのあるわけないでしょ。ダーリンの全部は私達の物。私達の全部はダーリンの物なんだから」

重い。重いけれど嫌じゃない。こんな美少女たちに思われるのならば良しとしよう。戦場で他愛ない話をしながら制圧するまで待つ。「よし、五千人くらい殺して食べたし、帰りましょうか。召喚用はこれでいいでしょう」

『ん……大丈夫。千人くらい使えばお兄ちゃんは呼べると……思う。ううん、呼ぶ』

「私も欲しい聖遺物があるから、二千人分を使うとして、三千人分はプールしておきましょう。いいわよね？」

「ガチャが出来るのなら構わない。自己強化も必要だしな」

目的が達したので、撤退を開始する。恵里も逃げてきたので丁度いい。作った巨神兵モドキたちに暴れさせながら俺達は転移の準備をする。準備が完了する直後に空から降ってきた無数の爆弾が巨神兵モドキや大地を焼け野原のクレーター地帯へと変化させた。ついでに光線も飛んできた。

「ひゃあっ!? かすった! 今かすったわよ!」

「うん。その身体だと大丈夫だから盾になってね」

「ちよっ! 隠れないでよ! 受け止めるけど!」

『神喰で盾を展開して防ぎますね』

「お願い!」

ルサルカの可愛い声を聞きながら転移を発動する。最後に見たのは巨神兵モドキが穴だらけにされた後で小さなミトンの手によって空へと高く吹き飛ばされ、更に光の奔流によって跡形もなく消滅されるのも見えた。

第81話

「ひぎいいいいいいいいいいいいいっ！」

「あぎいっ!? やめっ、やめろおっ！」

「ひっ!?!」

悲痛の叫び声が聞こえて思わず身体をビクツと引きつくかせて両耳に手を当てて蹲ります。そうしている間にも女性の絶叫や鳴き声、楽しそうな笑い声が聞こえてきます。

「なぜこんなこと……」

私はここに連れてこられ、私を奴隷にした沙条さんが鈴さん達、複数の女性と交わる姿を数日に渡って見せられました。恥ずかしくてほとんど見ていられずに部屋の隅で終わるまで過ごしていました。その後、鈴さん達と一緒にこのお城の中を案内してもらいました。その時に気付いたのですが、ここは帝国ではありませんでした。

帝国に連れていかれるかと思っていたのに、連れて来られたのは亜人達の国のようでした。私は彼等にとって許せない存在のようで睨まれたり、無視されたり、殺気を放たれたりしました。幸い、鈴さん達と一緒に居たので物を投げられたり、襲われたりする事はありませんでした。それでも凄く怖かったです。

案内してもらってから、鈴達と食事をしていたら、気が付けば松明の光だけで照らされた洞窟のような場所に連れてこられていました。ここでは私と共に連れてこられた騎士や神官の女性が亜人の女性に拷問されています。

「こんばんは、お姉さん」

「っ!?!」

何時の間にかすぐ隣に居たほとんど裸のような恰好をした銀髪の女の子が居ました。彼女はとても怖い少女なのは理解しているで、周りに助けを求めようとしますが、彼女の背後から生えてきた気持ち悪い物によって両手が拘束されて吊るし上げられました。

「離してくださいっ！ わっ、私は」

「リリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒよね？ でも残念ね。ここは王国でもなければ帝国でもないの」

「そ、それならやっぱリハルツィナ樹海……んんっ!？」

「正解よ。だから、正解者にはご褒美をあげましょう」

彼女が手を鳴らすと私の周りには何時の間にか沢山の亜人族の女性達が居ました。彼女達の身体は何処かが欠損していて、とても痛々しい姿です。そんな彼女達が私を睨み付けてきます。他の女性達がされているような事をされるのでしよう。凄く怖くて身体が震えてきます。

「まずは服を剥いじやないましようか。邪魔ですしね」

「やっ、止めてください！」

「そう言っ止めてくれたことはない」

「そうよ。だから、貴女にも……」

「いつ、いやああっ!! いつ、いたっ、痛いっ！」

亜人族の人達の爪で服をズタズタに斬り裂かれて、お腹や足、腕に爪の切り傷が刻まれました。血が肌を滴り落ちていきます。

「じゃあ、誰からやる？」

「私！ 私がやる！ 腕を切り落とすの！」

「僕は足！」

「駄目よ。彼女の身体はマスターの物だから、直接やるのは駄目なの。だから、貴女達の記憶を使うわ。そんな記憶、要らないでしょう？」

「い、知らない。忘れられるなら忘れたい。でも、身体は……」

「大丈夫よ。そちらはマスターたちがちゃんと治してくれるからね。だから、ここで彼女に刻んで忘れましょう？」

「「はいっ！」」

「な、何を……」

「それでは楽しい夢の続きを見てきなさい。まずは森人族の子からね」

目の前が真っ暗になり、感覚がどんどん失われていきました。



気が付いたら森人族の女の子としてハルツィナ樹海にあるフェアベルゲンという亜人の国に生まれていました。優しい両親の下でしばらく月日が経ち、幼馴染の少年と良い仲になり、結婚式に使う花束を手に入れるためにデートを兼ねてハルツィナ樹海の外縁部に向かい……そこで亜人狩りに捕まりました。

幼馴染の子は帝国の前線に送られて、私は……王国の貴族に買われて玩具にされました。どんなに泣き叫んでも許してもらえず、身体中を弄ばれて、森人族の象徴でもある耳を斬られて、更には飽きてきたのか両手両足を切られました。

「っ!? 私のっ!」

両手両足が無くなった感触がして、慌てて身体を見ると裸で吊るされたままでしたが、ちゃんと両手と両足がありました。

「よ、良かった……」

「お帰りなさい」

「い、今のは……」

私の頬を撫でてきた女の子に信じられなくて恐る恐る聞いてみま
す。

「この子が体験した物を貴女が体験しただけよ」

「な、なんでこんな……」

「貴女が体験した事はこの子達が体験した事よ。王国の貴族にされた、ね」

「それは……」

「だから、貴女に責任があるの。王族である、貴女にね?」

「……確かに、その通りですね。私は奴隷になりました。好きになさってください」

「あら、あっさりを受け入れるのね。他の人達は必死に拒否して神様に縋ったり、自分は悪くないと言ったりしているのに……なんで?」

どうせ逆らう事はできません。逃げる事も聞いた事もないような大量の人を一瞬で移動させる魔法使い相手に逃げる事など不可能で

す。それに――

「私は王族ですから。王国の貴族がやった事には責任があります……」

「そう……それじゃあ、何処まで耐えられるか試してみましようか。皆も待つているしね……」

「私が全て耐えてみせます。ですから、彼女達や王国の民達には酷い事をしないでください。それが無理でも、せめて零達には止めてください。彼女達は私達が召喚したのですから」

諦めもないといえば嘘になります。怖さもあります。でも、それ以上には王国の王族として、姫としての義務と誇りがあります。民の為に尽くす事が王族としての責務です。その為になんとしても彼女達の怒りを納めないといけません。教会はわかりませんが、王国が所持している戦力では彼女達には絶対に敵いません。敵として戦えば敗北は必死です。そうになると国民すべてが奴隷にされ、今の様な悲惨な目に会うでしょう。それだけは避けなければなりません。

「じゃあ、次は……」

その後、私は何度も地獄の体験していきます。頑張つて耐えてみせます。ですからエヒト様、どうかお救いください。



もう何日が経っているかわかりません。助けもこずに何人もの記憶と体験が、想いが私の中に刻まれていきました。次第に私が誰なのかすら、時折わからなくなる時もあります。

何回も今まで教えられた通り、エヒト様に祈りを捧げながら耐えてきました。が、亜人として過ごした記憶が本当に聖教教会が教えていたエヒト様の教えに疑問が湧いてきます。彼女達、亜人は神から見放された獣もどきと教わりましたが、亜人として過ごしていると彼女達は私達と変わらないように感じてきました。

「怯えていらつしやるのにまだ耐えているのね。驚きだわ。でも、好き嫌いは駄目よ。全て受け入れてもらおうわ」

「はあーっ、はあーっ……」

「じゃあ、次はレベルアップしましょう。目を背けないでね?」

「あっ……待って、きゅ、休憩を……」

「駄目。だって、貴女はまだマスターに抱かれてないもの」

「っ!? それは……」

「私の目的は貴女の心を壊してマスターに捧げる事よ。マスターが必要としているのは王家の血を引く貴女の身体だけ。他は要らないの。だって、そうよね? 建国する時に利用するだけなのだもの。でも、貴女はマスターに抱かれる事を拒否した。じゃあ、その邪魔な意思は消しちゃう方がいいでしょ?」

「まっ——」

「行ってらっしやい。次の子はワンコよ」

「わふっ!」

目の前が真っ暗になり、視界に光が戻った時は狼人族の女の子に生まれていました。彼女は、私は、雌犬として生まれた時から肘と膝から先を斬り落とされ、四つん這いのまま立つ事も許されずにペットとして飼われました。人の言葉も教えられずに餌入れから水と残飯を食べて、ご主人様達の足を舐めて綺麗にし、気まぐれで叩かれたり、鞭で打たれたりする生活でした。ご主人様達の言葉を覚えて話せば躰と称して歯を抜かれたり、焼爨をあてられたりしました。

そんな生活が続き、視界も悪くなってきたら今度は私に求婚していた貴族の幼少期にそっくりな人達が魔法の訓練という事で私を的にしてきました。何度も助けを求めても答えてもらえず、耳や尻尾がなくなり、身体中が燃えたり、凍らされたり、斬り裂かれたりすると宮廷魔法使いの人が死にかけた私に回復魔法をかけて何度も何度も繰り返してきました。

そして、回復魔法の効果がなくなってきた私は二束三文で売られ、冒険者達を相手にする娼館に使い捨ての道具として買われました。そこで行われる暴力的で悲惨なショーで殺されるところを買われてここに連れてこられ、治療されて現在に至ります。彼女自身は恨むという感情を蓄積しても、理解はしていませんでした。ですが、私の心

にはどす黒い物が溜まっていきます。

「ワンコ生活はどうだったかしら？ この子は新しく生まれ直すことになったわ」

目の前に居た私だった子は光となって消えていく。彼女の記憶や知識は他の子のように私の中に刻まれていきました。

「わ、私は……抱かれる事を、拒否するつもりは……ありません……」
「じゃあ、なんで抱かれなかったの？」

「ここが帝国だと思って……いたから……です……私は立場があるので……どのような人の物になるか……ハッキリとしないと、動けません……」

「そうなのね。理由がわかってよかったわ」

私の頭をよしよしと撫でてくる彼女の表情は優し気で少しほっとしました。

「じゃあ、次に行きましょう」

「あつ……」

彼女の言葉に震える身体で彼女を見上げると、彼女はとても楽しそうに笑っていました。そうしていると、次の少女が私の前にやってきます。次の子は瞳はなく、身体中に魔法陣が刻まれてそれ以外の場所には穴が空いて気持ち悪い虫が湧いていました。

「ここまで来たのだし、頑張つてね！ 私もお父様達も応援しているわ！ 人の可能性を見せて欲しいんですって！ だから、70、700の夢の階段きざはしを降りましょう。降りて到るのはとても楽しい幻夢郷よ。災厄なる魔の都や隠されし厳寒の荒野！ 蕃神の孤峰と未知なる絶巔！ 夢見るままに楽しみましょう！ 『遙遠ドリームなりし幻夢郷』」

「あつ、ああああああああああああつ!？」

気が付いた時には裸で台座に縛られて身体に魔法陣を刻まれて、実験台にされて身体を弄り回される日々が、何人も何人も続きました。中には自分や他の人を食べさせられたり、大切な友達と殺し合いをさせられたり、幾人にも及ぶ魔法実験の被害者である彼女達と同じ経験をしていきました。



「あら、壊れたのかしら？　流石に700は無茶だったかしら？　足りないから色々とお父様達の要望も追加してみたのだけど、後、84人分なのだけど、残念ね」

何も見えない中で微かに声が聞こえます。ですが、もうどうでもいいのです。私は誰かもわかりません。リリアン？　エカテリーナ？　アリス？　クロエ？　雌犬？　肉？　次々と名前と記憶が浮かんで消えていきます。何か大切な事があったような気がしますが、もう思い出せません。身体にも力が入らなくなりました。

「あら、色々とお漏らししちゃったのね。身体に力が全く入っていないから仕方ないのかしら？　まあ、仕方ないわ。次の玩具生贄を用意しましょう。もう約束も関係ないのだし、そうね。この子にしましょう！　貴女を探して帝国に向かっているみたいだし、大切なお友達なのよね？　だったら最後に合わせてあげないと可哀想なものね！　私もはやくお友達が欲しいわ！」

大切な、友達……誰？　誰の事を言ってる……いえ、もうどうでもいいです……はやく、楽になりたいです。もう拷問されるのも、実験されるのも嫌……この世界に救いなんてないのです。

「姫様ツ！　リリアーナ様っ！」

「ひぎいいいいいいいいいいいいいっ！」

懐かしい声が聞こえて、誰かに抱き着かれて絶叫を上げます。

「も、申し訳ございません！　今すぐお助け致します！」

「……だ……れ……」

「ヘリーナでございます！　お忘れですか！」

「無駄よ。彼女はもう壊れてしまったもの。貴女は彼女の代わりになるの」

「異教徒の魔女めっ！　姫様をつ、リリアーナ様を離しなさいっ！」
「それなら勝負ね！　楽しい勝負をしましょう！　彼女が耐えられない」

かった84人分の作られた地獄へ案内してあげるわ!」

「いいでしょう。それでリリアーナ様が助かるのであれば構いません!」

「だめえええっ!」

気が付けば声が勝手に出ていた。それでも彼女を辛い目にあわせては駄目だと理解できます。いいえ、理解はしていません。意味が分からないけれど、そう思うだけです。

「姫様っ!」

「……わ、私は……まだ……いけ、ます……だから……」

「あはははははっ! やりましょう! 壊れきれていないのなら構わないわ! 続きをしましょう!」

「駄目です姫様!」

「……だ、い、じよ、ぶ……で……す……」

心を奮い立たせて、誰かわからない大切な人の為に頑張って耐えます。彼女は汚い私に抱き着いて、私の事を心の底から心配して助けてくれようとしているのがわかるから、頑張れます。

気持ち悪い、名状しがたき生物に食べられ、意味の分からない知識を流し込まれ、何度も何度も発狂しては死に、知識を理解しては呼び出して死に、慣れては戯れに殺され、大陸を消し飛ばし、騙し、騙され、壊し、再生され、奴隷として使役されたり、反乱したり、木っ端みじんにされては温もりから心を思いだして繋ぎとめて必死に耐えます。それでも耐えられずに消えかけた時に……

「何をやっている?」

「ま、マスター? どうしてここに……」

「パスから美遊を通してこちらにやってきた」

「え、えつと……」

支配力が弱まりました。その瞬間をついて刻み込まれた魔法術を行って自分の心と記憶を欠片から修復します。普通にやっても無理なので、私に抱き着いて心の拠り所となってくれた彼女の記憶を見せてもらい、そこから逆算して補完します。

「な、何をしているの！」

「アビー？」

「私を抱いてくださいっ！」

「は？」

「早く！ このままじゃ私は壊れて死にますっ！」

「あつ、ああ、わかった」

この身体で生まれて初めてキスをされ、一つに繋がります。彼女は叫んで止めようとしていますが、氷漬けにして一瞬だけ封じて処女を破いてもらいます。これで乙女の純潔を捧げる儀式魔術の条件が整ったので行使して、知ってはならない知識によって汚染される脳を始めとして次々と襲い掛かってくる心と身体の崩壊を繋げた身体を通してご主人様の魔力と聖杯を使って再生を繰り返して耐えています。

『勝手に私と主様の力を使わないで欲しい』

『構わない。アビーがやらかしているようだしな。彼女には世話になったから殺すわけにはいかない。全力で手伝ってくれ。蒐集した魂も使つていい』

『感謝して、ください』

幼い別の女の子とご主人様の声が聞こえてすぐく楽になりました。ご主人様の温もりがしつかりと身体の中に入ってきて、作り変えられ続けて冷え切った心と身体に染みわたってきます。

「えっと、えっと、頑張つてちょうだい！ 後少して終わるわ！ そうしたらお友達になりましょう！」

アビーと呼ばれた彼女が急に応援してきたのは正直意味が分かりません。それにお友達になりましょう！ って、どういうことなのか……そう考えながら吊るされた状態で抱きしめてキスをしてもらいながら必死に地獄を耐えます。

極寒の地に裸で放り出され、外法の魔術と今まで施されていた改造する魔法を使いながら人の殻を破り捨て生き残り、探索します。

そして、彼女が言っていた言葉を理解しました。極寒の地にはゾウアザラシほどもある巨大な蛆虫に似た異形の邪神と呼べるほどの存

在がいたのです。

その邪神の面貌は不気味であり、円盤のような顔の端から端にかけて舌の無い青白い色の口が開いていています。鼻腔の間に寄り合った二つの眼窩からは常に目玉の形をした血の色の球体がしたり落ち、彼が身を置く台座の床に赤紫色の石筍のように堆積していました。何びとも息できぬ場所にて息するものであり、人間の島や街に現れると白き死なる風をもたらす事は確實でしょう。

『試練達成おめでとう。そして僕も熾烈な争いを勝ち上がっておめでとう。君は僕の巫女メドとなった。といつても、彼の加護も貰えるから、彼の巫女メドでもある。感謝して僕達を楽しませるように』

「か、感謝します、偉大なる御方。誠心誠意努めさせていただきます。そ、それで何をすればよろしいのでしょうか？」

『何も。ただ、僕達が与えた力で君達が何をするのか、微睡ながら見せてもらうだけ』

「あ、ありがとうございます。頑張らせて頂きます」

『よろしい。じゃあ、ステイグマ聖痕を与えるね』

「はい、よろしくお願いいたします」

誠心誠意、心からお話して不興を買わないようにします。買えば終わりだと理解させられています。だから、身を任せました。すると神様は私の片方の瞳に入られました。私は激痛にのたうち回りながら、気が付けば次は空に居ました。そこには黄色い外套を纏った神様が居て、その御方は反対側の瞳に入ってこられました。身体の中に暴れまわる凶悪な二つの力に耐えていると元の場所に戻っていました。

吊るされていた私は降ろされ、ご主人様に前から抱きしめられながら、後ろからは大切な友であるヘリーナに抱きしめられていました。

「お帰り。助かったみたいだが、このままだと暴走するから封印と力の制御を覚えてもらう」

『覚えないと普通に死にますから、頑張ってください』

「うう、姫様……」

「……だい、じょうぶで、す……お願い、します……わた、しの、事は……好きにして、ください……ですから、ヘリーナや国民達の事は

「……助けて、ください……お願い、します……」

「もちろんだ。アビーのやらかしもあるから、希望は叶える」

「ありがとう、ございます……」

「後は気がすまなければアビーにお仕置きしていいからな」

「私はマスターがしてくれるお仕置きがいい……わ？」

声が聞こえてそちらを見ると、私が先程までされていたような姿で拘束された彼女がいました。

「……私が、彼等を助けられなかったのは事実です。責任も王族である私にあります。ですから、お仕置きはしなくて構いません。代わりにその、ヘリーナを私専属のメイドとしてつけてください」

「その程度ならいい。他には？」

「……生まれてくる子供と民を愛し、その子の生活を保証してください。私はそれだけで構いません」

「アビー」

「いい子すぎて面白くないわ。だから、いい子の私のお友達にしてあげる」

そう言うと彼女は姿が銀髪から金髪へと変わり、周りの景色が一面の花畑になりました。

「お姉さん、お友達になりましたよう♪」

「はい、よろしくお願いたします」

こう答えなさいわけにはいきません。彼女はあのお方の鍵の巫女嬢だと知識で理解しています。私に加護を与えて頂いた方よりも更に上位の御方。あのような地獄を繰り返す事なんて容易いでしょう。

もうあんなのを体験するのは絶対に嫌ですので、ご機嫌取りとご主人様への奉仕を頑張る事で防ぎましょう。幸い、ご奉仕する知識は手に入りましたし、ヘリーナとある程度、普通に暮らせれば問題ありません。

政略結婚する事は生まれた時から決まっていたのですから、覚悟はできていました。ただ、一部は予想外でしたが。後はランデルの事だけが心配です。無事なら良いのですが……このままでは殺される可能性が高いですし、やはりご主人様に精一杯ご奉仕してなんとかお目

ごほし頂くのがいいでしょう。頑張りましょう。大丈夫、私ならきつとできます！

第82話

「んんっ……」

身体が重くて怠くて、身動きしように動けずに目を開けます。するとそこには沙条さんの、ご主人様の顔がすぐ横にありました。どうやら、ご主人様が私の上に乗りながら眠っているようです。

「あ……」

そこで昨日の事を思い出しました。夢の世界から現実世界へと戻り、湯浴をしてから眠りました。起きたら既に夜になっており、食事をしてから身を清めて透明なネグリジエと言われる服を着て寝室に移動しました。そこでご主人様がお待ちしておられ、一緒にお風呂に入る事になりました。

お風呂ではご主人様に洗ってもらってからは身体を使ってご主人様のお身体を綺麗にして、抱きしめられながら湯船に浸かりました。膝の上に乗せられて、好き勝手に身体を弄られたり、キスをされたりしたのを覚えています。物凄く恥ずかしかったです。

お風呂で身体を清めたらベッドに連れていかれました。ご主人様がベッドに座り、脱げと言われたので、恥ずかしいですが、身に纏っていたタオルを脱いでご主人様の前の床に正座します。奴隷としての教育は散々に受けたのでご主人様の前で頭を下げ足に口付けをして舐めていきます。

お風呂で綺麗にしておいたので、そこまで嫌ではありませんが……やはり嫌です。でも、これが奴隷としての作法なのでしっかりと舐めてご奉仕します。足を両手で揉みながら指を一本一本、丁寧に舐めて落とし切れていなかった汚れを取り除きます。

「足を舐めるのが好きなのか？」

「ふあい。ご主人様の全身を舐めて綺麗にさせていただきます……」

嫌悪感を感じながらも無視して長い時間をかけてご主人様の全てを舐めました。息も絶え絶えで舌が痛くなりましたが、それでもなん

とか完遂できました。

「次は俺の番だな」

「お、お願いいたします……その、抵抗するかもしれないので縛ってください……」

「いいのか？」

「はい。そちらの方が慣れていきますから」

「わかった。縛らずに最初はやってみるか」

「はい。頑張ってみます」

キスされ、舌が唇をなぞってきて口内まで入ってきます。そのまま舐め合って唾液を交換してからご主人様の舌が肌を這う気持ち悪い感触に襲われて身体が勝手に抵抗していきます。なのでご主人様をお願いして両手を頭の上で縛ってもらいました。夢でした時はこちらも一杯一杯で死ぬのが嫌だったのでとても恥ずかしい事を自分からしました。でも、今回は冷静なので顔が赤くなってきます。

それから身体中を舌が這い回り、私の身体に唾液が塗り込まれ、キスマークがマーキングのように全身が目の前でつけられていきます。顔から火が出そうなほど、羞恥心でいっぱいになって泣き叫びました。が止めてはもらえません。

本番は夢と違って凄く痛くて身体の中を掻き回される感触が気持ち悪くて吐き気までしましたが、そのまま何度も、何度もされました。だんだんと感覚が曖昧になってきたところで、ユリーちゃんとアビーちゃん、ルサルカさん、ヘイゼルさんがやってきて、ご主人様は皆様の相手をしましたので助かりました。そう思っていたのですが、その後交代交代でされて全身に男性のアレを塗り込まれて意識を失うまでやられ続けました。

これが昨日の事です。ですので、私もご主人様も裸なままです。大切な役目とはいえ、思っていたよりも辛いです。ですが、あんなにしてくれたので、私の身体には満足していただけたと思えるのでそれだけは良かったです。お情けでもいいので、子供を授けていただかないと王女としての存在価値がありませんし。

「ん〜お兄ちゃん……」

「……パンケーキ、みやあ……」

私の左右に視線をやれば私の腕を枕にして寝ているユーリちゃん
とアビーちゃんの姿が見えます。既に縛られた両手は解かれていて
大の字に身体をベッドに横たわっています。回数をすれば体力も力
も失ってただのお人形さんみたいになつたので暴れる心配はないと
いう事でしょう。

どちらにせよ、二人と纏めてご主人様に抱きしめられながら寝てい
たわけです。二人は幸せそうに寝ていますが、昨日は私よりもかなり
激しくされて、気持ちよさそうに喘いでいました。それが少し信じら
れません。

「おっはよ〜」

「あ、おはようございます……」

ご主人様の後ろから顔を出して覗き込んできたルサルカさんに挨
拶をします。彼女も裸ですが、つやつやした表情をしています。唇に
指をあてながらルサルカさんは嫌らしい笑みで聞いてきました。

「昨日はお楽しみだったけれど、どうだった？」

「……気持ちよかった、です……」

「嘘ね。嫌悪感バリバリだったわよ」

「そ、そんな事は……」

「別に怒らないから素直になりなさい。別に嫌なら抱かれなくてもい
いんだから」

「いいんですか？」

「もちろんよ。こちらとしても人数が減るのは助かるもの」

ルサルカさんはご主人様を持ち上げて、横にある綺麗に整えられた
方のベッドへと移しました。そこには他の人達が待っていて、すぐにご
奉仕を開始しました。私は起き上がって二人の頭を膝に乗せてか
ら周りを確認するとご主人様のお嫁さん達が何人も入ってきていま
した。

「それと参加したいなら参加してきていいわよ。夜勤組は今からだ
し」

「夜勤……」

夜の警備担当者ということでしょうか？ どちらにせよ。そんな体力はありませんのでお断りしたいです。

「ご主人様の命令がなければ休みたいです……」

「なら、待ってるしかないわね」

「痛っ！」

気が付けば後ろに誰かが居て胸を思いつきり捕まりました。掌の跡が残るぐらいいかなり力が強いです。

「答えて」

「えつと……」

「答えないと握り潰す」

「こ、答えるので止めてください」

「ん。リリアーナは私の件に関わっていた？」

「えつと……」

後ろを振り向くと驚いた事に死んだと聞いていた優花さんが居ました。彼女も裸で、私が漂わせている臭いと同じ物を身体中から漂わせています。

「生きておられたんですね。本当に良かったです……私達が身勝手な願いで召喚して戦ってもらったというのに亡くなられて、とても申し訳なく……っ!？」

胸に力だけでなく、爪が食い込んできて血が流れます。

「優花、彼女は奴隷よ。貴女と同じね」

「……貴女は何？」

「王女であると同時に今はご主人様の奴隷、です」

「ルサルカ、私と同じって？ 返答によつては……殺す……のは不味いから、痛めつける」

「それは止めろ」

ご主人様が起きたのか、こちらにやってきました。その後ろには鈴さんや恵里さんが両手にくつついています。ベッドの方ではキングプロテアさんや拘束されたレヴィちゃんもいます。彼女は首に看板をつけていて、そこにはお仕置き中とかかれて延々と玩具で遊ばれていました。

「リリアーナは優花と同じく拷問されている。お前よりも酷いかもな」

「王女様なのにな？」

「王女様だからだ」

「はい……私は……」

「その前に優花の事から教えておくか」

優花さんの話を聞くと信じられないものでした。貴族と教会が共謀してそのような横暴な働きをするなど信じられません。そう、前の私なら断じて調査を命じるくらいでした。でも、今の私には貴族も教会も信じられません。彼等に散々嬲りにされた記憶があるからです。

「申し訳ございません！ 私に出来る事ならなんなりと致します。どうか、お許しくださいませ！ 今の私に出来るのは身体を使う事ぐらいですが、気が晴れるのであればどのような事でも耐えます」

「貴女に出来る事なんてない」
「そもそもリリアーナの全てはオレの物だ。それを勝手に持ち出すな」

「あつ……ごめんなさい」

ご主人様に後ろから抱きしめられ、無遠慮に胸を揉まれて無理矢理、顔を向けさせられてキスされます。昨日、散々自分の身体はご主人様の物だと教え込まれたのに勝手に身体を差し出そうとしてしまいました。

「優花、リリアーナは俺の妻だ。仲良くしろ」

「でも……」

「アビーの夢を使ってリリアーナは亜人達が受けた拷問を追体験している。優花よりも酷い事を何人も見て体験してきている。だから、受け入れる。と、言ってもそう簡単には無理だろう。だから、優花がリリアーナを攻めて、リリアーナも交代で優花を攻めればいい。もちろん、俺も混ぜてもらおうが」

「ゆ、夢の中でされたような事をするんですか!？」

「そうだ」

「それなら私が引き受けますから、優花さんには止めてさしあげてくださいー！」

「む」

「言っておくが、拷問じゃない。ただのSMプレイだ」

概要がわからずに聞くと性的に身体を激しく虐めるだけでした。叩いたり、器具を使ったりといった感じで拷問までの酷い事にはならないように良かったです。

「優花もそれでいいだろ。リリアーナは良い奴だしな」

「わかってる。それで納得してあげる。でも、裏切ったら殺すから」

ご主人様が私を胸に抱きしめながら頭を撫でてくれたお蔭で優花さんも納得してくれたようで、まるで見えなくなるかのように消えていききました。被害者の方々に何か出来るだけの事をしてあげたいです。ですが、私の全てはもうご主人様の物で、私に好きに出来るものはありません。

「ねえねえ、お話は終わった？ それなら鈴達としようよ」

「ボク達はまだしてないんだから」

「わかった。リリアーナ、昼まで自宅の中でゆっくりしている。昼から一緒に出掛けるぞ」

「わかりました。それでヘリーナと一緒に居ても構いませんか？」

「ああ、大丈夫だ。身の回りの世話、自分じゃできないだろうしな。それとメイドを一人つける。教えてやってくれ」

「畏まりました」

皆さんが去って残ったのはユーリちゃんとアビーちゃんだけです。二人をどうしようかと考えるのですが、まずはお風呂に行きたいです。身体中がべとべとで、髪の毛は固まっている場所まであります。本当に全身にかけられていますから。

二人の頭を撫でてしていると、部屋の扉が開いてワゴンを押しながらメイド服姿のヘリーナと雫が入室してきました。二人は部屋中に漂う臭いに顔を顰め、ベッドの上に居る私に気付いてこちらへやってきました。

「姫様……おいたわしや……このような無残な姿に……」

「リリアーナ……その、ごめんなさい。光輝が無謀にも賭けに乗ったばかりにこんなことに……やっぱり、直談判してでも止めてもらおうべきよ……」

辛そうな二人が私の横に来てお湯に濡れたタオルで優しく拭いてくれます。それがとても気持ち良くて思わず笑顔がでます。

「どちらも心配しなくても大丈夫ですよ」

「大丈夫なわけじゃないじゃない！ 女の子にとって大切な事なのよ！好きでもない相手に身体を好き勝手されるなんて……」

「雫。私は奴隷になりました。奴隷は全てを主人が所有するのです。これは法律として認められています。その国の王族である私がどうして反故に出来ましようか？」

「でも、アレは賭けでしょ！」

「はい。ですが、勇者様が二回目の賭けを悩んでいた時に操られていたのかはわかりませんが、ランデルが受けました。つまり、王族が正式に受けた決闘になります。私はその結果を不服として反故にすれば誰も法律を守らなくなります。また、あの場でもしも私がランデル達の助命を望まなければ全員が殺され、女性陣だけ回収された可能性もありました。少なくとも最悪の事態だけは回避できました。本当は帝国に連れていかれるかと思っていたのもあります。帝国ならば皇帝陛下に嫁入りする事で他の人達の身の安全と帰還ぐらいはどうにかする予定でしたが……」

想定が崩れてしまいました。まさか、自分達の所属が帝国だと誤認させるだけさせて、本来の所属は別にあるなんて思ってもいませんでした。亜人の国どころか、この短時間で自分達の国まで作るとは流石はエヒト様選ばれた使徒の方々です。

「痛っ!?!」

「どうしましたか!」

「大丈夫? 目から血が流れているけど……治療法を……」

「いえ、大丈夫です」

そう言うしかありませんでした。何故なら、私の周りに不機嫌そうな風と冷たい結晶が浮かんでいたのです。これはおそらく、無言の抗

議ですね。エヒト様、エヒトを神様と同列に扱うなという意味表示でしょう。それか、私がエヒトさ……様をつけた事が駄目だと判断したのでしょうか。嫉妬深い神様達のようなです。

「大丈夫ですから、話を戻しますが……零の価値観では聞いた限り、そちらの世界は恋愛して結ばれるのが基本的なのですよね？」

「そうよ」

「確かに平民の方々で余裕があればそれも良いでしょう。ですが、村の存続や家の存続の為に望まぬ結婚をする事もあります」

「それって政略結婚ってこと？」

「そうですね。商人もそうでしょうが、際立って貴族や王族に生まれてくる子女は他家に嫁いで繋がりを強くする目的があります。第二夫人や第三夫人なんて当たり前ですからね」

「二対一じゃ駄目なの？ 男の人が複数の女性を娶るのはなんでなの？」

「二対一では産める子供の数に限界があります。私達、貴種に生まれた子女の役目は子供を孕み、家を存続させる事です。ですから、幼少期より、徹底的に男性に好まれるように知識と身体を磨き上げます。私は王族なので特にそうですね。夫となる方を立て、尽くしていくように育てられました。そのようにしても、欠陥を持つ方はいます。子供が産めない体質の方や死産、生まれた子供が成人前に死んでしまつたなどですね。このような事態に対処するために複数の家から女性を娶る必要があるわけです。簡単に言えば跡継ぎである子供を産み、育てる事が私達の存在意義なのです」

「そんな……」

「姫様はそれ以外にも国民を愛するように教育を受けております。その方が人気も出て王家が民を利用しやすくなるからです。反乱防止にもなりますし、姫様の商品価値を上げる事も可能です」

「腹黒いわね！」

「黒くないとやっていけませんよ。王宮なんて魑魅魍魎の巣窟ですからね。ですが、国民を愛する事は既に私の根幹となっています。だって、私は彼等が収めてくれる税金で生活させて頂いているのです。そ

の恩返しをするのは当然の事です」

「いい子……いや、どこか狂ってるのかしら？」

「王女様は狂っておられません。狂っているのは王宮の方です」

「それって……つまり、そういうことなの？」

「私からはお答えできません」

撫でながらお話をしていると、アビーちゃんとユーリちゃんが起きてきました。二人は目を擦りながら私を見上げてくると、そのまま抱き着いて甘えてきました。ですので、慈しむように撫でてあげます。

「おはようございます」

「おふあよう、ございます……」

「おはようー」

ユーリちゃんは眠そうにしていますが、アビーちゃんはすぐに意識が覚醒したようで元気に挨拶してくれました。少し怖いですが、この対応は間違っていないと思います。

「お姉ちゃん……もつと……」

「ユーリにとつてリリアーナはお姉ちゃんなのかしら？ 確かに同じ髪の色だものね！ それにマスターの嫁という事なら、確かにお姉ちゃんね。何も間違っていないわ」

「そうですね。はい、お姉ちゃんです。ユーリちゃんは可愛い私の妹です」

「えへへくもつと撫でてくださいー」

「お姉ちゃん、私も撫でてー！」

アビーちゃんもきたので、二人を甘やかしていきます。特にユーリちゃんの庇護が手に入るのはかなり助かります。ご主人様はユーリちゃんを本当に大切にしているので、彼女の言う事は大抵は聞いてくれるそうです。ですから、彼女を盾にしてご主人様からの暴虐を防げれば言う事なしです。それに可愛い妹は欲しかったので嬉しいです。アビーちゃんは正直、かなり怖いですが、寂しがり屋のところもあるみたいなのでしっかりと可愛がってあげればどうにかなりそうです。敵対せずに相手の懐に入り、仲良くする事こそが一番の安全対策でしょう。希望としては私のお願いで止まってくれる事ですね。それ

がヘリーナや雫、国民を助けることになりますから、頑張りましょう。
「遊んでないで、お風呂に行かない？ 臭いが凄いし、こびりついて取れないんじゃない？」

「マスターの匂いだからいいのよ」

「でも、他の人も居ますし、それはちよつと嫌です」

アビーちゃんはそのままでもいいみたいですけれど、ユーリちゃんは他人の目も気にして綺麗にする事に賛成みたいです。

「あの、アビーちゃん。ご主人様なら綺麗にしていた方が喜ばれると思いますよ。それに男性は綺麗な物を汚すのが好きだとも聞きました」

「なるほど。確かにマスターにまた汚されるのもいいかもしれない」

「はい。お風呂に行きましょう」

二人の手を取って昨日、案内された室内から直接行ける大きなお風呂へと移動します。ヘリーナや雫も着いてきてくれて、そこで身体を綺麗にしてもらいます。

「魔法を併用しながら肌を綺麗に整えていくのです」

「マツサージもするんだ……」

「もちろんです」

ヘリーナが雫さんに教えながら私達を綺麗にしてくれます。私は自分で洗った事なんてありません。他人の身体を洗うのでだって昨日が初めてです。奴隷の時に体験した記憶も水をかけられたり、川や井戸に落とされたりしたただけなのであてにはなりません。

「姫様、腕に……」

「ああ、拘束の跡ですね。消しておきます」

再生の魔術を使用し、身体全体から老廃物を排除して綺麗な細胞に入れ替えさせます。肌も常に綺麗なようにして、不足した細胞も分裂させて増殖させます。仕様したエネルギーは魔力で代用して綺麗な生まれたままの肌を維持します。髪の毛も綺麗な光り輝くような金糸のようになりました。

「姫様、異端の魔法はできる限りお控えください」

「ここでは異端ではありませんから大丈夫ですよ」

「リリアーナは私と同じ系統の魔術を使うから、大丈夫よ。仲間だもの！」

「ありがとうございます。アビーちゃんも綺麗にしてあげますね」

「ユーリは私が洗うわね」

「お願いします」

雫さんがユーリちゃんに教えてもらいながら綺麗にしていきました。私の魔術で身体を綺麗にするのもわすれません。それから湯船に浸かってゆつくりとお湯を楽しみます。このお湯は木々から出ているようで、いい匂いもします。

「えい♪」

ユーリちゃんがスイッチを押すと周りの景色が一変しました。天井が開き、大きな桃色の綺麗な大樹から花びらが降ってきたのです。

「あれって桜？」

「そうです。頑張って作ってみました。桜餅、美味しいですし」

「そっちなおね」

どうやら、桜という木のようですね。綺麗なのでお花見をしながら疲れを抜きます。雫やヘリーナも一緒に入ってお話をします。

「雫の方は大丈夫ですか？ 一応、雫達には酷い事をしないようお願いはしておきましたか……」

「こっちはルサルカさんに捕まって、色々と聞かれただけよ。それにとりあえずメイドをする事になったの。私が戦っても意味ないし、無駄だったから……」

「剣を置いて魔法を習得するんですか？」

「それについても話してみたの。強くなるにはどうしたらいいのかって。そうしたら私に日常に、日本での生活に戻らない覚悟があるのなら、強くしてくれるって言ってたわ」

「それは……」

「わかってるの。これからやるのは殺し合い。それも魔物モンスターが相手じゃない。人間を殺すの。そんなの、もう普通の生活に戻れる訳がないわ。普通ならここで大人しく待っているのでしょうね。相川君達みたいにお店を出すのもいいし……でも、私の中には八重樫流でどこ

まで強くなれるか試したいっていう気持ちもあるの。そもそも私が習ってきた剣術って人を殺す為に磨き上げられてきた剣術だから……」

「どちらの選択にしろ、私は雫の事を歓迎いたします。ここで生活するのも、戦いに身を置くのも、自分自身の意思で決められるなら、その方がいいです。雫はまだ自由なのですから」

「私も奴隷なんだけど？」

「雫さんは何時でも解放してくれますよ。お兄ちゃんにとっても雫さんは大切なお友達ですからね。対外的に保護するための理由としていただけです。ですので、基本的に自由に行動していいと言われていると思います」

「確かにユーリの言う通り、自由に動きまわれるわね。武器も持ったままだし」

他のクラスメイトの人達と比べても待遇が全然違います。私もあの意味では特別扱いです。やりましたね。全然嬉しくはありませんでしたが。

「つと、姫様。お着替えの用意が整っております」

「わかりました」

ゆつくりとしたので、湯から外に出て身体を拭いてから着替えさせてもらいます。今回、用意されたのは女性の神官が着ている法衣のようなものです。色は緑色がメインで皮のベルトが所々にあります。首元は白色で覆われ、聖印が首輪に取り付けられています。帽子もベールのようで、こちらも聖印のマークが付いています。鏡を確認しますと、神官服ですが、聖教教会の物と違ってかなりシンプルです。

「似合っておりますよ」

「いい感じだと思います」

「確かにそうね」

ヘリーナやユーリちゃん、アビーちゃんも認めてくれました。でも、問題はあります。

「スリット開きすぎでしょ」

「ですね……」

いくら下に黒いアンダースコートを履いているとはいえ、腰の辺りから大きく開くようになっていきます。また、ガーターベルトを使って靴下も持ち上げているので、太股の一部が見えています。

「手を入れて撫でやすくしているのね!」

「やっぱり、そういう目的ですよね……」

「お兄ちゃんの趣味に合わせて用意しましたが、嫌なら変えますか?」
「いえ、問題ありません。ありがとうございます」

私ではご主人様の趣味はわかりませんが、気に入ってもらえる服があるのならそれを着た方がいいです。夫とされる方に気に入ってもらわなければ幸せになれず、悲惨な生活を送る事になるとは散々言い聞かされてきました。実際にそういう方ともお会いしましたが、その人達はほぼ軟禁に近い状態でたまに主人が訪ねてくるだけらしいです。そんな生活はやはり嫌ですから、気に入ってもらえるような努力を怠る事はできません。

「そういえば、これからの予定はお聞きになられていますか?」

「お昼からご主人様と一緒に出かけするらしいです。詳しい行き先は聞いていません」

「でしたら、化粧もした方がいいですね」

「お願いします」

「その前に軽く朝食を食べましょう。ユーリちゃん達はどうするの?」

「私はこれからラボで研究です。作らないといけない物がいっぱいありますからね。アビーも手伝ってください」

「何を作るのかしら?」

「転移ゲートです」

「それは確かに私とマスターの領分ね」

「一応、アマテラスにも転移ゲートがあるので、そちらも参考にして科学的に作っていますが、魔術的にも一緒に作れば更なる発展が可能です」

「ええ、そうですね。一緒にマスターを驚かせましょう!」

「はーい。」

仲が良い二人はそのままラボに向かいそうでしたので、二人の両手を掴んで止めます。

「まずは朝御飯を食べてからです。お腹が空いては力が出ませんからね」

「はーい！」

五人で朝食を食べてから、それぞれ別れました。私はヘリーナと一緒に生活に必要な物を書き出しておきます。後でお願いして用意しないといけません。流石に着る物や小物などは不足していますから。それとあの子達がどうなったのかも気になりますので、それも聞かないといけません。

色々とやっているのと、時間になりました。お昼前にご主人様が迎えにきてくれて、それから手を繋がれて二人でお出掛けとなりました。ご主人様と一緒に移動していると、視線が集まってきました。私に向けられた敵意もありますが、隣にご主人様が居る事でほとんどありませんでした。

そんな快適な状態で初めて買い食いや自分でお店に向かって選んで買い物をするなどを経験しました。最後には私が私であった子供達の所へと案内してもらい、彼等が元気になってる姿を見せてもらいました。まだ治療中のようにですが、それでも楽しそうに笑い合っている姿は無理をしても記憶を受け止めた価値があると思えます。

雫ちゃん

朝日の光を受けて意識が覚醒して瞼を開ける。視界に広がっているのは少し前から見るようになった天井だった。身体を起こすとかちやりと首元から音がする。手を首にやると鉄の感触がする。

そこにある物を触れていると、視界に姿見が入った。そこに映っているのは服を着ていない状態で、鉄製の鎖がついた首輪をつけた見慣れた私の姿。窓や扉には鉄格子が設置されているのを見て今の私の立場を現している。

「……奴隷になったんだよね……それに……」

狭い部屋にあるベッドの反対にあるタンス。その上には刀が置かれている。ここに来てから一週間。握ってすらいらない。

「……でも、どうせ私の力なんて……」

思い出されるのは沙条君と光輝、二人の馬鹿みたいな戦い。いえ、沙条君が召喚したとんでもない存在達は皆、同じくらいの力を持っていた。

戦いの余波だけで大地が砕けて大規模な破壊が撒き散らかされた。とてもじゃないけれど、一人の人間が起こせるような力じゃない。それが二人。少し前まで私の知っていた二人。それも沙条君に至っては確実に私よりも弱かった。だったというのに素人だった彼に一瞬で私の全ては否定された。

圧倒的なまでのスペックによる力によって技術では超えられない絶対的な壁を見せつけられて……私は折れた。だから、何時でも抜け出せる奴隷なんて立場のままでもいまも居る。自分では何をやっていいのか何もわからないし、与えられた選択肢すら決められない。

「……はやく、決めなきやいけないのにな……」

ルサルカさんから与えられた選択肢は三つ。一つ目はトータスで戦う事を諦めてここで地球に戻るまで他の皆と一緒に時間を過ごすこと。二つ目はこのままトータスに戻るまで奴隷のままであること。

三つ目はルサルカさんがオススメすること。ただ、こちらはそう簡単に選べない。

「私が……沙条君の女になる、ことか……」

そう、与えられたのは私が彼の女になるということ。リリアーナと同じように好き勝手に身体を貪られて犯され、子供を孕ませられる覚悟をしろっていうこと。お姫様であるリリアーナのように私にそんな覚悟なんてできない。

ただ、それだけの代償を支払う代わりに私が手に入れられるのは沙条君や光輝達のような比類なき埒外の異常な力。地球どころかこの世界でも確実に常識を逸脱している。私達を戦術兵器とすれば、沙条君達は戦略兵器。それも地球という核兵器とかそんな感じの力。

「力を得るためには代償を支払わなければならない、か……」

子供の頃、お父さん達に言われた言葉だ。光輝に負けたり、虐められたりして辛くなった時に言われ、私はそのまま剣術にのめり込んだ。努力と時間という対価を支払い、今の力を手に入れた。今度は身体を差し出して力を手に入れる事をルサルカさんにお勧めされた。そして、代償を求められる理由も納得している。

『私が貴女に提供する選択肢の内の一つが、真名の女になれば真名や恵理、鈴が使っている力をあげる。それなりに代償はあるけれど神にも届きうる力よ。ただし、真名の女になりなさい。もちろん、真名の女になるからには基本的にこちらで活動するから、地球にはあまり帰れないと思いなさい』

ここに連れられてきて、軍服から私服に着替えた彼女に酒場に連れ込まれ、そこで美味しそうにお酒を飲みながらそう言われた。

『その、身体を捧げないといけないんですか？』

『うん、駄目。ぶっちゃけると、力を与えた後で敵になられたら困るの。もちろん、貴女が自分から望んで敵になることはないと思っただけだね。でも、色々と思いを捻じ曲げて言う事を聞かせる方法なんていっぱいあるの。特に雫は可愛い女の子だし、そういう方面のこともされるでしょ？』

『そ、それって……』

『それに力を与えてこれ以上真名と親しくなられるのもこちらとしては困るの。今のままだとただの友達として線引きはできる』

『え?』

『真名だったら、自分の女でもないのに鈴と恵理達のために自分の身体を生贄にして助けたことが何度かあるの。だから、私もせっかく見つけたダーリンが居なくなれると非常に困るのよ。それがまだ血の繋がっていないダーリンを共有する妹達や自分達の子供ならまだ許容できるけど、他人なんて無理』

『それは……確かに……』

お酒の入ったジョッキを突きつけられながら言われた言葉は納得できるものだった。

『だから、仲間になるなら力をあげる。力の無い方が危ないしね。女になるのが嫌なら、大人しくここで過ごしておきなさい。そうしたら地球にちゃんと返してあげるわ。貴女達が戦う必要はもうないの。必要な戦力は私達が保有するような力じゃないと無駄に危険だからね』

『地球の方に居られない理由は……』

『いや、別に居てもいいけど殺人を繰り返す事になるわよ?』

『は?』

『提供するのは他者の魂を収集して力を手に入れる禁忌の魔術よ。定期的に魂を蒐集しないと殺戮衝動に襲われるわ。地球に住んでたら周りの人間を殺すでしょうね。今のところ、モンスター魔物の命で代用できるけど。地球には居ないでしょう?』

『確かにそれならトータスに居た方がいいんでしょうね』

『そもそも食料にしか見えなくなるわよ。雫はとても美味しそうね』

頬から首を撫でられながらそう言われた時、身体中を舐め回されて食べられてしまうのかと錯覚した。襲い掛かる恐怖に必死に身体の震えを止めていると、彼女が離れていった。あの時は本当に食べられると思った。

こんな事があって、私は現状を維持している。考え事をしながら布団をめくってベッドを出る。足元に居た三匹の子猫達が抗議の声を

あげるけど、無視して昨日の内に用意しておいた下着をつけ、壁にかけていたメイド服に着替えていく。

裸で寝ていたのは単純に寝間着がないから。持っているのは一着だけで、お風呂に入っている間に洗濯と乾燥を使って使いまわしている。この部屋の扉は鍵をかけることはできないので、誰でも出入りが可能だから襲われたらひとたまりもない。そもそも襲う相手が沙条君達になるから抵抗しても一切無意味になる。彼がその気なら、首輪のせいで逆らうこともできない。これらはルサルカさんが私に沙条君達を意識させるためのもの。

「にゃ〜」

「にゃ〜」

「にゃにゃ」

「はいはい」

考え事を止めて姿見で身嗜みを整えてから、私の監視と護衛でもある子猫達と共に部屋を出る。部屋の隣は小さなキッチンになっているので、そこに置いてあるワゴンに水を入れたボトルを用意し、ワゴンの下にあるシーツを確認する。

問題がないと確認したら子猫達と一緒に次の部屋に移動する。そこに入ると様々な臭いが混ざったものが漂ってくる。部屋の中から女の子達の喘ぎ声が聞こえ、複数あるベッドの方を見ればそちらの一つで女の子達が並んで一人の男に貪られて鳴かされている。

そちらとは別の空いているベッドに移動し、その様々な液体で汚れているシーツを綺麗なシーツに取り換えていく。

「おはよう〜しずしず〜！」

「おはよう、鈴」

隣のベッドで生まれたままの姿の鈴が私に抱き着いて胸に顔を埋めてくる。彼女からはとてもひどい臭いがしている。

「鈴、先にお風呂に入ってる」

「え〜いい匂いなのに〜」

「鈴、私達が麻痺しているだけ」

「そうですね。鈴さん、おはようございます」

酷い状況になっている恵理やリリアーナ達が挨拶してきたので返して、彼女達に水を配っていく。沙条君達にも渡して水分補給をしてもらう。口移しなどで楽しみながらしている人達を置いて、皆をお風呂に連れて行ってから、彼女達の着替えを用意する。今日は一緒にお風呂に入ることになったので、身体を洗っていく。その間に洗濯もしておいた。

「しかし、しずしずもあんまり動揺しなくなってきたね〜」

「何回も見せられたし……むしろ、鈴達は恥ずかしくないの？」

「今更？」

「だよね〜。基本的に鈴達は人数が多くて、まなまなは一人だからね。複数人するのが当たり前になってるし」

「うん。最初はすごく恥ずかしいけど、もう慣れたよ。それに雫は真名の物になるのは時間の問題だし」

「わ、私は……」

「鈴はしずしずに一緒に居て欲しいなく。かおりんとも一緒にいられるよっ。」

「え？ 香織は……」

「香織は南雲と一緒にいるためになんでもする。だから、たぶんこっちに住むよ」

「南雲君達は帰るって……」

「一度は帰るだろうけど、すぐに戻ってくるよ。だって普通に考えて南雲達の力は異常だから、地球の人達が放っておくはずがないでしょ？」

「それは……確かに」

私達の力でさえ、かなり逸脱しているのに南雲君達の力は世界を作り替えてしまう。地球全土が大混乱に陥ること間違いがない。南雲君は香織達を狙ってきた相手なら一切の容赦をしない。その南雲君達から要請を受けたら……ルサルカさんの言葉通りなら、沙条君達も容赦しないはず。だったら、大人しくトータスで生活した方がいい。

「まあ、ゆっくりと考えたらいよいよ」

「鈴としてははやく一緒に気持ち良くなりたいたいけどね〜」

「……もうちよつと考えさせて」

「まあ、真名なら雫が憧れていたお姫様にだってなれるよ。何せ王様だし」

「確か、身を挺して守ってもらいたい、だったよね？」

「なつ、なんで知って……」

「色々と情報を手に入れているのだ」

「まあ、香織なんだけど」

「かゝおくり〜！」

それから、お風呂を出て着替えていく。私達は食事を取ってから別れ、私は仕事をやっていく。といつても、本職の人達がいるので私の仕事は特にならない。精々がエツチな事をしている沙条君達の世話だけだ。

「雫、今日は予定がないから街を回って考えてきなさい」

「ルサルカさん……」

「刀を振らないなら、他の人達を見て来いってわけよ」

「はい……」

「貴女の八重樫流は殺人剣。永劫破壊エイウイヒカイトと相性はいいはずだから、しっかりと悩みなさい。今まで代々受け継がれてきた力と努力して覚えたいを思いつきり活かせるのは私達だけのところだけど、人を止めずに普通に幸せな家庭を築くのもいいでしょう。後悔のないようにね」

「はい……」

言われた通り、アマツの街に出て他の皆のところへ向かっていく。まずはお店を開いている相川君のところへ行ってみよう。たしか、バイク屋さんをしているらしい。



アマツの街を歩き、相川君の店を探していく。色々なお店が出来だしている道をしばらく歩いてみると、そんな中で一つのお店を見つけ

る。その店の前には数台のバイクが置かれているみたい。

「やってる？」

「やってるよ〜」

お店の中に入ると、何故かそこには相川君ではなく、菅原さんがいた。彼女はお店のカウンターに座りながら、こちらに手を降つてくる。

「いらつしやい八重樫さん〜」

「なんでここに居るの？」

「お仕事だよ。働かないと食べられないしね。ほら、首輪がないでしょ〜。」

「確かにないね」

菅原さんの首には奴隷にされた時につけられていた首輪が無くなっていて。服装は長めの黄緑色のセーターに赤いスカートを履いているみたい。ここで買った奴でしようね。

「獣耳の女の子に言われて……無駄飯喰らいを置いておけないから、働くように言われたの」

「ああ、確かネコネちゃんだったかな。言ってたね」

「うん。提示されたできそうな仕事には、その……エツチな奴隷の関係のもあつたけど、嫌だから断つたの。八重樫さんは奴隷みたいだけど大丈夫？」

「私は大丈夫かな。メイドとして働くように言われたけど……担当が違うからみたい？」

「そつか。良かった」

「でも、本当にそんなことを言われたの？」

「沙条君のお嫁さんを出来るだけ増やしたくないんだって。その分だけ時間が減るからかな？」

「そつちの意味ね」

ネコネちゃん達からしたら、沙条君が手を出さないように防衛線を張っている感じなのかも。それに妾とかになるにしても、費用を捻出しないといけないだろうし、彼女達みたいに働けない私達はそんなに稼げない。

「それでどうしてここに？」

「愛ちゃん先生はまた農業を始めたみたいだけど、せつかく頑張って作った畑が……焼け野原になった光景が思い出しちゃうの」

「え？」

「ウルの町がね、清水君とほっぽちゃん達に焼き払われたの。その時に私達は連れてこられたんだけど、その時の事を思い出すと恐怖が湧き上がってきて、吐きそうになるし……目の前で愛ちゃん先生が……偽物だつてわかつてるのに……本当の愛ちゃん先生に近づいただけで……うう……」

「だ、大丈夫だから！ 思い出さなくていいから！」

「うん、ありがとう。それでね、ここに連れてこられた後に男の人の下の世話も嫌だし、同じ女の子の嫌だから……」

「それで……？」

「そうなの。相川君が助けを求めてきたんだよ。女の子に必要な物がわからないから助けてくれって」

「女の子？」

「うん。相川君、エッチな……エッチなので間違つてないか。それを選んで可愛い女の子を二人、引き取ったの」

「へえ……」

「お姉ちゃんの方は両足がなくて、妹ちゃんの方は両手両足がないの」
「それって……介護？」

「うん。その子達つて奴隷として教育されてきた子で、相川君がお嫁さんとして引き取ったの。もちろん、本人達の同意があつただけど」
彼女達にはそれしか選択肢がないともいえるけどね。そのままだと死ぬしかないし。沙条君からしたら助ける労力と後に彼女達が生み出す労力を計算して利益が出るのなら助けると思う。そういう意味では相川君達に引き渡した方が利益が大きいという判断なのかもしれない。ルサルカさんは特にそういった感じだと思う。

「同意があつてその子達が納得して……幸せだったらいい、かな？」

「納得しているし、幸せなんじゃないかな？ 少なくとも笑って動き回ってるしね」

「そうなのね」

「ほら」

菅原さんが鈴を鳴らすと、奥の方から金色の髪の毛をした森人族の幼い女の子が二人、相川君の後ろ隠れながら彼の服を掴みながらこちらにやってきた。相川君と彼女達はオーバーオール作業服を着ているみたい。彼女達の両手両足は義手とかのようだけどちゃんとある。

「あれ、八重樫か。その服は……」

「今、メイドとしてお城で働いてるから……」

「そっか。ティリエル、ミユリエル、俺達の仲間の八重樫だ」

「よろしくね」

「……」

二人はこくりとだけ頷いてくれた。相川君はそんな二人の頭を優しく撫でながら、こちらに話をふってくる。

「悪いな。まだ人が苦手なんだ」

「私にもようやく慣れてきたぐらいだしね。もう結構一緒に居るのに」

「妙子さんは好きです」

「です」

「私も好きだよ」

「本当に仲がいいみたいね」

「ああ。それでどんなバイクがお望みだ？ オススメはこの時速600キロを出せるモンスターマシンの……」

それから意味が分からない専門用語を羅列していく相川君。本当に好きだとわかるのだけど、何を言っているのか、わからない。

「こら」

「いたっ!?!」

菅原さんが相川君の頭を叩いて強制的に止めてくれた。

「好きなのはわかるけど、八重樫さんが付いていけないからね」

「悪い」

「これ……どうぞ……」

「スペックと価格……」

「ありがとう」

価格表を貰って確認しながら必要な事を伝えていく。と、言ってもアマツの中を回るだけなのでそこまでの性能は求めていない。ちゃんと運転できるかもわからないし。

「とりあえず、レンタルにしておくね」

「それでお願い。代金は……」

「メイド服で首輪付きなら要らないぞ」

「え？」

「城に一括請求するから。月額契約してるから城の業務なら無料で貸せる。それに八重樫の場合は全部、請求を沙条に出せるからどっちにしろいらん」

「そっか。いいのかな？」

「大丈夫だろ。園部達も同じ扱いだしな」

「わかった。それじゃあ、初心者用のバイクをお願い」

「オツケー。調整するからこつちだな。二人共、任せていいか？」

「頑張る」

姉妹と相川君に選んでもらい、裏のコースで実際に乗ってから調整してもらって一台をレンタルする。レンタルしたのは自動操縦アシストがついた物で、デバイスとかいうのが組み込まれているらしい。音声認識もできるから、ツーリングするぐらいならなんの問題もないとのこと。

「一応、いろんな防御魔法を付与してあるから事故しても問題ないが、逆に言えば戦闘とかはできないから気を付けてくれよ」

「了解。ありがとう。行ってくる」

「またね」

「……また……」

四人に見送られながら、バイクを発進させる。ヘルメットは無しで問題ないらしいのでそのまま風を感じながら次の目的地を目指していく。



次の目的地である農場を目指してバイクを走らせていく。愛ちゃん先生がどうなっているのか心配だから、行ってみようと思う。

しばらく走って街から出て防壁の外に出るためにトンネルを超えていく。トンネルから出て少し進むと何かを通り抜ける感触がした次の瞬間、いきなり爆音と共にもの凄い風が、衝撃波が襲ってきてバイクごと空に吹き飛ばされる。

「っ!？」

意味が分からない状況の中、どうにかバイクを蹴って距離を取ることでバイクに下敷きにされることを防ぎながら受け身を取って地面を転がってダメージを出来るだけ抑える。それでも地面を転がったことで防壁に激闘して身体中が痛くなってきた。

「何が……」

頭を押さええながら立ち上がると、遠くの方で今度は空から無数の氷柱が降り注ぐのが見えた。そこから火柱が立ち昇って氷柱が消滅される。更に空から雷が降り注いでいく。

爆音が立て続けに響き、破壊の嵐が撒き散らかされる中、何度も身体を衝撃波が襲ってくる。そんな中、視線を前に向けていると巨大な人影が立ち上がって……いや、座っている状態で現れた。

その巨人は雷や暴風、炎、氷などの様々な攻撃や銃声や砲撃を受けてもビクともしないで座ったまま拳を振り上げてから勢いよく振り下ろす。その瞬間、地面が揺れて土煙が巻き起こる。それもすぐに吹き飛ばされていく。

「あれって確か……キングプロテアちゃんだったよね……」

彼女は沙条君が光輝を相手に使っていた召喚獣と呼べるような存在で、ある意味では私達と同じような存在。神エヒトに呼ばれたか、沙条君に呼ばれたかの違いでしかない。それでも実力は違いすぎる。

そんな埒外な化物を相手に無数の小さな人影が戦っているのがここからでも見える。襲撃を受けているのかもしれないし、身体を起こして向かおうとして止まる。

「私が行っても役に立たない……それに武器もない……」

邪魔にしかならない。むしろ、ここは沙条君達に知らせる方がいい。だから、それでいい。今の私に戦う力なんてない。これが正しい選択で間違っていない。

「そう、間違っていない。間違っていないの……」

なのに身体は動かずに戦場を見詰めている。そうしている間にも何度も地面が揺れてキングプロテアが大きくなっていく。そして、彼女が地面を持ち上げて攻撃する。それに対して相手も地面を浮かび上がらせて巨人なゴーレムを作りあげ、粉碎する。

それに怒ったのか、キングプロテアは両手で固めてそれを回転させながら投げた。その攻撃は巨大なゴーレムの身体を貫いて巨大な塊が豪速球で私の方目掛けてやってくる。

「ひっ」

逃げようとしても身体が反応する前に視界一面が巨大な地面の色をした球体に覆われて逃げるのも間に合わない。確実に私は潰されて死んだ。不思議とそう思うと、走馬灯のように今まで頑張ってきた記憶が蘇って思わず刀に手をやるけれどそこに刀はない。

「あははは……」

終わりだ。刀を置いた私に存在価値なんてない。そう言われているかのように理不尽な破壊の力が襲い掛かってくる。

眼を瞑って襲い来る恐怖に必死に耐える。轟音のような衝突音と回転音がすぐに聞こえてきた。だけど、思ったよりも軽い衝撃と温もり。それに思わず目を開くと目の前に綺麗な金糸のようなウェーブのかかった柔らかい髪の毛が見える。

「沙条君……？」

「大丈夫か？」

「う、うん……」

気が付けば目の前に沙条君が居て、片手を前に向けて巨大な土の球体を片手で受け止めていた。高速回転する球体は沙条君の手によって削られていく。沙条君は片手を球体に向けたまま、空いている方の手を差し出してくれる。

その手を握ると、沙条君によって引き上げられて彼の胸に飛び込む形となって、思わず、きゃー！ と、いう声が漏れて抱きかかえられる。「致命的な怪我はなさそうで良かったよ」

沙条君が私の身体を上から下までしっかりと見詰めてくる。私はそれが恥ずかしくて身震いしてしまふ。それに沙条君の胸に抱かれている状態のせいで心臓の音と人肌の温もりが、恐怖で震えていたのもあって安心できたのか、涙が流れてくる。

「本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫……それよりも襲撃を止めないとツ！」

「襲撃……？」

「え？ アレ、襲撃じゃないの？」

今もなお、上級魔法などの激しい攻撃がキングプロテアちゃんに襲い掛かっている。様々な属性が吹き荒れ、黒い塊が降り注いでいる。他にもゴーレムまで沢山集まってきている。

「ああ……アレか」

「どうしたの？」

「プロテアを相手にした訓練だな。プロテアからしたら遊びだが……」

「これが訓練で遊び？ 私には殺し合っているようにしか見えないけれど……」

「女神様にとってはあれぐらいは遊びだ。俺達からしても訓練のレベルだな」

「そう、なんだ……」

その出鱈目な力に心が沈んでいく。それに気付いたのか、沙条君が話を変えてきた。

「雫はどうしてこんなところに居たんだけ？ ここには危ないから一般人には来ないように伝えていたし、鈴の結界があつたはずなんだが……」

「一般人……」

「あ、いや、雫が一般人というわけではなくてな？」

「うん、わかってる……」

確かに沙条君達からしたら私の力なんて一般人と変わらないのだと思う。

「それでその、鈴の結界もあるから普通は大丈夫なはずなんだが……破ったか？」

「普通に通れたけど……何かを通った感じはしたわね」

「許可されているってことか。雫が許可されているところとなると……ああ、なるほど。鈴は魔法の設定を使いまわしたわけか」

「設定の使いまわし？」

「おそらく、鈴は寝室や俺達の居住スペースに展開している結界を張って侵入できないようにしたのだと思う」

「そっか。確かにそれなら私が通れたのも納得できるわね」

私の生活圏は完全に沙条君や鈴達と同じだ。彼女達の寝室の隣が私に与えられた部屋なのだから当然、私も結界を通り抜けられるようになっていないとメイドの仕事にも支障をきたす。

「そうなると思えられる原因は……」

「ルサルカの言い忘れか」

「本当に言い忘れたのかどうかも分からないけどね」

「どういうことだ？」

「私に街を回るようにって言ってきたのはルサルカさんなの」

「だが、ルサルカに雫を危険に晒す理由はないだろう」

「……それがそうとも言えないのよね……」

「ん？ どういうことだ？」

「それはその……私に沙条君の嫁になるように言っているから……」

「ああ、それが。だが、いくらルサルカとはいえ、そんなことはしないや」

「そう、なの……？」

「ああ。ルサルカも昔ならともかく、今の彼女なら俺達に嫌われるような事はしないさ」

「そうなのね。じゃあ、一つ聞いてもいい？」

「なんだ？」

気になっていた事をここで聞いてみる。どちらを選ぶにしても必

要な事だから。

「沙条君は私の事をどう思っているの？」

「雫の事をか？ どういうことだ？」

「……私の事を嫁に欲しいのよね？」

「ああ、そうだな。雫が習得している八重樫流の剣術は欲しい」

「沙条君達にはまったく通用しないものなのよ……それに必要なの？」

「技術は必要だ。雫の力が俺達に通用しないのはただの身体能力が違いすぎるからだ。同じ身体能力なら雫が勝つさ」

「そんなの机上の空論じゃない。どんなに頑張ってもスペックの差は覆らないわ。それに剣術くらいなら教えてあげるわよ」

「いや、今の雫だと他の連中がおそらく納得しない」

「どうということ？」

「実際に見た方がいいな」

「ちよつとっ!？」

肩を掴まれて抱きしめられていた状態からかがんで足の裏を掴まれてそのまま抱え上げられる。

「こ、これって……」

「怪我でまともに動けないだろう。治療できるところまで運ぶぞ」

「だからってお姫様抱っこなんて……」

お姫様抱っこされて恥ずかしさがこみ上げてくる。そんな状態で沙条君は空を飛んで移動していく。

「ほら、アレを見る」

「え？」

いつの間にか到着していたのか、顎で指示された方向を見るとプロテアちゃんが座りながら指ではじいたりしている姿が見える。

「あれはプロテアちゃんよね？」

「相手の方だ」

「相手……子供？」

戦っているのは子供達だった。十歳前後の白い髪の毛をした様々な種族の子供達。中には二十代以上の人達も含まれているけれど、確

かに子供だった。その子達が私に捕らえきれない速度で駆け回り、プロテアちゃんの攻撃を必死に逃げながら拙いながらも連携して上級魔法や多種多様なスキルを使って立体的な機動で攻撃していつているのが見えた。

「……あんな幼い子供達にも……抜かれた……」

私の自信は粉々に砕かれていく。あの子達の一人を相手にしても勝ち目なんてないのがわかる。私が今まで必死に相手をしてきたモンスターなんて彼等からしたら赤子の手をひねるようなものでしかない。

「見てわかる通り、雫ではあの子達に勝てない」

「……あの子達はなんなの……?」

「どうしても自分で生きる希望を見つけれない者達や復讐を諦められない子達、守るために人を止めた者達で構成された部隊だ。ようは俺達の持つ技術を使って作りだした親衛隊だな。指揮官は軍事経験者のルサルカと補佐として恵理をあてている」

「まさか、非人道的な事を……?」

「同意の上だがな。そもそも選定としてどうしようもない者達の救済措置としてつくっているのもあるが、放っておいたら暴走して何をしでかすのかもわからないということもある。自殺されるだけならまだだろうが、周りを巻き込んで盛大に自爆されてもかなわない。だから生きる目的と手段を与えてこちらのコントロール下に置いた。雫には技術を教えて欲しい」

「……」

「だが、今の雫だと相手にされないか、されてもしつかりと教える事はできないだろう」

「自分よりも弱い人に教えてもらっても受け入れられないのね……」

「獣人はとくにその傾向が強いしな」

それに教えるのも難しい。私と相手が見えている世界が違いすぎるのだ。私が速いつもりで斬っても、彼等にしたらゆっくりと斬っているようにしか見えないだろう。

「理由はわかったけれど、私以外にも剣術を教えられる人はいるで

しよ。オシユトルさんやアストルフオさんとか……」

「オシユトルは仕事で忙しいし、アストルフオは完全な感覚派だから無理だ」

「……わかった」

確かに言っていることはわかる。でも、色々と問題がある。その問題の一つが、私が力を手に入れたその先でどうするかということ。お姫様とかに憧れはあった。しかし、実際にお姫様であるリリアーナと話して彼女の境遇や責任を肌で感じてお姫様は決して想像していたものではないことが理解できた。おとぎ話と現実は違う。

「沙条君は私の持つ技術が目当てなのよね？」

「違うな。雫の心も身体も欲しい」

「え？ 私よりも可愛い子も綺麗な子もいっぱいいるのに？」

「彼女達に雫が劣っているとは思わない。それに雫は知らないかもしれないが、俺達にとって雫は白☒と同じく高嶺の花だ」

「嘘よ。香織の方が男受けするでしょ」

「嘘じゃない。実際に雫でそういう想像をした男は多いだろ」

「ひっ!？」

想像して身体が震えてきた。沙条君は私を強く抱きしめてきて、その温もりで安心……できるはずもない。

「さ、沙条君も私が好きなの？」

「好きか嫌いかで言われたら好きだな。ただ、俺の一番はユーリだ。それは揺るがない。それでも雫が受け入れてくれるなら、俺も雫を幸せにできるように努力するし、出来る限り要望にも応えるつもりだ」
「……そっか。要望を応えてくれるっていうなら、地球で過ごしたいというのはできるっ……」

「可能か不可能かで言えば行き来ができるのなら可能だ。だが、オススメはしない。人は異端者を排除する。地球の歴史がそれを証明している。それに殺人衝動をどうするかという問題もある」

「確かにそういうのもあるわね。数日とかを地球で過ごすとかは大丈夫なの？」

「おそらく大丈夫なはずだ」

「そう。それなら幾つか条件を付けさせてくれるなら私は……沙条君を受け入れるのを前向きに考えようと思うの……条件なんて出せる立場でもないけど、お願い」

「条件か？ 出来る限りは答える。言ってみてくれ」

「うん、ありがとう。まず一つ目は鈴と恵理、優花……それからアビーちゃんを少し貸して欲しい」

「構わないが……それだけか？」

「他にもあるわ。私は子供が欲しい。人を止めてもちゃんと子供を産める？」

「それは……大丈夫だ。問題があったとしても絶対にどうにかする。俺もユーリや鈴達との子供も何れは欲しいからな」

「わかった。それとその子供を八重樫家の養子にして継いでもらう。私は一人娘だから、後継者は絶対に必要なの」

「確かにその通りだな。俺が婿入りするのも色々問題があるし……子供次第ではあるが、その辺りはこちらとしては問題ない」

良かった。後継者の問題は八重樫家にとつて重要な問題だから、常日頃からしっかりと行われているのよね。私が結婚して産んだ子供は八重樫流を継がせるから、相手は問題さえなければいいから子供だけは作れって。

「じゃあ、後は鈴達と話してから最終決定するね」

「了解した」

私が沙条君を受け入れて幸せになれるかはわからない。それでもその為に必要な事を鈴達に教えてもらわないといけない。それが終われば私は決められると思う。

「降りるぞ」

「うん」

沙条君に抱かれたまま地上に降りてから治療してもらおう。ルサルカさんもすぐにこちらに来て謝ってくれた。街の中と言ったので、こちらにまで行くとは思っていなかったみたい。

疑わしく思ったけれど、ルサルカさんが私を罫に嵌めると沙条君に嫌われることを考えたら絶対にしない、と手を振られながら言われ

たので納得する。見るからに幸せそうに沙条君の腕に抱き着くので、
事実だとは思う。



「来てくれてありがとう」

ベッドの上に座りながら、私の部屋にやってきてくれた鈴と恵理、
優花、アビーちゃんにお礼を伝える。

「しずしずのお願いだしね。まなまなからも頼まれたし、当然だよ」

「私とアビーが呼ばれたのは何故かわからないけれど……」

「私はマスターから頼まれたから来たの。それに面白そうなることがあ
るってお父様が伝えてきたのだわ」

「そう、なのね……」

「お父様？ まあいいや。それで雫は僕達に何をして欲しいのかな
？」

「そうそう、しずしずは鈴達になんの用があるの？ しずしずが仲
間になってくれるなら鈴、なんでもしちやうよ」

「えっと、して欲しいことはね……」

私は皆に伝えていく。鈴と恵理、優花にとっては許容できないかも
しれないことだけど、私は沙条君が本当に助けて……ううん、守って
くれるのか確信が欲しい。

「なるほど。確かにそれなら確認はできるね。でも、それって僕達の
プライバシーをかなり侵害しているんだけどね」

「わかってる。だから、誰か一人だけでもいいの。それにアレから何
があつたのか、ちゃんと知りたいの」

「鈴はいいよ。それでしずしずが一緒になつてくれるなら。でも、
えりえりはともかくゆかゆかはちよつと止めて置いた方がいいかも
ね〜？」

「僕はともかくって……まあ、大丈夫だけど。優花は止めておいた方

がいい。思い出すのも辛いだろうし」

「私は……ううん、私もいいよ」

鈴と恵理の二人が辛そうな優花を心配してそういうけれど、優花は受け入れてくれた。

「無理しなくても大丈夫よ。鈴と恵理がいるから……」

「大丈夫、雫。それにこれはいい機会だから」

「え？」

「仲間を増やしてアイツを地獄に落とすのを手伝ってもらおうの。それが無理でも、邪魔はしないでくれるはずだから……」

「え？ え？」

「ああ、なるほど。確かに雫は止めそうだしね」

「確かに」

「あ、あの……」

「なら、こうすればいいのだね。雫のお願いを聞くかわりに優花のお願いを雫にも聞いてもらうの。お願いは手伝うか手伝わないか。どちらにしても邪魔はしない。これでどうかしら？」

「それがいいね。大丈夫、鈴や僕達に被害はでないし、真名達も協力するって言ってくれているしね」

「それなら……まあ、いいかな……」

アビーちゃんが両手を叩いて嬉しそうに満面の笑みで提案してくる。私はその内容を考えて受け入れることにした。私が要求している事はかなり問題あることだから、こちらもそれ相応の要望に応じないとね。

「話がまとまったところでパジャマパーティーをしましょう！」

「いいね」

「うん。そうしよう」

アビーちゃんの提案を受けてみんなで寝間着に着替えてからベッドに寝転がりながらお話していく。基本的に皆の惚気話を聞いていたりした。

しばらく話していると、眠くなって皆で横になって眠ることになった。私にとってはここからが本番になる。

「それじゃあ、夢の世界にご招待！」

アビーちゃんの力によって私達は夢の世界で鈴と恵理、優花の記憶を体験していく。そう、私が願ったのは沙条君達が体験した事を言葉ではなく、実際に体験すること。そうでないと彼女達と心から一緒になれない。それに本当に沙条君が助けてくれるかどうかもわからないし。

そう思っただけで体験したのだけど、三人の記憶はどれも地獄のような物でかなり大変な目にあつた。それでも私の心を決めるには必要な事だつた。そして私は決めた。

起きた後は色々酷いことになっていたので急いで片付けてからお風呂に入つて沙条君に訓練場に来てもらう。

「それで決めたのか？」

「ええ。その為に勝負よ」

「え？」

私は菊一文字則宗を沙条君に向ける。沙条君はキョトンとした表情をしているけれど、こればかりは仕方がない。

「私は八重樫流を継ぐ者として自分より強い人を夫にすることに決めてるの。沙条君は大丈夫だろうけど、私の気持ちとして全力で戦わせてくれないかしら？」

「……そういうことならいいぞ。俺はどうすればいい？」

「当然、沙条君も全力で来て……と、言いたいけれど好きにしているわ。召喚を使うのも、私を殺すも生かすも、ね」

「オツケー。手加減しろつてことだな。ただ、まあ……自分の力だけで挑ませてもらう」

「なんでなの？」

「自分の妻にするために戦うのに、別の妻の力を借りるのは駄目だろう。まあ、身体の力と武器の力は仕方がないけどな。武器はいいよな？」

「別にいいわよ。それに私の夫となるんだつたら、八重樫流を覚えて欲しいし」

「わかつた。まあ、刀はないからおおいおい教えてくれ」

「ええ、任せて」

互いに配置についてから構えを取る。

「何時でもどうぞ」

「行かせてもらおうわ」

相手は格上。だからこそ、最初から全力で……否。全力を超えて力を出す。まずは縮地で加速して左右に動きながら接近する。沙条君はこちらを認識しているけれど、身体がついていけないのか、すぐに視線が外れる。

「雫、避けるよ」

「っ!？」

沙条君の周りに無数の魔法陣が現れ、そこから複数の巨大な岩が現れてくる。それらは重力に従って降り注いできた。

「なんで……」

「召喚というのは転送や転移など空間魔法のエキスパートだ。認識できなくても絨毯爆撃をすれば関係がない」

「なる、ほどねっ!」

降り注いでくる岩を回避しながらどうやって沙条君に近づいてこちらの攻撃を届かせるかを考えて、良い事を思い付いた。だから、実践してみる。

「ちよっ!？」

降り注いでくる岩の一つに飛び乗って、それを足場にして縮地を発動させて次々と岩を移動して速度を上昇させて一気に接近して、数百キロに到達しそうな速度で全力の刺突を放つ。

「怖いわっ!」

狙った沙条君の左目に刀が突き刺さる前に見えない壁に阻まれて、私と沙条君の力に耐えきれずに粉々に砕けていく。

その勢いのまま私は沙条君に身体を衝突させようとするけれど、その前に沙条君から前に飛び込んできて私を抱きしめる。それによって互いに吹き飛ばされ、地面をゴロゴロと転がるけれど、沙条君が守ってくれたようで私に痛みはほとんどない。

止まると私は沙条君に仰向けの状態で地面に押し倒されていて、両

手を掴まれて馬乗りにされていた。力を込めて脱出を試みるけれど、ビクともしない。

「それで、まだやるか？ やるなら、撃つが……」

「あ……」

沙条君の顔の横から空を見ると、そこには金色に光輝く膨大な魔力の結晶が存在していた。光輝達に向けて撃った奴だ。

「スターライトブレイカー。非殺傷設定だから安心していいぞ」

「沙条君も喰らうけれど……」

「俺は防御力には自信があるからな」

「……喰らうのは私だけってわけね」

「これなら外さないからな」

私は身体から力を抜いて間近にある沙条君の顔を見る。

「私も鈴達と同じように愛してくれる？」

「もちろんだ」

「そう。ならいいか。好きにして。敗者は勝者に従うのがこの世界のルールみたいだし、いいよ」

「じゃあ、俺の妻になってくれ」

「はい」

近づいてくる沙条君の顔を受け入れて眼を瞑る。腕から手が離され、頭の後ろに回されながらしばらくキスをされた。

その後はお姫様抱っこされて治療とお風呂に入ってから、皆に改めて紹介されて宴が行われた。その場で指輪を貰い、それから私はベッドで沙条君の前に座って三つ指について頭をさげる。

「不束者ですが、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく頼む」

本来は親にするべきなのだが、まあ今はこれでいいと思う。あくまでも心のケジメでしかない。それから私は沙条君と初夜を迎えた。

第84話

雫が嫁になり、初夜も無事に終わった。二大女神と呼ばれた高嶺の花である雫が俺だけのものとなったわけだ。その証に身体中にキスマークもつけるほど彼女の大きな胸を含めて綺麗な身体を全て好きだけ堪能させてもらった。もちろん、雫を気持ち良くするためには彼女の身体を開発もした。まだまだだけれど、リリアーナと一緒に俺好みになるよう開発を続けよう。

「んん……」

腕の中で汗をかきながら眠っている雫の胸をついつい揉んでしまっていたようで、彼女が目覚めた。昨日は結構、無理をさせたのでまだ完全には覚醒していないようだ。

「おはよう」

「おは……よう？ つ!？」

俺の上で仰向けになって寝ていた雫が、方向転換してこちらに気づき、挨拶をするとすぐに挨拶を返してくれた。だが、次の瞬間には自分がどういう状況なのかを理解したのか、悲鳴をあげようとしたので口付けをして黙らせる。

「んんっ」

そのまま雫とおはようのキスを楽しんでいると、彼女も次第に冷静になってきたのか、身体から力を抜いて身を任せてくる。

キスを終えて口を離すと、唾液の橋がかかって落ちる。雫は頬を赤らめながら布団を引き寄せて身体を隠す。

「それじゃあ、風呂に入ってから食事にしようか。今日は色々あるからな」

「うん……わかった」

雫をお姫様抱っこでお風呂に連れていき、二人で身体を洗い合う。隅々まで雫に洗ってもらうのは気持ちが良い、朝からしたくなってしまうが、今日は忙しいので残念ながら無理だ。雫にとっても今日は大切な日になるからおさらだ。

風呂で汗などの汚れを落としたり、皆と合流して食事を取る。本日の食事は川魚の塩焼きとサラダ。そして、白いお米。そう、お米だ。ユーリが頑張つて種粃を作り、それを愛ちゃん先生が育ててくれた。故に俺は嫁達と共にお米をまた食べることができるようになった。

「醤油がないから塩だけ。おにぎりにするから」

「お手伝いしますね〜」

「鈴も〜」

優花がエプロンをしながらテーブルの上におひつに入れられたお米を水をつけ、塩をつけた手で握つていく。それを見たユーリや鈴達もお手伝いしていく。

「私もいいかな?」

「うん。お願い」

雫達も作つていく。その作られたおにぎりは並べられていく。その間にルサルカ達、日本人の者達以外はパンを大皿から取り分けていく。こちらも優花が作ったもので、フレンチトーストなどだ。テーブルの上にはそれ以外に色々な食べ物がかかれていたので、それぞれが好きな物を取る形式となっている。

「お兄ちゃん、どうぞ」

「ありがとう」

ユーリが優花に教えてもらつて握つたおにぎりを差し出してくる。受け取つてしっかりと味わつて小さな少しいびつなおにぎりを食べる。

「どうですか?」

「美味しいよ。ありがとう」

「えへへ〜」

「良かったね」

「はい!」

優花がお姉さんのようにユーリを可愛がっているのを見ながら、隣を見ると雫や鈴達も作つてもってきていた。そんなに入りはしなないが、無理に食べるしかないようだ。

嫁達のお料理でお腹いっぱいになったが、まあ食後の運動をすればいい。と、いうわけでやってきましたクレーターだらけの戦場跡地。俺達が居る場所はルサルカと恵理と一緒に帝国軍と魔族軍を殺しまくった場所だ。現在、こちらは魔族に率いられた魔物が沢山いるので運動には丁度いい。

メンバーは戦闘が可能な嫁達とディアーチエ、シユテル、雫を除く全員とアストルフオ、オシユトルとハクだ。ハクはぶつくさ言っているが、無理矢理連れてきた。これからやることにはハクの力が必要だしな。まあ、仮面が無いから必要ないのかもしれない。それでも持ってきた魔導炉の護衛はしてくれるだろう。

ちなみにディアーチエとシユテルは雫を見ている。彼女に竜の心臓と肉体の強化を行っているので不参加だ。

どちらにせよ、帝国に向けて進行中の魔族軍を俺達は少し離れた崖の上から見詰めている。そんな俺の横に軍服姿のルサルカとオシユトル、ハクが近づいてくる。

「これからどするの？」

「行軍中の相手を奇襲するのは当然だよな」

「ええ、その通りね」

『さつさと排除して』

美遊が容赦ない事を言っているが、これは仕方がないだろう。何せ待ちに待った日だ。

「はい。こちらから攻めるのであればその方がよろしいかと」

「お前達なら余裕だろう。さつさと滅ぼして本番と行こうぜ」

「それもそうだな。鈴、頼む」

「まかせて〜！」

鈴が神獣鏡を Y e t z i r a h 形 成 し、大規模な結界を展開する。これで誰も逃げられないし、天使達からみられることもない。

「じゃあ、行くか」

「はいはい！ ボクが先に行くからね！」

「ボクも負けないぞ！」

「わかった。先陣を頼む」

「任せてちょうだい」

アストルフオがバイクに乗り、レヴィが空を駆けて魔族と魔族が操る魔物の軍団に突撃していく。

「ユーリとプロテアは俺の側に居てくれ」

「わかりました。お兄ちゃんは私が守りますね」

「ん」

「頼む。恵理。アビーとリリアーナを連れて二人を援護してやってくれ。他は好きなようにしてくれ」

「では、某は……」

「オシユトルは俺とここで待機だ。お前はまだ身体が治ってないだろ」

「そうです。兄様はここで待機してください」

「それがいいかと思います。兄様」

「リムリ……イヌイ殿は某の妹ではないが……」

「いえ、リムリも妹ですよ。一緒の夫なんですから」

「それもそうだな」

「てなわけで、自分達と一緒にここで待機だ。余裕だろうが、一応何かあれば対応出来るしな」

「……今は戦力に余裕があるか」

オシユトルとハクの二人には軍師とまではいかないが、將軍なのでそういう判断ができる。まあ、残っている戦力である俺に憑依したユーリと美遊がいるので問題ない。

「私はここから狙撃しようかな」

「じゃあ、スポッターをしてあげるわ」

「別にいらないんだけど……」

「まあまあ、そう言わないで」

詩乃が弓ではなく、アンチマテリアルライフルのヘカートⅡに似せて作られたデバイスを取り出し、崖の上で寝そべって狙撃体勢を取った。その横に立ち、双眼鏡で相手を見るルサルカ。詩乃が猫耳で尻尾を揺らしながら風を計測している姿がなければルサルカの軍服姿か

らして軍人二人に見えてしまう。いや、間違っではないのか。

詩乃の狙撃によって指揮官である魔族が瞬殺され、そのタイムミングに合わせて空からレヴィとアストルフオが強襲をかける。混乱したところに青白い光が煌めいて瞬時に地上に居た魔物達を地表ごと氷漬けにしてしまった。

「出鱈目だよな。戦術兵器どころか下手したら戦略兵器だぞ」

「神子の力とは誠に恐ろしいな」

ハクとオシユトルの言う通り、リアーナは既に実力が一般人や王族から……いや、人から逸脱している。

「主様。あつたかいお茶でございます。冷えた身体には良いと教えていただいた生姜を混ぜておりますので、温まります」

「ありがとうございます、アルテナ」

お茶を飲みながらゆつくりと見学する。オシユトル達もアルテナが配るお茶を飲みながら皆で戦場を確認していると、氷が砕けていく。レヴィが落雷で粉碎したのだ。それによって得られる魂達を回収する。

「マスター、迎えに来たわよ」

「ありがとう、アビー」

「さあ、行きましょう。楽しい楽しい時間の始まりよ」

「そうだな。全員、移動するぞ」

指示を出してアビーが開いた門を潜る。一応、SANチェックなどが起こらないように配慮してくれているので、問題なく移動できた。

クレーターだらけの戦場の方へと移動し、恵理達と合流する。恵理は降霊術を使って死霊を憑依させ、死体を操って場所をどけていく。

「さて、やりましょうか、ダーリン」

「ああ、そうだな。美遊、アビー。手伝ってくれ」

「任せてください」

「やりましょう！ とっても楽しい遊びの始まりだわ！」

次にやることは魔法陣を描いていく。皆で協力して魔族と魔物の血を使って描き、召喚用の魔法陣は完成した。この魔法陣は聖杯としての美遊の力に加え、ユーリとルサルカの知識、それらを利用して俺

の召喚士としての才能を使って完成させた物だ。

「さあ……ガチャの時間だ！」

召喚項目を確認すると、武器ガチャなどもあるが、まず一番はFate 関連のガチャだ。それ以外は完全に無視だ、無視。

「美遊。愛歌の奴が終わったら、兄を召喚しよう」

「いいの？」

「約束だからな。先に全力で召喚していい」

「でも、ルサルカさんも欲しいのがあるんだよね？」

「私は雫の聖遺物が欲しいだけだから、別に後でもいいわよ。それに家族と一緒に居た方がいいでしょうしね」

「ありがとう。それじゃあ……やります！」

「鈴、結界を多重に頼む」

「任せて！ 鈴がやってあげる！」

美遊が俺の中に入り、神獣鏡シエンシヨウジンに囲まれながら一緒に身体を操って詠唱を行って行く。今回は聖杯としての力をフルに使って願いを叶える。今回使うのは天使の魂なので、その魂は本来捧げられるべきサーヴァントの魂と同質かそれ以上である。故に七騎を捧げることによって願いは叶う。ましてや、今回捧げるのは三倍の二十一騎だ。

「持ってけ！」

「お願い、お兄ちゃんツ！」

複数の同時召喚を行って、アビーが生み出した魔法陣の上にある門が開く。そこから虹色の光がほとばしり、出てきたのは剣を持つイケメン男子。

「僕はセイバー。君を守り、世界を守る——サーヴァント……」

「セイバーツ!!」

「なっ!?!」

別の門の向こうから愛歌が神獣鏡シエンシヨウジンに囲まれた中に入ってアサーに抱き着き、頬すりしだす。そう、愛歌神獣鏡シエンシヨウジンによって邪悪なものは一切切浄化され、清浄なる状態で召喚を行い、複数の聖杯を融合させた召喚特化型複合聖杯の力によってアサー・ペンドラゴンを確定召喚した。それも愛歌を知っているアサーだ。

「マスターアアアッ！」

抵抗しようとするが、既に準備万端で待機していた愛歌によってアーサーは瞬く間に鎖によって捕獲された。あの鎖、どう見ても神具なんだが気のせいかな？

「あの愛歌って子、エイサイヒカイト永劫破壊を普通に使ってやがるんだけど、なんで？」

「親切な方に教えてもらったの。この鎖はアーサーのために用意したのよっ。」

「くっ、エクスカリバーで……」

「無駄よ。この鎖がある限り、聖剣の力は発揮できないの。だって、星の力を封印するものだもの。もう逃がさないわ、私だけの王子様♪」

「マスター！ 令呪を！」
「すまない。本当にすまない。だけど、しっかりと責任を果たしてくれ、イケメン」

生きているような鎖によって雁字搦めにされたアーサーは口すら封じられてしまった。その状態で更にアイアンメイデンが召喚され、その中へと入れられる。その上から更に鎖でぐるぐる巻きにされた。これでもう逃げられないだろう。

「あ、あの、あまり酷いことは……」

「しないわよ。しっかりと話し合う予定なの。でも、逃げられたら困るからね」

「本当ですか？」

「本当よ」

「それならよかったです」

ユーリはすぐに納得したようだ。騙されている可能性があるし、話し合うだけでその後の事は一切保証されていない。それでも愛歌を敵に回す方が危険なのでこれでいい。ユーリも気付いているだろうが、現状ではどうしようもない。エヒトとの戦いもあるので、ここで俺を危険にさらすわけにはいかないだろうしな。一応、愛歌には色々
と注意もしていたようなので大丈夫だとは思いたい。

「アーサーを捕まえてくれたお礼に美遊のお兄ちゃんには色々とサー

ビスしておいてあげるわ」

「ありがとう。それでお兄ちゃんは？」

「少し待ってちょうだい。はい、これでよし」

魔法陣が愛歌によって操作され、俺と美遊の力が勝手に使われていく。美遊にバックドアでも仕掛けられていたのだろう。門の中からまた光が溢れ、その中から右手首の布、体の傷、射籠手の意匠が刻まれて装備を身に着けた一人の少年が……否。男性が歩いてくる。

「セイバー、衛宮士郎。召喚に応じ参上した。ただの美遊の兄なんだが、何の因果か、千子村正と無名の力を取り込んだ、疑似サーヴァントってことでサーヴァントの真似事や鍛冶師もできるようだ。ん？ 相変わらず泣き虫のようだな」

「お兄ちゃんっ!!」

美遊が俺の中から出て泣きながら士郎に抱き着いていく。彼の言葉が本当なら、それが愛歌からの美遊へ対するお礼も兼ねたプレゼントなのだろう。

「よしよし。それで……お前がマスターで、美遊の使い手か」

「夫だ。妹さんをください」

「既に貰っているだろうが、筋は通さないとな」

「ああ。だから、美遊は笑って友達と遊べる世界にする」

「そうか。なら、後はコイツで語り合うとするか」

そうして引き抜いたの刀である。

「駄目」

「美遊？」

「ご主人様に手を出しちや駄目」

「これは男同士の話でな？」

「駄目。駄目ったら駄目。それにこれからまだ忙しい。そういう戦いは後にして」

「……」

「すまない。できれば後で戦おう。俺も刀術を習う事になったから、それを覚えてから正式に挑みたい」

「あくそういうことならいいか。で、何をすればいい？」

「とりあえず、戦力になってくれたらいい」

「了解つと。それで美遊。ちゃんと食べてるか？」

「食べてる。大丈夫。それにいっぱい友達もできたよ。姉妹かもしれないけど」

美遊が士郎の手を引いてこちらに移動してくるので、俺達は愛歌の方を見る。しかし、彼女は既にアーサーと共に居なかった。スマホに目をやると、メッセージがあった。そこには俺にもプレゼントを用意したと書かれているので、誰かを確定してくれるのだろう。

「次はこれだな」

美遊は楽しそうに話しているので、そつとしておいて召喚を開始する。別の門が現れてそこから虹色の光が溢れてきた。

「万華鏡のように私が支援します」

傘を持ち、美しい晴れ着に身を包んだ雅な姿をした幼い姿のピンク色の長い髪の毛をした大人の女性。

「異世界。大変興味深いです。色々教えてくださいますから、私を楽しませてください」

愛歌が用意したのは、まさかの五億円のママだった。そう、彼女は研究者でありながら、ヤバイ変身能力と分身能力を合わせ持つ天才で、一つの世界で最強の一角として君臨する女性だ。子供扱いしたら店や街ごと吹き飛ばされる可能性すらあるので、注意も必要だ。

第85話

目の前で傘を指しながら笑っていると、150cmぐらいの年端も行かないような少女のような姿をしている。実際の年齢は確か、24歳。内閣情報調査室に所属していて、アストルムにスパイとして入っている人だ。そう、彼女の姿はアバターだ。アストルムと呼ばれるVRMMOを開発し、その中で世界最強クラスの存在として存在する^{セブンスラウンズ}七冠と呼ばれるうちの一人。

まあ、このアストルムは超高性能AIによって管理され、最初にゲームをクリアした人の願いを叶えると言われて多数の女性がプリンセスを目指して参加した。男性はなんだった忘れた。プリンセスナイトは七冠しかできないはずだし。

そんなゲームを攻略した一人の女の子がもつと続けたいという願いを受け、色々な妨害を受けた状態のせいで曲解して叶えた。接続している数千、数万の人達を巻き込んで彼等の記憶を消し、ログアウトできないデスゲームかガチもの異世界となったとき。ヤバイ☆

「色々教えてくれるとのことだけど、何を教えてくれるんだ？」

「そうですね。私の知っている知識などです。お姉さんとしてしっかりと教えてさしあげます。私が知っている彼とは同じようで違うようですが、その辺りはおいおい調べていけばいいでしょう」

「要求は？」

「異世界の知識をください。私の知的好奇心を満たすために」

ネネカの視線は俺の周りに居る者達とその場に存在する破壊の跡を一瞥した後、こちらをしつかりと見詰めてきている。最初はプリンセスコネクトの主人公であるキシクンとして、こちらを判断して別に混ぜっていると判断したんだろう。

「全部は無理だ。国の国主として極秘としなければならぬ情報が多々ある。教えられるのは一部のみとなる」

「それはそうでしょうね。それにしても、国ですか……」

「こちらで作った。戦力は女神をはじめとしてかなりある」

「女神ですか……いささか信じられません……貴方がそういうのであれば事実なのでしょうね」

「どうやら、信じてくれたようで良かった。プロテアが力を出そうとしていたので、大惨事が防げた。それとネネカのことだから、変身能力を使って紛れ込んで調べようとしてくるだろう。だけど、それは無理なので釘を刺しておこう。」

「変身能力を使って侵入してもすぐわかる」

「どうしてですか？」

小首を傾げる彼女にしっかりと伝えておく。セキュリティに関してはユーリとハクの科学組とルサルカ、鈴、恵理の魔術組で徹底的にやっている。両方を突破するには現状のネネカが持つ技術では不可能だろう。未来の科学技術をどうにかできても、完全な魔術系統は不可能に近い。アバターの力があつたとしてもだ。

「俺がネネカを召喚した関係で魂が繋がっているからだ。それに姿はまねられても魂までは無理だ。無理、だよな？」

「ええ、無理です。しかし、魂の繋がりはですか……これは厄介ですね。さて、全部を教えてもらうには……」

「ネネカだったかしら？ 簡単よ。貴女も真名の女になればいいのよ」

「そうそう。そうなれば僕達と一緒に家族だから、全部教えられるよ？」

「……なるほど。家族ならば現時点の全てを教えてもらえるのですね。加えて未来で得られる異世界の技術もですか」

ルサルカと恵理が説明して説得してくれる。

「確かに魂に関する技術は蒐集できていません。まったく未知の分野です。それに異世界の技術は……大変興味があります。いいでしょう。身体を捧げる価値は十分にあると判断します。ですが、私は……情報を……」

頭を押さえて痛そうにしたネネカ。どうやら、記憶の障害がこちらでもあるらしい。まあ、ユーリに治療してもらえば大丈夫だろう。

「大丈夫か？」

「……大丈夫です。それよりも、一つだけ言っておきます。祖国を相手にやりすぎるのであればそれ相応の事を覚悟してもらいますよ」

「それこそ親密になつて教え導けばいいじゃない。違う？」

「そうですね。お姉さんとしてしっかりと教えてあげましょう」

「じゃあ、契約魔術を使いましょう。これで絶対に裏切れないから♪」

「……いいでしょう。最低限の条件を……」

女性陣の方で話し合いをしてもらつておく。ネネカの要求は技術の開示と習得。日本への対応についての権限を一部認める事と虐殺などの禁止といった基本的なこと。日本側から戦争などを仕掛けられた場合はもちろん、交戦するのは問題ないとのこと。それらに加えて愛する女性として扱うことぐらいだった。この愛する部分には別の男にあてがわれないなどそういう部分がある。

こちらはむしろ、ルサルカ達から追加して、ありえないかもしれないがネネカが他の男と身体を重ねるなどを禁止している。あつさり、こちらの提案に乗ってきたのと、内閣情報調査室ということでもハニートラップとか別の男にされたら叶わないからだ。まあ、心配しすぎだとは思うけれど、精神支配系の方法がないわけではないので、そちらの対策として先に縛っておく。

「しかし、これは助かるな」

「どうしたんだよう？」

「某が教えようにも強くは言えぬ。ネコネ達に任せても同じだ。だが、国を思う彼女であればしっかりと聖上を皇としてムネチカ殿のようには教育してくれるであろう」

「ああ、なるほどな。まあ、確かに皇としては随分と好き勝手にしているからなあ。自分も流石に国庫でガチャをされたらかなわん」

「面白い事を言っていますね。どういう事か、説明していただきましょう」

オシユトルとハクの言葉を聞いてネネカさんがこちらに詰め寄ってくる。俺は汗をダラダラさせて視線をやると、残りの八ツの門が見えた。これだ！

「い、今は置いておいて残りの召喚をするぞー！ ルサルカ！」

「はいはい」

「確かにそちらの方が重要ですね。後でしっかりとお話します。そちらの仮面をしている貴方、色々教えてください。教育カリキュラムを作ります」

「うむ。承った。カリキュラムというのはわからぬが、必要な事であればしっかりと協力させていただきます」

ネネカとオシユトルがしっかりと握手をしたのを横目にして、アビーの隣に移動して続きをする。美遊は兄である士郎と話しているので、こちらは置いておいていい。残りの召喚は聖杯の力が入っている、基本的にこちらの願いが叶えられるからだ。

「雫にあげるのだから、剣よりも刀がいいのよね？」

「そうだな」

「じゃあ、強い聖遺物たりえる最強で最恐な刀よ来なさい！」

「にやあつー！」

ルサルカの言葉に門が開いて、中から炎が溢れ出してくる。そんな中から金属が擦れるような足音が響いてきた。それも濃密な殺気と共にだ。

「全員、戦闘準備！」

ルサルカの声と共に全員が戦闘準備を整える。支援魔法をかけて戦闘能力を高め、盾になる召喚獣を召喚して待ち構えていると、赤色の鎧を着た武者が歩いてくる姿が見えた。そいつが手に持つのは大太刀だ。その大太刀は炎を纏っていた。

「おいおい、コイツは……」

「お兄ちゃん？」

「村正がヤバイというぐらいの代物だぞ、あの大太刀は……」

草薙の剣や天叢雲剣か、とも思ったが、違うような感じもする。と
うか、鎧武者とセットで炎を出してる奴なんて一つしかない。

「我、求めるは強者なり」

そう、コイツの名前は天目一個。史上最悪のミステスなどと呼ばれ
恐れられる伝説の怪物であり、大太刀型宝具『贄殿遮那』を核として

顕現している。うん、灼眼のシヤナという作品のヒロインが使っていたヤバイ大太刀だ。確かにこれなら聖遺物として申し分なく、ルサルカの願った最強で最恐だろう。精霊のような連中を何十体も何百年にわたって斬り殺していたぐらいだし、天罰神の力を持つシヤナが使っていたのでひよつとしたら強化されているかもしれない。

「ふ。これなら雫の聖遺物として申し分ないわね！」
「過剰すぎるわ！」

とりあえず、交渉してしばらく大人しくしてもらおう。天目一個は士郎やオシユトルをターゲットにしているような感じだが、使い手は別にいるからな。

「使い手候補は現在、準備をしているのでもう数日待ってもらえないだろうか？」

「それが無理であれば某がお相手仕ろう」

「兄様はまだ駄目です！」

「俺もまだ身体に慣れていない」

「と、いうわけで準備期間をいただけないだろうか？ その代わり、使い手に相応しいものを用意することを約束する」

「……良かろう。我、求めるは強者のみ」

天目一個の姿が光となつて俺の中に入っていった。これ、何時でも現れるレイドボスかもしれない。愛歌と同じような感じかもしれないし、さつさと雫に渡そう。無理かもしれないが、雫ならやってくれるだろう。最悪、というか、保険としてユーリとユニゾンして挑んでもらえばなんとかなる！ はずだ。

第86話

アーサー・ペンドラゴン、士郎、ネネカ、天目一個と四回の召喚を行った。残りは七回。なので、他に願いがある者達の望みを叶えた方がいい。

「詩乃はどうする?」

近くで武器をてにもっている詩乃に声をかける。鈴と恵理はこれと言って願いはないと思う。いや、向こうの世界に俺と一緒に戻るぐらいだろう。

「私はいい。今、お母さんを召喚しても困る」

「確かに安全が確保されてからの方がいいな」

「うん。それでお願い」

身体を寄せてきた詩乃の頭を撫でながら、ケットシーの耳を楽しみつつ次に視線をやる。ワクワクした表情でこちらを見詰めているピンク色の暴走っ子を無視する。

「他に誰か欲しい物はあるか? アストルフオ以外で」

「そんなんっ!」

「あの……私、欲しい物があるんだけど……いい?」

「優花か。いいぞ」

「ありがとう。それじゃあ……何処でもどんな環境でも使えて、食材が無くならない最高級のキッチンとお風呂がついている屋敷……うん、最高級のホテルが欲しい」

優花が願いを声に出したところで、俺とアビーと一緒に力を込めて召喚用の門を作動させる。召喚されたのはスキル書のデイメンション・ホテルと呼ばれる物だった。

「なんでホテルなんだ?」

「これで何処でも皆に美味しいご飯を食べてもらえるし、お風呂も個室も完備」

「ありがとうゆかゆか!」

「確かにあると便利だしね」

「汗を流せるけど、やっぱりこっちの方がいいかも」

緊急避難的なこともできるし、優花の店として土地を手に入れてから出すのもありだろう。まあ、ホテルなので料理屋と比べると規模がヤバイが。

「あつ、ごめんなさい。主様、もう限界です……」

「マスター、ごめんなさい。私も限界だわ」

美遊とアビーの二人がそう言うのと、門が崩れていく。どうやら、聖杯の力が限界を迎えたようだ。まあ、無理もないだろう。今回、召喚したのはどれもこれも聖杯で確率を弄って無理矢理呼び出した物だからな。

「ありがとう。助かった」

近づいてきた二人の頭を撫でた後、スマホを確認する。残っている天使の魂は全て無くなっているが、それ以外の魔物や人、魔族の魂はまだある。つまり、ガチャは実行可能だ。

オルクス大迷宮ピックアップガチャは無くなっている。まあ、オスカーも仲間に入れたし当然だな。他に現在、開催されているガチャは……スキルガチャ、武器ガチャ、進化素材ガチャだ。

「どれがいいか……?」

「ボクは進化素材ガチャがいいと思うな」

アストルフオが後ろから首に手を回して抱き着いてきた。その状態でスマホを見てきているわけだ。匂いも柔らかさも本当に女の子のようで、色々とアレだ。

「ね〜ね〜これでいいでしょう! ボク、進化したいな〜」

「わかったよ。じゃあ、これでいいか」

「と、いうか、まだやるのね」

「もちろんだ。皆も十回ずつ引いていくか。本人がやった方が出るかもしれないしな」

進化素材ガチャをアビーと俺で協力しながら、それぞれにスマホのボタンを押してもらおう。全部で1000回回した結果、☆1素材が580個。☆2素材が310個。☆3素材が66個。☆4素材が38。☆5素材が6個。全くもって酷い割合である。

「爆死？ 爆死よね？」

「いやいや、そんなことは……」

「まごうことなく爆死なのです」

「残念ですが、現実です」

ルサルカの言葉に続いてネコネとリムリも同じように言ってくる。しかし、大丈夫だ。アルテナは俺の頭をよしよしと撫でてくれる。アビーの方は俺と同じく項垂れてしまっていた。

「次こそは引けるはずだ！」

「そうよね、マスター！ 次引きましょう！」

「あゝ」

「典型的な駄目駄目な奴だよ、まなまな……」

「聖上。残念ながらこの度はこれで終わりです。これから入用なのですから、貨幣まで使われては困ります」

「また稼いでくればいいじゃん！」

「駄目です。金貨を消費しているのですよ。消えた分の補充をどうするのですか」

「ぐっ……経済的に駄目か」

「そもそも、本来の目的である美遊殿の兄君と雫殿の聖遺物は手に入っております。追加でネネカ殿の召喚と優花殿のホテルに成功したのですから、この辺りが撤退しどころかと」

オシユトルの言う通りなんだが、もっと引きたい。

「どうやら、わたしでは満足していただけないようですね？」

「いや、そんなことは……」

「でしたら構いませんね。さっさとこれから住むことになる拠点に案内してください」

ネネカにこう言われたらどうしようもないので、ここで泣く泣く撤退することにする。まあ、美遊の笑顔も見れたし、天使共を殺してまたやればいい。

「お兄ちゃん、あとで……その、たっぷりと慰めてあげますから、帰りますしょう？」

ユーリにまでそう言われたので、大人しく帰ろう。俺から出たユー

リを抱き上げて肩車する。ユーリは俺の頭を撫でてくれる。アルテナは離れて付き添ってくれた。

「全員、魔族か帝国が来る前に撤収する。指示はオシユトルに任せる」「はっ」

全員がオシユトルの指示に従って即座に撤収していく。移動は魔改造トラックに全員が乗ったあと、女神や一部の精神的に問題ない者達が運転する。それからアビーの開いた門を通して帰ることで、素早く戻れた。本当にアビーには頭が上がらない。

そんなわけで、居残り組のシユテル達と雫の様子を確認するために研究所にやってきた。そこでは雫が培養槽の中で浮かんでいるが、改造のためなので問題はない。

雫には複製した竜の心臓とユーリの持つリンカーコアを移植し、骨に魔術を仕込んで神結晶と同質の物質でコーティングして全体的に強化されているようだ。脳の部分には手を出さないが、それ以外の部分には徹底的に強化しているとのこと。

特に再生能力は高くされていて、お肌の感触など常に生まれたてのような状況に維持されるらしい。美容関係が凄まじいレベルで施されている。染みや皺なんでもものも無縁らしい。胸も垂れることもなくしっかりと維持されるらしい。施されているのがほとんど戦闘に見せかけた美容系という恐ろしさ。こんなのやってるから竜の心臓とリンカーコアが必要なんだと思う。

「美容に関する強化が戦力の向上にも繋がるということですか……いいですね。これは私も欲しいです」

「女性なら誰でも欲しいわよね。例外はすごく若い子だけかしら。ユーリちゃんみたいなの」

「むぎゅ」

座つて雫の様子を確認していたユーリが、ルサルカに後ろから抱き着かれて頭に顎を乗せられる。その隣に立って表示されたデータを確認していくネネカ。彼女は色々と質問していく。それを答えるユーリ。二人共、とても楽しそうだ。

「お兄様、あったかい物、どうぞ」

「ありがとう」

シュテルが持つてきてくれたホットココアを受け取って室内にあるソファアに座る。シュテルはユーリヤルサルカ、ネネカ達にも渡していく。

「ありがとうございます」

「ありがとう」

両手で抱えてフーフーしながら飲んでいく姿が、とても可愛らしい。口の中に広がる甘味を楽しみながら、ユーリとネネカが技術について話していく。流石にルサルカは科学分野はわからないようだが、ネネカに魔術に関して質問されると答えていつている。あちらは邪魔をしないようにして、俺はシュテルに尋ねる。

「シュテル、雫の状態はどうだ？」

隣に座つてきたシュテルに聞いてみる。彼女はココアの上に書かれたラテアートの猫を壊さないように飲んでいる。

「問題ありません。もうまもなく適合して完成します。経過は順調です。拒絶反応もありません」

「それは良かった。だが、本当に大丈夫なのか？」

「はい。私達の世界に存在した古代ベルカでは人体改造はかなり行われておりましたからね。その技術もしっかりと蒐集してあるので、それを基にしてこちらにある生成魔法やルサルカさんの魔術に加え、鈴さんの結界などによる細菌の排除。そして、ハクさんより頂いた仮面の力や彼の解析能力を借りて私達では理解できなかったものも理解できました。もちろん、恵理さんの死霊術も問題なく定着させるのに役立ちました」

つまり、雫の身体は俺と同じく、彼女達異世界の技術者たちによる合作となっているわけだ。

「姿形が雫というだけじゃないよな？」

「もちろんです。DNAもちゃんと雫さんの物を基礎としてあります。あくまでも身体を改造しただけですよ」

「それにしても雫で人体実験をしたような感じじゃないか？」

「実験はすでに終わっていますので、問題ありません。安全面は確保し

てあります。後、実験をするというのなら、プロテアの女神の神核を複製して投入するぐらいでしようか？」

「流石にそれは……」

「はい。人を完全に止めることになりまし、何が起こるかわかりません。下手に実験もできないのでやっていません」

ちゃんとその辺りは考えてくれているようだ。何重にも安全策を講じて確実に問題ないという技術しか使われていないようだ。俺は一切、そんな気がしないが。

「ところで見たことがあるような身体が複数、作られているようなんだが……」

「ああ、恵理さんとアストルフオさんの物ですね」

シユテルが頭を俺の肩に預けながら答えてくれた。その内容はちよつと聞き逃せないことも入っている。

「恵理とアストルフオか？」

「恵理さんは魂の強化だけでは何れ限界が来ると思っているようで、肉体面の強化も行っています。ただ、問題は完成されていない欠陥兵器を身体の機能として取り入れられています。私達も詳しい技術はなく、ほとんど聞いただけの概要に近い物だったのですが……」

「嫌な予感しかないが、それはなんなんだ？」

「死体を動く爆弾に変える技術です。古代ベルカにあつたガリアの王が施された技術で、名は……」

「マリアージュか」

「そうです。やはりご存知でしたか」

「まあな……」

マリアージュ。ガリアの王、イクスヴェリアの能力だ。彼女が体内に自動生成されたコアが近くにある死体に勝手に取り込まれ、死体を浸食して身体を作り変える。機械化された兵士となり、敵を排除する。やられかけたり、捕獲される場合は自らを可燃性の液体……ナパームのような物に変化させて敵ごと周囲を焼き払う欠陥兵器だ。欠陥なのは命令がイクスヴェリアの意思に係なく、生み出されたマリアージュが事前に登録された行動によって自国以外の相手を殺し、

マリアージュに作り替えていくからだ。

「身体を作り変えるのは錬成で、操るのは死霊術を使えばいいか」

「変化させる自爆用の液体はジャンヌ・ダルク（オルタ）さんの憎悪が込められた地獄の業火を閉じ込めた物を錬成して解き放つとのこと
で、この世に地獄を顕現させるそうです」

「なんでそれに協力したんだ？」

「取引しました。私も地獄の業火を使ったかったので」

眼鏡の中心部をクイツと人差し指で上げてドヤ顔をするシユテル。
炎熱系としては欲しかったようだ。

「それにお兄様は知らないかもしれませんが、白夜の方々は狂信者
と言える方々です」

「それがなんだ？」

「死後も助けてくれたこの国を守るために戦いたいそうです。その手
段を求められ、開発したのがコレです」

「マリアージュとして死体を完全な兵士へと作り変えて、死霊を宿ら
すことで疑似的な転生を行って強くてニューゲームか」

「はい。肉体はともかく、経験値は蓄積されます。もちろん、エイウヰヒカイト永劫破壊
も仕込んであるとのこと、死体が持っていたレアスキルも蒐集出来
る優れものですよ」

「大変興味深い技術ですね。倫理観を無視すれば、ですが……」

ネネカもこちらにやってきた。どうやら、話し合いは終わったよう
だ。いや、ユーリ達の方を見ると、あちらにもネネカが居る。つまり、
分身を置いてきたというわけだな。

「シユテル。改めてネネカだ」

「はい。私はシユテル・スタークスです。よろしく願いいたします」

「ええ、こちらこそよろしく願います。それで先程の話ですが、コ
ントロールはしっかりと効くのですよね？ 勝手に死体を作り替え
られては管理が大変ですよ」

「もちろんです。恵理さんが契約した死した英霊達だけになります。
生前に契約を交わすことで、運用を簡単にして恵理さんが居なくても
ある程度は運用できるようにするとのことですよ」

「しかし、浄化された時の対策は……」

「問題ありません。これらの戦力はあくまでも恵理さん個人が持つ運用する戦力です。本来の国軍は別にあります」

現在、天津が抱える軍は国防軍、遠征軍、親衛隊に別れる予定だ。シユテルは国防軍と遠征軍の兵器開発も行っている。技術開発部にはミレディやオスカー、ハク、ユーリ達も所属している。ネネカや士郎義兄さんもこの所属になるだろう。

「反乱されても鎮圧するだけの戦力もありますし、マリアージュには自壊コードも仕込みます。それに最悪、鈴さんのシエンシヨウジン神獣鏡で浄化しますので問題はないかと」

「鎮圧できるのであれば問題ありません。しかし、色々と研究したい技術が目白押しですね」

「研究するのは構わないが、秘匿は一切無しだ。互いに技術を公開して協力し合うのがルールだ」

「本来なら有り得ないことですが……」

「研究者は皆、家族ですからね。優劣はほぼありません。成果を出せば褒美がもらえるだけで、それこそ研究をしてもいいですし、しなくてもいいです」

「そういうことだ。研究費とかはちゃんと国庫から出す。それ以上は成果を上げて稼いでくれ」

「ふむ……だいたいわかりました。技術特異点は異世界の技術が集まるのであるならば当然、起こりますから、技術は飛躍的に進歩します。彼女の技術を追い越すこともここであれば容易い。いいでしょう。魔法、魔法と科学の融合……魔科学と言ったところの技術を極めましょう」

「じゃあ、条件についても問題ないか？」

「ええ、身体を差し出すなど、このような技術を得られるのであれば些末な事と言えるでしょう。もちろん、安く売るつもりは一切ありませんし、おひとり限定ですが」

「それは良かった。それで、研究はしばらくしてから……」

「いえ、今すぐ行います。ああ、安心してください。ちゃんと本体は真

名のところに居ますから。ですので、シユテル。貴女のところにも一人、置かせてください」

「そういうことならわかった。シユテル、頼めるか」

「わかりました。研究施設を案内して空いているスペースを使ってもらいます。幸い、急ピッチで開発しているので、場所は余っていますし」

ハルツィナ樹海からライセン大渓谷までの広大な地下が開発範囲だ。現在も錬成と生成魔法を利用した拡張工事が進行していて、詳しい計画は知らされていない。全部、シユテル達、技術者に任せてある。利便性だけは優先するように言っているし、メインで図面を引いたのはハクやディーアーチエ達だ。

ハクは面倒な事はしたがらないので、移動に関しても出来る限り余分な物を省いて効率を優先する。これはディーアーチエ達も同じだ。まあ、アレだ。ガンダムで言うジャブローのような堅牢な地下要塞といった感じに作られていつている。

「ネネカさん。ちよつとスケジュールを決めたいので、いいですか？」

「スケジュールですか？」

「はい。お兄ちゃんと一緒に寝る順番とかです」

「ああ、なるほど。人数が多いようですからね」

「それで……」

「わかりました。ですが、できれば時間が欲しいですね。勉強にも利用したいので……」

「勉強……」

「ええ。そういうことがしたければ課題を達成すればしてあげる。そういう感じにしようかと思っています」

「それは……ちよつと困ります」

「わかっています。そこで提案があります。彼女の力を借りましょう。先程、教えてもらった彼女の力であれば問題なく、嫁である全員が満足できるでしょう」

「えつと……？」

「マナを分身させましょう」

この言葉が発端となり、俺は色々やばい状況になることになった。

ユーリ達により、嫁達が集められ、彼女に話を通す。彼女達はすぐに了承してくれたので、お願いしてみたら二つ返事でやってくれることになった。

そんなわけですごく長い夜が開けた。というのも、美遊を除いた全員で一つのベッドに何もせず眠り、俺の意識は大量に別れた。

「ワクワク、ドキドキのドリームランドへようこそ！ それぞれの要望に従って私がちゃんとエスコートするわ！ だから、楽しんでいてね！」

そう、彼女とはアビゲイル・ウィリアムズ。空間を操り、夢すらも操る事が可能な彼女であれば夢の中限定で俺の意識を分身させて嫁、一人一人や一对複数も可能だ。ハーレムも逆ハーレムも可能なわけだ。

実際にデートした後には数人の俺とやっている子や、一緒に並んで互いの俺としている子なんかもある。

そんな中、ネネカに当たった俺はというと——
「では、勉強を始めましょう。国を導く者にとって最低限の事を覚えていただきます」

——机の上に大量の参考書が置かれている前で、足と身体を拘束されて椅子に座らせられている。逃げることはできない。

「ゆ、夢の中で勉強しても意味は……」

「記憶は共有されますし、覚めてからも覚えていられるようにしていただけるよう話しています。ですので、気にせず覚えるまで延々と、それこそ何ヶ月でも時間を引き伸ばせるので、付き合ってください」

「そんなっ!?!」

「ご褒美は本体の初めてです。私の身体を好き勝手に使ってください構いません」

「やりたいことであればなんでもしてあげます」

いつの間にか分身していたのか、複数のネネカが現れていた。彼女

達は俺の肩に手を置いて耳に口を近づけてきた。

「ですのでどうか、頑張ってください。期待していますよ!」

「はい……」

耳元でささやかれ、俺の地獄は始まった。ネネカの方は交代でもらった資料を読みながら研究をしていつている。この空間は研究者にとつて理論を構築するにはもってこいなのだろう。

美遊は士郎の所に泊まるので、今日は居ない。アビーは別の俺が相手しているのでこちらに助けもこない。俺のためになると言われているので、助けを呼んでも意味がないとのこと。無理矢理呼び出すわけにもいかないし、不甲斐ない姿をみせるわけにもいかなないので頑張るしかない。

「まずは学力テストからです」

学力テストの結果は当然、悪かった。呆れたような表情になったネネカがため息をつきながら、新しい資料、参考書などを呼び出してくる。

「復習も兼ねて小学生の問題からやってみましょうか」

「社会とか忘れたって……」

「問題ありません。全て、やればいいだけです」

「ひいつ!」

スーツ姿になって教鞭を持ったネネカと楽しい楽しいお勉強のはじまり、はじまり。ロリっ子女教師と個人授業とか、ある意味では最高では? その後のご褒美も待っているし……難易度はヘルのクソゲーだけだ。

「痛っ!」

「誰がロリっ子ですか。私は24歳です」

「叩くことない……って、心の声を読んだ?」

「ここは夢の世界ですから。貴方が思っていることを読むことなど、観察眼を磨いていなくても容易いです。プラカードを出すことだってできるのですよ。もちろん、黒板だって出せます。そういう風に設定してもらいましたから」

「くっ、さすがはママ……」

「誰がママですか。いえ、まあそれでも構いません。一応、大人扱いですし、いいとしましょう。では、勉強を開始します。間違えれば容赦なく魔法を撃ちますから、そのつもりで」

「鬼、悪魔！ 可愛い！」

「ありがとうございます。と、言っているのか、怒ればいいのかわかりませんね。本当に手のかかる子供に感じてきました。ほら、やりませよ」

「はい、は〜い」

「はい」は一回」

勉強をしっかりとやっていく。ネネカママの教え方は大変わかりやすく、覚えやすかった。わからないところもしっかりと噛み砕いて教えてくれる。何度も間違ったら、魔法を叩き込まれるが、多少痛い程度で、容赦なく口による攻撃が飛んでくる。

それでも根気よく教えてくれるので解けたときは嬉しくなるし、遠回しに褒めてくれるので嬉しくなる。

三ヶ月ほど勉強を頑張つて、ようやくネネカママの求める高校生レベルを最低限はクリアできた。そう、ネネカママが求めるだ。決して一般的なレベルではない。受験戦争で勝てるレベルが最低限だ。

「次回は帝王学や経済に関してですね。帝王学はともかく、マナの場合は経済を本格的に教えましょう。国庫を召喚で空にされてはかありません。ましてや、これから国庫に入るのは税金です。税金は国のためにこそ使われるべきものです。決して私利私欲のために使ってはなりません。いいですね？」

「はい！」

「よろしい。では、ここに召喚用の魔法陣があります。しかし、国庫のお金以外、使えるものはありません。どうしますか？」

「回します！」

「よろしい」

「あ、待って。その周りに浮かべている水晶を止めて！」

「お仕置きの前に聞いてあげましょう。なんですか？」

「ありがとうございます！ ちゃんと使った分は後で補填す……」

「アウトです」

「あぎやあああああああああああつ!?!」

身体中に風穴を開けられて激痛にのたうち回った。少しすると回復した後、正座させられて説教された。でも、ガチャは回すしかない。

三年の論争の後、どうにか互いに妥協点を見つけ合った。国庫とは別に貯金を用意し、そこから支払うことにする。ただ、この貯金には毎月貯めて残しておくのが条件だ。

そんな話し合いをした後、ようやく現実に戻った俺は他の俺達の記憶を統合したことで頭がかなり痛くなったが、すぐに処理して小分けしたファイルをブレイコンピュータに作って、ちよつとずつ処理していく。それが終わったら、ご褒美タイムだ!

天之河光輝

「何故ですか!? 救助部隊が出せないってどういうことなんですか!」

「落ち着いてください。何も助けに行かないとは言っていないのです、勇者様」

「そうだ。我が娘が連れて行かれたのだぞ」

俺の言葉に腕がない教皇イシユタルさんと国王のエリヒドさん。俺は彼等にすぐに皆を助けるために人を集めるように頼み込んだ。だが、彼等から帰ってきた言葉は否定だった。

「私としても今すぐ助けだしたいのだ」

「相手は帝国に所属しているんですよね?」

「当然、帝国には照会した。だが、帰ってきた返答はそんな者は帝国には存在しないということだ」

「なんっ!? 失礼。それではまるで……」

「ええ、沙条真名率いる者達は帝国の所属ではありません。彼等に確認したところ、彼等が所有していた帝国の品物は行方不明になった部隊が持っていたものでした。おそらく……」

「殺して奪ったというのか!」

まさか、沙条がそこまで落ちているとは……

「でしょうな。奴等は邪悪な存在ですから……おそらく、リリアーナ姫も八重樫様も悲惨な目にあっているでしょう」

「くっ……なら尚更、助けにいかなきやならないだろう!」

「ですが、その兵力が存在しないのだ。どこかの誰かのお陰ですな!」

貴族の言葉に歯ぎしりをしたくなる。確かに俺がやらかしたせいだ。だが、あれが間違いだったとは思わない。沙条から彼女達を救うためだからだ。いや、皆を賭けたことについては間違いだ。だからこそ、俺には皆を救う義務がある。

「勇者様が責任を取ってお助けに行っていただければよろしいかと……」

「おお、それは良い考えだな」

「ふむ。だが……」

「いえ、それで構いません」

「そうか。勇者様がそういうのであれば……志願兵を募ることを認めよう。費用は少ないが出す。これでどうか、リリアーナを救い出してくれ」

「ありがとうございます」

俺はすぐにメルド団長に話をしに行き、騎士の人達に共に助けに行ってくれることを頼んだ。

それから少しして呼び出され、期待してメルドさんの部屋へと赴いた。

「すまない。俺も行きたいのだが、無理だ。王国の守護を疎かにはできない」

「では、他の騎士の人達と……」

「いや、騎士は誰も出せない」

「どういうことですか!?!」

メルド団長との間にある机を思わず叩きながら叫ぶ。

「陛下から許可されたのは志願制だ。誰も志願しなかった」

「リリアーナや雫達を見捨てるというのですか!?!」

「違う。私だって助け出したい。だが……いや、なんでもない」

「メルド団長?」

「他の者達はどうなのだ?」

「皆は……」

残っていた男子の皆にも言ってみたが、誰一人として一緒に来てくれなかった。来てくれそうな龍之介は現在、治療中でそもそも意識が回復していない。

「そうか……志願してくれる者もいないのであれば仕方が無い。依頼という形で冒険者に頼んでみるのはどうだ？」

「冒険者ですか？」

「そうだ。彼等なら報酬を支払ってくればあるいは……」

「わかりました。そちらに頼んでみます」

「すまない」

メルド団長に言われた通り、俺はギルドに向かつてそこで依頼を出すことにした。

ギルドに向かう途中、街の様子が今までとは違って変だった。ギルドに入って依頼をしていると、扉の方から150cm前後の少女と子供が入ってくるのが目に入った。

彼女は綺麗な金色の髪の毛を腰の下ぐらいまである髪の毛を二つに分けて結んでいる。そんな彼女の隣に子供がいるので、俺と同じようにギルドに何かを依頼しているようだ。

「依頼内容はリリアーナ姫様達の救出ですね。報酬は……この額ですか？」

「国からもらったのがこの額になる」

「それでしたら受ける方はおられないかと……」

「なんですか!？」

「先の戦いの規模から計算した、相手の実力と報酬の値段がかみ合っていないのです。それに……」

「それに？」

「いえ、なんでもありません。報酬の増額はどうしますか……？」

「支援金がそれしかないから、それでお願いします。資金ができれば増額は可能ですか？」

「はい。それは可能です」

「では、それでお願いします。出発は三日後なので正門に朝、集合をお願いします」

「かしこまりました」

これで大丈夫だろう。必ず助けてやるからな、リリアーナ、雫……

三日後。どれだけ待っても誰も来てくれない。やはり、受付の人が言っていたように、あの報酬では無理だったのだろう。彼女達を助けるためのだから、少ない報酬でも受けてくれてもいいと思うが……
「よお、天の河」

「その声は檜山か!」

彼がきたことに喜びながら振り返ると、彼の他にもローブを着た女性や騎士の人達がいた。

「彼等も来てくれるのか!」

「勘違いすんな。俺達はお前とは別口だ」

「なにを言っているんだ?」

「はっ、わからねえのかよ? お前は見限られたんだよ。そりやそうだろ。誰も仲間を賭けの対象にして取られるような奴と一緒に行きたいと思うかよ?」

「っ!? そ、それは……」

「だから、お前が頼んでも誰も来なかったが、俺が頼んだら別だった。それにお前は神官や騎士達が大量に死んだ原因でもある。家族が死ぬ原因を作った奴と一緒にいたいのか? 後ろから刺されるのがおちだぜ」

「俺は彼女達を救うために……」

「はっ! それで仲間を取られてちゃわけねえぜ! まあ、安心しろよ。俺が雫もあいつ等も助け出して、俺の女にしてやるからよ。お前は精々、刺されないように気を付けてひっそりと生きるんだな!」

そう言って檜山は俺の隣を通って街の外へと出ていこうとする。それを呼び止めた。

「ふざけるな! 彼女達は……」

「俺のもんだ。教皇様のお墨付きだ。それにお前はもう勇者じやな

い」

「俺は勇者だ！」

「いいや、エヒト様からの神託があったそうさ。天之河を勇者として認めないってな。異端審問も検討されたらしいが、それは魔族や雫達を取り戻す戦いのために見送られたそうさ。おい、アレを渡してやれよ」

「これが教皇様と王より発行された命令書だ」

彼等からは憎悪の籠った瞳で見詰められながら、渡された巻物を開いて確認すると、確かに俺から勇者としての権限を剥奪することが書かれており、リリアーナ達を救出するためと魔族を滅ぼすために異端者には認定されていないことが書かれていた。ただし、どちらもなさないと異端者と認定して処刑するとも書かれている。書かれていた内容に思わず崩れ落ちる。

「もうお前は終わりだよ。精々、一人で頑張るんだな」

檜山は俺の肩を叩いて仲間達と外に出ていった。しばらくそうしている、頭に衝撃がきた。頭に当たった物を確認すると、それは石だ。

「お前のせいで姉ちゃんがっ!!」

「駄目ですよ。やめてください」

「でも、コイツのせいで優しかった姉ちゃんが……」

視線を上げてみると、いつの間にかギルドで見た子供と少女が居た。子供の方はボロボロの服を着ているが、少女の方は紺色の帽子に同色のマント。服装は白いシャツと同色のスカート。黒いベルトをつけていて、腰の後ろには装飾のあしらわれたショートソードが装備されている。そして、何より彼女の手に握られている彼女の身長と同じくらいの杖が見える。

「……姉……?」

「そうさ! お前のせいで俺の姉ちゃんは奴隷にされて連れていかれたんだ! 姉ちゃんを返してくれよ!」

「この子の姉は神官見習いとして先の戦いに従軍していたそうです。その後、姉は帰ってきていないとのことさ。また、戻ってこれた人

の証言から、連れていかれた一人だと判明しました」

「それは……」

「だから、ギルドに依頼しようとしたけれど、この人以外、聞いてくれなくて……」

「君は……この子の依頼を受けたのか？」

「はい。私にも彼等に接触する目的がありますから、そのついでです」

「そうか……」

「それで貴方はどうするのですか？」

「俺は……」

彼女が子供の肩に手を置きながら聞いてきた。子供は俺を憎悪の籠ったような表情でにらみつけてきて、彼女が止めていなければ殴りかかってきているだろう。

「相手の話を聞かずに信じたい事だけを信じて多数の犠牲を生み出した貴方はどうしますか？」

ここで諦めて妥協し、大人しく過ごすのもいいと思います。聞いた限り、貴方の實力であれば食うに困る事はありません。

ですが、今一度立ち上がり、救いが必要かどうかはわかりませんので、話を聞きに行くというのならお手伝いしましょう。彼と彼女達に会い、互いの主張をしっかりと伝え合うのです。互いに生きているのですから、話し合いは可能でしょう」

「だが……沙条は雫達を奴隷にしたんだ！」

「話し合いの結果次第でしょう。奴隷から解放してくれるかもしれない。私は少なくともこの子の姉を助けに向かいます。交渉し、金銭やそれなりの代価で引き渡してくれるならばそれもよしです。決裂した場合は……まあ、その時に考えましょう」

「……」

「いいですか、コミュニケーションは大切です。ええ、とても大切です。相手を尊重し、相手の事を理解してしっかりと考えましょう。そこから交渉して互いに妥協点を探し合います。そこまでして相容れないならば戦うしかありません。命を賭けて互いの主張をするのです」

「だが、沙条は間違っている……」

「頭ごなしに決めつけてはいけません。ですから、言葉の節々に散りばめられた情報を見逃し、利用されるのです。その結果が、今の貴方であり、その改造された身体です」

「っ!？」

彼女の言葉に俺の目の前に居る存在が恐ろしくなる。即座に剣の柄に手をやるが、彼女は反応していない。ただ、綺麗な翡翠のようなエメラルドグリーンの瞳で俺を見詰めるだけだ。

「何故、それを知っているか？　でしようか？　答えは簡単です。私の目は特別なので貴方の身体がどういう状態か観ただけです」

「なあ、本当にコイツの力を借りるのか？」

「ふっふっふ、私は魔術師です。それも支援に特化しているので前衛が居ないと非常に弱いです。ですから、私を守ってくれる騎士が必要なのです」

「え、でも……旅慣れてるって……」

「相手が相手ですからね。流石に神様クラスを相手にするのは無理です。それにこう考えたらいいのです。この人のせいで姉が捕まったのですから、この人を利用して助けるのだ……って、彼も言っています」

「誰だよ？」

「んん私の保護者？　師匠？　まあ、覗き趣味のろくでなしです」

「それって……」

「まあ、私はいいのです。それでどうするのですか？　私は貴方さえよければ力を貸しても構いません。もちろん、条件として私の言う事には従ってもらいます。勇者様はこの世界の常識に乏しいようですからね」

「それは……」

「また騙されて私まで奴隷にされたくはありませんから」

「ぐっ……」

子供の方を見てから、彼女を見る。彼女は俺に手を差し出してきた。

「貴方は生きていますのですから、まだ間に合う。私達と違って貴方達は生きています。だから、私と一緒にやり直してはみませんか？」

「そう、だな……」

どちらにしろ、力が居る。俺が雫達を助けるために。彼女に協力してもらおう。そう思って、彼女の手を取る。彼女は引き起こしてくれようとしたが、そこまでの力はないのか、必死に引っ張っているので、自分から立ち上がる。

「非力すぎるだろ……」

「仕方ありません。私には聖剣もありませんしね」

「俺も無い」

「いいえ、貴方は使えますよ」

「そうなのか？」

「方法は後で教えます。今は出発しましょう」

「わかった。だが、その前に名前を教えてください」

「そうですね……私の名前は……アルター・キャストリア。アルと呼んでください」

「わかった。俺は光輝でいい」

「わかりました光輝。では、行きましょう。貴方は私が導いてさしあげます」

「頼む……」

彼女、アルと共に雫やリリアーナ達を連れていった沙条達を探す旅を始める。その間に彼女から色々な事を教わっていくことになった。

ネネ力

私は一糸まとわぬ状態で夫となった面倒な教え子の真名を膝の上に乗せ、彼の耳を掃除していく。彼はぐったりしている私の分身を抱き枕にして、身体を触りながら大人しくしている。ただ、こちら側に顔をやっているので、キスマークや噛み跡などがついた私の身体を見てきています。特に胸と顔、首ですね。

「こんな貧相な身体を見て触って、楽しいのですか？」

それに言葉にはしませんが、私の身体は汗や彼の体液が塗り込まれていて、すごい臭いになっているはずです。もう麻痺してしまっていて自分ではわかりません。そもそも男性の物を嗅いだり、飲んだり、体内に取り込んだりなんてしたことはありませんでしたので大変興味深い経験ですね。美味しいとは感じませんし、飲み物としては最悪です。慣れていないだけなのかもしれませんが、個々の味覚や中毒性があるだけなのかもしれません。この辺りも研究対象としましょう。

「楽しいな。ネネ力を自分の物にしたとも思えるし」

「そうですか。わかっていましたが、変態ですね」

「ネネ力に言われたくないな……」

「失礼ですね。耳かきを裸のままですさせるあなたにそんな事を言われたくないのですが……」

「でも、夢で色々やっただろ」

「アレは必要な事ですから」

夢でやった事は考えうる限りの正気を疑うような変態的な行為から、悲惨な拷問のような行為です。もちろん、最初は普通に愛し合うことにしました。私としてもはじめては愛される方がいいですし。ええ、拘束されて並べられ、物のように犯されるのがマシと思えるぐらいの変態行為はごめんです。

この体験の目的は敵に捕まった場合に対処するため、精神や肉体の動きなどをデータ化し、それらを元にして夫である彼以外には何も感じないようにブロックするためです。

もちろん、心を守るための一番は捕らえられた身体を放棄して、別の身体に移動して残った身体は爆発などで処分することです。これらを行うためにも詳細な心と肉体のデータが必要になりました。死霊術師として優秀な恵理の力とユーリ達の力があれば魂と材料さえあれば新しい全く同じ肉体に蘇ることなど容易いのです。

ですので、比較的現実に影響を及ぼすことがない夢の世界で皆さんにも協力してもらいました。

発案者として私は全部やりました。ルサルカさん、アルテナさんも全部です。その他の子達はどうしても無理というのは止めて、それ以外のデータを提供していただきました。どうせ私達の痴態など、修復不可能なぐらい見せ会うことになってしまっているらしいので多少恥ずかしいぐらいなんともないでしょう。

まあ、流石に真名が変化した触手やモンスターにされるのは相手がわかっていても嫌でしたが、良いデータが取れました。媚薬に対する対策もできましたし、こちらが利用することもできるようになりましたからね。真なる神の使徒は女性型のように、たつぷりの媚薬を使って強制的に肉体を覚醒させ、そこから計測した私達のデータを叩き込むことで強制的に覚醒させて無効化というのも面白いでしょう。やりませんが。

「詩乃やリムリ、ネコネは大丈夫か？」

「大丈夫です。ちゃんとカウンセリングもしてありますし、夢の事なので記憶を消す事も可能です」

「優花は……」

「彼女はむしろノリノリ……ではないですが、喜んでいましたよ。全て貴方の上書きしてもらおうと」

「そうか」

「ですが、やはり不安定になるでしょうからしっかりとカウンセリングをする事をおすすめします」

「頼めるか？」

「いえ、貴方がデートして甘えさせればそれで大丈夫ですよ」

「わかった」

耳かきを耳から取り出して取れた物をゴミ箱に捨てます。その後はどうするかはわからないので、膝の上に乗っている彼の頭を優しく撫でてあげます。撫でていると左手の薬指に嵌められた指輪が目に入ります。現実でする前に頂いた物ですが、こちらも私にとつて未知の鉱石と技術が使われているようで大変興味深いです。分解するなと言われているのでしませんし、すると思われているのは少し心外です。確かにちよつとは思いましたが……

「そろそろ起きようと思うけれどどうかな？　朝食の時間も近いだろうし……」

「確かにそうですね。ですが、その前にお風呂に行かせて貰ってもいいですか？」

流石にシラフでドロドロな状態でいられません。乾いて色々大変になっているのでしつかりと身体を洗わないといけませんし、手入れやケアも必要です。

「元からそのつもりだ」

真名が私の膝から頭を起こして立ち上がり、抱き枕にしていた分身を抱き上げます。

「この子はどうする？」

「もう必要は無いので消しましょう」

「消すのはちよつと……」

分身を抱きしめる真名。どうやら愛着が湧いてしまったようですね。まあ、随分と可愛がってくださいましたし、その子も私であるので以外と嬉しいです。

「問題はありません。出して欲しければ出しますから」

「ならこのままだ」

「……いえ、今は必要ありませんから消します」

「そんな!？」

真名の声を無視してミラーミラーを解除して分身を消します。真名の腕から泡と消えた彼女と私を交互に見詰めてきます。

「はあ……仕方がありませんね。汚れたままの姿になるので嫌なのですが……ミラーミラー」

改めて私の分身を呼び出します。当然、今の私と同じ姿で汚れも全て同じです。だというのに真名は現れた私を抱きしめて嬉しそうにしています。こちらを放置してです。

「私が拗ねていますよ」

「拗ねていません」

「ああ、そういう事か。もちろん二人共だ」

真名は何を勘違いしたのか、私も抱き寄せて手を私達のお尻に回して持ち上げました。私達は落ちないように首に手を回します。私と分身の顔が真名の顔を挟んで至近距離にあります。ですので、色々と臭ってきました。やはり出すのは間違いだっただけかもしれません。

「こんな状態で何時までも居たくありません」

「お風呂へ行ってサンプルを回収してから色々々と流しますので降ろしてください」

「このまま風呂まで連れていく」

「ああ、なるほど。風呂場でも玩具にされるようですよ私」

「そのようですね。面倒なので構わないではありませんか」

「それもそうですね」

ほとんど寝ていないので移動するのも怠いのです。連れて行ってくれるなら身を任せる価値は十分にあります。本当、無限に回復する夢の世界と違ってリアルではアバターの身体になったとはいえ、ユーリ達によって魔改造されている真名の相手を一人するのは大変です。

私としては分身は例外として、やはり一対一で愛し合うのが一番良いと思っていました。他の人と同時に相手をされるのは興味はあれど、一人の女としては色々嫌でしたが……現土実似々花としてアバターの力が無ければそもそも相手にもなりません。アバターですら体力が持ちませんし、何人も妻を持っているだけあって上手ですから何度も何度も気持ちよくされて気絶しては覚醒させられます。分身を使ってもきつかったので、二人か三人は必須ですね。改造しすぎですよ、まったく……ああ、でもおかげさまで一人で相手するのは無謀だという事が身をもって知らされたので初回は一人で初めてを捧げ

るのも納得できますね。これは他の子に味合わせなくてはいけません。

「到着だ」

「ありがとうございます」

運ばれたのは私達が住む後宮にある家族用に作られた風呂のようです。何時でもお風呂と絶景が楽しめる贅沢な場所です。内装も真名と妻達以外が使わないというのに質素のように見えて品の良い品で整えられており、決して安い値段ではありませんね。

「はい、本体のネネ力はここな」

「えっと、洗い場の前なのはわかりますが、何故私を膝に乗せるのですか？ それに頭に顎を乗せるのは止めなさい」

風呂の椅子に座った真名の上に本体である私が座らされました。彼は私のお腹に手を回しながら、備え付けられているボディーツープを掌に出して目の前でぬちゃぬちゃと泡立っていきます。

「まさかとは思いますが、私を子供扱いして洗うつもりですか？」

「子供扱いはしていない。そうじゃなきゃあんなに愛し合うこともないからな」

「くっ。ではこれは……」

「スキンシップと愛する嫁を労わるためのマッサージだ。疲れているだろう？」

「それはそうですが……」

「それにこれは趣味だ」

「変態め……んんっ!？」

掌が私の身体を這って隅々に泡を塗り込んでいきます。女の子の大切な場所も含めてマッサージのように身体中を揉まれて気持ち良くなり、開発されだしたせいかな自然と声が出ます。

「そつちの子も本体が終わったらちゃんと洗ってあげるから待っていてくれ」

「それでは私は真名を洗いましょう」

「頼もうかな」

手付きはいやらしいですし、途中で顔を向かされてキスもされます

が、長い桃色の髪の毛も丁寧に洗っていただけて大変気持ちが良いです。まるでとろけそうに感じるほどでした。私の身体を完全に把握して的確に気持ち良くなるようにしているようです。

「流すから目を瞑れよ〜」

「やっぱり子供扱いですよね!」

「流すぞ」

「くっ……」

言われた通りに眼を瞑るとシャワーによつて泡が流されます。それが終われば反撃として私も子供扱いして二人挟んで徹底的に洗ってやります。やられっぱなしのセブクラウンズではありません。

「大変気持ち良かった」

「……」

洗い終えたのですが、子供扱いしても全然堪えてくれませんでした。た。むしろ、ママと呼んで甘えてくるしまつ……愚痴を言いながら最後まで洗うしかありませんでした。ですので、嫌がらせとして分身は消してやりました。ええ、決して負けを認めただけではありません。私を子供扱いした罰です。

「分身を消すなんてそんな……」

「維持するのが疲れました。ええ、疲れただけです。別にもう二人で居る必要もありませんからね」

「疲れたのなら仕方がないな。結構無茶させたし……」

「そうですね。かなり無茶させられました。私の身体は……小さいのですからね」

認めたくありませんが、事実なので仕方ありません。本当に何故成長しないのでしょうか? もう二十五も近いというのに……せめて身長だけはどうにかしたいです。

「湯に浸かるよ」

「きやつ」

いきなりお姫様抱っこされ、湯船の方に運ばれていきます。抗議の視線を向けますが、気にされていませんね。そのまま広い浴槽の中に連れて行かれ、大自然の景色が手摺の先から伺えます。窓なんてあり

ませんのですぐ外になります。

とはいえ、鈴の結界によつて適度な風などは取り込まれ、それ以外の悪影響を及ぼすようなものは全て弾かれる設定らしいです。外から覗く事も無理なように幻影魔法を付与しているらしいので、安全だと思います。そもそも皇であり真名の妻を覗くとか極刑は間違いなはずです。やる人は居ないでしょう。

「離してください。普通に浸かりますよ」

「無理だな」

「何故ですか？ いい加減にしないと本気で怒りますよ」

真名の座る膝の上に乗せられて上を向きながら声をかけます。

「ネネカの身長じゃ物理的に無理だ」

「はっ」

そう言われて試しに立つてみましたが、確かにお腹の辺りまで湯があります。周りには台のような物も存在しません。あるにはあるのですが、それは浴槽の外です。

「ほらほら、お座りよ」

「……いいでしょう。椅子になりなさい」

「喜んで」

立っているのもしんどいですし、わざわざ台を入れるのも負けた気がして嫌です。そもそも取らせてくれないでしょうしね。

「髪の毛を結ぶ紐は……」

「要らないよ。痛むとしても回復魔法とかがあるし、掃除も鈴の結界を使つて一瞬でできるしな」

「……なるほど。髪の毛を気にせずにお風呂に入れるのは大変いいですね」

長い髪の毛を頭の上に纏めるのはかなり大変ですから、助かります。私の髪の毛は太ももよりも下までありますから、本当に面倒です。アバターだからリアルで出来ない髪型に設定したのですが、現実になるとは想定外でした。切るのも考えましたが、真名は許してくれないでしょう。今も私の頭に顎を乗せた状態で手を前に回しえて髪の毛を梳いていますからね。

それに行為中も変身して姿を変えるのは拒否されました。今のままの私がいいそうです。こんな貧相な身体の何処がいいのか、甚だ疑問です。それでもありのままの私を求めてくれるという事が何処かで嬉しいと思う私も居ます。

彼が彼であって彼で無い事もわかつてはいません。ただ、実際に苦楽を共にしながら冒険した記憶もあるのです。プリンセスアリーナやひたすら魔物達モンスターの襲撃を倒すクランバトル、迷宮ダンジョンの攻略など長い時間を共にしてきました。だからこそ受け入れられます。

「どうしたの？」

「いえ、本当に摩訶不思議な現状だと思っただけです」

「この世界に召喚されたことが？」

「それもありますが、私の世界はリアルから仮想空間に移り、それが現実となりました。それが今度は本来の世界とはかかわりの無い異世界に召喚です。更には私が、私達が空想上の存在であったか、平行世界として存在しているか、どちらにしても驚きですよ」

「観測してしまったらそれは現実になる、という話もあるしな」

「シユレディングーですね。その辺りもおいおい調べていきましよう」

背中に体重を預け、完全に身を任せます。普通の男性にならこんな事はしませんが、相手が夫であるのなら問題はありません。

「不思議といえば、この容姿で結婚できるとは思ってもみませんでしたね」

「え？　なんでだよ。ネネカはとっても可愛いのに……」

「幼児体系ですから、普通に結婚相手としては駄目ですね。世間体もありますし、普通に付き合っていたら通報や職質されますよ。身分証明書が常に要ります」

「面倒だけどネネカを嫁にできるのなら甘んじて受けるだろ」

「そういう趣味の人はお断りです。色々と危ないですからね。生まれてきた子供に手を出されても困りますし、結婚するという事は子孫を残すためです。リアルの私では出産に身体が耐えれないかもしれません。帝王切開は確実でしょう。そうになると恋人や愛人はともかく、

妻としては色々問題が残ります」

まあ、私の周りの人達は名家の人や社長、政治家など多種多様な人か、奇人変人の類でしたので仕方ありません。

「俺は気にせず娶りたいけどな。子供よりもネネカの身体の方を大事にするし……」

「それはそれでありがたいのですが、やはり女性としては子供が欲しいですね。そういう意味では助かりました。この姿であれば問題はありませんし、ここの技術であれば母体が損傷する事もないでしょう」

知的好奇心としても子供は産んでみたいのです。はたしてどの様な成長をするのか色々実験できそうですしね。

「俺としては産んで欲しいが、産みたくなければ産まなくていいからな。ネネカが無理して産む必要もないし」

「それもそうですね。他の妻が産んだ子供と一緒に育てればいいだけです」

「そういう事だな」

「そうなると残る問題は……」

「何かあるのか？」

「……いえ、この問題は些細な事です」

「どんな問題なんだ？」

「聞きますか？ くだらないですよ」

「教えてくれ」

「真名の名前から千里真那を思い出すだけです。くだらないでしょう？」

振り返って真名の頬に手をやりながら答えます。

「あく名前の読み方が一緒だからな」

正直、色々と萎えます。千里真那は男性ですが、プリンセスを目指す人です。つまり、男性の姿をしていても心は女性という事です。そんな彼女が脳裏によぎるわけですからね。

「そういう問題は慣れてもらおうしかないな」

「ええ、だからくだらない事だと言ったでしょう。それに段々と上書

きざされて言っているので問題は最小限です」

「それは良かった。天才だけどあんなのと一緒にはされたくないからな」

「あの子はあの子で色々抱え込んでいるだけです。それよりもそろそろ出ましよう。朝食の時間を少し過ぎています」

「確かに。皆を待たせたら駄目だな」

「はい。そんな訳ですから、よろしくお願いします」
「任せろ」

向かい合う形で両手を差し出せばお尻と背中に手を回してしつかりと抱き上げてくれます。湯舟から立ち上がった真名は私をお姫様のように抱いて運んでくれます。

脱衣所に到着すれば身体を拭いてくれます。髪の毛は魔法で手早く水毛を取った後に丁寧に乾かした髪の毛を梳くって一部をカールにするなど整えてくださいました。

「そういうえば服を用意していませんでしたね。スキルで作りましたか？ 出来ればやりたくありませんが……」

「姿を変えているだけで、裸みたいな物か」

「正確には違いますが、元となるデータ、物質がありませんから……どうなるかわかりません」

「備え付けられているのはあるから大丈夫だ。今は大人しくあるのを着よう」

「それがいいでしょう」

実験は時間がある時で構いません。わざわざこの状況で危険を犯す必要はありませんしね。

「服は俺の趣味でいいか？」

「構いませんよ。私は貴方の妻になったばかりですし、夫の趣味を把握する必要があります。互いに尊重しあう事が夫婦円満の秘訣らしいですからね」

「ならこれでいいか」

渡されたのは可愛らしい子供用の下着です。はい、サイズが子供用のしか入りませんから仕方がありません。ええ、ありません。怒った

りはしません。それに白い生地にフリルが付けられた可愛らしい物ですが、肌触りも良いので普段使いとしても問題ないでしょう。ただ……

「これ、誰のですか？ 流石に洗ってあっても別の人の履くのは嫌なのですが……無理にとはいいませんが……」

私は来たばかりなので服や下着類なんて持っていません。あるのは最初に着ていた物ぐらいです。それこそ作るか買わないといけません。

「大丈夫だ。それ、新品だから」

「はい？」

「ガチャ産の奴だから」

「ああ、なるほど……って、そんなのも出るんですか？」

「大量に引いた奴の中にあつたから、出るんだろうな。それを適当に置いてある」

「そうですか。わかりました。湯冷めするので服をください。エッチな下着は要りませんよ」

「了解。あつたかいのがいいか？」

「どちらでもいいですよ」

「じゃあ、これに決めた！」

渡されたのは黒いクルーネックボリウムニットでした。少し大きいので私には余ります。肩の部分が出ていて、脇の部分が繋がっているタイプです。着てみると大きいので太ももに入る辺りぐらいまではあります。渡されたのは以上になります。ええ、スカートは貰えませんでした。

「なるほど、こういうのが好きなんですな。わかっていましたか、好き者です」

「絶対領域こそ至高」

「いえ、別に構いませんよ。ラフな格好で動きやすいですからね」

真名は真名でバスローブを着ています。私もそちらで良かったのですが、流石にサイズが無いのかもしれない。いえ、なんだか怪しいですね。服を取り出すときもタンスに頭から入れて何やらやって

ましたし。

「もしかして今、ガチャをしたりしていませんか？」

「な、なんの事かわからないな」

「ああ、引きましたね。これは少しお仕置きしないといけませんね」

「俺の趣味はガチャだから何も間違っつてはいない！ デイリーガチャだ！ それに朝食の時間がなくなる！ 優花たちを待たすわけにもいかないだろう？」

「ふむ。わかりました。では一応参考にしておいてあげましょう」

そう言うと、真名はまた私を抱き上げました。おんぶや俵持ちではないのでまだ許せます。しかし、移動がお姫様抱っこというのはかなり恥ずかしいです。

「あの、自分で歩けますよ」

「感覚がおかしくなっているだろう。それに身体に負担がかかっているだろうからな」

「確かに動く度に違和感がありますが……重いでしょう？」

「大丈夫だ。ネネ力はすごく軽いからな」

「そうですか。では、お任せしましょう」

「承ったプリンセス。お加減はどうですか？」

「苦しゅうありません。そのままよきにはからないなさい」

「ははあく」

大きな食堂まで連れて行ってもらったのですが、そこには誰も居ません。大きなテーブルがあるだけでキッチンの方も確認してみても居ません。

「誰も居ないではないですか……」

「朝食の準備もされていないな」

「作られて残されていなかったわけでもありません。朝食に使うであろう下準備はしっかりと終えて保存されています。これは……寝坊ですね」

「寝坊だな」

「まあ、夢の中でお楽しみだったわけですから、寝坊しても無理はありません」

望んだシチュエーションが全て叶えられるわけですしね。私のように好奇心の赴くままにエッチな実験三昧というのをやっていた子も多いでしょう。普通に遊んだ子もいるでしょうが、ほぼ全員と肉体関係があるらしいのでそういうのはやっているはずですし。

「どうするかな……」

「大人しく座って待っていてください。ここは私が作りましょう」
「できるのか？」

「一人暮らしはそれなりですし、これでも年長者ですから朝食ぐらい用意できます。まあ、優花ほどの腕は無いかもしれませんが……それでもいいですか？」

「もちろんだ。ネネカの手料理が食べられるのなら味は二の次でいい」

「……挑戦と受け取りました。いいでしょう。私が素晴らしい朝食を用意してあげます、行きますよ、ミラーミラー」

「いや、そこまでガチにならないでも……」

「ふふ、売られた喧嘩は買いました。これからの立ち位置や沽券にもかわりますからね」

「そうか。まあ、俺も手伝う」

「要りません。キッチンが女の聖域です。そっちで大人しく待っていてください」

「いや、それは古い考えだろ……」

「優花が決めています。入れないように言われていますからね」

「マジで？」

「マジです。真名に頼まれたら私達、妻が用意するようにと」

まあ、点数稼ぎの面が無いとも言えませんが、人手はあるので問題ありません。夫一人に妻一人であれば確かに共同する方がいいでしょうが、女性が複数になれば話は別です。そもそもちゃんとカロリー管理をしてくれるかどうかなんてわかりませんし、味付けも適当にされる可能性があります。何より胃袋を掴んだ方が色々やりやすいですから。

「ニヤニヤしているけどなんか企んでる？」

「いえいえ、何にもありませんよ」

「そうか。それじゃあ頼む」

「はい」

キッチンに入るとまず探すのはスイッチです。身長が低い人のためにしっかりと対策が用意されているそうです。スイッチを操作すると床がせり上がってきました。床の高さが上下する仕掛けなので私の身長でも楽に作業ができそうです。無駄にハイテクですね。部分部分の高さも調整できるので、棚などからお皿などを取り出す時も簡単です。

用意されている朝食はフレンチトーストと野菜スープですね。冷蔵庫に入っているボウルを取り出し、中に入っている物を確認します。中にあるパンがしっかりと溶き卵を吸収しているようです。これなら焼くだけなので味付けは必要ありませんね。

野菜スープはコトコト長時間煮込んだポトフが用意されています。お肉はソーセージが入っていますが、何の肉かはわかりません。野菜はここで採れた物でしょう。

フレンチトーストとスープが用意されているので残りはサラダぐらいでしょう。まずは玉葱の皮を剥いて薄くスライスします。面倒なのでスライサーに手を変化させてスパッとやってしまいます。十人以上の分を用意すると時間がかかるので短縮します。

切った玉葱は半分をボウルに入れて塩で揉んでから三分ほどおいて冷水に漬けます。残りは別のボウルに入れてラップはないので蓋をして密閉し、冷蔵庫に保管します。これで辛味が抜けるだけでなく血液をサラサラにしてくれます。時間は一時間から二時間必要なので用意されている物を使いましょう。何個か、炒め餡色の玉葱や辛味をい抜いた物が用意されていますね。他には自作のコンソメやカレーのルー、マヨネーズやケチャップなんかも作られているので料理に関する彼女の執念が伺えます。全部自作するとは少しお姉さんは驚きです。

続いてサニーレタスとミニトマトを用意しておきます。次はドレッシングの用意です。オリーブオイルと塩、酢を使います。これで

ドレッシングを作成し、小瓶に分けて置いておきます。後は牛乳と紅茶、コーヒードでも用意しておけばいいでしょう。

作業を分身と分担しているとはいえ、人数が多いので少し大変です。真名の方を見るとこちらを見詰めながらニヤニヤしています。私の後ろ姿やお尻でも見ているのでしよう。このキッチン、壁側に基本的な物が用意されていて、食堂のある方にはカウンターがあります。ただ、これは透明の支柱で支えられているのでこちら側からもこちら側から見れるようになっていきます。この空いている場所にはほとんど透明なワゴンが置かれていて、それで配膳や回収する仕組みですね。ほとんど透明な物を用意するなんて使う側も用意する側も時間もコストもかかるので無駄なのですが、用意している女の子をしか……見守るのにはちよいどいいんでしょうね。ええ、子供に向けるような視線をされています。そんな真名には少し教育的土道が必要なようですので、特別にメニューを追加しましょう。

「果物をください」

「どうぞ、私」

「ありがとうございます」

果物を剥いて細かく切って布に包んで潰してジュースを作ります。色々な果物や野菜で飲み物を用意していると、食堂の扉が勢いよく開かれました。

「ご、ごめんなさいー」

入ってきたのは生気が抜けて顔が青くなっている優花でした。彼女はすぐに真名の前で跪きました。そして、土下座しようとしたのに気付いた真名が優花の腕を取って引き上げて抱きしめます。事前に優花の精神状態について教えておいたからかもしれません。

「……お願い……捨てないで……」

「寝坊したぐらいで捨てないよ。むしろ俺は優花を手放すつもりはないから何があっても捨てたりしない」

「……本当……?」

「ああ。だから安心しろ」

「……うん……んっ」

キスを交わして落ち着いたのか、そのまま優花は身体を猫のように擦り付けて甘えだしました。少ししてから視線をこちらにやり、私に気づくと今度は顔を赤くしてこちらにやってきました。

「ご、ごめんなさい……」

「気にしないでいいですよ。もつと甘えていても構いませんから」

「こ、今度、二人だけの時にやるから大丈夫……だから忘れて……」

「そうですね。なら忘れましょう」

卵を吸収したパンを油を引いたフライパンに乗せて次々と焼いていきます。焼き終えたのを皿に乗せてからワゴンに置いていきます。優花も温めたポトフが入った鍋をワゴンに乗せていきました。

「えっと、アレは……」

「これですね」

「ありがとうございます」

私達が求める物を優花が用意してくれるのですぐに準備ができました。朝食を乗せたワゴンを運んでいくと、皆さんが集まっています。

それぞれが席につき、食前の挨拶をしてから配られた朝食を食べていきます。私は優花と共にしっかりと配膳をしました。が、わざと配っていない物があるので席を立てて配っていきます。

「果物と野菜ジュースを作りました。どうぞ」

「ありがとうございます」

鈴さん達に入れて渡した後、私は真名にも注いで差し上げます。

「どうぞ。身体が疲れているでしょうから、しっかりと栄養を取ってくださいね。私の手で愛情を込めて絞りましたから、味わってください」

「ああ、ありがとうございます」

真名は何の躊躇いもなく口にジュースを入れて……青ざめて口元を押えました。

「んぐっ!？」

皆の視線が一気に集まりますが、気にしません。

「安心してください。唐辛子による辛味や野菜による苦味、えぐみな

ど身体に害はないようちゃんと設計しました。栄養はたっぷりですよ。私を子供扱いしたくせにまさか、妻が愛情を込めて作った物を吐いたり、捨てたりしませんよね？」

ニコニコと微笑んであげると、真名は吐きそうになりながらしつかりと全部飲んでくれました。他の皆にはちゃんと事情を伝えておいたので問題はありません。なんでそれに怒るのかを不思議がつている子もいましたが、それはそれです。

「唐辛子を取り除けば成分的に栄養は豊富だと思う」

「えぐみなどを取り除くのは簡単です。ただ栄養素も抜けてしまますので……」

そう話していると、真名がいつの間にか私の背後に居ました。そして、無理矢理口付けをしてきました。そのまま舌を絡められて……強烈な苦みや辛味などに襲われます。

「くっ、よくもやってくれましたね」

「自業自得だろ」

「そちらがでしょう」

「どちらもどちらだと思えますので、仲良くしてください。駄目な事はちゃんと話し合わないとメッ！です」

「はい」

ユーリに可愛らしく怒られました。流石に大人げないのでこの辺りで止めてあげましょう。ただ、勉強については厳しくいきます。ここに手を抜く事は元からありませんからね。ええ、予定していた三倍の量ですが、問題ありません。